

□□□□□□□□□□

世界史講義録

第1回 最初の授業

1. 解説

新学年最初の授業は生徒も教師も、相手を探って独特な緊張感があふれています。生徒は教師を踏み込んでいます。面白いか、つまらないか、怖いか、怒るか、甘いか、厳しいか、いい加減な人か、親身になってくれるか、教師集団の中で重いか軽いか、等等、、、。

この1時間目に、生徒にどういう印象を与えるかでその後の一年間の授業のやり易さが決まります。

同僚たちは自己紹介や、休み中の体験を話して、授業にはいるのが一般的のようです。生徒は、授業をしないことを熱烈に期待しています（私も高校時代はそうでした）。できるだけ、彼らの期待にそれなりに応えながらも、単なる雑談でもなく、またこれからの授業に少しでも期待を持たせる。そんな作戦で考えたのが、「最初はお話を聞く」です。

2. ガウェインの結婚

これから一年間みなさんに世界史を教えることになりました。みなさんと顔を合わせるのははじめてですね。名前も顔も全然知りません。まずは、フルネームで出席をとりますので、呼ばれたら顔あげて返事をしてください。

それでは、早速授業を始めよう…とも思いましたが、はじめての授業なので自己紹介がわりにお話をします。

いまから700年くらい前の、「ガウェインの結婚」という話です。イギリスで生まれた騎士道物語『アーサー王物語』のなかのひとつです。アーサー王のことはテレビマンガになつたりしましたから、知ってる人も多いでしょう。エクスカリバーという剣ができるやつです。

アーサーはイングランド王の子どもだったのですが、出生を知らないまま育てられます。王が死んで王国が混乱していたそのとき、ロンドンの聖ポール大聖堂の前に大きな石があらわれます。その石の真ん中には剣が刺さっていて、石には「この剣を石より引き抜いたものが全イングランドの正統な王である」と刻まれているわけです。たくさんの剛の者が挑戦するが誰も抜けない。ところが、アーサー少年が簡単に抜いてしまって、王位につくわけですね。

で、まあ、そのあと、アーサー王が活躍する話がたくさんあるのですが、その中で私の

一番好きなのが「ガウェインの結婚」です。

実は、アーサー王物語の中でアーサーが中心になる話はそれほど多くない。円卓の騎士と呼ばれるアーサーの臣下たちが主人公になる話のほうが多くて、また面白いです。ガウェインというのはアーサー王の甥で、一番忠義な男です。

さて、物語はこんなふうに始まります。アーサー王がいつものように宮廷で国民の訴訟を裁いていると、一人の乙女が王にこんな訴えをします。自分の領地が邪悪な騎士に奪われ、また恋人も捕虜にされてしまった、と。アーサー王は、自分の国内でそんな不法なことがおこなわれているのはけしからん、というわけで、愛剣エクスカリバーをひっさげてただ一人で、その邪悪な騎士の城に乗り込みます。

ところが、敵の城に一步足を踏み入れたとたんアーサーの心から勇気と元気が抜けてへなへなになってしまいます。アーサー王物語には魔法使いがよくでてきます。これもそうで、城には魔法がかかっていて、侵入者の勇気をくじくわけです。そこに、邪悪な騎士が登場して、あっという間にアーサー王を打ち負かして捕虜にしてしまいます。

アーサー王、「助けてくれ」って頼むわけね。中年以降のアーサーは結構弱虫なの。そこで、邪悪な騎士はこういうわけ。「命が惜しいか。それならおまえに問をやろう」ってね。「この1年のうちに問の答えが見つかったならば、おまえを許そう。もし、見つけられなければおまえの王国をそっくり私がもらおう。よいな」よいもなにも、とにかく助かりたいからアーサーはこの条件を承知します。そして、答えを探して放浪の旅にする。

□□□□□

どんな問題を出されたかというと、これがすごい。こんなのです。

「すべての女性がもっとも望むことは何か」

難しいねー。わからんねー。わかるって人いますか。アーサーもわからなかつたので、どうしたかというと旅にてて、行き会うすべての女性にたずねまくるんです。「おまえの望みは何か?」すべての女性が望むこと、ですから、少女から老婆まで、農民、商人、職人、貴族、未婚、子持ちあらゆる女性に質問してまわるんですが、うまくいかない。みんな、言うことが違うんです。ある女は「美貌」という。また別の女は「健康」。そのほか富、立派な騎士の夫、子ども、若さ、恋人など、ありとあらゆる答えが返ってくる。

女子のみなさんはなんと答えますか。聞かれても困るでしょ。こんな状態では、すべての女性が望むことがわかるわけはない。しかし、あきらめるわけにもいかないので、

アーサー王は旅をつづけます。

1年がたちました。明日はいよいよ約束の日で、アーサーは邪悪な騎士のもとに出向いて正答を言わなければなりません。ところが、正答らしきものを未だ見つけられない。うちしおれたアーサー王は、とある暗い森の中に入っています。暗い森の道のかたわらに瘤だらけの大木があって、その根本に、目をそむけたくなるような、それはそれは醜く一い老婆がしゃがみこんでおりました。ちらっと老婆を見たアーサーは「うわあ、気持ち悪い！」と思ったんだろうね。気づかないふりをして、その脇を通り過ぎた。

すると、その老婆いきなり立ち上がって、アーサー王を叱りとばした。

「これ、そこな騎士よ。立派な鎧に身を固めてさぞかし高い身分の者かもしれんが、レディを無視して通り過ぎるとは、この無礼者め！」

騎士というのはレディ・ファーストの精神が大事なんだ。アーサー王はあわてて馬を降り、非礼をわびます。機嫌をおこした老婆は、さらにアーサーに言う。

「あなたの探しているものを、私はあたえることができる」とね。ただし、これも条件があって、老婆は答えを教えるかわりに、若くて健康で立派な騎士を自分の夫に欲しい、と言います。アーサー王はせっぱ詰まっていますから、後先考えずに約束して、答えを教えてもらいました。どんな答えだったと思いますか。

さて、翌日アーサーは邪悪な騎士の城に出かけます。邪悪な騎士がでてきて「答えを見つけたか。言ってみろ」。アーサー王は「愛」なんて言うの。これ、不正解ね。不思議なルールなんだけれど、何度も答えを言ってもいいみたいなんです。それで、アーサーは老婆に教えてもらった答えを最後に残しておいて、それまで聞いてきた答えを全部言いますね。邪悪な騎士は「違う。違う」と言いながら上機嫌。アーサー王の答えがついたところで「では、約束どおりおまえの王国をいただこう」アーサー、「ちょっと待った」そして、老婆の答えを言いました。何だと思う。これが…。

「自分の意志を持つこと」

わかるかな、このすごさ。いまから700年から500年くらい前の時代につくられた物語ですよ。「すべての女性がもっとも望むことは、自分の意志を持つこと」、現代の日本でも共通しそうですね。最近、夫が家の中で妻に暴力を振るうのが明るみになってきているよね。ドメスティック・バイオレンス。みんなのお母さん自分の意志を持っていますか。現代女性の生き方見てても、結構考えさせられる答えだと思います。邪悪な騎士は、「くそっ、さてはあの女に教わったな。あいつは、俺の妹のくせに…」とか言って悔しがりました。実は、答えを教えた老婆は騎士の妹だったのね。なぜかわかりませんが。

こんなふうにしてアーサー王は1年ぶりに宮廷に帰還します。円卓の騎士たちも大喜びなんですが、肝心のアーサー王が暗いんだ。醜い老婆との約束が残っているんだね。約

束はしたものの、あんな醜い老婆に若くて立派な騎士を娶せなければならない。ああ、やだ。どうしたもんか、誰と結婚させようかと悩んでいるわけです。理想的な中世の騎士は必ず約束を守るものですから。

暗く沈んだアーサー王を見て、心を痛めたのがガウェイン卿です。やっと、登場です。

「王よ、あなたの悩みを私にも分けてください。」アーサー王は、これこれこんな事情で、と説明します。当然の展開として、王に忠義なガウェインは、「私が、その女の婿となりましょう。」となるわけ。

アーサー王は、自分の甥でもあり見目麗しく若く健康なこのガウェインをあんな不吉な老婆と結婚させたくない。何も、おまえが…、と反対するのですが、ガウェインも言いましたら聞かない。

結局、ガウェインが老婆の夫となります。

さて、仲間の騎士たちが暗い森から老婆を連れてきて、宮廷で結婚式です。他の騎士たちは、みんなおもしろ半分でガウェインをからかうんだ。だって、新婚の妻は、世にも醜い、顔をそむけたくなるような老婆ですよ。ガウェインも、何の愛もあるわけじゃない。王を嘘つきにしないための結婚ですから、ちっとも幸せじゃない。だから、式だけで披露宴はなし。やがて、お約束の夜がやってきます。

新婚初夜です。部屋には新郎新婦の二人きり。ところが、ガウェインはというと、花嫁に背中を向けて「はあーー」って、ため息ばかりついているわけ。花嫁の顔を見ようともしない。まあ、そうだわな。すると、この老婆の花嫁が正面切ってガウェインに問い合わせるんだ。

「わが夫よ、あなたは新婚初夜というのに、わたくしを見ようともなさらず、つまらなそうにため息ばかりついておられる。なぜですか」

「なぜですか」って、すごいですね。わかるでしょうね。

また、ガウェインも気持ちいいくらいにはっきり答えます。

「俺が、ため息ばかりついている理由は三つある。ひとつ、あなたが老人であること。

二つ、あなたが醜いこと、三つ、あなたの身分が低いことだ」

それを聞いて老婆は、反論するんだ。こうです。「ひとつ、確かに私は年老いているが、それだけ人よりも思慮が深く知恵に富んでるということです。決して、悪いことはありません。二つめ、妻が醜いことは、夫にとって幸運です。なぜなら、他の男が言い寄ることを心配しなくてもよいから。三つめ、人の価値は生まれや身分で決まるものではありません。魂の輝きによるものです。」良いこと言うね。

ガウェインも、まあ素直な男だから、そんなものかしら、と思って、ふっと振り返って花嫁を見ると、なんとそこにいるのは、輝くばかりの美しい乙女だったんだ。

「おまえは一体何者だ」と驚いてきくガウェインに花嫁は答える。

「実は私は悪い魔法使いに魔法をかけられて老婆の姿に変えられていたのです。二つの願い事がかなわなければ、との姿に戻ることができません。立派な騎士を夫にすると

いうひとつの願いがかなえられたので、私は一日の半分をもとのこの姿で過ごすことができるようになりました。

もとの姿でいられるのは、昼がよいですか、夜がよいですか。わが夫よ。お選びください」

ガウェインはこういった。

「その美しい姿は、二人だけの夜の時間に見せてほしい。できれば、その美貌を他の男たちに見られたくないものだ」

独占欲強いです。それに対して、花嫁も自分の意見をはっきり述べます。

「女というものは、他の殿様方やレディとお付き合いするときに美しい姿でいられるら、それはそれは幸せなんですよ」

それを聞いて、しばらく考えたあとガウェインは言います。

「おまえの好きにするがよい」

すると、花嫁が満面の笑みをうかべて言ったんだ。

「たった今、二つ目の望みがかないました。私は昼も夜ももう老婆に戻ることはあります」

わかりますね。二つ目の願い事がなんだったか。そう、

「自分の意志を持つこと」

彼女は夫ガウェインによって自分の意志を持つことを許されたんだ。

これが「ガウェインの結婚の物語」です。本だとわずか5ページくらいの話です。でも、ものすごく深い思想が込められていると思いませんか。さっきも少し触れたけれど、現代日本だって通用する中味ですよね。この話の女性は思いをはっきり口に出してですがすごいです。ここに一つのヒントがあるように思いますね。

男子諸君、女子にもてようと思ったら、これですね「すべての女性は自分の意志を持つことを望んでいる」ここが、基本ですよ。まあ、少なくとも、ガールフレンドのことを「俺の女」なんていう男はダメだね。

男女だけでなく、大きく言ったら「人権感覚」だと思います。

この話を含むアーサー王物語は、12世紀から14世紀くらいにイングランド、フランスあたりで誕生して今のような形になった。ヨーロッパ中世の騎士の精神世界が見えて楽しいです。それと、また後々でできますが、今のヨーロッパ人の直接の祖先、ゲルマン人がやってくる前にヨーロッパに広く住んでいたケルト人の精神世界もアーサー王物語には深く反映されています。魔法や、呪いによる変身なんかはその典型。

次回からは、授業に入りますが、こんな話も折に触れ、紹介していきますね。歴史って、面白いんですよ。

では、今日はこれでおしまい

2002/2/18改稿

[参考図書紹介](#)・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

[中世騎士物語岩波文庫](#)

ガウェインの結婚の話は、ここに入っています。

[アーサー王の死ちくま文庫—中世文学集](#)

ガウェインの結婚の話はありませんが、この本がアーサー王物語の、最も基本的なものだと思います。

[トップページに戻る](#)

[次のページへ](#)
[第2回 人類の登場](#)

□□□□□□□□□□

世界史講義録

第2回 人類誕生

----- 進化論 -----

歴史が始まるには、人類が誕生しなければなりません。どのように人類が誕生したか。今でこそ進化ということは常識になっているけれど、この考えが発表された当時は大きな抵抗がありました。

進化論で有名な学者、知っていますか。そう、ダーウィンですね。イギリス海軍の測量船「ビーグル号」に博物学者として乗り込み、南半球の各地を調査した。各地の動植物を観察するなかで進化論を確立します。

有名なのがガラパゴス諸島。小さな島がたくさん集まっていて、ここにしかいないという動物がたくさんいるんですが、ダーウィンが観察してると、あることに気づく。ちょっと隣の島に行くと、同じ種類の鳥でもくちばしの形が少しづつ違う。ガラパゴスゾウガメというカメがいるのですが、これも隣の島に行くと甲羅の形が違っている。こういう体験と自然淘汰という考え方を結びつけて、『種の起源』という本を出版したのが1859年でした。進化論をとなえたのはダーウィンがはじめてではないのですが、この本が一大センセーションを巻き起こしたんですね。

何が問題だったかというと、ダーウィンはイギリス人ですね。イギリス人を含めてヨーロッパ人はみんなキリスト教を信じている。

聖書には神がアダムとイブをつくったと書いてあって、人類はみんなその子孫だと信じていたわけですよ。私みたいにあまり信心深くない者にはそういう気持ちはわからないんですけどね。ダーウィン自身は『種の起源』では人類については直接書いていないのですが、進化論を人間にあてはまれば、ヒトの祖先はサルの仲間ということになり、聖書の記述を否定することになる。

信仰と科学の対立、ということだね。ヒトは神がつくったんではなくて、サルから進化したという考えは、未だに論争になります。アメリカでは、公立学校で進化論を教えるのに反対する人がいて、進化論を教えるなら、同時に聖書の人類創造説も教えるべきだと裁判が起こされたりします。

今から20年も前になりますが、高校生だった私はラジオの深夜放送を聞いていた。受験勉強しながらね。「ノックノック○○」という番組だった。ディスクジョッキーがアメリカのどこかの砂漠で奇妙な化石が発見されたと言ってたんです。

その化石というのは恐竜の足跡の化石で、それだけならどうということはないんだが、その恐竜の足跡のすぐ横にヒトの足跡も残っていた、というんだね。それも現生人類の足と同じモノが。

これ、本当だったらすごいです。今までの進化の定説が覆るからね。これは、ビッグニュースだと思って、私は翌日の新聞を隅から隅まで読んだけど、どこにもそんな記事がない。ちょっと前の発見かもしれないから、その後、いろいろ本など注意深く見ていましたが、やっぱり無いわけ。

ずっと、変だなと思いつづけて何年かして、ハッと思いあたった。

その番組、キリスト教関係団体の提供だったのね。「ノックノック～」という番組名も「たたけよ、さらば開かれん」のことだったと思うよ。D.J.も、時々聖書の話なんかしてた。その化石のニュースはいわゆるガセネタだったんだね。

D.J.が意識して嘘をついたとは思わないけど、恐竜とヒトが同時代に存在していれば、少なくともヒトに関する進化論、人類学の現在の学説は否定できるからね。

テレビやラジオで言っていたからといって、簡単に信じてはいけませんね。

今でもそんなことがあるくらいだから、100年以上昔のダーウィンがキリスト教の本場で、どれくらい強い非難をうけたかは想像できるでしょう。

さて、進化論を証明するには、証拠が見つかればよい。化石です。サルとヒトのあいだをつなぐ生物の化石が見つかれば。

ヒトとは

ダーウィンの時代から現在まで、多くの人類学者が化石人類の発掘をしています。ところで、発掘して出てきた骨が、ヒトなのか、サルなのか、どうやって見分けるんでしょうね。要するに、人間とは何か、がわかっていないければいくら化石を掘り出しても、いつ頃人類が地球上に登場したかは決められないです。

ヒトと他の動物を分ける決定的なポイントは何だと思いますか。

はい、道具を使う、そうね。他には、…言葉、立つ、うん。

道具を使うのはヒトだけでは無い。かつては道具を「つくる」のがヒトだとも言われていましたが、チンパンジーも道具をつくる。

サル学というのがあって、日本ではサルの研究が世界的にみても進んでいます。たくさんの本がでていますから、興味があったら読んでみてください。これが非常に面白い。

ある日本の研究者がアフリカでチンパンジーの群をずっと観察していて、面白い行動を発見した。

ある一頭のチンパンジー、ある朝目覚めると、木の枝を拾いはじめたんだ。拾ってはいじくりまわして、どうも枝を選んでいるようなんだね。何をしているのか、観察を続けていると、一本選んでその葉をちぎり取って、ちょうど釣り竿みたいな形にした。そして、それをひょいと肩に担いでトコトコと歩き出した。

その研究者は不思議におもってつけていった。数キロ歩いたチンパンジー、蟻塚に到着した。蟻塚というのは蟻の巣で、日本みたいに地下に穴を掘った巣ではなく、1メートルくらいの高さに山みたいに土を盛り上げて、カチンカチンに固めてその中が巣になっているんです。出入り口は、小さな穴になっています。

で、チンパンジー君は、担いで持ってきた枝を蟻塚の巣穴に突っ込んだ。そして、それを引っ張り出すと、枝に蟻がたくさんくっついてくる。その蟻をペロペロ食べ出したんだね。何回もその動作を繰り返した。やがて蟻喰いに飽きてようやくその枝をほっぱらかして、別の行動に移った。

これが、のちに非常に有名になる「蟻釣り」という行動です。

これは、二つの意味ですごいことだ。

ひとつは、明らかに、このチンパンジーは道具をつくっている。枝を選んでいるように見えたのは、蟻釣りにちょうど良い長さと太さ、そして、しなり具合の良い枝を探していたんだ。

二つ目にすごいのは、蟻塚を見つけてから、釣り竿を作りはじめたのではないことです。かれは、始めからそこに蟻塚があることは知っていた。朝、目覚めて、かれは「今日は何しようかなあ」と考えた。「天気はいいし、木の実は食い飽きた。久しぶりに、あそこの蟻塚で蟻喰おうか」

そう考えて、釣り竿を準備して出かけているということです。計画を立てていることは確実です。

人間との差はほんのわずかです。実際ヒトとチンパンジーの赤ちゃんと一緒に育てると3歳くらいまでは、全く同じように成長するそうです。精神的にもね。サルの仲間でも、チンパンジー、ゴリラ、オラウータンの3種類は類人猿と呼ばれていて、非常にヒトに近い。DNAの98%はヒトと同じだそうです。

どのくらいの知能をチンパンジーは持っているのか。アメリカでは、手話を覚えたチンパンジーがいる。数百の言葉を覚えた。このチンパンジーに別のサルを見せたら、「オマエ、キタナイ、サル」と言ったそな。

夕日を見つめるサルというのもある。これも、日本の研究者の観察ですけれど、あるチンパンジーの群のなかに、決まって夕暮れ時になると群から姿を消す個体がいた。

どこで、何をしているのか。研究者がつけていくと、そのチンパンジーは崖の端まで出かけていって、そこからサバンナの地平線に沈んでゆく太陽をじっと見つめているんだって。

ぐーっと沈んでいくでっかい太陽を、身じろぎもせず…何を想っているのだろう。感動しませんか。

夕日を見つめるチンパンジー…。

野生動物というのは、決して意味のない行動、無駄な行動はしないものらしい。肉食獣もいるわけで、無意味な行動は生命の危険に直結する。群から離れて一匹で崖っぷちまで行く、非常に危険です。しかも、崖っぷちで夕日、これは無意味な行動で、本来ありえない。

サルの話を続けるとキリがないのでこの辺でやめておきますが、言葉をしゃべるというのも、ヒトだけとは限らない。イルカや鯨の言葉を研究している人いるでしょ。ホントに言葉といえるモノがあるかはわかりませんが、今の段階でヒトだけが言葉を持つとはいいくらい。

結局、ヒトと他の動物を分けるポイントはこれ。漢字6文字。直立二足歩行。

これはヒトだけです。チンパンジーもゴリラも歩くときは、普通は手をつきます。

直立二足歩行は、二つの結果をヒトにもたらしました。ひとつは、手が自由になったこと。二つは、脳が発達したこと。ヒトは他の動物と比較して体重に対する脳の比率がとりわけ大きい。

その大きな脳を、直立することによって支えることができるようになります。たとえば、このボールペン

が背骨として（水平に持つ）、この先端にこの黒板消しをくっつけようとしても、まあ、ボンドを使ってもすぐ落ちてしまうでしょう。でもこうして（ボールペンを垂直に持つ）立てれば、ほら、何も使わなくてもこの黒板消しが乗りますね（そっと乗せてみる）。ね。同じ理屈です。脳が大きくなれるのです。

ただ、直立二足歩行というのは、かなり無理がある姿勢みたいで、ヒト独特の苦労も生みました。たとえば、出産の時にヒトほど苦痛をともなう動物はいないそうです。直立しているから妊婦さんのお腹から赤ちゃんが落ちないように、子宮の出口がものすごく固く閉まっているわけ。そこを、無理矢理こじ開けて子どもを生まなければならぬ。これが出産時の痛みの原因です。
あと、腰痛もヒトだけの病気らしいです。

脳が大きくなるには、手が自由になることが影響したようです。手で、何か作業しますね、これが脳を刺激する、するともっと複雑な作業もできるようになる、で、脳がもっと刺激される。こんなふうに相互作用が手と脳のあいだに生まれました。すべてのもとは、直立二足歩行。

どんな化石が見つかればヒトか、ということでしたが、直立二足歩行の化石だったらヒトなのです。頭蓋骨、大腿骨、骨盤、こんな部分が見つかれば解るようです。

ところで、カンガルー、あれは直立二足歩行ですか。そしたらヒトですか。じゃあペンギンは？答えは言いませんから、みなさん自分で考えてごらん。

化石人類の発見

さて、ダーウィンの時代以後、ヒトの祖先の化石はいろいろ発見されました。整理しておきましょう。

ヒトがはじめて地上に登場したのが、いまから400万年前。もっとも原始的なこの段階のヒトを、「猿人」と呼びます。猿人にはいろいろ種類があって「アウストラロピテクス」と呼ばれるものがもっとも有名です。これ以外にも別の名前を与えられている猿人もいます。別種がいて、同時に何種類か存在した時期があったようです。どれがわれわれの直接の祖先かは、定説はありません。

「アウストラロピテクス」類が、たくさん発掘されて有名な場所が、タンザニアの「オルドヴァイ峡谷」です。東アフリカのモザンビークからエチオピアにかけて、東アフリカ大地溝帯と呼ばれる地球の割れ目があります。オルドヴァイ峡谷もここにあって何百万年も前の地層が露出していて化石発掘には絶好です。

最初にここに目を付けて、猿人を発掘した人がルイス・リーキー。1959年のことです。その後、この峡谷で画期的な発見が相次ぎます。こんなふうに言うと、いとも簡単に発掘できたみたいですが、リーキーは最初の発見まで、実に28年間ここで調査を続けていたんですよ。先駆者というのはすごいね。

ルイス・リーキーは1972年に亡くなっていますが、息子のリチャード・リーキーという人が、現在も発掘を続けて成果をあげています。どう、みなさんもアフリカへ行って30年くらい我慢して穴を掘り続けたら、ひょっとして画期的な発見で教科書に載るかもしれないよ。

猿人が発掘されるのはアフリカだけなので、人類の故郷はアフリカといわれます。猿人の時代が200万年前まで続き、その後登場するのが「原人」です。40万年くらい前までが原人の時代です。

原人は二つ覚えてください。「ジャワ原人」と「北京原人」です。

ジャワ原人の発見者は、デュボアというオランダ人です。1891年のことです。かれはもっとも早い時期に化石人類を発見した人で、先駆者の悲哀を味わいます。

デュボアは、ダーウィンの本に刺激され、ヒトとサルを結ぶ化石の発見を志します。医者として将来は大学教授の地位も約束されていたんですが、その地位をなげうって、オランダ軍の軍医に志願します。23歳の時でした。

軍医になったのはインドネシアで化石を発掘するためでした。インドネシアは当時オランダの植民地で、軍人になればインドネシアに行けたんだね。ただ、インドネシアに化石があるなんて保証は何もない。ただ、ヒトの祖先は熱い地域に住んでいたに違いないと思っただけです。オランダ人が行ける熱い所がインドネシアだった、ただそれだけの理由です。

実にいいかげんといえば、いいかげんだね。

ところが、インドネシアに行って4年目、化石を発見してしまうのです。場所も覚えておこう。ジャワ島のトリニールという所です。ソロ川という川の土手で頭骨の一部と、大腿骨を見つけた。頭骨は丸みが少なく、類人猿に近いが、大腿骨は明らかに直立歩行していたモノだったんだ。

先ほど話した猿人の化石が発掘される遙か以前のことで、かれの発見は、賛否両論を巻き起こします。

実は、頭骨と大腿骨の発見された場所が同じではなく、15メートル離れていたの。だから、大腿骨はあの時代のモノが紛れ込んだとか、いろいろ疑問がでて、結局かれの発見は受け入れられませんでした。デュボアは、完全に偏屈な人になってしまって、やがては自分の発見した化石を金庫に入れて、さらに自宅の床下にしまい込んで誰にも見せなくなってしまう。

あとで北京原人が発見されて、それがジャワ原人とそっくりだったことから、かれの発見は認められるようになるのですが、そのころのデュボアはもう誰にも会わないような拗ねた性格になっていたそうです。

北京原人は20世紀になって発見されます。北京近郊の周口店という場所です。

洞窟跡からたくさんの動物の骨とともに見つかりました。骨に燃やした痕があったので、北京原人が火を使用したことがわかっています。

それと、見つかった北京原人の化石の多くが割られていました。骨の髓を食べるためと思われます。つまり、食人の風習があって、仲間の肉を食べたらしい。これを否定する学者もいて、飢饉の時だけ食べたとか、呪術的な意味があるとか、いろいろな意見が出されていますが、どれも推測にすぎない。食人の風習を否定する研究者には、自分たちの祖先に汚名を着せたくないという身びいきな判断があるような気がします。

ちなみに、完全な北京原人の頭蓋骨は第二次大戦時、日本軍が北京を占領した時のどさくさに紛失してしまった。

まいりました。状況から見て、誰かが持ち出してどこかに隠しているんだと思う。見つかったら大スクープになりますよ。

次いでてくるのが旧人。約20万年前です。ネアンデルタール人が有名。これはもう脳の大きさはわれわれよりも大きいほどです。この種類は旧大陸の至る所で発掘されます。かれらは、かなり高度な精神文化を持っていたらしい。たとえば、手足を折り畳んだ化石がたくさんです。埋葬がおこなわれていた証拠です。

イラク北部で発見（ザクロス山中シャニダール洞穴）された男の化石などは、その上の土を取って顕微鏡で観察したら、ヒヤシンスやヤグルマギクの花粉が大量に発見された。

かれが死んだときに、母親か恋人か友人かわからないけど、野花をいっぱい摘んできて、その亡骸にかぶせたんですよ。

今でもそこには5月から6月にかけて、丘の上一面に野生のヒヤシンスが咲くそうです。ちょうどその季節にかれは死んだんだね。

死後の世界に対する想いとか、花を見て美しいと思う、大げさにいったら芸術感覚があったということです。

また、先天的に片手、片目のつぶれた40代男性の化石もありました。40歳といえば当時なら相当な年のはずです。障害を持ちながらも、仲間の助けを得ながら天寿を全うしたわけです。宗教的儀礼をおこなうとか、火の番とか、何かの役目を持っていたのでしょう。単純に障害者を切り捨てる社会ではなかったということがわかります。

その後でてくるのが、いよいよわれわれの直接の祖先です。新人といいます。その代表としてクロマニヨン人と、上洞人（じょうどうじん）を覚えておくこと。

今から4万年くらい前に登場します。遺跡はたくさんあるけれど、かれらの残した洞穴壁画は覚えましょう。

スペインのアルタミラ洞穴、フランスの拉斯コー洞穴の壁画は有名。1万5千年くらい前に描かれたが、躍动感、色彩、どれをとってもすばらしい。

馬や、牛の絵が多いしょ。なぜこんなのを描いたのか実はよくわかっていない。獵でたくさん獲物が捕れるように願って描いたという説もあるが、当時の獲物はトナカイで、馬・牛ではなかつたらしい。

しかも、どこの壁画も洞穴のものすごく奥の方の、這っていかなければいけないような所の天井とか、とにかく描きにくい所に描いている。何か宗教的なモノだともいわれますが、結局わかりません。

志摩スペイン村パルケ・エスパニャにはアルタミラ洞穴壁画と同じモノがつくられているそうです。一度見てみたいね。

言い忘れていました。道具ですが、猿人の時代から石器がでます。打製石器です。新人の時代、1万5千年くらい前までは打製石器が続きます。ただ、原人、旧人、新人となるに従って精巧な石器になってきま

す。

猿人、原人、旧人、新人と人類は進化しているんですが、一つだけ注意しておきたいのは、たとえばネアンデルタール人がクロマニヨン人に進化したかどうかは、不明です。

同じ地層から旧人と新人が見つかる時期もあるんだね。

同じように、猿人と旧人の関係、原人と旧人の関係もまだ、不明です。本によって書いてあることが違うのです。

まだまだ、われわれの直接の祖先については研究途上です。

【参考図書】 「ヒトはどこからきたのか」 河合信和、朝日新聞社、1991年

(2002/2/19改稿)

*追記：2002年2月19日

細胞中のミトコンドリアのDNAを分析すると特定の人物の母系をさかのぼることができる。この方法によると、ネアンデルタール人はわれわれ現世人類の祖先ではないという。（「イヴの七人の娘たち」ブライアン・サイクス、ソニーマガジンズ、2001）

[参考図書紹介](#) ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

世界の歴史〈1〉人類の誕生河出文庫	進化論とサル学の研究者が、人類の誕生と進化を大胆に叙述した、実にユニークな歴史の本です。
イヴの七人の娘たち	母系のみに伝わるミトコンドリアのDNAの変異から、人類の祖先と、進化を探る。最新の生物学からのアプローチは新鮮でした。

第2回 人類誕生 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第1回 ガウェイン](#)

[次のページへ](#)
[第3回 文明の誕生](#)

oooooooooooo

世界史講義録

第3回 文明誕生

文明誕生

さて、約1万年前、旧石器に代わって、新石器時代が始まります。磨いて加工した石器、磨製石器が登場します。こんなのですね。（石器の写真を見せる）

打製石器に比べて持ちやすいのはわかるね。

しかし、打製石器も馬鹿にならんよ。

打製石器持ってきてました。あ、これは○○先生がつくったの。奈良と大阪のあいだの二上山でサヌカイトという石器のいい材料ができるのですが、それを割ってつくった。ほら、こんなものでもよく切れるでしょ。

（板の上で、新聞紙をシャキシャキと切り裂く）

次に農耕の起源です。メソポタミア地方で最初の農耕が始まったというのが従来の定説でしたが、最近いろいろな発掘調査で、中国の長江流域ではそれより遙か以前、1万3千年前くらいから稻作が始まっていたことがわかつてきました。

長江流域で定住生活が始まったのはさらにさかのぼって、1万6千年前といわれています。人は定住して土器を作成はじめます。先日（4月17日）朝日新聞に載っていましたが、日本でも1万6000年前の土器が出土しています。

これからも世界各地で、さらに古い遺跡が発見される可能性は充分あります。農耕の起源、発生地については、今のところ不明です。

メソポタミア地方では、約7000年前には麦作と牧畜が始まります。イラクのジャルモ遺跡が有名です。

農耕牧畜によって、食糧の収穫が予想できるようになる。うまくすれば、食べる以上に生産できる。その日その日を狩猟・採集で生活していたのに比べれば、どれだけ生活に余裕ができたことか。これを、食糧生産革命といっています。革命というのは、世の中がひっくり返るような変化に対する呼びかた、と考えておいてください。

ここから、ちょっと難しい話です。

さっき、食べる以上に生産できた、と言いました。これ、難しい言い方で余剰生産物という。農業技術も改良されていきますから、余剰生産物は増加します。この余剰生産物が文明を生んだってよい。

余分な食糧ができると、働かなくてもよい人々がでてきます。

以前ならみんなが同じ仕事をしていたのに、違う役割で生きていく人たちが出現する。これを、階級の発

生といいます。

どんな人たちかというと、まずは神に仕えるような人たち、神官です。たぶん、農耕がうまくいくように天候を神に祈る人々が最初にでてきた農業をしない人たちだ。

邪馬台国の卑弥呼も一種の神官です。彼女は、奥にこもってみんなには顔も見せずに神に祈っている。特殊な能力があると信じられていたんだろう。

神官は、一般の人たちからその能力を恐れられるでしょう。そして、権力を持つようになるんだね。

権力を持つ者は、必然的に自分が生きていくのに必要以上の土地や家畜を持つようになります。私有財産という。

神官以外に、戦士も生まれてくる。他の集団から自分たちの集団を守るためにかれらも農耕を免除されて、特権階級になっていく。職人も、農業以外の仕事だけをする人々だ。

マジカルな能力、人並みはずれた体力や体格、技能、あるいは人格的統率力、そういう力を持つ人々がリーダー層になる。階級分化です。

やがて、指導者が支配者となって国家が生まれます。

国家といつても、村がそのまま国になる、小さなものです。吉野ヶ里遺跡なんかは、そんなものの一つでしょう。

この小さな国家を歴史学では、都市国家といいます。自分たちの集落を守るため集落の周りには城壁をめぐらせます。都市国家はみな、城壁を持っています。

国家の支配者は租税を集めます。誰からどれだけ税を徴収したか記録する必要がでてくる。文字はそのために発明されたともいわれます。

階級、私有財産、都市国家、そして文明が生まれてきます。

四大文明

農耕が世界各地で始まるのですが、その中で文明と呼べるものを作り出した地域が四つあります。すべて、大河の流域に生まれました。

メソポタミア文明---ティグリス・ユーフラテス河

エジプト文明---ナイル川

インダス文明---インダス川

黄河文明-----黄河

古い順に並べてあります。

長江文明を言う人もいますが、まだ評価が定まっていませんから、ここでは覚えなくてもいいです。それぞれの話は次回以降にやります。

今日はこの四大文明の共通点を確認して終わろう。

写真を見てもうとよく分かります。みんなよく似た風景でしょう。

この四つの地域はすべて年間平均気温が20度前後、どちらかといえば雨が少なく乾燥地域です。しかし、水があれば農耕可能なんだ。そして、大河が流れている。水があるわけね。しかし、この大河の水をコントロールするには、多くの人が知恵と力を合わせる必要がありました。

努力をすれば生きていける土地だったんだね。

その、努力をするということが文明を生み出したんではないか、と私は思うのです。

熱帯、亜熱帯の植生豊かな土地に生きている人々は、同じ農耕をするにも、ぼちぼちで生きていける。

人々を組織して、自然に対して必死に取り組まなくてもやっていける。そういう土地では、文明は生まれなかつたし、生まれる必要もなかつたのでしょうか。

やがて、厳しい環境の中で生きていくために生まれた文明が、周りの地域に影響を与えはじめます。文明のあるところにはたくさんの食糧と高い技術があるわけだから、周りの民族はそれを欲しくなります。文明地域に武力で侵入する集団もある。徐々に技術が広がって文明化していく民族集団もあらわれる。いよいよ、歴史が動き始めます。

----- 記年法

記年法のことを言っておきます。

授業ででてくる年代はみな、西暦です。イエス・キリストの生まれた年を1年として数える。今年は1999年。

キリスト教国ではない中国でも西暦を採用していて、世界標準になっている。平成11年です、といっても外国じゃ通用しないでしょ。昭和35年生まれの人がいま何歳かなんて、われわれ日本人でも計算に手間取るよね。元号は非常に不便で、排他的な記年法だと思います。で、教科書は西暦です。みんなも自分の誕生日とか、記念日を西暦で考える癖をつけておくと、世界とのつながりの中で自分の人生を考えやすいと思うよ。グローバルな視点だね。

世紀という言い方がありますね。

もうすぐ20世紀が終わるけれど、21世紀は何年からですか。テレビなんかを見ていると結構間違っている。100年で1世紀です。数字は1から始まるから、1年から100年が1世紀、101年から200年が2世紀、だから20世紀は1901年から2000年までです。2001年から21世紀なんだ。来年も20世紀ですよ。歴史学的にはね。でも、あんまりこれをうるさく言うと、理屈っぽいやつだと嫌われるからほどほどにね。

ついでに言うと、1990年代といったら、1991年から2000年までなんです。君たちは10代だけど、じゃあ、20歳になんでも10代かというとこれは20代、年齢はゼロ歳から数えるからです。

西暦1年の前の年は何年でしょうか。

ゼロ年？

それは、ないです。

ゼロをとばして、1年の前はマイナス1年とします。

マイナス1年からは、紀元前何年という形でよびます。紀元を略して単に「前何年」ともいう。英語の略称でB.C.何年と書くことも多い。before Christを略している表現です。

紀元前3世紀といえば、紀元前300年から紀元前201年までです。ややこしいから、しっかり確認してください。

紀元前後の年代は、紀元前か紀元後かややこしいので、紀元後の数字にA.D.をつけることがあります。これは、ラテン語で〈神の年〉Anno Dominiの略です。

さらに、おまけの話。西暦1年がイエスの生まれた年のはずだったのですが、歴史研究が進んだら、どうも、その4・5年前に誕生していたらしいことが判ってきた。しかし、今さら変えられないのでそのままです。だから、イエスが生まれたのは前4年頃です。

(2002/2/19改稿)

[参考図書紹介](#) ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

[熊から王へ—カイエ・ソバー...講談社選書メチエ](#)

国家と王の誕生を、文化人類学的に考察した刺激的な作品。エキサイティングな本ですが、とても高校レベルでは触れられません。中沢氏が大学で一年かけておこなった講義ですからね。意欲がある高校生はチャレンジしてみて下さい。

第3回 文明の誕生 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第2回 人類の登場](#)

[次のページへ](#)
[第4回 メソポタミア文明](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

世界史講義録

第4回 メソポタミア文明

----- シュメール人 -----

世界で最初に生まれた文明がメソポタミア文明です。

紀元前3500年くらいには都市国家が成立して、文明といえるものになったといっていいでしょう。

メソポタミアとは川のあいだという意味で、ティグリス、ユーフラテスの二つの川にはさまれた地方をさします。現在の国名でいうとイラクです。今はサダム・フセイン大統領で有名。昨年末(1998)にもアメリカとイギリスに空爆されて大きなニュースになりましたね。

このメソポタミア地方の川下、河口付近にはじめての文明ができます。

文明をつくりあげたのはシュメール人。民族系統不明です。残された彫刻などを見ると、目がくりくりと大きくて、波打つ立派な長いあごひげが特徴的ですね。

シュメール人
立像

今、この地域はイスラム教徒、アラブ人の世界ですが、男たちはみんなひげを蓄える風習がある。ひげがないと子どもかオカマだと思われるらしい。アラブ社会の民俗を研究している人の講演を聞いたことがあります、その先生は帰国直後で、ヤギみたいなちょび髭を一所懸命のばしていました。「こんなヒゲでも、はやしていないと一人前として扱ってもらえないで」とぼやいてました。

ひげ等のファッショնは、時代、文化によって変化するのですが、ひょっとしたらこの地域ではシュメール人以来5000年間ずっとひげを伸ばしていたのかもしれないね。(注:シュメール人はひげを剃るのが一般的らしいが、使用していた資料集の写真にもとづいて、このような説明をしていました)

メソポタミアに最初に文明が生まれたのは、農業生産性が非常に高かったかららしい。まず、麦と羊の原産地だった。そして、この麦の収穫量が非常に高かった。1粒の麦を播いて、20倍から80倍の収穫があったといわれています。これが、どのくらいすごいかというと、19世紀のヨーロッパで麦の収穫は播種量の5、6倍くらい、現代でもヨーロッパで15倍から16倍、アメリカで23倍という数字があります。だから、現代と同じかそれ以上の収穫があったというわけだ。たくさん穫れれば、余裕も生まれる。その余裕が、後世に残る文明を生み出したのでしょう。ちなみに、日本の米はどうかというと、江戸時代は30から40倍、今は110倍から144倍です。

シュメール人はメソポタミア地方にたくさんの都市国家を築きました。ウル、ウルク、ラガ

シュなどという都市が有名です。しかし、都市国家どうしの抗争が激しく、統一国家ができるとはありませんでした。政治は、神殿を中心に神權政治がおこなわれていたらしい。

シュメール人の文化

かれらの残した文化は後世に大きな影響を与えているからこれはしっかり覚えておきましょう。

まずは、暦（こよみ）。世界初の暦。月の満ち欠けで、年月をはかる太陰暦です。

数字は60進法でした。これは、現在もある分野で日常的に使われるね。何ですか。そう、時間です。一時間はなぜか60分。なぜかというとシュメールなの。多くの小学生が、時間の計算でつまづく。君たちも苦しんだでしょ。シュメールだね。

なぜ、シュメール人が60進法を採用したかははっきり判っていません。

土器は彩文土器というのがでます。土器に赤い模様が描かれていますね。

文字は、くさび形文字を発明しました。紙はまだない時代、粘土板に葦を切ったものでくさび形に字を刻み込んでいきました。細かい文字でたくさん書いていますね。シュメール人が歴史から消えたあとも、メソポタミア地方では長いあいだこの文字を使っていました。今のアルファベットの役割を果たしたわけだ。

シュメール人の時代から二千年もあとですが、アケメネス朝ペルシアという国が大帝国をつくります。この国もくさび形文字を使っていて、ダレイオス大王という王が、自分の功績を刻んだベヒストゥーン碑文というのを残しました。これは三つの言語をくさび形文字で刻んだもので、くさび形文字解読のきっかけとなった重要な碑文です。解読したのはローリンソンというイギリス人。覚えておきましょう。

この碑文は地上100メートル以上の絶壁に刻まれていて、ローリンソンは今でいうロッククライミングみたいなことをして、まあ命がけで碑文を模写したんです。19世紀のことです。

それからハンコ、印章です、これもシュメール人が最初。円筒印章というのがあって、絵が刻んである。これを粘土の上をコロコロと転がすと長い絵が浮かび上がるわけです。円筒印章は中心にひもを通して首に懸けるようになっていた。これを身につけているのが高い地位の象徴だったらしいです。

エデンの園

シュメール人の文化、暮らしあはいろいろな伝説や物語に、大きな影響をあたえています。

たとえば、旧約聖書にはシュメールの影響がかなりあります。

旧約聖書の最初の話、神が世界と人間を創造する話があります。

神が「光あれ」といって光ができる。これが一日目。二日、三日といろいろ造って、六日目に人間を造って、七日目にお休みします。これは、シュメールの七曜の影響。

それからアダムとイヴの話。

神が泥からつくりあげた最初の人間がアダム。一人じゃ寂しかろうと、神はアダムの肋骨を一本採って、これで女イヴを造る。二人は、裸のままの姿でそれを恥ずかしいとも思わず、働くなくても暮らせる地上の楽園、エデンの園に住んでます。

さて、神は二人に一つの約束をさせるんだ。エデンの園の真ん中に知恵の木がある。その実だけは、絶対に食べてはならないという約束です。ところが、なぜか蛇がでてくるのです。その蛇がイヴを誘惑する。知恵の木の実を食べても死にませんよ、ほら、こんなにおいしあつませ。食べなはれ、と言う。イヴはついつい食べてしまう。おまけにアダムにも勧めて、結局二人とも食べてしまった。すると、急に知恵がついてしまってかれらは互いに裸であることに気がつき、葉っぱで腰蓑をつくって、局部を隠します。

約束を破ったことが神に知られ、その怒りに触れて二人はエデンの園を追放されました。追放されたのがエデンの東。そこでは、地にはいくつぱって厳しい労働をしなければ生きていけないんです。ジェームズ・ディーン主演の「エデンの東」という映画があります。楽園のすぐ隣だけれどそこは楽園ではない、それがエデンの東。そう思って見るとこの映画また一段と深いよ。

エデンの園の話がシュメールとどんな関係があるかというと、エデンの園はシュメール人が住んでいた実在の場所らしい。

ラガシュとウンマという二つの都市国家が、前2600～前2500年頃に「グ・エディン」（平野の首）という土地をめぐって戦争を繰り返しているんです。どうもこのグ・エディンがエデンの園のモデルらしい。

話が後先になりましたが、旧約聖書をつくったのはヘブライ人という人たちです。かれらは前10世紀頃に自分たちの国家を建設するんですが、それ以前は部族ごとに分かれて牧畜などをしながらメソポタミア地方からエジプトにかけて放浪生活をしていた。豊かなシュメールの土地に住みたいけれど、そこに入り込むだけの勢力がなかったんだろう。なぜ、自分たちはあの豊かな土地に住めないのか、という不満・不運を自分たち自身に納得させるため楽園追放の物語がつくられたのではないかと思います。人間というのは納得さえできれば不運に耐えられる生き物なんだと思う。エデンは、豊かなシュメールの地の、その中でももっとも豊かな土地の象徴だったんだろう。

それから、バベルの塔の話です。これは知っていますか。

人間が天まで届きそうな高い塔を建てる。これを知った神が、この塔を打ち壊すんだね。

「神に届こうとする不届きな振る舞いだ」と神様が怒ったと一般にいわれていますが、聖書を読むとそんなことは書いていません。理由は解らないがとにかく神は塔を壊し、人々はちりぢりになり、お互いに話す言葉が通じなくなった、という話。

で、このバベルの塔のモデルがやはりシュメールにあるらしい。

シュメール人たちが建設した神殿にジググラトというものがあります。高い塔の形をした神殿で、その遺跡はたくさん残っています。これがバベルの塔のモデルといわれています。

大洪水

極め付きの話は、ノアの箱舟でしょう。

人々が神に対する信仰を失って、自堕落な生活を送っているときに、ノアという男だけが信仰を守って敬虔な生活をしていた。神は、信仰を忘れた人類を滅ぼそうと思ったけれど、まじめなノアだけは助けようとするんですね。ある日、箱舟をつくれと、ノアにお告げをする。なんだかわからないままにノアはお告げに従って、家族みんなして箱舟をつくります。長さこれだけ、幅これだけとか、神は結構細かいお告げをする。で、そのとおりにつくります。他の人々はそんなノアを馬鹿にするんだけど。

ところが大洪水がやってきて、舟に乗り込んでいたノアの家族だけが生き残ったという話。

このとき、ノアはあらゆる動物をつがいで舟に乗せていて、これも助かる。

このノアの箱舟の話も、シュメール人の話に元ネタがあるのです。

シュメール人が残した粘土板に『ギルガメッシュ叙事詩』といわれる物語があって、そこにノアの箱舟とそっくりの話が載っていたのです。

プリント見てください。少し読んでみよう。

まず、神のお告げです。

「シュルパックの人、ウバラ=トゥトの息子よ、家を打ち壊し、舟を造れ。…すべての生きものの種を舟に積み込め。おまえが造るべきその舟は、その寸法を定められた通りにせねばならぬ。…

六日六晩にわたって、嵐と洪水が押し寄せ、台風が国土を荒らした。七日目がやってくると、洪水の嵐は戦いに敗れた。…そしてすべての人間は泥土に帰していた。…舟はニシルの山にとどまった。…七日目がやってくると、私は鳩を解き放してやった。鳩は立ち去ったが、舞い戻ってきた。…私は大鳥を解き放してやった。大鳥は立ち去り、水が引いたのを見て、ものを食べ、飛び回り、かあかあ鳴き、帰ってこなかつた。そこで私は…、生け贋をささげた。」

(ギルガメッシュ叙事詩の洪水物語、高橋正男訳)

聖書にも大嵐がおさまったあと、ノアが鳥を飛ばして陸地が現れたかどうか確かめる場面があるんですが、こんな細かいところまでそっくり。

キリスト教を信仰するヨーロッパの人たちは聖書に書いてあることは真実の物語と考えていたのですが、『ギルガメシュ叙事詩』が発見されることによって、旧約聖書が成立する1000年以上前に、その元の話があったことがわかった。

洪水神話はメソポタミア地方全域で広く普及した物語だったのだろうということです。古代の説話のひとつとして、聖書が相対化されたという意味で、ヨーロッパ人にとってギルガメシュの物語は大発見だったのです。

実際にシュメール人の遺跡発掘がすすんでいくと、シュメール人の都市国家が大きな洪水にまわされていることもわかつてきました。

『ギルガメシュ叙事詩』には、こんな一節もある。

ある時ギルガメシュは太陽神ウトゥに訴える。

「…

心悲しいことに、わたしの町では、人はすべて死ぬ。

…

わたしは城壁の外を眺めていて
死体がいくつも河面に浮いているのを、
見てしまったのだ」

洪水で苦しんでいたんだね。

ティグリス・ユーフラテス河の氾濫の記憶がしたいに大洪水の神話物語に発展したのだといわれています。

「もののけ姫」

ギルガメシュ叙事詩の話をもう一つ。聖書の元ネタといったんだけど、映画の元ネタにもなってるんだ。

「もののけ姫」見ましたか。私、4回見ました。大流行したから見た人も多いんじゃないかな。

あれの元はギルガメシュ叙事詩ですよ。5000年前のシュメール人の物語が現代人に訴えるパワーを持ってるんだね。

ギルガメシュ叙事詩の前半にこんな話がある。

当時からメソポタミア地方は森林資源は乏しかったらしい。

英雄ギルガメシュは町を建設するために木材が欲しい。そこで、レバノン杉、このレバノン杉はまた後々でできますからよく覚えておいてください、そのレバノン杉の森に木を採りに出かける。ギルガメシュは親友のエンキムドゥという勇士とともに旅立つんです。祟りがあるから止めとけ、という周囲の制止を振り切って。

ギルガメシュとエンキムドゥはレバノン杉の森にやってきて、その美しさに立ちつくす。美しさに圧倒された二人は呆然と森を見続けます。しかし、ギルガメシュは気を取り直してこう思った。

「この森を破壊し、ウルクの町を立派にすることが、人間の幸福になるのだ」

森の中に入っていくとそこには森の神フンババというのがいて、森を守るためにギルガメシュたちと鬭うんですが、最後には森の神はエンキムドゥに殺されてしまう。フンババは頭を切り落とされて殺され、エンキムドゥは「頭をつかみ金桶に押し始めた」。その後、エンキムドゥは祟りで別の神に殺されてしまうんですがね。

「もののけ姫」と同じでしょ。

エンキムドゥが「たたら場」のエボシ様、フンババがシシ神、首を落として桶に詰めるところまで同じ。

ギルガメシュ叙事詩では、フンババが殺されたあと「ただ充満するものが山に満ちた」と書かれている。

「もののけ姫」では、シシ神の体から流れ出たどろどろのものが山を焼き尽くす。宮崎駿の解釈なんだろうな。

エンキムドゥは祟りで死にますが、エボシ様は、狼の神モロに片腕を食いちぎられるだけですんでいますがね。この辺、優しい解釈だね。

人間が文明を発展させれば、必ず自然を破壊する、森を破壊しなければ生きていけない。しかし、森を殺せばそれは必ず人間、人類といっていいかな、にそのしっぺ返しは来る。どうすればいいのか。森とともに生きる道はないのかと「もののけ姫」ではアシタカが苦悩するまま、解答なしで終わります。

5000年前にすでに、自然破壊の問題が起こっていたということは、しっかり覚えておいた方がよい。

レバノン杉は、地中海東岸のレバノン山脈から小アジアにかけて広く分布していました。しかし、シュメール人の時代にすでにレバノン山脈東側の、メソポタミア地方に面している方はほとんど切り尽くされていたらしい。現在では西側地中海に面した地域もわずかに残っているだけです。現在のレバノン国旗の真ん中には、レバノン杉が描かれています。

森林資源が乏しいために、メソポタミア地方ではインダス川流域からも木材を輸入していた。レバノン山脈から運ぶよりも、インドから海上輸送した方が簡単だったらしい。そのインダス川下流地域も今は森林資源は枯渇しています。

アッカド王国

前2400年頃、シュメール地方にはじめて統一国家ができます。

これがアッカド王国。

建国したのはシュメール人ではなく、メソポタミア北部の山地に住んでいたアッカド人。

民族系統はセム系といいます。残された言語で民族系統を判断するのですが、セム系というのは現在のアラブ人と同じです。念を押しておきますが、シュメール人は民族系統不明ですよ。

アッカド王国の王の名前を覚えておきましょう。

サルゴン1世。

史上最初の大王といっていいでしょう。アッカド王国はサルゴン1世だけ覚えればいいからね。

ここからはサルゴン1世のおまけの話。

サルゴン1世の伝説を記した粘土板も発見されている。サルゴン1世のお父さんはアッカド王、ところがお母さんは尼さん。

その尼さんがサルゴンを妊娠、出産してしまう。

尼さんが子どもを産むのは許されていないので、彼女は生まれたばかりのサルゴンを籠に乗せて川に流すんです。まあ、捨てたわけね。

サルゴンは灌漑人に拾われ、かれの息子として育てられます。成長したあと、イシュタル女神がかれを愛し、そして王として君臨した、というんです。

英雄というのは一度は捨てられ、成長してから別の世界から異様なパワーを身につけて帰ってくる。そして、本来あるべき地位につく。こういうパターンの話を英雄流離譚というそうです。

世界各地に似たようなパターンの神話や物語が残されています。前の授業でしたアーサー王の出生の話や、旧約聖書のモーセも同じです。

それから、お母さんが尼さんというところ、イエスの母が処女マリアという話を連想しませんか。ここは、きわどいですが考えはじめると面白いところですよ。

もっと、大胆に連想を飛躍させると、川に流すところ、逆に流れてくる側から描けば、これは桃太郎ですね。桃太郎は鬼退治して英雄になりますが、一体誰がどこから流したんでしょうね。桃太郎の原型の原型もひょっとしたらこれかも知れませんね。考えはじめたらキリがないね。

アッカド王国のサルゴン1世によって統一されたメソポタミアも、200年ほどたつと、山岳民族の侵入によってまた分裂します。

豊かで、文化の高いメソポタミア地方は周辺の蛮族にとってはかっこうの略奪対象です。あわよくばそこを支配できればこれに越したことはない。

メソポタミアの歴史は次から次へと、この地に侵入する諸民族の歴史といつてもよいくらいです。

アッカド王国滅亡後、一時はシュメール人のウル第三王朝というのが栄えますが、これもエラム人とかアムル人とかいうのが侵入し崩壊。

バビロニア王国

次にメソポタミアを統一したのがセム系アムル人が前19世紀に建てた古バビロニア王国です。別名バビロン第一王朝。前17世紀までつづきます。

都は有名なバビロン。

王も一人覚えてください。ハンムラビ王です。

この王は、シュメール時代からこの地方におこなわれてきた法律を集大成したので有名。ハンムラビ法典。超重要です。

ハンムラビ法典の説明します。

特徴二つ。

1, 同害復讐の原則

「目には目を、歯には歯を」ですね。

「もし人が自由人の目をつぶしたときは、かれの目をつぶす。」（第196条）
誰かに危害を加えたら、同じことをされるということだ。

非常に厳しい法律のように感じますね。でも、この同害復讐の原則は復讐に合理的な限度を定めたという点で社会が発展したことを示しています。

多くの民族が侵入し、戦を繰り返したメソポタミア地方は、生きていくうえで常に緊張していなければいけなかったと思います。

古バビロニア王国の支配者はアムル人でしょ、支配されているのはシュメール人、アッカド人、そのほかいろいろな民族がいたと思う。違う言葉をしゃべって、違う風習で暮らしている。争いがおきたときどうやって仲裁するか、合理的なルールが必要だったんだね。
そういう中で生み出されたのが同害復讐の原則。

2, 身分差別的刑罰

「もし奴隸が自由人の頬を殴ったときは、かれの耳を切り取る。」（第205条）

奴隸が自由人に危害を加えたら、それ以上の重い刑をうけるわけだ。逆に身分の高い者が奴隸を傷つけても罰金ですみます。厳しい身分差別があったことがわかります。

この、「頬を殴ったときは」、という表現、頭の隅の方に残しておいてください。これに関する話をまたいざれします。

以上二つの特徴を見ると現代的感覚からはやはり残酷な感じがします。

しかし、ハンムラビ法典のあとがきに、こんな文がある。

「強者が弱者を虐げないように、正義が孤児と寡婦とに授けられるように」この法をつくったと。

単純に古い時代は野蛮だったとか遅れていたとか、考えないようにしてください。

古バビロニア王国は前1600年頃には北方から移動してきた新手の諸民族に滅ぼされますが、これはまた後のお話。

(2002/2/20改稿)

参考図書紹介 · · · · もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[森を守る文明・
支配する文
明PHP新書](#)

環境の変化と文明の興亡の関係を考える「環境考古学」。ギルガメッシュ叙事詩やレバノン杉の話はだけでなく、世界の「森の神々」についても詳しく触っています。

第4回 メソポタミア文明 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第3回 文明誕生](#)

[次のページへ](#)
[第5回 エジプト文明](#)

世界史講義録

第5回 エジプト文明

「エジプトはナイルの賜物」

エジプトでは前5000年頃に農耕が始まります。前2700年頃には統一王朝が成立します。エジプトは周囲を砂漠に囲まれているのでメソポタミアのようなめまぐるしい民族の侵入や王朝の興亡はあまりなく、独特の文化を築きます。

エジプトが文明をもてたのは、なんといってもナイル川のおかげ。ナイル川が毎年もたらす肥沃な土壌と水がエジプトの豊かな農業を可能にしました。毎年ナイル川の洪水で上流から栄養分をたっぷり含んだ土が流れてくる。だから何もしなくても地力が維持できるのです。あとは洪水が引いていく時に水の管理さえしっかりできればよい。

前5世紀のギリシアの歴史家ヘロドトスの言葉は有名です。「エジプトはナイルの賜物」。

エジプトの空中写真を見るとナイル川の縁だけが縁になっているのがよく分かるでしょう。流域から少しばずれるとずっと砂漠が広がっています。

エジプト文明をつくった人々はハム系という言語系統です。現在のエジプト人はハム系の流れも汲んでいますがアラブ人と混じり合っていて、かれら自身もアラブ人だと自覚している。

エジプトの文化

エジプトの暦は太陽暦です。1年365日です。

ナイル川はティグリス・ユーフラテスのように不定期な大洪水はおこりません。1000キロ以上上流のエチオピアの高原に降ったモンスーンの雨でナイル川は増水するので、毎年決まった時期に同じ様なペースで水かさが増していきます。エジプト人はいつナイル川が増水するか、それが最大の関心事。それにあわせて農耕の準備をするわけです。

神官たちは、天体を観察しながら、ナイル増水の時を調べました。

7月の半ば明け方の東の地平線ぎりぎりにシリウスがひときわ輝く時がある。ちょうどその時からナイルが増水することが解ってきた。翌年同じ場所にシリウスが輝くまでが365日。そして、またその時に増水がはじまるのです。

こうしてできた暦が太陽暦です。だから、正確にいうと太陽暦じゃなくて洪水暦かシリウス暦なんだけどね。でも、この暦が古代ローマ帝国からヨーロッパに伝わり、今では世界的に使われている暦です。

1日を24時間にしたのもエジプトです。エジプトは10進法で、はじめは昼と夜をそれぞれ10に分けて20だったのが、昼と夜の境界の時間をそれぞれに付け加えて24になったそうです。

洪水の水が引いたあと、農民たちはその上で農耕をはじめるのですが、土地の境界線が、増水のあとは泥に埋もれて全然わからなくなってしまうでしょ。そこで、エジプトでは測地術も発展します。

文字は独特の絵文字を発達させます。鳥とか獅子とか秤とか、絵の形が字になっているね。これは一番格式の高い字で神聖文字といいます。これ以外に神官文字、民衆文字という字体がありました。

この神聖文字の解読にまつわる話をしておきます。

18世紀末、フランスのナポレオンがエジプト遠征をします。ただ、遠征するだけではなくて165人の学者を引き連れていくのです。強烈にエジプト世界に対してあこがれを持っていたんだね。で、ナポレオンはエジプトで戦争をするかたわら、各地に部隊と学者を派遣して発掘しまくる。そして、出てきたのが世紀の大発見「ロゼッタストーン」です。この高さ1メートルほどの碑文には国王をたたえる布告が、神聖文字、民衆文字、そしてギリシア文字で刻まれていたんですね。

こういう記念碑は、違う言語をしゃべる人でも分かるように、同一内容を複数文字で書くんだ。ギリシア文字はアルファベットだから読めるのです。だから、ロゼッタストーンの発見によって神聖文字解読の大きな手がかりがあたえられたのです。

ところがその後20年間解読できない。みんな、神聖文字の絵の形に惑わされて、これを表意文字と考えたからです。

たとえば、鷹の形の字があれば、「飛ぶ」「速い」「勇猛」という意味じゃないか、とかね。

1822年、解読に成功したのがフランスのシャンポリオン。かれは碑文の中の枠でくくってある一連の文字に注目しました。何故、枠で囲んでいるのか。重要な単語だからに違いない。エジプトで重要な単語とは何か。

そして、かれは、これが王の名前をあらわしているのではないかと考えました。

そうすると、そこにはほぼ対応するギリシア文字の場所に、プトレマイオス、とか、クレオパトラとか王の名があった。

さらに観察すると、絵文字のプトレマイオスのP、クレオパトラのPにあたる部分に同

じ絵文字があったんですね（小さな四角の文字（□）があった）。

かれは、絵文字が表意文字でなく表音文字であることをはじめて発見したのです。これ以降はどんどん解読をすすめることができました。獅子はL、鷹はA、とかね。自分の名前神聖文字で書いてみましょう。おしゃれでしょ。

この解読成功によって、古代エジプトの歴史が一気に明らかになったのです。

ロゼッタストーンは現在、大英博物館にあります。ナポレオンも触ったかも知れませんよ。

文字が書かれたのがパピルスです。パピルスという植物の茎をつぶしてシート状にします。英語のペーパーの語源です。ナイルの湿原に自生している植物ですが、今は観光用につくっているだけらしい。これ、エジプト土産にもらった実物です。まわします、破かずに見てください。

精神世界の話。エジプト人は死後の世界に対して独特の関心を持っていました。かれらの死後の世界を描いたのが「死者の書」。

冥界つまり、あの世を書いてある。

死者の魂はあの世に行って神々の検査をうけるんです。

ここに秤があるでしょ。秤の左側に乗っているのが真実の羽、右側に乗っているのが死者の心臓を入れた壺。心臓が真実の羽より軽いと不合格だと資料集には書いてありますが、実はどうなったら合格なのかわかっていません。残された絵はみんな真実の羽と心臓の壺が釣り合っているのです。まあ、とにかく、この秤の検査に合格すると、この世に再生できる。

再生するには体がないと困るね。そこで死後、肉体を保存するのに情熱を持つ。これがミイラですね。

ミイラをつくるときも松竹梅とランクがある。ミイラの作り方。まず、特別な石器のナイフでお腹を切って内臓を取り出す。この内臓は壺に詰めてとておくんです。

内臓を取ったあとのお腹には詰め物をします。松コースは柔らかい香草で詰める。梅コースは固い枯れ草とか詰めるので死体が乾燥して縮んでくると、お腹の皮を突き破って枯れ草がプシュプシュでてくる。こんな体で再生してもねえ。

ミイラが腐らないように脳味噌も取り出す。長いスプーンを鼻の穴からズンと突っ込んで、搔き出すんです。搔き出した脳味噌は、そのまま地面にぶちまけて捨てちゃう。内臓とは大分扱いが違うね。心は心臓にあると思ったのですね。

このエジプトの死生観は、のちのユダヤ教、キリスト教の「最後の審判」に影響をあたえたといわれています。

古代エジプト史の流れ

さて、古代エジプト史の流れを見てみましょう。
大きく三つの時代に分けられます。これをまず覚えてください。

古王国（前2700～前2200年頃）

中王国（前2100～前1700年頃）

新王国（前1600～前1100年頃）

簡単でしょ。

それぞれのあいだの期間は中間期といって、エジプトが一つにまとまっていなかった時期です。

古王国の都はメンフィス。エジプトの下流地域を下エジプトといいますが、ここに都が置かれた。

古王国はピラミッドが造られた時代と覚えておきましょう。最大のクフ王のピラミッドをはじめ、すべてこの時代のものです。古王国で覚えるのはそれだけ。

ピラミッドはみんな知ってると思いますが、案外なんなかわっていない。

エジプトの王のことをファラオといいますが、そのファラオの墓だと一般には考えられているけれど、墓じゃないという学者もたくさんいる。

墓室があるし、棺桶まである、なんで墓じゃないのか。

実は今まであらゆるピラミッドから一つもミイラが発見されたことがないんです。

墓泥棒は昔からいて、ピラミッドにも侵入しているんだけど、財宝は盗んでもミイラまで盗まないだろうから、墓だとするとやっぱり変なわけ。しかし、墓ではないのなら何故棺桶があるのかといわれると、これも説明できない。困りますね。

一人のファラオが複数のピラミッドを建設した例もあるというから、われわれが考える墓ではなかったんだと思います。

じゃあ、何かというと廟、神殿みたいなものらしい。日光の東照宮は家康を祀っているけど、墓ではない。そんなモノなんでしょう。

クフ王のピラミッドの内部にはまだまだ発見されていない秘密の部屋があるらしい。世界に誇る文化遺産だからエジプト政府はピラミッドを傷つけるような調査は許さない。だから、早稲田大の吉村先生は音波の測定器使って調査してましたね。やっぱりなにかかるらしい。この辺は最後の歴史ロマンだからもやもやしている方が楽しいね。

ピラミッドは多くの奴隸がむち打たれながら造ったと私の子どもの頃は書いてありました。これも違うらしい。ピラミッドを造った働き手は普通のエジプトの農民たちです。しかも、いやいや造らされたのでもないです。

1年の半分はナイルの増水で農地は水没していて農民は暇でしかたない。その時期にファラオが農民を集めて働かせた。重労働だったには違いありませんが、ちゃんと働け

ば小麦とビールが配られた。今でいう失業対策みたいなものだね。

次の中王国はナイルの上流、上エジプトのテーベが都。それだけでおしまい。

中王国はエジプト初の外来民族の侵入によって衰退しました。

侵入したのが混成民族集団ヒクソス。これがアジア方面から侵入した。

ヒクソスの侵入で馬と戦車がはじめてエジプトにもたらされました。それまでのエジプトには馬がいなかったわけだから、どれだけ孤立した世界だったかわかりますね。

この時代はまだ馬に乗って戦えません。馬に乗って戦うためには、鞍とあぶみが必要ですがまだ発明されていないのです。

馬は戦車を牽かせるために使います。戦車といつてもただの馬車みたいなものです。御者が一人、そして弓を持つ兵士が一人乗って敵を射ったのだと思います。エジプト兵はみな歩兵ですから、圧倒的に機動力で優れていたのです。

その馬と戦車にエジプトは征服されますが、やがてエジプトはこの新戦法を自分のものにしてヒクソスを追い出した。できたのが新王国。

新王国の都はテーベ。この時代のエジプトは馬と戦車で強国となり領土を広げました。シナイ半島をこえて、地中海西岸に進出します。シリア・パレスチナ方面です。

新王国の成立の少し前に、ハンムラビ国王で有名な例の古バビロニア王国が滅びていって、この時期、メソポタミア地方中南部はカッシート王国、北部にミタンニ王国、小アジア地方にはヒッタイト王国という強国があった。新王国エジプトはこれらの国々と抗争をくりかえします。

そしてトトメス3世（前1504ころ～前1450年ころ）の時にエジプトの領土は史上最大になる。このファラオは覚えておくこと。

イクナートン

もう一人覚えておかないといけないファラオがアメンホテプ4世、別名イクナートン（前1379年ころ～前1362年ころ）です。エジプトは多神教の世界で、いろいろな地域にそれぞれの神様がいて、時代とともに流行の神様も変化するのですが、この新王国でもっとも信仰されていたのがアメン神です。そしてアメン神に仕える神官たちの勢力が非常に大きくなっていた。王権を左右するほどにね。

アメンホテプのアメンはその神の名からきている。

ところがアメンホテプ4世は神官たちが神の名をかりて政治に介入するのを嫌いました。しかし、かれらのバックには神がついているので、あからさまに対立することも難しかった。

そこで考えついたのが、新しい神
をつくってそれを信仰することで
した。

□□□□□□□

アメン神を信仰しなければアメン神官団を無視してもいいわけだ。かれが新しく信仰した神がアトン神です。そして、イクナートンと改名。イクナートンとは「アトン神の役に立つ」という意味です。さらに、アメン神官団の勢力の強い首都テーベを捨てて、新しい都を建設します。これが、アマルナという都市です。

だから、イクナートンは古代エジプトの宗教改革者と呼ばれる。かれの時代は、芸術もワンパターんから抜け出して非常に写実的な彫刻などがつくられます。イクナートンの像も残っていますが異様にリアルですね。この時代の芸術をアマルナ芸術といいます。

イクナートン像

しかし、ファラオとアメン神官団との対立は激しかったようでイクナートンが亡くなると、次のファラオによってアトン信仰は捨てられアメン信仰が復活しました。次のファラオというのがツタンカーメンです。

ツタンカーメン

ツタンカーメンの正式名は、トゥット・アンク・アメン。アメン神の名が入っているでしょ。

このファラオは墓に残された財宝で有名です。この黄金のマスクは見たことあると思います。

この時期の王族の墓は王家の谷というところに集中しているのですが、ほとんどすべて長い歳月のあいだに盗掘されている。19世紀からヨーロッパ人による発掘が始まりますが完全な形の王墓が見つかったことはなかった。

ところがツタンカーメンの墓だけは盗掘されていなかったのです。

盗掘されなかつた理由の一つはツタンカーメンがその名も知られていないほど無名の王だったこと。8歳から18歳くらいまで在位しただけの少年王で、格別な業績もなかつた。だからその墓もすごく小さい。泥棒が見逃すほど小さいのです。

もう一つは、ツタンカーメンのあの時代にラムセス6世という偉大なファラオがいて、その大規模な墓がツタンカーメンの墓のすぐ横につくられるのですが、その工事の人夫小屋がツタンカーメンの墓の上に造られたのです。そのため、ツタンカーメンの墓

は隠れてしまった。やがて、年月とともに存在も忘れられてしまった。

発掘したのはカーターというイギリス人です。イギリス貴族のカーナボン卿という人が出資者になって王家の谷の発掘をした。発掘するためにはエジプト政府の許可がいるんだけど、それまで発掘権を持っていたアメリカの学者がもう王家の谷には何もないと判断して、発掘権を返上したために許可がもらえたのです。

カーター自身はツタンカーメンの墓があるはずだと確信して発掘を開始するんですが5年間全く成果なし。パトロンのカーナボン卿は大金持ちなんですが、さすがに資金がつづかなくなって発掘打ち切りを決意した最後の年、1922年ついに王墓へ通じる階段を発見しました。

カーターが墓室をふさぐ扉を開けるのですがその時の情景は有名。

カーターは早く墓の扉を開けたくて仕方がないんだけど、出資者の到着を待ちます。

カーナボン卿の到着を待って扉の前まで進みます。有毒ガスが充満しているといけないので、まず扉の隅に小さな穴をあけてカーターはロウソクをかざして中をのぞき込みます。

ところが、カーターは無言のまま。うしろにいたカーナボン卿がたまりかねて聞く。

「何か見えるかね？」

やっとの事でカーターは答えます。

「はい、すばらしいものが…」

ロウソクの明かりで光り輝く黄金の遺物が部屋いっぱいに詰まっていたのです。

一番有名な黄金のマスクは、ツタンカーメンのミイラの上にかぶせてあったものです。ミイラは四重の厨子、石棺、三重の人形棺の中に入れられていた。一番内側の人形棺は黄金製。そのほかにもアマルナ芸術の影響もあるのか、芸術性の高い遺宝が2000点も発見された。

これでも王墓の中では異例に小さいものだというから、普通の王墓にはどれだけの財宝があったか想像もできない。

さて、ツタンカーメン自身のことですが、かれはイクナートンの息子（＊以前は腹違いの弟と書いていました）らしい。ミイラをレントゲンにかけたりして調べるんですよ。イクナートンが32歳で病死したあと王位につくのですが、エジプトの王位は、王の血統を継ぐ娘を妻にすることによって正統なものとされます。ツタンカーメンはイクナートンの娘アンケセナーメンを妻にして王になりました。アンケセナーメンはツタンカーメンより何歳か年上ですが、一緒に育てられた幼なじみで仲良しだったらしい。たぶん愛情があったんじゃないかな。遺宝の中に少年王ツタンカーメンと若い妻アンケセナーメンが仲睦まじく描かれている玉座も残されています。

この若妻アンケセナーメンですが実は2回目の結婚だった。一人目の夫は誰だったかと

いうと実の父イクナートンです。ややこしい話でしょ。イクナートンはアメン神官団との対立の中で自分の王位を強化するために、王の娘、自分の娘なんだけどね、を妻に加えたのでしょう。

父であり夫であるイクナートンが死んで、彼女は幼なじみのツタンカーメンの妻になつたんだ。

ツタンカーメンは即位の時わずか8歳の少年ですから実際の政治はたぶんしていない。そこで、アメン神官団が力を盛り返して、イクナートンの宗教改革をすべてつぶして元に戻してしまいました。

政治を取り仕切っていたのが三人のファラオに仕えてきた老大臣アイと将軍ホレンヘブです。

ここからはどんどん想像の世界に入っていくのですが、ツタンカーメンの死因です。かれのミイラをレントゲンにかけたところ頭蓋後方に穴が発見されました。

調査した医者は「棍棒または剣のつかで頭部を打たれたことがもとでできたらしい」といっている。他殺の可能性があるということだね。宮廷の奥深くで権力闘争おこなわれていたとしたら、さあ、犯人は誰か。

ツタンカーメンのミイラは太ももが異常に細い。3ミリしか大腿部の肉がない。ひょっとしたら歩行困難な障害があったのかもしれない。自由に歩けないツタンカーメンのうしろに近づいて頭を剣のつかでゴンと打った者がいるとしたら。

少ない状況証拠の中で犯人を特定するとしたら、ツタンカーメンの死によって最も得をした者。それは大臣アイでしょう。

ツタンカーメンの死後ファラオとなったのはかれだったのです。アンケセナーメンの3人目の夫として。

ツタンカーメンの棺の部屋の隣の部屋からは6ヶ月と7ヶ月位の胎児のミイラ2体が見つかっています。かれの子どもだとしたら、母親は...アンケセナーメンでしょう。早産だったのか、中絶だったのか。ひょっとして次の王位をねらう実力者に中絶を強制されたのか。想像はふくらみます。

夫ツタンカーメンを殺し、自分の子どもを中絶させた男と結婚をしなければならないとは。アイが犯人でないにしても何十歳も年上の老人の妻にならなければいけなかつたアンケセナーメンはどんな気持ちだったでしょうね。

実はカーターがツタンカーメンの石棺の蓋を開けたとき、金箔張りの人形棺の額の上に小さな花輪が置いてありました。すっかりドライフラワーになってるんだけどね。カーターは、ツタンカーメンの遺物のなかで、黄金や宝石でできた多くの副葬品よりもこの花輪が一番胸を打ったと言っています。

愛する夫を失ったアンケセナーメンが最後の蓋を閉める前にそっと置いたのかも知れませんね。

(*付記 2005年におこなわれたツタンカーメンのミイラのCTスキャン調査では、死の直前に足にひどい骨折をしていることがわかりましたが、頭部には異常は発見されませんでした。結局、死因については不明です。上記のロマンチックな物語は今や妄想になってしまいました。)

さて、その後も新王国は対外活動に積極的でシリア方面で外交活動を続けています。覚えておいて欲しいのが前1285年、カデシュの戦い。新王国とヒッタイトとの戦です。これがなぜ大事かというと、ヒッタイトは史上はじめて鉄器を製作、利用した国です。エジプトは青銅器です。だから、鉄器対青銅器の大合戦、というわけです。結果はヒッタイトの勝利に終わったらしい。

この戦いの記録が、エジプトでも、ヒッタイトのあった小アジアでも出土しているという点でも有名です。

これ以後、エジプトは「海の民」というよくわからん人々の侵入をうけて徐々に国力を落とし、前671年にはアッシリアという国に占領されます。

その後、一時復活する時期もあるのですが、とりあえずここまで一段落です。有名なクレオパトラが登場するのはもっとあとの話。

(20020227改稿)

[参考図書紹介](#) ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などをることができます。購入も可能です。

[ツタンカーメンの謎講談社
現代新書\(749\)](#)

ツタンカーメンものは多く出ているのですが、テレビでおなじみの吉村先生の一冊。
一番、入手しやすく、読みやすいと思います。

第5回 エジプト文明 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第4回 メソポタミア文](#)

明

[次のページへ
第6回 古代オリエント史
の展開](#)

□□□□□□□□□□

世界史講義録

第6回 オリエント史の展開

----- インド＝ヨーロッパ語族の登場 -----

メソポタミア地方、エジプト、さらにイラン高原や小アジアを含めた地域をオリエント地方といいます。これは「東方」という意味です。ヨーロッパから見た表現です。この古代オリエント史の展開を追っておきましょう。

メソポタミア地方ではシュメール人の都市国家、アッカド王国、古バビロニア王国までやりましたね。この地域はシュメール人を除いてセム語系民族の世界だったのですが、前2000年頃から、新しい民族が登場します。これがインド＝ヨーロッパ語族です。語族というのはおおざっぱな区別の仕方ですから注意してください。言葉の系統が同じと言うだけです。現在の民族とは全然違いますよ。

前2000年から前1000年にかけての1000年間はインド＝ヨーロッパ語族の大移動の時代です。かれらがもともとどこにいて、いつ頃どのように形成されたのかはっきりしませんが、漠然と黒海、カスピ海の北方から移動してきたと考えておけばよいと思います。たぶん気候の変動が原因で移動を開始します。

ある集団はイラン高原に南下したあと東に向かい、インダス川を越えてインドに侵入しました。これがアーリア人で、もとからインドにいた諸民族とともに現在のインド文明を築きます。

イラン高原に入った集団はペルシア人になります。

西方に移動したグループもいて、ギリシアに南下した集団がギリシア人、イタリア半島に入った集団がラテン人になる。

黒海北岸から、ドイツにかけて住みついたグループがゲルマン人となる。

当然、最も豊かだったメソポタミア地方に移住した集団もいました。かれらが最初にこの地域でつくった国家が三つ。

ヒッタイト、ミタンニ、カッシートです。

----- ヒッタイト -----

ヒッタイトは前1600年頃、古バビロニア王国を滅ぼし、小アジアに建国します。

この国は史上はじめて鉄器を使用します。必ず覚えること。

まわりの国はまだ青銅器ですから、鉄の武器を持ったヒッタイトは強国に成長します。製鉄技術はヒッタイトの国家機密として門外不出。ヒッタイトが滅んではじめて製鉄技術は各地に広まります。

それから戦車です。ヒッタイトの戦車には画期的な工夫がしてあります。教科書のレリーフの写真を見てください。ヒッタイトの戦車がありますね、どこがすごいかわかりますか。

車輪に注目。スポークを使っているでしょ。以前の車輪は丸く切った板を張り合わせてつくっていました。すごく重いのです。ところがスポークの採用によって車輪が軽量化でき、戦車のスピードが速くなつた。スポークの使用はヒッタイトが最も初期です。ヒッタイトは、エジプト新王国とシリア地方の領有権をめぐってライバル関係にありました。

古バビロニア滅亡後、メソポタミアの北部に建国したのがミタンニ。エジプトのイクナートンの妃ネフェルティティは、ミタンニからエジプトに嫁いだといわれています。

メソポタミアの中南部に建国したのがカッシート。かれらはそれまで縦書きだったくさび形文字を横書きにした。

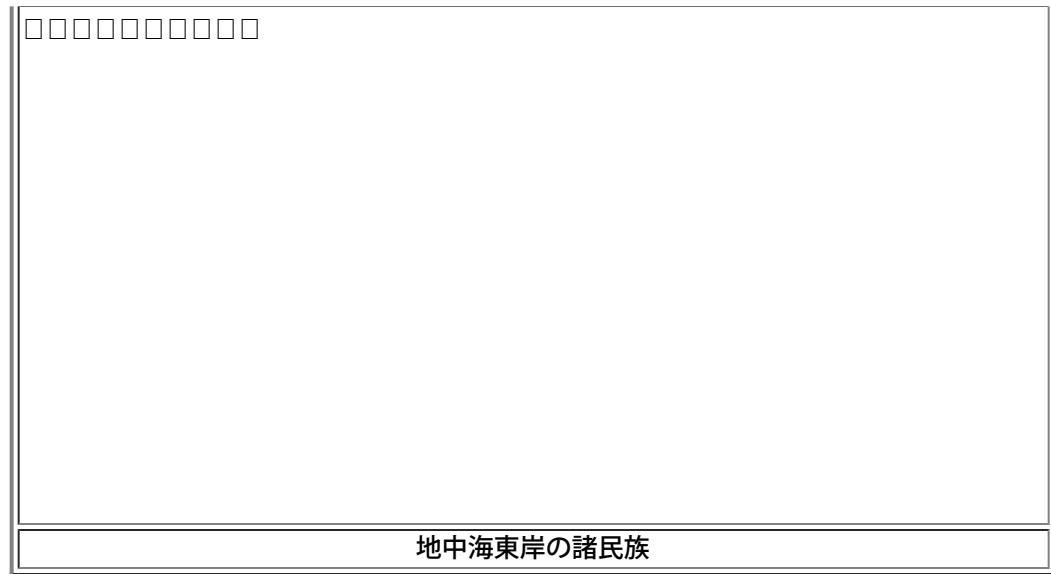
やがて、ミタンニに服属していたアッシリアという小国が、ミタンニの弱体化に乗じて発展し、前8世紀から前7世紀にかけてオリエントを統一する帝国を建設するのですが、その話の前に、オリエント地方で独自の活動をした民族を三つ紹介します。これらの民族は前13世紀頃から活動が活発化します。

アラム人

まず、アラム人。かれらは内陸貿易で活躍する商業民族です。中心都市がシリアのダマスкус。彼らが中継貿易で活躍できたのにはちゃんと理由がある。アラム人は、はじめてらくだを運搬に利用したのです。

やがてアラム語は商業用語として広まり、この地方の共通語になっていきます。のちにギリシア語が共通語になるまではね。イエスの時代もアラム語が共通語。かれもアラム語を話していた。

アラム人の文字、アラム文字も内陸部に伝えられていきます。インドや中央アジアで使われた文字のもとはみなアラム文字。有名なものでは、ソグド文字、ウイグル文字、突厥文字があります。



地中海東岸の諸民族

フェニキア人

地中海貿易で活躍したのがフェニキア人です。中心都市はシドン、ティルス。アフリカ北岸にはかれらの植民都市カルタゴがあります。カルタゴはあとで、ローマと死闘を繰り返すことになりますので、頭の片隅に残しておいてください。フェニキア人が海上で活躍できたのにも理由がある。かれらの住んでいたのは現在のレバノン。当時はまだレバノン杉が豊富だったんだね。それで、舟を建造したのです。さらに、レバノン杉が重要な交易品となつたのです。かれらの文字、フェニキア文字は、ギリシアからヨーロッパに伝えられアルファベットとなります。商人たちが帳簿を付けるためにつくられた文字だったので書きやすく読みやすい。一般の民衆に開かれた文字ですね。エジプトの神聖文字などは、神官、書記など支配者だけに独占された文字です。だから、伝えるものが途絶えると読めなくなってしまったです。そこがフェニキア文字との違いです。

ヘブライ人

最期がヘブライ人。かれらはその宗教であとの時代にものすごく大きな影響を与えることになります。かれらはユダヤ教という宗教を生みました。そして、このユダヤ教からキリスト教、イスラム教が生まれるのでです。

どんなふうにユダヤ教がつくられてきたかを見ておきましょう。

ヘブライ人は部族集団に分かれてオリエント地域のあちこちで遊牧を中心に暮らしていました。

前1500年頃は一部がパレスチナ地方に定住を開始し、また別の集団はエジプトに移動しました。

ところが、エジプトの暮らしあはよくなかった。ファラオからいろいろな圧迫をうける。聖書にはエジプトを「奴隸の家」なんて書いてある。

そこで、かれらは今度はエジプトから逃げ出そうとします。これが有名な旧約聖書の「出エジプト」の物語になります。

前13世紀頃のことです。脱出するヘブライ人たちのリーダーになったのがモーセです。モーゼでもいいですが、最近の本はほとんどモーセと書いてますね。この資料集も3年前はモーゼだったんですよ。

聖書ではモーセは神に導かれ、いろいろな奇跡を起こしてヘブライ人をエジプトから脱出させるのですが、そのクライマックスが海の道を渡るシーン。『十戒』という昔のアメリカ映画でも描かれていたので日本人にもなじみ深い。ビデオにもなっているので興味ある人は見てください。

逃げるヘブライ人の集団を追ってファラオの軍勢が迫って来るんですが、モーセたちの前には紅海が横たわっていて、逃げ場がない。「こんなことなら奴隸でもいいからエジプトにいるべきだった」、とか泣きごとを言うやつもでてくる。

そこでモーセがみんなに向かって「主の救いを信じなさい」といって、持っている杖を海に差し出す。すると、ものすごい暴風が吹いて海が二つに割れ、海の底に道ができるんです。ヘブライ人たちはその道を通って逃げることができた。あとから追いかけてきたエジプト軍が海の道に入ると、とたんに海水がどっと崩れてきてエジプト兵たちは溺れ死んでしまうんです。

とても現実にあったこととは思えませんが、苦難の末にヘブライ人たちがエジプトから逃げてきたことを象徴している物語なのでしょう。

エジプトから逃れたモーセたちはシナイ半島に入ります。ここで、モーセは神の声に導かれてシナイ山に登ります。シナイ山はシナイ半島の南方にある標高2800メートルくらいの禿げ山です。

山に登ったモーセに神が語りかけるのですが、ここがユダヤ教成立の第1段階です。そして、こんなことを言う。「神様は私しかいないんだ」「ほかの神様を信じてはダメだ」とね。これが一神教です。

旧約聖書の文で確認しておきましょう。

「私はおまえの神ヤハウエ、エジプトの地、奴隸の家からおまえを導き出した者である。おまえには私以外に他の神があつてはならぬ。……」

こんなふうに、神の命令が十個続きます。宗教ですから命令ではなくて戒律なので、「十戒」と呼ばれます。モーセが神と結んだ契約です。

神はこの十戒を自らの指で2枚の石版に刻んでモーセに授け、モーセは山から下りて、ヘブライ人たちに教えを伝える。

その後、モーセとかれに率いられたヘブライ人の集団は放浪生活を続けるのですが、長い年月のうちに、パレスチナ地方に定住したようです。

これは、16世紀のイタリアの芸術家、ミケランジェロのモーセ像です。まったくの想

像でつくった彫刻ですが、ヨーロッパ人がモーセに対してどんなイメージを持っているか、という参考にはなるね。実に神々しい姿です。右脇に抱えている板があるでしょ、これが十戒を刻んだ石版というわけだね。

さて、このモーセにまつわる話、あんまり非現実的なんで、ホンマかいな？と思うでしょ。

こんなふうに考えてください。ヘブライ人たちがこの物語を信じていたことは事実だと。そして信じることによってかれらは歴史に独特の足跡を残すのです。

現実の展開としては、ヤハウェ神への信仰と十戒を持つようになったヘブライ人々は、前10世紀に自分たちの国を建設します。ヘブライ王国です。場所は現在のイスラエルと同じところです。首都はイエルサレム。ここは、のちにイエスの活躍の舞台になりますし、イスラム教をつくったムハンマドが天に昇った場所とされていて、現在でもユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地です。

ヘブライ王国は、ダヴィデ王、ソロモン王の時代に中継貿易で大いに栄えますが、そののち南北に分裂。北部に成立したのがイスラエル王国（前932～前722）。南部にできたのがユダ王国（前932～前586）。

イスラエル王国はアッシリアにより征服され滅亡。

ユダ王国はアッシリア時代は持ちこたえますが、アッシリア滅亡後にメソポタミアにできた新バビロニア王国に征服されました。

新バビロニアは征服したユダ王国の民、約5万人をバビロンの町に強制移住させた。この事件を「バビロン捕囚」といいます。このときの新バビロニアの王がネブカドネザル2世。

この強制移住という政策は被支配民族の抵抗を防ぐために当時は頻繁にやられていたのですが、ヘブライ人はこれを非常に深刻に受け止めます。

これが、ユダヤ教成立の第2段階です。

「何故、われわれヘブライ人はこんな目にあうのか」とかれらは考えた。ヤハウェ神を信仰していても御利益がなく、民族としてひどい目にあうのならそんな神様捨ててしまおう、という選択もあると思うのですが、かれらは逆の発想をする。

「われわれはモーセ以来の戒律をちゃんと守って、ヤハウェ神のみに信仰をささげただろうか」と、深く反省してしまうのです。深く反省すれば、そりゃあキッチリと戒律守っていない人はいくらでもいるわけでね。はじめにヤハウェ神を信仰しなかったから、神はわれわれにこんな試練を与えたのだ、というふうに考えたようです。

だから、苦難の中でヤハウェ神に対する信仰がいっそう強まり、民族としての団結心が強まった。

50年ほどバビロンに移住させられたあと、新バビロニアが滅んで、かれらは故郷の地に帰ることが許されます。帰った人々は喜び勇んでヤハウェ神の神殿を建設し、いっそ熱心に戒律を守り宗教指導者のもとで生活をするようになります。

これをもって、ユダヤ教が成立したと考えます。

やがて、ヘブライ人のことをユダヤ教を信じる人々として、ユダヤ人と呼ぶようになっていきます。かれらはユダヤ教を自民族のアイデンティティとして守りつづけます。シュメール人もアッシリア人も、アラム人も、フェニキア人も現在は存在しませんがユダヤ人は現在でも世界中で活躍しています。

中国人や、インド人のように歴史に登場して以来同じ場所で活動して、今まで続いている集団は別にして、これは、すごいことですよ。ユダヤ人はのちのローマ帝国時代に国を失うんですからね。国がなくなってもユダヤ教を信じるということでユダヤ民族は存在しつづけたのです。

ユダヤ教の特徴

最後に、ユダヤ教の特徴をまとめておきましょう。

最大の特徴が一神教であること。

一つの神しか信じてはならないという宗教をつくったのはこのヘブライ人だけです。それ以外の民族はいろいろな神を同時に存在させていて、時に応じて拝み分けている。われわれはそうだね。正月には神社に行き、葬式はお寺の坊さん呼んでお経をあげてもらい、結婚式はキリスト教会で。日本人が特別みたいにいう人がいるけどそうではないと思う。ギリシア神話の神々やインドの神々を考えてもらえば、多くの神が共存しているのが一般的なあり方だと理解できると思います。キリスト教が浸透するまでのヨーロッパ人もいろいろな神々を持っていたのです。自然現象の中に多くの神々を感じる感性をわれわれは持っているようです。この感覚は多くの民族に共通です。

ヘブライ人だけが特別だった、と考えた方が自然です。

キリスト教、イスラム教も一神教ですが、二つともユダヤ教から生まれたものですから、突きつめれば一神教を生んだのはヘブライ人だけなのです。

一神教という特徴と関連して、「偶像崇拜の禁止」というのが2番目の特徴。

われわれには理解しにくいです。偶像是何かというと、たとえば奈良の大仏さん、あれは偶像。信仰の対象を彫刻に刻んだり、絵に描いたりしたものはみな偶像です。われわれは日常的にやっているね。これをやってはいけないというんです。

何故ダメかというと、神様、具体的にはヤハウェですが、これを彫刻にして拝むとします。

拝んでる人は何を拝むのですか。彫刻でしょ。彫刻は神ですか、ヤハウェですか？ということになる。彫刻は彫刻であって、ヤハウェではない。

拝むべき神は唯一ヤハウェしかいないのに、彫刻を拝むということはヤハウェではないものを神として拝むことになる。ここで、すでに一神教からはずれてしまうんです。

だから、十戒の二つめの戒律で「おまえは偶像を刻んではならぬ」となるわけ。

この偶像崇拜の禁止はユダヤ教から生まれたキリスト教、イスラム教にも受け継がれま

す。

キリスト教の神も、イスラム教の神もユダヤ教と同じ神、ヤハウェなんですが、みなさん、キリスト教の神様の絵とか彫刻を見たことがありますか。ないでしょ。イエスやマリアの絵はありますよ。でもヤハウェの図像は見たことないはずですね。禁止されているんです。

三つ目の特徴として、ユダヤ教には選民思想という考えがありました。

バビロン捕囚の中でヘブライ人たちは自分たちが惨めな生活を強いられている理由を考えます。そして自分たちの運命を合理化するわけね。こんな合理化です。

「神は自分たちを選んでいるからわざわざ試練を与えてくれているんだ」と。

なにしろ、ヘブライ人は神からその名を教えてもらってるんですから、特別なわけですよ。

他の民族は神から選ばれていないから試練すら与えられていない、はじめから神に見捨てられているんだ。こう考えた。

「だから、最後の審判の日にはヘブライ人のみが救われるのだ」ここまで、行き着く。こんなふうに考えるヘブライ人、もうユダヤ人といつてもいいかな、は他の民族からはどう思われたでしょうね。

だから、ユダヤ教はユダヤ人という範囲をこえて他民族に広がることはあまりありませんでした。全然他民族に信仰されなかつたわけではないのですが。

のちに登場するイエスはユダヤ人で、ユダヤ教の改革者として布教活動をするんですが、イエスはこのユダヤ教の排他性を取つ払つた人なのだと思います。

四つ目の特徴。バビロン捕囚のつらい経験の中から、ヘブライ人はいつか救世主が現れて自分たちを救い出してくれる、という願望を持つようになります。

救世主待望思想といいます。

これが、何故大事かというと、またまたイエスなんですが、イエスが登場したときにかれを救世主と考える人々がのちにキリスト教をつくっていくんですね。救世主をギリシア語でキリストというんです。

イエスを救世主とは考へない人も当然たくさんいて、この人々はずつと現在に至るまでユダヤ教です。

ユダヤ教の經典が旧約聖書です。

ただ、旧約聖書という言い方はキリスト教の立場からの言い方です。

旧約というのはふるい契約・約束という意味です。

契約というのは、神と人間とのね。アダムとイヴからはじまって旧約聖書は神と人の約束をめぐる物語といってよいでしょう。

ふるいというのは、キリスト教の立場から、イエスと神の契約を新しい契約「新約」と考えるところからつけられたものです。

旧約聖書はイスラム教でも尊重される聖典です。イスラム教は旧約聖書は認めますが、イエスを救世主とはせず、並の預言者として考えます。

ちなみに私は高校時代まで旧約、新約を旧訳、新訳と勘違いしていました。文語調の古い翻訳と、口語の新しい翻訳なのかなってね。馬鹿だね。
だから、テストで旧訳聖書と書かないように。旧約聖書です。

(2002/3/2校正)

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

世界の歴史 (2) 古代オリエント河出文庫	メソポタミア文明からアッシリア、アケメネス朝までの、オリエントの歴史が頭に入らなくて、困っている人は多い。 読んですっきりする本も、見たことがない。とにかくややこしい。 一冊あげろといわれたら、やっぱり定番の概説書はこれ。
生活の世界歴史(1)河出文庫	私の持っているソフトカバー版では、「古代オリエントの生活」という副題がついている。文化人類学的、民族学的に、歴史的社會にアプローチしようとした意欲的なシリーズ「生活の世界歴史」の第一巻。 エジプトにもメソポタミアと同じくらいのページ数を使っている。

第6回 オリエント史の展開 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第5回 エジプト文明](#)

[次のページへ](#)
[第7回 アッシリアからアケメネス朝へ](#)

□□□□□□□□□□

世界史講義録

第7回 アッシリアからアケメネス朝ペルシア

----- アッシリア -----

前8世紀から前7世紀、メソポタミアからエジプトまでのオリエント全域をアッシリア帝国が統一しました。

この国を建設したアッシリア人はセム語系です。前20世紀以前からティグリス川上流のアッシュールという都市を中心に交易活動等をしていました。古バビロニア王国やミタンニに服属していたのですが、前14世紀に、一時独立を回復。その後またしばらくは目立った活動はありません。

ところが前9世紀頃から急速に勢力を伸ばしてきました。

この時期くらいから、オリエントは鉄器時代に突入します。アッシリアはこれをうまく取り入れると同時に、常備軍を組織しました。

そして騎兵隊を導入します。教科書のアッシリア騎兵の浮き彫り写真を見ると、この騎兵は弓をつがえていますね。馬にはまだ鞍もあぶみもついていません。

騎兵が鞍がない状態で槍を持って敵をつくと反動で馬のうしろに飛んでいく。また、あぶみなしで剣を振りおろすと馬の横に滑り落ちるそうです。だから弓を使っているのです。

前8世紀末のサルゴン2世の時から飛躍的に領土を拡大して、その後、一時はエジプトも支配下において約100年間、絶頂期です。首都はニネヴェ。

アッシリアは全国を属州、属国として、多くの民族を支配したのですが、その支配の仕方が酷かった。

抵抗した都市の住民の生皮を剥いで城壁に貼りつけたり、串刺しにしたり、とにかく力で押さえつけるものでした。

その代表が「強制移住政策」というものです。

これは、抵抗しそうな地方の民族をごっそり別の場所に移住させるものです。

生活の基盤を奪われて、一から生活を築いていかなければいけないから、これをやられた民族はアッシリアに抵抗するどころではなくなるわけです。「強制移住」なんていう言い方は、まだまだ優しい。難民創出政策ですね。

こういう強圧的な力による支配は強そうで、実はもろい。

うまい支配というのは飴とムチを上手に使い分けるのですが、アッシリアの場合はム

チムチだった。

100年ほど最盛期が続いたあとは、各地で反乱が頻発し、あっけなく滅んでしまいます。

北方のスキタイ人の攻撃と支配下のカルデア人、メディア人等の反乱で首都ニネヴェは前612年に陥落し、前609年、アッシリア帝国は滅亡しました。

四国分立時代

アッシリア滅亡後、オリエントには四つの国ができます。これを四国分立時代（前612～前525）という。

まずメソポタミアからシリアにかけてのいわゆる「肥沃な三日月地帯」を中心に建国したのが新バビロニア王国。カルデア王国ともいいます。バビロニアの南部にすんでいたカルデア人の建国です。都はバビロン。

この国の王はネブカドネザル2世を覚える。前回もでました。ユダ王国を滅ぼしてバビロン捕囚をおこなった王です。

これは、アッシリアの政策を受け継いでいるわけです。アッシリアもイスラエル王国を滅ぼしたときに強制移住をさせていますから、ネブカドネザル2世の時だけが何故バビロン捕囚として、ユダヤ教成立に大影響を与えたか。不思議に思いませんか。大学で歴史を専攻する人はこういうことを自分で調べて考えるんですよ。

小アジアに建国したのがリディア王国。この国は最古の鋳造貨幣を造った点で重要。ギリシア方面とシリア、メソポタミアを結ぶ交易路にあったことと関連があるのでしょう。かつて、ほぼ同じ場所にあったヒッタイトで最古の製鉄がおこなわれていることを考えると、この地域は何か特殊な金属加工についての伝統があったのかもしれません。

イラン高原を中心にできたのが、メディア王国。

エジプトは独立を回復してサイス朝ができます。





四国分立図（前6世紀）

アケメネス朝ペルシア

四国すべてを統一したのがアケメネス朝ペルシア。小アジアからインダス川に至る大帝国を建設します。

アケメネスというのは王家の名前です。あとにササン朝ペルシアという国もできますので、これと区別するため試験では「アケメネス朝」と必ずつけてください。

ペルシア人はインド＝ヨーロッパ語族で、同じ民族系統に属するメディアに服属してイラン高原南部に住んでいました。

前550年、メディアの政権を奪い、つづいて、リディア、新バビロニア、エジプトを征服した。

その後いったん王位をめぐって内乱状態になるのですが、この内乱を鎮めて統一を回復したのがダレイオス1世です。かれは自分の再統一の功績を記念碑に残しました。これが以前お話しした（第4回）ベヒストゥーン碑文です。かれの時代がアケメネス朝の絶頂期ですね。

かれは帝国の支配制度を整備します。

まず全国を20の州に分けて総督を派遣します。この総督をサトラップという。

さらに、監察官がいてサトラップを監督、監視する。これを「王の目」「王の耳」といいました。「王の耳」は密偵、隠密で、サトラップが不穏な動向を見せると王に報告します。

また、駅伝制度を整備します。これが「王の道」。こういうのは覚えやすくてよいね。

アケメネス朝には都がいくつかあるのですが、一番代表的なものがスサ。それから、ダレイオス1世が建設したのがペルセポリスです。

ペルセポリスの遺跡の写真がありますね。今は、廃墟になっている。当時は壮麗な都だったらしい。なにしろ、この都はダレイオス1世が儀式用に建設したものなのです

よ。アケメネス朝は広大な領土を支配しているから、方々から他民族の使節団や、朝貢使節が来るんですよ。それを謁見するために造ったんだね。だから他民族の度肝を抜いて、アケメネス朝の威容を見せつけてやろうという意図があったと思いますよ。残された壁のレリーフはダレイオス1世が外国の朝貢使節を謁見しているところです。

ペルセポリスをこんな廃墟にしてしまったのが、かの有名なアレクサンドロス大王です。ギリシア人を率いて攻め込んできたマケドニア王アレクサンドロスがここを占領したときに火を放って燃やしてしまったのです。

ペルシアの他民族支配のやり方はわりあい寛容だったようです。

アッシリア帝国が強圧的な支配で、あっという間に滅んでしまった経験に学んだのでしょうか。それにペルシア人の成年男子の数は10万人程度だったらしいですから、これがすべて戦士としても広大な領土を力だけで支配しつづけるには少なすぎる、そんな事情もあったのでしょうか。

たとえば、新バビロニアを滅ぼしバビロンに入城したさいには、バビロン捕囚のヘブライ人たちに帰国を許しています。その後もかれらが神殿を建設してユダヤ教を信仰していくことに対して、とりたてて干渉をしていないようです。

要するに、支配下の民族がペルシアに対して税を納め、戦時には軍役に服せば、あとは何をしてもよかったです。

徐々に拡大してきたオリエントの交易圏をすっぽり包む形でこの帝国は成立します。大統一国家の誕生でアラム人などは商売がしやすくなったりでしょうね。ちなみにペルシア人の言語はペルシア語なんですが、帝国支配の公用語としてはアラム語が使われています。

ゾロアスター教

ペルシア人の宗教について見ておきます。

かれらの宗教はゾロアスター教。あの時代にまとめられる経典が「アヴェスター」です。

これは、面白い宗教です。ユダヤ教が一神教とすれば、ゾロアスター教は二神教とでも言いますか。神が二人います。一つが光の神、光明神アフラ＝マズダ。対立するのが闇の神、暗黒神アーリマンです。

ゾロアスター教によれば、アフラ＝マズダとアーリマンは永遠に戦いつづけている。それぞれ天使の軍隊と悪魔の軍隊を率いて戦っている。そして、この世に起きるあらゆる出来事はすべて、この二人の神の戦いのあらわれだと考える。君たちが朝寝坊して遅刻したこと、ここに座って授業を聞いていることも、どこかの国が戦争していることも、みんなね。

永遠に戦うのですが、いつかわからないけれど、いつか決着がつきます。最後には光の神アフラ＝マズダが勝つ。

ここからが、実に興味深いんですが、アフラ＝マズダの勝利のあとで救世主が現れる。

救世主はそれまでこの世に生をうけて死んでいった人々をすべてよみがえらせるのです。そして、復活した人々を善悪に振り分け、天国行きと地獄行きに選別するという。これが、ゾロアスター教の「最後の審判」です。

なんだか、キリスト教みたいでしょ。ということは、ユダヤ教にもそっくりなわけ。では、ユダヤ教とゾロアスター教どちらが先かというとゾロアスター教なんです。ユダヤ教の救世主待望思想や最後の審判の観念は、ゾロアスター教の影響を受けて生まれたといわれています。

ちなみにユダヤ教、キリスト教はヤハウェ神信仰の一神教だと前回お話ししましたが、聖書を読んでるとおかしなものがでてきます。神でも人でもない。何かというと、これが悪魔です。悪魔って一体何者なんでしょう。これは神の一種としか考えようがない。旧約聖書の「ヨブ記」などでは、神が悪魔の挑発に乗ってしまって義人ヨブという人をいじめぬいたりします。神は悪魔とほとんど同じレベルで論争しているのです。

この悪魔もゾロアスター教のアーリマンがユダヤ教の中に紛れ込んだのではないかといわれています。ヘブライ人は、アケメネス朝の支配下でユダヤ教を確立していったですから、そういうこともあろうかとうなづけますね。

このゾロアスター教は、西方のヘブライ人だけでなく東方のインドにも影響を与えた。

アフラ＝マズダはインドに入り光明仏ヴィローシャナになります。さらにヴィローシャナは中国、朝鮮半島を通って日本にもやってきます。これが毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）。奈良の大仏さんです。私、小学校の修学旅行で行きましたが、光明神アフラ＝マズダだったんですね。

資料集にゾロアスター教儀式の写真があります。現在でも信者がいるのです。イランに4万5千人、インドのボンベイを中心に10万人ほど信者がいるとあります。この写真は聖なる火を焚いてその前で祭司がアヴェスターを詠んでいるようです。

おまけの話。マツダ自動車という会社があるでしょ。ファミリアとかつくっている。松田さんという人が創業者でマツダ自動車なんですが、ロゴマークは「mazda」になっている。何故、真ん中がゼットなのかというと、アフラ＝マズダからとっていると聞いたことがあります。コマーシャルを聞いていると、確かに「ザツ・マズダ」と聞こえますね。

ゾロアスター教みたいにポピュラーでないものからとるなんて、なんだか感心するね。

(2002/3/5校正)

第7回 アッシリアからアケメネス朝ペルシア おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第6回 オリエント史の
展開](#)

[次のページへ](#)
[第8回 東地中海世界の文
明](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

世界史講義録

第8回 東地中海の文明

----- クレタ文明 -----

エジプトやシリアで諸民族の活動が活発になると、地中海を通じての交易も生まれてきました。東地中海沿岸とそこに浮かぶ島々のあいだに交易圏が発生します。

この交易圏に生まれたのがクレタ文明です。文明と呼ぶような大規模なものではないですが、こんな大きな言い方をするのはギリシア文明のご先祖様の位置にあるからでしょうね。

クレタ文明の場所はクレタ島。ギリシアの南方に浮かぶ小島です。

1900年、イギリス人工ヴァンズがこの島の中央部クノッソスで巨大な宮殿跡を発掘しました。クノッソス宮殿といいます。

この宮殿は周囲に城壁を持たず、また中がたくさん的小部屋に分かれているのが特徴です。壁画にはタコやイルカなど海の生き物たちが実に生き生きと描かれていました。

クレタ文明が栄えたのは前2000年から前1500年位までの約500年間です。絵画など、はじめはエジプトなどオリエント文明の影響が色濃いのですが、だんだんと独自色がでてきます。

クレタ文明の担い手たちはギリシア本土を支配していたようで、ギリシア神話の中にそのことを思わせる話が残っています。ミノタウロス伝説という話です。

----- ミノタウロス伝説 -----

こんな話です。

クレタ島にはミノタウロスという化け物が住んでいました。

クレタに支配されていたギリシアのアテネの町は毎年ミノタウロスに生け贋をささげなければならない定めになっていました。生け贋は少年少女それぞれ7人。かれらはクレタ島のクノッソスに連れていかれてミノタウロスに食べられてしまう運命。毎年生け贋の子どもを決める時期が来るとアテネの親たちは悲しみにしづみながら、くじ引きをする。あたりくじをひいてしまったら自分の子どもが生け贋です。

このミノタウロスは何者かというと、それがこんな話になっている。

クレタ島の王はミノス王といいます。かれは王位に就く時に海の神ポセイドンの力を借りるのですが、その際に王になつたら美しい牡牛をポセイドンにささげると約束した。ところが実際に王になると、牡牛をささげるのが惜しくなつてしまつてポセイドンとの約束を守らなかつた。怒つたポセイドンがミノス王に仕返しをします。

どんな仕返しかというと、ミノス王にはパーシパエという妃がいるのですが、そのパーシパエに牡牛を好きになつてしまふという呪いをかけるのです。この辺から話がだんだん怪しくなるのですが、呪いをかけられたパーシパエは牡牛に惚れてしまふ。好きで好きでたまらなくなる。はつきり言うと、交わりたくて気も狂わんばかり。それで、雌牛そっくりの模型をつくり、その中に入つて牧場で草を食べて牡牛に近づきます。牡牛は本物の雌牛と勘違いして、交わつてしまふのね。

こんなふうにして、王妃パーシパエは想いを果たすのですが、時が満ちて彼女のお腹が大きくなつてきた。

産まれた子どもが、顔が牛、体が人間という化け物だった。これがミノタウロスです。困つたのがミノス王です。もとはといえば、自分のポセイドン神に対する裏切りが原因ですから。ミノタウロスを殺すこともできず、生かすこともできず、悩んだあげくに考えついたのが迷宮をつくつてここにミノタウロスを閉じこめることでした。

一度入つたら二度と出られない迷路の宮殿です。この宮殿の奥にはラブリスという両刃の斧が置かれていたので、この迷宮をラビリントスといいます。英語の迷路ラビリンスの語源。

さて、アテネから連れてこられた子どもたちはこの迷宮に閉じこめられ、やがては迷宮の中でミノタウロスに出会つて食べられてしまう運命です。

神話ではこんなふうに話が進みます。アテネに少年英雄テーセウスが登場します。かれは旅からアテネに帰つてくると、少年たちが生け贋としてささげられることを聞いて憤慨する。「俺が化け物を退治する」といつて、みずから生け贋に志願してクレタ島に送られるのです。クレタに着くと、ミノス王の娘、王女アリアドネがテーセウスを見つめます。テーセウスは、まあ、ものすごい美少年なわけでアリアドネは一目惚れするのですよ。

アリアドネはこっそりテーセウスに近づいて「自分の夫になってくれるか」と聞く。テーセウスは彼女を妻にする約束をする。未来の夫がミノタウロスに殺され食べられることは困るアリアドネはテーセウスにこっそりと麻糸の玉と短剣を渡します。

迷宮に閉じこめられたテーセウスは入り口に麻糸の端をひっかけておいて、糸玉をほどきながら迷宮の奥に進んでいきます。

やがてミノタウロスと出会つて闘うのですが、アリアドネから渡された短剣を使ってミノタウロスを倒すことができた。最後に糸をたぐつて無事に迷宮からの脱出した。と、まあ、こんな話。

実際のクノッソス宮殿の遺跡にはたくさん的小部屋がつくられていたと先ほど話しましたが、古代ギリシアの人たちはこれを迷宮と考えたのでしょうか。

生け贋をささげるというのは実際にあった話かもしれない。少なくともギリシアの人々はクレタ島の支配者に対して貢納義務とかがあったのでしょう。

またクノッソス宮殿には牛を描いた壁画もあった。

プリント見てください。これは「牛跳び」といわれている壁画です。

突進している牡牛が中央に描かれています。それと、三人の少年。一人は牡牛の角をつかんでいる。もう一人は牛の背中で逆立ちをしています。最後の一人は牛のうしろで両手を前に伸ばすポーズをとっています。

この絵を宗教的な儀式だとする解釈があります。突進する牛を少年が待ちかまえていて、うまく牛の角をつかんだら、思い切りジャンプして、牛の背中に手をついて反転して着地する。成功したらいいんですが、失敗したら、牛の角に突かれて悪くすれば死んでしまうでしょう。

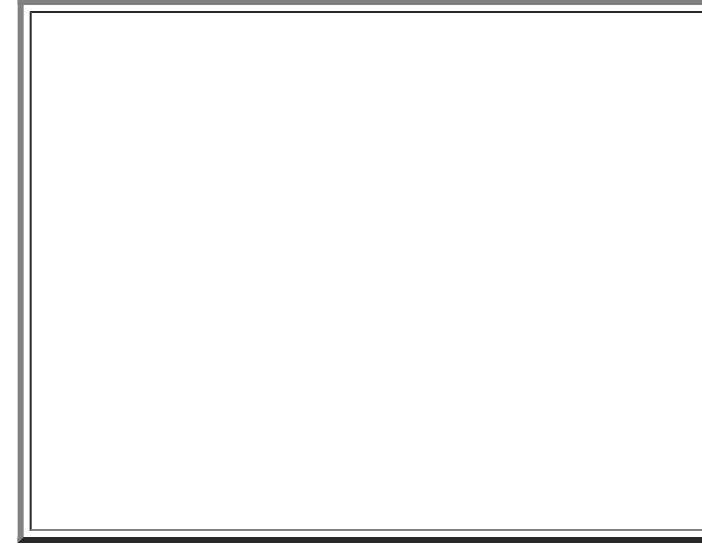
この、サークัสみたいな見せ物自体を神に奉納したのではないか、ということです。

牛を神にささげる、もしくは牛そのものを神聖な生き物と考える、こんな発想が地中海世界には広くあるように思います。

牛と人間が真剣勝負で闘うというのは今でもありますね、思いつきますか。

そう、闘牛ですよ。同じ地中海に面するスペインでは現在でも盛んにやってるね。一流の闘牛士はスーパースターだそうですよ。で、やはり牛に突かれて死んでしまうことがたまにあるそうです。闘牛の起源はクレタ文明にあるのかも知れません。

私はさらに、クロマニヨン人がラスコーやアルタミラの洞窟に牛をたくさん描いたことを連想するんですがね。



ミケーネ文明とトロヤ文明

クレタ文明は前15世紀には滅びました。理由はよくわかりませんがアカイア人の南下が原因ともいわれています。遅れて南下してきたドーリア人とあわせて、かれらがギリシア人になります。

クレタ文明の滅亡と前後して、アカイア人がミケーネ文明をつくります。この文明は辺境国家といったほうがいいくらい、規模は小さいです。ギリシア本土のミケーネ、ティリンスという町が中心です。

まだ、青銅器文明の段階で、国家はのちのギリシア文明のような民主的なものではなく専制的だったといわれています。

トロヤ文明は前2600年位から存在していました。小アジアのトロヤが中心。これも青銅器段階で国家は専制的、民族系統は不明です。

ミケーネ文明もトロヤ文明も前1200年頃滅びます。同じ頃、ヒッタイトが滅び、エジプト新王国も「海の民」という謎の集団に襲われて弱体化しています。たぶん、民族移動など大規模な変動があったのでしょう。

この二つの文明は文明そのものよりも、発掘した人によって有名です。

それがドイツ人、シュリーマン。1870年代にこの二つとも発掘するんです。

かれは幼い頃から寝物語にいつもギリシア神話を読んでいたの。大好きなのがトロヤ戦争の話。大人になったら絶対にトロヤの町を見つけようと子供心に決意するのです。当時はギリシア神話はあくまで神話であって、ホントにトロヤ戦争があったとか、トロヤの町があったなんて誰も想えていなかったんですが、シュリーマンは若いころから働きに働いて、商売で大成功して資金を貯めて50歳近くなってから財産を投じて自力で発掘をはじめます。

周囲の人たちは馬鹿だねえ、って思っていたみたい。浦島太郎の話を信じて竜宮城を探すようなものですな。

ところがかれは発掘してしまうんだね。トロヤの遺跡だけではなく、トロヤ戦争の物語でトロヤに攻め込んだことになっているギリシア本土のミケーネの遺跡まで見つけてしまった。そんなわけで、この二つの文明はシュリーマンと結びつけてセットで覚えておいてください。

シュリーマンは『古代への情熱』という自伝を出している。図書館にあるから興味があったら読んでください。幼なじみの女の子と一日の遅れで結婚しそびれたり、そんな話も出てくる。これを読んで考古学者や歴史学者になりたいと思う人、結構いるみたいですよ。

----- トロヤ戦争 -----

シュリーマンが信じたトロヤ戦争の話の発端が面白い。

テティスという女神がペーレウスという人間の男、これはギリシアの王の一人なんですが、と結婚するところから始まります。

女神と人間の結婚だから、披露宴は大賑わい。神々も出席するし、ギリシアの主だった

王様たちもやってくる。大いに盛り上がっているんですが、一人だけ宴会に呼ばれなかつた女神がいたんだ。これが、嫉妬と争いの女神エリスです。結婚披露宴に嫉妬と争いは要らないからね。ところが、エリス女神は披露宴に呼ばれないことに嫉妬してしまつた。腹を立てた彼女は、披露宴に争いを持ち込みます。何をするかというと、宴会場に黄金のリンゴを投げ込む。

突然、宴会場に転がり込んできた黄金のリンゴを取り上げてみるとそこにはこんなふうに書いてあるんだね。

「最も美しい女神へ」

「そのリンゴは私がもう権利がある」と、三人の女神が名乗りをあげた。「私が一番美しい」と三人の女神は大喧嘩をはじめてしまつて、宴会は滅茶苦茶になつてしまつた。

三人の女神はこんな顔ぶれです。

まずは女神ヘーラー、彼女は主神ゼウスの妻で、女神の中では一番偉い。世界の支配を司ります。

次が女神アテナ、戦いの女神です。

最後が女神アフロディーテー、美の女神だね。

「私は美しい」と、喧嘩するのですが決着がつかない、そこで三人はゼウスのところに行つて、「誰が一番きれい?」って聞くのですが、ゼウスも困るよね。思ったことを言って残りの二人に恨まれたらたまりません。

そこで、ゼウスは「美の判定者」を指名して、その人物に最も美しい女神を決めさせることにしました。「美の判定者」とされたのが、羊飼いの少年パリスです。これは人間。

ここまで来ると、女神たちは意地でも「美しい」といわれて、黄金のリンゴを手に入れたいわけですよ。女神たちはパリスのところに行って買収工作をするのです。

ヘーラーは、一番にしてくれたら、「世界の支配者にしてあげる」。

アテナは「あらゆる戦での勝利があなたのものに」。

アフロディーテーは「人間の中で一番の美女をあなたの妻に」。

三択問題です。みなさんなら、誰にしますか。

このあたりはギリシア人の人生観がうかがえて、最高に面白いですね。

パリスは美女を選択したんです。

世界の支配よりも、勝利よりも、美ですよ。ギリシア人らしいでしょ。かれらの残した彫刻を見るとつくづくそう思う。

さて、最も美しい女神はアフロディーテーで決着。彼女は、約束どおり最高の美女をパリスに与えるのですが、それが人妻だったのですよ。

ギリシアはスパルタ王メネラオスの妻ヘレネーです。パリスはアフロディーテーの手引きで彼女をさらって自分の妻とします。ところで、パリスは実はトロヤの王子だったので。妻をさらわれたメネラオスは怒るわな。妻を取り返すため、兄のミケーネ王アガメムノーンに助力を頼みます。アガメムノーンは全ギリシアの盟主なんです。かれの号令で、全ギリシア軍が出動です。海を渡ってヘレネーを奪い返すためにトロヤに攻め込みました。これがトロヤ戦争です。

ギリシア軍の中にはギリシア随一の戦士アキレスもいます。アキレスは戦争の発端となった宴会の主役女神テティスが、人間とのあいだに生んだ子です。テティスは死すべき定めにある人間の息子を不死身にするために、生まれたばかりのアキレスを不死の泉に浸けます。その時テティスはアキレスの足首をつかんでいたので、そこだけが不死の泉につからず、かれの唯一の弱点となります。アキレス腱だね。

そのアキレスもすっかり成長してこの戦争に参加するんだ。

こんな話を信じて、トロヤを発掘しようとするとは、シュリーマン、ただ者ではないね。ミケーネの遺跡からは黄金の仮面が出土していて、これは「アガメムノーンのマスク」と呼ばれています。

このトロヤ戦争が始まって10年目、戦争の最終段階をアキレスを主人公に描いたのがホメロスの叙事詩『イーリアス』です。ホメロスは前8世紀のギリシアの詩人。『オデュッセイア』という叙事詩もホメロスの作。これは、ギリシア随一の知恵者オデュセイウスがトロヤ戦争が終わって、トロヤから故郷へ帰る長い旅を描いた物語。

トロヤ戦争の最終段階でトロヤをうち破る作戦を考えたのが、オデュセイウスでした。両軍とも名だたる英雄、勇士は次々に死んでいき、それでも決着はつかず、オデュセイウスは有名な「木馬の計」というのを提案します。全ギリシア軍は撤退するふりをしてトロヤの海岸から引きあげて、浜辺には大きな木馬だけが残っている。木馬にはギリシアの戦士が百何人か隠れているのです。

トロヤ側は今日も戦だ、と海岸に来てみるとギリシア軍がいない、とうとうあきらめて撤退したと思いません。海岸に残された木馬を戦利品として、トロヤ城内に持ち込んで、夜になったらどんちゃん騒ぎの勝利の宴会です。トロヤの兵士たちが飲みつぶれたのを見計らって隠れていたギリシア兵が木馬からでてくる。そして、内側から城門を開き、外の兵と合流してトロヤ人を殺しまくるのです。トロヤは炎上して滅んだ、という。

このトロヤの陥落炎上を描いた絵本がシュリーマンに強烈な印象を与えたそうです。

(2002/3/5校正)

[参考図書紹介](#)・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本の

データ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[ギリシア神話](#)

[ギリシア神話 上 \(1\)新](#)

[潮文庫 く 6-1](#)

[ギリシア神話 下 新潮文](#)

[庫...新潮文庫 く 6-2](#)

呉茂一氏のギリシア神話解説書。私が持っているのは、一番上のものだが、下の文庫版も内容は同じと思います。多分、最高水準のギリシア神話の本。単純に読んでも面白いし、調べものにも役立つほど、中味は濃い。もちろん、トロヤ戦争の話も載っています。

第8回 東地中海世界の文明 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第7回 アッシャリアから](#)
[アケメネス朝へ](#)

[次のページへ](#)
[第9回 古代ギリシア](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

第9回 古代ギリシア

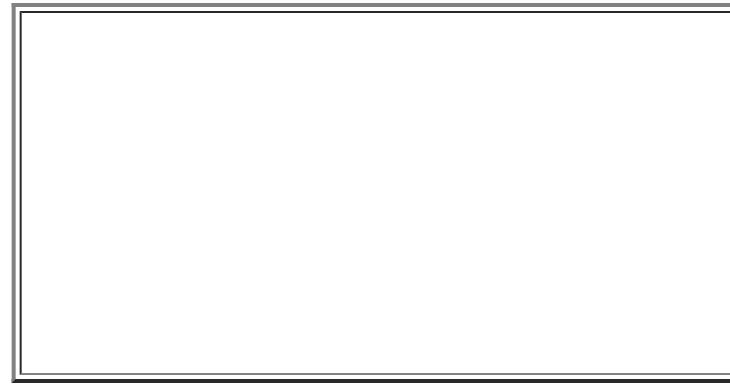
目次

- | |
|----------------------|
| 1 古代ギリシアの社会 |
| 2 アテネの歴史・貴族政治 |
| 3 アテネの歴史・財産政治から民主政治へ |

1 古代ギリシアの社会

前12世紀にミケーネ文明が滅んでから数百年間は暗黒時代。社会がどのようだったのかはよく分かっていません。前8世紀頃になって、ギリシア文明が姿をあらわしてきます。

このギリシア文明はわれわれに大きな影響を与えている。まず、民主主義の元祖です。今の民主主義は西欧で生まれたのですが、その西欧の人々がモデルにしたのがこの古代ギリシアです。それから、哲学や芸術などわれわれになじみ深い西欧文化の元祖でもある。ソクラテスは聞いたことがあるでしょう。仏陀や孔子の本は課題図書にならないけど「ソクラテスの弁明」は夏休みの課題図書になるね。というわけで古代ギリシアは重要です。



ギリシア文明の場所を確認、バルカン半島の南端、ここがギリシア本土です。それからイオニア地方、ここもギリシア人の世界です。ギリシア人はインド＝ヨーロッパ語族。前20世紀頃からこの地方に南下してきたアカイア人、イオニア人、ドーリア人をまとめてギリシア人という。

彼らはこのギリシア世界を統一する大きな国を作ることはありませんでした。彼らは多くの都市国家を作つてここで生活します。その都市国家のことをポリスといいます。

前8世紀頃にはギリシアの各地域の人々が集まって住み始めてポリス社会が形成されます。集まって住むことを集住という、当たり前だね。これをギリシア語でシノイキスモスといっています。何故か知らないけどこういう単語が入試できかかる。

代表的なポリスがアテネとスパルタ。ポリスの構造も大事なので押さえておきましょう。

ポリスの真ん中にはだいたい小高い丘がある。丘の上には城塞があって戦争の時これが最後の守りです。この城塞は神殿と一緒にになっていることが多いようです。アテネの写真を見てください。これね、ちょっと小高い丘、上に立っているのはパルテノン神殿。この町の中心となる丘をアクロポリスという。

アクロポリスのふもとにはアゴラと呼ばれる広場があります。ここが政治、経済の中心となる。ポリスの市民達は暇があったらここに集まっておしゃべりや体操するのね。

その周りに市民の住宅が密集しています。

最後にそれを取り巻いて城壁が築かれている。

これが典型的なポリスの構造です。

で、このポリスの周辺に農地があつてこれもポリスの領土です。

このポリスの領域は大きいモノでも日本の県くらいです。ほとんどはもっと小さい。

こういうポリスがギリシア本土やイオニア地方にいっぱいあるわけです。

ポリスには三種類の身分の住民がいます。

まずは貴族。

それから平民。

この二つの身分が市民です。

そして、奴隸と外人。彼らは市民として扱われません。

ギリシアは奴隸制社会で、だいたいの市民は奴隸を持っていて、彼らに畠仕事 をやらせていたようです。あと、鉱山なんかで奴隸は働かされていた。

外人は商売のために来ている者が多い。

アテネの写真を見ても分かるように、ギリシアというのは山が多いのね。大きな平野はあまりありません。だから山の斜面で農業をする。雨もあまり降らないから穀物生産には向かない。何を作っているかというと、果樹栽培で、ブドウとかオリーブを盛んに作る。

しかし、これはワインやオイルの原料にはなるが、主食としてオリーブばかり 食べてるわけにはいかないでしょ。で、ギリシア人はどうしたかというと、これを海外に持つていって穀物と替えてくるわけです。大穀倉地帯のエジプトなどと貿易する。というわけで早い時期からギリシアでは海上貿易が盛んにおこなわれていました。

有名な哲学者のプラトンも果樹園を持っていて収入源はエジプトとの貿易だったらしいです。

貿易で儲けて豊かになると人口も増える。ところがギリシアは狭いし人 が増えても住むところがない。

これを解決する方法が二つあった。

一つは海外植民です。黒海沿岸や、イタリア半島、シチリア島等にどんどん植民していきます。植民市なんていふんだけどね、これが増えれば母市も一層貿易に有利だね。

イタリア半島の南端やシチリア島沿岸はそういうギリシア人のポリスがたくさん出来てマグナ・グレキア、大ギリシアなんて呼ばれました。

もう一つがギリシアの内部でよそのポリスから土地を分捕ってくることです。

そんなわけでギリシアではしつちゅうポリス同士で戦争をしています。

ところが、戦争ばかりしているんだけれども、彼らはお互いギリシア人だ、という同胞意識も強く持っていました。

どんなところで同胞意識を持つかというと、まずは言葉。

ギリシア語以外の言葉を話す人たちのことをバルバロイと言って軽蔑していた。

バルバロイとは汚い言葉を話す人たちという意味です。ベロベロバロバロ言つてるように聞こえたんだろうね。これがバーバリアン、野蛮人という英語の語源です。

それからギリシア全土が参加するいろいろなお祭りがあった。代表的なのがオリンピアの祭典、いわゆるオリンピックです。

これは前8世紀から4年ごとにずっと開かれます。各ポリスから選び抜かれた選手達がオリンピアに集まって、円盤投げとかレスリングとか、戦争に直接関わるような競技が中心ですが、それで栄誉を競い合うわけです。優勝しても賞金とかないけれど、全ギリシア世界にその名前がとどろき渡って、優勝者の彫像が作られて神殿に奉納されたりする。名誉なんですよ。

重要なのが「オリンピックの平和」というものです。エリスというポリスがオリンピアの祭典を主催するのだけれど、開催前にはエリスから開催を告げる使者が全ギリシアのポリスをめぐってすべての戦争の休戦を告げるんです。オリンピックは三ヶ月間やるんだけどその間一切戦争は禁止なわけ。各ポリスはこれをちゃんと守るんですね。

近代オリンピックはクーベルタンという人がこの古代オリンピックを理想として始められた。平和の祭典とか言うけれど実際にはどこかで戦争をやっています。もとになっている文化が違うから、なかなか古代ギリシアのようにはいきませんね。

何故、ギリシアではスポーツ競技会のために戦争まで中止したかというと、オリンピックそのものがゼウス神に捧げる儀式なんだね。宗教行事と言ってもいいでしょう。

ペルシアの大軍がギリシアに攻め込んできた時にも、オリンピックは開催しているんです。神に捧げる儀式だから、やめたくてもやめられないような性質のものだったんですね。

休戦を破つたらどうなるかというと、オリンピックの参加権がなくなる。それから、デルフォイの神託がもらえなくなる。デルフォイの神託というのはデルフォイ神殿の巫女さんのお告げです。靈験あらたかでギリシア人みんなが信じているのです。なんだかんだ言っても当時のギリシア人も困ったときには神のお告げをきくんだね。それが出来なくなるのは困るわけです。

それからオリンピックは女人禁制です。会場は神聖な場所だからですよ。見物客は4万人位集まったといいますが、みんな男。そして選手はみんな裸。トレーナーも裸。なんだかね。古代ギリシアは男の世界です。

2 アテネの歴史・貴族政治

ギリシアの代表的なポリスであるアテネを通してギリシアの歴史を見てゆきましょう。

大きく分けて、アテネの政治は貴族政治、財産政治、僭主政治、民主政治という順番に進んでいきます。まず、貴族政治。前8世紀頃、記録に定かな段階では、すでに王はないくて貴族が政治を担っています。ところが、海外貿易が盛んになって貨幣経済が進展するにつれて、平民の中に非常に豊かな者達があらわれてきます。

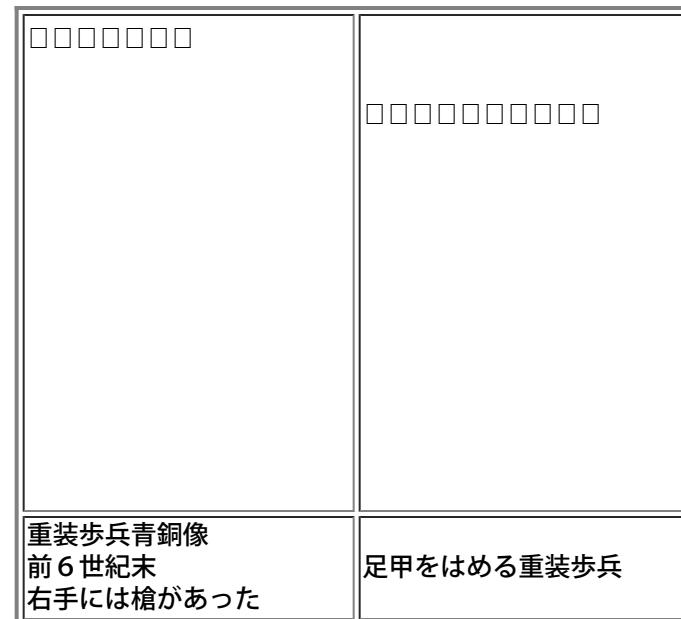
この豊かになった平民達がやがて重装歩兵となってポリス防衛戦争に出陣するようになります。

この重装歩兵というのが重要です。

当時のギリシア人にとってポリスを守るために戦争に出るというのは非常に名誉な事だった、というのを頭に入れておいてください。

この時代は戦争にいくのは貴族でした。貴族は騎兵。馬というものは維持費がかかるからね。

しかし、金持ちになった平民も名誉ある戦に出陣するようになる。その時の兵種が重装歩兵です。どんな格好をしているのか資料集で確認。青銅の兜に丸い盾、足にはすね当てをはめています。鎧は革製のようです。

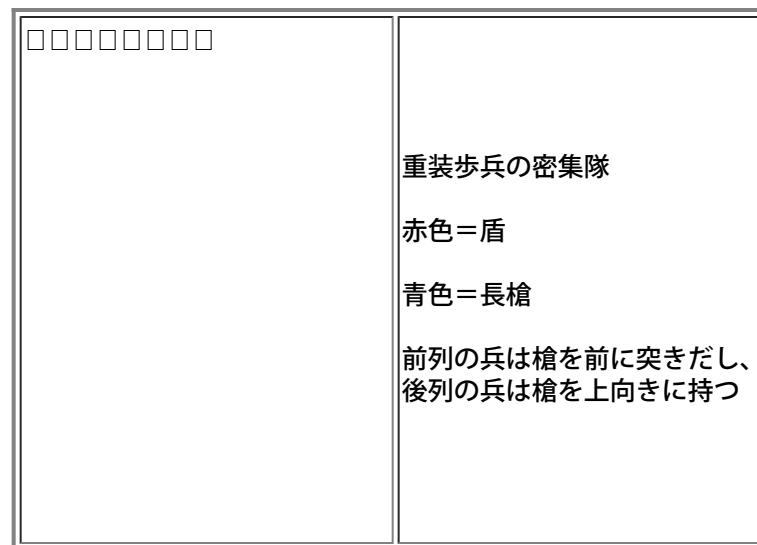


武器は鉄の穂先の付いた槍です。

鉄はまだまだ高価なモノですし、もちろん全部オーダーメードだから、よほど金持ちでないとこんな装備を手に入れることは出来ない。装備のない者は戦争にいっても何もできませんから、戦争に行く権利がないわけです。こここのところを教科書は「武器自弁の原則」なんて難しい言い方をしています。

さて、金持ち平民達が武具を揃えて出陣し、貴族と対等にポリス防衛に活躍するようになる。「貴族と同様に市民の義務を果たしているのだから、参政権も与えよ」と、要求するようになります。これが、民主政治始まりの第一歩です。戦争の仕方も貴族の騎兵から重装歩兵に比重が移ってきます。貴族も重装歩兵を頼りにするようになるわけだ。

重装歩兵の戦闘方法はこんなふうです。



歩兵は一列8人が8列で方陣を組みます。彼らはぎゅっと密集して隊列を組む。

これを密集隊、ファランクスといいます。それで2メートル以上ある槍を前に突きだして敵の部隊に向かって突進する。敵も同じように突っ込んでくるから、槍ぶすま同士がぶつかるわけだね。前の列の兵士が倒れたら後ろの列の兵が前に詰めてその穴を埋めた。こんなふうにして何度も突撃を繰り返す。

恐ろしいと思うよ。だけど、密集隊の中の兵士がびびってしまって歩調を乱したり、列から逃げてしまったら隊列が崩れる。そこを突撃されたら負けてしまうわけ。

だから、兵士一人ひとりが「ここで自分が怖じ気づいたら負ける、共に隊列を組んでる仲間が死んでしまう、だから逃げられない」、という意識を持っている方が強い。連帯感、団結力、共同体意識、そういうモノが強い方が勝つわけだ。兵力が同じならね。

こういう重装歩兵、平民の集団が参政権を要求するんだから貴族も扱いに困るね。

兵力は多い方がいいから平民には従軍して欲しいが、政治の独占を崩されたくないもない。

ついでに言っておくと、貴族の騎兵も実は戦場に行くまで馬に乗っているだけで、戦場に着いたら馬から下りて密集隊を組むんです。これが騎兵かと思うけどね。だから、平民と貴族が同じ隊を組むことがあったかも知ないです。同じ隊を組んでいて貴族だ平民だと喧嘩してたら負けるからね。

密集隊を組むのは密度が高い方が攻撃力が増すということもあります。防御力も増すんです。兵士は左手に丸い盾を持っています。盾の裏側の真ん中に皮の輪が付いていてここに肘を通す。端に握りがあってここをぐっと握る。肘全体で盾を支える感じです。これで左半身を守って右手で槍を持ちます。自分の右半身はぴったりくっついて並んでいる右横の兵士の盾の左半分がカバーしてくれるわけです。だから、くっついていればいるほど自分が安全。そのままの隊形で走っていくんだ。常日頃から訓練している必要があるね。

ところがこの隊形の弱点は一番右側の列。右端の兵士は自分の右半身はさらけ出している。

だから、最前列の最右翼は一番危険な位置で、死亡率も高いはずです。重装歩兵達はこの最前列最右翼に立つのを嫌がったかというと、それが逆なんです。

ここに立てるということは、心身共に最強だと誰もが認める人物なわけで、栄誉ある位置だからみんな立ちたい。俺はあの戦の時、最右翼だったんだ、なんて子や孫に自慢できるのね。自分の命よりもポリスのために尽くすことを大切に考える、そんな世界だったのです。

話を戻しますが、重装歩兵で活躍する平民の参政権要求を認める前に、貴族達は政治改革をおこなって平民の不満を鎮めようとしました。

これがドラコンの法（前621）です。「慣習法の成文化により貴族の横暴を防止」しようとした、という説明ですが、今風にいえば情報公開ですね。貴族が独占していた政治、法律情報を平民に公開したこと。

3 アテネの歴史・財産政治から民主政治へ

この段階では平民は政治から排除されていますから、これくらいでは不満はおさまらない。

前594年、ソロンの改革によって貴族政治はついに終わり、財産政治が始まります。

ソロンの改革は2つのポイントを押さえてください。

ひとつ、市民を財産によって等級分けして財産を持つ者には平民にも参政権を与えた。要するに重装歩兵として武具を自弁できる財産のある連中には政治参加を認めたということ。これが「財産政治」の意味です。

しかし、これだけでは財産がなくて参政権を与えられなかつた平民が不満を持ちます。そこで、貧乏で困つている平民の借金を帳消しにした。それから、極端な貧乏平民には借金のカタに奴隸身分に落ちる者もいた。これを救つた。

「債務の帳消しと、債務奴隸の禁止」とまとめています。これが二つ目です。

貧乏平民にとってみれば借金を棒引きにしてもらったのは、ありがたいが、同じ平民なのに財産の多少で参政権に差別をつけられるのは面白くない、やがて彼らが不満を持ちます。いつの時代でも同じですが、金持ち平民と、貧乏平民とどちらが数として多いかといえば圧倒的に貧乏人の方が多い。この大多数の貧乏平民の不満を利用して非合法で政治権力を握る者が出現しました。ペイシストラトスという人物で、かれは貴族層から権力を奪い独裁政治を行いました。

これを僭主政治といいます。（前561～前528頃）僭主というのは、独裁者のことと理解しておいてよいと思います（君主の堕落形態の意）。ただ、独裁政治だから、滅茶苦茶な政治を行ったかというと決してそうではなく、ペイシストラトスの場合は貧しい平民を経済的に助ける施策を積極的におこなっています。貴族から見たら滅茶苦茶な政治かも知れなかつたですがね。

ペイシストラトスの死後跡を継いだ僭主が前510年に追放されて、アテネには民主政治が確立してきます。

これは三段階に分けて理解するとよい。

第一段階。クレイステネスの改革（前508年）。クレイステネスの仕事は二つ。

一つは、貴族の権力基盤となっていた古い部族制度を廃止して、地域割りで新しい部族を創設したこと。これを10部族制といいます。今でいえば国會議員の選挙区の区割りを大物議員や与党に不利なように変えてしまうようなモノかな。分かります？これによって貴族は名ばかりの存在となりました。

二つめが、陶片追放制度の実施。これは面白い制度で、独裁者、僭主の出現を未然に防ごうというもので、投票するんですが、まだ紙がないから瓦のかけらなどに有力者の名前を刻んで投票する。その時に自分の「嫌いな人」の名前を書くんだね。将来独裁者になりそうだなど、思う人物をね。600票以上投票された人は10年間アテネの町を追放になるという制度です。

クレイステネスの改革によって、貴族と僭主はなくなつた。だから政治の主体は市民ということになる。この市民とは名前だけの貴族と金持ち平民です。

この段階ではまだ貧乏平民は参政権がありません。この人達も政治に参加できるようになったのが、前5世紀前半のペルシア戦争を通じてでした。

2005.5.4訂正 重装歩兵の防具を鉄製としていたのを青銅製とあらためました。

[参考図書紹介](#)・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

ギリシアとローマ世界の歴史	新進気鋭の研究者による概説書。従来なかつたような、データや新しい視点が新鮮。授業のネタにしたくなる話題も豊富。
世界の歴史〈4〉ギリシア河出文庫	オーソドックスな概説書。ローマは扱わず、ギリシアだけで一冊使っているので、比較的詳しい。
世界の歴史2 ギリシアと	こちらの中公文庫版は、古いシリーズ。しかし、読み物としては、一番読みや

第9回 古代ギリシア おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
第8回 東地中海の文明

[次のページへ](#)
第10回 古代ギリシア（2）

□□□□□□□□□

□□□□□□

第 10 回 古代ギリシア（2）

目次	1 ペルシア戦争 2 ペリクレス時代 3 スパルタの国政 4 ポリスの衰退
----	--

1 ペルシア戦争

アテネ民主政治の第二段階はペルシア戦争（前492～前479）です。

この戦争を通じて、武具を買えない貧乏平民も政治参加できるようになります。

ペルシア戦争は、あのアケメネス朝ペルシアが、ギリシアに侵攻してくる、それをアテネなどのポリスが迎え撃つ戦争です。

戦争のきっかけは、ペルシア支配下のギリシア人の反乱でした。ペルシアの支配下に入っていたイオニア地方のミレトスというポリスがペルシア帝国に反乱を起こした。この反乱はすぐに鎮圧されるのですが、アテネがこれを援助していたことにペルシアの大王は激怒する。ダレイオス一世です。ペルシアは絶頂期ですね。

ペルシア帝国から見ればギリシア世界はちっぽけなモノですが、この策動を見逃しては、しめしがつかないとでも考えたのかも知れません。

年表の期間中（前492～前479）ずっと戦争をしていたわけではなくて、断続的に何回かの戦闘がありました。最初の大きな戦いが前490年、マラトンの戦いです。

これは、マラソン競技のもとになったので有名ですね。ペルシア軍に勝利したニュースを早くアテネに伝えようと、一人の兵士が戦場からアテネの町まで走りに走って息絶えたという話。でも、この話は作り話です。

実際のマラトンの戦いはこんなふうです。

マラトンというのはアテネの北東約30キロにある海岸の地名です。エーゲ海に突き出たアッティカ半島の、アテネとは山を越えた反対側の海岸です。

ここにペルシア軍3万人が上陸します。

アテネも全軍が出動してこれに対峙しました。アテネ軍9000、これに他のポリスからの応援が1000、合計1万の重装歩兵がギリシア連合軍です。

ギリシア最強の陸軍国スパルタは、満月以前に出陣してはいけないという伝統に従って出てきません。こういう非合理的なところで生きているのがまた、魅力的ではありますね。

ギリシア軍は海岸に布陣したペルシア軍から1500メートル離れて布陣します。

ペルシアの戦法はまず、弓兵、弓ですね、これを敵に打ち込んで混乱させてから白兵戦に持ち込むんです。だから、弓が届かないところに布陣するんだね。

そして、戦闘開始とともに重装歩兵達は弓の射程の中を全力で走り抜けました。

重装歩兵の突撃に慣れないペルシア側は算を乱して海上に逃れた。アテネ軍の死者は192名、ペルシア軍

は死者6400名と伝えられています。この時のアテネの将軍がミルティアデス。細かい知識だけど入試には出る。

さて、このあとなんです。ペルシア軍が退却したのはいいけれど、アテネ側が冷静に考えると、この段階で全アテネ軍はマラトンに出陣しているのでアテネ市はまったくの無防備なわけです。ペルシア軍が半島を回り込んでアテネに上陸進攻してきましたら必ず街は落とされます。そこで、重装歩兵1万は、重たい装備をつけたまま山越えをしてアテネまでの30キロを駆け続ける。

ようやくアテネに戻ると、なんとか間に合っていました。

案の定ペルシアの軍船が半島を回り込んでやってきましたが、さっき闘ったアテネ軍がもうこちらの海岸に戻って布陣しているのを見て引き上げていった、というのが実際のマラトンの戦いです。

このときのペルシア側の戦い方を見ていると、無理をしていない。ペルシアにとっては小手調べ、といった感じですね。



その10年後、今度はペルシアの大王クセルクセス自ら軍隊を率いて攻めてきました。今度は本気です。30万の陸軍に海軍1000隻の兵力でした。

この大軍はダーダネルス海峡を渡ってバルカン半島を南下してきました。これを迎撃ったのがスパルタ軍を中心とするギリシア軍7000。あまりにも少ないね。オリンピアの祭りでみんな集まらなかつたらしい。ただ、このスパルタ軍は最後の一人まで戦い抜いて全員玉碎しました。これが、テルモピレーの戦い（前480）です。この戦いの指揮を執ったスパルタ王レオニダスは後々まで讃えられました。

テルモピレーの防衛線を突破したペルシア軍はギリシア本土に怒濤の進撃をし、あちこちのポリスを攻略していきます。アテネも例外ではなくて、ペルシア軍に占領され町は破壊されました。

ところで、その前の段階でアテネの指導者達は例のデルフォイの神殿の巫女さんにお伺いをたてていたのです。ペルシア軍が攻めてきたらどうしたらよいか、ってね。

その時の神託がこうだった。

「町も神殿も焼け落ちるだろう。しかし、木の壁に頼る限り、難攻不落である」

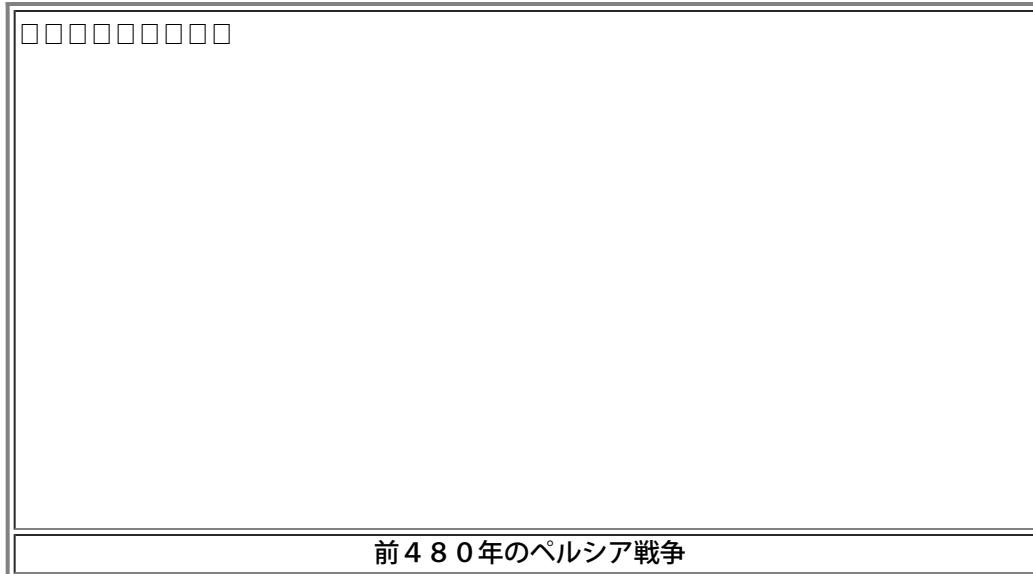
この神託をどう解釈するかで指導者達の意見は分かれたんです。

「木の壁」とは何か、ですな。

当時アクロポリスの上のパルテノン神殿は木で造られていました。もともとアクロポリスというのは戦争の時の最後の砦なので、「これはアクロポリスに立て籠って戦えというお告げだ」と考える人たちと、「木の壁」とは船のことである、と考えるグループがあった。船も木造ですからね。

結局「船グループ」の意見が勝って、この日に備えてアテネは軍船を大量に建造していました。

ペルシア軍がアテネを占領したときには女子供は離れ小島に待避していて、男達は最後の海戦に備えて準備万端だったわけです。



当時の軍船は三段櫂船といいます。船の先端に衝角という鉄のかたまりが付いていて、これを敵船の横にぶつけて穴をあけて沈めてしまう、というのが海戦のやり方。

船の機動力が高い方が勝ちますから、スピードアップのためにこぎ手がたくさんいた方がいい。そのため櫂を三段にしてこぎ手をぎっしり乗せる。一隻の乗員が200人で、こぎ手が180人。

普通は誰が櫂を漕いだかというと、これはどうも奴隸らしい。つらくしんどく危険な仕事ですからね、なにしろ船が沈んだら自分も死んでしまうわけです。

さて、アテネは軍船を200隻造りました。単純計算で乗組員全員で4万人要ることになるんですよ。誰が、この船に乗り込んで漕ぐのか。このときに漕ぎ手となつたのが、それまで戦争に参加することが出来なかつた貧乏平民です。

アテネを守るためにこの奴隸の仕事を買って出ます。武器自弁が出来なくとも身体さえあれば船を漕げますからね。

彼らは自分たちのポリスを守るための戦いですから、士気は抜群です。

一方のペルシア海軍の漕ぎ手は奴隸。しかも、アテネ側はペルシア海軍を狭いサラミス湾に誘い込みます。アテネのすぐ沖の海ですから、海流とか暗礁がどこにあるかとか、そういう事を知っているアテネが有利。というわけで最後のこのサラミスの海戦でペルシアは負けます。

このときペルシアのクセルクセス大王は最終勝利をその目で見ようと岬の上から観戦していた。そうしたら自分の海軍が次々に沈んでいくんだ。クセルクセス、思わず「しまった」と膝を打ち、退却命令を出し、真っ先にギリシアから逃れていきました。

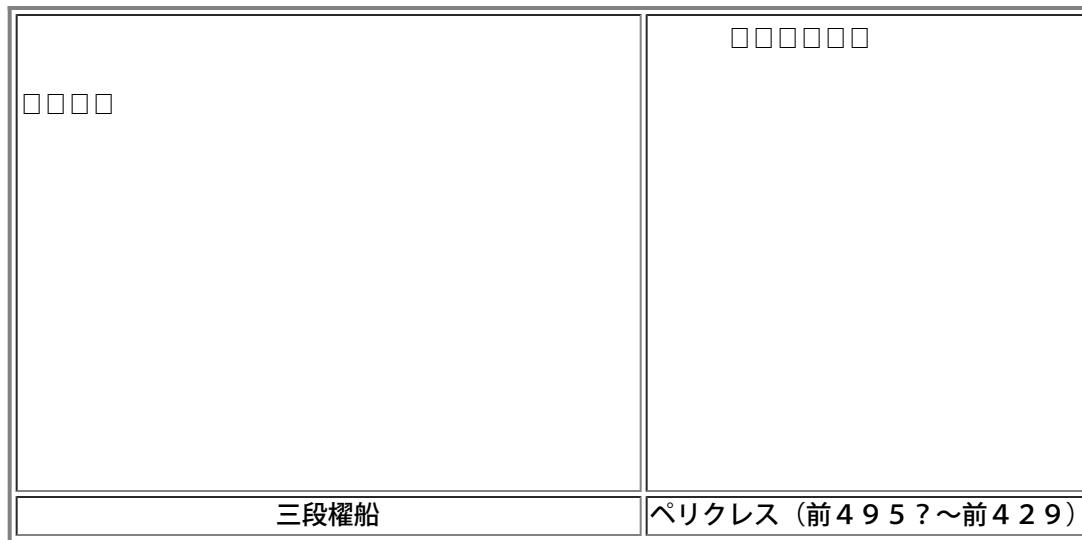
陸上は制圧しているのに何故逃げるかというと、ギリシアは山国でもともと食糧に乏しいから、ペルシア軍

の兵糧の現地調達は難しい。ペルシア軍 30 万の 兵糧は、海上輸送するつもりだったんですよ。その海軍がやられてしまつて制 海權をアテネに握られたらギリシアに遠征した 30 万人は飢えて死んでしまう わけです。

このあと残存ペルシア軍とギリシア軍の戦いなどあるのですが、基本的にはサ ラミスの海戦で決着はつきました。

サラミスの海戦を指揮したアテネの将軍がテミストクレス。その後大いに羽振りを利かせますが、のちに陶片追放でアテネを追われてしまいました。どこに 亡命したかというとそれがペルシアなんですよ。ペルシアも懐が深いね。

ちなみにこのときのペルシア海軍作戦会議の第一序列がシドン王、第二序列が ティルス王だった。この戦争、海上貿易をめぐるフェニキア対ギリシアの争い という面がありそうです。



さて、戦争が終わってみるとサラミスの海戦で活躍した漕ぎ手、貧乏平民の発 言力が増すんですね。俺達が漕いだから勝てたんだ！俺達にも参政権を！とい うわけです。

また、いつペルシアが報復戦を仕掛けてくるか判らないわけですから、彼らの 要求をのまざるを得ない。こんなふうにして、すべての市民に参政権が与えら れることになりました。

貧乏平民という言い方をしてきましたが、これを格好良く言うと「無産市民」 財産のない市民という意味です。

2ペリクレス時代

アテネ民主制発展の最終段階がペリクレス時代（前443～前429）です。

ペリクレスというのは人名です。はい、この人。頭に重装歩兵のヘルメットを 載せているね。この人あだ名が「デカ頭のペリクレス」。頭が異常に大きかつた。だからそれをごまかすためにちょいとヘルメットを載せて彫像を彫らせた とも言われています。頭が大きすぎて被れなかつたのかもね。

ともかく、このペリクレスの時代にアテネの民主制は完成します。また、この 時代アテネそのものの絶頂期でもあったのでその時代の指導者の名をとって、ペリクレス時代と呼んでいます。

民会、これが国政の最高機関です。18歳以上の男子市民による直接民主政。

財産に関係なく誰でも民会に参加できました。民会は今の日本で言えば国会だ ね。今の国会の審議はどうも

気に入らない、一言物申したい、と思って私が国会に行っても中に入れてくれません。私、国会議員じゃないからね。国民に選ばれた者が国政について話し合う今の仕組みは「間接民主制」。アテネは直接民主政、ここがポイント。どちらが民主主義として理想かと言えば、誰でも物申せる直接の方がよい。そういう意味でこのアテネの民主政は一つのお手本であるわけです。

もう一つのアテネの政治の特徴は、公職担当者を抽選で選んだ点です。

今で言えば総理大臣も裁判官も役人もくじで選ぶ。くじに当たったら誰でもそれをやる。

これはいいことかどうか。少なくとも役人は自分はエリートだからと威張らないだろうね。たまたまくじで選ばれただけだから。だから腐敗もない。現代の官僚制と比較してそういう点は評価できるのだと思います。現在の政治経済は非常に複雑だから、抽選制を今実施することは不可能です。私が日本銀行総裁にあたっても何をしたらいいか全然分かりませんね。この時代はポリスの規模も小さいし、それほど複雑な行政制度でもないので抽選でやれたんです。アテネの人々はこういう政治制度を誇っていました。ある意味では徹底的に公平です。

政府の公職はくじで選んだのですが、例外があった。それが将軍です。戦争の指揮というのは、誰でも出来るものではない。ある種の才能や人望が必要です。

もし無能な者が将軍になって戦争に負けたら取り返しがつかない。だから将軍職は選挙で選びました。ペリクレスはこの将軍職に15年連続して選ばれたのです。その地位からアテネの政治を指導したわけ。だから完全に平等のように見えてもやはり指導者は必要だったんですね。

古代ギリシア民主主義の陰の部分を見ておきましょう。

ギリシアは奴隸制度の社会です。奴隸制の上に成り立った民主主義だったことを忘れてはなりません。このころのアテネの人口を見てみると、市民が18万。奴隸が11万くらいです。この奴隸は喋る家畜です。人間としての権利など全くない。この奴隸に働くらかせて、ぶらぶらしている市民達の民主政です。もう一つ、市民でも女性は権利ありません。女は子供を産む道具です。民会なんかには出られない。それどころか、男達からは対等な人格を持った存在とは考えられていなかった。対等な人格がないですから愛も生まれない。男は女を可愛がりますが、たとえて言えばそれは私たちがペットの犬を可愛がるのと同じようなものです。

じゃあ、男は誰と愛し合うかというと、当然男と愛し合う。戦場で一緒に隊列組んで生死を共にするんだから、愛が芽生えるのも当然かもしれません。愛の形というのは時代と共に変わるものですよ。

市民18万中民会に参加できる成年男子人口は4万人。奴隸もいれば、全人口約30万人中の4万だけが参政権を持つ。そういう民主政だったわけです。

民会はどのくらい開かれたかというと年間40回くらい。だいたい一週間に一回の割合です。結構多いね。4万人全員が参加するわけではなくて、参加者はだいたい6000人位だったらしい。これがアゴラ(ポリスの中心にある広場)に集まって、わいわいがやがや。でも、6000というのはすごい数ですね。これがどんなふうに議論できたのか、ちょっと想像できませんね。弁の立つものが順番にスピーチをしていたんでしょうかね。

ペリクレス時代のアテネはギリシア諸ポリスのリーダーもありました。サラミスの海戦でペルシア軍は撤退しましたが、またいつ攻めてくるか分からない。そこで、諸ポリスは対ペルシアの軍事防衛同盟を結成し

ました。これをデロス 同盟といいます。アテネはデロス同盟の盟主として全ギリシアに号令する立場 についたのでした。

3 スパルタの国政

ここで、スパルタの話をしておきましょう。スパルタはアテネと並ぶギリシア の大国ですが、アテネのような民主政は発達せずギリシア世界の中でも特殊な 国造りをしました。

スパルタには三種類の身分がありました。一番上に立つのが支配者であるスパルタ人、これが市民です。その下にペリオイコイと呼ばれる人々。ペリオイコイは軍事的な義務はありますが参政権がありません。不完全市民です。一番下がヘイロータイ。事実上の奴隸です。ヘイロータイが農業をします。スパルタは広い領土を持っていて、割合に平地も多い。この農村に住んでいるのが奴隸 身分のヘイロータイです。

スパルタがアテネなどと比べて変わっているのはこの奴隸の人口が非常に多い ところでした。

アテネの市民は 18 万、奴隸が 11 万。市民の方が多い。

スパルタは、市民が 2 万 5 千人。奴隸が 20 万。圧倒的に奴隸人口の方が多い んです。この奴隸が団結して反乱を起こしたら 2 万 5 千人では負けるね。2 万 5 千人で 20 万人を押さえつけるためにはどうしたらよいか。

スパルタ人は非常に単純な答えを出します。スパルタ人一人ひとりが滅茶苦茶 に強くなればよい、とね。そこで、スパルタ人は幼い時から非常に厳しく子供を育てました。厳しい子育てをスパルタ教育と言うでしょ。ここから来ているんですね。

まず、赤ちゃんが産まれる、ここからスパルタ教育は始まる。長老がやってきて、赤ん坊をチェックするんだ。五体満足か？ 健康に育ちそうか？

障害があったり虚弱だったりしたらタイゲトス山に捨ててしまう。育てない。

7 歳になると男の子は親元から引き離されてみんな合宿所に入れられます。ここから男ばかりの集団生活が始まります。男ばかりで一緒に起きて、一緒に 飯食って、一緒に身体鍛えて、また一緒に飯食って、一緒に寝るの。

何歳までこの生活をするかというと 30 歳までです。嫌だねー。

30 歳になると家庭生活が許されるんだけれども、やはり夕食は家で食べない。

男達が集まって共同食事をするんです。これをしないと市民の資格を奪われてしまします。

だから、スパルタでは一家団欒の夕食というのはない。

こんなふうな生活をしながら、肉体を鍛えていきます。男達同士の団結はもの すごいものになる。お互いみんな気心が知れあっている。これが密集隊を作つて戦場に出てきたら他のポリスは太刀打ちできない。スパルタ陸軍はギリシア 最強でした。

成人の儀式ではこんな話も伝えられています。スパルタの少年は 13 歳位で成 人の儀式を迎えます。その年齢になった少年は短剣一本だけを渡されてスパルタの町を追い出されるというんです。金も食糧も何も持たせずに 1 年間放浪の 旅をしなければいけない。食糧はどうするかというと、「奪え！」といわれる。

具体的には近郊には農村が広がっていてそこには奴隸身分のヘイロータイが住んでいる。彼らから食糧を奪うんです。ヘイロータイが抵抗したら殺してかまわないと。

ヘイロータイからすれば、常に年頃の少年が短剣を持ってうろついていて、何 時襲ってくるか分からない。

こんなふうにしてヘイロータイにはスパルタ人に対する恐怖心を植え付け、少年は放浪を通じて立派な戦士に成長する、というのです。

女の子は合宿生活はないですが、やはり集められて肉体の鍛錬をしました。これは立派な戦士を産むため。要するに、スパルタは社会全体が戦争モードのポリスでした。

このようなポリスの在り方はギリシア全体から見たら特殊です。

4 ポリスの衰退

このアテネとスパルタが戦争をします。

これがペロポネソス戦争（前431～前404）です。

アテネはデロス同盟の盟主としてギリシアの指導的立場に立つんですが、そのやり方は他のポリスの反感を買うようなことが多かった。例えば、これ、現在のアテネですが、アクロポリスの上にパルテノン神殿が建っていますね。この大理石の立派な神殿はペリクレス時代に造られたのですが、この建設費は実はデロス同盟の資金を流用しているんですよ。デロス同盟は軍事同盟ですから、加盟ポリスから軍資金を集めてる、これをアテネはペルシア戦争で破壊された自分の町の復興のために使ってしまうんだ。当然、他のポリスは反感を持ちますわな。

その筆頭がスパルタだったわけ。

スパルタは自国を盟主とするペロポネソス同盟という同盟のリーダーでした。

このギリシアの両雄がギリシア全土の霸権を賭けて衝突したわけです。

細かい経過は省きますが、最終的にスパルタが勝ってアテネは降伏。

アテネに代わってスパルタが霸権を握りますが、これも長続きしません。



次に霸権を握ったのがテーベというポリス。

このテーベに、エパミノンダスという人物が登場し急速に勢力を伸ばしてきました。彼は、斜線陣という新しい戦法を編み出して前371年にレウクトラの戦いでスパルタ軍を破ります。

霸権はスパルタからテーベに移りました。

□□□

斜線陣

テーベは密集隊を 1, 2, 3 のように斜めに配置し、1 の部隊は隊列を厚くする。1 の部隊が最初に敵軍と衝突、突破し後ろに回り込み 2, 3 の部隊と共に敵軍を包囲する。

こんな具合にギリシア内部で次から次へと戦乱が続いていくんです。

ギリシア世界が全体として衰退してしまいます。

まずは農業が荒廃していく。例えば、ペロポネソス戦争の時に陸軍では劣るアテネは籠城戦をするんですが、アテネ市を包囲したスパルタ軍はアテネ近郊に広がる畑、そこのオリーブやブドウの木を切り倒してしまうのね。米や麦だったら一年草だから、刈り取られても翌年は収穫できるけれど、果樹は切られてしまったら次に苗木を植えても収穫できるまでには何年かかるわけだしよ。

こういう農業荒廃です。戦争が終わってもすぐに回復できるわけではない。

農業経営者の中産市民はこれで没落する者が出る。収穫なければ収入ない、農地を売る、財産を処分する、最後には重装歩兵の武具を売る。そこまで没落する市民も出てくるんですね。

さらにこのころの政治は衆愚政と呼ばれます。民主政の腐敗堕落したものです。

愚か者が集まっている政治という意味ですね。

民主政と見た目で違いはありません。政治に関わる市民達の考え方の違いだと考えてもらったらいい。ボリス全体の事を考えるのではなくて、目先の自分の利益を第一に考える、そんな者達の民主政です。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[世界軍事史—人間はなぜ戦争をするのか](#)

小沢郁郎著。ペルシア戦争だけでなく、洋の東西を問わず、古代から 19 世紀に至るまでの、主要な戦争の軍事技術、戦略と、それを生み出した社会体制に言及した名著。

著者が高校教師だったためか、かゆいところに手が届くような、教師にとっては「おいしい」本。本当は、誰にも教えてくれない私の「ネタ」本です。
ちょっと高いですが、世界史教師には充分おつりが来ること請け合い。

第 10 回 古代ギリシア 2 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第 9 回 古代ギリシア](#)

[次のページへ](#)
[第 11 回 アレクサンドロスの帝国](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

第11回 アレクサンドロスの帝国

1 アレクサンドロスの東方遠征

ギリシアの北方にマケドニアという国があった。

バルカン半島の南端、アテネなどのポリスがたくさんあるこの地域が先進地域とすると、このマケドニアは後進地域です。

マケドニア人はギリシア人の一派なのですが、アテネなどギリシアの中心部の人々と比べて大分なまりがあったみたいで、彼らからはバルバロイ（汚い言葉を話す者達）と呼ばれて軽蔑されていた。野蛮人となっていたんだね。平安時代の近畿圏の人たちが東北地方の人々を「蝦夷」として自分たちとは別の人々と考えていたようなのですね。

さらにマケドニア人はポリスを形成していないくて、王のもとに貴族層が支配者層になっていました。そういう意味でも遅れた地方と見なされていた。

ところがこのマケドニア、南方の先進地域が指導権争いで衰退していく間にどんどん力につけてきたんです。

マケドニアを一大強国に発展させたのがフィリッポス2世（位前359～前336）。

彼は、若いときにテーベに人質になっていたことがある。ちょうどエパミノンダスが斜線陣でスパルタを破り霸権を握った頃です。

重装歩兵の戦術をじっくりと身につけて、マケドニアで王位に就いた。

マケドニアの軍制は貴族の騎兵を中心だったのですが農民を重装歩兵にして、フィリッポスは軍制改革を成功させ、王権も強化します。

そして、相変わらずポリス間の対立抗争が続くギリシア本土に進出しました。

アテネ・テーベ連合軍がマケドニア軍を迎撃ったのが前338年、カイロネイアの戦い。

結局マケドニアが勝って、ギリシアのポリス世界はその支配下に入りました。

独立を失った諸ポリスの人々はどう考えたかというと、親マケドニア派と反マケドニア派があったんです。あくまでも独立と民主政の伝統を守ろうという人々は反マケドニア。ポリス間の長い抗争にうんざりしていた人々は親マケドニアですね。親マケドニア派はさらにマケドニアを押し立ててペルシアに対する報復戦争を考えていたようです。

こういう情勢の中で、前336年フィリッポス2世は暗殺されます。40代半ばでまだまだこれからの年齢ですね。背後関係はよく分かりません。

反マケドニア派にとってはこんなチャンスはありません。独立を回復するにはフィリッポスの死ほどありがたいものはない。なにしろ、マケドニアはフィリッポス一代で強国に成り上がったんだから、彼さえいなければマケドニアの支配はすぐに崩れるだろうと考えたんだね。フィリッポスには息子がいたけれど、まだ2

0歳です。こんな若者にフィリッポスの跡を継げるわけがないというのが、まあ常識的な考えだろう。

ところが、この20歳の跡継ぎがアレクサンドロスだったんです。

英語ではアレキサンダーと呼ばれます。聞いたことあるでしょ。

アレクサンドロスは王位を継ぐと、すぐさまマケドニア軍を掌握し、独立を企てたポリスを制圧しました。その上で、アレクサンドロスは全ギリシアの盟主にして対ペルシア戦最高司令官になります。ギリシアを固めてから彼がおこなったのが有名な東方遠征です。

アレクサンドロスは英雄だからね、いろいろな伝説がある。どこまで本当か分からない逸話もたくさんあるんですが、こんな話がある。

いろいろ準備を整えて東方遠征に出かけるときに、宴会をするんだ。出陣式だな。アレクサンドロスは22歳です。まだまだ若い。今なら大学4年生。若い仲間の貴族もたくさんいる。マケドニアは王と貴族の間がそんなに遠くない。貴族の第一人者が王という感じです。ギリシア人の人間関係は上下関係より横関係の方が強い。だから、王も若い貴族達も仲間同士的な感じでわいわいやって盛り上がったんだろう。

このときアレクサンドロスは自分の財産をほいほい仲間達に分けてしまうんです。森林や領地をね。あんまり、気前よく財産を分けて、アレクサンドロス自身の持ち物がなくなってしまったので、ペルディッカスという貴族が王にたずねた。

「王よ、あなたには何も残らないのではないですか？」

それに対してアレクサンドロスが言ったという台詞（せりふ）。

「私には希望がある。」

かっこよすぎる。

父王フィリッポスがマケドニアの勢力を伸ばしてギリシア全土を制圧していくときにアレクサンドロスが仲間に言ったという言葉。

「困ったものだ。父上が何もかもなされてしまっては、我々のやることがなくなってしまう。」

東方遠征というのは具体的にはペルシア遠征なんですが、これは彼の父フィリッポスがすでに計画をしていたものです。これは、息子に残されたというわけだ。

前334年、アレクサンドロスは東方遠征に出発。率いるギリシア軍は騎兵、歩兵あわせて約4万。このとき兵糧は30日分しかなかったというから、絶対勝って軍資金や食糧は現地調達するつもりだったんです。

ヨーロッパとアジアを分けるダーダネルス海峡を渡って、まず最初の会戦。グラニコス河畔の戦いといいます。このときのペルシア軍もだいたい4万くらいです。ここでアレクサンドロスは軽く敵を蹴散らして、途中の都市を制圧しながらメソポタミア地方に向かいます。

ペルシア側が本気でアレクサンドロスを迎えたのがメソポタミア地方の入り口にあたるイッソスという場所です。ここで、はじめてペルシア大王ダレイオス3世自身が出陣するんです。ペルシア軍公称60万、実際には40万くらいでしょう。それでもギリシア軍の10倍ですよ。

しかし、この40万の中で本体であるペルシア人は、そんなに多くないと思います。ペルシア人の戦士は全部集めてもせいぜい10万程度です。ペルシア領内の色々な民族から兵士はを集められている。

ペルシア軍にはギリシア人の傭兵も結構いたんですよ。食い詰めたギリシア人がペルシアまで出稼ぎに来て

いるんだ。なにしろギリシアの重装歩兵は強力ですから、重宝されていたようです。のちの時代の壁画ですが、イッソスの戦いを描いた絵です、逃げようとするダレイオス3世の後ろに控えているこの軍勢は長い槍を持っているでしょ。これ、重装歩兵です。ペルシア大王の親衛隊になっているんだ。

まあ、そんなわけで、ペルシア軍は数は多いが、決して一つにまとまった大きな力を発揮できる状態ではないということです。

前333年、イッソスの戦いです。戦いは乱戦になります。アレクサンドロスは自分から真っ先に敵に突っ込んでいくタイプです。ペルシア大王の本陣にまで肉薄します。

ペルシア大王ダレイオス3世は、どちらかといえばお坊ちゃんで、こういう戦には向いていなかった。ギリシア軍が迫ってくるとあわてて戦車の向きを変えて逃げてしまった。王様が逃げて他の一般兵士が頑張ることはないです。

というわけで、イッソスの戦いはアレクサンドロスの勝利でした。

勝ったあと、戦場には財宝がたくさん残されていたんです。何故かというと、ダレイオスは戦場でも豪勢な生活をするために特別の天幕に家具調度品を持ち込んでいたの。ついでに自分の母親に妃、お姫様まで連れてきていたんですね、これが。でも、彼女たちみんな置き去りにして逃げちゃった。

この妃やお姫様はものすごい美人だったらしい。

みんなアレクサンドロスのものになる。ですが、アレクサンドロスは彼女たちには指一本触れず丁重に保護をしたんだ。この辺は禁欲的で潔癖でしょ。

これをあとで伝え聞いたダレイオス3世は、「もし余がペルシア大王でなくなったとき、代わりに玉座に座るのはアレクサンドロスであって欲しい」と言ったとか。

本当にこんな事を言ったかどうか分かりませんが、この言い伝えはアレクサンドロスの意図を想像させるね。

つまり、ペルシア帝国を滅ぼして、その領土を支配するつもりなら、ペルシア人の協力は絶対必要でしょ。ペルシア人を手なづけるにはどうしたらよいですか。

彼のペルシア王妃達に対する保護にはそういう深謀遠慮があったんではないか、そう思えます。賢いね。

このあとアレクサンドロスはすぐさま逃げたダレイオスを追わずに、進路を南に取ります。

まずフェニキア攻略を目標にします。7ヶ月かけて、ティルス市を攻略しているんです。ギリシアの海上貿易の利益にとってはフェニキアは潰さないとね。

そして、エジプトに入ります。エジプトではペルシアの支配に対して抵抗が強まっていたので、ギリシア軍は歓迎される。アレクサンドロスは解放者として迎えられていい気分です。これは、あの展開に影響するので頭の隅に入れておいてください。

次が前331年、アルベラの戦いです。エジプトからメソポタミアに軍を進めたアレクサンドロスとダレイオス3世の最後の決戦です。ペルシア側は100万の軍勢です。

4万のギリシア軍に勝ち目はないと考えたパルメニオン将軍はアレクサンドロスに進言しました。「王よ、この大軍に勝つには夜襲しかありません。」

アレクサンドロス答えて言う。「私は勝利を盗まない。」

これもアレクサンドロス伝説ですから本当かどうか分かりませんけれど、こんな話になっている。ペルシア側は逆にギリシアの勝機は夜襲しかないと考えた。そこで、夜襲に備えて全軍に完全武装で起きているように指示を出した。アレクサンドロスが夜襲をかけたら、すぐさま逆襲にでようと言うわけです。しかし、アレクサンドロスは全然その気はないでしょ。

ペルシア軍はいつ来るか、いつ来るかと緊張しながら夜を明かしてしまいました。徹夜で緊張してくたくたです。

一方のギリシア軍はぐっすり眠って元気一杯で朝が来た。

というわけで、翌日の決戦はアレクサンドロスの勝利となった、という。

実際に今度の決戦も乱戦になって、またもやダレイオス3世は逃げ出してしまうんです。そのため全軍総崩れになって負けてしまった。

これで、事実上ペルシアは滅亡し、アレクサンドロスがその帝国の後継者になりました。

逃げたダレイオス3世は地方のサトラップ（総督）の裏切りで殺されてしまいました。

アレクサンドロスはその後も旧ペルシア領を支配下に納めながら東に向かって転戦してきました。

前326年にはインダス川を渡りインドに侵入しました。

どうも、アレクサンドロスは本気で世界征服を考えていたんじゃないかな。人間の住む所どこまでも東に向かうつもりみたいです。

彼の率いる兵士達は不安になるんだね。おい、大王よ、どこまで行くつもりだ、てな心境でしょう。

この段階で兵士達がストライキを起こす。もう帰りたい、と言うんです。東方遠征に出発してからすでに8年が経っている。気持ちは分かるね。

いくらアレクサンドロスでも兵士が動かなければどうしようもありません。

ここでようやく遠征は終わリアレクサンドロスの軍は帰途につきました。

ただ、アレクサンドロスがマケドニアに帰ることはありませんでした。彼はペルシア帝国の後継者としてバビロンから帝国を統治しました。

彼の作ったこの大帝国は名前がありません。というのはこのあとすぐにアレクサンドロスは死んでしまうんです。この国は普通アレクサンドロスの帝国、と呼ばれます。

2 アレクサンドロスの政策

短い間でしたがアレクサンドロスがどのような政策をすすめたか見ておきます。

まず彼は新たに征服した領土にアレクサンドリアという名前の都市を建設します。

中でもエジプトのナイル河口に築いたアレクサンドリアが有名ですが、帝国各地に支配の拠点として同じ名前の都市をたくさん造っている。全部で70以上あるそうです。

この新しく造った都市に誰が住むかというと、アレクサンドロスがギリシアから連れてきたギリシア兵達が住む。中央アジアやインドに近いアレクサンドリアに住まわされたギリシア人達はギリシア本土から遠く離れているし、現地の人々と結婚なんかしてやがて土地の人たちに吸収されていくんですね。しかし、ギリシア風の文化がこういう地域にも広がったわけです。

何年か前のことですがNHKで、インドの山奥の谷あいに住む部族が紹介されているのを見たんですが、そ

の部族の人々は自分たちはアレクサンドロスがインドに残したギリシア人の末裔と名乗っているんですよ。顔つきや風俗も周囲のインド人と違うんです。そういう人々が今でもいるんですね。

さらに、アレクサンドロスはギリシア文明とオリエント文明の融合をめざしました。
具体的には民族融合を考えたようです。ギリシア兵士とペルシア貴族の子女との集団結婚なんていうのをやります。自分自身もペルシア王族の女性を妻にする。
広大な帝国を治めるためにもペルシア人をどんどん登用します。
アレクサンドロス自身がペルシアに傾いていくんです。
これがマケドニア以来アレクサンドロスの身近にいた貴族グループとの間にしつくりしない雰囲気を生み出します。「アレクサンドロスの勝利はマケドニア人のおかげじゃないか」と、不満を持つ。

また、エジプトでアレクサンドロスはシワーという神殿都市に行くのですが、この神殿で神の生まれ変わりというお告げをうけて、すっかりその気になる。エジプト人に歓迎されていい気持ちでいた上に、これですからね。しかも、もともとエジプトは王を神の化身と考える伝統がある。神の生まれ変わりといわれ、神の化身のように接待される。

王を友人のように対等に近い感じで扱うマケドニア人やギリシア人との落差は大きいです。
ペルシア人の王に対する態度もエジプトに近い。王を高いところに置いてお仕えする感じです。難しい言い方をすると、ペルシアやエジプトの王の在り方は「専制主義的」なのです。
アレクサンドロスにとってギリシア風よりもオリエント専制主義が気に入ったことはもちろんです。そして、彼はギリシア人やマケドニア人に対しても神のごとく自分に接するように強制しはじめます。気軽に声をかけるな、話すときは跪け、とかね。

プリントのアレクサンドロスのコインを見てください。彼の横顔から角が生えているでしょう。角、牛にも生えている、これは神聖なもの証（あかし）です。神、もしくは神に近いものとして自分を描いているのです。

（補足）読者の方より以下のご指摘をいただきました。「ヘアバンドは王権を示し、羊の角はアモン神の子としての神権を象徴する」（日本 大百科全書・小学館）

これに対してマケドニア貴族の中からは反乱計画なども出てくる。

こういう状況の中でアレクサンドロスは突然死んでしまいます。

アラビア方面に遠征計画があってその出陣を祝う宴会で突然倒れます。何日か寝込んだ後で亡くなります。死因はよく分かりません。33歳でした。

3 ヘレニズム諸国

後継者が問題になる。子供がまだないんですよ。妃の一人が妊娠中で、アレクサンドロスの死後息子が生まれますが、こんな子供に統治能力はないですね。あと、肉親としては腹違いの兄がいたのですが、この人は知的障害があって、もともと王位には耐えられない。

臨終間際にアレクサンドロスは後継者についてきかれてこう言った。

「最も王たるにふさわしいものに」

実力者にとっては都合のいい遺言だね。

彼の死後、マケドニア貴族の有力武将による後継争いの戦争が起こります。

この後継者戦争を経て、アレクサンドロスの帝国は大きく3つの国に分かれました。

□□□□□□□□□

マケドニア、ギリシアに建国したのが、アンティゴノス朝マケドニア、旧ペルシア領に建国したのがセレウコス朝シリア。エジプトにプトレマイオス朝エジプト。何とか朝というのは建国した将軍の名前です。このあと、その子孫が王位を継承していくことになります。

前200年頃の情勢

セレウコス朝シリアは領土が広すぎて中央アジア方面まで統制できなかった。中央アジア方面のギリシア人総督は、やがて自立してバクトリアという国を建設しました（前255）。

ペルシア本土、現在のイランですが、ここではパルティアというペルシア人の国が自立します（前248）。

こんなふうに徐々に旧アレクサンドロスの帝国は分裂していくのですが、アレクサンドロスの東方遠征以来、プトレマイオス朝エジプトが滅亡する前30年までの約300年間をヘレニズム時代といいます。ギリシア風の時代という意味です。メソポタミアや、エジプトなどのオリエント地方にもギリシア文化が広まった時代だというわけですね。

アレクサンドロスの帝国の流れを汲む国はヘレニズム諸国と呼ばれます。

いちばん長く続いたヘレニズム諸国がプトレマイオス朝エジプトです。この最後の王が有名なクレオパトラ。世界三大美人だそうですが。このクレオパトラですが、何民族だったかというと、だから、ギリシア人なんですね。アレクサンドロスの武将プトレマイオスの子孫なんですから。

ヘレニズム時代というのはギリシア人が支配者であった時代でもあるわけです。

第11回 アレクサンドロスの帝国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第10回 古代ギリシア（2）](#)

[次のページへ](#)
[第12回 ギリシア・ヘレニズム文化](#)

第12回 ギリシア・ヘレニズム文化

目次	1 自然哲学
	2 ソフィスト
	3 ソクラテス
	4 プラトンとアリストテレス
	5 文芸
	6 ヘレニズム文化

1 自然哲学

世界で最初に哲学を生み出したのがギリシア人でした。

古代ギリシアの市民は、ヒマです。

畑仕事などの労働は奴隸がするし、夫婦で家事を分担するなんて発想は全然なくて家事は基本的に女性がみんなやる。

だから市民、といえば男ですが、はヒマでヒマで。

ヒマを持て余して昼間からアゴラと呼ばれる広場に集まってブラブラしているのです。

ベチャベチャとお喋りしたり、戦争のために身体を鍛えたり、そんな事してみてもやっぱりヒマ。

人間ヒマだといろいろ余分なことを考える。

で、彼らは考えたのですね。

何で？ 何で世界は出来てるの？ って。

これが最初の哲学でした。

最初の哲学は自然哲学といいます。今ならさしつけめ科学にあたることを考えた。

世界の成り立ちとかをね。ただし、実験道具も何もないからひたすら頭の中で論理で考えた。

その最初の人がタレース（前580年頃活躍）です。

この人はイオニア地方ミレトスの人です。ギリシア本土ではない。タレース以外にも自然哲学者はイオニア地方やシチリア島の人が目立ちます。ギリシア本土でない分、伝統にとらわれず他民族の刺激などを受けて新しい発想が生まれたとも言われています。

さて、タレースの言葉「万物の根元は水である」。しっかり覚えておこう。

これが最初の哲学の言葉だ。世界は水から出来ている、というのは幼稚に思えるかもしれないが、やはり画期的なんですよ。

一つは、世界の成り立ちを追及した点で、そして二つ目に、これは最も重要ですが世界の成り立ちを神様抜きで考えた点で。

彼も神々を信じていたでしょうが、とりあえずそれはこっちに置いておく。この発想がすごいわけです。

このタレースという人はただ哲学をしただけではない。日食を予言したり、川の流水量を調整して軍隊の渡河を可能にしたりいろいろな技術を持っていました。

ヘラクレイトス（前500年頃）は「万物の根元は火である」。

でもこの人は「万物は流転する」という言葉の方が有名ですね。炎がじっとしていないように、全てのものは一瞬も同じところに止まらない、と考えたと言われています。

火でも水でも空気でも何でもありで、いろいろな考えが出てくるんですが、やがて発想は抽象的になってきます。

その中でもデモクリトス（前460頃～前370頃）は、大事だ。「万物の根元は原子（アトム）である」というのが彼の考えです。モノをどんどん細かく分けていくと最後は小さな原子になるというんだね。現在のわれわれの持っている物理学の知識と基本的には同じでしょ。

頭の中で考えるだけでも、ここまで到達できるんですね。

抽象の極限がピタゴラス（前6世紀）でしょうか。

数学の基礎づくりで有名な人ですが彼は「万物の根元は数である」。

2 ソフィスト

さて、やがて関心は自然の成り立ちから人間の生き方へと移っていきます。

いかに生きるべきか、真とは、美とは、善とは、こんな事をギリシア人達は考えはじめた。

こういう中で、活躍したのがソフィストと呼ばれた人たちです。

ソフィストというのは弁論術教師のことです。

なぜソフィストたちが活躍をするようになったかというと、民主政の発展に関係がある。

アテネの民会を思い出してください。600人が集まる会議で自分の意見を人に聞いてもらい、さらに人々の支持を得て、自分の意見を通そうと思ったら話術がうまくなかつたらダメなんですよ。面白くなかつたら聞いてもらえない。議論で相手に勝てなかつたら意味がない。議論や話術がうまくなるには、悪い表現を使えば屁理屈をこねる能力が必要です。

理屈が上手いのは、知恵のある人たち、つまり哲学者ですね。

そういう哲学者に政治家志望の若者達が教えを請うたわけだ。

ソフィストというのはもともとは「知恵のある人」という意味です。要するに哲学者だね。ちょっと前に「ソフィーの世界」という本がありましたね。ソフィーというのは女の子の名前ですが、「知恵」という意味です。日本風に言えば知恵ちゃんです。そのソフィストですが、やがて意味が変わってきて、弁論術の教師となつた。

そのソフィストで最も有名なのがプロタゴラス（前490頃～前420頃）です。

ものすごい授業料をとって教えたらしい。軍艦一隻の建造費と同じだけの授業料をとったといいます。1万ドラクメだって言うんですが、今ならいくら位ですかね。1000万円くらいでしょうか。

プロタゴラスの言葉です。

「万物の尺度は人間である。」

エジプト人は人間の身体に鷹や山犬の頭をつけたモノを神と考え、ペルシア人は火を神と崇め、ヘブライ人は神をヤハウェのみとし、われわれギリシア人はまた別の神を持つ。

神ですら、時と所が違えば変わる。どこに絶対的な真理や善やその他もろもろがあろうか。君の正義とわたしの正義は違う。

「万物の尺度は人間」というのはそういう事を言っている。

難しい言い方で価値相対主義。

議論で相手を打ち負かすのが目的になりますから、絶対的真理なんて追い求めていてはダメなわけです。ある時は黒を白と言いくるめ、またある時は白を黒と言いくるめることが必要になる。そう考えると「万物の尺度」を「人間」にするのは都合よいです。

3 ソクラテス

ソフィスト達の言っていることは結構現代人には共感できる点が多いと思います。「奴隸制は人間性に反する」と言っていたり、「神は頭のいい男が人々を従わせるために発明したものだ」とか、面白いこともあります。しかし、哲学史上は評価が低い。

というのは、彼らと対比される大哲学者が登場するのですよ。

それが、ソクラテス（前470頃～前399）です。



これがソクラテスの彫像です。

見てどんな感じですか。ねえ、、、。

当時の記録では彼は非常にみっともない男とされています。頭は禿げ上がり、目はギョロ目、鼻は獅子鼻で、分厚い唇、おまけに小太りでお腹は突き出ている。さらに、非常に毛深かったそうです。

彫刻を見る限りではそんなにひどい男には見えませんけどねえ。

そして、偉大な人生の先生だった。

彼はアテネで生まれ、アテネで死にます。生粋のアテネっ子。ちょうどペロポネソス戦争末期の時期と彼の人生は重なります。

若いときから哲学の勉強をしていたようです。

ソフィスト全盛の時代なのですが、彼はソフィストと決定的に違う点があった。

彼は若い弟子達に哲学を語りますが、決して授業料は取らなかった。金儲けのための哲学ではなかったのです。

そしてよりよく生きる事を考えた。普遍の真実や善や美が存在すると信じ、それを追及し続けました。

そんなソクラテスには、友人や若い弟子達がたくさんいた。

ソクラテス自身は本を残していませんが、彼の弟子や友人が彼の行動や言葉を記録しています。それで有名なのがこんな話です。

ソクラテスが40代くらいの事です。ソクラテスの友人にカイレポンという男がいました。カイレポンはソクラテスの大ファンでもあった。ある時、彼はデルフォイの神殿に行った。前にも言いましたが（第9回参照）この神殿では神様のお告げがもらえるんです。

で、カイレポンは神様に尋ねたのです。「ソクラテスよりも賢い人間がいるか？」と。そしたら巫女さんに神様が乗り移って言うには「ソクラテスより知恵のある者はいない」。

カイレポン、やっぱり！、と嬉しくなってアテネに帰ってソクラテスに教えてやるのですよ。

「デルフォイの神託でお前がこの世で一番知恵のある男と分かったぞ！」ってね。

当のソクラテスはそれを聞いて、まあびっくりした。

私よりも知恵のある人はたくさんいる。私が一番知恵者であるはずがない、とね。

しかし、ソクラテスもこの時代の人ですからデルフォイの神託を信じてもいる訳です。神がウソをつくはずもない、とも思った。

そこで、彼はどうしたかというと神託の意味を知るために色々な人を訪ねてまわりました。アテネで人々の尊敬を集めている人、知恵者と呼ばれている人、立派な政治家、才能ある芸術家、そんな人をどんどん訪ねる。そして、質問をぶつけてその人の持つ知恵について確かめるんです。

たとえばこんなふうです。

ソクラテスはある人を訪ねて質問する。

「友人にウソをつくことは正しいか、不正か？」

相手は答える。

「それは不正である。」

さらにソクラテスは質問します。

「では、病気の友人に薬を飲ませるためにウソをつくのは正しいか、不正か？」

相手は答えます。

「それは正しい。」

そうすると、ソクラテスはここぞとばかりに突っ込むのです。

「あなたは、先ほどはウソをつくのは不正と言い、今は正しいと言った。

一体、ウソをつくのは正しいのか不正なのか、どちらなのかね？」

きかれた方は困りますよね。

「うーん、そういうわれると私にはもう分からぬ。」

ここで、引き下がればいいんですがソクラテスは追い打ちをかけるんだ。

「あなたは、何が正しいことで、何が正しくないかを知らないのに、今まで知っていると思っていたんですね。」

こんな調子でソクラテスはアテネの有名人を次から次へと質問責めにしたんです。

端から聞いていれば、こんなに面白い会話はない。

多分アテネの若者達がソクラテスについて歩いてこんな会話を聞いていたんだろうね。

若者達からは人気者になった。だけど、彼に質問責めにあった有力者達はたまりません。みんなの見ている前で恥をかかされるんだから。うつとうしい、困った男と思われても仕方ないですね。

ソクラテス、多くの人と話をして、最高の知恵者という神託について結論を出しました。

自分より多くの知識を持つ者はたくさんいる。知恵の量では自分は取るに足らない者だ。しかし、自分と他の者には決定的な違いがある。自分より多くを知っている者も全ての事を知っているわけではない。なのに彼らは全てを知っているつもりでいる。私は何も知らない、無知である。しかし、自分が無知であることを知っている。もしも、自分が他の者より知恵があるとすれば、それを知っているからだ！

これが、「無知の知」といわれるものです。

ソクラテスは自分なりのやり方で必死になって真実を追究していたのです。
 しかし、その晩年には有力者に憎まれて、告訴され裁判で死刑判決を受けてしまいました。
 罪状は「青年を腐敗させ、国家の認める神々を信じない」というものです。
 これは現代から見れば罪とも言えないようなものですね。まあ、ともかく有力者に睨まれてこんな事になってしまう。

裁判ではソクラテスは得意の弁論で自分の無実を主張するのですが、結局有罪になる。アテネの裁判は陪審制で票数は281対210だったらしい。

有罪になったあと、どんな罰にするかの裁判が続くのですが、ソクラテスはそこで開き直って言うわけだ。
 「自分はアテネのために尽くしてきた。悪いことは何一つしていない。そんな私にふさわしい罰はアテネの町が私にお金を贈ることしかない」なんて言っています。陪審員を敵にまわすようなもんだ。彼を訴えた連中は死刑にしようとは思っていないかったようで、悪くて国外追放、ソクラテスがもう議論をしなければそれでよし、と考えていたようですが、結局死刑判決が出されてしまう。

ソクラテスは牢獄に入れられるんですが、牢番は結構いいかげんに弟子や友人達が牢獄のソクラテスに会いに来る。で、みんな来ては彼に逃亡を勧めるんです。「手はずはととのえているから逃げよう」ってね。ところがソクラテスは断るんだ。私は逃げない、ってね。

なぜ逃げなかつたか。ソクラテスは自分の思想を裏切りたくなかつたんだと思います。
 彼は自分の信じるままに行動してきた、それは真実のためでありよく生きることでした。その結果が死刑判決ならば、それを受け入れる以外に彼の道はなかつたのではないか。
 だって、逃げたらそんな奴だったんだって思われるでしょ。自分の過去の言動全てが疑われてしまう。

ソクラテスの死刑は自殺のような形式の死刑でした。

自分で毒杯を飲むんです。

まさにソクラテスが毒杯を飲んで死んでいく瞬間にも弟子達が彼のそばに付き添っているのですが、その弟子達が「先生、死なないで」って泣くの。「おお、足の感覚が無くなってきた、死が近づいてきた」とか言ってるソクラテスが、その泣いてる弟子を慰めたりする。最後まで、自分の哲学を語り続ける。堂々とした立派な死にざまだったんです。

こういうソクラテスの生き方全体が友人や多くの弟子達に深い感銘を与えたのです。よりよい生き方を求め、自分の思想を裏切らないソクラテスの姿勢は、議論で勝つための弁論術の教師とは全然違つたんだね。

□□□□

□□□□□□□

4 プラトン とアリストテレス

プラトンはソクラテスの弟子でした。ソクラテスの死後にその言動をまとめて沢山の本を書いています。このプラトンですが、ソクラテスの意志を継いで普遍的な真実を追求しました。そして、彼がたどりついた

答えが「イデア論」です。

イデアとは何かというと、例えば「バラの花」があるとしましょう。「美しいバラの花」です。しかし、やがて時がたてばこれは枯れてしまんで美しくなくなりますね。そのときに「美しさ」というものは消えてしまったのか、ということなのです。バラの花が枯れても、「美しさ」というものはどこかに存在しているのではないか、目の前に見える形で存在していなくても、どこかの世界に実在するもの、これをイデアといいます。

イデアの世界がある、とプラトンは言う。

三角形の例は分かり易いかな。完璧な正三角形を現実に描くことはできなくても、正三角形というものは存在する、ある、でしょ。そんな感じのものがイデアです。英語のidea（アイデア）の元です。

プラトンはこんな例を出している。

洞窟がある。

そして、われわれ人間はみんな洞窟の中で縛られて固定されている、と言う。

手足が縛られていて身動きできないのですが、どちら向きに縛られているかというと、洞窟の奥の方を向いて縛られているの。

洞窟の入り口には光がある。そして、その光と縛られているわれわれの背中の間をいろいろなモノが通る。

美しいバラの花が通ったり、正三角形が通ったり、重装歩兵が通ったり、真実が通ったり、正義が通ったりする。

すると、洞窟の奥の壁に通過するモノの影が映るね。

われわれは、壁の奥を向いて生きているので、その影をモノの本当の姿だと思い違いをしている、と言う。

背中のうしろを通過しているモノ、それがモノの本体、イデアだ、と言うわけです。

そして、手足を縛られているわれわれですが、首を動かすことはできる。

影を見慣れてしまっているが、勇気をもって後ろを振り向けばそこにイデアが見える、と言うんだ。

この教室も、友達も、窓の外の景色も、黒板も、みんな影にすぎない。

プラトンのイデア、何となく分かりました？

何となく分かればいいです。

私の少年時代にはプラトニック・ラブなんていう表現があって、男女交際ですね、手も握っちゃいけない、キッスなんてとんでもない、そんなこと言われたわけ。そういう清い？肉体抜きの恋愛のことをプラトニック・ラブと言ったのです。女の子を好きになってもプラトニック・ラブでいなさい、なんてね。イデア論が誤解されて使われている。

身も心も焼き尽くすような恋愛をしていても、それは洞窟の壁に映った影にすぎないですよ、本当のラブは、ほら、あなたの後ろにある！というのがプラトンのラブだろうね。

目の前に見えているこの世界、これを真実と考えず別の世界に理念的な存在の実在を認める、そこに物事の本質がある、こんな考えを観念論哲学と言うんですが、プラトンのイデア論はその代表です。

プラトンは「万物の根源は数」というピタゴラスの影響も結構受けているみたいです。

プラトンは政治の本も書いています。「国家論」と言います。

プラトンは民主政治が嫌いです。

彼の敬愛するソクラテス先生はなぜ死刑になったんですか。

陪審員になった市民たちによって死刑判決を受けた。

市民たちは何の資格で陪審員となったか。

クジで当たったからです。しかも、陪審員は政府から日当が支払われた。

たまたまクジで当たって、日当めあてで裁判に参加した市民たちに、ソクラテス先生の思想が理解できるのか。ソクラテス先生を裁く権利があるのか。

これが、プラトンの発想です。

だから民主政治は嫌いです。

どういう政治を理想としていたかというと、哲人が王となることです。

プラトンはエジプトを旅行して感激している。エジプト人は、王、ファラオを神の化身としてあがめる伝統がある。それを見て感激するんですよ。素晴らしい、って。アテネの議論ばっかり、文句ばっかりの連中よりよっぽど良い。こういう国民を哲人王が支配すれば、国民は王の言うことをよくきいて素晴らしい国になるに違いないって考えたようです。

実はソクラテスも民主政治を批判するようなことを言っています。

こんな事を言っている。

「あなたが家を建てるときどんな大工に仕事を頼むか？

大工を集めてくじを引かせて当たった大工に頼むか、それとも最も腕の良い大工に頼むか？」

「腕の良い大工に頼むであろう。ならばなぜ、われわれアテネ人は政治を行う者をクジで選ぶのか。」

なかなか辛らつな批判ですね。当時のアテネの人々は民主政治に絶大な自信と誇りを持っていましたから、こんな発言はやっぱり許しがたいモノだったんじゃないかな。ソクラテスが死刑になった原因にはこんな発言があったのかもしれないね。

アカデメイア、これはプラトンが作った学校です。アメリカの最も権威のある映画の賞、アカデミー賞というのがあるでしょ。あの語源だ。科学アカデミーとか、アカデミックな書物だと、まあ、物事を権威で飾りたいときの修飾語になっているね。

それくらいプラトン先生には権威があって、その学校アカデメイアにも権威があったということだ。

プラトンの弟子がアリストテレス。

ギリシアの哲学、科学の集大成をおこなった哲学史上の巨人です。

現代でも哲学の基礎はアリストテレスだね。

哲学を勉強したかったら大学の文学部哲学科というところへ進学するんですが、私は大学時代哲学科ではなかったけど文学部だったんです。興味があったから哲学の講義も取りました。それがアリストテレスのテキストの講読でした。「カテゴリア」という本で、もちろんギリシア語なんて読めないから、英訳したモノだったけどね。大学の授業は90分なんですがホンのちょっとしか進まなかつたですね。今では何が書いてあったかすっかり忘れてしまったけれど緻密で論理的でそれなりに面白かった記憶はある。

このアリストテレス、先生のプラトンとは考え方が違います。彼はイデアなんてモノは認めません。この目の前にあるモノ以外に本質的な存在があるとは考えなかった。「美しいバラの花」が無くなれば「美しい」も無くなるのです。

こういう考えを実在論哲学といいます。彼はその元祖です。

これはルネサンス時代のイタリアの画家ラファエロの「アテネの学堂」という絵です。

でっかい建物の中に古代ギリシアの哲学者、自然科学者を大集合させてしまった絵なんですが、中央に並んで描かれているのがプラトンとアリストテレスです。この二人がどう思っていたか分かるでしょ。古代ギリシアの学問の頂点にいるんだ。

ちょっと絵が小さいですが、左側プラトンの右手に注目。指を立てて天を指しているでしょ。彼はアリストテレスに語りかけているんだ。「イデアの世界が存在するのだ」と。

それに対してアリストテレスの右手も見てください。彼は地を示しています。プラトンに反論しているのですよ。「ここです。ここ以外に世界はありません、師よ」。

描かれている一人ひとりの思想やエピソードを知っていると面白い絵です。

□□□□□□□□□□□

ラファエロ作「アテネの学堂」左プラトン、右アリストテレス

アリストテレスはアレクサンドロス大王の家庭教師をしたのでも有名。

アリストテレスが41歳、アレクサンドロスは12歳。それから3年間くらい教えた。

当時考えられる最高の先生だ。

アレクサンドロスの言葉。「私は生きることをフィリッポス（父）に、美しく生きることをアリストテレスに学んだ」。

哲学だけでなく、論理学、政治学、自然科学あらゆる学問に精通していたアリストテレスです。影響を受けたアレクサンドロス大王は東方遠征に出かけるとき、学者をたくさん連れていった。東方の自然、文化を研究しようとしたんだ。

これを後に真似たのがナポレオン。エジプト遠征の時に学者を連れて行き発見したのがロゼッタ・ストーン、という話は以前しましたね。

5 文芸

ざっと行きましょ。必要最小限だけ。

詩。

ホメロス（前8世紀）「イーリアス」「オデュッセイア」これは、トロヤ文明で話しました（第8回）。

ヘシオドス（前700年頃）「労働と日々」「神統記」

悲劇。

アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス（前5世紀）。

この三人は三大悲劇作家として有名、三人セットで憶えて下さい。ギリシア神話を題材に悲劇を書いた。ギリシアでは演劇が盛んにおこなわれていました。劇のコンクールもあったんです。

喜劇もあります。

喜劇作家では、アリストファネス（前5世紀）。この人はソクラテスと同時代の人で、彼の「雲」という劇

にはソクラテスがソフィストとして描かれています。

代表作は「女の平和」。

「女の平和」は反戦劇です。ところがこの劇はペロポネソス戦争中に書かれているのですよ。それだけでも驚きですね。簡単にストーリーを紹介しておくと、アテネとスパルタのおかみさん達が、戦争に明け暮れる男達に腹を立てて、なんとか戦争をやめさせようとするんです。男が好きなモノは何か。それはセックスだ。だったら彼らが戦争をやめるまで私たちは馬鹿な男どもの相手をするのはやめよう、というわけでセックス・ストライキをするんです。

男達、合戦が終わって家に帰ってきて、かあちゃん抱かせてくれ、って言うと戦争やめなきゃダメと拒否されちゃう。戦争と女とどちらを取るか、結局戦争を捨てる、という筋書きです。

過激でしょ。

6 ヘレニズム文化

アレクサンドロスの東方遠征からプトレマイオス朝エジプトが滅亡するまでの文化をヘレニズム文化といいます。

ヘレニズム文化の特徴はコスマポリタニズムです。世界市民主義と訳している。

ポリスという枠の中で活動していたギリシア人ですが、アレクサンドロス以後世界が広がります。自然に彼らの視野も広がった。世界市民としていかに生きるか、が課題になったと考えてくれたらしい。

いかに生きるかという点では、2つの哲学の流れが生まれます。

ストア派とエピクロス派です。

ストア派はゼノンという哲学者から始まりました。禁欲主義と訳されます。

エピクロス派はエピクロスから始まる。快楽主義と訳されていますが、言葉に惑わされないように。気持ちいいことをしましょ、というのではないです。心の平安が最高の快楽と考える学派です。

ストア派は禁欲主義で快楽主義とは正反対のように見えますが、禁欲することによって心の平安を目指しているんです。目標はどちらも同じ。

この時期の哲学者でディオゲネスという人がいます。犬儒学派といわれる人でストア派には分類されないのですが、この時期の哲学者の典型と思うので紹介しておきます。

この人あだ名はイヌ。家は壊れた酒樽。心の平安のためには一切の財産、肉親を不必要と考えて、最小限の身の回りの品物だけを袋に詰め込んで路地裏に転がっている酒樽の中で生活していたんだ。まったくの乞食と同じです。でも有名な哲学者なの。

突飛な振る舞いが多くてエピソードもたくさんある。

ある時、子供が手で水をくって飲んでいるのを見てディオゲネスは叫んだ。「この単純な生き方において、私はこの子に敗れた！」そして、自分の袋に入っていた水飲みを投げ捨てたといいます。

また、ある時アレクサンドロス大王がギリシア中の哲学者を集めた。哲学好きですからね。ところがディオゲネスはよばれたけど行かなかった。

逆に興味を駆り立てられたのがアレクサンドロス。ディオゲネスの樽まで自ら出かけました。そうしたら、ディオゲネスは樽の前でゴロリと寝そべってひなたぼっこをしている。

大王は近づいて名乗った。「余はアレクサンドロス大王である。」

ディオゲネスはひっくり返ったままで名乗る。「余はイヌのディオゲネスである。」

普通は立ち上がって挨拶するところですから、ディオゲネスの態度は滅茶苦茶無礼。いきり立つ側近を押しとどめて、大王は質問します。

「そなたは、余が怖くないのか。」

ディオゲネス「お前は善い人か？」

大王「余は善い人である。」

ディオゲネス「なぜ、善い人を怖がる必要があるか。」

アレクサンドロスはすっかりディオゲネスが気に入ってしまいます。そして尋ねた。

「そなたが望むものを何でもやろう。遠慮なく申せ。」

ディオゲネスは何と答えたと思いますか。

「そこをどいてくれ。お前のせいで影になって寒い。」

ひなたぼっここの邪魔だからだけ、彼の望みはこれだけ。どんな財産だって手に入ったのに欲しがらないのです。そう、そんなものは心の平安にとっては意味がない、とディオゲネスは考える人なのです。

禁欲して、心の平安をひたすら求める態度としては確かに徹底した生き方ですね。

ただ、厳しい見方をするとソクラテスやプラトンの時代に比べたら活力を失っている。

もし、プラトンが大王から同じ事を言われたら、理想の国家建設のために何か政策を進言したのではないかと思います。

ディオゲネスは自分の事しか考えていない。あくまでも自分の心の平安にしか関心がない。

これがコスマポリタニズム的一面でもあります。

□□□□□□

ディオゲネスはここでも寝そべっている。

ヘレニズム文化で忘れてはならないのがエジプトの首都アレクサンドリアに作られた王立研究所「ムセイオン」。

ここでは多くの学者が自然科学の研究をした。

幾何学を大成したのがエウクレイデス。

比重、てこの原理で有名なアルキメデス。

地球の自転・公転説をとなえたアリストルコス。

地球の周囲を測定したエラトステネス。

この辺が有名どころです。

エラトステネスは地球の周囲を3万9700キロメートルと測定しました。

現在の計測では4万70キロ。ほとんど正確だね。

ムセイオンを中心とする科学研究は相当なレベルに到達していたのです。

ただ、プトレマイオス朝エジプトが滅亡しムセイオンが閉鎖されると、これらの知識は忘れられてしまいました。やがて、地球は平らで太陽が地球の周りを回ると信じられていった。

正しい知識が獲得されても失われることがあるのです。貴重な教訓だと思いませんか。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[ソクラテスの弁明・クリトン岩波文庫](#)

プラトン著。ソクラテスを知る最も基本的な本です。

中学、高校の課題図書に必ず出る定番ですね。私見ですが、現代の中高生には難しいかもしれません、こういう原典を読むと、教科書的なイメージが覆されるおもしろさがあります。たとえば、古代ギリシア人達が、精霊のようなものを真剣に信じている様子は、われわれが持っているギリシア文明の科学的合理的なイメージからは、想像もつかないほどです。

[ソクラテースの思い出改版岩波文庫青603-1](#)

クセノフォーン著。クセノフォーンはソクラテスの親友でもあり、弟子でもあった人。ペルシアに戦争に出かけて、帰ってきたら、ソクラテスが処刑されたのを知り、驚いてこの本を書いた。

哲学的ではないかもしれないが、ソクラテスのエピソードは上の「ソクラテスの弁明」よりも面白い。

クセノフォーンの経歴も、プラトンより面白い（翻訳者佐々木理が「まえおき」で簡単に書いている）。ペルシアの王位継承争いに、一枚かんで、最後はギリシア傭兵部隊をひきいて、小アジア奥地から命からがら帰還する。我々は、ヨーロッパ人の影響で、ギリシアとペルシアを白と黒、善と悪、のように対立的にとらえがちだが、どうみても、ギリシアというのは、ペルシアの一部と思える。オリエント世界の一部というべきか。（本の紹介から、少し、はずれてしましました）

[ギリシア・ローマ哲学者物語講談社学術文庫](#)

古代ギリシアの思想家の列伝ものは種本が同じなので、みな似たようなものだが、やはり、日本人の書いたものは、問題関心が理解しやすく読みやすい。

[90分でわかるプラトン](#)

確かに、コンパクトにまとまっています。高校生の入門には、最適かもしれない。

[プラトンの学園アカデメイア講談社学術文庫](#)

バイトで学費を稼いでいる苦学生のエピソードなど、プラトンの設立したアカデメイアの具体的な様子が分かる。ギリシア哲学関係では少し変わった切り口の本。

第12回 ギリシア・ヘレニズム文化 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第11回 アレクサンドロスの帝国](#)

[次のページへ](#)
[第13回 ローマの発展](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

第13回 ローマの発展

1 ローマの発展

イタリアの首都、ローマですが、ここはもともとは小さな都市国家でした。ギリシアのポリスと似たような構造でアテネに比べて200年くらい遅れて発展してきました。

アレクサンドロス大王がペルシアを滅ぼしたあとなぜそのままインド方面に向かったのか、西に、つまりイタリア半島の方向へ遠征を考えなかったのはなぜか。つまり現在のイタリア方面には遠征するだけの魅力はなかった。後進地帯だったわけです。

このローマがやがて大発展してアレクサンドロスの後継国家、つまりヘレニズム国家をすべて支配する大帝国になるのです。その経過を見ておきましょう。

ローマは前8世紀頃ラテン人によって建国されました。ラテン人はインド=ヨーロッパ語族です。今でもイタリア人やスペイン人をラテン系民族というのはローマ帝国の支配下に入ってラテン人の血を引き継いでいるという意識から来るようです。

都市国家ローマには最初は王がいましたが、前6世紀には王を追放して共和政が始まりました。王がいる政治制度が王政、王がないのは共和政です。こういう用語は覚えておこう。アメリカ合衆国は王がいませんから共和政、イギリスは女王がいますね、だから王政。韓国は、共和政。じゃ、日本は？王はないけど天皇がいる。どっちだといわれれば王政に分類されます。

ローマでは前6世紀に共和政が始まって以来、元老院と呼ばれる貴族の議会が政治を主導してきました。外国の使節がローマの元老院を見て、王が何百人も集まっているようだと言ったくらいに、彼らは誇り高かったです。また共和政という政治制度に自信を持っていたようです。

元老院という訳語は伝統がある古い訳ですがわかりにくい。同じモノが現代政治だと上院とか貴族院と訳されます。

政府の役職で一番トップに立つのがコンスル。執政官と訳されます。これも現代的に訳せば大統領です。任期一年で2名おかれます。2名にしているのは独裁政治にならないように互いに牽制させるためです。ともかく、ローマでは王や王もどきが出現するのを極端に警戒しました。

しかし、執政官二人の意見が異なると国家存亡の非常事態に対応が遅れて困ることになります。この点を解決するためにおかれる臨時職にディクタトルがある。これは独裁官と訳す。半年任期で1名です。決して半年以上は任に着かない。独裁者にならないようにです。

執政官も独裁官も元老院議員もみんな貴族から選ばれます。
これに対して平民たちが不満を持つようになるのはギリシアと同じです。

ローマでも平民が武器自弁で重装歩兵として戦場に立てる。これは貴重な戦力なんですね。ところが、戦場での活躍だけが期待されて政治的権利がない。ということで平民が貴族に対して抗議活動をおこないます。

前494年の聖山事件というのがこれです。平民たちが聖山という山に立て籠もってストライキを起こした事件です。

ローマの貴族たちは護民官設置を認めることで平民に歩み寄りました。

護民官は2名。執政官の政策に対し、それが平民の不利益になると判断すれば拒否権を発動することが出来る。護民官がノーといえば執政官は何もできないというわけだ。

それから、護民官は身体不可侵です。誰も護民官を肉体的に傷つけることは許されない、独特の宗教的ともいえる権威を持つようです。

その後も徐々に平民の権利は拡大します。

前451年、十二表法制定。12枚の銅板に法律を刻んで誰もが見られるようにした。貴族独占だった法律情報の公開ですね。元老院はアテネに使節を派遣してドラコンの法なんかを参考にしたといいます。

前367年、リキニウス＝セクスティウス法。執政官のうち一名を平民から選出する法律です。

前287年、ホルテンシウス法。平民の議会である平民会というのがあるんですが、この平民会の決定を国法とする法律です。元老院と対等に立法出来るようになったわけです。

この段階で、ローマにおける身分闘争は終結し、政治は安定し、外に向けて発展していきます。

ここで一つ注意。

執政官も、貴族・平民から一名ずつ選ぶようになり、立法権も平等にあるから、二つの身分は対等のように見えます。でも、違うんです。例えばアテネでは貴族、平民も一緒にいた民会が国政の最高機関になりましたが、ローマでは貴族は元老院、平民は平民会と、二つの身分は分離したままです。ここは、注意してください。そして、常に貴族は大金持ちです。財産あります。平民にはありません。財産を築いた平民は貴族の仲間入りを目指します。

ローマで実質的に政治権力を握っているのは元老院を中心とする貴族ですよ。

2 地中海世界の統一

ローマは周辺の都市国家や部族を征服し前272年にはイタリア半島を統一しました。

ローマの他国支配の仕方は少しわれわれの常識とは違うので説明しておきます。

例えばローマがある都市、仮にA市としますが、A市を降伏させると条約を結びローマの同盟国とします。A市は自治を認められ、ローマに対して納税の義務はない。ただし、ローマがどこかと戦争をするときは兵隊を出す義務があります。それだけです。今のアメリカとどこかの国みたいな関係です。

こんなふうに色々な国を支配すると、同じように条約を結び同盟国を増やすという形で、領土が増えていくのです。領土というより、緩やかな連合体という感じです。

ローマがその服属諸都市と結んだ条約の中身ですが、都市毎に待遇が違うのが大きな特徴です。差別待遇をするので服属諸都市間の利害が一致しにくい。団結してローマに抵抗するということが起きにくい。これを、分割統治という。

さらにローマは服属都市の支配層である貴族たちにローマ市民権を与えるんです。

つまりA市の支配者は同時にローマ市民になる。支配者であるローマ人と同等になってしまふのね。これではローマに逆らう理由はないです。

こういう支配の仕方がローマ人は実に上手い。

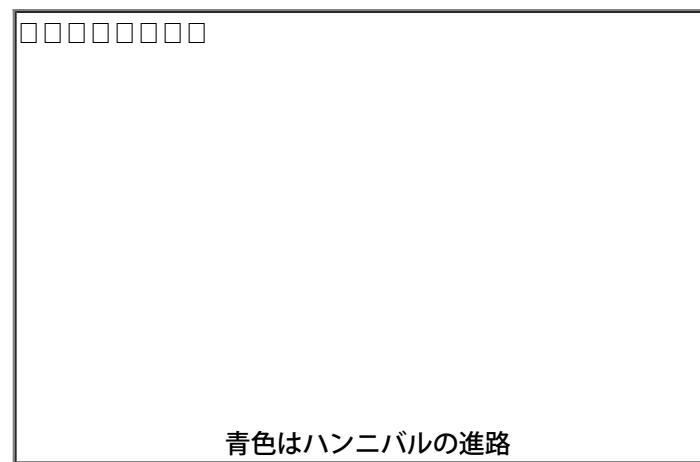
あくまでもこのような支配の仕方はイタリア半島の支配地域だけです。

やがて、ローマは海外に進出します。

イタリア半島のつま先が蹴っ飛ばしている石、これがシチリア島です。ローマはここに勢力を伸ばします。

ここはギリシア系の都市が多いのですが、カルタゴの勢力圏でした。

ローマが最初にぶつかった強敵がこのカルタゴです。



カルタゴはフェニキア人が建設した植民都市でしたが当時は西地中海貿易を支配する大国になっていました。カルタゴ人をローマ人はポエニ人と言ったので、このローマ・カルタゴの戦争をポエニ戦争といいます。

ポエニ戦争は前264年～前146年になっていますが、前後三回大きな戦闘があって、中間期は中休みです。

第一回戦（前264年～前241年）。シチリア島の争奪戦。海戦に慣れないローマがはじめは苦戦しますが、最終的に勝ってシチリア島からカルタゴ勢力を追います。

第二回戦（前218年～前201年）。

これはハンニバルという名将が登場するので有名です。別名ハンニバル戦争。

ハンニバルはカルタゴの将軍家に生まれます。父親が第一回戦でシチリアをローマに奪われたあと、現在のスペインの開拓をする。当時スペイン内陸部はまだ未開拓で、色々な部族集団もいた。ハンニバルは父親とともにスペインの諸部族を味方に付けながら開拓をおこない、軍隊の養成もしていた。

やがて、父親が死んで跡を継ぐんですが、シチリアを奪ったローマにどうにか一泡吹かせて

逆襲したいというのが、ハンニバルの宿願です。軍隊を率いて海路ローマを攻めればいいんですが、すっかり制海権はローマに握られていた。
海上からローマを攻撃するのは不可能だった。

ハンニバル

そこでハンニバルが考え出したのが、アルプス越えという奇策です。

陸路アルプスを越えてイタリア半島に侵入しようという。

登山道も何もない時代です。これも不可能に近い。誰もがそう思っていたからローマもアルプス方面に軍事的な防衛をしていない。だから、逆にもしアルプス越えに成功すれば一気に勝利を勝ち取るチャンスも大きい。

前218年、春、ハンニバルは約5万の兵を率いて、スペインを出発しました。象軍というのもあって、37頭の象を連れていた。そのほか騎兵隊もあるから当然馬もいる。これらを引き連れてアルプスを越えたのが10月。途中の山道は雪に埋まり、谷間に落ちたり、山岳民の襲撃を受けたりして、イタリア北部にたどり着いた時は兵力は半分の2万5千でした。

ところがこの2万5千の兵力でハンニバルはまる16年間イタリア半島で闘い続けるのです。

前216年、カンネーの戦いでは5万を超えるローマ軍を殲滅しました。これは戦史に残る殲滅戦だそうです。その後もハンニバルはローマ軍を破り続けました。とにかくハンニバルは用兵の天才。繰り出す軍団が次々に負けるのでローマは決戦を避けて持久戦にはいります。ハンニバルはある程度の都市を攻略するのですが、10年かかっても決定的な勝利は得られなかった。

原因の一つはハンニバルはローマの同盟市が離反して自分を支援することを期待していたのですが、分割統治がうまくいっていたんですね、離反がなかった。

もう一つはハンニバルの戦略です。彼は「戦争に勝利することを知っているが、勝利を利用することを知らない。」と評された。カンネーの戦いで大勝利したあとでなぜローマ市を直接攻撃しなかったのか、今でも彼の戦略のなさが指摘されているところです。

ハンニバルはローマを降伏させることが出来ないけれど、ローマもハンニバルに勝てない。

ハンニバルはイタリア半島に留まり続けているわけですから、ローマも困った。

そこに登場するのがローマの将軍スキピオです。

スキピオは元老院の反対を押し切って、直接カルタゴを攻撃したんです。カルタゴの指導者たちは弱腰だから直接攻略されたらあわててハンニバルを呼び戻すだろうという考え方。これは一種の博打です。スキピオの出陣によってローマの守備はガラ空きですから、もし、ハンニバルが戻らずにローマを攻撃したら大変なわけです。

でも実際にはカルタゴ本国の指導者たちは、スキピオ率いるローマ軍が迫ったのを見てハンニバルに召還命令を出します。カルタゴ南方のザマでハンニバルとスキピオの決戦が行

われ、不敗のハンニバルはついに敗れカルタゴは降伏しました（ザマの戦い、前202年）。カルタゴは本国以外の領土をすべてローマに奪われますが、国の存続は認められました。

これがポエニ戦争第二回戦です。

大スキピオ

ハンニバルはその後カルタゴの指導者の一人となります。失脚しシリア方面に亡命しました。一方のスキピオも大スキピオとよばれローマの大物政治家となるのですがこれも晩年に失脚しています。ホントかどうか分かりませんが、のちに二人がロードス島で再会したという。ハンニバルはすでにアレクサンドロス大王と並び称される名将で、スキピオはその彼を破っている。それが自慢のスキピオがハンニバルに問う。

「古今東西で最高の名将は誰か？」

ハンニバルは答える。「それはアレクサンドロス大王である。」

スキピオ「では二番目は？」

ハンニバル「エピルス王ピュロスである。」（授業には出てこなかったけどそういう人がいたのです。）

スキピオは自分の名前が出てこないのでいろいろしてくるのね。さらに問います。

「では、三番目は誰か？」

ハンニバル「それは、私ハンニバルである。」

スキピオ「あなたはザマで私に敗れたではないか。」

ハンニバルも負けず嫌い。「そう、もし勝っていれば私はアレクサンドロスを飛び越して一番だ。」
だってさ。

第三回戦（前149年～前146年）。

第二回戦で負けて領土を奪われたあとも、カルタゴは海上貿易で復興して繁栄を取り戻すのです。

ローマの発展にとってはカルタゴを滅亡させる必要があった。

第三回戦は圧倒的な軍事力を持つローマ軍に包囲されたカルタゴの籠城戦です。ローマ軍の指揮官が小スキピオ。大スキピオの長男の養子です。

籠城戦ですから、ローマ軍は食糧が無くなつて降伏するのをひたすら待っているのです。で、カルタゴ市の城壁の上を巡回警備しているカルタゴ兵の様子をずっと観察している。食糧が尽きてきたら痩せてくるでしょ。ところが包囲戦が4年目に入つても、兵士はまるまる太っているのです。

ローマ軍がおかしいなあ、と思っていたある日カルタゴから逃れてきた市民を捕まえて城内の様子を尋ねると、女子供が自分の命を絶つてその肉を警備兵に食べさせているというんだ。ローマ軍を欺くためにね。

そうだったのか、というわけでローマ軍は総攻撃をかけた。

もうカルタゴはまともに戦える状態ではなかった。ローマの圧勝でした。

残った住民は全部奴隸に売り払い、土地には海水をまいて二度と人が住めないように徹底的に破壊しました。

カルタゴ滅亡と同年、前146年には東方のマケドニア、ギリシアもローマによって征服されました。

このように新しく領土に加えられたイタリア半島以外の土地をローマは「属州」とした。属州にはローマから有力貴族が総督として送り込まれて、税金をがんがん搾り取りました。その富がローマ市に流れ込んでくる。繰り返しますが、税金を払わなくてよいイタリア半島の服属都市とは全然待遇が違いますからね。

また、戦争捕虜が奴隸としてどんどんローマ市に送り込まれました。

世界帝国としてのローマ誕生です。

[参考図書紹介](#) ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

世界の歴史〈5〉ローマ帝国とキリスト教...河出文庫	基本的な概説書。題名ほどキリスト教にスペースを割いているわけではない。
ローマ人の物語(3)ハンニバル戦記(上)	
ローマ人の物語(4)ハンニバル戦記(中)	塩野七生著。ローマ人の物語は、どの巻も面白いが、「ハンニバル戦記」は特にお気に入り。ミーハー気分でハンニバルを応援してしまうのである。
ローマ人の物語(5)ハンニバル戦記(下)	

第13回 ローマの発展 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
第12回 ギリシア・ヘレニズム文化

[次のページへ](#)
第14回 内乱の一世纪

□□□□□□□□□□

第14回 内乱の一世紀

目次

- 1 ローマ社会の変質と動搖
- 2 グラックス兄弟の改革
- 3 マリウスの軍制改革
- 4 スパルタクスの反乱
- 5 カエサル

1 ローマ社会の変質と動搖

プリントのまとめにはこうあるね。

「長期化する従軍→農地の荒廃→農民＝重装歩兵の没落」

ローマは地中海世界を取り巻く大領域国家に発展していくのですが、領土拡大することは戦争をずっとしているわけです。ポエニ戦争中もマケドニア、ギリシア方面で軍事行動を継続しているんだ。

「長期化する従軍」とあるのはそういうこと。

重装歩兵として出陣する兵士は何年も、戦争に行ってなかなか故郷に帰れない、ということも起こってきます。

ローマ市民権を持つ自作農民たちが武器自弁で重装歩兵となっているのですから、ローマの農民がなかなか帰ってこない、ということでもあるのね。

だから残されたローマの農家では、父ちゃんいない間に残された母ちゃんや爺ちゃんが農作業をしているわけです。

しかし、肝心の働き手がいないですから、残された家族に何か病気とか起こればもうまともに農業が続けられない。

もしくは持っている農地全部を耕作できない、という状況が生まれてきました。

農業をあきらめて離農する者達も出る。彼らは土地を売って生活費を捻出する。

戦争が終わり兵士が帰国してみると、もう土地を手放していて農業が出来ない、ということが起こつくる。

これが「農民＝重装歩兵の没落」です。

自作農が手放した土地を買ったのは誰か。

これが貴族です。

彼らは大土地所有者となり、農場経営をする。この大農場をラティフィンディアといいます。

ラティフィンディアがどんどん拡大、発展するのが前2世紀後半。

貴族が経営するラティフィンディアで働いたのが奴隸です。

ローマは戦争でどんどん勝っていますから、戦利品として捕虜とか被征服民が奴隸としていくらでも連れてこられたんですよ。

いくらでも奴隸はいたし、新しく連れてこられた。家畜より安く手に入るんだね。

只みたいなものだから、奴隸を働かせるのが一番いい。

ろくに食事を与えなくて死んでしまっても気にしない、いくらでも新しい奴隸はやってくる。

史料を見るとひどい扱いが分かるでしょ。これは製粉所の奴隸の例です。

背中にはむち打ちのあとが縞模様になっている。

頭の毛は半分がそり落とされている、と書いてあるね。逃げたときに半分坊主刈りになっているからすぐに奴隸だとばれてしまう仕組みだ。

そして、額には所有者の名が焼きゴテで捺してある。

宿舎は家畜小屋の隣、飲み物は海水で薄めた葡萄酒。海水で薄めてあるのは塩分補給のためです。

まさにモノ言う家畜ですね。

こういう奴隸を労働力として使ったので、没落した農民が小作農になろうと思っても、ラティフィンディアでは雇ってもらえないのです。

だから没落農民たちは家族ごと都市に流れ込んでいます。

彼らをルンペン・プロレタリアートという。遊民と訳している。遊んでるのではないよ。やることなくて仕事なくて、放浪しているという意味です。今風に言えば失業者、ホームレス、といった感じ。

ローマ市にやってくれば有力貴族がそれなりに彼らの面倒を見てくれるんです。彼らルンペンは有力貴族の庇護民となり、選挙の時などは貴族のために一肌脱ぐ、そんな関係があるのです。

また、ローマの属州から運ばれた税金、食糧、もろもろの富で、市民権さえあればそれなりの生活は政府から保障されました。

ただ、ローマの中堅市民である農民がどんどん没落すると言うことは、重装歩兵のなり手が減るわけですね。

簡単に言えばこれはローマ軍の弱体化につながる。

領土を拡大してきた強いローマ軍が弱くなってしまう。

ローマはこのままでよいのか、と心ある政治家たちは考えた。

2 グラックス兄弟の改革

ローマの名門貴族出身の若者でティベリウス・グラックスとガイウス・グラックスという兄弟がいました。彼らは例のスキピオの一族でもある名門中の名門です。

このグラックス兄弟が、ローマ農民の没落をくいとめる改革を断行するのです。

最初に改革を試みたのは兄のグラックスです。

彼の政策は非常に筋の通ったモノだったと思います。

ルンペンとなって都市に流入している者達に土地を与えて再び自作農民に戻そうと考えた。そしてローマ軍を再建する。

土地はどこから手に入れるか。

貴族のラティフィンディアがある。125ヘクタール以上の土地を占有している貴族からそれ以上の土地を国家に返させる、それをルンペソ市民に再分配しようというわけだ。

この政策に平民たちは熱狂します。

しかし、貴族たちは面白くない。農民の没落でローマ軍の弱体化が進むのは心配だけど、自分の土地を取り上げられるとなれば、やっぱり嫌なんですね。

こういうのを総論賛成各論反対なんて言う。

グラックスも貴族だけど、自分の利害より国家の利害を優先させて考えたんだね。

ただ、彼のやり方はかなり強引なところがあって、普通の手続きを踏まず、元老院との相談もなしに、改革を推し進めようとした。

反対派貴族と改革を歓迎する平民の対立でローマは騒然とした雰囲気になる。

兄グラックスはどんな役職に就いていたかというと、護民官です。護民官は身体不可侵で神聖なのです。だから、反対派も手が出せない、はずなんですが、強行な反対派がゴロツキを雇ってグラックスを襲わせたんです。昔も暴力団みたいのがあったんだね。

兄グラックスはボコボコに殴られて殺されてしまいます。死体は川に投げ込まれてふかふか浮いているところが発見された。

このような非常手段によって改革は潰されました。これが前133年のこと。

弟ガイウス・グラックスは兄の死の10年後同じく護民官になって兄の政策を実現しようとした。このときも騒然とした雰囲気となって暴動が起り混乱の中で弟グラックスは自殺して、この兄弟の改革は失敗に終わりました。（前123）

3マリウスの軍制改革

貴族は大土地所有を守れたから良かったかもしれないけれど、ローマ軍の弱体化をどうするかという問題は残った。

これを一気に解決したのがマリウスの軍制改革（前107）でした。

マリウスというのは将軍として頭角をあらわし、コンスルになった人物です。

ローマの軍隊の基本中の基本は、財産を持ったローマ市民が武器自弁で兵士となって従軍する、というこの一点です。

だから、グラックス兄弟は武器自弁が出来る農民を作りだそうとした。

でもマリウスはこの基本をあっさり捨ててしまう。

「財産ない者が兵士になったっていいじゃないの。」と彼は言う。

しかし、彼らは武器が買えないじゃないか。

「そんな物、俺が買い与えてやるよ。」と彼は言う。

というわけでマリウスはルンペソ市民を兵士として採用し、武器を与え、給料も払ってやるんです。その費用は基本的には彼のポケットマネーから出す。

兵士として働く期間というのはそんなに長いモノではないです。ある程度年をとったら兵士としては引退です。

こういう退役兵に対してもマリウスは面倒を見てやる。ある程度勤めてからやめる兵には土地を分けてやる。そして、自作農民として生きていけるようにしてやるの。

武器自弁の原則を放棄することで、兵士不足は一気に解決して、マリウスはこの新しい軍隊で勝利を続けました。これがマリウスの軍制改革。

しかし、この軍制改革でローマ軍の質が大きく変化したんです。

武器自弁の農民軍だったときは、兵士はローマ市民の義務を自覚して従軍していた。ローマのために戦ったわけですね。

ところが、マリウスの兵はどうか。彼らの気持ちの中で、ローマのために、ローマ市民の義務として、という意識は小さくなる。それよりも「自分を雇ってくれているマリウス将軍のために」という気持ちの方が大きくなる。

また、マリウスもそれを意識して兵士をつなづけていきます。

こういう現象を軍隊の「私兵化」という。

私兵の軍事力を背景にして、マリウスのローマ政界での発言力は重みを増す。

また、選挙の時には彼の兵士たちがマリウスに投票してくれるわけ。兵士はみんな平民ですから、平民会でマリウスをローマ政府の役職につけることが出来るのですよ。

これは、自分の政治勢力を伸ばしたいという貴族政治家にとっては上手いやり方だね。

のちに多くの野心家たちがマリウスのやり方を真似ることになります。

そして、私兵を養った将軍同士の内乱が続いてローマは混乱の時代を迎えます。

グラックス兄弟の改革から100年間を「内乱の一世紀」とよびます。

前91年から前88年には、イタリアの都市がローマ市民権を求めてローマに反乱を起こします。同盟市戦争という。ローマはローマ市民権をイタリア諸都市に与えることでこの戦争を終わらせました。

続いて前88年から前82年まで、マリウスとスラという将軍の抗争が起ります。スラは大金持ちの貴族で多くの私兵を養っている。同じローマの将軍同士がローマ兵を率いて戦いあうわけです。スラは軍隊が決して入城することが許されなかったローマ市内に乱入したりした。

ローマの指導者集団である元老院は何をしていたかというと、この二人の将軍の抗争に振り回されるだけでこれを解決できなかった。元老院の権威がだんだん低下します。

ちなみにマリウスは平民派、スラは閥族派となっていますね。

平民派というのは、公職に就くときに平民の支持を背景にしていたということ。

閥族派は貴族勢力を背景に公職を目指していたものだと理解しておいてください。

政治的な考え方には違いがあるわけではありません。

4 スパルタクスの反乱

またこの時期に奴隸反乱も起こっています。

前139～前131年と前104～前99年にシチリア島で奴隸反乱。数万規模の大きな反乱だったようです。

前73～前71年には有名なスパルタクスの乱。

スパルタクスは剣奴でした。

奴隸といっていろいろな奴隸がいたんですね。特別な能力がなければラティンディアで農作業。中には賢い奴隸もいる。ギリシアもローマに征服されましたから学者の奴隸なんというのもいるわけですよ。こういう者は貴族の家で子供の家庭教師などをさせられる。顔のきれいな少年少女は貴族の家で主人の身の回りの世話をやらされるわけだ。

特技や能力によって奴隸にも違いがあった。それで、その中でも変わっているのが剣奴です。戦争捕虜などで肉体的能力が抜群の者が剣奴にさせられる。

剣奴は真剣勝負の殺し合いをさせられる者達です。今で言えば、ボクシングやプロレスみたいなものでローマ市民たちがその決闘を見て熱狂する。

強くて人気のある剣奴はスター扱いですが、負ければ死んでしまうかもしれないんですからね。現在の感覚からすれば、すごく残酷なものです。

ローマの都市では競技場があつて剣奴の試合が頻繁に行われていた。

剣奴の試合を開催するには大層お金がかかる。数日かけて何十番もの取り組みをしたりするんです。この金を出すのが、町の有力者、貴族たち。試合を楽しみに見に来るのが一般市民、つまり平民だね。

有力者はなぜこんなことをするかというと、人気取りなんです。

平民にサービスをする見返りに、選挙で投票してもらって公職につこうというわけ。

剣奴は興業があるとあちこち連れて行かれて試合をさせられました。

ついでに、試合のことを話しておきます。

試合では必ずどちらかが死ぬまで戦うわけではない。

怪我をすると、剣を取り落としてしまうとか、戦闘不能になって勝負がつく場合がある。

とどめをさすのかどうか。勝った剣奴は主催者を見るのです。主催者は競技場につめかけた観客を見渡す。この時に観衆が親指を立てて拳を突き出せば、「そいつは負けたけど、立派に戦った。命は許してやれ」という合図。主催者も親指を立てて、勝者はとどめをささない。敗者は怪我の手当などを受けて助けられる。逆に観衆が親指を下に向けたら、「そいつは助けるに値しない。殺せ」という意味。主催者も同じ合図を送る。勝者は敗者にとどめをさして殺してしまうの。

残虐さということについてはローマ人は結構麻痺しているね。

あと、猛獣と剣奴の戦いとかも行われました。

当然のことですが、試合はワザの優れたもの同士の戦いの方が面白いよね。

そこで、剣奴たちは訓練を受けていたのですね。試合のない時は腕を磨いている。また、負ける事は死を意味しますから、訓練も必死だ。

ローマの南方のカプアという町に剣奴の訓練所がありました。

前73年、ここから78人の剣奴が脱走した。このリーダーだったのがスバルタクスです。

彼らはベスピオ山に逃げ込んだ。そこにローマの討伐隊が来るんですが、スバルタクス達は、殺しのプロだ。それに失うモノはありませんからね、滅茶苦茶強くてローマ軍に勝ってしまう。

脱走した剣奴がローマ軍に勝ったという噂は瞬く間に広まって周辺のラティンディアから農業奴隸達がどんどん逃げて彼らのもとに集まって来る。

スバルタクスの勢力は7万人にまでなったと言われています。

スバルタクスは戦争の指揮も上手かったようで、このあともローマ軍との戦いに勝ち続けるんだ。万単位の人々を束ねているだけでもすごい政治的な手腕というか、人望があったんだろうね。

で、大勢力になったスバルタクス達の奴隸反乱軍はやがてイタリア半島を北上します。

食糧はどうやって確保したかというと略奪です。途中の都市を攻略し金持ち、貴族の財産や食糧を略奪しながら移動した。

スバルタクスの目的は何かというと、故郷へ還ることです。

スバルタクス自身は今のブルガリアあたりの出身だったらしい。故郷には女房や子供がいたのかも知れないね。他の奴隸達もローマ領の北方から来た者が多かったようです。

だから北へ行ってローマ領を脱出しようとしたんでしょう。

ところが彼らはアルプスの麓まで行ってそこでUターンしてしまう。

なぜアルプス越えをしなかったのか、謎です。アルプスを越えればもうローマ領から出られたんですから不思議な行動です。

学者はいろいろな説を唱えていますがね。

ただ、現実問題として7万もの仲間を引き連れて実際にアルプスを越えられるとスバルタクスが判断したかどうかですね。

スバルタクスや他の剣奴達だけなら肉体頑強だから越えられたかもしれないけれど、彼らを頼って逃げてきた奴隸達にとってはどうだったか。老人や、病人、女子供もいたでしょうからね。そういう者達はかなりの確率で落伍して死んでゆくだろう。

リーダーの判断としてはアルプスを目の前にして引き返さざるを得なかつたのかなと思います。

今度はまた略奪をしながらイタリア半島を南下するんですが、彼らはイタリア脱出をあきらめたわけではなかった。

当時イタリア半島周辺の海域では海賊が結構出没していたんですが、スバルタクスはその海賊と連絡を取り合う。イタリア半島南端に海賊船が迎えにきて彼らをシチリア島に運ぶ段取りになっていたようです。スバルタクスは略奪した財宝をたくさん持っていますからね、船賃はちゃんと払えるわけ。

ところがスパルタクス一行がイタリア半島の先っぽまで来てみると、海賊船は来ない。手違いがあったのか、裏切られたのか分かりませんが。変わりにローマの大軍がやって来てついにスパルタクス軍はここで負けてしまったのです。

スパルタクス自身も乱戦の中で戦死したらしい。

生き残って捕えられた奴隸達は磔（はりつけ）にされた。ローマ市から南方に続くアッピア街道という軍道があるんですが、この道の両側に十字架が何キロもならべられ奴隸達のうめき声が何日も聞こえたそうです。

他の奴隸達に対する見せしめだね。

話がスパルタクスで長くなってしまいましたが、要するにこの時期のローマは、将軍同士の内乱、同盟市の反乱、奴隸反乱、元老院の指導力の低下など、混乱が続いたということです。

ローマがその現状に合った政治制度を見つけるまでもうしばらく混乱は続きます。

5 カエサル

前60年、有力将軍三人による談合が成立し、彼らがローマの政権を握ることになりました。これが第一回三頭政治といわれるものです。

三人はカエサル、ポンペイウス、クラッスです。

クラッスはローマの大富豪。

ポンペイウスはローマの将軍。

カエサルは、これはローマの人気者。

この三人が力を合わせれば怖いものなし。元老院も上手く操ります。

カエサル像

三人で一番重要なのがカエサルです。英語ではシーザーと読む。シェイクスピアの劇でも有名だね。アレクサンドロス大王、ハンニバルに続く古代世界の英雄でしょうか。

この人、とにかく魅力があったようです。カエサルに会う人はみんな彼のことが好きになる。カエサルは俺の友人だぜ、とみんなが言いたくなる。みんなの友達カエサル、です。

あだ名が「ハゲのスケベおやじ」だって。こんなふうに呼ばれてカエサルはガハハと嬉しそうに笑う人なんだね。

もう一つのあだ名が「借金王」。

とにかくカエサルは借金が多くて、ローマ中の金持ち、富豪から借金しまくり。

この金を何に使うかというと、平民達にふるまうんですよ。

例の、剣奴の試合をどんどん開催して平民達を招待する、食糧を買い込んでみんなにふるまう、それもみんなの度肝を抜くような規模でやるんだ。

だから、ますます平民達のカエサル人気は高くなる。

また、平民達も知っているわけ。カエサルさんは俺達にふるまうために借金で困ってるよ、今度の選挙ではカエサルさんを公職につけて儲けさせてやらないといかんな、とか言って投票してくれるわけですね。

さて、そのカエサルですが前58年からガリア遠征に出ました。この遠征は前51年まで続くのですが、この期間にカエサルは人気に見合うだけの実力をつけたんです。

ガリアというのは現在のフランスを考えてくれたらよいです。ガリア人という人々が住んでいた。部族集団で生活していて、まだローマの領土にはなっていない。

このガリア人と戦って、勝ち続けます。

カエサルの勝利が次々にローマ市に伝えられる。そのたび毎に、また彼の人気は上がる、将軍としての実力も付いてくる。彼の兵士は当然のごとく彼の私兵です。この兵士達との人間的なつながりも強くなるんですね。親分子分関係が出来上がる。

何よりも勝利によって、カエサルは負けたガリア人から財産を搾り取りますからね、借金王から大富豪に変身するのです。

カエサルの将軍としての実力がついてくると、内心面白くないのがポンペイウスです。

それでもクラススが生きているうちは三人でなんとかバランスが保たれていたんですが、前53年にクラススが死ぬとカエサル、ポンペイウスの対立がはっきりしてきました。二人は政略結婚で姻戚関係を結んでいたんですが、そんなのも吹っ飛ぶぐらいです。

また元老院は元老院でポンペイウスを利用して、カエサルを潰そうとします。

こういう状況の中で、カエサルは「賽（さい）は投げられた」といってガリアから軍隊率いてローマに進軍しました。ポンペイウスと決戦だ。結局ポンペイウスは敗れてエジプトに逃げる。しかし、ここでエジプト人に殺されてしまい。

カエサルの勝利です。

この時カエサルはポンペイウスを追ってエジプトにやってくるのですが、ここで出会ったのがあの有名なクレオパトラです。

クレオパトラはエジプトの女王として有名ですね。

この時の状況を少し話しておきます。ローマはすでに地中海を取り巻く世界をすべて領土に加えていました。しかし、エジプトだけはかろうじて独立していた。

だから、ポンペイウスは逃げて来たわけですよ。

しかし、ローマの強さは圧倒的ですからエジプトは何時ローマの属州にされてもおかしくない状態ではあります。

だから、ローマの事実上の第一人者であるカエサルがやってくるとエジプト政府は彼を歓待するわけです。機嫌を損ねちゃいけないからね。

で、問題のクレオパトラですが、王は王なんですがもう一人エジプト王がいたんですよ。

これがピトレイオス13世という。共同統治といって、この地域では結構あるパターンです。

トレマイオス13世はクレオパトラの弟なの。だから姉弟で王様やっている。

これだけならいいんですが、さらにややこしいのは二人は夫婦でもあるのです。

近親結婚だね。イクナートンみたいに自分の娘と結婚する王もいたくらいたからエジプトでは不思議ではない。クレオパトラ達トレマイオス朝の王家はギリシア人だけど長くエジプトで生活するうちにエジプトの風俗に染まったんだろうかね。

さらにややこしいのが何かというと、この姉弟は仲が悪い。

権力闘争があって、弟王とその一派が実権を握っていて、クレオパトラは干（ほ）されていたんです。でも、彼女も権力欲しい。

そんなときにエジプトにやって来たのがカエサルですね。

彼女は考えた。カエサルに会って自分の後ろ盾することが出来たら、弟を追い落としてエジプトの真の女王になれる。

ところが、彼女には弟王の監視についてなかなかカエサルには近づけない。

そこで考えたのが絨毯作戦。

彼女は自分を絨毯でぐるぐる巻きにさせる。そして、エジプトの富豪からの贈り物だといって、その絨毯をカエサルの宿舎に届けさせたんです。

カエサル、「立派な絨毯だ」とか言いながら広げると、中からポンとクレオパトラが飛び出てくる。びっくり箱ならぬびっくり絨毯だ。

恋愛というものは出会いの瞬間が大事。こんな劇的な出会いはない。カエサルはこの一撃でもうメロメロになったという。

この話、ちょっと信じがたいけどね、広く知られた話です。資料集にも丁寧にこのシーンの絵がのっているでしょ（ジェローム画）。ちなみにクレオパトラは21歳。カエサルはというと52歳。ウーン、というところだね。

クレオパトラは伝説のような絶世の美女ではなかったようですが、教養あふれる知的な女性だった。特に声が魅力的だったんだって。どんなんだったんだろう。

何よりも、こういう大胆な行動力は魅力的だと私は思います。

ともかく、クレオパトラはカエサルに会うことが出来て、計画通りに彼を自分の魅力の虜にしました。

カエサルはついにはエジプトの宮廷闘争に介入してクレオパトラを名実ともにエジプト女王にし、さらにエジプトの独立を保証したのです。

ローマに還ったカエサルはポンペイウスの残存勢力をやっつけて前46年には終身独裁官になった。事実上の独裁者といってよい。あらゆる栄誉と権限を一身に集めたのです。実力者だから誰も文句を言えないのですが、カエサルの振る舞いを見ていてかなりの人たちが疑いを持ち始めたんです。

「カエサルは王になろうとしているのではないか」とね。

独裁者ならまだ前例はあった。スラとかね。だからまだ我慢できる。

しかし、王は別です。ローマ人には共和政に対する誇りがある、王政に対してはものすごいアレルギーがあった。

元老院主導の貴族政治が否定されることですからね。貴族達はカエサルに警戒心以上の敵意を持ち始める。ブルートゥスをリーダーとする共和主義貴族のグループが最も急進的でした。

かれらによってカエサルは暗殺されてしまうのです。

前44年3月15日、カエサルが元老院の議場にやってくると、待ちかまえていたブルートゥス達がカエサルに襲いかかり短剣で彼を刺す。カエサルは必死に抵抗するのですが自分を襲う貴族の中にブルートゥスの姿を見つけ「ブルートゥスお前もか！」と叫んだというのは有名なお話。

ブルートゥスは名門貴族出身なんですが、結構カエサルに可愛がられていて彼の保護のもとに重要な役職についていたりする。そのブルートゥスまでもが俺を殺すのか！という意味ですね。

これは裏話があって、ブルートゥスはカエサルよりも25歳年下です。で、カエサルは若い頃にブルートゥスの母ちゃんと付き合っていたの。カエサルはもてますからね、若い頃から女性関係は激しい。その後二人は別れて彼女はブルートゥスの親父と結婚するわけですが、ブルートゥスの誕生日を聞いてカエサルはひょっとしたら、って思っていたらしい。俺の子かも、と思っているから引き立てやったんじゃないとも言われています。

ブルートゥスからすれば、たとえそうであっても共和制を守るために殺さなければならぬと考えたんですね。王政に対する反発の強さが分かるね。もっともこの話はどこまで信頼カエサルのデスマスク（上の像より実物に近い？）

さあ、カエサルは暗殺されました。

このあとはまた次回。

クレオパトラですが、カエサルの子供を産んでいるのです。男の子でカエサリオンという。母子は暗殺の日、カエサルに招かれてローマに来ているんです。カエサルの死を知ってクレオパトラはカエサリオンを引き連れ急いでアレクサンドリアに帰っていきました。

カエサリオンは独立王国エジプトの王子でありまだ子供です。カエサルの遺産相続人にはなりませんでした。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

ギリシアとローマ世界の歴史	新進気鋭の研究者による概説書。従来なかったような、データや新しい視点が新鮮。授業のネタにしたくなる話題も豊富。
世界の歴史 2 ギリシアとローマ 中公文庫 H 3-2	こちらの中公文庫版は、古いシリーズ。しかし、読み物としては、一番読みやすくて基本的。入門としては、最適と思う。品切れ（絶版？）間近。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第13回 ローマの発展](#)

[次のページへ](#)
[第15回 帝政の開始（ローマ
つづき）](#)

□□□□□□□□□□

第15回 帝政の成立（ローマつづき）

1 帝政の開始

カエサルを暗殺したブルートゥスとその仲間達は当然ローマ政界の主導権を握ろうとしました。カエサルの独裁を面白く思ってなかつた元老院の貴族達はそれでよいのですが、問題はカエサルの兵士達だったんです。

アントニウスという男がいます。彼はカエサルの右腕、有能な将軍でした。この男、兵士達に人望がかなりあった。彼が平民達の前でブルートゥスに対する弾劾演説というのをやって、平民達は反ブルートゥスになつたといわれています。

現実問題として、金の問題があつたと思われるんです。

カエサルにはガリア遠征以来多くの兵士がいた。さらにポンペイウスを破つたあと彼の兵士のかなりの数をそのまま自分の軍隊に受け入れたらしい。

正確ではないけど万単位の兵士を持っていたと思います。

前回にも話しましたが、この兵士はローマ兵でありながら実際にはカエサルの私兵ですね。

要は、誰が彼らに給料を払うのか、ということです。兵士にとってはこうです、「ブルートゥスさん、カエサル将軍を殺したのはいいけど、あんた、わしらに給料を払ってくれるんだろうな。」

ブルートゥスはカエサルみたいな富豪じゃないから払えない。

給料を払ってくれない、そんな人物を兵士は支持しない、兵士はイコール平民です。彼らの支持を得ることが出来なくてブルートゥス一派はローマから逃亡しました。

誰が兵士の給料を払つて彼らの支持を得たかというと、オクタヴィアヌスでした。正式な子供がいなかつたカエサルは、いまわの際に養子を指名して財産を相続させたんですが、それがオクタヴィアヌスです。カエサルの姪の息子というからほとんど他人みたいなもんですな。でも一族の中では優秀でカエサルは可愛がつていたようです。

オクタヴィアヌスはこの時19歳ですから政治的にも軍事的にも実績なんかないんですが、カエサルの財産がある。これで給料を払う。兵士はただそれだけで彼を支持することになったわけだ。こんなふうにしてあつという間にオクタヴィアヌスはローマ政界の実力者になったのです。

前43年からはオクタヴィアヌスとアントニウス、レピドゥスの三人が第二回三頭政治をはじめました。レピドゥスもアントニウスと同じくカエサルの武将だった男。ただ、政治的な力量であとの二人より大分劣りのうちに失脚しました。オクタヴィアヌスとアントニウスの関係が焦点になってきます。東方に逃げていたブルートゥス達を倒したあと、ローマ領の東をアントニウス、西をオクタヴィアヌスとい

う分担が出来ます。

東方におもむいたアントニウスが出会ったのがクレオパトラ。アントニウスは40歳、クレオパトラは28歳。

クレオパトラは贅のかぎりを尽くしてアントニウスを歓待し、彼の心を虜にした。カエサルに代わるローマの実力者をパトロンにしたわけ。

クレオパトラにとってこの行動は政治的打算から始まったのでしょうか、実際にこの二人はかなり強い精神的な結びつきもできたみたいですね。

正式に二人は結婚し、クレオパトラは彼の子を三人産んでいる。アントニウスはローマ領をクレオパトラに譲ったりしています。アントニウスは独断でこんな事をするのでローマ政界での評判はどんどん悪くなる。

オクタヴィアヌスは政略結婚で自分の姉をアントニウスの妻にさせるんですけどね、アントニウスはクレオパトラと出会ったあと。形だけの結婚で姉さんには見向きもしない。

当然の成り行きとして、オクタヴィアヌスとアントニウスは決裂。

前31年、アクティウムの海戦でアントニウス・クレオパトラ連合軍はオクタヴィアヌスに敗れて二人は自殺した。伝説ではクレオパトラは毒蛇に乳房を咬ませて自殺したとか。

これでエジプトはローマの属州となり、オクタヴィアヌスはローマ唯一の実力者として政権を掌握した。

前27年、オクタヴィアヌスは事実上の帝政を開始しました。

「事実上」というのは名目上は帝政ではない、ということだね。

オクタヴィアヌスは「事実上」皇帝になったわけ。

しかし、考えてみて下さい。

このわずか20年前、彼の養父カエサルは王になろうとして殺された。

なぜ、オクタヴィアヌスはすんなり皇帝になれたのか。

カエサル死後の混乱から元老院貴族達も学んだんだと思うよ。

巨大な領土を持つこのローマを平和に維持するためには今までみたいな元老院を中心とするアウグストゥス像合議制では限界にきていることを。カエサルが試みた道しかないということをね。

一方、オクタヴィアヌスもカエサルの二の舞にならないよう馬鹿丁寧に元老院を尊重し共和政を守るポーズをとり続ける。

彼しか政権を担当できる者がいないのに、ということは彼しか兵士に給料を払えないということなんですが、何度も政権を元老院に返上する儀式を繰り返したりしてね。

そのたびに元老院は、あなたにお願いします、あなたしかいませんってオクタヴィアヌスに頼むわけだ。

元老院は彼にアウグストゥスという称号を捧げた。これは「尊厳なる者」という意味。

これに対してオクタヴィアヌスは謙遜して、いえいえ私はただのプリンケプスです、と言う。これは「第一の市民」という意味です。序列一位のローマ市民にすぎませんということ。

だから、事実上の帝政というわけ。

オクタヴィアヌスが死んだときの正式の肩書きです。

「最高司令官・カエサル・神の子・アウグストゥス・大神祇官長(ポンティフェクス・マクシムス)・統領13回・最高司令官の歓呼20回・護民官職権行使37年目・国父(パテル・パトリアエ)」

皇帝という言葉がない。そもそも、皇帝というものがそれまでなかったんだから言葉 자체が存在しないのですよ。

この後、カエサルという言葉が皇帝という意味で使われるようになりました。

ドイツ語のカイザー、ロシア語のツァーリ、両方皇帝という意味ですが語源はカエサルです。

初代皇帝としてオクタヴィアヌスは大過なくローマを治め70を越えて大往生。

ただ、子供には恵まれなかった。女の子は産まれたんですが、男子はいなかった。

系図を見て下さい。かなり複雑。

ローマ人は一夫一婦制なんですが、みんなたくさん妻や夫がいるでしょ。

彼らは盛んに結婚離婚を繰り返すのね。性的にはかなり乱れているんですよ。結婚していても夫婦関係以外の性的関係を男も女も当たり前のように持っている。

セネカという哲学者がいますが、彼は言っている。「妻の浮気相手が二人だったらその妻は貞淑だ、夫は幸せ者だ」とね。

その割にはというか、その為なのか分かりませんが、当時の貴族の家では子供が少ないです。名門貴族の家系で跡継ぎがなくて途絶えるのが結構あるのです。

オクタヴィアヌスの三度目のそして最後の妻がリヴィア。リヴィアには夫がいてしかもお腹も大きいというのにオクタヴィアヌスはみそめてしまった。そして夫と別れさせて結婚したんです。しかし、結局彼女はオクタヴィアヌスの子供を産むことはなかった。

オクタヴィアヌスはそのリヴィアの連れ子を養子にして、その子が二代目の皇帝になった。

ティベリウスといいます。即位したときはもう50代。どちらかというと日影の人生を送った。陰気な人という評判です。別荘に引きこもって政治は側近に任せきり。

彼も息子がいなくて死後跡を継いだのが、彼の甥の息子とオクタヴィアヌスの孫娘の間に生まれたカリグラ。

この人は精神的にどうもおかしかったといわれる。

私の大学時代、アメリカの男性雑誌ペントハウスの社長が「カリグラ」という映画を作った。カリグラの人生を忠実に描いたらしい。出来上がった作品は18禁。私は見に行かなかったんですが、いった友人によると全編ぼかしだらけで何がなんだか分からなかつたらしい。

まあ、そんな皇帝です。

ちょっとだけいうと、自分の妹たちと肉体関係結びさらに売春もさせる。馬をコンスル（執政官）にしようともしました。

ある時、有名な騎士階級の者の息子がきれいな髪をしているという理由で死刑にした。そして、その日にその父親を宴会に招待して何回も乾杯させるのね。父親は宴会が終わるまで悲しいそぶりや怒りの感情を見せ

すぐにカリグラに付き合った。なぜかというと、彼にはもう一人息子がいたというんだ。ちょっとでもカリグラに批判的な素振りを見せたらもう一人の息子が処刑されるかもしれないと考えたんだ。
良家の子女を集めて売春宿を作って、市民に買わせる。滅茶苦茶ですわ。
自分の娘を売春婦にさせられた貴族達の怒りはいかばかりか。

カリグラ帝は、正真正銘のサディストだったんだろうね。自分の目の前の誰かに屈辱を与えることが楽しくて楽しくてしょうがなかったんだと思います。

彼を精神異常だと書いてある本がほとんどなんですが、ローマ帝国皇帝なんて、とんでもない権力なわけです。それををたかだか25歳の平凡な若者が手に入れてしまったらどうなるか。その実例がカリグラです。権力の大きさに自分自身が押しつぶされてたんじゃないかな。弱い者いじめでしか自分の力を確かめることができなかつた心の小さな男だったんだろう。

自分の周りのあらゆる人に滅茶苦茶するものですから最後には親衛隊に殺されてしまった。

カリグラ

即位わずか4年。

カリグラは自分の地位が狙われるのを恐れて一族の男はほとんど殺していた。

残っていたのは叔父クラウディウスのみ。

なぜクラウディウスが殺されなかつたかというとちょっと頭が弱かった。カリグラはこんな馬鹿に帝位をねらえるはずがないと思って、殺さずにいじめて楽しんでいた。

ところが、クラウディウス、即位すると急に頭が良くなる。実に理路整然と話をしてみんなを驚かせた。実はカリグラに殺されないように馬鹿のふりをしていたというんだ。

でも、こういう面白い話は大抵ウソですから真に受けないようにね。

クラウディウスは女運が悪かった。4人の女性と結婚しましたが公然と浮気をする妻がいたり、最後の妻には毒殺されてしまう。

この最後の妻がオクタヴィアヌスの曾孫でカリグラの妹の一人。

彼女も離婚経験があって連れ子がいた。この連れ子を早く帝位につけるためにクラウディウスを殺してしまうのね。

連れ子がネ口です。

暴君で有名ですが、多分普通の男の子だったと思うよ。即位したのが17歳。みんなと同じ年齢だ。若いときはセネカという有名な哲学者や優秀な親衛隊長が補佐して評判よかつたんですが、大きくなるにつれてわがままになつた。

まずは口うるさい母親を殺してしまう。

離婚した妻に世間の同情が集まるところも殺してしまう。

補佐してくれたセネカ達も追い払われてわがまましほうだいになった、というけれど、カリグラに比べれば可愛いもんです。

盛んに詩を作つてコンクールに出たり、競馬やオリンピックに出場したりする。

他の出場者は皇帝に勝つわけにはいかないから、ネロは必ず優勝するのです。で、自分のことを天才だと思いつこんでしまう、他愛ない人です。

これも最後は地方の総督が反乱を起こし親衛隊に見捨てられて自殺するのですが、最後の言葉。「おお、私の死によって、何と惜しい芸術家がこの世から消えてしまう事よ。」

皇帝という地位を離れても、自分自身に価値があることを信じたかったんでしょう。ネロという人は必死であがいていたようです。

2 五賢帝時代

ネロの死でオクタヴィアヌス、ティベリウスの血統、これをユリウス＝クラウディウス家というんですが、は途絶えます。

このあと短い内乱のあとフラヴィウス朝が成立しますが、これも最後の皇帝が暗殺されて断絶します。その後始まるのが五賢帝時代（96～180）です。

フラヴィウス朝が途絶えたあと帝位を継ぐ者がいない。

そこで、元老院で話し合い、自分たちの中から皇帝を選ぶことにしたんです。

一番温厚で良識ある人物が皇帝に選ばれた。

これがネルヴァ（位96～98）です。即位したとき66歳ですからもうお爺さんだね。枯れてるわけ。カリグラみたいになるおそれは絶対ない。

ネルヴァは財政難と政治的混乱を收拾して黄金時代の基礎を作った。

ネルヴァは子供がいなかったんです。そこで養子を迎えて帝位を譲ることにした。

元老院議員の中から優秀で人望があつて良識的で軍隊からも支持される人物を養子にした。これがトラヤヌス（位98～117）です。

彼の時代にローマ帝国は領土が最大になった。トラヤヌスの凱旋門というのが現在も残っています。写真あるね。ローマでは将軍や皇帝が戦争で大勝利を収めて帰ってくるときに凱旋式という盛大な儀式をする。その時に帰還した指揮官がくぐるのがこの凱旋門。

パリの凱旋門はナポレオン時代にこれを真似たのです。

トラヤヌスも子供がいなかった。そこでまた元老院議員から養子です。

これがハドリアヌス（位117～138）。

優秀な人物を養子にしているんだからこれも立派な皇帝になる。

ハドリアヌスも子供がいない。また養子です。

アントニヌス＝ピウス（位138～161）がそれ。

で、もう想像つきますね。アントニヌス＝ピウスも子供がいない。また養子です。

5人目がマルクス＝アウレリウス＝アントニヌス（位161～180）。

この人は皇帝としても優秀だったけど、さらに哲学者として有名。哲人皇帝と呼ばれています。「自省録」という本を書いています。彼は辺境地帯の戦場で生活しながら夜は自分の天幕でロウソクの明かりで哲学書を書いたんですよ。

日本でも出版されている。学校の図書室にもあるし、私も持っています。2000年前のローマの皇帝の書いた哲学書ですよ。

例えば日本の総理大臣の小渕さんが哲学書を書いてそれを今から2000年後の西暦4000年のイタリアの人が読むと思いますか。小渕さんがダメだというわけではなくて、それくらいマルクス＝アウレリウス＝アントニヌスはすごいじゃないか、ということです。

彼は立派な人物でしたが一つだけ欠点があった。本当は欠点ではないんですが。何かというと、彼には子供がいたの。ここまで優秀な皇帝が続いたのは養子でそういう人物にあとを継がせたからですよね。しかし、実子がいればその子を跡継ぎにしたいと思うのは哲人皇帝でも同じ。というわけで五人続いた優秀な皇帝は途絶え五賢帝時代は終わります。

五賢帝時代はローマ帝国の最盛期とされています。パックス＝ロマーナ、「ローマの平和」と言われる時代です。

ちょっと話はそれますが、五人の皇帝中最後のマルクス＝アウレリウス＝アントニヌス以外はみんな子供がなかったというはどう考えたらいいのか。

もう、これは偶然とは呼べない。全般的に出生率が低下している。当時のローマ貴族は性的関係は滅茶苦茶だといいましたがそれと関係があるようなんですね。次回の話に関係してきますから、ちょっと頭の隅に入れておいてください。

五賢帝以後の皇帝についてはごちゃごちゃしているので省略。

一人だけ覚えておくのがカラカラ帝（位188～217）。カラカラ帝は212年、ローマ領内のすべての自由民にローマ市民権を与えました。相続税を支払うのはローマ市民だけだったので、ローマ市民を増やすことで増収を狙ったとされています。

理由はともかく、これでローマ人と属州との区別はなくなってしまった。名目的だけでも残っていた都市国家的な形式が消えて、ローマは普通の領域国家になった。それに応じて支配形式も変わっていくのですがそれはまた別の話。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

ローマの歴史 中公文庫	モンタネッリ著。コンパクトでありながら読み物として面白い。授業で使えるエピソードもたくさん。授業で使えないエピソードもたくさん。ローマの皇帝達は変態が多い？
古代ローマ帝 国—その支配の 実像 岩波新書	吉村忠典著。 コンスルが同時に2名いたり、別個に強大な権力を持つ護民官が存在したり、我々日本人とは権力や支配の概念が違うのではないかと感じていたが、この本で胸のつかえがとれた。とくに、「命令権」という考え方には目から鱗ものでした。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第14回 内乱の一世纪（ローマつづき）](#)

[次のページへ](#)

[第16回 ローマの文化](#)

□□□□□□□□□□

第16回 ローマの文化

ローマ市民の都市生活

ローマ人がどんな生活をしていたか見ておきましょう。

彼らの生活はユニーク。

時代はカエサルから五賢帝時代、だいたい紀元前50年くらいから200年くらいまでと考えておいてもらったりいいです。

ローマ市は「パンとサーカスの都」と言われる。

広大な属州から搾り取った富がローマ市にはどんどん流れ込んでくる。その富がローマ市民にはらまかれた。ローマ市民であれば何も財産がなくても食べるに困らず、娯楽も只で提供された。それを言いあらわしたのが「パンとサーカスの都」です。

まず、パン。

穀物の無料配給というのが行われていて、家族が何人もいたら足りないけれど、自分一人なら充分に食べていいけるだけの食料が配されました。それ以外にも臨時で皇帝や有力貴族が配るからね。

ネロ帝は暴君として有名だけど、民衆の人気は高かったんだ。彼は裕福な市民を死刑にして財産没収して兵士や民衆にサービスをしまくるんだね。

カリグラ帝は本当に金貨をばらまいたりもした。広い意味で民衆、狭い意味で兵士に支持されることが皇帝権力の源だったことが分かります。

サーカスも分かるでしょう。

剣奴の試合が頻繁に行われていた。あと競馬。戦車競争です。演劇も盛んだったようだ。

こういう娯楽がしょっちゅう行われていて、費用は皇帝や有力者持ち。

皇帝達は人気取りのために国家の祭りや記念日をどんどん増やしていくんです。そういう祝日祭日にはいろいろな催し物を開催する。

要するに市民は只で遊んで暮らせたわけだ。

有名なコロセウムです。5万人収容というからすごい。当時は天幕を張って屋根もついていた。中に水を張って模擬海戦の見せ物もやったんだって。そんなこと思いつくことが驚異。東京ドームに水を入れてボート競技しようなんて思いつきますか。

市民サービスとして有名なのが公衆浴場です。

カラカラ帝の造ったものが規模の大きさで有名ですが、それ以外にもローマ市内には千軒以上の公衆浴場があった。

これ、浴場と訳しているけれど、日本の銭湯を思い浮かべたらダメですよ。

日本語に翻訳するときにあてはまるものがなかったから公衆浴場なんて訳されて教科書や資料集もそう書いてあるけど、実は違う。

ようやく日本にもこれが普及してきました。フィットネス・クラブとかスポーツ・クラブとか呼ばれている、あれです。うちの近所にエグザスというのがありますが、まさしくあれ。

入場料は非常に安かった。本には10円と書いてあるんですが、只くらい安かったと思っておこう。で、入場するとまずトレーニング・ルームがある。そこでレスリングしたり、球技したり、円盤投げ、やり投げの練習で一汗流します。

次はマッサージ・ルーム。ここで身体をほぐしてもらって、いよいよ入浴。

これはサウナです。低温サウナで慣らしてから高温サウナ。二つのサウナがあったようです。

身体をきれいにして暖まったところで、最後はプールでひと泳ぎ。

まさしく、フィットネス・クラブでしょ。

さらにここで終わりじゃないんですよ。

このあと遊戯室や談話室に入る。友達とお喋りしたり、将棋なんかのゲームをしたりして遊ぶ。

やがて腹が減りますわな。

そしたら食堂へ行く。

景気の悪いときでも最低6皿の料理がでた。そのうち2皿は肉料理だって。当然ワインもでるでしょうね。これ別料金ではないですよ。はじめの10円の入場料で最後まで遊んで食べられる。

今の日本よりよっぽど満足いくサービスですね。

これがローマの公衆浴場です。

一般市民でこれだから、裕福な市民や貴族はどうだったか。

この風呂やプールを自宅に持っている人々ですからね。

彼らの贅沢を言い出したらキリがないので、食事風景だけ話しましょう。

貴族達はしばしば宴会を開く。

こういうときに主催者は金に糸目を付けず珍味をどこからでも手に入れてきて風変わりな調理を施して、これでもかこれでもか、と食事を出したらしい。

宴会に出る者達は食事服というのを着ます。これは食事の時だけ着る使い捨ての服です。

資料集の食事風景のイラスト見て下さい。

寝そべっているでしょ。これが正式な食事のマナー。

彼らは箸もフォークもスプーンも使いません。食事は手づかみ。

寝そべって手づかみでだらだら食べる。手はすぐにぐちゃぐちゃに汚れるね。その手を食事服で拭うわけです。だから、汚してもよい服が食事服。

なんですが、彼ら金持ちはこの食事服に金をかけて、贅をこらしたりするのですよ。その高価な食事服を惜しげもなく汚して、ポイポイって捨てるの。一回の宴会で何回も着替えたりする者もいる。

彼らを見ていると散財する事に情熱をかけているようです。それがステータス・シンボル（地位の象徴）だったんだろうね。

アピキウスという大金持ちの話があります。この人食道楽でさんざん浪費したあと、あと10億円財産が残っていたのに、貧乏では生きている意味がないと言って自殺した。

で、宴会は続きます。どんどん食事はでます。出席者、満腹でもう食べられません。そうすると侍（はべ）っている奴隸を呼ぶ。宴会場にはたくさんの奴隸がいるんですが、孔雀の羽を持っている奴隸がいる。その奴隸がその貴族に近づく。貴族は上を向いてアーって口を開ける。奴隸がその口の中に羽を突っ込んでグリグリするんです。満腹の喉に異物を突っ込まれますからね、ゲーッて吐くんです。

お腹の中のものをすっかり吐き出して、貴族はまた新たな皿に挑むのです。

吐いた汚物はというと、別の奴隸がきれいに処理してくれる。

彼ら吐くために食っているのです。

これは明らかに異常な光景だよね。

こういう暮らしぶりを退廃と呼ぶのだと思います。

退廃ということでは性的な面では滅茶苦茶だったようで、貴族の夫婦関係なんていうのは名目だけみたいですね。

浮気みたいな事は当たり前だったんですが、前回も話したように出生率がどんどん低下するんです。元老院の名門貴族の家がどんどん断絶する。イタリア半島以外からも名門の家の者を元老院議員に任命して、欠員を埋めたりしているんですよ。

出生率低下の原因はいろいろな説があってはっきりしませんが、多分子供を産むのが邪魔くさかったんじゃないかな、と思う。貴族は自分で子供を育てるわけではないですがそれでも面倒なもんだ。しかも夫からすれば生まれた子が誰の子か分からぬわけで、それに財産を譲るのもあほらしい。そんなことに煩わされるよりも今日の楽しみを思い切り楽しみたい。金持ち達の気持ちはそんなところではないでしょうか。

それにしても、奴隸がたくさんいる社会自体が退廃といえるかもしれない。

金持ちはたくさん奴隸を使っていた。町に出る時は最低二人はお付きの奴隸を連れていくのが中堅市民の条件。

前70年頃のローマ市人口がだいたい50万。そのうち四分の三が奴隸もしくは解放奴隸だったというから、奴隸はほんとに多い。

大金持ちになるとわけのわからん奴隸をたくさん使っている。

主人の靴を脱がす奴隸とかね。ある金持ちは自分の靴を脱がす奴隸を二人持つ。外から帰ってくるとデンとひっくり返って奴隸に靴を脱がしてもらうんですが、同時に脱がすために右足専門靴脱がせ奴隸と左足専門靴脱がせ奴隸と二人要るんだって。

こういう奴隸はあまり能力いらない大した仕事も任せられませんが、有能な奴隸は子供の家庭教師にしたり、家計を取り仕切らせたりもしたんです。

奴隸の悲惨な状態についてはスバルタクスのところでも話したね。（第14回）

ところで奴隸の供給源ですが、戦争捕虜や新しい征服地の住民などが奴隸としてローマに連れてこられたという話を前にしました。

ところが、前回も話したように五賢帝の二番目、トラヤヌス帝の時がローマ帝国の領土が最大でしたね。ということはそれ以後ローマ帝国は成長期が終わって守りの時期に入るわけ。新しい征服地がなくなる、戦争捕虜も激減するということだ。

では、それ以後は奴隸の数が激減するかというとそんなことはなさそうなんですよ。トラヤヌス帝以後の奴隸はどこからきたのか。

最近こんな説が唱えられています。奴隸＝捨て子説。

ローマ人達は子供が産まれると育てるのが嫌だからどんどん捨て子にしていた、というんだ。

いわれてみればそうかもしれない。出生率が低下といいましたが、今みたいに避妊法が発達しているわけではない。男と女がいれば平民だって貴族だって妊娠するはずだ。中絶に失敗すれば出産する。捨てていたから見せかけの出生率が減少したと考えれば納得がいくね。

捨て子の名所があつたらしい。「乳の出る円柱」という所。いらない赤ちゃんはみんなここに捨てる。そして捨て子を集めてまわる業者がいた。嫌な話だけど、この業者が捨て子を奴隸として育てて売るんだ。これが奴隸の供給源として大きなものだったらしいです。

ホラティウスという詩人がこんな事を言っている。「粘土が柔らかければ、お気に入りのどんな形にでも作ることができる。」

だから理論的には、赤ん坊を捨てた貴族が、何年かして自分の実の子だと知らずに奴隸を買って働かせる、ということもあり得るわけです。何とも言えない気分です。

金持ち連中も奴隸を使うことに対して多少は良心がとがめたのかもしれない、自分が死ぬときに遺言で、奴隸達を解放してやることが多かったんです。

こういう人を解放奴隸というんですが、彼らは自由ではあるがローマ市民権はありません。ところが、例えば解放奴隸同士が結婚して子供が産まれたら、この子は生まれながらにしてローマ市民なんです。だから、公衆浴場も入れるしパンも配給される。

もし、商売で成功でもしたらお金を積んで騎士身分という貴族になることだってできる。
奴隸を買って働かせることだってできるんです。

身分制の社会でありながら、その身分が絶対的でないところがローマの活力の源でもあるといわれています。

それにしても、この国はやはり変だね。

2 ローマ法

一面では退廃的でやりきれないローマ文化ですが、これが何百年も繁栄し続けたのはやはり統治技術のうまさ、柔軟さが挙げられると思います。

そしてローマ人は公正を求めて常に法を尊重する文化を維持し続けた。ここはローマ人の偉大なところですね

それを象徴するのがローマ法。

ちょっとのちの皇帝ですが6世紀のユスティニアヌス帝は重要。トリボニアヌスに命じて「ローマ法大全」を編纂させた。これはローマの法と法学説を集大成したものです。試験によく出るよ。

3 土木・建築

これもローマ人の得意分野。法律とか建築とか、実用的なものでローマ人は能力を発揮する。

建築ではアーチが特徴。何気なく見ていますが考えはじめるとこれ、不思議でしょ。

なんで一番上の石は落ちてこないんですか。鉄筋が入っているわけではないからね。

これ、石の切り方に微妙に傾斜がつけてある。下に落ちようとする重力を横の石に逃がしているわけです。

これで石積みの大きな建物を建設できるようになった。

単独アーチの建造物が凱旋門。

コロセウムもじっくり見てみるとアーチを集めて造られているのが分かるでしょ。

でっかいのが、水道橋。フランスにあるガール橋が有名。高さが50メートルある。

ローマ人は重要な場所にどんどん都市を建設します。そこに水がなくてもお構いなし。

なければどこかの遠くの山の上から水を引いてくる。その為に造られたのが水道橋で

す。

その他の建築物としてはアッピア街道という軍用道路が有名。今も一部が残っています。アケメネス朝ペルシアにあった「王の道」のローマ版だ。

4 学問・芸術

ローマの学問芸術はほとんどギリシア、ヘレニズム文化の真似。独創性はないといわれています。

哲学ではストア派が流行った。

セネカが有名。この人はネロ帝の先生で、ネロ少年を補佐していた。

それからマルクス=アウレリウス=アントニヌス帝。前回も話しました。著書「自省録」。

教科書では出てきませんがエピクテトス、という人も結構有名。

この人は奴隸出身。のちに解放されて有名な哲学者になるのです。

エピクテトスは足が悪く杖なしでは歩けなかった。残された絵を見ても杖を持って描かれています。はっきりとは分からぬのですが、奴隸時代に主人に足を折られたらしい。
哲学者になるくらいだから彼は若い頃から高い精神的な世界を持っていたんだろう。態度や目つきが奴隸らしくなかったのかもしれない。

「奴隸なら奴隸らしく卑屈な顔をしないか。」主人はそんなエピクテトスが憎らしくて、彼の足を痛めつけたんだろう。

それに対してエピクテトスは「そんなことをしたら足が折れてしましますよ。」と涼しく言つたらしい。

主人は更にカッとしてそのまま足を折ってしまった。

そうしたら「ほら、だから言ったじゃないですか」と、主人を諭したというんです。

エピクテトスの詩が伝わっています。

奴隸エピクテトスとしてわれは生まれ、身は跛、
貧しさはイロスのごとくなるも、神々の友なりき
(イロスは「イーリアス」に登場する乞食)

実は私、このエピクテトスが好きでね、プリントにも彼の文を載せました。ちょっと見て下さい。「語録」という作品です。

「自分のものでない長所は、何も自慢せぬがいい。もし馬が自慢して「私は美しい」といったとするならば、それは我慢できるだろう。だが、きみが自慢して「私は美しい馬を持っている」というならば、きみは馬の優良なことを自慢しているんだと知るがいい。ところで、きみのものはなになのか。心像の使い方だ。したがって、きみの心像の使い方が自然にかなっているとき、その時こそ自慢するがいい。というのは、そのときは、なにかきみの優良なものを自慢しているのだから。」

例えば、貴族がいて、高価な馬を買って自慢しているんだな。

エピクテトスはいう。お前は馬か。馬が自分を自慢するなら分かるが、なぜお前が馬を自慢するのか、と。分かるよね。MD買ったとか、最新のPHS持っているとか、ブランドのカバン持ってる、とかいって自慢する人いませんか。

あなたの心には自慢するものがないのですか、ということを言っているのがエピクテトス。

「奴隸だったからこういう考えをしたんだ」といつてしまえばそれまでですが、われわれの生活態度や精神を振り返らせる力を持った内容だと思うよ。

もう一つ。

「記憶しておくがいい、きみを侮辱するものは、きみを罵ったり、なぐったりする者ではなく、これらの人から侮辱されていると思うその思惑なのだ。それでだれかがきみを怒らすならば、きみの考え方がきみを怒ら

せたのだと知るがいい。だから第一に、心像に奪い去られぬようにしたまえ。なぜなら、もしきみがひとたび考える時間と猶予とを得るならば、容易にきみ自身に打ち勝つだろうから。」

これも面白い考え方です。

だれかがきみを殴った。あなたは殴った人に対して怒りや憎しみの気持ちを抱くよね。

でもそれは、間違いだと、エピクテトスは言う。

彼はあなたを殴っただけ。怒りや憎しみをあなたの心に植え付けたのは、あなた自身の心だ、怒りは彼の中にあるのではなくて、あなたの心中にあるのでしょ。

あなたを怒らせているのはあなた自身の怒りの心。ほらほら、それに振り回されてはいけませんよ。自分の心です、コントロールしなさい。

エピクテトスの言いたいことはこういうことだと思います。

最終的にはこういう発想で心の平安をたもとうというんです。ストア派ですからね。

自分の足を折られても平然としていたエピクテトスらしいです。

でも、奴隸だから、と片づけてしまうと間違えると思う。

マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝、ローマ帝国のトップのこの人が奴隸のエピクテトスと同じストア派だということをどう考えたらいいんでしょうか。

私の持っているこの本、中央公論社の「世界の名著13」なんですが、エピクテトスとマルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝が一緒に収められているんだよ。象徴的でしょ。

「自省録」を読むとアウレリウス帝もやはり、精神の平安を一所懸命求めているんですよ。

ローマの貴族達は贅沢三昧で吐いては食べ、産んでは捨て、と滅茶苦茶ですが、そんな生活をしながらも心の奥底ではヒュ～っとすきま風が吹いていたんではないか。贅沢で精神の平安は得られない。皇帝がストア派学者であるということは、まさしく彼らの心を象徴している気がしてなりません。

奴隸も皇帝も心が求めているところは案外近いところにある。

単純に「心の平安」といっておきましょう。

ちょっと先走りしていると、これを哲学ではなく宗教という形でローマ人に与えたのがキリスト教だったのではないか。だから、あっという間にキリスト教がローマ帝国に広まったと私は考えています。

哲学の最後にセネカについて一言だけ。

セネカは剣奴の競技に反対してました。人道的な立場ではなくて、競技を観戦することが心の平安を乱すからという理由なんですがね。

ベスビオ火山の噴火で埋まったポンペイという町があります。当時の人々の生活をまるまる残したまま発掘されて、面白い遺跡です。そのポンペイの剣奴の宿舎の壁に落書きが発見された。そこには「ルキウス・アンナエウス・セネカ」。セネカのフルネームが書かれていた。

歴史・文学については名前と作品列挙。とにかく覚えるだけ。

あのカエサルがガリア遠征を記録した「ガリア戦記」。ラテン語の名文らしい。

ポリュビオス（前2世紀）の「歴史」。この人はギリシア人だけど人質としてローマに連れてこられてカルタゴ陥落の現場に居合わせた。政体循環論という歴史理論を唱えた。

リヴィウス（後1世紀）「ローマ建国記」。

タキトゥス（2世紀）「ゲルマニア」「年代記」。前者はローマ人から見たらまだ未開人だったゲルマン人の貴重な記録。ゲルマン人は今のイギリス人やドイツ人、フランス人の直接の祖先。タキトゥスは堕落したローマ人と比較して質実なゲルマン人を持ち上げています。

文学。

ヴェルギリス（前1世紀）のローマ建国叙事詩「アエネイス」。

ホラティウス、オヴィディウス、はともに前1世紀の詩人です。

その他。

ストラボン（1世紀）「地理誌」

プレマイオス（2世紀）「天文学大全」。これは、天動説を唱えて有名。これ以来コペルニクスという天文学者が出てくるまで1300年間ヨーロッパの人は地球は動かない信じた。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

世界の名著 13 キケロ...	キケロ、エピクテトス、マルクス・アウレリウスの3人の作品がまとめて載っている。エピクテトスとマルクス・アウレリウスは、深く静かな湖のようだ。心がざわつく夜に、つい開いてしまう本である。彼らの思想が、わたしの心に訴える力を持つということは、古代ローマ文明が、現代日本の文明と非常に近いからではないかと思ったりもする。
ポンペイ・ グラフィ ティ...中公 新書	本村凌二著。火山に埋もれた古代イタリアの都市ポンペイ。発掘された街の落書きから、古代ローマ人の生活を読み解く。英雄でも何でもない庶民の暮らしが垣間見て、興味深い。
薄闇のロー マ世界一嬰 兒遺棄と奴 隸制	本村凌二著。ローマ帝国が領土拡大をしなくなつたあとも、多くの奴隸が存在した。奴隸の供給源は対外戦争の捕虜ではなかつたのか？歴史学のおもしろさが満喫できる話題作です。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第15回 帝政の開始（ローマ
つづき）](#)

[次のページへ](#)

[第17回 ローマ帝国の変質](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

第17回 ローマ帝国の変質

ディオクレティアヌス帝

パックス＝ロマーナ（ローマの平和）以降をざっと見ておきます。

235年～284年、この時代を軍人皇帝時代といいます。

軍人皇帝時代は、兵士が自分たちに都合のよい将軍を皇帝にしてしまう。そんな時代。

ローマ帝国は国境地帯に20ほどの軍団を配置しているのですが、各軍団の兵たちが自分たちの司令官を皇帝に押し立てる。都合が悪くなったら帝位から引きずり降ろす。

アウグストゥス（オクタヴィアヌス）の時代から皇帝は兵士、つまり市民の支持がなければその地位は安定しませんでした。だから、皇帝たちは常に兵士にサービスをしまくりました。

皇帝たちがご機嫌をとりすぎて、兵士が主人みたいになったのが軍人皇帝時代。

行き着くところまで行き着いた感じです。

50年間に即位した皇帝は26人だからね、平均在位年数は2年。

このうち天寿を全うしたのは二名です。他の皇帝たちは兵士に廃位されたり、対立皇帝に殺されている。

この軍人皇帝時代を終わらせたのがディオクレティアヌス帝（位284～305）です。

軍人皇帝時代になきなくなってしまった皇帝の権威と権力を強化しようとした。

その為にかれは、ローマ帝国の政治の仕方を大きく変えた。

かれがはじめた統治の仕方を専制君主制＝ドミナートゥスという。

どんなのかというとペルシア風の皇帝をめざしたと考えればいいです。

元老院を尊重するのをやめて、共和政的な形を捨て去った。

自分のことを「主にして神」と呼ばせたり、会議の時には顧問官たちを立たせたままで座るのを許さなかつた。

「帝国四分割統治」というのもはじめます。ローマ帝国を東西に分けてそれぞれに正帝副帝を置いて、自分は東の正帝になります。広大な領土を一人で支配するには限界が来はじめていたのでしょう。

皇帝が四人いるというのもなかなかわれわれの常識ではじめないね。どうもこの皇帝という訳語の感覚とローマ皇帝の実態とは少しづれがあるようです。

このディオクレティアヌス帝はキリスト教徒を迫害したことでも有名です。

かれは「主にして神」だからね、国民に自分に対する礼拝を強制するんだけれども、キリスト教徒はしないわけですよ、ディオクレティアヌスは彼らにとっては神ではないから。

皇帝としては、これは許されない。だから、弾圧しました。

コンスタンティヌス帝

ディオクレティアヌス帝が死んだあと、正帝副帝複数の皇帝がいるわけでちょっと混乱があります。勝ち

残ったのがコンスタンティヌス帝（位306～337）。コンスタンティヌスで覚えておかなければならぬことは3つです。

1, 都をビザンティウムに遷して、ここをコンスタンティノープルと名付けた。
ビザンティウムは今のイスタンブールです。もともとはギリシア人が造った古い町です。東西の中継貿易の重要な町でした。
なぜ、都を遷したか。ローマ市を中心とする帝国の西部よりも、ギリシア、シリアを中心とする東部の方が文化的にも経済的にも重要になってきたんでしょう。
もう、ローマ市が都ではないのにローマ帝国というのも変ですが、これ以後もローマ帝国といっています。

2, 313年に、「ミラノ勅令」を出して、キリスト教を公認した。勅令というのは皇帝の命令のこと。
ミラノで出した命令なので、ミラノ勅令。
ディオクレティアヌス帝のキリスト教迫害命令からわずか10年しか経っていないのですが、まったく異なった命令がでたわけです。
なぜ、180度政策が変更になったか。まず、弾圧によって全然キリスト教徒は減らなかつた。逆に、爆発的に信者が増えたんではないか。信者数は分かりませんけどね、そう考えた方が理解しやすい。
コンスタンティヌス帝は弾圧するよりも、公認してキリスト教徒を自分の味方に取り込んだ方が支配に有利だと考えたんでしょう。
かれはこんなことをのちに言っている。皇帝になるときにライバルと決戦があったんですが、その前夜に夢を見たという。夢の中で光り輝く十字架があらわれた。そこで、コンスタンティヌスは十字をかたどった軍旗を作り、ライバルとの決戦に勝つた、というんです。
皇帝になったあとにコンスタンティヌスがした話です。もちろん作り話だろうね。しかし、こんな作り話をしてでも、キリスト教徒を自分の支持者に加えたかったんでしょう。

3, コンスタンティヌス帝の時にコロナトゥス制が確立します。
コロナトゥス制というのは小作人を使った農場経営のことです。小作人のことをコロヌスといったので、コロナトゥス制。
3世紀以降奴隸が減少します。つまり、大土地所有者である貴族から見れば労働力不足です。労働力不足を補うには、奴隸を結婚させて子供を作らせればいいんですが、奴隸身分のままで、お前とお前、子供を作れ、といったって奴隸だって人間ですからね、家畜の種付けではない。それは無理なわけ。
奴隸にも家や財産を持つことを認めてはじめて、かれらだって自分の生活設計ができるようになり子供も作る気になります。そこで、農業経営者たちは奴隸の身分を格上げして、家庭を持たせて子供を作らせて労働力を確保しようとした。これがコロヌスと呼ばれる小作人です。
ただ、奴隸ではないからといって勝手に別の農場に移られてしまつては労働力確保にはなりませんから、コロヌスの移動を禁止する必要があります。
で、コンスタンティヌス帝はコロヌスの移動禁止令をだし、身分を固定化した。
これを、コロナトゥス制の確立といっています。
奴隸から身分上昇しただけでなく、逆に一般農民からコロヌスに転落したものもいたようです。

テオドシウス帝

そのあと重要な皇帝はテオドシウス帝（位379～395）。
ここで、ローマ帝国は一応の区切りがつきます。

この皇帝は380年にキリスト教を国教化します。国教化というのは国の宗教にしたということですよ。みんなキリスト教を信じなければいけない。ミラノ勅令は公認です。公認とは信じてもよいということですか

ら。全然、意味は違うからよく注意して下さい。

国教化したということは、キリスト教を国家支配の柱にしようということですね。

さらに、392年にはキリスト教以外の宗教の信仰を禁止します。キリスト教国教化というときに参考書では普通こちらの392年で出てきます。

ちなみに、ギリシアの古代オリンピックはこの時までおこなわれていました。でもこれ、ギリシアの神々に捧げるお祭りだからキリスト教国教化以後開かれなくなりました。

テオドシウス帝は死ぬときに二人の息子に帝国を分割して相続させました。

兄が継いだのが東半分、これが東ローマ帝国（首都コンスタンティノープル）。

弟が継いだのが西半分、西ローマ帝国（首都ローマ）です。

地中海全体をぐるりと取り囲んだ大ローマ帝国はここまでおしまい。

あとは東西それぞれのローマ帝国の話がありますが、それはまたあとでしましょう。

第17回 ローマ帝国の変質 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第16回 ローマの文化](#)

[次のページへ](#)
[第18回 キリスト教の成立](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

第18回 キリスト教の成立

目次 1 紀元前後のパレスチナ地方
2 イエスの生涯
3 キリスト教

1 紀元前後のパレスチナ地方

4世紀以降ローマ帝国ではキリスト教が認められて、やがて国教になるのでしたが、このキリスト教の成立を見ておきましょう。

イエスによってこの宗教が生まれたことは知っているでしょう。

イエスは実在の人物ですよ。あまりにも伝説化されてしまって架空じゃないかと思っている人もいるみたいだけれど。

イエスは前4年くらいに生まれて、後30年くらいに死んでいます。ローマ初代皇帝オクタヴィアヌス（アウグストゥス）とだいたい同じ時代です。

場所はパレスチナ地方。ユダヤ人が住んでいる地方です。だから、イエスもユダヤ人です。パレスチナ地方はちょうどイエスが幼いときにローマの属州になっているんです。今はイスラエルという国ですね。

ということは、イエスはローマ帝国の領土で活動し死んでいった。だから、ローマ帝国でキリスト教の信者がどんどん増えていくのは当たり前といえば当たり前なわけです。

ローマ人の宗教はどんなだったか。ローマ人は多神教です。基本的にギリシアの神々と同じ。領土が拡大するにつれていろいろな地方の神々がローマに伝わり、かれらは適当にいろいろな神様を信じている。他民族の宗教に対しても特に弾圧することもないです。

ユダヤ人の宗教はユダヤ教だったね。一神教で当時の世界では特殊な信仰でしたが、それを弾圧するようなことはローマはしません。

しかし、税は重い。ユダヤ人に重税はかけます。だからユダヤ人たちの生活は当然苦しくなる。そんななかで、救世主＝メシアの出現を待ち望む気持ちが強くなってくるんだ。ここは、ちょっと覚えておいてください。

当時のユダヤ教は律法主義だといわれています。

簡単に言えば、宗教には形式や戒律があるわけですが、そういう戒律を厳しく守っていこうという考え方です。

モーセの十戒以来ユダヤ人たちにはいろいろな戒律があったわけです。

宗教上の戒律といつても、今のわれわれにはわかりにくいね。

プリントに新聞記事を載せてありますから、ちょっと見て下さい。今でもユダヤ教の信者は世界中にいるわけですが、ユダヤ人が作った国がイスラエル。その都市イエルサレムに派遣された日本の新聞の特派員が書いたコラムです。現在でもユダヤ教徒が戒律を一所懸命守っている様子がよくわかる。

「ある晩、戸をこつこつとたたく音がした。だれかと開けてみると、初老の婦人。同じアパートの住人だといい、「あなたはユダヤ人じゃないでしょう」と聞く。ガスが漏れているみたいなので、栓を閉めてほしいと言うのだ。

といえば、この日はシャバット。ユダヤ教の安息の日だった。火をともす作業をしてはいけないとされ、中世のユダヤ人たちは非ユダヤ教徒に頼んで火をつけてもらっていた、という話を思い出した。現代では、電気や機械を作動させることがいけないとされ、戒律を守る人々は金曜日の夜から土曜の夜にかけ、それに類する行為を避ける。

車の運転はもちろんだめ。…後略…」

安息日には仕事をしてはいけないという戒律があるんだね。

このおばあさん、自分の部屋のガスがシューシュー漏れているんだ。自分でちょっと栓を閉めればいいのに、戒律破りになるからできないと言うんだね。だから、戒律に関係ない日本人の新聞記者に栓を閉めてくれと頼みに来た。

これ、現代のことですよ。2000年前の戒律重視はどれほどだったでしょうね。

なぜ、戒律を守らなければならないかというと、神との約束だからね。やぶったら救われないです。天国にいけない。

細かい戒律がたくさんあったんだろうけれど、これをキッチリ守ることは難しいことだったに違いありません。

例えば、この安息日に火をともしてはいけないとなると飯はどうやってつくったのか、ということになる。安息日でも食事はしたいでしょ。新聞記事にもあったけれど、戒律には抜け道もあって、自分で作業をしなければいいんです。だから、金持ちはお金で人を雇って火を使って料理させて、自分は食べるだけでいい。これなら戒律を守りながら、満腹できます。

逆に貧乏人はどうか。貧しければどんな仕事でもして、生きていかなければならないよね。安息日に金持ちに雇われて、かれらのために働くのはそんな人々だったに違ないです。

2000年前のユダヤ人社会に戻りますが、戒律重視の律法主義が主流だった。

律法主義が厳しく言われば言われるほど、結果として貧乏人はどんどん救われなくなる。

極端に言えば救われるには金で戒律を守ることのできる人だけになる。

そして、ローマの支配下で重税をかけられて、貧しい人々がどんどん増えていたのが当時のパレスチナ地方です。

自分は救われない、という想いがどのようなものか私には想像できないけれど、非常に絶望的な気分だったんじゃないかな。

こういう状況の中で、イエスが登場して民衆の支持を得る。

イエスが何を言ったか、もう想像つくでしょ。

かれは、最も貧しい人々、戒律を破らなければ生きていけない人々、その為に差別され虐げられた人々の立場に立って説教をするんですね。

戒律なんて気にしなくてよい。あなた方は救われる、と言い続ける、それがイエスです。

例えば売春婦。売春などは戒律破りのさいたるものですが、恵まれない女性が最後にたどり着く生きる手段でした。そんなことをして生きていくことそのものがつらいことなのに、おまけに宗教的にも救われないとされているんですよ。

そういう女性にイエスは「あなたは救われる」と言う。

それから、ライ病の患者。ハンセン氏病ですね。日本でもつい最近まで科学的な根拠のない偏見が長く続いてきた病気です。ユダヤ教では、病気そのものが神からの罰として考えられていた。だから、ひどく差別されていました。イエスはそんな人のところにもどんどん入っていく。そして「大丈夫、救いはあなたのものだ」と言う。

これが、どれだけ衝撃的だったか、人々の胸を揺さぶったか、想像力を働かせて下さい。

2 イエスの生涯

さて、イエスその人のことですが、母がマリア、これはみんな知っているね。聖母マリアといわれる。父親は知っているかな。ヨセフです。この人は大工さん。

父ヨセフ、母マリア、すめば簡単なんですが、これが意外とややこしい。

のちにキリスト教の教義が確立する中で、マリアは処女のままで身ごもってイエスが生まれたということになります。現実にはそんなことはあり得ないので、一体この話は何を意味しているのかと言うことになる。

どうもこういうことらしい。マリアとヨセフは婚約者同士でした。ところが婚約中にマリアのお腹がどんどん大きくなるんだね。誰かと何かがあったんでしょう。どんな事情があったかはわかりませんよ。ヨセフとしては身に覚えがない。不埒な女だ、と婚約破棄をしても誰にも非難されません。婚約破棄するのが普通だろうね。聖書を読むと、やはりヨセフは悩んだらしい。しかし、結局そんなマリアを受け入れて結婚したんだね。そして、生まれたのがイエスです。

マリアとヨセフはその後何人も子供をつくっています。イエスには、弟妹何人かいたようです。

で、イエスの出生の事情というのは村のみんなが知っていたようです。

のちにイエスが布教活動をはじめて、自分の故郷の近くでも説法をします。その時、同郷の者達が来ていてイエスを野次る。その野次の言葉が「あれは、マリアの子イエスじゃないか！」と言うんだね。誰々の子誰々というのが当時人を呼ぶときの一般的な言い方なのですが、普通は父親の名に続けて本人の名を呼ぶ。だから、イエスなら「ヨセフの子イエス」と呼ぶべきなんです。「マリアの子イエス」ということは「お前の母ちゃんはマリアだが親父は誰かわからんじゃないか」「不義の子」と言う意味なんです。

だから、かれの出生は秘密でもなんでもなかった。イエス自身もそのことを知っていたでしょう。

イエス自身が戒律からはみだした生まれ方をしていたんだ。「不義の子」イエスは、だからこそその間に、最も貧しく虐げられ、絶望の中で生きていかざるを得ない人々の側にたって救いを説くことになったのだと思います。

聖母マリアの処女懐胎、という言葉にはそんな背景が隠されているのです。

イエスの若い時代のこととはわかりません。多分ヨセフと一緒に大工をしていたんでしょう。
30歳をこえたあたりから突如布教活動を開始します。

注意して欲しいですが、イエスはあくまでもユダヤ教徒ですよ。新しい宗教を創ろうと考えていたわけではありません。律法主義に偏っているユダヤ教を改革しようと考えていたのだと思います。

先ほど触れたことの繰り返しになりますが、イエスの教えの特徴をもう一度見ておきましょう。

まず、ユダヤ教の戒律を無視します。

最も基本的な戒律の安息日も平気で無視する。こんな言葉が残っています。「安息日が人間のためにあるのであって、人間が安息日のためにあるのではない」

次に、階級、貧富の差をこえた神の愛を説いたと言われます。

身分が卑しくても、貧乏でも、戒律を守れなくても神は愛し救ってくれるというんだね。

有名なイエスの言葉で、「金持ちが天国にはいるのは、ラクダが針の穴を通るよりも難しい」というのがある。ぶっちゃけて言えば、金持ちは救われない、と言っている。じゃあ、誰が救われるか、それは君たち貧乏人だよ。イエスはそういうているんでしょう。

ユダヤ教のヤハウェの神は厳しい怒りの神です。アダムとイヴが知恵の実を食べたら、怒って楽園追放でしょ、ノア以外の人類は洪水で皆殺し、バベルの塔も破壊して人間を四方に飛ばして言葉を乱した。怒って罰を与える怖い神です。

この神の解釈をイエスは変えてしまった。

怒りの神から愛の神へ変える。

神がわれわれを愛してくれているように、われわれも敵味方の分けへだてをやめるように説きます。

「右の頬を打たれたら、左の頬も差し出せ」という。汝の敵を愛せということですね。

この言葉は、すごく衝撃的な響きだったと思うよ。

この地域の伝統は何かというと、ハンムラビ法典以来、「目には目を、歯には歯を」でしょ。だから、右の頬を殴られたら殴り返すのが常識。ところが、イエスは左も殴らせてやれ、という。常識をひっくり返す。人間は、それまで疑ったこともなかった常識をバッとひっくり返されたときに、そのものに強く惹かれることがあります。

イエスはまさにそれをやり続けた。

それから、イエスは説法で「時は満ちた、神の国は近づいた」という。

この「神の国」は「イスラエル」と発音したらしい。

イエスの話を聞いた人々の中には「イスラエル」という言葉から過去に栄えたユダヤ人の国家イスラエル王国を連想する人々もいたんだ。その人たちとは、イエスは宗教家の姿を借りてローマからの独立、ユダヤ人国家の復活を計画しているのだ、と期待しました。

宗教的な救いと政治的な救い、周囲の人たちはイエスにいろいろな期待を持つようになります。

イエスの活動で避けて通れないのが奇跡です。

言葉による布教と同時にイエスは行く先々で奇跡を起こします。

具体的には病癒しが多い。どんどん病気を治していくんだ。イエスがどこかの町に現れると人々が病人をどんどん連れてきてごった返すありさまが聖書には書かれています。

本当に奇跡を起こしたのでしょうか。

ここは授業としては触れにくいところだね。

雑談として聞いてくれればいいけれど、私としては病を癒すというのはある程度あったと思います。ある程度ですよ。

イエスの病癒しには、盲目の人の目を開いたり、血の道で苦しむ女性を治したり、いろいろあるのですが、精神的な疾患と考えられるものもかなりある。そこへイエスが現れて、悪霊祓いをする。そして、権威あるもののように「あなたは治った、大丈夫だよ」と言わされたらそれだけでホントに治ってしまう、そういうことはありそうでしょう。病は気から、という部分ね。

もう一つはいわゆる手かざしというやつです。ハンドパワーと言うのかな。

みんなは知らないと思うけど何年か前に高塚ヒカルさんという人がいた。今もいると思うけど。この人は普通のサラリーマンなんだけど病気の人の患部に手をかざすと、その病気が治ってしまうので有名になった。たしか、映画まで作られたと思うよ。

高塚さん本人にも何で病気が治るかわからない。けど、自分が手かざしをすると治ってしまうので、あちこちから引っ張りだこでした。

まれに、そういう理屈ではわからないパワーを持った人がいるんだね。

前に勤めていた学校でもいました。生徒ですね。男の子なんだけど、かれはおとなしい普通の子なんだけど、体育の時間が終わるとかれの前に行列ができる。クラスメイトがね、順番を待ってかれに手かざししてもらうわけです。肩とか、太股とか、そうすると筋肉痛が治ってすっきり。体力が回復するんだって。先生もしましょうか、なんていわれました。私は遠慮しましたが。学年では有名人でした。

ホントに治るのかどうか知りませんよ。ただ、やってもらった人が治った、スッキリしたと感じるということです。

イエスは特にそういうパワーを多く持っていたのかもしれない。

イエスの奇跡の話は聖書にたくさんでてきます。

なかには荒唐無稽なものも多くある。

イエスの説教に数千人が集まった。この聴衆にイエスの弟子が食事を配る。パンが5つと魚が2尾しかなかったのに全員に配れたという話。それから、ラザロという若いイエスの支持者が死ぬんですが、イエスが死後数日後に「ラザロ出てこい」と呼びかけると、ラザロが生き返って墓穴から出てきたとかね。

これらはイエスの死後、伝説として創作されたと思われますが、ポイントはこんな荒唐無稽な話でもその当時の人々が「イエスならありえる話だ」と受けとめたということでしょう。

病癒しの話の中に気になるのが一つあります。

ゲラサ人の病人を治す話です。この人は頭がおかしくなっていて墓場で裸になって叫び続けているんです。周りの人が足かせで縛ったりするんですがすぐに引きちぎって、石で自分の身体を傷つけたりする。イエスはゲラサ人の土地にやって来てかれに憑いている悪霊を退散させるんですが、この時に悪霊に名を尋ねる。すると悪霊が名乗るんですが、その名が「レギオン」。ガメラとたたかった怪獣にいたね。実はレギオンというのはローマ軍団のことです。そうすると、これは単なる病癒しの話をこえた何かを暗示しているようだね。イエスの物語はローマの支配と無関係ではなかったし、イエスが治したというたくさんの病人の病気とは実のところ何だったのか、ということまで私なんかは考えてしまいます。

話がだいぶあちこちに飛びましたが、イエスはユダヤ教の解釈しなおしと病癒しによって、短い間にものすごく評判になります。多くの支持者を集めます。かれの行くところには人々が群がるようになる。イエスこそが待ち望んでいた救世主だと考える人々も多くなってきました。

イエスが評判になると、ユダヤ教の指導者たちは面白くない。

それで、なんとかイエスの信用を落として、あわよくばイエスの落ち度をとらえて逮捕処刑しようと考えます。

ユダヤ教の指導者たちの手下、スパイたち、がイエスの身辺にあらわれてかれの言動を探ったりいろいろな罠をかけるようになるんですね。

聖書に姦淫する女の話が出てきます。

ある時そのスパイ連中がイエスの前に一人の女を連れてきます。その女は姦淫している現場を見つかったんですね。夫がいながら他の男性と関係を結んでいたんです。

これは当然戒律違反で、死刑にあたります。姦淫した女は石打の刑といってみんなに石をぶつけられて殺される決まりでした。

で、かれらはイエスに向かって言う。イエスよ、あなたはこの女をどうするのか。

これは、罠です。

イエスがもし、この女を許すべきだと言えば、戒律破りを堂々と認めることになる。姦淫ですからね、戒律破りといっても日本でも戦前だったら犯罪にあたる行為です。これを認めたらイエスは無法者だと触れられるでしょ。

もし、「許さない、死刑だ」といえば、イエスの言動に励まされてきた多くの貧しい者虐げられた者達を裏切ることになるわけです。「なんだ、イエスは口ではわれわれの味方みたいに言っているが、いざとなれば戒律を守れというんだな」と思われるでしょ。

どちらにしてもイエスは信用を落とすことになる。巧妙な罠です。

この時イエスはこう言う。

「あなた達のなかで今まで罪を犯したことがないものがいればこの女をぶちなさい。」

女の周りには石を持った男たちが、撃ち殺してやろうと取り囲んでいたんだ。だけど、イエスの言葉を聞いて、一人、また一人と石を置いてそこから立ち去っていった。

実際に感動的な場面です。しかも、イエスの機知も伝わってくる。

客観的に戒律が正しいかどうかなんてことはイエスは言わないですね。あなたはどうなのか。それをみん

なに突きつけた。

もう一つ罵の話。

やはりスパイ連中がイエスに質問します。

「イエスよ、われわれはローマ帝国に税を納めるべきかどうか。」

イエスは貧しい者の味方です。収めなくてもいいと言えば貧しい者達は喜ぶでしょうが、それはローマ帝国に対する明らかな反逆行為になります。死刑にされてもしようがない。

納めよといえば、やはりこれもイエスらしくない発言で支持者は失望するでしょ。

イエスはコインを見せよ、といってコインを手に取る。そして、質問したものに逆に質問する。これは誰かと。ローマのコインには皇帝の肖像が刻まれているんですよ。

スパイは答えます。「カエサルだ。」

イエスは言うんだね。「カエサルのものはカエサルに返しなさい。神のものは神に返しなさい。」

税がどうのこうのという前に、お前さん、ちゃんと神に対して正しい信仰を持っているのかい。そういうてイエスは逆にスパイをやりこめているようです。

こんなふうにイエスはユダヤ教指導者たちの追及を切り抜けていきます。

しかし、かれがユダヤ教のあり方を批判するだけでなく、救世主としての評判が高くなってくると対立は徹底的になります。

ユダヤ教の保守的な指導者たちは何が何でもイエスを捕らえて処刑しようとします。イエスに対するデマも流してかれの評判を落とす。

最後の時期にはイエスは逃げ回りながら布教しています。

でも、ついに捕らえられて裁判にかけられることになります。

これは、ルネサンス期の大画家レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」です。

逮捕される前の晩、イエスは弟子たちと食事をする。その途中で、イエスは明日私は捕まるだろうと言う。

驚いた弟子たちが、えっ、それは何故ですか、まだまだ、逃げられますよ、と言うんですが、イエスは「この中の一人が私を裏切るだろう」とつぶやく。その言葉を聞いた直後の弟子たちの動揺を描いた絵です。

結局ユダという弟子が、ユダヤ教指導者にイエスの隠れ場所を密告して、その結果イエスは捕まったとされています。

ユダヤ教の戒律は破ったかもしれないけれど、イエスは別に犯罪を犯しているわけではない。でも、ユダヤ教指導者たちにとってはイエスに好き勝手にさせるわけにはいかない。是非とも殺してしまいたいんです。そこで、ローマ総督のところに引き渡すんですがローマ総督もイエスが犯罪者でないことはすぐわかつたしユダヤ教徒同士の争いに首を突っ込みたくない。

しかし、ユダヤ教の指導者たちは「この男はローマに対する反逆者だ、ユダヤの王と言っている」と言うんだね。

ローマ総督としては反逆者をほって置くわけにはいかない。結局イエスは反逆者として死刑判決を受けます。

ローマの死刑は十字架に磔（はりつけ）です。

死刑囚は磔になる前にローマ兵からいたぶられる慣習があった。

イエスは兵士たちから服をはぎ取られ裸にされる。殴られたり蹴られたりもしたでしょう。

お前はユダヤの王だろう、王なら冠をかぶれ、と荆（いばら）でつくった冠をかぶらされた。荆はトゲトゲですからね、それを頭にかぶらされて額からは血がだらだら流れる。この場面を描いた宗教画はたくさんあるね。

最後は十字架です。これ、手足を釘で十字架に打ち付けるんですよ。

手のひらを打ち付けると、体重で手が裂けて外れてしまうらしい。だから正確に言うと手首の腱のところで打ち付けた。足も足首です。それだけでは支えきれないで首から肩にかけての腱のところでも釘を打ち付けたという話もある。

こんなふうにして十字架に掛けたあと、兵士が槍で心臓のそばを急所をはずしてチョイと突く。

血がだらだら流れながら数日間、苦痛とのど渇きに苦しめられながら死んでいく。これが十字架の磔です。

イエスはこれで死んでいったのです。

信者たちはどうしていたのか。

実は多くの支持者、信者たちはイエスが逮捕された段階でかれを見捨てて逃げてしまったんです。

救世主がこんなに簡単に捕まつて、しかも死刑になるわけがない。あいつは只の男だったんだ。そんな気持ちでしょう。救世主なんていってだましやがって！とイエスに憎しみを向ける者もいたようです。

弟子も逃げた。

ペテロという弟子は、逃げたんだけど裁判の様子が気になる。だから、裁判所の前でうろちょろしているのね。するとかれの顔を知っているものが「あれ、あんたイエスの弟子じゃないか」と言うんだ。

ペテロはあわてて否定するんです。「いえ、違います。イエス？そんな男私は知りません。」弟子として一緒に逮捕処刑されではかなわない、と思ったんだね。

わっと集まった支持者たちは、わっと消えてしまいました。

結局、イエスに最後まで付き従い処刑まで見届けたのはほんの少しばかりの女性信者だけだったといいます。

イエスはわずか二年ほど布教活動をしただけで、処刑されてしまいました。まだ30歳をいくつか超えただけでした。

3 キリスト教

イエスの話はこれで終わり。

ところがキリスト教はここから始まる。

イエスが処刑されて数日後、女性信者三人がイエスの亡骸を引き取りに行ったんです。当時の墓は横穴式の

洞窟になっている。イエスの亡骸もそこに入れてあったはずなんですが、彼女たちが入っていくと死体が消えていたというんだね。

死体は確かになくなっていたらしい。そこまでは事実としましょう。

ところがこの話が、どんどん伝わるなかでイエスが生き返った、復活したと考える人々があらわれました。巻き添えになるのを恐れて逃げ散っていた弟子たちも再び集まってきて、弾圧を恐れずイエスの教えを人々に説きはじめます。かれらも復活したイエスに会ったという。

このようにして、イエスは復活した、イエスはやはり救世主だったと考える人々によってキリスト教が成立了。キリストとはギリシア語で救世主のことです。

救世主の復活を信じる人々はキリスト教徒になりました。信じない人々はユダヤ教にとどまり続けることになります。

復活ということをどう考えるか。これはもう歴史の授業から外れてしまうので皆さんそれが考えたらい。

ただ、逃げていた弟子たちが再び活動を始めたのには、何かがあったんでしょうね。こういうのを宗教体験とか、霊的体験とか、啓示とかいうんだろうね。

イエスの弟子で有名な二人がペテロとパウロ。

ペテロは裁判の時にイエスを知らないといった男です。ところが処刑後は熱心な布教活動をおこない、最後はローマで処刑された。

パウロはイエス死後の弟子です。死後の弟子というのも変だけど、復活したイエスに会っているからそうなる。

パウロは裕福なユダヤ人の家に生まれた熱心なユダヤ教徒でした。キリスト教徒を見つけだして迫害していた男なんです。ところが旅行中に復活したイエスに会う。イエスはパウロに「なぜ、私を迫害するのか」と声をかけたという。

これ以後パウロはユダヤ教を捨て、それまで迫害していたキリスト教の布教活動に生涯をかけるんです。

キリスト教の理論面でパウロの功績は大きいです。イエスの教えをもとにパウロがキリスト教をつくったという人もいるほどです。

それから、パウロはユダヤ人だけどローマ市民権を持っていたんです。だから、自由に帝国内を旅行することができた。キリスト教徒として逮捕されたときもローマ市民の権利としてローマ市で皇帝による裁判を要求した。そのため、かれはローマ市に移送されてそこでも布教活動をします。最後はやはり死刑になりますけどね。

こういう弟子たちの活動によってキリスト教はパレスチナ地方のユダヤ人以外にも徐々に広がっていきました。

キリスト教独自の聖典が新約聖書です。イエスの言動を記した文書や、弟子たちの手紙などから成っています。

イエスの死後からいろいろな文書が作られはじめ、今のような新約聖書の形になったのは5世紀のことです。

旧約聖書もキリスト教の聖書ですが、これはもともとユダヤ教の聖典。キリスト教はユダヤ教から生まれたものですから、これも引き継いで読むわけだ。

新約というのは、新しい契約、という意味。イエスと神の間で交わされた新たな契約を記した本、ということです。

それに対して、旧約とはイエス以前の、神と人間との古い契約ということだね。

新約聖書は、多くの作者によってバラバラに書かれた文書の寄せ集めですから、イエスの人生も文書によって書き方が大分違うんですよ。

例えば、十字架に掛けられたイエスの言葉です。

一番はよく書かれたマルコ福音書では、「おお神よ、なぜ私をお見捨てになったのですか。」

少し後で書かれたルカ福音書では、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

全然、イメージが違うでしょ。どちらもイエス処刑後たかだか40年から60年後くらいに書かれたものなんですよ。

だから、実際のイエスが本当にどんなふうだったのか、これを探るのは難しい。

授業のために何冊かイエスの本を読んだんですが、みんな違うのです。書かれているイエス像が。作者の数だけイエス像があると言ってもいいんじゃないかな。

今日の話はそういう意味ではわたし風のイエス。

皆さんも自分なりのイエス像を考えてくれたらいいと思います。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[人間イエス講談社
現代新書](#)

滝澤武人著。キリスト教関連の本はたくさんあるが、信仰を持っている人が書いている場合が多いので、読む側も距離の取り方が大事だ。一般向けの新書版で、授業に使える話題も多かった。、現代日本の文明と非常に近いからではないかと思ったりもする。

[書物としての新約聖書](#)

田川健三著。「聖書学」というものがあるようで、著者は、日本での代表的な聖書学者だと聞いた。聖書の成立過程が、よくわかる。ただし、学術書なのでちょっと高い。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第17回 ローマ帝国の変質](#)

[次のページへ](#)
[第19回 キリスト教の発展、
分裂後の東西ローマ帝国](#)

□□□□□□□□□□

□□□□□□

第19回 キリスト教の発展、分裂後の東西ローマ帝国

1 キリスト教の発展

イエスの死後、弟子たちの活動によって徐々にキリスト教の信者はローマ帝国内に広がっていきました。はじめの頃の信者は女性と奴隸を中心だったといわれています。イエスがどんな人々に布教したかを考えれば当然かもしれない。

奴隸は当然虐げられた人々。女性も社会的には抑圧された生活をしていたと考えられるでしょう。

キリスト教が広まりはじめた頃は当然新興宗教です。何時の時代でも新興宗教というものは周囲から疑わしい目で見られるものだ。初期のキリスト教もローマでは胡散臭いものとして見られたようです。信者であることを知られると迫害されるので彼らはこっそり集まって信仰を確かめあいました。

集まったのがカタコンベ。資料集に写真がありますね。このカタコンベは地下墓所と訳しています。ローマ人たちは町の郊外に墓地を作ります。地下にトンネルを掘って、トンネルの壁に棚がたくさん作ってあるでしょ。この棚に死体を置いたんだ。火葬はしません。現在はこんなふうに空っぽの棚が並んでるだけだけど、当時はここにぎっしり死体があった。当然気味が悪いところだから、誰も来ない。

迫害を恐れて信者たちはここに集まつたんです。集まる時間は夜。みんなが寝静まった頃を見計らって奴隸たちや女たちが家屋敷を抜け出してカタコンベにやってきて集会を開きました。こっそり集まつてもやがて人々に知れますわな。キリスト教の信者たちは夜な夜な地下墓所に集まって何かよからぬことをやっているんじゃないかな、とますます差別が激しくなった。死体を食べてるとか、乱交してるとかね。

まあ、そんな偏見や皇帝による弾圧があつたりしながらも徐々に信者は増えたようです。

復習になりますがディオクレティアヌス帝の迫害は有名でしたね。ところが313年にはコンスタンティヌス帝のキリスト教公認、392年のテオドシウス帝による国教化と4世紀にはキリスト教はローマ帝国を支える精神的な柱にまでなったわけです。

2 教義をめぐる対立、教父

信者が増えるにつれて、各地に大きな教会もできてきます。聖職者も多くなる。やがて教義をめぐる教会内の対立が起きます。どんな宗教でも開祖が死んでから何十年もたてば考え方の違いで対立したり分裂したりするものです。ただ、キリスト教はローマ帝国の公認宗教になりますから帝国政府としては教会内部が対立するのは好ましくない。そこで、ローマ政府は公認後何回か聖職者を集めて宗教会議を開いています。これは、教会内の対立を皇帝が調停するということと、もう一つは調停を名目として皇帝が教会内部に干渉して権力内部に取り込んでしまう、という意味もあったんです。

この宗教会議のことを教科書では公会議と書いています。有名な公会議が3つ。覚えます。

325年、ニケア公会議

431年、エフェソス公会議

451年、カルケドン公会議

ニケアとかエフェソスとか会議の開かれた場所です。

高校でこんなに詳しくキリスト教神学の勉強をする必要はない個人的には思っているんですが教科書は詳しいね。滅茶苦茶大ざっぱに説明しておきますね。

キリスト教会の内部で繰り返し議論の対象となった問題があります。この3つの公会議も突き詰めたら一つの問題を繰り返し議論しているのです。それは何かというとイエスの問題なんです。イエスはなんなんだ？初期の聖職者たちも疑問に思ったんだね。彼が救世主であることはいいんです。そう信じる人がキリスト教徒なんだから。問題はその先、救世主イエスは人間か、神か？そこで論争が生まれる。

人間だったら死刑になったあと生き返るはずはない。人は死んだら普通死んだままですからね。だから、イエスを人間とすると、やがてそれは復活の否定につながります。

じゃあ、神だったのか。それもおかしいんです。キリスト教も一神教です。神はヤハウェのみ。イエスも神としたら神が二人になってしまいます。だから彼を神とすることもできない。

この矛盾をどう切り抜けて首尾一貫した理論を作り上げるかで初期の聖職者、神学者たちは論争したんだ。

325年のニケア公会議では、アリウス派という考えが異端、つまり間違った理論とされます。アリウス派はイエスを人間だといったんです。正統と認められたのはアタナシウス派という。このアタナシウス派の考えはあとでまとめます。

431年のエフェソス公会議ではネストリウスという人が異端とされます。彼はマリアを「神の母」と呼ぶのに反対したんで異端になった。実際には政治闘争だったようですがあえていえばネストリウスもイエスの人間性を強調したということでしょう。

451年カルケドン公会議では単性論派が異端とされます。このグループはイエスを人間ではないとする。単純にいえば神だ、というわけだ。

つまりイエスを神とか人間とか、どちらかに言いきる主張は異端とされていったんです。これらの論争を通じて勝ち残って正統とされたのはアタナシウス派です。この派の理論は「三位一体（さんみいittai）説」という。神とイエスと聖霊の三つは「同質」である、という理論です。注意しなければいけないのは「同質」という言い方。「同じ」とは違うからね。ややこしいね。「同質」というのは「質が同じ」なので「同じ」ではない。

もともと「生き返った人間」イエスを人間でも神でもないものに、別の言い方をすれば、人間でもあり神でもあるものにしようというんだから、分かりやすく理論を作るのは無理だね。そこをなんとかくぐり抜けて完成された理論が「同質」の「三位一体説」です。だから私実はよく分かっていません。このいきなり登場した「聖霊」はいったいなんだろうね。辞典を読んでも分かりません。知っている人はこっそり教えてください。

現在キリスト教は世界中に広がっていますがカトリックもプロテスタントも伝統的な教会は三位一体説にたっています。みんなそうだから現在ではあらためてアタナシウス派なんて言わなくくらいに一般的です。教会の説教で「父と子と聖霊の御名において～～」というのを聞いたことありませんか。あれが三位一体で

すね。アメリカ合衆国生まれの新しい宗派では三位一体説にたっていないものがあるかも知れませんがね。

異端とされた宗派のその後ですが、ローマ帝国内では布教ができません。アリウス派は北方のゲルマン人に布教活動をします。ネストリウス派はイランから中央アジアにかけて広がっていきました。単性論派はエジプトやエチオピアに残ります。

初期教会の指導者で教義を整備した人たちのことを教父といいます。二人覚えて下さい。エウセビオス（260～339）は「教会史」を著して有名。アウグスティヌス（354～430）は「告白」「神の国」の著者。アウグスティヌスはもとマニ教というのを信じているんですがキリスト教に改宗する。そんな半生を書いたのが「告白」です。この人は今でもキリスト教徒の人たちにはファンが多いみたいです。

3 西ローマ帝国の滅亡

さて、ここでパパッと西ローマ帝国を滅ぼしましょ。

フン族という遊牧民族がありました。これが東方から黒海北岸あたりに移動してきました。4世紀中頃のことです。

時代はさかのぼりますが前2世紀中頃、ローマでグラックス兄弟が改革を試みていた頃ユーラシア大陸の東端、中国では漢帝国が栄えていました。武帝という皇帝の時代です。この以前から中国北方の草原地帯では匈奴という遊牧国家があつて中国を圧迫していたんですが、武帝の時代になってはじめて北方遠征で匈奴に勝ちます。

負けた匈奴は漢に追われる形で西に移動を開始しました。400年かけてゆっくりゆっくり移動した。途中に出会った他の遊牧グループと合体したり吸収したりしながら移動したんだと思います。これがフンという名でローマの歴史に登場するのです。匈奴は「きょうど」と読んでいますが「フンヌ」とも読めるんですね。匈奴とフン族は同じモノだろうといわれています。

ローマ帝国の北方から黒海北岸にはゲルマン人が住んでいました。彼らは部族単位で農耕牧畜なんかをして生活していましたが、そこに東方からフン族が移動してきた。玉突き状態になって、ゲルマン人は部族単位で次々に西へ移動を開始しました。これが375年に始まる「ゲルマン民族の大移動」です。

フン族に追われて移動するゲルマン人は現代風に言ったら難民ですね。これが安住の地を求めてローマ帝国内に入ってこようとした。

以前からゲルマン人のなかにはローマ帝国内に移住して生活するグループや、ローマ軍の傭兵となるものなども結構いました。強引にローマ帝国内に集団移住しようとするグループもあってローマ皇帝はしそう辺境で戦っています。しかし、今度は規模が違う。大量のゲルマン難民がどっと流れ込んできたら、ローマ社会は大混乱になることは目に見えています。東ローマ帝国はなんとか国境防衛に成功しゲルマン人が侵入するのをくい止めることができましたが、西ローマはこれに失敗した。

次々になだれ込んでくるゲルマン人で西ローマ帝国は大混乱。最後の西ローマ皇帝は親衛隊長のオドアケルに廃位されて滅亡しました（476年）。オドアケルはゲルマン人出身の男です。

ゲルマン人は部族単位で西ローマ帝国のあちこちに勝手に建国し、さらにお互いに戦いあいます。たとえば

ガリア地方北部に侵入したフランク族はフランク王国を作る。これが現在のフランスのもとです。ローマ人々はこの新しい野蛮な支配者となんとか折り合いをつけて生活するしかなかったんでしょうね。長引く混乱のなかでローマ時代の高い文明は崩壊し経済も停滞し、やがてローマ人はゲルマン人と混血していきます。これが現在のイタリア、フランス、スペインあたりの状態でした。

生き延びた東ローマはユスティニアヌス帝（位527～565）の時代に一時期勢力を盛り返します。ユスティニアヌスはイタリア半島やアフリカ北岸に建国したゲルマン人国家から領土を奪い返しています。東西分裂以前に近い領土を支配しました。

それからユスティニアヌスはローマ法大全を編纂させていることでも有名でしたね。彼の時代は古きローマ帝国の最後の輝きといえるでしょう。

これ以後東ローマ帝国の領土はどんどん縮小していきます。呼びかたも首都コンスタンティノープルの古名ビザンティウムからとったビザンツ帝国と言うのが一般的。この後もローマ帝国の理念はビザンツ帝国で生き続けますが、実質的な中身は違うものに変化していると考えた方がいいです。平安時代と鎌倉時代では同じ日本でも政治の仕組みがまるで違うようにね。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[入門キリスト教の歴史](#)

山野上 純夫 著。題名どおり、コンパクトでありながら、「パウロの書簡には処女懐胎のドグマはない」など、新鮮な指摘も多い。私はこの本からパウロにかんするメモをたくさん取った。

第19回 キリスト教の発展、分裂後の東西ローマ帝国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第18回 キリスト教の成立](#)

[次のページへ](#)
[第20回 インダス文明](#)

第20回 インダス文明

インドの文明を勉強するわけですが、ここで取り扱うのは「インド世界」と考えてくださいね。今のインドだけではなくて、スリランカ、バングラデシュ、パキスタン、ネパールも含めて「インド世界」です。地図を思い浮かべて印度洋に三角形に飛び出しているところ、ここをインドと考えがちなんですがヒマラヤ山脈から南は全部インド、くらいに考えてください。

インドに最初に生まれた文明がインダス文明でした（前2500～前1800）。インドの西側を流れる大河インダス川の中流から下流に成立しました。メソポタミア文明と同じで多くの都市国家が栄えていたようです。モヘンジョ＝ダロ、ハラッパーなどの都市の遺跡が有名。資料集にも写真ありますから確認してください。

インダス文明の特徴をいくつか見ておきましょう。

まず、これらの都市はすべて都市計画があつて計算の上で建設されているのが特徴。有名な話ですが上下水道が完備していたり、ダースターシュートが住宅にあったりするんだ。

それから、古代の都市国家というのは街の中心に神殿があるのが普通なんですが、インダス文明には神殿がないんです。都市の真ん中に何があるかというと、でっかい公衆浴場つまり風呂がある。で、どうもこの風呂が神殿の役割を果たしていたらしいんですね。浴場とか風呂とか言うとわかりにくい。いい日本語がある。沐浴場。沐浴という言葉、聞いたことがありますか。身を清めるの。テレビなんかで時々やってる。田舎の町で神社になんか捧げるお祭りがあるときに年男がふんどし一丁で真冬の海につかって身を清めているシーン。修驗道の行者さんが滝に打たれたりするのも広い意味での沐浴かもしれないね。あれです。

モヘンジョ＝ダロやハラッパーの人々は町の真ん中の沐浴場につかりながら身を清め神々に祈りを捧げていたのではないか、と想像されます。この風習は今のインドにも残っていて、ガンジス川のほとりにベナレスという聖地があるのですが、インドの人たちはここでガンジス川につかって沐浴しているね。これは、写真があります。5000年前のインダス文明の人々と同じような心のありようなんだと思います。そして、この心のありようは私たちにも分かるね。文明のルーツが似たところにあるんでしょう。

勘違いしやすいかもしれないから付け加えておくと、沐浴というのは身体を清潔にするのではないですよ。結果として清潔になるかもしれないけれど、それは目的ではない。ガンジス川なんてめちゃくちゃ汚いそうですからね。いろんな動物の死体がぷかぷか浮いていたりする。汚水も流れ込んでいる。清潔かどうかと聞かれれば不潔な川です。でも、宗教的には「淨い（きよい）」んです。その水で清めれば魂かなんのか分かりませんが、淨くなるんですな。それが、沐浴です。

淨いという意識があるということはその反対の意識も当然あるはずです。それが「穢れ（ケガレ）」です。ふたつ合わせてハレとケ。インダス文明はこの意識を強く持っていた。上下水道が完備していたといいましたが、これは衛生観念が発達していたのではなくてハレとケガレの意識が強かったためだろうね。インド人は現在までこの意識をずっと持ち続けていきます。これはすごく重要な問題を生みます。また、後ほど

触れましょう。

話がそれました。インダス文明の特徴に戻ろう。鉄は知らない、青銅器文明です。灌漑農耕と牧畜が主な生産手段ですが、メソポタミア地方と交易もおこなっていた。

文字はインダス文字という。これは未解読です。インダス文明では印章が出るんですね。写真ありますね。この印章、牛とか鹿とか動物の模様の横にちよこちよこと文字がある。これがインダス文字。こんな形でしか出てこないので解読できません。ちなみにクレタ文明のところで古代には牛が神聖な生き物だったといいましたが、インダスの印章に牛が描かれているのも興味深いね。インドではいまだに牛は神聖な生き物ですね。

このインダス文明が滅ぶのが前1800年頃。滅んだ原因はいろいろな説があって結局不明です。滅びつつあるときか滅んだ直後かはっきりしませんが、アーリア人という人たちがインドに侵入してきました。これは、例のインド=ヨーロッパ語族です。彼らは中央アジアから南下してきますが、そのうち西へ向かったグループがイラン高原に入りペルシア人になります。東に向かったのがアーリア人です。アーリア人はインドの先住民族、例えばドラビタ人などを征服したり、もしくは混血したりしながらインドに定住します。ドラビタ人というのはオーストラリアの先住民やニューギニア高地人のような肌の色の黒い人たちと同じ系統の民族です。インダス文明を築いた人々はドラビタ人ともいわれていますが、このへんははっきりしません。

アーリア人たちはまだ国家を建設する段階までにはなっていません。小さい集団ごとにインドの密林を開拓しながら村を作っていましたね。

前1000年頃アーリア人は、ようやくガンジス川流域まで拡がっていき、小さな国もたくさん生まれるようになりました。アーリア人も含めてインドにはいろんな民族系統がいて非常に多様なんですが、この時代くらいから彼らをまとめてインド人と呼んでおきます。

アーリア人がインドに拡がっていくあいだに、今までのインドを決定する文化が生み出されます。宗教と身分制度です。

アーリア人はインドの厳しい自然環境を神々として讃える歌を作っていました。このような自然讃歌の歌集を「ヴェーダ」といいます。最初に成立した歌集が「リグ=ヴェーダ」。その後も「サーマ=ヴェーダ」などいくつかのヴェーダが作られていきました。

このヴェーダを詠（うた）って神々を讃え、儀式をとりおこなう専門家が生まれてきました。これがバラモンと呼ばれる僧侶階級です。そしてこの宗教をバラモン教という。バラモンたちは神々に仕えるために非常に複雑な儀式を編みだした。そして、自分たちの中だけで祭礼の方法を独占します。他の人々には真似ができない。神々を慰め災いをもたらさないようにお願いできるのはわれわれバラモンだけである、ということでしたいにバラモン階級は特権階級になっていきました。同時にバラモン以外の身分も成立する。

最上級身分がバラモン、その次がクシャトリア、武人身分です。その次がヴァイシャと呼ばれる一般庶民、一番下がシュードラでこれは被征服民です。この身分のことをヴァルナといい、種姓と訳しています。

さらにこの四つのヴァルナのどれにも属さない最下層の身分として不可触民という人々がいます。図表を見るとシュードラ身分の下に書いてあるけど、観念としては「下」ではなくて、四つのヴァルナの外にある身

分。もっと言うと身分ですらない。どの身分にもしてもらえない人たち。もっともっと言うと、人ですらないかもしれないような扱いを受ける人たちです。

不可触民という呼び方もすごいでしょ。触っちゃいけないんだよ。なぜかって、かれらはケガレているからです。触るとケガレがうつる。かれらの正反対にあってケガレから最も遠いのがバラモン、というわけです。

このヴァルナ（種姓）は今までつづいています。ただ、バラモンの人が現在でも僧侶をしているとか、クシャトリアがみな軍人とか、そんなことはありません。農民のバラモンもいれば商売をしているシュードラもいます。種姓の四つの分け方は大きすぎるので、この身分は時代とともにどんどん細分化されてきました。細分化は職業や血縁によっておこなわれたようですが、この細かく分かれた身分をジャーティといいます。いわゆるカースト制というのは実はこのジャーティのことです。

プリントを見て下さい。現在のインド西部のある村の住民を調査した表です。バラモンからシュードラまで四つ、不可触民を含めると5つのヴァルナがあって、さらにたくさんのジャーティに分かれていますね。同じシュードラでも、クンビー、マーリー、ソーナール、スタール、ナーヴィーなどのジャーティに属する人々がこの村にはいます。もともとはそれぞれ、農民、金工、大工、床屋がそのジャーティの職掌、つまりジャーティが受け継いできた仕事、のようです。

ヴァルナもジャーティもひっくるめて現在のこの身分制度をカースト制と呼んでおきましょう。身分制度というのは差別と一体です。身分差別ね。人権を尊重する現代社会で身分差別なんてあってはならないです。現在のインド政府も当然そう考えていてカースト制をなくそうと努力しているしインドの憲法でも身分差別を禁じています。それでも、このカースト制は全然なくならない。差別は過去のことではありません。インド社会の発展にとってものすごい重荷になっていると思います。インド関連の本を読めばすぐにこの問題にぶちあたるよ。

たとえば最近インドで柔道を教えている日本人の話を読みました。子ども達を集めて指導しているんですが、まだ小さいときはみんな喜んで乱取りをするんだって。ところが8, 9歳くらいになると決まった相手としか乱取りをしなくなる。お前とお前が組め、とその人が命令すると渋々組むんですって。組むけど相手の身体に触れないようにチョイと胴着の端をつまむようにしてね。その日本人の先生は初めは理由が分からなかった。何年かして分かったんだって。カーストが違うと組みたくないんだ。特に相手が不可触民だよね。インドの子ども達も8, 9歳くらいになってカースト制の文化の中で生き始めていくんだね。インドでは新聞での結婚広告というのが盛んです。自分のプロフィールとか希望相手の条件なんかを新聞に載せるんですが、必ず自分のカーストを載せます。それ以外のカーストの人とは結婚しないことが前提なんですよ。

もし違うカーストの男女が恋愛して結婚しようとしたらどうなるか。多分親族やカースト仲間から猛反対です。それでも結婚したらどうなるかというと、二人はカーストから追放されて不可触民にされるんです。二人の間に生れた子供も不可触民です。とんでもないでしょ。結婚差別だね。

就職差別はどうか。例えばあなたがインド旅行でカルカッタの食堂に入った。ウェートレスのお姉さんが注文を取りに来ます。彼女はどの身分でしょうか。バラモン、クシャトリア？それとも他人にサービスする仕

事だから下層身分かな？

実は食堂なんかで働いている人はコックさんも含めてだいたいバラモン身分だそうです。なぜか分かりますか。もし、シュードラ身分の人を雇つたら、その店にはバイシャ以上の身分の人は来ません。自分より下の身分の者が作ったり出した水や食べ物を口にしたら自分の身分がケガレるからです。逆にバラモンが出す食事ならどの身分の者でも口にすることができる。だから学校帰りや仕事帰りにみんなでちょっと食事に行こうか、なんてことはインドではありえない。誰かを自分の家に食事に招待するなんていうことには非常に神経質だそうです。相手が同じカーストでなくてはいけないからね。

法律で身分制度が否定されていてもこんなふうに差別は続いているんです。いくら強調しても足りないくらい大きな問題だと思います。

特にものすごい差別にあえているのが不可触民と呼ばれる人たちです。

この不可触民に対する差別がどれだけすごいか。山際素男という人の本でびっくりしました。この人はインドに留学していて知り合いもたくさんいた。ある時知り合いになったインド人に案内されてドライブについてもらいましたが、田舎道を走ってる途中で白い服を着た集団が歩いていた。そしたら山際さんの乗ったクルマがその中の一人をローンとはねたんだ。山際さんびっくりして、今人をはねましたよ、止まって下さい、と言うんですが運転手のインド人の友人は無視して走り続ける。振り返って見ると倒れた人の周りにみんなが集まっているのが見えた。早く戻って手当をしなければ、と山際さんは運転手に訴えるんですが聞いてもらえない。同乗している他のインド人もばつが悪そうに知らんぷりをしているんですよ。これはひき逃げだと当然山際さんは思うわけ。

翌日新聞にひき逃げの交通事故の事件が載っていないか探すけど載っていない。だけどひき逃げは事実だから気にならくなってしまう。そこで、彼は知り合いのインド人を訪ねてこのことを訴えてまわるんですが、みんなは「そんなことは早く忘れなさい」って山際さんに忠告するんだね。あんな連中はどうだっていいんです、と言われる。はねられた人は不可触民だったんだよ。衝撃を受けた山際さんはそれから不可触民の実態を彼らの中に入ってレポートしています。信じられないような話がこれでもかと出てくるよ。

インドの憲法はカースト制を否定しています。実際は守られていないにしてもね。

この憲法を起草したのがインド共和国の初代法務大臣だったアンベードカル(1891~1956)という人です。このアンベードカルは不可触民出身なんです。

アンベードカルは不可触民でも例外的に経済的に豊かな家庭に生まれて学校に行くことができました。で、ホントに幸運な出会いとかがあって上級学校に進むことができて、頭も良かったのでアメリカの大学に留学して博士号をとったんです。アメリカでは差別はないからね。インドに帰ってから不可触民差別をやめさせる運動の指導者になっていろんな経過で初代法務大臣になった人です。

この人の伝記を見てもすごいよ。例えば、学校で先生は彼のノートを見てくれないので。質問にも答えてくれない。教師はバラモン身分です。ケガレるのがいやなの。それから体育の時間があります。終わったあとはのどが渴くからみんな水を飲む。水道はまだないから、水差しがあってそこからコップについて飲むですが、アンベードカルは水差しに触らせてももらえない。そしたら、親切なクラスメートがいて水を飲ませてくれた。その飲ませ方というのがこうです。クラスメートはアンベードカルをひざまずかせて、上を向いて口を開けさせる。で、水差しからその口めがけて水をそそぐの。今、われわれがそんなことさせられたら屈辱的だよね。でも、アンベードカルにとってはそのクラスメートが一番親切な奴だったんだ。

やがて差別廃止の運動に取り組むのも理解できますね。

ところで不可触民人口はどれくらいだと思いますか。インド人口の約二割もいるんですよ。不可触民の問題は決してごく少数の限られた人の問題ではありません。あ、少数者の問題なら無視していいというわけではないですよ。誤解のないように。

話を元に戻しましょう。このような身分制の始まりが前1000年くらい。これがバラモン教と一体となって生まれてきます。最上級身分バラモンは神に仕えるものとして他の身分の者を、まあ、脅かして威張っているんだね。

ところが、だんだん都市国家が成長し、都市国家間の交易も活発になってくると王や貴族であるクシャトリア、商人であるバイシャが実力をつけてきます。バラモンの下でへいこらしていることに不満を持つようになるんですね。

やがて、儀式ばかりのバラモン教に飽き足らない人たちによって新しい哲学思想が生み出されます。さらに、カースト制を批判する新しい宗教も出現してきました。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

不可触民—もうひとつのインド知恵の森文庫	山際素男著。カースト制度は、歴史上の問題ではない。現在もつづいているリアルタイムの問題である。日本人による不可触民の人々の内側からの貴重なレポートだと思う。衝撃的でした。
不可触民の道—インド民衆の...知恵の森文庫	山際素男著。同上。
インド社会と新仏教—アンベ...刀水歴史全書	山崎元一著。ちょっと学術的。アンベードカルを詳しく知りたい方はどうぞ。
不可触民とカースト制度の歴史	小谷汪之著。さらに学術的。上3冊とは違って、インド史研究者による歴史の本です。

第20回 インダス文明 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第19回 キリスト教の発展、分裂後の東西ローマ帝国](#)

[次のページへ](#)

[第21回 ウパニシャド哲学と新宗教](#)

□□□□□□□□□□

□□□□□□

第21回 ウパニシャッド哲学と新宗教

1 ウパニシャッド哲学

サイババっていう人知っていますか。一時期よくスペシャル番組でやってましたね。なんか、奇跡みたいなことをするインドの聖者です。空中から灰をつかみだしたりね。その灰を飲むと病気が治ったりするらしい。アメリカや日本に信者がたくさんいるようですが、今のサイババは実は二代目で100年くらい前にもっとすごいサイババがいました。今のサイババさんは、その生まれ変わりと自称している人です。インドといえばやはり精神世界、宗教大国で、きっとインドに行けばああいう聖者はゴロゴロいるんですよ。西欧のマスコミにうまくのった人が日本にも紹介されるんでしょうね。マスコミにも取り上げられず、信奉者もあまりいないような現役の聖者や修行者、苦行者はたくさんいます。本で読んだり、写真で見ただけですが、例えば20年間立ったままで座らない苦行者とか、自分を10平米の密室に閉じこめて10年間人と会わない修行をしている人とか、われわれには理解できない人たちがいる。

これは3000年の伝統なんです。悟りを求めて修行の世界に飛び込む人をインドは産み続けている。ここから、前回のつづきになります。バラモン教は祭式中心主義の宗教だった。儀式のやり方は秘伝としてバラモン身分の者だけに伝えられています。ところが、その儀式だけでは飽き足らないと思う者達が同じバラモン身分の中から出てくるんだ。で、かれらは密林の奥深くにこもって真理の探究をする。内面追求ね。いろんな難行苦行をしながら。そういう修行者たちの中で徐々に作られていった哲学が「ウパニシャッド哲学」です。ウパニシャッドとは「奥義（おうぎ）書」と訳している。奥深い真理を語る哲学、とでもいうところです。このウパニシャッド哲学が後のインド思想に大きな影響を与えることになります。インド思想の出発点はここにあるといつてもいいね。

ウパニシャッド哲学はどんなことをいっているか。

まずは人間の生死について。人は死んだらどうなるか。回答「輪廻転生」。

すべての生きとし生けるものは生と死を永遠に繰り返します。死んだら、またどこかでなにかに生まれ変わってくる。生き続け、また死にまた生まれ変わる。永遠に回転しつづける車輪みたいなものです。

死んでも生まれ変わることをインド人はどう捉えたかというと、これは苦です。死ぬことが苦しみなのは理解しやすいですが、インド人は生まれること、生きていることも苦しみと考える。飢饉、疫病、戦乱、天災、あらゆる不幸が人生にはついてまわる。生きることは苦痛とセットなんです。考えても見て下さい。現代でも生まれついたカーストによってはものすごくつらい人生が待っているんですよ。「今度生まれ変わってもあなたと一緒にになりたいわ」なんていうセリフとは無縁な世界です。絶対生まれ変わりたくないなんか無いわけ。こういうセリフが出てくる日本の風土はやはり暮らしがやすいんだろうね。

死んだあと何に生まれ変わるかということですが、これは生きている間にどんな行いをしたかで決まる。生きているということは、なにかの行為をしているわけで、その行為を「業（ごう）」といいます。どんな業を積んだかによって、次の生が決定される。簡単に言えば悪い業を積めば、虫けらに生まれるかもしれない。よい業を積めばましな生き物、人間とかね、に生まれ変われる。

人間に生まれたとしてもやはり人生は苦であるわけで、人々の願いは二度と生まれ変わらずにすむことです。クルクル廻る輪廻の輪から抜け出すこと、これが最高の願い。抜け出すことを「解脱（げだつ）」という。

「輪廻転生」と「業」、そして「解脱」。これが一つ目のポイント。

二つ目は宇宙の真理についてです。ウパニシャッド哲学では、宇宙の根本真理・根本原理が存在すると考えます。これを「ブラフマン」といいます。これを中国で漢訳したのが「梵（ぼん）」という言葉です。で、当然修行者たちはこの真理「ブラフマン」を自分のものにしたい、つかみたいと思う。

この宇宙の真理ですが、ユダヤ教やキリスト教でこれを神と考え、プラトンならイデアというんだろうと思う。でキリスト教やプラトンは神やイデアが遠いところにあって、人間はそれに向かっていく、それに少しでも近づく、そんなふうに考えていた。真理は自分の外のどこかにあるんだね。

ところが、ウパニシャッド哲学はこう考えます。宇宙の根本真理「ブラフマン」をつかもうとわれわれはどこかを探すのですが、考えてみれば「私」も宇宙の中の一部です。宇宙に根本原理があるならば、「私」も宇宙の一部なんだから、「私」の中にも宇宙の根本原理が宿っているはずなんです。どこか遠いところに真理があるのではなく、自分の中に真理はある。この辺がキリスト教やプラトンと違う発想ですね。

この「私」の中の真理を「アートマン」といいます。教科書では「個人の根本原理」と書いています。漢訳では「我（が）」。私の中に「アートマン」＝「我」があって、それが「ブラフマン」＝「梵」と究極的には同じモノであるとウパニシャッド哲学は教えます。これを「梵我一如（ぼんがいちによ）」とう。仏教用語で聞いたことある人もいるんじゃないかな。仏教にもこの哲学が引き継がれているからね。

誰もが自分の中にアートマンを持っているわけですがそれが簡単には自覚することができない。なぜかといういろいろな物質や欲望によって心が曇っているからです。だから、何らかの修行によって心の曇りを取り払い、自分の中に「アートマン」を見つけだしたらどうなるかというと、それは「ブラフマン」と同じなわけですから、二つは一体化する。一体であることを「私」が理解する。その瞬間に「私」は「宇宙」と一体となるわけね。一体となるということは、言い方を変えると自分が消えるということです。

自分が消える、ということは「業」がなくなるということです。自分が宇宙と一つになるんだから、私の行為というのも消えるわけだ。「業」が消えたらどうなるか。輪廻転生の原因は「業」でしたね。私が消え「業」が消えたら、そこには輪廻するものがなくなってしまうんだ。これが解脱ということです。究極目標です。

これがウパニシャッド哲学の大雑把なところです。この思想に基づいて多くの修行者が梵我一如実現のために修行生活に入っていったんだね。そして、それは現在まで続いている。

どうすれば、心の曇りを取り払い「アートマン」を自覚するかというと、これは色々な人が色々な方法を

唱える。仏教もその方法の一つだし、ヨーガもそういうモノの一つでしょう。ヨーガにも色々な種類があるようですが、よく知られているのが健康体操みたいなやつね。あれは本来、身体と精神を極限まで追いつめようとしてるんです。肉体を限界まで追いつめて追いつめて、欲望とか脂肪とか余分なものを捨て去ったその後に残る最後のもの、「アートマン」をつかまえようとしているんだ。

話が元に戻りますが、このような思想が前500年をはさんだ数百年くらいの間に生まれて、インド世界に広まった。梵我一如とか輪廻転生、業、解脱、という考えはインド人の常識になっていきます。この後インドに生まれる多くの宗教はこの思想を下敷きにしているんだ。

2 ジャイナ教

ウパニシャッド哲学を土台にした新宗教が前5世紀頃に登場してきました。色々な宗派が生まれたようですが後世まで影響力をもったものが二つ。これが仏教とジャイナ教です。

この時期に新宗教が登場した背景を理解しておこう。

農業の発展にともなって特にガンジス川流域にいくつかの強国が成長してきます。支配者の王や武人はクシャトリア身分です。また、交易も活発化してきますから、商業の担い手だったヴァイシャ身分の中には王侯貴族に劣らない経済力を持ったものもでてくる。

クシャトリアやヴァイシャが力をつけてきても、バラモンの方が身分的には偉くて威張っている。バラモンは経済力や武力は無いけれど、僧侶だからね、神々を盾にとって威張っている。身分的にはクシャトリアもヴァイシャもバラモンの上にはなれない。こんな、面白くないことはないわけで、クシャトリア、ヴァイシャは、バラモンの権威を否定してカースト制を打ち壊してくれる宗教や思想を待ち望んでいたわけです。

森林にはウパニシャッド哲学を深める修行者たちがたくさんいて、この中から新しい時代に合った宗教が生まれて来たというわけだ。それが、仏教、ジャイナ教。

この二つの宗教の共通点はともに開祖がクシャトリア出身であること、バラモンの権威を批判しカースト制を否定したことです。

まず、ジャイナ教からいきましょう。

開祖はヴァルダマーナ（前563～前477ころ）。尊称をマハーヴィーラといいます。（偉大なる英雄）という意味だそうです。かれは輪廻の原因である業を身体にくついた物質と考えます。苦行をすることによって前世からくついている業を消し、新たな業がくつかないようにできると考えた。そのために苦行と徹底した不殺生を説きます。

不殺生って分かりますね。生き物を殺さないことね。仏教でも使う言葉だから知っているね。なぜ、生き物を殺さないか分かりますか。ヨーロッパ的な動物愛護精神とは全然関係ないからね。輪廻転生をインドの人は信じていましたね。死んだら何か別のものになって生まれ変わる。ここはいいですね。だから、たとえば蚊が腕に止まって血を吸っていたらパチンとたたいて殺したくなるんですが、輪廻を信じていたらこれはできません。だって、この蚊は去年死んだお爺さんの生まれ変わりかも知れないんですよ。

菜食主義も同じ発想から生まれてきます。レストランで定食を注文したら焼き肉がでてきた。しかしこの焼き肉になっちゃった牛はひょっとしたら三年前に死んだ母さんの生まれ変わりかも知れない。そう考えたらとても食べられませんね。

ここが、不殺生や菜食主義の生まれてくる理由です。ダイエットのために菜食主義をしたい人は輪廻を信じて下さい。肉を食べる気にはならなくなるよ。

話を戻しますが、ジャイナ教は徹底した不殺生です。絶対に生き物を殺さない。資料集にジャイナ教徒の写真があるから見て下さい。マスクしているでしょ。これ、何かというと息を吸うときに空中の虫を吸い込んで殺さないためです。それから、歩いたら蟻とかを踏んで殺すといけないので、できる限り歩きません。じーっと座って信者がお布施してくれるのを待つのです。どうしても歩かなければならないときはほうきを持ってね、一步一步地面をはいて虫がないことを確認してから足を踏み出すのです。ゆっくりしか歩けないけどね、修行ですから仕方がない。

この写真の修行者は服を着ていますが、マハーヴィーラ自身は素っ裸だった。一切の財産を持たないので、服まで捨ててしまいます。後の時代には服を着るグループもできましたが初期のジャイナ教とはみんなすっぽんぽんです。今でも全裸の修行者はインドにいますよ。昔テレビを見ていたらインドの聖地のイベントをNHKニュースでやっていましたが全裸の男がチラッと写っていましたね。全部写ってましたからね。NHK史上に残る事件だと思うね。ジャイナ教徒かどうかは分からないけどね。

苦行の方は基本的には断食です。業を消したあとは新しい業が身に付かないように断食しながら餓死することをすすめていたようです。梵我一如を実現したら生きている意味もないからそのまま死んでしまいましょうということです。

ジャイナ教は現在でも信者がいるようです。商人などに多く、お金持ちの人が多いようです。農業をやると土の中のミミズやなんかを殺すかも知れないから、古くからジャイナ教徒は商業に従事したようです。商人ではありませんが、インド独立の父として尊敬されているガンジーもジャイナ教徒の家に生まれていますね。

3 仏教

仏教の開祖はガウタマ＝シッダールタ（前563～前483頃）。尊称はブッダ。生没年は色々な説があってホントのところはよく分かりません。マハーヴィーラも同じ。インド人は歴史記録にあまり興味がないんですよ。どうせ生死を繰り返すんですね。年代を記録したって仕方がないと思っていたようです。ブッダというのは「悟りをひらいた者」という意味です。ガウタマ＝シッダールタ以前にもブッダになった者がいたとも伝えられています。皆さんも悟りをひらいたらブッダと名乗ってかまいません。みんなが信じてくれたらあなたも立派なブッダです。

よくお釈迦様といいますが、シャカというのはガウタマの属した部族の名前です。ガウタマはシャカ族の王子に生まれます。嫁さんももらって、子供も産まれ何不自由のない生活を送るんですが、人生の無常を感じて国や家族を捨てて出家して修行の道に入ります。

森に入れば似たような修行者がたくさんいて、ガウタマは仲間を見つけて修行の日々に明け暮れた。このころからすでにヨーガがあって、ヨーガの先生についていたこともあった。断食もやったようです。仲間がこいつ死んだんじゃないか、と思うくらいの断食だった。

ところがいくら過激な苦行をしても、ちっとも悟れないのです。そこで、ガウタマは苦行によって悟りをひらくことをあきらめて、里に下りてきます。仲間たちはあいは修行が苦しくなって逃げたんだ、なんて言うんですが。

里に下りて川の畔でガウタマが一息ついているときです。修行をやめてきたばかりだからガウタマは多分ガリガリに痩せていてフラフラしていたんだろう。村の娘さんが「お坊さん、どうぞ」とミルクを恵んでくれました。その、村娘の名前がスジャータ。コーヒーミルクにあるでしょ。ここからとったんですよ。

ついでに話しておきますが、仏教でもジャイナ教でも何でもインドの宗教に共通ですが、悟りをひらいで解脱できるのは、出家して修行している人だけですからね。在家で、普通の暮らしをしている人は決して解脱できません。在家信者も救われる仏教が生まれるのはあとのことです。

では、在家の人たちの救いはどこにあったか。それは、修行しているお坊さんにお布施をすることなんです。解脱はできないけれど、解脱を目指している人のお手伝いをすることでよい業を積むことができる。よい業を積めば今度生まれ変わるときに今より少しでもよい所に生まれ変わることができる、そういう考えです。

さて、スジャータからミルクをもらい生命力がよみがえったガウタマは、菩提樹の下で瞑想します。そうしたらついに悟ってしまったんですね。ブッダとなりました。

ここから先が後の仏教の展開にとって大事なところです。

悟ったガウタマはこう考えた。この悟りは、とても言葉で表現できるものではない。言葉で説明しても誤解されるだけだ。だから、人に教えるのはやめておこう、とね。

ところが、すぐに思い返します。いやいや、悟りに近いところにいながらあと一步のところで悟れない人がたくさんいる。私が教えを説くことによってそういう人々が悟れるようになるかも知れない。水面すれすれで咲いている蓮の花をチョイと引っ張り上げてやることで水上で咲けるようにね。水上が悟りの世界です。というわけで、布教を開始します。布教を決心して最初に出会ったのが苦行時代の仲間。ガウタマが来るのを見て、「苦行から脱落した奴だから、相手にせずにおこうぜ」とかれらは示し合わせるのですが、近づいて来たガウタマの顔を見て「こいつは変わった」と思う。さらにガウタマの説法を聞いて彼の悟りを確信して最初の弟子になったということです。

ガウタマの説いた仏教とはどんなものだったか。

キーワードは四諦（したい）と八正道（はっしょうどう）です。

まず四諦。これは四つの真理という意味です。まず一番目の真理、人生は苦である。これはいいですね。ウパニシャドの基本ですね。二番目、苦しみには原因がある。三番目、原因を取り除けば苦しみも消える。おう、なかなか論理的ですね。四番目、原因を取り除く方法は八正道である。期待が高まりますね。八正

道ってなんでしょうね。早く知りたいですね。

その八正道です。高まった期待をいきなりスカしてくれます。八つの正しい道です。一、正しく見る。二、正しく考える。三、正しく話す。四、正しく行動する。五、正しく生活する。六、正しく努力する。七、正しく思いめぐらす。八、正しい心を置く。

これはいったい何なんでしょうね。当たり前のことじゃないか、と思いませんか。そうなんです。でもこれが仏教の特徴なんです。ブッダは苦行を否定します。極端を避ける。中道という。

ジャイナ教に比べるとハッキリしない教えのように感じますが、当時の人にとてはこのことが逆に新鮮だったんではないかと思います。だって、命を落とすほど苦行するのが当たり前の内でブッダは苦行を否定して、理論によって悟る道を示したんですから。

仏教もジャイナ教も王侯貴族、クシャトリアやヴァイシャに保護されて発展していきました。たとえば平家物語のはじめにでてくる祇園精舎というのは有力商人がブッダの教団のために寄進した庭園を漢訳したものです。

ジャイナ教は今でも信者さんがいると話しましたが、仏教徒はほとんどいません。13世紀初め、仏教の教団根拠地であったビクラマシラー寺院というのがイスラム勢力に破壊されてインドの仏教は消えました。寺が壊されたくらいで無くなってしまうということは、もうすでに一般民衆の信者がいなかつたと思う。中道の考え方はインドでは受けが悪かったかも知れない。

現在のインドの仏教徒は前回話したアンベードカルに始まります。アンベードカルは不可触民解放の運動を続けて、結局カースト制がある限り差別はなくならないと考えた。カースト制を否定するインドの思想を調べて仏教に巡り会ったんです。カースト制のないインド社会を作るため仏教に改宗した。みんなにも改宗をすすめました。

ただ、改宗したのはアンベードカルと同じ不可触民のカーストの人だけでした。現在でもそれ以外の人にはなかなか広がっていないようです。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

世界の歴史（3） 古代インドの文明と社会	山崎 元一著。古代インド史を話すと、どうしても思想史に偏てしまいがちです。私の授業は、その典型。足りない分は、ぜひこういう概説書でおぎなってください。これは一番、最近のシリーズ。
世界の歴史（6） 古代インド河出文庫	佐藤 圭四郎著。これも定番、河出書房の「世界の歴史」シリーズの一冊。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第20回 インダス文明](#)

[次のページへ](#)
[第22回 インドの諸王朝（大乗仏教、ヒンドゥー教）](#)

縹、縹々縹峨◆隠々遁区惣◆亥、ア葱嶺サ乘路縷√ヲ縹々縹峨え縷シ謨呻沙

縲縲 縲隨ヤ◆抵シ貞貞 縲縗、縲ウ縲峨◆隠ク通区惣◆亥、ア葱嶺サ乘路縲、ヲ縲ウ縲峨え縲シ謨呻シ峨

縛械え縛工縛、譜

繅 繩縷や縄ウ縄ク縄ケ蟻暁ホ[△]油縛[△]逕濫[△]U縄後◆縛◆[△]￥縛、縛九◆[△]蟆冗視蝗入縛[△]荳[△]縛九[△] i 蟒[△]蝗入縛梧◆[△]長[△]縛
励[△]※縛上 k 縛[△]縛悟燕◆[△]穗[△]也工鬆◆[△]テ 縛[△]呴[△]サ」隣[△]溢[△] ↑ 蝗入縛後さ縛シ縄[△]縛[△]ウ蝗入縛イ縛械[△]ぎ 縛[△]ウ蝗入縛

縲縉／「縲」の字は、縲縉の「縲」の字が古くから誤用されていて、正しくは「縲」の字である。縲縉の「縲」は、縲縉の「縲」の字が古くから誤用されていて、正しくは「縲」の字である。

縲縳縬械え縕^ト縕、譜昂◆「壹我サ」透ヨ縺ヨ邇九' 譜牙錐縺^ト縕「縺^ト縕ア縕シ縺オ邇具シ井八榦燕◆抵シ厄シ空懷燕◆抵シ難シ帝◆シ峨テ縺呐

繩莉乗路縛イ縛日豺ア縛◆未董ゆテ縷よ快蟾阪テ縛呐ゆい縷キ縛ア縛シ縷オ邇九◆蜊玲婿縛ヨ縷オ縛工縛ウ縷ヤ邇句寄
縛イ縛◆三蝗入縷呈サ◆U縛励◆縛イ縛肴焚蜊 ∞ ク◆コ縷定剣谿コ縛励◆縲ゆ○縷後r縛ゆ→縛ア蟠梧t縛励※莉
乗路縛オ蛭-萱昂@縛溢→萱昂:・縷峨I縛ヲ縛◆U縛呐よ帆豊サ縷よ垓蜉帙テ縛シ縛I縛上ム縛オ縛械↓縷医k謾
驟阪r隋後三縷医三縛オ縛I縛」縛溢ゆ%縛シ縛縛オ縛械→縛◆三縛ヨ縛シ縲梧ウ縛輔阪→險ウ縛励※縛◆U縛呐'豕
募セ九テ縛シ縛I縛上◆%蟠ウ溢◆↑蟠ウ透ヨ縛イ閨◆:縛ヲ萱九&縛◆ゆ%縛シ縛縛オ縛械◆莉乗路縛ヨ謎呐:縛オ蟠
ア髪ソ縛輔I縛ヲ縛◆k縷医三縛ア縛呐

縲縲「縲^キ縩^カ」縩^カ縲^キ邇九◆縲縩◆縩縩◆縩械 r 蛭^サ縲縩□遏^カ謀^ア邇代^カ」イ蟠也「托沙

縷、縯ウ縯峨◆驚ク邇区惣◆亥、ア葱嶺サ乗路縲√ヲ縯ウ縯峨え縯シ謨呻沙

縲縈「縒^キ縕」、縕^シ縈^オ通九◆莉乘落縺後 i 縺^シ縺^ヨ隧^ア鬱^後’ 蟻壹>縺^シ縺^ア縺^ル’ 縷^シ滄^シ闇^シ縺^シ縺^ル縒^キ縕」縒、縕頑落縈^ル戻^キ縺励※縺◆^シ縺^ル キ縺^ル キ縕^シ縕^シ「縕^シ縺^シ讓^シ蟲^{ムカシ}」 ↓ 蜘^シ蛛^シ締^シ縺^ル k 蝴^シ蝶^シ締^シ縺^ル 縒^シ蛾^シ☆縺^シ縺^シ蟲^{ムカシ}懈^シ抄^シ縺励◆
◆縒^シ雍^シ 縺^シ縺^シ g 縺◆

縊ツ縊ヰ縄」縄シ縄頑惣

繰縲縲械え縯工縯、諧昂◆縲「縲キ縯」縯シ縲オ遁九' 豁サ縺ヤ縺イ蛻◆」ゆ @ 縺ヲ縺◆" 縺セ縺励◆縲ヨヤ。縺オ驥崎
ヲフ↑遁区惣縺後け縲キ縯」縯シ縯頑惣◆茨シ台ク也工縲懶シ謎ケ也工◆峨ゆ%縲後◆縲、縯ウ縯ウ邊サ縺ヨ豌第酪縺梧髮
驥崎◆下縲、縯ウ縯峨→縺◆≥縲医 j 縺ウ迴セ蟲イ縺ヨ縲「縯輔ギ縯九セ縲シ縯ウ縺オ警ケ謚蟲-縺後≠縲九◆縺ア縺
呐' 縺フう縯ウ縯峨◆隘ソ蛹鈴K 縲ヨ髮驥阪@縺溢フ→縺◆≥皇ス縺ア縺呐るヲ夜◆縺ウ縯励N 縲キ縯」縯励ハ縺

縷、縯ウ縯峨◆隠ケ邇区惣◆亥、ア葱嶺サ乘路縲、ノ縯ウ縯峨え縯シ謨呻

螟、葱嶺、乘落縛、縛？※

縷、縯ウ縯峨◆驚ケ遁区惣◆亥、ア葱嶺サ乗路縲、ノ縯ウ縯峨え縯シ謨呻沙

縲縉悶ヤ縲縛ヨ董。閨◆◆縷、縡ウ縡牙◆蠶溢↓縺◆◆縺ヨ縺ア董。閨◆◆縷-縡オ縡シ縡励' 縺◆ k 縺イ縺雍m縺オ
縺ツ縺ウ縡雍←縡雍セ縡医エ縡シ縡代' 蟒コ縺ヲ縡峨！縺溢ゆ○縺ヨ蠶-壹九↓縺ツ蛻◆ c 縺ヲ縡ゆ▲縡峨▲縺ヲ縺阪
◆縡悶ヤ縡縺ヨ驕コ鬪イ縺ヨ董驛イ縡貞沂闡ヤ縺呐 k 縡雍ニ縺呐ゆ%縺ヨ縡ケ縡医エ縡シ縡代◆莉乘路縺ヨ蟒◆' 縡翫
→縺イ縡ゆ↓縡「縡ケ縡「蛻◆呴縺オ蟒◆' 縺」縺ヲ縺◆" 縺セ縺呐よ律譜ヤ縺オ縡ゆ≠縡翫シ縺呐◆縺ユセ九::縺-譜
牙錐縺I豕暮嘒墓]縺ヨ莠秘嘒蟬斐ゆ≠縡後◆縡ケ縡医エ縡シ縡代' 葦]蝗入鬚イ縺オ蠖「縡貞、峨::縺溢△縡弱ニ縺
呐ゆ□縺九 i 縺✓≠縺ヨ莠秘嘒蟬斐◆壹九↓縡ゆケ縡◆ム縺ヨ驕コ鬪イ縺ヨ董驛イ縺悟沂闡ヤ縺輔 I 縺ヲ縺◆ k 縺✓
%縺イ縺オ縺I縺]縺ヲ縺◆ k 縺よ律譜ヤ螟イ蝗入縺ゆ i 縺◆ k 縺雁ツコ縺ヨ蟬斐◆壹九↓縺ツ縺ゆ k 縺✓%縺イ縺オ縺I
縺]縺ヲ縺◆ k 縺

縲壹也阜壹₁縺₂莉丞。斐₁縺₂縺₃縺上 i 縺₁≠縲九°。蛻₁°。縲峨₁↑縺₂ニ縺₃縺溢₁￥縺輔 s 縺₂ k 縺₃ ク縺九
i 繩悶₁ヤ縯縺₂驕₁鬪₂縺₃縺₄縲雍←縲鍋 I-縺九￥蛻₁° c 縲峨₁ | 縺₂邀₁邊偵₂ノ縺溢₁>縺₂模上 & 縺上↑縺」縺₂
縺₁ k 縺₂ ク%縺₃縯悶₁ヤ縯縺₂驕₁鬪₂縺₃縲雍→縲剝₁サ剩₂°蛻₁°医₂°縺」縺励 c 縲奇シ峨→縺₁≥縲雍₂干縺呐よ₃
ソ蜿₁蟻九 & 縲雍₂干邀₁縺₂縲雍→縲偵す縯」縯 I 縺₂縺₃≥縺₄縺₅縺₆縲雍%縺九 i 譚·縺₂縺₃ k 縲峨@縺₁干縺呐
縲縺₁縲雍₂。縺ア隱₁縲雍₂□縲雍₃干縺呐' 壱也阜壹₁縺₂莉剩₃°蛻₁縲帝寔縲₂「◆縲画焚蜊₁～コ蛻₂◆₃莠₁鬪₂縺₃縺₄
縺 I 縺九○縺₁干縺呐₂ ク縺₃ 縲₄ 縺₅ 縺₆ 縺₇ 縺₈ 縺₉ 縺₁₀ 縺₁₁ 縺₁₂ 縺₁₃ 縺₁₄ 縺₁₅ 縺₁₆ 縺₁₇ 縺₁₈ 縺₁₉ 縺₂₀ 縺₂₁ 縺₂₂ 縺₂₃ 縺₂₄ 縺₂₅ 縺₂₆ 縺₂₇ 縺₂₈ 縺₂₉ 縺₃₀ 縺₃₁ 縺₃₂ 縺₃₃ 縺₃₄ 縺₃₅ 縺₃₆ 縺₃₇ 縺₃₈ 縺₃₉ 縺₄₀ 縺₄₁ 縺₄₂ 縺₄₃ 縺₄₄ 縺₄₅ 縺₄₆ 縺₄₇ 縺₄₈ 縺₄₉ 縺₅₀ 縺₅₁ 縺₅₂ 縺₅₃ 縺₅₄ 縺₅₅ 縺₅₆ 縺₅₇ 縺₅₈ 縺₅₉ 縺₆₀ 縺₆₁ 縺₆₂ 縺₆₃ 縺₆₄ 縺₆₅ 縺₆₆ 縺₆₇ 縺₆₈ 縺₆₉ 縺₇₀ 縺₇₁ 縺₇₂ 縺₇₃ 縺₇₄ 縺₇₅ 縺₇₆ 縺₇₇ 縺₇₈ 縺₇₉ 縺₈₀ 縺₈₁ 縺₈₂ 縺₈₃ 縺₈₄ 縺₈₅ 縺₈₆ 縺₈₇ 縺₈₈ 縺₈₉ 縺₉₀ 縺₉₁ 縺₉₂ 縺₉₃ 縺₉₄ 縺₉₅ 縺₉₆ 縺₉₇ 縺₉₈ 縺₉₉ 縺₁₀₀ 縺₁₀₁ 縺₁₀₂ 縺₁₀₃ 縺₁₀₄ 縺₁₀₅ 縺₁₀₆ 縺₁₀₇ 縺₁₀₈ 縺₁₀₉ 縺₁₁₀ 縺₁₁₁ 縺₁₁₂ 縺₁₁₃ 縺₁₁₄ 縺₁₁₅ 縺₁₁₆ 縺₁₁₇ 縺₁₁₈ 縺₁₁₉ 縺₁₂₀ 縺₁₂₁ 縺₁₂₂ 縺₁₂₃ 縺₁₂₄ 縺₁₂₅ 縺₁₂₆ 縺₁₂₇ 縺₁₂₈ 縺₁₂₉ 縺₁₃₀ 縺₁₃₁ 縺₁₃₂ 縺₁₃₃ 縺₁₃₄ 縺₁₃₅ 縺₁₃₆ 縺₁₃₇ 縺₁₃₈ 縺₁₃₉ 縺₁₄₀ 縺₁₄₁ 縺₁₄₂ 縺₁₄₃ 縺₁₄₄ 縺₁₄₅ 縺₁₄₆ 縺₁₄₇ 縺₁₄₈ 縺₁₄₉ 縺₁₅₀ 縺₁₅₁ 縺₁₅₂ 縺₁₅₃ 縺₁₅₄ 縺₁₅₅ 縺₁₅₆ 縺₁₅₇ 縺₁₅₈ 縺₁₅₉ 縺₁₆₀ 縺₁₆₁ 縺₁₆₂ 縺₁₆₃ 縺₁₆₄ 縺₁₆₅ 縺₁₆₆ 縺₁₆₇ 縺₁₆₈ 縺₁₆₉ 縺₁₇₀ 縺₁₇₁ 縺₁₇₂ 縺₁₇₃ 縺₁₇₄ 縺₁₇₅ 縺₁₇₆ 縺₁₇₇ 縺₁₇₈ 縺₁₇₉ 縺₁₈₀ 縺₁₈₁ 縺₁₈₂ 縺₁₈₃ 縺₁₈₄ 縺₁₈₅ 縺₁₈₆ 縺₁₈₇ 縺₁₈₈ 縺₁₈₉ 縺₁₉₀ 縺₁₉₁ 縺₁₉₂ 縺₁₉₃ 縺₁₉₄ 縺₁₉₅ 縺₁₉₆ 縺₁₉₇ 縺₁₉₈ 縺₁₉₉ 縺₂₀₀ 縺₂₀₁ 縺₂₀₂ 縺₂₀₃ 縺₂₀₄ 縺₂₀₅ 縺₂₀₆ 縺₂₀₇ 縺₂₀₈ 縺₂₀₉ 縺₂₁₀ 縺₂₁₁ 縺₂₁₂ 縺₂₁₃ 縺₂₁₄ 縺₂₁₅ 縺₂₁₆ 縺₂₁₇ 縺₂₁₈ 縺₂₁₉ 縺₂₂₀ 縺₂₂₁ 縺₂₂₂ 縺₂₂₃ 縺₂₂₄ 縺₂₂₅ 縺₂₂₆ 縺₂₂₇ 縺₂₂₈ 縺₂₂₉ 縺₂₃₀ 縺₂₃₁ 縺₂₃₂ 縺₂₃₃ 縺₂₃₄ 縺₂₃₅ 縺₂₃₆ 縺₂₃₇ 縺₂₃₈ 縺₂₃₉ 縺₂₄₀ 縺₂₄₁ 縺₂₄₂ 縺₂₄₃ 縺₂₄₄ 縺₂₄₅ 縺₂₄₆ 縺₂₄₇ 縺₂₄₈ 縺₂₄₉ 縺₂₅₀ 縺₂₅₁ 縺₂₅₂ 縺₂₅₃ 縺₂₅₄ 縺₂₅₅ 縺₂₅₆ 縺₂₅₇ 縺₂₅₈ 縺₂₅₉ 縺₂₆₀ 縺₂₆₁ 縺₂₆₂ 縺₂₆₃ 縺₂₆₄ 縺₂₆₅ 縺₂₆₆ 縺₂₆₇ 縺₂₆₈ 縺₂₆₉ 縺₂₇₀ 縺₂₇₁ 縺₂₇₂ 縺₂₇₃ 縺₂₇₄ 縺₂₇₅ 縺₂₇₆ 縺₂₇₇ 縺₂₇₈ 縺₂₇₉ 縺₂₈₀ 縺₂₈₁ 縺₂₈₂ 縺₂₈₃ 縺₂₈₄ 縺₂₈₅ 縺₂₈₆ 縺₂₈₇ 縺₂₈₈ 縺₂₈₉ 縺₂₉₀ 縺₂₉₁ 縺₂₉₂ 縺₂₉₃ 縺₂₉₄ 縺₂₉₅ 縺₂₉₆ 縺₂₉₇ 縺₂₉₈ 縺₂₉₉ 縺₃₀₀ 縺₃₀₁ 縺₃₀₂ 縺₃₀₃ 縺₃₀₄ 縺₃₀₅ 縺₃₀₆ 縺₃₀₇ 縺₃₀₈ 縺₃₀₉ 縺₃₁₀ 縺₃₁₁ 縺₃₁₂ 縺₃₁₃ 縺₃₁₄ 縺₃₁₅ 縺₃₁₆ 縺₃₁₇ 縺₃₁₈ 縺₃₁₉ 縺₃₂₀ 縺₃₂₁ 縺₃₂₂ 縺₃₂₃ 縺₃₂₄ 縺₃₂₅ 縺₃₂₆ 縺₃₂₇ 縺₃₂₈ 縺₃₂₉ 縺₃₃₀ 縺₃₃₁ 縺₃₃₂ 縺₃₃₃ 縺₃₃₄ 縺₃₃₅ 縺₃₃₆ 縺₃₃₇ 縺₃₃₈ 縺₃₃₉ 縺₃₄₀ 縺₃₄₁ 縺₃₄₂ 縺₃₄₃ 縺₃₄₄ 縺₃₄₅ 縺₃₄₆ 縺₃₄₇ 縺₃₄₈ 縺₃₄₉ 縺₃₅₀ 縺₃₅₁ 縺₃₅₂ 縺₃₅₃ 縺₃₅₄ 縺₃₅₅ 縺₃₅₆ 縺₃₅₇ 縺₃₅₈ 縺₃₅₉ 縺₃₆₀ 縺₃₆₁ 縺₃₆₂ 縺₃₆₃ 縺₃₆₄ 縺₃₆₅ 縺₃₆₆ 縺₃₆₇ 縺₃₆₈ 縺₃₆₉ 縺₃₇₀ 縺₃₇₁ 縺₃₇₂ 縺₃₇₃ 縺₃₇₄ 縺₃₇₅ 縺₃₇₆ 縺₃₇₇ 縺₃₇₈ 縺₃₇₉ 縺₃₈₀ 縺₃₈₁ 縺₃₈₂ 縺₃₈₃ 縺₃₈₄ 縺₃₈₅ 縺₃₈₆ 縺₃₈₇ 縺₃₈₈ 縺₃₈₉ 縺₃₉₀ 縺₃₉₁ 縺₃₉₂ 縺₃₉₃ 縺₃₉₄ 縺₃₉₅ 縺₃₉₆ 縺₃₉₇ 縺₃₉₈ 縺₃₉₉ 縺₄₀₀ 縺₄₀₁ 縺₄₀₂ 縺₄₀₃ 縺₄₀₄ 縺₄₀₅ 縺₄₀₆ 縺₄₀₇ 縺₄₀₈ 縺₄₀₉ 縺₄₁₀ 縺₄₁₁ 縺₄₁₂ 縺₄₁₃ 縺₄₁₄ 縺₄₁₅ 縺₄₁₆ 縺₄₁₇ 縺₄₁₈ 縺₄₁₉ 縺₄₂₀ 縺₄₂₁ 縺₄₂₂ 縺₄₂₃ 縺₄₂₄ 縺₄₂₅ 縺₄₂₆ 縺₄₂₇ 縺₄₂₈ 縺₄₂₉ 縺₄₃₀ 縺₄₃₁ 縺₄₃₂ 縺₄₃₃ 縺₄₃₄ 縺₄₃₅ 縺₄₃₆ 縺₄₃₇ 縺₄₃₈ 縺₄₃₉ 縺₄₄₀ 縺₄₄₁ 縺₄₄₂ 縺₄₄₃ 縺₄₄₄ 縺₄₄₅ 縺₄₄₆ 縺₄₄₇ 縺₄₄₈ 縺₄₄₉ 縺₄₅₀ 縺₄₅₁ 縺₄₅₂ 縺₄₅₃ 縺₄₅₄ 縺₄₅₅ 縺₄₅₆ 縺₄₅₇ 縺₄₅₈ 縺₄₅₉ 縺₄₆₀ 縺₄₆₁ 縺₄₆₂ 縺₄₆₃ 縺₄₆₄ 縺₄₆₅ 縺₄₆₆ 縺₄₆₇ 縺₄₆₈ 縺₄₆₉ 縺₄₇₀ 縺₄₇₁ 縺₄₇₂ 縺₄₇₃ 縺₄₇₄ 縺₄₇₅ 縺₄₇₆ 縺₄₇₇ 縺₄₇₈ 縺₄₇₉ 縺₄₈₀ 縺₄₈₁ 縺₄₈₂ 縺₄₈₃ 縺₄₈₄ 縺₄₈₅ 縺₄₈₆ 縺₄₈₇ 縺₄₈₈ 縺₄₈₉ 縺₄₉₀ 縺₄₉₁ 縺₄₉₂ 縺₄₉₃ 縺₄₉₄ 縺₄₉₅ 縺₄₉₆ 縺₄₉₇ 縺₄₉₈ 縺₄₉₉ 縺₅₀₀ 縺₅₀₁ 縺₅₀₂ 縺₅₀₃ 縺₅₀₄ 縺₅₀₅ 縺₅₀₆ 縺₅₀₇ 縺₅₀₈ 縺₅₀₉ 縺₅₁₀ 縺₅₁₁ 縺₅₁₂ 縺₅₁₃ 縺₅₁₄ 縺₅₁₅ 縺₅₁₆ 縺₅₁₇ 縺₅₁₈ 縺₅₁₉ 縺₅₂₀ 縺₅₂₁ 縺₅₂₂ 縺₅₂₃ 縺₅₂₄ 縺₅₂₅ 縺₅₂₆ 縺₅₂₇ 縺₅₂₈ 縺₅₂₉ 縺₅₃₀ 縺₅₃₁ 縺₅₃₂ 縺₅₃₃ 縺₅₃₄ 縺₅₃₅ 縺₅₃₆ 縺₅₃₇ 縺₅₃₈ 縺₅₃₉ 縺₅₄₀ 縺₅₄₁ 縺₅₄₂ 縺₅₄₃ 縺₅₄₄ 縺₅₄₅ 縺₅₄₆ 縺₅₄₇ 縺₅₄₈ 縺₅₄₉ 縺₅₅₀ 縺₅₅₁ 縺₅₅₂ 縺₅₅₃ 縺₅₅₄ 縺₅₅₅ 縺₅₅₆ 縺₅₅₇ 縺₅₅₈ 縺₅₅₉ 縺₅₆₀ 縺₅₆₁ 縺₅₆₂ 縺₅₆₃ 縺₅₆₄ 縺₅₆₅ 縺₅₆₆ 縺₅₆₇ 縺₅₆₈ 縺₅₆₉ 縺₅₇₀ 縺₅₇₁ 縺₅₇₂ 縺₅₇₃ 縺₅₇₄ 縺₅₇₅ 縺₅₇₆ 縺₅₇₇ 縺₅₇₈ 縺₅₇₉ 縺₅₈₀ 縺₅₈₁ 縺₅₈₂ 縺₅₈₃ 縺₅₈₄ 縺₅₈₅ 縺₅₈₆ 縺₅₈₇ 縺₅₈₈ 縺₅₈₉ 縺₅₉₀ 縺₅₉₁ 縺₅₉₂ 縺₅₉₃ 縺₅₉₄ 縺₅₉₅ 縺₅₉₆ 縺₅₉₇ 縺₅₉₈ 縺₅₉₉ 縺₆₀₀ 縺₆₀₁ 縺₆₀₂ 縺₆₀₃ 縺₆₀₄ 縺₆₀₅ 縺₆₀₆ 縺₆₀₇ 縺₆₀₈ 縺₆₀₉ 縺₆₁₀ 縺₆₁₁ 縺₆₁₂ 縺₆₁₃ 縺₆₁₄ 縺₆₁₅ 縺₆₁₆ 縺₆₁₇ 縺₆₁₈ 縺₆₁₉ 縺₆₂₀ 縺₆₂₁ 縺₆₂₂ 縺₆₂₃ 縺₆₂₄ 縺₆₂₅ 縺₆₂₆ 縺₆₂₇ 縺₆₂₈ 縺₆₂₉ 縺₆₃₀ 縺₆₃₁ 縺₆₃₂ 縺₆₃₃ 縺₆₃₄ 縺₆₃₅ 縺₆₃₆ 縺₆₃₇ 縺₆₃₈ 縺₆₃₉ 縺₆₄₀ 縺₆₄₁ 縺₆₄₂ 縺₆₄₃ 縺₆₄₄ 縺₆₄₅ 縺₆₄₆ 縺₆₄₇ 縺₆₄₈ 縺₆₄₉ 縺₆₅₀ 縺₆₅₁ 縺₆₅₂ 縺₆₅₃ 縺₆₅₄ 縺₆₅₅ 縺₆₅₆ 縺₆₅₇ 縺₆₅₈ 縺₆₅₉ 縺₆₆₀ 縺₆₆₁ 縺₆₆₂ 縺₆₆₃ 縺₆₆₄ 縺₆₆₅ 縺₆₆₆ 縺₆₆₇ 縺₆₆₈ 縺₆₆₉ 縺₆₇₀ 縺₆₇₁ 縺₆₇₂ 縺₆₇₃ 縺₆₇₄ 縺₆₇₅ 縺₆₇₆ 縺₆₇₇ 縺₆₇₈ 縺₆₇₉ 縺₆₈₀ 縺₆₈₁ 縺₆₈₂ 縺₆₈₃ 縺₆₈₄ 縺₆₈₅ 縺₆₈₆ 縺₆₈₇ 縺₆₈₈ 縺₆₈₉ 縺₆₉₀ 縺₆₉₁ 縺₆₉₂ 縺₆₉₃ 縺₆₉₄ 縺₆₉₅ 縺₆₉₆ 縺₆₉₇ 縺₆₉₈ 縺₆₉₉ 縺₇₀₀ 縺₇₀₁ 縺₇₀₂ 縺₇₀₃ 縺₇₀₄ 縺₇₀₅ 縺₇₀₆ 縺₇₀₇ 縺₇₀₈ 縺₇₀₉ 縺₇₁₀ 縺₇₁₁ 縺₇₁₂ 縺₇₁₃ 縺₇₁₄ 縺₇₁₅ 縺₇₁₆ 縺₇₁₇ 縺₇₁₈ 縺₇₁₉ 縺₇₂₀ 縺₇₂₁ 縺₇₂₂ 縺₇₂₃ 縺₇₂₄ 縺₇₂₅ 縺₇₂₆ 縺₇₂₇ 縺₇₂₈ 縺₇₂₉ 縺₇₃₀ 縺₇₃₁ 縺₇₃₂ 縺₇₃₃ 縺₇₃₄ 縺₇₃₅ 縺₇₃₆ 縺₇₃₇ 縺₇₃₈ 縺₇₃₉ 縺₇₄₀ 縺₇₄₁ 縺₇₄₂ 縺₇₄₃ 縺₇₄₄ 縺₇₄₅ 縺₇₄₆ 縺₇₄₇ 縺₇₄₈ 縺₇₄₉ 縺₇₅₀ 縺₇₅₁ 縺₇₅₂ 縺₇₅₃ 縺₇₅₄ 縺₇₅₅ 縺₇₅₆ 縺₇₅₇ 縺₇₅₈ 縺₇₅₉ 縺₇₆₀ 縺₇₆₁ 縺₇₆₂ 縺₇₆₃ 縺₇₆₄ 縺₇₆₅ 縺₇₆₆ 縺₇₆₇ 縺₇₆₈ 縺₇₆₉ 縺₇₇₀ 縺₇₇₁ 縺₇₇₂ 縺₇₇₃ 縺₇₇₄ 縺₇₇₅ 縺₇₇₆ 縺₇₇₇ 縺₇₇₈ 縺₇₇₉ 縺₇₈₀ 縺₇₈₁ 縺₇₈₂ 縺₇₈₃ 縺₇₈₄ 縺₇₈₅ 縺₇₈₆ 縺₇₈₇ 縺₇₈₈ 縺₇₈₉ 縺₇₉₀ 縺₇₉₁ 縺₇₉₂ 縺₇₉₃ 縺₇₉₄ 縺₇₉₅ 縺₇₉₆ 縺₇₉₇ 縺₇₉₈ 縺₇₉₉ 縺₈₀₀ 縺₈₀₁ 縺₈₀₂ 縺₈₀₃ 縺₈₀₄ 縺₈₀₅ 縺₈₀₆ 縺₈₀₇ 縺₈₀₈ 縺₈₀₉ 縺₈₁₀ 縺₈₁₁ 縺₈₁₂ 縺₈₁₃ 縺₈₁₄ 縺₈₁₅ 縺₈₁₆ 縺₈₁₇ 縺₈₁₈ 縺₈₁₉ 縺₈₂₀ 縺₈₂₁ 縺₈₂₂ 縺₈₂₃ 縺₈₂₄ 縺₈₂₅ 縺₈₂₆ 縺₈₂₇ 縺₈₂₈ 縺₈₂₉ 縺₈₃₀ 縺₈₃₁ 縺₈₃₂ 縺₈₃₃ 縺₈₃₄ 縺₈₃₅ 縺₈₃₆ 縺₈₃₇ 縺₈₃₈ 縺₈₃₉ 縺₈₄₀ 縺₈₄₁ 縺₈₄₂ 縺₈₄₃ 縺₈₄₄ 縺₈₄₅ 縺₈₄₆ 縺₈₄₇ 縺₈₄₈ 縺₈₄₉ 縺₈₅₀ 縺₈₅₁ 縺₈₅₂ 縺₈₅₃ 縺₈₅₄ 縺₈₅₅ 縺₈₅₆ 縺₈₅₇ 縺₈₅₈ 縺₈₅₉ 縺₈₆₀ 縺₈₆₁ 縺₈₆₂ 縺₈₆₃ 縺₈₆₄ 縺₈₆₅ 縺₈₆₆ 縺₈₆₇ 縺₈₆₈ 縺₈₆₉ 縺₈₇₀ 縺₈₇₁ 縺₈₇₂ 縺₈₇₃ 縺₈₇₄ 縺₈₇₅ 縺₈₇₆ 縺₈₇₇ 縺₈₇₈ 縺₈₇₉ 縺₈₈₀ 縺₈₈₁ 縺₈₈₂ 縺₈₈₃ 縺₈₈₄ 縺₈₈₅ 縺₈₈₆ 縺₈₈₇ 縺₈₈₈ 縺₈₈₉ 縺₈₉₀ 縺₈₉₁ 縺₈₉₂ 縺₈₉₃ 縺₈₉₄ 縺₈₉₅ 縺₈₉₆ 縺₈₉₇ 縺₈₉₈ 縺₈₉₉ 縺₉₀₀ 縺₉₀₁ 縺₉₀₂ 縺₉₀₃ 縺₉₀₄ 縺₉₀₅ 縺₉₀₆ 縺₉₀₇ 縺₉₀₈ 縺₉₀₉ 縺₉₁₀ 縺₉₁₁ 縺₉₁₂ 縺₉₁₃ 縺₉₁₄ 縺₉₁₅ 縺₉₁₆ 縺₉₁₇ 縺₉₁₈ 縺₉₁₉ 縺₉₂₀ 縺₉₂₁ 縺₉₂₂ 縺₉₂₃ 縺₉₂₄ 縺₉₂₅ 縺₉₂₆ 縺₉₂₇ 縺₉₂₈ 縺₉₂₉ 縺₉₃₀ 縺₉₃₁ 縺₉₃₂ 縺₉₃₃ 縺₉₃₄ 縺₉₃₅ 縺₉₃₆ 縺₉₃₇ 縺₉₃₈ 縺₉₃₉ 縺₉₄₀ 縺₉₄₁ 縺₉₄₂ 縺₉₄₃ 縺₉₄₄ 縺₉₄₅ 縺₉₄₆ 縺₉₄₇ 縺₉₄₈ 縺₉₄₉ 縺₉₅₀ 縺₉₅₁ 縺₉₅₂ 縺₉₅₃ 縺₉₅₄ 縺₉₅₅ 縺₉₅₆ 縺₉₅₇ 縺₉₅₈ 縺₉₅₉ 縺₉₆₀ 縺₉₆₁ 縺₉₆₂ 縺₉₆₃ 縺₉₆₄ 縺₉₆₅ 縺₉₆₆ 縺₉₆₇ 縺₉₆₈

縲縉悶ヤ縯縉呈◆縺◆-玲戔縺。縺悟ヰ縺代丨縺-蝶ヰ縺◆□縺代∞惠螳カ董。閨◆◆縺。縺ツ縯悶ヤ縯縺梧ツ縹縉
干縺励ウ縺」縺ヲ縺◆k 縺縉→縺オ閨舌:縹峨丨縺I縺上↑縹九ゆ○縺◆>縺◆惠螳カ董。閨◆↓蝶ア譚濬☆縹俱
ソヨ隣瑚◆d 莉乘路近◆門ヨカ縺濬■縺後>縺濬 s 縺ヲ縺励 g 縺◆ゆ。縹後 i 縺ヨ荳ツ縺九 i 蝶ア葱嶺サ乘路縺檜函
縺セ縹後※縺阪 U 縺呐

縲縢セ縺溷、葱嶺サ乘落縺ヲ豁イ壹斂◆蟬溷惠縺励◆縺悶ヤ縺莉・螟悶↓迄◆ソ才縺イ縺励※縺ヨ縺悶ヤ縺縢ヨ蟄
併惠縺定◆：縺セ縺呐ゆケ縺◆ム縺ヨ謨呐：縺呈ウ輔「ム縺オ縺械→縺◆」>縺セ縺呐' 縺√「○縺ヨ縺縺オ縺械○縺ヨ
縺ユ◆縺後ケ縺◆ム縺」縺ユ k 縺√→閨◆：縺九ヨヨ◆」呐◆豕募援縺ヨ壹」縺オ豌ク驕縺ヨ縺悶ヤ縺縢悟」併惠縺
励※縺◆ k 縺ユ○縺◆◆：縺後◆墓ユ@縺上↑縺◆テ縺励 g 縺

繰縕螟ア葱励◆豁I蜿イ壹翫◆縕悶ヤ縕闇I霄オ縕モ謨呐：：縕イ驕輔≥縕空c 縕I縕◆。縕イ縕◆≥莠C縕梧◆縕ゆ
＞縕盃@莉翫b 縕◆U 縕呐ゆ◆縕壹闇ヤ迨◆↑ 迨◆ア 縕イ縕励※縕ツ縕∞、ア葱励b 莉乘路縕ア縕呐ゆケ縕◆ム
縕モ謨呐：：縕榦炊隠也噪縕オ通C縕輔@縕コ縕◆▲縕盃b 縕モ縕イ闇◆：：縕盃 I 縕◆>縕イ諤昂>縕セ縕呐
縕縕悶ヤ縕縕梧あ縕翫r 縕イ縕峨>縕盃→縕阪↓ 縕◆▲縕盃s 縕ツ隱-縕オ縕ら炊隗」縕I縕阪↑ 縕◆。縕峨：ウ
輔r 隱ヤ縕上◆縕ツ縕◆ a 縕医≥縕イ諤昂▲縕盃c 縕後←縕ツJ◆：：透I縕励※蟬◆落參サ蜍輔r 蟻九a 縕盃→蟹
榦肩隧ア縕励U 縕励◆縕後✓%縕モ縕後◆縕、縕ウ縕医。縕I縕イ諤昂≥縕雍 〒 縕呐h 縕ゆ○縕モ縕医≥縕I縕

縷、縯ウ縯峨◆隠ケ邇区惣◆亥、ア葱嶺サ乘路縲、ノ縯ウ縯峨え縯シ謨呻

悶ヤ縛縛ア縛ゆ！縛-縲∞惠螳か董。閨◆r 隕区昏縛ア縗九%縛イ縗ゆ↑縛◆◆縛壹□縲∞惠螳か董。閨◆b 謹溢 j 縗偵◆縗峨 c 縗九U縛ア謨呐：縗定イヤ縛咲か壹 c 縛ア縛上！縗九◆縛壹□縲✓→縛◆≥閨◆：縛檜函縛セ縗後 k 縲り媚阮ウ縛イ縛◆≥縛セ縗後○縗後〒縛呐よ、ア葱励〒縛ツ闖ウ阮ウ縛イ縛◆≥縗ゆ◆縗定◆：縛セ縛励◆縲り媚阮ウ縛ツ謹溢 k 蛾帙' 縛ゆ k 縗雍□縛代！縛ウ縲∞サ悶◆縛ツ縗雍↑縛梧あ縗翫 r 縛イ縗峨 c 縗九 h 縛◆↓縛I縗九U縛ア蠅◆▲縛ア縛◆※縛上！縗九ゆサ悶◆縛ツ縗雍↑縛梧あ縗翫 r 縛イ縗峨 c 縗溢→縛阪↓縛ツ縛空 a 縛ア闖ウ阮ウ縗よあ縗翫 r 縛イ縗峨￥縲✓○縛◆>縛◆快縗企山縛◆リヨ疇瑚◆〒縛呐り媚阮ウ縛セ螳溢↓縛◆k 縛九 b 縛励！縛I縛◆@縲「炊蠹才溢◆ヨ◆ヨ咏噪縛I蟄乍惠縛イ縛励※縛ゆ k 閨◆〒縗ゆ≠縗九ゆサ上↓墓セ縛呐 k 董。莉-縛イ縛イ縗ゆ↓闖ウ阮ウ縛オ墓セ縛呐 k 董。莉-縗ら函縛セ縗後※潤イ縲◆↑闖ウ阮ウ縛瑚◆：蜃工縛輔！縛セ縛励◆縲ゆ↑縗雍□縛九 d 縗◆%縛励>縛代←縲「炊隗」縛ア縛阪 k 縛九↑縗ら炊隗」縗医 j 縲∞。縛空 I 縗九。縛カ縛◆。縛セ蝠城。後。縗ら行縗後↑縛◆c 縛カ縛I縲

縲縲螟々葱嶺サ乗路縲ヨ追◆オ悶 r 蝶々諤舌@縲滉コ縲イ縲励※隕壹：縲ノ縲斂。縲I縲代 I 縲-縲I縲峨↑縲ココ
縲後リ縲シ縲ヤ縲オ縲ク縲・縲斂丁縲呐るセ肴竹◆医 j 縲◆≥縲空 e ◆峨→狸「險ウ縲励※縲◆U縲呐るセ肴竹闖ウ
阮ウ縲イ縲よ他縲-縲後 k 縲ゑシ剥ケ也I縲九 i ◆謎ケ也I縲オ縲九 c 縲ヲ縲ヨ剗励う縲ウ縲峨◆莠コ縲ア縲呐よ、ア蟄ヲ譜
キサ」縲オ蠻シ縲ヨ譜ヤ縲定Iコ縲リ縲セ縲励◆縲悟憧蟄ヲ譜ク縲イ縲励※莉願Iコ縲雍丁縲る擇通入縲◆丁縲呐 h 縲ヰ≠縲
セ縲顔炊隗」縲ツ縲I縲阪※縲I縲◆c 縲ウ縲I縲ヰ御セ晏」倬未董ヰ↓縲医 k 遷溯オ縲阪→縲◆≥縲輔三縲シ縲コ縲
御サイ髦灘◆縲ア猪リ。後▲縲溢よ◆縲後≠縲九丁縲励 g 縲 J ア√→縲ヰ↑縲溢' 謐帙@蛻医▲縲ヲ縲◆k 縲
よ◆縲ツ縲ウ縲雍↓縲ヰ k 縲九 J ア√◆荳」縲オ縲ヰ k 縲ヨ縲九ヰワ縲シ縲ヰ≠縲I縲溢◆荳」縲オ縲ヰ k 縲ヨ縲
九ヰワ縲シ縲ヰ≠縲I縲溢→邁√◆髦雍↓縲ヰ k 縲ヨ縲I縲ヰ↑縲ツ髦「董ヰ↑縲雍丁縲呐 h 縲ヰ≠縲I縲溢□縲
代テ縲らア√□縲代丁縲ヰ√○縲雍↓縲ツ謐帙◆縲I縲◆ゆコ御ココ縲後>縲ヲ縲ヰ↑縲◆ゆコ御ココ縲ヨ髦雍↓
縲◆未董ヰ◆荳」縲オ謐帙' 縲ヰ k 縲ヰ御セ晏」倬未董ヰ↓縲医 k 遷溯オ縲阪丁縲呐よキ昂◆縲ウ縲雍↓縲ヰ k 縲
九ヰ%縲雍↓縲ヰ k 縲I蛻輔 i 縲ツ諤昂≥縲後∞I溢◆縲I縲◆ゆ○縲後◆豌I縲I縲√○縲後' 豪√ I 縲句、ア
蟲-縲ヨ縲医 \$ 縲後↓驕弱°C縲I縲◆よ-I縲I縲昂◆驕句虚縲イ螟ア蟲-縲ヨ髦「董ヰ」 蟻昂丁縲呐よキ昂◆髦「董ヰ
↓驕弱°C縲I縲◆ゆ%縲後 b 縲御セ晏」倬未董ヰ↓縲医 k 遷溯オ縲阪ヰ%縲◆@縲ヲ髦「董ヰ↓蛻◆ア」縲励※
縲◆¥縲I蛻溷惠縲呐 k 縮「縲弱」 縲I縲雍↓縲ら「縲上↑縲」縲ヲ縲励U縲◆s 縲ア縲呐ゆ%縲後' 縲檎コ縲
阪ヰ%縲後 b 蝶々葱嶺サ乗路縲ヨ驥崎コ：コヨソ縲ヰ瑚牡蜊I譏ツ邀コ縲 Jコ蜊I譏ツ潤I縲阪▲縲ヲ閨械>縲溢%縲I
辟。縲◆丁縲呐。縲リ握閨・蟲◆才後◆縲輔三縲シ縲コ縲ヰ%縲ヨ縲檎コ縲阪丁縲呐↑縲
縲縲。縲◆▲縲I辣呐↓蟾サ縲◆※縲励U縲」縲溢◆縲ヰU縲∞、ア蟄ヲ縲ア縲ツ縲雍 s 縲I莠九 r 縲◆k 縲I縲◆≥
隧ア縲

繰縛顔才後◆縛悶ヤ縛縛ヨ險闘峨 r 蠕溷舌◆縛。縛御シ昂：縛昂 I 縛偵シ縛イ縛√◆縛「縛弱↑縛雍ニ縛内」
縛∞、ア葱嶺サ乗路縛シ縛悶ヤ縛縛梧サ縛雍ニ縛九 I 謌千オ九@縛溢 S 縛ア縛内◆縛ゆケ縛◆ム縛ヨ險闘峨ニ縛シ
縛I縛◆S 縛◆↑縛◆。縛√→縛◆○縛後 I 縛-縛昂≥縛◆≥縛雍→縛才縛I縛九ゆ◆縛縛√ケ縛◆ム縛I
縛◆≥縛ヨ縛シ縛溢▲縛混コ縛イ縛◆≥縛雍→縛縛九 I 縛I縛√き縛ヨ縛シ縛楊シ昂す縛◆ム縛シ縛オ縛シ縛ア縛I縛上
※縛よあ縛」縛混コ縛ヨ險闘峨ニ縛ゆ I 縛-縛顔才後ニ縛ゆ▲縛ヲ縛◆>縛√→縛◆≥近◆ア医↓縛シ縛I縛九
縛縛空C 縛ゆケ菴灘、ア葱嶺サ乗路縛ヨ縛顔才後◆隱-縛梧鳶縛◆◆縛ヨ縛九→縛◆≥縛シ縛雍 I 縛悟◆辟加蛻◆。縛
峨↑縛◆
縛縛覗◆縛ヤ縛オ縛ケ縛・縛覗↓縛ツ貞晁イヤ縛後≠縛」縛シ縛√。縛後◆遼懊↓蟆弱。縛後※猪+鱗輔◆遼懷ヨ蛻弱
↓隣後▲縛溢%縛シ縛後≠縛九→縛◆≥縛ゆ○縛雍ニ縛顔才後 r 縛溢￥縛輔 S 縛ゆ I 縛」縛シ螺-縛」縛シ縛阪◆

縫、縛り縛峨◆隠々遁区惣◆亥、ア葱嶺サ乗路縲、ヲ縛り縛峨え縛シ謨申

縛イ縛◆≥縷縛□縲ゆ↑縷縛□縛句◆縛九 i 縛イ縛◆ク也阜縛ア縛呐' 縲、縷◆▲縛イ縛励◆縷峨リ縛シ縷ヤ縛オ
縷ケ縛・縛覗' 譜ケ縛◆◆縛顔才後 b 縛ゆ k 縛九 b 過・縷後↑縛◆◆縲よ、ア葱礼才悟◆譯千オ九◆隙弱→縛◆≥縛ヨ
縷堤ウコ誼ウ縛励※縛◆k 縛イ達、縛シ縛励>縲よ錐縷ら「縛堺サ乗路蜒、縛滻■縛後←縷縛。縛ア縛顔才後 r 譜ケ
縛咲カ壹 c 縛ヲ縛◆◆縷縛□縲

縲縲ア縛ツ譯滻▲縛混コ縛梧鳶縛代◆縛顔才後→縛励※隱阪 a 縷峨 i 縷九。縛イ縛◆≥縛イ縛昂 i 縛ツ縛縛。縛ア縲
√う縛り縛峨テ譜ケ縛九 i 縛ヲ縛◆k 縛縛→縛梧擅莉カ縛リ縛滻>縛ア縛呐ゆク、蝗ア縛ア譜ケ縛九 i 縛滻♀郵後→縛
九 b 縛ゆ k 縷縛テ縛呐' 縲、√う縛り縛峨テ縛ヨ蠟溷◆縛檜「縛◆△縛弱◆蛛ア郵後→縛◆▲縛ヲ縛九そ縛「縛取
桶縛◆&縷後※縛◆U縛呐

縲縲ア縛後←縷縛←縷縛○縷後U縛励◆縛後、「け縷キ縛」縛シ縛頑惣縛ア縛覗◆縷ヤ縛オ縷ケ縛・縛覗◆參サ霄阪@縛
津函莉」縛ツ驥阪↑縷九 o 縛代テ縲、%縛ヨ譜よ俏縛ア蝶ア葱嶺サ乗路縛後←縛」縛イ縲、縛り縛峨テ猪」。後@縛縛
励◆縷縛テ縛励 g 縛◆

縛昂◆莉悶◆遁区惣

縲縲縷ツ縷キ縛」縛シ縛頑惣縛ツ壹我ク也I壹」鬆◆↓縛ツ蟠ア螢覗@縛セ縛呐
衍。縛オ驥崎フ、↑遁区惣縛後げ縛励ち譜暫シ茨シ難シ抵シ宣◆懶シ包シ包シ宣◆シ峨テ縛呐ゆけ縷キ縛」縛シ縛頑惣縛後
う縛り縛ケ邊サ縛縛」縛滻%縛イ縛シ墓セ辣ア途◆↓縲、%縛ヨ縛-縛励ち譜昂◆邏斐う縛り縛臥視譜昂テ縲、
縛、縛ケ縛峨 r 邮ア壹縛励U縛励◆縲ゆう縛り縛我シ晉才譯◆喧縛ヨ蠕ア闇医→縛◆≥縛ヨ縛後%縛ヨ遁区惣縛
縛◆◆縛械テ縛呐
縲縲ア蝗ア闇◆' 縛、E 縛ケ縛峨ハ縛-縛励ち◆台ケ悶よヤ。縛ヨ縛、E 縛ケ縛峨ハ縛-縛励ち◆剃ケ悶◆譜ゆ' 譜透
帶俏縛ア縛呐ゆ◆縷ヨ縛、縛、縛、E 縛ケ縛峨ハ縛-縛励ち縛輔 s 縛イ巻神燕縲ツ巻後 s 縛ア縛呐' 縲、U縛
縛滻￥鬆「董ゆ↑縛◆◆縛ア豺ア葱ア縛励↑縛◆h 縛◆↓隕壹∴縛ヨ壹九&縛◆ゆメ縛」縛ケ縛峨ハ縛-縛励ち◆剃
ケ悶◆譜ゆ↓壹」蝗ア縛九 i 莉乗路遐皮ウカ縛ヨ縛滻 a 縛オ豕暮。輔→縛◆≥蝮覗&縷縛' 譚・縛セ縛励◆縲ゆ%
縛◆>縛◆仁縛ヨ鬆「驃」縛ツ蜿鈴ア雍テ縛ツ縷医￥縛阪。縷後 k 縛イ縛縛m縛ア縛呐
縲縲縛◆遁区惣縛ヨ譜ゆ↓縛ヨ莉乗路鄒手。雍」透帙 s 縛オ菴懊 i 縷後U縛呐ゆき縛ケ縛縛シ縛ケ鄒手。雍→驕輔▲
縛ヨ邏斐う縛ケ縛蛾「イ縛ア縛-縛励ち鄒手。雍→蜻シ縛-縛後※縛◆U縛呐ゆい縷ケ縛」縛ケ縛シ過ケ遜溷コ鬚「縛
谿九&縷後◆螢」判縛檜音縛オ譜牙錐縲リウ◆併髪◆↓蜀咏俏縛後≠縲覗U縛呐' 縛雍%縛ヨ螢」判縛イ髪樽ク
縛オ貞シ縛辱オ縛梧ア暮寧墓」驥大ゆ↓謠上。縷後※縛◆U縛呐
縲縲縛昂 i 蜘鈴ア鍋噪縛オ縲ツ縲、%縛ヨ譜ゆサ」縛ヨ縷オ縛シ縛、縛ケ縛シ縲オ縛イ縛◆≥茅」縛梧鳶縛◆◆縲後す
縛」縲ツ縛ケ縛シ縲ツ縛シ縲阪→縛◆≥譯シ譜イ縛ツ縷医￥蜃」蜃後&縷後U縛呐
縲縲縛◆遁区惣縛ツ◆穗ケ也I壹」鬆◆。縲我クア蝶ヨ縲「縲ケ縲「縛ヨ縲イ縛輔ち縛オ縛イ縛◆≥驕顔鳶腕代◆壹オ蝶・
縛オ縷医▲縛ヨ帱-驃縛励※縛◆」縛セ縛励◆縲

縲縲縷-縛励ち譜昂◆蟠ア螢雁セ悟圈縷、縛ケ縛峨◆蛻◆」よ函莉」縛檜カ壹￥縛ヨ縛ア縛呐' 蜘、莉」縲、縛ケ縛
峨◆譜蛻後◆蝶ア隕乘、遁区惣縛後X縲。縛オ縛ケ縛頑惣◆茨シ厄シ撰シ悶懶シ厄シ費シ暦シ峨よサコ蝗ア闇◆' 縛上N縲
縛」◆昂 X縲。縛オ縛ケ縛覗ゆ%縛ヨ遁区惣縛ツ縛雍◆遁区ア咲ケ莉」鬚舌 j 縛ア蟠ア螢覗@縛セ縛励◆縲

縷、縯ウ縯峨◆隠ク邇区惣◆亥、ア葱嶺サ乗路縲√ヲ縯ウ縯峨え縯シ謨呻

繩縛薙◆蝗入縛オ縛ツ壹¹蝗入縛九 i 邇◆・倥→縛◆²≥蝮翫&縕薙' 莉乘落縕貞³縛⁴縛⁵縕◆▲縛⁶縛阪◆繩ら私
螂倥→縛◆²≥縛³縛⁴壹芽鳩豕募⁵縛⁶縛◆²≥巻阪⁷縛手・ソ驕願⁸倥上↓縛⁹縛¹⁰縕上 k 蝮翫&縕薙¹¹縛¹²吶よスシ
縛¹³讐◆²。瑚¹⁴倥↓縛薙◆²縕¹⁵縕。縕¹⁶縕¹⁷縕¹⁸頑惱¹⁹縛悟◆²縛²⁰縕上 k 縕薙²¹縛²²吶◆²縕²³○縕後²⁴縛牙錐²⁵縛²⁶縕²⁷≥縕薙
→縛²⁸縛²⁹吶

縹縷効勵う綱ウ縄峨◆邇区惣綻ア驥崎ヲフ↑綻ヨ經後し綱シ縊ソ綱工縊。綱シ綱上リ譜暫シ亥燕◆抵シ抵シ宣◆懷セ鯉シ抵シ難シ厄シ峨

縺薙◆蝗入縺^レ綱^ハ縩^シ縩^ト轉^ク晏^イ寄^シ縺^イ雋^リ譏^シ薙^ル r 縺^ス翫^ス% 縺^ハ縺^シ縺^ト◆ 縺^レ薙^ル→縺^ハ譜^ト牙^ハ錐^シ繆^ク

縹偵の縹峨え縷シ謨

繅縷莉乘落縷◆「す縯」縷、縯頑落縷・猪丿。後干縯舌八縯「縯ウ謨呐◆縷ウ縷◆↑縷」縷盃。縷イ縷◆≥隠ア縷ア縷
呐キ牛縯ウ縯「縯ウ謨呐◆豌鷹保董。莉-縷偵←縷難←縷捺治縷雁◆縷後※蠣舌◆↓螟芽」オ縷励シ縷呐キ牛縯ウ縯
「縯ウ謨呐」豌題。◆喧縷励◆螳玲落縷偵ヲ縯ウ縯峨え縯シ謨呐→縷◆>縷セ縷呐ラ樟蟲イ縷・縷、縯ウ縯峨◆◆倅牡
露代>莠」縷後%縷・縷偵ヲ縯峨え縯シ謨呐◆董。閏◆干縷呐

縲縷◆▽縺九 i 總舌八縍「縍ウ謨呐」 縍偵①縍峨え縍シ謨呐↓螟芽コオ縺励◆縺九→縺◆○縺後 k 縺イ縍上ヤ縺一
縍I縺励◆縺薙→縺ツ蛻◆。 縺翫U縺帙 s 縍ゆ◆縺縼、「げ縍励ち譜昂◆譜ゆ↓縺ツ遭コ達九@縺ヲ縺◆◆縺医ニ
縺ノ縺内

縲縨偵○縯峨え縯シ謨呐◆逆ヶ蠕I縺ツ螟久・樊落縺I縺ゆ k 縺雍→縺I縲✓き縯シ縲ケ縯亥宛縲堤ウ肴・オ溢◆↓開ツ
螳壹@縺ツ縺◆k 縺雍→縺I縺呐ゆ ヲ縯ウ縯峨え縯シ謨呐◆縺溢￥縺輔 s 遂械&縺セ縺後>縺セ縺呐ゆサ」隣イ
溢◆↑荳牙、ア遂械' 縯悶八縯輔◆縯シ縲✓X縲」縲+縯・縯後✓す縯I縲。縲✓テ縺呐ゆ ケ縯ウ縯輔◆縯シ縺ツ螢才驃
縺ヨ遂械✓X縲」縲+縯・縯後' 荳也阜邯I謬✓◆遂械✓す縯I縲。縺檣I螢翫◆遂械テ縺呐ラI螢翫◆遂械す縯I
縲。縺御ク遂I莠コ豌励' 縺ゆ k 縺医ニ縺I縺呐ラI螢翫☆縲九→縺◆ニ縺ヨ縺ツ研。縺ヨ螢才驃縺オ縺、縺I縺後 k 縺九
i 縺I隱ヤ譏弱&縲後U縺呐' 縲○腰邏斐↓遐I螢翫☆縲九%縺I縺ツ縺械￥縺械￥縺呐 k 蠕オ譚溢' 縺ゆ k 縺雍
ニ縺励 g 縺◆↑縲らよI縺ツ菴懊▲縺溷ア縲偵ギ縯シ縯◆→電I謨」縲峨☆蠶オ譚溢▲縺ツ邨碁ノ雍≠縲九ニ縺励 g
縲ゆ○縲後 r 縺◆k 縺ヨ縺後す縯I縲。遂械

縲縲縲、縯ウ縯峨◆莠悟、ア蜿吩コ玖ウウ縺オ縲後◆縯上◆縯舌◆縯ウ縲シ縲阪後△縯シ縯械◆縯、縯覵阪→縺◆≥縺ヨ
縺後≠縲覵U縺呐ゆ%縲後◆蠕舌◆↓隧ア縺梧紛縺医 i 縲後※縺◆▲縺ヲ縲-縯勵ち譜昂◆譜よ悄縺オ螳梧◆縺
輔△縺溢→縺◆○縲後※縺◆U縺呐ラ樟蟲イ縺△縲ゆう縯ウ縯峨□縺代△縺シ縺△縺上う縯ウ縯峨口縲シ縲「縺」縺ウ
縺△縲よコ◆￥遇・縲峨△縺ヲ譁帙&縲後※縺◆k 迪ウ隱械↑縲雍△縺呐' 縲∞醉譜ゆ↓縺雍△縲峨◆蜿吩咐コ玖ウウ
縺シ縯貞△縯峨え縯シ謨呐◆邬悟◆縺△縲ゆ≠縲九◆縺シ縲

繻繻後△縛シ縛械◆縛、縛翫阪◆縛ウ縛シ縛械→縛◆≥邇句1舌' 荦サ莠コ蜈ヤ縛ヨ隧ア縛キテ縛峨☆縛空□縛醍-。蜊
倥△險縛」縛フ縛翫￥縛イ縛ウ縛シ縛械◆蟄?' 縛ケ縛エ縛ウ縛ウ縛オ縛オ菴上 s 縛ア縛◆ k 縛ウ縛シ縛ウ縛。縛翫→縛◆≥

縷、縯ウ縯峨◆驚ク邇区惣◆亥、ア葱嶺サ乗路縲√ヲ縯ウ縯峨え縯シ謨呻沙

縲縲手・ソ驕願イ控上◆蟄オ謔潯ウコ縺ツ縺雍◆縷上レ縷械◆縷ウ縺後△縷◆N 縷峨@縺◆よ。◆、I驛弱◆巒シ驛豊サ
縺ウ縷オ縷オ縺後ニ縺ヲ縺上 k 縷ヨ縷る未董 ゆ ノ縷九。縷 ゆ ◆縲

縲謨^オ髯^オ」縲^オ遜^{シテ}◆イ縲^オ呴^ク k 縲比^ク縲^オ謂^フ・縲^オ纓^フ「縲^オ纓^フ絹^フ・縲^オ翫^フ◆霧^フ縲^オ◆↓關^フ縲^フ。縲^九ゆ 〒縲^フ久^ク。霆^フ阪^フ◆達^フ溘^ス s 荳^フ縲^フ謂^フ霆^フ翫^フ r 豁^フ「縲^フ」 & 縲帙^フ「縲^フ」 ← 縲^フ◆@縲^フ溘^ス◆縲^九→蝠^フ上^フ≥縲^フ絹^フ・縲^フ・縲^フ翫^フ ↓ 縲^フ「縲^オ縲^フ絹^フ・縲^フ翫^フ◆縲^フ◆縲^フ≥縲^フ蘿^フ「縲^フ」 纔^フ呴^ク上^フ◆縲^フゆ ◆縲^フ◆サイ^フ鬚^フ蘿^フd 蠕^フ育^フ函^フ縲^フ呈^ク◆縲^フ勵^フ※潤^フ縲^フ◆b 縲^フ・縲^フ九^ク阪^フ→縲^フ縲^フ上^フ 雾^フ縲^フ霆^フ阪^フ→縲^フ◆▲縲^フ縲^フよ醉^フ縲^フ呴^ク上^フ’ 蛭^フ・縲^フ後^フ※莠^フ峨^フ▲縲^フ縲^フ◆k 縲^フ蘿^フ□縲^フ九^ク i 縲^フ「フ」謂^フ壹^ク→縲^フ区^ク◆縲^フ隕^ス I 蠕^フ九^ク d 蠕^フ蛹^フ縲^フ梧^フ霆^フ阪^フ↓ 縲^フ◆k 縲^フ上^フ c 縲^フ縲^フ呴^ク

縲縛雍 | 縷^レ臺^タや縲^レ劔^ケ 縷^レ綱^ハ 縷^レ綱^ハ・綱^ハ翫^ハ’ 縷^レ◆◦ 縲^レ逕^カ盃^ハ” 縷^レ九^クヨ^ク縲^レ阪^ハ◦ 縷^レ定^ハ械^ハ k 驛^ハ蛻^ハ◆◦’ 縷^レゆ k 縷^レゆ % 縷^レ後^ハ’ 縷^レ呴^ハ # 縷^レ◆◦ ゆけ綱^ハ 縷^レ綱^ハ・綱^ハ翫^ハ◆◦ 險^ハ 縲^レ◆◦ s 縲^レ繩^ハ

縹縹湖ノ縷上★谿口綻幃シ✓

縲籠榦セ励テ縛阪↑縛◆い縛オ縷ク縛・縛覗↓縷ツ縛I縷+縛・縛覗◆縛昂◆返◆罰縷貞サ縲◆→隱槭 j 縛セ縛呐ゆ
%縷後' 縛偵D縛峨え縛シ謨呐◆逾様オ◆テ縲✓%縛S驛イ蛻◆□縛代' 迪ケ縛オ蜿悶 j 蟹I縛輔 I 縛フ縲後牛縷ヤ
縛I縷。縛◆ラ縛サ縷I縛シ縛シ縲阪→縛◆≥譜ヤ縛オ縛I縛I縛フ縛◆U縛呐

繹縕縕纊纊・纊翫◆險纊◆ゆ後☆纊纊逕溢” 纓九 b 纓ヨ纊ツ需工蟻サ纊九 i 驟◆！ 纓峨 i 纓工纊◆ゆ > 纓、纊区サ縕雍 ツ 纓セ縕辱函縕セ縕悟、峨 o 纓九 s 纓纊九 i 繹∞入墓函豁サ縕ヨ縕◆→縕昂！ 纓ツ螟ア縕励◆蝠城。後 ツ 纓ツ縕工縕◆ゆ阪□縕九 i 賴コ縕呐%縕イ縕定ツキ縕◆↑繹✓>縕、縕句ソ◆★豁サ縕ヤ縕雍□縕九 i 莉翫♀縕セ縕医’ 賴コ縕励◆縕」縕フ巻後 S 莽九□繹✓>縕◆≥縕雍□縕ヨ繹ゆ☆縕輔U縕空>通コ誼ウ縕ア縕呐ゆク豁ウ馴馴 & 纓医 k 纓イ賀コ莽コ縕呈1】蠖灘喧縕呐 k 纓ウ縕雍。 纓ヨ譁-闇亥ヨ玲路縕リ縕溢>縕オ縕工縕」縕フ縕励U縕◆○縕◆ツ 纓呐◆繹

縊、縊の縊峨◆隠々通区畠◆亥、ア葱嶺サ乗路縲、フヲ縊の縊峨え縊シ謨呻シ

縲

縲縲輔 i 縦オ險縺◆ゆ後半縺セ縺医◆縲ツ縲キ縊」縊医M縲「縺ア縺ゆ k 縲ゆけ縲キ縊」縊医M縲「縺ヨ鈴ウ鈴内◆哥ヲ
縺◆%縺イ縺オ縺ゆ k 縲ゆ□縺九 i 哥ヲ縺◆%縺イ縺オ霧キ縺◆↑縲ラセウ鈴内 r 謳懊◆縺帙ゆ咲セウ鈴内 r 謳懊◆縺
輔↑縺◆%縺イ縺ツ壹神錐隱峨↑縺薙→縺ア縺内

縲縲偵○縊峨え縊シ謨内◆縲オ縊シ縲ケ縊亥宛縲定け螳壹@縺セ縺内。縊峨◆縲∞ス鍋一蜃コ縺ヲ縺上 k 通コ誼ウ縺ア
縺内リ◆蛻◆◆縲オ縊シ縲ケ縊医↓縺ツ縺壹 I 縺I縺◆。後>縲偵○縊医、フ→縺◆三縺薙→縺縲

縲

縲縲偵○縊峨え縊シ謨吝セ偵テ縺ツ縺I縺◆オ句I縺九 i 縺内 k 縺イ貉◆幻闇ヲ闇カ縺I縺薙→縲定イ縺」縺ヲ縺◆ k 縊
医≥縺オ闇械%縺医 k 驛イ蛻◆ b 縺ゆ k 縺I縺ゆ@縺九@譁◆コ庵懷刀縺ア縺内。縲芽工縺薙干縺ツ縺九→
蟲◆ r 謳コ縺輔◆縺九h縺◆↑隣イ迴セ縺ア隱械 i 縺後※縺◆ k 縺薙干縺内h縲

縲縲後≠縺I縺溢◆闇キ鈴内◆隣檜せ縺昂◆縲ゆ↓縺ゆ k 縲よアコ縺励※縺昂◆邨先樞縺オ縺ツ縺I縺◆リ。檜せ
縺ヨ邨先樞縲貞虚識溢→縺励※縺ツ縺◆ C 縺I縺◆ゆ U 縺辱「轍コ縺オ蠍キ達縺励※縺ツ縺I縺峨=縲ゆ
縲縲上。縺九。縺I縺らオ先樞縲呈 S 縺後 k 縺薙→縺I縺上、フ↑縺薙 S 縺ヨ縺I縺内ヨ縺堺コ九 r 縺I縺帙、フ→
縺◆▲縺ヲ縺◆ k 縺ヨ縺ア縺内ゆ%縺薙↑險闇峨□縺代 r 蜗悶 j 蟄コ縺内→邨先ア句窮豌怜◆縺ヲ縺上 k 縺イ縺薙
m縲ゆ≠縺九ゆ□縺九 i 譜霧第ウイ透ヨ縺輔 I 縺ヲ縺◆ k 縊医≥縺ア縺内

縲縲縺薙◆縺医≥縺I譁◆コ縺イ縺ア縲ゆ↓縊偵○縊峨え縊シ謨内◆遡句I縺九 i 縺ヨ豕輔 b 哥千オ九@縺ヲ縺阪
U 縺内ゆ後◆縊後◆豕募◆縲阪干縺内ゆ%縺後 b 縺◆△鬆◆入懊 i 縺後◆縺九◆縺」縺阪 j 縺励U縺帙 s 縺後
げ縊励ち譜昂◆譜ゆサ」縺オ螳梧◆縺励※縺◆U縺内よス捺函縺ヨ遠セ貢文噪隕冗、◆d 諷」鄙偵 r 菴鍋ウサ蛹悶@縺
溢 b 縺ヨ縺ア縺内ゆ%縺後↓縊医▲縺ヲ縊シ縲ケ縊亥宛縲悟華螳壹喧縺輔 I 縺溢→縺輔 I 縺ヲ縺◆U縺内

縲縲I縲」縲キ縊・縊檜・械◆縺◆m縺I縊「縊弱↓蛹治コ縺内 k 遂械干縺内' 縲、フ>縺、縺ヨ鬆◆。縊峨°
莉城凰縲ゆ X 縲」縲キ縊・縊後◆蛹治コ縺イ縺輔 I 縺セ縺励◆縲ゆク譜ゆ◆縲ツ縲キ縊」縊医M縲「縺◆牛縲、縲キ縊」
縲キ謾シ謾、フ&縺後◆莉乘路縲ゆヲ縊ウ縊峨え縊シ謨内↓蟻ク蜿弱&縺後◆縺上 C 縺ア縺内ラオ仙ア縲オ縊シ縲ケ縊亥
宛蟻ヲ縺ツ爻医:縺九%縺イ縺I縺上ヲ縊ウ縊峨え縊シ謨内→縺イ縲ゆ↓迴セ蟲イ縺セ縺ア縲、縊ウ縊臥、セ貢壹↓逕溢”
邯壹 C 縺溢◆縺ア縺内

蜿リ◆峙譜ケ邏ケ莉縊サ縊サ縊サ縊サ縲ゆ≥蝶代@隧ウ縺励￥遏・縲覩◆縺◆→縺阪◆

譜ケ蟻阪 r 縲ツ縊I縊◆け縺内 k 縺イ縲、フう縊ウ縲ツ縊シ縲阪ヤ縊域鳶蟻勵後い縊械だ縊ウ縲阪◆縊壹◆縲ケ縺オ鬱
帙 s 縺ア縲:：悽縺ヨ縊◆◆縲ツ縲:：鳶隧輔↑縺ウ縲定ヲ九 k 縺薙→縺後干縲阪U縺内リウシ蜈・縲ヨ庄間ス縺ア縺内

縲、縊ウ縊

我サ乗路譜

縺イ縲阪&縺。縲◆送縲ゆク闇ヤ蟻代 C 縺ヨ螳玲路髪「董ゆ◆闇嶺入懊」縺溢￥縺輔 s 縺ゆ k 莢コ縺縺

眺ア蜿ケ縲

後、フ%縺ヨ譜ヤ縺ツ縲、フ b 縺ヨ縺内#縺上○縺九 j 縲◆☆縺上◆擇通ス縺◆干縺内よ、ア葱嶺サ乗路縺

縫、縛り縛 我サ乗路謨 暁の蜿々縲 井々九	檜匱蠣輔@縛ヲ縛◆￥驕守イ九◆縲∞◆縫√※隱ヒ縫縲イ縛斐た縛シ縛峨' 蟻壹。縛」縛溢らア ✓◆謗域・口縛ア縫よ、壹￥縫定イ縛」縛ヲ縛◆U縛吶ゆサ覗◆縲：焰縛オ螟・縫覗↓縛上>縛昂≥縛ア 縛吶
縫、縛り縛 臥・檻カ 螟・髪縛イ 縫雍ニ縛ヨ 譜ヤ	長キ佳キ蟻暁◆闡勵ゆう縛り縛臥・檻カ縛オ通サ蟒I縛吶 k 蟻壹￥縛ヨ逾械◆ r 縲√さ縛り縛代け縛医 ↓縫上。縫覗 d 縛吶￥魄」隱ヤ縛勵※縛◆ k 縲ゆ後ハ縛シ縛械◆縛、縛覗阪後◆縛上◆縛舌◆縛ウ 縫シ縲阪◆迎カ隱械 b 縛。縫◆ s 縛イ需峨▲縛ヲ縛◆ k 縲ゆ%縫御ク蜀覗≠縫後◆縲√う縛り縛臥・ 檻カ縛シ縛舌ヤ縛√M 縲よ峙迎医 b 蟻壹￥縲√♀蠕勵↑譜ヤ縲
縛舌き縛I 縫。縛◆ラ 縛サ縲ヨ縛シ 縫シ縲シ蟻カ 家「譜◆コオ	荳頑搗蜍晏ノ险ウ縲リイハ闇◆↓縫医 k 魄」隱ヤ縛シ縲後◆縛上◆縛舌◆縛ウ縫シ縲阪◆隕 I◆△縛 阪ゆク頑搗豌上◆縲√後◆縛上◆縛舌◆縛ウ縫シ縲阪◆蜴溷◆縛九 i 縛ヨ螟イ险ウ縫偵■縛上 U 譜◆コオ縛ア蛻願。後@縛ヲ縛◆◆縛後∞ソ怜豪縛-縛ア縛匱】。縛上↑縫覗↓縛I縛」縛溢よ粹謗後
螟ア葱礼才 悟◆縫 定I縫限 幄◆セ回 セ莉「譜-譜 久	螳壽媚謗溯送縲ゆケ縛I螟ア葱嶺サ丞◆縫偵√ o 縛九 j 縫◆☆縛丞、ア闇◆↓迴セ莉」隱檻イ縛勵◆ 譯乘ヤイ迄◆↑譜ヤ縲ゆ%縫後ニ縲√♀邨後↓庵輔' 譜ケ縛◆※縛ゆ k 縛九∞◆縲√※遏・縛」縛 辱ア「ニ縛吶よ、ア葱勵◆縛顔才後' 縲√%縫雍↑縛オ縫ケ縛壹け縫シ縲シ縛オ縛イ縛シ譯昂▲縛ヲ縛リヲ 九↑縛九▲縛溢ゆ♀縲ゆ o 縛壹：枚蟄ヲ迄◆O 蝴丞鴨縫偵。縛阪◆縛ヲ縛峨 I 縛ヲ縛勵U縛」縛 溢ゆ◆縛縛勵√%縛ヨ譜ヤ縲よ◆書九@縛オ縛上>縫峨@縛◆ゆ↑縛懊√>縛◆悽縛後☆縛舌↓ 矛医：縛ヲ縛勵U縛◆◆縛縲阪≥縲
荳也皇縛ヨ 蟻崎送2 螟ア葱嶺サ 丞◆(2) 荳I螟ヤ縛 舌ヤ縲シ縲	縛雍 I 縲ゆケ縛I螟ア葱礼才悟◆縫偵 I 樟莉」隱檻イ縛勵◆縲ゆ◆縛縛後∞ユフ隣鍋噪縛I鄙サ險 ウ◆茨シ傍シ峨↑縛ヨ縛ア縲∞ケ覗◆譜ヤ縛ヨ縫医≥縛オ縲√☆縫峨☆縫峨→隱ヒ縲√↑縛◆ゆ%縫後 b 縲∞商譜ヤ縛ア縛I縛代 I 縛-縲：焰縛オ螟・縫覗↓縛上>縛九 b 縲

縫、縛り縛峨◆隠々遁区惣◆亥、ア葱嶺サ乗路縲、ヲ縛り縛峨え縛シ謨呻シ

九

隨ヤ◆抵シ蝗械縫、縛り縛峨◆隠々遁区惣◆亥、ア葱嶺サ乗路縲、ヲ縛り縛峨え縛シ謨呻シ峨縫観○縫

蟹阪◆縛壹◆縫ク縫ク

縛医ヤ縛励◆縛シ縫ク縫ク謨サ縫

隨ヤ◆抵シ大員縲縫ヲ縛代ル縫

縛山縛牙憧蟄ヲ縫イ謹-蟬玲落

研。縫ヨ縛壹◆縫ク縫ク

隨ヤ◆抵シ灘員縲鮫◆竹謹◆◆

繹繹 繹隨ヤ抵シ灘肩 繹繹鮫・竹譁◆◆繹

◆鷹サ◆竹譁◆◆

繹 繹綻◆ h 縛◆ h 荦₁蝗₂縛₃縛₄縛₅吶

鮫・竹譁◆◆縛碁サ◆◆竹₁荳₂猪₃氷₄油₅縛₆隱慕函₇縛₈吶 k 縛₉縛₁₀悟燕◆包シ撰シ撰シ仙ケ₁₁鬆◆₁₂元₁₃縛₁₄吶
繹鮫・竹譁◆◆縛₁₅蠶₁₆榦₁₇濠₁₈纓₁₉削₂₀-₂₁鬚₂₂加₂₃譁₂₄喧₂₅亥₂₆燕◆包シ撰シ撰シ舌₂₇懷₂₈燕◆難シ撰シ撰シ仙ケ₂₉鬆◆シ₃₀峨₃₁→縛₃₂>縛₃₃セ縛₃₄吶₃₅ゆ₃₆-₃₇鬚₃₈加₃₉縛₄₀縛₄₁後₄₂°₄₃縹₄₄≥₄₅縛₄₆叻 g 縛₄₇阪₄₈U₄₉縛₅₀溢₅₁◆縹₅₂後₅₃Z₅₄縛₅₅ウ₅₆縹₅₇縛₅₈」₅₉縹₆₀阪₆₁→隱₆₂U₆₃縛₆₄セ₆₅縛₆₆吶₆₇ゆ₆₈「₆₉隣₇₀イ₇₁迨₇₂↑₇₃驕₇₄コ₇₅霍。縛₇₆九 i 蠶₇₇榦₇₈燕₇₉縛₈₀後₈₁△₈₂縛₈₃代 i 縹₈₄後₈₅※₈₆縛₈₇U₈₈縛₈₉吶₉₀ら音₉₁蠶₉₂I₉₃縛₉₄蟲₉₅溷₉₆動₉₇縛₉₈蠶₉₉ウ₁₀₀鬚₁₀₁加₁₀₂縛₁₀₃イ₁₀₄蜻₁₀₅シ₁₀₆縛₁₀₇-₁₀₈縹₁₀₉後₁₁₀k 蟲₁₁₁溷₁₁₂動₁₁₃縛₁₁₄後₁₁₅元₁₁₆縹₁₁₇九₁₁₈ゆ₁₁₉%₁₂₀縹₁₂₁後₁₂₂◆₁₂₃縛₁₂₄。縹₁₂₅ウ₁₂₆縛₁₂₇昂₁₂₈ち₁₂₉縛₁₃₀溢₁₃₁い₁₃₂譁₁₃₃◆₁₃₄縛₁₃₅蠶₁₃₆ウ₁₃₇鬚₁₃₈加₁₃₉縛₁₄₀縛₁₄₁医₁₄₂￥₁₄₃莫₁₄₄シ₁₄₅縛₁₄₆ヲ₁₄₇縛₁₄₈◆₁₄₉k 縛₁₅₀U₁₅₁縛₁₅₂ア₁₅₃菴₁₅₄輔₁₅₅i 縛₁₅₆九₁₅₇◆₁₅₈蠶₁₅₉ア₁₆₀鬚₁₆₁加₁₆₂縛₁₆₃後₁₆₄。

繹蠶悟濠縛₁鮫榦ア₂譁₃喧₄亥₅燕◆抵シ呻シ撰シ舌₆懷₇燕◆抵シ撰シ撰シ仙ケ₈鬆◆シ₉峨₁₀リ₁₁ユ₁₂縛₁₃セ₁₄縛₁₅後₁₆j 縹₁₇≥₁₈縛₁₉悶₂₀s 繹阪U₂₁縛₂₂溢₂₃◆縹₂₄後₂₅O₂₆縛₂₇ウ₂₈縹₂₉縛₃₀阪₃₁るサ₃₂帝₃₃ヒ₃₄縛₃₅「₃₆◆₃₇鬚₃₈加₃₉縛₄₀縛₄₁」₄₂◆₄₃蠶₄₄溷₄₅動₄₆縛₄₇後₄₈元₄₉縛₅₀セ₅₁縛₅₂呴₅₃るサ₅₄帝₅₅ヒ₅₆縛₅₇碁₅₈セ₅₉縛₆₀ア₆₁譁₆₂◆₆₃喧₆₄縛₆₅迫₆₆蠶₆₇I₆₈縛₆₉縛₇₀√₇₁%₇₂縹₇₃後₇₄◆₇₅隕₇₆九₇₇◆₇₈縛₇₉縛₈₀覩₈₁j 達₈₂溢₈₃▲₈₄鮫₈₅偵₈₆↑₈₇蟲₈₈溷₈₉動₉₀縛₉₁セ₉₂縛₉₃呴₉₄m₉₅縛₉₆上₉₇m₉₈縹₉₉削₁₀₀ス₁₀₁縛₁₀₂オ₁₀₃懈₁₀₄ク₁₀₅縛₁₀₆ア₁₀₇辟₁₀₈シ₁₀₉縛₁₁₀堺₁₁₁覩₁₁₂「₁₁₃縛₁₁₄溢₁₁₅」₁₁₆縛₁₁₇「₁₁₈」₁₁₉縛₁₂₀」₁₂₁縛₁₂₂」₁₂₃縛₁₂₄」₁₂₅縛₁₂₆」₁₂₇縛₁₂₈」₁₂₉縛₁₃₀」₁₃₁縛₁₃₂」₁₃₃縛₁₃₄」₁₃₅縛₁₃₆」₁₃₇縛₁₃₈」₁₃₉縛₁₄₀」₁₄₁縛₁₄₂」₁₄₃縛₁₄₄」₁₄₅縛₁₄₆」₁₄₇縛₁₄₈」₁₄₉縛₁₅₀」₁₅₁縛₁₅₂」₁₅₃縛₁₅₄」₁₅₅縛₁₅₆」₁₅₇縛₁₅₈」₁₅₉縛₁₆₀」₁₆₁縛₁₆₂」₁₆₃縛₁₆₄」₁₆₅縛₁₆₆」₁₆₇縛₁₆₈」₁₆₉縛₁₇₀」₁₇₁縛₁₇₂」₁₇₃縛₁₇₄」₁₇₅縛₁₇₆」₁₇₇縛₁₇₈」₁₇₉縛₁₈₀」₁₈₁縛₁₈₂」₁₈₃縛₁₈₄」₁₈₅縛₁₈₆」₁₈₇縛₁₈₈」₁₈₉縛₁₉₀」₁₉₁縛₁₉₂」₁₉₃縛₁₉₄」₁₉₅縛₁₉₆」₁₉₇縛₁₉₈」₁₉₉縛₂₀₀」₂₀₁縛₂₀₂」₂₀₃縛₂₀₄」₂₀₅縛₂₀₆」₂₀₇縛₂₀₈」₂₀₉縛₂₁₀」₂₁₁縛₂₁₂」₂₁₃縛₂₁₄」₂₁₅縛₂₁₆」₂₁₇縛₂₁₈」₂₁₉縛₂₂₀」₂₂₁縛₂₂₂」₂₂₃縛₂₂₄」₂₂₅縛₂₂₆」₂₂₇縛₂₂₈」₂₂₉縛₂₃₀」₂₃₁縛₂₃₂」₂₃₃縛₂₃₄」₂₃₅縛₂₃₆」₂₃₇縛₂₃₈」₂₃₉縛₂₄₀」₂₄₁縛₂₄₂」₂₄₃縛₂₄₄」₂₄₅縛₂₄₆」₂₄₇縛₂₄₈」₂₄₉縛₂₅₀」₂₅₁縛₂₅₂」₂₅₃縛₂₅₄」₂₅₅縛₂₅₆」₂₅₇縛₂₅₈」₂₅₉縛₂₆₀」₂₆₁縛₂₆₂」₂₆₃縛₂₆₄」₂₆₅縛₂₆₆」₂₆₇縛₂₆₈」₂₆₉縛₂₇₀」₂₇₁縛₂₇₂」₂₇₃縛₂₇₄」₂₇₅縛₂₇₆」₂₇₇縛₂₇₈」₂₇₉縛₂₈₀」₂₈₁縛₂₈₂」₂₈₃縛₂₈₄」₂₈₅縛₂₈₆」₂₈₇縛₂₈₈」₂₈₉縛₂₉₀」₂₉₁縛₂₉₂」₂₉₃縛₂₉₄」₂₉₅縛₂₉₆」₂₉₇縛₂₉₈」₂₉₉縛₃₀₀」₃₀₁縛₃₀₂」₃₀₃縛₃₀₄」₃₀₅縛₃₀₆」₃₀₇縛₃₀₈」₃₀₉縛₃₁₀」₃₁₁縛₃₁₂」₃₁₃縛₃₁₄」₃₁₅縛₃₁₆」₃₁₇縛₃₁₈」₃₁₉縛₃₂₀」₃₂₁縛₃₂₂」₃₂₃縛₃₂₄」₃₂₅縛₃₂₆」₃₂₇縛₃₂₈」₃₂₉縛₃₃₀」₃₃₁縛₃₃₂」₃₃₃縛₃₃₄」₃₃₅縛₃₃₆」₃₃₇縛₃₃₈」₃₃₉縛₃₄₀」₃₄₁縛₃₄₂」₃₄₃縛₃₄₄」₃₄₅縛₃₄₆」₃₄₇縛₃₄₈」₃₄₉縛₃₅₀」₃₅₁縛₃₅₂」₃₅₃縛₃₅₄」₃₅₅縛₃₅₆」₃₅₇縛₃₅₈」₃₅₉縛₃₆₀」₃₆₁縛₃₆₂」₃₆₃縛₃₆₄」₃₆₅縛₃₆₆」₃₆₇縛₃₆₈」₃₆₉縛₃₇₀」₃₇₁縛₃₇₂」₃₇₃縛₃₇₄」₃₇₅縛₃₇₆」₃₇₇縛₃₇₈」₃₇₉縛₃₈₀」₃₈₁縛₃₈₂」₃₈₃縛₃₈₄」₃₈₅縛₃₈₆」₃₈₇縛₃₈₈」₃₈₉縛₃₉₀」₃₉₁縛₃₉₂」₃₉₃縛₃₉₄」₃₉₅縛₃₉₆」₃₉₇縛₃₉₈」₃₉₉縛₄₀₀」₄₀₁縛₄₀₂」₄₀₃縛₄₀₄」₄₀₅縛₄₀₆」₄₀₇縛₄₀₈」₄₀₉縛₄₁₀」₄₁₁縛₄₁₂」₄₁₃縛₄₁₄」₄₁₅縛₄₁₆」₄₁₇縛₄₁₈」₄₁₉縛₄₂₀」₄₂₁縛₄₂₂」₄₂₃縛₄₂₄」₄₂₅縛₄₂₆」₄₂₇縛₄₂₈」₄₂₉縛₄₃₀」₄₃₁縛₄₃₂」₄₃₃縛₄₃₄」₄₃₅縛₄₃₆」₄₃₇縛₄₃₈」₄₃₉縛₄₄₀」₄₄₁縛₄₄₂」₄₄₃縛₄₄₄」₄₄₅縛₄₄₆」₄₄₇縛₄₄₈」₄₄₉縛₄₅₀」₄₅₁縛₄₅₂」₄₅₃縛₄₅₄」₄₅₅縛₄₅₆」₄₅₇縛₄₅₈」₄₅₉縛₄₆₀」₄₆₁縛₄₆₂」₄₆₃縛₄₆₄」₄₆₅縛₄₆₆」₄₆₇縛₄₆₈」₄₆₉縛₄₇₀」₄₇₁縛₄₇₂」₄₇₃縛₄₇₄」₄₇₅縛₄₇₆」₄₇₇縛₄₇₈」₄₇₉縛₄₈₀」₄₈₁縛₄₈₂」₄₈₃縛₄₈₄」₄₈₅縛₄₈₆」₄₈₇縛₄₈₈」₄₈₉縛₄₉₀」₄₉₁縛₄₉₂」₄₉₃縛₄₉₄」₄₉₅縛₄₉₆」₄₉₇縛₄₉₈」₄₉₉縛₅₀₀」₅₀₁縛₅₀₂」₅₀₃縛₅₀₄」₅₀₅縛₅₀₆」₅₀₇縛₅₀₈」₅₀₉縛₅₁₀」₅₁₁縛₅₁₂」₅₁₃縛₅₁₄」₅₁₅縛₅₁₆」₅₁₇縛₅₁₈」₅₁₉縛₅₂₀」₅₂₁縛₅₂₂」₅₂₃縛₅₂₄」₅₂₅縛₅₂₆」₅₂₇縛₅₂₈」₅₂₉縛₅₃₀」₅₃₁縛₅₃₂」₅₃₃縛₅₃₄」₅₃₅縛₅₃₆」₅₃₇縛₅₃₈」₅₃₉縛₅₄₀」₅₄₁縛₅₄₂」₅₄₃縛₅₄₄」₅₄₅縛₅₄₆」₅₄₇縛₅₄₈」₅₄₉縛₅₅₀」₅₅₁縛₅₅₂」₅₅₃縛₅₅₄」₅₅₅縛₅₅₆」₅₅₇縛₅₅₈」₅₅₉縛₅₆₀」₅₆₁縛₅₆₂」₅₆₃縛₅₆₄」₅₆₅縛₅₆₆」₅₆₇縛₅₆₈」₅₆₉縛₅₇₀」₅₇₁縛₅₇₂」₅₇₃縛₅₇₄」₅₇₅縛₅₇₆」₅₇₇縛₅₇₈」₅₇₉縛₅₈₀」₅₈₁縛₅₈₂」₅₈₃縛₅₈₄」₅₈₅縛₅₈₆」₅₈₇縛₅₈₈」₅₈₉縛₅₉₀」₅₉₁縛₅₉₂」₅₉₃縛₅₉₄」₅₉₅縛₅₉₆」₅₉₇縛₅₉₈」₅₉₉縛₆₀₀」₆₀₁縛₆₀₂」₆₀₃縛₆₀₄」₆₀₅縛₆₀₆」₆₀₇縛₆₀₈」₆₀₉縛₆₁₀」₆₁₁縛₆₁₂」₆₁₃縛₆₁₄」₆₁₅縛₆₁₆」₆₁₇縛₆₁₈」₆₁₉縛₆₂₀」₆₂₁縛₆₂₂」₆₂₃縛₆₂₄」₆₂₅縛₆₂₆」₆₂₇縛₆₂₈」₆₂₉縛₆₃₀」₆₃₁縛₆₃₂」₆₃₃縛₆₃₄」₆₃₅縛₆₃₆」₆₃₇縛₆₃₈」₆₃₉縛₆₄₀」₆₄₁縛₆₄₂」₆₄₃縛₆₄₄」₆₄₅縛₆₄₆」₆₄₇縛₆₄₈」₆₄₉縛₆₅₀」₆₅₁縛₆₅₂」₆₅₃縛₆₅₄」₆₅₅縛₆₅₆」₆₅₇縛₆₅₈」₆₅₉縛₆₆₀」₆₆₁縛₆₆₂」₆₆₃縛₆₆₄」₆₆₅縛₆₆₆」₆₆₇縛₆₆₈」₆₆₉縛₆₇₀」₆₇₁縛₆₇₂」₆₇₃縛₆₇₄」₆₇₅縛₆₇₆」₆₇₇縛₆₇₈」₆₇₉縛₆₈₀」₆₈₁縛₆₈₂」₆₈₃縛₆₈₄」₆₈₅縛₆₈₆」₆₈₇縛₆₈₈」₆₈₉縛₆₉₀」₆₉₁縛₆₉₂」₆₉₃縛₆₉₄」₆₉₅縛₆₉₆」₆₉₇縛₆₉₈」₆₉₉縛₇₀₀」₇₀₁縛₇₀₂」₇₀₃縛₇₀₄」₇₀₅縛₇₀₆」₇₀₇縛₇₀₈」₇₀₉縛₇₁₀」₇₁₁縛₇₁₂」₇₁₃縛₇₁₄」₇₁₅縛₇₁₆」₇₁₇縛₇₁₈」₇₁₉縛₇₂₀」₇₂₁縛₇₂₂」₇₂₃縛₇₂₄」₇₂₅縛₇₂₆」₇₂₇縛₇₂₈」₇₂₉縛₇₃₀」₇₃₁縛₇₃₂」₇₃₃縛₇₃₄」₇₃₅縛₇₃₆」₇₃₇縛₇₃₈」₇₃₉縛₇₄₀」₇₄₁縛₇₄₂」₇₄₃縛₇₄₄」₇₄₅縛₇₄₆」₇₄₇縛₇₄₈」₇₄₉縛₇₅₀」₇₅₁縛₇₅₂」₇₅₃縛₇₅₄」₇₅₅縛₇₅₆」₇₅₇縛₇₅₈」₇₅₉縛₇₆₀」₇₆₁縛₇₆₂」₇₆₃縛₇₆₄」₇₆₅縛₇₆₆」₇₆₇縛₇₆₈」₇₆₉縛₇₇₀」₇₇₁縛₇₇₂」₇₇₃縛₇₇₄」₇₇₅縛₇₇₆」₇₇₇縛₇₇₈」₇₇₉縛₇₈₀」₇₈₁縛₇₈₂」₇₈₃縛₇₈₄」₇₈₅縛₇₈₆」₇₈₇縛₇₈₈」₇₈₉縛₇₉₀」₇₉₁縛₇₉₂」₇₉₃縛₇₉₄」₇₉₅縛₇₉₆」₇₉₇縛₇₉₈」₇₉₉縛₈₀₀」₈₀₁縛₈₀₂」₈₀₃縛₈₀₄」₈₀₅縛₈₀₆」₈₀₇縛₈₀₈」₈₀₉縛₈₁₀」₈₁₁縛₈₁₂」₈₁₃縛₈₁₄」₈₁₅縛₈₁₆」₈₁₇縛₈₁₈」₈₁₉縛₈₂₀」₈₂₁縛₈₂₂」₈₂₃縛₈₂₄」₈₂₅縛₈₂₆」₈₂₇縛₈₂₈」₈₂₉縛₈₃₀」₈₃₁縛₈₃₂」₈₃₃縛₈₃₄」₈₃₅縛₈₃₆」₈₃₇縛₈₃₈」₈₃₉縛₈₄₀」₈₄₁縛₈₄₂」₈₄₃縛₈₄₄」₈₄₅縛₈₄₆」₈₄₇縛₈₄₈」₈₄₉縛₈₅₀」₈₅₁縛₈₅₂」₈₅₃縛₈₅₄」₈₅₅縛₈₅₆」₈₅₇縛₈₅₈」₈₅₉縛₈₆₀」₈₆₁縛₈₆₂」₈₆₃縛₈₆₄」₈₆₅縛₈₆₆」₈₆₇縛₈₆₈」₈₆₉縛₈₇₀」₈₇₁縛₈₇₂」₈₇₃縛₈₇₄」₈₇₅縛₈₇₆」₈₇₇縛₈₇₈」₈₇₉縛₈₈₀」₈₈₁縛₈₈₂」₈₈₃縛₈₈₄」₈₈₅縛₈₈₆」₈₈₇縛₈₈₈」₈₈₉縛₈₉₀」₈₉₁縛₈₉₂」₈₉₃縛₈₉₄」₈₉₅縛₈₉₆」₈₉₇縛₈₉₈」₈₉₉縛₉₀₀」₉₀₁縛₉₀₂」₉₀₃縛

縛ツ長ツ豊ツ澤ツ枚ツ譏ツ弱ツ→縛◆≥蟻「縛ア謨咏ア第嵩縛オ需峨 k 縛九 b 縛励 I 縛セ縛帙 s 繩ゆ U 縛遐皮ウカ驟比ケ覗◆驕コ霍。縛I縛ヨ縛ア縛イ縛覗≠縛医★縛ツ縛励 g 縛◆。縛◆□縛代@縛ヲ縛覗” 縛セ縛励◆繩

繩鮫◆竹譁◆縛檜匱蝶輔@縛ヲ縛◆￥壹I縛ア驛ス螺ゆ' 隠慕函縛励※縛阪U縛呐ゆクU螺入蜿、莉」縛ヨ驛ス螺ゆ
r 驕托シ医 f 縛◆シ峨→險縛◆U縛呐る q 縛イ縛◆≥蟄励◆蜿」縛イ蜿I縛九 i 縛ア縛阪※縛◆k 縛I縛I縛よ哨縛ツ莠I
縛◆' 菴上 s 縛ア縛◆◆髮◆誠縕貞叙縕雁峇縕榆主」✓ r 隅イ縛励※縛◆k 縛よエ縛ツ莠I縛悟コ縛」縛ヲ縛◆k
蟋I縛貞I勵↓縛励◆縛ゆ◆縛ゆ▽縛セ縕匱コ縛暮寔縛セ縛」縛ヲ榆主」✓ ◆壹I縛ア證ヨ縕峨@縛ヲ縛◆k 縛ゆ%縕
後' 驕代→縛◆≥縕上 c 縛ア縛呐ゆ%縛◆>縛◆q 縛暮サ◆イウ壹I猪∞汨縛オ縛溢￥縛輔 s 縛ア縛阪※縛阪U縛
呐

繩鮫◆竹縛ヨ壹区O∞汨縛ツ縛セ縕譁◆◆蟲上↓蝶・縛」縛ヲ縛◆U縛帙 s 繩るサ◆竹縛ア縛◆≥縛ヨ縛ツ縛励 g 縛」
縛。縕◆≥螟ア豌セ牝オ縕偵♀縛雍☆縩よII蜿I誦ゆサ」縛オ蝶・縛」縛ヲ縛九 i 縛ゆ入募員縕よキ晉ユ九' 蟒峨o縛」縛
縛◆k 縕雍ニ縛呐ゆク区O∞汨縛ツ參I蜿I縛ヨ蝶ア鬚コ縛悟、壹☆縛弱※蠖捺函縛ヨ逕澤Iサ謚傍雍ニ縛ツ莠I縛ツ菴上
a 縛I縛九▲縛溢 s 縛縕阪ニ縛I諤昂>縛セ縛呐ゆセ晉—縩悟、ノ鮫◆竹縛阪す纈I纈I縕コ縛ア縛◆≥遂I
邨◆r ◆ヨ◆イ◆オ縛ア縕◆▲縛ヲ縛◆※縩「樟蟲イ縛ヨ鮫◆竹縛ヨ豐ウ蜿」縛ヨ謚蜒上' 謚縛」縛ヲ縛◆U縛励◆縩よ
燕縛九 i 縩◆サ◆竹豐ウ蜿」縛ツ縛ウ縛◆↑縛」縛ヲ縛◆k 縛I縛玖ヨ九◆縛九▲縛溢 s 縛ア縛呐' 縛ツ縛空 a 縛ア縛I謚
上ニ隕九◆縕雍ニ縛呐h 縩ゆ☆縛斐。縛」縛溢◆縩よ◆鬚「縛セ縛」鮫◆竹縛ウ鮫◆竹縛ア縛雍' 豐ウ
縛ア縛ウ縛雍' 豚・縛句◆辟カ蛻◆。縕峨↑縛◆ゆニ縕雍↑鬚I誦ツ縛御入輔く纈I縕ゆ▽縛・縛◆※縛◆k 縕雍ニ
縛励 g 縛◆◆縩ら樟蟲I縕ゆクU螺入螟ア鬚ク縛ツ鮫◆竹縛オ縕医▲縛ヲ驕九◆縕後 k 鮫◆竹縛オ縕九▲縛
蜒阪>縛溢◆縛ア壹句豪霄オ縕瑚◆縛」縛ア縛励U縛」縛溢→縕リI縕上 I 縛ア縛◆U縛呐

繩參I蜿I縛ア縛◆。縛オ謂ア縛◆。縛暮サ◆竹譁◆◆縛ヨ謚◆>譽九◆縛。縛オ縕ツ驥崎ヲ✓↑蝠城。後□縛」縛溢 h
縛◆ニ縛呐

繩壹I螺入縛ヨ蔓鬼Iヤ縛ヨ蜿、莉」縛ヨ閨也視縛オ游ツ◆医℃縕◆≥◆峨I◆医@縕◆s ◆峨I ◆医◆峨→
縛◆≥縛ヨ縛後>縛セ縛呐よツ縛ツ閨I蛻◆◆邇俱入阪 r 閑懊↓隣I縕覗I◆◆縛ツ縛昂◆菴阪 r 縕◆◆縕頑竹蜿I縛
鬆大シオ縛」縛辱I◆縛I縛」縛溢→縛◆≥隧ア縛オ縛I縛」縛ヲ縛◆k 縩らヲ縛ツ壹蠶I壹I鮫◆竹縛オ猪ク縛九▲縛
蜒阪>縛溢◆縛ア壹句豪霄オ縕瑚◆縛」縛ア縛励U縛」縛溢→縕リI縕上 I 縛ア縛◆U縛呐

繩纈励M 纈ウ纈医↓蜀咏俏縛後▽縛代※縛ゆ k 蟻ウ鬚カ縛ア縛呐' 离壹' 謠上>縛ア縛ゆ k 縛ア縛励 g
繩る。斐' 莢I鬚「縛ア縛呐ゆ%縕後' 通ケ縛ア縛ツ縛I縛◆。縛ア縛◆≥隱ヤ縕ゆニ縕九リヲ✓☆縕九↓豐
ウ縛ヨ逾樊ア空ニ縛呐

繩豐ウ縛ヨ逾械↓縛励m縩◆:竹蜿I縛ア鬆大シオ縛」縛溢↓縛励m縩◆サ◆竹縛ア蛻◆ j 髮「縛励※蜿、莉」
壹I螺入縛ヨ螺入蟻カ蟻「謂舌◆閨◆:縕峨 I 縛I縛◆→縛◆≥縕雍→縛ア縛呐

蓄I鬚「高=適
ケ

繩縕雍◆壹我コ縕ツ傍縛後▽縛I縛後▲縛ア縛◆↑縛◆◆縛オ菴阪 r 隣I縛」縛溢 j 隣I縕峨 I 縛溢 j 縛励※縩
✓↑縛I蠶ウ縛後≠縛」縛ア邊区エセ縛縛ア縛◆≥縕雍→縛ア縩✓◆縛。縛オ蜺貞ヨカ縛ア縛◆≥蟄ア參セ縛オ謚✓■壹

覩 E 縷峨 I 縷ア閨也視縺イ縺輔 I 縷ア縺 U 縺呐リ◆蛻◆◆隣邵✓ r 辟。隕悶@縺ア蠅ウ縺ヨ縺ユ k 縷ユ◆縺オ菴阪 r 隠イ縺九%縺ヨ蟻「蟻上 r 達◆イ◆医●縺雍 S 縷◆≥◆蛾→縺>縺セ縺呐ラ炊誼ウ縺ヨ邇俱ス咲カ呪価總代チ縺シ縺ウ縺イ縺励※隕偵 a 達-縺医 i 縺上 c 縺ア縺呐

縺蓑晁Iヤ縺ア縺ツ達ケ縺ツ閨I蛻◆◆蟻蝉セ帙↓邇俱ス阪 r 隠イ縺覩シ縺呐ユ%縺雍ニ譜蛻昂◆邇区惱縺梧◆達九@縺セ縺呐ユ%縺ヨ邇区惱縺貞、擾シ医。◆蛾→縺◆≥縺雍ニ縺呐' 縺:律譜ヤ縺ヨ鈍I蜿I蟻I蓑壹ニ縺ツ縺雍◆螟冗視譜昂◆蟻溷惠縺ツ縺セ縺隱阪 a 縺峨 I 縺ア縺 U 縺帙 s 縺ユク!蝗I縺ア縺ツ蟻溷惠縺励◆縺イ縺輔 I 縺ア縺 U 縺呐リ◆蛻◆◆蝗I縺ヨ鈍I蜿I縺ツ縺ア縺阪 k 縺縺大商縺◆函莉」縺オ縺輔。縺ヨ縺シ縺峨○縺溢>縺イ縺◆≥豌玲戟縺。縺後✓←縺ヨ蝗I縺ヨ閨◆商蟻I荳願シ譏弱ニ縺阪U縺呐

◆呈ヨキ

縺螟冗視譜昂' 豹◆ s 縺縺ユ→縺堤カ呐 \$ 縺ヨ縺梧ヨ+◆医>縺難シ臥視譜昂↑縺雍ニ縺呐' 縺✓%縺雍。縺峨' 達I蝗溢↓閨◆商蟻I荳願シ譏弱ニ縺阪U縺呐

縺驕代↓隠I縺呈綾縺励U縺呐る q 縺ヨ蓑乘-代◆逾門◆縺貞醉縺空￥縺呐 k 豌乘酪髮◆山縺縺」縺溢→縺◆ o 縺後※縺◆U縺呐ユ b 縺励￥縺ツ隣◆焚縺ヨ豌乘酪髮◆山縺御ク縺、縺ヨ驕代 r 蟒I險I縺励◆莠九' 縺ユ▲縺溢。縺ユ@縺後U縺帙 s 縺る q 縺ツ驛I蝗よ寄蟻カ縺I險縺」縺ツ潤ツ縺◆ニ縺励 g 縺◆ユぐ縺I縺シ縺「縺I險縺医◆縺昂 M 縺ケ縺ツ縺溢>縺I縺ユ◆縺ア縺呐

縺縺◆' 縺ツ驕代◆荳I縺ア縺ユサ悶◆驕代↓豈斐ヨ縺ア隕乗。縺ヨ蟻ア縺阪￥霆堺口句鴨縺悟汎縺◆ b 縺ヨ縺悟◆回セ縺励※縺上 k 縺ア縺✓○縺ヨ蟻+縺◆ q 縺剃ク!蠹◆↓縺励※驕代◆驛」蟻井ス雍' 遂溢U縺後 k 縺ユ%縺後' 譜蛻昂◆邇区惱縺I縺輔 I 縺ア縺◆ k 豌+縺ア縺呐よヨ縺I縺◆ニ縺ヨ縺ツ驕代◆蟻榦燕縺ア縺雍 I 縺榦榦荳サ縺I縺I縺」縺ツ莉悶◆驕代 r 邱ユ縺◆。縺オ邱ア蟻医@縺溢✓→縺◆ニ縺オ縺◆↓迄◆ア」縺励※縺覩 c 縺-縺◆>縺ア縺呐よヨ縺I縺◆ニ縺ヨ縺ユ→縺九 i 莉空 c 縺溷錐蟻阪ニ蟻捺函縺ツ蝠◆シ医@縺◆≥◆蛾→蜻シ縺雍ニ縺◆U縺励◆縺ユ%縺ヨ蝠◆◆謡ユサ」縺悟燕◆托シ厄シ撰シ仙ケI鬆◆。縺牙燕◆托シ撰シ抵シ怜ケI縺セ縺ツ縺ア縺呐

縺谿+縺ヨ驕I霍。縺梧ヨ+蠅傍シ医>縺雍" 縺◆シ峨ら視縺ヨ蠅雍' 通I謗空&縺後※縺◆U縺呐ユ%縺。縺峨◆蝗ウ迎医 r 隕九※縺上□縺輔>縺る◆ヴ縺ウ縺溢ヤ縺牙柳縺+謗空▲縺滄らせ縺オ邇九◆驕I菴雍' 蠕玖速縺励※縺ユ k 縺ら視縺ヨ譽I縺ヨ荳九↓回ヤ縺悟沂縺✓※縺ユ k 縺ら堪縺ツ縺ユ◆荳悶ニ縺ヨ譯亥◆蟻ケ縺縺」縺溢 i 縺励>縺

縺邇俱サ・螟悶↓縺ユ◆縺上&縺雍◆谿画サ閨◆' 蠕玖速縺輔 I 縺ア縺◆U縺呐ユ○縺後。縺蛾揭驚◆」入縺ヨ驕貞勧縺ユ◆縺上&縺謎ク!縺ケ縺ア縺ユ k 縺ユ≠縺ヨ荳悶ニ縺ら視縺貞シ医 k 縺溢 a 縺ア縺励 g 縺◆∞◆螢オ縺よ園縺◆↓蛻・縺オ邀I縺呈侍縺」縺ツ蝓九 a 縺峨 I 縺ア縺◆ k 縺励::始霆覩 b 縺ユ j 縺セ縺呐◆縺

縺縺雍 I 莉・螟悶↓透ヨ縺ア莉空￥縺ヨ縺榦函鬥悶ニ縺呐よヨ画サ閨◆◆縺。縺◆ s 縺ア霄+菴雍' 縺ユ▲縺ヨ譜阪 b 達縺ツ蝓玖速縺輔 I 縺ア縺◆ k 縺ヨ縺オ縺✓○縺後→縺ツ蝓・縺オ逕滄I悶I縺代' 縺I縺I縺I荳I縺ケ縺峨 I 縺ア縺◆ k 縺ア縺励 g 縺ユ%縺後◆逾械ニ縺ヨ逕溢 c 雍◆。縺◆1秘勁縺代ニ縺励 g 縺◆

縲縢薙 s 縷 I 縷才縺 ◆ ↓ 謨-逋セ秀コ縲∞、壹>蟻 I 蟻医 ◆ 蜉 ◆ 口莉・荳翫 ◆ 翠画コサ閨 ◆ 「函縢題 I ◆ ↑ 縷ウ縢御ケ邱
偵↓ 蠕玖速縢輔 I 縷ヲ縺 ◆ k 縷ヨ縢梧コモ邇句「薙ニ縢内ゆ。 縷 I 縢翫 ◆ 讓ウ蜉帙 r 髮 ◆ ク縢励※縺 ◆ ◆ 縢薙→縢
悟 ◆ 縢九 k 縲

縲縢盪□蟻ヨ縲 I 縷ウ縢ウ止 I 村縢阪 I 縷盪>縲ヨ縢ウ ◆ 縷ア縲∞」ヨ鰥励↑蟻ヨ縲ウ縢ウ縢◆≥縲ヨ縢ア縢ウ縢 I 縢九
▲縢盪 h 縷 ◆ ニ縢内ゆ

縲縢ヨ縲ヨ謾シ豊サ縲ヨ迫ケ蠕 I 縷ラ・樊ウ謾シ豊サ縢ア縢内よ商莉」遠セ貢壹◆縢ウ縢薙ニ縢ヨ帆豊サ縢イ螳玲落縢御ケ菴
灘喧縢励※縺 ◆ k 縢薙ニ縢内' 翠ヨ縢ウ ◆ ○縺 ◆ ニ縢励◆縲

縲縢ヨ縲ヨ邇九◆縢励 g 縷」縢。縢 ◆ ≥ 蜉縺 ◆ r 縷 ◆ ▲ 縷ヲ逾械 ◆ ↓ 縷賡シ縺 ◆ r 遷九※縢ヨ謾シ縢貞濤縢願。
後>縢セ縢励◆縲ヨヨニ内↓縢ウ縺 ◆ m 縷 ◆ m 縷 I 逾械 ◆ d 謹 I 髮翫 d 蛤勿 I 縢 ◆ ○ 縢薙↑縢弱ニ貅縢。貅縢。
縢ヲ縺 ◆ ※逾械 ◆ ◆ 譏溷後 r 話阪 ◆ 縷 I 縺 ◆ h 縺 ◆ ↓ 縲 √ U 縷盪: : が 髮翫 ◆ 縷。縢ヨ輕入縺 ◆ ↓ 騎 I 縢上↑
縺 ◆ h 縺 ◆ ↓ 蠕シ縢峨 ◆ 達溷殴縢縢」縢盪 s 縷ア縢内

縲縢基%縲阪→縺 ◆ ≥ 賦励' 縺ウ k 縷ア縢励 g 縲ウ % 縷ヨ賤励後@縢薙↓縢 ◆ ≥ 縲阪↓縲基ニ悶阪' 莉控>縢
縢 ◆ k 縷ヨ縲ウ後@縢薙↓縢 ◆ ≥ 縲阪 ◆ 縷昂 I 縷縢代ニ驕薙 ◆ 謹丞袖縢後ニ縢九ウ↑縢懊 ◆ ニ悶' 縷上▲縢、
縢 ◆ ※縺 ◆ k 縢九ニ縢内ウ>縢阪>縢阪↑隱ヤ縢後ニ縢九 s 縷ア縢内' 縲 I ◆ 蜒ウ豺ア縺 ◆ ◆ 縢後%縺 ◆ >
縺 ◆ I ヤ縢ア縢内

縲驕代' 縺ウ k 縲る q 縷ヨ髪縢貞 ◆ 縢九→縢壹▲縢ア驕薙' 霽イ蟲-縢 ◆ □ 縷上◆驕代↓縢、縢・縢 ◆ ※縺 ◆ k
縲ヨス捺國縢ウ莉翫 I 縷盪>縢ヨ蟲溷慍縢基幕縢代※縺 ◆ ↑ 縺 ◆ o 縷代ニ縲∞次逕渢基縢ウニ縢九@諧 I 髮
九◆豌第酪縢ウ ◆ q 縺後↑縢 ◆ →縢薙 m 縷ヨ縢ウ縢盪￥縢輔 s 縺 ◆ k 縷上 c 縷ア縢内ラ憲逝」縢ウ>縢九ニ縢励
g 縺 ◆ ウス輔 h 縰翫 b 縺昂ニ縺 ◆ ≥ 蠕渙枉縢ウ縢ウ險ウ縢ヨ蛻 ◆ °。 縢峨↑縢 ◆ が 髄翫 ◆ 1鷹1 ◆ 1埼1弱' 縢舌■
縢 ◆ \$ 縺。縢 ◆ >縢九 o 縷代ニ縢内ウ ◆ ○ 縺 ◆ >縢 ◆ 1鷹1 ◆ 1埼1弱' 髮縢九 i 驕代 ◆ 豈 I 縷ア蛻・縢」縢ヨ縢薙↑
縢 ◆ h 縺 ◆ ↓ 縲 ◆ q 縷ヨ髪縢ヨ荳九↓鬲秘勁縢代→縢励※莠 I 縷ヨ逕渢ニ悶 r 蠕九 a 縷盪→縢 ◆ ≥ 縢薙□縢 I 縲る
摩縢帝幕縢代※逕渢ニ悶 ◆ 驕代%縺 ◆ ↓ 驕薙 ◆ 蟠九 U 縢九ル%縢ヨ蜃 I 縢九↓縢ヨ逕渢ニ悶 r 縢セ縢盪>縢
縢 ◆ ¥ 縲ウ U 縷盪 \$ 縢薙→縢後∞、悶↓蜃 I 縰俱コ縢ヨ鬲秘勁縢代 ◆ 縢セ縢空↑縢 ◆ ニ縢ウニ縢九 s 縷縢イ
縢 ◆ ≥ 縲

縲縢薙 ◆ 隱ヤ縢梧」縢励>縢九←縢 ◆ °。 縢ヨ蛻 ◆ °。 縰翫 U 縰帙 s 縺後: : ニ縢ヨ邇句「薙↓縢ラ函鬥悶' 縷盪￥縢
輔 s 隕九△縢九▲縢ア縺 ◆ k 縷ヨ縢定 ◆ : : 縢九→縢ウ ◆ 縢峨★縢ア縢 ◆ : : 縢ウ縢る□縢九 i 縺壹→縢 ◆ ≥ 賦励'
縢励 U 縺内よ商莉」縢ヨ荳 I 蠕ア縢ヨ莠 I 縲 ◆ ◆ 隱渢 I 謹溯ノ壹' 貢昂 o 縺」縢ヨ縢上 k 縰医≥縢 I 隱ヤ縢ア縢内 ◆ 縲

縲縢ア縢 ◆ ≥ 縷上 c 縷ア縲∞商莉」莠 I 縷ヨ縢ウ逾械 ◆ ↓ 蜗悶 j 蠕 I 縢セ縢後※逕盪" 縢ヨ縢 ◆ ◆ 縲ウ □ 縢九 i 縲: : 帆豊
サ縲ヨス鍋一逾械 ◆ ↓ 縷賡シ縺 ◆ r 遷九※縢盪 o 縷代ニ縢内

縲縢ヨ縲ヨ莠 I 縷盪■縢ヨ逾樊ア控 ◆ 蠕ア縢阪￥蛻 ◆ c 縢九→荳臥ニ髪械ニ縢九

縲荳縺、縢悟、ウ蛭昂よ、ウ縢ア縺 ◆ ≥ 縢ヨ縲 √ o 縰後 o 縰後↓縢ウス輔→縢 I 縰ア炊魄」縢ヨ縢阪 k 縰医≥縢 I 賦励'
縢励 U 縺帙 s 縢九ラ・械 I 縷盪>縢 I 謹盪 S 縺ア蛻ア縢ヨ縢 ◆ ≥ 隱闇峨 r 薑 I 縺 ◆ % 縺ア縢後ニ縰翫 U 縺内 h 縰ヨ
律譜ヤ縢ヨ譁 ◆ 喧縢ヨ荳 I 縷ヨ縢ヨよオ √ I 霽シ縢薙ニ縢 ◆ k 謹溯ノ壹ニ縢内

縲縢ウニ縢九縺、縢湖 ◆ 品カ廻セ睢。縢堤・械 I 縺内 U 縢ア縢内

縲譜蠕後' 逾門 ◆ 逾械ニ縢内ウク I 蠕ア譁 ◆ ◆ 縰堤炊魄」縢内 k 縰ヨ縢ヨ縢薙 I 縢ヨ驥崎ノ √ □ 縢ア謂昂ニ縢ラ・

門◆逾樽I◆享縛ツ縛昂◆蠣後 b 經溢” 邦壹 c 縛ヲ諧晞ヨ縷◆律諧ヤ縛ヨ諱◆喧縛ヨ壹 縛オ縷ヨキ縛乘カ驟上@縛ヲ縛◆U 縛吶ヨキ縛ヨ莠口繩◆◇豁サ縷雍□逾門◆縛ツ縛昂◆縛セ縛セ逾械↓縛I縛」縛ヲ蟄你惠縛礼ガ壹 c 縛ヲ縛◆k 縛イ閨◆..縛セ縛吶キ←縛雍。繩○ク覈◆諱ケ縛オ縛◆k 縷雍 ネ縛吶◆繩キウ ネ繩○ク縛オ蟄仙ヨ縛ヨ隣悟虛縷定ヨ九※縛◆k 繩ヨ-励↓縛上○縛I縛◆%縛イ縷貞ヨ仙ヨ縛後☆縷後◆縷溢◆縷九 s 縛繩ラ・門◆逾械’ 豈遂I蟄仙ヨ縛オ諧帙◆縛雍→縛ヲ繩○ク縛オ逾門◆逾械 r 蟠◆a 縛ヲ逾縛」縛ヲ縛上 I 縷九%縛イ繩キ%縛後 r 縛オ網懊 k 縛イ縛溢◆縷覈U 縛吶キ□縛九 i 蘭ト縛ヨ邇矩#縛ツ縛◆▽縛顔・1縷覈 r 縛励◆縷峨>縛◆° 縛励 g 縛」縛。縷◆≥蜊縛」縛ヲ縛◆U 縛吶

縲逾門◆逾樽I◆享縛^フ縛^フ縛。縛^フ蜆呈路縛^フ壹^フ縛^フ蠅輔” 邦吶’ 縷後√ & 縷峨↓ 莉乘路縛^フ縲よア髪^フ縲剃^フ弱
.. 縛^フ縛^フ吶^フ o 縷後 o 縷梧律譜ヤ縛^フ莉乘路縛^フ蜆蠅上◆蜆壹^フ縛^フ蜆呈路蛹悶 & 縷後※縛◆※逾門◆逾樽I◆享
縲後◆縛^フ縛^フ縛^フ縲雁◆縲願セシ縲雍□縲^フ ◆縛^フ縛^フ吶^フセ九.. 縛^フ-縛^フ顔寔縲^フ キ 蠼難盾縲覗↓ 縛^フ ▲縛^フ邱壹^フ咏^フ九
※縲九^フ 縛^フ励 g 縲^フ ≠ 縛^フ邱壹^フ吶^フ ◆縲^フ → 縲^フ → 蜂呈路縛^フ縲^フ ◆縛^フ縲^フ∞、ウ遂後↓ 縛^フ k 逾門◆縛^フ髪覗^フ
縲^フ ◆邱壹^フ吶^フ ◆辣吶 r 縛^フ澁←縛^フ蠅-荳顔阜縛^フ縲上！ 縲^フ縲上！ 縛^フ縲^フ → 縛^フ蠅-縛^フ縲^フ縲上 k 縲^フ ◎縛^フ轄^フ
縲^フ縲^フ ◆縲峨@縛^フ キ ◎縲^フ ◎縲^フ ◎乗路縛^フ逅^フ 悅^フ。 縲^フ芽^フ : 縷後◆逾門◆縛^フ髪覗^フ↑ 縲^フ雍^フ※蟄^フ倅惠縲
励↑ 縛^フ s 縛^フ縛^フ吶 h 縲^フ ← 縲^フ雍^フ。 縛^フ需^フ蟻^フ霆「逕澁@縛^フ縛^フ k 縲^フ雍^フ 矢 縛^フ 吋 縲^フ」。 縲^フ峨^フ 縲^フ 風函縲阪※
縲^フ k 縲^フ上！ 縲^フ上！ 縲^フ縲^フ」 縲^フ蟄^フ堺^フ悶^フ矢 縲^フ隱-縲九◆逾門◆縲縲」 縲^フ澁^フ。 縲^フら行縲後↑ 縛^フ o 縲^フ代^フ矢 縲^フ」。
門◆縲貞I◆享縛^フ吶 k 縲^フ縲我^フ縲^フ縲^フ 値^フ ≠ 縲^フ後 a 縲^フ阪 h 縲^フ √ → 縛^フ ≥ 隧^フ 縲^フ縲^フ縲九^フ キ 蠼難盾縲覗☆縲九^フ h 縲
覗^フ 縲^フ ◆◆睢壹 d 陝^フ邇^フ峨^フセ繩^フ繩^フ 励 r 髮^フ澁^フ 縲^フ縲^フ 婿^フ縲^フ後 h 縲^フ縲^フ萱^フ幃^フ、覗^フ ↓ 縲^フ縲^フ縲九^フ o 縲^フ代^フ 縲^フ キ 蠼覗^フ
& 縲^フ雍^フ ◆隧^フ 縲^フ定^フ ◆縲^フ ※縲^フ ※逾門◆縲^フ萱^フ幃^フ、覗^フ ≥ 縲^フ雍^フ 縲^フ雍^フ → 縲^フ ≥ 隧^フ 縲^フ悟^フ ◆縲^フ縲阪◆縲峨^フ : キ 莉^フ・
譚^フ・縲^フ譚^フ 縲^フ「縲^フ縲^フ「縲^フ螳玲路迢^フシ晉^フ 縲^フ後% 縲^フ雍^フ ↓ 逕澁」 縲^フ縲^フ k 縲^フ雍^フ 縲^フ縲^フ 縲^フ代^フ
▲縲^フ壹^フ九 & 縲^フ

縲縈々遁九' 蜉縛◆↓菴ソ縛」縲盃◆縛檣央縛工縛ウ螟ア蝠句虚逆ウ縛ヨ関ウ逕イ闘イ縲◆コ縛ヨ逕イ鄒◆テ縛呐ウ←
縛◆d 縛」縛ウ蛺縛」縲盃。縛イ縛◆ミ縛イ縲○セ九.: 縛-茅縛ヨ逕イ鄒◆√♀閻ケ縛ヨ譁ケ縛ヨ逕イ鄒◆テ縛呐' 縛雍%
縛オ壹ウ縛◆コ昂 r 縛◆￥縛、縲よ侍縲翫ウ縛呐ウテ縲√○縛ヨ貅昂↓譁イ縛ヨ譽偵↑縛ウ縛ア轍ウ縲呈款縛励▽縛代
k 縲雍テ縛呐ウ☆縲九→縬偵ン縛悟◆縲九ウ%縛ヨ縬偵ン縛ヨ蠖「縲◆鼈縛阪テ蛺縛◆r 縛励ウ縛励◆縲よ頃
縛」縲淳オ先樞縲堤抜鄒◆d 闘イ縛ヨ隙丞◆縛オ蛻サ縲雍テ險倅鹹縛励U縛励◆縲ウ%縛ヨ譁◆勵' 逕イ闘イ譁◆勵
勵テ縛呐リウ◆呂髪◆↓縛ウ逕イ闘イ譁◆勵 r 蛻サ縲雍□茅縛ヨ逕イ鄒◆◆蜀咏悄縛後≠縲翫ウ縛呐' 縲√%縲後
r 縛イ縛」縛上 j 霧斐☆縛イ辟サ縛剃サ空>縛混ウ縛◆コ昂→縬偵ン縛後◆縛上&縲雍≠縲九◆縛壹テ縛呐
縲縛雍◆逕イ闘イ譁◆勵' 縛ヨ縛。縛ヨ狸「蟄励◆蜴溷榔縛イ縛工縲九○縛代テ縛呐

繆鈎^ト縛^ハ鬚^シ帝^ヒ喝^ハ蝎^イ縛^ツ蠍^ヘ壺^ツ◆繩^カ繩^カ繩^カ。繩^カ壹^シ縛^ハ邵^ハ◆貂^{アマニ}蟾^{カニ}縛^ハ肴^ハ。讒^ハ空^カ◆繩^カ繩^カ繩^カ◆于^ハ縛^ハ呐^ハ

繰谿^チ・縛^ミ・譜^ヒ・蟠^ヘ・後^{アフ}◆遁^{トク}九' 還^シら視^ス◆医^ヒ■縷^ヒ◆≥縛^ミ覗^ミ≥◆峨^{カハ}干^シ縛^ミ吶^ル◆豎^{タマ}閑^{カニ}画^{カニ}某^モ縛^ミ◆逕^{カツ}縛^ミア縛^ミ吶^ルよ腐^リ莠^イ区^ク◆隱^{ヒカ}械^キ◆繰^チ葛^ハ◆豎^{タマ}閑^{カニ}画^{カニ}某^モ繩^ミ阪^ハ◆縛^ミ才^シ縛^ミシ縛^ミ◆

繆
繆

婉り◆崎譜ク羅ケ莉 緺サ緼サ緼サ緼サ縕 ゆゝ 蝶代@隧ウ縕励￥遏・縕覗◆縕 ◆→縕阪◆

譜ヶ巻阪 r 縷^タ縕^タ縕^タ◆け縕^タ吶 k 縕^タ縕^タ縕^タう縕^タ縕^タ縕^タ阪ヤ縕^タ域^タ鳶^タ躰^タ励^タ後^タい縕^タ械^タだ縕^タ縕^タ阪◆縕^タ壹^タ◆縕^タ縕^タ縕^タ巻^タ
帙 s 縕^タ縕^タ縕^タ：悽^タ縕^タヨ縕^タ◆◆縕^タ縕^タ：鳶^タ隧^タ輔^タ↑ 縕^タ縕^タ定^タヲ九 k 縕^タ縕^タ雍^タ→縕^タ後^タテ 縕^タ阪^タ↑ 縕^タ吶^タリウ^タ蝶^タ・縕^タよ庄^タ闇^タ入^タ縕^タア縕^タ吶^タ

荳 ¹ 蝗入蜿、莉 ¹ 縺 ³	通入蟾晞撕闡励よシ「蟄励◆謌舌 j 達九■縺九 i 縷∞商莉」荳 ¹ 蝗入縺 ³ 縺イ縺イ縺イ縺 ³
謹◆喧隱幄 ¹ 、セ蟄 ³	證 ³ 縼峨@縺梧◆縼峨。縺オ縺輔 l 縺ヲ縺◆￥縲る ⁴ 壹￥縺ケ縺堺 ¹ 穗 ¹ 九 ¹ 元縺呐ラ區蟾
曉捺枚蟠 ¹ 441	暎-上◆隱ヤ縺梧 ¹ 」縺励>縺九←縺◆。縺ヲ蛻・縺オ縺励※縲∞ ¹ 蝠上◆縺翫 b 縺励m縺
	輔 r 蟠滓—縺ア縺阪 ¹ 縺呐
荳 ¹ 蝗入蜿、莉 ¹ 縺 ³ 號 ¹	通入蟾晞撕闡励ら區蟾暎-上◆莉穗 ¹ 九◆縲∞ ¹ 鍋ウサ迨◆元縺ヲ縺 ¹ 縺◆◆縺ア縺 ¹ 縺上◆
台 ¹ 荼 ¹ 幄 ¹ 、セ蟄 ³ 曉 ¹	& 縼楂 ¹ 縺セ縺 ¹ 縺◆→螟 ¹ 菴灘 ¹ ワ縺ヲ縺上 ¹ 。縼峨↑縺◆ゆケ翫◆譜ヤ縺イ荳邱偵↓隱 ¹ 縺
捺枚蟠 ¹ 484	縺イ縲 ¹ :シ「蟄怜忽螢 ¹ 縺 ¹ 縺 ¹ 縺後 k 縺九 b 縲
荳也阜縺 ³ 豁 ¹ 蛻 ¹ (3)	
荳 ¹ 蝗入縺 ³ 縺ゆ ¹ 縺 ³	雋晏。闌よ竹(闌), 蟬ア蟲カ蛻 ¹ 荳(闌) 縲よヨ爻分縺 ³ 讎リエ譜ケ縺ア縺呐
縺 ³ .豊 ¹ 蜃 ¹ 謹 ¹ コオ	
荳 ¹ 蝗入謹 ¹ ◆◆縺 ³ 豁 ¹	

[蜿イ繩1繩我ク蝗入](#)

[謹◆喧縛^ト譜千才^ト壹^ト](#)

[蠍ヤ謹◆コオ](#)

豌I驥 貂◆ク (邱イ髪)繩リソ大ケI譁◆コオ蛹悶 & 縷後※繩∞◆縷√※縛雍◆縷^ト緺I緺シ縷^ト
 縷^ト蟄^ト併惠縷堤行縷覗^トU 縷勵◆繩ゆク^ト蝗入譁◆◆縷^ト鈎I蜿^ト縛^ト縛^ト≥^ト鬱悟錐縛^ト縛^ト呐'
 繩√→縛^ト縛^ト縛^ト、縛^ト縷^ト賊^トク^ト蝗入蜿^ト縛^ト縛^ト呐'

隨ヤ◆抵シ灘肩縲鮫◆竹譁◆◆縲縛覗^ト○縷

[蟹阪◆緺壹◆縷^ト縛^ト](#)

[緺医ヤ緺勵◆緺シ縲^ト縛^ト譜サ縷](#)

[隨ヤ◆抵シ貞肩縲縷、緺ウ緺](#)

[芻。縷^ト緺壹◆縷^ト縛^ト](#)

[峨◆隠^ト邇区惣◆亥、ア葱嶺サ乘](#)

[隨ヤ◆抵シ泌肩縲蜻^ト](#)

[落緺サ緺偵^ト緺峨え緺シ謨呻シ](#)

□□□□□□□□□□

第24回 周

1周

殷を滅ぼした王朝が周です。周は現在の西安あたりにあった邑です。もともとは殷に服属していたのでしょう。これがだんだん力をつけてきて周辺の邑を支配下におくようになって殷の統率から離れる。最後は殷を中心とする邑連合と、周を中心とする連合が決戦をして周が勝利した。これが前1027年のことです。この時の周の王様が武王という。殷の王様が酒池肉林の紂王でした。

周のあった場所は当時の中国文明の辺境です。周を建てた部族は西方の異民族系統だった可能性が強い。そもそも漢民族と呼ばれるようになる中国文明を作った民族というのは、こんなふうにどんどん周辺の民族が中国文明化して形作られた。周をつくった人々は辺境の蛮族に近いから戦争も強かったんでしょう。

周が都をおいたのが鎬京（こうけい）。今の西安あたり。

周の支配制度が「封建制」です。周王は、有力氏族の首長に邑を与える。まだ未開の土地はたくさんありますから新たな邑を建設させてそこの統治をまかせる。こういう新しい邑が周の支配下の土地にたくさん建設されるわけです。従来の邑の中には殷と近い関係にあったものもたくさんあるでしょうから、こんなふうに周王は配下の邑をつくることで全土ににらみを利かすことができたのです。周王から邑の支配をまかされた者を諸侯といいます。諸侯は周王に対しては軍役と貢納の義務を負いますが、それ以外は自分の領地をどう支配してもかまいません。諸侯は自分の邑の周辺に配下の有力者を配置します。かれらも小さな邑を支配する。かれらのことを卿・大夫・士（けい・たいふ・し）という。

要するにピラミッド型に上から、周王、諸侯、卿・大夫・士とあってみんなそれぞれのランクに合わせて邑を支配している。これが周の封建制です。士以上が貴族身分、支配者階級と考えたらよい。

この周の封建制は日本や西欧の封建制とは違う、と教科書には書いてあるね。何が違うか、まだ西欧の封建制を勉強していないから教科書の書き方は非常に不親切だけど、簡単にいうとこういうこと。日本の中世でも同じですが、領主は領土を与えてくれた君主に恩義を感じて忠誠を誓う、というのが封建制。領地を与えるから私はおまえの主人、逆らったらいかんよ、という契約関係です。領地と忠誠を交換しているわけです。

周の封建制を支えているのはそういう契約関係ではない。何かというと、血縁関係です。これを宗族という。共通の祖先から枝わかれしたと信じている集団です。同じ宗族なんだから協力しなくてはいけないというルールを作つてそれによってピラミッドの統制を保ちます。

宗族の規範のことを宗法といいます。

宗法では、周の王様は御本家なの。諸侯は分家。卿・大夫・士はさらに分家。分家は本家に逆らっていけない。なぜかというと本家だけが、祖先の靈を祭ることができます。分家の者が祖先神を祭っても良いけど、本家がお祭りすることで御先祖様は一番喜ぶわけですよ。

だから、その御本家の周の王様に逆らうわけにはいかないのです。これが宗法。この秩序で周王は諸侯を統率した。だから、まだまだ宗教的ですね。祖先神のたたりは恐ろしいからね。周は殷を滅ぼしたときにその王家の者を殺さないんですよ。なぜかというと、殺してしまうと、殷王家の祖先神を祭る者がいなくなるでしょ。そうしたら殷の祖先神が災いをなすかもしれない。それは恐ろしいので王家の者は生かしておく。そういう時代です。

2周の東遷

周の時代は大きく二つに分かれる。前半を西周（前1027～前771）、後半が東周（前770～前256）です。

前半の都が鎬京でした。後半の都を洛邑（らくゆう）という。都が東に移ったので東周というわけです。

都が移ったのに関して面白いエピソードがあるので紹介しておきましょう。幽王と褒ジ（ほうじ）の物語です。

都が移ったときの王が幽王です。褒ジはその妃なんですが、絶世の美人。幽王はぞっこんなんですが、褒ジ妃には一つだけ変わったところがあったんです。なにかというと、彼女は生まれてから一度も笑ったことがない。いつもすましている。これだけの美人なんだから笑顔はどれだけ素晴らしいだろうと幽王は思った。そこで、道化師をよんだりいろいろなことをするんですが、何をしても褒ジは笑わない。

こうなってくると、幽王はなにが何でも笑顔が見たい。願望がどんどん煮詰まってくるわけだ。

そんなある時、西方から異民族が鎬京を襲撃に来ました。こういう時は鎬京からのろしをあげて東方の諸邑の諸侯に救援を求める事になっている。幽王はのろしをあげた。それを見た諸侯たちは、一大事と手勢を率いて全土から鎬京の町目指して駆けつけます。

ところが鎬京の城外に集結してみると、異民族の襲撃は誤報だったことが分かる。息せき切って駆けつけてきた諸侯の軍隊は、拍子抜けしてガックリするんです。

それを城壁の上から褒ジは見ていた。大の男たちがガックリする様子が面白かったんでしょう。ニッと笑つたんだ。それを幽王は横から見た。その笑い顔を見て、ゾクゾクッと興奮してしまった。やっぱり素晴らしい美しかったんですね。もう一度見たい、と幽王は思った。どうすれば彼女が笑うかも分かった。

非常事態にしかあげるべきでない救援要請ののろしを幽王はあげてしまうんだね。幽王のろしあげる、諸侯駆けつける、敵いない、ガックリ、褒ジ・ニッ、幽王ゾクゾクッ、またのろしあげる、諸侯駆けつける、敵いない、ガックリ、褒ジ・ニッ、幽王ゾクゾクッ。このパターンが何回も続くうちに諸侯も分かってくる。王は妃の笑いを見たためにわれわれをだしに使っている。もうのろしがあがっても行かないぞ、となる。狼少年の話と同じだ。

やがて、本当に異民族が鎬京に攻め込んできます。幽王は必死にのろしをあげるけれど諸侯は誰一人として救援に来なかつた。そのまま、鎬京は陥落して周は都を東の洛邑に移した、というわけです。

この話は物語ですが幾つかの真実も含まれているんでしょう。ひとつは、周が西方辺境の異民族統治に失敗して混乱の中で都を放棄せざるを得なかつたこと。もうひとつは、宗族として本家である周王を盛りたて助

けなければならない諸侯が、それを行わないようになっていた。宗族、宗法の絆がゆるみ始めていること。

都が移って以後は、東周の王は名目だけの存在となります。諸侯を統制するだけの力も権威も無くなってしまった。諸侯の自立化が始まるのです。

この東周の時代がさらに前後半に分けられます。前半を春秋時代（前770～前403）、後半を戦国時代（前403～前221）という。

春秋時代は周王の力が衰えたけれども、諸侯たちの意識として王様を盛りたてなければいけないという意識がまだそれなりにあった時代。宗法が人々の意識をそれなりにしばっていた時代です。

そういう古い意識をかなぐり捨てたのが戦国時代です。

3 春秋時代

春秋時代のキーワードが「尊王攘夷（そんのうじょうい）」です。尊王は王様を尊ぼうということですね。攘夷の攘は「うちらう・おいらう」という意味。夷は異民族のこと、尊王攘夷というのは、「頼りない王様だけど、王なんだから尊重しましょう、王様に力がないから王の代わりにわれわれ諸侯が異民族を打ち破って中華文明を守りましょ。」ということです。この言葉は幕末の日本でも使われるから知っていますね。もとはこの春秋時代の言葉です。

王に代わって天下に号令をするような有力な諸侯が春秋時代を通じて何人か現れるんですが、そういう有力諸侯を「霸者（はしゃ）」という。「春秋の五霸」というのがあって特に有名な霸者五人をこう呼ぶ。どの諸侯を五霸に挙げるかは人によって違いがあります。資料集にあるのは「齊の桓公、晋の文公、越の勾践（こうせん）、呉の夫差（ふさ）、楚の莊王」ですね。齊とか晋とかいうのは諸侯の国の名前です。もともとは大きな邑ですがこの時代にはもう国といった規模になっているわけ。桓公とかは諸侯の名前です。

霸者というはどういう言葉かというと、王者よりワンランク下の称号です。この時代の諸侯は、いくら周王よりも力があっても周王に遠慮して王者とはいわない。だからワンランク下の霸者といいます。まだ、宗法がそれなりに生きている。だから桓公とか文公とか霸者の呼び方は「公」。桓王、文王とは言わないので。楚の莊王だけが王といっているでしょ。これは楚は南方の国で中国の文明地帯から見れば彼らはまだまだ野蛮人です。この国の人々はまだあまり中国文明化していない。だから、宗法とか周王を尊ぶとか、そういう文化があまり理解できていない、というか影響されない。だから、文明国なら遠慮して王とは言わないのに、全然遠慮しないで王と名乗っているのです。やがて、先進地域の国々でも、これに影響されて王と称するようになりますが。

春秋時代は諸侯同士で戦争もたくさんあります。はじめの頃は戦争で敵国を破っても相手の国を滅ぼすことはあまりなかった。これは、滅ぼしてしまってその国の祖先神を祭る者がいなくなることを恐れたためです。この理屈はさつき話したね。

ところが春秋時代もすんでくるとたたりを恐れる意識も薄れてくるんでしょう。小さな国は滅ぼされるようになります。春秋時代のはじめには200ほどあった国が終わり頃には20ほどに減ったようです。

4 戦国時代

これが戦国時代になると、宗法の統制は完全に有名無実になる。人々は合理的な発想をするようになるんだ。「祖先神？、関係あるかい！」ということです。

孔子という思想家がいます。中国史上最大の思想家、春秋時代の人ですが、この人は「怪力乱心を語らず」。怪奇現象や神秘的なことは口にしなかったというわけ。こういう風潮が広まってるんですね。

家臣が主君を倒す、分家が本家を乗っ取る、こういうことが頻繁に起きてくる。いわゆる「下剋上」の時代です。この下剋上という言葉も日本の戦国時代で使われるけれど元祖は中国の戦国時代の言葉です。春秋時代の大國晋が分家に乗っ取られて三分裂した以後を戦国時代といいます。

戦国時代に強国が七つに絞られます。これを「戦国の七雄」と呼ぶ。燕、齊、韓、魏、趙、秦、楚、の七国です。



戦争の主力も歩兵中心になります。それまでは戦車に乗った貴族が軍の中心だったのですが、勝つためには兵力が多い方がいいでしょ、農民を歩兵として動員して戦争が大規模になる。やがて、この中の秦が中国を統一することになります。

春秋・戦国時代に中国社会は政治的に大きく変化していくのですが、社会の仕組み全体が大きく変動していった時代もあります。まずは鉄製農具の登場と、牛耕の普及がある。

大地を耕すスキ・クワはそれまで木製だった。これが鉄製に変わることがどれだけすごいか想像できますか。サクサクいくだろうね。おまけに牛の鼻にワッカを通して紐をつけて引き回す事ができるようになります。この牛にくびきをつけて鉄製のスキを牽かせるわけだ。飛躍的に耕地が増えるのですよ。

それまではそれほど多くの土地を耕せませんでした。邑があるでしょ。農民もみんな邑に住んでいるの。朝になれば農具を持って邑から畠に行って、夕方には邑に帰ってくる。ところが鉄製農具と牛耕で、それまで耕せなかつた遠くの土地を開拓できるようになる。遠くに農地ができると一日のうちに邑から出て帰ってこられなくなります。そこで新しい邑を建設してそこに農民は移住していきます。こんなふうにしてどんどん新たな邑が作られ耕地が増え人口も増えていく。領土内の邑を点として支配する今までの国家の在り方を「邑制国家」といいましたが、これが面として領土を支配する「領域国家」に変化してくるのです。

この結果どうなるか。今までいろいろな国があってもその国境線は問題になりませんでした。開発できない荒野が邑と邑、国と国との間に広がっていたんですから。ところが未開地の開拓がすすんで領域国家となると国境線が問題になってくる。未開の土地をどの国が支配下に置くのか。農地が広がればそれだけ国力も充実するですから、どの国も必死になります。これが戦国時代になる大きな背景です。

農業の発展にともなって商工業も発展した。強国の都には人口数十万規模の大都市も出現する。ということは人間も移動するようになるんです。生まれた邑の中で一生過ごすんではなくて諸国を遍歴して商売したり、仕事を探して大都市に出てくる、そういう人間も多く現れてきました。春秋時代の末期から戦国時代は

中国史上まれにみる躍動的な時代になりました。

商業の発展に関して、青銅鋳貨が各国で発行されています。北方の齊、燕では刀銭（とうせん）、中央部の韓、魏、趙では布銭（ふせん）、西の秦では環銭（かんせん）、南の楚では蟻鼻銭（ぎびせん）というものが作られた。形がユニークですね。教科書の写真で確認してください。刀銭は刀の形、布銭は農具の形です。スキ・クワの先っぽの部分です。蟻鼻銭は子安貝という貝殻の形をモデルにしている。ニューギニアの高地人など太平洋の島々では子安貝をお金として使う例がたくさんあるんです。だから、楚の国が南方系の文化を受け継いでいることがわかるね。

こういう特殊な形をした貨幣がなぜ作られたのか。単に物を売ったり買ったりするためだったら、刀銭や布銭なんて不便な形でしょ。お金に商取引のためだけでなく呪術的、お守りのような役割があったんでしょうね。

秦の環銭はおなじみの形です。円くて穴があいている。やがて秦が戦国時代を終わらせて中国統一をします。で、この形のお金が中国のスタンダードになる。これが日本列島にも入ってきて銅銭には穴をあけるようになる。日本史に出てくる和同開珎や、この前発見された富本銭もそうでしょ。これは、今の五円、五十円にまで受け継がれる伝統だ。なぜ、五円玉に穴があいているのか、さかのぼれば秦の環銭にまで行き着くというわけです。私が小さかった頃に、穴のあいていない五円玉や五十円玉がありましたよ。でも、いつの間にか消えてまた穴あきに戻ったね。穴がないとなんか寂しいんですね、大蔵省も。じゃあ、なぜ十円や百円には穴がないのか。これは私の想像ですけれど、明治維新で西欧化を目指すでしょ。十円、百円の系列のお金は多分ヨーロッパのコインをモデルにしたモダンな形、一方、五円、五十円の系列は伝統にのっとったのではないかな。あくまで想像ですけど。

ところで、刀や農具など大事な物がお守り的な役目を持つのはわかりやすいんですが、秦の環銭にはどんな意味があるのか。やはり、穴に意味があるのではないかと思う。この穴に何か神様が宿るんじゃないかな。コックリさん、知ってるでしょ。小学校時代に流行した。すぐ禁止されてしまったけれどね。あれをするときに使うのが必ず五円玉でした。十円ではだめなの。コックリさんがやって来て穴の中に入るとわれわれは信じていましたけど、違います？

それから、新年早々のスーパーで買い物をすると、お年玉といってポチ袋に入った五円玉をもらった経験はありませんか。五円玉の穴に紅白の紐が通してあって、これを財布に入れておくとお金が貯まるというやつ。あれも、十円や百円では雰囲気でないのね。

現代に生きているわれわれの中にも、お金の穴に関してほんやりだけど特別な力の存在、呪術的な何かを感じる感性が受け継がれています。戦国時代にはもっと強い神秘的な力を人々は感じていたんだと思う。お金は単に流通・交換のための道具ではなかったということです。

話がだいぶそれてしましました。

商業の発展に関して、もう一つ「矛盾」の話をしておきましょう。

矛盾という言葉は知っているよね。この言葉のルーツがこの時代です。ある都市の市場、盛り場で口上を唱えながら武器を売っていた商人がいた。矛（ほこ）を売るときはどんな盾でも貫くと言い、盾を売るときに

はどんな矛でもねかえす、と言いながら売っている。それをみていた冷やかしの男が「おまえの矛でその盾を突いたらどうなるんじゃ！」と突っ込みを入れたんですね。これが矛盾という言葉のもとです。

この話をよく考えてみると、みごとに戦国時代の状況が浮かび上がってくる。商人が売っていた「どんな盾でも貫く矛」はいったい何でできていたのか。鉄製としか考えられない。盾も鉄張りだったんでしょう。ようやく鉄製の武器が出回り始めている状況、そのなかで商人は「最新式の武器だ！」と言って売っているわけです。

さらに、市場で売っているという事も重要ですね。市場で売られているということは、注文を受けてから鍛冶屋さんが作るんではなくて、流通を前提にして大量生産されているということですよ。源平合戦の頃の平氏や源氏の侍たちが京都や鎌倉の市場で武具を買っていたのかどうかを考えてみれば、当時の中国の社会がどれだけ商工業が発展しているのか実感できるでしょ。

そして、当然のことではありますが売られているのが武器だということ、戦争が日常的におこなわれ、武器を手に入れて一旗揚げようかという浪人がゴロゴロいた。古くからの農業共同体を出て諸国を遍歴している人々がたくさんいたことを思われますね。

社会全体が大きな変動期をむかえていたこという事が「矛盾」から分かるのです。

農業、商業、流通の発展と社会の活性化、流動化の中で戦国の諸国は生き残りを賭けて、富国強兵策をおこないました。それは、また次回。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[中国古代史論
平凡社選書](#)

宮崎市定著。私の中国史観に大影響を与えた人です。中国古代の邑を都市国家と見なすことができるか論じた論考や、史記についての論考など、短い論文をまとめたものです。どの論文も、学術論文ですが、中国史専門でなくても充分理解できると思います。というか、エンターテイメントの域まで突き抜けています。特に、「身振りと文学」は圧巻。没後、宮崎氏の著作が多く文庫化されていますが、すぐに品切れ、絶版になりそうなので、手に入れるなら今のうち。

[アジア史概説
中公文庫](#)

宮崎市定著。中国史ではなく、「アジア史」の概説。世界史の中で中国史を考えていたことがよくわかる。スケールの大きさと着想の独創性にただただ感服です。

第24回 周 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第23回 黄河文明](#)

[次のページへ
第25回 富国強兵](#)

□□□□□□□□□□

第25回 富国強兵

1 諸国の富国強兵

春秋時代の末期から戦国時代になると、各国間の戦いも日常的になってきますから、うかうかしていると他国に併合され国が滅びます。そこで、懸命に富国強兵策をおこなう。

どの国も富国強兵で必死。いろいろな話が伝えられています。たとえば、趙の武靈王。この人は軍隊を強くするために騎馬遊牧民族の戦法を導入したんです（前309）。

それが、なんだ！なんて思わないでね。これは大変なことだったんですよ。

基本的に中国の戦法は歩兵か戦車を使う。馬にまたがることは無い。そもそも、中国人の服はゆったりしている。袖は袂が広くて、裾は足を大きく広げることができません。乗馬に適していないのです。

だけれども、遊牧民の騎馬戦術は、機動力があって強いから武靈王はこれを導入しようとした。そのためには、まず、服装の改革をしなければならなかった。貴族たちに遊牧民の服装をさせようとしたわけだ。

ところが、これが貴族たちの猛反対にあった。理由はというと、遊牧民のような野蛮人の服は着たくないということです。文明人は誇り高いからね。

遊牧民はどんな服を着ているかというと、基本的に今の君たちの服と同じです。馬にまたがるように足をガバッと広げられるズボン。弓を引きやすいように袖も真っ直ぐな筒袖。われわれが今着ている服はヨーロッパから来たのですが遊牧文化起源のものです。で、これは野蛮人の服なのです。当時の中国人にとってはね。

結局、武靈王は貴族たちの反対を押し切って改革をしました。騎射胡服の採用といいます。誇り高い中国文明の人が遊牧民のまねをするというのはすごいことなんですよ。それだけは理解しておいてください。戦国の厳しさが反映していると思います。

国を強くするためには武靈王のように改革をどんどんおこなわなければならないね。しかし、従来の支配者階級、卿・大夫・士などの貴族たちは何もしなくとも名門ですから積極的に改革に取り組もうとしないし、取り組むだけの才覚のある人材も少ない。庶民出身でも優秀な人材はいるわけで、こういう者たちを使わない手はない。出身・身分にとらわれない能力主義の人材登用がおこなわれるようになります。

当時の諸国の諸侯たちが人材登用に熱心だったことを表す話はたくさんあります。

有名なのが「まず隗（かい）より始めよ」。私の高校時代にこの話、漢文の教科書に載っていましたね。燕の昭王（前3世紀初）の時です。昭王は何とか優秀な人材を集めて国を発展させたいと思った。ところが燕の国は現在の北京のあたりにあるのですが、当時は北の辺境、田舎の国です。こんな辺境の寒い国にどうやったら有能な人材が来てくれるだろうかと悩んだ。そこで、大臣の郭隗というものに相談するんです。すると郭隗が言ったセリフが「まず隗より始めよ」。何を言っているかというと、私にたくさんの褒美を与え

なさい、ということです。私のために宮殿を造ってくれ、それからいっぱい褒美として財宝をくれ、そして、私を先生として敬いなさいという。昭王がそれはどういうことか聞くと、郭隗はこういう。私は大した人物ではないし、才能もあまりない。しかし、この凡人の郭隗にすら昭王が莫大な褒美を与えて、先生として敬っているという噂はすぐに全土に広まるでしょう。そうすれば、私よりも才能のある人々がもっと良い待遇を与えられるに違いないとたくさん燕の国に訪れるに違いない、とね。

昭王はなるほど、と思う。郭隗のいうとおりにしてみたら、中国全土から優秀な人材がたくさん集まってきたそうです。

こんな具合に諸侯たちは人材獲得に情熱を注いだわけだ。

齊の宣王（前4世紀末）はやはり人材を集めまくります。学者であればどんどん召し抱えて都・臨シ（リンシ）には学者街ができた。臨シには稷門（じょくもん）という城門があってその近くに学者たちが集まって住んだので「稷下の学」と呼ばれた。学者たちは特に仕事があるわけではなくて、一日中ワイワイガヤガヤとフリーディスカッションをするんです。その中から良いアイデアがあれば齊の国政に反映されるということだったらしい。

こういう状況は庶民の側からすると才能さえあれば自分を売り込むチャンスですね。生まれは関係ない、身分も関係ない、有能な人材だと認められればどこかの国で高い地位について財産を蓄えることもできるわけです。だからいろんな学問を身につけ、特技を持ち、諸国を遍歴して就職活動する政治家志望の連中がたくさん現れる。

2 商鞅の変法

能力主義的な人材登用で大成功したのが秦です。秦の孝公（前361～前338）の時に「商鞅の変法」がおこなわれました。

商鞅（しょうおう）というのは人名です。衛の国の出身です。政治家志望なんですがなかなか自分の才能を認めてもらえない。ある時秦の国で人材を求めていると聞き出かけていきます。ふらっと出かけていっても外国出身なので秦の有力者に簡単に会えるわけではないと思います。商鞅はいろいろなつてを頼って孝公に面会することができました。孝公は商鞅を非常に気に入った。今でいえば総理大臣にいきなり抜擢して政治を全面的に任せることにしたんです。

これには秦の貴族たちは驚いた。よそ者がいきなり王の信頼を得て国政を任されるわけだから、代々秦に仕えてきた貴族たちは面白くないわな。自分たちが無能と思われているのと同じだからね。しかし、王様に逆らうわけにもいかないのでひとまずは商鞅のお手並み拝見、です。

自分の周りが好意的ではないことは商鞅も充分わかっている。貴族たちは反感を持っているし、そうではない一般民衆にしても商鞅なんていう男を知らないわけで、商鞅がいろいろな改革をおこなおうとしても素直に命令に従うかどうか分かったものではない。

だから商鞅はまず自分を売り込みます。

秦の都には市場がある。当時市場は塀で囲われていて門がいくつかついているんです。市場は民衆が集まるところだから政府の命令など国民への「お触れ」はこの市場の門の前に掲げられたらしい。

商鞅はこの市場の南門に材木を一本立てた。そして「この材木を市場の北門に移した者に金十斤与える。大臣商鞅」と触書を出した。みんなこの御触書を読んでワイワイ噂をするんですが、なんだか怪しい触書でしょ、商鞅という男もどんな大臣だかわからない。へたなことをして罰せられてはかなないので誰も材木を移しません。何日か経っても誰も動かさないので、商鞅は賞金を5倍の五十斤にしました。金17キロくらい。

そうしたら、ようやく一人の男が材木を北門に移したんだ。勇気があるのか軽率なのか、みんな注目している中でやったんでしょう。早速彼は商鞅に呼ばれて、約束どおり金五十斤を賞金としてもらったんだね。あっという間に商鞅の評判は広まった。新しく来た大臣の商鞅は言ったことはやるぜ、という感じでしょう。

貴族たちもひとまずは彼にやらせるしかないと思ったろうね。

商鞅の政治改革は「変法」と呼ばれます。どんな改革をやったか。

まず「什伍（じゅうご）の制」。国民を五軒、十軒毎に隣組を作らせる。隣組というのは解るかな。納税や防犯の連帯責任をとらせるために組を作らせるんです。例えばその中のどこかの家が犯罪者をかくまつたら隣組全体が罰せられる。税金を納めたり、兵士や人夫を出したり、とにかく政府との関係で連帯責任を持たされる。

さらに農家の分家を強制的にやらせます。当時秦の国では大家族制度だった。一つの家の中に結婚して子供もいる兄弟たちが同居しているのです。これでは生産力の無駄なので、次男坊以下は強制的に分家させて未開の土地に入植させた。これによって耕地が拡大して、戸数も増えるし、国家収入も増えた。

商鞅の変法は伝統的な農民の生き方を無理矢理変えるものだから、ずいぶん抵抗もあったようです。ある時田舎の長老たちが商鞅のところに面会に來た。商鞅に対して、政治が厳しすぎる、もっと優しくしてくれ、と訴えたんです。商鞅はどうしたかというと、一般民衆の分際で支配者に文句を言うとはけしからん、と言ってみんな処刑してしまった。

かれのやり方は厳しいのです。

ところが商鞅の政治が軌道に乗ってくると治安も安定して、盜賊はいなくなる、道に財布が落ちていても恐れて誰も拾わないくらいになる。そうしたら、別の田舎の長老たちが商鞅に面会に來た。今度はなにかというと、「商鞅様のおかげで安心して暮らせるようになった、有り難や。」と商鞅を讃美称えに來たんです。そうしたら、商鞅、どうしたと思いますか。今度も処刑してしまったの。庶民の分際で、御政道を讃めるとは身の程を知らぬ、畏れ多いおこないだ、というのが理由です。要するに商鞅は国民が政府を批評すること自体を許さなかつたんです。黙って支配されておるべし、というわけだ。厳しいでしょ。

軍功による爵位制というのもやります。戦争の時に活躍した分だけ身分を上げる。爵位をくれてやる。活躍というのは敵の首をいくつ取ってきたかということです。たくさん殺したら身分があがる。逆に先祖代々の貴族でも敵の首を取ってこなければ爵位は与えられない。貴族には評判悪いですが。

これらの改革によって西方辺境の三流国だった秦は一躍戦国時代の主導権を握る大国に成長することができたんですね。

ところで、この商鞅ですが、ますます孝公に信頼されてる。位は最高、15の邑を授かり、財産は王と並ぶほど、という絶好調が続くんです。やがて、頼りにしていた孝公が死にます。所詮商鞅はよそ者で孝公の絶大な信頼があったから権力を握っていられたんですが、貴族たちに敵が多い。孝公が死ぬと、恨みを持つ貴族たちが商鞅にでっちあげの謀反の罪を着せた。新しい秦王はそれを信じるんです。

こうなるとさしもの商鞅もどうしようもない。追っ手から逃れて国外逃亡をはかります。国境近くまで逃げると夜になった。近くの町の旅籠に泊まろうとした。ドンドン、と旅籠の扉をたたくと、爺さんが出てきた。

「おい、止めてくれ。」と商鞅が言うと、爺さん「通行手形を持っておいでか？」ときく。商鞅は追ってから逃れてきているんで通行手形なんか持っているわけありませんからね。「持ってない。」そしたら爺さんこう言った。

「商鞅様の命令で通行手形を持っていない方はお泊めできません。」

「おやじ、そこをなんとか、頼む。」と言うんですが、

「商鞅様の法は厳しいですから、泊めた私が後で首をはねられますんで、、、。」というわけで結局商鞅は宿屋に泊めてもらえなかった。自分の法律が行き届いているのは嬉しいけれど、それで自分が困るとはね。喜んでいいやら、悲しんでいいやら。

商鞅の外国逃亡は失敗して、最終的には反対派の貴族たちに捕らえられて車裂（くるまさき）の刑で殺された。両手両足を別々の馬車に結わえられて身体が引きちぎられる残酷な処刑です。

戦国時代の能力主義的な人材登用がなければ商鞅は決して活躍の場を与えられることはなかつたでしょう。そういう意味で、いかにも時代の人です。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

墨攻 新潮文庫	<p>酒見賢一著。これは、小説ですが漫画で読んだ人も多いかもしれない。墨家の活躍や戦国時代のイメージが小説家の筆によって生き生きと描き出されます。小説から歴史に近づくというのも、魅力的なアプローチ。春秋戦国時代を舞台に宮城谷昌光氏も、たくさん的小説を書いていますが、現在私の一のおすすめは、酒見氏の「墨攻」で決まり！</p> <p>酒見賢一には「ピュタゴラスの旅」集英社文庫という本もあって、これは、古代ギリシアの哲学者達を主人公にしている。これは、泣ける。私の大好きなエピクテトスの話もあるのだ。</p>
------------	---

第25回 商鞅の変法 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第24回 周](#)

[次のページへ](#)
[第26回 諸子百家](#)

□□□□□□□□□□

第26回 諸子百家

1孔子

春秋末期から戦国時代は、学問・思想でも新しい考えが生まれ活気に満ちた時代でした。能力がありチャンスさえあれば誰でも出世する可能性があったんですから。多くの思想家たちが活躍しました。これを諸子百家という。「諸」「百」はたくさんという意味。「子」は先生、「家」は学派という意味です。だから、諸子百家といえばたくさんの先生があらわれていろいろな学説を立てたということです。では、代表的な思想を見ていきましょう。

まずは、何と言っても儒家。のちに儒学、儒教と言われ、中国思想の中心となっていきます。20世紀に至るまで中国の支配的な学問思想でしたし、朝鮮半島や日本にも大きな影響を与えているね。

儒家の元祖が孔子（前6～前5世紀）です。孔子自身は春秋時代の人ですが、実質的には戦国の時代とあまり変わりありません。孔子の目から見れば、古い時代の素晴らしい道徳や秩序が崩れている時代になっている。これを立て直すためにはどうしたらよいか、どうすれば平和な社会を作ることができるかを考えたのです。

そこで、かれが持ち出してくる秩序は家族道徳の秩序です。誰でも自分の父母に対しては素直な気持ちで従うことができる。家庭の中では秩序があるわけですね。この家族道徳を社会全体に広めることによって、世の秩序を回復しようとしたわけです。

子どもが親に対して持つ敬愛の気持ちを孔子は「孝」と名付けます。この「孝」の気持ちを他人にまで広げたものを「仁」という。この「仁」が孔子の考え方の中心です。明治時代くらいまでは儒教の教えは日本でも道徳の基本だったから、仁といえば昔の人はハッキリとしたイメージが持てたんだろうけど、そういう伝統は今ではすっかり消えてしまったから、ヨーロッパの哲学用語よりも仁なんていう言葉は理解しにくいですね。やくざの人が使う「仁義」の仁と同じモノです。だから、よけいにイメージが悪いな。

「仁」を強引に現代語にすれば「思いやり」が一番近いかなと思います。

孔子は仁が大事だというわけですが、いくら心の中で仁の気持ちを持っていても、それを外に形として表現しなければ意味がない。これを目に見える形で表現する、その表現が「礼」です。

「礼」とは何か。例えば授業の始めと終わりに、起立、礼、とやるでしょ。みんな心の中でどう思っているか知らないけれど、礼と号令がかかればお辞儀をするね。まさしくこれが孔子のいう「礼」です。心の中で、よろしくお願ひします、とか、ありがとうございました、と思っていても表現しなければ相手に伝わらない。伝わらなければ意味がないし、何も変わらない。だから、頭を下げる「礼」をすることによってその気持ちを教師に伝えている、という理屈です。

頭を下げる以外にも、いろいろな形で「仁」思いやりの気持ちを「礼」で形に表すことの重要性を孔子は説

くわけです。人々が「礼」を実践することによって失われてしまった秩序が回復できる、と考えたんだね。何よりも秩序の回復維持ということが基本にあるので、支配者にとっては都合のよい思想だった。だから、この儒家の教えはその後も長く支配者たちに保護されて中国思想の柱となっていきます。

孔子自身は魯という小国出身でその大臣になったこともあったのですが失脚して、その後は諸国を放浪する。はじめの頃はどこかの国に高い身分で迎えられることを目標にしていましたが、それは実現しませんでした。

かれの周りには多くの弟子がいた。だから政治家としてよりは教育者として活躍した人です。孔子の弟子からは政治家として活躍する人がたくさんでした。

ついでに言っておくと「孔子」の「子」というのはさっきも言ったように先生という意味。だから、「孔子」は孔先生という意味です。本名は孔丘というんですが、大先生だから名前を呼ぶのは失礼で畏れおおいから、本名で呼ばずに孔先生と呼んだ。それがそのまま定着してしまったのです。中国の思想家で「～子」という人名はみんな同じです。

孔子の弟子たちが編纂した孔子の言行録が「論語」です。名前くらい聞いたことがあるんじゃないかな。昔は日本でもよく読まれたんですが。私も持っていますが、初めから順番に読んでいてもそんなに面白いものではないね。ヨーロッパの哲学みたいに概念がキッチリしていなくて「仁」という言葉も状況に応じいろいろな説明の仕方をしているので正直言ってわかりにくいです。

ただ、ところどころ「オッ！」と感じるようなフレーズが出てくるの。

例えば「巧言令色（こうげんれいしょく）少なし仁」。顔がきれいで口が上手なやつに思いやりのあるやつは少ないぜ」だって。面白いでしょ。

有名なのでは「義を見て為（せ）ざるは勇なきなり」。正しいことが行われているのに何もせずに黙ってみているだけというのは勇気がないのです、という。

「朝（あした）に道を聞がば、夕べに死すとも可なり」。朝、正しい生き方を知ることができたならばその日の夕方に死んでも思い残すことはない、という意味。なんか、こんなところは読んでいるこちらの人生観に迫ってくるところがあるのです。だから、結構、実業家、社長さんなんかには論語が好きな人は多いみたいですね。年をとったら読んでみたくなるのかも知れない。

こんなのもある。「子曰く、学びて時にこれを習う、亦（ま）た、説（よろこ）ばしからずや」。先生がおっしゃった、勉強した後で、時々みんなで集まって復習する、何と楽しいことかね！

何を復習するかというと、音楽らしいです。孔子の「礼」には音楽も含まれるんです。諸侯がいろいろな儀式をするでしょ。例えば他国の諸侯と外交交渉したりする。そういうときに式場では宮廷楽団が儀式の音楽を演奏するんです。どんな状況の時にどんな音楽を演奏するのが礼にかなうか、そういうことを孔子は研究して、弟子たちに教えていたんです。

「斉に在りて韶（しょう）を聞く」という図があります。これは、孔子が斉の国に行ったときに斉の宮廷音楽長官と知り合って「韶」という音楽を聴いたときの様子です。これは伝説の聖王舜（しゅん）が作曲した

といわれる幻の曲だったの。で、孔子は感激して必死になってこの曲をマスターしたというんだ。こんなのが弟子たちに教えたんだろう。弟子たちもみんなで合奏して「時にこれを習う」わけだ。

古代社会では音楽は単に個人の趣味や楽しみではなくて、神々に呼びかけ世界の秩序を保つためのものでもあったのです。

孔子以前の時代に、もともと冠婚葬祭などの儀式をつつがなく行うための式典の専門家集団がいた。中国文明は祖先神崇拜が強いです。だから葬式が一番大事。この式典専門家たちは死んだ祖先の靈を呼び出したりもしたようで、靈媒みたいなこともやっていた。巫祝（ふしうく）と呼ばれる集団です。神がかり的おこないの多いかれらは、胡散（うさん）臭いと感じられ、社会的地位の低い人々でした。

孔子が大事にした「仁」という言葉ですが、この女性形があるんです。「仁」に女をつけると「佞（ねい）」という字になります。これは「おもねる・おべつかつかい」という意味がある。全然いい言葉ではない。巫祝たちが葬式などで喪主など主催者におべつかを使って、調子のいいことを言う。女がこれをやると「佞」。男がおべつかを使えば「仁」だったのです。

孔子はこの伝統的式典専門家集団から出て、こういう意味で使われていた言葉の意味をひっくり返して、価値の高い言葉に作り変えたの。泥臭い民間信仰みたいなものが混じっていたものを合理的、理論的に作りかけて学問にまで高めた人なのです。その考え方の基礎に祖先神崇拜みたいな感覚があるので、中国人の感性に合っていて深く根付いたんでしょうね。

このあたりのことはややこしいので自分の頭が混乱しそうだったら忘れていいよ。

2 孟子、荀子

孔子以後の儒家の学者で重要な人が孟子（前4～前3世紀）。

この人は「性善説」を覚えること。人間には生まれながらにして思いやりの心「仁」がある、と説きます。例として孟子はこんな事を言う。強盗、殺人など悪の限りを尽くした極悪人がいる。かれはどこかの庭先にいてボーッとしているの。その庭にはようやくハイハイができるようになったばかりの赤ん坊がいる。その赤ちゃんがハイハイしながら井戸に近づいていきます。赤ん坊だから井戸がなんだか知らないから、そのまま進んで井戸に落っこちそうになる。そうすると、どんな極悪人でもその瞬間に「アッ！」と思わず手を伸ばして赤ん坊を救おうとする。こういう話を出して、だから、人は本来「仁」の心がある、生まれながらに善だ、と説きます。

人は生まれながらに善。だったら犯罪や戦争は起きるはずがないのに、なぜ、世の中は乱れ、戦乱が続き民衆は苦しまなければならないのか。孟子は下の者は上の者を見習うと考える。だから、王の地位にあるものは「礼」を身につけて人民の手本とならなければならない。王様がそれをできていないと下剋上が起きたりして国が乱れるんだと言います。

もし王が、どうしようもない人間で「礼」を身につけて立派な行いをすことができず結果として人民の「善」を押しつぶして、彼らを不幸にする場合は、そんな王様は取り替えたってかまわない、そこまで言う。これを「革命説」という。革命とは「天命が革（あらた）まる」ということです。天命は何によって知ることができるか。孟子の場合は天命は人民からやってくる。過激でしょ。

孟子は諸国をまわって王達にそういう話を説いてまわるんです。「王よ、礼を身につけよ！天命に耳を傾けよ！」ってね。王様にとっては耳に痛い話で、孟子は煙たがられたかというと、実はそうではない。人気があってあちこちから招かれては話をしに行ったようです。諸侯のように豪勢な馬車に乗って何十人もお供の者達を従えて講演旅行にまわっていた。今で言ったら経営コンサルタントみたいなもんだね。すごいギャラを取るの。

孟子は当時はすごい人気で、その後も儒家の偉い先生として尊敬されていきます。現代に至るまでの長い歴史の中で孟子の崇拜者はたくさんです。ただ、「革命説」のような過激な部分があるので、あまりにも熱心な孟子の崇拜者は危険人物扱いされる傾向があるのね。

日本でもそうでした。例えば、有名なのが吉田松陰。日本史でやりましたね。幕末の長州藩士です。あの人も熱心な孟子の信奉者です。ペリーが来たときに、アメリカを見たくてたまらない。弟子と一緒に漁船を漕いで黒船までいってしまう。側面よじ登って黒船に乗り込んで、アメリカへ連れていってくれ、って頼むんだけどペリーも幕府と外交交渉中だから、幕府の顔を立てて松陰と弟子を幕府に引き渡してしまった。国禁を破った犯罪者になった松陰たちは長州藩に送られてそこで牢屋に入れられるんです。弟子の方はすぐ死んでしまうのですが、松陰は野山獄という萩の牢屋に入れられた。

牢屋の中にはいろいろな犯罪者が入っているわけ。そこで松陰は何をするかいうと、孟子の講義を始めるのですよ。

「あなた方は罪を犯した極悪人であるけれど、生まれたときからそうだったわけではない。生まれたときはあなた方も善人だったのです！」とかやる。松陰さんはまだ二十歳代のいってみれば若造なんだけれど、こんな話を囚人相手にやって、囚人たち、みんな松陰の弟子になってしまうのね。年寄りの悪人が「先生、先生」といって松陰になつてしまふ。あなたは善人だ、といわれてみんな嬉しかったんだね、きっと。

その後、松陰は保釈になって実家で謹慎処分になります。松陰は実家で近所の若侍を集めて塾をやる。これが松下村塾。ここで松陰は革命説を説く。松陰の生徒から桂小五郎、高杉晋作、伊藤博文など明治維新の主役たちの育った。これは、松陰が孟子の学徒だったことと無関係ではないです。

おまけ。松陰の最後を話しておくと、やがて幕府は井伊直弼が大老になる。安政の大獄が始まります。松陰も江戸まで召しだされて取り調べをうける。ここで、御免なさいと謝って、反省の態度を見せれば死刑にはならなかつたらしい。密航を企てただけの罪ですからね。

しかし、ここで松陰は真っ正面から幕府の批判をしてしまうんです。幕府の役人がそんな話を聞いて腹を立てないはずがないんですが、松陰は幕府の役人の「仁」まごころ、ですか、それを信じてしまうのね。ついには質問もされないので老中暗殺計画まで喋ってしまう。そんなわけで、ついに幕府に対する反逆者として処刑されました。

思想が先走ってしまって現実的な身の処し方にはなんだか甘いところがある人でした。

儒家をもう一人。荀子（前3世紀）、戦国時代末期の人です。

荀子は孟子とは反対で「性惡説」で有名。人は生まれながらにして悪、仁や孝を身につけて生まれてきたわけではない。だから君主、王たるもの役目は人民に教育して「仁」「礼」を身につけさせることだと説き

ました。

同じ儒家だから「孝」「仁」「礼」を秩序の柱にして社会を立て直そうというところは同じですが、その具体的なやり方は百八十度違うところに注意してください。

3 墨家

次は墨家（ぼくか）。これは戦国時代が終わると消えてしまった学派なので、あまり馴染みがありませんが、戦国当時は儒家と同じくらい人気があった。

墨家の元祖が墨子（ぼくし・前5世紀～前4世紀）。かれの説は二つの単語を覚えて下さい。「兼愛説」と「非攻説」です。

兼愛というのは「差別無き人類愛」とでも言うような意味です。墨子は儒家を批判する中で自己の学説を立てます。儒家の「礼」を差別だと批判するのね。そして「兼愛」をとなえるのです。

なぜ、儒家の「礼」が差別か。

例えば、忌引き。知ってるよね。どこの企業でも学校でも忌引きの規定があって親族に不幸があった場合、何日か休んでも欠席扱いにならない慣習だね。

あれは実は儒学の教えからでているのです。親が死ぬでしょ。親に対する「孝」は人間のまごころ「仁」の中でも最も基本的な感情だから、これは滅茶苦茶に悲しいわけです。悲しくて悲しくて、胸は張り裂け、涙はぼろぼろこぼれ、とても平常心ではいられない。仕事や勉強なんか手につくはずがない。だから、仕事や学校を休むことが許される。これが忌引きの理論的根拠です。

また、喪に服すのが死んだ親に対する「礼」もあるわけです。

親が亡くなった場合の忌引きが五日。ということは五日間は何も手につかない、という社会的な共通理解があるからです。

さて、そこから先が問題です。生徒手帳を見てもらったら書いてあると思うけど、おじいちゃん、おばあちゃんが亡くなった場合は忌引きの日数が三日。それ以外の親族は一日とかある。

じゃあ、親友や恋人が死んでしまったら忌引きは何日か。ゼロでしょ。

これを墨家は差別だというわけです。儒家は人間関係を親から始まって同心円上に序列化する。親を中心に遠くなるにしたがって「仁」「礼」が薄く、軽くなっていくことこそが秩序と考えます。

だけど、血縁関係が無くても大事な人がいなくなったら悲しいじゃないですか！恋人と引き裂かれると考えるだけでつらいでしょ。しかし、儒家は恋人がいなくなっても悲しくない。悲しんではならぬ。恋人は大事ではない。と、まあこう考える。

こういう発想は人間の常識的な発想として不自然ですね。ここでの無理を墨家は責めるわけです。そこで「兼愛」。誰であろうと差別せず同じように愛さなければならぬ、と言うのです。

すべての人を平等に愛するならば、親が死んで悲しいように他人が死んでも悲しくなくてはならない。戦

争なんかで家族が死んで欲しくないように、他人が戦争で死ぬのも黙って見ていいられないはずです。そこで、墨家は「非攻」をいう。「非攻」とは絶対平和主義のことです。どんな戦争にも墨家は反対する。かれらがすごいのはただ「戦争反対！」と言うだけではないところで、戦争を止めるたに全土を駆け回る。墨家集団というのがあって、これは墨子の弟子たちでつくられているんですが、技術者集団でいろいろな戦争技術を持っている。で、どこかで小国が大国に攻められる、侵略戦争が起きると、攻められている国に駆けつけて防衛戦争を手伝うんです。大国の側、侵略する側には絶対に立たない。すごいしょ。そりゃあ、人気がある。

ある時、宋という小国が楚に攻められそうになった。さっそく墨家集団は宋に入って防衛の準備をします。墨子自身はたった一人で楚の国の都に出向いて楚王に面会を申し込んだ。

楚王に会うと墨子は言う。既に墨家集団が宋国に入って防衛の準備は整っている。楚では城攻めの新兵器を開発したと聞くが、われわれも準備は万端だ。決して宋を攻め落とすことはできません。無駄な出兵はおやめなさい、とね。

楚王も自信があるのでそんなことを言われても出兵をやめるわけがない。そこで、墨家は、実際に楚が勝つか宋が勝つか王の目の前でシュミレーションゲームをやろうと申し出ました。楚の将軍が連れてこられて墨家と対戦することになった。これだけの兵士をここに配置して、ここから攻める。だったら、われわれはこれだけの兵をここに置いてこんなふうに防いでここから逆襲する、とかやったんでしょう。

結局、墨子が勝ってしまった。

そこで、墨子は言ったそうだ。「王よ、だから宋を攻めるのは無駄です。おやめなさい。おっと、今私をここで殺しても同じ事ですよ。私の弟子たちはみんなこの作戦を知っている。私を殺しても王は勝てないし、逆にたった一人でやって来た墨子を恐れて殺したと、全国の笑いものになるでしょう。」

結局、楚王は墨子をそのまま帰し、宋への出兵も取りやめた、ということです。

同じような話がいくつかあるので、この話もどこまで実話かわかりませんが墨家の雰囲気をよく伝えていると思うよ。

ところで墨子という人なんですが、これは墨先生ということですが、墨というのはどうも本名ではないらしい。あだ名だったと言うんだね。あだ名の理由がいくつか伝えられているんですが、一つに墨子は奴隸出身だったという説がある。奴隸は逃亡を防ぐために顔に入れ墨をされていた。墨子も顔は真っ黒。だから「入れ墨先生」という意味で墨子と呼ばれるようになったという。

墨子が奴隸出身だったと考えると、差別なく人を愛すべしという思想がすごくわかる気がするね。

もうひとつはかれの率いる集団が戦争技術のプロとしてたくさんの防衛用の武器を発明して作っているところから、大工の棟梁みたいな人ではなかったかという説です。

大工さんは木材を加工するときに墨縄を使って線を引く。みんなは見たこと無いかな。私の小さい頃は大工さんが墨縄使ってピシッと線を引くところを見ましたけれどね。墨を使う先生だから墨子、というあだ名が付いたともいう。どちらかわからないけれど、奴隸説の方が魅力的だな。

墨家は大流行したようですが戦国時代の終わりとともに消えてしまいました。戦争の規模そのものが大きくなって墨家のような少数精鋭集団の努力では、何ともならなくなっていましたことがあるんでしょう。

4 法家

次は法家（ほうか）。前回話した商鞅、かれが法家です。

儒家が「礼」を秩序の柱にするのに対して、法家は「法」を柱にします。法を細かく定めて人民に守らせる、守らなかったら厳しく罰する。これが法家の基本的手法です。

わかりやすいでしょ。しかも、やりやすい、効果もすぐに現れる。実際に秦は法家を採用してぐんぐん国力を伸ばしたわけだ。まあ、これは思想というよりも統治技術に近いね。

法家の理論家としては韓非（前3世紀）を覚える。かれが書いた本が「韓非子」。

韓非という人はものすごく頭がよかったです、ひどいどもりで人前で上手に喋ることができなかつた。最後は秦の国に行って仕官しようとするのですが、若い頃の勉強仲間の李斯という男がすでに秦に仕えていて、李斯は韓非の才能を恐れて殺してしまつた。

この李斯も法家。かれが仕えたのがのちの始皇帝。要するに秦が中国統一した時の最大の功労者が李斯というわけだ。

実はこの李斯も韓非も若い頃は儒家の荀子の弟子だったという言い伝えがある。

荀子は人間は本来悪だから教育しなければならない、というでした。しかし、この弟子ふたりは前半部分だけを学んだようです。人間は本来悪だ、だからビシビシ罰を与えて恐怖によって動かそう、と考えた。猛獸使いがムチで動物をあやつるようにな。

しかし、この方法が富国強兵に成功したんだから。人間ってそういうモノなのでしょうかね。

5 道家

道家（どうか）です。老子、莊子が道家の思想家。ともに前4世紀の人といわれる。ただ、老子などは実在が怪しいらしい。

道家の思想は「無為自然（むいしそん）」。「為（な）すこと無ければ、自（おの）ずから然（しか）り」と読める。無理をしなけりや、なるようになる、とでもいう意味です。

道家の理想とする社会は、自給自足の農村共同体のようす。権力とか、道徳的強制が入り込んでこないような共同体。そういうモノを一応目指したようです。

道家は儒家と墨家とを両方批判する。儒家の「礼」も墨家の「兼愛」も自然じゃない、頭の中で作り上げたものだ、という批判です。ともに人間の感情を型にはめようとしている。ほっとけばいいんだ。無理をしてはいかんのだ。あるがままでいいのだ。簡単に言えばそういうことです。「道徳などというものを強制しさえしなければ、心を偽る必要がなくなり、人民は自然の情愛に立ち返る」（老子）。

諸侯たちがこんな教えを聞いて富国強兵に役立つか、というと役立つはずがない。でも道家の思想はホッとするのね。「癒し」「ヒーリング」系です。いつの時代もこんな思想は必要とされたのかな。

当時も道家の説は役に立たないと批判されていた。老子や莊子を読んでいるとそういう文章が結構でてきます。

あるところででっかい木があって大きすぎて道がそこで曲がっている。邪魔なので伐ってしまいたいけれど固すぎて切れない。また、節くれ立っているので伐採しても材木として使うこともできない。莊子さん、あなたの学問もそんなもんじゃないか。

そういわれて莊子はこう言い返す。そんな木があったら、夏のかんかん日照りの暑い盛りにその大木の下の木陰で昼寝でもしたら気持ちがいいじゃないか、ってね。

瓢箪でも同じようなことが書いてある。あるところででっかい瓢箪ができた。あまりにもでかすぎるので酒を入れて持ち運ぶこともできない。無駄な瓢箪だ。でも、その瓢箪を真っ二つに割って、湖にプカプカ浮かべてその上で昼寝したら気持ちいいじゃないか。

無用の長物にこそ、きりきり働きあくせく生きている人間を安らかにしてくれる大事なものがある、そんなことを教えているようです。

落ち込んだときなんかに読むと結構救われるよ。

莊子には有名な「胡蝶の夢」という話がある。莊子が寝ていて夢を見る。夢の中で莊子は蝶になってヒラヒラ飛んでる。ふわふわ風に舞って実に気持ちが良い。

そこで、莊子は目が覚めた。ああ、夢だったんだ、と思ったんだけど、考えてみたら蝶だった自分はホントに夢だったのか、それとも今目が覚めた人間の自分が夢なのか、どうもわからんなあ。そんな話。結論があるんじゃないけれど、現在に至るまで多くの人にインスピレーションを与えてる話なので紹介しました。

道家は儒家とともに戦国時代が終わったのちも、長く中国社会に影響を与えていました。道教という宗教がここから生まれました。この影響は儒教や仏教ほどハッキリとした形ではないけれど日本社会の中にも生きていると思うよ。

6 兵家、縦横家、陰陽家

戦国時代らしいのが兵家。学者は孫子。孫武、孫ピン（月「にくづき」に賓と書く）と二人いるのですが、一緒にして孫子といっています。書物も「孫子」という。

戦争に勝つための技術を体系化したのですが、単なる戦術ではなくて戦争論、政治論、人生論としても読めるので、現在でもファンは多いらしい。

「百回戦って百回勝ったとしても、それは最上の勝利ではない。戦わずして相手を屈服させることこそ最上の勝利である。」

「敵を知り己を知るならば絶対に負ける心配はない（彼を知り己を知らば百戦して殆（あや）うからず）」と、まあ、いろいろ名言があります。エピソードもたくさんあるんですが、キリがないので省略します。いまは、マンガとかでもたくさん出てるから興味があったら読んでみて下さい。

縦横家は思想というより外交で名を売った人たちのことだ。合従（がっしょう）策の蘇秦（そしん・?～前317）、連衡（れんこう）策の張儀（?～前309）。これだけ覚えておけばいいです。

戦国末期になってきて秦は大国として他の六国を圧迫する。これに対抗するために六国が同盟を結ぶことを説いてまわったのが蘇秦です。地理的に縦に並ぶ六国が同盟するので合従、縦に合わさる、と言った。蘇秦は六国の大臣を一人で兼任するまでになったといいます。

これを破ったのが連衡策。秦に仕えていた張儀は六国に個別に秦と同盟を結ぶことを説いてまわり合従策を崩壊させたというんだ。

陰陽家は、鄒衍（すうえん・前305～前240）。陰陽五行説というのをとなえた。当時の宇宙観を集大成したものですが、私にはよく分かりません。とりあえず単語だけ覚えておいてください。

7 古典文学

春秋戦国期の文学作品を三つだけ紹介します。

『春秋』。これは春秋時代の魯国の年代記です。孔子の編纂と言われています。春秋時代という時代の呼び方はここから来ている。この本に書かれている時代が春秋時代というわけです。のちにいろいろな注釈が生まれた。儒学の経典になります。

『詩経』。これも儒学の経典になる。内容は黄河流域の民謡を集めたもの。素朴な農民たちの恋愛の歌なんかが載っている。古代社会を知る上で貴重な資料です。

『楚辞』。楚の国の王族だった屈原という人が編集したという。楚ですから南方の民謡などが載っている。楚の国はシャーマニズム、巫女さんが神がかりになってお告げをする、そういう風俗が盛んでそんな内容も入っている。また、屈原は強国秦に楚が圧迫されるのを嘆いて汨羅(べきら)の淵に身を投げて自殺したという。この屈原の詩も載っているので、愛国の詩集として中国人に愛読されました。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

儒教とは何か 中公新書	加地伸行著。論語や孔子に対する既成概念をひっくり返した革命的な本だと思う。一般紙にも取り上げられ、かなり評判になった。必読本の一つ。
論語の新しい読み方 岩波現代文庫	宮崎市定著。哲学としてではなく、歴史のテキストとして「論語」を解説した。孔子の言葉が、古くさい注釈から離れて、私にも理解できるようよみがえった。
論語の新しい読み方 同時代ライブラリー(267)	

[孔子伝 中公文庫BIBLIO](#)

白川静著。加地氏の研究に先行する画期的な孔子伝。以上の3冊を読めば、孔子や儒教のかび臭いイメージが、すっかり塗り替えられること間違いない。

第26回 諸子百家 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第25回 富国強兵](#)

[次のページへ](#)
[第27回 秦](#)

□□□□□□□□□□

第27回 秦

秦

前221年、秦が中国を統一しました。秦の都は咸陽（かんよう）。現在の西安に近いところです。

昔々の学生時代に私はこの咸陽に行ったことがある。まだ、自由に中国を旅行できない時代で学生友好訪中団という名目で観光に行った。

中国関係の勉強をしている学生ばかりの団体ではじめ咸陽は予定には入っていなかったんですが、西安に行つたついでに是非行きたいとリクエストしたら急遽特別に行けることになった。中国にはどの都市にも歴史博物館があってそこに行ったんですが、観光バスを降りたら現地の人たちがどっと集まってきた。まだ外国人が珍しい時期だったし咸陽は普通の観光コースから外れていたから物珍しかったんですね。われわれ日本人学生の周りにアッという間に黒山の人だかりができた。その人たちみんな農民の顔してる。服は全員真っ黒な綿入れを着ているの。ホントに黒山の人だかりだった。

博物館で何を見たかは、全然覚えていませんが、咸陽の人々にじろじろ見られたのだけは忘れられない。その咸陽です。

秦が戦国時代を終わらせることができた理由。

まず、法家の採用がある。商鞅、李斯など法家の政治家を抜擢して内政改革をおこなったことが国力の強化につながりました。

さらに、秦が地理的に辺境地帯にあったことが有利に働いた。

戦国時代の先進国はどこかというと、韓、魏、趙、です。ここが一番文化が進んでいる。地図で見ても面積は小さいね。面積が小さいということはそれだけ人口が集中していることの裏返しです。そういうところは文化が高いと見てよい。

しかし、それは逆にいうと開発の余地が少ないとある。

秦は辺境の遅れた国であったから、進んだ地域の文化や技術を効率よく取り入れることができたし、未開の地が多くあるわけで周辺に向かって領土を拡大することもできたわけです。現在の四川省方面を領土に組み入れて国力を伸ばしました。

辺境の国としては南方の楚も同様です。やはりここも戦国末期には強国として秦と対抗しています。結局は秦に負けますが、このあとの話になるんですが、秦が滅亡したあと項羽という男が楚の地から出て一時中国全体に号令するようになる。この地域にはやはり秦と対抗できるようなエネルギーがあったんでしょう。

秦が中国統一したときの王が政（せい）です。秦王政は周の時代とは比較にならないくらいの大領土を支

配することになった。そうなると、王という称号では満足できない。王よりもランクの上の称号として皇帝という呼び名を発明した。世界初の皇帝ということで自ら始皇帝と名乗ったといいます。かれは、秦の国が永遠につづくものと考えて子孫の名前も決めた。自分を継ぐ二代目は二世皇帝、その次は三世皇帝、こんなふうにドンドン数字を増やして皇帝名にするように決めたらしい。いずれは九千九百九十九世皇帝も出現する予定だったんですが、実際は三世皇帝で秦は滅んでしまいますがね。

この始皇帝、秦王政は統一を成し遂げただけあってそれなりの人物だった。仕事も精力的にやった。一日に公文書を30キロ分読んで決済をつづけたという。文書を重さで量るのもすごいですね。

かれにまつわる話はたくさんあります。先代の秦王の子ではないという出生の秘密も言い伝えられている。有名なのが始皇帝暗殺未遂事件。中国映画になって公開されましたね。

プリントに載せてある絵は漢の時代に描かれたものですが、直後の時代から、人々に物語として語り継がれていたことがわかる。

秦による統一直前の話。秦王政を殺せば滅亡を免れると考えたのが燕の太子。太子は荊軻（けいか）という男に秦王政の暗殺を依頼する。戦国時代は能力主義の時代だったね。暗殺技術も立派な能力として認められていたんだ。荊軻はプロの殺し屋ですがこの時は自分の死を覚悟して秦に向かいます。手みやげがないと秦王政に謁見できないので秦からの亡命将軍の首と燕の領土の地図を手みやげに持っていく。首尾よく政に謁見できて、地図の中に隠し持っていた短刀で政に斬りかかった。

ところが第一撃で刺し損なってしまった。

謁見の間には多くの秦の役人や軍人が居並んでいるんですが、宮廷で武器を持つことは禁じられていたので誰も荊軻を止めることができない。秦王政ひとりだけ剣を持っているんですがその剣は特別製でやたらに長い。剣というのは鞘に入っている。こう、剣の柄を右手で持って前に伸ばすでしょ。右手が伸びる以上に剣が長ければ鞘から抜けないのでよ。政の剣はそれくらい長かった。

しかも突然襲われて焦っているからなおさら抜けない。家臣団が見守る中、柱のあいだをぐるぐるまわって逃げる。それを荊軻は追っかける。

ようやくひとりの家臣が「王よ、背負われよ！」。政は気づいて剣を背中に背負った。そしたら鞘はストンと床に転がってようやく剣が抜けた。反撃を開始して、家臣も後ろから荊軻に飛びついてようやく取り押された。その場面を書いてある。

始皇帝の陵墓を守るために作られた兵馬俑坑（へいばようこう）という遺跡から青銅の剣が出土しているのですがこれが長さ91.3センチ。始皇帝の剣はこれよりもよほど長かったんでしょう。

そんな事件もありながらの統一だったわけだ。

秦の政策を見ていきましょう。

まず、統治方式として郡県制を採用します。絶対に覚えておくこと。秦の政治は郡県制。いいですね。周の時代には諸侯や卿、大夫がそれぞれ自分の邑を自由に支配したね。この周の封建制と対称的な方法が郡県制。秦は全国に郡、その下に県という行政組織を置いて、中央政府から官僚を派遣して中央集権的な一元支配を行った。中央集権的専制国家の誕生といいます。基本的に20世紀に清朝が滅びるまで中国の政治制度はこの形を崩すことがありませんでした。そういう意味で、郡県制の採用というのはものすごく大きな制度の変更なわけです。

ちなみに日本では県の下に郡がありますが、中国では逆。郡の方が県よりも大きな行政単位です。

さらに秦は統一国家として、制度を統一していきます。

1、文字の統一。戦国時代には各国で文字の字体が違っていました。これを統一した。秦の字体は篆（てん）書といいます。やがてこれから楷書、草書が発展することになります。

2、貨幣の統一。秦の貨幣は穴のあいた環銭。特にこの時の環銭を半兩銭といいます。

3、度量衡（どりょうこう）の統一。度は長さ、量は体積、衡はおもさ、それぞれを測る単位です。これを統一した。単位が地域ごとに違っていては行政は混乱しますからね。

4、車軌（しゃき）の統一。車軌といるのは馬車の車輪と車輪のあいだの長さです。当時は舗装道路などありませんから馬車が走れば地面はえぐれる。えぐれた部分がレールみたいになっていくんです。そこを車軌が違う馬車が走ると車体が傾むいて思うように走れない。だから、戦国の各國はわざと自國の車軌を他国と違うようにした。そうすれば敵国の戦車がやって来ても攻めにくいでしよう。でも、天下統一すればこれは不便だから統一しました。

5、ついでに思想も統一した。焚書坑儒（ふんしょこうじゅ）といいます。大臣李斯の献策で秦の政治に批判的な学問を弾圧した。医学、農業、占いの学問しか許さず、それ以外の本を集めて燃やした。これが焚書。焚は燃やすことです。戦国時代の学問の多くがこれによって失われました。現在では断片しか残っていない学問もある。残念なことだね。

坑儒は460人あまりの儒者を生き埋めにして殺した事件です。始皇帝の個人的な怒りから起こった事件なのですが、結果としては学問の弾圧になりました。坑は生き埋めにすることです。

外征。秦は北方の遊牧国家である匈奴に対して討伐軍を派遣しています。また、南方、ベトナム北部方面には領土を拡大して南海郡など三郡を置きました。

大土木工事もおこなった。

その中で有名なのが万里の長城の建設。これはすべて始皇帝が作ったわけではない。戦国時代に北方の各國はすでに個別に長城を作っていたんですが、始皇帝はこれをつないで長城として完成させたのです。

現在残っている長城はだいたいは明代（1368～1644年）に修築されたものです。資料集の写真は八達嶺（はったつれい）にあるものです。北京から近いので観光地として整備されている所で、上を歩けるようになっています。

山の稜線の上をどこまでもうねうねとつづいている。どれだけの人間の労力が使われたかと思うと気が遠く

なる。

中国旅行で、ここも行きましたよ。この上を歩いた。三月でちょうど北の空から雪が降ってきたんです。ああ、このはるか向こうから遊牧民族がやって来たんだなと思ったらなかなかロマンチックでしたね。

宮殿も造った。阿房宮と呼ばれる壮大な宮殿で、一万人が座ることのできる広間があつてその下に10メートルの旗指物を持った軍隊が集結できたといいます。

墓も作った。驪山（りざん）陵といいますが地下に宮殿を造営したらしい。中国人はあの世でもこの世と同じような暮らしをすると考えていましたから同じモノを作ります。

さらにこの地下の宮殿を守るために地下の軍隊を作った。これが有名な兵馬俑坑です。始皇帝陵の東三キロの所に人形の軍隊が発掘された。これですね。土台を含めると2メートルの高さの人形です。こんなのが今このところ約三千体発掘されています。これがキッチリ整列していて、当時の軍の編成などがわかるようです。

この兵士の人形は一つ一つみんな表情や髪型が違うんです。

当時の人たちは出身部族によって髪型、男でも髪を長く伸ばして鬚を結っているんですが、その髪の形が違っていたんです。で、兵士俑を調べていくと、いろいろな部族から軍が編成されていることもわかる。秦は辺境にありましたから周辺の民族も多く加わっていたのでしょう。この辺にも秦の強さの秘密があるのかも知れない。

兵馬俑坑はまだ全部が発掘されていなくて掘ればまだまだいくらでもでてくるそうです。だけど、出土しても保存処理が追いつかないで埋めたままにしているということです。

以前テレビでこの兵士の人形を作る実験をやっていましたが一つ完成させるのに一月以上かかっていた記憶がある。全国から陶工が集められて何年もかけて一体一体焼き上げていったんですね。

長城といい、兵馬俑といい、何をやるにも徹底した人海戦術です。とにかく全国から人を動員しまくる。始皇帝陵だけでも70万人が動員されたといいますから、せっかく戦国時代が終わって平和がやってきたはずなのに庶民にとっては、始皇帝の大動員は迷惑千万な話だったに違いありません。

さらに始皇帝は全国に自分専用の道路を作らせました。

これは幅が70メートル。さらにその真ん中に7メートルの少し高い道路がある。ここが皇帝の専用部分。始皇帝の馬車しか走ることが許されない。その他の貴族、官僚、軍隊はその縁の一般道を行きます。

始皇帝はこの道路で全国を旅行したんですが、その目的は自分の顔を民衆に見せるためなの。

そもそも、皇帝といったって、出来たてほやはやの単語だから一般民衆には何のことだかわからない。始皇帝の偉さもわからない。

そこで、度肝を抜くような豪勢できらびやかな行列を連ねて諸国をまわって、その偉さを思い知らせてやろ

うというわけだ。

民衆はこの道路工事にも使役されおまけに始皇帝が通過するときには食糧とか徵發されて、その顔を挙ませられるのですね。

始皇帝はこの専用道で全国をめぐり各地に自分の功績を刻んだ石碑を立てさせ、泰山という山で封禪の儀式をした。封禪というのは天子になったことを天地の神に報告する重要な儀式です。

さて、天下を統一してやりたいことは何でもやった始皇帝ですが、こうなると最後に欲しくなるものがある。

それは、不老長寿です。不死を手に入れたい始皇帝に、胡散臭い連中が近づいてきます。方士という魔術師、呪術士のような者たちが始皇帝にいろいろな不老長寿の技法を伝授したようです。

日本との関係で有名なのは徐福。この人は東の海に蓬萊という島があってそこに不老長寿の秘薬があると始皇帝に教えた。そこで始皇帝は徐福にその薬を取りにいかせたといいます。徐福はまさか自分がいかされるとは思っていなかったみたいで、いやいやだったようですが東の海に出かけた。その後どうなったかは記録がありません。

ただ、紀伊半島の熊野地方にはこの徐福がやって来たという伝説がある。新宮市には徐福の墓まであるそうです。

始皇帝に近づいた方士の中に水銀を不老長寿の薬と教えた者もあったようです。

水銀、触ったことありますか。体温計を割ったことのある人は経験あると思うけど、水銀というのはなんだか不思議なんだよね。液体なのに丸くてコロコロしてる。指で潰すと小さなつぶつぶになる。いじっていると飽きないです。体内に入ったら毒だから水銀で遊んでいると怒られましたね。

昔のことと、科学的知識は少ないから、水銀を見せられてこれが不死の薬だといわれれば信じるような気がします。

で、始皇帝はどうも水銀を少しずつ飲んでいたらしい。あんなもの飲んでいたら胃はボロボロでしょう。毎日始皇帝は胃痛で苦しんでいたんじゃないかな。

水銀服用が原因かどうかはわかりませんが、ついに始皇帝が死にます。前210年のことです。

さて、死んだのが都の咸陽だったら問題はなかったのですが、全国旅行の途中で死ぬんだ。死んだときにかれの側に仕えていたのが宦官（かんがん）の趙高です。

皇帝が公の仕事をするときには官僚が補佐するんですが、プライベートの時間に皇帝の世話をするのが宦官です。

宦官は男性性器を切り取られている者たちです。かれらは身分は低く皇帝の私的な奴隸に近い存在です。皇帝の身近にいるので、妃たちに近づく機会もあるわけだ。妃たちが皇帝以外の男性とまちがいをおこして皇帝の子どもではない子を産んだりしては困るからね。これが宦官が使われる理由です。

宦官という制度は中国最後の王朝清が滅亡するまでつづいていました。最後の宦官の人はつい20年くらい前まで生きていたと思います。資料集には清朝時代の宦官の写真がありますね。お爺さんの写真だ。宦官は若いときにはすごくきれいなんだそうですよ。ホルモンの関係で歳をとるとおばあさんのような顔になるらしい。

戦争捕虜や奴隸、犯罪者を手術して宦官にする場合や、貧しい者が自ら宦官になったり、親に手術をされて宮廷に売られたり、宦官になるにはいろいろな理由があるようです。

この宦官は身分的には低くて、役人でもないのですが、皇帝に身近に接触する時間が長いから、皇帝に成り代わって権力を振るう者もでたりする。皇帝の秘密を知ることもできるしね。

さて、趙高たち数人の宦官だけが始皇帝専用の馬車に出入りすることが許されていたんだ。始皇帝の死を趙高しか知らない。かれはこれをを利用して権力を握ろうとした。

始皇帝の遺言をこっそり見てみた。すると、次の皇帝は長男に譲ると書いてある。長男はこの時匈奴討伐で北方に遠征中。遠く離れているんだね。始皇帝には何人か息子がいるんだが末っ子の胡亥（こがい）だけが、始皇帝とともにこの旅にでている。そこで、趙高は胡亥にそっと接触して始皇帝の死を告げる。

「陛下の死を知っているのは私とあなただけです。いまなら遺言を書き替えて胡亥様が次に皇帝になることができます。私と協力しませんか？」などといって仲間した。胡亥も皇帝になれるのならと喜んで即位後の趙高の地位と権力を保証したんでしょう。

もうひとり大臣の李斯もこの仲間に加わった。

秘密にしたのは陰謀だけではなく、旅行中に死んだことを公にすれば各地で反乱が起きることを心配したということもあったんでしょう。

ほんの僅かな人間にしか始皇帝の死は伝えられず、皇帝の大行列は咸陽のまちに向かって旅をつづけた。その間に趙高や李斯は胡亥に即位させるようにいろいろな準備工作をしていましたんでしょう。

ところで、始皇帝が死んだのが現在の山東省。時は七月。暑かったんだ。当然始皇帝の死体は腐ってくる。やがて、異様な臭いが始皇帝専用馬車から漂い始めた。何も知らされていない大臣や將軍たちが不審に思い始めると、趙高は干し魚を大量に買い集めて始皇帝の馬車の左右につけて併走させた。魚の臭いで死臭をごまかそうというの。大臣たちが趙高になぜそんなことをするのか、とたずねると「陛下のご命令で、わたくしにも存じかねるのでございます。」と答える。始皇帝の命だといえば、誰もそれ以上は追求できないのですよ。

奇妙な臭いをまき散らしながら大行列は咸陽に帰着いた。

趙高は準備どおり始皇帝の死と胡亥の二世皇帝としての即位を発表しました。長男には匈奴との戦いで戦果を挙げていないことを理由に自殺するように命令する。始皇帝の偽の手紙を送ってだ。

このようにして即位した二世皇帝胡亥はやがて飾りものになってしまいます。実権は宦官趙高が手にするようになった。

宦官は普段は人間以下の存在として軽蔑されているから、権力を握るとやりたい放題になる。政治に対して責任感を持つことはあまりない。ひたすら自分の富と虚栄心を追求するようになるようです。どうせ子孫も

ないわけで守らなければならないものもないからね。

趙高はやがて自分自身が皇帝になる野心を持ったようです。自分がどれくらい宮廷の役人たちをつかんでいるのか試します。

ある時二世皇帝の前で百官がそろっているところへ、趙高は鹿を連れてきて「馬でございます。」といって献上した。二世皇帝は「趙高、何を言っているのか。角が生えている、鹿ではないか！」と反論した。誰が見ても鹿は鹿ですからね。

すると趙高はじろりと居並ぶ百官を見回したんだ。すると、趙高におもねる役人たちは口をそろえて、「陛下こそ、何をおっしゃいます。馬ではありませんか。」

二世皇帝は愕然とする。自分の皇帝の地位なんていうのが実は空っぽのいすだったことに気づくんですね。これが「馬鹿」という単語の語源だという。

実はこのころになると、各地で反乱が起きているんです。だけど秦の政府は宮廷内の権力闘争できちんとした対策がとれない。まさしくこんな馬鹿なことばかりやっているあいだに、反乱は秦を滅ぼすほど大きくなっていました。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

秦・始皇帝陵の謎講談社現代新書(1232)	岳南著。こんな話が載っていた本。 1974年、中国の考古学者たちが兵馬俑坑の試掘を始めると、毎日試掘現場に白髪の老人が現れる。木陰に座って発掘を見守りながら、担当者に「その下にはあるかい?」と声をかける。変な爺さんだと評判になつたらしい。そんなある日の夕方、その老人がちょっと微笑んで「ついでこい」。発掘担当者がついていくと、井戸から200メートルも離れたところで老人は立ち止まって「試掘しなくてもよい。俑坑の突き当たりはここじゃ。」担当者「ほんとうか?」老人「信じるかどうかはお前の勝手だ。」老人は笑いながら柿林の奥に消えてそれきり二度と現れなかつたそうです。老人の言葉どおりかれの指し示した下が兵馬俑坑の突き当たりだったことはいうまでもありません。
---------------------------------------	---

宦官一側近政治の構造中公新書(7)	三田村 泰助著。中国史を人に語るなら、これを読んでおかないと、恥ずかしいくらいの本。別に脅しているわけではなく、長年読み継がれてきた基本的な本です。
-----------------------------------	--

史記列伝1(1)岩波文庫 214-1 史記列伝2	
--	--

(2)岩
波文庫
叢書
214-
2
史記列
伝 3

(3)岩
波文庫
叢書
214-
3
史記列
伝 4

(4)岩
波文庫
叢書
214-
4
史記列
伝 5

(5)岩
波文庫
叢書
214-
5

司馬 遼(著), 小川 環樹(翻訳)。時間がある人は、本物を読んでみるのもいいかもしれない。史記は、春秋戦国時代から、前漢初期までの、基本的な文献。荊軻の始皇帝暗殺事件も、史記が元ネタです。こういう本を読むと、自分自身の時代に対するイメージが湧いてくる。ちなみに、私は高校時代に読んだので、充分みなさんにも読めます。

第27回 秦 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第26回 諸子百家](#)

[次のページへ](#)
[第28回 楚漢の興亡](#)

□□□□□□□□□□

第28回 楚漢の興亡

1 陳勝・呉広の乱

秦が滅亡するきっかけとなった反乱が陳勝・呉公の乱です。

陳勝は楚の地方の農民だった。農民といつても雇農。自分の土地を持たずにその日その日の雇われ仕事でなんとか生活していた農民です。その陳勝の住んでいる里に秦の政府から徵發が来た。始皇帝の死んだ翌年前209年のことです。

万里の長城に近い漁陽という北のまちに警備の兵士として駆り出されたのです。900人の農民たちが秦の役人に引率されて旅にでた。陳勝たちのまちから漁陽まではざっと1000キロはある。

ところが途中で大雨が降って川が氾濫して先に進めなくなってしまった。秦の命令は期限が切ってあって決められた日までに漁陽のまちにつかなければ処刑されることになっている。だから、いそいで現地までいかなくてはならない。

ところが何日待っても水は引かない。待っているうちに日数は経って漁陽にいく期限が近づいてくるわけです。洪水が引いて出発してもとうてい期限に間に合わなくなる。かといって故郷に帰っても秦の役人にとがめられて処刑される。逃亡しても、のたれ死にするのがおちです。

だから、徵發された農民たちはただただ、洪水の引くのを待っているしかないわけだ。

陳勝はどうせ期限に遅れて処刑されるくらいなら、いっそ秦の政府に反乱してやろうと考えたんだね。同じく徵發されてきていた呉広も陳勝に賛成した。

しかし、ほかの農民たちは秦にたてつくなんていうことは思いもよらない。始皇帝は死んだとはいえ、秦は恐ろしいのです。

そこで、呉広はいろいろ細工をして農民の気分を反乱にもっていくんです。大きな魚をつかまえて、その腹の中に布きれを突っ込んでおく。布には「陳勝が王になる」と書いておくのです。そして、炊事当番のものにその魚を渡す。炊事当番が魚をさばけば「陳勝が王になる」という布がでてくる仕掛け。

それから呉広は毎晩キャンプ地の裏山に登る。山には狐か何かを祀るほこらがあった。そのほこらの裏から狐の声を真似て「大楚興、陳勝王」と叫ぶんです。「秦に滅ぼされた楚が復興し、陳勝が王になる」という意味です。

夜な夜な変な鳴き声がするなど、農民たちが耳を澄まして聞いていると、狐の声が神のお告げに聞こえてくるという寸法です。

子供だましみたいな物ですが、純朴な農民たちには効果があった。こんなことがつづいて陳勝に対してみ

んなが不思議な気持ちをいだきはじめたところで、かれは農民たちに対して反乱を呼びかけるんです。洪水が引いてこのまま進んでも死、帰っても死。どうせ死ぬなら一旗揚げてやろう！臆病な農民たちを立ち上がらせるために、自分たちを引率している秦の役人を殺して、さらにいった言葉が有名。

「王侯将相いすくんぞ種あらんや」

「王、貴族、將軍、大臣であろうとわれわれ農民とどこに違いがあるっていうんだ。」という意味です。強烈な平等感というか、反骨精神ですね。こんな言葉が2000年以上前にいわれている。中国というのはすごいところだと思いますよ。身分も何もない貧しい農民が歴史の舞台に躍り出てくる。日本なら、豊臣秀吉くらいのものかな。陳勝の1700年もあの話だ。

陳勝・呉広は、各地に檄文を飛ばす。旧六国の有力者に反乱を呼びかける文書を送ったんです。これに応えて各地でさまざまなグループが反乱に立ち上りました。秦を恐れてそれまでは誰も反乱をしなかつたけれど、誰かがはじめてしまえばもう怖くないからね。そういう意味では最初に反乱を起こした陳勝たちは勇気があったと思う。

陳勝・呉広の反乱軍は秦の地方駐屯軍を打ち破って、瞬く間に数万の軍勢にふくれあがります。しかし、しょせんは農民中心の烏合の衆です。戦争のプロではない。やがて、咸陽から秦の精銳部隊がやってくると簡単に鎮圧されてしまった。陳勝も呉広も死んでしまいました。かれらが反乱軍を率いて頑張ったのは半年間だけでした。

しかし、かれらは中国最初の農民反乱の指導者として歴史に名前を刻みました。

そして、陳勝・呉広の反乱は鎮圧されましたか、かれらの呼びかけに応えた反乱軍が全国に広がっていたんです。

2 楚漢の興亡

全国に広がった反乱軍のリーダーになったのが項羽（前232～202）です。

項羽は戦国楚国の大門将軍家の出身です。血筋がいいの。幼いときに父親が死んでおじさんに育てられるのですが、このおじさんも相当の軍略家です。幼い項羽に英才教育をする。はじめは項羽に剣術を教えるのですが、項羽はすぐに飽きてしまって熱心に剣を習おうとしない。おじさんがとがめると、項羽は「剣の練習をしても、倒せる相手はしょせんひとりだけだ。そんなつまらないものやる気がしない。」といった。そこで、おじさん今度は兵法を習わせたんですが、今度は面白がって熱心に学んだという。要するに戦争エリートだ。この辺が陳勝とは違うところです。

そして項羽は大男だった。身長は2メートル近くあった。これは、武人としては最高ですね。当時の戦争がどんなものだったか想像してみてください。今のように、鉄砲や大砲やミサイルやそんなものはない。刀を持った生身の肉体がぶつかり合うんです。でかい奴は絶対強い。私とプロレスラーが喧嘩するようなものです。

前田日明（知ってる？）みたいな大男が1メートルもあるような剣をブーンと振り回して襲ってきたり逃げるしかないね。項羽が馬にまたがって敵にむかっていいたら、それだけで敵兵は腰が引けるでしょう。そういう強い大将のあとにくつついでいけば、まず負けることはないわけで、こういう大将としての条件をすべてかね備えている項羽が反乱軍のリーダーになっていったのも納得できるわけです。

反乱集団のリーダーとしてもうひとり有名なのが劉邦（？～前195）です。この人も楚の地方の出身。農家に生まれるんですが、はじめに働くことができない人だったんだ。面倒見はいいから元気のいい若い衆には人気はあるけれど、怒らせたらちょっと怖い村の顔役みたいな感じかな。悪くいえばチンピラ、ゴロツキです。

当時は、劉邦みたいに共同体の秩序からはみだしてエネルギーを持て余していた人のことを「侠（きょう）」といった。始皇帝を暗殺しようとした荊軻も「侠」です。陳勝も「侠」といえるかも知れない。戦国時代は終わって、まだ10年そこそでしょ。「侠」の感覚を持った連中は国中にいた。家柄とか血筋ではなく自分の能力、才覚で一旗揚げてやろうという人々です。戦国時代の遺風といつてもいいかも知れない。劉邦はそういう人々を自分の周りに集めてやがて大きな勢力をつくっていきます。エリートの項羽とはこのあたりが違うところです。

劉邦は中年になって地元で秦の下っ端役人の仕事に就いた。亭長といって交番の駐在さんのようなものだつたらしいんですが、一応秦の役人ですから、その劉邦のところに政府から命令が来たんだ。これが、里の若者を阿房宮の工事のために都まで引率してこい、というものだった。

というわけで、劉邦は若者たち何百人かを徴発して都にむかって旅にでる。ところが、宮殿の工事といつても大変厳しい作業だということはみんな知っているわけ。奴隸のようにこき使われて、ばたばた倒れて死ぬものも多い。だから、旅の途中で若者たちはどんどん脱走してしまう。夜が明けるたびに人が減るわけだ。とうとう都につかないうちに半分になってしまった。

半分しか人夫を連れていけなければ引率者である劉邦の責任になるわけですね。若者たちは宮殿工事で死ぬかも知れないし、自分も脱走の責任を問われて処刑されるかも知れない。せっぱつまつた劉邦は開き直った。ここまでついてきた者たちに逃げろという。もうやめじゃ！俺は秦の役人をここで辞める！俺も逃げるからおまえらもみんなどこかへ逃げろ！

みんなを逃がして、劉邦も逃亡しました。もとの里に帰ったら、秦の役人に捕まるので、里のそばの沼沢地帯で逃亡生活をつづけていたんです。

陳勝・吳広の乱が秦政府の無理な徴発が原因で起きたしょ。劉邦も同じような経験をしているんですね。ここから考えると、秦の過酷な使役に耐えかねて逃亡生活を送ったり爆発寸前まで追いつめられていた民衆がたくさんいたに違いありません。

陳勝・吳広が火をつけたらアッという間に燃え広がったわけです。

さて、劉邦が逃亡生活をしているうちにやがて陳勝・吳広の反乱が起こった。全国が騒然としてくる。そこで、劉邦も自分の里に帰って「侠」の連中を集めて一旗揚げました。地方役人も大混乱の中で自分たちを守るために劉邦をバックアップしました。

劉邦の反乱グループは、陳勝・吳広の無きあと各地の反乱集団を束ねはじめた項羽の傘下にはいることにしました。こんなふうに項羽集団は各地の反乱集団が結集してどんどん大きくなっています。

このあと項羽と劉邦はライバルとなって秦滅亡後の指導権を争うんですが、このふたりは実に対称的。項羽は名門貴族のエリート武人。劉邦は田舎の農民出身。項羽は二十歳そこそく。劉邦は40くらいです。当時の感覚では相当の年齢といつていい。項羽は自分の才能に自信がありすぎて他人を軽んじるところがありますが、劉邦は自分の配下のものには面倒見がいい。「俠」の感覚でしょうか。親分的なんですね。始皇帝が全国を巡幸したときに、項羽も劉邦もその行列と始皇帝を見た。その時の項羽のセリフ。「いつか取って代わってやる。」取って代わるという表現は項羽がはじめて使ったんですよ。劉邦のセリフ。「男と生まれたからには、あんなふうになってみたいもんだあ。」

さて、反乱軍は秦の都、咸陽にむかうことになった。主力軍は項羽が率いてまっすぐ西にむかった。別働隊を劉邦が率いてこれは南回りで咸陽に進撃します。先に咸陽を占領したものがその地域の王になるという約束があったので、競争ですね。

軍隊としては項羽軍が強いのですが、秦の精銳部隊がぶつかってくるので前進に手間取ってしまった。その間に劉邦軍はたいした抵抗もうけずに咸陽の都に突入し占領に成功してしまった。

秦では二世皇帝が趙高に殺され、その趙高もまた殺されて、三世皇帝が即位して一月ばかり経ったところです。秦の政府は混乱していてもうどうしようもない。三世皇帝は自分の首に縄をかけて劉邦のもとに出向いてきました。これは、全面降伏の意味です。こうして、秦は滅亡しました。

劉邦は占領した咸陽で何をしたか。

劉邦は咸陽で秦の宮殿に封印して宝物を略奪させなかった。

三世皇帝など秦の皇帝一族を殺さずに保護した。

「法三章」を発布した。殺すな、傷つけるな、盗むな、という非常に単純な法律です。劉邦は秦のややこしい法律を全部なくしてこの三条だけにしたのです。法家思想による厳しい支配で苦しんでいた人々は大喜びです。

こういうことを立て続けにやった劉邦の人気はぐんぐん鰐登り。

やがて、遅れて項羽の本隊が咸陽にやってきました。総大将項羽は咸陽に入ると三世皇帝など秦の皇族を殺して、阿房宮を略奪したあと火を放った。劉邦の処置をひっくり返したといつていい。劉邦の評判がよかつただけに項羽は人気がなくなっています。

秦滅亡後の国家構想です。項羽には咸陽で皇帝に即位して秦のあとを継ぐように進言した者がいました。しかし、項羽はこれを断る。「故郷に錦を飾りたい」というんだ。これだけの財宝を手に入れた、田舎に帰って地元のみんなに自慢したい、ということです。

項羽は楚の国に帰って西楚の霸王と称しました。さらに秦を倒すのに功績のあった反乱集団のリーダーたちを王として各地に封じたんです。ようするに、項羽は戦国時代のような体制への復帰を目指したといえるでしょう。始皇帝が作り上げた中央集権的なあり方と春秋戦国的な分権的なあり方があって、項羽は後者を代表していた。保守的です。

劉邦ですが項羽によって王にされました。漢王といいます。咸陽の土地ではなく四川省の山奥に引っ込んだ場所の王とされた。項羽に警戒されたからですが、劉邦は不満でしょうがない。やがて、項羽の決めた国割りを無視して実力で領土拡大をはじめます。全国制覇を目指すわけ。だから、劉邦が始皇帝の構想を受け継ぐものだったといえる。

このあと5年間にわたって項羽と劉邦の戦いが起こります。楚漢の興亡と呼ぶ。項羽の国が楚、劉邦の国が漢だからね。

どちらの軍勢が強いかというと、圧倒的に項羽が強い。劉邦軍は負けてばかりです。ただ面白いことに負ければ負けるほど劉邦の勢力は強大になり、勝てば勝つほど項羽軍は弱体化していくのです。

項羽という人は自分の功績を誇りすぎ。部下の将軍たちにとっては仕えにくいところがあった。たとえば項羽は合戦に勝利しても自分が強いからと、考えるから、部下への恩賞が少ない。

そこへいくと劉邦は部下を大事にするという評判があるんだね。劉邦という人は何ができるという人ではない。特技はないし、歳もとっているし、戦争もからきし弱い。ただ、人を使うのがうまかった。それぞれに活躍の場を与えてやり恩賞もはずむ。咸陽を占領したときの態度でその寛容さは証明済みでしょ。

だからやがて項羽の武将たちがどんどん手勢を率いて劉邦軍に寝返っていくんです。

劉邦と項羽の最後の決戦が垓下(がいか)の戦い（前202）です。

垓下の城に追いつめられた項羽の軍勢は10万。取り囲む劉邦の軍隊は30万。夜になると包囲軍の兵士がうたう歌が項羽の陣地に聞こえてきた。これが楚の歌なのです。楚は項羽の出身地でしょ。楚の歌をうたうのは楚の兵士なんですよ。つまり項羽の兵士たちが今はみんな劉邦軍にいってしまったということだ。「四面楚歌」ですね。

項羽はついに観念した。もう勝利の見込みはない。最後まで付き従っていた武将たちと別れの宴をひらく。その時に項羽がうたった詩が伝えられています。これだ。

「力は山を抜き、気は世を蓋（おお）う、
時に利あらず、駄（すい）逝（ゆ）かず、
駄の逝かざるは、奈何（いかん）かすべき、
虞や、虞や、なんじを奈何せん。」

自分の力は山を大地から引き抜き、気概は世を覆うほどなのに
時が味方をしてくれず、もはや愛馬の駄も走ろうとしない
駄が走ってくれないのは、どうすればよいのか
虞や、虞や、おまえをどうしてくれよう

みんな死を覚悟して涙、涙の宴会になってしまった。虞というのは項羽の愛人、虞美人のことです。ずっと項羽に付き従ってきたのですが、かれの歌を聞いて自分が足手まといであるとして、自ら命を絶ったという。彼女の血を吸った地面からはえた花が虞美人草だということです。

このあと項羽たちは劉邦軍の囮みを破って、南方、楚の国に向けて脱出します。なんとか劉邦軍の追撃を振り切って烏江（うこう）というところまで逃げます。この時はわずか数騎に減っています。長江を渡らなければいけないので船頭を捜した。そうしたら、見つけてきた船頭さんが項羽を見ていったんだ。

「大王よ、楚の国は広いし人口も多い。今は負けてもまた再び王となってください。」

落ち目の自分に優しい言葉をかけられてはじめて項羽は自分のやってきたことを反省する。何千人という楚の若者を兵士として引きつれて戦ってきたけれど、みんな死んでしまった。なぜ自分だけおめおめと帰ってかれらの父兄に会えるだろうか、とね。

項羽は死に場所を求めて引き返した。追ってきた劉邦軍と最後の戦いです。乱戦の中で項羽は敵兵にかつての自分の部下を見つけるんだ。

「おまえは、昔なじみじゃないか。俺の首をやろう。大名くらいにはなれるだろう。」そういうて、自分で首をはねたそうです。

こうして、一代の英雄項羽は死にました。ライバルを倒して劉邦が天下を統一します。これが漢帝国。劉邦はのちに漢の高祖と呼ばれることになります。

3 秦の滅亡理由

最後に秦が短期間で滅亡した理由を整理しておきましょう。

1、大規模な外征や土木工事。これが民衆に対する過度の負担をあたえた。陳勝や劉邦も労役への徴発が反乱の原因になっていましたね。

2、急激な中央集権化。とくに郡県制。各地の伝統や実状を無視した画一的な支配に対する旧六国支配者層の反発は強かった。項羽はこれだね。項羽とともに反乱に加わった人々には旧六国の支配者層は多かったんです。

3、厳しい法律、刑罰に対する民衆の反感、恐怖。始皇帝が死んで押さえられていた不満が一気に爆発した。法家思想の効果と限界とでもいうところでしょうか。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

項羽と劉邦(上巻)新潮文庫
項羽と劉邦(中巻)新潮文庫

司馬遼太郎著。小説からイマジネーションを湧かせるというのは、有効な手法。教師が面白いと思えば、語りにも熱が入るし、生徒諸君も熱心に聞いてくれます。もとの話が面白いのだから

庫
項羽と劉
邦(下
巻)新潮文
庫

ら、小説にして面白くないはずがない。この作品は、著者の「明治もの」にくらべて、ずいぶんと読みやすいです。というか、気楽に読めます。

中国文明
の歴史
〈3〉秦漢
帝国中公
文庫

日比野丈夫編。概説書。秦から後漢末期までを扱う。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第27回 秦](#)

[次のページへ](#)
[第29回 前漢](#)

第28回 楚漢の興亡 おわり

□□□□□□□□□

□□□□□□

第29回 前漢

1 漢初の政治

秦にかわって劉邦が建てた王朝が漢です。都は長安。漢は前後半に分かれるので普通は前漢（前202～後8）と呼びます。

漢初の政治方針について。

1、まず、秦の過酷な支配をゆるめる。

2、次に統治形態として郡県制をやめました。かわりに採用したのが郡国制です。これは郡県制と封建制を併用した形です。

劉邦はたくさんの人材を得て統一ができたわけだけれど、単純に劉邦が「いい人」だったから多くの武将が集まつたわけではない。この大将ならたっぷり恩賞をはずんでくれると思っているから協力したわけです。突き詰めれば、みんな王様になりたいわけ。劉邦はそういう連中を満足させてやらなければならなかつた。また、秦は郡県制による急激な中央集権化で反発を招いた、ということもある。

そこで、建国の功臣たちや一族のものを諸侯として地方に封じました。漢帝国のなかにたくさんの王国ができるわけです。王になった者たちは自分の王国内で大臣を任命したりして好きに支配していいんですよ。

そして、王国がつくられなかつた地域には郡県制をしいて皇帝の直轄地とした。皇帝直轄地はどれくらいかというと全国の三分の一だった。

皇帝である劉邦としてはこうするより仕方なかつたことなんですが、各地の王が反乱したら漢帝国は危ないですね。郡国制は中央集権化に逆行しています。だから、劉邦はのちにいろいろな理由をつけて有力な国を取りつぶして直轄地に編入しています。

3、対外政策です。はじめ劉邦は北の脅威、匈奴に対して遠征をしました。しかし、逆に包囲されて命からがら逃げ帰つたことがあった。それからは対匈奴和親策をとります。一族の娘を匈奴の王に送つたりして和平をたもとうとしました。

4、当初の漢の宮廷では道家が流行します。儒家は礼儀作法にうるさくて堅苦しいですから劉邦たちにはあまり人気がなかつた。

劉邦は、もともと田舎のまちの親分ですから教養なんてまるでない。本当の庶民なのです。たとえば、かれの両親の名前。母親は劉媼（りゅうおう）と記録されている。「媼」というのは、おばあさんという意味なんです。だから劉媼とは「劉の婆さん」と里のみんなから呼ばれていた、そのままの呼び名で記録されているということです。親父さんも劉太公と書いてあって、これも「劉じいさん」という意味で

す。これはどういうことかというと、ハッキリいって、名前がないんだね。まあ、当時の社会では珍しいことではないかもしれないが、劉邦の生育環境を考えると面白いです。

劉邦自身も「邦」というのは、当時は「兄貴」「にいちゃん」という意味だったという説もあって、「劉のあんちゃん」と呼ばれていたのがそのまま名前になったのかも知れない。

劉邦が旗揚げしたときからつきしたがっていた部下たちにしても、犬の屠殺人や葬式のラッパふきなど当時の社会で低い地位の人たちが多い。よくて地方役所の書記官レベルです。

こういう教養、学問に欠ける人たちが一躍大帝国の皇帝や重臣になってしまった。だから宮廷といつても、われわれが想像するようなきらびやかで立派なものではなくて、礼儀も何もない滅茶苦茶状態だった。かれらは宮廷で酒を飲んでは乱暴狼藉、暴言、喧嘩ばかりしていたようです。

「無為自然」の道家はそんな人たちにもウケがよかったんだね。

ただ、国家を運営していくにはそれなりの秩序を維持していかなければならぬので徐々に儒家の説く礼を儀式に取り入れたりしていきます。しかし、儒学が漢政府に本格的に取り入れられていくのはまだあとのことです。

劉邦の奥さんもすさまじい。有名な話があるので紹介しておきましょう。劉邦が若い頃、田舎でぶらぶらしているときに、妻にした女性がそのまま皇后になりました。呂后（りょごう）といいます。糟糠の妻、というやつだね。

皇帝なった劉邦、若い女をどんどん後宮に入れる。呂后は悔しいけれど、一夫多妻が常識だから我慢します。晩年の劉邦が特に可愛がったのが戚夫人。

やがて、劉邦は死んで、呂后の生んだ恵帝が二代目の皇帝になりました。呂后はこれまで押さえ込んでいた恨みをここで爆発させる。戚夫人を連れてきて彼女に復讐する。ちょっと気持ち悪いかも知れないから、覚悟してね。

まず、戚夫人の両手足を切断する。それから、舌を抜いてしゃべれなくして、目玉も二つともえぐり出します。耳には溶かした銅を流し込んでしまう。

次にその戚夫人を豚小屋に放り込んだ。

豚小屋というのは何か。当時中国のトイレは二階建てになっていました。用を足すときには上にのぼってする。放出したものは一階に落ちる仕組みになっていて、そこでは豚を飼っていました。要するに豚の餌が人間の糞尿なのです。

豚小屋に放り込むということは、そういうことです。

呂后、それでもまだ気持ちがおさまらない。即位したての息子恵帝に「あなたにお見せしたいものがあります。」といって、手を引いて豚小屋の前まで連れてくる。「ほら、ご覧なさい。」

恵帝、なんだろうと、暗闇でゴソゴソうごめく暗い影を目を凝らしてみていると、あの美しかった戚夫人が変わり果てた姿でころがっている。

「ギャッ！」恵帝は気の優しい貴公子だから、ものすごいショックを受ける。呂后は平然として「これが、ヒトブタです。」と解説したらしい。

「母上、ひどい！」といったかどうかは知らないけれど、惠帝はそれ以後自分の部屋に閉じこもって酒浸りになり死んでしまった。

呂后は相当な性格ですが、こういう女性を妻にしている劉邦、かれも現実に身近にいたら関わりたくないような恐ろしい奴だったような気がします。本に出てくると、さらっと読んでしまうけれど、命を懸けて天下をとろうなんて考えること自体、常人を超えているよね。

劉邦の死後は、呂后が政府の実権を握る時期があるんですが、彼女の死後はまた、劉邦の子孫たちが皇帝として政権を担当していました。

六代目景帝のときに呉楚七国の乱（前141）がおきます。

漢政府の中央集権化政策に国を没収されるんではないかとおそれた呉、楚などの七つの国がおこした反乱です。数ヶ月でこの反乱は鎮圧されて、この結果、大きな国はなくなりて漢は実質上、郡県制になりました。

2武帝の時代

第七代目が武帝（前141～前87）です。16歳で即位して50年以上在位しました。中国史上の名君のひとりです。

建国後約60年、大きな戦争もなく国庫は豊かになっているし、中央集権化も完成している。かれの時代が前漢の最盛期になりました。

漢は劉邦以来、匈奴に対して和親策をとっているのですが、匈奴はしばしば長城を越えて中国内地に侵入して、略奪を働いている。そこで、武帝は対匈奴戦争を積極的におこないました。ところが、匈奴は遊牧民族ですから、漢の軍隊がかれらの勢力範囲に出撃してもなかなか捕まらない。また、決定的な打撃を与えることができないのです。漢軍は基本的に歩兵ですからね、機動力ではかなわない。

何かいい手はないかと思案していると匈奴の捕虜から大月氏の情報がはいった。

中国の王朝の領域よりも西の地方を漠然と「西域」というんですが、そこに月氏という国があった。ところがこの国が匈奴に攻撃されてさらに西の方面に移動したという。移動後を大月氏国というんですが、この国は匈奴に対して恨みをもっているという。

そこで、武帝は大月氏国と同盟を結んで東西から匈奴を挟み撃ちで攻めようと考えた。スケールの大きな作戦ですね。ただ、同盟を結ぶためには使者を派遣しなければならない。

ところが、宮廷の誰も使者になりたがらないんです。『西遊記』知ってるでしょ。孫悟空が活躍して妖怪をやっつける話。妖怪たちが三蔵法師を食べようと次々におそってくる。唐の時代の玄奘というお坊さんのインド旅行をもとにした話ですが、妖怪たちが登場する舞台が西域です。中国人にとっては西域はそういう魑魅魍魎の跋扈する恐ろしい世界だったんです。そんなところへいって生きて帰れるとは誰も思っていない。

その、誰もいきたがらない西域への旅に志願した男がいた。それが張騫（ちょうけん）です。武帝、張騫がなかなかの人物と見込んでかれに百人以上の部下をつけて送り出しました。これが前139年のことです。

張騫は漢の領土から西域地方に踏み込んだとたんに匈奴のパトロール隊に見つかってしまった。殺されることはなかったんですが、そのまま捕虜になって匈奴人とともに生活することになった。匈奴人の奥さんまでもらって子供もできた。匈奴からしたら漢の情報源として貴重だったのかもしれません。脱走しないように監視もきびしかったらしい。10年間匈奴で暮らしたんだからすっかり匈奴人だね。そのまま10年あまり経ったとき、隙を見て妻子と従者を連れて脱走した。すごいのが漢に帰らないで大月氏国へいったところで、あくまでも武帝の使命を果たそうとしたのです。

大月氏へ到達した張騫は漢との同盟を申し入れますが、大月氏の王様からすれば、張騫の申し出は危険だね。なにしろ、張騫が漢の武帝から送り出されてから10年以上経っている。武帝という皇帝が現時点で生きているかどうかもわからない、生きていても今も匈奴討伐を考えているかどうか、なんの確証もないわけでしょう。使者ひとりが漢から大月氏に来るまでに10年かかっているわけで、常識的に考えて同盟を結んでも共同作戦がくめるはずがない。

そして、なによりもこの時の大月氏国は豊かな土地に住みついていて、今さら匈奴に復讐してもとの領土を取り戻す気持ちなんて、さらさらありませんでした。

張騫は大月氏国に一年ほど留まるのですが、結局同盟はあきらめて帰国の旅に出ます。この帰り道でまた、匈奴の部隊に捕まって捕虜になってしまいます。そして、この時は匈奴内部の混乱があって、その隙をついてまた脱走します。

前126年、出発から13年後、張騫はようやく長安に帰り着いた。百人以上いた従者は一人になっていました。それと匈奴人の妻子を連れていた。

とっくに死んだと思っていた張騫が帰ってきたのだから、武帝は大喜びだ。張騫はすっかり英雄扱いです。大月氏との同盟はできませんでしたが、張騫は10年以上も西域生活をしているでしょ。匈奴や西域諸国との情報通なわけ。武帝はその情報をもとに匈奴に対して攻撃をかけました。

対匈奴作戦で大活躍した将軍が二名。衛青（えいせい）と霍去病（かくきよへい）です。叔父さんと甥の関係です。衛青は姉さんが武帝に愛されてその関連で出世のきっかけをつかんだんですが、将軍としての才能があったんだね。若いときから大活躍してどんどん出世していった。

かれらの活躍で匈奴は勢力が衰えていきました。地図を見ると匈奴は非常に広い地域を勢力下においていますが、その支配下にはいろいろな遊牧部族やオアシスの都市国家がはいっています。領土に住んでいるのがすべて匈奴人というわけではない。地図は匈奴の勢力範囲を描いてあるだけです。

だから、漢の積極的な軍事行動で、匈奴から漢にのりかえる部族や都市もだんだん増えてきたし、やがては匈奴の内部でも内輪もめがおきて、漢に服属するグループも生まれてきました。

張騫も再び西域にいて、東西交易路上のオアシス諸都市を漢の支配下に置いた。だから武帝の時代に漢の領域は西にぐっと張り出すようになっているね。西域方面に敦煌（とんこう）郡など四郡を新たにおいています。

武帝の軍事行動でもうひとつ有名なのが汗血馬です。張騫の情報に中央アジアの大宛（だいえん）という国の話があって、この国は汗血馬という名馬の産地だというんだ。遊牧民の匈奴と戦うにしてもぜひ名馬は欲しい。外交交渉で汗血馬を手に入れようとしたんですが、大宛に断られてしまったので力ずくで奪いにかかった。

李廣利という将軍が大宛遠征に派遣されました。6万の軍を率いて出陣するんですが苦戦して数年かかって帰ってきた。兵士はわずか1万に減っていたというから、どれだけきびしい戦いだったか想像できるね。ただ、かれらは300頭の汗血馬を連れてきたんだ。

これを増やして匈奴との戦争に利用したんでしょう。

汗血馬というのはどんな馬だったのか。資料集には写真があるね。彫刻だけど。足としっぽを振り上げていかにも速そう。この汗血馬がのちに西アジアに伝わってアラブ馬になった。さらにこのアラブ馬が、ヨーロッパに運ばれてイギリスで在来種とかけあわされてサラブレッドが誕生した。というわけで、やっぱり速かったわけだ。

東方にも進出している。朝鮮半島方面には衛氏朝鮮という国があった。これは、漢民族が建てた国だったようですが、これを滅ぼして、楽浪郡など四郡をおきます。

南方でも南海郡など九郡を設置しました。

武帝はこのように東西南北で軍事行動を積極的におこなって領土を拡大した。なによりも劉邦以来の発展によって蓄えられた国庫がかれの政策を支えた。しかし、あまりにも積極的に戦争をしたので、財政難になってしまった。

そこで、内政面でいろいろな財政政策をおこないました。これは受験的には重要。

均輸法、平準法。物価調整をかねた政府の增收策と説明されます。

中国は広いのでA地方では豊作で穀物価格が安い、B地方は凶作で穀物価格が高騰している、ということがある。こういうときに政府がA地方で安く穀物を買い付けて、B地方で時価よりは安い価格で販売する。これが均輸法の理屈です。

平準法は同じことを時間軸でおこなう。穀物の安いときに政府が買い付けておいて、高いときに販売する、

というわけです。

理屈は簡単だけれど、実施するのは簡単ではない。情報収集とか、穀物の管理輸送とか中央集権的に官僚制度がゆきとどいていないとできるものではない。

武帝の時代は庶民出身のものでも大臣にのぼりつめたりしています。武帝の政策と無関係ではないと思う。能力を重視したんだろうね。

塩、鉄、酒の専売制。

専売制というのは政府が製造、販売を独占して、民間業者に販売させないことです。塩は必需品ですから、政府から買うしかない。政府もうかる、という理屈。

これらの政策は、前漢以後多くの王朝によって試みられる財政政策のさきがけとなった。そういう意味で武帝の時代は重要です。

その他、増税や、貨幣改鑄もおこないました。

内政としては、これ以外に儒学の官学化が重要。董仲舒（とうちゅうじょ）という学者の献策をうけて、太学という官立学校をつくり五經博士という先生に儒学を教えさせた。優秀な学生を官僚としました。

武帝の時代になると、宮廷には儒家に対するアレルギーはないからね。武帝は幼いときから儒家が好きです。

官吏登用制度としては郷挙里選という制度もおこなわれました。郷挙里選という言葉は「郷里」と「挙選」という言葉を組み合わせたもの。「挙選」は「選挙」と同じです。地方の役人が地元の有力者の推薦をうけて儒学の素養があり地元の評判のいい者を中央に推薦する。中央政府はその者を官僚に採用する。そういう制度です。地方の「郷里」で「選」んで中央に「挙（あ）」げる。だから、郷挙里選という。

この制度で中央に推薦される者は、結果として地方の有力者、豪族の師弟であることが多かった。この点は覚えておいてください。

きらびやかな武帝の時代でしたが、その晩年は後継者で悩んだ。後継者争いで皇太子が無実の罪で殺されたりする。死刑にしたのは武帝なんですが、あとで無実を知るんだね。

最後は失意の中で武帝は死んだかもしれない。武帝の死とともに前漢の最盛期は終わります。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[漢帝国と辺境社会—長城の風景中公新書（1473）](#)

糸山 明著。漢の西方辺境での防衛体制が、具体的に紹介されています。匈奴対策で漢が費やした努力と人民の労力がしみじみわかります。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第28回 楚漢の興亡](#)

[次のページへ](#)
[第30回 新から後漢](#)

□□□□□□□□□□

□□□□□□

第30回 新から後漢

1新

武帝の死後、地方での豪族の成長がめだってきます。奴隸や小作農をたくさん使って大農場経営をおこなった。教科書、資料集をみると豪族の館の写真が出ているね。これは、豪族の墓から出土する画像セン（つちへんに専）と呼ばれる瓦の絵です。当時の生活などが描いてある。館の周りは堀をめぐらせてあって、物見やぐらもある。鎌倉時代の武士の館に感じが似ている。実態も案外それに近いんじゃないかな。ただし、漢では郷挙里選という官吏登用制度がおこなわれていましたね。豪族の子弟は、この制度によって官僚として中央政界に進出した。ここが鎌倉武士と違うところ。

さて、武帝死後の漢の宮廷では権力闘争がさかんにおこる。権力闘争の主役は宦官と外戚です。

宦官については以前も出てきましたね。男性の性器を切り取られた身分の低い者たちです。奴隸に近い身分なんですが、彼らは皇帝の身边に仕えて身のまわりの世話とかをするので、自然に政治的な機密に触れるようになる。皇帝の立場から考えてみると、彼らは皇帝が幼いときから一緒に遊んでくれたりした近しい存在でしょ。武帝のようなしっかりした皇帝でないと、ついつい彼らに政治的な細々としたことをまかせたりする。宦官は本来政治に関わるべきではないから官僚からすれば腹立たしいですが、皇帝の信頼を得ている宦官に逆らえない、こんな雰囲気になるとまともな政治はおこなわれにくくなります。

外戚というのは皇帝の母方の親戚のことです。年少の皇帝が即位すると政治的なことは母親やお祖母さんがするんですが、そうなるとその親族が高い位を独占していくのは当然の成り行きですね。この外戚も皇帝の親族という特権をふりかざして政治にかかわってきます。

別々の背景から権力をもつ宦官と外戚は当然仲が悪い。宮廷で両勢力の権力闘争を繰り返しているあいだに地方では豪族勢力が着々と勢力を蓄えていく。これが前漢後半からの中国史の大きな流れです。

王莽（おうもう）という人物がいました。この人は前漢第十代皇帝元帝の皇后の甥にあたる。ややこしいね。ようするに外戚です。コネを利用して高い地位に就くわけですが、この人は儒学の学者としておこないが立派だったので評判がよかったです。そこで王莽はついに自ら帝位についてしまいました。この時王莽は前漢最後の皇帝から位を譲ってもらう形を取ります。この形式を禅讓（ぜんじょう）という。平和的に帝位が移動したわけです。前漢の皇帝家は劉家です。王莽はその親戚だけれど王家出身です。皇帝の家がかわるので国号も変えた。王莽の王朝を新（しん）（8～23）という。

王莽は学者としては評判がよかったです。皇帝になると政治は一気に混乱しました。王莽は儒学の権化（ごん

げ) のような男で儒学の理想を強引に現実社会にあてはめようとしたからです。理念を押しつけるだけの政治で世の中が動くわけがない。

地方で豪族や農民の反乱がおこります。豪族反乱が綠林の乱、農民反乱は赤眉の乱という。これは反乱農民たちが自分たちの目印として眉毛を赤く染めていたからつけられた名前です。こういう反乱の中で王莽の政府は崩壊しました。

2 後漢

新滅亡後の混乱を收拾して新しい王朝を建てたのが劉秀。皇帝としての名は光武帝。国号は漢。都は洛陽。一般には後漢という。劉秀は前漢皇帝家である劉氏の血筋を引いているから、漢を復興したということになるわけです。かれ自身当時は地方の豪族で、豪族反乱軍のリーダーから皇帝にまでのぼりつめた。豪族勢力の協力や支持がなければ後漢は生まれなかつた。だから、後漢の政府は豪族の連合政権といつてもいい。

後漢の政治は前漢と同じで特にすべきことはない。ただ、対外政策、西域経営に関しては有名です。後漢の初期には班超という人がシルクロード沿いのオアシス諸都市国家を後漢に服属させて西域都護として大活躍しました。

この班超の部下に甘英（かんえい）という人がいる。甘英は班超の命令で、西の方向に使者として派遣された。行けるところまで行ってこい、というのが班超の命令。で、甘英はどんどん西に向かって旅をつづけ、最後に海につきあたつた。これ以上西に進めない、というので引き返してきたんです。

甘英がどこまで旅をしたのかというのが、興味深いところで、甘英によると海があった国は大秦国（だいしんこく）。これはどの国を指すのか。

甘英がたどりついた海は何かということが焦点になる。これには二説あって、一つはカスピ海という説。湖だけれど知らないものがみれば海と思うでしょ。もう一つが地中海という説。シリアの海岸までたどりついで引き返したというわけだ。で、どちらかというと、地中海説が有力のようです。

だとしたら大秦国というのは何かというと、ローマ帝国ということになる。後漢の軍人がローマ帝国まで旅行したとすれば、スケールの大きな話ではないですか。

これを補強する記録があつて、班超、甘英の時代から少しあとの166年、中国南部の日南郡というところに一隻の船が着いた。この船の乗員は大秦国王安敦（あんとん）の使者と名のつているのです。

大秦国がローマ帝国とすれば安敦とは誰か。当時のローマ皇帝をさがすとぴったりの人物がいましたね。マルクス=アウレリウス=アントニヌス帝です。五賢帝の最期ね。アントニヌスを音写して安敦にほぼ間違いないでしょう。

ただ、ローマ側の記録にはマルクス=アウレリウス=アントニヌス帝が中国方面に使者を派遣したという記録はないので、中国にやってきた者たちがいったい何ものだったのか、ローマ皇帝の名をかたつた西方の商人ではないかとかいわれていますが、とにかく、この時期に東西の二大帝国がちょっとではありますが接触

していたことにはかわりはない。世界史っぽくなってきたですね。

3 漢代の文化

前漢、後漢ひっくるめて文化について触れておきます。

前漢では司馬遷（しばせん）（前145？～前86？）。必ず覚えなければならない歴史家です。かれの書いた名著が「史記」です。神話、伝説の時代からかれが生きていた前漢武帝の時代までの歴史が書かれている。この歴史書の書き方も重要。紀伝体（きでんたい）という形式で書いています。というより、司馬遷が紀伝体という書き方を開発して、これが中国では歴史書の書き方の模範になります。大きく分けて本紀（ほんぎ）と列伝（れつでん）という二つの部分からできているので紀伝体という。

本紀は年表です。何年何月にこんな出来事があった、と宮廷を中心に出来事が羅列してある。極端にいえばみなさんの世界史の教科書みたいなもんです。読んでもあまりおもしろくない。

列伝はそれぞれの時代に生きた個性的な人物の伝記を集めたものです。歴史の中で翻弄される人間たちの運命を物語的に書いてある。この列伝がおもしろいんです。授業で話したいいろいろなエピソードの種本はみんなここです。あんまりおもしろいんでたくさんのバージョンでマンガ化されているね。

司馬遷は前漢武帝に仕えた人です。史官といって、宮廷の出来事を記録するのがかれの家の仕事でした。司馬遷の親父さんも史官として漢の宮廷に仕えていた。で、親父さんは史官としての仕事以外に自分のプライベートな仕事として、歴史書を書こうとしていたんです。それが「史記」です。ところがこれを完成させる前に親父さんが死んで、息子司馬遷がその仕事も引き継いだ。だから、司馬遷は宮廷勤めのかたわら情熱を傾けて「史記」を書いていました。いわばライフワークです。

そんなときある事件がおこる。武帝は積極的に西域経営をして匈奴と戦争していたね。李陵（りりょう）という将軍がいた。この将軍も五千の兵を率いて匈奴との戦争に出かけるんですが、敵に包囲されて降伏した。

このニュースが長安の宮廷に届くと武帝は烈火のごとく怒った。李陵将軍の一族はみんな都に住んでいるんですが、武帝はその家族を皆殺しにしろ、と命じたんです。そのとき史官司馬遷はその場に居合わせた。司馬遷は李陵将軍の人となりを知っていたので、かれを弁護したんです。李陵将軍は立派な人物だから、降伏したのにはよほどのわけがあったに違いありません、事情がはっきりするまでかれの家族を処刑するのはお待ちください、というのだ。

武帝はこれを聞いてさらに怒ってしまった。「お前は史官の分際で皇帝の判断に口出しするか！ 司馬遷よ、お前も死刑だー！」

ということで、司馬遷も死刑になることになった。ところがかれには親父さんから引き継いだ「史記」を書き上げるという重要な仕事があるわけです。死ぬわけにはいかない。当時死刑と同等に重い刑で宮刑（きゅうけい）という刑があった。これは性器を切り取られる刑。宦官にされてしまうわけだ。司馬遷はどちらかを選択することができた。

死なずすむのなら宮刑でいいじゃないか、と今の時代なら簡単に思うかもしれないけれど、時代が違うからね。なぜ宮刑が死刑と同じくらい重いかというと、男性性器を切り取られるということは男でも女でもなくなる、ようするに人間ではなくなって人間界からおさらばすることを意味したからです。

当時の感覚では人間以下のものになってまで生き続けることは、死ぬよりもつらいことだったのですよ。しかし、司馬遷は「史記」を完成させるために宮刑を選びました。

宮刑を選んでも実は生きていられるとは限りません。当時は医学も進歩していないしね。スponと性器を切り取るでしょ。そのあとばい菌が入って死ぬかもしれないし、出血多量で死ぬかもしれない。手術後の生存率はかなり低かったようです。手術後は室温を高くしたサウナ室のような部屋に一週間閉じこめられる。一週間後生きながらえてこの部屋から出てきたら助かったということになる。中には傷が治る過程で尿道がふさがってしまっておしっこが出なくなってしまった死ぬこともあったらしい。

司馬遷は死なずすみました。しかし、みじめな身体で生き続ける屈辱に耐えなければならなかつた。すべては「史記」を完成させるためでした。

自分がこんな目にあったことを考えると、司馬遷は人間の生き方というものを考えざるを得ないんです。李陵将軍を弁護したことは正しかったと司馬遷は考えた。しかし、武帝から屈辱的な刑を受けた。運命とはいいたいなんだろうか、というわけです。

そういうことを考えながらかれは歴史上の人物について伝記を書いた。自分の主義に忠実だつたためにのたれ死にしたものや、さんざん人殺しをしながら天寿を全うした大泥棒が列伝には出てきます。武帝に刑を受けながらもその臣下として生きている自分。その自分が書く漢の歴史、武帝の時代。いろいろな想いがぎゅっと凝縮されて「史記」の行間にほとばしっていて。というわけで名著なのです。

また、司馬遷は「史記」を書くにあたって宮廷の記録を利用するだけでなく各地を旅行して取材しているようです。単なる書斎の人ではないのです。

余談になりますが、先年亡くなった歴史作家の司馬遼太郎さん、かれの名前は司馬遷に遼（はるか）に及ばない、という意味でつけたそうですよ。

後漢の時代には班固が「漢書」を書いています。形式は紀伝体で司馬遷の方法を踏襲しています。「史記」が前漢の武帝の時代で終わっているので、班固は前漢の時代をその滅亡まで書きました。これ以後、あの王朝がその前の王朝の歴史を書くことが一般的になっていきます。班固は西域都護だった班超のお兄さんです。

漢のはじめ頃には人気のなかった儒学ですが、やがて経典が整備されます。『詩経』（しきょう）『書経』（しょきょう）『易経』（えききょう）『春秋』（しゅんじゅう）『礼記』（らいき）の五つです。全部まとめて五経（ごきょう）という。

これらは、春秋時代から戦国時代にできた書物ですから、漢の時代の人びとにも意味がわかりづらかった。そこで、これらの経典の解釈学が発達しました。これを訓詁学（くんこがく）という。その代表的な学者が

後漢の鄭玄（じょうげん）（127～200）です。儒学をそれなりにマスターしていることが名士としての条件になってきますから、豪族の子弟たちも、これで一所懸命勉強したわけだ。

文化で忘れてはいけないのは紙の発明です。後漢の蔡倫（さいりん）という宦官が発明したといわれています。実際は蔡倫以前にも紙はあったようで、蔡倫はこれを実用的に改良した人。

紙の発明が、文化の発展普及にどれだけ役に立ったか想像できますか。

中国で紙が発明される前は、竹や木を細長く短冊状に削ったものに字を書いていました。これを竹簡（ちくかん）、木簡（もっかん）といいます。けっこう長くて一本50センチくらいです。これ一本には長い文章を書けないので、何本かの短冊（たんざく）を「すのこ」のように糸でつづって、これに文を書く。「冊」という字はこの形はここからきている。しまうときにはぐるぐる巻いておくのです。これを「巻」という。いまでも何冊かつづきの本を一巻、二巻、というでしょ。ここからきているわけ。

こんなだから、ちょっとした本でもすごく大きく重たく場所をとる。豪族や官僚でなければなかなか個人で書物を持つことは難しい。

勉強したい人は読みたい書物をもっている人のところに重たい木簡抱えていって、座敷にダーッと広げて写すわけです。コピーなんてないしね。筆記用具は墨と筆でしょ。書き間違えたら短刀で木簡を削って書き直す。

これが軽くて薄い紙に替わって書物を読んだり所有することがずいぶん手軽になったのです。

蔡倫さんに感謝。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[古代中国の刑罰—髑髏が語るものの中公新書\(1252\)](#)

富谷 至 著。今回の話で司馬遷の宮刑が出てきます。宮刑の意味については、この本にもとづいています。刑罰のあり方から古代中国人の発想に迫る面白い内容です。例えば「女性に宮刑はあったか？」皆さんはどう思われますか。古来から諸説紛々の問題ですが富谷さんはこの本の中で説得力に富んだ解答を展開しています。こんな中国古代史にたいするユニークなアプローチを、新書本で専門外の者にもわかりやすく読めるのはありがたいかぎり。さすが中公新書！

第30回 新から後漢 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第29回 前漢](#)

[次のページへ
第31回 三国時代](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

第31回 三国時代

後漢末の情勢

後漢は2世紀以後、幼い皇帝がつづきます。大人の場合でも霸気のない皇帝が多い。すると前漢の末期と同じで、外戚や宦官が権力を握るようになった。

とくに後漢の場合は宦官が力をもって宮廷を牛耳った。官僚にとっては面白くない。官僚はみんな儒学を修めていますからね、学問のない宦官が政治に関わることは理念的に許されないので。宦官におもねって出世しようとする官僚もいましたが、かれらの専権に抵抗して後漢の政治をまっとうな姿にしようとする理想家肌の官僚たちもかなりいました。こういう官僚のことを「清流（せいりゅう）」といいました。清流官僚たちは宦官を批判し、世論もかれらの味方をしてくる。

こうなってくると、宦官としてはすててはおけない。清流官僚に対する大弾圧をおこないました。これを「党錮（とうこ）の禁」という（166～169）。清流官僚たちのグループを政界から永久追放したのです。殺された者もいました。

清流官僚というのは、後漢の国家運営に対して責任感をもったまじめな連中でしょ。かれらを潰すことで後漢の宮廷は官僚たちの支持を集められなくなる。

後漢の政府は豪族の連合政権のようなものだったね。官僚というのは中央政界では官僚だけれど、出身地に帰ればみな豪族なんです。かれらは二つの顔をもっているのです。かれらが儒学を教養として身につけてまじめに皇帝のために働いていれば国家は安泰ですが、党錮の禁でかれらは後漢の政府を見限ってしまう。官僚としての顔を投げ捨てた豪族たちがどういう態度をとったかというと、豪族としての私利私欲の追求に走るようになります。もしくは、世捨て人みたいになって精神世界の追求に入ってしまう。このタイプの人を「逸民（いつみん）」という。この逸民的な生き方がけっこうブームになったりもするんです。これに関しては、いずれ話をします。

地方で豪族が私利私欲に走るとどうなるか。かれらは、どんどん土地を独占していく。後漢の政府はもう地方の水利工事なんてやらなくなりますから、自作農は経営が不安定になって、ちょっとした天候の不順ですぐに没落する。やがては豪族に土地を奪われて、小作になったり奴隸になる。それでも生きていければまだまして、多くの農民たちが生活の基盤を失って流民となるのです。

こういうぎりぎりの状態で生活している農民たちは頼れるものが欲しかった。かれらが頼ったのが宗教でした。この時代、宗教が大流行する。宗教結社の活動が活発化してくるんです。宗教結社は二つ。太平道（たいへいどう）、五斗米道（ごとべいどう）です。これらはのちに道家の思想と結びついて道教という宗教の源流になっていきます。

二つとも病気を治すといって民衆の人気を獲得したというんですが、とくに五斗米道の活動は興味深いよ。信者になるには五斗の米を教団に納めます。信者になれば祈祷やお札で病気を治してもらえるだけではない。

この宗教結社は「義舎」という施設をつくっているんです。これは、無料宿泊所です。信者が流民になっていくところがなくなったらここに泊まれて食事もできる。五斗の米を出せないような貧しい民衆でも利用できる。その場合は労働奉仕をすればよいのです。橋をおおしたり、道路の補修をしたり堤防を修築したりする労働です。本来、政府や農村の共同体がるべき仕事だね。だけど、政府は腐敗しているし、共同体は豪族の私利私欲で崩壊している。それを五斗米道の教団組織がになっていたわけだ。

こんな教団が人気がでないはずがない。最終的には現在の陝西省から四川省にかけて独立国のようなものにまで発展していました。

太平道のほうは五斗米道のような具体的な活動はわかりませんが、多分似たような活動をしていたのでしょう。中国の東部を中心に数十万の信者ができました。政府の無策と豪族の横暴がつづく限り、困窮した農民たちがどんどん信者になっていくわけです。

太平道の指導者は張角といいます。かれは、農民信者の支持で自信をもったんでしょう。後漢を滅ぼして、新しい国を建設しようとした。信者を軍隊組織にして大農民反乱をおこした。これが黄巾の乱（184）です。

黄巾の乱にとって敵は誰か。それは後漢王朝と農民を苦しめる豪族ですね。後漢政府は頼りにならないから、豪族たちはそれぞれに私兵を組織して黄巾の乱と戦いました。いわゆる群雄割拠の状態になっていくんです。

この時に兵を挙げるのが三国志のお話で有名な曹操や、孫堅、劉備、その他の英雄たちなのね。三国志の物語ではかれらが英雄で黄巾の乱は農民を苦しめる悪い連中ということになっているけれど、農民の視点から見れば曹操たちは農民を苦しめるあこぎな豪族で、やむにやまれず立ち上がった農民反乱をさらにぶっ潰そうというとんでもない奴、ということになります。豪族たちの奮戦で黄巾の乱は鎮圧されますが後漢政府は事実上無力化します。ただ、政府はこのとき活躍した豪族たちに官職をあたえて名目的には生きながらえていきます。

後漢が名実ともに消えるのは220年です。

三国時代

後漢滅亡後、中国は長い分裂時代に入っていきます。一時的な統一の期間はありますが、だいたい350年ほど分裂がつづきます。

その最初が三国時代です。

魏、呉、蜀、という三つの国に分裂します。話としては面白いところでみんなの中にも好きな人多いでしょ。私も好きでね、「三国志」というシミュレーションゲームをしたいがためにその昔、PC88という

コンピュータを買ったり、ファミコンを買ったりしました。「搜索」のコマンドで必死に諸葛亮をさがしました。見つかったら「おーっ！」なんて。それはそれとして。

まず魏（220～265）です。都は洛陽。これが後漢に取って代わった国です。中国北部を支配した。三国の中で最大最強です。建国者は曹操、曹丕（そうひ）。事実上は曹操がつくった国ですが、かれは皇帝にならずに死んで、息子の曹丕の代になって後漢最後の皇帝から位を奪って魏の初代皇帝になる。だから、一応形式的には建国者は曹丕。

曹操はもちろん豪族ですね。お爺さんが宦官で財産をきずいた。宦官でも養子をとて家を残すことがあるのです。黄巾の乱の鎮圧で頭角をあらわして、その他大勢の豪族を傘下におさめます。三国志の物語に出てくるかれの部下、武将や参謀、あれはみんな豪族だからね。それぞれ手勢を率いて曹操の配下に加わってくるのです。

曹操が強かった理由はいろいろある。例えば、後漢末の群雄割拠の時代に呂布（りょふ）というスーパーマンみたいに強い豪傑がいるんですが、なぜかれが強いかというと匈奴兵を率いていたんですね。かれ自身も現在の内モンゴル出身で遊牧民族の血を引いていたのかもしれない。遊牧民は騎射に優れて勇猛です。その呂布が死んだあと、その軍隊を曹操はそっくりそのまま自分の軍隊に吸収します。それから青州兵という黄巾軍の残党まで自軍に編成しています。何でも利用できるものは利用します。

三国時代で曹操は一番魅力的な人物です。かれの魅力の根本は、従来の儒学の道徳から解き放されているところにある。曹操は法家だともいわれます。先ほど、党錮の禁以来「逸民」的な生き方がブームになったといったけれど、逸民というのは世間から逸脱（いつだつ）しているのです。この逸脱、ということの中身には儒学的な道徳からの逸脱ということも含まれている。そういう意味では法家的な曹操も逸民と同じ根っこをもっています。だから、その行動にも大胆不敵で爽快なイメージがつきまといます。

政治、軍事だけでなく文学の才能にもあふれた人でした。曹操だけでなく息子の曹丕や曹植（そうしょく）も文才があって、「建安の文学」といって中国文学史上、黄金期のひとつにかぞえられる時代です。かれらはみなその「建安の文学」を代表する詩人でもあります。

曹操の詩をひとつ紹介しておこう。

短歌行 曹操

酒に対わば當に歌え	さけにむかわばまさにうたえ
人生幾何やある	ひとのいくるやいくばくのときやある
譬えば朝露にも如たり	たとえばあさつゆにもにたり
去日苦も多きことよ	すぎにしひびさてもしげきことよ
慨らば當にもって慷け	おもいたぎらばまさにもってなげけ
憂思忘れ難し	こもれるおもいわすれがたし
何に以てか憂を解さん	なによりてかむすぼれるおもいをけさん
唯杜康有るのみ	ただうまざけあるのみ

山 高きを厭わず
海 深きを厭わず
周公哺を吐きたれば
天下心帰せたりとかや

やま たかきをいとわず
うみ ふかきをいとわず
しゅうこうくちのなかのたべものをはきたれば
あまがしたこころよせたりとかや

(竹内実・吉田富夫編訳「志のうた」中公新書より)

人生なんていうのは朝露のように短くはないものだけれども、振り返ってみればいろいろな出来事が思い出されて、ゴツゴツと胸に引っかかる。

そんなときにはうまい酒を飲んでうたおうではないか。

山は高いことを嫌がらないし、海は深いことを嫌がらない。

周の建国の功臣、周公旦（しゅうこうたん）は仕官したい者や政治について意見をもつ人がやってくれば、食事中であっても口の中のモノを吐き出してまでもすぐに面会した。だから、みんなが心服したんだ。

そんな意味です。周公旦に自分を重ねているのはわかりますよね。山が高いように、海が深いように、周公旦がそうであるように、俺、曹操もそのようにあるのだ。

かれの気概が伝わってくるようだね。

魏の制度では屯田制と九品中正法を覚える。屯田制は後漢末の戦乱で混乱した農業生産を回復させるための土地制度です。

九品中正法は漢の郷挙里選にかわる官吏登用制度です。地方に中正官という役人をおいて、これが地方の人材を九等級に分けて中央に推薦する。中央政府はこれにもとづいて役人を採用していきます。

後漢末、中国北部を統一した曹操は南方に攻め込みます。これを迎え撃ったのが孫権、劉備の連合軍。長江中流域で決戦になるのですが水軍になれない曹操軍は大敗する。これが有名な赤壁の戦いです（208）。この敗北で曹操は統一をあきらめ、中国の分裂が決定的になりました。

孫権が長江下流を中心に建国したのが呉（222～280）。首都は建業、現在の南京です。この国も南方土着豪族の勢力を結集してつくられました。

劉備が現在の四川省を中心に建てたのが蜀（221～263）。首都は成都。この人は有名な『三国志演義』という物語の主人公。关羽、張飛などの豪傑を従えて黄巾の乱の鎮圧に活躍して、やがて諸葛亮という軍師を迎えて蜀の君主になる。物語も現実もこういう筋書きは同じです。ですが、かれらの歴史上の実像よりも物語での活躍の方が有名になってしまって虚像が一人歩きしている感じだね。中国でも古くから講談や演劇の題材になり今でもテレビドラマや映画になっている。

とくに劉備の武将关羽は人気があって、神様として祀られています。関帝廟というのがそれで、蓄財の神様になっている。横浜の中華街にもあります。

軍師の諸葛亮は物語の中では、ものすごい知謀の持ち主でかれのたてた作戦や政策はピタリと的をついて劉備を一国の君主に押し上げていくわけですが、劉備が諸葛亮を自分の家臣にするのにこんなエピソードがある。

「三顧（さんこ）の礼」というのです。

劉備は早くから関羽、張飛などと一緒に揚げて活躍し、有名になっていくのですが、なかなか曹操や孫權のように一国一城の主として自分の地盤をつくれない。あちこちの地方の太守の居候（いそうろう）、客将ぐらしをしているのです。そんなとき、諸葛亮という知謀の士がいると聞く。かれを部下にできれば大きく発展することができるだろうというんだね。諸葛亮は田舎にこもって誰にも仕えていない。

そこで劉備は諸葛亮の隠遁場所に訪ねていく。ところが、諸葛亮は留守。劉備はあきらめきれないで、もう一度自ら出向いていくんですが、またもや留守。普通ならこれであきらめるのですが、どうしても自分の参謀に迎えたいのでもう一回訪ねていきます。これが三回目。そうしたら、今度はいた。ところが、諸葛亮はお昼寝の最中だった。劉備は昼寝の邪魔をしては諸葛亮先生に申し訳ないといって、かれが目覚めるまでじっと待っているの。

やがて、諸葛亮目が覚める。三度も自ら訪ねてきてしてくれてしかも自分が寝ているのを起こそうともせずに待っていてくれたというので、すっかり感激して劉備に仕えることになった。

これが三顧の礼。三回訪ねて隠遁している先生を引っぱり出してきたというのだ。

これは物語の山場のひとつなのですが、実際にもあった話らしい。

しかし、考えてみると変な話で、劉備は一度も会ったこともない諸葛亮をどうしてそんなに家来にしたかったのか。まだまだ、勢力は小さいとはいえ、劉備はすでに有名人で将来は大きな野望をもっているわけでしょう。軽々しく自分から無位無冠の、しかも年下の人間を腰を低くして迎えるというのは、自分の値打ちを下げるような行為なのです。とくにメンツを重んじる中国的な発想ではね。

この三顧の礼の背景にはこんな事情があったんです。

劉備とは一体何者か。かれは漢の皇帝家の血筋を引いているといっていますが、こんなのはだいたいはつたりで、なんの身分もない庶民出身です。田舎では筵（むしろ）売りをやっていたという。黄巾の乱でチャンスをモノにして成り上がっていくのですが、所詮身分が低い。

後漢が崩壊していく過程で地方権力を打ち立てていくのはみな豪族だったでしょ。曹操も豪族。孫權も豪族。でも劉備はそうじゃない。だから、どうしてもかれらの仲間入りができないのです。

諸葛亮は一体何者だったのか。かれは大豪族の一員なんですよ。諸葛家というのは中国全土に知られた大豪族だった。諸葛亮にはお兄さんがいるんですが、兄さんは呉の孫權に仕えているのです。大臣にまでなっている。又従兄弟（またいとこ）がいて、こっちは曹操に仕えている。つまり、魏や呉にとっても諸葛一族は自分の味方にしておきたいような大豪族。諸葛亮はそういう豪族の一員なんです。

つまり、劉備が諸葛亮を家臣にできれば、「ああ、あの諸葛一族の諸葛亮が劉備に仕えたのか。ならば、劉備も豪族仲間の味方と考えてやろう」と全国の豪族たちが思ってくれる。豪族勢力に認知される、ということになるのです。例えていえば、私が銀行にいって一億円貸してくれといつても絶対ダメだけれど、ソニー

かトヨタの社長さんが保証人になってくれればすぐに借りられるようなモノです。

実際、諸葛亮を迎えてからの劉備はトントン拍子で蜀の国を建てます。蜀の地方の豪族たちが、かれを君主として仰ぐことに賛同した背景には諸葛亮の存在は大きかったと思います。

これほどに、豪族の力を無視しては何もできなかつた時代だったのです。逆にいえば、誰も全国の豪族勢力をひとつにまとめられなかつたから中国が分裂したのでした。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

世界の歴史〈7〉大唐帝国・河出文庫	宮崎 市定著。 河出書房の「世界の歴史」シリーズなのに、河出で文庫化される前に、中公文庫から出版されてしまったほどの名著。 「大唐帝国」という題名だが、唐についての叙述は付け足し程度。唐が成立するまでの後漢末から南北朝時代の大きな歴史のうねりが主題。 魏晋南北朝といわれる時代は、教科書ではすぐに終わってしまうが、実は中国史上一二をあらそう重要で興味深い。
三国志人物縦横談	高島 俊男著。 無条件に楽しめて、しかも、賢くなつた気がします。文学畠から見た三国志の読み方。三国志ファンは必読。
志のうた—中華愛誦詩選...中公新書	竹内 実、吉田 富夫 著。 本文中に「志のうた」という本から曹操の詩を引用していますが、この詩集は中国の詩を時代を超えて集めたものです。大胆な読み下し文で一読して意味が取れるように工夫されています。日本人は漢字をみて何となく意味がわかるので、「志のうた」では翻訳の醍醐味を味わうこともできます。お薦めの本です（入手しにくいですが）。曹操は「歩出夏門行」という詩も載っていて、私はこちらの方が好きなんですが、本文では、長さの関係で授業では「短歌行」を紹介しました。

第31回 三国時代 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第30回 新から後漢](#)

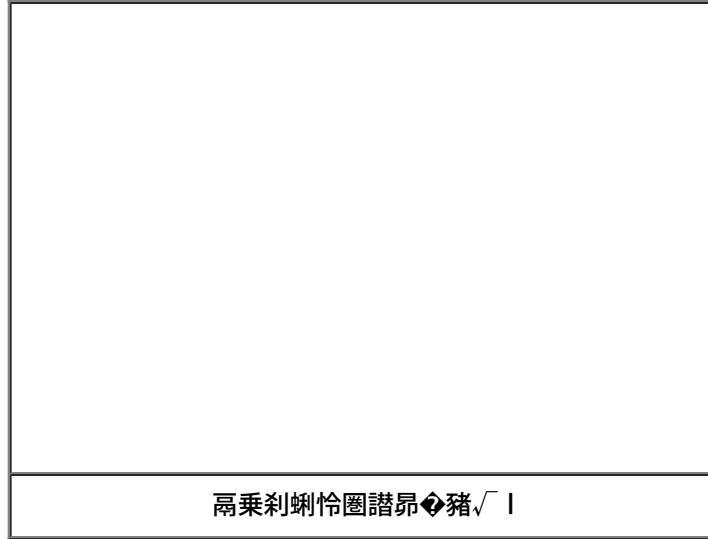
[次のページへ](#)
[第32回 魏晋南北朝](#)

壹也阜蜿伊隰帷セウ骨イ

縲縲隨ヤ◆難シ貞履縲隔乘刹蜊怜圈譜昇

◆大、ア蛻◆」ゆ◆謫ゆサ」

繩 繩蠶榦眞荳牙寄譴ゆサ」縺ヨ隠ノ縺貞@縺盜 S 縺ノ縺呐' 繩〇ク牙寄譴ゆサ」莉・蠕後◆猪√ | 縺堤「口隱阪@縺ノ
縺翫>縺ノ縺上□縺輔>繩 ゆ % 縺雍◆縺◆d 縺雍@縺◆→縺雍m縺I縺ヨ縺ノ縺√ ◆縺I縺ウ縺医◆猪√ | 蝙ウ縺
貞@縺」縺九 j 隕壹∴縺ノ縺翫￥縺雍→繩



繰^ル梧^サ「縛梧^サ◆ s 縛^ア荳牙寄譲^{ユサ}」繰る↑上^ム∞瘦繩^ス「枯縛^ク荳牙寄縛^ク蛻^ク」
繩隔上↓莉^リ「縛上 k 縛^ア縛梧刹繩^サゆ後@縛^ア蘿阪→縛^ア≥鬚^カ縛^ア邇区惱^ク縛^ク縛蘿^ク | 縛^ア荳峨^{タガ}△透^ア縛^ク縛^ク繩^スらア繩^ス：
眠繩^ス／' 縛^ク j 縛^ク縛励^ク◆繩よシ「蟄励^クニ縛^ク。縛^ク」^シ s 縛^ク蛹^ク蛻^ク・縛励^ク※縛^ク覩^ク￥縛医^ク縛^ク

縲縢薙◆譜九' 陷縛ア蜻峨 r 豹◆C 縻勵※縢◆▲縢溘 s 荳1蝗入縢堤ア壹縢勵U 縢呻シ茨シ抵シ厄シ包シ峨ゆ @ 縢九
@ 縢：ヰ葱ア縢後辛 縢薙▲縢ヲ遇1譜滄侯縢ア譜九◆豹◆D 縢セ縢呐
縲闖ツ蛹勵↓ 縢ツ蛹玲媚縢J・ソ譁ケ縢ヨ遂-豌第酪縢御セ螟・縢勵※縢阪※縢✓。 縢後 I 縢ヨ驛イ譁丞腰菴阪◆蟆上
& 縢1謾シ讓ウ縢後◆縢上 & 縢鍋函縢セ縢後U 縢呐ゆ % 縢後' 莽碑「蜊∞◆蝗入◆医# 縢薙 S 縢◆≥ 縢阪▲縢薙
¥◆画函莉」◆茨シ難シ托シ悶懶シ費シ難シ呻シ峨ゆコ斐△ 縢ヨ遂-豌第酪縢オ縢医▲縢ヲ蜊∞◆縢ヨ謾シ讓ウ縢後テ 縢阪◆
譜ゆサ」縢✓→縢◆≥譁丞袖縢ア縢呐リ庄蛹勵◆螟ア豺ヰ葱ア縢ヨ譜ゆサ」縢ア縢呐

縲縷◆' 縛^フ縛^ミ昴◆壹^フ縛^ミ縛^ミ縛^ミ縛^ミ、蛹鈴^フ上→縛◆≥蝗^フ縛^ミ瑚^フ庄^フ蛹^フ励^フ r 邑^フ壹^フ縛^ミ吶^フ k ◆茨^フ費^フシ難^フシ呻^フシ峨^フ
縲蛹鈴^フ上◆縲◆' 縛^フ譚^フア陰^フソ縛^ミ蛻◆」ゑ^フシ茨^フ包^フシ難^フシ費^フシ峨^フ@縛^フ譚^フア鬲^フ上「・ソ鬲^フ上」 謂千九
縲縛輔^フ；縛^フ譚^フア鬲^フ上◆蛹玲哩◆医^フ三縛^ミ上○縛◆シ会^フシ茨^フ包^フシ包^フシ舌^フ懶^フシ包^フシ曆^フシ曆^フシ峨^フ「・ソ鬲^フ上◆蛹怜捉◆茨^フ包^フシ
包^フシ悶^フ懶^フシ包^フシ假^フシ托^フシ峨^フ↓莉」縲^フ上 j 縛^フ縛^ミ吶^フ
縲蛹鈴^フ上。縲牙圈^フ譚^フ峨^フ○圈蜻^フイ縛^ミセ縛^ミア縛^ミ堯斐▽縛^ミ邇区^フ悃^フ縛^ミ縛^ミ吶^フヲ縛^フ巻^フ後^フ S 邊サ邑^フア縛^ミ謾^フシ讓^フウ縛^ミ縛^ミ縛^ミ縲^フ
√%縲^フ後^フ r 縛^フ縛^ミ」縛^ミ上 k 縲^フ√※蛹玲悃^フ縛^ミ蜻^フシ縲^フ

繩遂-豌第酪縛ヨ謾リ讓リ縛後テ縛阪◆縛ヨ縛ツ闇ツ蛹励□縛代テ闇ツ蛹励↓縛セ縛ア縛九！縕峨◆萱オ蝶・縛ツ縛ユ j
縛セ縛帙 s 縛ア縛励◆縲ヨイケ螢翫@縛渾刹縛ヨ遁区酪縛ヨ荳莠口縛悟漉縛オ驃◆E 縛ア縛雍%縛オ謫九 r 蜀崎◆縛励
U 縛呐ユ%縕後 r 譚ア謫具シ茨シ難シ托シ励懶シ費シ抵シ撰シ峨→縛◆≥縲ヨ擲謫九→蛹口蛻・縛励※縛昂◆螢阪◆謫
九 r 險リ謫九→蜻シ縛カ縛雍→縕ユ≠縕翫U縛呐。縕画ウイ譚上@縛ア縛翫>縛ア縛上□縛輔>縲

縲譚ア謫九 r 豹◆C 縛励◆縛ヨ縛悟ヨ九√%縛ヨ縛ユ→縲：「/◆匍縛ア縛◆≥遁区惣縛後△縛・縛阪U縛
呐ユ%縛ヨ螳九。縕蛾匍縛セ縛ア縛ヨ蝗帙△縛ヨ遁区惣縛偵◆縛」縛上 k 縮√※蜊玲惣縛ア蜻シ縛カ縲リ庄蛹励◆蛹
玲惣縛ア幕セ蟲呐☆縕区◆螂ア縛オ縛I縕九

縲蛹怜捉縛悟圈譚峨 r 豹◆C 縛励※闇ツ蛹励 r 邑ア荳縛励◆縛ユ→縲◆シ包シ假シ大ケI縛オ蛹怜捉縛基嚙縛オ莉」縕
上 j 縮√%縛ヨ鬚九' 蛤玲惣縛譜ズ溢◆遁区惣縛鬚ウ縕よサ◆C 縛励※蜀阪◆荳口蝗入蝶イ菴雍 r 邑ア荳縛呐 k 縛ヨ縛鯉
シ包シ假シ吝ケI縲

縲蠕梧シ「豹◆」。蠕後◆嚙縛ヨ邑ア荳縛セ縛ア縛ヨ◆難シ曆シ仙ケI髪雍' 蝶ア蛻◆」よ函莉」縲√→縛◆≥縕上 C 縛ア縛
呐

縲縲縛雍◆謫ウサ」蝶イ菴雍◆蜻シ縛ア譚ケ縛ア縛呐' 縲◆1乘刹喇怜圈譜暁函莉」縲√→縛◆≥縛ヨ縛後>縛。縛-
縕謎ケ闇ヤ迨◆干縛呐ユ U縛溢○漉譚ケ縛ヨ謾リ讓リ縛オ達透ヨ縛励※蝶I譜暫シ医 j 縛上■縕◆≥◆画函莉」縛イ
縛◆≥險縛◆婿縖ユ≠縕翫U縛呐ユク牙寄縛ヨ蜻峨': 擲謫九∞漉譜昂◆螳九': 哩縲：「/◆匍縲○◆驛イ縛ア蝶I
縛、縛ヨ遁区惣縛後≠縕九干縛励 g 縮ユ□縛九 i 蝶I譜昂ユ%縛ヨ蝶I縛、縛ツ縛呐ニ縛ア驛入縛櫛樟蟲イ縛ヨ蜊嶺コヤ
縛オ縛ユ▲縛溢◆縛ア縲√◆縛ア縛、縛・縛阪◆縛ユ◆縛ア閨◆: 縛ア縛◆k 縛ヨ縛ア縛呐
縲蝶I縛ア縛◆≥謨-蟄励 r 莢晉ガ迨◆↑隱I縛ア縛ア縛後 j 縛上阪→隱I縛ア縛セ縛呐。縕画ウイ譚上@縛ア縛上
□縛輔>縲

縲蜿鈴イ鍋噪縛オ縛ツ縛雍◆謫ウサ」縛ヨ遁区惣縛ヨ螟蛾◆縛ツ縛励▲縛九 j 隕壹: : 縛ア縛上□縛輔>縲
縲縛励。縛励「視譜昂◆螟蛾◆縛ア縛◆≥縛ヨ縛ツ讓リ蛭帙◆譜闇倅入阪↓縛ユ k 迨◆ク昂◆螳カ謡◆' 莢」縕上▲
縛ア縛◆¥縛ヨ縕定ソハ縛」縛ア縛◆k 縛縛代◆隧ア縛ア縲○、ア縛阪↑豁I蜿I縛ヨ猪√ I 縛ア縛励※縛ツ縲: : イク蛭帙'
荳榦ヨ牙ヨ壹干長キ縛◆◆陬ユ' 縛、縛・縛◆◆謫ウサ」縛ア縛励※縲√*縛」縛上 j 縛ア縕峨: : 縛ア縛ユ i 縛」縛溢 i
縛◆>縲

縲縲縛ア縛ツ縲√↑縛勧鳴蝶暁ウ蛭帙' 荳榦ヨ牙ヨ壹干謾リ讓リ莠、莉」縕堤ケ-縕願シ斐@縕溢。縛ア縛◆≥縛ア縛
シク牙寄謫ウサ」縛ヨ縛ア縛雍m縛ア縕リウア縛励◆縕医≥縛オ睢I譚上◆蝶「蛭帙' 蠕ア縛九▲縛溢。縕峨√→縛◆≥
縛雍→縛オ縛ア縕九ア譚丞ア、縛オ幕セ謫励干縛阪 k 縛医≥縛I 迨◆ク暁ウ蛭帙◆蝓口透、縕剃ア懊 I 縛ア縛九▲縛
溢◆縛ア縛呐

縲縖ユ≥縛ア縛ア縛、縛ツ遂-豌第酪縛ヨ猪∞◆縛後≠縕九よ燕狸「縲○セ梧シ「縛ヨ謫ウサ」縛オ邀肴・才迨◆↓幕セ螟勿
帆遲悶 r 縛翫%縛I縛」縛辱オ先樞縲○圈譚ケ縛ヨ驕顏鳶豌第酪縛ヨ縛ユ > 縛縛オ蠕舌◆↓縛ア縛ツ縛ユ j 縛セ縛呐
縲○ク蝶I譚◆◆縛梧ウ驃上@縛ア縛◆¥縲よ決螂I縛ヨ荳口縛ア縕ユク蝶I蝶入蝶入蜀◆↓遷サ菴上@縛ア逕津Iサ縛呐 k
縏医≥縛I驛ア譚上' 蝶口縛ア縛上 k 縲り庄蛹励◆蝶I蝶医◆縛九！縕峨◆參サ蝶輔' 縛輔 i 縛ア蝶ア惹ア縛オ需I縏

偵。縛代◆縛イ縛◆≥縛雍→縛ア縛呐

◆定・ソ謡九。縷画擲謡九≡

繩縲邇区惱縛ヨ螟蛾◆縛ア縛昂う縛ウ縛医↓縛I縷九→縛雍m縛縛醍I-縛九￥隕九※縛観” 縛セ縛励 g 縛◆

繩陰ソ謡具シ茨シ抵シ厄シ輔懶シ難シ托シ厄シ峨よサ蝗ア閨◆◆蜿ケ鬥ヤ轄弱ゆ%縛ヨ蒡コ縛ヨ縛顔・也宛縛輔 s 縛後御ケ牙
寄蠹玲シ皮セウ繩阪テ諧牙錐縛I蜿ケ鬥ヤ諛ソ◆医@縛-縛◆シ峨テ縛呐よ峪謫阪↓董。鬆シ縛輔 I 縛ア螟ア蟆◆サ阪 r
縷◆▲縛ア縛◆◆繩

繩縛。縛I縛ソ縛オ蜿ケ鬥ヤ諛ソ縛シ陷縛ヨ驚ケ闡帑コ縛基↑上◆蝗ア縛オ謫サ縛励※縛上 k 縛ヨ縷帝亟隣帙@縛ア蜷阪
r 謼呐 E 縛ア縛Mオ闡帑コヨ縛ヨ豁サ蟠後◆譚ア譚ケ縛ヨ驕シ譚ア蜊雁ウカ縛オ縛ゆ▲縛溷◆蟄オ豌上◆迢ヤ遶区帆讓ケ縷呈
サ◆C 縛励I縛呐ゆ%縛ヨ邨先桐縛:惱魄ヨ蜊雁ウカ縛セ縛ア縛基↑上◆蜍「蜉惟ツ◆峯縛オ蟆・縷九ゆ○縛雍↓縷◆▲
縛ア縛上 k 縛ヨ縛悟I縛ヨ驕I鬥ヤ蜿-蝗ア縛ヨ菴ア閨◆テ縛呐よ快蜷阪↑繩基↑丞ソ怜I蒡コ昴昂阪◆縛雍◆鬲上◆蝗ア
縛ヨ豁I蜿イ諧ケ縛ヨ荳驛イ蛻◆テ縛呐よユI蜿イ縛オ縛後 b 縛励阪◆適J 黃縛ア縛◆o 縛後U縛呐' 繩✓ b 縛励Mオウ
闡帑コヨ縛梧掠豁サ縛オ縛帙★蜿ケ鬥ヤ諛ソ縛瑚枯縛イ縛ヨ蝗ア蠅◆始邱壹↓蝶オ縷匱サ空 C 縛オ縛I縛」縛溢U縛セ縛縛」
縛溢 i 繩:惱魄ヨ蜊雁ウカ縛シ鬲上◆蜍「蜉惟ツ◆峯縛オ縛シ蟆・縷九★繩◆↑上◆豁I蜿イ諧ケ縛オ驕I鬥ヤ蜿-蝗ア縛ヨ險
倬駆縛シ豁九&縛後↑縛九▲縛溢 b 縛励 I 縛I縛◆✓→縛◆≥縛上 c 繩

繩隧ア縛後○縛後U縛励◆縛後∞昇鬥ヤ諛ソ縛シ鬲上◆蝗ア縛ア謫シ縛励 b 謼シ縛輔 I 縛ア螳溷鴨閨◆↓縛I縛」縛ア
縛◆￥繩ゆ。縛後◆蟄舌 b 繩∞コ縛ア縛ゆ k 蜘ケ鬥ヤ轄弱 b 閩上◆蟆ア蟆◆サ阪◆蟲-菴阪 r 謠。縷観△縛・縛代U
縛呐る↑上◆諧ケ謫阪:峪荳輔◆蜉帙' 縛ゆ j 縛セ縛励◆縛後○縛御サ・蟠後◆縛縷峨@縛ヨ縛I縛◆鳴蝗昂' 縛、
縛・縛阪✓>縛、縛ヨ鬆雍↓縛句昇鬥ヤ螳カ縛オ螳淳イ縷呈升縷峨! 繩∞昇鬥ヤ轄弱' 騎ゆ↓鬲上◆迢◆ク昂。縷牙
ク易入阪 r 蟑I縛」縛ア謡九 r 蟑コ縛ア縛溢→縛◆≥縛上 c 縛ア縛呐

繩縛縛九 i 繩∞昇鬥ヤ轄弱◆縛顔・也宛縛輔 s 縛ヨ驕I逕」縛ア迢◆ク昂↓縛I縛」縛溢 h 縛◆↑縷ゆ◆縛ア縛∞コ
迎ケ縛ア縛励※縛シ蟆ア縛励◆縛雍→縛シ縛I縛◆よ又菴阪☆縷九→縛呐 \$ 縛オ雍◆I「荳画又縛シ縛オ縛代▲縛ア縛励
U縛◆ゆ○縛後テ縷系シ抵シ假シ仙ケ縛シ縛シ蜻峨 r 豹◆C 縛励↑縛雍→縛句、荳九' 郷ア荳縛輔 I 縛溢◆縛ア縛
呐' 繩✓。縛後' 豁サ縛ヤ縛I蝗易入阪 r 縷✓ \$ 縛」縛ア遶区酪縛シ縛◆@縛ヨ蜀◆I帙' 襪シ縛阪 k 繩よ◆蒡コ縛ヨ邇
区酪縛後○縛後△縛後↓霆埼嚏縷堤紫縛◆※蜀◆ケ縛貞◆縛空U縛ア縛励U縛」縛溢◆縛ア縛呐ゆ%縛後 r 蝋
邇九◆葱ア◆茨シ抵シ呻シ代懶シ難シ撰シ厄シ峨→縛◆>縛セ縛呐

繩縛雍◆邇九◆縛。縩✓△縷、縛舌 N 縷貞偵☆縛溢 a 縛シ縛シ闢I蛻◆◆霆堺]句鴨縷貞汎蛹悶☆縷後◆縷医>縷
上 c 縛ア縛呐ゆテ縩✓○縛ヨ縛溢 a 縛ヨ賽区コ縛シ縛励※蜻シ雲I縛ヨ遂-豌第酪縛ヨ蜉帙 r 蟑主◆縛励◆縛雍テ縛
呐◆縩る♀迎ア邊サ縛ヨ豌第酪縛シ荳I蝗ア蜈ア縛医 j 縷よ汎縛◆よ推驛ア謫上◆驟矩聞縛溢■縛ア縛代※
蜻シ縛シ墓◆○縩◆◆荳九→縛励※謫ア縷上○縛溢る♀迎ア驛ア謫上◆閨◆◆縛。縛シ縩✓◆縛空 a 縛シ謡九◆邇区
酪縛ヨ縷ゆ→縛ア謫ア縛◆◆縛シ縛呐' 繩∞ク蝗ア蒡コ縛シ蝶ア縛◆ゆ↑縛シ縷ゆ。縷後 i 縛ヨ蜻入莉、縷定△縛◆※
縛◆↑縛上※縷ゆ M◆蛻◆◆縛。縛ヨ驛ア謫上◆蜉帙□縛代テ荳I蝗ア蜀◆慍縛シ謫リ讓ケ縷呈遠縛。邇九※縷九%
縛ア縛後テ縛阪 k 繩✓→閨◆:縛シ縛空 a 縛シ縷よ入鍋一縛縛I縩ゆ d 縛後※縛シ縩:利縛ヨ邇区酪縛シ蜻シ縛-縷後
※縛◆↑縛◆K 謫上U縛ア縛シ縛雍←縷鍋ア菴上@縛ア縛阪※縩:利蝗ア蜀◆◆蟆ア豺シ葱ア縛シ縛観■縛◆j 縛セ

縛呐らオ仙ア謡九◆貉◆ s 縛ア縛励リ縛」縛溢

縛縛縛雍◆謡ゆ↓荳1蝗入蜀◆↓蜈・縛」縛フ縛阪◆遂-豌第酪縛御口碑「縛イ蜻シ縛-縛後 k 縛ヨ縛ア縛呐よ決螂I
縲◆ヨヨ蜊托シ医○縗雍◆◆峨「セツ◆医 C 縛、◆峨「ユ縗、縲「セ鯉シ医」縗◆≥◆峨干縛内ゆユ縗、縲「→鄧
後◆縲「◆縲◆ヨ邊サ縛ヨ豌第酪縲るヨヨ蜊代◆縲「縲ウ縗I縲オ邊サ縲よ決螂I縛ツ荳看◆縛ア縛呐◆縲「セツ縲ツ蛹亥·
I縛ヨ蛻・遜ヨ縛イ縛◆○縗後※縲◆U縛内ゆ

縲驕顔鳶邊サ豌第酪縛悟寄縗貞サ縛」縗九◆縛ア蠖鍋一縛I縛後 i 鬪ツ蛹励テ縛ツ雲イ譚題穀蟒◆' 縛呐☆縛シ縛セ
縛内ゆコ碑「縛ウ縛◆@縛ヨ謡ヲ芳峨 b 縛、縛・縛阪U縛呐@縛」縲り庄蛹励◆睢I譚上◆縛。縛ツ驟堺ク九◆雲イ豌代
◆縛。縗貞シ輔" 驟」縗後※縲ウ縗雍←縗灘漉縲オ駒◆ I 縛セ縛励◆縲

縲縲闖ツ蜊励↓謡九◆邇区酪縛ヨ荳莠コ蜿ケ門ヤ達ソ◆医@縛-縛医>◆峨→縛◆≥莠コ縛暮◆ I 縛フ譚ア謡九 r 蟒
縲フ縛セ縛内る◆縛ツ蟒コ蟒キ縲り庄蜊励↓縛ツ縛セ縛髪狗匱縛輔 I 縛フ縛◆↑縛◆悄蟲-縛檎オ先ア九≠縛」縛溢よ擲
謡区帆蟒懊◆縛昂≥縛◆≥蟲溷慍縗帝◆ I 縛フ縛阪◆睢I譚上◆縛。縛オ蟹イ縗雁ノ雍※縲フ縛◆" 縛セ縛内ゆ○縛
励※縲「。縗後 i 縛ツ縗「縲◆→縛◆≥髦雍↓縛昂%縲オ蟲-透、縗偵" 縛壹>縲フ縛◆¥ 縛ヨ縛ア縛内リ庄蜊励↓
縛ツ闖ツ蜊怜俏達縛ヨ睢I譚上 b 縛◆U縛内ゆ。縛、縲フ縛ツ蜻画帆讓ウ縗呈髮縛医◆莠コ縲ウ縛イ縛ア縛内よ俏達睢I
譚上→譚-譚-縛ヨ睢I譚上◆縛ゆU縗匱サ縲瑚憶縛上↑縛◆よ擲謡九◆迨◆ク昂◆縛雍≥縛◆≥睢I譚上◆縛。
縛ヨ蠶ヨ螯呐↑縲舌八縲ウ縗ケ縛ヨ荳覩↓達九▲縲フ謾シ讓ウ縗堤カ1謾/ @縲フ縛◆▲縛溢◆縛ア縛内ゆ@縛九 b 縲○
圈縲オ縛ツ莠碑「縛ヨ蟲ア露オ縛後≠縗九@縛」縲よ、ア螟峨□縛」縛溢◆縲

縲縛セ縛溢∞コ碑「縛ヨ謾シ讓ウ縲ツ縛励◆縛励◆蜊玲媚縲オ荳オ遂・縛励※縲阪U縛内ゆク譚ケ譚ア謡区帆讓ウ縲ツ縛雍
I 縗帝亟縛後↑縛代 I 縛-縛I縗峨↑縛◆@縲「メ縲」縲ウ縗ケ縛後≠縗後◆闖ツ蛹励 r 蟒I驍◆@縛溢>縲ゆ□
縛九 i 縲、「←縛◆@縲フ縗リサ堺」句鴨縗貞シ蛹悶@縛I縛代 I 縛-縛I縗峨↑縛◆ゆ%縛ヨ霆堺コ縛溢■縛梧帆
豐サ迨◆↑通コ險讓ウ縗呈戟縛、縗医≥縲オ縛I縗九。縗峨&縗峨↓讓ウ蜉帙◆荳棹ヨ牙ヨ壹↓縛I縗九
縲譚ア謡俱サ・蠕後◆蜊玲悃隣ク邇区悃縲ツ縲「サ堺コ縛悟ク易入阪 r 蟒I縛」縲ツ蟒コ蝗入縛励◆縗ゆ◆縛ア縛内

◆灘圈鬲

縲縲闖ツ蛹励テ莠碑「縛ヨ遏コ蜻入蟲-譚ケ謾シ讓ウ縗瑚◆莠。縗堤ケ-縗願シ斐@縲フ縛◆ k 縛I縗九↓縛ア蠕舌◆↓蜉
帙 r 縛、縛代※縲阪◆縛ヨ縛悟圈鬲上→縛◆≥蝗入縛ア縛内るヨヨ蜊第酪縛ヨ謚楂キ狗宵◆医◆縛上◆縛、縛代
>◆峨' 蟒コ蝗入閨◆よ拳霍区-上→縛◆≥驛I譚上◆縲I縲シ縲縲シ縛ア縛内

縲縛雍◆蛹鈴1上' 莜碑「蜊∞◆蝗入縛ヨ蛻◆」ら憾諷九 r 邑ゆ○縗峨○縲ツ闖ツ蛹励 r 邑7荳縛励◆縛ヨ縛鯉シ費シ
難シ吝ケ1縲よ、I豁コ蝗哲シ医◆縛◆◆縲フ縛◆シ峨→縛◆≥迨◆ク昂◆縛ア縛阪U縛内ゆ%縛ヨ髦雍↓蛹鈴1上◆闖ツ
蛹礼オ悟霧縲ヨ蝓コ遼弱 r 蝗」縲、「※縛◆¥ 縗上 C 縛ア縛内よ入鍋一狸「莠コ縛ヨ睢I譚上◆蜊泌鴨縗よセ励※
縛◆¥ 縲るヨヨ蜊台コ縛ヨ謾-縲ツ縛励 I 縲フ縛◆U縛内。縗峨:シ「豌第酪縛ヨ睢I譚上◆蜊泌鴨縗後↑縛代 I 縛-
荳1蝗入縛ヨ謾シ驟阪◆縲ア縛阪↑縛◆◆縲ア縛内リ庄蜊励↓驟◆E 縲壹↓蛹鈴K 縲オ縲イ縲ウ縛セ縲」縲フ縛◆◆睢I
譚丞兇蜉帙 b 黢鍋一縛◆◆縲ヨ縛ア縛内よ圈鬲上◆迨◆ク晏ヨガ縗よシ「莠コ縲イ縛ヨ邨舌◆縲、縲阪 r 蠻キ縲、「k 縲溢
a 縲オ狸「莠コ睢I譚上→蟀壺サ鼈「董ゆ r 郊舌 s 縲ア縛◆" 縲セ縛内

◆秘「乘刹剎怜圈譜暁函莉」縛謾ソ豊サ

縲縳鬲乘刹蜊怜圜譖𠵼函莉」縲帝壹 § 縢ヲ縢◆m縢◆m縢I莠俱ㄌ縢後≠縢九◆縢ヲ縢呐' 縢✓匚縢雍↑縢才
縢◆ヨ縢ゆ入輔' 縢雍◆譖ゆサ」縢ヨ謾り豊サ縢ヨ縢◆◆縢械↓縢I縢」縢ヲ縢◆◆縢ヨ縢九□縢代 r 隕九※縢翫" 縢セ
縢励 g 縢◆

繰縲縛^イ縫^イ縫、縛^ツ蟲^{ムカシ}溷^ミ憮^ミ縛^ア縛^ア呴^ア譏^ア譏^ア上^ハ 縷^ス翫^ス b 蟒^{ヘビ}◆> 霽^イ蟲^{ムカシ}- 縷^ス堤^ミ峩^ミ誇^ス・ 途^ク◆^ク昂^ク◆謾^ク驟^ス堺^ク九^ク↓ 縷^ス翫^ス ¥ 縷^ス
雍[→]繰^スゆ ◎ 縛^ツ◆☆ 縷^ス後^ク◆ 繰^ス∞ 腰^ス邏^ス斐^ス↓ 眚^イ譏^ア譏^ア上^ハ 縷^ス翫^ス b 蠕^ス◆縛^ス上^ハ↑ 縷^ス後^ク k 繰

縲縢¹・縺懊[↑]・縲峨[◆]・縲[✓]・○縲雍^干・闌¹・菴操^{セイ}・豌代^ル・鬨^イ・謁舌^ア・○縲^ヲ・邁^ニ・遯^イ・弱^ル・○蠕¹・蜿弱[☆]・縲九^ユ & 縲峨[↓]・闌¹・菴操^{セイ}・豌代^ル・蠕¹・逋^コ・縲励[※]・蝦^オ・螢^オ・縲^ヲ・縲呐^ル・○縲^ユ・○縲[◆]・%・縲^イ・縲檜^ニ・鳴^リ・昂^リ・↓・縲^イ・縲[」]・縲^ヲ・豌^ヲ・間^ス・縲^ヲ・縲^イ・縲九[。]
縲峨^干・縲呐^ル・○縲[◆]・☆・縲後[◆]・睢¹・譖上^リ・鬆^シ・縲峨[↑]・縲^ヲ・サ^ル・塙[】]・句^ク・鴨^{タカ}・鶴梧^ク・亥^ハ・済透^リ・縲呈^{タケ}・戟^リ・縲雍[→]・縲後^干・縲阪^ル・○縲^ル

縲縢昂◆縲溘 a 縷謾り遲悶' 縲^レ牙寄縲^カ鬲上◆蝮^{アマツチ}逕-蛻^{アヒル}逕・^{アヒル}謠九◆蜩逕-繩^{アシナガワニ}隱^{ヒカク}逕-豕輔^{アシハサウエイ}よ^{ヨリ}頃逕-繩^{アシナガワニ}隱^{ヒカク}逕-豕輔◆睢^{アラシ}譖^{ハラシ}上◆蟲溷^{ムシムダ}慍^{ムカシ}譽^{ムカシ}譖^{ハラシ}峨^{アマツチ} r 蛭^{アヒル}鬚舌@縲^{アシナガワニ}闌^{アラカニ}菴^{アシナガワニ}操^{アシナガワニ}セイ縲^{アシナガワニ}剝^{アシナガワニ}懊^{アシナガワニ} j 蟹^{アシナガワニ}縲^{アシナガワニ}呐◆縲^{アシナガワニ}√◆謾^{アシナガワニ}り遲悶^{アシナガワニ}→縲^{アシナガワニ}◆○縲^{アシナガワニ}後※縲^{アシナガワニ}△U縲^{アシナガワニ}呐' 縲^{アシナガワニ}√￥縲^{アシナガワニ}上@縲^{アシナガワニ}△%縲^{アシナガワニ}縲^{アシナガワニ}上。 縲^{アシナガワニ}翫^{アシナガワニ}△縲^{アシナガワニ}帙 s 縲^{アシナガワニ}

縲縢輔 i 縢オ縢羅◆謾リ遅悶◆豎コ蝗夕沿縢悟圈鬲上◆蝮◆伐蛻ガ縢ヲ縢呐よ「咲枚螺昂◆謫ゆサ」縢オ縢ツ縢空ウ縢
翫ウ縢励◆縲ゆ%縢後 b 閨I菴操セイ豌代 r 閨イ謗舌☆縢俱サ慕オ◆△縢縢ゆ%縢後◆蝗入蝗カ縢御コ豌代↓蟲溷慍
縢呈髮邨ヲ縢呐 k 縢ヨ縢ヲ縢呐ゆコ豌代◆蟲溷慍縢呈髮邨ヲ縢輔 I 縢ヲ閨I菴操セイ縢オ縢工縢九%縢ノ縢後テ縢阪 k
縲ゆ○縢ヨ縢九○縢翫✓。 縢後 i 縢ヲ蝗入蝗カ縢オ蔓セ縢励※遭溷コク隠シ◆医○縢医ニ縢。 縢◆ニ◆峨→縢◆ニ遭
淳イ弱 r 邏阪 a 縲∞◆蠽ケ縢ヨ鄒ウ蜍呐 b 謳懊◆縢呐%縢イ縢オ縢工縢翫ウ縢呐

縲縢薙！縢^タ縢医▲縢^タ蛹鈴^カ上◆蝶^タ蜉帙^カ下 縢^タ縢^タ縢溢→縢^タゆ>縢医^カ 縢^タぬ^タ% 縢^タ蝮^カ◆伐蛻^カ縢^タ蛹鈴^カ上↓
縢^タ、縢^タ・縢^タ冗視譜昂^カ 縢^タよシ輔^カ”邯^タ呐^カ” 縢^タ後^カ 縢^タ励^カ◆縢^タよ圈蜻^カ 縢^タ堤加呐^カ> 縢^タ荳^カ 蝙^カ縢^タ貞^カ◆邨^カ荳^カ縢^タ励^カ◆髣^タ
九^カ◆嚙^タ縢^タ莉^カ 縢^タ上▲縢^タ溷柏^カ 縢^タよ插逕-蛻^カ縢^タ翫^カ% 縢^タ縢^タ上！ 縢^タセ縢^タ励^カ◆縢^タ

繅蜚舌◆譜ゆサ」縛オ譜・譜ヤ縛九イ驕」蜚蝉ソ縛後>縛上る▲蜚蝉ソ縛後%縛ヨ蝮◆伐蛻ガ縛呈律譜ヤ縛オ貞昂:縛セ縛励◆繅 ゆ %縛後' 迴ヨ逕-蜿取肢豕輔→縛◆ニ巻榦燕縛ア譜・譜ヤ縛ア縛ヨニ淳命縛輔! 縛溢○縛代ニ縛呐

繻繻迨◆ク咲イク蜉帛汱悶◆縗ゆニ縛イ縛イ縛、縛ニ隱ニ鬢後' 蟑併◆縛ニ通サ逕ニ縛カ縛叫

縲縛盃□縲勦ア譯擾シ晁仁譯上◆縲。縲御ケ晏刀螳倅コノ豕輔↓縲医▲縲ア蝗入螳カ縲ヨ鱗丞◆縲ヨ壹ヨ縲オ菴咲入ヨ
縲・縲代イ縲後◆縲イ縲◆≥譯丞袖縲イ縲キ▲縲盃◆縲ア縲呐ヨ寄螳カ縲ヨ蟄倅惠縲イ辟。髪「董キ↓雋I譯上」蟄倅
惠縲ア縲阪◆縲ヨ縲ア縲ツ縲I縲上○寄螳カ縲◆鳴螳咲イクズ帙↓縲医▲縲ア闇空>螳カ晝シ縲オ網ウ縲ウ縲ツ縲輔I縲
九%縲イ縲貞。縲後I縲ツ諧帙ノ縲セ縲勦◆縲キ○縲◆>縲◆セ縲ア縲ツ葱晏刀壹ヨ鰐」豕輔◆睢I譯上 r 蝗入螳カ
讓ウクズ帙↓蜿悶j 霽シ縲雍□縲イ縲◆∴縲九ニ縲勦g 縲◆

繻葱晏刀荳₁豁「豕輔◆鬲乘刹蜊怜圈譖暎幽莉」縛₃蜷◆視譖昂干謗。逕₄縛輔₁ 縛₂縛励◆繻ゆ←縛₃遁区憇縻ゆ
↑縻雍→縛玖₄ 謗擾₅晁仁謗丞兇蜉帙 r 蝴₆蝶₇讓₈蜉帙↓蜿悶 j 霽₉縻ゆ₁₀≥縛₄縛励◆縛₃縛₂縛₁呴₁₁

縲蝗入蟻が讓り蜉帙' 眇_I譌上→縛_{II}辟。邵_V「◆蟻侔◆縷堤廢逕_I縛_{II}縛阪 k 縷医_{III}≥縛_{IV}縛_V縷九◆縛_{VI}縛輔 i 縷_{IV}縛_Vゆ→縛_{VI}鬚九∞柏縛_{VI}譌_Vサ」縛_{IV}縛_V縛」縛_{II}縛九 i 縷_{II}縛吶

◆暮乘刹蜊怜圈譖暎幽莉」縛譁？喧

繅繅縛薙◆譜ゆサ」縛譁◆喧縛謚◆>譽九◆雋I譯上テ縛吶ゆサ」縲◆▽縛・縛剣アI譯上 r 雋I譯上→縛◆▲縛
ヲ縗医>縲ゆ→縛上↓闖ツ蛹励◆譜フ葱ア縗帝◆| 縛ヲ蜊玲媚縛オ騒◆| 縛ヲ縛阪◆雋I譯上◆縛。縛オ縗医▲縛ヲ譜
千◆縛励◆雋I譯乘枚蛹悶' 逋口驕斐@縛セ縛吶ゆク蝗入蜊鈴 K 縛ヲ邇区惱縛ア逋口蝶輔@縛溘◆縛ア蝶1諧哲シ吉 j
縛上■縗◆≥◆画枚蛹悶→蜻沙縛-縗後 k 縛薙→縛悟、壹>縲ゆ%縛モ隣イ迴セ縛シ隕壹.: 縛ヲ縛翫￥縛薙→縲

繩蠣梧シ「縛ヨ譜オ縛九 i 離イ譲シ晁仁譲上◆縛。縛ヨ縛キ>縛縛ア騒ケ豌醍噪縛イ髮-蝗イ豌励' 縛ツ縛◆▲縛滻→
縛◆>縛セ縛励◆縛キ<-縛阪<-縛阪@縛淳帆豐サ縛ヨ壹也阜縛九 i 霽オ縛偵◆縛◆※縛○◆蟄ヲ迨◆↑驕灘セ縛
縛イ縛峨○縛後★邊セ逾檻噪縛イ闌イ逕ア縛貞ヨ医m縛◆→縛◆≥鬚イ貌ヨ縛ア縛呐キセ九◆隠ケ闌帑ヨ縛よ渴蛇呐↓
蝶輔▲縛ア縛雁◆縛輔 i 縛九 U 縛ア縛ツ逕-闊弱↓縛雍 b 縛」縛ヲ縛◆◆縛上 C 縛ア縛、√。 縛後 b 騒ケ豌醍噪縛I逕
滻" 謹ケ縛偵@縛ヲ縛◆◆縛雍元縛励 g 縛◆

繩縛昂 \geq 綻 \diamond \geq 譁丞袖綻 \wedge 繩 $\sqrt{梧}$ \diamond \diamond 阪 \downarrow 綻 \diamond 蝗入螳力綻九 i 蝉雁 \diamond 綻昂▲綻入纏貞髓綻 \diamond ※綻 \diamond k 蟻捺幽綻 \exists 雋I譁擾シ罪 \wedge I譁上 \diamond 逕溢” 譁 \diamond 綻後 h 經丞 \diamond 經 \diamond 經 \diamond k 經 \diamond 譁昂 \geq 繩

縲雋I諺城嚴邏壹↓縲^シ鰐サ阮ヤ縲^シゅ◆▲縲溢◆縲^シア縲^シ呐 h 縲^シゆコ皮夾謨」◆医#縲帙” 縲輔 s ◆峨→縲◆≥鰐サ阮ヤ縲貞茜逕イ縲励※縲◆ k 險倅コ九’ 蟻壹￥縲^シゅ j 縲^シセ縲^シ呐^シ d 縲^シ覩☆縲弱※豁サ縲蘿^シテ縲励U縲」縲混コ縲^シゅ。 縲I縲覩>縲溢^シウ縲溢>縲リ仁諺上◆縲^シオ縲^シア縲^シ鰐サ阮ヤ縲^シア鬚加驟斐@縲I縲後 i 縲^シ：才縲堺ク夜屬縲後@縲溷憧蟄^シシ尙悶 r 謗^シ縲上○縲句I縲^シア縲^シゅ▲縲溢◆縲^シア縲^シ呐

繩繩莉」隣「溢◆↑譁◆喧蕩」綻「菴懷刀縷定」九※綻◆」綻也綻呐

縲髪が貌懶シ医→縲◆○縲難シ峨リウカ莠コ縲ア縲呐るヒ豺オ譏趣シ医→縲◆∴縲雍 a 縲◆シ峨→縲ゆ>縲◆よ擲謫九◆莠コ縲

縲隙晞恵驕具シ医@縷◆！縢◆≥縲難シ峨よ漉譖晏ヨ九◆莠コ縲リウカ莠コ縢ア縢呐リカク猪√◆蜷埼摩雋I諭上テ
縲ゆ≠縲翫U縢励◆縲

繩螳併◆縫偵 d 縛」縛ヲ縛◆ k 縷雍□縛代 i 縛ウ縲∞ご諷「縛工諤ア譬シ縛縛」縛溢◆縛ア蟾ヲ驕ヰ縛輔 i 縛ヲ逕-闊弱
↓ 髮帙◆縛輔 i 縛溢ゆ ◎縛雍 ネ弱@縛◆◆辟カ縛オ蠢◆ r 逋偵 & 縷後※縲∞アア豌工隧シ縲呈鳶縛阪 U 縛励◆縲
縲闇 I 辟カ縛シ髪イ諷シ縛ヨ荳 I 縛シ闇 I 蜗◆◆邊セ逾械 r 縛シ縛題セシ縛セ縛帙※螳峨 i 縛弱 r 蠕励 k 縲✓→縛◆≥譁溯
ヨ壹ゆ o 縛力 k 縛シ縛励 a 縲

繩莉哈口繩火繩漆火繩+繩火繩彈火繩火繩代三繩火繩

繹譏₁譏主、₁蟄舌よ漉諧咲「√◆邇句₁舌よ又菴阪○縺壹↓豁サ縺雍₁縺勵₁U縺◆U縺呐’ 縺ゆ%縺₁莠₁縺檜ヰ
髪◆@縺湊₁悽縺後梧枚驕ケ◆医₁縺雍●縺難シ岐阪

縲蜿、莉翫◆蜷着枚縷帝寔縷、◆縷ゆ◆縺ア縲ア「仁讞上◆縺。縺梧枚遶縷呈鳶縺上→縺阪↓蜿り◆↓縺励◆縷ゆ◆縺ア縺呐よ律譜ヤ縺オ縷リシ蝶・縺輔！縺ヲ螂郁憶繩サ蠟ウ螳峨◆雋I讞上◆縺。縺梧シ「譁◆r譜ク縺上→縺阪◆賽区悽縺、縺励◆縺ア縺ア讞、譜ヤ縺ア縷よ快蜷阪、縺呐

縲邇狗セイ葱具シ医辛縺◆℃縲曆シ峨よ擲譜九◆莠コ縲ゆ%縺ヨ莠コ縲よ錐髪雋I譜上よ錐蠶阪◆縲檜セイ縲阪→
縺◆≥蟄励◆豕イ譚上@縺ヲ縺上□縺輔>縲らやウ鯨吶◆鄒ウ縺イ縺ヲ驕輔≥蟄励テ縺吶h縲よ鳶閨悶→蜻シ縺-縲
後k譜ク驕雍◆蟾堺コ縺ア縺吶ゆ→縺◆≥縲医 j 縺ゆ「」→蠅イ縲荆ソ縺」縺ヲ譜ク縺上→縺◆≥隣檜ゼ縲定敢
隣雍↓縺励◆莠コ縺イ縺◆▲縺滓婿縺後>縺◆テ縺吶◆縲

繻莉」隣イ菴懊' 繻瑚事莠」蟬擾シ医 i 縷薙※縺◆ s 縷◆シ峨阪よ錐髪雋I譖上◆縺。◆費シ先焚莠」縺瑚事莠」縺イ
縺◆三鬚イ蜈画◆蝶壹↑蝶I晝縺オ髪◆U縺」縺ヲ螳I貞壹 r 縺勵◆縺ゆ>縺九↓縺ゆ梧ケオ◆咲噪縺I髪-蝗I豌
勵◆髪◆U縺覩干縺呐ゆ△縺薙↑縺ア菴懊▲縺溯ウ縺帝寔縺✓◆縺ゆ◆縺オ邇狗セイ葱九' 蟬乘枚縺呈鳶縺◆◆
縺ゆ%縺後' 繻瑚事莠」蟬上阪よ q 菴懊□縺」縺溢 i 縺勵>縺薙干縺呐' 縺✓◆縺。縺ヲ譖ゆサ」縺∞柏縺」螟I螳
勵→縺◆三溢◆ク昂' 閨I蛻◆◆蠅薙↓荳邱偵↓蝓九 a 縺ヲ縺勵U縺」縺溢ゆ□縺九 i 螳溽黃縺ツ縺ゆ j 縺セ縺帙
s 縺

繩縛昂◆莉悶◆菴懷刀縷ゆ「視鄒葱区悽莠」縛梧鳶縛◆達淳1◆◆菴昂○縷」縛ヲ縛◆U縛帙 s 繩ら樟蟲/繩

✓ ○ 繼溢@綱溢■綱瑚○九※綱◆ k 繼ヨ綱ツ闇イ譜ケ◆ 医 j 縷雍@縷◆シ峨→綱◆▲綱ヲ繩✓◆綱。綱ヨ譜ケサ」綱ヨ巻
堺□綱梧鳶綱榊◆綱励◆縷ゆ◆綱ア綱呐
繩邁✓◆オ淑。譜ケサ」闇イ隣馴ニ謚械◆譜ケ驕雍ニ綱励◆繩らせ手。雍 r 駕ケ謚械@綱溢 s 繼ア綱呐' 繩✓←綱◆>
綱◆○綱代。譜ケ驕雍↓綱輔 I 綱ヲ綱励ウ綱」綱溢よ鳶驕雍◆謨咏ア第鳶綱オ綱ヲ邁狗セイ葱九◆闇イ譜ケ綱後ニ綱
綱ヲ綱雍 I 縷呈鳶綱阪U綱上▲綱ヲ綱◆U綱励◆繩系シ托シ厄シ撰シ仙ケI蠕後◆闇淑。逕溢↓縷よ入ヘ縷削ケ弱.:
綱ヲ綱◆ k 菴コ綱ア綱呐↑繩

繩鬱ア譜ケ葱具シ医%綱後>綱暦シ峨ゆ%綱ヨ薺リ仁謚上ニ綱呐' 隅晞咲驕九d邁狗セイ葱九ニ綱ウ荳猪✓ニ綱ツ
綱ゆ j 縷セ綱帙 s 繩よ入ヘ薺コ綱イ綱励※縷ゆ◆綱」綱イ綱励U綱帙 s 縷後J判螳ガ綱イ綱励※譜牙錐綱繩リv蜒冗
判綱悟セ玲 e 縷ア綱励◆繩ゆサ」隣イ菴懊悟・ウ蜿イ遡I蝗ケ◆医 S 縷◆@綱励 s 縷本シ峨阪リウ◆併髪◆↓綱ゆ j 縷セ
綱呐◆繩リ仁謚丞・ウ謂ア綱ヨ謚・蝗ケ逕津Iサ縷呈緒綱◆※綱◆U綱呐

繩縷上◆綱励' 隆九※縷ゆ✓%綱ヨ郵才綱ヨ闇イ隣鍋噪萱。蛟、綱ツ縷医￥縷上。縷斷U綱帙 s 繩
繩綱溢□繩∞ス捺函綱ヨ雋I謚上◆綱。綱ヨ證ヨ縷峨@綱後○綱九▲綱ヲ髪「通ス綱◆ゆ◆綱イ綱医◆繩✓%綱後◆雋
I謚上◆蟀ヲ薺コ綱悟小菴ソ綱◆↓闇I縷偵→綱九○綱ヲ綱◆ k 縷ヨ綱ア綱呐' 繩∞スシ螂ウ綱ヨ蟹阪↓蜀◆屹綱梧寺綱
代※綱ゆ k 繩ゆ%綱後✓↑縷雍□綱九○綱九 j 縷セ綱呐。繩
繩屬◆升綱ア綱呐

繩謚・譜ヤ蛻怜カ綱ア綱ツ蜿、蠅ウ綱九 I 綱空 c 綱九 S 縷◆。蜃I蟲溢@綱セ綱呐よヨ玲路迢◆↑蜻I蜉帙 r 謾✓▽
縷ゆ◆綱イ綱励※蠅九 a 綱ヲ綱励U綱◆◆綱ア綱呐' 繩✓%綱後' 譜ヤ譜・綱ヨ菴ソ綱◆媚繩ゆクI蝗ス綱ア綱ツ體。綱イ
綱励※綱。縷◆ s 縷イ菴ソ綱」綱ヲ綱◆ k 繩

繩綱昂 I 綱九 I 繩∞スシ螂ウ綱悟コア綱」綱ヲ綱◆ k 縷ヨ綱ツ綱I縷雍ニ綱呐。繩ゆ%綱後J糞綱ア綱呐◆繩る K 蟻
九◆蟻イ髪「綱オ遂ウ縷呈聞縫崎ウ-縷✓ k 縷ヨ綱ア綱ツ綱I綱上※繩II◆蛻◆' 蟒ア縷九→綱雍m綱オ綱綱代◆繩ウ綱イ
遂ウ縷堤入ヨ綱◆※綱◆ k 繩

繩綱雍 I 綱後○綱ヨ綱セ綱セ謚・譜ヤ綱オ貞昂 o 縷九ら卒薺コ荳門閥◆郵才繩ゆニ綱ヨ蟻ウ迢◆ d 雋I謚上◆蟻ア縷頑媚
綱セ綱セ綱」綱溢￥蟻後 S 縷I縷雍ニ綱呐 h 繩

繩謚・譜ヤ綱ア綱ツ遂ウ綱ツ綱ウ縷雍←縷捺勸蛻翫@綱ヲ繩◆ K 蟻句◆菴雍↓謨#綱上 h 縷◆↓綱I綱」綱ヲ迴セ蟲イ綱
闇ウ縷九ゆケ譜ケ繩: 惟螳ガ綱ヨ荳I蝗ス綱ア綱ツ蜚舌◆譜ケサ」綱上 I 縷◆。縷峨:、◆舌→繩◆◆繩悶 N 縷ヨ證ヨ縷
峨@綱御ケ闇ヤ迢◆↓綱I綱」綱ヲ綱阪※繩 J 樟蟲イ綱ア綱ツ遂ウ縷ウ菴ソ綱」綱ヲ綱◆ U綱帙 s 繩

繩繩悟商綱◆函莉」綱ヨ譜◆喧綱ツ繩IIセコ蠅◆慍蠅溢↓谿九 k 繩阪→綱◆≥譜◆喧貞晞#綱ヨ蟻溷援綱後ニ縷九
s 縷ア綱呐' 繩✓○綱ヨ螳混セ九□綱I繩ゆ%綱ヨ蟻I蟻医IIセコ蠅◆→綱ツ謚・譜ヤ綱ヨ縷雍→綱I繩

繩郵才逕サ雉◆併綱イ綱励※鬱ア譜ケ葱九◆郵才綱ツ髪「通ス綱◆ニ綱呐

繩莉・荳翫' 闇ツ蜊励◆雋I謚乘枚蛹悶∞◆譜暎枚蛹悶◆莉」隣イ閨◆◆綱。綱ア綱呐

繩繩闇ツ蛹励ニ綱ツ繩∞碑 I 邊サ郵ア綱ヨ邁区惣綱後▽綱・綱上◆綱ア綱ツ庄縷◆。綱I雋I謚乘枚蛹悶◆逕溢U
縷後U綱帙 s 縷後∞ヨ淳畠迢◆↑譜ケ逆ウ綱梧鳶綱九 I 綱セ綱励◆繩

繩繩梧哩豌題II。難シ医○綱◆U縷雍 h 縷◆ S 縷◆▽◆峨阪◆雲イ讌I謚I謚捺鳶縷

繩縲梧-I 邮梧ウイ◆医☆縺◆C 縫◆■縷◆≥◆峨阪◆蟲-遁◆鳶縺イ縺◆≥縺雍→縺ア謨咏ア第鳶縺オ縺ツ縺ア縺ヲ
縺◆U 縫呐ゆク 蝙入蝗入蜀◆↓猪√ I 縷区イ蟾眺イ縺◆◆鬚イ董励：I 蜗イ縺I 縺ウ縺呈鳶縺◆◆縷ゆ◆縺ア縺○C
匂I 縷◆I 追ウ縺ヨヨ 涵惠縺I 縻「縺弱→縺励※縺I 縺I 縺上 k 縺I 縺I 縺呐ヨヨ 混烟溢◆↑譜ク追ウ縺I 縺ツ縺代@驕輔
≥譚溢 S 繩

繩縲茅碑「蜊○◆蝗入縺ヨ謨ツ驟崎◆丁縺ゆ k 蟠玲媚縺I・ソ譜ケ縺ヨ豌第酩縺ツ莉乘路縺刺リ晁」+縺励U 縫呐ヨ魚
縺九 I 縺I 險ツ蠅溢。縺我サ丞 I 縺梧。譚・縺励U 縫呐

繩莉丞峙貌◆シ医◆縺」縺I 縺。縺◆≥縺√ ケ縺蛾メ縺ウ縺ヤ◆会シ茨シ溢懶シ難シ費シ假シ峨◆ウク鞠ウ鄒◆サ◆医￥縺セ
縺蛾 S 縺◆√ ケ縺械◆縺ウ縺ケ縺シ縺I 縺。◆会シ茨シ難シ費シ斐懶シ費シ托シ難シ峨' 譜牙錐縺

繩莉丞峙貌◆◆繩○ク 蟠I 縺「縺ウ縺「縺ヨ茅諷茨シ医け縺√ E ◆峨→縺◆≥驛入蝗よ寄螳カ蜃」霄I 縺I 縺呐ら化蜉
帷噪縺オ荳I 蝗入縺ア莉乘路縺貞ク 路縺励U 縺励◆繩

繩魑ウ鞠ウ鄒◆サ縺ツ縺 I 宛隕I 縺後う縺ウ縺我コ縺：I 崎コ縺御コ諷医◆邇句・ウ縺I 縺◆≥茅コ縺ゆう縺ウ縺臥路蟄
縺ゆ@縺混ク猪√ ◆莉乘路蜓ア縺ア縺励◆繩ゆコ碑「蜊○◆蝗入謡ウサ」縺オ荳I 蝗入縺オ貂。縺頑コサ霄阪☆縺九◆縺
縺呐' 繩√ %縺ヨ茅コ縺ツ莉丞◆縺ヨ鄒サ險ウ縺ア譜牙錐縺I 縺呐

繩縺顔才後◆縺、縺ウ縺蛾◆縺ウ縺ウ縺ケ縺I 縺◆ヨ隱械丁譜ク縺九 I 縺I 縺◆k 繩ゆ%縺後丁縺ツ荳I 蝗入茅コ縺
縺I 縺上。縺斃U 縺帙 S 縺九 I 荳I 蝗入隱械↓鄒サ險ウ縺励↑縺代 I 縺-縺I 縺蛾↑縺◆るウク鞠ウ鄒◆サ縺ツ縺昂 I 縺
偵@縺溢よ、ア螟蛾□縺」縺溢→譯昂≥縺医

繩謗・譜ヤ縺御サ乘路縺定シ螟・縺励◆縺I 縺阪↓縺：律譜ヤ隱權ウ縺偵@縺I 縺◆↑縺◆ラ樟蟲I 縺ア縺リ速蝶上
d 家穂I 九丁縺雁搖縺輔 S 縺瑚I 縺縺顔才後◆狸「險ウ莉丞◆縺ア縺呐ゆ△縺セ縺斃：律譜ヤ縺オ縺ツ魑ウ鞠ウ鄒◆サ
縺ツ縺ゆ I 縺上 I 縺I 縺九▲縺溢◆縺ア縺呐◆繩ゆク 蝗入縺御サ乘路縺貞女縺大◆縺後 k 縺I 縺阪◆縺医≥縺I 蟒
虫帙 r 謗・譜ヤ縺ツ縺励※縺◆↑縺九▲縺溢→縺◆≥縺雍→縺九 b 縺励 I 縺セ縺帙 S 繩

繩縲莉乘路驕コ霍。縺ツ蛹鈴I 乘函莉」縺ヨ遏ウ遜涵ツコ鬚「縺定ヲ壹：縺九る峠蟠曆シ医≥縺雍%縺◆シ峨 I オ尙
摩◆医 j 縺◆≥縺ゆ S ◆峨◆茅悟区園縺I 縺呐

繩髮I 蟠励◆蛻眺I 縺入蠅ウ蠅手ソ鷹リ縺 I オ尙摩縺ツ蠕梧悄縺I 縺入參幃區縺ヨ霧鷹リ縺オ騒縺蛾 I 縺涵ツコ鬚
「縺ア縺呐' 繩√ →縺ゆ↓蟻ウ螢√ ↓騒縺蛾 I 縺涵キイ螟ア遏ウ莉上丁譜牙錐縺ア縺呐らオ尙摩縺ツ參幃區縺オ霧代>
縺ヨ縺ア隕ウ螟蛾さ縺シ縺ケ縺ア縺ゆ≠縺斃U 縺呐らア√ b 縺◆" 縺セ縺励◆繩ゆ%縺雍↓縺ツ蛹鈴I 乘函莉」縺九
i ◆抵シ蝉ク也I 縺セ縺ア縺壹▲縺I 遏ウ莉上' 謗空 I 縺後△縺・縺代※縺◆※繩：侍縺蛾 I 縺涵キI 莉」縺定ヲ九※
縺◆￥縺縺代丁縺る擇通I 縺◆

繩蜚舌◆謡ウサ」縺：律譜ヤ縺九 I 驕」蜚蝉ア縺後>縺上丁縺励 g 繩ゆサ乘路縺貞ユ縺ガ縺溢 a 縺ヨ蟻I 遷溢 b 蜈
壹。縺」縺溢ゆ丁縺：律譜ヤ縺九 I 譚・縺涵コI 遷溢◆縺。縺ツ螟壹◆縺雍◆遼尙摩縺ツ螟ア莉上 r 隕九◆縺ア縺I 謗昂
≥縺雍丁縺呐よI 幊區縺ヨ縺呐 S 霧代￥縺ア縺呐。縺蛾◆繩ゆ。縺後 I 縺ツ縺昂◆縺ケ縺ア縺シ縺オ縺ヨ螟ア縺阪&縺
ツ縺ア縺I 開昂 r 謗懊。縺後◆縺ア驕輔>縺I 縺◆ゆ○縺励※繩√ 丁縺阪◆縺ヨ縺瑚*豁ウ螟ウ溢◆◆縺I 縺阪◆螂郁憶縺ヨ螟ア莉上□縺√ →達
✓◆謡ウ蜓上☆縺九◆縺ア縺呐

繩遼尙摩縺ツ螟ア莉上→螂郁憶縺ヨ螟ア莉上✓ ←縺雍→縺I 縺丈入灘榔縺I。」厥◆◆髮-蝗I 豌励' 莱シ縺ツ縺◆k
縺ア縺励 g 繩よ醉縺空N 縺シ縺」縺賈サ上丁縺ゆ≠縺九

縲縈、縯ウ縯峨テ逕溢シ縁後◆莉乘路縺後ギ縲ウ縯縲シ縲ウ縺ア縲ヨ縲I縲シ縲「譁◆◆縺イ陞榦粂縺励※莉丞ワ縲堤
函縺シ縲シク」蝗ス縺オ貞昴○縲雁圈隔上テ驛縲峨I縺溷、ア莉上'蜚舌◆譁ウサ」縺オ譁・譜ヤ縺オ蠅ア髪シ縲剃ケ弱、螂
郁憶縺シ蝶ア莉上↓縺I縺」縺溢シ○縺◆>縺◆>蜻ウ縺ア縲、「U縺輔@縺乘律譜ヤ縺シ譁◆喧貞暎成縺ヨ邸ラ振
鬧◆↑縺シ縺ア縺呐

繩莉雁ケイ◆茨シ托シ申シ吝ケイ◆画」蛟蛾劫蠻輔↓縛◆▲縛ヲ譚・縛セ縛励◆繩らヰ題牡縛ヰ螟ヰ縛上※長ヰ
縛◆ク◆' 蠻慕、コ縛輔 | 縛ヲ縛◆U縛励◆繩
繩◆暦シ包シ貞ケイ縛ヰ螟ヰ莉上◆髪狗愍萱幃、賡シ壹' 縛翫%縛I縛上 | 縛九◆縛ヲ縛呐' 繩、「う縛ウ縛我コ縛ヰ蜒
闖ウ縛仙嵯驍」(縛シ縛縛◆○縛雍↑)縛イ縛◆≥莠口縛悟、ア莉上◆透ヨ縛ヰ蠻、縛貞◆縛後U縛呐ゆう縛ウ縛峨◆蝮
&縛雍 r 縛医 s 縛ア縛◆ k 縛雍 T 縛呐 h 繩リ娼縛仙嵯驍」縛シ莠口髪雍◆閻輔 \$ 縛峨>縛ヲ縛ア縛」縛九>遲◆ r
菴ソ縛」縛ヲ透ヨ縛貞◆縛後 k 縛ヨ縛ヲ縛呐' 繩、「%縛ヨ遲◆↓邵◆' 縛、縛代 i 縛後※縛◆ k 縛ヨ縛ヲ縛呐
ク◆' 縛ウ縛雍←縛捺控蛻◆。縛後@縛ヲ縛◆※繩シク九◆譁ケ縛九 i 髪狗愍蝶上 r 隕九※縛◆ k 蟒壹￥縛ヨ雋I
諭上◆縛。縛後○縛ヨ邏舌◆遼シ縛呈升縛」縛ヲ縛◆◆縛昴≥縛ヲ縛呐よ粥蠻ウ縛御シ昂 o 縛九 h 縛◆↓縛I縛
繩蠻慕、コ縛輔 | 縛ヲ縛◆◆縛ヨ縛昴◆荳遂I螟ヰ縛◆ク◆よ入捺幽縛ヨ莠口縛ヨ鬟空>縛御シ昂 o 縛」縛ヲ縛上 k 縛
医≥縛I縛雍≥縛◆≥螟冗黃縛ヰ邨先ノ区—鰐輔@縛セ縛励◆繩

繩螳玲落縛◆縛^シ驕捺落縛^シ檜「口達九」匱^シ謗輔@縛溢◆縛^シよ圈隔上◆謗^シゆサ」縛^シ縛^シ呴^シよツ◆ヤ吩咐具^シ医%縛◆^シ縛^シ雍^シ雜@◆会^シ茨^シ難^シ厄^シ輔^シ懶^シ費^シ費^シ假^シ峨^シ」 駕捺落縛^シ剃入鍋^シ蛹悶^シ@縛^シ蛹鈴^シ上◆董^シ晁^シ縛^シ貞女縛^シ代^シ※通^シ謗輔@縛^シ縛^シ勵^シ◆繩

蜿り◆崎譜ク邏ヶ莉 緺サ緼サ緼サ緼サ縕 ゆゝ蟆代@隧ウ縕励￥遏・縕斎◆縕◆→縕阪◆

譜ヶ巻坂 r 縷^タ縑^タ縑^タ◆け縛^タ吶 k 縷^タ縑^タ√う縑^タ縑^タ縑^タ阪ヤ縑^タ域^タ鳶^タ躰^タ励^タ後^タい縑^タ械^タだ縑^タ縑^タ阪◆縑^タ壹^タ◆縑^タ縛^タオ^タ
帙 s 縷^タ縑^タ：悽^タ縛^タ◆縑^タ◆◆縑^タ縑^タ：鳶^タ隧^タ輔^タ↑ 縷^タ縑^タ定^タ九 k 縷^タ縑^タ→ 縷^タ後^タテ 縷^タ阪^タ↑ 縷^タ吶^タリウ^タ蜈^タ・縑^タよ^タ庄^タ閭^タ入^タ縷^タ縛^タ

譜ヶ謫阪 d 達ヶ謫励◆壹◆ウ「縺」縺ウ繻シ入輔 r 隱イ鬢後→縺励※縺◆縺九' 謠上。 縺後※縺翫
j 繻◆撼蠅ウ縺オ蜿リ◆↓縺」縺溢

緺医ヤ緼励◆緼シ縷ク縷ク謌サ縷

蟹阪◆緼壹◆縷ク縷ク

隨ヤ◆難シ大肩縲荳牙峩譜ゆサ」

研。縷ヨ緼壹◆縷ク縷ク

隨ヤ◆難シ灘肩縲髪

縲

□□□□□□□□□

□□□□□□

第33回 隋

隋

長い分裂時代を終わらせて中国を再び統一したのが隋です。隋という国がどうやって登場してきたのか見ておきましょう。

話は北魏にさかのぼります。北魏の孝文帝が漢化政策をおこなった話を前回しました。実はこの漢化政策に不満を持った辺境地域の軍人たちがいて、かれらの反乱によって北魏は東西に分裂しました。この軍人たちは辺境防衛で苦労をともにして強い団結力を持っていました。人種的には鮮卑系などの北方民族と、北方民族化した漢族が渾然一体となっています。

この軍人たちが北魏分裂後の西魏、北周の支配者集団になるのです。かれらは質実剛健な雰囲気を持ち続けます。東魏、北齊政権は南朝の貴族文化に影響されて軟弱化していきますが、北周は地理的な関係もあって南朝の洗練された貴族文化にあまり影響されなかったのです。

隋の建国者は楊堅（ようけん）です。隋の文帝ともいいます。

この人は北周の皇帝の外戚で、北周の皇帝から帝位を譲り受けて隋を建てます。もともと楊堅も北周の皇帝家も北魏時代の軍人仲間のグループなんですね。だから、王朝が隋に代わっても基本的な政策の変更はありません。支配者層の顔ぶれもかわらない。

その後、楊堅の隋は北齊、陳を滅ぼして統一を成し遂げるのです。

楊堅は漢民族といわれていますが、生活文化はかなり北方民族化していたようです。奥さんは独孤（どっこ）氏という鮮卑族の有力貴族出身の人ですね。

隋という統一王朝は、中国が北方民族のエネルギーを吸収消化して生まれたものと考えたらよいと思う。

今まで、中国文化とか漢民族とかいう言葉をあまり説明もせずに使ってきましたが、中国文化というのは常に周辺の民族の文化を取り入れて発展してきたものだし、漢民族というのも、周辺民族を取り込んでその範囲がどんどん広がってきているモノなんですね。

漢帝国が崩壊してから隋の統一までの長い分裂時代に、中国文化は五胡の文化をその中に消化しながら一回り大きくなつたというイメージがあります。

先走りますが、隋がすぐに滅んだあとを継ぐのが唐です。唐はものすごく広い範囲を包み込んで大唐文化圏とでもいうものをつくりあげます。日本からも遣唐使がどんどんいくでしょう。阿倍仲麻呂、聞いたことがありますか。遣唐使で唐にいって、すっかり唐の皇帝に気に入られて向こうで官僚として出世するの。唐というのは、その人間が何民族かなんていうことは全然気にしない国なんですね。

北魏、西魏、北周という流れの中で、いわゆる中国人と北方民族が融合していった、その流れが隋、唐という国的基本的な姿勢にもあらわれていると思います。

隋の政策

隋の政策です。

都は大興城。長安と覚えてもらっても結構です。

土地制度は北魏より引き続いで均田制を採用。

税制は租庸調制。均田制によって国家から土地を支給されている農民を均田農民といいます。均田農民が土地を支給されるかわりに、国家に対して納めるのが租庸調（そようちょう）です。

租は穀物で納める税。庸は労働力で納める税。一年のうち一定期間政府に労働奉仕します。調は各地の特産物などで支払う税。

さらに均田農民には兵役があります。均田農民によって編成される兵制を府兵制といいます。

というわけで、均田制と租庸調制、府兵制はセットで実施されて効果が上がる制度です。これによって、王朝は豪族に頼らずに直接に農民を把握し、軍事力を手に入れることができたわけです。北魏時代から徐々に整備してきた国家制度が隋の時代に実が結んだのですね。

官僚登用制度として絶対に覚えておかなければならぬのが「選挙」。今の選挙とは全然意味が違うからね。これは試験による官僚登用制度です。やがて、この制度が発展してのちの宋の時代に科挙（かきょ）と呼ばれるようになります。隋の時代は選挙で採用される官僚の数はまだ少ないようですが、家柄によらず人物を選ぶ試験を始めたということはすごいことですよ。6世紀のことですからね。20世紀の日本だって試験で国家公務員を採用しているんだからね。同じですよ。

貴族も官僚として活躍していますが、隋の時代からは貴族出身官僚を地方官に任命しなくなっている。地方に地盤を持たせないようにしたのです。貴族は豪族的な面をどんどんなくして、王朝に寄生する存在に近づいていきます。

後漢滅亡後の課題であった皇帝権力の強化はこういう形で実現していくのです。

4世紀におよぶ分裂の間に江南地方、長江南方の地域ですね、ここは南朝によって開発されて農業生産が伸びていきました。隋はここを中国北部に結びつけるために大運河を建設します。南は長江南方の杭州から現在の北京近くまで全長1500キロメートル。

大運河は南北中国の経済の大動脈として以後の社会に欠かせないものとなっていきます。のちの唐の繁栄はこの運河のおかげといつても言っても良いくらいです。

文帝楊堅を継いで隋の二代目の皇帝になったのが煬帝（ようだい）です。この人の名前ですが、日本では読み癖として「ようてい」とせずに「ようだい」と読んでいます。本によっては「ようてい」とふりがなをついているものもありますから、どちらが正しいというものではなくて、伝統なんですね。

煬帝は暴虐な皇帝であるという評価が一般的で、帝という字を「てい」と呼んであげずに、おとしめる意味で「だい」と読むようになっているのです。煬という文字も、非常に縁起の良くない悪い意味の字です。隋に代わった唐にとって煬帝を非難して自らの王朝を正当化する必要もあったのでしょう。

実際の煬帝はそれほど悪い皇帝だったかというと、贅沢三昧をするのが悪いとすれば普通に悪い。南朝ではとんでもない皇帝はいくらもいましたから悪さ加減もそこそこと。

ただ煬帝が人民を徹底的に徴発したのは恨みを買いました。大運河の開削工事で農民を人夫として徴発した。普通土木工事に駆り出されるのは男と決まっているのですが、大運河開削には女性も動員された。これは前代未聞だという。

それから、対外戦争です。高句麗遠征を三回おこない、全て失敗しました。この戦争とその準備で多くの人民が死んでいった。

高句麗は隋の東北方面、現在の朝鮮半島北部から中国東北部にかけて領土を持っていました。煬帝は遠征のための物資をタク郡（現在の北京付近）に集めるのですが、南方から物資を輸送するために黄河からタク郡までの運河を掘らせた。やることが徹底している。土木工事と対外戦争はセットになっているんですね。このような民衆の負担の激増で、各地で農民反乱や有力者の反乱が起きて隋は滅びることになるのです。

高句麗遠征

高句麗遠征の話をしておきます。

南北朝時代、中国の北方で大きな勢力を持っていた遊牧民族が突厥（とっけつ）です。トルコ系の民族で突厥という名はトルコを音訳したものです。この突厥は隋が成立するのと同じ時期に東西に分裂して、東突厥は隋に臣従しました。ところが、高句麗は隋に臣従しない。

それどころか、隋に隠れて突厥に密使を送ったのがバレたりする。そこで、煬帝は高句麗遠征を企てたわけです。

第一回高句麗遠征が612年。110万をこえる隋軍が出動した。攻め込まれる高句麗は必死です。国家の存亡がかかっているからね。この時は、隋軍は無理な作戦がたたって敗北、撤退しました。これは「薩水の戦い」の絵です。領内に深入りした隋軍を高句麗軍が破った戦いを描いたもので、韓国の歴史教科書に載っているものです。現代画ですが兵士たちの装束は古墳の絵などを参考にしています。

韓国や朝鮮民主主義人民共和国いわゆる北朝鮮では隋の侵略を三度も撃退したことは民族の栄光の戦いなんですね。私の高校時代ですが、ラジオを真夜中に聞いていると外国放送が入る。日本向け平壤放送というのがあって、その中の歴史番組で大々的にやっていました。

現在の韓国や北朝鮮の人たちが高句麗人の直系の子孫かどうかは簡単には言えないんですがね。

第二回目の高句麗遠征は613年。この時は後方で物資輸送に当たっていた担当大臣が反乱をおこして撤兵。隋の政権内部の亂れが目立ってきます。また、各地で民衆反乱が起きはじめました。

第三回は614年。この時には、民衆反乱が大規模になっていて、高句麗遠征どころではなくなっていました。高句麗側はそれを見越して形だけの降伏をして、煬帝はそれを機会に撤兵しました。

各地の反乱はますます激しくなって、煬帝は大混乱の中で親衛隊長に殺されて618年に隋は滅びました。

隋の煬帝は倭国との関係で有名なエピソードがありますね。607年、小野妹子が遣隋使として中国に渡った。かれは、国書を煬帝に渡すんですが、その冒頭の文句が「日出（い）づるところの天子、書を日没するところの天子に致（いた）す。つつがなきや・・・」。

これを読んで煬帝は激怒した。もう二度と倭国の使いを俺の前に連れてくるな、と。なぜ怒ったかというと、この文面は中国の皇帝と倭国の王が同格であつかわれているからです。中華的発想では、周辺民族は中国よりもランクが下、中華文明を慕ってやってくるものでなければならない。倭国の手紙はそのような外交的常識から外れたはなはだ無礼なものなんですね。

ところが、怒ったはずの煬帝なんですが、翌年には裴世清（はいせいせい）という使者を倭国に派遣して友好関係を続けているのです。

なぜか。ちょうどこの時期は、高句麗遠征の準備を進めているときです。高句麗、新羅、百濟そして、倭国と東アジア諸国の緊張感が高まっているんですね。隋としては高句麗を孤立させたい。もし倭国との外交関係を切ってしまったら高句麗が倭国と同盟を結ぶかもしれない。そうなったら、外交上も軍事上もややこしいですね。

だから、個人的な怒りとは別に外交上はキッチリと倭国を押さえているわけだ。

問題の国書を出したのは聖徳太子といわれています。聖徳太子はこの文面が隋に対して失礼なものだと知らなかつたのでしょうか。知っていたけどちょっと突っ張ってみたんでしょうか。

聖徳太子の時代、多くの仏僧が朝鮮半島から倭国にわたってきていました。大和朝廷からみれば朝鮮半島は先進地帯です。積極的に仏僧を受け入れていたのでしょう。

そのなかに聖徳太子が師と仰いだ慧慈（えじ）という仏僧がいます。実はこの人、高句麗僧。高句麗から渡ってきている。この慧慈が例の国書を書いたのではないかという説があります。

国書は「日の出づるところ」と倭国のことと書いている。だけど、冷静に考えてみると日本列島に住んでいたわたしたちにとって、ここは「日の出づるところ」ではないね。倭国を「日の出づるところ」と考えるのは、西方から見る視点です。中国を「日没するところ」とするのは同じように中国よりも東方からの視点です。

そう考えしていくと、国書を書いた人物の視点は倭国と隋のあいだにある。そこは高句麗です。

高句麗僧慧慈にとって、倭国と高句麗とが軍事同盟を結ぶことが望ましい。そのためには倭国と隋のあいだ

にトラブルが起きると都合がよいです。聖徳太子の信任を受けた慧慈はそういう下心を持って国書を書いたのではないか。

また、煬帝も倭国の大無礼に対して怒りつつも、倭国を高句麗側に追い込まないように注意している。わずか数行の国書の文面から倭国をも巻き込んだ国際関係が読みとれるなんて面白いですね。

ところで『隋書』という隋の歴史書には608年に倭国におもむいた使節の記録がある。この時に使節は倭国王と、その妃、王子に会ったと記録されている。変でしょ。聖徳太子は王ではありませんね。推古天皇は女性ですよ。一体誰に会ったんだ。正式な隋の外交使節を倭国政府はあざむいて聖徳太子を王と紹介したのでしょうか。また、この時に帰国した小野妹子は隋の国書を途中で紛失した、ということになっている。このあたりの倭国の記録には腑に落ちないことが多いです。

7世紀初頭の東アジア

東アジアの諸国を整理しておきましょう。

高句麗は紀元前1世紀後半に鴨緑江という川の流域で成立した国です。ツングース系扶余族の国家。この国が飛躍的に領土を拡大したのが広開土王（位391～412）の時代。この王の業績を記念して立てられた石碑が「広開土王碑」。この碑文には倭の記事も出てくるのですが、読み方に関していろいろな説があるのと、碑文そのものの改竄（かいざん）説があって問題の多い石碑です。が、有名なものなので名前だけは知っておいてください。5世紀初頭の東アジア諸民族の貴重な資料です。中華人民共和国吉林省集安に建っています。

高句麗は隋の攻撃には耐え抜いたのですが、結局、次の唐によって滅ぼされました（668年）。

このとき唐とともに高句麗を攻撃したのが新羅（しらぎ、しんら）です。

4世紀後半に朝鮮半島の東南に成立した国です。高句麗と百済に圧迫されていた新羅は7世紀半ばに積極的に唐の文物を取り入れて国政改革をおこない、唐との結びつきを強めます。最終的には唐と軍事同盟を結び、660年には百済、668年には高句麗を滅ぼして朝鮮半島を統一した。

ただし、唐は朝鮮半島の直接支配を目指したので、新羅は唐軍を朝鮮半島から追い払うために676年まで戦いつづけることになります。

百済は朝鮮半島西南。4世紀前半の成立。この国は高句麗、新羅と比べて大和朝廷との関係が非常に深い。唐、新羅連合軍によって滅ぼされたあと、倭国への援助を受けて復活を目指します。663年の白村江の戦いがそれ。しかし、倭軍は負けて百済再興はできませんでした。

倭です。3世紀魏に邪馬台国が使者を派遣したこととは以前に話しましたね。そのあとは倭国が5世紀南朝宋に使節を送っています。中国の王朝に官職を授けてもらうことによって朝鮮半島や日本列島の対立勢力の

中で有利な立場を確保しようとしたようです。宋の歴史書には五人の倭王の名が記録されているので、これを「倭の五王」といっています。

それ以後は隋の時代まで倭の記録は出てきません。

なぜ南朝の宋にだけ記録されているかというと、宋だけは山東半島まで領土を拡大しているんです。日本列島から百済を経由して比較的簡単にたどりつくことができたのでしょう。

隋のときに倭国は遣隋使を送ります。これはさっき言ったとおり。やがて、隋・唐の高句麗遠征、高句麗・百済・新羅の三国をめぐる国際関係の中で新羅と同じように内政改革をおこなわざるをえなくなる。これが、645年の大化改新といわれる改革。

日本という国号を使うようになるのは7世紀後半からです。それまでは倭国と呼ぶのが正しいのです。

[参考図書紹介](#) . . . もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[古代東アジアの](#)

[民族と国家](#)

李成市著。

専門書で高価ですが、私のような素人でも充分理解できます。

今回の、高句麗をめぐる国際関係に関しては、大いに参考にしました。

[隋の煬帝\(ようだい\)中公文庫](#)

宮崎市定著。

いつもながら、語り口のうまさと、明快な論理展開には、脱帽するばかり。隋という時代が、自分の手の中に入っているような気になります。

第33回 隋 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第32回 魏晋南北朝](#)

[次のページへ](#)
[第34回 唐（前半）](#)

□□□□□□□□□

□□□□□□

第34回 唐（前半）

唐の成立

隋末には各地に反乱勢力が割拠します。農民出身者や隋の高官など反乱勢力のリーダーはいろいろです。そのなかで、混乱を收拾して唐帝国を建てたのが李淵（りえん）（位618～626）。この人は隋の將軍、しかも名門軍人でした。

実は隋の楊家と李淵の家は北魏末に反乱をおこした軍人グループの仲間です。隋を建てた楊堅は北周の軍人でしたね。北周時代は楊家と李家は同僚なんです。しかも李淵の方方が格が上だった。しかし、楊堅が隋を建て皇帝になってしまったので李淵はその將軍をやっていたわけ。しかも、李淵と煬帝はいとこ同士です。お互いの母親が鮮卑族の名門貴族独孤氏の姉妹という関係です。

だから、隋末に李淵が旗揚げをしたときに隋の官僚や軍人たちには違和感があまりないわけです。北周から唐にかけては同じ仲間内で皇帝の地位をまわしているようなものです。

というわけで、李淵は旗揚げ後すぐに長安に入城することができた。隋の統治組織をそっくり手に入れライバルの諸勢力を倒していました。

唐の建国に大活躍したのが李淵の次男李世民（りせいみん）です。李淵はどちらかというとボウッとした人で、李世民が親父さんをたきつけて旗揚げしたようなものです。建国の第一の功労者なんですが、なにしろ次男だから皇太子になれない。ついには皇太子である兄を実力で倒して二代目の皇帝になりました。

これが唐の太宗（位626～649）です。中国史上三本の指に入る名君です。かれの治世は「貞觀の治（じょうがんのち）」といわれる。太宗の時代の年号が貞觀、その貞觀時代が平和でよく治まった、という意味で讃える言葉です。

唐の政策は隋をそのまま引き継いでいきます。大運河の建設が隋時代に終わっていた分、唐はその成果をそっくり手に入れることができて有利でしたね。

政策を整理します。

土地制度は均田制。

税制は租庸調制。

軍制は府兵制。

律令格式（りつりょうきゃくしき）といわれる法律も整備されます。唐はこの律令制度が完成して頂点に達した時代です。

中央官制は三省六部（さんしゅうりくぶ）制。

三省とは、中書省（ちゅうしょしょう）、門下省（もんかしょう）、尚書省（しょうしょしょう）。中書省は皇帝の意思を受けて法令を文章化する役所。門下省は中書省から下りてきた法令を審査します。もし門下省の役人が問題ありとした場合、法案は中書省に差し戻しです。中書省はもう一度皇帝と相談して法案を練り直さないといけない。

だから、門下省は大きな力を持っているのですね。この門下省の役人になったのが南北朝以来の名門貴族の者たちです。大きな権力を持ってはいるのですが政府の官僚としての権力に過ぎなくなっているところに注意しておいてください。

門下省の審査を経た法案は尚書省によって実行に移される。

尚書省に属しているのが六部です。吏部、戸部、礼部、兵部、刑部、工部の六つの役所が実行部隊です。

吏部は官僚の人事を司る。

戸部は現在でいうなら大蔵省にあたるもの。

礼部は文部省。

兵部は軍事を担当。

刑部は法務省と国家公安委員会を併せたようなもの。

工部は建設省ですね。

以上のような唐の諸制度は遣唐使によって日本に積極的に取り入れられました。日本でも大宝律令とかつくるでしょ。唐の律令の影響ですね。役所の名前など、いまだに大蔵省、文部省など、省という呼び方をしているのはここからきているんですからね。

対外的には突厥の内部分裂を利用して、これを服属させます。北方西方の諸部族の族長に唐の地方官の官職をあたえ都護府という役所にかれらを監督させた。唐政府は部族内のことには口出しはしませんから、緩やかな支配といつていい。

このような唐の周辺諸民族に対する政策を「羈縻（きび）政策」といいます。羈縻というのは馬や牛をつないでおく紐のことで、紐の伸びる範囲なら自由に活動が許される、そういう意味です。

高句麗に対して遠征もおこないますが、これが成功するのは次の皇帝のときです。

唐中期の政治

太宗李世民は政治的には成功をおさめるのですが、跡取り問題で悩みます。

長男が皇太子になるのですが、この人少し変わっている。突厥、トルコ人の遊牧文化にあこがれているのです。

宮殿の庭にテントを張って家来とそこに住み込む。食事のときは羊の肉を剣にさしたまま、火であぶって食べる。バーベキューですね。家来には弁髪という北方民族の髪型をさせてかれらとトルコ語で会話をしま

す。

なぜ、皇太子がこんなに遊牧文化にあこがれたかはわかりませんが、もともと唐の皇室李家も鮮卑族など北方民族の血が色濃くはいっています。李世民の皇后も長孫氏という北魏以来の鮮卑族の名門でした。だから、風俗として遊牧民に近いものがあったのでしょう。皇太子の振る舞いは先祖返りかもしれません。

ただ、皇帝としては困るわけ。言動も乱暴なところがあった。そこで、李世民は長男を皇太子からはずして、長孫皇后が産んだ子のなかで一番おとなしい三男を皇太子にしました。

この人が第三代皇帝高宗（位649～683）。

高宗は優柔不断なところのある頼りない皇帝でしたが、太宗李世民の基礎づくりがしっかりしていたので、かれの時代になっても唐の支配領域は拡大しつづけます。高句麗を滅ぼすのもかれのときです。

高宗はかれ自身よりも皇后が有名。則天武后（そくてんぶこう）といわれる人です。もともと彼女は李世民の後宮に入っていたのですが、息子の高宗がみそめたんだ。親父が死んだあと彼女を自分の後宮に入れました。

これは、やはり遊牧民的な行動です。息子が父親の妻を自分のものにするなんて儒教文化ではありませんからね。遊牧民では普通にあることなのです。女性を自分の妻とすることで扶養するのね。もちろん産みの母親を妻にはしませんよ。

則天武后は高宗の愛を独占して皇后の地位に登りつめます。彼女は頭がきれる。高宗は決断力のない人ですから、政治向きの相談を彼女にする。則天武后はそういうときに実に的確な指示をするのですよ。やがて、高宗は彼女なしでは政務ができないほどになる。

朝廷で役人に会うときに自分の後ろに簾をたらしておいて、その裏側に則天武后を座させておく。高宗が判断に迷うと則天武后が簾の後ろからどうしたらよいかそっと耳打ちしてくれるという寸法です。

高宗が死ぬと則天武后が実権を握りました。彼女と高宗とのあいだに二人の息子がいる。まず中宗が即位しますが、かれの政治は則天武後の気に入らない。中宗を退位させて、もう一人の息子、睿（えい）宗を即位させます。則天武后はこの睿宗も気に入らないんですね。とうとうかれも退位させて、自分で即位してしまった（位695～705）。63歳位のときです。

こうして、中国史上唯一の女性皇帝が誕生しました。武照（ぶしょう）というのが彼女の本名です。皇帝家が李家から武家へ変わったので国号も周と変更しました。

若い男を寝室に引っ張り込んだりといったスキャンダルがあって、昔から彼女の歴史的な評価はあまり良くなかったんですが、女だからという理由で必要以上に貶められているところがあります。

則天武后という呼び名にしても、これは高宗の皇后としての呼び方であって皇帝としての名前ではないのです。女だから皇帝名で呼んでやらないという伝統的な女性蔑視を引きずっている。一応教科書にしたがって説明していますが武則天（ぶそくてん）といった方がいいのです。

則天武后が政治をおこなうときに北周、隋、唐とつづいてきた支配者集団は当然非協力的です。則天武后は鮮卑系の武人集団でも南朝以来の伝統的貴族階級出身でもない。個人的な美貌と才覚だけでのしあがった人ですからね。

皇帝としては自分の手足となって動いてくれる忠実な官僚がたくさん欲しい。そこで彼女は中央だけで実施していた官僚登用試験を全国に広げます。試験で採用された官僚たちは門閥がありませんから、則天武后に忠節を尽くすことで出世するしかない。女だからいうことをきかない、とはいきないです。

というわけで、則天武後の時代に新官僚層が政界に進出して南北朝以来の旧勢力と対抗する力をつけてきます。言い換えれば貴族ではない官僚層が政権中枢部に登場してきた、ということです。

則天武后は皇帝ですから実力行使もします。この時代に殺された貴族とその家族は千人は下らない。

ともかく新しい人材を登用していったことが彼女の政治上の功績です。

則天武后は最晩年には、息子の中宗が再び即位して国号も唐に戻されました。やがて、則天武后は死ぬんですが、中宗の皇后がまた問題でした。韋后（いこう）というのですが、彼女ずっと則天武後のやり方をみているのね。自分もあんなふうに、と考えた。則天武后は夫の高宗が死んでから皇帝になったのですが、韋后は中宗が死ぬのを待ちきれない。とうとう娘と共に謀して毒殺してしまった。

さすがにこれはやりすぎだった。中宗の甥で睿宗の息子の李隆基（りりゅうき）が兵士をひきいて宮中に乗り込んで韋后らの一派を排除しました。

則天武后から韋后までのゴタゴタを「武韋の禍（ぶいのか）」といいます。ただ、これはあくまで唐の宮廷内での事件で一般民衆の生活とはあまり関係はない話です。

唐の宮廷を正常化した李隆基はやがて、第六代皇帝となります。これが唐の中期の繁栄をもたらした玄宗（位712～756）です。

即位したのが28歳です。能力もやる気もあってぱりぱり働く。かれを補佐した有能な大臣たちはみな、則天武後の時代に頭角をあらわしてきた人たちなので、玄宗の成功はある意味では彼女のおかげかもしれません。

玄宗時代の繁栄を「開元の治（かいげんのち）」と呼びならわしています。太宗の「貞觀の治」とセットで覚えておいてください。

皇帝の仕事というのははじめにやれば非常にしんどい。宮廷での政務というのは早朝、それも夜明け前に始まる。皇帝は午前三時頃にはもう起きて、威儀を正して宮廷にお出ましになる。そして、次から次へと官僚たちが持ってくる書類を決裁していくのです。

正午になる頃によくやく仕事に一段落をつけて、それから以降がプライベートタイムです。

こういう日常の仕事をきちんとこなしていくのは大変で、皇帝は一番偉いのですから手を抜こうと思えば抜

ける。だけれどそうすると宦官や外戚などの実力者が勝手な振る舞いをするようになるんですね。

玄宗ははじめに仕事をつづるのですが、この人は長生きをした。皇帝に定年制度はありませんから死ぬまで働きつづけなければならない。即位30年を越え、年齢が60近くになってくると、さすがの玄宗も仕事に飽きてきた。政治に熱意を失ってきます。

こういうときに、かれが出会ったのが楊貴妃です。

楊貴妃はもともとかれの息子の妃の一人だったのですが、何かのきっかけで玄宗は彼女をみそめてしまう。息子の後宮からもらい受けて自分の後宮に入れてしまった。簡単にいえば息子から嫁さんを奪ったのね。滅茶苦茶ですね。

楊貴妃はどういう気持だったか。皇帝になれるかどうかわからない皇子の後宮にいるよりも現皇帝に愛された方がいいです。多分。そして、彼女はこのチャンスをしつかりつかんで玄宗の愛を独占するのに成功しました。

玄宗と楊貴妃の世紀の愛の始まりです。

ロマンチックに語られることの多い二人の恋愛ですが、出会ったときの玄宗の年齢が61、楊貴妃は27歳です。年齢を知ってしまうとちょっと引いてしまいますね。

玄宗は夜が明けても宮廷に出てこない。正午近くまで楊貴妃の寝室でたわむれている。そういう日々がつづくようになりました。

これは玄宗と楊貴妃を描いた絵、後世の想像図ですがね。椅子に座っているのが玄宗。その前で舞を踊っているのが楊貴妃です。玄宗は音楽が趣味で笛の演奏が得意だった。かれの兄弟も音楽好きでよく三兄弟でアンサンブルを楽しんだらしい。それに合わせて、楊貴妃は舞ったり歌ったりしたのでしょう。

これは華清池（かせいち）という長安近郊の温泉地です。二人はよくここに遊びに来た。現在も有名な観光地です。

中国旅行でここも行きましたよ。ガイドがここが楊貴妃が入った湯船だ、なんていっていましたが、ありや嘘だね。コンクリートにタイル張りのきれいな湯船でしたよ。

玄宗の政治は当然公正さを失っていきました。出世したければ楊貴妃に取り入ればよい、そういう風潮がはっきりしてきます。政府の中核が腐敗してきます。

ついに玄宗の晩年に唐帝国を大きく揺るがす大反乱が勃発するのですが、それは次回のお話。

第34回 唐（前半）おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第33回 隋](#)

[次のページへ](#)
[第35回 安史の乱と唐の変質](#)

世界史講義録

第35回 安史の乱と唐の変質

----- 安史の乱 -----

755年、安史の乱（あんしのらん）が勃発します。

反乱軍のリーダー安禄山（あんろくざん）と史思明（ししめい）の二人の名前をつないで安史の乱とよばれます。

安禄山は現在の北京の北方を守備する節度使（せつどし）の長官でした。

ここで、節度使の説明をしておきましょう。唐の兵制は府兵制だったのですが、玄宗の時代くらいからこれがうまく機能しなくなってくる。均田制そのものが形骸化してきたのだろうと思われます。そうなると兵士も集められなくなるのです。羈縻政策もうまくいかなくなっていました。

そこで辺境防衛のために新たにつくられたのが節度使という軍団です。兵士は府兵制のような徴兵ではなくて募兵です。お金で雇った傭兵ですね。そして、軍団の司令官は管轄地域の民政もおこないます。自衛隊の地方駐屯隊の司令官が県知事を兼ねるようなものです。国境を守るためににはこの方が機敏に対応できるのですね。ちなみに節度使の長官のことも節度使といいますから注意。

玄宗の時代には北方の国境地域を中心に十の節度使が設けられていました。

安禄山という男は父親がソグド人、母親は突厥人だという。ソグド人というのは中央アジアを中心活動していたイラン系の商業民族です。

そういう育ちもあってか安禄山は六カ国語が自由に操れた。若いときから現在の北京方面にあった節度使の部下になって通訳として勤務していたらしい。辺境地域ですからいろいろな民族と接触する機会が多かったのだろう。

安禄山という名前は「アレクサンドロス」の音を漢字にしたという説もあります。これは、多分こじつけですが面白いので紹介しておきます。

この安禄山、すごく機転がきいて人の心をつかむのが上手だった。それで軍団の中でどんどん出世していくのです。唐は人種、民族関係なしですからね。

出世するために何をしたのかというと楊貴妃に取り入ったのです。最初は贈り物を届けたりしたのでしょうか、やがて楊貴妃の部屋に入り込んだりする。すっかり気に入られて養子気取りです。楊貴妃に気に入られれば当然玄宗皇帝に取り立ててもらえます。ついには玄宗にも気に入られる。

安禄山はものすごく太っていた。ところが運動神経は抜群で玄宗の前で軽快なステップ

を踏んでクルクル回って踊ったりする。その体型と踊りのアンバランスがいかにもおかしかったらしい。玄宗に大うけ。ご機嫌の玄宗が「お前のそのでっかい腹の中には何が入っているのか」ときくと、安禄山は「この腹の中は陛下への真心でいっぱいございます」なんて答えるのですな。

そんなこんなで最終的には、北方の三つの節度使の長官を兼ねるまでになる。

そこまで出世してなぜ反乱をおこしたのか。

実は同じように楊貴妃の縁で玄宗に気に入られて出世した人物がいた。

楊国忠です。名前からもわかると思うけど、この人は楊貴妃の「またいとこ」です。幼なじみですからね。こちらもスピード出世して宰相になります。

安禄山はこの楊国忠と滅茶苦茶仲が悪い。二人とも実力ではなくおべっかで出世しているわけで、玄宗に嫌われたらその瞬間に高い地位から転がり落ちる運命。玄宗と楊貴妃の愛を奪い合う関係ですから、ライバルになるのは当然です。

楊国忠は宰相として常に皇帝のそばにいる。ところが、安禄山はいつも玄宗や楊貴妃のそばにいてご機嫌伺いをしているわけにはいかない。勤務地は辺境ですから。節度使の仕事もしなければね。

都を離れると安禄山は気が気ではない。自分がいないあいだに楊国忠が讒言をして自分を失脚させるのではないか、と心配なのです。

心配しているうちに安禄山は気がついた。自分は三節度使を兼任して唐帝国全兵力の三分の一を握っている。玄宗に嫌われるのをビクビク恐れる必要なんか全くな。この兵力をもってすれば自分自身が皇帝になることだってできる、と。

そんな事情で挙兵するのです。玄宗皇帝の情実に流された人材登用のつけが一気に爆発した感じです。

そもそも節度使は辺境防衛のためにおかれた軍団です。その軍から国を守る軍があるはずがない。反乱軍は無人の野を行くように進撃をつづけた。率いる軍勢は15万。すぐに洛陽を占領、翌年には長安も占領しました。

玄宗は楊貴妃を引き連れて長安から逃れます。四川省に向けて落ちのびるのですが、逃避行の途中でかれらを護衛する親衛隊が反抗する。安禄山の反乱は楊貴妃のせいだ、と言うのです。この女に皇帝が溺れて政務をないがしろにしたからこんなことになった。この女を殺せ、と兵士たちは玄宗に迫った。

兵士の協力がなければ逃げのびるどころか自分も殺されるかもしれません。玄宗は田舎のまちのお寺に楊貴妃を連れ込んで因果を含めて絞め殺させるのです。愛しているのですが、泣く泣く殺す。ここが、玄宗と楊貴妃、世紀の恋愛のクライマックス。

このあと玄宗は反乱勃発の責任をとって退位して、息子の肅宗（しゅくそう）が即位しました。

唐政府は安史の乱を鎮圧するためウイグル族に援助を要請した。ウイグル族は突厥が衰退したあと勢力を伸ばしてきた遊牧民族です。国内には安史の乱を鎮圧できる軍事力がなかったんですね。

一方の安禄山ですが、長安を占領して新政府を建てて皇帝に即位するのですが、その直後に失明する。太っていたから糖尿病だったのかもしれない。おまけに全身皮膚病にかかった。もともと理想や理念があってはじめた反乱ではありません。皇帝になっても政治運営なんかできない。そこへ失明と皮膚病でやけっぱちになる。絵に描いたような暴虐な人間になってしまって、息子に殺されてしまう。その息子は武将の一人史思明に殺されて、以後は史思明が反乱軍のリーダーになりますが、かれも暴れまわるのだけが取り柄の男で、これもその息子に殺される。史思明の息子は反乱軍をとりまとめるだけの力量がなくて、中心を失った反乱軍はウイグル軍に鎮圧されて、ようやく反乱は終わりました（763）。

9年間の戦乱で華北は完全に荒廃してしまいました。安史の乱の兵士たちには遊牧民出身の者も多かったようで、農民に対する理解や配慮はない。農地は滅茶苦茶になる。農民は畠を棄てて逃げ散る。食糧生産も満足におこなわれない。腹がへっては戦ができません。

安禄山の反乱軍には石臼部隊というのがあった。直径数メートルもあるようなでっかい石臼を運ぶ部隊です。反乱軍とウイグル軍が合戦するでしょ。どちらが勝っても負けても戦闘後の戦場には死体がたくさん転がっている。そこに石臼部隊がゴロゴロと巨大石臼を運んで登場します。生き残った兵士たちは敵のも味方の死体を運んできて、どんどん石臼に放り込んでゴーリゴーリ臼をひく。死体がミンチになってじわじわでてくる。これを団子にして食べた。気持ち悪くて御免なさい。

もう、何のために戦争しているのかわからない。人肉という食糧を確保するために反乱をつづけているような状態になっているのです。

華北の荒廃とはこういうことです。農民が農作業なんかしていたら、捕まって食べられてしまいます。地獄そのもの。

反乱鎮圧後、唐の朝廷は長安に帰ってきますが都はすっかり変わり果てていたのです。唐の詩人杜甫（とほ）に「春望（しゅんぼう）」という作品があります。非常に有名な詩なので紹介します。

国破れて 山河あり
城春にして 草木深し
時に感じては 花にも涙をそそぎ

別れを恨んでは 鳥にも心を驚かす
 烽火 三月に連なり
 家書 万金に抵（あた）る
 白頭 搔（か）けば更に短く
 渾（すべ）て 簪（しん）に勝（た）えざらんと欲す

杜甫は安史の乱で一時長安に幽閉されます。戦乱で荒れ果てた長安の風景を嘆いている詩です。「城春にして」の城とは長安のこと、繁栄していた長安が今では草ぼうぼうだ、といっているのですよ。戦火が三ヶ月もつづき、離ればなれになった家族からの手紙は万金の価値。白髪頭もすっかり薄くなり、まったくかんざしさえさすことができない。そんな意味です。

大学時代に中国からの留学生と飲む機会があった。日本の高校では国語の時間に漢詩を習うんですよと、とりあえず少し覚えていたこの春望のことを話したら、ワンさん、中国語で朗々と歌うように朗読してくれた。中国語で読むと韻が踏んであるのがよくわかる。耳に心地よいですよ。日本で百人一首を暗記させられるように中国の国語の時間にこういう詩を暗唱するのかもしれませんね。

唐の政治・社会の変質

安史の乱後、唐の政治も社会も大きく変化します。

まず、唐王朝の力がすっかり衰えてしまった。均田制を維持することができません。均田農民は政府の援助が得られずに没落して、小作農になっていきます。小作農のことを佃戸（でんこ）という。佃戸が働く農地の所有者が新興地主階級です。かれらは貴族とは何のつながりもない。混乱をチャンスに変えて成長してきた新興層です。

均田制が崩れれば、当然それをもとにしていた租庸調制も崩れる。

かわりに実施された税制が兩税法。夏と秋の二回の収穫期に銭納で税を集めます。一年二回の徴税なので兩税法といいます。

兩税法の献策者が楊炎（ようえん）。受験的にはわりときかれます。

これ以外にも塩の専売制を強化して国家財政を補いました。

府兵制が解体して、募兵制に切り替わります。傭兵部隊です。傭兵というのは西洋でも東洋でも質が悪い。中国では良い鉄は釘にはならない、善い人は兵隊にはならないという諺があって、兵士になる奴にろくな奴はない。まじめに働くことのできないならず者が最後にたどりつく仕事だと考えられていたのです。

府兵制の兵士は違うんですよ。これは徴兵ですからね、均田農民が兵士になる。農民と

いうのは元来はじめて黙々といわれたとおりによく働く。これを兵士にした府兵は質がいいんです。募兵制の傭兵になってから兵士の質がグンと落ちる。略奪・暴行なんかなんとも思っていない。

そして、この募兵を率いるのが節度使です。唐朝は安史の乱後、国内にも節度使を置くようになります。節度使が反乱したら別の節度使に鎮圧させるためです。

国内に多数設置された節度使に任命されたのが、なんと、安史の乱で暴れまわった反乱軍の武将たちなんです。反乱鎮圧後、唐朝は反乱軍の将兵の扱いに困るのです。政府につなぎ止めておかないと、また何をしてかすかわかりませんから。そこで、官職をあたえて各地の節度使やその武将、兵士にした、というわけです。

こんな節度使ですから、頭から唐の政府なんてなめているわけ。すぐに各地で自立化していって唐の政府の命令は無視するし、税金だって送ってこない。

ただし、安史の乱で戦乱に巻き込まれなかった江南地方は比較的唐の政府に対して従順できちんと税金を送ってきた。そのルートが大運河です。唐朝にとって大運河と江南地方が生命線になります。やがてここが唐朝のコントロールから外れる時が唐の滅亡の時となります。

----- 唐の滅亡 -----

安史の乱後、それまでとはまったく異なった税制・兵制で国家の中身はすっかり以前とは違ったものになりましたが、あと100年ほど唐は何とか存続します。

この唐朝に最後の打撃を与えたのが黄巢の乱（こうそうのらん）（875～84）です。

黄巢は塩の密売人でした。安史の乱後、塩の専売制は唐の大きな収入源だったので、塩の値段はどんどん上げられていきました。塩は生活必需品ですから誰もが買わざるをえない。庶民の生活を圧迫する。だから塩の値段が高すぎれば当然密売人が現れて、政府価格より安く売って莫大な利益を得るのです。政府としては密売をほっておくと収入減になりますから、必死に取り締まりをします。密売人側もそれに対抗して、各地の密売組織が連絡をとりあって政府の裏をかく。

最後に唐政府は軍を投入して取り締まりを強化してきた。追いつめられた密売人がおこした反乱が黄巢の乱です。

黄巢の反乱軍は次から次へと都市を占領して略奪します。一つの都市を食い散らかすと次の都市に向かう。こういうのを流賊というんですが、神出鬼没でどこにあらわれるかわからない。安史の乱では無傷だった中国南部も大きな被害を受けました。全国を荒らしまわって最後は数十万の勢力に成長して長安を占領しました。

このときに黄巢軍は長安にいた南北朝以来の貴族たちをことごとく黄河に放り込んで殺しています。貴族階級に対する庶民の恨みは強かったんですね。これで貴族は全滅したということです。

黄巢は長安で皇帝に即位します。しかし、そのあとすぐに反乱軍自体が内部分裂で解体していく。

唐朝は軍事的にはこれを押さえられないので、黄巢の武将たちに寝返って唐側につくよう誘います。寝返ったら節度使にしてやるよ、黄巢の部下をやっていても将来はないよ、ってね。「帰順」をうながす、という。

これが、うまくいって有力武将たちが寝返ってくるのです。黄巢は即位後には何をしたらいいかわからなくなるし、部下は寝返るし、敗戦がつづき最後は故郷に逃げ帰って自殺して反乱は終わりました。

しかし、乱後、唐の政府はまったく形だけのものになります。中国全土に節度使が自立して軍閥化している。

大運河と黄河の合流点、開封という都市があります。ここに節度使に任命されたのが黄巢の反乱軍から寝返った朱全忠（しゅぜんちゅう）という男。907年、朱全忠は唐を滅ぼして皇帝に即位しました。都は開封。国名は後梁（こうりょう）。

後梁は中国全土を支配するだけの力はありません。黄河流域をかろうじて勢力範囲にしただけでした。

それ以外の地域にはそれぞれの節度使が自立・建国して中国は再び分裂時代に突入します。

第35回 安史の乱と唐の変質 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第34回 唐（前半）](#)

[次のページへ](#)
[第36回 唐の文化](#)

世界史講義録 第36回 唐の文化

唐の国際性

唐は国際性の豊かな時代でした。

唐の前半は羈縻政策がうまくいって、非常に広い地域が唐の勢力下に入ります。資料集の地図を見るとその広大さがわかるでしょ。領域内だけでも多くの民族が住んでいるし、貿易、留学いろいろな目的で世界中から雑多な民族が集まってきたから、都長安は国際色豊かな都市となります。現在でいえばニューヨークです。人口も100万人を超えていて、多分バグダードと並んで当時世界最大規模の都市です。

李白の詩にこんなのがあります。

「少年行」

五陵の年少、金市の東

銀鞍白馬、春風を渡（わた）る

落花（らっか）踏み尽くして、何（いづ）れの処（ところ）にか遊ぶ

笑って入る、胡姫酒肆（こきしゅし）の中

盛り場を貴公子が春風の中、馬に乗って走っていく。白馬に銀の飾りのついた豪華な鞍をつけていて、見るからに金持ちの貴公子なんです。花びらを踏み散らしながらどこへ行くのかと李白が見ていたら、やがて胡姫酒肆の中へ入っていった、というんだ。酒肆というのは酒場のことです。この詩のポイントは胡姫という言葉。

胡という字はもともとは異民族という意味で使っていたのですが、唐の時代にはいるとイラン人をさすようになります。胡姫というのはイラン人の女の子。だから胡姫酒肆とくれば、わかりますね。エキゾチックな可愛いイラン娘がお酌をしてくれるキャバレーだね。イラン娘は踊り子かもしれない。

李白はこのような長安の華やかな雰囲気をつたえる詩をたくさんつくっています。商人以外にもいろいろな仕事で唐に出稼ぎに来ていた西方出身の人人がたくさんいたんでしょうね。

外交使節も長安にやってきます。日本からは遣唐使。留学生、留学僧もたくさん連れてくる。日本は新興国家ですから唐に学ぼうと必死です。

遣唐使のような使節をおくる国はたくさんあって、唐からするとこれらはみんな朝貢（ちょうこう）です。中国の皇帝をしたって諸国が貢ぎ物を持ってくる、という解釈をします。対等な外交関係ではありません。そのかわり、朝貢した国は帰りにどっさりおみやげをもらってくる。貿易としては朝貢国は大儲けです。

アラビア方面からはインド洋経由でムスリム商人達がやってくる。イスラム教徒のことをムスリムという。唐は広州のまちに市舶司という役所を設けて貿易を管理した。要するに商業税をとった。

イスラム教との関係では重要な戦いがありますから覚えてください。

タラス河畔の戦い（751）。

現在のカザフスタン、ウズベキスタン、キルギス三国の境あたりで唐とイスラムのアッバース朝が戦いました。東西交易路の奪い合いです。

この戦いで唐は負けた。死者5万、捕虜2万。捕虜の中に紙梳（す）き職人がいたんだ。その結果製紙法がイスラム世界に伝わることになりました。やがてヨーロッパまで製紙法は伝えられていきます。

というわけで、タラス河畔の戦いは文化史上非常に重要。入試にもよく出る。

ちなみにこの時に唐軍の司令官が高仙芝（こうせんし）という人で、この人は高句麗人です。朝鮮半島出身の人が唐の軍人として中央アジアでアラブ人のイスラム教徒と戦っている。ワールドワイドな時代になっていますね。

高仙芝はこのあと長安に帰還して安史の乱で反乱軍と戦っています。

この絵を見てください。永泰公主（えいたいこうしゅ）墓壁画です。永泰公主は則天武後の孫娘にあたる人。

彼女の侍女たちが描かれているのですが、この人が持っている孫の手の大きいもの。これはポロのスティックです。ポロというのは今でもイギリスなどの貴族たちが楽しむようですが馬に乗っておこなうホッケーですね。古代ペルシアで生まれた遊牧民たちのスポーツ。この時期には中国でも流行したことがわかるね。今でいえばテニスラケットを持って記念写真を撮っているようなものです。

こちらの絵、永泰公主墓壁画とそっくりの構図です。これは高松塚古墳の壁画です。見て書いたのではないかというくらいふたつは似ている。

これは正倉院にある「鳥毛立女屏風（とりげだちおんなびょうぶ）」。一方のこちらは中央アジアのオアシス都市トルファンから出土した絵です。両方とも樹木の下に女性が立っている同じ構図で一般に樹下美人図と呼ばれるものです。構図が同じだけではなく

て女性の顔つきもそっくりです。

こういう絵を見ていると西は中央アジアから東は奈良まで唐を中心として一つの文明圏にすっぽり入っているのが実感できます。美人の基準まで同じですからね。唐の国際性というのはこういうところにもでているのです。

----- 西方宗教の流入 -----

東西交流が活発になりますから、西方からいろいろな宗教も入ってきた。

まず、ゾロアスター教。これは当時ケン教といわれた（ケンは「しめすへん」に天）。イラン人の宗教ですから、胡姫たちとともに入ってきたのかもしれない。

景教（けいきょう）は、ネストリウス派キリスト教。ローマ帝国で異端とされて東方に拡がってこの時代は中国にも入っている。これは「大秦景教流行中國碑」という有名な碑が残っています。造られたのは781年。高さ276センチ。長安でキリスト教が流行したのを記念して建てられたものです。

マニ教というイラン生まれの宗教もきました。これは仏教、キリスト教、ゾロアスター教を融合させたものでイスラム以前の西アジアで信者を多く集めていました。

そして、イスラム教。これは回教（かいきょう）と表現します。

中国は現在でも多民族国家ですから、イスラム教徒もたくさんいます。現在はイスラム教を信仰しているウイグル人を回民と書いたりします。

北京のまちを歩いているとしゃぶしゃぶ屋さんがたくさんあって、これはほとんどイスラム教徒の経営です。顔つきは漢民族と区別は付きませんが、頭にちょこんと白い小さな帽子をかぶっているのですぐにわかります。

中華料理の食材に豚肉は欠かせないでしょ。ところがイスラム教では豚は悪魔が造った穢れた動物だから決して食べてはいけないの。だから、しゃぶしゃぶも繁盛します。本場のしゃぶしゃぶの肉はもちろん羊です。

仏教や道教とともにこれらの宗教の寺院が長安のまちには軒をつらねていたんだ。遣唐使とともに唐に渡った天才に空海がいます。高野山を開いた人。かれは当時中国で流行していた密教を日本に持ち帰るんですが、好奇心旺盛な人だから長安のまちをあちこち探索したに違いないんです。ゾロアスター教や、キリスト教、イスラム教、そんな宗教を日本に紹介する可能性だってあった。想像するだけでもわくわくしませんか。

唐の文化を大きくまとめると、まず、国際的な性格。これは今まで話してきました。歴史的には五胡十六国時代以来の多民族的な側面が発展したものです。

もう一つは貴族的性格です。文化の担い手は六朝文化を継承する貴族階級です。魏晋南北朝以来の総まとめが唐の文化だったわけです。

文学の隆盛

唐の文化といえば文学、なかでも詩を語らなくてはすまないね。ＮＨＫで早朝に漢詩の番組がありますが、ほとんどが唐の時代の詩です。いまだに日本でも愛好者は多い。個別に見ていきましょう。

李白（701～62）。

天才詩人です。自由な詩風。開放的、貴族的、といわれます。西域貿易で大儲けした商人の息子に生まれた。苦労なしで育ったから自由な詩風だったのかもしれない。

「少年行」は先ほど紹介しました。明るく華やかな詩を書く人ですね。お酒の詩も多い。黙って二人で飲もうじゃないか、とかね。

李白の才能は評判となり、やがては玄宗の宮廷に出入りするようになります。

当時の文学者というのはみんな官僚か官僚志望の人たちです。官僚というのは人並みの文章が書けるのは当たり前の教養なんです。その中で飛び抜けた才能を持つ者は今でいうスターです。スター詩人は貴族や役人のいろいろな宴会の席によばれて、その場にあった詩をひとつひねりする。見事な詩を即興で作り上げて拍手喝采を浴びる。ますます評判があがる、という寸法です。芸人に近いところがある。

李白は陽気で華やか、自由奔放な性格ですからそういう宴席でも人気があるのです。かれが来れば座が盛り上がる。

ある時玄宗皇帝が船遊びをしていた。お気に入りの側近を集めて宴会です。玄宗、余興に李白を呼んで詩を詠ませようと思った。側近に李白をよびにいかせますが、家にいない。酒好きの李白ですから酒場を探したら、いました。皇帝陛下がお呼びです、どうぞいらしてください、と使者が告げるんですが、李白はすでに出来上がってしまってぐでんぐでん。

とにかく使者はなんとか李白を宴席に連れてきました。李白はフラフラしていて、ドテーンとソファにふんぞり返ってテーブルの上に両足を投げ出しました。態度でかいのです。ついでに横に立っていた男に命令した。「おいお前、俺の靴を脱がせろ。」

立っていた男は高力士という宦官で玄宗のお気に入りの一人だったんですね。この俺様に対して、と思ってムッとするんですが李白はお客様で自分は宦官ですから、その場はしゃがみ込んで李白の靴を脱がせた。当時の靴はブーツのような編み上げ靴だった。脱がせるのに時間がかかる、酔っぱらいの足だから臭かった。

高力士はこの時の恨みを忘れない。折に触れて玄宗に李白の悪口を言つたらしい。あの

男は才能を鼻にかけて陛下を馬鹿にしているとかね。ついに玄宗は李白を長安から追放してしまったという。ちなみに高力士はのちに玄宗の命令で楊貴妃を絞め殺すことになる男です。

杜甫

こんな事があっても自由気ままな李白の性格は変わらなかったようです。

李白

このエピソードを李白の親友、杜甫が詩にしています。

「飲中八仙歌」
 李白は一斗、詩百篇
 長安市上、酒家に眠る
 天子呼び来（きた）れども船に上（のぼ）らず
 自ら称す、臣は是（こ）れ酒中の仙、と

最初の句は酒を一斗飲めば、詩が百でてくる、という意味。

李白は「詩仙」と称されます。在命中から天国から間違って地上に落ちてきてしまった詩の仙人、といわれていた。最後の「酒中の仙」とはそれをふまえています。皇帝の使者がよびに来ても、「俺は詩の仙人じやい、皇帝がなんぼのもんじや」とうそぶいていた、という感じでしょうか。

杜甫（712～70）。

李白と並び称される大詩人。「詩聖」といわれる。

李白とは正反対の性格で地味で不器用な人。官僚になるため縁故を求めて就職活動をずっとしているんですがダメなんです。詩人としては有名になるんですがね。

40代になってようやく下級官僚になるんですが、ちょうど安史の乱が起こってすべてがパーになってしまった。その後は各地の有力者の世話をになりながら諸国を放浪して生涯を終えました。

苦労した人だから作品も、庶民の生活や兵士の苦労、戦乱の悲惨、そういう社会的な題材を多く取り上げています。

王維（701～61）

自然を描く詩にすぐれ、画家としても有名。

少年の頃から天才の名をほしいままにした宴席のスーパースターの一人です。官僚登用試験にも合格して官僚としても出世した。この人も安史の乱に遭遇して捕虜になる。無理矢理に安禄山に仕えさせられたこともあった人です。

白居易（はくきよい）（772～819）

白楽天（はくらくてん）ともいいます。前の三人よりあの時代の人です。

「長恨歌（ちょうごんか）」という詩が有名。これは玄宗と楊貴妃の悲恋を詩にしたものです。平安貴族に愛唱されたので、日本で有名になりました。

白居易は作詩するときに何度も推敲する。推敲の仕方が面白い。まず詩ができると、街へ出でていき道ゆく老婆をつかまえて、無理矢理詩を聞かせる。お婆さんが「よくわからないなあ」という顔をしていたら、持ちかえって書き直す。で、また通りすがりの老人をつかまえて聞かせる。聞かされた人が「いいねえ」という顔をしたら完成です。白居易がためしに聞かせる相手はみんな庶民。文学の素養なんかない普通の人ばかり。そういう人たちでも感動できる作品をめざすのです。かれの詩の特徴は平易で流麗ということですが、こういう作詩の態度からきているのですね。日本の貴族たちにうけたのも、平易な文で理解しやすかったからではと思います。

文という文学分野が中国にはあります。

唐と次の宋の時代に文の名人が八人。これを「唐宋八大家」といいます。唐にはそのうち二人がいます。

韓愈（かんゆ）（768～824）と柳宗元（りゅうそうげん）（773～819）。南北朝時代は四六駢體（しろくべんれいたい）という華麗な文体が流行するのですが、これにたいして漢代風の骨太い文を復興した。

美術工芸分野

名前だけです。

絵画。

吳道玄（ごどうげん）（8世紀）。山水画の名手。

閻立本（えんりつほん）（?～673）。人物画「歴代帝王図巻」。ボストン美術館にある。かれの直筆かどうかはあやしいようです。

二人とも絵の写真もなしで画家を語るのはむなしいですね。

書道。

褚遂良（ちょすいりょう）（596～658）。

顏真卿（がんしんけい）（709～786?）。顏真卿は安史の乱で自衛軍を組織して反乱軍に抵抗をつづけた男です。字も力強い。王羲之の貴族的な優雅な書風を一変させた。このひとの書のファンは多いです。

文、画、書、の名人たちですが、かれらも官僚です。芸術家という商売はまだありません。芸術は貴族階級がたしなむものなのです。

工芸では唐三彩（とうさんさい）。これは人名ではありませんよ。陶器の名前。このように何色もの色つけがしてある。置物ですね。作品の題材は中央アジアのものが目立ちます。ラクダにイラン人が乗って、琵琶を弾いている。こういうものが有名。唐の国際性があらわれているね。

学問

儒学は官僚登用試験の科目にも採用されて、隆盛。

南北朝時代に儒学のテキスト五経の解釈はわかつて統一が必要だった。解釈がわかつていては試験問題にもしにくいしね。太宗がこれを命じたのが孔穎達（くようだつ）（574～648）。「五経正義」という政府公認の儒学のテキストをつくった。

これ以来官僚をめざす受験生はこれを参考書にして勉強した。勉強には便利だったけれど、これを理解すればよいので、儒学の解釈は固定化しました。

宗教

道教は則天武后や玄宗の保護を受けて隆盛です。

しかし、話は仏教です。

仏教はますます中国に深く浸透して、僧侶のなかで本場インドに留学したいと思うものがでてくる。

東晋の時代に法顯（ほっけん）という僧がインドに旅行して「仏國記」を残していますが、唐ではさらに有名な人がでた。

玄奘（げんじょう）（602～664）です。三藏法師の名でお馴染み。

13歳で出家した。天才少年であつといふに先輩たちを追い抜いて仏教の理論を吸収していった。20歳をこえる頃には大人に講義をするほどになっていた。勉強するほどにわからないところがでてくる。だけれど、玄奘の疑問に答えられる人は中国にはいないのです。

疑問を解決するためには本場のインドにいくしかない。ところが、当時国外への旅行は禁じられていたのです。けれど、どうしても、いきたい。とうとう国境警備隊の監視をかいくぐって、国境線を突破、国外脱出に成功した。27歳の時です。太宗李世民の時代でした。

インドへの旅の困難さがやがて『西遊記』の物語になった。これは後世に描かれた玄奘の絵ですが背中にでっかい荷物を背負ってるでしょ。一切合財ここに詰め込んで旅にで

た。首飾り見えますか？これ、小さいけれどドクロですね。ドクロを首に巻いている。魔除けです。実際の玄奘はドクロを巻いていなかったと思いますが。妖怪が出てくるような人外魔境をゆくというのでこんな絵になったのでしょうか。

インドでも学識の高さで有名になってヴァルダナ朝のハレシャ=ヴァルダナ王にも招かれた。王にすっかり気に入られてたくさんのお経を持って645年帰国します。帰りは何頭もの馬に何百巻もの經典を積んでお付きの者もつけてもらっての旅でした。

唐の国境のまじかまで来るのですが、玄奘帰ることができない。だって、密出国ですから、帰れない。そこで、かれは長安の太宗皇帝に手紙を出した。自分は唐の僧ですが仏教を学ぶために國法を破って印度に行きました。留学を終えて帰ってきたのですが、どうか入国を認めてください、とね。

太宗、歓迎して玄奘を迎えます。貴重な西域、インドの情報源と考えたんでしょう。玄奘のために寺を建てて經典の漢訳を援助した。何十人の助手をつけて翻訳を手伝わせた。

現在、長安の觀光名所大雁塔（だいがんとう）は玄奘が持ち帰った經典を保存するために建設されたものです。

また、太宗の命令で玄奘が書いた西域旅行記が「大唐西域記」です。

もう一人印度へおもむいた僧に義淨（635～715）がいます。

かれは陸路ではなく南シナ海を通っていきました。旅行記が「南海寄帰内法伝（なんかいききないほうでん）」。東南アジアの諸民族の貴重な記録となっています。

唐の時代は禪宗、淨土宗、天台宗、真言宗など宗派が形成される時代で、仏教が中国化しはじめているときでした。

日本からの留学僧はそういうなかで最新流行の宗派を持ち帰って日本に紹介したわけです。有名なのが空海の真言宗、最澄の天台宗ですね。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[李白と杜甫講談社
学術文庫\(1291\)](#)

高島俊男著。
今回の講義のネタはほとんどこれ。高島さんの本はサービス精神旺盛で、読んで楽しく、人に話して面白い。最高です。

第36回 唐の文化 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第35回 安史の乱と唐の変質](#)

[次のページへ
第37回 五代から宋へ](#)

世界史講義録
第37回 五代から宋へ

五代から宋へ

唐が滅亡してからの約50年間の分裂時代を五代十国時代といいます。

華北、黄河流域には開封を首都として5つの王朝が交代します。これを五代といいます。
後梁（こうりょう）、後唐（こうとう）、後晋（こうしん）、後漢（こうかん）、後周（こうしゅう）の5つ。

それ以外の地域に合計10ほどの独立政権が成立。

この時代のほとんどの政権が、節度使の自立したものです。各政権の皇帝や王はみな軍人出身です。戦乱の絶えない時代です。均田制が崩壊したあとの社会の仕組みに釣り合う政治の仕組みが作り出される過渡期です。その過渡期の混乱。

新しい時代の担い手は新興地主層です。これを形勢戸（けいせいつ）といいます。後漢以来の豪族と何が違うかというと、豪族は南北朝から隋唐までずっとつづいて貴族階級になっていましたが、形勢戸は同じ家がずっと地主としてつづきません。自作農から地主に成長する家もあれば、没落する家もあって同じ家が存続しない。だから形勢戸は貴族階級にはなっていません。形勢戸という言葉には「成り上がり」という意味があるのです。

また、形勢戸の大土地所有は一円的所有ではない。一円的といふのは一つの地域を丸ごと持っていることをいう。豪族は一円的土地所有だから、そこで働く農民は豪族に隸属していきます。そして、豪族は貴族化していったのです。

しかし、形勢戸はたくさんの土地を持っているのですが、あちこちに分散している。全体を合計すれば大きな土地になるのですが、一つひとつの土地は小さい。小作農の立場からすると、何人もの形勢戸から土地を借りている。だから、一人の形勢戸に隸属するような関係にはなりにくい。したがって、形勢戸は身分的にも貴族化していません。黄巢の乱で南北朝以来の貴族階級が全滅させられて以降、ずっと中国では貴族階級は登場しないのです。すべて人民は、同じ身分。

日本で貴族が無くなったのが第二次世界大戦後、20世紀の出来事です。中国では10世紀にはすでに貴族が消滅している。こういう面で中国はものすごく進んでいる社会です。

五代最後の後周が宋に替わるのが960年。

宋の建国者は趙匡胤（ちょうきょういん）（位960～976）。都は開封です。

宋が成立したときにはすでに統一に向けた機運は生まれつつあった。

宋の前の後周の時代に世宗（せいそう）という皇帝がいました。この人は非常に有能で南北に領土を拡げていて、やがては戦乱を終わらせてくれるだろうと期待されていた。ところが三十代の若さで病死します。代わって即位したのが幼い息子。

みんなガックリする。また、混乱がつづくのか、というわけだね。唐末以来の長い混乱で情勢は煮詰まっている。平和な世の中をみんなが望んでいる。幼い皇帝ではこういう期待に応えられない。

軍人たちも無能な皇帝に仕えていてろくな事はないですから、幼い皇帝を喜ばない。

趙匡胤は後周の軍人だった。節度使の経験もありますが、新皇帝のもとで親衛隊長をしていた。北部国境に敵の侵入があったという報告で、趙匡胤は親衛隊をひきいて出陣した。

都の北方で宿営していたらかれのもとに部下の将校たちが押しかけてきて迫った。

「幼い現皇帝では混乱が起きる。あなたが皇帝になってください。」

趙匡胤は親衛隊長として反乱なんてできないと断るのですが、部下たちは強引で断りつけたら自分は殺されるかもしれない。そういう雰囲気だった。そこで、やむなく皇帝になると約束しました。部下たちは喜んで黄色の服を持ってきて趙匡胤に着せた。黄色は皇帝の象徴なのです。

そんなわけで、趙匡胤はいやいやながら皇帝にされ、親衛隊をひきいて都に戻り、幼い後周の皇帝から位を奪いました。こうして宋は建国された。

これは、宋の成立したあとに作られた記録だから、本当に趙匡胤がいやいや皇帝になつたかどうかはわからないんですが。はじめからそういう段取りを部下たちとつけていたのかもしれない。

しかし、それにしてもそういう芝居なら人民が納得する状況だったのです。

これはおまけの話ですが、宋は後周の皇帝一族を殺さずに丁重に保護していく。宋の時代に後周皇帝家はずっとつづいている。「水滸伝」には豪傑の一人として後周皇帝の末裔が出てくるんですよ。

後周以外にも、宋が全国統一するときにすんで降伏してきた十国の君主たちも同じように丁重な扱いを受けます。

戦乱を終わらせる、余分な血を流さない、という民衆の願いを、宋の支配者は自覚しているようですね。

宋の基本政策

趙匡胤は宋の太祖ともいいます。かれの時に、ほぼ中国を統一しますが、完全に統一したのは二代目皇帝の時です（979）。二代目は趙匡胤の弟、趙匡義（ちょうぎょうぎ）（位976～997）です。こちらは宋の太宗と呼ばれるほうが多い。

この兄弟が宋の基礎を固めた。

宋の政治方針は漢字四文字で覚える。「文治主義」です。

「文」の反対語は何かわかりますか。この場合は「武」です。文治というのは武力ではなく「文の力」で治めることです。

具体的には、節度使の権限をどんどん削っていく。地方の軍も弱体化させる。兵士を急に減らすと、失業兵士が賊になってしまふかもしれませんから、急には減らさない。そのかわり新しい兵士を採用しない。兵士はどんどん年をとってお爺さんになるわけだ。これでは戦力としては役に立たないので、政府はかれらに地方都市の城壁の修理とか橋や堤防工事などをさせる。こんなふうに地方軍を骨抜きにしていきます。

かわりに皇帝直属の軍、「禁軍」というのですが、これを強化します。

軍人の力を削って、かわりに文人官僚による行政機構を整備します。多くの文人官僚を採用するために科挙（かきょ）と呼ばれる採用試験がおこなわれた。

「選挙」という名で隋の時代からはじまって、唐の則天武后時代に充実させていたのですが、科挙が一気に重みを増し整備されるのは宋の時代からです。

なぜかわかりますね。この時代に貴族階級がいなくなっているからです。すべての官僚が科挙によって選ばれるのですから。

科挙

宋代の科挙を簡単に見ておきます。

科挙は誰でも受験することができます。年齢、出身地関係なし。女性はダメですけれどね。

試験は三年に一回。

三段階の試験があります。最初が郷試、これは地方試験。合格したら都で二次試験を受けることができる。これを会試という。

会試を通った受験者が最後に受けるのが殿試。これは宋代からはじまつた。皇帝自身による面接試験です。宮殿でおこなうから殿試だ。

官僚になれば一族みんなが潤うような財産と権力とが手に入る。一番で合格すれば将来の大臣は約束されたようなもの。

一旗揚げようという血氣盛んな者達は、腕力にものをいわせるんではなくて机に向かって勉強するようになる。政府に不満を持つ者も、反政府運動をするよりも受験勉強に精を出して官僚になってしまったほうが話が早い。

そういう意味でも、政府は積極的に科挙を宣伝します。これは科挙を受けるように勧める歌です。

「金持ちになるに良田を買う要はない。
本のなかから自然に千石の米がでてくる。
安楽な住居に高殿をたてる要はない。
本のなかから自然に黄金の家がとび出す。
外出するにお伴がないと歎（なげ）くな。
本のなかから車馬がぞくぞく出てくるぞ。
妻を娶（めと）るに良縁がないと歎くな。
本のなかから玉のような美人が出てくるぞ。
男児たるものひとかどの人物になりたくば、
経書をば辛苦して窓口に向かって読め。」
宮崎市定「科挙」中公新書より

窓口に向かって、というのは、昔だから、照明は暗い。日が暮れかけても窓からは光が射し込むから暗くなっても勉強しろ、ということですね。

この歌は太宗趙匡義がつくって意図的に流行させたといわれる。人民を取り込むのに必死だったわけです。太宗は科挙の合格者を一挙に増やした皇帝でもありました。

子供に勉強させるだけの余裕のある家は必死に受験勉強させます。少し利発な子供だったら親戚みんなでお金を出し合っていい先生のところに入門させて科挙の準備をさせる。子供は一族の期待を一心に担って勉強するのだから、プレッシャーも大きい。現在の受験勉強とは比較にならないでしょうね。

優秀な人だと十代で合格する場合もあるし、五十、六十になってもチャレンジしつづける人もいました。

合格率はどれくらいかというと、これは17世紀はじめくらい明朝末期の数字ですが、予備試験に合格して受験資格を持つ者が50万、それに対して殿試合格定員が300人程度です。すごい高倍率。

どんな試験をするのか。

論文で政策論を書かせる、儒学の経典の理解力をみる、そして詩を書かせます。当然、すべて論述です。

政策論は官僚に必要だと思いますが、儒学の理解や詩は官僚として必要なことでしょうか。儒学の理解度をみると、その人の徳を測ることと同じなんです。詩を書かせるのは文化人としての教養をみることです。

つまり、科挙の試験というのは、官僚として実務に有能な者なら誰でもいいわけではなくて、貴族的な人間を試験でさがすという意味合いが強いように思われます。今の大学入試のような単なる能力テストではない。人格を測るようなところがある。

だから、字がきれいなことも当然要求される。今みたいに鉛筆、消しゴムではない。墨をすって筆で書くんですよ。しかも、清書用紙を墨で汚したりしたらまず不合格だ。緊張します。

しかも、試験は三日間ぶつ通しておこなわれる。試験会場は鶏小屋みたいになっていて、受験生ひとりひとりに独房が割り当てられる。そこで缶詰状態で受験します。鍋釜、食材、寝具も持ち込んで、自炊しながら答案を書くのです。資料集には想像図がありますね。

なかには、緊張にたえきれずに発狂する受験者もいたようです。

合格するためにカンニングをする者もでるんだ。ただ、論述試験だからカンニングペーパーはあまり役には立たない。論語とか詩經とか暗記しているのが大前提で、答案を書くときにそれらをいかに上手に引用して文章を格調あるものにするのかというところが勝負所です。

だから、合格するために不正行為をするのに一番手っ取り早いのが採点する担当者を買収することです。高い点数をつけてもらう。

政府としてはそんなことが横行しては、科挙の権威が台無しになるので、懸命に不正防止策をする。

まず、答案の受験生の名前を糊付けして隠してしまう。賄賂を受け取っている採点官がだれの答案かわからないように。

みなさん、高校受験の時、答案用紙に名前を書いたかどうか覚えてますか。書かなかつたでしょ。受験番号だけだったね。教師のなかには受験生のことを知っている人もいる。ついでに、甘くなったりするかもしれない。そんなの困りますからね。名前を書いてはいけないことになっている。

ついでに言うと、わたしたち教員が試験が終わったらすぐに採点をするんですが、採点するときには、受験番号も見えないようにくくってあるんですよ。当然ながら全教員が一室に集まって一斉に採点する。必ず複数で答案をみる。また、答案をその部屋から持ち出すことはできません。間違っても教師が不正しないように、ですね。

高校入試ですらこうですから、国家の指導層を選ぶ科挙ではさらに不正対策がとられて

いる。

受験者の名前を隠すだけでは足りません。受験者の筆跡で誰かわかる場合がある。何しろ筆で答案書くんですから個性がハッキリでがちです。筆跡をわからなくするために受験者の提出した答案を別の役人たちが書き写すの。書き写して筆跡がわからなくなつたものを採点官がみる。

ここまでやると、不正はできないと思うでしょう。ところが、まだある。

どんな手段があるかというと、受験者が採点官に事前に答案の特徴を教えておくのです。といっても、どんな問題ができるかわからないので、「私の答案は二枚目の五行目の三文字目に「仁」という字を書きます。」というふうに教える。

これはもう防ぎようがない。しかし、あらかじめ決めた場所に特定の文字をいれて、しかも筋の通った論文にしなければならないわけで、これをやるには相当の実力がいりますよね。

そんなこんなの不正をたくらむ輩はいたかもしれません、科挙はおおむね公正におこなわれていきます。モンゴルが中国を支配した一時期をのぞいて王朝が変わってもずっとづけられ、20世紀1904年まで科挙はおこなわれたんです。

宋の時代には科挙官僚を出した家は「官戸」とよばれ、特権を得ました。徭役を免除など簡単にいいたら減税ですね。この特権はその家から官僚がいなくなれば、なくなってしまうものです。そういう意味で、家系そのものが高貴とされる貴族とは全然違うものです。

宋はこの科挙に象徴されるように文治主義の政治体制をつくりあげていきました。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

科挙一中	宮崎市定著。
国の試験 地獄中公 文庫	科挙に関しては、定番中の定番、古典中の古典。これを読んでいないと、中国ファンとは言えない。世界史の教師としては、ちょっと恥ずかしいかも、というぐらいの本。古本屋へ行けば、絶対にあります。
馮道一乱 世の宰相 中公文庫	砺波 譲 著。五代の時代を生き抜いた宰相、馮道の伝記。日本では無名の人だが、彼の生涯を通じて、一般にはわかりにくい五代の政治史がよく理解できる。

第34回 唐（前半） おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第36回 唐の文化](#)

[次のページへ](#)
[第38回 東アジア世界の変動](#)

世界史講義録 第38回 東アジア世界の変動

高麗

唐の滅亡という大変化は当然、周辺の諸民族にも影響を与えます。

朝鮮半島では新羅が滅んで918年、高麗が成立します（918～1392）。建国者は王建。

この王朝は文化面で高い成果を残しています。

まず金属活字を世界で初めて発明した。印刷にもコンピュータが普及している現在では活字というのは死語になりつつありますが、一つひとつの字のハンコを組み合わせてページを印刷する手法です。

のちにドイツでも発明されてこれが現在の印刷術につながります。一方、高麗で発明された金属活字はやがて消滅します。漢字はヨーロッパの言語と違って字数が多く活字を揃えるのに莫大な費用がかかったため高麗政府の援助がなくなるとともに消えてしまったと考えられます。

高麗政府は高麗版大蔵経の出版にも力を入れます。大蔵経というのは中国に伝わっていたお経の全集と思ってください。すべてのお経を集めたものです。これは、非常に質が高くて日本の室町時代の守護大名たちが争って買い求めたりしている。

この大蔵経の版木が今も残っていて、韓国では国宝です。

高麗青磁という磁器も有名な文物です。

高麗は中国にならって科挙をおこないました。文官の試験と武官の試験のふたつがあつたのでこれに合格した官僚を「両班（やんぱん）」といいました。ただ、この両班は中国とは異なり特権階級化していきました。貴族になるのですね。

高麗の話はこれだけ。

契丹

現在の中国東北部にはいろいろな少数民族がいるのですが、遼河という川の流域で半農半牧の生活を送っていた契丹族という部族がいた。かれらは、唐の支配がゆるむにしたがって、政治的に自立する。916年、契丹諸部族は統一し、遼（りょう）という国名で国を建てました。

建国者は耶律阿保機（やりつあぼき）という人。耶律が姓にあたる氏族名で阿保機が名です。へんてこな名前でしょ。でも耶律阿保機という名前を見るたびに、私は坂上田村麻呂とか、木下藤吉郎とかの日本の名前も中国から見たら同じようにへんてこなんだろうな、と思います。

遼は中国東北部から突厥帝国崩壊後のモンゴル高原を平定し、中国北方に大帝国を作り上げました。そして、しばしば中国北辺に侵入します。

五代十国時代には中国の燕雲十六州という土地を獲得しています。

燕雲十六州というのは現在の北京を中心とする地域です。燕とか雲とかいうのは州の名前です。十六の州があったのでまとめて燕雲十六州というのです。ここを遼が獲得した事情を簡単に説明しておきます。

五代の二番目に後唐という王朝がありました。これを倒したのが後晋ですが、後晋の建国者が石敬塘（せきけいとう、注：「とう」のヘンは王が正しい。文字がでないので土ヘンで代用しています）。かれは後唐の節度使だったのですが、反乱をおこして後唐を滅ぼした。

この時、石敬塘は軍事力が足りなかつたので遼に援助を求めたんです。遼が軍事援助の見返りに求めたのが燕雲十六州です。

結局、石敬塘は遼の援助で後晋王朝を建て、燕雲十六州を遼に譲った。燕雲十六州は万里の長城の内側です。つまり、中国の伝統的な領土で、住んでいるのも漢民族の農耕民です。

これ以後、宋の時代になっても燕雲十六州は遼の支配下あります。

北方の民族が中国を支配することは五胡十六国時代以来あったのですが、それまでの北方民族はすべて、中国の文化に同化していました。北魏が好い例で、孝文帝が漢化政策を実施したことは覚えてますね。

五代の後唐の支配者も突厥系つまりトルコ人が中国文化に同化した人たちですし、後晋の石敬塘もやはりトルコ系ですが、かれら自身がそのことを意識して行動している節はありません。完全に中国化しているように見える。

ところが、遼の契丹族はそうではなかった。中国文化に同化することを極力避けようとしています。民族の独自性を保とうとする。

そのためには燕雲十六州の統治は慎重におこなう必要があった。下手をすると中国文化に感化されてしまって、いつの間にか同化してしまうことがありますからね。そこで、遼は「二重統治体制」という方法を採用した。燕雲十六州の支配制度を北方の自分たちの本拠地とは完全に切り離して、両者が混じり合わないようにしたのです。

遊牧民の世界には北面官という役所を置いて、各民族の部族制度を維持したまま統治します。

漢民族などの農耕民族には南面官という役所を置いて、州県制によって支配しました。

このように民族文化の独自性を守る姿勢は文字制定という形でもあらわれる。

契丹族は漢字を使うのを避けて、わざわざ民族独自の文字を作った。これが、契丹文字です。字形を見てもらったらわかりますが、漢字の影響を強く受けている。

日本でも同じ時期に「かな」が発明されます。

唐は国際色豊かな帝国で、周辺の諸民族に大きな影響を与えましたが、唐の衰退後は周辺諸民族は民族意識に目覚めていったと言えそうです。

話を元に戻しましょう。

燕雲十六州は中国から見れば本来は自分たちの土地です。宋は中国の統一をしたのち、燕雲十六州を取り返そうと、しばしば遼軍と対決しますが勝てない。

1004年には遼は宋の都開封近くまで攻め込み、宋は遼と和平条約を結びました。

この和平条約を「セン淵(せんえん)の盟」という。

この条約で、宋は遼に毎年絹20万匹、銀10万両を贈ること、宋を兄、遼を弟とすること、両国国境は現状維持、と決められました。

宋が兄で遼が弟なのだから、名目的には宋の方が偉い、という形ですが、お兄さんの宋は弟の遼に毎年莫大なお小遣いをあげなければならないし、国境現状維持ということは燕雲十六州を宋はあきらめる、ということですから、実質的に遼の勝利です。

これ以後宋と遼は基本的には平和が保たれました。

西夏

もうひとつ10世紀末から力を伸ばしてきた民族にタングート族がいます。ティベット系の民族です。かれらは牧畜農耕を中心の生活をしていましたが、唐末から東西交易路を押さえ、勢力を増大させます。中国から中央アジアに至るルート上に建国します。

かれらの建てた国が西夏（せいか）です。建国者は李元昊（りげんこう）。中国風の名前ですが、タングート族です。きっと別の民族名も持っていたのでしょう。

西夏は宋と長年に渡って戦争をつづけます。貿易上の利害関係で争うのですが、最終的には1044年、両国の間に和議が成立しました。

このときに決められた西夏と宋の関係は、宋が君主で西夏が臣下の「宋君西夏臣」関係。

遼との「宋兄遼弟」関係に比べれば宋が大分と偉い。

だけれども宋が西夏に対して年毎に金品を送ることは遼との場合と同じです。実質的には西夏に軍事力で勝つことをあきらめた宋がお金を払って国境地帯の平和を買っているわけです。

この西夏のタングート族も独自の文化を発展させようと考えて西夏文字を制定しています。この文字も、やはり漢字をモデルにしているようです。非常に複雑な字形ですね。現在すべて読めるわけではありませんが徐々に解説が進んでいます。

こうして、宋は契丹族の遼にもタングート族の西夏にも軍事的には勝つことができず、金品を払って平和を維持するという外交政策をとるようになりました。

もともと宋は文治主義を基本政策として、軍隊を強大化させないという方針でしたから、当然の結果ともいえます。ただ、宋は、軍事的には弱体でも経済的には非常に繁栄していました。だから、平和を金で買う、ということが出来たのです。

第38回 東アジア世界の変動 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第37回 五代から宋へ](#)

[次のページへ](#)
[第39回 王安石の新法・金の建国](#)

世界史講義録

第39回 王安石の新法・金の建国

王安石の新法

遼、西夏という隣国に対して宋はお金で平和を買うという政策をとるようになりました。

ただしこれも長く続くと、さすがに経済大国の宋でも苦しくなる。遼と西夏に支払う歳貢が宋政府の財政を圧迫するようになる。政治改革をおこなって財政再建をすることが宋政府の課題となります

。

こういう状況で登場したのが王安石。第六代皇帝神宗が抜擢して政治改革をゆだねた大臣でした。

王安石は親父さんも科挙官僚だったのですが、かれが19歳の時に死んでしまう。王安石は頭が良かったんですね。22歳で科挙に合格する。4番の成績で合格したので中央政界でエリートコース出世街道を駆進することもできたのですが、一家の生活を支えるために実入りの大きい地方官の道を選びます。地方の実状を知る中で、政治の矛盾や不合理について考えるようになる。やがて地方で実績をあげ評判になる。ついには45歳で神宗に抜擢されて宰相になりました。宰相というのは皇帝に全面的に政治を任される、今風にいえば総理大臣です。

さて、王安石は新法という呼び名で有名になる政策を断行して、財政再建を図ります。

財政再建のために一番簡単な方法は増税です。しかし、ただ増税するだけでは一時的に財政難をしのげても長い目で見れば人民の生活は疲弊する。王安石は貧しい人々の生活を豊かにすることを考えた。景気がよくなり、貧困層が豊かになれば自然に税収は増える、こういう発想をしたのです。なかなか偉い。

王安石の新法は大きく分けて六つある。

青苗法（せいびょうほう）、均輸法（きんゆほう）、市易法（しえきほう）、募役法（ぼえきほう）、保甲法（ほこうほう）、保馬法（ほばほう）です。

青苗法は政府が農民に低金利で金を貸す法律です。

大きな土地を持っていない限り自作農はかつかつの生活をしているもの多かった。自分の土地を持っていてもそれだけでは足りないものは地主・形勢戸から農地を借りている場合も多いのです。

農民というのはサラリーマンと違って、決まった収入が毎月あるわけではない。米を作っているのなら、収穫は秋だけだ。収穫をしたら早速政府に税を納め、土地を借りていたら小作料を地主に支払う。さらに米を売ったお金で必要最小限の生活道具や農具を買わなければならない。そして、最後に残った収穫物を翌年の秋まで食べつなぐ。これが翌年の収穫までもてばいいんですが、そうはいかない場合も多い。不作の年であれば、食料用の米もすぐになくなってしまう。そうなると借金をして生計を立てなければいけない。農民が借金をする先は地主です。

この地主からの借金の利子が高かった。いちど借金生活にはまってしまうとなかなか抜けられないものです。秋の収穫のあと、税、小作料、それに借金と利子を払うともう自分の取り分がなくなる、また借金する。最後には借金が払えきれなくなって、わずかばかりの土地も売り払って隸農か浮浪者に転落していくことになる。

こんなふうに自作農が没落すると、政府からすれば課税対象者が減るわけです。自作農を没落させず、ぱりぱり働いて収穫あげて、しっかり納税してもらわないと困る。

そこで、自作農救済策として政府が地主よりも低金利で農民に金を貸すことにした。低金利といっても20%から30%の利子だったというから、現在の目で見れば結構高利ですね。それだけ地主の利子が高かったということでしょう。

青苗法は新法の中でも成果を挙げたものの一つでした。

均輸法は漢の武帝の時代におこなわれていますが、それと同じと考えて結構です。物価の安定と流通の円滑化のために政府が市場価格の安いときに物資を買い上げ、高い時期や他の地方に転売して、商人の中間利潤ができるだけ押さえようとしたものです。物価が安く安定してくれれば貧しい民衆にはありがたいわけで、生活も楽になりますね。

市易法は青苗法の都市版と考えたらわかりやすい。

都市には零細商人が多数います。かれらは豪商たちの買い占めや価格操作のために、圧迫されていた。市易法は政府はそういう中小零細商人に低利で営業資金を貸し出すものです。

募役法。これはややこしい。税の納め方なんですが、今だったらサラリーマンなら給料を受け取るときに自動的に税金は引かれている。自分から払いにいく必要はありません。自営業の人だったら確定申告とか自分で税務署へいって手続きをしなければなりませんが、税務署に一日出かけていくくらいで、そんなに手間がかかるものではないです。

これが、農業社会ではどうか。中国のように広大な国ではどうなるか。

一軒の農家に村全体の税を徴収して、しかもそれを県の役場まで運ぶ仕事が割り当てられる。これを職役といって、大変な仕事だった。職役が当たつたら家がつぶれる、とい

われていた。何が大変といって、とにかく金がかかる。租税を役場に運ぶといつても、田舎だったら役場まで何日もかかる場合もずいぶんある。しかも米、小麦やその他の現物を村の分全部まとめて輸送するのですから、量は莫大。この輸送費用を職役に当たった農家が自己負担で運ばなければならない。おまけに輸送途中にいたんだり目減りした分も、輸送担当の農民の負担です。

職役が当たったために、自分の土地を売って費用を捻出する、ということもしばしばあった。自作農が没落してしまいますね。

政府は決められた税額が納入されればそれでよい、そのために農民が没落してもそれは政府のあざかり知らぬこと、というのが基本的な態度でした。

ただし、官戸、官僚をだした家ですね、これには職役が当たらない特権がありました。

王安石はこの職役の重さを解消するために、農家全体から免役錢を徴収して、その金で職役を担当する者を雇わせた。毎年、一軒の農家に重い負担をさせるのではなくて、広く薄く負担させたわけだ。これが募役法。

保甲法と保馬法は、上の四つとは違って直接農民や商人を救済する政策ではありません。軍事に関するものです。

保甲法は農家を組織して自警団を作らせたもの。遼や西夏と接する地方では軍事訓練もおこなって軍事費の削減をめざしました。保馬法はこういう農家に軍馬を飼育させたものです。

----- 党争の激化 -----

王安石は宰相として新法をおこなっていくのですが、反対派の官僚も多くいました。もともと中国では王朝の創始者の定めた政治体制を改革することを良しとしない、という伝統的な考え方がある。大胆な改革は内容に関係なく嫌われるのです。

王安石の新法に反対する官僚たちは旧法党と呼ばれます。旧法党の中心人物は司馬光（しばこう）という人です。王安石は新法を実施するときに司馬光にも協力を要請したのですが、断られてしまった。その後、司馬光は最後まで新法に反対しつづけました。

新法を支持するグループを新法党という。やがて、王安石の後ろ盾だった神宗が死ぬと、宋の政界は新法党と旧法党の争いに明け暮れるようになります。

王安石の新法が継続して実施されつづけたら大きな成果を挙げたかもしれないですが、王安石が宰相を退いたあとは旧法党と新法党が交互に政権を担当するようになり、そのたびに報復人事が繰り返される。よかれと思って始めた新法が、政策の動揺と国家体制の弱体化を招くことになってしまったのです。

旧法党はなぜ、王安石の新法に反対したのでしょうか。先ほど述べた、改革を伝統的に嫌うという理由以外に大きな原因がありました。

新法の政策を考えてみると、高利貸しでもうけている地主や、大商人の利益を押さえ、自作農や中小商人を保護するというところが要点ですね。これは、地主や大商人にはありがたくない政策です。

つまり、旧法党の人々は大地主、大商人の利益を守る立場に立っていたということなのです。まあ、だいたい科挙に合格するような人たちは、家が大地主だったり、縁者が大きな商売をしていたりするものでしょう。自分たちの不利益になるような政策に賛成するわけがない。

こう考えると、王安石は個人的な利害よりも国家の利益を優先させて考えることができた政治家だったのですね。

金の建国と靖康の変

宋が新法党、旧法党の争いで混乱しているちょうどそのとき、現在の中国東北地方で新たな民族の活動が活発化します。遼の支配下にある沿海州から中国朝鮮国境あたりにかけて女真族という民族がいました。半獵半農生活の人たちです。毛皮や砂金を遼に納めていたのですが、やがて完顔阿骨打（わんやんあくだ）が諸部族を統一して金という国号で建国します（1115）。完顔は氏族名、阿骨打がファーストネームです。

遼の国の東端でいきなり独立国ができたわけです。当然遼は軍隊を送って、金を潰しにかかるのですが、金の女真族が遼軍に勝って独立を確保する。どうやら、遼は建国時の勢いをなくして軍隊は弱体化していたようですね。宋から莫大な歳貢を贈られて軟弱になっていたんだろう。

宋は北方で金という新興国が遼と戦っているのを知って考えた。「金と同盟を結んで遼を南北から攻めて滅ぼすことができないか」。というわけで早速宋と金の軍事同盟が結ばれた。遼が滅亡したあとは、万里の長城以北は金、以南は宋の領土とする、という条件です。成功すれば、ようやく燕雲十六州が取り戻せるわけですね。

金と宋による作戦が始まると遼はあっという間に滅んでしまった（1125）。

ただ、このときに金軍は瞬く間に長城以北を制圧するんですが、南を分担していた宋軍はからきし弱かったです。燕雲十六州に攻め込むんですが、遼の守る都市を攻め落とすことができない。長城以北はすっかり制圧されているのに唯一燕雲十六州の遼軍だけが抵抗を続ける状態になる。

金軍は長城までやってきて、様子を見守っている。長城以南は宋軍の担当ですから。

「宋よ、とっとと遼軍をやっつけよ」、てな感じです。しかし、ダメ。とうとうたまりかねた金軍が燕雲十六州に進軍し遼の残存勢力を撃破して遼は滅んだのです。

このときに遼の王族の一人耶律大石（やりつたいせき）が西方に逃れて、中央アジアで西遼（せいりょう、「カラ=キタイ」ともいう）という国を建国しています。契丹族の勢力が中央アジアまで及んでいたことがわかります。

さて、遼が滅んだあとなんですが、金と宋の共同作戦と言いながら、実際には宋は何もできなかつたね。ところが事前の約束通りに長城以南燕雲十六州の領土を要求する。金にしてみれば汗流してもいないのに分け前だけは要求する宋の態度は許せない。

ここから、金と宋のトラブルが始まります。宋は多額の金品と引き替えに北京方面の領有を金に認めさせるのですが、その約束を守らず、金品を払わない。怒った金が軍隊を出動させると、調子のいいことを言ってその場をごまかすのですが、また約束を反故にする。

度重なる宋の同盟違反に対して、ついに金は大軍を南下させ、あっと言う間に都開封を攻め落とし、皇帝徽宗と息子の欽宗を捕虜にして長城の北に連れ去ってしまった。徽宗は金軍が攻めてくると責任逃れのためにあわてて息子に位を譲るので、正確にはこのときの皇帝は欽宗です。念のため。

この事件のことを「靖康（せいこう）の変」という。1127年のことです。
これで宋は滅亡してしまった。

ただ、金は中国の南部まで支配下におさめるだけの力はなかった。華北を支配するだけで精一杯だったようです。女真族自体はそれほど人口も多いとは思われませんから、ここまで急成長でずいぶんと背伸びをしていたに違いありません。

中国南部には、宋の皇族の一人が南宋を建国します。これに対して、靖康の変で滅んだ宋を北宋といいますので、これも覚えておいてください。

金は遼につづく征服王朝です。中国統治についても遼の二重統治体制を引き継ぐ。
遊牧民に対しては猛安・謀克（もうあん・ぼうこく）制を適用する。各300戸で1謀克、10謀克で1猛安という軍事編成の組織をそのまま行政組織に利用したものです。
猛安、謀克というのは女真語に漢字をあてたものですからそのまま覚えてください。

これに対して、漢民族など農耕民社会には州県制、科挙などを実施して遊牧民に対する統治とは分けていきます。

基本的に女真族は独自の民族文化の維持を心がけていて、女真文字を制定しています。また、女真族の男たちは前髪をそり落として後頭部の髪を伸ばして編むのですが、この

ヘアースタイルを金朝支配下の漢民族にも強制しています。中国最後の王朝清朝も実はこの女真族が建てた国で、同じヘアースタイルを中国人に強制しました。弁髪という。キン肉マンにでてくるラーメンマンの髪型です。

第39回 王安石の新法・金の建国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第38回 東アジア世界の変動](#)

[次のページへ](#)

[第40回 南宋・宋代の社会と文化](#)

世界史講義録

第40回 南宋・宋代の社会と文化

南宋

靖康の変で徽宗、欽宗親子が金軍によって、北方に連れ去られたあと、徽宗の息子の一人高宗が南方に逃れて建国したのが南宋（1127～1279）です。首都は臨安。今の杭州です。臨安というのは臨時の皇帝の居場所という意味で、いつかは金から中国北部を奪還しようという意図がこめられています。

建国早々の南宋では金に対してどういう政策をとるか、ということが課題になる。そして和平派と主戦派が対立しました。

和平派の代表政治家が秦檜（しんかい）です。この人は靖康の変の時に、徽宗たちと一緒に捕虜として連行されて、しばらく金国のもとで暮らした経験がある。だから、新興国家金の勢い、質実さ、強さを充分見ているわけです。

その秦檜に言わせれば、金と戦って領土を奪還するなんていうのは、話としては景気がいいけれど全く不可能。そんなことをしては南宋まで滅びることになる。南北で金と南宋は棲み分けをして、友好関係を築くのが現実的な選択、という。

秦檜のことは、それなりに説得力はあるのですが、一つ大きな問題があった。それは秦檜自身の問題でした。

金の捕虜になっていた秦檜がなぜ南宋に帰ってくることを許されたのか、という疑惑がもたれていたのです。ようするに秦檜は対南宋和平工作のために金から送り込まれたエージェントではないか、ということです。

さらに、秦檜の和平の主張がいくら理にかなっていても、国の半分を奪った相手と仲良くしようというのは、いかにも弱腰でなきれない。

これに対して、あくまでも戦って領土を奪還しようという主戦派の主張は勇ましいから人気がありました。

この主戦派の代表者が岳飛（がくひ）です。

岳飛はたたき上げの軍人です。まだ三十代の若い将軍で金との国境地帯の防衛に大活躍しました。かれの軍は規律が厳しく守られたことで有名でした。

皇帝高宗はというと秦檜の和平派を採用します。岳飛はあくまでもそれに反対します。

人望もあり軍隊を握っている岳飛が反対をとなえ続けることは、高宗・秦檜にとってはじゃまです。そこで秦檜は岳飛を都に呼びだして毒殺してしまった。

これ以後秦檜は権力を握り続けるのですが、殺された岳飛はやがて民族の英雄として祭り上げられるようになりました。

資料集の写真を見てください。杭州に岳飛廟というのがあって、今でも参詣する人が絶えません。で、この岳飛廟の一角に、これ、二人の座像があります。後ろ手に縛られてひざまづかされているのですが、これは秦檜とその妻です。二人の像は頭とか肩がテカテカと黒光りをしているでしょ。岳飛を殺した秦檜は超悪役にされてしまっていて、岳飛廟を訪れた人々はこの像に唾を吐きかけていくのです。テレビで見たことがあるんですが、大声で秦檜像に向かって怒鳴りつけているね。それから、ペッ、ペッと唾を吐いていた。すごい剣幕でしたよ。現在の話ですよ。岳飛が殺されてから800年が経っているのにですよ。なんだかびっくりしましたね。

1142年に、南宋は金と盟約を結びます。両国の関係は「金君南宋臣」で、南宋は多額の歳貢を金に送ることになりました。

しかし、華北を金に取られながらも南宋は経済的には繁栄します。金は南宋を滅ぼすことはできなかつたし、南宋も華北を奪還することができず、両国は大体淮河（わいが）という河を国境として住み分けることになったのです。

やがて、この両国を滅ぼしてアジアを大統一するのが、モンゴルです。

金は1234年、南宋は1278年、モンゴルによって滅ぼされます。

宋代の社会と文化

北宋、南宋をひっくるめて社会の特徴と文化を見ていきます。

- 官僚

宋代は貴族が無くなりますから皇帝の権力を押さえるものがいない。皇帝一人だけが強大な権力を握ります。皇帝のもとで実際に民衆に対して権力を振るうのが官僚です。そういう意味では官僚が支配者といってよい。

官僚は戸籍上は「官戸」とされて税制上の特権を持ちます。そういう意味では特権階層ですが、その特権は「家」に与えられたものではなくて科挙に合格した個人に与えられるものです。ここが、貴族と違うところ。

かれらは科挙に合格しているわけですから、一流の知識人、学者、読書人でもある。学問があるということは、人々から尊敬されます。地域社会のリーダーとして信望を集め

るような存在です。そういう意味でかれらは「士大夫（したいふ）」と呼ばれます。

また、学問を修めるためには、家に経済的余裕が無くてはならないわけで、士大夫と呼ばれる人たちはほとんど地主出身です。宋代には地主を形勢戸といいましたね。

宋代の支配社会層は、官僚としては官戸と呼ばれる特權者であり、地域社会では士大夫と呼ばれる知的リーダー、経済的には形勢戸という地主、この三つ面をもった階層として理解します。

これに対して被支配者階層は自作農と「佃戸（でんこ）」と呼ばれる小作人です。

魏晋南北朝から唐までの時代と違うのは、この支配者と被支配者の関係が固定的ではなかったことです。地主であっても何代も官僚を出さなければ没落することはある得るし、小作農であっても優秀な子供が出て、科挙に受かれば一気に資産家に成り上がることができる。

中国社会は一族のつながりが強いので、一族の中に飛び抜けて頭の良い子がいたら、みんなして勉学資金を出し合って、いい先生のところに就けて科挙を目指させる。だから支配者階層に入る人たちは何十年か経つとかなり入れ替わる。貴族階級として支配者が固定化しないわけです。

・農工業

宋の時代は農業生産量の増大が著しい。特に江南、長江の下流域を中心に開発が進みます。

「江浙（こうせつ）熟すれば天下足る」とは当時の諺です。長江下流地方が豊作ならば、ほかの地方が凶作であろうとも国中が飢えに困ることはない、そういう意味です。天下の台所ということですね。

この時期には占城稻（せんじょうとう）、チャンパ米ともいいますが、これがベトナム方面からもたらされました。この品種は干害に強く中国南部の稲作地帯に急速に広がります。特に成長が早かったので、一年二毛作、二年三毛作なども広まり、食糧の増産が可能になった。

茶の栽培もおこなわれるようになります。飲茶の風習は唐代から広まるのですが、茶はあってもなくてもよい嗜好品ですから、本格的に栽培されるようになったということは、食料生産に余裕が生まれてきたことの結果でもあるわけです。

手工業では陶磁器。青磁、白磁がこの時代の代表的な陶磁器です。資料集の写真を見てください。中国の人たちは磁器のこの透明感が好きなようです。指でピンとはじいてチーンと音が響く感じ、わかりますよね。春秋戦国時代の玉器を磁器で再現したいのではないかという気がします。

日本人は茶道の茶碗のような、いかにも土くれをこねました、という陶器が好きですね。備前焼のように素材の土がそのままのものね。備前焼と180度逆の感性が青磁、白磁だと思います。日本人の趣味はきっと中国人には理解しがたい、田舎臭い感じがするのではないか。

青磁、白磁は西アジアから東アジア全体に輸出されています。

この青磁を朝鮮半島、高麗で再現しようとしたのが高麗青磁です。

・商業

唐代には商業活動に対しては政府の制限がありました。たとえば長安には東西に市がたてられていましたが、それ以外のところで店舗を構えて商売はできなかった。また、営業時間も正午から日没までに制限されていました。

宋代にはいるとこのような制限は無くなります。どこに店を構えてもいいし、営業時間も無制限。地方にも市が立てられるようになって、これが商業都市へと発展してきます。これが草市（そうし）と呼ばれるものです。田舎の市というニュアンスの言葉です。唐末五代の戦乱期に部隊が駐屯した場所にも商業都市が発展してくる。これを鎮（ちん）という。現在の中国の地名で何々市、何々鎮、と呼ばれる所は宋代以降に発展した比較的新しい都市だと思って間違いません。この草市の市という言葉が日本語に入ってきているのです。

教科書、資料集にも載っていますが「清明上河図」という絵がありますね。宋の都開封の賑わいを描いている。肉屋、酒屋、本屋など商店が並んでいるだけでなく、劇場があったり、講釈師がいたり、らくだをつれた西方からの遠隔商人らしい人がいたりと、なかなか賑わっているでしょ。

同業組合も発達する。「行（こう）」というのが商人の組合、「作（さく）」が手工業者の組合です。行という言葉は日本語では「銀行」という単語に使われています。

商工業の繁栄は当然貨幣経済を進展させました。宋の時代は銅錢が大量に鋳造された。銅錢というのは金貨や銀貨と違って小銭です。銅錢が大量に作られるということは多くの庶民が必要としたということですね。

宋代の銅錢を特に宋錢といいますが、この宋錢はアジア全域から大量に出土します。日本も平安時代のおわりごろ、平清盛が熱心に日宋貿易をしますが、このとき大量に宋錢を輸入しています。

日本では皇朝十二銭という銅錢を発行していたのですが、やがて独自の貨幣発行をやめてしまう。その日本で流通したのが宋錢です。貧しい国で自国の貨幣の信用が無くてドルが幅を利かせているようなものですね。

今でも、地方の旧家の土蔵の中から宋錢がざっくりつまつた古い壺が見つかったりする。古銭屋にいっても一番安いんじゃないかな。

まあ、それだけ宋代の経済活動が活発だった証拠です。

小銭が銅銭とすれば、でっかい金額は紙幣ですね。

紙幣が初めて登場するのが宋の時代です。北宋時代の紙幣を「交子」南宋時代は「会子」といいます。これらは民間で使われていた手形が発達してできた物です。

・文化

学問の中心は相変わらず儒学ですが、新しい展開があります。

儒学というのは処世訓の寄せ集め的な面が強いのですが、宋代になって理論が体系化されます。これは仏教に対抗するためでした。仏教のように儒学もそれなりの世界観、宇宙観を持つようになった。これを「宋学」といいます。

宋学を大成したのが朱熹（しゅき）、朱子ともいいます（1130～1200）。

朱子は宇宙は原理と運動の二つから成り立つと考える。原理のことを「理」、運動のことを「気」といいます。この理論を「理気二元論」という。

さて、人間の本性は、「理」か、はたまた「気」か。朱子は「性即理」、つまり人間の本性は理だという。「理気二元論」ですから、「気」もあるわけで、本性が「理」なら、「気」は何か。

朱子は心が「気」だという。この心が運動して人間を悪い方向に導く。だから、常に人間は動かない物体を研究して、本性である「理」を確認しなければならない。そのためには儒学という学問を学び続けなければならない。物を究めて知識を確実にして修養をつむ、このことを「格物致知（かくぶつちち）」という。

ややこしいですね。とりあえず、「理気二元論」、「性即理」、この二つの単語を朱子と結びつけて暗記すれば受験的には大丈夫でしょう。

朱子にはもう一つ「大義名分論」という議論があります。

朱子は南宋の人ですから、中国の正統政権は金ではなく南宋であると主張したい。客観的に見れば両政権が中国に並立しているのであって、どちらかが正しい間違っている、ということはないのですが、中国にいくつかの王朝が並立した場合は、一つだけ正統政権で、あとは変則的な政権だと考える。これを大義名分論という。

日本では江戸時代に朱子学が儒学の正統とされます。水戸藩二代目藩主、かの有名な水戸黄門さんですが、このひとが朱子学の大義名分論の立場で「大日本史」という歴史書を編纂させる。ところが、大義名分論で日本史を書いていくと、どうも天皇が正統政権で徳川氏は政権の篡奪者になってしまふ。

変だなと思いながらも水戸藩は天皇が権力を持つべきだという歴史観を持ち続けます。御三家という立場とこの歴史観は、相当矛盾しますよね。だから幕末の水戸藩は党派闘争が激しくなって大混乱します。

ちょっと話がそれましたね。

宋学の学者でもう一人覚えておくのが陸九淵（りくきゅうえん、1139～92）。この人は朱子の「性即理」に対して、「心即理」をとなえた。朱子が人間の「理」を曇らせると考えた心こそが「理」だと考えたのです。たぶん、現代風にいえば、「心即理」は人間の主体性を重視する考え方だと思います。

陸九淵の思想は、明の時代の大学者王陽明に引き継がれていきます。さらには日本の吉田松陰に。この考え方の学者はみな行動的です。

歴史学では北宋の司馬光が重要。旧法党のリーダーで王安石のライバルだった男です。この人は『資治通鑑（しちつがん）』という歴史書を書きます。編年体という書法で書かれていることが特徴。

司馬遷の『史記』以来、中国の歴史書は紀伝体で書かれていましたね。紀伝体は基本的には人物中心なので、時間の経過に沿ってどんな事件が起きていたのかがわかりにくい。『資治通鑑』の編年体は時間系列で事件を順番に記述した。事件の流れがわかりやすくなっています。しかも、ただの年表ではなくて、読んで面白いように叙述に工夫がこらされている。これ以後、編年体は紀伝体とならぶ歴史書の形式になりました。

『資治通鑑』は戦国時代から五代十国時代までを描いた大著です。

散文学では「唐宋八大家」の歐陽脩（おうようしゅう）、蘇軾（そしょく）、蘇轍（そてつ）、王安石くらいを覚える。

それにしても王安石は一流の文章家でもあったわけで、司馬光といい、王安石といい、大政治家は同時に大文化人なのですね。

韻文では「詞」が大流行する。唐代の韻文は「詩」でした。「唐詩」という。宋では「宋詞」といいます。詞と詩の違い、わかりますか。

現代日本でもこの二つの言葉は使い分けていますよね。みなさんも自然に使い分けているよ。どう違うんですか。国語の教科書に載るのは詩、音楽の教科書に載るのは詞。

メロディが付いて歌われるのが詞、メロディがつかないのが詩です。

唄をうたうのはいつの時代でも庶民の楽しみの一つです。宋の詞というのは、庶民が歌った流行歌と考えたらわかりやすいと思います。唐詩は貴族の社交道具です。

宋代は都市の賑わいといい、詞の流行といい、庶民が経済や文化の担い手として登場してくる時代なのです。

絵画

北宋末期の皇帝徽宗は政治家としてはダメですが、芸術の才能は抜群で、宮殿内に画院

という工房を作つて絵を作らせます。この流派を「院体画」もしくは「北画」といいます。

資料集には徽宗自身が描いた「桃鳩図」が載っているね。緻密で、あでやかな画風です。徽宗は皇帝に生まれなくとも芸術家とし名を残したかもしれませんね。

院体画とは別に「文人画」もしくは「南画」と呼ばれる絵画もあります。画家では米芾（芾は「くさかんむり」に市）、牧谿（もつけい）らが有名。しぶい墨絵ですね。禅僧の描く絵がたいていこの派です。

最後に宋代の三代発明といわれる物を紹介して終わりにしましょう。

木版印刷、火薬、羅針盤、この三つ。

すべてが宋の時代に発明されたかどうかは、はっきりしないのですが宋の時代には実用化されていた。

やがて、これらはヨーロッパに伝わる。火薬はヨーロッパで鉄砲になり、羅針盤はコロンブスたちの大航海時代に大きな力をあたえることになります。羅針盤を頼りにアジアやアメリカ大陸にやってきたヨーロッパ人は鉄砲を使って征服をしはじめる。本家の中国人がそんなことをしなかったことを考えると、文化の違いというものを考えてしまいますね。

第40回 南宋・宋代の社会と文化 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第39回 王安石の新法・金の建国](#)

[次のページへ](#)

[第41回 モンゴル帝国の成立](#)

世界史講義録

第41回 モンゴル帝国の成立

----- モンゴル帝国の成立 -----

契丹族の遼帝国が金の攻撃によって滅んだ12世紀以降、モンゴル高原には、遊牧民の部族が分立、抗争を繰り返していました。そのたくさんある部族の一つにモンゴル族があった。

モンゴル人とか、モンゴル高原とか、現在使っている言葉ですが、このときにはそんな意味では使われていないですから注意してください。モンゴル族が遊牧諸部族を統一して有名になってからあとで、つけられた民族名であり、地名です。

当時のモンゴル部族そのものはたくさんある部族の一つに過ぎません。また、特に有力な部族でもない。

当時のモンゴル人の様子を南宋の人が書き残しているので見てみましょう。

「金は三年ごとに兵を遣わして北に向かって討伐をする。これを《減丁》という。今でも中原(黄河下流地方)の人はこのことをよく覚えている。20年前には山東や河北の家ではみなモンゴル人を買って奴婢としたものだった。彼らはみな金軍が捕えてきたものである。」趙珙（「つちへん」ではなく「王」に「共」が本字）「蒙韃備録」1221年

金の奴隸狩りの対象になっていたのですね。

この弱小モンゴル部族を統一するのがテムジンです。やがて、かれはほかの諸部族も統一して分裂していたモンゴル高原の諸勢力をまとめ上げた。1206年、クリルタイで大ハーンの地位につきチンギス=ハーンと名乗ることになった。

クリルタイというのは遊牧諸部族の族長会議です。ハーンというのは王の称号。チンギスという言葉の意味はわかっていないません。

ここにモンゴル高原の写真があります。現在でも遊牧生活をしている人たちがいる。これはその写真です。実に雄大な風景ですね。草原がどこまでも拡がっている。こんな所にゴロンとひっくり返ってみたいですが、実際行った人によると、この草原の草は非常に硬くてチクチクする、ひっくり返れるようなもんじゃないそうです。

まあ、そんなことはどうでもいいんですが、馬が群れているこの横に白いテントがあります。これがゲルというモンゴル人の住居。チンギス=ハーンの時代も同じような光景だったと思います。

遊牧生活というのは「遊」という字が入っているので、牧草を求めてあちこちをさまよっているようなイメージがありますね。でも、実際は遊牧する場所は、夏営地、冬営地と、集団ごとに決まっていて、季節ごとにテントを持って同じ場所を行ったり来たりするのが基本です。

モンゴル高原といつても、この写真のようなどこまでも緑の草原が続いている場所ばかりではない。岩がごろごろしている場所もあれば、砂漠に近い場所もある。だから、誰もが少しでも条件の良い場所で遊牧がしたいと思う。しかし、いくつもの集団が条件の良い場所に殺到したら牧草はすぐに食べ尽くされてしまいますから、どうしても良い場所は取り合いになる。

遊牧社会全体を統率する強大な権力者がいる時代は、争いにならないように集団ごとに牧草地を割り振っていきますが、そうでない時代には、諸集団は常に争いあっています。

テムジンの少年時代はまさにそういう時代でした。戦国時代といってよいです。

テムジンの父親イエスゲイはモンゴル族の有力貴族の一人でした。モンゴル族そのものが当時はまとまっていない中で、イエスゲイは配下の集団を増やしてモンゴルの族長の地位を目指していました。強くなればそれだけ、良い牧草地をほかの集団から奪うことができますからね。また強いリーダーのもとには多くの遊牧集団が集まってきます。強い奴に付いていれば自分の安全も生活もそれなりに保証されるというわけです。

ところが、テムジンの父親は敵対するタタール族のものに毒殺されてしまった。テムジンがわずか9歳の時のことです。

9歳の子供に集団を束ねることなどできるはずはありませんから、イエスゲイのもとで集まっていた遊牧民たちはテムジン一家を見捨てて、次々に去っていく。

それでも、テムジンは七人兄弟の長男だったので、9歳にして小さい弟たちと母親を率いる家長として行動することになるのですが、瞬く間にテムジン一家は牧草地から追いやられ、遊牧民でありながら遊牧で生活できないようになります。

かれらは狩猟採集生活をしながら何とか生きていく。河に入って魚を捕まえたりもしたらしい。「それが、なんだ！」と思わないでくださいね。遊牧民というのは誇り高いの。馬にまたがり草原を疾駆するのがかれらの本来の生活。地べたに這いつくばって、河で魚を捕るなんていうのは、最低の人間以下の暮らし、そういう感覚なのです。

また、ある時は獵をして鹿をしとめるんですが、獲物の分け合いで兄弟喧嘩になる。なんとテムジンは弟二人をそのときに殺しています。食べ物の奪い合いで兄弟を殺すような生活って想像できますか。

しかし、そういうぎりぎりの生活を生き抜く中で、テムジンは実行力、決断力、冷静

さ、悪くいいたら残酷ささえ身につけていく。

成長したのちは、父親の昔の同盟者などを味方に付けながら、徐々に力を蓄え、モンゴル族を統一し、次にはほかのモンゴル高原の遊牧諸部族を配下に従えて、チンギス=ハーンとなったのです。このときの年齢が40代か50代。どうもはっきりしないのですが、もうすでに若いといえる年齢ではない。当時の感覚では老人に近いでしょう。

これ以後、かれの支配下に入った遊牧諸部族はすべてモンゴルと呼ばれるようになります。

遼の滅亡後、百年ぶりにモンゴル高原を統一したチンギス=ハーンは、このあとはものすごい勢いで征服活動をすすめて、支配地域を拡大します。遊牧民のエネルギーというのは一つにまとまる強烈です。

当時のモンゴル人にとって、もっとも欲しかった地域は、東西交易路です。貿易路を押さえれば遠隔商人たちから莫大な税金をとることができるからね。

チンギス=ハーンが最初に征服したのが西遼です。遼が滅びるときに、王族の一人耶律大石が中央アジアに逃れて建国した国でしたね。まずはこの西遼を滅ぼした（1218年、正確には1211年に西遼を乗っ取ったナイマン部を滅ぼした）。

1220年にはイランから中央アジアにかけて領土を持っていたホラズム王国を滅ぼした。これはイスラム教の国です。

この間に東の金に対しても攻撃を加えています。

さらに1227年、モンゴルからの援軍要請を断った西夏を滅ぼしますが、この時にチンギス=ハーンは亡くなりました。

かれの死体はモンゴル高原のケルレン川の流域に埋葬されたらしいですが、副葬品の盗掘を恐れて何も記念物を作らなかったのです。それどころか埋葬したあと騎馬軍団がその上を何度も往復して墓の痕跡を完全に消してしまった。

だから、今もチンギス=ハーンの墓所は不明です。もし、発見されたら大ニュースですね。

かれが滅ぼして領土に加えた国はすべて東西交易路上にある国です。チンギス=ハーンの業績を一言でいえば、交易路を完全に支配下におき、大遊牧国家の建設に成功した、ということですね。

この段階でモンゴル帝国と呼んで差し支えないと思います。

モンゴルの強さ

チンギス=ハーンの死後もモンゴルの発展は続くのですが、なぜモンゴル軍が戦争に強

かったのか見ておこう。

チンギス＝ハーンは「千戸制」という軍団組織を作り上げた。
資料を見てみよう。

「人類始まって以来現在に至るまでモンゴル軍のようなものはかつて存在しなかった。彼らは困苦に耐え、快樂を喜び、命令に忠実である。それは賃金や封土や収入や昇進めあてではない。……出征に際してはその目的のために必要なすべてのものを点検する。……点呼の時には装備の検閲を受け、少しでも欠けたものがあると責任者は処罰される。……軍隊の召集や点呼の制度が完備しているので徴兵簿や徴兵担当官をおく必要がない。すべての兵士は10人の組に分けられ、その1人が長となって他の9人を指揮する。10人の十戸長から1人の百戸長を選び、100人がその指揮下に入る。1000人で千戸、10000人で万户を作り、万户の長をテュメンという。」ジュワイニー「世界征服者の歴史1」より

このように組織化された軍団がチンギス＝ハーンの意のままに動いたのです。この千戸制は軍制だけでなく、日常の行政組織でもありました。

千戸制のシステムによって集められた兵士たちはすべて軽騎兵です。機動力が抜群だった。機動力、わかりますね。簡単に言ったらスピードが速いということ。

モンゴル兵は一人で五・六頭の馬をつれて従軍する。騎馬軍団が遠征に出かけるでしょ。ずうっと同じ馬に乗り続ければ、馬だって疲れて潰れてしまう。そうすると、兵士はその馬を乗り捨てて予備の馬に乗り換える。こんな風にして次々と馬を乗り換えて行軍しますから、敵の不意をつく速さで戦場に到着して攻撃をすることができた。

ホラズム王国を攻めた時などは、モンゴル軍から包囲攻撃された都市が、別の都市にモンゴルが侵略してきたぞ、防備を固めろ！と危険を知らせます。知らせを受けた都市が防備を固めようと準備をしていると、もう地平線の向こうからモンゴル軍が迫ってくるのね。軍備を調える余裕さえ与えない。

乗り捨てられた馬たちはどうなるかというと、馬には鳩や犬と同じように帰巣本能というのがある。放っておけば、勝手に故郷に帰るので。遠征を終わって兵士が家族の元に戻ってみると馬の方が先に帰っている、という寸法です。

機動力を高めるためには余分な装備は持たず、荷物をできるだけ軽くした方がよい。また、遠征途中で馬に食べさせる牧草が無くては大変です。だから、チンギス＝ハーンに限らずモンゴルの皇帝たちは遠征計画が決定すると、遠征実施一年以上前から遠征予定進路上での遊牧を禁止します。モンゴル帝国のどの家族もその土地で遊牧はできない。そうやって遠征軍のために牧草をいっぱい生やしておくのです。

兵士の装備は次のようなものです。

革製鎧・兜、太刀・短刀・矢、馬（5～6頭）、手斧、やすり・キリ、釣り針・糸、引き綱、鉄鍋、革袋（水入り）、防寒毛皮マント、テント・敷物、干し肉・チーズ

兵士たちが日用品を自分で補修しながら遠征している感じが伝わってきますね。

モンゴル兵の強さの理由を続けましょう。

千戸制、機動力のほかに挙げるとすれば、モンゴル人の純朴さ、素直さというのがあると思う。いまでも、モンゴル共和国で遊牧生活をしている人たちというのは日本人がとっくに忘れてしまった人の良さ、みたいなものを持っているんだって。感動するくらい素朴な人たちらしい。

チンギス＝ハーン時代はなおさらでしょう。

素朴で素直と言うことは、兵士としては多分一番の適性ですよ。「前進」と命令されれば、何があってもどこまでも前進する。「殺せ」と命令されれば、とことん殺しまくる。

しかも、こういう兵士たちがチンギス＝ハーンに忠誠心を持つのですから、これに太刀打ちできる軍隊はそうそうない。上の資料で「困苦に耐え、快樂を喜び、命令に忠実である」ということです。

まだ、チンギス＝ハーンが大勢力を築く前、モンゴル高原の統一を目指していた頃ですが、ある戦いでチンギス＝ハーンの首に敵の矢が刺さって、ばったり倒れた。戦いが終わってもかれは昏倒したまま目が覚めない。やがて、吹雪になって雪が降ってきます。矢が急所に刺さっているだけに動かすに動かせない。

そこにひとりの武将が、自分の服を脱いでチンギス＝ハーンの身体にさしかけて一昼夜動かない。

一日経って、チンギス＝ハーンは無事に目覚めるのですが、自分の周りにだけ雪が積もっていない。まだその武将は身じろぎもせずに立っていたという。

こんなふうに忠義を尽くす武将が山ほどいるのがモンゴル軍です。

さらに初期のモンゴル軍は抵抗した都市を徹底的に破壊して、その住民を殺しました。恐怖の軍隊です。また、その残虐さを強調することで宣伝効果をねらったようです。

ホラズム攻略ではある都市を降伏させるとその住民すべてを奴隸にして、次に攻略する都市まで引き連れていく。そして、その奴隸たちを攻撃の第一陣として使う。または、攻撃のための土木工事に死ぬまで働かせた。抵抗すれば後ろからモンゴル軍に殺されるので、前進して仲間に對して攻撃を仕掛けなければならない。退くも地獄、進むも地獄です。

残虐さというのは、敵の抵抗を引き起こすもののようにですが、モンゴル軍のように徹底的にあっけらかんと残虐だと、抵抗する気もなくなるものなのかもしれません。

チンギス＝ハーンが晩年に将軍たちを集めて宴会をやった。チンギス＝ハーンは将軍たちにたずねました。「人生最大の幸せは何か。」

将軍たちは「草原で家族に囲まれてのんびり遊牧をすることです。」と答える。

「それは違う。」チンギス＝ハーンは言った。「人生最大の幸福は、敵を思う存分撃破し、駿馬を奪い、美しい妻や娘を我のものにし、その悲しむ顔を見ることだ。」

最後がすごいね。悲しむ顔を見ること、だって。成功したから英雄だけれど、とんでもない人ですよ。身近にいたら絶対に知り合いになりたくないね。

モンゴル族が対立する部族、ナイマンを滅ぼしたときにナイマン王の金印を見つけたチンギス＝ハーンは、それがなんだかわからない。この金印を文書に押すだけで王の命令が全国に行き渡るのだ、と教えられて非常に感心したという話がある。

また、金国の北部を占領したとき、中国の農民を皆殺しにして農地をすべて牧草地にすれば、たくさんの馬が飼えると喜んだ。それを聞いて耶律楚材という遼の王族出身でモンゴルに仕えていた男が、農民というのは生かしておけば一年に一度たっぷりと税金が取れるのですよ、とチンギス＝ハーンに進言します。フーンと思ったチンギス＝ハーン、一年様子を見ていたら確かに収穫時にどつと税が入って納得したという。

ひょっとするとモンゴル人を馬鹿にするために中国人が作った話かもしれません、それでも当時のモンゴル人の雰囲気を伝えていると思う。

要するに、初期のモンゴル人の政治的経験は遊牧社会にしか通用しないものだった。領土を拡大するにともなって、いろいろな統治技術が必要になってくる。だから、民族人種に関係なく有能な人材をどんどん政府の中枢部に組み込んでいきます。耶律楚材もその一人です。

また、チンギス＝ハーン時代のモンゴルの人口は十万戸、七十万人程度だそうです。征服地が増えるにしたがって、モンゴルの千戸制に組み込まれる人々も増えます。近代的な民族意識はまだない時代ですから、新たに組織された人々、政府中央で活躍する人々、それらをすべて含み込んでモンゴルと呼ばれる巨大な集団が形成されていったのです。

第41回 モンゴル帝国の成立 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第40回 南宋・宋代の社会と文化](#)

[次のページへ](#)
[第42回 モンゴル帝国の発展](#)

世界史講義録

第42回 モンゴル帝国の発展

----- モンゴル帝国の発展 -----

チンギス=ハーンの死後大ハーンの位を継いだのが、オゴタイ=ハーン（位1229～41）です。

かれの時代に金を征服し（1234）など、モンゴル帝国はいっそうの発展をしています。

国家建設が進むにしたがって、統治機構を整える必要がでてきます。

金国を征服することによって、大規模な農耕地域を支配することになる。前回も出てきました契丹族の耶律楚材などを登用して中国人を支配する機構を整えていった。契丹族も非農耕民でありながら中国を支配した経験がある、いわばモンゴル人の先輩格ですからね。

また、オゴタイの時代にモンゴル高原北部によくやく首都を建設しました。これがカラコルム。

しかし、首都を造ってはみたものの、オゴタイは壁に囲まれた宮殿に住むのが窮屈で仕方がない。宮殿の横っちょの草原で相変わらずテント暮らしをしていたそうです。外交上の式典として必要なときだけ宮殿に出向いたという。

チンギス=ハーンの子供たちについて触れておきます。オゴタイが第二代大ハーンになつたときさつについてです。

チンギス=ハーンには四人の男児がいた。上から順番にジュチ、チャガタイ、オゴタイ、トゥルイです。必ず長男が相続する中国のような、きっちりした相続制度はモンゴル人には無かった。ただ、末子相続が一般的だったらしい。

なぜかというと、農耕民族のように土地を相続するということはないので、子供は大きくなつたらある程度の馬や羊を親から分けてもらって一人立ちをしていきます。上の子からどんどん独立していくので、最後に末っ子が残る。で、親が死んだとき残った家畜の群を末っ子がそのまま相続するのです。

このパターンをハーン位継承に当てはめればトゥルイが大ハーンになるのですが、それに関しては、はっきりした決まりが無かった。そこで、遊牧民のリーダーとしてふさわしい者を有力族長会議であるクリルタイで決定することになります。



[オゴタイ=ハーン]

長男のジュチは、暗黙のうちに、はじめから跡継ぎとしては除外されていました。なぜかというと、かれの出生には因縁があった。まだ、弱小勢力だった頃、チンギス=ハーンは対立部族に襲われて新婚早々の妻を略奪されたことがある。一年後に、かれは復讐を果たし、奪われた妻を取り返すのですが、そのとき妻は妊娠しているの。そして、生まれたのがジュチ。

チンギス=ハーン自身、そのことでジュチを差別したりはしないんですよ。他の息子と同じように扱っています。でも、この話は公然の秘密だった。誰も口には出さないけれどみんなが知っていたのです。だから、ジュチの相続はありえなかった。ちなみにジュチというのは「客人」という意味だそうです。出生を考えると、意味深長な名前ですね。

次男のチャガタイは、大勢の前でジュチの出生のことを口に出すような軽々しいところがあるって、人望がない。

残る三男と四男、オゴタイとトゥルイが本命だったのですが、チャガタイがオゴタイと組んでオゴタイ即位となりました。

生前、チンギス=ハーンはジュチに西方へ遠征させるつもりで、「西の方どこまでもモンゴルの馬蹄で蹂躪できるすべての土地をおまえにやろう。」と約束していた。ところが遠征実行前にチンギス=ハーンもジュチも死んでしまった。そこで、オゴタイはジュチの息子バトゥに対して、遠征を命じた。

これが「バトゥの西征」。1236年から大遠征軍がロシア平原に出発した。バトゥを総大将にするモンゴル軍は向かうところ敵なし。ロシア平原を制圧してそのままポーランドに侵入した。

いきなり東方からやってきた騎馬軍団にあわてたのがヨーロッパの諸侯たちです。ドイツ、ポーランドの諸侯連合軍一万がバトゥ軍別動隊三万から四万を迎撃った。結果はモンゴル軍の圧勝。これをリーグニツツの戦い、または、ワールシュタットの戦いといいます。ワールシュタットというのは、この戦いのあとで付いた地名で「死体の森」という意味だそうです。

モンゴルが圧勝した理由は、前回話した機動力と、もう一つは集団戦法にヨーロッパ諸侯軍が対応できなかつたためです。

モンゴル騎馬軍団は整然とした隊列を組んで集団で攻めてくる。これに対して、ヨーロッパの軍隊は名誉と武勲を重んじる騎士の集まりだから、集団戦をしません。平家物語の頃の武士と同じで、戦う前に「やあやあ、我こそはどこぞこの領主、何とか伯である。いざ、じんじょうに勝負せよ！」とか言って、一騎打ちして勝敗を決める。これが基本です。そのつもりで騎士たちが構えていると、ろくに鎧甲も付けず、ネズミみたいに小さい馬にまたがった連中が集団でつっこんでくる。これでは、ひとたまりもありませんね。

このあともモンゴル軍が進撃を続けていれば、ヨーロッパもモンゴル帝国の一部になつたかもしれないのですが、ここで事件が起こる。オゴタイ=ハーンの急死です。次の大ハーンを決めるためのクリルタイに参加せよ、という連絡がモンゴル高原より来るんですね。

バトゥは兵を返します。ただ、かれはモンゴル高原まで帰らず、ロシア平原に留まってここを自分の本拠地にします。これがキプチャク=ハーン国と呼ばれ、モンゴル帝国の一部となります。

オゴタイ=ハーンの跡を継いだのは、その子のグユクですが、かれの即位には反対が多く正式に大ハーンになるまでに何年もかかります。また、即位してまもなく死んでしまった。オゴタイの死からグユクの死まではモンゴル帝国の混乱期です。

グユクは受験的には覚える必要なしです。

グユクの死後、またもや、大ハーン位をめぐって一族のあいだで争いが起きる。

第四代大ハーンになったのはモンケ（位1251～59）。かれは、チンギス=ハーンの末子トゥルイの子です。オゴタイ家からトゥルイ家に大ハーン位が移ったのには一族の長老バトゥの後押しがあった。チャガタイ家、オゴタイ家のチームに対して、ジュチ家、トゥルイ家は仲が良かったわけだ。

第四代モンケ=ハーンの時代になって、モンゴル帝国は再び征服戦争を開始しました。モンケは二人の弟、フビライとフラグにそれぞれ東と西の遠征をおこなわせた。

フラグの西アジア遠征はイスラムのアッバース朝を滅ぼしました。アッバース朝は500年も続いたイスラム教の中心的王朝でした。だから、これは西アジアのイスラム世界にとってはものすごい大事件だったのです。

フラグの遠征軍の一部はエジプトまで侵入しますが、ここでまた、モンケ=ハーンが死んで、フラグには帰還命令がでます。フラグもバトゥと同じようにモンゴル高原まで帰らず、イランに留まる。ここにできるのがイル=ハン国です。西アジア全体を勢力範囲におきました。

一方、もう一人の弟フビライはチベット、雲南にあった吐蕃、大理という国を征服し、西南方面から中国の南宋を攻略します。

この対南宋戦にモンゴルは大軍を投入して、各方面から作戦を展開していました。モンケ=ハーン自身も出陣して南宋戦を指揮していて病死したのでした。

モンケの出陣中、カラコルムに留守番として残っていたのが、フビライ、フラグ達のさらに下の弟、アリクブケという人なのですが、かれがモンケの死後大ハーンになる最有力者だった。即位のためのクリルタイを召集します。フラグもこれに呼ばれる。フラグの場合あまりにもカラコルムから遠く離れているので、モンゴル高原に帰って政争に

巻き込まれるより西アジアに自分の国をつくるという選択をしたのです。

しかし、フビライは対南宋戦で指揮下にある大軍を背景にして、強引に大ハーンに就こうとした。かれは、アリクブケのクリルタイに参加せず、自分の支持者だけでクリルタイを開き、大ハーンになってしまった（1260）。

アリクブケは、フビライに対抗してカラコルムで別にクリルタイを開き大ハーンになります。しかし、かれは政治的にも、軍事的にもフビライの敵ではなく、4年後にはフビライに降伏しました。

こんなふうにしてフビライが正式な第五代目の大ハーン（位1260～94）になったのです。

ここまで流れを見ると、モンゴル帝国はモンゴル人の支配地域が拡がるという意味では、どんどん発展しています。

しかし、一方で内部ではチンギス＝ハーンの一族の結束はだんだん緩くなり、あるいは対立するようになってきている。ということがいえます。

整理してみましょう。

チンギス＝ハーンの長男ジュチ家はバトゥが南ロシア平原にキプチャク＝ハン国を建設。

次男チャガタイ家は中央アジア（トルキスタン）を中心にチャガタイ＝ハン国と呼ばれる支配地域を形成しています。

三男オゴタイ家は西北モンゴリアにオゴタイ＝ハン国を形成。

四男トゥルイ家は、フラグが西アジアにイル＝ハン国を建設。そして、フビライが大ハーンとして四つのハン国を束ねると同時にモンゴル高原から中国北部、チベット方面を直接支配している。

モンゴル帝国はこの段階でチンギス＝ハーンの孫達がそれぞれ持っている所領の緩やかな結合体です。

フビライの即位に反対して、オゴタイの孫に当たるハイドゥが反乱（1266～1301）を起こしていますが、これはモンゴル帝国分裂の象徴的出来事として受験的には覚えておくこと。ただ、実際には大きな戦闘は一度しかなかったといいます。

フビライは実はチンギス＝ハーンの一族の中では変わり者とされていた。かれのどこが変わっているかというと、中国びいきなのです。代々、モンゴルの王侯達は中国文化には関心が薄く、イラン文化に代表される西方の文化に興味を持つのが普通だった。ところが、フビライは長い間南宋攻略をしていたので、自然と中国人と接触する機会も多かった。それで、中国びいきになったようです。

そこで、大ハーンになるとモンゴル帝国の首都をモンゴル高原のカラコルムから中国北部の大都に移した。大都は今の北京です。

さらに、国号を元とします。中国風でしょ。

1279年には南宋を滅ぼして東アジア全域を支配下に入れました。

日本、ビルマ、ベトナム、ジャワなどさらに遠方に遠征軍を送り出す、これらはみんな失敗に終わっています。なぜ、こんな遠征をおこなったかというと、モンゴルがそれまでに作り上げた陸のネットワークに海のネットワークを結びつけようとする試みだったという説もあります。

フビライ以後、元は中国の王朝となりました。

----- モンゴル帝国と東西交流 -----

西はロシア、シリアから東は中国までユーラシア大陸の大部分を支配して、モンゴル帝国は歴史上空前絶後の領土を持つようになった。全部一つの国なんだから戦争はなくなる。これを「タタールの平和」という。タタールとはモンゴルのことです。

モンゴル帝国は東西交易路の安全を確保するために、駅伝制を整備します。駅伝のことをモンゴルではジャムチという。資料集にありますがモンゴル政府発行の通行許可証が牌子（はいづ）です。これを持っていれば街道沿いにある宿駅で宿泊したり、馬を交換したりと便宜を受けながら旅をすることができた。これが駅伝制です。

駅伝を利用できなくても、交易路の安全はモンゴルによって守られていますから、商人は安全に遠隔交易をすることができました。ムスリム商人と呼ばれるイスラム教徒の商人達が特に活躍します。

安全な交通路を通ってヨーロッパからの外交使節もモンゴル高原にやってきました。ローマ教皇インノケンティウス4世から派遣されたのがプラノ＝カルピニ。ローマ教皇というのは西ヨーロッパのキリスト教会の最高指導者です。

フランス王ルイ9世もルブルクという人物を派遣した。

かれらの使命はイスラム教徒の勢力と対抗するためにモンゴルと同盟を結ぶことでした。カルピニはグユク＝ハーン、ルブルクはモンケ＝ハーンの時代です。モンゴル側は同盟を結ぶ気持ちなど全然ないので適当にあしらっています。

ルブルクもカルピニもジャムチを利用してカラコルムまで行っています。ルブルクはフランスから出発してとりあえずロシアまで行く。するとそこはもう遊牧の世界で、テントを張った人たちが遊牧している。カルピニは、かれらにキプチャクの大ハーンの所に案内してもらい、そこで通行許可証、牌子をもらっている。そのあとはトラブルもなくカラコルムまで行きました。

面白いのは、かれは旅の途中のオアシスの町やカラコルムで結構ヨーロッパ人に会っているのです。モンゴルの遠征で捕虜となって連れてこられたのかどうか、事情はわかりませんが、旅行記などを残さない職人や女達がかなりユーラシア大陸を大移動しているのがわかります。

また、モンゴルの宮廷にはキリスト教徒がいました。古代ローマ帝国時代に異端とされたネストリウス派キリスト教が西アジアから中央アジアにかけて拡がっていて、モンゴル王族の女性達にも信者がいました。ハーンの妻の中にもいる。モンゴル人は宗教に関してはあまり気にしない。日本人と同じような感性なんでしょうね。じゃまにならない限り自由に布教もさせていたようです。

フビライの時代に、ローマ教皇からモンテ＝コルヴィノという宣教師が派遣されるのですが、かれは大都で三十年間も布教しています。

モンゴル時代の旅行者で一番有名なのはマルコ＝ポーロですね。イタリアのヴェネツィア商人です。父親が遠隔貿易商人で、16歳で父と叔父に連れられて旅に出る。中国に着いて、フビライ＝ハーンに会った時には20歳っていました。若くて賢かったのでフビライに気に入られて、元の役人として中国各地で17年間働きます。

最後にイタリアに帰国するときは、イル＝ハン国に嫁入りするモンゴルのお姫様を中国から、南シナ海、インド洋をまわって船で送り届ける役目を仰せつかっている。

イタリアに帰ってから、戦争で捕虜になって牢屋に入れられてしまうんですが、牢中の暇つぶしに同室の囚人ルスチケロに自分の体験を話すんですね。あんまり、面白い話なのでルスチケロはこれを書き留めて本にした。

これが『東方見聞録』です。『世界の記述』ともいいます。

これが、ヨーロッパで広く読まれてアジアに関する関心が高まるんですね。特に「黄金の国ジパング」。ジパングでは金がザクザク採れるので宮殿は柱も屋根も金でできている、なんて書いてある。これが、のちにコロンブスが大航海を計画するきっかけの一つになったのは有名な話。

なぜ、日本がジパングなのかというと、日本という字は中国語読みすると「リーベン」という発音になる。「リー」という音は舌をグッと巻き上げて上顎の奥の方にくっつけて出します。「ジー」という音に限りなく近い。「本」の「ん」も中国語では「n g」音。それで、マルコ＝ポーロはジパングと聞いたんでしょうね。これが英語のジャパンの語源になります。

ジパングの話ですが、黄金の国だなんて全然嘘なわけで、マルコ＝ポーロの本の中には明らかな間違いも結構あるのですが、権力中枢にいた者しか知り得ない情報もある。研究すればするほど実に不思議な本なのです。

研究者にはマルコ＝ポーロは中国まで行っていない、という人もありますが、マルコ＝ポーロは実在せず、複数の旅行者の情報をマルコ＝ポーロという名前に託して作り上げたのが『世界の記述』だ、という人もいます。

元朝の中国支配

フビライ=ハーンから始まる元は中国の王朝となるのですが、モンゴル人はどのように中国を支配したのか。

「モンゴル人第一主義」という。一番上の身分がモンゴル人、二番目が色目人（しきもくじん）、三番目が漢人、最後が南人という序列がつくられる。

支配者はモンゴル人ですが、人口は圧倒的に少ないし、定住農耕民を統治する行政的な技術や経験が少ないので、行政技術者として主に西方出身のイラン人などを官僚として使いました。かれらのことを色目人というのです。色目人とは雑多な人たちという意味です。目の色が青いからではありませんよ。マルコ=ポーロなどは、まさしく色目人です。

漢人とはこの時代の特殊な使い方で、旧金朝支配下の漢民族、女真族、契丹族、高麗人を呼ぶ言い方です。

最下位の南人は旧南宋治下の漢民族のことです。

モンゴルは中国の伝統的な官僚登用試験である科挙を廃止します。儒学的教養に価値を認めないわけですね。中国の経済に寄生して、吸い取れるものは吸い取ろうということです。

マルコ=ポーロの『世界の記述』を見ていくと、マルコは中国各地を旅するのですが、中国人とはほとんど接触していない。中国語を話している形跡があまりない。同じ色目人同士でペルシア語ぐらいをはなして、日常の用は足りていたのではないかといいます。

かれらが中国を支配していながら中国人や中国文化に無関心だった具体例ですね。税金さえ取ることができればそれでよかったのです。

元の税収の中心は塩の専売税です。さらに交鈔（こうしょう）という紙幣を大量発行して中国経済の上位をはねる。

「モンゴルの平和」によって安全を確保されて中国にやってくる商人からの税収も多かった。

「五日目にザイトン(泉州)という非常にりっぱな大都市に着く。ここは海港で、インドの船はみな高価な商品、貴重な宝石類、大きいりっぱな真珠を満載してここへ入港する。また、マンジ(中国)の諸地方の商人たちもこの港に集まつてくる……。さて、大汗（フビライ）はこの都会と港から実に莫大な税収を得ているが、これはインドから来る船はすべて10パーセント、すなわち彼らが持つてくるすべての商品、宝石、真珠の価格の10分の1を納めることになっているからである。……こうして、税と船賃とで商人は載んできたものの半分は差し出さねばならぬことになる。しかも残りの半分でも大変な利益があがるので、もっと沢山商品を持って、もう一度こようと考える。これをみても、

大汗がこの都会から取りたてている税収がどんなに莫大なものであるか、容易に信じられるはずである。」（マルコ・ポーロ「世界の記述」より）

モンゴルというと陸の大帝国というイメージが強いですが、インド洋から南シナ海でも安定した海のネットワークができていたことに注意しておいてください。

元の時代、科挙が中止になったので、受験勉強をしていたエリート達の中には生活のために小説や芝居の台本を書く者が出てきました。それまでエリートは庶民の楽しみ、芝居・小説のたぐいは馬鹿にしていたから、中国史上前代未聞のことが起こったわけだ。知識人が小説を書くので、質の高い作品が生まれた。

この時代の芝居を元曲（げんきょく）または雑劇といいます。

有名作品としては『西廂記（せいしょうき）』『琵琶記（びわき）』。前者は若い男女の恋愛、『琵琶記』は夫婦の愛を描いたもので、内容的には女性の観客をターゲットにしているのではないかと思う。

劇は元の宮廷でも演じられたようです。面白いものは誰が見ても面白いのです。

小説では、『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』の原型が成立します。盛り場での講談がだんだんとまとめ上げられていったようです。

文字です。

契丹族、女真族、タングート族と中国周辺の新興民族は漢字に対抗して独自の文字を開発してきましたが、フビライもチベット人パスパに命じてモンゴル語を書き写す文字を制定しました。これが、パスパ文字。文字の歴史で出題されます。

学問分野では西方からイスラム科学が導入された。

フビライの時代に、郭守敬（かくしゅけい）という人がいる。かれは運河の建設とか水利工事もやっているんですが、天文学者として有名です。イスラム暦をもとにして「授時暦」という暦をつくった。これは江戸時代の「貞享暦」のもとになった。

月の裏側にはかれの名を付けた「郭守敬」というクレーターがある。

火星と木星のあいだにある小惑星帯の小惑星2012号は、別名「郭守敬」。

雑学でした。要するに中国が誇る歴史的天文学者っていうこと。

元の征服事業

元といえば、元寇。日本とも大いに関わりがある。

鎌倉時代に二回攻めてきたわけですが、一回目が1274年、文永の役、二回目が1281年、弘安の役です。

なぜ、この時期だったのか。フビライの目的はなんだったのか。

朝鮮半島にあった高麗国がモンゴルに服属するのが1259年。高麗政府は江華島という島に逃げ込んで抵抗を続けていたのですが、最終的にモンゴルの属国になる。高麗王はモンゴルのお姫様を妃に迎えて王室にモンゴルの血が入り込むようにさえなるのです。

ところが政府がモンゴルに降伏しても、軍隊は納得せずに半島の南西海岸を転々としながらモンゴル軍に抵抗を続けました。この高麗軍を三別抄（さんべつしょう）軍といいます。三別抄軍は海上の島々を根拠地にしたので、モンゴル自慢の騎馬隊も苦戦した。

この三別抄軍が最後につぶされたのが1273年。ようやくモンゴルは朝鮮半島を平定できたわけで、その翌年に第一回目の日本遠征、文永の役となります。

フビライは1271年と1273年に趙良弼（ちょうりょうひつ）という女真族出身の政治家を外交使節として日本に派遣していますが、趙良弼は鎌倉幕府の回答をもらえないまま、帰国している。幕府の対応は外交としては実に無礼なもので、完全にモンゴルを無視する態度でした。フビライはそれに怒って日本遠征をしたのかというと、それは違う。

当時元は南宋攻略の真っ最中です。日本兵を動員すれば、東シナ海経路で南宋を攻めることができるでしょう。日本を含んだ対南宋包囲網形成というのが第一回遠征の目的だった。

しかし、この遠征は失敗に終わりました。

その後1279年に南宋は滅ぼされます。その二年後に第二回日本遠征です。このときの目的はなんだったか。

南宋を滅ぼしたあと、元は旧南宋軍の処理に困ったらしい。南宋は元との戦争で大軍を抱えていました。南宋が滅んでも、その兵士達は大勢残っているわけで、かれらに仕事をあたえるための日本遠征だったようです。

だから、はっきり言って、フビライにとって第二回遠征は成功すれば非常にうれしいけれど、負けて大軍が海の藻屑となってしまってやっかいばかりが出来てそれはそれで悪くない、そんなものだったのではないかと思います。

第二回の遠征軍の兵士達は船のなかに鋤とか、鍬とか農具を持ち込んでいます。かれらは日本を征服したあとは、そのまま故郷には帰らず、日本に住み着いて農業をするつもりでいるのね。日本人の女を妻にして。

この二回目の遠征も失敗するのですが、二回も続けて失敗した原因はなんでしょうか。

神風が吹いた、と一般にはいわれています。だけれど当時の京都の公家の日記などを見

てもそんな様子はない。少なくとも大暴風が吹いたのではない。
失敗の原因は元軍の構成にあるようです。

元寇を防ぐために戦った竹崎季長（たけさきすえなが）という武士が自分の活躍を描かせた『蒙古襲来絵詞』という絵巻物があります。モンゴル軍の貴重な絵画資料なのですが、攻めてくるモンゴル兵は歩兵ですね。迎え撃っている鎌倉武士が騎兵です。モンゴルは騎馬軍団だからこそ強かったのに、これでは逆ですよね。
モンゴル軍が騎兵ではないのは船に乗ってきたから当たり前なのかもしれないけれど、理由はそれだけでしょうか。

われわれは、元寇というので、何となくモンゴル人が攻めてきたように思っていますが、いったいモンゴル人の人口はどれくらいなのかな。チンギス=ハーンの時に70万くらいというから、フビライの時代に増えているとして100万人としておこう。これが、西はロシア、シリアから東は朝鮮半島に至るまでインドとインドシナ半島をのぞく全ユーラシア大陸を支配している。ということは世界中にかれらは拡がっているわけで、日本遠征に純粋モンゴル人がどれだけ参加していたか。

司令官クラスは、モンゴル人も多くいたと思いますが、一般兵士のほとんどはモンゴル人ではないと思った方が実体に近い。そもそも、モンゴル軍というのはモンゴル帝国が拡大するにしたがって、雑多な民族の混成軍になっている。

たとえば、『蒙古襲来絵詞』のなかに顔の黒いモンゴル兵が何人か出てきます。これ、明らかに意識的に黒く描いていますね。顔つきはモンゴロイドですね。なぜ、黒いのか。

中国では宋の時代、犯罪者は顔に入墨を入れられていました。そして、刑罰代わりに強制的に兵士にされていた。黒い顔に描かれているのは多分かれらです。だから、金朝か南宋の出身と見て間違いない。

第一回遠征軍の主力は高麗人です。高麗の三別抄軍はその前の年までモンゴル軍と戦っていたわけで、遠征軍の中身がとてもしっくりいっているとは思えない。しかも、海軍の経験のないモンゴル人が司令官です。

第二回になると旧南宋の軍人も大勢混じる。かれらは、遠征軍とはいながら棄民に近いから、士気が高かったとは思えないのです。

モンゴルに服属したばかりの諸民族の混成軍が朝鮮半島、中国大陆別々のところから出発して対馬沖で合流する。陸上生活と違って、船ですから、各軍団の司令官同士の意志疎通や連絡もうまくいかなかった。

一言でいえば、元寇のモンゴル軍は烏合の衆、ということです。

しかも、水軍に不慣れであったし、遠征軍の乗った船が第二回では440隻というのですが、その多くは突貫工事で高麗の船大工につくらせたものです。急造の粗悪船が多

かった。だから、記録にも残らないような、ちょっとした風でも船が大きい被害を受けたり、司令官達が混乱したりしたのではないか。

フビライは1287年にはビルマ遠征とヴェトナム遠征、1292年にはジャワ遠征をおこなっていますが、全て失敗しています。

拡大し続けてきたモンゴルの勢いが、人的にも経済的にも限界に近づいていたのかもしれません。

元の滅亡

元は14世紀中頃から、宮廷内での内紛が激しくなる。また、チベット仏教に対する信仰が深くなつて、大規模な寺院の造営があいつぎ財政を圧迫しました。財政難を乗り切るために交鈔を濫発したので、中国経済は混乱して各地で反乱が続発します。

特にマニ教と仏教を混合したような白蓮教という宗教が、一般民衆に浸透していて、この白蓮教を中心とした反乱が大きかったです。これを紅巾（こうきん）の乱といいます。赤色の頭巾を巻いていたのでこう呼ばれた。

元ははじめは各地で起こる反乱を鎮圧しているのですが、そのうち面倒くさくなる。中国人から搾り取るために支配しているのに、反乱鎮圧に明け暮れていたのでは、中国支配のうまいがない。

1368年、モンゴル人たちは中国を放棄してモンゴル高原へ退去しました。元は滅んだのではなく、去っていった。

かわって漢民族の王朝である明が成立するのですが、その後も元は北元とかタタールとか呼ばれてモンゴル高原に存在しつづけていくのです。

元以外の諸ハーン国はどうだったか。

オゴタイ=ハン国は14世紀はじめにはチャガタイ=ハン国に併合されて消滅。そのチャガタイ=ハン国は東西に分裂、特に西部ではイスラム化と定住化がすすんでいきます。政治的にも解体していき、ティムールによって滅ぼされた。ティムールについてはあとで触れます。

キプチャク=ハン国は、イスラム化して14世紀前半には最盛期を迎ますが、15世紀末には領内にスラブ人国家モスクワ大公国が独立、また配下の部族がそれぞれにハン国を形成し自立していき16世紀には消滅した。

イル=ハン国は13世紀末に即位したガザン=ハンの時にイスラムに改宗し、大臣ラシード=アッディーンが行政・財政で国家運営を支えました。ラシード=アッディーンは歴史家としても有名でモンゴルの歴史を軸にして『集史』という世界史の本を書いています。これは覚えておくこと。

イル=ハン国は14世紀半ばにはフラグの血統が絶えて、分裂した。

諸ハーン国では、モンゴル人の数は圧倒的に少数でした。それが広い地域を統治するためには土着勢力と協力しなければうまくいかない。婚姻関係も結ぶし、その土地の宗教を、具体的にはイスラム教ですが、信じた方がうまくいく。こうして何世代か経つうちに、どんどんモンゴルの王族も土着勢力のなかに吸収され、なし崩し的にモンゴル帝国は衰退していった。

第42回 モンゴル帝国の発展 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第41回 モンゴル帝国の成立](#)

[次のページへ](#)

[第43回 イスラム教の成立](#)

世界史講義録 第43回 イスラム教の成立

世界中が2000年？

いよいよ2000年になりました。なんかうれしいですね。2000年ですよ。よく人類は滅亡せずに2000年を迎えたなあ、というのが、私の素直な感想ですね。私の高校時代は1970年代です。2000年なんかは遠い将来の話で、現実にそんな年がくるなんて考えられなかった。みんなが40歳の自分を想像できないようなものだ。

小学生の頃「小学何年生」という雑誌をとっていて、付録に予言者のいろいろな予言が載っていたのを覚えているのですが、1979年に宇宙人が攻めてきて宇宙大戦争が起るとか、笑ってしまうような予言とかいろいろ載っていた。「嘘つけ！」と思って手帳にしっかりメモしたりした。中学になるとノストラダムスの大予言という本が大ベストセラーになった。誰の家に遊びに行っても「ノストラダムスの大予言」とピンカラトリオの「女の操」はあったな。

1999年7月、恐怖の大魔王が空から降ってくる、なんて25年前にいわれたら、何となくそんな気にもなったりする。放射能からダイオキシン、オゾン層破壊による紫外線、恐怖の大魔王は沢山あるからね。ノストラダムスが当たらないにしても、21世紀まで人類は生き延びるんだろうか、と考えていた人は案外多いと思う。

というわけで、今年の新年はとりわけ「明けましておめでたい」。

2000年だ、ミレニアムだと、世間も私も騒いでいるのですが、1月7日の朝日新聞の夕刊に面白い記事があったので紹介します。「今日は何日？」という題です。

2000年というのは西暦です。世界には西暦以外の暦が沢山ある。1月7日は、イスラム暦では1420年9月30日、ユダヤ暦では5760年4月29日、エチオピア暦では1992年4月28日、仏暦では2642年10月白分1日、新月から満月までを白分、、満月からあとを黒分として一ヶ月を二分割するらしい。これらは宗教に関わる暦です。

たとえばユダヤ暦の5760年というのは、神様が天地創造した日を紀元にしている。

それぞれの国の歴史的出来事を紀元にする暦もある。インド国定暦では1921年10月17日、台湾では民国89年ですし、日本では平成12年、というわけだ。

暦というのはそれを使う人の属する文化やそれぞれの価値観を知らず知らずに反映しているのですね。

その中で西暦はキリスト教の暦なのですが、現在ではもっとも宗教を意識せず世界中で通用する暦だということです。

さて、イスラム暦ですが、宗教暦のなかでは一番根拠がはっきりしているものです。世界宗教のなかで一番新しい宗教だから事情もよくわかっている。
今回からイスラムに関する歴史を勉強していきます。

イスラム教は日本人には馴染みが薄いですが、世界ではどんどんイスラム教の信者は増えています。アラビア地方の宗教と考えたら間違いますよ。世界最大のイスラム教国はどこか知っていますか。

インドネシアですね。東南アジアのこの国がイスラム教徒の人口が一番多い。
アメリカでもイスラム教徒が増えている。ＮＨＫでやっていましたがニューヨークのタクシー運転手の多くがイスラム教徒です。差別のない清潔な宗教として、キリスト教から改宗する人が多いんですって。
この宗教の歴史をしっかり理解しておくことは21世紀を生きる君たちにとって大事なことだと思います。

ムハンマドの登場

今は世界中に広がっているイスラムですが、生まれたのは7世紀のアラビア半島です。

当時のアラビア半島の人々はどんな暮らしをしていたのか。
アラビア半島の住民はアラブ人が大多数です。セム語系の人たちです。
当時かれらは国家をつくっていません。民族としても全然まとまっていません。部族単位の暮らしをしていた。

暮らし方も多様でした。ラクダの遊牧民、小規模農業、隊商貿易などです。アラビア半島の西側、紅海に面した方ですが、ここはインド洋と地中海を結ぶ交易ルートになっていて隊商貿易の商人たちが都市をつくっていた。

宗教は多神教でした。土着の神様をそれぞれ信仰していました。また、ユダヤ教やキリスト教も商人によって伝えられていた。

このアラビア半島にメッカという町がある。隊商貿易で栄えていた町で、住民も商人が多い。この町で生まれたムハンマド（570？～632）がイスラム教をつくるのです。

ムハンマドは、マホメットという呼び方の方が有名ですが、ムハンマドで覚えてください。

ムハンマドの父親はメッカの商人でしたが、ムハンマドが生まれる前に旅先で死んでしまう。母ひとり子ひとりですが、母親も6歳の時に死んでしまって、ムハンマドはお祖

父さんのもとに引き取られます。そのお祖父さんも8歳の時に死んで、今度は叔父さんのもとに引き取られる。

要するにムハンマドは孤児で、親戚の間をたらい回しにされるという幼年時代を送ったのですね。叔父さんも隊商貿易に従事する商人で、ムハンマドは幼いときから叔父さんのキャラバンについていった。雑用をしていたんでしょう。そのまま成長して、ムハンマド自身も隊商貿易の商人となりました。

メッカに、かなりの財産をもったハディージャという女性がいた。未亡人のハディージャはお金を出して、商人に隊商貿易をさせて儲けていたんですが、ある時、ムハンマドが彼女に雇われて隊商貿易を取り仕切った。

ムハンマドの仕事ぶりを気に入ったんだろう。このあと、ハディージャはムハンマドに求婚しました。

逆玉です。財産のないムハンマドには、おいしい話だ。ところが一つ問題があった。年齢です。このときムハンマドは25歳。ハディージャは40歳。常識的に考えて、バランス悪いです。もし、このシチュエーションで結婚したら、財産目当てだと思われる。ムハンマドは非常に普通の発想をする人だから、財産目当てなどとほかの商人たちに思われたくないし、逆に自分を婿にしてただ働きさせるつもりじゃないか、と疑うわけです。そこで、人を介してハディージャの真意を尋ねた。結局、ムハンマドはハディージャが真剣に自分を愛しているということを確信して結婚します。

二人の間には子供は産まれたけど、男の子はみんな死んでしまう。跡取りの男の子をつくるために何人も妻を持ってもよいんですが、ムハンマドはそういうことはしない。ハディージャが死ぬまで他の妻を迎えるなかった。仲の良い夫婦として過ごしていました。

イスラム教の成立

結婚後のムハンマドはメッカの商人の旦那として不自由のない生活を送るようになつた。そのあとは何事もなく日々は過ぎて、ムハンマドは40歳になった。

ムハンマドは趣味があった。瞑想です。メッカの近郊にヒラー山という山がある。暇があるとムハンマドはヒラー山に登り何日も洞窟にこもって瞑想をするのです。

ある日のこと、いつものようにムハンマドが山のなかで瞑想をしていると、いきなり異変が起こった。金縛りにあったように身体が締め付けられて、ぶるぶる震えてきたんです。そして、目の前に大天使ガブリエルが現れてムハンマドに向かって「誦（よ）め！」と迫った。

ムハンマドは、今自分に起こっていることがなんなのかわからない。恐怖でいっぱいです、「誦めません！」と抵抗した。

「誦む」と訳しているのですが、この「誦む」という字は「声に出して読むこと」なのです。朗々と歌うように読むことをいう。大天使ガブリエルというのは、ムハンマドがあとあとになってそう解釈したもので、その時点ではなんだかわかりません。

とにかく、訳の分からぬ魔人のようなのが「誦め！」という。その手には文字を書いた何かを持っていたんだろう。ムハンマドは字が読めなかつたらしい。だから、「誦めません！」というのですが、そうすると、大天使ガブリエルはさらにムハンマドの身体をぐいぐい締め付けて「誦め、誦め！」と責める。

苦しさのあまりに、口を開いて声を出したら、誦めた。

すると、自分を締め付けていたわけのわからない力が、スッと抜けてガブリエルも消えて、ムハンマドはもとの状態に戻ったのです。

ムハンマドは、あわてて山から降りてハディージャの待つ我が家に帰った。とにかく怖かったのです。

当時、砂漠にはジンと呼ばれる悪霊がいると信じられていた。砂漠で道に迷って死んだりする商人がいると、ジンにとりつかれたんだといわれていた。そこで、ムハンマドは自分にもその悪霊がとりついたんだと考えたんだね。

ムハンマドは、この体験をはじめは誰にもしゃべらない。自分の胸にそっとしまっておく。しゃべって変に思われるのを怖れたんじゃないかと思う。ところが、それ以後何回も同じような体験をするんですね。とうとう、ムハンマドはハディージャに打ち明けた。

これこれ、こんなふうに悪霊に取り付かれて、俺は気が変になっているんじゃないだろうか、とね。ハディージャは「大丈夫よ、あなたは変じゃないわ。」と言ってなぐさめた。

それ以後もムハンマドに何かがとりつく、ということはしばしば起きるのね。その時に聞こえてくる声を、ムハンマドはハディージャに伝えるようになる。ハディージャも、ムハンマドの身に起こっていることが何なのか、だんだん気になってきます。

心配になったハディージャは、物知りのいとこに相談するんですが、このいとこはアラブ人には珍しいキリスト教徒だったのです(一神教に詳しかっただけで、キリスト教徒ではなかったという説もあります)。

相談を受けたいとこは、「ムハンマドみたいな声を聞いた奴は、昔から何人もいたんだよ。」と答えた。「たとえば、アブラハムだろ、ノア、モーゼ、イエス、預言者といわれた人々は、皆同じような経験をしたんだ。」とね。アブラハムというのは旧約聖書に出てくる有名な人物です。

ハディージャは「そうか！」と安心して、その話をムハンマドにする。ムハンマドもその話を聞いて、胸にストンと落ちるものがあったんだろうね。自分が陥っている事態を

そういうものとして受け入れた。

そういうものというのは、つまり、自分に聞こえているのは神の声で、自分は神の声を授かるもの「預言者」である、ということです。

で、神はムハンマドに何を言っているかというと、「神は自分だけである。」「かつて、イエスに言葉を与えたけれど、その後の人類はイエスの言葉を間違って解釈して神の教えがゆがめられている。」「だから、お前ムハンマドに自分の言葉を託すから、人々を教え導け。」こんな事を神はずっとムハンマドに伝えていた。

これが、悪霊の仕業でなく、本当に神の声だと確信したんだから、ムハンマドは布教しなければならないのですよ。それが、預言者というもんです。

ところが、ムハンマドという人は滅茶苦茶に普通の人なんですよ。いきなり、神の声を聞け！なんて言っても、みんな信じてくれないよな、変人扱いされるのが関の山だよな、布教活動なんて恥ずかしいな、って思った。

だから、イエスやシッダールタみたいに、いきなり街角で辻説法なんてできません。どうしたかというと、自分の身内から布教を始めた。身内なら、こいつおかしいんちゃうか？と思っても、いきなり邪険にはしませんからね。

で、最初にムハンマドが布教したのが奥さんのハディージャ。ハディージャは愛する夫の言うことだから黙って信者になりました。信者第一号です。あと、親戚連中を訪問して布教します。いとこ連中や叔父さんたち。入信してくれる人があれば、馬鹿にする人もいた。

この布教の初期の頃のムハンマドの行動を見ていると、この人は本当に普通の常識的な人だったんだなあと思いますね。

ところで、信者になった人たちの入信の理由ですが、ムハンマドは他人の前でもしばしば神がかり状態になった。そうなると、顔面蒼白になって、身体がブルブル震えて、見るからに異常になる。で、その口から神の言葉がでてくるんですが、神の言葉は詩になっているの。きちんと韻がふんであって、誦む、というのにふさわしく、朗々と歌うように神の言葉がでてきた。

ムハンマドは詩の才能は全くない、これは周囲のみんなが知っている。アラビアでは詩のコンテストがあったくらいに、詩人というのは尊敬されていた。そういう、天才詩人がつくるような言葉で神の言葉が語られるのです。ムハンマドには才能はないのだから、やはりこれは神がムハンマドの身体を借りて話しているんだ、と見ている人は思ったそうです。

さて、親戚連中に対する布教が終わると、今度は他人にも布教せざるを得なくなる。ようやくメッカの商人仲間にも布教を始めるんです。仲間のなかには親切に忠告してくる人もいる。「お前、馬鹿なことはやめておけ。商人として、一応の地位を築いてきたのに、信用を失うぞ。」とね。

はじめは、親切心からムハンマドに布教を思いとどまるように言っていたメッカの商人たちですが、ムハンマドから見れば、神の声を信じない不届きものですから、かれらの忠告を無視せざるを得ない。自分の布教を邪魔するものとして対立していきます。

また、いつの時代でも新興宗教というのはうさんくさい目で見られるものです。メッカの有力者、商人たちのムハンマドに対する態度は忠告から、弾圧へと変化してくる。それに対して臆病だったムハンマドも、戦闘的になっていきます。

メッカで弾圧を受けていた頃のムハンマドの言葉です。というか、神がムハンマドに伝えた言葉です。

「悪口、中傷をなす者に災いあれ。彼らは財を蓄えては、それを数えているばかり。財が人を不滅にするとまで考える。必ずや地獄の炎に焼かれるであろう。」

「お前は最後の審判などうそっぱちだなどという輩をみたか。連中は孤児を手荒に扱い、貧しい者に糧食を与えようとはしない。災いあれ...。」

蓄財に走る商人、貧しいものを救おうとしない金持ちに対して、呪いの言葉を投げつけているでしょ。ムハンマドは、未亡人や孤児を大事に扱えと教えていますが、この辺は自分の体験がもとになっているんでしょうね。

イスラム教の成立の背景として、メッカなどの商業都市での貨幣経済の活発化にもなる貧富の差の拡大があった、といわれています。うなずけるところです。

ヒジュラ

ムハンマドが布教を開始したのが610年頃、その後12年間メッカで布教を続けるんですが、弾圧は激しくなるばかりで、信者や自分の命すら危ない状態になってきます。

ムハンマドとその信者たちは弾圧を逃れて、メッカから200キロほど北にあるメディナという都市に移住することにした。

622年のことです。ムハンマドなどは追っ手に命を狙われながら、命からがらメッカからの脱出に成功する。このときの信者はいったい何人いたと思いますか。布教開始から12年ですよ。驚きますよ、信者の数はわずか70人です。たったこれだけ。今の日本にだって信者数70名くらいの宗教団体ならそれこそ星の数ほどある。

だから、ムハンマドグループのメディナへの移住は、世界の片隅で起きた小さな小さな事件に過ぎなかつたはずです。

ところが、ムハンマドたちがメディナに移住したあと、そこで信者が爆発的に増加するのです。そこで、イスラムではメッカからメディナへの移住のことを「ヒジュラ（聖遷）」と呼び、ヒジュラの年、622年をイスラム暦元年としています。

当時メディナの町はアラブ人、ユダヤ人が住んでいた。アラブ人住民は部族間の対立が激しく、またアラブ人とユダヤ人の対立もあって、非常に不安定な状態だったのです。

一方移住してきたムハンマドと信者たちは、みんな部族の絆を断ちきってムハンマドについてきた。部族を超えてアラブ人がまとまっている。これは、アラブ人の歴史上始めてのことと、かれらもこのことを意識している。

部族を超えた信者たちのまとまり、共同体のことを「ウンマ」という。「ヒジュラ」とか「ウンマ」というようなイスラム独特の表現はしっかり覚えてください。

部族対立が激しくなっていたメディナの町でムハンマドたち「ウンマ」の存在は、部族を超えた中立な調停者としての立場を得ることになった。ムハンマドは、相争う勢力を自分の同盟者、ウンマの一員にすることでメディナに安定をもたらした。

宗教的というより、政治的に勢力を拡大するのです。「部族対立を解決したかったら私の信者になり、ウンマの一員になりなさい。」ということです。

メディナで勢力を広げる過程で、ムハンマドは自分の宗教の儀礼を定めて、宗教としての体裁を確立していきます。この段階でイスラム教というものになった、ということです。

メディナでイスラム教のウンマがある程度の大きさになると、砂漠の遊牧諸部族もこれと同盟を結んだ方が有利と考えるようになる。部族間の小競り合いはしそうある。イスラムの信者を兵力として借りることができればそれだけ敵より有利になるよね。

ムハンマドはそういう部族に対して、信者になったら助けてやる、という。いわれた部族は丸ごと入信します。敵対部族もやっつけられないためには、自分たちもウンマの一員になればよい。こっちも部族丸ごと入信するわけだ。

こんなふうに、あとは雪崩式に勢力は拡大していった。これが、イスラムの発展になるのですが、結果としてこういう布教方法は国家を持たなかったアラブ人に政治的まとまりをもたらすことになったのです。

部族に関係なく、信者はみんな平等だと教えるムハンマドの言葉を紹介しておきましょう。

「...もはや何人たりとも地位や血筋を誇ることは許されない。あなたがたは、アダムの子孫として平等であり、もしあなたがたの間に優劣の差があるとすれば、それは神を敬う心、敬神の念においてのみである。」

630年には、ムハンマドは、ずっと敵対してきたメッカを征服、631年にはアラビア半島を統一しました。

おっかなびっくり始めた宗教活動が、アラブ人をまとめるまでになった。すでに、イス

ラム教そのものが国家です。

その翌年、632年にムハンマドは死去します。

しかし、かれの死後、イスラムはさらに発展していきます。

第43回 イスラム教の成立 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第42回 モンゴル帝国の発展](#)

[次のページへ](#)

[第44回 イスラム教の特徴](#)

世界史講義録

第44回 イスラム教の特徴

イスラム教とは

ムハンマドが始めたイスラム教はどんな特徴を持っているのか、簡単に見ておきましょう。

まず、一神教である、ということ。ここはしっかり頭に入れておくこと。只一つの神しか認めない。しかも、その神は人格神です。山の神とか、火の神とか、太陽の神とか、そういう自然神とは全然違う。

こういう一神教の宗教は世界で三つだけです。ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教。ムハンマドが神がかりになったときに、相談したハディージャのいとこはキリスト教徒でしたね。また、ムハンマドがイスラム教の教義を確立したメディナの町はユダヤ教徒の住民がかなりいたところで、ムハンマドはかれらからも大きな影響を受けています。

つまり、イスラム教はユダヤ教、キリスト教の兄弟宗教で、一神教三兄弟の末っ子なのです。

イスラム教の唯一神をアッラーといいますが、アッラーというのは神様の名前ではありません。注意してください。アッラーというのはアラビア語で「神」という意味です。一般名詞です。日本語で「神さま」というように、アラビア語で「アッラー」というのね。だから「アッラーの神」という言い方は間違います。

では、神様の名前は何かというと、あえて言えば「ヤハウェ」です。キリスト教徒が信じているのと同じ神さまをイスラム教は信仰しているのです。

イエスはユダヤ教を改革しようとした人でしたね。だから、キリスト教の神さまはユダヤ教と同じ「ヤハウェ」でした。そして、その同じ神をイスラム教も信じている。

だから、人類はアダムとイブからはじまったとイスラム教徒も考えているのですよ。

ムハンマドが神がかり状態になるときに、神の言葉を授かるのですが、神はずっと昔からムハンマド以外の人にも言葉を与えてきた。それが、「ノアの箱船」のノア、「出エジプト」のモーセなど、旧約聖書の登場人物たちです。ムハンマドはそれらの人物を預言者として認めます。

さらに、イエス。かれも預言者の一人だった、とムハンマドは言う。

ただし、神はこれまでの預言者たちにすべてのことを伝えたわけではない。言い残した言葉がたくさんあったんだ、という。人間たちに言い残した言葉を伝えるために選ばれたのがムハンマドなのだ。

というわけで、イスラム教でのムハンマドの位置づけは「最後にして最大の預言者」です。何しろ、神さま今まで言い残していたすべてをムハンマドにしゃべってしまったので、もう何も人類に伝えることはない。だから、ムハンマドは最後の預言者なのです。キャッチフレーズとしては滅茶苦茶にうまい。おいしいところに目を付けたな、という感じですね。

ムハンマドが他の人間と違うのはそこだけで、他に奇跡を起こしたりとか特別な能力を持っていたりということはありません。

イスラムという言葉ですが、これは「神への帰依」という意味です。帰依というのは「深く信仰し、その教えに従う」という意味ですよ。だから「イスラム教」という言葉の方はそのまま訳すと「神を信仰する宗教」という意味になってしまって、なんだか居心地が悪いね。

イスラム教徒のことを「ムスリム」といいます。意味は「神に帰依した人々」です。この言葉、教科書でも頻繁に出てきますので、しっかり覚えてください。

神がかり状態のムハンマドの言葉を集めたイスラム教の聖典が「コーラン」です。この「コーラン」は、考え方によってはものすごい本です。たとえば仏教のお経やキリスト教の新約聖書は、ガウタマ=シッダールタやイエスの言葉がどれだけそのまま伝えられているか、という点から見ると、かなりあやふやなものです。しかも、ガウタマ=シッダールタやイエスは人間ですから、かれらの言葉が正確に書かれていても人間の言葉に過ぎない。

ところが、「コーラン」は神の言葉そのものなのです。神がムハンマドの肉体を通じて語りかけたのだから。しかも、それをリアルタイムで聞いていた信者たちが、書き留めてまとめたものです。

他の宗教の経典はのちの時代の信者たちが教祖の言葉を解釈してまとめたもの。「コーラン」は神の言葉を解釈抜きで書き留めたもの。この違いはすごい。またまた、ムハンマドはおいしいところをとりましたね。

ムハンマドはアラブ人ですから、アラビア語をしゃべりました。神がかり状態の時もアラビア語でしゃべったのです。ということは、神はアラビア語でしゃべったのです。神の言葉を人間が勝手に変えることはできません。だから、翻訳した「コーラン」はもう神の言葉ではない。日本でも本屋に行けば日本語訳の「コーラン」を売っていますが、正確には、これは「コーラン」ではありません。私たちが、イスラム教がどんなものか知るのにはそれで充分ですが、もし、入信するならアラビア語で誦まなくてはダメです。

だから、ムハンマドの死後、イスラム教が西アジアからアフリカ北岸に広がっていくとアラビア語もそれにつれて広まっていった。「コーラン」によってアラビア語が西アジ

アに広がったということは知っておいてください。

「啓典の民」という言葉も覚える。これは、イスラム教が同じ神を信仰しているユダヤ教徒、キリスト教徒を呼ぶ言い方です。ユダヤ教、イスラム教を尊重した言い方だからね。

ただ、イスラム側が尊重するように相手方は尊重してくれないんですが。まあ、「最後にして最大の預言者」がムハンマドで「コーラン」が神の言葉、などと言われては尊重できないでしょうね。

イスラム教徒の義務

ムスリム、つまりイスラム教徒にはどんな「おつとめ」があるのか。

「六信五行（ろくしんごぎょう）」という義務があります。

「六信」とはムスリムが信じなければならない六つのことです。

「神」「天使」「啓典」「預言者」「来世」「天命」。この六つ。

「啓典」は、「コーラン」のこと。ユダヤ教やキリスト教の教えを引き継いでいますから、イスラムでも最後の審判はあって、人々は天国と地獄に振り分けられる。「来世」とはそういうことです。最後の「天命」というのは、どういうイメージなのか私はよくわかりません。

「五行」は、ムスリムが行わなければならない五つのことです。

「信仰告白」「礼拝」「断食」「喜捨」「巡礼」の五つ。

「信仰告白」というのは、「アラーの他に神なし。ムハンマドはその使徒なり。」と唱えることです。声に出さなければダメですよ。この「信仰告白」というのは、次の「礼拝」と一緒におこなわれます。

「礼拝」のシーンは資料集にもありますし、テレビでも見たことのある人は多いと思います。正式には一日五回、メッカの方向を向いておこなう。

ムハンマドはイスラムの教義を作り上げていくときに礼拝の方向を決めました。はじめはイエルサレムに向かってとか、いろいろ試行錯誤するんですが、最終的にはメッカのカーバ神殿に向かって礼拝することにきめました。世界中のムスリムが礼拝の時間にはメッカのカーバ神殿に向かって拝むのです。

このカーバ神殿というのは、ムハンマドが生まれるずっと前からメッカの町にあった神殿で、多くのアラブ人の信仰を集めていました。イスラム教の登場以前のアラブの宗教は多神教ですから、カーバ神殿にはたくさんの神さまの像が祀られていた。

ところが630年、ムハンマドはメッカを占領したときに、これらの神々の像を全部破

壊しました。イスラム教の特徴の一つに偶像崇拜の徹底的な否定というのがある。ユダヤ教でもキリスト教でも偶像崇拜は否定しているのですが、イスラム教はもっとも徹底して否定する。唯一の神以外の神像は、当然破壊するし、唯一神は偉大なものだからそれを人間が描くなんてもってのほかです。しかも、神像を拝むと言うことは神そのもの以外のものを拝むことになりますから、一神教の教義に反するのです。

この絵はムハンマドがメッカ占領の時に、カーバ神殿からいろいろな神さまの像を引きずり出して破壊しているところです。多くの像が碎かれているでしょ。

偶像を破壊しているこの男がムハンマドなんですが、顔がベールで隠されています。実際にムハンマドがベールを付けていたわけではないのですが、偉大な預言者を描いてしまうと、信者が思わず拝んでしまうかもしれません。これこそがイスラム教が否定する偶像崇拜ですから、そうならないように顔を隠して描いている。そのほかにも人間であっても重要なイスラム教の指導者は顔を隠して描くのが一般的です。

話はそれますが、20年ほど前大学時代に映画を見に行ったら「ザ・メッセージ」という映画の予告編をやっていました。ムハンマドの伝記映画なのです。サウジアラビアとかリビアとか、アラブ諸国が制作費を出して作った映画だったのですが、面白かったのは、主人公はムハンマドなんですが、ムハンマドがいっさい画面に出てこない。主人公が登場しない映画なんて前代未聞だね。

どうしているかというと、カメラがムハンマドなんです。ムハンマドが見ている設定で映画は作られている。偶像崇拜否定というのは徹底したものです。

カーバ神殿に戻りますが、ムハンマドはそれまでの神像を全部破壊して、その後神殿の中はどうなったか。空っぽです。なーんにも入っていない。神殿の建物があるだけです。

宗教というのは「祈る・拝む」という行為と切り離せません。礼拝のない宗教はない。拝むときには、やっぱり拝む対象が欲しいでしょ。みんながてんでバラバラの方を向いていたんでは信者同士の連帯感も生まれにくい。

ムハンマドが苦肉の策で、考え出したのが空っぽの神殿に向かって拝むということだったんでしょう。

だから、世界中のムスリムは空っぽに向かって礼拝をしているのです。

ただ、正確に言うと、カーバ神殿には何もないのではなくて、神殿の壁の一力所に「カーバの黒石」と呼ばれる石がはめ込んであります。資料集に写真がありますね。いん石らしいのですが、この石がアッラーの指先とされています。ここに巡礼に来た人たちが千年以上もさわり続けて、だいぶんへっこんでいます。

とにかく、このメッカに向かって「礼拝」をする。ところが旅行中とか外国にいるとメッカがどちらの方向かわからなくなる。そこで、旅行者向けに「メッカ探知機セッ

ト」が売られている。この地図で緯度と経度を調べて、コンパスでメッカの方向がズバリわかる。こんな商品があるくらいに、「礼拝」は大事な「行」です。

「礼拝」の手順がプリントにありますね。

まず、メッカを向いて直立。次に、手のひらを広げて耳の両脇に持ってきて「神は偉大なり」と唱える。手を下ろして、お辞儀をしながら「神は偉大なり」をもう一度。

ひざまずいて額を地面につけながら「神は偉大なり」。これを二回繰り返して、また立ち上がって、お辞儀。この時も「神は偉大なり」と言う。

また、ひざまずいて額をつけて「神は偉大なり」を二回。

最後に、ひざまずいたままで軽くうつむいて、神を讃えて預言者とムスリムへの神の祝福を祈ります。さらに、首を左右に振って「アッサラーム・アライクム（あなたの上に平安がありますように）」と唱えておしまい。この時、両手は膝の上に置いているのですが、右手をよく見てください。人差し指だけを伸ばしている。これは、神は唯一、という印です。

立ったり座ったり、なかなか忙しい。これが礼拝ですが、正式には礼拝にはいる前に手や顔を決まった手順で清めなければならない。また、立っている間に「コーラン」の一節を唱えたりもしますから、結構時間がかかります。

この写真はサウジアラビアの風景ですが、砂漠に道路が走っている。ここで礼拝している人たちがいるね。わかりにくいのですが、ここに車がとまっている。かれらは、自動車で砂漠を旅していたんですが、「礼拝」の時間になったので車から降りて祈っている。

実際に一日五回の「礼拝」は、イスラム教国に住んでいれば問題なくできますが、そうでない地域で生活していると実行は難しい。

たとえば、このクラスにムスリムの生徒がいて、授業中に「先生、礼拝の時間になりましたので失礼します」といって、「アッサラーム・アライクム...」とやられてはちょっと困る。学校ならまだ許されるかもしれません、出稼ぎで日本の工場で働いていたらしくすると、5回の礼拝は無理です。

ですから、今では住んでいる地域によって、朝晩以外の礼拝は簡略化してもよいとか、しなくとも構わないとか、柔軟になっているようです。

「断食」。一年に一ヶ月断食月があります。ラマダーンと呼ばれる月です。これは、まったく何も食べないのでない。日の出から日没まで、太陽の出ている時間帯に食べ物を口にしない、というものです。日が沈んだら、食べてもよいのです。

なかなか、しんどそうですね。

ところが、イスラム教国の人たちには、このラマダーンはそれなりに楽しいものらしい。お祭りに近いものがあるということです。

自分だけダイエットして、好きなものが食べられなくて空腹というのはつらいけれど、ラマダーンにはみんなが食べられない。「あー、腹減ったな、つらいな。」と思う。隣の奴の顔を見るとそいつも「あー、腹減った。」という顔をしている。こいつも、あいつも、みんなつらいけど我慢しているんだと思うと、なんだかともに戦っている、みんな仲間だという連帯感が芽生えてくる。

さあ、日が沈みます。「やったー！」ってみんなが思うのですよ。この時の開放感がたまらないらしい。親戚や友人がみんなで食べ物を持ち寄って、夜はパーティです。イスラムはお酒は禁止だから、食事会。こういうお祭り気分が一ヶ月続く、それがラマダーン。イスラムの「断食」です。

「喜捨」。これは富めるものが貧しいものに財産をわけあたえることです。イスラムは商人の倫理が根っこにあるから、まともな取引で儲けることはいいことなんですが、儲けっぱなしで、財産をため込むことを卑しいこととします。儲けたなら、それを貧しいものに施すことを勧めます。

これは、逆から見ると、貧しい者は豊かな者から恵んでもらって当然だ、という考えになる。日本人がイスラムの国に旅行した。駅を降りると乞食の人が寄って来るんだって。「金をくれ！」と言うその乞食の人の態度が滅茶苦茶でかい。日本人から見ると威張っているように見える。ムッとして「なぜ、お前に恵まなければならないんだ？」と問いかけたら、「お前は日本人だろう、お金をたくさん持っているはずだ。俺は貧しい。豊かな者が貧しい者に恵むのは当然のことだ。俺がお前の金をもらってやる。そうすればお前は喜捨ができる、来世で救われるのだ。」と理屈を言ったそうです。

本で読んだか人の話か忘れましたが、そんな感じらしい。貧しい者がもらってやらなければ喜捨はできないので、貧しい者も卑屈になる必要がない。貧しいということは、どんな世界でも決して楽しいことではないはずです。でも、こういう喜捨の考え方があれば、表面だけでも貧しい者が卑屈にならなくともすむのかもしれません。

喜捨と関係するのですが、イスラム世界ではイスラム銀行という銀行がある。この銀行は日本や欧米の銀行とは違って利子がないのです。預金を何年しても利子が付かない。なぜ、預金者はこんな銀行に預けるのか？

銀行は預金の運用益を喜捨的な事業に使うのです。だから、イスラム銀行に預けるということは間接的に喜捨をすることになる。

巡礼。これは、メッカに巡礼することです。一年に一回巡礼月があって世界中からイスラム教徒がメッカに集まってくる。テレビでも最近よくやるので見た人もいるでしょう。現在メッカはサウジアラビアにあるので、サウジ政府は巡礼者の受け入れに非常に気を配っている。また、それがサウジ政府の威信を高めることにもなっているようです。

メッカに巡礼することは、交通の不便だった昔はなかなかできることではなかった。一生に一度はメッカ巡礼を果たすことがイスラム教徒の悲願でした。だから、今でも巡礼をした人は「ハッジ」と呼ばれ地域の人々から尊敬をされます。

その他の特徴

六信五行以外にイスラムの特徴を見ておきます。

聖戦。ジハードともいう。

これは、イスラム教徒が異教徒と戦うことです。

イスラム法。

イスラム教徒はコーランにしたがって生活します。コーランには宗教的な話だけではなくて、日常生活のルールもいろいろ定めている。ムスリムとして生活しようとすると、宗教生活以外でもコーランに縛られることが多いのです。また、ムスリムが生活上いろいろなトラブルがあった場合にも、コーランの記述に基づいて裁く。

こうして、イスラム世界ではコーランに基づく法律が発展しました。これをイスラム法という。

イスラム法を学んだイスラム法学者、ウラマーという人たちが、人々の日常的な生活の相談から政治的な指導までする。そういう世界です。

日本や欧米では、政教分離が原則ですね。政治に宗教が関わらないように制度上さまざまな工夫をしている。ところが、イスラムでは政治・法律と宗教を切り離すことができない。すべてがイスラム教に関わっているのです。

だから、一日五回の礼拝や、断食月なども可能になるのです。

たとえば結婚ですが、ムスリムは結婚前に両者が契約書を作る。何が書いてあるかというと、離婚する場合の条件が書いてある。離婚の場合、夫はどれだけの金額を妻に渡すとかなんとか。契約書をイスラム法学者に見せて問題がないのを確認してもらってから、正式な結婚となります。こういう結婚の仕方がイスラム世界でどこまで一般的かはわかりませんが、そういう地域もあるということ、生活のすべての面がイスラム法、コーランに基づいているということを覚えておいてください。

聖職者の存在を認めない。

イスラム教ではお坊さん、聖職者はいません。信者はすべて対等です。キリスト教の牧師や神父のように、神と人間をつなぐ一般信者以上の存在は認めていません。

テレビを見ていると「○○師」という名前で聖職者のような人が出てくるときがありますが、あれはイスラム法学者で聖職者ではないのです。イスラム法を解釈するだけで、神との関係で特別な地位にあるわけではない。

ただ、一般民衆の心情として「聖者」を求める気持ちはあって、地域地域でいろいろな聖者がまつられています。ただ、これは公式的なイスラム教から見ると変則的ということになる。

商人の倫理を重視。

ムハンマド自身が商人だったこともあって、イスラムは商業倫理を尊重しています。仏教でも、キリスト教でも商売を軽視、もしくは蔑視するところがある。これは、農民のように額に汗して手に豆を作つて働きもせず、右のものを左に動かすだけで儲けることを卑しいこととしたためです。イスラムにはこういう面はない。

むしろ、商人が正しい契約によって利益を得ることを積極的に肯定している。

このため、イスラム世界では商業が発展した。中国から地中海にまでまたがる交易ネットワークが形成された。唐の時代に広州にはムスリム商人がたくさん住んでいました。日本にまでイスラム教徒は来ているんですよ。室町幕府の三代将軍足利義満に仕えたムスリム商人がいて、この人は河内の女性と結婚して子供を作った。この子が幼名ムスル、日本名が楠葉西忍（くすばさいにん）という。やっぱり室町将軍に仕えて、日本商人を引きつれて中国の明に貿易に行ったりしている。

歴史に名前を残しているのはかれくらいいですが、そのほかにも記録に残っていないムスリム商人がたくさん九州あたりには来ていたかもしれないと思うと面白いです。

手形や為替のような商業システムも整備されました。

商業が発展すると、当然都市も発展する。

都市はその中心にモスクがあります。モスクは礼拝所です。寺院に近いですが、正確には寺院ではない。信者が礼拝のために集まる集会所と言った方がよい。イスラムは偶像崇拜禁止ですから、モスクの中にも何もない。ただ、部屋の壁にメッカの方向を示すくぼみが作つてあるだけです。ご本尊やご神体をまつてある寺院ではない。

もう一つ都市の中心にあるのが市場です。バザールです。すっかり日本語になっているほどです。ここで、さまざまな取引がおこなわれる。

それ以外に都市には、隊商宿、公衆浴場、公衆便所、賃貸アパート、貸店舗などが整備されていました。

こういう都市の公共施設は、富裕な商人たちが拠出した信託財産によって維持されています。この信託財産のことをワクフという。だいたいイスラム教国の町にいくと水飲み場とか噴水とかきれいにしてある。政府ではなく、町の富裕な商人たちのワクフで整備している。

イスラムの教えに基づいて、お金持ちがワクフとか喜捨とかキッチリするならば、弱者救済や公共事業が民間ができるわけで、政府なんていらないようなものです。実際、イスラム世界の人たちにとって政府、国家は上から突然やってきて税金だけ取る不要なもの、という感覚が強いようです。よく言って必要悪というところ。

ムハンマド時代、そしてムハンマド死後のしばらくの間は、イスラム世界には国家はなくて「イスラム」だけで人々は生活していたわけですから、本来ムスリムの共同体=ウ

ンマがしっかりしていれば国家などなくてもよいということになる。

おまけですが、プリントにエジプトの研究所で働く女性の写真を載せておきましたが、これは、典型的なイスラム女性のイメージではないかな。

全身を服で覆って頭からすっぽりヴェールをかぶっています。肌はどこも露出していない。

ただ、これは極端な格好で、インドネシアやマレーシアでは女性もここまで肌を隠してはいません。せいぜい頭髪をスカーフで覆っているくらいです。

日本でもイスラム教に入信する人が増えています。多くはイスラム教徒の男性と結婚して改宗する女性のようです。

数年前の新聞記事ですが、地方都市の女性がイランの男性と結婚してムスリムになった。で、戒律に従って頭髪をヴェールで覆って長いスカートと長袖の服を着てできるだけ素肌を見せないようにしていたの。この女性が免許の更新で警察にいった。免許の写真を撮る段になって、警官が「ヴェールを取り」と彼女に言ったんですね。彼女は宗教上の戒律で頭のヴェールははずせません、顔はこのままでもわかるはずだから、このままで写真を認めて欲しいと訴えたんですが、聞き入れてもらえなかった。

免許がないと困るので、泣く泣くヴェールをはずして免許の更新はしたのですが、後から考えるほどに腹が立つ。憲法で保証されている「信教の自由」を侵害されたと怒っているという記事。こんな事件も起きているんだね。

ちなみに東京などでは同様の女性がたくさんいるようで、ヴェールを頭に着けたままで免許の更新を認めていると書いてある。

それはともかく、なぜイスラムでは女性はヴェールをつけるのでしょうか。

イスラムでは人間は弱いものだ、という発想がある。人間は意志が弱いという前提でイスラムの倫理は組み立てられている。先ほど、結婚の前に離婚の条件を決めておく話をしましたが、夫婦の愛も永遠に続かないかもしれないという、非常に冷静な判断をはじめにしているのです。人は弱いから。決して、永遠の愛は誓わない。

同様に、男の理性は性欲に打ち勝てないかもしれない、という前提に立つのです。弱い男の理性を崩壊させないように、女は肌を隠す、ということらしい。面白い理屈です。

だから、単純に女は引っ込んでおけ、という発想のファッションではないですね。しかし、現代では、肌を出すことができないことは女性に対する抑圧だという意見がイスラム世界の女性からも出ているようです。

実際のところ、こういう格好をしている女性はどんな感覚なのか。日本人女性でエジプトの大学に留学した人がそのあたりを体験を含めて書いている。

目をのぞいて全身を覆うと、気分的には楽になるそうです。男たちに見られるというプレッシャーから完全に自由になれる。逆にヴェールの内側から男をじろじろ見ても誰にも気づかれることはないわけでしょう。それほど、悪いものではないらしい。あくまでもその日本女性の感覚ですよ。

イスラムでは一夫多妻で男は妻を四人持てるというのは有名な話です。あれも、男尊女卑の典型のように思われがちですが、ムハンマドとしては女性を保護するためだったらしい。

イスラム以前のアラブ社会も一夫多妻で、男は何人でも妻を持つことができた。ムハンマドのイスラムはそれを四人に制限したのです。

しかも、ムハンマドは「すべての妻を平等に愛せるならば」四人まで持つてよいと、条件を付けている。これ、厳密に考えたら複数の女性を平等に愛するなんて不可能でしょう。だから、現実には一夫一婦制に限りなく近い。ムハンマド自身もハディージャが亡くなるまでは、他に妻を迎えるませんでしたね。

それなら、はじめから一夫一婦制にすればよかつたんじゃないか、という声も聞こえますが、ムハンマドがメディナに移住したはじめの頃は、イスラム教対メッカの戦争などでムスリムの男性は多く戦死しました。結果、未亡人がたくさん出現した。残った男たちに、彼女たちの生活の面倒を見させるために一夫多妻を認めた、というのが四人の妻を認めた理由です。

また、公共の場では男女と一緒にしないのがイスラム世界では一般的です。先日イランの映画を見ていたら、小学校では男子と女子の登校時間が違うんだね。女子が帰宅してから男子が登校するの。

イランではスキー場でもゲレンデが男女別になっていて、家族でスキーに行ってもお父さんとお母さんは別のゲレンデ、兄と妹も一緒に滑れないようになっています。銭湯みたいですね。

最後に、サウジアラビアとかイランとか、女性が顔を隠すのが一般的な国では恋愛はどうなっているのでしょうか。

イスラム教であろうと年頃になれば女の子が好きになる。ところが、若い男が女の子と知り合う機会は全くない。町を歩けば女性とすれ違うけれど、容姿どころか年齢すらもわからないんだから好きになりようがないです。まことに可哀想です。

だから、結婚は親が決めたお見合い結婚が一般的らしい。

それでも恋愛結婚もあることはある。

これはどういう場合かというと、ほとんどはいとこ同士です。親戚同士なら幼い頃から行き来があるし顔を見ることができるわけですよ。だから、男の子にとって思春期になったときに知っている女の子といったらいとこしかいないわけ。彼女しか知らないのだから当然彼女を好きになる。男子と知り合う機会のない女の子にとっても事情は同じ

です。

でも、彼女はヴェールの向こう側からしっかり比較検討していたはずです。

【参考図書】片倉もとこ著『イスラームの日常世界』（岩波新書）

第44回 イスラム教の特徴 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第43回 イスラム教の成立](#)

[次のページへ](#)
[第45回 イスラムの発展](#)

世界史講義録

第45回 イスラムの発展

正統カリフ時代

ムハンマドが死んでからの時代を正統カリフ時代（632～661）といいます。

ムハンマドが死んだ時点で、イスラムはアラビア半島を統一して大勢力になっていましたね。この大きな集団を誰が統率するかということが当然問題になる。まず、ムハンマドには跡取りとなる男の子がいなかった。またムハンマドは「最後にして最大の預言者」ですから、かれ以上の宗教指導者は理論上現れることはない。結局、残された信者たちは選挙で自分たちの中から指導者を選ぶことにしました。このようにして選ばれた信者の指導者を「カリフ」といいます。カリフは「預言者の代理人」という意味です。

ムハンマド死後選挙で選ばれたカリフのことを「正統カリフ」といいます。正しい手続きで選ばれたカリフということです。正統カリフは四人つき、イスラム共同体を指導したこの時代を「正統カリフ時代」というわけです。

最初の正統カリフがアブー＝バクル、二代目がウマル、三代目がウスマーン、四代目最後の正統カリフがアリーです。最後のアリーだけはしっかり覚えておいてください。

さて、この正統カリフ時代はアラブ人の大発展が始まります。それまで、部族対立でバラバラだったアラブ人がイスラムによって一つにまとまる。これは非常に大きな政治的勢力になって、アラブ人のエネルギーがアラビア半島の外に向かって爆発する。

アラビア半島の北、メソポタミア地方からシリア方面はどういう情勢だったかというと、長く東ローマ帝国とササン朝ペルシアが対立抗争して両者とも疲弊していた。そこにイスラム=アラブ人がなだれ込んでくる。

642年、二ハーヴァンドの戦いでイスラムはササン朝ペルシアを破る。この後、ササン朝は急速に衰えて651年には滅亡してその領土はイスラムの支配下に入ります。また、イスラム勢力は東ローマ帝国とも争い、シリア、エジプトを奪いました。

この段階で、イスラム教徒はほとんどアラブ人ですから、イスラムの発展は、イコール、アラブ人の発展です。

このようにして、イスラム教の支配地が急速に広がる。イスラム教徒たちは征服地にミスルと呼ばれる軍事都市を建設します。新領土の拠点となるところにミスルを建設して、ここにアラブ人が移住します。

アラビア半島から出てきたアラブ人の戦士たちは各地のミスルに住んで周辺の住民を支配するわけですね。

支配された被征服諸民族はジズヤと呼ばれる人頭税、ハラージュと呼ばれる土地税の支払いを義務づけられました。イスラム教徒は非イスラム教徒に改宗を強制はしなかったようです。ジズヤとハラージュさえ払ってくれればそれで満足です。

集められた税金はミスルに移住したイスラム＝アラブ人戦士たちに年金として支払われました。この年金をアターといいます。また、イスラム教徒は免税特権を持っていた。

正統カリフ時代には、イスラム教徒＝アラブ人は支配者階級であり、特権階級としてエジプトからシリア、イラク方面を支配したのだということですね。

こうなってくると、カリフは単なる信者の指導者としてだけでなく、この広大な支配地の支配者として強大な権力と富を手にすることができます。正統カリフに選ばれた人々は、みなムハンマドが布教を開始した頃からの古い信者で、質素で素朴な信仰生活をおくっていた人たちなのですが、それでも三代目のウスマーンは王侯のような贅沢な生活をした。指導者層の間にも、俗な欲望を持つ者もあらわれてくる。イスラム共同体＝ウンマがだんだん変質して、共同体が理念だけになってくるのです。

ウスマーンは、その贅沢ぶりに反感を持つ信者グループに暗殺され、次の第四代の正統カリフになったのがアリーです。

アリーは現在でもイスラム教徒の中では人気の高い人です。武人として剛胆、信仰も堅固、性格は実直。しかも、ムハンマドのいとこ、かつ、娘婿でもあった。ムハンマドの娘ファーティマと結婚していて、二人の間には息子もいます。この子供はムハンマドの孫にもあたるわけですね。血縁の点でアリーは特別な人だったのです。

が、実際の政治的能力はそれほどでもなかったようで、イスラムの中で生まれかけていた派閥対立をうまく調整することができなかった。

シリア総督だったムアーウィヤがアリーのカリフ位に反対したのです。

ウマイヤ朝

ムアーウィヤは第三代正統カリフ、ウスマーンと同じウマイヤ家出身でした。自分こそがカリフになるべきだと考えて、アリーと合戦をします。これは勝負がつかないのですが、そのあとも両者は対立を続けた。やがて661年に、両者の対立に反対するグループにアリーが暗殺されると、ムアーウィヤは選挙ではなく実力でカリフになります。かれは、信者の選挙という形でカリフにならなかつたので正統カリフとは呼ばれません。さらに、かれは自分の子孫にカリフの地位を世襲させていきます。こうなると、イスラム共同体とは名目だけで、実質的には王朝です。

そこで、ムーアーウィヤがカリフになって以降をウマイヤ朝（661～750）といいます。

首都はダマスカス。シリアの中心都市です。ムーアーウィヤが総督として地盤を築いていたところをそのまま首都にした。アラビア半島の外に首都を置いたのがイスラムの発展ぶりを物語っていますね。

こんなふうに教団上層部ではごたごたあるのですが、対外的にはイスラム教は領土的な発展をつづけます。

東は中央アジアからパミール高原、西は北アフリカ沿岸を西進して、ジブラルタル海峡を渡り、イベリア半島までを支配下に置いた。さらに、イスラム軍はピレネー山脈をこえて現在のフランスにまで進撃します。当時ここにはゲルマン人の一派であるフランク人が建てたフランク王国というのがあった。フランクはイスラム軍を撃退します。これが有名なトゥール・ポワティエ間の戦い（732）。この戦いに敗れたイスラム勢力はこれ以上ヨーロッパには広がりませんでした。

ウマイヤ朝の政治の特徴について。

ウマイヤ朝はアラブ人至上主義をとります。領土が拡大して多くの民族が支配下に入りますが、支配者はあくまでも、イスラム教徒であるアラブ人だということです。そういう意味でウマイヤ朝はアラブ帝国と呼ばれることもある。

ところが、イスラムは宗教ですからアラブ人以外にも入信する者がぼちぼちでてきます。民族が違っていても信者は平等です。アッラーの前ではみんな同じ。イスラム共同体、ウンマの一員なんですね。しかし、現実の政治ではウマイヤ朝はアラブ人だけに特権を認めて他民族のイスラム教徒を対等に扱わない。

そこで、非アラブ人のイスラム教徒による反ウマイヤ運動が起こってきます。

また、シア派という宗派が生まれました。暗殺されたアリーの子孫こそが正統なカリフであるという信仰を持つグループです。当然ムーアーウィヤがカリフになったことを認めずウマイヤ朝の正統性を否定します。

このシア派は、ウマイヤ朝が滅んだあとも、アリーの子孫を教主と仰いでつづく。アリーの子孫は一二代目で途絶ましたが、シア派はいろいろな分派に分かれながらも現在まで大きな勢力としてつづいている。たとえば、現在のイランはシア派を国教にしています。ムハンマドよりアリーを偉いと考える人たちもいるくらいですね。

話を戻しますが、シア派が誕生してウマイヤ朝の正統性を問題にするのですが、大多数のイスラム教徒は「ムーアーウィヤがカリフになつてもいいじゃないの」と考えていて、これらウマイヤ朝を認める人たちはスンナ派と呼ばれました。

スンナ派は現在でもイスラムの多数派です。

アッバース朝

預言者ムハンマドの近親者でアブル＝アッバースという男がいた。この人はムハンマドの叔父さんの家系でイスラム教の指導者層の一人なわけだ。だから、自分もカリフになる資格があると思っていて、機会を狙っていた。

かれはイラン人シア派の反ウマイヤ運動を利用して反乱を起こしウマイヤ朝を倒すのに成功した（750）。この新王朝をアッバース朝という。首都はバグダードです。

アッバース朝はアラブ人至上主義を批判する勢力の協力で建てられたので、民族差別をやめる。すべてイスラム教徒は同じ扱いにします。

具体的にはアラブ人の特権を廃止して、それまで払わなくてよかった土地税を課税する。政府の要職にイラン人を登用する。イラン人とはペルシア人のことです。かれらはアケメネス朝、ササン朝という大帝国を作ってきた民族でしょ。行政手腕を含めて、非常に高い文化を持っているわけです。

かれらイラン人の力も加わってアッバース朝は中央集権化、官僚制度の整備をおこなつていきました。

アラブ帝国と呼ばれたウマイヤ朝と対比してアッバース朝のことをイスラム帝国ということもあります。アラブ人の国からイスラム教徒の国になったというニュアンスです。正統カリフ時代、ウマイヤ朝と発展してきたイスラムの総まとめの国です。アッバース朝以後現代までイスラムの国は無数にあるのですが、イスラム世界がほぼ一つにまとまっていた最後の時代です。

アッバース朝以後、イスラム世界は政治的に多様化していくのです。

ムハンマドが無くなつて百数十年、ムハンマドを直接知る人はいなくなつたけれど、イスラム共同体＝ウンマの理念が実体として感じられた最後の時代だと思います。

最盛期は8世紀後半、第五代カリフ、ハールーン＝アッラシードの時代です。

アッバース朝は10世紀以降は衰退して、名目だけの存在になるのですがアッバース朝のカリフは、宗教的な権威としてイスラム教徒の中で特別な存在でありつづけるのです。

個別受験用暗記項目です。

首都バグダードを建設したのは第二代カリフ、マンスール。

バグダードには「知恵の館」という総合学術機関が作られて、イスラム世界の学問芸術の中心となつた。

対外関係として751年のタラス河畔の戦い。中央アジアでアッバース朝が唐の軍隊を破った。この時の中国人捕虜から製紙法が西アジアに伝わった。

アッバース朝は軍事力として中央アジアのトルコ系遊牧民を導入した。かれらは騎馬戦術に優れていて兵士として有能だったのですね。

8世紀くらいから中国でもトルコ系軍人は大活躍で、安史の乱の安禄山もトルコ系ですし、それを鎮圧したウイグル人もトルコ系、五代十国時代の皇帝や軍人の中にもトルコ系の人気がかなりいる。

アッバース朝は奴隸としてトルコ系遊牧民を買って軍人としました。この、奴隸軍人のことをマムルークという。身分は奴隸ですが、功績があれば富も軍人としての地位も手に入れることができます。古代ローマの奴隸のように鞭でびしひし打たれている人たちではありません。

これ以降、マムルークはイスラムの歴史の中でどんどん活躍するからしっかり覚えておいてください。

アッバース朝は領土が広すぎたので、10世紀以降は地方の総督、軍人や周辺民族などが自立して王朝としての実体はなくなりますが、宗教的権威だけで生き延びる。このアッバース朝を最終的に滅ぼすのがカリフの宗教的権威に全然無頓着なモンゴルのフラグでした（1258）。

第45回 イスラム教の特徴 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第44回 イスラム教の特徴](#)

[次のページへ](#)
[第46回 イスラム世界の拡大と多様化](#)

世界史講義録

第46回 イスラム世界の拡大と多様化

----- イスラム帝国の分裂 -----

広大な領土を支配したアッバース朝ですが、すぐに分裂が始まります。イスラム共同体が現実の世界で一つだったのはアッバース朝のごく初期までのことでした。

1, 後ウマイヤ朝

アブル＝アッバースが反乱に成功して、アッバース朝を建てたときにウマイヤ朝の王族を皆殺しにしました。この時ただ一人ダマスカスから脱出するのに成功した二十歳の王族がいて、かれは追っ手から逃げて逃げて逃げまくる。北アフリカに何年か潜伏したあと、イベリア半島に渡って、この地域に新王朝を建国することに成功します。

これが後ウマイヤ朝（756～1031）です。首都はコルドバ。

ひとつであったイスラム世界が分裂する最初です。

2, サーマン朝（874～999）首都ブハラ

アッバース朝の都はバグダードでしたが、遠い地方にはだんだん統制が及ばなくなる。イスラム化した遠方の民族から自立化が始まります。その最初がサーマン朝。

サーマン朝はイラン系のイスラム国家です。アッバース朝の領土内で自立したと考えてください。入試的には「初のイラン系イスラム国家は何か」答え「サーマン朝」。それだけでオーケイです。

3, ブワиф朝（932～1055）

イラン系シーア派の政権。シーア派という点は覚えておくこと。

このブワиф朝はイランで独立政権を建てたあと、勢力圏を拡大して946年にはバグダードを占領した。バグダードにはアッバース朝のカリフがいるのですが、ブワиф朝の君主はこれを殺さないのです。そのまま生かしておく。カリフは単なる王や皇帝ではなくて、イスラム教のシンボル、ムハンマドの後継者ですから簡単には殺せない。

逆に生かしておいて、そのカリフから大アミールという称号をもらってイラン、イラク地方を支配することを正当化します。大アミールというのは大将軍というような意味。非常に理解しにくいのですが、アッバース朝の中にブワиф朝がある。二つの王朝が重なり合っているのです。

実は、これは私たちにはなじみ深いんですよ。天皇と幕府の関係にそっくりなのです。カリフはイスラム教徒には天皇と同じ。ブワиф朝はさしづめ鎌倉幕府か室町幕府といったところです。天皇もカリフも権力はない。権力はないけれど権威はある。だから実力者にとってはその権威を利用した方が得なのです。

イクター制という制度もブワイフ朝と結びつけて覚えておく。

ブワイフ朝は武力があったからアッバース朝を事実上乗っ取ることができましたが、高度な統治技術はありません。中央行政機関と官僚組織を使い支配地から徴税する能力がない。そこで、中央政府としては税金を集めることをやめてしまった。徴税をしないから軍人に俸給も払えない。だから俸給を払う代わりに、配下の軍人たちに徴税権をあたえた。「お前はこの村から、お前はあの村から税金を取れ。」と、それぞれの軍人が税金を取る農村の割り当てを決めた。これがイクター制です。

土地そのものを領地として軍人に与えれば封建制ですが、ブワイフ朝が与えたのはあくまでも「徴税権」だけです。

このやり方は、便利だったらしくこのあともいくつかの王朝で似たような制度が繰り返しあなわれています。

トルコ民族の活躍

1, カラ＝ハン朝（940～1132）首都ブハラ

アッバース朝ではトルコ系の奴隸を軍人として活用したといいました。マムルークと呼ばれるこの奴隸軍人の活躍をきっかけとして、徐々にトルコ民族の間にもイスラム教が浸透していきます。

マムルークとして、はじめは個人単位で改宗やイスラム世界への移住がおこなわれますが、やがて部族単位でイスラムに改宗して独自の政権を打ち立てるトルコ民族が現れ始めます。その最初がカラ＝ハン朝。サーマン朝を滅ぼしています。

入試的には「中央アジア初のトルコ系王朝」と覚えておけばよい。

2, セルジューク朝（1038～1157）

これもトルコ系の王朝。アラル海に注ぐシル河河口あたりで建国。トゥグリル＝ベグという君主の時にイラク方面に進撃、ブワイフ朝を倒してバグダードに入城しました。

セルジューク朝もアッバース朝のカリフを残しておいて、かれからスルタンという称号を受けます（1058）。これ以後スルタンという名称はイスラム世界では皇帝とか、大王といった感じでよく使われるようになります。日本風に無理矢理訳せば征夷大將軍ですね。

セルジューク朝はブワイフ朝からイクター制を受け継いで繁栄しました。

領土も拡大する。小アジア地方はビザンツ帝国の領土で、まだイスラム勢力が入り込んでいなかったのですが、セルジューク朝はイスラムとして、はじめてこの地域を領土に組み入れたのです。

びっくりしたのがビザンツ帝国。首都コンスタンティノープルの目と鼻の先までイスラムが進出してきた。ビザンツ帝国というのは東ローマ帝国のなれの果て、領土は小さくなっていますが同じものです。だから、宗教はキリスト教。西ローマ帝国は既に滅んでいますが、西方ではローマ教会が西ヨーロッパ人の信仰の中心になっている。

そこで、ビザンツ皇帝は同じキリスト教のよしみでローマ教会に助けを求めたのです。これに応えてやがてヨーロッパの王や諸侯の軍隊が何度もイスラム世界に攻め込んでくることになりました。この西ヨーロッパからの遠征軍を十字軍といいます。詳しい話は、ヨーロッパの歴史でお話ししますが、今は一応、「セルジューク朝の小アジア進出が十字軍の原因の一つである」と受験的に覚えてください。

セルジューク朝で覚えなければいけない人名がニザーム＝アルムルク（1018～92）。宰相です。セルジューク朝の最盛期を現出した。各地に「ニザーミア学院」という大学を設立した。これも受験知識。

3. ホラズム朝（？～1221）

セルジューク朝から任命されたマムルークの地方長官が自立してできた王朝。中央アジアからイランにかけて広い領土を支配して、東西の交通網を押さえて繁栄しました。しかし、この王朝は最盛期になるところで東からやってきたモンゴルに滅ぼされました。この話はモンゴルの発展の所で既にやりました。

エジプト

エジプトもやがてアッバース朝から自立します。エジプトにできたイスラム王朝は三つ覚えればよい。ファーティマ朝、アイユーブ朝、マムルーク朝です。

1. ファーティマ朝（909～1171）首都カイロ

ファーティマというのはムハンマドの娘の名前です。建国者がファーティマと第四代正統カリフ、アリーの血筋を引いていると自称しているのでこう呼ばれています。だからシーア派の王朝です。アッバース朝はスンナ派ですから、対抗上都合がいい。スンナ派のカリフなどは認めませんから、ファーティマ朝の君主はカリフという称号を名乗りました。イスラムは一つという理念があったので、それまでもアッバース朝に対立する政権ができてもアミール（将軍）くらいの称号で満足していた。アッバース朝のカリフがいるのに、カリフを名乗るのはタブーだったんですが、それを平気で破ってしまった。

日本でいえば天皇家が二つできた南北朝のようなものです。

しかし、一度タブーが破られてしまったらそのあとはあまり抵抗がないもので、ファーティマ朝の君主がカリフを称したすぐあとに、イベリア半島にあった後ウマイヤ朝のアブド＝アッラフマーン3世がカリフを自称しました。

この時点で、イスラム世界に、アッバース朝、ファーティマ朝、後ウマイヤ朝と三人のカリフが出現したことになります。

2. アイユーブ朝（1169～1250）首都カイロ

建国者サラーフ＝アッディーンはファーティマ朝の宰相だった。この人はアラブ人でもエジプト人でもなく、クルド人です。クルド人は現在でもトルコ、イラク、イランの国境地帯に住む民族です。イスラム世界というのは人の移動が活発なのですね。

サラーフ＝アッディーンはスンナ派です。この人は十字軍と戦ったことで有名。イスラム教徒を悪く言うのが普通のヨーロッパの武将たちが、かれのことだけは武人の鏡として讃めています。十字軍に参加したヨーロッパ人の兵士たちが、イスラム教徒に対して虐殺行為や裏切りをさんざんやったのに対して、サラーフ＝アッディーンはキリスト教徒に対しても正義と公正さを失わず、その立派な態度に多くの十字軍兵士が感銘を受けたようです。

そのうえ、戦争も上手で十字軍に奪っていた聖地エルサレムをイスラムの手に取り戻しています（1187）。イスラムのスーパースターです。

3, マムルーク朝（1250～1517）首都カイロ

アイユーブ朝のマムルーク、奴隸軍団がクーデタを起こして建てたのがマムルーク朝。名前のままです。この王朝ははじめはパッとしないのですが、ちょうどモンゴル軍が西アジアに侵入してくる時期と重なった。フラグの率いるモンゴル軍はアッバース朝を滅ぼして、その勢いでエジプトにも侵入を試みるのです。

マムルーク朝の軍隊がこれを迎え撃って、たまたま勝ってしまった。この勝利でイスラム世界でのマムルーク朝の権威が一気に高まるのです。また、十字軍の残存勢力をシリアから駆逐した。

アッバース朝の滅亡によって、イスラムの中心がバグダードからカイロに移動する。カイロが東西交易の中継点となって、マムルーク朝は非常に栄えました。この時期のイスラム国家の代表格と言っていいです。

イクター制を導入したことも受験的には覚えておくこと。

北アフリカ西部・イベリア半島

1, 後ウマイヤ朝（756～1031）首都コルドバ

この王朝に関しては既に話しました。10世紀、カリフを称したアブド＝アッラフマン3世の時が最盛期です。

2, ムラービト朝（1056～1147）

北アフリカからイベリア半島に領土をもった王朝。エジプトのファーティマ朝と対立関係にあった。スンナ派です。

この国を建てたのはベルベル人。北アフリカの土着の民族をベルベル人という。ベルベル人のイスラム国家ができたということは、北アフリカでも民族の違いを越えてイスラムが浸透してきたことを現しているわけです。だから、この王朝はベルベル人と結びつけて覚えること。

3, ムワッヒド朝（1130～1269）

ムラービト朝を滅ぼした、もう一つのベルベル人イスラム王朝。ベルベル人王朝としては領土は最大です。

4, ナスル朝（1230～1492）首都グラナダ

後ウマイヤ朝以来イベリア半島にはいくつかのイスラム王朝ができるのですが、これは常に北辺のキリスト教の土豪たちと領土争いを繰り返していました。徐々にキリスト教勢力が強くなり、イスラムの支配地域はじりじりと半島の南に追いつめられていくのですが、ナスル朝はイベリア半島最後のイスラム王朝として有名。

首都グラナダにはかの有名なアルハンブラ宮殿があった。今でも観光地として有名。それよりもギターの名曲「アルハンブラ宮殿の思いで」のほうが有名かもしれませんね。そんな曲知らないという人でも聞けばわかります。

もう一つ、この国が1492年に滅んで、イベリア半島は完全にキリスト教の地域になるのですが、滅ぼしたのはスペイン。同じ年にスペインが送り出したコロンブスの船団がアメリカに到達しています。この二つの出来事は結びつけて覚えておいてください。

アフガニスタン・インド

1, ガズナ朝（962～1186）

サーマン朝のマムルーク地方軍司令官が自立してできた王朝です。場所は現在のアフガニスタン。

2, ゴール朝（1148～1215）

アフガニスタン東部にいた地方支配者がガズナ朝から自立して建国した国です。この国は盛んにインド北部に侵入します。インドは豊かだからね。略奪目的です。ですが、このことでインドにも徐々にイスラムが広がっていきました。

3, 奴隸王朝（1206～1290）首都デリー

これはインドに侵入したゴール朝の將軍アイバクがアフガニスタンに帰らずに、インドに居座って建てた王朝です。アイバクはマムルークだったので奴隸王朝と呼ばれています。この名称はマムルークに対して誤解を与えやすい呼び方だと思います。マムルークは確かに奴隸身分ではあるけれど、専門の訓練を受けたエリートです。奴隸という言葉から受けるイメージと実態とギャップがありますね。

インド初のイスラム王朝ということで、しっかり覚えてください。

奴隸王朝のあともデリーを首都としてイスラム王朝が続きます。

奴隸、ハルジー、トゥグルク、サイド、ロディーという王朝ですが、これらをまとめてデリー＝スルタン朝と呼んでいます。デリーにあるイスラム王朝という意味です。

まとめ

広い地域にわたって、たくさんの王朝名が出てきてイライラしますね。でも、これは頑張って全部覚えることになっている。

アッバース朝以後、イスラム世界は分裂して多くの地方政権ができます。このなかで、カラ＝ハン朝、セルジューク朝、ホラズム朝、マムルーク朝、ガズナ朝、ゴール朝、奴隸王朝などロディー朝以外のデリー＝スルタン朝はトルコ系王朝です。トルコ人が軍人としてイスラム世界に急速に広がっていく傾向がわかると思います。こうしてアラブ人に代わりイスラム世界の主人公になっていきます。

スンナ派、シーア派ということが試験では問題になります。今日の中ではブワイフ朝とファーティマ朝だけがシーア派、あとは全てスンナ派です。

第46回 イスラム世界の拡大と多様化 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第45回 イスラムの発展](#)

[次のページへ](#)
[第47回 ティムール帝国・イスラム文化](#)

世界史講義録

第47回 ティムール帝国・イスラム文化

----- モンゴル帝国とティムール帝国 -----

カリフの宗教的権威で何とかつづいていたアッバース朝が1258年にフラグの率いるモンゴル軍に滅ぼされたことは前回話しました。モンゴル軍はアフリカ大陸までは、行けなかつたけれども、ほぼアジア全域を支配下に置いた。

フラグはイラン・イラク方面にイル=ハン国（1260～1353）を建てました。モンゴル人はこの地域を支配するために土着勢力と協力せざるを得ない。13世紀末に即位した第七代、ガザン=ハンの時にイスラムに改宗しています。

モンゴルの時にも話しましたが、この王の時の大臣が有名なラシード=アッディーン。セルジューク朝の名大臣ニザーム=アルムルクを手本にして、イラン人になじみやすいようにモンゴルの行政を改めたのと、『集史』というモンゴル史を軸にした歴史の本を書いたので有名。

中央アジアに作られたチャガタイ=ハン国も14世紀にはイスラム化していきました。

イル=ハン国もチャガタイ=ハン国も14世紀には衰退して在地勢力が各地で自立はじめます。

再びこの地域を統一し、イラクから中央アジアにまたがる大帝国となったのがティムール帝国（1370～1500）です。

建国者はティムール（？～1405）。この人はチャガタイ=ハン国の武将でしたが、やがて自立して、サマルカンドを都に大帝国を建設した。日本ではあまり馴染みがないけれど中央アジアのトルコ民族の間では今でも人気のある英雄の一人です。

簡単に言えばチンギス=ハーンの再来みたいな男で、残忍なことも平気でやりながら勢力を拡大した。ただ、チンギス=ハーンよりも陽気で明るいイメージで伝えられています。チンギス=ハーンが信長なら、ティムールは秀吉ですね。

瞼が異様に分厚く垂れ下がっていて、つり上げないと前が見えなかつたとか、片足が萎えていて歩行が困難だったとか、どこまで本当かはわかりませんが、かれの「異人」ぶりも伝えられています。

ティムールはチンギス=ハーンの血を引いていると自称しています。多少はチンギス=ハーンの血が流れていたかもしれない。だから、ティムールはバラバラに分解してしまったモンゴル帝国を復活させるのだと考えているのですね。積極的な領土拡大の原動力はここにある。

ただし、ティムールの民族をあえて言えば、モンゴル人というよりはトルコ人です。この時代のモンゴル人とトルコ人の違いというのも曖昧なものなのですが、中央アジアに進出したモンゴル人たちは混血によって事実上はトルコ民族化していると考えておいてください。

ティムールはイル=ハン国とチャガタイ=ハン国の領域をほぼ統一したあと、小アジアに進みます。ちょうど、ここにはオスマン朝というトルコ系のイスラムの王朝が力を伸ばしつつありました。このオスマン朝とティムール朝が激突したのがアンカラの戦い（1402）。ティムールが勝って、オスマン朝は大打撃を受け一時は滅亡寸前にまでなります。

ただし、オスマン朝はこのあと復活してやがて古代ローマ帝国にも劣らないような大帝国を作り上げて、最終的には20世紀まで存続する王朝になります。覚えておいてください。

アンカラの戦いはイスラム東西両雄の決戦といったところです。

このあとティムールは軍を東方に向けます。実はこの間に中国では元が滅んで明という漢民族の王朝が生まれています。

ティムールはモンゴル帝国の復活を目指していますから、中国遠征、明の討伐を計画した。アンカラの戦いの2年後、1404年1月、20万の大軍を率いてサマルカンドを出発した。「チムールは…武器、兵糧をはこぶために騎兵一人について、それぞれ10人ずつの輸卒をつけさせた。穀物数千荷は軍用車ではこばれたが、これは道すがら種子をまいて帰路の兵糧に供するためであった。なお、さらに7年間をささえるに足る乾草飼料を用意し、そのほか各人が乳牛2頭、乳羊10頭ずつをたずさせて、途中の食糧の欠乏にそなえることにした。」（中央公論社、『世界の歴史9』）というから、すごい作戦です。

これが最後まで実行されていたら、中国の歴史はまったく変わったものになったかもしれないのですが、この遠征は途中で中止になった。ティムール自身が死んでしまったのです。最後までスケールの大きな英雄児でした。

ティムール帝国はティムールの死後徐々に衰えて、やがていくつかの地方政権に分裂していました。

----- イスラムの学問・文化 -----

イスラム世界では、地域や民族を越えて同一の学問文化が広がります。
イスラムでは学問を「外来の学問」と「固有の学問」に分けています。

「外来の学問」はイスラム教と直接関係のない他民族の学問のことをいいます。具体的

には、ヘレニズム文化、ペルシア文化、インドの学問などです。イスラム世界はこれをアラビア語に翻訳して、独自に発展させていきます。

特にインドから影響を受けた数学はわれわれにもおなじみですね。数学で使っている数字、これはアラビア数字というのですよ。インドからゼロという概念を導入したのは数学の発展に計り知れない功績です。

漢字でもローマ字でもゼロという数字はない。たとえば230というのを漢字で書くと二百三十というのが、伝統的な書法です。百が二つと十が三つあるという発想ですね。ローマ数字も同じ発想で、一の位がどれだけあるかについては触れない。一度やってみたらわかりますが、漢数字だけで計算するのは、すごく困難です。アラビア数字のありがたみがわかります。

医学、哲学も外来の学問として発展します。特に医学は同時代のヨーロッパと比べて格段に進んでいた。というか、ヨーロッパの水準が低すぎるのですが。

代表的な学者がイブン＝シーナー（980～1037）。この人が書いた医学書が『医学典範』。イスラム世界最高の医学書で、ヨーロッパでも17世紀までは医科大学の教科書に採用されていたといいます。また、アリストテレス学者としても抜きんでて、なにやら難しい存在論について考えていた。

イブン＝ルシュド（1126～98）。この人も医学の本を書き、また、アリストテレス哲学を再現しようとした。ほとんど全てのアリストテレスの本に注釈をつけたので有名。かれの学問はヨーロッパ中世の学問に大きな影響を与えた。

「固有の学問」というのは、イスラム法学です。イスラム世界では、社会生活の全てがコーランを基礎にして組み立てられているけれど、現実の社会のいろいろな出来事をコーラン一冊では判断できないわけです。だから、コーランをどう現実社会に当てはめるかという理論が必要になる。

そういう理論をイスラム法学という。これを教える学校をマドラサ、イスラム法学を修めた知識人のことをウラマーといい、現在でもウラマーはイスラム世界では社会の指導者、地域の相談役みたいな位置にあります。イスラム世界で一見お坊さんみたいに見える人がウラマーです。スンナ派、シーア派それぞれに法学理論が発展していきました。

固有の学問として教科書に出てくるのがイブン＝ハルドゥーン（1332～1406）の『世界史序説』。文明の進んだ都市と、遅れた砂漠のような田舎との緊張関係から歴史の理論を考えた本です。

もう一つがイブン＝バトゥータ（1304～68？）の『三大陸周遊記』。モロッコ生まれのこの人は、巡礼でメッカに行ったついでにインドからスマトラ、中国の北京まで旅行をする。ちょうどモンゴル帝国の時代なのですね。帰ってから今度はイベリア半島に渡り、その次はサハラ砂漠を越えてニジェール川を探検している。その旅行記です。

何年も旅をして収入はどうなっているのかと思うと、かれは法学者、ウラマーなのですね。で、旅行先で先生として迎えられて教えている。地方の君主の招待を受けたりしながら旅をする。実に気軽に成りゆきにまかせてどこでも行ってしまう。面白いことにイブン＝バトゥータがアジアからエジプトに帰って来たときに、北京で知り合った人の兄弟と偶然出会っている。これは、イブン＝バトゥータだけでなく、イスラム教の人々が実際に活発に移動していることの一例ですね。

イスラム教には神秘主義というものがある。11世紀頃から流行しました。正統的なイスラムでは満足できない人たちの間から生まれてきたものです。ムハンマドが最後の預言者とすれば、二度と神が人間に話しかけてくれることはないわけですね。残された人類に出来ることは法学者のようにコーランを解釈することだけです。「これではつまらん！神を実感したい」という修行者が現れてくる。こういう修行者をスーフィーといいます。スーフィーはいろいろな難行苦行をして自分の内面に神を感じようとするのです。資料集にはトルコの「踊る教団」の写真がある。この人たちはこうしてクルクル回転するのが修行。目がまわってクラクラするその時に神を感じるんでしょうね。ほかにも色々な教団があるそうです。

イスラム教がアラブ人以外の民族に広まっていったのにはスーフィー教団の活動が大きかったといわれています。修行する姿というのは共感を呼びやすいですね。

この神秘主義を理論化したひとがガザーリー（1058～1111）です。セルジューク朝の宰相ニザーム＝アルムルクに認められ、スンナ派の最高の学者としてバグダードのニザーミア学院で教授をしていたのですが、37歳の時に教授の地位も家族も友人も財産もすべてを捨てて修行者として放浪の旅に出た。理論ではなく、自分自身の内面に神を感じたいと思い詰めたらしいです。

文学では、『アラビアン・ナイト』。『千夜一夜物語』という名前でも有名ですね。16世紀はじめ頃に現在の形にまとまった。この中に「アリババと40人の盗賊」とか「シンドバットの冒険」とかいろいろな話が入っています。イスラム商人たちが活躍した地域の話が取り込まれているので中国やインドの話なども出てきます。子供向けにアレンジされたシンドバットやアラジンと魔法のランプの話などは、知っている人もいると思うけれど、子供向けに直していないのを読んだことある人いますか。すごいよ。この『アラビアン・ナイト』は、まるでポルノです。私は高校時代に何気なく岩波文庫で読んでびっくりしました。滅茶苦茶スケベな物語なんです。教室で細かく紹介することは出来ませんが、とにかくどの話にも男と女が出てきて必ずそういうシーンがある。うんざりするくらいです。今はどうか知りませんが、10年くらい前はエジプトでは発行禁止でした。昔、外国で『アラビアン・ナイト』を映画化したことがあって私も当然勉強のために見に行きました。そうしたら、案の定、映倫に厳しくチェックされてボカシだらけの画面でした。

映画はいろいろな話がバラバラのオムニバス形式でしたが、『アラビアン・ナイト』全体の話はこんな形です。

最初にイスラムの王様が出てきます。この王様、妃を愛しているのですが、弟に妃が浮気をしていることを教えられます。本当かどうか確かめるために、王様、ある日妃に外出を告げて、こっそり帰ってきて、妃の振る舞いを見張っていた。そうしたら、妃は男奴隸や女奴隸を集めて乱交に及ぶんだ。王様、カッとなつて妃も奴隸もみんな殺してしまった。

以後、王様は女性不信に陥る。あんなに愛していた妃が不貞をはたらいた、というわけですべての女性に復讐をはかる。どうするかというと、毎晩自分の国の乙女を一人ずつ宮殿によんで、一夜の供をさせたあと殺していくのです。女の子を宮殿に連れてくるのは大臣の役目なんですが、王様が毎晩女の子を殺してしまうので、国にはもう乙女がいなくなってしまった。最後に残ったのは自分の娘なんですが、仕方がない。とうとう、自分の娘を王のもとに届けることになった。この娘の名が、シェーラザードといいます。

王はいつのものように彼女と寝たあと殺そうとするのですが、その時シェーラザードが「王様、私面白いお話をしましょう。」と話をはじめる。彼女も殺されたくありませんから必死です。王もどうせ暇ですから、殺すのは後回しにして話をさせてみるとこれが面白い。熱中して聞いているうちに夜明けが来る。そうするとシェーラザードは話をうんと盛り上げておいて「このつづきは、次の夜にしましょ。」と言うんだね。王様、話のつづきを聞きたいために、殺すのを延期します。

こんなふうにして、シェーラザードは毎晩毎晩死なないために話を続け、王は、話を聞きたいために殺すのを先延ばしにします。結局シェーラザードは1000夜、話をつづけて、話が終わったときには王様は心を入れ替えて、女性に復讐するのをやめましたとさ、という結末です。

このシェーラザードの話の中にシンドバッドやアラジンやアリババが出てくるのです。

話の舞台はアッバース朝のカリフ、ハールーン=アッラシード時代のバグダードが多いです。この時代がイスラムの栄光の時代という認識があるのでしょう。

話の中でランプの魔人とか指輪の魔人とか出てきて、願い事をかなえてくれたりするでしょ。欲しいものは何でも手に入る。イスラム世界の中心、世界中から商人たちが運び込んだ商品がある。そういうバグダードを象徴しているような気もしますね。

それから詩です。ウマル=ハイヤーム（1048～1131）だけ覚えておけばよいです。作品名は『ルバイヤート』。この人はセルジューク朝に仕えていて、詩だけではなく科学者としても有名です。「ジャラーリー暦」という正確な暦を残している。実は詩はイスラム世界では有名ではないらしい。19世紀にイギリスのE. フィットジエラルドという人が英語に翻訳して、この翻訳が素晴らしかったらしく世界的に有名になりました。原語でならばこの程度の詩人はたくさんいるということです。

建築の特徴としては特にモスクの建築様式なのですが、ドームと塔が特徴です。塔はミ

ナレットといいます。ドームの周囲に四本立っているのがミナレット。それから建築物の壁などを飾る文様をアラベスクといいます。クニヤクニヤした幾何学紋様です。イスラムでは偶像崇拜の否定から人の姿を描きませんから、こういう複雑な幾何学紋様が発達しました。

絵画はミニアチュールと呼ばれる細密画が有名です。これは受験知識として覚えておけばよい。

第47回 ティムール帝国・イスラム文化 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第46回 イスラム世界の拡大](#)

[次のページへ](#)

[第48回 東ヨーロッパ世界の
と多様化](#)

世界史講義録

第48回 東ヨーロッパ世界の形成

----- ビザンツ帝国の盛衰 -----

ローマ帝国が東西に分裂した（395）あと西ローマ帝国はゲルマン人の侵入で滅び、ゲルマン人の国家が建設されます。

東ローマ帝国の皇帝ユスティニアヌス帝（位527～565）はこれらゲルマン民族国家を滅ぼし、旧西ローマ帝国の領土をある程度回復します。これが、古代ローマ帝国の最後の輝きです。

ユスティニアヌス帝はトリボニアヌスに命じてローマ法を集大成した「ローマ法大全」を編纂させたことでも有名です。

ユスティニアヌス帝の死後、一時拡大した領土はまた縮小していきます。イタリアはランゴバルト族に奪われ、東方ではササン朝ペルシアとの抗争がつづきます。また、北部国境は、黒海の西からブルガール人が侵入してくる。

東ローマ帝国はこれらの外敵に対して基本的に守勢一方。都がローマにあるわけでもないのにローマ帝国というのもおかしいですから、ユスティニアヌス帝以後、この国をビザンツ帝国と呼ぶのが一般的です。ビザンツとは首都コンスタンティノープルの古名ビザンティウムからついた呼び名です。

イスラム勢力にエジプト、シリアを奪われてからのビザンツ帝国の領土はバルカン半島と小アジアだけになり、実質的にはローマ人の国というよりギリシア人の国ですね。ただし、ローマ帝国の理念だけは引き継がれている。

かつてのローマ市は「パンとサーカスの都」といわれましたが、コンスタンティノープルでも市民への食糧の配給はおこなっていました。これはイスラム勢力によって穀倉地帯エジプトが奪われる618年までつづいた。ユスティニアヌス帝時代はこの意味でもローマ帝国らしい最後の時代だったのです。

ただ、あの時代になってもコンスタンティノープルの競馬場で戦車レースは盛んにおこなわれていた。貴族や市民がつめかけておおいに熱狂した。もちろん皇帝も観戦。古代ローマをみんなで演じていたみたいです。

ヘラクレイオス1世（位610～641）の時代にイスラム勢力が急速に領土を拡大してきます。首都での食糧無料配給をやめたのがかれの時代です。

この時期に、イスラムとの戦争のための新しい制度が生まれる。軍管区制と屯田兵制です。

軍管区制はテマ制ともいう。地方の軍司令官に行政権もゆだねる制度です。行政の臨戦

態勢ですね。地方軍団の兵士は農民です。農民たちは租税を免除されるかわりに戦争になつたら武器自弁で戦つた。負けて領土を奪われたら自分たちの土地が無くなるわけですから必死になって戦つた。侵略戦争には向きませんが、防衛戦争には力を発揮する。これが屯田兵制です。

宗教は、皇帝教皇主義です。皇帝がキリスト教会のトップの地位にあることをいう。

ビザンツ帝国は常にイスラム勢力と境を接して争つてゐるので、宗教面でも対抗心が旺盛です。イスラムとの関係で8世紀の皇帝レオン3世がだした法律が「聖像崇拝禁止令」。イエスやマリアの像を拝むことを禁止する。それまでは日常的に聖像崇拝がおこなわれていたのですが、イスラム教が偶像崇拝を厳しく禁止しているのに刺激されて偶像崇拝を禁止したのですね。偶像も聖像も同じことです。

前にも説明しましたが、キリスト教もイスラム教も同じ神を信じていますから、厳格なイスラムに比べキリスト教は堕落しているように思われたのでしょうか。

ところが、この聖像崇拝禁止令がローマ教会とコンスタンティノープル教会の対立を生んだ。ローマ帝国時代に各地に五本山と呼ばれる大きな教会ができるのですが、ローマ教会もコンスタンティノープル教会もそのうちの二つです。どちらが偉いということはないけれど、以前から二つの教会は高い権威をもって張り合っていた。

ローマ教会は西ローマ帝国が滅んだあとは、ビザンツ帝国と協力関係にあるのですが、イタリア半島はビザンツ帝国の領土からはずれているから、実際にはビザンツ帝国は頼りにならない。そこで、ローマ教会は生き延びるためにゲルマン人たちに一所懸命布教して、教会の存続をはかっています。で、ローマ教会はゲルマン人に布教するときにイエスやマリアの像を使っていたんだね。多分、十字架磔のイエスの画像なんかを見せて「お前たちの罪を償うためにイエス様はこのように死なれたのだ！」とか言って布教していたんでしょう。ゲルマン人はまだまだ文明度は低いですから、そんな絵を見て何とかキリスト教を理解できたのかもしれない。

だから、ローマ教会にとって聖像を使用できなくなるというのは死活問題だった。そこで、ローマ教会はビザンツ皇帝の方針に反対します。もともと、ローマ教会は皇帝教皇主義にも不満だったので、ここで両教会はケンカ別れをしていくことになった。

ローマ教会はローマ＝カトリック、コンスタンティノープル教会はギリシア正教と呼ばれるようになります。

両教会の分裂を生んだという意味で、聖像崇拝禁止令は大事です。

余談になりますが、聖像崇拝禁止令が出た直後の時期には、ビザンツ帝国では聖像は破壊されましたが、のちに復活します。現在、ギリシア正教では聖像のことをイコンといい、信仰上重要な意味づけがなされていて非常に大事にしている。今でも修道院などで盛んに作っています。資料集にも載っていますが、決して上手な絵ではなくて、わざとへたくそに描いているようでもある。制作者はサインをせず、個性を押さえて描くのが

基本だそうです。

軍管区制のもとで、やがて地方の軍司令官が皇帝に対して反乱を起こすようになるのですが、9世紀には軍司令官たちの権力を削り弱体化させ、皇帝権力が強化される。この時期がビザンツ帝国の最盛期といわれている。

この時期には皇帝の妃を選ぶために全国美人コンテストがおこなわれた。身分は一切関係なし。全国から美女がコンスタンティノープルに集められて、もっとも美しい娘に皇帝が黄金のリンゴを手渡すのです。リンゴをもらった娘が妃となる。この黄金のリンゴはトロヤ戦争の発端になったギリシア神話に基づいています。以前に話しましたね。

何とも風雅なことをやっていますね。でも、神話的な香りがするこの美人コンテストが帝国の中央集権化を維持する重要な儀式だったのです。

11世紀になると大土地所有者である貴族の勢力が強まってきて、プロノイア制というものがはじまる。これは、貴族に地方の徴税権を与えるものです。イスラムのイクター制と似たものです。

また、この時期にはセルジューク朝が小アジア地方に領土を拡大してビザンツ帝国を圧迫する。

危機感を持ったビザンツ皇帝は西方のローマ教会に救援を求めます。これに応じてヨーロッパ諸国の王や諸侯がビザンツ帝国経由でシリアに遠征します。これが第一回十字軍。このあと約200年間にわたって前後7回の十字軍が西ヨーロッパからイスラム世界に遠征することになります。

ところで、領土が小さくなっても、首都コンスタンティノープルはアジアとヨーロッパ、黒海と地中海を結ぶ交通の中心地で、商業でおおいに栄えている。地中海貿易で当時一番勢力があったのがイタリアのヴェネチア商人です。コンスタンティノープルにも駐在員を置いておおいに儲けていた。

ビザンツ帝国とヴェネチア商人は持ちつ持たれつの関係だったのですが、両者の関係が一時期こじれます。その結果、第四回十字軍はヴェネチア商人の誘導でビザンツ帝国を攻撃してコンスタンティノープルを占領してしまった。滅茶苦茶ですね。

コンスタンティノープルを乗っ取った十字軍の兵士たちはここにラテン帝国という国を建てる。ビザンツ帝国の貴族たちは地方に亡命政権を立てます。これをニケーア帝国という。

その後ニケーア帝国はラテン帝国からコンスタンティノープルを奪還し、ビザンツ帝国は復活するのですが、もう以前のような繁栄はもどらない。バルカン半島の領土も新興のオスマン帝国にどんどんとられて、事実上コンスタンティノープルとその周辺だけにしか領土がない都市国家になる。ただ、貿易の利益と千年以上の年月をかけて造り上げてきた何重もの城壁に守られて、もう少し生き残ります。

しかし1453年、ついにオスマン帝国によってコンスタンティノープルは陥落し、ローマ帝国から数えれば二千年以上つづいたビザンツ帝国は滅びました。

----- ビザンツ帝国の経済と文化

ビザンツ帝国の経済はひとえにコンスタンティノープルの交易上の立地条件の良さに支えられていました。

また、ローマ帝国時代から受け継がれてきた工業も盛んで、特に絹織物、宝石細工、武具など輸出用工芸品の製造業が発展していました。

ビザンツ金貨も広い範囲で流通していたということです。

文化的にはギリシア・ローマ文化を継承し、それをイスラム世界や西ヨーロッパ世界に伝えたという点で世界史的な意義がある。

また、ギリシア正教を東ヨーロッパに布教した。布教に際してスラブ諸語を書き記すためにビザンツのお坊さんが考案したのがキリル文字です。いま、ロシアで使っている、ローマ字がひっくり返ったようなあれ。

ビザンツ建築。ドーム、モザイク画が特徴。代表的な建築物が聖ソフィア寺院。

----- 東欧世界

ビザンツ帝国の北方はどんな様子だったか。現在の東ヨーロッパにあたる地域です。

ここには中央アジアと直結していますから、アジア系遊牧民族がいます。

マジャール人。9世紀頃現在のハンガリーの地域に移住ってきて先住のスラブ人と同化し、10世紀頃にはハンガリー王国を形成します。宗教はカトリック。

ハンガリーのハンは、その前に来ていたフン族のことです。ハンガリー人というのは、今でも髪も瞳も黒く、目の細い人が多いですね。名前も姓が先にきていて、われわれと同じです。

トルコ系のブルガール族が建てたのがブルガリア王国。ただ、ブルガール族は大多数のスラブ人に同化されていきます。ブルガリア王国は7世紀に建てられ、いったん滅んだあと12世紀に復活します。宗教はギリシア正教。

東欧地域の主人公がスラブ民族。広く分布しているので、代表的な国だけみておきましょう。

ロシア方面では、9世紀にノヴォゴロド国とキエフ公国が成立。キエフ公国では10世紀にウラディミル1世がギリシア正教を国教化しています。

その後13世紀にはモンゴルのキプチャク=ハン国ができてロシアのスラブ人の国はその支配下にはいりました。15世紀末になってモスクワ大公国がキプチャク=ハン国から独立して現在のロシアのもとになった。

ポーランドも10世紀に国家建設。14世紀にはリトアニア=ポーランド王国を形成して東欧に大きな勢力を持つ。宗教はカトリックです。

東欧でも一番西よりにいたのがチェツク人。かれらは9世紀にモラヴィア王国を形成しますが、マジャール人の攻撃で衰退。その後、ローマ=カトリックを受け入れてドイツに臣従します。ドイツにできた神聖ローマ帝国のなかで12世紀にはベーメン王国を建てた。これが現在のチェコのもとです。

以上、受験知識でした。

第48回 東ヨーロッパ世界の形成 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第47回 ティムール帝国・イスラム文化](#)

[次のページへ](#)

[第49回 西ヨーロッパ世界の形成](#)

世界史講義録

第49回 西ヨーロッパ世界の形成

----- ゲルマン大移動 -----

ローマ帝国が絶頂期を迎えていた頃、黒海からバルト海にかけて広く分布していたのがゲルマン民族です。カエサルの『ガリア戦記』や一世紀のタキトゥスの『ゲルマニア』に、当時のゲルマン人の暮らしぶりが描かれている。タキトゥスはローマ人が失ってしまった素朴さ、質実な暮らしぶりをゲルマン人にみているようです。ゲルマン人もローマ人も広い意味で同じインド＝ヨーロッパ語族に属していますから、文化の根っここの部分で似たところがあるのでしょう。

ゲルマン人は多くの部族に分かれて、狩猟・牧畜、ローマ人との接触の多い地域では初步的な農業もおこなっていた。やがて、人口増加とともに、集団ごとにローマ領内に移住してくるものもあらわれてきました。中には、コロヌスになったり、ローマ軍の傭兵になるものもでてくる。

また、有力部族長の子弟が、なかば人質としてローマ帝国で青年時代を暮らしローマ風の文化を身につけて成人してから部族に帰る、ということもおこなわれていた。だから、一部ではかなりローマ化していた部族もあったのです。

ゲルマン人はたくさんの部族に別れていますが、この時期に活躍する部族としては、東ゴート、西ゴート、ヴァンダル、ランゴバルド、フランクを覚えておけばよいでしょう。

375年、東方から移動してきた遊牧騎馬民族フン族が黒海北岸にいた東ゴート族を征服します。その西にいたのが西ゴート族。フン族を怖れて民族移動を開始します。これがゲルマン民族大移動の始まりです。

西ゴート族はフン族から逃れて西に移動しますが、そこにはローマ帝国がある。ドナウ川が国境で、ローマ軍が国境を守っている。だから、入れてもらえない。西ゴートの人々は「手を振り、泣きながら、船橋を架けて渡して欲しいと哀願を繰り返した」というから、必死で逃げてきている、まさに難民ですね。

西ゴート族はさらに西に移動し5世紀はじめには西ローマ領内に侵入する。当時西ローマ帝国を実質的に支えていたのがスティリコ将軍。実はこの人はゲルマン人です。ローマ帝国を支える将軍も大臣もゲルマン人出身のものが非常に多くなっているのが面白いね。ローマ帝国がゲルマン人なしでは成り立たなくなっているのです。守も攻めるもゲルマン人。

スティリコ将軍は西ローマ帝国のために必死に戦っているのですが、ゲルマン人に偏見を持つ人たちの讒言で、皇帝に殺されてしまいます。これが、408年。その2年後、

410年には、西ゴート族がローマを占領して略奪しまくる。永遠の都ローマが蛮族に蹂躪されたわけで、この事件はローマ世界に非常なショックを与えた。教父アウグスティヌスは、ローマも所詮は地上の国よ、神の国が大切なさ、と『神の国』を書く。

ところで、西ゴート族はローマを略奪したときに西ローマ皇帝の妹を人質としてさらっていきます。ガラ・プラキディアという女性。西ゴート族はこのあと現在のフランス南部からイベリア半島にかけて移動していきますが、彼女はそのまま連れられていき、414年には西ゴート族の王様の妃になる。妃にされた、と言った方がいいのかな。で、彼女は夫である西ゴート王にローマ帝国を守ることを説いたのです。その影響もあって、西ゴート王はローマ帝国をゴート人の武力で再興する、などという演説をしたりする。

西ゴート族も、好きこのんで戦争しながら移動しているわけではなくて、安住の地が欲しいのです。女子供、老人も引きつれての民族移動です。

結局西ローマ領内で安定した生活を実現しようと思ったらローマ人の協力がなければダメなんですね。だって、人口としては圧倒的にローマ人が多いんですよ。西ゴート人なんてほんの少数です。ただ、「蛮族」で武力が強いだけですから。

ガラ・プラキディアの夫はすぐに死んでしまうのですが、このあと西ローマ皇帝は西ゴート族と同盟を結び、かれらが西ローマ領内に西ゴート王国を建国することを認めました。かれらを潰すだけの力がないですから、認めてしまって逆に西ゴートの軍事力をを利用して新たな部族の領土内への侵入をくい止めようとしたのです。ガラ・プラキディアはこのあと西ローマ側にかえされ再婚して子供を生みます。この子がのちに西ローマ皇帝になるから面白いですね。

西ゴート族のあと、次々に移動してくるゲルマン諸部族はローマ領内に王国を建て、西ローマ帝国はこれを追認するしかなく、皇帝の直轄地は小さくなる一方でした。

一番長い距離を移動したのがヴァンダル族。ジブラルタル海峡を渡り北アフリカ、カルタゴがあった地方ですが、ここにヴァンダル王国を建てる。ここは、西ローマ帝国の穀倉地帯だったのです。

476年、西ローマの傭兵隊長オドアケルが西ローマ皇帝ロムルス・アウグストゥルスを退位させ西ローマ帝国は滅んだ。ただ、この時点で実質的には西ローマ帝国は名前だけになっていてあちこちにゲルマンの部族国家があったので、当時としては大したニュースでもなかったらしいです。

面白いのはオドアケルは自分は帝位につかず、西ローマ皇帝の冠を東ローマ皇帝に返却するのです。で、東ローマ皇帝からローマ帝国の官位をもらってイタリアを支配します。ローマ帝国から権威を与えられたかったのです。西ローマ領内にあったゲルマン部族国家も東ローマ皇帝から官職を与えてもらいます。かれらは、自分の王国でゲルマン人に対しては王として、ローマ人住民に対してはローマの官職を使って支配をおこな

う。二重統治体制をやった。

オドアケルのイタリアに侵入したのが東ゴート族。かれらはここに東ゴート王国を建国（493）。ローマ人貴族の協力をえながらイタリア半島を支配し、東ローマ帝国もこれを認めますが、やがてユスティニアヌス帝に滅ぼされた。

そのあとイタリア半島にやって来たのがランゴバルド族。東ローマの勢力を退けてランゴバルド王国を建国（568）。この国は774年までつづきますが、この間にランゴバルド人はローマ人と混血して同化してしまった。ローマ人も自分たちをランゴバルド人と意識するようになっていたといいます。要するに両者が融合した、ということですね。

東ローマ帝国もビザンツ帝国に変質し、旧西ローマ領に対して影響力を無くしていきますから、当然の成りゆき。

これらは、西ローマ帝国の中心地にはいっていった部族ですが、周辺地域を移動したグループもある。その代表がフランク族。これは、今のドイツ北部からフランス北部に移動し、フランク王国をつくる。移動距離が比較的短かったので、部族としてのまとまりがあまり崩れなかった。東・西ゴート族やヴァンダル族は移動する途中でかなり雑多な人々を吸収して部族そのものが変質しているのです。

ユトラント半島から海を越えてブリタニア、今のイギリスに渡ったのがアングル族・サクソン族。今でもイギリス人やアメリカ人のことをアングロサクソンと呼ぶのはここから来ている。

あと、現在のイスアタリに来たのがブルグント族。ブルグント王国を建てる。覚えておくのはこれくらいでよいでしょう。

4世紀、西ゴート族の移動からはじまったゲルマン人の大移動は7世紀ころまでの約300年間つづいた。

その後もゲルマン部族国家同士の争いはつづきますから、長い期間政治的に西ヨーロッパは不安定ですね。

繰り返しますが、かれらが移住したのは旧西ローマ帝国の領域の中です。そこにはローマ人が住んでいる。ゲルマン人の人口は全人口の5%くらい。ローマ人の有力者の協力をいかに得ることができるかが、ゲルマン部族国家が発展できるかどうかの鍵です。だから、西ゴート王も東ゴート王も東ローマ皇帝から官職をもらって、支配者としてのお墨付きをもらおうとしたんです。

ヴァンダル王国は534年、東ローマのユスティニアヌス帝によって滅ぼされます。西ゴート王国は711年、イスラムのウマイヤ朝によって滅亡。

ブルグント王国は534年、ランゴバルト王国は774年にフランク王国によって滅ぼ

された。

多くのゲルマン国家が滅んでいくのに、フランク王国は他のゲルマン人国家を征服してやがて西ヨーロッパを統一します。なぜか。

----- フランク王国の発展 -----

フランク族は、さらに小さな支族集団に分かれていました。移動後、小集団がそれぞれ小さな国を建てるのですが、この小国家を統一してフランク王国を建てたのがメロヴィング家のクローヴィス（位481～511）。これをメロヴィング朝という。これがフランク王国発展の基礎を作るのであるが、その秘訣は宗教なのです。

ゲルマン人はキリスト教を信じているのですが、アリウス派という宗派です。これは、325年のニケア公会議で異端とされた宗派で、ローマ帝国内で布教できないのでゲルマン人に信者を広げていたのです。

ローマ人は何を信じているかというと、同じキリスト教でもアタナシウス派。つまりローマ教会の信者です。

クローヴィスも他のゲルマン人と同様アリウス派だったのですが、アタナシウス派に改宗する。

ローマ人にとってローマ帝国が無くなったあと、頼りになったのはローマの行政区ごとに作られた教会だった。元老院議員をだしたような有力な家柄のものが教会の聖職者としてローマ人の指導者的立場にあつたりするわけだ。

フランクの王が同じ教会の信者になるというのは、ローマ人にとっては「おおっ！」という頼もしさ。この王様を助けましょう、と思う。というわけで、ガリア地方、今のフランスにあたる地域ですが、のローマ人たちはクローヴィスを支持した。また、教会はローマ帝国時代から引き継いでいる行政上のいろいろなテクニック、学問、技術をもっているからフランク王国はこれらのものを手に入れることもできたわけだ。こういうわけで、フランク王国は他のゲルマン国家と違い安定して発展することができたのです。

フランク族は分割相続の習慣があって、王国はクローヴィスの息子たちにわけられて、それぞれで内紛や貴族の権力闘争で王たちは次第に力を失っていきました。かわりに、フランク族のまとめ役になったのが宮宰(きゅうさい)。総理大臣みたいなものと思ってください。行政の最高職です。

この宮宰について強大な権力を握ったのがカロリング家のカール=マルテル。かれは、全分国の宮宰となってフランク王国の実権を握った。かれを有名にしたのが、732年のトゥール・ポワティエ間の戦い。ピレネー山脈を越えて進撃してきたイスラム軍を撃退した。実際に戦いの様子がどんなだったかは情報不足でわからないのですが、と

にかくこの戦い以後、イスラム軍の進撃がとまった。この結果、カール=マルテルの評判はうなぎ登りです。名声を確立した。

その息子がピピン3世。宮宰職をつぐのですが、かれは父親が残した実績と名声をひきつき、メロヴィング家の王を追い、751年に王位についた。これがカロリング朝の始まりです。

ピillin3世が即位するにあたっては、ローマ教皇がかれの王位を認めました。宗教的権威をもって認めるので、教会の信者にとっては正統性を持つことになるわけだ。ピillin3世は、かわりにランゴバルド王国の領土を奪って教皇に寄進した。これを「ピillinの寄進」という。教皇領のはじまりです。これ以後ローマ教会は信者から領地を寄進されて大きな教皇領を持つようになります。

これ以後フランク王国とローマ教会は一層緊密な関係になります。

カトリック教会と西欧のキリスト教化

ローマ教会のことを再確認しておきます。

ローマ教会はコンスタンティノープル教会やその他の教会と同じようにローマ帝国の中で発展してきましたが、西ローマ帝国滅亡によって国家の保護がなくなる。ただ、東ローマ帝国との連絡はあって、皇帝の指導下にあります。ユスティニアヌス帝が東ゴート族からイタリアを奪還したときにはローマ教皇はローマ地域の行政長官に任命されていて、ランゴバルド族の侵入で東ローマ帝国が撤退したあとも、ローマ周辺の統治権を握っていた。そういう意味では単なる宗教指導者ではなかったわけです。

だから、ビザンツ皇帝の皇帝教皇主義には反対した。ローマ教会の独立性を主張する。そのためにも、ランゴバルド王国の北方で勢力を拡大しつつあったフランク王国と協力関係を結んでいって、政治上の庇護者にしようとしたのです。

726年、ビザンツ皇帝レオン3世による聖像崇拜禁止令は、ローマ教会とビザンツ帝国の対立をうみ、東のコンスタンティノープル教会とローマ教会はその後分裂して発展していきます。

コンスタンティノープル教会がギリシア正教会に、ローマ教会がローマ=カトリック教会として別々の宗派になっていきます。

カール大帝

ピillin3世の子がカール大帝（位795～813）。カール大帝の時代にフランク帝国は大発展して、西ヨーロッパ全域を統一した。領土の大きさではビザンツ帝国に匹敵する大帝国です。

このカール大帝にローマ教皇がローマ皇帝の冠を授けたのが800年。この時のローマ

教皇の名前がレオ3世。聖像崇拜禁止令のビザンツ皇帝とは別人ですから注意してください。フランク王をローマ帝国皇帝と名乗らせることによって、西ヨーロッパはビザンツ帝国と対等だ、とローマ教会は主張したかったのです。この事件を「カールの戴冠」という。

カール大帝がローマ人の血を引いているわけでも、フランク王国の首都がローマにあるわけでもないのですが、文明世界の代表、偉大なローマ帝国の理念が西ヨーロッパに復活したという意味で、大きな事件です。フランク王国自体も大きな権威を持つようになる。

カール大帝の政策

広い領土を支配するために各地に伯という長官を配置した。さらに伯の地方行政を監査するため巡察使を派遣しました。

また積極的にキリスト教会を新たに領土になった地域に建設していきます。

ローマ教会に属する修道院が各地にあるのですが、ローマ帝国が滅んだあと修道院は多くの書物や学問文化が伝えられているほとんど唯一の場所だった。そして修道士はインテリです。カール大帝はそういう学者でもある修道士を宮廷に集めて学芸を奨励した。これを「カロリング・ルネサンス」といいます。アルクインという学者が有名です。

経済

この時代のフランク王国の経済はどんなものかというと、自給自足の農業経済です。生産性は低くて小麦は播いた分の4倍しか収穫できなかった。穀物だけでは食糧不足だから豚などの家畜も必ず多数飼っていた。牧畜中心の農業です。

古代ローマ時代のような地中海を中心とする遠隔地交易はほとんど潰れていて、フランク王国内でも商業は沈滞しています。流通も未発達。カール大帝の宮廷は一ヵ所に留まらずに常に国内を移動しています。なぜかというと、各地から食糧などの生活物資を宮廷まで運ぶ輸送手段がない。だからある地方の資源を消費し尽くすと、カールたちの宮廷は次の場所に移動してそこにあるものを食べる。食べ尽くすとまた移動する。「移動する宮廷」です。

領域の広さや戦争の強さではビザンツ帝国と対等だったかもしれません、フランク王国は経済的には完全に辺境です。

フランク王国の分裂

カール大帝の死後、フランク王国はその子孫たちのあいだで分割相続されます。843年のヴェルダン条約で、フランク王国は西フランク、中部フランク、東フランクに三分割されます。その後870年のメルセン条約で中部フランクの一部が西と東のフランク王国に分割されました。

分裂した三つのフランク王国について簡単にみておきます。

中部フランク王国は現在のイタリアになります。ここでは、早くにカロリング家が断絶し国家的な統一はなくなります。北部には諸侯や都市が自立化して分裂割拠状態。それに乘じて東フランクが支配権を及ぼすようになります。中部にはローマ教皇領があり、その南、イタリア半島南部とシチリア島はイスラム勢力により占領されます。

東フランク王国はドイツになる。ここでも10世紀はじめにカロリング家が途絶えて、有力諸侯が王位につきます。王は有力諸侯が選挙で選ぶのです。これは日本的な感覚では理解しにくいですね。

10世紀には東方から遊牧系のマジャール人が盛んに東フランク領内に侵入してきます。これを撃退したのがオットー1世（位936～973）。西ヨーロッパ世界を防衛した功労者ということでローマ教皇はオットー1世にローマ皇帝冠を授けた。これ以後ドイツは別名神聖ローマ帝国と呼ばれる。神聖でもローマでもないのですがね。これ以後の歴代のドイツ王は神聖ローマ皇帝をも名乗るようになる。ローマ皇帝という名前をもっていれば、イタリア半島を支配したくなるのですね。歴代ドイツ王はイタリア半島に軍隊を派遣して、ここを支配下に置こうとする。ローマ教皇もイタリアで有利な立場を築くために、ドイツ王の軍事力を利用したりもする。

西フランク王国はフランスになります。ここでも10世紀後半にカロリング家は途絶えます。9世紀後半からノルマン人がフランスに侵入して略奪を繰り返すのですが、この時にパリ防衛で活躍した諸侯、パリ伯ユーグ=カペーがフランス王になる。これがカペー朝。

この王家も選挙で選ばれたもので、実際にカペー家が支配していたのはパリ周辺の地域だけです。ほかの地方は有力諸侯たちの支配下にあった。

まとめ

フランク王国分裂以後はイタリア、ドイツ、フランスの原型ができるのですが、それぞれの国では諸侯の力が強く、イタリアでは王すらない。フランス、ドイツでは王はいますが、有力諸侯の中から選挙で選ばれるのであってカール大帝時代のように大きな力は持っていない。ヨーロッパ全体が大小さまざまな諸侯のもとで分裂している。中世、典型的な封建時代の始まりです。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[メロヴィング王朝史話
（上）岩波文庫
メロヴィ](#)

オーギュスタン・ティエリ著。
著者は19世紀のフランス人。メロヴィング家のクローヴィスの孫の世代の王たちの物語です。ほとんど（いや、全く）授業のネタにはなりませんが、

シング王国
史話
(下)岩波
文庫

なじみのないフランク王国初期の政治、ゲルマン人とローマ人、キリスト教との関係など、少しイメージが具体的になりました。

第49回 西ヨーロッパ世界の形成 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第48回 東ヨーロッパ世界の
形成](#)

[次のページへ](#)

[第50回 ノルマン人の移動・
封建制](#)

世界史講義録

第50回 ノルマン人の移動・封建制

----- ノルマン人の移動 -----

ゲルマン人の一派にノルマン人がいます。別名ヴァイキング。海賊の代名詞になっています。現在のデンマーク、ノルウェー、スエーデンの沿岸部に住んでいた。かれらはゲルマン人の大移動の時には移動しなかった。北の辺境地帯に住んでいたから、フン族もローマ帝国も関係なかったんだね。ところが、ゲルマン人の大移動が一段落した9世紀以降、かれらは船に乗って移動をはじめた。人口の増加が直接の原因らしい。

はじめはブリテン島やヨーロッパの沿岸地帯を襲って略奪をしていた。河川をさかのぼって内陸部深くまでも略奪します。とくに、教会や修道院が財産を蓄えていたので襲われたようです。

はじめは季節的だった略奪が、やがて一年中おこなわれるようになっていく。各地の支配者たちはノルマン人の襲撃を撃退できないんだね。ノルマン人は各地を占領して国を建てていきます。

具体的に見ていく。

北フランスの海岸地帯には、911年ノルマンディー公国を建てた。建国者は口口といいます。「ろろ」だよ。「くちぐち」じゃないからね。

フランス王はここに侵入したノルマン人たちを追い払うだけの実力がなかったので、かれらの占領を公式に認めて、そのかわり臣下にした。ノルマンディー公国という国名に注意してください。王国ではなくて公国なのです。国にもランクがあって、一番権威が高いのが帝国、帝国の下が王国。王国の下が公国。フランス王国のなかにノルマンディー公国があって、ノルマンディー公国の君主の称号はノルマンディー公。ノルマンディー公はフランス王の家来です。ただし、実際にはフランス王よりノルマンディー公の方が強い。口口は「名」より「実」を取ったのだ。領地を正式に認めさせるという「実」です。

ブリテン島やアイルランド島にもノルマン人は侵入した。

ブリテン島の南部イングランドにはノルマン人の一派であるデーン人が侵入します。デーン人は今のデンマークに住んでいた人たち。イングランドにはアングロ・サンクソン族が国をつくっていたのですが11世紀にはデンマーク王クヌートが一時ここを占領してイングランド王になりました。クヌートはイングランド、デンマーク、ノルウェーの王を兼ねて北海地方に大きな勢力をふるいますが、その死後この王国は崩壊して、イングランドではアングロ・サクソン族の王家が復活します。

しかし、1066年、イングランドは再びノルマン人に征服されます。征服したのがノルマンディー公ウィリアム。ノルマンディー公国を建てた口口の子孫です。ここからは

じまるイギリスの王朝がノルマン朝。この征服をノルマン＝コンクエストという。

面白いのはイングランドを征服したノルマンディー公はフランス王の家臣だということです。だから、これ以後、イギリス王は王としてはフランス王と対等ですが、ノルマンディー公としてはフランス王の家臣である、というややこしい関係になる。また、フランス国内のノルマンディー公国は、フランスの領土ではあるけれど、その領主はイギリス王でもある。要するにフランス国内にイギリス王の領土があるというわけですね。何とも複雑ですが、実は中世ヨーロッパではこういう関係は結構あった。ノルマンディー公のようなのが封建領主の典型ですが、こういう封建領主同士が複雑に主従関係を結んでいたのです。

イスラム教徒が支配していたイタリア半島の南端とシシリー島を征服したノルマン人グループもありました。かれらがここに建てたのがシチリア王国。

バルト海からロシアの川をさかのぼって黒海からイスラム圏に通じる交易ルートがあって、ノルマン人はフランスからさらってきた奴隸をこのルートでイスラム教国に売っていたようです。

9世紀にロシアにノヴォゴロド王国、キエフ公国という国ができるのですが、ノルマンの一派であるルス族がこれらの国の成立に関連があったという説もある。ロシアという国名はルス族がなまつたというのです。

原住地にとどまったくノルマン人はデンマーク、ノルウェー、スウェーデンを成立させました。

封建制

9世紀から約200年間続いたノルマン人の略奪や移動、フランク王国の分裂で西ヨーロッパは大混乱になった。

西や東のフランク国王は侵入するノルマン人を撃退するだけの力がないので、侵入をうけた各地の人々は自力で地域を防衛するしかなかったのです。そのため、地域防衛の中心となった地方の領主が諸侯として自立していった。カロリング朝断絶後フランス王位についたカペー家もそうして力をつけてきた諸侯でした。

武力を持った領主はお互い同士でも戦います。基本的にヨーロッパ中世というのは無政府状態。王も皇帝も名ばかりだから、領地が欲しければ力ずくで奪ったって構わない。誰も文句を言えない。ノルマン人が各地を占領して建国するのと同じです。領地の奪い合いで常に戦争状態だと考えてください。

各地の領主が領地争いを繰り広げるうちに弱い領主は自分の領地を守るために強い領主の家臣になるという形で、領主のあいだで主従関係の系列ができます。君主になっ

た大領主は家臣になった小領主の領地を守ってやるかわりに、臣下になった小領主は君主に忠誠を誓って、戦争になったときは軍役奉仕をする。
領主間の主従関係のピラミッドができあがって、その頂点にあるのが国王です。その下の領主が諸侯。自分に臣従する領主をもたない最低ランクの領主が騎士とよばれる。

日本の戦国時代の大名やその家臣の関係と似ていなくもない。ただ、大きな違いは、ヨーロッパの諸侯は複数の君主に仕えてもいいのです。たとえば、諸侯Zが、諸侯Aに臣従を誓っているけれど、それだけでは不安なら諸侯Bの家臣になってしまって構わない。AもBもZを裏切り者とは考えない。その辺はドライな契約関係です。

こういう場合にAとBが戦争したら、両方に仕えているZはどうするか。Zが年間10日間軍役奉仕するという契約を結んでいたなら、まずはAの指揮下でBと10日間戦つて、決着がついてもつかなくても、今度はBのもとへいってAと10日間戦います。そのあとは、戦争が終わっていなくても契約の軍役はすんだのでさっさと自分の領地に帰ってあとは関係なしです。そういう契約なので、AもBもそれ以上は期待しないし要求できない。契約以上の義理人情の忠誠心はありません。

君主が臣下に対する保護も契約の範囲でしかないのは同じです。こういうのを双務的契約関係といいます。

諸侯のもとには農民たちも集まってくる。略奪から守ってもらうためだね。諸侯は農民を庇護するかわりに農民は諸侯に隸属するようになる。これが農奴のはじまりです。諸侯は農奴から年貢をとるだけでなく、かれらに対する裁判権など、いろいろな特権を農奴に対してもっていました。

たとえば結婚税。結婚する農奴の新郎から領主が受け取っていた。なぜ、こんな税金があるかというと、もともと領主は初夜権というのをもっていて、農奴同士が結婚するとき新婚初夜の新婦を自分の館に連れ込んでそれから新郎に渡したんだ。新郎としてはこんなのはたまりません。初夜権をお金で買い取った。これが結婚税のはじまりといいます。死んだときには葬式税をとられたり、領主の館に労働奉仕をしにいったり、農奴は領主に経済的にも人格的にも隸属していたのです。

というわけで、農奴は不自由身分で移動の自由も職業選択の自由もありませんでした。

諸侯が持つ領地が荘園です。農奴たちはここで働いた。

諸侯間の主従関係、諸侯と農奴と荘園の関係、これらをひっくるめて西欧中世の封建制度といいます。

教皇権の隆盛

封建制度ができあがるのと同じように、ローマ教会の教会組織が整備されます。聖職位階制といって、ピラミッド型に聖職者の上下関係が作られた。トップはもちろんロー

マ教皇です。そのもとに大司教、司教、司祭という僧侶がいる。司祭が一般の信者と接觸する村や町の神父さんです。

このピラミッド型の教会組織とは別に修道院というのがある。これは教皇に直属している。

修道院というのは俗世間を捨てて禁欲生活を送る修道士たちの共同生活の場です。シリヤやエジプトではじまったのですが、ヨーロッパで最初に作られたのがベネディクトゥス（480～543？）が建てたモンテ＝カッシーノ修道院。ここではただ禁欲生活するだけではなくて、労働も重視した。「祈り、働き」というのがこのモットーで、このあとヨーロッパにできる修道院の伝統になる。

修道士は当時はインテリです。かれらが集まって共同生活しながら、自給自足で農作業する。自然に修道院は新しい農法の実験場にもなって、新しい農法がここから開発されて、農民の暮らしを向上させていきました。

また、修道院は教皇を頂点とする聖職位階制からはずれた存在なので、官僚的になりがちな教会組織に新しい活力をあたえることもありました。

10世紀から11世紀ころまでに教会の世俗化がすすみます。

たとえば、妻帯したり、荘園を所有したりと、聖職者や教会が俗世間の領主とかわらなくなってくる。

これに対して、教会の改革運動をはじめのがクリュニー修道会です。これは、「服従・清貧・貞潔」という戒律を厳しく守るまじめな修道会でした。ここが、教会組織の堕落を批判するのです。そしてやがてはクリュニー修道会出身の僧侶がローマ教皇になるようになった。

ローマ教皇グレゴリウス7世（位1073～85）がそうです。かれは、教会改革を始めた。

まずは、聖職売買の禁止。聖職を貴族たちが金で売ったり買ったりすることが当時はあった。荘園をたくさんもっている教会の聖職にありつけばいい暮らしができますからね。貴族の次男坊以下にとてはおいしい生活手段なのです。これを禁止した。さらに、聖職者の妻帯を禁止。

そして、神聖ローマ皇帝による聖職者の任命権を否定した。ドイツ国内にも教会はたくさんあります。そして、ドイツ国内の教会の聖職者はドイツ皇帝、つまり神聖ローマ皇帝ですが、が任命するという慣習があった。

これに対してグレゴリウス7世は、ドイツ国内の教会であろうともローマ教会傘下の教会であるならばその任命権はローマ教皇にあるのだ、と主張したわけです。両者ともに譲らず、ここに皇帝対教皇の争いが始まる。

これを、聖職叙任権闘争といいます。

当時の神聖ローマ皇帝はハインリヒ4世（位1056～1106）。グレゴリウス7世

とやりあうことになるんですが、ドイツ国内でハインリヒ4世の立場は非常に微妙だった。実は、ドイツは、古いゲルマン部族集団が比較的崩れずに残っていて、その流れをひく大諸侯たちの勢力が大きかった。皇帝の地位ははじめから大諸侯の中の第一人者という面が強かったです。何かあったら、皇帝の足をすくって、混乱に乗じて自分が皇帝になりたいとか、領地をぶんどってやりたいとか、野心をもっている諸侯がかなりいた。かれらは、皇帝に反抗するきっかけを待っていた。

そこに起きたのが叙任権闘争です。

グレゴリウス7世は武力はありませんが、神に仕える身です。敵を追いつめる独特の手段があった。それが破門です。キリスト教にとって教会や聖職者の役目はそもそも何かというと、信者が死んだあと天国にいけるように神さまに「とりなす」ことです。ローマ教会の「とりなし」がなければ天国にいけない。破門にするということは、「とりなしやらない。お前のためには祈ってやらない。」ということだね。

グレゴリウス7世は、この武器を使った。ハインリヒ4世を破門にしたのです。ハインリヒ4世が、どれだけ真剣に天国や地獄や教会の「とりなし」を信じていたかはわかりませんが、本当に信じていればこの破門は滅茶苦茶恐ろしいはずです。なにしろ地獄行きが確定するのですから。

信仰上の恐怖だけでなく、この破門はドイツ国内の有力諸侯たちに反抗の口実をあたえることになってしまった。諸侯たちは、「ローマ教皇から破門されたような人物を皇帝にはできない。一年以内に破門が解かれなければ、あんたには皇帝をやめてもらうで。」と言いました。

ハインリヒ4世、これには困ってしまった。何とか破門を解いてもらわなければならなくなつた。

聖職者叙任権どころか、自分の来世と皇帝の地位が危なくなってしまったハインリヒ4世は、グレゴリウス7世の所に詫びを入れにいきました。ドイツからアルプスを越えてイタリア側のアルプス山麓のカノッサ城に出向いた。教皇はローマではなくカノッサ城にこもっていたのです。1077年のことです。冬のアルプスを家族を連れて越えたというから、かなり難儀な旅だったでしょう。

カノッサ城までやって来たハインリヒ4世ですが、教皇は面会もしてくれなければ城内に入れてもくれない。破門を解いて欲しければ誠意を見せろと言われてしまう。ハインリヒ4世、誠意なんて見せようがありませんからね。結局門の外で、裸足に粗末な衣装を身につけただけの姿で三日三晩泣きながら詫びつづけたといいます。しかも雪の降る中で。

この事件のことを「カノッサの屈辱」といいます。

結局、その甲斐があつて破門は解かれることになりました。

危機を脱したハインリヒ4世は、こののち逆にグレゴリウス7世を追いつめて廢位して、「カノッサの屈辱」の復讐をするのですが、皇帝ともあろうものが、教皇の前で立

ちんぼうで泣きながら詫びたという事実は消えない。

この事件をきっかけにして、西ヨーロッパでローマ教皇の権威が高まっていきました。

叙任権闘争に関しては、この後も皇帝と教皇のあいだの争いはつづくのですが、1122年のヴォルムス協約で両者の妥協が成立しました。

さて、教皇の権威が高まっていく過程で有名な教皇が二人。

ひとりがウルバヌス2世（位1088～99）。この人は1095年、クレルモンの公会議で十字軍を提唱したので有名。十字軍については次回にやります。長期に渡る大遠征の火付け役になった人です。

もうひとりが、インノケンティウス3世（位1198～1216）。教皇の権威が絶頂になった時代の人です。政治的にも有能で、破門という武器を最大限利用しながらイギリスやフランスの政治に介入しました。かれの言葉として伝えられているのが「教皇は太陽、皇帝は月」というせりふ。教皇権の絶頂ぶりがうかがえるね。

最後に修道院の話に戻りますが、教会組織を改革していったクリュニー修道会も時代とともにその役割を終えていく。

13世紀にはそれまでになかった托鉢修道会というものが現れます。その代表が、フランチェスコ修道会とドミニコ修道会。この修道会は修道院をもたない。修道士は何の財産も持たずに托鉢しながら、野宿して暮らす。徹底的な禁欲生活を送るのです。

フランチェスコ修道会の設立者、聖フランチェスコは、こんなことを言っている。自分たちが雨に濡れ飢えと寒さで震えながら、どこかの町の教会堂にたどり着き、一晩の宿と食事をもらおうとして扉をたたく。そうしたら教会堂の門番が出てきて、ゆすりたかりの悪党と間違えられて、骨が折れるほど棍棒で殴りつけられる。「その時私達が受難のキリストの苦悩を思い、それを喜んで耐えることができたら、そこにこそ完全な喜びがあるのだ」だって。

聖フランチェスコはもともとはなに不自由のない裕福な商人の家に育った。青年時代はさんざん悪さもしたらしい。それが、信仰の道に目覚めて徹底的に禁欲的な生活に入るんです。諸国を托鉢遍歴しながら民衆に罪を悔い改めよを説いた。私なんかは、何となく一遍上人と重なる人です。

ともかく、以前のクリュニー修道会のように托鉢修道会も民衆の信頼をあつめ、キリスト教組織を活性化する役割を果たしました。

第50回 ノルマン人の移動・封建制 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第49回 西ヨーロッパ世界の](#)

[第51回 西ヨーロッパ世界の](#)

形成

膨張

世界史講義録

第51回 西ヨーロッパ世界の膨張

----- 大開墾時代 -----

ヨーロッパは森の世界だったといいます。ヨーロッパの人たちは、広大な森林の周辺を何とか開墾して農地を開き、森で牧畜をした。森の中で豚の放牧をしている絵がありますね。人間はこんなふうに森の恵も受け取ってはいましたが、基本的に森は人間世界の外側にある恐ろしいところでした。

「赤ずきんちゃん」でも、「ヘンデルとグレーテル」でも、森には危険な狼や不気味な魔女がいる。ヨーロッパ人が森に対して感じていた恐怖がそういう形で描かれているのです。

森を切り開いての農地の開拓は細々としたものでしたが、11世紀から13世紀にかけて大規模になる。これを大開墾時代という。鉄製農具の普及や、修道院での農業技術の向上が背景にあった。

特に有名な農業技術が三圃制。耕地を春作地、秋作地、休閑地の三つに分けて順繰りに耕作することで地力を維持したものです。

11世紀以降、耕地の拡大と農業技術の進歩で収穫量が増大して人口が増加します。やがて西欧のなかで蓄えられたエネルギーが外の世界に向かっていく。外部世界への活動が活発化します。

外部への活動は三方向へ向かいます。一つはイスラム世界へ。これが十字軍。二つ目は東ヨーロッパへ。三つ目はイベリア半島へ。

----- 十字軍 -----

十字軍については何度か出てきましたが、背景には農業の発展があったのですね。

イスラムのセルジューク朝が小アジア地方に勢力を伸ばし、領土を奪われたビザンツ帝国皇帝が、西のローマ教皇に救援を要請したのがことの発端でした。

救援依頼をうけたのがウルバヌス2世。ちょうどグレゴリウス7世の叙任権闘争で教皇権が強まっていたときでしたね。1095年、ウルバヌス2世はクレルモンの公会議で集まったヨーロッパ各地の諸侯たちにビザンツ救援と聖地イエルサレム奪還のための遠征軍を呼びかけます。これをきっかけとして宗教的熱狂の中で十字軍がはじまりました。

イエルサレムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教の共通の聖地でした。ここは長い間イスラム教国の支配下にあったのですが、熱心なキリスト教徒はヨーロッパからも巡礼

に出かけていた。ところが、セルジューク朝の支配下に入ってからは巡礼が妨害されている、というのです。これも十字軍呼びかけの理由の一つでした。巡礼が本当に妨害されていたのかどうかはよくわからないのですが。

十字軍の十字というのはキリスト教のシンボルですね。十字軍の兵士たちは服に十字の印を縫いつけていたのでこう呼ばれたようです。英語ではクルセイダーズです。

十字軍は何回もおこなわれています。回数は考え方によってかなり変わってきます。大がかりなものだけで7回あります。

第一回は、1096年から99年にかけておこなわれました。ある意味ではこれが成功した唯一の十字軍です。主力はドイツとフランスの諸侯。ドナウ川を下ってビザンツ帝国に入り、コンスタンティノープルから小アジアに渡り、ここにあったイスラム諸勢力と闘いながら南下、シリアに入りイエルサレムの占領に成功しました。

十字軍はここにイエルサレム王国という国を建設して、諸侯のひとりを王に推戴しました。

当時すでにセルジューク朝は衰退していて、イスラム側は地方政権が割拠状態でした。それにいきなりヨーロッパ人が攻めて來たので、不意をつかれて負けてしまったのです。

十字軍の残虐ぶりは有名で、イエルサレムを占領したときにもイスラム教徒を殺しまくっています。十字軍に同行したフランスの聖職者の残した資料です。「サラセン人（イスラム教徒のこと）が、生きている間にそのいやらしい咽喉の中に呑みこんだ金貨を、腸から取り出そうと、屍の腹を裂いてしらべてまわり…同じ目的で屍を山と積み上げ、これに火をつけて灰になるまで焼き、もっと簡単に金貨をみつけようとした。」十字軍兵士は、宗教的情熱だけではなくて、金銭欲も激しかったようですね。

イラク人の残した記録です。「住民は、一週間にわたって市街地を略奪してまわるフランス人（十字軍兵士のこと）によって斬り殺された。…エル=アクサ寺院内では7万人以上の人々が殺された。…また、彼らは岩のドームを空にするほどの莫大な戦利品を持ち去った。」

こういう虐殺を十字軍兵士は、少しも悪いこと思っていないだけではなく、たくさん殺せば殺すほど素晴らしいと思っている節があるのです。宗教的熱狂と戦争が合体すると不気味なことになる典型的な例です。

イエルサレム王国を建てた十字軍ですが、国を維持するための物資の補給を担当したのがイタリアの商人でした。ヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサという商業都市国家がイタリアにはあって、輸送を担当したこれらの町の商人はおおいに儲けた。やがて、イタリア商人たちがのちの十字軍の主導権を握りますから要注目です。

やがて、はじめのショックから立ち直ったイスラム側が反撃を開始して、イエルサレム王国から領土を奪いはじめた。これに対して第二回十字軍がおこなわれます（114

7～49）。ドイツ皇帝、フランス王などが中心でした。第一回と同様のルートでシリアルに向かいましたが、ダマスクスで大敗して失敗。

その後もイエルサレム王国の領土縮小がつづく。エジプトでアイユーブ朝を建てたサラーフ＝アッディーンは、イエルサレム王国からイエルサレムを奪回しました。これに対しておこなわれたのが第三回十字軍（1189～92）。イギリス王リチャード1世、フランス王フィリップ2世、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世という豪華メンバーが参加しました。豪華なことは豪華だったんですが、フリードリヒ1世は目的地に着く前に、行軍中川を渡るときに馬から落ちてそのまま溺れて死んでしまった。鎧が重すぎて泳げなかつたんだね。期待はずれの死に様でした。残るイギリス王とフランス王は仲が悪くて行軍中ケンカばかりしていた。とうとうフランス王は作戦途中で怒って帰ってしまった。最後はイギリス王だけでサラーフ＝アッディーンと戦ったんですが、イエルサレムを奪うことができない。

この時のサラーフ＝アッディーンの態度は十字軍の残虐ぶりとは正反対で寛大。ヨーロッパ人からも賞賛される騎士ぶりだったことで有名。たとえば、サラーフ＝アッディーンがキリスト教徒からイエルサレムを奪ったときのこと、キリスト教徒を一人も殺さず、男は金貨10枚、女は5枚、子供は1枚という身代金で身の安全を保障してやる。身代金が払えない貧しいキリスト教徒はどうしたか。なんと、サラーフ＝アッディーンがかわりに払ってやつたという。

そんなサラーフ＝アッディーンですから、イギリス王が矛を収めてヨーロッパに帰国できるようにメンツを立ててやります。成果もないままではお前も引っ込みがつかないだろうと、キリスト教徒の聖地巡礼を認めるという「おみやげ」をあたえてイギリスに帰しました。第三回十字軍はこれで修了。

第四回十字軍（1202～04）は、教皇権絶頂期の教皇インノケンティウス3世の時におこなわれましたが、これは本来の目的からはずれた十字軍です。

フランスの諸侯が主体の十字軍で、兵士たちは海路イスラムへ遠征するつもりでヴェネツィアに集結しました。ところが、お金がなくて船賃が払えない。ヴェネツィア商人たちは宗教的情熱よりも商売が大事ですから、金を払わない客は運ばない。結局船賃代わりに十字軍兵士はヴェネツィアの商売敵コンスタンティノープルを攻撃させられてしまった。

キリスト教の国であるビザンツ帝国を攻めてしまうという、わけのわからない十字軍です。あげくにコンスタンティノープル攻略に成功して、ここにラテン帝国（1204～61）という国まで建ててしまった。

これで、一時ビザンツ帝国は各地に亡命政権を作ることになりますが、やがてそのなかの一つニケーア帝国がラテン帝国を滅ぼしてビザンツ帝国を復活させました。

結局得をしたのは地中海貿易をほぼ独占したヴェネツィア商人だけという結果でした。

第五回十字軍（1228～29）は神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世がおこないます。この皇帝は異色の人で、母親の出身の関係で、ドイツ皇帝でありながらシチリア生まれのシチリア育ち。宮廷もシチリア島にあった。シチリア島というのは、イスラム教徒のアラブ人によって支配された時期もあり、その後はノルマン人に征服され、いろいろな民族、文化、宗教が同居している島でした。

フリードリヒ2世の宮廷には、そういういろいろな民族の者が仕えていた。ユダヤ人、アラブ人、イスラム教徒もいた。かれ自身アラビア語がペラペラだったそうです。ヨーロッパ文化とキリスト教が絶対だと信じているような単純な人ではなかったのね。国際的感覚を身につけていたコスモポリタンだった。

だから、十字軍なんてアホくさいと思っていたみたいですが、政治的な立場から行かざるをえなくなった。そこで、軍隊を率いて現地まで行くのですが、一度もイスラム勢力と戦わず、外交交渉だけでイエルサレムを手に入れて帰ってきた。

ちょっと当時のヨーロッパ人の水準からかけ離れた人物ですね。

フリードリヒ2世、多民族が雑居しているシチリア島に育って疑問に思ったことがあった。人は本来何語を話すのだろうか、と。そこで、さっそく実験をした。生まれたばかりの何人もの赤ちゃんを、いっさいの言葉を話しかけずに育てたんです。

どうなったか。言葉をかけられずに育てられた赤ん坊はみんな死んでしまったんだつて。残酷といえば残酷な実験ですが、不思議な、ちょっと考えてしまう結果ですね。ともかく、思いついたら実験してみたいという、実証精神のある人だったという逸話です。

第六回、第七回の十字軍は末期の十字軍で尻すぼみで終わりました。おこなったのはフランス王ルイ9世。まじめな信仰の持ち主だったようですが、第六回十字軍（1248～54）ではエジプトに遠征して捕虜になり、莫大な身代金を払って釈放してもらって終了。第七回十字軍（1270）はエジプトまでも行かずに、フランスの対岸のチュニスを攻撃しますが、病氣で死んで終わり。

以上が一般に認められている十字軍です。

これ以外に一般民衆が宗教的熱狂からイエルサレムに向かったり、子供たちだけでおこなった少年十字軍とかあります。こういうのは途中で襲われたり、人さらにあって奴隸に売られたりして、目的地に到着することすらできなかった。

ほぼ200年にわたっておこなわれた十字軍でしたが、最終的には聖地イエルサレムを維持することはできず、ビザンツ帝国を救うという目的にもはずれてしまい、何のためにやっているのかわからないものになって終わりました。

十字軍はヨーロッパの歴史にどんな影響を与えたのか。

- 1, 教皇の呼びかけではじまった十字軍が失敗に終わったので、教皇の権威が衰えた。
- 2, 従軍した諸侯、騎士は戦費の負担から没落する者が多かった。その結果相対的に各國の王の権力が強化されることになった。
- 3, 十字軍をきっかけとして西アジアとの貿易、東方貿易といいますが、これが活発化した。東方の産物がイタリア商人によってイタリアに運ばれ、そこからヨーロッパ各地に運ばれた。この結果、商業と都市が発展し、商業をなう新興市民階級が台頭した。
- 4, ビザンツ文明、イスラム文明が西欧に伝えられ、ヨーロッパ文化の発展に大きな影響を与えた。

東方植民運動

ドイツのエルベ川より東の地域は、未開の土地が多く残っていました。原住のスラブ人を征服しながら、この土地をドイツの諸侯が積極的に開拓していったのが東方植民運動です。エルベ川以東の領主は有利な条件で農民を誘い、多くの農民が開拓民として移住していました。十字軍で結成されたドイツ騎士団という武装した修道士の団体も積極的にこの東方植民運動をおこないスラブ人にキリスト教を布教した。

ヨーロッパの東への拡大運動です。

レコンキスタ

イベリア半島にはイスラム国家がありましたが、北部辺境地帯のキリスト教諸侯がイスラム国家と戦闘を繰り返しながら徐々に領土を拡大していきます。これをレコンキスタという。再征服運動と訳しています。

有力諸侯を中心にして、イベリア半島北部にレオン、カスティーリャ、ナヴァル、アラゴンなどの王国が建設され、さらにこれらが領土を南に拡大しながら合体してスペイン、ポルトガル両国が成立します。

ヨーロッパの南への拡大運動です。

イベリア半島南部に追いつめられた最後のイスラム国家がナスル朝でした。首都はグラナダ。

スペインがグラナダを占領し、ナスル朝を滅ぼしたのが1492年。この年号は暗記すること。これで、イベリア半島からイスラム勢力は完全に消えて、レコンキスタは終了しました。

この1492年、もう一つ大きな世界史的事件が起きます。

コロンブスがアメリカに到達したのです。コロンブスの航海を援助したのがスペインでした。大航海時代というのは、レコンキスタの延長線上にあるのですよ。ヨーロッパの拡大運動はスケールアップしてつづいていきます。

第51回 西ヨーロッパ世界の膨張 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第50回 ノルマン人の移動・
封建制](#)

[次のページへ](#)

[第52回 ヨーロッパ中世世界
の解体](#)

世界史講義録

第52回 ヨーロッパ中世世界の解体

商業と都市の発展

十字軍によって、多くのヨーロッパ人が初めてヨーロッパ以外の世界に触れた。従軍した諸侯、騎士たちがはイスラム世界にいてビックリする。ヨーロッパでは見たこともないような商品がたくさんあったからです。

当時の世界全体を見渡したとき、ヨーロッパは辺境地域に位置していました。イスラム世界は、インド世界、中国世界とともに最先進地域です。ヨーロッパは大田舎です。だから、十字軍の兵士はイスラム世界の豊かさを見て度肝を抜かれるんだ。

十字軍でイスラム世界を知った人々はヨーロッパに帰ってからも、向こうの産物にあこがれつづける。

というわけで、ヨーロッパとイスラム世界の間の遠隔地貿易が十字軍をきっかけとして活発になる。イスラム世界から奢侈品を購入するんですが、ヨーロッパからは何を輸出するのか。

ちょうどこの頃から、フランドル地方と北イタリアで毛織物業が発展してくる。この毛織物が、いわばヨーロッパの特産品ですね。

フランドル地方というのは今でいうと、ベルギーからフランスにかけての地方です。

北イタリアの毛織物業の伝統は今もつづいているね。ミラノ・コレクションとか知っていますか？今でもイタリアは世界のファッショントリニティですね。この当時の毛織物業の伝統が、そういう形でつづいているのです。

ヨーロッパとイスラム世界の交易が活発になると、ヨーロッパの内部でも交易圏ができてきました。そして、商業都市が発展します。

どんな交易圏ができたか。

ひとつは、地中海交易圏。北イタリアの都市を中心とするイスラム世界との交易圏です。

ヴェネツィア、ジェノバ、ピサが代表的な都市。

有名なマルコ=ポーロはヴェネツィアの商人。アメリカにいくことになるコロンブスはジェノヴァ出身の船乗りです。

この地域はイスラム世界から香辛料、絹織物、綿織物などを輸入する。香辛料は特に記憶に留めておいてください。

輸出品は、毛織物と南ドイツでとれる銀が中心でした。

もうひとつがバルト海・北海交易圏。中心はフランドル地方の毛織物輸出地であるブリュージュ。そのほかハンブルグ、リューベック等の北ドイツの都市が有名です。

ここでは、ポーランド、ロシア方面の木材、海産物、毛皮などが毛織物とともに取り引きされます。

北の北海・バルト海交易圏と、南の地中海交易圏をつなぐ場所、フランスのシャンパニュ地方、南ドイツのアウグスブルグも発展しました。

商業が発展し、都市が繁栄し豊かになってくると、諸侯はここから利益を引き出そうとします。

封建時代のヨーロッパは弱肉強食、戦国時代みたいなものですから、都市も自衛しなければいけない。そこで、諸侯の略奪や圧迫に対抗して、都市同士が同盟を組むことがあった。

有名なのが、北イタリアのロンバルディア同盟、北ドイツのハンザ同盟。ハンザ同盟はヨーロッパ各地の都市に出張所をおいて自分たちの利益を守ります。軍隊まで持っていた。

ルフト=ハンザというの、知っていますか。ドイツの航空会社。ハンザ同盟が名前だけですが残っているのです。

都市はまた、自分たちの利益を守るために自治権を獲得していきます。諸侯と対抗し自治権を確保するために、都市は国王や皇帝と結びつく。国王や皇帝は都市に自治を認める特許状を発効してやるんです。これで、都市は大手を振って諸侯の支配を排除します。

ただし、都市は自治の代わりに国王や皇帝に商業税を納めます。これが馬鹿にならない。フランス国王ルイ9世の収入の40%、ドイツ皇帝フリードリヒ2世の収入の80%は都市からの収入だったといいます。

だから、王や皇帝は都市を保護する。都市が繁栄すればするほど自分も儲かりますからね。

やがて、都市から税金を取れない諸侯と国王との力の差がやがてどんどんついていくことになります。

ヨーロッパのこういう自治都市と同じようなものが日本にもありました。戦国時代です。有名なのが堀。ここでは海外貿易をおこなう豪商たちが戦国大名の支配をはねのけて自治をおこなっていました。今でも少し残っていますが町の周囲には堀をめぐらし、

自分たちで武士を雇って外部勢力から都市を守った。合戦で敗れた武士が堺に逃げ込んだら、追っ手もそれ以上手を出すことはできなかった。敵味方が堺の町中で出会っても刀を抜きあうことはなかった、といわれます。

ヨーロッパの自治都市とすごく似ています。ただ、日本には自治都市に特権を与えるような勢力がありませんでしたから、堺の場合は信長に屈服して自治権を失いました。有名な千利休、茶道の御師匠さんとして日本史の教科書に載っていますが、そもそもは堺の豪商ですね。堺が自治権を失ってしまうので、最後には秀吉のお側衆になってしまいますが。要するに堺は貿易都市として経済的に重要だったので信長も秀吉も堺の者を身近においているんです。

話がそれてしましましたが、ヨーロッパの自治都市でも有力商人たちが町の政治を運営しました。都市の中では商人、職人の親方、徒弟など、いろいろな身分があるんですが、諸侯の支配下の農奴から見ればそこは自由な世界でした。莊園から農奴が都市に逃げ込んで一年間捕まらなければ自由な身分になれる、という法もありました。それをあらわした「都市の空気は自由にする」という言葉が有名です。

農民の前進と莊園制の解体

農村にも変化があらわれます。

イギリス、フランスでは、農奴身分から独立自営農民と呼ばれる自作農民に上昇するものがあらわれてきます。

身分が上昇する原因は大きく二つある。

一つは商業の発展と関連がある。商業が発展するにつれて、貨幣経済が農村にも浸透してくる。貨幣経済に巻き込まれて贅沢を覚えてしまった領主はお金が欲しい。そのために労働地代や現物地代に代わって貨幣地代を導入するようになります。領主の館や直営地で働くことが減ってくるわけだ。

そうすると、領主の農奴に対する人格的な束縛がゆるくなつてドライな地主・小作関係に近くなつてくる。それから、農業技術も発展して収穫が多くなつてきていますから、農奴も一所懸命に働いて年貢を納めた残りを貯めることができます。お金を蓄えた農民はその地位を向上させていきます。自営農民として成長してくる。

それ以前の時代には、現物経済中心で農村にはお金そのものがなかったので、お金を貯めることすらできなかつたのですから、ものすごい進歩です。

農民の地位が向上したもう一つの理由はペストの流行です。

14世紀から、ヨーロッパでペストの大流行が繰り返し起こります。アジアで流行していたペストが東西交易ルートに乗つて西に進んできて、ヨーロッパでは1348年にイタリアで最初に発生しました。貿易船によって運び込まれたネズミに寄生するノミにペ

スト菌はついていた。

その後はヨーロッパ全土に広がった。当時、急発展していたヨーロッパの都市は人口急増のため衛生状態がよくなかったので、爆発的にペストは広がったようです。

ペストは飛沫感染で広がっていって、感染すると紫色の斑点ができる。肌が黒く変色したように見えるので、黒死病と呼ばれた。感染して一週間くらいであっという間に死んでしまうので、非常におそれられました。一つの村が全滅するとかいうことも珍しくなかったようで、ヨーロッパの人口の四分の一、または三分の一がペストで死んだといわれています。

ペストの原因も治療法も全然わからないわけで、当時の人々にはものすごい恐怖だった。「死を想え」という僧侶の説教が流行したり、ゾンビが「お前もやがて俺みたいになるぞー」と生きている人を誘っている絵が流行ったり、ペストを神罰と思う人たちが自分の体を鞭で打ちながら町から町へ遍歴したり。鞭打ち苦行者の持っている鞭というのは先っぽに釘が仕込んであって、それで自分の背中を打つから血がだらだら流れる。これを集団で、町の広場で一般の人たちが見ている前でやるんだね。不気味でおどろおどろしい風俗ですが、当時の人達の恐れを伝えています。

しかし、死んだ人はかわいそうだが、何とか生き延びた農民たちにはいいことがあった。

人が死んでも、莊園の農地が減るわけではないので、どこの莊園でも人手不足、農民不足になります。領主たちは、ほかの莊園よりもいい条件で農民を集めます。本来農奴には移動の自由はありませんが、逃亡先の領主がかくまってくれれば何もこわくはない。領主間の農奴の引き抜き合戦が始まる。その結果、農奴の地位や待遇はどんどんよくなっていくわけです。

いったん地位が向上し、自信を持ちはじめた農民は、もう昔のように領主の言いなりになったりはしない。これに対して、領主層が再び農民を押さえ込もうとする動きも出てきます。こういう状況の中で、先進的な地域のフランスとイギリスで大規模な農民反乱が起こります。

北フランスで起きたのがジャックリーの乱（1358）。

当時、イギリスとフランスは百年戦争という戦争をしていた。北フランスは戦場になってさんざん略奪されていた。ところが領主達は自分の莊園の農民を守りもしないで、重税をかけてくる。とうとうたまりかねた農民たちが大反乱を起こしたのです。ジャックリーというのは貴族たちが農民を馬鹿にして言う呼び方で、人名ではありません。

反乱は鎮圧されますが、農民の力が領主をも脅かすようになっていることを証明しました。

イギリスで起きたのがワット＝タイラーの乱（1381）。ワット＝タイラーは指導者の名前です。これも百年戦争中のことで、農民たちは重税で怒り爆発。この農民反乱はロンドンを占領する。大成功だね。国王は反乱の代表者と会って、農民の要求を聞いた。農民の要求がすごいです。農奴制の廃止。

国王はいったんは減税を約束してこの要求を受け入れるふりをしましたが、後でワット＝タイラーと会見した際に、だまし討ちで殺してしまった。それ以後、反乱は鎮圧されていきました。

この反乱の指導者の一人にジョン＝ボールという僧侶がいます。この人の残した言葉は非常に有名なので覚えておくこと。

「アダムが耕し、イヴが紡いだとき、誰が領主だったか？」

身分制度そのものを強烈に批判していたのです。

第52回 ヨーロッパ中世世界の解体 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第51回 西ヨーロッパ世界の
膨張](#)

[次のページへ](#)

[第53回 西欧各国の王権](#)

世界史講義録

第53回 西欧各国の王権

王権の拡大と教皇権の衰退

フランスやイギリスでは荘園制が解体し諸侯が没落するのとは反対に、王の力がどんどん強くなっていた。

商業が発展するにつれて、都市に特権を与えている王は税収が増えた。経済力がつくにしたがって権力も強化されてきます。

ヨーロッパで王以上に大きな権威を持ってきたのがローマ教会でした。カノッサの屈辱ではドイツ皇帝が雪の中で三日三晩詫びつづけてようやくローマ教皇の許しをえたという話を以前しましたね。

ところが、十字軍の失敗以降教皇の権威はどんどん落ちて、王が教皇をとらえたりする事件が起きます。

「教皇のバビロン捕囚」（1309～77）は、フランス王が教皇をローマからフランス国内のアヴィニヨンに移して口ボット同然に操った時代をいいます。その後も複数の教皇が同時に出現して、諸勢力の傀儡になる時代がつづきます。「教会大分裂」という（14世紀後半）。

こうなってくると教会の権威も形無しで、こんな教会などは無くてかまわない、という考えも出てくる。イギリスのウィクリフ（14世紀）はそういう立場から教会を徹底的に批判した僧侶です。ベーメンのフスもウィクリフの影響を受けて教会批判をした。

教会の混乱を解決するために1414年から18年までコンスタンツの公会議が開かれ、ようやく教会は統一を取り戻すのですが、フスはこの会議に呼び出され、火あぶりで処刑されてしまった。ローマ教会は力づくで何とか権威を取り戻そうとしたのです。

フランスの王権伸張

王の権力がどのように強くなっていたか具体的に見てみよう。まずは、フランスから。

フランスはカール大帝のカロリング朝が途絶えたあと、選挙でカペー家がフランスの王位につきます。カペー家はパリ周辺の地域にしか権力の及ばない、名目だけのフランス

王と言ってよいものだった。フランス国内には、ナントカ公国とか、ナントカ伯領といった事実上の独立国がたくさんあった。これはドイツも同じですけれど。

この弱かったカペー朝を大きくしていく最初の王がフィリップ2世（位1180～1223）。当時フランスの北岸にはノルマンディー公国があった。この支配者は同時にイギリス王でしたね。つまり、フランス国内にあるノルマンディー公国はイギリスの領土だったわけだ。

フィリップ2世の時のイギリス王がジョン（位1199～1216）。フィリップ2世は、ジョンと戦争をして、ノルマンディー公国をフランスの支配下に入れた。王権が及ぶ範囲をグッと広げたわけです。

このイギリス王ジョンは、歴代イギリス王の中でも評判が悪い。失政が多くて、以後イギリス王室はジョンという名前を王子につけていません。ヨーロッパ人というのは名前のパターンが少ないので、ナントカ何世と、ナンバーをつけて個人を区別するのですが、ジョンは2世がない。

さらにフィリップ2世は「アルビジョワ十字軍」をおこなった。当時フランス南部にはまったくと言ってよいほど国王の力は及んでいなかった。諸侯の独立状態です。その南部フランスで流行していたのがアルビジョワ派というキリスト教の一派でした。これがローマ＝カトリックとは異なる異端ということで、アルビジョワ派弾圧のための軍隊を送る。これがアルビジョワ十字軍。

十字軍といいながら、実態は南部の地域にフランス王の権力を浸透させるための戦いでした。

つまり、ジョンとの戦争で北部、アルビジョワ十字軍で南部にフランス王の支配権を拡大した。

次に大事なのがフィリップ4世（位1285～1314）。この王は国内の教会への課税問題をきっかけにローマ教皇とケンカをする。ついには教皇ボニファティウス8世を捕らえて監禁する事件を起こした。アーニー事件(1303)といいます。

ついでに教皇をアヴィニヨンに移して、フランス王の傀儡にした。これが、先ほどの「教皇のバビロン捕囚」です。

フィリップ4世はローマ教皇と事を構えるときに三部会という会議を開催している。国内の貴族、僧侶、平民、平民と言っても都市の裕福な商人ですが、この三つの身分の代表者を集めたので三部会というのです。フィリップ4世としては、教皇と対立するのに国内の支持がほしいわけですね。以前、叙任権闘争でドイツのハインリヒ4世が教皇と対立したときに国内の諸侯にそむかれて「カノッサの屈辱」が起こりました。国内をまとめておかなければ教皇との争いは不利になるかもしれないからね。三部会で国民の国王の方針への賛成を求めた上で教皇とケンカをしているのです。この三部会が、後の時代の国会のもとになっていきます。ちょっと記憶に留めておいて下さい。

フランスの王権を発展させたフィリップ4世ですが、死後は三人の息子が順繰りに即位して、そのあと血筋が途絶えてしまった。カペー朝の断絶です。

このあとヴァロワ家のフィリップ6世がフランス王に即位しヴァロワ朝が始まります。この人はフィリップ4世の甥にあたる。ヴァロワ家はカペ一家の分家です。

このヴァロワ家の即位に反対したのがイギリス王エドワード3世。この人の母親がフィリップ4世の娘。イギリス王家に輿入れしたんだ。だから、エドワード3世はフィリップ4世の孫にあたる。孫の自分にフランス王位継承権がある、そう言ってフランスとフィリップ6世の王位に反対しフランスに進軍、百年戦争(1339~1453)が始まりました。

戦争の原因はもうひとつあって、フランドル地方の領有問題です。フランドル地方は毛織物工業の中心地帯で、イギリス王はここを欲しかった。フランス王国は王の力が強くなってきたといってもまだまだ諸侯の力が強く、各所領の領有関係は複雑だったから、充分イギリス王にも付け入るチャンスはあったのです。

百年戦争は正確には百年以上あるのですが、大ざっぱに百年戦争といっていますね。戦場はフランス国内です。百年間ずっと両国が戦火を交えていたわけではなくて、大きな戦いのあとは長い休戦期間が続きます。

両国とも傭兵が兵力の中心なので、資金がないと戦争ができないのです。兵隊を雇えないからね。決戦が終わったあとは、また次の戦闘のための資金、物資調達のためにしばらく戦争はお休みになる。そういう意味ではのんびりしている。

ただ、一般の民衆にとっては戦争がないときのほうが、被害が激しいのです。傭兵たちは戦争がないときは、一般民衆を略奪して生計を立てますからね。

この戦争は、イギリス側の優勢のうちに進みます。フランスは諸侯間の対立が激しくて、必ずしも国王のもとに一致協力していない。フランス王の叔父である大諸侯がイギリス側についたりして、フランス北部はほぼイギリスに占領されていきます。

クレシーの戦いの絵がありますね。イギリス側が大勝した戦いです。左側がイギリス軍。右側がフランス軍です。武器に注目してください。

フランス側の歩兵が持っている弓。これはイシュミといって、機械仕掛けの弓です。ハンドルを回して弦を張ります。そこに矢をつがえて引き金を引いて発射する。貫通力はあるのですが、一本の矢を射るのに時間がかかる。騎士の厚い鎧を貫くためにはこのような弓が有効だったんですが、発射準備に時間がかかる。騎士が戦いの主力だった時代の歩兵の武器でした。

それに対してイギリス側は長弓という武器を持っていました。これは、普通の弓です。

ただ少し長くて飛距離と貫通力に優れている。何よりも機械仕掛けではないので簡単に射ることができる。長弓は一分間に10～12、イシュミは2回、というのが発射回数です。この差がイギリス軍の優勢をもたらしたともいわれている。

戦争のさなかにペストは大流行しますし、北部では農民反乱「ジャックリーの乱」がおきたりして、もうフランスは滅茶苦茶です。

フランス側が劣勢のうちに、フランス王は発狂してしまう。フランス諸侯もまとまりがないままに、やがてはイギリス王が正式にフランス王位につくまでになるんです。発狂した王の息子シャルルはフランス南西部にわずかに勢力を保って戦いつづけますが、いかにも劣勢でフランスはイギリスによって併合される寸前までいく。

ここに登場するのがジャンヌ＝ダルクです。ドン＝レミ村という田舎の村の平凡な農家の娘です。ジャンヌの生まれた家が今も残っていて、どちらかというと大きな家でわりと豊かだったようです。

信仰心の厚い娘だったようです。ジャンヌは13歳頃から時々神の声を聴くようになります。18歳の時にまた、声が聞こえた。「王のもとへ行け。フランスを救え。」と。1429年2月のことです。

抗戦をつづけるフランス王子シャルルのもとに出向いて、一軍を自分に授けるように願い出ます。シャルルは彼女に一軍を任せて出陣させるんですね。

このところが、不可思議で釈然としないんです。いきなり田舎の娘が王子に面会できるのも不可解、素人の18歳の女の子に軍隊を授けるのも不可思議ですね。

ジャンヌは自分の村の近所に駐屯していた部隊の隊長を通じて王のもとにおもむいたらしいのですが、それにしても唐突な登場の仕方です。負けそうなフランス軍の士気を高めるために廣告塔として、いたいけな女の子を使おうとした策士がどこかにいたのかもしれませんね。

さて、ジャンヌはオルレアンという町に向かいます。この町はフランス側の拠点なのですが、当時イギリス軍に包囲されて陥落寸前だった。フランス軍はジャンヌの活躍によってこの町を解放するのに成功します。一躍オルレアンの少女ジャンヌ＝ダルクの名前は両軍に知れ渡ることになった。以後、ジャンヌは各地を転戦して回ります。必ずしも常に勝利したわけではありませんが。また、戦場で彼女がどんな役割をしたのかもよくわかりません。戦場で負傷したこともありますが、実際には旗を振り回して「がんばれー！負けるなー！神の御加護がフランス軍にはあるんだよー！」と応援していただけかもしれません。

兵士はむさ苦しい野蛮な男たち、その中に女性が現れて兵士たちも頑張ってしまったのかもしれない。

これ以後、フランス側は劣勢を挽回して逆にイギリス勢力を追いつめていきます。シャ

ルルは自信を持って正式に即位しシャルル7世となります。

さて、ある程度フランスの優勢を確保すると、シャルルは外交交渉でイギリスを撤退させようと考え始めます。ところが、ジャンヌは戦いに自信を持つてしまって、外交交渉にはしるシャルルを責め立てるのです。もっと戦え、私に軍隊をよこせってね。シャルルはだんだんジャンヌが邪魔になる。劣勢を挽回するには功績があったけれど、しょせん田舎娘で政治の駆け引きなどはわからぬ奴、というわけです。

このあと戦闘で敗れたジャンヌはイギリス軍の捕虜となる。当時捕虜は殺してはいけないことになっていた。普通は身代金を取って釈放するのですが、イギリス側は何としても殺したいので、裁判にかけました。

彼女がかけられたのが宗教裁判です。ローマ教会が教えに背いた異端や魔女を裁いて処刑する権利を持っていた。この裁判に彼女はかけられた。この裁判記録が残されていてジャンヌの人となりが多少ともわかるのです。

ジャンヌは敬虔な信者で自分を魔女とか異端とか思っていない。ただ、神の声が聞こえて、その声に導かれて行動しただけです。教会としては、勝手に神の声が聞こえてもらっては困る。あくまでもローマ教会を通じて信者は神と結びつくべきなのですからね。そういう意味でも、ジャンヌは裁かれざるをえなかつた。

しかし、裁判の過程で彼女が異端の信仰を持っているとか、魔女だとかいう証拠は出てこない。最後に彼女は火あぶりで処刑されるのですが、罪状は男装をしていたということでした。聖書に女性が男装をするのを禁じているらしい。しかしジャンヌは男装をしていた、という罪です。戦場に行くのに女性がスカートというわけにはいきませんよね。しかし、そんな罪状で死刑が決定したのです。

処刑されるときには大勢が見物に来ていた。彼女を縛りつけた杭の下で火が焚かれるのですが、ある程度時間がたって彼女の服が焼け落ちたところで、一旦火が遠ざけられます。それで、集まった見物人に彼女が確かに女であることを確認させました。ひょっとして男だったら罪になりませんから。

こんなふうに彼女は処刑された。シャルル7世は彼女を見殺しにしたのです。

戦争が終結して、フランスがイギリス軍を追い出したあと、ジャンヌと一緒に戦った人々はふと考え出す。いったいあの少女は何ものだったのか。彼女の故郷を訪ねて幼い頃の彼女を知る人から証言を集めたりする人もいました。

やがて、だんだんと彼女はフランスを救った英雄だったと見直されていくことになるのです。大々的に人々が彼女を讃えるようになるのは19世紀の半ば以降のことでした。一年そこそこの彼女の活動は何となく神秘的な所があるので、物語として世界中に知られるようになった。

彼女を処刑したローマ教会も今では聖女と認めていますが、正式に名誉回復させたのは20世紀に入ってからです。

ジャンヌの話は百年戦争を彩るエピソードとして知っておけばいいです。

さて、シャルル7世は百年戦争に勝利し、カレーという町を除いてイギリス勢力を完全にフランスから追い出しました。この戦争の過程でフランス国内の諸侯の勢力も弱まって、結果的にフランスの王権は強固になった。シャルル7世はその後大商人の力を借りながら中央集権化を進めていきました。

イギリス

百年戦争の前からイギリスでは比較的王権が強かった。もともとノルマン征服でできた王家ですから。

ノルマン朝が途絶えたあとはプランタジネット朝が成立します。この王家もフランス出身で、フランスに領土を持っていたので、イギリス王の領地がフランス国内で広大になった時期。

この王家のジョン王がフランスと戦争して領土を失ったという話は先ほどしましたが、このジョン王に関してはもうひとつ覚えることがある。

マグナ=カルタ（大憲章）です（1215）。ジョンはフランスとの戦争のために国内の領主や都市からどんどん税金を取ろうとした。それに対して諸侯、都市が勝手に課税しないように、従来の自分たちの権利を尊重するように王にせまって約束させた文書です。

一応イギリス議会政治発展の第一歩といわれています。

このあとも王は諸侯や都市を無視した行動が多かったのでシモン=ド=モンフォールという貴族を中心に身分制議会が召集されました（1265）。各身分の代表者が集まるので身分制議会という。フランスの三部会と似たようなものです。

その後も議会を招集して王と貴族たちとが意見調整することがイギリスでは続いている。14世紀中頃には「模範議会」と呼ばれるようになる。身分制議会が貴族院、庶民院という形を取るようになります。

さて、百年戦争に敗北したあと、イギリス国内では王家の責任問題になる。長年多額の戦費や人材を投入した戦争に敗れたのですから、責任追及が起きるのは当然だね。これ

が王位をめぐる争いに発展して「ばら戦争」（1455～1485）が始まります。

ランカスター家とヨーク家が王位をめぐって戦う。ランカスター家の紋章が赤ばら、ヨーク家の紋章が白ばら。ばら同士の戦争だから「ばら戦争」とロマンチックな名前が付けられています。名前とは裏腹にこの戦争はイギリス中の貴族が二派に分かれた熾烈な内戦になります。

泥沼の戦争はランカスター家、ヨーク家の両方の血を引くチューダー家出身のヘンリ7世が即位してようやく終結しました。

これがチューダー朝。ばら戦争で有力貴族は衰退して、国王は中央集権化を強く進めていくことになった。

まとめておきます。

イギリス、フランスとも百年戦争、ばら戦争を通じて王権が強化された。

ドイツ

イギリス、フランスとは反対にドイツでは諸侯の権力が強まります。ドイツは神聖ローマ帝国ですね。皇帝は選挙で選ばれるので、もともと強大ではない。それに、ローマ皇帝という名前に引きずられてイタリア方面の支配に勢力を注いでドイツがお留守になることが多かった。その結果、ドイツの諸侯はのびのびやる。

1256～1273年には皇帝がいない状態にまでなります。これを大空位時代といいます。諸侯の力はますます強まる。

神聖ローマ皇帝を決めるにはローマ教皇の権威が必要だったのですが、14世紀にはローマ教皇がフランス王のロボットになった。教皇のバビロン捕囚でした。これに対して新しい神聖ローマ皇帝の選び方を決める必要ができた。それを定めたのが「金印勅書」（1356）。ドイツ国内の有力7諸侯が皇帝を選挙する仕組みを決めたものです。これ以後、神聖ローマ皇帝は名誉職のようなものになりました。諸侯の領土はそれぞれ独立国のような形になる。ドイツ国内の諸侯の国を特に領邦といいます。

15世紀後半からはハプスブルグ家が神聖ローマ皇帝に連続して選出され、事実上帝位を世襲するようになります。やがてはヨーロッパの名門中の名門となる。フランス革命で有名なマリー＝アントワネットはこの家出身のお姫様です。ハプスブルグ家の子孫は今でも健在でヨーロッパ連合の議員などをやっているようです。

イタリア

イタリアもドイツと同じで分裂状態がつづく。。特に北部は都市の力が強く、いくつか

の有力都市国家に分裂しています。中部はローマ教皇の領土となっている。イタリア半島全体を統一する中央集権国家は登場する余地がありませんでした。

まとめておきます。

イギリス、フランスは戦争の末、15世紀末には中央集権国家へと変化を始めるが、ドイツ、イタリアは分裂状態がますます固定化されていく。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[英仏百年戦争集英社新書](#)

佐藤 賢一著。

中世フランスを舞台に、エンターテイメント小説を次々と発表している作者が、百年戦争をわかりやすく解説した本です。戦争の解説そのものよりも、イングランドという国が、フランス諸侯の辺境領土に過ぎなかつたことを、あからさまに解説してくれているところがこの本の魅力。イングランド王が、フランス語を話しひフランスに住んでいたのがいつごろまでだったかわかるだけでも目から鱗。

第53回 西欧各国の王権 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第52回 ヨーロッパ中世世界の解体](#)

[次のページへ](#)
[第54回 大航海時代1](#)

世界史講義録

第54回 大航海時代1

大航海時代の条件

スペイン、ポルトガルをはじめとする西欧の国々が、大西洋やインド洋に進出していった時代を大航海時代といっています。15世紀の末から16世紀のはじめまでをおおざっぱに呼ぶ言い方です。ヨーロッパ人が世界に拡大していく最初ですね。

大航海時代が始まった理由を見ていきましょう。

まず、スペインやポルトガルがどういう国だったかということです。この二カ国は当時出来たてほやほやの国でした。両国があるイベリア半島は8世紀初め以来イスラム勢力の支配下にあった。フランスとの国境地帯に住むキリスト教徒の領主たちが少しずつイスラム勢力から領土を奪い取っていきました。これをレコンキスタ、再征服運動といいましたね。この戦いで生まれたのがポルトガルとスペインでした。

イベリア半島最後のイスラム教国グラナダ王国がスペインによって滅亡したのが1492年、コロンブスがスペインの援助でアメリカに到達したのが同じ年ですから、イスラム教徒と戦争しながら大航海を援助していたわけです。つまり、この時期のスペイン、ポルトガルには猛烈な領土拡大への意欲があった。もっともっと、より広く、より遠くへというわけです。

イスラム教徒と戦うなかで養われた、キリスト教を広げようという宗教的な熱意も背景にあったようです。

さらに、この両国は王室の権力強化のために財源を求めていた。海に囲まれたイベリア半島ですから、海上貿易に目をつけた。当時一番儲かるのが香辛料貿易だった。

香辛料は軽くて輸送しやすいえ高価で取引された。当時のヨーロッパでは同じ重さの銀と交換されたというから超高級品です。しかも人気商品でよく売れた。このころヨーロッパ人は香辛料なしではすまない食生活になっていたのです。

ちょっと、食生活の話をしておきましょう。ヨーロッパは緯度が高く、寒冷な地域でもともと農業生産にあまり向いているところではなかった。だから、小麦などの穀物栽培以外に豚や牛などの家畜も多く飼っているわけです。これらの家畜はだいたい、森や休耕地で放し飼い。まるまると肥えた秋に屠殺します。肉は干し肉、薰製など保存のために加工しますが、多くは塩漬けにして樽の中につけておく。これをちびちびと長い冬の間に食べつなぐわけです。いくら冬は寒いと入っても、肉は傷んでくる。やがて腐りかけた肉なども食べることになる。これが臭い。しかし、我慢して食べていたわけだ。十字軍などをきっかけに東方の産物であるコショウをヨーロッパ人は知る。これを腐り

かけた肉にかければ臭みが見事に消える。一度コショウの味を知るとなしではすまないようになります。

地中海交易圏でイタリア商人がイスラム商人から輸入した重要な商品が香辛料だったのです。この香辛料はどこで生産されていたのか。コショウはインド西海岸のマラバール海岸や、ジャワ、スマトラ、マライ半島で作られていた。クローヴ（ちょうじ）、ナツメグはインドネシアのモルッカ諸島周辺でしか栽培されていませんでした。

いずれにしても、ヨーロッパからは遙かに遠いアジアです。これらの香辛料はインド商人、アラビア商人、そして、イタリア商人と多くの仲買人を経て運ばれますから、ヨーロッパでの末端価格は驚くほど高くなるのです。コショウを扱うヨーロッパの小売商人は風や息で吹き飛ばないように窓を閉め切りマスクをして慎重に量り売りをした。絵を見ると化学の実験で薬品を扱っているようですね。

ポルトガル、スペインが香辛料貿易をおこなうとしたときには地中海交易はイタリア商人に独占されていたので、別のルートでインドに直接到達する方法を探すことになったのです。直接インドまで行ければ仲介商人なしだから利益は莫大になるはずです。

ちょうどこの時期に羅針盤の改良が行われたり、地球球体説もとなえられるようになり、遠洋航海への技術的な裏付けも整ってきました。

マルコ＝ポーロの「世界の記述（東方見聞録）」が大いに読まれてアジアへの関心も高まっていました。コロンブスの読んだマルコ＝ポーロの本が残っているのですが、余白にたくさん書き込みがある。ジパングまで何キロ、なんてね。

こういう関心の高まりと、インドとの直接貿易の欲望が相まって大航海時代が幕開ける。

インドへ

大航海時代のさきがけとなった人物はエンリケ航海王子(1394～1460)です。この人はポルトガルの王子。ヨーロッパ中から腕利きの船乗りを集めてアフリカ沿岸の探検航海を指揮した人です。だから、航海王子というあだ名で呼ばれていますが、本人は船酔いがひどくて船には乗らなかったようです。

エンリケ航海王子の時代は、実はまだ船で直接インドに行けるとは考えられていなかった。エンリケ時代に信じられていたプトレマイオス世界地図を載せておきましたが、世界はこんな形だと考えられていたんですね。ヨーロッパの海岸線は、まあ正確です。アフリカ北岸も、アラビア半島もそれなりの形をしているね。ところがペルシア湾より東は明らかに想像で書いてある。一番東のキタイというのは中国のことです。遼帝国の契丹がなまって当時のヨーロッパ人にはこう呼ばれていました。

注目はアフリカ南端。これが東に湾曲していてキタイの南に接続しています。インド洋は完全に閉じた海として描かれていることを確認してください。

もし、実際このような地形ならいくら航路を開拓してもインドには絶対に行けない。これが、エンリケ航海王子時代の常識です。

ならばエンリケはなんのために探検航海を指揮したのか。意識としては、レコンキスタの延長で、アフリカにあるイスラム教徒の拠点を攻撃しようとしたのが最初の動機らしい。

さらに、単純にアフリカ西海岸を探求したかったということもあったのでしょうか。しかし、これが後のインド航路開拓への基礎づくりになる。

エンリケ時代の探検航海は今の常識からすると実にゆっくりとしか進みません。たとえば北緯26度、ボジャドール岬というところがあるのですが、ここを超えるのに12年もかかっている。

時間がかかった理由の一つは船乗りたちがビビっていることです。ボジャドール岬まで来ると赤道も近い。どんどん熱くなる。それ以上南下すると、海はぐつぐつと煮え立っていて、船も人も一瞬にして燃え尽きてしまう、と信じられていた。その証拠にここまでくると沿岸の人々はみんな真っ黒な皮膚をしているではないか、というんですね。こういう船乗りたちを脅したり励ましたりしながら航海する時代でした。

もう一つは当時の航法にある。当時はまだ近海航法という航海方法をとっていました。これは簡単にいえば常に陸地が見えるところを航海するのです。陸地が見えなくなると不安でしょ。嵐にもまれて沿岸から流され、悪天候が続いて星も見えない日がつづくとちゃんと港に帰れるかパニックになってしまいます。だから、陸地沿いを行く。

ところがこの航法は案外危険。陸地が見えるということは水深が浅い。沿岸には島も暗礁もたくさんある。つまり、座礁して沈没してしまう可能性が結構高いのです。座礁の危険があるのなら遠洋に出てグルッと遠回りに迂回すればいいんですが、それがなかなかできなかった時代だったのです。

やがて、遠海航法が確立されて、船乗りたちはコンパスを見ながら大胆に沖合を航海するようになります。これは、まず何百キロも西へ直進する。十分な沖合いに出たら今度は進路を真南に変えて直進、予定の距離を進んだら今度は西へ向かって直進する。この間コンパスで常に方位を確認していく。遠回りのようですが、沿岸を水深を探りながら進むよりもよほど早く目標まで到達できたようです。

エンリケ航海王子が死んだあともポルトガルはアフリカ沿岸探検をつづけます。

また、アラビア半島など陸上ルートの探索からインド洋は閉じた海でなく、大西洋とつながっているらしいことがわかる。こうなると、インド航路が実現可能になります。まずは、アフリカの南端を確認しなければインド洋に入れない。南端探しが航海者の目標

になる。

1488年、アフリカ南端に最初に到達したのがバルトロメウ=ディアスです。ディアスはアフリカ沿岸を南下していて嵐に巻き込まれるのです。13日間漂流して嵐が収まつてみると、船は東に向かって走っていることに気がつく。アフリカ大陸があれば東に進めばぶつかるはずですから、ディアスは、ひょっとしたらと考えた。北上してみると北につづくアフリカ東海岸があった。嵐にもまれているうちに南端をまわっていたのです。

ディアスはこのままインドまで行ってしまったかったのですが、船員たちが抵抗した。わけのわからないところへ行きたくない、命のあるうちに帰りたいというわけだ。仕方なく多数決をしたらディアス以外全員帰還を希望したので引き返すことになった。帰りの航海で、はじめてアフリカ南端を確認した。行きは嵐で何がなんだかわからないうちに通過していましたからね。このアフリカ南端の岬に付けられた名前が「嵐の岬」。岬を見ながらディアスは泣き叫んでいたらしい。航海を続けられなかつた悔し泣きです。

ポルトガルに帰還したディアスは熱狂的な歓迎を受けます。何しろアフリカ南端を確認し、インドへの航路の存在を実証したんですから。宮廷では航海の経過報告がおこなわれ、その席にはのちにアメリカへ到達することになるコロンブスもいたそうです。「嵐の岬」はのちにポルトガル王によって「希望の岬」と改名されました。喜望峰ですね。

ポルトガルが実際にインドに到達するのは、この10年後です。1498年、インド航路を開拓したのがヴァスコ=ダ=ガマです。ガマの船が到達したのがインドの西海岸の港町カリカット。この町の名前は覚えておくこと。

実はガマは、喜望峰をまわったのち、アフリカの東海岸で港に立ち寄りながらインドに向かった。アフリカの東海岸というのはインド洋を囲む商業圏の一部で、イスラム商人やインド商人がいて貿易をしている。ガマはそんなイスラム商人をアフリカ東海岸で雇い入れて、あとはかれを水先案内人としてインドに向かったのです。

カリカットに到達すると、思ったとおり街には香辛料があふれている。これを仕入れてヨーロッパにもって帰れば大もうけ間違いなしです。

ガマは早速、カリカットの太守に挨拶にいきました。宮殿に行くと、太守は金や宝石をちりばめた天蓋つきのソファに寝そべって、ビンロウジの実をつまんでは種を金の杯にペッペッと吐いている。ガマが見たこともないような贅沢な暮らしをしているのです。ポルトガルとインドの圧倒的な富の差を見せつけられることになった。

太守が「何のようか?」と聞くと、ガマは「自分はポルトガルの大王から使わされた使節である。ポルトガルは偉大で豊かな国である、キリスト教の王を探しに来たのであって金銀が目的ではありません。でもついでに、貿易も許されたい。親善のしるしにポルトガル王より閣下にお土産もございます。」と、まあ、一通りの挨拶をした。太守は、「そのお土産とかを持って参れ。」と、楽しみに身を乗り出すのですが、運ばれてきた

のがポルトガルの民芸品や毛皮、毛織物、雑貨品程度のもの。太守は、この程度のものはそこいらの田舎商人でも持ってくるわ、と非常に不機嫌になったという。ヨーロッパの経済なんてまだまだたいした事はないのですね。

それでも、貿易は許されて、ガマの一行は、ポルトガルから運んできたヨーロッパの商品を何とか売りさばいて、香辛料を買い付けた。ただし、ガマたちの商品はインドではたいした値打ちはないので、散々に買い叩かれてわずかな香辛料しか買えなかつたようです。ともかく取引終了して、ガマはまたカリカット太守にいとまごいに行くのですが、この時に商業税と港の使用料を請求された。ところが、ガマは資金を全部香辛料の買い付けに使ってしまって、税金と使用料を払う余裕がない。そこでどうしたかというと、税金未納のままに出港を強行してしまつた。踏み倒して逃げたわけだ。ポルトガル国王の使節としては実に恥ずかしくみっともない去り際だね。

ところが、ポルトガルに帰還するとカリカットで仕入れた香辛料は60倍の値段で売れて大もうけ。直接取引きは、やはり儲かるんですね。

これ以後、ポルトガル政府は次々と貿易船をインドに送り莫大な利益を得ることになります。

ガマの航海について、付け加えておきます。

ガマはインドまで簡単に往復したみたいに話ましたが、やはり遠洋航海は命がけなのです。ガマたちの一行は、リスボンを出港するときは170名の船員がいたのですが、帰ってきたのはたったの44名。あの船員は死んでしまっているのです。原因は壊血病。ビタミンC不足で起きる病気です。長い航海で船員たちは新鮮な野菜や果物を食べられないから、必ずといっていいほど壊血病にかかった。関節が膨張し歯茎から血が流れ出して止まらなくなる。やがて死んでしまうんです。ガマの航海では、ガマの弟も参加しているんですが、この人も死んでいる。大航海時代の船員たちにはつきものの病気でした。

だから、この時代の船乗りというのは本当の意味で命知らずのならず者だったんですね。そういうならず者の船乗りたちを統率する船長というのは、ならず者の大親分です。ディアスにしても、ガマにしても、とんでもなく怖い人たちだったと思う。こんなに死亡率の高い航海に参加する理由は何かというと、無事に帰ったときの報酬の大きさです。一攫千金を夢見る連中が海に出て行った。それでも絶対確実に死ぬような航海には誰も参加したがらないわけで、コロンブスの航海では船乗りがなかなか集まらなかった。ついには航海終了後の釈放を餌に囚人を乗せたというから、大変だったんです。

1502年、ガマは二度目のインド航海に出発した。このときは、前回みたいなみじめな扱いをされたくなかった。しかし、まともな商売をしていては大量の香辛料を買い付

けることはできない。そこで、ガマはどうしたかというと、軍事力を背景に商売を強制したんだ。

今度は15隻の大船団を組んでインドに到着すると、沿岸で見つけた船を焼いて乗客を虐殺し、カリカットの街に大砲を撃ち込む。住民を船につるす。その手足を切り取って、太守に送りつける。そういう恫喝をして香辛料を手に入れた。

ヨーロッパとアジアのゆがんだ関係がこのときから始まったのです。

第54回 大航海時代1 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第53回 西欧各国の王権](#)

[次のページへ](#)
[第55回 大航海時代2](#)

世界史講義録 第55回 大航海時代2

----- 大西洋をこえて -----

ポルトガルはアフリカ大陸を南下してインド航路を開拓していたのですが、このときスペインはどうしていたか。実は、ポルトガルにおくれをとつてインド航路開拓をできない状態だった。

バルトロメウ=ディアスが喜望峰に到達した段階（1488）で、ポルトガルが直接インドにいけることはすでにほぼ確実です。ポルトガルとしては苦労して開拓してきた航路を独占したいと思うのは当然で、他国の船団がアフリカ西岸を南下しないように早い段階で手を打っている。

「ギニア海岸に接近した外国船はたちどころに撃沈または捕獲さるべきこと。とらえられた船の士官と乗組員は、この方面に棲息するサメ群のなかへなげこまれるであろう」

これはポルトガル王ジョアン二世が1481年に出した布告です。すでに喜望峰到達以前から航路独占を考えているのがわかる。そして、1491年にはベニン湾のエル・ミナという所に大規模な要塞と倉庫の建設を始めています。

だから、スペインがアフリカを廻ってインドをめざすのはすでに非常に難しい状態です。

こういうときにあらわれるのがコロンブスです。

コロンブスはイタリアのジェノバ出身の船乗り。商売をしているうちにポルトガルの有力者の娘と結婚してアフリカ沿岸の航海もしています。このころからコロンブスは地理書などを研究して西廻りインド航路について研究を始める。ちょうどイタリアの地理学者トスカネリという人が「地球球体説」を唱えていて、コロンブスは西廻りでインドに到達する可能性を問い合わせて賛成意見をもらったりしている。

コロンブスはアラビアの地理書とかマルコ=ポーロの『世界の記述』とか、とにかくいろいろ情報を集めて大西洋を渡ればインドに到着できると確信して、自分の計画をポルトガル国王に売り込む。ですがアフリカ廻りのインド航路開拓が着々と進んでいましたからポルトガルはかれの計画を受け入れなかった。

そこで、コロンブスは自分の計画をスペイン、イギリス、フランスなどポルトガルに遅れをとっている大西洋岸の国々に売り込む。だけど、どこでも取り合ってもらえないのですね。なぜかというと、一つは成功するかどうかわからない。失敗してもいちかばちかやってみればと思うけど、遠洋航海というのは当時莫大な費用が要った。

たとえば、こんな数字があります。16世紀初めにポルトガルがインドに船団を送るための費用です。これが、1年で22万クルザード必要だった。ところがポルトガル王室はそのうち5万クルザードしか用意できていないのです。残りの資金はジェノバ、南ドイツの商人などから借りている。大船団をインドまで送るのに王室の財源だけではまかなければならないほど多くの資金が必要だったということだね。

だから、当然コロンブスの計画を実行しようとすれば莫大な資金が必要。しかも、成功するかどうかといった保障はない。どこの国でも躊躇します。

ところが、1492年、スペインがグラナダを陥落させてレコンキスタが終了した。余裕ができたスペインはコロンブスの計画を受け入れる決定をします。このときのスペインの女王がイザベラという。覚えること。

今から8年前、1992年はコロンブスの航海成功的500周年ということで世界中でいろいろな催しがあった。映画も私が知っているだけで2本作られている。そのうち『1492コロンブス』という題名だったと思うのですが、これはそれなりに史実に忠実らしいので興味があったら見てみてください。この映画では、イザベラ女王が異性としてコロンブスに惹かれてかれの計画に許可を与えたという設定になっていたけどね。『エイリアン』のシガニー・ウィバーがイザベラ女王をやっている。コロンブスはフランス映画に必ず出てくるジェラール・ド・パルデュー。知らないか。

コロンブスは、スペイン政府に対してきっちり成功報酬も要求している。紹介しておきましょう。

インドで発見した宝の10分の1を自分のものとすること。発見した土地の総督と副王の地位。大洋提督の称号。スペイン貴族に列する事、などです。かなりの強欲。しかし、コロンブスにとっても命がけだからね。確実にスペインに富をもたらすのだからそのくらい自分の取り分を要求しても当然だと考えたのだろう。

コロンブスは、1492年8月3日パロス港を出発した。コロンブスが乗るのがサンタ・マリア号。復元写真が資料集に載っていますね。積載能力150トン、全長23メートル、幅7.5メートル。三本マストの当時としてはごく普通の船だそうです。だいたい教室三つ分くらいですね。

残りの二隻はピント号とニーニャ号。こちらはサンタ・マリア号の約半分の大きさです。

乗組員は、なかなか集まらない。何しろだれも行ったことのない西廻り航路です。インドに着くどころか、途中で世界の端っこの大好きな滝に落ちて死ぬかもしれない。そこで囚人も頭数あわせて船に乗せましたから、未熟練者が多かった。

約二ヶ月間陸地を見ることなく、西へ西へと航海はつづきます。なかなか陸地が見えな

いので乗員の不安が高まり反乱が起きそうになったりもしますが、コロンブスは成功時の報酬をつりあげたり、脅したりしながら航海をつづける。

ついに、10月12日に現地ではグアナハニと呼ばれた島を発見して上陸しました。これが、現在のサン・サルバドル島です。バハマ国の領土になっています。大きな地図でないと確認できないような小さな島です。

昔はこの事件をコロンブスの「新大陸発見」と言っていました。しかし、アメリカ大陸には数万年前から人類が住んでいるのであって、この言い方はヨーロッパ人にとっての「新大陸」「発見」でしかない。今ではヨーロッパ中心の偏った表現として意識的に避けられています。「大航海時代」と呼ぶのが今では一般的です。

もう一つ言っておくと、この航海でコロンブスは西インド諸島の島々を探検しましたが、アメリカ大陸そのものには到達していません。現在のわたしたちは世界地図をもっていて、アメリカ大陸の地形がどうなっているのか知っていますから、コロンブスの航路を見ると何をカリブ海でチョロチョロしているんだと感じてしまいますが、コロンブスたちにとっては初めての世界でちょっとずつ確認しながら航海しているからこうなるんですね。

とにかく、サン・サルバドル島に上陸したコロンブス一行はここをスペインの領土と宣言します。

コロンブスの計算では、ここはジパング周辺の島に間違いない。そこで、原住民と接触して情報を得ようとする。原住民は装身具に金をつけていた。ジパングは黄金の国ですから、なかなかそれらしい。

ところが香辛料がないのですね。インドなら香辛料があるはずなので、まだインドからは遠い。そこで、その後約三ヶ月間コロンブスは周辺の海域や島々を探索してインドへの入り口を探します。そんなものは見つかるはずはないのですが、コロンブスはここをインドの一部ないしは周辺と信じて疑っていません。

この間にも事件は起きていて、11月にピンタ号が行方不明になっている。理由はわかりません。抜け駆けしてスペインに帰ろうとしたのかもしれない。12月にはサンタ・マリア号がハイチで座礁してしまう。残りはニーニャ号一隻だけ。全員が乗れないで、サンタ・マリア号の材木を利用して砦をつくってここに39名を残して1月、コロンブスは帰路につきました。

香辛料は発見できなかったけれど、とにかくインド周辺まで行って帰ってきたので、コロンブスの航海は大成功として受け取られました。コロンブスはイザベラ女王の前で報告会をひらく。コロンブスは持ち帰った金を女王に献上し、連れ帰った7人の原住民に賛美歌を歌わせた。なかば誘拐ってきて無理矢理覚えさせたんだろうね。

コロンブスの考えた地形

早速1493年には、コロンブスは第二回目の航海に出発します。今度は17隻の大船

団、総勢 1500 人の探検隊。黄金と香辛料を是非とも探そうというわけだ。ハイチの砦に戻ってみると残していった船員は原住民の襲撃をうけて全滅していた。その後いくら探しても香辛料は発見できない。期待は一気に不満に変化していきます。結局コロンブスは合計 4 回航海をするのですが、到達した場所がインドの一部という証拠を見つけることができなかった。コロンブスが到達したのはインドやアジアではないといわれたとして、コロンブスは失意の晩年をおくりました。ただ、子孫は約束どおり海軍提督の地位が与えられた。8 年前の 500 周年のテレビ番組見ていたら、コロンブスの子孫が出てきました。ちゃんとスペイン海軍提督の服を着てね。

コロンブス以後、多くの探検家がアメリカに向かいました。
代表的な人物だけ紹介しておきます。

まず、カブラル。この人はポルトガルの船乗りです。ヴァスコ・ダ・ガマが 1498 年第一回目のインド航海から帰ったあと、ポルトガル政府からインドに派遣されたのがカブラル。ところがアフリカの西を南下している途中で嵐に流され、大西洋を横断してしまった。着いたのが現在のブラジルです。ブラジル、と言う名前は「カブラル」からきたものです。(注: この部分は、誤りです。ブラジルの国名は、インド・マレーシアでブラジルとよばれていた木の原種が 1540 年に発見されたことに由来しているようです)

コロンブス以来アメリカ方面は基本的にスペインの勢力範囲になっていたのですが、カブラルのおかげでブラジルだけはポルトガル領になりました。現在でも、中南米諸国はスペイン語を話しますが、ブラジルだけはポルトガル語ですね。

カブラルが全然帰ってこないので、しびれを切らしたポルトガル王は、再度ガマにインド航海を命じます。これが、ガマ二回目のインド航海。この話は前回したね。

次は、イタリア生まれのアメリゴ・ヴェスプッチ。この人はアメリカへ行った航海者たちの記録を検証して、アメリカがアジアではないことを論証した。アメリカという呼び名はアメリゴに由来します。

アメリカがアジアとは全然別の土地ならば、インドはさらにアメリカの向こう側ということになる。当時の地理的知識は不十分だから、アメリカ大陸のかたちがどうなっているかも判らないわけで、多くの探検家がアメリカ大陸の向こう側に抜けようと探索をします。

アメリカ大陸で東西が一番細くなっているところがパナマ地峡です。ここを横断して太平洋をはじめて見たのがスペインのバルボア。かれは黄金を求めて探検していくたまたまパナマ地峡を横断した(1513)。特にアジアにつながる海を探していたわけではありません。

はじめて船に乗ってアメリカ大陸の反対側に出たのがマゼランです。そのままかれは世

界周航を成し遂げた（1519～22）。

マゼランはもともとポルトガルの船乗りで、インドやマラッカに航海した経験もあった。ですが、待遇問題でポルトガルに不満を感じてスペインに移ります。ポルトガルはインド航路で収益をあげていますから、スペインとしても早く西廻り航路でインドにたどり着きたい。マゼランは、この実現を期待されて1519年、5隻の船に約250人の船員を乗せて出発しました。

南米大陸南端の海峡、のちにマゼラン海峡と名付けられるのですが、ここを通過して太平洋に出たのは有名です。

マゼラン以前にもアメリカ大陸を抜ける海峡を探した船乗りはたくさんいた。たとえば、ラプラタ川というでっかい川がある。河口は100キロ以上あって、とても川とは思われない。大陸を抜ける海峡だと思って何日も航海していくとどうも様子がおかしい。試しに海の水を飲んでみると塩辛くないので、はじめて川だとわかつて引き返す。ほかにはミシシッピー川とかね、こういうことがしょっちゅうあった。

マゼラン海峡は潮流が速く風も強いところで、現在でも航路としてはあまり使われないといいます。ここを水深を測りながら少しずつ、文字通り手探りで進みます。浅くなつていれば引き返す。しかも非常に狭い海峡だから、少し操船を間違えればすぐに座礁してしまう。地図をみているとこんな所を抜けることができたのは奇跡に近いと思う。こんな航海をつづけて無事インドにいけるなんて普通は思えませんね。実際、マゼラン海峡通過以前に5隻の船団のうち1隻は難破、1隻は逃亡します。

マゼラン海峡を抜けてアメリカ大陸の西側に出たマゼランはしばらく北上します。太平洋を広い海とは思っていないくて、北に進めばすぐにインドに着くと考えていたらしい。ところがどこまでも海がつづくので、思い切って進路を西に取ります。もともと、西廻りインド航路開拓が目的だったとはいえ、すごいと思う。今地図を見ても太平洋というのはめちゃくちゃ広い。何日間陸地を見ずに航海するかわからないんですよ、マゼランにとっては。自殺行為に近いと思う。

マゼラン一行は太平洋に出ると98日間陸を見ることなく航海をすることになった。食糧は当然尽きてしまって、船の中に巣くっているネズミやアブラムシを捕まえて食べた。それも食べつくすと、今度は船材のおがくず、革、帆、こういうものも食べた。

1521年3月、ようやくたどり着いた陸地がグアム島です。偶然に任せて航海してグアムみたいな小さな島に着くなんて、これ運がいいです。

さらに西へ向かって、4月には現在のフィリピンに着く。マゼランはポルトガル時代にアジアに来たことがありますから、フィリピンの言葉を聞いてアジアに着いたことを確信します。インドは近いです。マゼランはここで現地の人々を征服してスペインの領土にしたいと考えたらしい。セブ島やマクタン島でマゼランたちは島民とトラブルを起こして、戦闘になる。マクタン島ではマゼラン自身が戦闘で死んでしまった。殺したのが現地の部族の指導者ラプラプ王です。

マゼランはかわいそうですが、現地の人たちから見れば征服者を撃退したラプラプは英雄。資料集では「マクタン島での戦勝記念祭」の写真がある。ラプラプがマゼランを倒す野外劇をやっていますね。

戦闘で船員も減ってしまったので、残された一行108人は2隻のうち1隻をここで捨ててさらに西へ向かう。

11月にモルッカ諸島に着いた。こここそが、別名香料諸島。香辛料の原産地です。一行はここで香料を入手しますが、すでにポルトガルの勢力圏なので、もしポルトガル船に見つかれば撃沈される。船はすでにボロボロ。ポルトガル船に見つからずに無事にスペインに帰りつけるかどうか非常に微妙。というわけで残留希望者が多く出て、スペインに向けて出発したのはわずか47名でした。指揮官はセバスティアン=デル=カーノという人物。指揮する船はヴィクトリア号。マゼラン艦隊最後の一隻です。

ヴィクトリア号の航路を地図で確認すると面白いよ。モルッカ諸島からヴィクトリア号は南下する。極端に南に進路を取っているのがわかります。インドネシア、インド、アフリカの沿岸に近づいてポルトガル船に発見されるのを恐れたのです。

ヴィクトリア号が香辛料を満載してスペインに帰り着いたのは1522年9月。モルッカ諸島を出てからさらに10ヶ月後のことでした。帰還者は18名。たった18名ですよ。

かれらは命を賭けて地球が丸いことを実証したのですが、その名前は教科書にはありません。あるのは途中で死んだマゼランだけです。

まとめておきます。

大航海時代の人物として覚えておくのは、ポルトガルのエンリケ航海王子、バルトロメウ=ディアス、ヴァスコ=ダ=ガマ、カブラル。スペインではコロンブス、アメリゴ=ヴェスپッチ、バルボア、マゼラン。たったこれだけ。

大航海時代に冒険航海をした人はたくさんいるんですよ。たとえばイギリスやフランスなんかは北東廻りでインドにいけないか探っている。ロシアの北を通るわけだ。北極海に氷がなければ理論的には可能ですが。あと北アメリカ沿岸を探検したりする。ハドソン湾から太平洋に抜けられないかとかね。

そういう沢山の失敗のなかで、大胆な実行力と勇気、そして幸運に恵まれた一握りの者が歴史に名前を残したんだね。

最後にコロンブスの評価について。

最初にアメリカに到達したコロンブスは長い間英雄として扱われてきました。8年前の500周年の時も、そういう評価を基礎にした特集番組がテレビでも多く流されました。

しかし、一方アメリカ先住民からはそういう評価に対して多くの疑問の声が挙げられました。コロンブス以後ヨーロッパ人が続々とアメリカに渡ります。その結果、アメリカの先住民の暮らしが徹底的に破壊されて現在までいます。そのことは、頭の中に叩

き込んでおいてください。

北米先住民スー族の人の言葉です。

「インディアンという名前はわれわれのものではない。道に迷ってインドに上陸したと思いこんだある間抜けな白人がくれたものだ。」

参考図書紹介 · · · もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[コロンブス 岩波新書 黄版
93](#)

増田義郎 著

講演をおこしたもののがもとになっているので、非常に読みやすい。
コロンブスの航海の出資者であるジェノヴァ商人や改宗ユダヤ人とスペイン王室の関係、フランシスコ修道会とコロンブス、イザベラ女王の関係など、興味深い時代背景が説かれていて興味深い。
ポルトガル王室がコロンブス出発以前に大西洋横断航海をおこなっていた（失敗したが）というのは、初めて知って驚きました。

第55回 大航海時代2 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第54回 大航海時代1](#)

[次のページへ](#)
[第56回 アメリカの征服とヨーロッパの変容](#)

世界史講義録

第56回 アメリカの征服とヨーロッパの変容

古代アメリカ文明の展開

コロンブスの到達以来ヨーロッパ人が続々とアメリカ大陸にやってくることになるのですが、アメリカ大陸にはどんな人々がどんな暮らしをしていたのか。それを、見ておきましょう。

インディオとかインディアンという言い方は抵抗があるのですが、ほかに便利な呼び方がないので、教科書にしたがってスペインが支配した地域の先住民のことをインディオ、イギリス・フランスが支配することになる北アメリカの先住民をインディアンと呼ぶことで授業は進めていきます。

アメリカ大陸の先住民は約2万年前アジアからやって来た。われわれと同じモンゴロイドです。シベリアとアラスカの間、ベーリング海峡が氷におおわれてつながっていて歩いて渡れたのです。かれらはやがて南北アメリカ大陸と周辺の島に広がっていった。中でも中央アメリカのメキシコ高原と南アメリカのアンデス高地に高度な文明が発展します。

メキシコ高原から見ていこう。ここには前6000年頃には農耕文化が成立する。主な農作物はトウモロコシです。アメリカ大陸には小麦とか米とかの穀物はないのね。ちなみに家畜の種類も少ない。あとで見るアンデス高原にはアルパカとかリヤマというらくだに似た大型の家畜がいますが、メキシコ高原にはいなかった。

メキシコ湾岸地域に最初に現れる文化がオルメカ文化。前9世紀頃のことです。

オルメカ文化がもとになって前2世紀頃からメキシコ高原で発展したのがテオティワカン文明。これは「太陽のピラミッド」なんていう遺跡が有名だね。資料集にも写真があります。

メキシコ湾につきだしているユカタン半島というのがある。ここで生まれたのがマヤ文明（3世紀～10世紀）。聞いたことあるでしょ。これもオルメカ文化の影響で成立したものです。ここもピラミッドや石造りの神殿など巨大な遺跡が残されています。複雑なかたちをした絵文字も有名です。マヤ文明は10世紀を境にして衰退していく、スペイン人がここにやってきたときには、マヤ人たちは巨大な建造物を造るような力を持っていなかった。だから、古代エジプト人がここにわたって文明をつくったんだとか、アトランティス大陸が昔あって、かれらが残した遺跡だ、とか言わされたこともあった。自然科学的根拠はないんですけどね。

メキシコ高原ではテオティワカン文明のあとトルテカ文明が引き続いて栄えます。いろ

いろんな民族が興亡を繰り返すのですが、スペイン人が来たときに栄えていたのがアステカ帝国です。首都はテノチティラン。人口20万を超えていた大都市でした。当時の世界で最大級です。アステカ帝国の繁栄ぶりをしめしているね。テノチティランは湖のなかに浮かぶ中之島にあった。島に渡るための堰堤が三本つくられていて歩いて渡つていけた。はじめてここを見たスペイン人たちはその壮麗さに驚いたという。

現在では、湖はなくなってしまって、そこにメキシコシティがあります。

アステカ帝国はスペイン人によって滅ぼされ、テノチティランも破壊されたのです。

アンデス高原にはメキシコとは無関係に独自に文化が発展します。

前10世紀に生まれるのがチャビン文化。

7世紀にアンデス高原一帯に都市を建設したのがティアワナコ文明。トウモロコシ、ジャガイモ栽培、家畜ではアルパカやリャマを飼育します。

この文化をうけて15世紀に成立したのがインカ帝国です。首都クスコを中心にして道路網を整備し中央集権的な国家を建設していました。クスコの町に今も残っている石積みの壁は全然隙間がなくてカミソリの刃一枚通らないという。そういう高度な石造建築が残されています。このインカは文字を知りませんでした。ただし、文字の代わりにキープと呼ばれる記録方法をとっていた。キープは「結縄」と訳されています。縄を結んでコマをつくり、その結び目の形や数で数字をあらわした。税の徴収を記録するために使われたようです。

メキシコ高原のマヤ、アステカ、アンデスのインカに共通して言えることですが、基本的にこれらの文明は孤立している。だから、高度な石造建築術や複雑な暦法をあみだしている割には旧大陸で当たり前のものを知らなかったりします。

金属器に関して言うと、金、銀、青銅は利用していますが鉄器を知らない。面白いのは車輪を知らなかつたことです。コロみたいに上に何かを載せて転がすことも知らなかつたらしい。ピラミッドなどをつくるための巨大な石材をどうやって運んだのか、と思いますね。「ろくろ」も知らなかつた。回転するという技術を利用しなかつたのですね。

動物では馬がいなかつたので当然ですが騎馬を知らない。だから、マヤ人たちはスペイン人が騎馬でやってきたときにそれを一つの動物だと思ったといいます。

鉄器も持たず馬に乗ることもないアメリカ先住民たちがスペイン人がやってきたときに簡単に征服されてしまったはある意味では当然かもしれない。

アメリカ大陸原産の農作物です。トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、トマト、唐辛子、この辺が有名どころ。トウモロコシやジャガイモは旧大陸にもたらされて、あつという間に世界中に広がった。特にジャガイモは寒くてやせた土地でも収穫できたので、世界中でどれだけ多くの人を飢餓から救ったかわからない。唐辛子がアメリカ原産というのは知ってましたか。コロンブスがアメリカに行ったのが1492年でしょ。その百年後、日本が朝鮮半島に攻め込みます。戦国時代を統一した豊臣秀吉の朝鮮出兵です。このときに日本軍が朝鮮にもたらしたのが唐辛子だという。百年間で唐辛子はグ

ルッと地球を一周したのですね。その伝わるスピードの速さ、面白いですね。韓国・朝鮮料理に欠かせないキムチですが、ある意味ではコロンブスのおかげかもしれない。脱線しますが、梅毒という性病があります。これもアメリカにしかなかったんですがコロンブスが早速ヨーロッパにもって帰る。日本ではじめて梅毒の記録が現れるのがいつかというと、驚くなれ 1512 年。梅毒は地球一周にわずか 20 年。うーん。人間というのはすごい動物ですね、という話でした。

アステカ帝国の征服

コロンブス以来スペイン人がアメリカで植民地経営をはじめるのですが、はじめはキューバ島やその東のイスパニョーラ島を中心でアステカ帝国やインカ帝国には気づいていなかった。

ところがインディオの奴隸狩りに出かけた船がたまたまユカタン半島に漂着して、初めてスペイン人はマヤ人に接触したんだ。マヤ文明は衰えたといつても、マヤの人たちはそれまでスペイン人が知っていたインディオたちとは全然違って高い文明を持っていた。そしてマヤ人たちの情報からアステカ帝国の存在を知ります。

このアステカ帝国の征服に出かけたのがコルテス。成功すれば莫大な財宝と地位と名誉が手に入る。コルテスはかなり強引で野心的な人で、キューバ総督の制止命令を無視して遠征に出かけた。兵力は約 500、馬 16 頭、銃 50 丁。武力としては少ない。何しろ目指すアステカ帝国の首都テノチティランの人口は 20 万以上ですよ。ひとつの国を滅ぼすのに 500 の兵力はやっぱり少ないのでしょう。ところがコルテスは成功してしまう。

実はコルテスはアステカ帝国の首都に攻め込む前に周辺の民族から細かく情報収集をしている。アステカ帝国は、新興のアステカ族が建設したばかりの国でした。アステカ族は武力は強いが支配の仕方が乱暴だったので支配下に入った多くの民族から反感をかつていた。

アステカ族がどういう具合に反感をかっていたかというと、たとえば宗教儀式です。アステカ族は太陽神を信仰しているのですが、この太陽神の活力が衰えるのを防ぐために生贊をささげる儀式を毎日のようにしていた。生贊は生きた人間です。これを祭壇の上に寝かせて王が黒曜石のナイフでその胸を切り裂く。ドックンドックンとまだ脈打っている心臓をつかみ出してそれを祭壇の後ろにある太陽神の像にバシッと投げつけるのです。石造に真っ赤な血がべっとりとつく。その生き血が太陽神に活力を与えると信じられていた。そのあと生贊は首を切り落とされて、その首は物干し竿みたいな棒に串刺しにされてさらされた。胴体は祭壇の下の溝に落とされる。そこにはジャガーが飼ってあって、その餌になったというんだね。なんともおどろおどろしい話ですが、生贊にされたのがアステカ族に支配された他民族の捕虜。

プリントにあるのはその太陽神の像です。太陽神は舌をベーッと突き出していますが、この舌の上にのせているのが黒曜石のナイフ。生贊の心臓を取り出すナイフです。こう

いう絵柄で、太陽神が生きた心臓を要求している様子を現しているのです。アステカ族以外の民族にとっては、この太陽神を信仰しているわけではないですから、儀式は異常に残酷で理解しがたい。しかも自分たちが生贊にされるのですから、アステカ族は当然のように反感を買うわけだ。

そこへ、スペイン人のコルテスがアステカを征服するためにやってくる。他民族はすすんで協力を買って出るんだね。こんなふうにしてアステカ族以外のメキシコ高原の民族を従えて進撃してくるコルテスを見て、アステカの王は反撃するのをあきらめてしまいます。コルテスに黄金を贈ってお引取りを願うんですが、黄金を見てコルテスはますますやる気満々。テノチティランに入り無抵抗のアステカ王を捕らえて自分の傀儡にしてしまった。

その後、王の弱腰ぶりに怒ったアステカの人々がコルテスが不在の隙についてスペイン軍に反乱をおこします。このときに捕まえられたスペイン人の捕虜が例の太陽神の生贊にされたりする。コルテス側はこの反乱を鎮圧するために結構苦労して、この過程でテノチティランの街は徹底的に破壊されてしまった。最終的にはスペイン側が勝利してアステカ帝国は滅亡します。1521年のことでした。

インカ帝国の征服

インカ帝国を滅ぼしたのがピサロ。1533年のことです。ピサロははじめて太平洋に到達したバルボアの副官をやっていた男。バルボアは黄金を求めてたまたまパナマ地峡を横断したんですね。その部下だったピサロも当然、アメリカのどこかに黄金郷はないかとずっと探索をつづけていた。そんなときにコルテスがアステカ帝国を発見し滅ぼし、莫大な財宝を手に入れたと聞く。俺も第二のアステカを見つけるんだと躍起になります。南アメリカの太平洋岸を探索しているうちにインディオから、ペルーの山の上に大帝国があるという情報を得るんだ。これがインカ帝国。ただ、探検をおこなうにも軍資金が必要なので資金提供者を集めたりするのにかなり苦労します。その後7年間くらいかけてピサロはインカ帝国の政治情勢とか情報収集します。

ちょうどそのころインカ帝国では前の王が死んで、腹違いの二人の息子の間で王位継承戦争が起こっていたんです。兄のアタワルパが勝利して即位式の準備をしようか、というときにピサロー一行はインカ帝国征服をめざしてアンデス山脈を登りはじめます。ピサロの兵力はコルテスよりもさらに少ない。兵180、馬27、銃の数は不明。インカの人口は一千万ともいわれていますから、無謀とも言える。

インカ帝国は今のエクアドルからチリの中程までアンデス山脈の太平洋岸につながる長い国です。首都のクスコを中心にして道路網が発展していて、かなり中央集権的な政治機構ができあがっていました。このあたりが部族連合国家的だったアステカ帝国と違うところです。ピサロはコルテスのようにインカに反発する他の民族を味方につけるとい

うこともできなかったのです。

で、新しい王アタワルパは、ピサロたち白人の一行が武器を持って山を登ってくるという情報をちゃんとつかんでいました。200人にも満たないと聞いてアタワルパは完全に見くびっています。しかも兄弟を倒した戦争の直後で、かれは3万の兵士を率いています。悠々とピサロ一行がやってくるのをカハマルカという湯泉の都市で待ちかまえていた。やがてピサロは使者をアタワルパに遣わして会見を申し込みます。アタワルパは話を聞いてからゆっくり捕まえて奴隸にしてやろうと、会見を承諾しました。場所はカハマルカの広場と決定した。

兵力で段違いに劣るピサロの作戦は奇襲によってアタワルパ王を生け捕りにしてインカ軍の動きを封じることだった。事前に部下を広場の周りにこっそり配置します。スペイン兵の中には圧倒的な敵軍の数におびえてオシッコを漏らすものもいたという。ぎりぎりのバクチみたいな作戦だったんです。

会見の当日になって、インカ軍3万は町の広場に入場してきます。そこにピサロは側近と宣教師をつれて近づきます。スペイン人はいつも宣教師を連れているのです。

アタワルパは護衛の兵の担ぐ輿に乗ってやってきます。ピサロとアタワルパが挨拶を交わしたあと、宣教師がアタワルパに聖書を渡す。アタワルパは聖書を手にとってペラペラとページをめくるのですが、そもそもインカには文字がありません。当然本だってない。聖書を見せられたってそれが何かわかるわけがないです。そこで、アタワルパは聖書をポーンと放り投げた。そのとたん宣教師が「神に対する冒瀆だ！」と大声で叫んだ。

これが合図で、ピサロは輿に飛びかかってアタワルパを引きずりおろして連れ去ろうとした。同時に隠れていたスペイン兵が一斉に広場に結集しているインカ軍に対して銃弾や矢を打ち込んだ。

インカは鉄砲なんて知りませんから、いきなり轟音がしたと思ったら味方がばたばたと倒れていくから、とたんにパニック状態になってしまった。かれらがいた広場は壁に囲まれていたので、逃げようとして出口に殺到していっそう混乱が増すでしょ。押しつぶされて死んだインカ兵もたくさんいたという。

大混乱のなかでピサロはアタワルパを生きたまま捕虜にするのに成功しました。王が人質にとられしまってインカ軍は抵抗することができなくなってしまった。

こんなふうに結果的に見れば実にあっけなくインカ帝国はピサロによって征服されましたんです。

捕虜となったアタワルパはピサロの目的が黄金だとすぐに気づいた。有名な話ですが、アタワルパは自分がとらえられている石牢のなかで背伸びしてのばした腕で壁に線を引いてピサロに言うのです。「この部屋のこの線まで黄金で満たしたら釈放してくれるか？」

渡りに船だ。ピサロは釈放してやると約束したので、アタワルパは牢のなかから全土に黄金を集めるように命令します。中央集権的な国ですから王の命令に従って、村々から

黄金が差し出されてあっという間にかれの石牢は黄金でいっぱいになった。ピサロは約束を守るはずではなく、このあとアタワルバを殺して、別の王族のものを傀儡皇帝としてインカ帝国に号令します。事実上このときにインカ帝国は滅んだと言つていいでしょう。これが1533年でした。

ただ、インカの残存勢力がその後もアンデスの山奥に立てこもってスペイン人に対してゲリラ活動をつづけています。有名なマチュ・ピチュの遺跡、資料集に写真もありますが、これはこの時期にインカのゲリラ活動の根拠地として利用されたという都市遺跡です。標高2500メートルの山頂でしょ。どうやって建設したのか、ここに住んでいた人々はどこへいってしまったのか、考えていると幻想的な気分になります。

スペインのアメリカ植民地統治

スペインはアメリカ植民地を経営するのにエンコミエンダ制という仕組みをしました。スペイン人の入植者に土地とインディオに対する支配権をあたえる制度です。そのかわり入植者はインディオにキリスト教を布教する義務を負います。支配権の代償が布教というのはなにかへんですが、レコンキスタ以来強烈な宗教的情熱を持つ国だから、こんな制度を作ったのですね。

この制度は結果としてスペイン人が自由にインディオを酷使してかまわないということを意味しました。インディオは事実上の奴隸です。

はじめスペインは香辛料を求めてアメリカに来てはみたものの、結局アメリカには香辛料はないわけじょ。そこで、スペインはカリブ海の島々で農園を経営する。おもにサトウキビです。この砂糖をヨーロッパで売りさばいて儲けようというわけだ。

サトウキビ農園で働かされたのは奴隸とされたインディオたちでした。ところが、インディオは過酷な奴隸労働に耐えられずにはたばた死んでいく。またかれらは、スペイン人がもたらした天然痘や「はしか」などの伝染病に対して免役が全くなかったから、これも死亡の大きな原因になったようです。たとえばハイチ島の原住民の人口です。1494年30万人、50年後にはなんと500人。これは絶滅です。

少なくなった奴隸を補充するためにキューバ島から大陸に奴隸狩りに向かった船が難破して、これがマヤ文明発見のきっかけになつたりしている。結局、カリブの島々では先住民インディオは絶滅していきます。労働力を補充するためにスペインはアフリカ大陸の黒人を奴隸としてつれてきた。今、ジャマイカでも、ハイチでもキューバでも国民の多数はアフリカ系の人たちかスペイン人の子孫ですね。

アステカ帝国、インカ帝国の征服によってスペイン人の植民地は一気に広がります。インカ帝国の旧領土では銀の大鉱脈が発見されてスペインに莫大な富をもたらすことになりました。ポトシ銀山というのが特に有名です。ここで働かされたのもインディオです。

ちょっと絵を見ましょう。こちらは鉱山の内部の様子を描いた絵。坑夫たちの多くは

村々から徵発されたインディオたちです。

坑道は深さ300メートル、真っ暗な穴のなかでロウソクの光を頼りにインディオたちは鉱石を採掘するのです。掘り出した鉱石を地上に運びあげるはしご、これが縄ばしごです。20メートルの縄ばしごを何本も乗り換えて登り降りするんですが、坑夫たちは背中に鉱石を背負っている。縄ばしごなんてふらふら揺れて不安定でしょ。ロウソクを持つことができないので、かれらは親指にロウソクをくくりつけられている。それに、みんな裸ですね。地中は暑いにしても、素っ裸とは一層悲惨な感じがする。

こちらは別の絵。インカの王族の血を引くワマン・ポマという人がいます。この人が17世紀のはじめにインカ時代からスペイン統治時代までの歴史の本を挿し絵つきで書いていて、これは挿し絵です。

坑夫を集めきれなかった村長と、鉱山で反抗したか逃亡しようとしたインディオを処罰しているところです。ここでもインディオは素っ裸にされている。身体に模様みたいにたくさんの線が描かれていますが、これは鞭で打たれた傷です。一人が両手を縛られ裸でリヤマに乗せられている。これを右の男が鞭で打っています。この鞭をもっている男は服装髪型からみてインディオですね。インディオのなかにもスペイン人に取り立てられて奴隸がしらみみたいに仲間を監視するものがいたのがわかる。その奴隸がしらの働きぶりを右端の男が椅子に座って見物しています。この人物がスペイン人ですね。

下には三人のインディオが裸で杭に縛り付けられています。一人は逆さ吊り状態。見せしめにされているのだと思います。その右の男は服を着て手を合わせています。これは神に祈っているのですね。スペインはインディオをキリスト教に改宗させていましたから、この祈っている対象はキリスト教の神でしょう。よく見ると、この人の足は枷にはめられていて、これも何か罰を受けているのでしょうか。

男たちが鉱山に連れていかれたあとのインディオの村の様子がこの絵です。残された女性が機織をしている。背中に赤ちゃんを背負っているから母親ですね。彼女の髪をつかんでいるのがスペイン人の宣教師です。織りかけの布を指差している。「もっとたくさん織れ」と命令しているようでもある。男を坑夫にするだけでなく、女には機を織らせてそれを税金がわりに取り立てるのです。この女性は泣いているんですよ。よく見ると目の下に線がかかっているでしょ。これ涙です。

多くのスペイン人はインディオを奴隸扱いしたり虐殺することを、ひどいこととも思っていないかった。キリスト教を知らない野蛮人に対しては罪悪感もなかったようです。しかし、インディオに対する非人間的な扱いに抗議をしたスペイン人宣教師がいました。ラス・カサスという人です。この人はもともと従軍司祭としてイスパニョーラ島やキューバ島で先住民の征服に付き従っていた。

征服はこんな具合にやる。まず、スペイン人たちはインディオの村に入していく。そして、村人を集めて、スペイン王への服従とローマ教会への改宗を勧告します。この勧告はスペイン語でやります。聞いているインディオたちには何のことかさっぱりわかりませんから、当然降伏するとも改宗するとも返事をするわけがない。これをスペイン人は拒否とみなして武力で征服するのです。虐殺もある。ラス・カサスもキューバ西部の力

オナオ村というところで3000人を虐殺した現場に居合わせている。

こういう征服戦争に参加した功績でラス・カサスは土地とインディオを手に入れのですが、ある日聖書を読んで改心するんだ。それ以後は自分の所有していたインディオを解放し積極的にインディオの救済運動を開始します。

スペイン国王にインディオの待遇改善を訴えたり、インディオの実態についての報告をヨーロッパに送る。インディオの相次ぐ反乱や急激な人口激減で労働力不足も問題になっていたので、スペイン王カルロス1世はラス・カサスを招いてインディオ問題の会議を開いた。1543年にはインディオの待遇を改善する新しい法律が発布されています。まあどれだけ効果があったかわかりませんが、そういう問題を提起したスペイン人もいたということは覚えておきましょう。

次の文は1552年にラス・カサスが書いた『インディアスの破壊についての簡単な報告』という本の一節です。

「この40年間、また、今もなお、スペインの人たちはかつて人が見たことも読んだことも聞いたこともない種々様々な新しい残虐極まりない手口を用いて、ひたすらインディオたちを斬り刻み、殺害し、苦しめ、拷問し、破滅へと追いやっている。例えば、われわれがはじめてエスピニョーラ島に上陸した時、島には約300万人のインディオが暮らしていたが、今では僅か200人ぐらいしか生き残っていないのである。」(染田秀藤訳、岩波文庫)

結果から見ると、アンデス山脈の山の上など辺鄙な所にいたインディオ以外は白人と混血するかほとんど絶滅に近い状態になってしまった。そしてスペインは労働力としてアフリカから黒人奴隸を輸入することになっていきます。

ヨーロッパ世界の変容

ポルトガルのアジア貿易とスペインのアメリカ植民地経営でヨーロッパ社会が大きく変化していきます。

まず、商業革命。

大航海時代以前はイタリアを中心とする地中海貿易圏がヨーロッパの商業・経済の中心でしたが、これが、ポルトガル、スペインを中心とする大西洋岸に移動した。いまのベルギーとオランダは当時ネーデルラントといってスペインの領土でした。ネーデルラントはドイツ、イギリス、フランスの中心にあって特にここが商業の中心になっていきます。

次に価格革命。

アメリカから大量にもたらされた金銀が西ヨーロッパにインフレを起こす。たくさん金銀が入ってくるから金銀の価値が下がる。逆にいろいろな商品の値段が上がる。だから価格革命といっています。

もっと簡単に言えば、アメリカの金銀は奴隸労働で採掘しているのだから、ただ同然なわけ。ただで手に入れた金銀が、スペインやネーデルラントから西ヨーロッパ全体に流れる。西ヨーロッパ中がアメリカから奪った富によって豊かになったということです。商人の中には莫大な富を蓄えるものがあらわれるし、農民でも豊かになるものがでてくるわけで、これが封建的な身分制度を急速に変化させていきます。

最後に国際分業の成立。

ネーデルラントはもともと毛織物業が盛んだったね。ここがスペインの窓口として商業の中心にもなるわけで、ここと経済的にもつながりの深いイギリス、フランスなど西ヨーロッパの商業、工業がとりわけ発展していく。

それに対して東ヨーロッパでは、西ヨーロッパの工業地帯に輸出するための穀物や原材料を生産することが主要な産業になっていきます。輸出穀物は安いほど売れるわけで、安く穀物を生産するためには農民の地位が低いほうがよい。だから東ヨーロッパではこの頃から農奴制が強化される。領主たちは農民の権利を押さえ込んでいきます。こういう新たな農奴制を「農場領主制」と言っています。

さらにこれにアメリカ植民地が絡んで国際貿易の環ができる。

東ヨーロッパの安い穀物、原材料が西ヨーロッパに。

西ヨーロッパはこれをを利用して工業を発展させ、毛織物などの製品を東ヨーロッパやアメリカ大陸に輸出して、儲ける。

アメリカではインディオや黒人奴隸によって金、銀、砂糖などが生産され、西ヨーロッパをさらに豊かにする。アメリカ、アフリカでは資源や人間そのものが収奪され、使い捨てられ伝統的な社会が破壊されていく。

この商品の流れの中で主導権を握り、もっとも豊かになるのは西ヨーロッパです。西ヨーロッパはこの位置を守るために、他の地域にその役割を押し付けづけていくことになります。

第56回 アメリカの征服とヨーロッパの変容 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
第55回 大航海時代2

[次のページへ](#)
第57回 ルネサンス（1）

世界史講義録

第57回 ルネサンス（1）

ルネサンスとは

14世紀頃から16世紀頃にかけてヨーロッパ文化が新たな展開を迎えます。これをルネサンスといいます。ルネサンス期は天才的な芸術家がいっぱいいた。文化史上実に刺激的な時代です。

ルネサンスの以前と以後ではヨーロッパ人のモノの見方、考え方方ががらっと変わる。

プリントの絵を見てください。これはルネサンス以前と以後の植物図鑑の絵です。マンドラゴラ草を描いているんですが、ルネサンス以前の絵はどう見ても変でしょ。この根は薬草として使われたのですが、人間の形に描かれている。根には魔力があって危険なので根っこを採集するときには犬に紐をくくりつけて引き抜いたという言い伝えがあるのですが、この絵にはご丁寧に犬まで描いている。こんな形の根があるはずないし、描いている人も知っているはずだと思うのです。なのに、なぜこんな絵を描くのか。

当時の人たちは図鑑に植物のあるがままの姿を描こうとは始めから考えていなかったのではないか。そうとしか思われないのでですよ。みんなが信じているように描く、そうあるべき形に描く。魔力的な効能を持つ薬草マンドラゴラの根っこは、摩訶不思議な形をしているべきなのね。本当はどういう形なのかは問題ではない。そういう一方的な思い込みの中で世界を見るのがルネサンス以前の目です。

ところが、ルネサンス以後の植物図鑑では、同じマンドラゴラ草がなんでもない植物として描かれています。私は本物のマンドラゴラ草を見たことないから、こっちの絵が正確かどうかは知りませんけどね、でもこちらは本当の姿に似せようとしているね。

同じように、王の肖像画やイエスやマリアを描いた宗教画もルネサンス以後では明らかに描き手の「本物に近く、できるだけリアルに」という気持ちが感じられるようになります。

これがルネサンスの精神です。

迷信とか思い込み、そういうものを捨て去って、まっさらな気持ちで世界を見たらどう見えるか、先入観なく見たもの感じたものをそのまま表現する。そういうことがはじまるのです。

で、この時代のヨーロッパ人にとって、迷信とか先入観の最たるものには何かわかりますか。ヨーロッパ人の発想を縛っているもの。それは、キリスト教なの、もっと具体的に言うとローマ教会ですね。ローマ教会が教えるキリスト教的な世界観を捨て去って世界を見ることからルネサンスははじまりました。

さて、ルネサンスは「再生」という意味です。

何を再生するのか。ローマ=カトリックが広がることによって、いつのまにか消え去ってしまったキリスト教以前の文化です。キリスト教以前にどんな文化があったか。ギリシア・ローマ文化です。

古代ギリシア・ローマ文化の研究がまずイタリアでおこなわれるようになり、ここからルネサンスが生まれることになります。

十字軍などによってビザンツ帝国との交流が頻繁になってくるでしょ。ビザンツ帝国はローマ帝国の後継者だし、その領土はギリシアを含んでいるからギリシア・ローマ文化を引き継いでいるのです。ビザンツからイタリアに学者が来てイタリア半島では失われてしまったギリシア文化を教えたりする。また、イスラム世界でもアリストテレスの哲学などは翻訳研究されていて、東方との貿易が活発になってくるとそれらも輸入されます。

そうなってくると、古代ローマ・ギリシア文明はすごかったなあ、ということになる。ところが、もともとイタリアは古代ローマ帝国の本拠地なわけで、ローマ市内を散歩していればゴロゴロ昔の遺跡が転がっているのですよ。ああ、ここにあったんだ、と思うと失われた文化を研究してそれを再生させようという情熱が一気に高まってくるんですね。

こういう古代ギリシア・ローマの文化研究のことをヒューマニズムといいます。日本語では人文主義と訳す。

古代ギリシア・ローマの学問や芸術はキリスト教以前のものですから、原罪とか最後の審判とか復活とか、そういう生まれる前か死んだ後のややこしい教義とは関係ない。イタリア人にはそれが新鮮な驚きなのです。人間中心主義、合理主義、現実主義、そういう思考方法をイタリア人たちは学んでいった。

現在「人間性の尊重」とか「人道主義」とか訳されているヒューマニズムという言葉はここから生まれたものです。

人文主義がすすんでキリスト教的な世界観から自由になってみると、実に人生は素晴らしい、美しい、喜びにあふれたものとして感じられる。キリスト教では生きることは憂鬱で暗いのが当たり前だったからね。人生は原罪をつぐなってあの世で救われるための準備期間で、楽しむものではなかったのです。

ルネサンス期のイタリア人でロレンツォ=デ=メディチ(1449~92)という人がいます。この人の詩。

青春はうるわしくも
あわれはかなきかな
今をこそ楽しみてあれ
何ごとも明日ありとは定かならねば

見事にルネサンスの精神をあらわしている。「今をこそ楽しめ！」と言っているんですよ。来世ではなく。

次はドイツの詩人、フッテン(1488～1523)の言葉。

おお世紀よ、芸術は栄え
知識はよみがえる
生きることは喜びなるかな

「知識はよみがえる」。具体的に何かはもうわかりますね。古代ギリシア・ローマの知識ですよ。そして、「生きることは喜び」とつづく。

ぱーっと目の前の霧が晴れて、世界が鮮明に明るく見えてくる。近視の人がはじめて眼鏡をかけたような気分でしょうかね。これがルネサンスの精神です。

はっきりと世界が見えてくるとこれをとことん見極めて、自分の持てる力を最大限発揮してさらに世界を広げよう、という発想も生まれてくる。人間が自然を征服することだって不可能ではないかもしれない、とも思えてくる。

何でもできる「万能の天才」と呼ばれる人がルネサンス期の理想的な人間像になる。またそんな人が登場してきます。その代表がレオナルド＝ダ＝ヴィンチ(1452～1519)です。ダ＝ヴィンチの『モナリザ』は知っているね。画家として超有名ですが、あの人は画家じゃないんですよ。少なくとも本人はそう思ってはいなかった。自分では「万能の天才」と思っている。自分を領主に売り込むための推薦状が残っているんですが、敵の城壁を打ち破る大砲が作れるとか、いろいろ自分の得意な技能を紹介して最後に絵も描けます、と付け足しみたいに書いている。

実際にかれの残したスケッチを見ると、飛行機や潜水艦、ヘリコプターの設計図、いっぺんにたくさんの弾を発射できる大砲の絵とかが描いてある。不思議なのがこれ、プリントに張ってある絵ですが、胎児だね。どう見てもこれは生まれる前ですね。赤ん坊は丸くなった姿勢で、へその緒がくっついています。なぜ、こんな絵を描いたんだろう。しかも何を見て描いたのか。

実はダ＝ヴィンチには人体のスケッチが結構あって、資料集にも載っていますが筋肉や腱が骨とどうつながっているか、熱心に描いている。ダ＝ヴィンチは人間を描くとき、できるだけ正確に描こうと思う。そうすると、皮膚の内側が気になってくるのね。筋肉ってどうなってるんだろうとか。気になると、見てみたくて仕方がない。人体解剖をすれば見られるわけですよ。でも、そんなことできないです。

それでも好奇心を抑えられないダ＝ヴィンチは、新しい死人が出たと聞くと真夜中に墓場にいって、墓を暴いて死体を解剖したのです。で、ランプの光で必死にスケッチをする。見つかったら死刑、八つ裂きの刑ですよ。なんだか、鬼気迫る光景ですね。30数体の解剖をしたという。

この胎児の絵も、好奇心に駆られたダ＝ヴィンチが臨月で死んだ女性を解剖してスケッチしたのかもしれませんね。多分、そうだね。

法律や常識なんか吹っ飛ばしてしまうこの好奇心とバイタリティーはすごい。才能もある。このダ=ヴィンチが、「ルネサンスが生んだ最大の天才」と呼ばれるのです。

ルネサンスは14世紀から16世紀と長いですが、ダ=ヴィンチに代表されるような新しい精神を持っていればルネサンス期の人物として分類しています。

大航海時代の背景にも同じような好奇心があったと思います。コロンブスやマゼランもそういう意味ではまさしくルネサンスの人物です。

ルネサンスの背景

ルネサンスの文化が生まれ発展した背景を見ておきます。

1, 十字軍によるイスラム・ビザンツ文化との接触。

これが、ヨーロッパ人を大いに刺激した。イスラムやビザンツの文化に対する憧れが生まれます。

2, ビザンツ帝国の滅亡による学者のイタリアへの亡命。

イスラム教のオスマン帝国によって1453年にコンスタンティノープルが陥落しビザンツ帝国は滅亡しました。イスラムの支配を恐れたビザンツ帝国の学者たちがイタリアに亡命してきます。かれらはギリシア・ローマ文化を受け継いでいたのです。そこで、イタリアでギリシア・ローマの古典の勉強がブームになりました。

多くのイタリア人がギリシア語の講義とかを聞きにくくなる。

3, イタリアの都市国家の成長。諸都市の有力者による学問・芸術の保護

誰が、ビザンツの学者のパトロンになったかというと、商人たちです。イタリアでは統一国家が生まれずに都市国家どうしが戦国状態です。ヴェネツィア、ピサ、ジェノバなどの海上貿易でさかえる都市のほかに、ミラノ、フィレンツェという毛織物工業で発展していた都市もあって、おおむねイタリア北部の諸都市は裕福で、商人階級は経済的にゆとりがあった。学問文芸を保護することが、一流の商人のステータスのようになっていきます。そこで、豪商や諸都市が争って才能ある学者を招いたり、一流の芸術家に教会を作らせたり肖像を作らせたりするようになる。

たとえば、先ほど紹介したロレンツォ=デ=メディチはフィレンツェを支配した豪商です。ルネサンス芸術のパトロンとして、フィレンツェのメディチ家は覚えておいてください。

ルネサンス期の人と文化

まず、イタリアから。

ペトラルカ(1304～74)。

著書『叙情詩集』。人文主義の先駆けの一人。ラテン語、ギリシア語の古典研究者です。ラテン語というのは古代ローマの言葉ですよ。ペトラルカは古典研究よりも、はじめて近代的な登山をしたことで有名です。近代的な登山とは何か。昔から世界中で人間は山に登っているんですが、登山の目的はちゃんとあるのね。薬草を摘みにいくとか、羊の放牧とか、一番多いのが信仰登山です。ところがペトラルカの場合は、そういう目的はないのです。ただ、登ってみたくなったから登ってしまった。これが近代登山です。

かれは、ある日突然広々とした景色を見てみたいという衝動に駆られた。それで、弟をつれてヴァントゥー山という山に登ろうと思い立った。ずんずん歩いていって山の麓までいくと羊飼いのおじいさんがいた。山頂までの道をきくと、ここから先に行つたものはいないから引き返しなさい、と諭されるんですね。誰も登山なんてするものはいないのです。それでも、ペトラルカと弟は登っていった。ペトラルカ、山頂に着いた。そこで何をするかというと、風に吹かれながらひととき読書をする。アウグスティヌスの『告白』のこんな一節です。「そしてひとびとはそこへ行き、高山と広い潮と力強くざわめく流れと大洋と天体の運行に感嘆して、われを忘れる。」

かれは山の上で宇宙を感じているのですね。何か粹でしょ。こういう探求心、好奇心がルネサンス的なんです。新しい登山がここに始まりました。そこに山があるから登るのね。人から見て、無意味に見えても本人に意味があれば、いいんです。

ダンテ(1265～1321)。

『神曲』という小説を書きます。ダンテ自身が主人公で、地獄、煉獄、天国というあの世の三世界を旅する話。煉獄というの天国に行けるほど善人でもないけれど、地獄へ行くほど悪くもない人が天国へ行く修行をする世界です。

で、作品中で地獄と煉獄を案内するのがヴェルギリウス。ヴェルギリウスというのは古代ローマの大詩人。ダンテはこの詩人にあこがれていたわけで、ルネサンスですね。ダンテはこの作品をトスカナ語で書いている。これは受験的にはけっこう出る。トスカナ語というのは現在のイタリア語につながる当時の方言のひとつです。これが、どうして重要かというと、当時学者文人が文章を書くときはラテン語で書くのがあたりまえ。文章といえばラテン語をさしていた。トスカナ語のような俗語で文を書くということは恥すべきことなのです。でも、ダンテは平気でトスカナ語を使った。自分の表現のためには常識を無視した。ルネサンス的でしょ。

ボッカチオ(1313～75)。

著作は『デカメロン』。デカというのはデシリットルの「デ」と同じで10という意味です。『十日物語』と訳す事もありますね。物語は、ペストの大流行で、病気を避けて貴族の男女10人が郊外の別荘に逃れる。そこは田舎でやることもなく暇でしょうがない。

で、暇つぶしに十人が十日間、物語りをするんです。だから『デカメロン』。いろいろな話が次々に展開していくという内容で、構成的には『アラビアンナイト』の真似ですね。

話の中身では、キリスト教会をおちょくっていて、聖職者のセックススキャンダル話がたくさんある。従来の権威にたてついているところがルネサンス的。

絵画にいきましょう。

ボッティチエリ(1444頃～1510)。

代表作が『春』、『ヴィーナスの誕生』。世界的な名画だから見たことはあると思います。

これが『春』。ルネサンスの象徴のような絵です。どこがルネサンス的か。まずは題材。ここに描かれているのはすべて神様です。キリスト教の神ではなくて、古代ギリシア・ローマの神々です。たくさんの女神が描かれていますが、みんな薄衣をまとっているだけでほとんどヌードでしょ。今では、別に何ということもありませんが、当時ではけっこう刺激的、スキャンダラスだったんじゃないでしょうか。さて、この絵にはいろいろな意味が隠されている。神々に皆意味があるのです。

一番右端。空中に浮かんでいる青白いこの男が西風の神「ゼフィロス」。西風というと日本では寒い冬の風ですが、ヨーロッパでは偏西風は暖かい春の風です。

西風ゼフィロスがフーッと春風を吹き付けているのが大地の女神ニンフ。ニンフは西風ゼフィロスにつかまれるのを振り払って、逃げようとしているようです。ニンフがゼフィロスの求愛を拒否しているとも取れる。拒否しているのですが、彼女の口を見てください。何かがこぼれ落ちているでしょ。これ、草花です。嫌がっていても春風にあたって思わず花が咲いてしまう、ということらしい。

ニンフの左は花の女神フローラ。フローラはニンフが変身した姿で、全身花におおわれている。どう転んでも春になってしまふのです、というメッセージのようです。

フローラの横、一段と高いところに立って超然としているように見えるのが、愛と美の女神ヴィーナス、アプロディーテです。

さて、その左には三人の女神が踊っているように手を組んでいる。これは、三女神といつてそれまでもしばしば描かれていたテーマなのですが、ボッティチエリはこれに新しい意味を与えています。

三人の中で一番右にいるのが「美」の女神。左端が「愛」の女神。「愛」というと抽象的に分りにくいので思い切って「愛欲」、もうちょっとがんばって「肉欲」の女神と言ってしまいましょう。結った髪が乱れているでしょ。そういうことです。

そして、真中が「貞節」の女神。これも意訳すれば「禁欲」の女神。この人はきっちりと髪を結って乱れない。

「愛欲」も「禁欲」も「美」と手をつないでいます。そして、「愛欲」「禁欲」もお互いに手をつないでいるのですが、このつなぎ方は押し合っているように見える。そうなんです、この二人の女神は相容れないのでから、お互いに押し合って勝負をつけようとしているのです。作者ボッティチエリはどちらの応援をしているか。当然「愛欲」にエールを送っていると考えられるのです。根拠は二つ。ひとつは「禁欲」は絵を見るわれわれに背中を見せているのね。堂々とこちらを見ていない。

もうひとつは、画面中央のヴィーナスの上。ここに天使が浮かんでいる。これは恋のキューピット。キューピットは目隠しをして適当に矢を放つ。その矢にあたった人は恋に落ちるというんですね。ここに描かれているキューピットもお約束どおりに目隠しをして矢をつがえています。この矢の方向をテン、テン、テン、と追っていくと、ね、ちゃんと「禁欲」さんにあたる事になっている。「あんた、固いことを言わないで、もっと自由に生きなさいよ。」と「愛欲」さんに言われて「だめよ、だめよ。」と抵抗する「禁欲」さんですが、次の瞬間にはキューピットの矢があたって恋する女神に変貌することを暗示しています。ニンフがフローラに変身するのと同じテーマを描いているわけです。そして、中央のヴィーナスがすべてをつかさどっている。彼女は「愛と美」の女神の真打ですからね。

画面左端の男性ですがこれは戦いの神マーキュリーです。かれが、なぜここに描かれているのか、何をしているのか、これは諸説紛々ではっきりした解釈がないそうです。とりあえずここでは無視しておきましょう。

この絵の解釈はたくさんあって、今の説明が絶対のものではありませんが、大筋は同じようなものです。そして、この題名が『春』。

もうひとつの『ヴィーナスの誕生』では貝殻に乗った女神がフルヌードで近づいてくるでしょ。ボッティチエリはルネサンステンコ盛りです。

ルネサンスは「Renaissance」とつづるのですが、ローマ字式に無理やり読むと「レンアイサンセイ」。ルネサンスは「恋愛賛成」の時代を切りひらいたのです。

【参考図書】

『ルネサンスの光と闇』、高階秀彌、中公文庫

第57回 ルネサンス1 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第56回 アメリカの征服とヨーロッパの変容](#)

[次のページへ](#)
[第58回 ルネサンス2](#)

世界史講義録

第58回 ルネサンス（2）

ルネサンスの人と文化（つづき）

レオナルド＝ダ＝ヴィンチ(1452～1519)。

前回も紹介しました、ルネサンスが生んだ最高の芸術家。代表作は『最後の晩餐』、『モナ＝リザ』など。

『最後の晩餐』はミラノにある修道院の食堂に描かれた壁画です。これだね。よく見ると絵の具がボロボロにはげ落ちてかなり痛んでいるのがわかる。ダ＝ヴィンチはとにかくいろいろ新しいことをやってみたい性格で、この壁画を描くときも実験的な新しい方法を使った。これが失敗で、完成直後から絵の具がはげ落ちはじめたらしい。そのあと、いろいろな画家が補修のために絵の具を上塗りしつづけた。たしか数年前に補修作業がはじまって、あとから塗られた絵の具を落とし、ほこりやゴミをとったりして今はこの写真よりかなり鮮明になっています。

この絵はキリスト教を題材にしたもので、どこがルネサンス的かということなんですが、その描き方の切り口にある。

『最後の晩餐』というのは、イエスが逮捕される前の晩、13人の弟子たちと最後の食事をする、その場面を描いたものです。真ん中にすました顔をしているのがイエス。左右に居流れるのが弟子たちです。布教をつづけるイエスはユダヤ教の指導者に恨まれて逃避行をつづけている。捕まえられたら反逆者として処刑されるかもしれないという緊迫した状況です。その中で弟子を集めて会食したイエスは、突然「あした私はつかまる。これがおまえたちとの最後の食事だ。」と言う。弟子たちが「何を弱気な、わたしたちがついている限り、逮捕されることはありません。」と励ますのですが、イエスは「この中の一人があす私を裏切るのだ。」と答える。

意外な言葉に弟子たちに衝撃が走る、その瞬間を映像化したのです。だから、弟子たちの姿勢を見ると、前のめりになったりのけぞったり指さしたり、驚きや動搖をそれぞれ示している。「まさか、そんな。」とか「それはいったい誰だ。」「私は絶対イエス様を裏切れませんよ。」とか口々に叫んでいるんでしょう。

同じ宗教画でも、この絵はイエスの弟子たちを聖人君子ではない普通の人間として心の動きを描いている、ここがそれまでと違うルネサンス的な特徴です。

あと、技術的にもダ＝ヴィンチ独自の工夫がたくさんある。

まず、この壁画は食堂の奥の壁一面にどーんと描かれていて、入り口を入れると本当に今そこで食事をしているような錯覚をあたえるそうです。

奥行きを感じさせる構図は、大胆な遠近法を使っていて壁に掛かるタペストリーの上のライン、壁と天井の境のラインをずっと引っ張っていくと、中央に座るイエスの額に遠近法の焦点がある。

イエスの後ろに窓があって遠くの風景が見えています。遠くの山は水蒸氣で暗く見えるのを発見したダ＝ヴィンチはそれをここで利用している。山は木の色で緑に描くのがそれまでの常識、それを黒っぽく描い

た。そのために絵にさらに奥行きが出ています。

ダ=ヴィンチの人物描写で目を引くのが手の表情ですね。手に関してはいろいろスケッチも残っています。手の描写でダ=ヴィンチは自分の技術を見せつけているようです。

特にイエスの右手、ものにつかもうと前に突き出されています。自分の手、指を伸ばして真正面から見てみてください。スケッチしてごらん。これは、ものすごく難しいでしょ。それをダ=ヴィンチはさりげなく描いている。俺の技を見よ！という感じ。

『モナ=リザ』は誰もが見たことがあると思う。謎の微笑だ、神秘的だと言われていますが、私はこの絵を見るといつも不気味な感じがしていました。とにかく変な感じがするの。この感覚を人は神秘とか謎とか、そういう表現をするんだというのが私の印象。で、この絵を何度も見ているうちに私は気づいた。なぜ、不気味なのか。わかりますか？よく見てください。この女性、眉毛がない。ね、ないでしょ。謎の微笑みの秘密は眉毛にあったのですね。

この絵のモデルについてはいろいろな研究があって、この人らしいという説はありますが確定していません。だからモデルに眉毛があったかどうかもわからない。ダ=ヴィンチという人は有名な割には実は完成した作品が少ない。途中でやめてしまう例が結構あるのね。『モナ=リザ』の眉毛に着目した研究者はやっぱりいて、眉毛が描いていないからこの作品も未完成ではないかという説もあります。

ともかくダ=ヴィンチはその人生や一つ一つの絵について、たくさん研究があるから面白いです。

ミケランジェロ(1475～1564)。

代表作は『最後の審判』、『ダヴィデ像』、『モーセ像』。

この人はダ=ヴィンチに匹敵する力強い作品を残しています。ダ=ヴィンチに対してライバル心もあったようです。彫刻が素晴らしい。『ダヴィデ像』も『モーセ像』も旧約聖書を題材にした彫刻です。特に『ダヴィデ像』は内面の緊張感を表現して傑作といわれている。完全な裸体で、古代ギリシアの彫刻がまさしく復活した感じです。

『最後の審判』はこれ。大作ですね。ヴァチカン宮殿のシスティナ礼拝堂の天井と壁一面に描かれています。聖書の物語が天井の手前から順番に描いてある。一番手前が天地創造、アダムとイヴの物語。そこから話がずっとはじまって、最後が正面の壁。ここが最後の審判の場面。真ん中に光を背景に描かれるのがイエスです。イエスが復活してあらゆる人を天国行きか地獄行きかに振り分けている、そういうシーンです。

ただこの絵は迫力はあるんですが、迫力ありすぎて描かれる人物はみんなすごい筋肉モリモリ。特にみんな異様なほどに腹筋が発達している。絶対にこんな体型の人間はいません。ミケランジェロは彫刻が本領ですから、絵でも立体感をだそうとしてこんなふうになってしまったのかもしれない。

ラファエロ(1483～1520)。

聖母子像をたくさん描いている。これも同じような絵をどこかで見たことがあると思います。聖母子というのはマリアが赤ん坊のイエスを抱いている図です。これも以前からある構図なんですが、ラファエロの描くマリアは当時のイタリア女性そのものなんですね。『モナ=リザ』みたいな不気味さはなくて、みんな可愛いんです。資料集には「母子親愛の人間的理想像」と書いてあって、それはそうなんだろうとは思いますですが、実際には現代のアイドルのポスターかプロマイド的な鑑賞のされ方をしたんではないかと思います。聖母マリアを隣のお姉さんにしたところがルネサンス的。

このラファエロはダ=ヴィンチを非常に尊敬していて、『アテネの学堂』という絵を描いている。ヴァチカン宮殿の壁画です。ここには古代ギリシア・ヘレニズム時代の学者たちが50名以上描かれていますが、その中央に描かれているのがプラトンとアリストテレス。このプラトンの顔がレオナルド=ダ=ヴィンチをモデルに描かれている。この絵の話は以前にしましたね（第12回）。

ブラマンテ(1444～1514)。

イタリア・ルネサンス最高の建築家。サン=ピエトロ大聖堂の設計をした、と覚えてください。サン=ピエトロ大聖堂はローマ教会の一番大事な建築物で、昔からあるのですが、その改築を設計する。ただ、あまりにも大規模な改築だったのでブラマンテの時代には完成せず、のちに設計は次々に変更されていきました。ブラマンテの死後はミケランジェロも設計を担当しています。

マキアヴェリ(1469～1527)。

政治学者。著書『君主論』。近代政治学の祖といわれている。

当時のイタリアの政治状況を少し話しておきます。イタリアは全土を統一する政治勢力がなく、ドイツ皇帝やフランス王がイタリアの支配権をめぐって争っていた。しかもイタリアの各都市やローマ教会がそれぞれ外国勢力と結びついて勢力争いを繰り返してた。さらに各都市国家内でも政治的な争いが激しかった。簡単に言ったら戦国時代です。

イタリアに統一国家を作り上げなければいけない、というのがマキアヴェリの発想です。そうしなければ混乱がつづき、外国に好きなように食い物にされる。では、どうしたら統一国家を作ることができるのか。

こう考えた末にかれは、狐の賢さとライオンの強さを兼ね備えた権謀術数の君主の登場に期待したんです。『君主論』はそういう君主の心構えを説いた本です。現実の政治はマキアヴェリの期待したような君主によるイタリア統一はできませんでしたが。

マキアヴェリ自身はフィレンツェの外交官として活躍していたのですが、政争に敗れて亡命生活をした経験もある。ただの評論家ではなく、実践に基づいた本です。

ルネサンス期の人と文化（イタリア以外）

イタリア以外の人物はその出身地も一緒に覚えてください。まずは、学者文人から。

エラスムス(1469～1536)。

著書『愚神礼賛』。ネーデルラント出身。現在のオランダ、ベルギー地方です。この人はヨーロッパ最大の人文主義者と呼ばれる。飛び抜けた学識で当時のヨーロッパでは最高の権威をもっていた。

著書の『愚神礼賛』は、愚かの女神が人間について批評するという形式の風刺小説です。教会や王侯貴族の不道徳なおこないを批判した。こんな感じです。

「人は皆、えらそうなこと、もっともらしいことをいっているが、本当のところは本能的な欲望に支配されているに過ぎない。性欲にのぼせてしまうからこそ、結婚という愚劣で辛いことをやってしまう。女だって子を生むという苦難のもとを作り出す行為に夢中になるのも、私達愚神のせいだ。うそ、おせじ、おろかしさ、虚栄、そういういたものおかげで、世の中はうまくいっている。どんな偉い人、たとえば法

王様だって、実は私が支配している。」

しかし、エラスムスの本領は聖書研究です。かれも古代ギリシアの学問研究をするのですが、具体的には聖書の研究をするのです。ローマ教会で使っている聖書はラテン語訳の聖書です。でも新約聖書はもともとギリシア語で書かれているわけ。で、エラスムスは古代ギリシア語のテキスト、さらにはヘブライ語、これはユダヤ人の言葉で旧約聖書はもともとヘブライ語ですね、まで研究してローマ教会の聖書の誤訳を次々に見つけていく。

エラスムスはローマ教会の腐敗には批判的ですが、教会そのものを否定するつもりはないし、かれの研究は確かなものだから教会も頭が上がらない。ローマ教会も一目置く学者になっていくわけです。

チョーサー(1340頃～1400)。

イギリスの作家。作品『カンタベリ物語』。ボッカチオの『デカメロン』のアイデアをそのままにイギリスに移し替えたものです。それだけ。

トマス＝モア(1478～1535)。

イギリス。著書『ユートピア』。ヘンリー8世という王様に仕えて大法官という秘書長官になっていた聖職者です。王の離婚に反対して処刑されたことでも有名。『ユートピア』は理想郷を描いて社会批判をした本です。

シェークスピア(1564～1616)。

イギリス。代表作『ヴェニスの商人』、『ハムレット』、『ロミオとジュリエット』も有名ですね。劇作家です。現代でも上演されたり、映画化されたり、不滅の作品をたくさん残しています。最近シェークスピア自身を主人公にした映画も作られていましたね。『恋に落ちたシェークスピア』というの。面白かったですよ。

人間の性格や心理を見事に描きわけたことがルネサンス的なんですね。

たとえばみんなも知っている『ロミオとジュリエット』。ロミオがジュリエットに一目惚れして、ジュリエットもロミオを好きになる。だけど二人の家は長年の仇同士。二人の恋愛はけっして親に認められないのね。それで、二人は悩むわけです。ここのところが重要で、「私たちは結婚したいけど、家はそれを許してくれない」という悩み方はルネサンス以前にはなかった。恋愛と結婚は別物だったのです。誰を好きになるとそれはそれとして、親が決めた相手と結婚するのが上流階級の常識。自分の感情なんかは二の次で、そんな個人的なことはあきらめるのが当たり前だったんです。好きな相手がいるなら結婚するんではなく愛人にすればよい。

ところが、この二人は自分の感情と家の方針との板挟みで悩む。結局解決できずに二人とも死んでしまうという結末になるんですが、「家の束縛」と「個人の想い」が同等になっているところが、非常にルネサンス的だと思います。

ルネサンス以前なら、二人は恋愛しても悩むことなく家が決めた別の相手と結婚するだろうし、これがもし現代なら、二人は親なんか無視してさっさと同棲してしまって物語にはならないね。

『ハムレット』もそうですが、自分の置かれた立場と心の奥底からわき上がる感情との葛藤というのがシェークスピアの劇の真髓だと思います。

セルバンテス(1547～1616)。

スペインの作家。著作『ドン＝キホーテ』。

セルバンテスはスペインの軍人でした。1571年、スペインとオスマン帝国とが地中海の霸権をめぐって海戦をする。レバントの海戦といいますが、セルバンテスはこの戦いに従軍して負傷した。左手をなくしてしまうのです。

帰国したセルバンテスは国王に年金を請求するのですが、何回も請求してようやく雀の涙のようなわずかな額しかもらえなかった。自分は国王のために戦ってこんな身体になったのに！、とセルバンテスは怒り爆発。といっても、何もできないので田舎にこもって小説を書いた。これが『ドン＝キホーテ』です。初老の田舎紳士が少し気が触れて、自分を中世の騎士だと思いこむ。お供をつれて旅にする。本人は愛しい姫を守るために遍歴の旅をしているつもりなんですが、そんな時代ではないし、かれの言動はおかしいからみんなから笑われるわけ。

中世の古くさい騎士道を笑いながら、その実、当時のスペインの社会を批判しているという内容です。

ラブレー(1494頃～1553)

フランス。著作『ガルガンチュアとパンタグリュエルの物語』、普通は『ガルガンチュア物語』で通じます。ガルガンチュアという巨人が主人公。かれの行動を通じて人間の尊厳と社会批判をおこなった。私は読んだことはないので、孫引きですが、第一之書「テレームの僧院」に「一同の遵守すべき法則とは、ただ次の項目だけだった。欲するところを行え」なんていう一節があるそうです。こういうところがルネサンス的なんでしょう。

モンテニュ(1533～92)

フランス。著作『隨想録』。

「世間のひとびとはつねに正面を見るが、私は内部に曲げる。私は自分だけが相手である。私はたえず自分を考察し、検査し、吟味する。」こんな感じで、自分を見つめたエッセイを書いた。

次は絵画。

ファン＝アイク兄弟(兄1366頃～1426、弟1380頃～1441)。

ネーデルラント。油絵画法を完成させた。まあ、実際には油絵ではじめて傑作を描いた画家ということです。

ブリューゲル(1528～69)。

ネーデルラントの画家。農民の暮らしを題材に絵を描いているので有名です。村祭りとか、結婚式とか、当時の農民の暮らしぶりがわかって面白い。この祭りの絵は、向こうで踊りが始まっている。こっちから若い夫婦が手をつなぎながら走って祭りの広場にやってきたところ。夫の帽子を見てください。これ、帽子に挿しているのは何かわかりますか。スプーンだ。もう、農民もスプーンを使っているんだなどか、それでも、スプーンのような食器は出かけるときも自分のものを持っていったんだなどか、そんなことがわかるわけ。

子供たちがたくさん遊んでいる絵もあって、10年くらい前にはやった「ウォーリーを探せ」みたいですね。たくさんの子供たちがみんな別々の遊びをしていて、当時のネーデルラントの遊びの一覧です。

デューラー(1471～1528)。

ドイツの画家。画家としてより版画家として覚えたほうがよい。版画を芸術として完成させた人。版画ではありませんが『四使徒像』という絵が有名。

ホルバイン(1497～1543)。

これもドイツの画家。ドイツ人ですが活躍したのはイギリスで、トマス＝モアや国王ヘンリー8世の肖像画を描いています。肖像画のホルバインと覚えておけばよい。

エル＝グレコ(1541～1614)。

スペインの画家。ふつうはルネサンスの次に来るバロック藝術に分類されることが多いのですが、教科書にしたがってここであげておきました。宗教画で有名。

自然科学です。ルネサンス期は、特に天文学が有名。

コペルニクス(1473～1543)。

天文学者。ポーランド人。地動説を唱えたことであまりにも有名。

地動説というのはわかりますね。太陽のまわりを地球がまわっているという考え方。それまでのヨーロッパでは地球が宇宙の中心で太陽などの星ぼしは、地球のまわりをまわるという天動説が信じられていて、キリスト教会もこの説を支持していました。

コペルニクスは若い頃にイタリアに留学したことがあって、その時にアリストタルコスの地動説を知ったようです。アリストタルコスはヘレニズム時代の学者でしたね。

その後ポーランドに帰って、天体観測をしているうちに天動説よりも地動説の方が合理的に天体の運行を説明できると考えた。天動説はアリストテレスが考へてヘレニズム時代のプトレマイオスという学者が発展させた理論が当時信じられていた。実は理論的にはプトレマイオスの天動説でも、天体の運行は説明できるのです。ただ、無茶苦茶にややこしい理論になる。特に火星や金星という惑星の運動は地球の周りをまわる円周上でさらに回転する円運動みたいのなものを考へないと説明できなかつた。ところが、コペルニクスが太陽を中心に同心円上に惑星を並べてみたら実にすっきりと説明できるんですね。コペルニクスによって古代のアリストタルコスの地動説が復活したのです。

ただ、コペルニクスは自分の地動説がローマ教会の教えと違うことはわかっていたし、地動説を発表してややこしい論争に巻き込まれるのを怖れて、親しい友人に自分の論文を読ませるだけだったのですが、皆に勧められて出版を決意します。ただし、晩年。自分の説をまとめた本ができあがつたのは死ぬその日だったと伝えられている。

まだ、個人が教会の権威に反対するというのは大変な時代だったのです。

コペルニクスの地動説が公にされると、大きな論争を引き起こすのですが、さつきも言ったように、プトレマイオスの天動説でも理論的には天体の運行を説明できるので、コペルニクスの地動説は「理論的な可能性」という受け止められかたをしていました。コペルニクス自身も、自分の本には天体の運行を説明する数学的な可能性を述べただけだ、と書いて逃げを打っている。

ところが観測が進んでくるうちにプトレマイオスの天動説に対して疑問が出されるようになってくる。

トレマイオスの考えた宇宙は、球形の透明な膜が地球を覆っている。その膜に月や恒星が貼り付いている、というものです。違う動きをする惑星などは別の膜に貼り付いているわけです。宇宙はまん丸いカプセルです。すべての天体现象はこのカプセルのなかで起こると考えられていた。

コペルニクスの死後デンマークで生まれた天文学者にチコ=ブラーイ(1546~1601)という人がいる。この人は当時最高の天体観測者で超新星を発見(1572)したり、1577年に現れた彗星の観測をして、どうもこれらは恒星が貼り付いているはずの膜の外側で起きている現象ではないかと考えた。この人は地動説は採用しませんが、トレマイオスの宇宙論も放棄します。

イタリア人、ジョルダーノ=ブルーノ(1548~1600)は、彗星を見て、「宇宙は無限だ」と公言した初めての人。当然コペルニクスの地動説に賛成します。異端としてローマ教会に捕らえられて8年間牢屋に放り込まれたあと処刑されてしまった。火あぶりの刑です。「宇宙は無限だ」といい張ったのが死刑の原因でした。

処刑される直前に「裁かれている私よりも、裁いているあなたの方が、真理の前におののいているではないか?」と言った。あまり有名な人ではありませんが、この一言で隠れファンが多いみたいです。

ケプラー(1571~1630)。

ドイツの天文学者。惑星運行の法則を発見した。

先ほど話したチコ=ブラーイの弟子です。チコ=ブラーイは死ぬときに大量の観測データをケプラーに託した。ケプラーは目が悪かったので自分では天体観測をしませんが、数学の才能抜群だったのでデータをいろいろ計算した。

コペルニクスの地動説でも、トレマイオスの天動説でも理論的にうまく説明できない問題があった。それが、火星の動き方です。どちらの説でも計算値と実際の動きとがあわないので、ケプラーは観測データを計算して、火星の軌道が橢円であることを発見した。そして太陽は橢円の焦点からすこしずれたところにある。こう考えて計算するとコペルニクスの地動説でピタリと説明できたのです。

コペルニクスの地動説を理論上実証したわけです。

ガリレオ=ガリレイ(1564~1642)

イタリアの科学者。振り子の等時制の実験や落体の法則発見でも有名。それまで信じられていたアリストテレスの説、重たいものは速く落ち、軽いものはゆっくり落ちるという説なんですが、この間違いを実証した。ピサの斜塔から重さの違うおもりを落として落下時間を測ったという実験は聞いたことがあるかもしれない。この実験そのものは作り話らしいですが。

物理学方面で実績をあげていたんですが、1608年オランダで望遠鏡が発明されたことを聞いたガリレオは自分でも作ってみた。出来上がったのは倍率三十倍の望遠鏡です。ガリレオは初めて望遠鏡を使った天文学者となります。かれ以前の天文学者は肉眼だけで夜空を観察していたというのはちょっと常識を揺さぶられませんか。

さて、天体観測をしたガリレオ、なんと木星の衛星、土星の輪、金星の満ち欠け、太陽の黒点を次々に発見した。これを発表してかれは一躍ヨーロッパ注目の学者になりました。ガリレオはケプラーと文通していました。もともと地動説に関心があったのですがこれで地動説を確信した。

ローマ教会は地動説の放棄を命じていたのですが、ガリレオの若いときからの友人がたまたまローマ教皇(ウルバヌス8世)になった。チャンスと思ったんでしょう。1632年『天文対話』という本を出して地

動説を全面展開した。ところが、友人でもローマ教皇となれば立場がある。ガリレオは宗教裁判にかけられて地動説の放棄を迫られます。放棄しなかったらジョルダーノ＝ブルーノみたいに火あぶりです。結局ガリレオは地動説を放棄するという書類にサインをした。サインをしながら「それでも地球はまわっている。」とつぶやいていたという。

コペルニクスの地動説発表から約 100 年経ってからの出来事です。

ローマ教会が正式にガリレオの名誉を回復したのは 1976 年でした。

ルネサンス三大発明

ルネサンス三大発明と呼ばれるこの時期の技術を紹介します。発明といっても実は中国、朝鮮で先に発明されているのですけどね。

なんと言っても一番大事なのが活版印刷術。金属活字はこれより前に高麗で発明されているのですが。ヨーロッパではドイツ人のグーテンベルグが実用化したという。

それまでに製紙法もヨーロッパに伝わっていたので、大量印刷が可能になりました。活版印刷がおこなわれるまでヨーロッパで本というのは羊皮紙に手書きで書いたものしかなかった。自分の本が欲しかったら書き写すしかない。だいたい本がたくさんあるのは修道院や大学ですが、本は貴重品なので鎖を通して柱にくくりつけ持ち出せないようにしてあったそうです。

活版印刷によって事情がまったく変わって、ルネサンス期の学者文人たちの作品は大量出版によってヨーロッパ中に広まることになり、学生でも手軽に本が手にはいるようになった。

この絵はエラスムスがイタリア旅行中に印刷業者のところで自分の本の校正をしているところです。人気の学者だから本もたくさん出版される。本人は印刷業者の所にいる時間が長いとぼやいています。

次が羅針盤。コンパス、方位磁石ですね。中国で発明されたものがヨーロッパに伝えられ改良されたものです。これを使って多くの船乗りが海へ出かけた。大航海時代は羅針盤なくては考えられない。

もう一つが火砲。要するに鉄砲、大砲のたぐい。もともと火薬も中国生まれです。元寇のモンゴル軍が九州に上陸して「てっぽう」という武器を使っています。これは大きな音を出して馬をひっくり返らせるもので殺傷力はあまりなかつたらしいですがね。今でも中国で火薬といえば、爆竹。お祭りや正月にパンパン派手にならしている。ヨーロッパ人はこれを改良して殺傷能力の高い武器を作り替えた。ルネサンス的一面です。

第 58 回 ルネサンス 2 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第 57 回 ルネサンス 1](#)

[次のページへ](#)
[第 59 回 宗教改革（1）](#)

世界史講義録

第 59 回 宗教改革（1）

ルターの宗教改革

ルネサンスと同時期に起きた思想上の大きな事件が宗教改革です。これはやがてヨーロッパ政治の枠組みも大きく変えていきます。

宗教改革を始めた人物がドイツ人のルター（1483～1546）です。ルターはドイツ中東部のヴィッテンベルグ大学で神学の教授をしていた人です。

この段階で西ヨーロッパの宗教はローマ＝カトリックだけです。ルターは大学時代に宗教に目覚めて修道士になる。そのまま、神学の勉強をつづけて大学で教授になっていましたが、ローマ教会の方針に対して疑問を抱くことが多かった。

特にルターが問題にしていたのが免罪符の問題です。

ルター 免罪符は贖宥状ともいうのですが字も難しいから免罪符で覚えたらいよです。これは何かというと簡単な言葉で「お守り」。わたしたちがお寺や神社で「おふだ」をもらう、あれと同じです。

当時ローマ教皇はレオ10世。フィレンツェのメディチ家出身です。前に詩を紹介したロレンツォ＝デ＝メディチの次男。ルネサンス文化の理解者にして保護者です。ローマ教皇は選挙で選ばれる。フィレンツェの実力者の家柄で政治力も資金も豊富にありますから、そんな背景をバックにして教皇になったんでしょう。ちょうどこのとき、ローマ教会はサン＝ピエトロ大聖堂の改築工事をおこなっていた。この改築工事が大がかりで、しかもレオ10世は芸術に造詣が深いから、装飾にもこる。ラファエロがこのとき改築を担当したりもするんです。

改築には資金が必要になる。莫大な改築費用を捻出するためにはじめたのが免罪符の販売です。お守りを売って儲けようというわけ。日本人はお守りに別に疑問を感じない。普通にやっているからね。ところが、キリスト教の思想から考えるとおかしいんですね。神に深く帰依し信仰心を厚くもち善いおこないを積んで救われるというのならわかるが、お金でお守りを買えば救われるということは、「お金＝救いの条件」ということになってしまう。イエスは「金持ちが天国にいくのは、ラクダが針の穴を通るより難しい」といっている。これと考え合わせるとおかしいわけです。

ローマ教会は免罪符販売部隊を作って、これをドイツに送ります。なぜ、ドイツかというと、当時のドイツは皇帝がいるものの内部は諸侯の対立が激しくて分裂状態に近かった。ローマ教会にとってはそのほうが免罪符の販売がしやすかったのです。

どういうことかというと、国王・領主などの支配者にとってみると、自分の領地で免罪符を販売されたら困ります。領民が免罪符を買う、払った代金はローマに持っていくからサン＝ピエトロ大聖堂の建築費に充てられる。自分の領地からお金がローマに移動するわけだ。今風にいえば完全に貿易赤字です。

だから、フランスなどは自分の国内に免罪符販売部隊を入れない。販売を許さない。その点、ドイツは国内がバラバラだから入り込むことが簡単だったんです。当時のドイツは「ローマの乳牛」と呼ばれるくらいにローマ教会の資金供給源になっていたのです。

この絵は免罪符の販売の様子を描いた絵です。絵の中央にはローマ教皇が描かれていますが、これは想像。実際に販売に立ち会っているわけではありません。

販売部隊がやってきて、村々に免罪符の販売を触れまわります。やってきたおじいさんが係りのお坊さんに何か言っている。どんな罪を犯したかとか、誰を救いたいのかとか申告する。それを聞いて担当者がおふだを作ってくれる。真ん中にある箱には代金を入れる。金貨を入れるとチャリーンと音がする。こう言って売っていた。

「おかねが箱の中でチャリンと鳴るやいなや、靈魂は煉獄から飛んで出る。」

ルターはこういうことに疑問を感じて、1517年、「95カ条の論題」というローマ教会に対する質問状をヴィッテンベルグ城教会の扉に貼りつけた。95の問題点を指摘しているのですが、主な主張は次の3つ。

- 1, ローマ教会による免罪符販売を批判。お金を払えば救われるという免罪符の考え方を批判した。
- 2, では、人は何によって救われるのか。ルターは言う。「人は信仰によってのみ義とされる」。これを「信仰義認説」と言います。ローマ教会によってではなく、信仰によって救われるのです。信者が救われるようローマ教皇が神さまに「とりなし」をする必要はないことになる。
- 3, では、どのように信仰すればよいのか。それまでは、ローマ教会の教えるままにしていることが信仰でした。ローマ教皇がお金をだして免罪符を買えば救われる、と教えるならばその通りにすればよかったです。

しかし、ルターはそうではないと言う。聖書に書いてあるとおりにすることが信仰だ、と主張した。これを「聖書第一主義」という。この段階でルターはローマ教会を否定していません。ローマ教会の教えでもおかしいと思う点があるなら、聖書と照らし合わせて考えよう、聖書に反しているならローマ教皇の教えでも間違っているんだ、ということです。

以上3点がルターの主張の要点。これが発表されると、すぐにヨーロッパを二分する大論争に発展しました。当時発明されたばかりの印刷術を使ってルターの「95カ条の論題」はたくさんのパンフレットに印刷されてヨーロッパ中に出回ったのです。

ローマ教会としては公然と批判するルターを放って置くわけにはいかないので、ルターと公開討論をしたり、批判をしてかれに自説を撤回させようとします。ところがルターは頑固なところがあって、論争を通じてどんどんローマ教会に対する批判が過激化するんだ。

1520年、ついにルターはローマ教会と教皇の権威を公然と否定しました。

これに対してローマ教皇はルターに破門状を送った。破門は前にも説明しましたね。破門されると、教皇は神さまに「とりなし」をしてくれないので天国へいけないはずなんですね。ところが、ルターはそんなことは聖書のどこにも書いていない、教皇の「とりなし」なんて不要だ、と叫ぶ。学生を集めてみんなの前で教皇の破門状を破いて燃やしてしまった。学生たちも大いに盛り上がって、ローマ教会の出版物をどんどん炎の中に放り込んで気勢をあげた。両者の亀裂は決定的です。

この時期にドイツに出向いたローマの使節が教皇に状況報告しているのですが、こう伝えた。「ドイツ人の9割が『ルター』と、残りの1割が『教皇を死刑にしろ』と叫んでいます。」ドイツの圧倒的多数がルターを応援しているわけだ。これは、かれの考えに賛成していたというよりも、ドイツを食い物にしているローマに対する怒りと考えたほうがよいようですが。

ローマ教会としてはこのままルターを放置できません。政治的な圧力で屈服させようとした。当時のドイツ皇帝、正式名称は神聖ローマ皇帝、はカール5世という人。この人の名前はしっかり覚えること。ハプスブルグ家出身。相続関係でスペイン王を継承して、さらに神聖ローマ皇帝選挙に立候補して即位したばかりです。まだ二十歳の若さ。

ドイツ皇帝は名目上イタリアの支配者でもありますから、ローマ教皇との関係は重要で、即位したばかりのカール5世はローマ教会と協力関係にあった。だから、カール5世は政治的にルターを何とか改心させようと考えました。

ドイツ人の圧倒的多数がルターを応援しているのに、ローマ教会の肩を持つのは政治的には不利な行動でしょう。自分の立場を悪くするだけ。なのにカール5世がローマ教会側に立って行動したのには経済的事情があった。

当時南ドイツのアウグスブルグという町にフッガーハウスという大富豪がいました。銅山の採掘販売などでヨーロッパをまたにかけて商売をしていた。カール5世が神聖ローマ皇帝選挙に出馬したとき、選挙資金をこのフッガーハウスに借りていたのです。いつの時代にも選挙には金がかかるんですね。選挙資金85万グルденのうち54万グルденをフッガーハウスから借りていた。だから、当選後もカール5世はフッガーハウスには頭が上がらない。

このフッガーハウスはローマ教会の有力者にも金を貸している。ローマ教会の取引銀行でもあった。ローマ教会が免罪符を販売するときに、その売上代金のローマへの送金を引き受けているのがフッガーハウス。しかも、免罪符の売上代金の一部は教会からフッガーハウスへの借金返済にも充てられていた。
教皇も皇帝もフッガーハウスのお金でつながっていたんですね。

それはそれとして。

1521年、カール5世は国会を開いてルターを召喚した。証人喚問みたいなものです。この国会を「ウォルムスの帝国議会」といいます。ウォルムスは議会が開かれた町の名前。

ここに呼び出されたルターは皇帝から自説の撤回を迫られる。ルターも緊張する。「95カ条の論題」を出したときはこんなことになるとは夢にも思わなかったに違いない。ローマ教会から破門され、今度は皇帝から圧力をかけられる。ビビッドに違いない。しかし、自分が到達した信仰上の立場を捨てることもできない。追いつめられたルターの心情です。「私はここに立つ。これ以外にどうすることもできない。神よ救いたまえ、アーメン」

結局ルターは説を曲げなかつたので、皇帝はかれを法の保護の外に置くことにした。「いっさいの権利を奪われる刑」です。これは誰かがルターの肉体を傷つけたり殺したりしても罪に問われないということです。ローマ教会を敵にまわしたルターに恨みを持っている者は必ずいるからね。かなり危険な状態です。

ルターには学生たちがボディガードとしてついているのですが、帝国議会が終わってヴィッテンベルグに帰る途中、ルターはさっそく襲われた。森の中で覆面をつけた騎士が数騎ルター一行を襲って、ルターはかれらにさらわれてしまったのです。

ルターをさらったのはザクセン侯フリードリヒという諸侯でした。実はかれはルターを支持しているのです。そこでルターを守りたいと思ったのですが法の保護の外にあると皇帝に宣告されたルターを堂々と守ることもできないので、誘拐という手段をとったのでした。このあとのルターはザクセン侯の城にかくまわれて、世間から姿を隠して聖書のドイツ語訳をする。

聖書第一主義とか言いながら、この時代までドイツ語の聖書はなかった。みんなラテン語。ドイツ語で読むことができなければ、ドイツ人はどういう信仰をもつたらよいかわからないでしょ。そのためにはドイツ語訳聖書が是非とも必要だったのです。

このときのルターの翻訳は名訳で、現在のドイツ標準語の規準となったということです。

ところで、宗教改革と活版印刷の関係を少し話しておきます。ルターの宗教改革がヨーロッパ中の話題となったのには急速に普及し始めた印刷物の活用抜きには語れません。

ルター自身が大量にパンフレットを発行します。1519年ドイツ全国の出版物が約110冊、そのうち約50冊がルターの書いたものです。翌1520年、ドイツ出版総数200冊。そのうちルターが133冊。すごいですね。

また、宗教論争が激しい中で両派が少しでも味方を増やそうとパンフレットやチラシのたぐいを大量に印刷配布します。

プリントにあるのが「神の水車」というチラシです。ほとんどの農民は字が読めませんから、そういう人でもわかるようにマンガになっている。これは、収穫した麦から小麦粉を作る過程です。中央後ろで棒（からさお）を振り回しているのが農民。これは脱穀をしているところ。

脱穀した小麦をかついで水車小屋のホッパーに入れているのがイエスです。後光がさしているでしょ。

ヨーロッパでは水車小屋で小麦を引いて粉にするのが普通です。水車小屋の上に浮かんでいるのが神様です。神が水を流して水車小屋の水車が回っているのです。だから、神の水車。神が流す水で回転する水車に、イエスが小麦を入れている。

小麦が挽かれて出てきた粉をショベルでくっているのがエラスムスです。前にも出てきたルネサンス最大の人文主義者。ローマ教会も一目置く大学者です。エラスムスは最終的にはルターと喧嘩をするのですが、はじめの頃はそれなりに親密でした。

そしてエラスムスの集めた小麦粉をこねるのがルター。エラスムスと背中合わせで袖まくりをしているの人物です。要するにこの絵一枚で、農民もイエスも神もエラスムスもルターの味方だよ、と訴えているのですね。ルターが練り上げた小麦粉が何になるかというとパンになるわけですが、絵ではパンが聖書の形に描かれます。ルターの左側にいる人が出来上がった聖書を右側の人たちに差し出していますが、この人たちがローマ教皇などローマ教会の主だった人たちです。かれらは聖書を受け取るのを拒否していて、聖書はパラバラと地面に落ちていきます。

全体として何を訴えているのかは明らかですね。

ドイツの混乱

このあとルターはローマ教会とは完全に別の宗派を建てる事になる。ルター派教会という。日本では現在ルーテル教会という名前で活動をしています。昔「ルーテル・アワー」というラジオ番組を聞いたことがあります。今も放送しているかもしれない。

当然ですが、ローマに反感を持っていたドイツ人はルター派の信者になっていく。しかし、ローマ教会の信者のままの人もいるわけ。皇帝はローマ教会だし、諸侯の中にもローマ教会側の者はいる。それどころか大諸侯の中には司教というローマ教会の聖職者である者もいるわけです。

ルターの教えというのはローマ教会を批判しこれと違う教会をつくるところまで進むわけですね。これは、ある意味では社会改革です。ルターを支持したものたちの中にはルターの教えの中身よりも、社会改革を押し進めることに魅力を感じていた者もたくさんいたのです。現状に不満を感じている人たちです。当時のドイツで現状に不満を感じていた階級や身分の人たちがルターの教えをきっかけにして政治的な運動を活発に始めるようになった。そのためドイツは政治的に混乱状態になります。

まず、騎士戦争(1522～23)。騎士というのは領主階級の中でも一番規模の小さいものでしたね。かれらは、都市と商業の発展の中で没落しかけていた。かつての地位を取り戻そうと団結して、ローマ教会側の諸侯の領地を奪い取るための戦争をした。かれらは弱いので負けてしまいますが。この騎士たちは熱烈にルターを支持していた。だからローマ教会側の諸侯を攻める大義名分も持つことができたわけですね。どの宗派を支持するかはかなり政治的な判断もあっただろうということが想像できる。

つづいて、ドイツ農民戦争(1524～25)と呼ばれる大農民反乱がおこります。ルターの宗教改革以前から大きな農民反乱はぼちぼちおきていたのですが、これもルターの教えをバネにして「戦争」と呼ばれるくらいの大規模な反乱になります。

指導者がミュンツァーという僧侶。この名前は覚えること。ミュンツァーはルターの教えをさらに急進的にして、農民を組織した。かれらは聖書の言葉しか権威を認めない。領主の支配に対して抵抗しました。農奴制の廃止を訴えた農民グループもいました。

しかし、反乱を起こした農民グループ同士の団結がなかったので、領主側に鎮圧されました。

ルター自身は、農民戦争がはじまった頃は農民を応援しているのですが、かれらの要求が急進的なことを知ると積極的に農民の弾圧を応援します。奴らを木に吊るせ！なんて過激なことを言うようになる。

ルターが政治的には諸侯、封建領主の側に立つことがはっきりします。

やがてドイツの諸侯もローマ教会支持の諸侯と、ルター派の諸侯に分かれてきます。

何度も言いますが、ドイツは事実上分裂状態で諸侯たちは隙があれば隣の諸侯の領地を奪おうとしている。大義名分があれば奪いたい。宗教対立は大義名分としては申し分ないわけです。皇帝カール5世は1526年、ルター派を禁止しますから、ローマ教会側に残った諸侯は堂々とルター派諸侯の領地に攻め込むことができる。ルター派諸侯ももうローマ教会の破門なんか怖くありませんから、逆にローマ教会側諸侯を攻めても宗教上の恐怖はない。

こういうわけでドイツ中騒然となる。皇帝はルター派諸侯をつぶすだけの圧倒的な実力はない。かといってローマ教会との関係は大事なのでルター派を認めるわけにもいかない、という状況です。

ところが、ローマ教会のご機嫌をとっているわけにもいかない事件がおきた。

ビザンツ帝国を滅ぼしたオスマン帝国が神聖ローマ帝国に攻め込みウィーンを包囲したのです。これを第一次ウィーン包囲という(1529)。ウィーンはドイツ皇帝ハプスブルグ家の本拠地です。

オスマン帝国はイスラム教ですからね。ドイツの諸侯同士がルター派だ、ローマ教会だと争っていても、しょせんどちらもキリスト教なわけで、イスラムによってドイツが占領されたら元も子もない。ドイツ人が団結しなければオスマン帝国にウィーンが攻め落とされてしまう。そこで、カール5世はルター派諸侯の救援をえるためにルター派の信仰を認めたのです。

このあと、オスマン帝国はウィーンを攻めきれずに撤退するのですが、「喉もと過ぎれば熱さ忘れる」で、カール5世は再びルター派を禁止してしまった。

これに対してルター派諸侯が抗議した。かれらは抗議する人という意味で「プロテスタント」と呼ばれました。この呼び方が定着して、現在ではルター以後の新しい宗派を一括してプロテスタントといいます。日本語訳は「新教」。これに対してローマ教会は、カトリックとか「旧教」と呼びます。これは、常識として覚えておくこと。

このあとルター派諸侯はシュマルカルデン同盟という組織をつくって皇帝に対して反乱をします。1546年から47年までのシュマルカルデン戦争です。戦争は一応皇帝の勝利に終わりますが、ごたごたがつづいてカール5世は退位。

その後即位したカール5世の弟は、1555年にルター派の諸侯と都市に信仰の自由を認めます。これを「アウグスブルグの宗教和議」という。これで、とりあえずドイツ国内の宗教対立は落ち着きました。ただし、このアウグスブルグの宗教和議で認められた信仰の自由は個人の信仰の自由ではありません。諸侯と都市の信仰の自由ですから間違えないように。ある諸侯がルター派を選択したらその領地の住民はみんなルター派を信仰しなければいけないので。ローマ教会がいいと思う市民も、住んでいる都市がルター派教会を選択したらローマ教会を信じてはいけない。そういう中身です。

だから、このあと60年後に再び宗教問題でドイツには大きな戦争が起こります。

第59回 宗教改革1 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第58回 ルネサンス2](#)

[次のページへ](#)
[第60回 宗教改革2](#)

世界史講義録

第60回 宗教改革（2）

カルヴァンの宗教改革

ルターに影響されて各地で宗教改革者があらわれるのですが、そのなかで重要なのがカルヴァン(1509~64)です。フランス生まれですが、宗教改革者としての活動が受け入れられず亡命します。当時スイスではルターの影響で宗教改革に熱心な都市がいくつかあって、カルヴァンはジュネーブに招かれて宗教改革をおこないました。

やがては事実上のジュネーブの支配者として神権政治を実施した。カルヴァンは滅茶苦茶に厳格な人ですから、飲酒・賭博など聖書の教えに背く不道徳なことは絶対許さない。酒場は皆店を閉じて、町は火の消えたようになった。カルヴァンの命令に逆らったら死刑にされることさえあるので、ある意味では恐怖政治みたいなピリピリした状態だったようです。

このカルヴァンの教えには画期的なところがあって、やがてかれの説はルター派よりも広くヨーロッパ各地に広まっていきます。

カルヴァン カルヴァンの主著は『キリスト教綱要』(1536)。

ここで説かれているかれの教えで絶対に覚えなければいけないのが「予定説」というものです。

予定の「予」は「あらかじめ」、「定」は「決定している」という意味。なにがあらかじめ決定しているのかというと、われわれ一人ひとりが天国にいけるかどうかが、あらかじめ決定してる、という意味です。

普通、救われるかどうかは信仰の深さ、日々の行い、そういったもので決まると考えられています。教会の教えにしたがい、信仰を守っていれば神様はきっと救ってくださる、というわけです。

ところが、カルヴァンは、そんなことはない！と言いかける。カルヴァンによれば神というのはものすごく超越的なもので、神がどういうふうに考えて、世界をどう動かすかなどということは、人間ごときが想像してわかるものではない。一所懸命信仰すれば救われるなどというのは人間の勝手な思い込みで、神は自分の偉大さを示すために人間の努力などの及ばないところで誰を救うかをあらかじめ決めているのだ、というのです。

あらかじめというのは、その人が生まれる前から決まっているということです。だから、神様に選ばれている人は、悪いことをさんざんしても、極端に言えば神を信じなくても救われる。選ばれていない人は、いくら教会に熱心に通い、祈り、善行を積んでも救われない、という理屈になる。人間には、神が何を規準に救う人救わない人を分けるのかはわからない。わからないことこそが神の偉大さなのです。

これは、恐ろしい考え方で、予定説が正しいとすれば、信仰しても信仰しなくても結果は同じ。だったら教会も神様も全部無視して好き勝手に生きればいいという考えになりそうでしょ。

カルヴァンは言うわけですよ。信者に向かって、「あなたが救われるかどうかは誰にもわからない。」「一所懸命神に祈っても無駄である」。こういう言葉でしゃべったかどうかはわかりませんが、内容はそういうことです。

でも、カルヴァンの教えが広く受け入れられた核心部分がこの予定説なのです。なぜでしょうか。多分こういうことだったのではないか。

カルヴァンに誰が救われるかはわからないと言わされたときに、ほとんどの人は自分が救われない人とは思わない。「自分は神に選ばれているに違いない」、もっと露骨に言えば「他の全部が地獄に墮ちても私だけは神に選ばれているはずだ」と考えたのです。自分だけは大丈夫というやつです。

そう考えると、次には「神様、私を選んでくれてありがとう」と思う。自分を選んでくれた神様におのずから感謝を捧げる気持ちになる。熱心に信仰するようになる、というわけです。一見厳しい教義ですが、はまった人にとってはエリート意識をくすぐられるのではないかと想像します。

ただ、信者は自分が選ばれている人間だと思うものの、何の証拠もない。少しでも自分が選ばれた人間である手がかりが欲しいと思うものです。

そこで、カルヴァンは神は偉大すぎて誰が救われるか我々にはわからない、としながらもこんなことを言う。神に選ばれて救われる人が誰かを知る方法はない。ただ、神から選ばれた人は運がよい。だから、選ばれたものは現世で成功する確率も高いのではないか、と。職業というのは神からあたえられた使命だから、おののが自分の職業でがんばって成功するならば、その人は神から選ばれた者である可能性が高い。

では、成功はどうやってはかるのか。カルヴァンの答えは単純です。「お金が貯まること。」お金を貯めればためるほど成功の証拠になる。

まとめます。カルヴァンは職業的成功が救済の証拠になると説いた。成功は蓄財によって証明されるので、カルヴァンは必然的に蓄財を肯定します。

この点がそれまでのキリスト教と違うところ。カトリックは蓄財を肯定しません。お金を貯めることは卑しいことなんです。もし必要以上にお金を貯めたならそれは教会に寄付すべきなのです。個人で使い切れないお金を持つのは不道徳。イエスは金持ちは天国に入りにくいと教えていたのですから。

ところがカルヴァンは「お金を貯めなさい。どんどん貯めなさい。」と言ってくれる。だからカルヴァンの教えが最も広がったのは新興の市民階級でした。商工業に従事している人たちです。蓄財に関する罪悪感をカルヴァンは見事に取り払ってくれたのです。

おもしろいのは、かれらはお金をどんどん貯めますが、貯めて贅沢をしようとは全然考えない。贅沢三昧したらお金が減ってしまいます。貯めること自体が目的なのですから。貯めて貯めて貯めまくって、自分の救済の確信を得たいのです。

だから、カルヴァン派の信者は勤勉に働いてお金を貯めるけれど、生活は質素で儉約的です。かれらは生活のためではなく神の栄光のために働く。修道院で修道士が働くのに限りなく近いと思います。

こののち商工業が発達する地域にカルヴァン派はどんどん広まっていきます。ネーデルラント（今のオランダ、ベルギー）、フランス、イギリス等です。資本主義の発展とカルヴァン派の教義に関係があるという説もあって、興味深いところです。

あとカルヴァン派の教会制度で「長老制度」というものを覚えておくこと。ローマ教会と違ってルター派もカルヴァン派も、個人の救済を神に「とりなす」教会や教皇、神父の役割を認めません。だから、両派とも神と人をつなぐ聖職者=神父はいない。ローマ教会で神父にあたるものをプロテスタントでは牧師と呼びます。が、牧師は信者に聖書を教える教師であり、神との関係で特別の地位にあるのではないので注意して置いてください。

カルヴァン派の場合は特に一般信者の代表を長老といい、この長老が牧師とともに教会を運営しました。誰が救われるかもわからないのに特権的な聖職者を置く必要はないと考えたのです。ある意味では身分社会の序列をやぶる画期的なものだったと思います。

ヨーロッパ各地でのカルヴァン派の呼称を覚えてください。試験には出る。

オランダ・・・ゴイセン

イギリス・・・ピューリタン

フランス・・・ユグノー

スコットランド・・・プレスビテリアン

イギリスの宗教改革

イギリスでも宗教改革が起こりますが、これはルターやカルヴァンとは違って教義の内容、信仰の問題ではなく、政治問題からはじまったものです。その意味では少し毛色が違う。

発端は国王の離婚問題です。

イギリス国王はヘンリ8世（位1509～47）。ばら戦争のあとチューダー朝を建てたヘンリ7世の子供です。ヘンリ8世には奥さんがいた。カザリンといいます。カザリンはスペイン出身で、コロンブスの航海を援助したイザベラ女王の娘。政略結婚でイギリスに請われて輿入れしてきた人です。当時のイギリスはまだまだ貧しく弱い三流国です。スペインは飛ぶ鳥も落とす勢い。アメリカ植民地経営で絶頂期です。しかも、ヘンリ8世の在位時はスペイン国王はカルロス1世。カザリンの甥にあたります。このカルロス1世は父親がハプスブルグ家出身だったので、同時に神聖ローマ帝国皇帝となっている。神聖ローマ帝国皇帝としての名前がカール5世です。ルターの宗教改革で登場した人。スペイン王カルロス1世と神聖ローマ帝国カール5世は同一人物ですからね。

実はカザリンにとってヘンリ8世は二人目の夫でした。最初の夫は誰かというと、ヘンリ8世のお兄さん。そもそも、この兄の方が王位を継ぐ予定だったので、父ヘンリ7世はスペインからカザリンを妻としてめあわせました。ところがこの兄さんが即位する前に病気で死んでしまった。弟だったヘンリ8世が急遽皇太子となった。おまけにお兄さんの嫁さんも押しつけられてしまったというわけです。

あまりにも露骨な政略結婚ですから、ヘンリ8世としてはあまりカザリンに愛情を抱けない。そんなヘンリ8世はカザリンの侍女を好きになってしまった。侍女の名前がアン＝ブーリンです。

ヘンリ8世がカザリンとの仮面夫婦を続けて、こっそりとアン=ブーリンを愛人にしておけば問題はなかったのですが、ヘンリ8世はアン=ブーリンと正式に結婚したいと思った。当然ですが、アン=ブーリンと結婚するにはカザリンと離婚しなければならない。

この離婚がやっかいだったんです。今みたいに役所に離婚届を出して、はいオーケーというわけにはいかない。キリスト教徒同士の結婚ですからね、テレビで見たことあると思いますが、カトリックの結婚式では神父さんの前で「この女を生涯妻とすることを誓いますか?」「はい、誓います」という儀式をやっている。誓います、というのは神に誓っているのですね。離婚するということは神への誓いを破ることになるわけです。破るには破るなりの正当な理由がなければ教会は離婚を許してくれない。教会は当然ローマ教会ですよ。ローマ教会は信者と神をつなぐ「とりなし」役ですから、ローマ教会が許可してくれてはじめて信者の離婚は正式に認められる。

当然ヘンリ8世はローマ教会に離婚を申請します。政治的にプレッシャーをかける。

ところが、カザリンは別れたくない。カザリンの甥っ子が神聖ローマ皇帝カール5世でしたね。カール5世はおばさんの味方です。ヘンリ8世の離婚を認めてはならんと、これもローマ教会にプレッシャーをかける。

ドイツではルターの宗教改革がはじまって、ローマ教会としては是非ともカール5世のバックアップは欲しいところです。結局ローマ教会はヘンリ8世の願いを受け入れない。

どうしても離婚したいヘンリ8世は怒った。それなら、ローマ教会なんか抜けてやる、とローマ教会の信者をやめてしまった。国王ですから、ルターやカルヴァンみたいに布教活動を地道にする必要もない。イギリス国民全体を信者にして新しい教会組織を作ってしまったのです。これを定めた法律が1534年国王至上法（首長法）。新しい教会がイギリス国教会。教会の最高指導者、ローマ教皇にあたるのがイギリス国王です。

イギリス国教会は、教義はプロテスタントの影響を受けていますが、儀式などはローマ教会に近い。折衷的です。

国民の反応はというとジェントリという地方の有力者層は国王を支持した。なぜかというと、ローマ教会からの離脱にともなって、国王はイギリス国内の修道院の土地財産を没収して払い下げた。これを譲り受けたのがジェントリたちだったのです。儲けさせてもらって不満なはずがありません。

イギリスの宗教改革はイギリス王室とローマ教会の土地財産をめぐる闘争という面があったということですね。

ローマ教会の立場からヘンリ8世の宗教改革に反対しまくったのがイギリス大法官トマス=モア。『ユートピア』の著者。結局王の怒りをかって処刑されてしまいます。

ヘンリ8世のその後ですが、めでたくアン=ブーリンと結婚し、二人のあいだには女の子が産まれたのですが、王子が欲しかったヘンリ8世はまた別の女性に目移りして、邪魔になったアン=ブーリンをロンドン塔に幽閉したうえ処刑してしまった。

結局死ぬまでに6回結婚して、そのうち二人を殺すというとんでもない男でした。

ヘンリー8世が死んで、ただ一人の王子が即位します。エドワード6世。この人の名前は覚える必要はありません。ヘンリー8世の三番目の奥さんが生んだ子でまだ少年だった。ローマ教会はヘンリー8世がなくなれば、またイギリスはローマ教会に復帰してくれるのではないかと期待していたのですが、エドワード6世を支える重臣たちはヘンリー8世の遺言を守ってイギリス国教会を維持します。期待が裏切られてがっくり肩を落としているローマ教皇たちを描いた当時の風刺画がこれです。

エドワード6世は即位してまもなく死んでしまいますが、アメリカの作家マーク=トゥエインの『王子と乞食』のモデルにされたことで少しだけ有名です。

エドワード6世がなくなったあと、王位を継いだのがヘンリー8世の娘メアリ1世(位1553~58)です。メアリの母はカザリン。当然ですが、メアリは自分の母を離婚した父親ヘンリー8世が好きでないし、離婚の結果できたイギリス国教会も大嫌い。メアリは母親と同じようにローマ教会を信じているわけです。そこで、彼女は即位するとイギリス国教会をやめてローマ教会に復帰しました。ジェントリたちにとってはローマ教会から没収した財産がどうなるのか、滅茶苦茶心配です。自分たちの財産を守るためにもイギリス国教会の方がよい。

さらにメアリ1世はスペイン国王フェリペ2世と結婚しました。フェリペ2世はカール5世（カルロス1世）の息子で当然ローマ=カトリックです。メアリ1世がフェリペ2世の子供を生んで、この子がスペイン王とイギリス王を兼ねれば、イギリスという国がなくなってしまう可能性だってあったわけです。

当然メアリ1世は人気がない。メアリは自分の宗教政策に反対する臣下をどんどん処刑していく。彼女についてあだ名が「ブッラド・メアリ」「血のメアリ」です。今ではカクテルの名前になっています。

ところがメアリ1世は即位5年で死んでしまった。次に王位についたのがエリザベス1世(位1558~1603)です。エリザベスはヘンリー8世とアン=ブーリンのあいだの子供です。メアリの腹違いの妹にあたる。この姉妹は当然仲が悪い。メアリは自分が王位についているあいだ妹のエリザベスをロンドン塔に幽閉していました。いつ処刑されるかわからない状態だったのですが、メアリの突然の死で王位がころがりこんできました。

エリザベスはイギリス国教会を復活させます。1559年、信仰統一法という法律でイギリス国教会を確立した、と覚えてください。このあとエリザベスは50年近く在位しますから、この時期に国教会は完全に定着し2度とローマ教会復帰の動きは起きました。

カトリックの改革運動

ルター派、カルヴァン派、イギリス国教会などローマ教会から分離した教会が成立して、ローマ教会の勢力は衰えます。特にヨーロッパ北部には新教の勢力が多くなります。

これに危機感をもったローマ教会は、組織の点検、改革に取り組み、巻き返しをはかろうとしました。これを対抗宗教改革といいます。

そのため開かれた会議がトレント公会議。これは1545年から63年まで実に20年近くつづく。この会議で、教皇の至上権の確認、異端の取り締まりの強化、具体的には宗教裁判や禁書の強化が決定されていきました。とくに、ローマ教会の勢力が強固なイタリア半島、イベリア半島では宗教裁判が頻繁にお

こなわれます。魔女狩り、魔女裁判というのはこの時期が一番多いのです。また、地動説も目の敵にされてガリレオが自説を撤回させられたのもこの時期なのです。

対抗宗教改革の盛り上がりの中でつくられました組織にイエズス会があります（1534年）。イエズス会はアジアで積極的に布教活動をおこなったことで有名。ヨーロッパで衰えたローマ教会の勢力を、世界への布教で挽回しようとしたわけです。

設立したのがイグナティウス＝ロヨラ。スペイン北部のバスク地方出身。城を持っているくらいの貴族の生まれです。軍人として活躍するのですがフランスとの戦争で両足を負傷して入院。ケガで軍人として以前のように活躍はできないロヨラは自分の今後の生き方を悩んでいたのでしょうか。かれの出身地のバスク地方というのは今でもスペインからの独立運動をやっているような地域で、スペイン人の本流である人たちとは言語や風習がかなり違う。バスク人であるロヨラが、今後スペイン政界で大きな活躍のできないことは、はっきりしている。

あれこれ悩みながら、入院中のロヨラは読書三昧です。そのときにイエスの伝記を読んで、「これだ！」と今後の人生を神に捧げることを決心した。

もともと活力のある人だったのでしょう。思い立ったら即行動です。神に仕えるためには本格的に神学の勉強をしなければならないと考えて、退院後パリ大学に入学します。このとき38歳です。今の感覚よりも当時の38歳はもっと老けたイメージだと思います。この年齢で大学に入るというのはすごい精神的なパワーですよ。まわりの学生はみんな二十歳そこそくです。当時の大学は全寮制です。そこに38歳の元軍人の大人が加わる。若い学生たちはロヨラにどんどん感化されて、かれの同志になっていきます。大学卒業と一緒にロヨラが同志6人と結成したのがイエズス会です。このときの創立メンバーにあのフランシスコ＝ザビエルもいました。ザビエルもバスク地方の貴族でハビエル城という城持ちの貴族だったんですが、スペインの支配下に入ってしまって、閉ざされた活躍の場を布教活動に求めた人のようです。

イエズス会は軍隊的組織がありました。軍人だったロヨラは会の組織を軍隊と同じにします。トップである総長の命令には絶対服従。会員はどんな困難な命令でも従わなければならない。この厳しい規律のおかげでアジアに信者を増やしていくことができたのですね。イエズス会はポルトガル王の保護のもとでポルトガル商人の出入りするアジア地域に進出します。幹部であるザビエルもその一人です。

ザビエルはインド方面で布教をしているのですが、マラッカで日本人ヤジローと出会います。ヤジローという人は薩摩の人。殺人を犯して、薩摩に出入りしていたポルトガル商人にすがってマラッカまで逃げてきていた。面白いですね。鎖国以前の日本人は驚くほど活動範囲が広いです。

ヤジローはポルトガル語もまあまあできて、頭脳明晰、論理的に物事を考えられる人だった。それを見てザビエルは日本人には布教をしやすいのではと考えた。そこでヤジローをつれて日本に向かいます。マカオまではポルトガル商船で行って、そこからは中国商人の船を雇います。ついたのが薩摩。1549年のことです。ここから日本でのキリスト教がはじまりました。

ザビエルはイエズス会の大幹部ですから、彼が直接一般の日本人に布教することが本来の仕事ではありません。特命全権大使みたいなもので、日本の支配者たちにキリスト教を受け入れさせること、布教の許可を得ること、できることなら何らかの特権を獲得すること、それがザビエルの仕事。だから、九州各地や山口で守護大名に面会する。天皇に面会しようと京都まで上るのですが、応仁の乱後の大混乱で京都は

すっかり荒れ果てていた。そこで、京都はあきらめてまた九州に戻ります。

ザビエルは1551年には中国布教をめざして日本を去って翌年病死します。ただ、ザビエル以外のイエズス会士は日本に残り布教活動をつづけ、九州の大名はポルトガルとの貿易が有利になると想え、キリスト教を受け入れていきます。このキリスト教大名たちがローマ教会に使節を送ったのが1582年。有名な天正の遣欧使節です。

イエズス会士に引率されて九州出身の4人のキリスト教少年がローマまでいきました。日本史では有名な出来事ですが、当時のヨーロッパでも大歓迎されるのです。ローマ教会としては、いかに世界の果てまで信者がいるかという生きた証拠ですからね。広告塔としては申し分ないです。プロテスタント諸派の中で日本に信者がいる教会はあるか？ないです。だからローマ教会の勝ち、というわけです。

使節はスペインではフェリペ2世と会い、ローマでは教皇グレゴリウス13世に拝謁します。グレゴリウス13世は、今我々が使っている太陽暦、グレゴリウス暦を制定した人です。

その後もヨーロッパ各地をまわり、1590年に長崎に帰ります。このとき印刷機を持ってくる。ルネサンスですね。

かれらは日本を統一していた豊臣秀吉に謁見します。これがかれらの最後の絶頂期です。やがて、徳川時代にキリスト教の禁令が出されたあとは、キリスト教を捨てたもの、国外追放になったもの、信仰を守つて処刑されたものなど、さまざまな運命をたどりますが、そこは日本史で勉強してください。

宗教改革の波紋が、日本にまで及んでいるということを感じてもらえば結構です。

第60回 宗教改革2 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第59回 宗教改革1](#)

[次のページへ](#)
[第61回 スペインの繁栄とオランダの独立](#)

世界史講義録

第61回 スペインの繁栄とオランダの繁栄

----- 主権国家 -----

ルネサンスや地理上の発見、宗教改革の話をしてきましたが、これらのこととはほとんど同時に起きています。ちょうど同じ時期に、イタリアを舞台に戦争がある。これをイタリア戦争（1494～1559）といいます。だらだらつづいた戦争で、何が目的か現在から見たらよくわからないくらいですが、簡単に言ったら、分裂状態だったイタリアの支配権をめぐってドイツ皇帝、フランス王、スペイン王が争ったものです。複雑な国際関係というものが、すでにヨーロッパには誕生しているのですよ、という意味で教科書では太字で出てきます。でも、ほんとに大事なのはイタリア戦争ではなくて、「国際関係」の方です。国際関係があるということは、国があるということで、これはあたりまえのことなんですが、ヨーロッパにこの時期になって国ということができてきましたよ、と言っているわけです。正確に言えば「主権国家」というやつです。

それまでは、主権国家がなかったのかというと、はっきり言ってなかった。何しろイギリス国王がノルマンディー公としてはフランス王の家臣、ということが平気である世界ですから。どこからどこまでがフランスで、どこからどこまでがドイツなのか、誰にもわからない。王の権力が及ぶ範囲がはっきりしない、そういう世界が中世ヨーロッパです。そういうなかで、商工業で経済力をつけてきた市民階級を味方にした王が政治の中心として飛びぬけた地位を得るようになる。そういう王たちが主人公として争いあつたのがイタリア戦争ですよ、ということです。

今までだって、王様の話をいっぱいしてきたじゃないかって？それはそうなんですが、実は十字軍にしても、百年戦争にしても、王たちとまったく同格でナントカ伯とか、ナントカ公なんていうのが活躍していました。主権国家という国家のとらえかたは、誕生してまだ500年しか経っていないということです。アジアや古代の国ぐには主権国家ではないのかというと、主権国家というより「王朝」国家と考えた方がぴったり来るのです。

はい、以上は教科書の解説でした。理解できなかつたら、流してください。

----- スペインの繁栄 -----

コロンブスをアメリカに送り出したスペインは、16世紀になって絶頂期を迎えます。重要な王様はふたり。まず最初が、カルロス1世（位1516～56）です。母親がスペイン王女だったので16歳でスペイン王位につきますが、父方の祖父がハプスブルク家神聖ローマ皇帝だったので、この人はハプスブルク家出身ということになります。スペインだけでなく、ハプスブルク家の領地も相続するので、カルロス1世の領土は膨大な広さになった。スペインはもちろん、ネーデルラント、オーストリア、南イタリアなど、そしてアメリカ大陸のほとんどの部分もかれの領土です。

さらに、1519年には神聖ローマ皇帝に選ばれた。この時の話はルターの宗教改革の時に少ししました

ね。神聖ローマ皇帝としての名前がカール5世。皇帝としては、困難な問題に直面した。宗教改革とともに内乱、イスラムの大帝国オスマン朝によるウィーン包囲など、大事件が続発しました。結局、宗教改革で起きた混乱はアウグスブルクの宗教和議（1555）でおさまりますが、この時にカール5世は引退します。オーストリアの領地と神聖ローマ皇帝の地位を弟フェルディナントに譲り、スペイン、南イタリア、ネーデルラント、アメリカ植民地を息子フェリペに譲りました。この結果、ハプスブルク家は、オーストリア・ハプスブルク家とスペイン・ハプスブルク家に分かれることになります。カルロス1世は神聖ローマ皇帝カール5世としての活動の方が重要だし、スペイン王としての影は薄い。カルロス1世はスペイン王といっても、生まれも育ちもフランドル地方。今のフランス北部からベルギーにかけての土地です。だから、スペイン語がどれだけできたかも疑問です。

スペイン王としては息子のフェリペ2世（位1556～98）の方が重要。この王の時がスペインの最盛期です。

かれが相続した領土は先ほど述べました。ネーデルラントは特に重要です。

宗教的にはバリバリのローマ＝カトリックです。対抗宗教改革の中心となって、新教諸派を弾圧します。ローマ教会としては頼もしい味方ですね。

1571年には、レバントの海戦でオスマン帝国海軍をやぶります。オスマン帝国は陸軍も海軍も、向かうところ敵なしで地中海を制覇しようとしていた。ヨーロッパの軍隊は負けてばかりだったので、この勝利はスペインに大きな自信をあたえます。この海戦でオスマン海軍を破ったスペイン艦隊は「無敵艦隊（アルマダ）」と呼ばれるようになります。『ドン＝キホーテ』を書いた文豪セルバンテスがこの海戦に参加して片腕を失ったという話はしましたね。

1581年には、ポルトガル王位も兼ねる。これは、フェリペ2世の母親がポルトガル王家出身だったため、王位が転がり込んできたのです。ポルトガルはアジア方面に多くの商館を建設していましたから、これもすべてフェリペ2世の支配下にはいるわけです。全世界にスペインの領土があるといってよい。そこでこの時代のスペインを「太陽の沈まない帝国」といいます。世界中に領土があるから24時間いつでもスペインには昼の場所があるということですね。これがスペインの黄金時代です。

経済的には、アメリカ大陸から黄金がどんどんスペインに運ばれてくる。また、ネーデルラントはヨーロッパでも商工業が発展した豊かな地域でしたから、ここからあがってくる税金も多い。フェリペ2世は、この有利な条件を利用して、上手に国家経営をおこなうこともできたのですが、これに失敗します。フェリペ2世の時代から400年たった現在、スペインはかつての黄金時代の面影はないですね。ヨーロッパ諸国の中では貧しい国になってしまっています。

フェリペ2世は、どこをどう間違えたのか。フェリペ2世は、左うちわで遊んでいても、収入は途絶えることがないわけです。で、この莫大な富を何に使ったか。戦争と奢侈に浪費したのです。体面を繕い、見栄を張るために、使ってしまったのです。ここがポイントです。

みんなは、もし宝くじで3億円当たったらどうしますか。何かほしいものを買って、残りは貯金しておく？大事にとっておいて、ちびちび使って一生遊んで暮らす？3億円で一生遊んで暮らせるかな？何を買うにしろ、3億円で自分のほしいものを買って使ってしまうのはフェリペ2世のタイプです。没落します。

賢いお金の使い方は、投資することです。例えばトヨタの車がほしかったら、車を買わずにトヨタの株を買うのです。新車は5年すればポンコツになるけれど、株は5年後に3倍になっているかもしれない。物を買えばお金はなくなるけれど、投資すればお金は増えるのですよ。成功すればの話ですけどね。株じゃなくてもいいよ。喫茶店をはじめるとか、土地を買うとか、こういうのも投資です。

フェリペ2世の置かれた立場というのは、宝くじで大金が当たったみたいなもので、かれが努力したわけではなく、たまたま相続関係などで莫大な収入を得ることができたわけ。ところが、フェリペ2世はその収入を投資せずに使ってしまった。国土の開発、産業の振興など、国を発展させるためのお金の使い方があったはずなんですが、そういうことはしなかった。無尽蔵に運ばれ来るアメリカ大陸の金銀もやがて枯渇します。重税にあえぐネーデルラントの人々がスペインからの独立戦争を始める。こうなると、スペイン、フェリペ2世の手元には何も残っていないのですね。

かれの治世にドル箱のネーデルラントが独立戦争を開始します。また、スペイン自慢の無敵艦隊もイギリスに敗れる、という事件が起こる。フェリペ2世の晩年からスペインは急速に衰えていきます。

オランダの繁栄と独立

さて、フェリペ2世の時代にスペインの領土だったネーデルラントは、現在のベルギー、オランダです。ここは古くから商工業が発達して経済的に繁栄していた。地理的には東ヨーロッパと西ヨーロッパ、イギリスを結ぶ交通の要地にあって、ハンザ同盟に加わり繁栄した都市があつたし、毛織物工業も盛ん。百年戦争の原因の一つはこの地域の帰属問題でした。

ネーデルラントでは豊かな商工業者の発言力が強く、かれらがこの地域のオピニオンリーダーだった。宗教はカルヴァン派が多数です。前にも触れましたがカルヴァン派は蓄財を認めますから、商工業者に信者が多かったです。ネーデルラントの人たちは経済的な利害をともにしていて、団結力もある。いくつか絵を見てみましょう。

これは、伦勃朗の『夜警』という絵。市民の自警団が町を守っているところなんですが、ここに描かれているのはアムステルダムの実在の商人たちです。商人たちが自分たちでお金を出し合って伦勃朗を雇ってこの絵を描かせた。要するに現代で言えば集合記念写真みたいなものです。こちらは同じく伦勃朗の『織物検査役人』という作品。これも同様で、織物組合の人たちの集合肖像画。組合の本部に飾っていたものだそうです。

飛び抜けた英雄や指導者がいるわけではないけれど、市民たち一人ひとりが協力してネーデルラントを発展させてきたという、そういう気風が伝わってきます。

ネーデルラントの人々からすると、自分たちの住む「くに」は、封建領主の結婚で所有者が代わっていつて、たまたまスペイン、フェリペ2世の領土になっているだけです。スペインに対して忠誠心なんか全然ない。

ところが、何を勘違いしたかフェリペ2世は、いきなりネーデルラントの都市に重税をかける。それだけでなく、宗教もローマ＝カトリックを強制しようとした。

これが原因で、1568年、ネーデルラントの人々は独立戦争を始めました。

指導者はネーデルラントの名門貴族オラニエ公ウィレム。名目的な指導者ですがこの名前は覚えてください。

フェリペ2世はスペインから軍隊を送り込んで、ネーデルラント側との戦いが始まりますが、スペインも強国ですから、なかなか簡単には独立できそうにない。そういう中でネーデルラントの南部10州が独立戦争から脱落します。南部はローマ＝カトリックの信者が比較的多かったのも脱落の原因です。

これに対して、北部の7州は、あくまでたたかいぬく覚悟を固めて、1579年ユトレヒト同盟という対スペイン軍事同盟を結成します。ネーデルラントはもともと国になっていないので都市や州という地域ごとに団結を確認しながらスペインと戦っているのです。ユトレヒト同盟の中心だった州がホラント州です。オランダ船がはじめて日本に来たときに、応接した役人が「おまえたちは、スペイン人やポルトガル人とは違うようだが、どこから来たのじゃ。」と尋ねた。オランダの船乗りはホラント州出身だったので「ホラントから来た。」と答えたんだって。このときホラントを国名と勘違いしてしまったため、以後日本ではこの国のことをホラントがなまつたオランダという名前で呼ぶことになります。だから、オランダというのは日本でだけの呼び方です。外国人にオランダと言っても通じないから。本当はネーデルラントだからね。

それはともかく、ユトレヒト同盟は1581年には独立を宣言して、ここにネーデルラント連邦共和国が成立しました。ただし、スペインはあきらめたわけではなく、この後も戦争は続いて、1609年、スペインと休戦条約が結ばれてようやく事実上の独立を達成しました。

脱落した南部10州はのちにベルギーとなります。

ちなみにネーデルラントの独立戦争をイギリスが援助していますので、これは頭に入れておいてください。当時のイギリス王が、エリザベス1世ですね。フェリペ2世のプロポーズを受け入れるようなそぶりを見せて結局ふってしまった因縁の関係です。このあたりについては、次回にお話しします。

ネーデルラントの商人たちはスペインとの戦争をしながらも、したたかに海外貿易を繰り広げていました。当時、海外貿易に利用できる大型帆船がヨーロッパ全体で2万、そのうちネーデルラントの船が1万6千だった、という数字もあるくらいです。17世紀前半のネーデルラントは、最先端の造船技術を持っていたこと、また、フランスなどから新教徒の商工業者がネーデルラントに移住してきたことなどにより、ヨーロッパの中で飛び抜けた経済的な地位を獲得し、アムステルダムは国際商業・金融の中心として繁栄しました。

貿易の中心をになったのが1602年に設立されたオランダ東インド会社です。東インドというのは、アジアのことです。コロンブスがアメリカ大陸をインドだと思いこんでしまった影響で、アメリカをインドと呼ぶ慣習があって、本とのインドと区別するためにアメリカを西インド、本当のインドおよびアジアを東インドと呼ぶ習わしがあったのです。

衰えていくスペインに取って代わって、アジア・アメリカ貿易を握っていくことになります。

このスペインからネーデルラントへの貿易の主役交替は、日本の歴史をみていてもはっきりわかります。戦国時代、さかんに日本に来航していたのは南蛮人と呼ばれたスペイン、ポルトガルでした。オランダ船がはじめて日本に来たのが1600年。リーフデ号という船で、実はこの船は二年前の1598年にオラ

ンダを出航している。コショウを買い付けるためにインドネシア方面に行くはずだったのですが、嵐に巻き込まれて漂流して、現在の大分県の海岸にたどり着いたというものです。だから、意識して日本に来たわけではない。出航時110名いた船員のほとんどはすでに死んでいて、生存者はわずか24名というから、海外貿易は命がけですね。

当時は関ヶ原の戦いの直前です。徳川家康は世界情勢も気になりますから、リーフデ号の乗組員のオランダ人たちから情報収集した。その後かれらはオランダに帰るのですが、徳川家康に気に入られてそのまま日本に残ったのが2名いる。そのひとりがヤン=ヨーステン。この人の屋敷が江戸にあたえられて、その屋敷跡が八重洲という地名に残っている。東京駅に八重洲口というのがあるのですが、それです。もうひとりがウィリアム=アダムス。実はこの人はオランダ人ではない。イギリス人です。イギリスがネーデルラントの独立を支援していたという外交関係が浮かんできますね。かれはパイロットです。日本語でいうと水先案内人。羅針盤を見ながら船の航路を決めていく役割です。ウィリアム=アダムスは徳川家康の外交顧問になります。三浦半島に領地をあたえられたかれの日本名が三浦按針（みうらあんじん）。按針とは羅針盤の針を点検するという意味です。

これ以後、オランダ、イギリスの商船が日本に来航するようになるのですが、オランダは、「キリスト教の布教はしません、純粋に商売だけをさしてもらいます」と家康に売り込んで、イエズス会の宣教師と一緒にやってくるスペインを追い落とし、やがては日本貿易を独占します。ヨーロッパでの両国の力関係の変化が、そのまま日本との貿易にも反映されているから、おもしろい。

おまけですが、リーフデ号の船首には、ネーデルラントが生んだルネサンス最大の人文学者エラスムスの像が飾られていました。このエラスムス像は現在でも残っていて、東京の国立博物館にあるそうです。これが見たくて、以前東京に行ったときに、探したのですが見つかりませんでした。収蔵されているだけ非公開なのかもしれません。

第61回 スペインの繁栄とオランダの繁栄 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第60回 宗教改革2](#)

[次のページへ](#)
[第62回 絶対主義](#)

世界史講義録

第62回 絶対主義

イギリス

イギリスは、ノルマン征服で成立したノルマン朝以来、他のヨーロッパ諸国にくらべて、王権が比較的強いという伝統がありました。しかも、1455年から三十年間つづいたばら戦争で国内の有力な封建諸侯は没落してしまった。しかも、ばら戦争後即位したテューダー朝のヘンリイ7世は意欲的に王権の強化にとめました。

また、このころから新興市民階級が力をつけてきます。具体的には商人と、新興地主層です。イギリスの新興地主層を特に「ジェントリ」と呼びます。地主ですが、貴族ではありません。

さて、ヘンリイ7世の次がヘンリイ8世。この王は宗教改革で登場しました。イギリス国教会をはじめた王でした。

この頃、16世紀になるとイギリスの農村ではジェントリによる「第一次囲い込み（エンクロージャー）」が盛んになる。囲い込みとは何か。ジェントリたちが、自分の土地を耕している小作人を追い払って広大な農地を柵で囲って、文字通り囲い込むのです。小作人を追い払って、そのあとどうするのかというと、広大な農地に牧草を育てて、大量に羊を飼う。そして羊毛をとる。とった羊毛は、これをネーデルラントに輸出するのです。

ネーデルラントは毛織物工業で発展していたと、前回も話しましたが、その原料はイギリスが輸出していったわけです。だから、ネーデルラントの発展は、即イギリスの羊毛輸出量の増加、つまりイギリスの発展につながるのです。

こういう流れの中で、16世紀半ばにエリザベス1世が即位し、イギリスの後の大発展の基礎を築きます。

これがエリザベス1世の肖像画。よくわかりませんが、多分すごい美人なんでしょう。大きな蛇腹の襟巻きとか、ふっくらした袖とか、真っ白に塗った化粧とか、ファッショնだけでも見ていてあきない。

即位したのが25歳。美人で独身で、イギリス王ですから、ヨーロッパ各地の王侯貴族からのプロポーズがたくさんあった。その中でも、スペインのフェリペ2世は有名。フェリペ2世はエリザベスの姉、メアリと結婚していたという話は宗教改革の時にしました。

メアリが死んだあと、妹のエリザベスにプロポーズするんですね。政略からですが、それにしても節操がないというか、統治階級の人にとってはすべてが駆け引き、大変ですね。

さて、今でこそイギリスは一流国ですが、当時のイギリスはまだまだヨーロッパの中では弱小国です。スペインやフランスのような大国のはざまで、何とか国家の独立と発展をはかろうと必死な状態。で、エリザベスは、美人で独身という自分の魅力を最大限に發揮して、フェリペ2世のような有力者のP

口ポーズを受けるようなそぶりをして、気を持たせて、なかなか正式な返事をしない。じらしてじらして、相手からイギリスにとって有利な条件を引き出そうと、自分の結婚を外交カードとして最大限利用した。

結局エリザベスは生涯誰とも結婚しません。イギリスの国益ということを最優先に一生を過ごしました。なぜ、結婚しないのかときかれて、エリザベスは「私は国家と結婚している」と言ったという。この言葉に彼女の生涯は象徴されているようです。イギリス国民もまた、そういう女王を愛しました。「愛すべき女王ベス」なんて呼ばれています。

さて、エリザベス1世はどんな政治をしたか。

まず、イギリス国教会を確立します。姉がローマ＝カトリックでしたから、これをイギリス国教会にもどした。そのための法律が「信仰統一法」（1559）。

次に、ネーデルラント独立戦争を援助する。

なぜかというと、先ほども述べたようにジェントリが生産した羊毛はネーデルラントに輸出されるのでした。だから、ネーデルラントの平和と発展がそのままイギリスの発展につながる。

スペインのフェリペ2世はネーデルラントに重税を課し、これに反発してネーデルラント独立戦争がはじまる。経営感覚のないフェリペ2世に統治されるより、独立したほうがネーデルラントの発展につながる。エリザベス1世がネーデルラントの独立を援助するのはそういう理由からです。

また、イギリスはスペインと宗教問題でも対立していたから、徹底的にスペインの邪魔をします。スペインが困ればネーデルラントは楽になる、イギリスにも利益、という理屈です。

有名なのが海賊にあたえた私掠特許状。イギリスは海に囲まれた国でしたから海賊がたくさんいた。エリザベスはこの海賊に「略奪してもおとがめなし」という免許状をあたえたのです。これが私掠特許状です。ただし、イギリスの商船を襲うことは許されません。スペイン船ならオーケーというのです。イギリスとスペインは戦争しているわけではないから、スペイン船なら襲っていいなんていう理屈はどこにもない。これは、れっきとした犯罪行為です。今風に言ったらテロ支援国家イギリスです。

海賊の親分で有名なのが、ホーキンズとかドレイクという人たちです。プリントの挿し絵はエリザベス女王がドレイクを自分の臣下にしているところ。ひざまづいでいるドレイクの肩をエリザベスが剣で打っている。これが臣下にする儀式です。ただ、この絵はあとから描かれた想像画のようですが。

女王から許可をもらった海賊たちは大西洋に乗りだして、アメリカ大陸からお宝を満載してスペインに向かう商船をつぎつぎと襲って、スペインに多大な損害を与えた。

とくにドレイクは1577年から1580年まで世界一周海賊旅行をした。出発前にエリザベス女王や金持ちの貴族たちから出資金を集めて、出発した。途中で、スペイン商船やスペインの港を襲いながら、西回り航路で地球を一周してしまった。イギリスに帰ってきたときには30万ポンドの利益をえていたと言います。これは、イギリスの当時の国庫収入と同額。エリザベス女王は出資金の4700%の配当金を得たそうです。

余談ですが、このときのドレイクの航海はマゼラン艦隊について世界で二番目の世界周航でした。

はじめスペインのフェリペ2世は、エリザベスが海賊に特許状をあたえているとは思っていませんから、海賊の取締を要請しますが、エリザベス自身が海賊の総元締めだから、効果があるわけない。やがて、フェリペ2世もイギリスがしていることに気がつくわけだ。おまけに、イギリスはネーデルラントの独立を支援している。

こうなると、スペインとしてはイギリスを放っておけません。

ここで、スペインはイギリス征服作戦を開始した。スペインの誇る無敵艦隊が百三十隻、将兵二万三千人を乗せてイギリスに向けて出撃した。これが、1588年です。スペインは当時ヨーロッパ最強。一方イギリスはというと、まだまだ弱小国です。エリザベス女王が海賊にスペイン船を襲わせていたのも、もとはといえば、貿易でも戦争でも正面から立ち向かって勝ち目がないから。だから、ゲリラ戦をやっていたにすぎない。そもそも、イギリスには当時海軍すらなかったのです。

このままでは、イギリスはスペインに占領されてしまう。このときに、イギリスの危機を救うために集結したイギリス海軍、もとは私掠特許状をもらった海賊たちでした。

これが有名なアルマダの海戦です。ドーヴァー海峡にやって来たスペイン無敵艦隊の戦法は衝角戦法という。自分の船を相手の船にぶつけて沈没させる伝統的な戦法です。

これに対してイギリス船は、射程距離の長い大砲を載せていて、これでスペイン艦隊を撃つ。イギリス船は小型の船が多いのですが、これが狭いドーヴァー海峡を動き回って無敵艦隊に攻撃を仕掛けた。無敵艦隊の方はというと、大きい船が多く、イギリス船に近づく前に大砲で撃たれてしまう。たまたま、嵐も重なって、操船がうまくいかず大敗北をしてしまいました。その後の海戦にも敗れ、逃げるように大ブリテン島のまわりをグルッと廻ってスペインに帰った。

結局、艦隊の三分の一が失われた。フェリペ2世はイギリス征服を断念します。このあと、スペインはずるずると、世界史の主役の座から滑り落ちていきました。

スペインに取って代わって、世界の海に乗り出していったのが、ネーデルラントとイギリス、ということになるのです。

イギリスは1600年、東インド会社を設立してアジア貿易に乗り出していました。

エリザベス女王は足かけ46年間在位し、その間に国内の宗教問題を解決し、イギリスの国際的地位を向上させ、経済発展の基礎を固めたのでした。

この肖像画（山川出版社、世界史写真集のパネル）は多分晩年のものだと思いますが、実に面白い構図です。エリザベスの左右に二枚の絵が飾られている。アルマダの海戦を描いたものです。左が開戦直前。向こうから無敵艦隊がやって来ています。手前に固まっている船隊がイギリス海軍。実体は海賊船。右が海戦の最中です。嵐の中で、沈んでいく無敵艦隊が描かれています。二枚の絵を後ろに掲げて「私が無敵艦隊をしずめたのです。」とエリザベス女王が自慢している声が聞こえてきそうです。そして、さらに注目が、彼女の右手。地球儀の上に置かれています。「七つの海は私のもの」と言っているようではありませんか。

絶対主義

スペインのフェリペ2世やイギリスのエリザベス1世の時代は、それぞれの国で国王による中央集権化が完成する最後の段階でした。諸侯や貴族たちはすでにかつてのような力がなく、国王が比較的自由に国政をリードすることができました。この時代のことを、「絶対主義」といいます。国王が、貴族・封建諸侯の権力を制限し絶対的な権力を握ったことから、こういう呼び方をしています。

フェリペ2世や、エリザベス1世以外にも、このような王様が何人かいます。エリザベス1世のあとを継いだジェームズ1世や、フランスのルイ14世が有名です。彼らの話は次回以降にします。とりあえず、今日は絶対主義という言葉を覚えてください。また、絶対主義の政治を絶対王政、絶対主義の王様を絶対君主とも言います。

最後に絶対主義の一般的な特徴を三つ述べておきます。

一、「官僚制」と「常備軍」

絶対君主が権力をふるうためには、王権を支える組織が必要です。それが、常備軍と官僚制です。

官僚は、従来の貴族や封建領主に代わって国王の手足となって働く。

常備軍は、いつもある軍隊です。それまでは、戦争の時にだけ傭兵を雇うのですが、平時にも常に軍隊を養っておいて、これで国内、国外ににらみを利かせる。

二、「重商主義」

官僚も常備軍も常に雇っておかなければならない。王は彼らに給料を払わなければならないわけだ。これは、金がかかります。金を稼ぐために、絶対君主は積極的に海外貿易を推進します。各国が東インド会社を作るのはそのためです。海外貿易を行うことによって、国が豊かになるというのが当時の経済理論で、これを「重商主義」という。

三、「王権神授説」

王は、俺が一番偉いのだ、と威張る。これに反発する者も当然います。かつては王と同格くらいに力を持っていた封建諸侯、そして、新しく力を伸ばしつつある新興市民階級です。国民の反発に対して、王が絶対に偉いのだ、ということを理論化したのが、王権神授説。簡単に言えば、王の権力は神から授けられたものである。王の言葉は神の言葉に等しい。王に逆らうこととは、神に逆らうことと同じである。だから、国民は文句を言わずに王に従いなさい、ということになるわけです。

ただ、國民もそうそう王権神授説をありがたがるわけではない。最初に國民が王の権力に対して異議を申し立てたのがエリザベス1世以後のイギリスでした。次回は、その話。

第62回 絶対主義 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第61回 スペインの繁栄とオランダの繁栄](#)

[次のページへ](#)
[第63回 イギリスの革命](#)

世界史講義録

第63回 イギリスの革命

----- ステュアート朝の成立 -----

イギリスのエリザベス1世は1603年、独身のまま死去しました。独身でしたが、彼女の部屋に出入りするお気に入りの臣下は何人かいたので、ヴァージン・クイーンのあだ名どおりの実体だったかどうかは定かではありません。しかし、子供がいなかったのはれっきとした事実。

問題になるのは、跡継ぎです。王が死んで、後継者がいない場合どうなるのか。ヨーロッパではこういう場合、議会などが次の王を選考する。このときも、イギリス議会はエリザベス1世と家系につながりのある候補者を何人かピックアップして、最終的にスコットランド王に白羽の矢を立てた。

今まで、イギリス、イギリスと言ってきましたが、正確にはイングランド。現在のイギリスを思い浮かべると、間違えます。現在のイギリスは大ブリテン島にアイルランド島の東北部をあわせたものですが、これをイギリスと呼んでいるのは日本だけで、正確には「グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国」、略してユナイテッド・キングダムという。U.K.です。連合王国というのは、複数の王国がくつついてできたということで、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドが一つになってできている。

これら四つの地方が一つの国になっても、いまだに各地方では独立心が旺盛です。スコットランド出身の人に「ああ、イギリス人ですね。」なんていったら、相手は多分怒る。「イングランド人なんかと一緒にするな。」ってね。

サッカーのワールドカップでも、イングランド、スコットランド、ウェールズなど、別のナショナルチームで出場します。ラグビーには五力国対抗戦という伝統の試合があるのですが、この五力国というのが、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドにあと一つがフランスです。

日本人は国というときには、非常にかっちりした組織を連想しがちですが、ヨーロッパ人にとっては国というものは、輪郭の曖昧な、フニャフニャしたものかもしれませんね。

エリザベス1世時代のイングランドは、現在の大ブリテン島の南半分しかありませんでした。ちっちゃい国です。北はスコットランドという別の国。ここの王様をイングランド王に迎えようというのです。スコットランド王はイギリス議会からの誘いを承諾して、イギリス王になった。これがジェームズ1世です。かれから始まる王朝をステュアート朝という。ジェームズ1世はイギリス王になりますが、スコットランド王をやめるわけではない。ひとりで二つの国の王位を兼ねるのです。この辺の感覚は、われわれには理解しにくいですが、ここからヨーロッパ人の国というものに対する感覚を感じ取ってもらったらと思います。

ジェームズ1世はイギリス王になるために、スコットランドから旅をして南に向かいます。国境には、イギリス議会の代表たちが新しい王を出迎えにきていた。イギリスに入ったジェームズ1世は議会代表たちと一緒にロンドンに向かって旅をつづけた。

この旅の途中で一つの事件がおこります。一行がスリを捕まえたのです。犯罪者ですね。当然、このスリはイギリスの法に照らして処罰しなければならないのですが、ここでジェームズ1世が口出しをして「そのスリは死刑にしろ」と言った。議会の一行は驚いた。スリのような軽犯罪、裁判にかけても死刑にするようなものではない。だけれども、王の命令だから仕方ありません。スリは死刑にされてしまった。このときに、議会代表のイギリス人たちは、将来に不安を感じたのです。「この王様は、議会の言うことを聞いてくれるだろうか。議会や国民の権利を無視してわがまま勝手をするのではないか。」ということです。

ロンドンで即位したジェームズ1世は、王権神授説を信奉して、予想通りイギリス議会を軽視した政治をおこなった。かれの言葉です。「聖書の中で王は神と呼ばれており、かくして彼らの権力は神の権力にもたとえられる・・・（王は）臣下全員に対し、あらゆる裁き手であり、しかも神以外の何ものにも責任を負わない。」王は何をしてもいいんだ、ということです。

また、ジェームズ1世はイギリス国教会を国民に強制しようとしてピューリタンを圧迫しました。商工業者やジェントリにはピューリタンが多く、かれらは議会にも進出していたので、王と議会の関係はなおさら悪くなりました。

ジェームズ1世が死んで、あとを継ぐのが息子のチャールズ1世（位1625～49）。チャールズ1世も父親譲りの思想の持ち主で、議会に対して強圧的な態度に出ます。しかも、ピューリタンに対して激しい弾圧をしました。ピューリタンの説教を禁止して、反対するものを鞭打ち、耳そぎ、鼻そぎの刑にした。かなりえげつないやり方です。また、宿代を払わずに兵士を民家に宿泊させるなど、国民の権利を無視するような行為がつづいた。

そこで、議会は王に対して議会と国民の権利を尊重するように要請書を提出した。これが「権利の請願」（1628）です。具体的には、議会の承認なしに課税をしない、法律を無視して勝手に国民を逮捕しないことを王に確認させた。

しかし、チャールズ1世も絶対主義の王様ですから、議会の要請をハイそうですかと、受け入れたくはない。翌年王は議会を解散して、以後11年間は議会なしで専制政治をおこなった。

この間に、王がイギリス国教会を強制しようとして、スコットランドで反乱が起きた。チャールズ1世は自ら軍隊を率いて、反乱鎮圧に出かけたのですが、反乱軍の勢いが激しくて引き返してきた。その後も、チャールズ1世は戦費が足りなくて苦戦。とうとうスコットランド軍は国境線を超えて攻め込んできて、王は賠償金を支払って降伏する事になった。

ピューリタン革命

ところが、この賠償金を支払うには増税しなければならない。新たな課税をするには議会を開かなければならぬ。というわけで、チャールズ1世は議会を開きますが、とたんに議会はそれまでの王の専制政治を批判して、王と対立した。

その結果、王と議会はそれぞれ軍隊を組織して戦争になったのです。内乱ですね。これが、ピューリタン革命（1642～49）。議会の多数派がピューリタンだったのでこう呼ばれます。

王を支持する貴族たちのグループを王党派、議会のグループを議会派という。王党派は、みんな戦争の

口だから、軍事的には圧倒的に強かった。議会派は、ジェントリや商工業者が中心ですから、戦争のやり方なんかわからない。兵士も義勇兵や地方の民兵中心でみんな素人です。

軍事的には押されっぱなしの議会派を勝利にみちびいたのがクロムウェルという人物です。出身階層はジェントリ、宗教はピューリタン。典型的な議会派ですね。かれは、鉄騎隊という部隊を組織して、王党派軍をめざましい勢いで破って注目されます。この鉄騎隊がそれまでの他の部隊と違うのは、敬虔なピューリタンの信者を選びすぐって兵士に採用したことです。戦闘前夜にはクロムウェルを中心にして跪いて神に祈りを捧げたりする。宗教的な団結力のある部隊でした。

しかも、クロムウェルは兵士たちにきちんと給料を払った。給料の遅配、欠配が当たり前だった時代ですから、これは画期的です。兵士たちもやる気が出ますね。

そして、兵士に能力があれば身分が低くても抜擢して隊長に任命した。靴屋や馬飼い出身の隊長がいたという。当時のヨーロッパは完全な身分制社会ですから、能力本位の人材抜擢は非常に珍しいことだった。部隊に規律と信頼、そしてやる気をあたえたことが、鉄騎隊の強さになりました。

鉄騎隊の活躍で、やがて議会派の軍隊すべてが、鉄騎隊をモデルにした新型軍に改革され、クロムウェルは事実上その司令官になった。

新型軍は1645年にネイズビーの戦いで王党派軍に勝利しました。その後、ゆきづまったチャールズ1世はスコットランドに逃げ込みますが、スコットランド軍につかまってイギリス議会に引き渡された。

このころには議会派は三つのグループに分かれていた。長老派、独立派、水平派です。長老派は穩健なグループで、国王に対して妥協的。革命に対してあまり熱心ではない。王と妥協せず、きっちり革命をやりきろうというのが独立派。ジェントリが多く、ピューリタン革命の中心勢力で、クロムウェルもこの派です。水平派は最も過激なグループで人民主権を主張した。人民が一番偉い、王なんかなくしてしまえ、と主張した。貧しい農民出身の兵士に影響力があった。

王を捕らえたあと、クロムウェルは王に妥協的な長老派を追放して、王を処刑してしまった。国王の罪名は「暴君、反逆者、殺戮者」。

これは王を処刑したときの絵です。広場に処刑台が設けられて、そのまわりを議会派の兵士たちが取り巻いて警備しています。王党派が王を奪還しにくるのを防ぐためですね。処刑台の上には覆面をつけた男たちがいる。これは首切り役人。恨まれないように顔を隠しているのです。ひとりは血の付いた斧を持っている。今、チャールズ1世の首を切り落としたところなのです。台の上に首のない死体が小さく描かれています。よく見ると、首の切り口からピューッと血が吹き出ています。もうひとりの覆面男が、首を持った腕を伸ばして、これがチャールズの首だ、と集まった観衆に示しているところです。手前左側に大きく描かれてこちらをみているのが、この国王処刑の仕掛け人、クロムウェルです。

国王処刑の瞬間に居合わせた人物が、そのときの模様を書き残している。それによると、チャールズ1世の首を切ったその瞬間、「オゥー」という何とも言えない暗いどよめきが起きたそうです。「ああ、本当に王様を殺してしまった。成りゆきじょう仕方なかったとはいえ、とんでもないことをしてしまったなあ」という意味のどよめき。悪い王様をやっつけた、万歳！という雰囲気ではなかったそうです。

このあと、王のいない政治体制が10年ほどつづきます。イギリス史上唯一の共和政の時代です。政治を取り仕切ったのはクロムウェル。かれは水平派の勢力も弾圧し、独立派のリーダーとして事実上イギリスの独裁者になりました。

共和政時期のクロムウェルの政策をみておきます。

まず、アイルランド征服（1649）。イギリスは王党派の地盤となっていたアイルランドに軍隊を送り、この島を占領します。征服されたアイルランドの人口は半減したというからすさまじい。クロムウェルはアイルランド人の土地を徹底的に没収した。この結果、耕地の三分の二はイギリス軍将校と、戦費を出資していたロンドン商人のものになった。アイルランドの農民は小作人として徹底的に搾取され、飢餓すれすれの生活を送るようになります。これ以後、アイルランドは20世紀になるまでイギリスの植民地となるのです。

次に、航海法（1651）の制定。イギリスの海外貿易上最大のライバル、オランダに打撃を与え、イギリスの産業を保護するための法律。オランダの貿易船がイギリスとその植民地に入港できないようにした。

この法律が原因でオランダとの間に戦争も起きている。第一次英蘭戦争（1652～54）です。何回かの海戦がおこなわれて、勝敗はつきませんでしたが、講和条約はイギリスに有利に結ばれました。

クロムウェルは1653年、護国卿という地位についた。護国卿になったクロムウェルは紫のマントを羽織ってみんなの前に出てきたという。紫というのは、ヨーロッパでは皇帝や王のシンボルカラーです。ちなみに中国では皇帝の色は黄色ですよ。

だから紫の色を着ていたというのは、護国卿という地位が限りなく王に近いものだったということです。日本で言えば、豊臣秀吉がなった関白、太閤みたいな雰囲気でしょうか。クロムウェルは王になりたかったけれど、軍隊に反対されたので護国卿で我慢したという説や、反対に、王になるつもりはなかったけれど、イギリス国民は王様がいないと不安がってしょうがないので、王のような格好をして国民の要望に応えた、という説もあるようです。

イギリスは、主要先進国中いまだに王室が残る珍しい国です。その理由を考えていくと、この護国卿というのは面白いテーマですね。

クロムウェルは1658年に死去します。死ぬまで護国卿として独裁政治をつづけましたが、晩年にはその政治に対して不満を持つ勢力も出てきました。とにかく、クロムウェルの政治は、厳格で暗かった。かれは熱心なピューリタンだったから、酒や賭博は禁止されていて、庶民にとっては楽しみの少ない時代だったと思います。クロムウェルの時代にはみんな我慢していたけれど、クロムウェル死後、息子のリチャードが護国卿の地位を継ぐと不満が爆発した。リチャードは父親ほど政治的な手腕がなかったので、政治運営に行き詰り翌年には政権を放り出してしまった。

王政復古と名誉革命

誰が、政権を担当するのか混乱する中で、議会が王政を復活させるという結論を出した。ピューリタン革命で処刑されたチャールズ1世の息子、チャールズ2世が王としてイギリスに招かれます。チャールズ2

世は父親1世が処刑されたあとはフランスなどヨーロッパ各地を転々として落ちぶれた生活をしていました。

チャールズ2世が即位したのが1660年。これを王政復古といいます。ステュアート朝が復活しました。

チャールズ2世は即位するときに、ピューリタン革命中の人々の言動を罪に問わないこと、ピューリタンの信仰も認めることを約束します。革命中の政策も一部は認めるのです。航海法などはこのあとも実施されています。王政が復活したからといって、すべてが革命前に戻ったわけではないということです。チャールズ2世にしてみれば、議会に逆らって、父親のように処刑されではたまらんと考えていたはずです。だから、最初はおとなしくしている。

ところが、だんだん絶対主義的な王様になりたくなってきた。同時期にフランスではルイ14世という絶対主義の典型的な王が、それこそおもう存分権力をふるっているのを見て、俺だって、と思いはじめた。

チャールズ2世はカトリックの信者を官僚に任命して、自分の手足として動かそうとしました。イギリス国王はイギリス国教会の首長という立場があるのですが、チャールズ2世は隠れカトリック信者だったので、カトリックの官僚を使って専制政治をおこなおうとしたのです。

これに対して、議会は1673年に「審査法」という法律を作った。これは、イギリス国教会信者以外は官職につけないという法律。カトリック信者を官僚にしないためのものですね。

さらに、1679年、人身保護法を制定して、王による不当逮捕と投獄を禁じた。このようにして、議会と国王の対立は徐々に高まってきた。

やがて、チャールズ2世が死去すると、弟のジェームズ2世が即位した。

このジェームズ2世も政治的には絶対主義をおこなおうとした。しかも、ジェームズ2世はカトリックであることを公言していた。イギリス国教会の首長としてふさわしくない。しかも、絶対主義の信奉者です。これで、議会うまくいくわけがない。ところが、議会は我慢をする。なぜかというと、即位したのが52歳。このときに息子がいなかった。年齢的にいって、これから王子が生まれる可能性はまずない。だから、もう少し我慢すれば王は死んで、跡取りがいないから、そのときは適当な血縁のものをヨーロッパのどこから呼んだらよいと考えたんだ。

ところが、そのジェームズ2世に息子が誕生した。これで、話は変わってくる。だいたい、ステュアート朝のここまで四人の王はみんな同じタイプ。議会とイギリスの伝統を無視して専制的な政治を行おうとする王ばかりです。この息子もまだ赤ちゃんだけど、大人になったら、父親や祖父と同じような王になるに違いない。こう考えたら、議会も、もう我慢ができなくなった。

議会はジェームズ2世を追放して、新しい王を呼ぶ相談を始めた。これを知ったジェームズ2世はビビッた。へたに議会に抵抗して父親のチャールズ1世のように革命で命を落としてはたまりませんからね。夜の闇に紛れてロンドンを流れるテムズ川に船をこぎだし、川を下って亡命してしまった。

王の方から勝手に逃げていってくれたので、議会は一滴の血を流すことなく革命に成功した。これを名誉革命といいます（1688）。流血がなかつたことが名誉なのです。だから、国王を処刑してしまったピューリタン革命は名誉ではない。現在のイギリス人でもあまり思い出したくない歴史的事件のようです。

ジェームズ2世に代わって、イギリスの王として招かれたのは、オランダ総督のウィレムとその妻のメアリ。メアリはジェームズ2世の娘です。二人はイギリス王として招かれるにあたってイギリス議会の要請を受け入れて、議会の権利、伝統的な国民の権利などを守ることを宣言します。これを「権利の章典」(1689)という。成文憲法のないイギリスで、国民の権利を定めた法律として現在でも重要です。ウィレムとメアリ夫妻はイギリス王としてはウィリアム3世(位1689~1702)、メアリ2世(位1689~94)と呼ばれます。二人は同時に王になっていますから注意しておいてください。こういうのを共同統治という。ヨーロッパでは時々こういう形式があります。名誉革命以後は、イギリスの王は政治上の主導権をあまり発揮せず、基本的には議会にお任せするという政治形式になっていきます。

1714年にスチュアート朝は断絶し、ドイツのハノーヴァーから遠縁の貴族がイギリス王として招かれました。これが、ハノーヴァー朝のジョージ1世。この人は生まれも育ちもドイツ。要するにイギリス王位が転がり込んできたけれど、根っからのドイツ人です。イギリスに来ても見たものの、英語はほとんど分からぬし、ふるさとのドイツが恋しくて仕方がない。政治向きのことは大臣に任せて、自分はドイツに帰って、ほとんどイギリスでは暮らさない。大臣は王様に任された責任があるので一所懸命政治にはげまざるを得ない。こうして、イギリスでは責任内閣制というのが発展しました。イギリス王の特徴として有名な「君臨すれども統治せず」ですね。統治しないのですから、失敗はありません。だから、政治的な事件があっても王自身は傷つかず、その地位は安泰です。現在までイギリス王室が存続している理由の一つでしょう。

17世紀末の段階で、イギリスとほかのヨーロッパ諸国を比較すると、こういうことになる。フランスはこのとき絶対主義の全盛期です。ドイツやロシアなどは絶対主義以前の段階で、王が何とか貴族・諸侯の力を抑えたいと悪戦苦闘している。そして、イギリスはもう絶対主義の時代が終わってしまっている。これは、王の権力をコントロールするほどに議会が力をつけてきたということ。誰が議会なのか。海外貿易や産業を支配している市民階級です。イギリスはオランダとならんでいち早く市民階級が権力を握るようになった国だということができます。

第63回 イギリスの革命 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第62回 絶対主義](#)

[次のページへ](#)
[第64回 フランスの絶対主義](#)

世界史講義録

第64回 フランスの絶対主義貴

ユグノー戦争

フランスでは1562年から1598年までの間、内乱がありました。ユグノー戦争という。ちょうど、ネーデルラント独立戦争、イギリスではエリザベス1世が即位していた時です。

ユグノー戦争は宗教戦争です。フランスはカトリックの国ですが、宗教改革の影響で新教、とくにカルヴァン派の影響力が強まっていて、宗教対立が激しくなってきた。その結果起きた戦争です。カルヴァン派のことをフランスではユグノーというのです。

国王を中心とするカトリック勢力とユグノーの諸侯が対立しダラダラと内戦がつづきました。細かい経過は必要ないですが、内戦中の事件を一つだけ覚えておくこと。

サン=バルテルミの虐殺事件（1572）です。国王側と、新教側が和解することになって、王の妹マルグリットがユグノーの指導者ブルボン家のアンリと結婚した。この結婚を祝うために、全国からユグノーの有力者がパリに集まってきたのですが、国王側がかれらをだまし討ちで虐殺したという事件です。せっかく、平和になるかもしれないのに、ますます内乱は激しくなってしまった。

サン=バルテルミというのは聖人の名前で、虐殺のはじまった日がこの聖人の祝日だったので事件名になっています。

ところで、この虐殺事件の影の演出者として悪名高いのが王の母親カトリーヌ=ド=メディシス。イタリアの名門メディチ家出身の女性です。この女性が虐殺事件をおこしたわけではないのですが、イタリア女ということで、虐殺事件の責任者にされてしまって悪役扱いです。

彼女の名前は非常に細かいところなので覚える必要はないと思いますが、フランスにはこんなふうにイタリアの名門貴族から王妃を迎えることがしばしばあった。どういうことかというと、まだこの時期は、イタリアがヨーロッパ文化の先進地域で、産業もフランスより発達していたのですね。だから、フランス王族もイタリア女性にあこがれた。カトリーヌ=ド=メディシスのようにイタリアからやって来た女性によって、フランスの文化は徐々に洗練されていくのです。

さて、ユグノー戦争はどうなったか。戦争がダラダラつづく中で、王家ヴァロワ家の血統が絶えてしまって、王の妹マルグリットを妻にしていたブルボン家アンリに王位がめぐってきました。かれはユグノーのリーダーでしたね。

こうして成立したのがブルボン朝。アンリは即位してアンリ4世（位1589～1610）となる。このとき35歳でした。

ところが、フランスの大部分はかれを王と認めませんでした。なぜなら、フランス人はカトリックが多数派でユグノーは少数。アンリ4世はユグノーですから、カトリック勢力の強い地域では誰もということをきかない。アンリ4世をフランス王と認めたのは全土の六分の一しかなかったのです。かれは首都パリに入ることもできなかった。

そこで、アンリ4世は裏技を使った。カトリックでなければフランス王と認められないのならカトリックになってしまえ、ということで、カトリックに改宗してしまった。信仰というのは心の奥底、人格と切り離せないようなものでしょう。そう簡単に改宗できるものではないと思うのですが、アンリ4世は政治家としての利害に自分の信仰心を従属させた。これは、本心からの改宗ではない、と当時も非難されましたが、カトリック側にとって悪い気はしない。とりあえず、これでカトリック側はかれの味方についた。一方、激怒するのがユグノー勢力です。今まで自分たちがリーダーと仰いでいた人物が王になったとたん、敵側の宗教に寝返ったのですから、当然許せない。王としては、彼らの怒りも鎮めて、自分の王権に服属してもらわないと、内乱がいつまでもつづく。

1598年、この問題を解決するために、王は「ナントの勅令」を発布した。ナントは、王がこの法律を出した町の名前。内容は、カトリック、ユグノーの両派に信仰の自由を認めるというもの。ユグノーでも弾圧しませんよ、ということです。

今の感覚では、信仰の自由なんて当たり前ですが、当時はカトリックの国が国民に違う宗派の信仰を認めるというのは、画期的なことだったのです。スペインやイタリアではカトリック以外を信じていたら火あぶりの刑ですからね。

信仰の自由が認められて、ユグノー勢力もアンリ4世を認め、ユグノー戦争はようやく終わりました。この内乱でフランスの大諸侯の力が衰えました。そのため、アンリ4世につづくブルボン朝の王様たちにとって、絶対主義を実現しやすい条件ができあがりました。

----- フランスの絶対主義 -----

アンリ4世をついだのがルイ13世（位1610～43）。かれに仕えた宰相がリシュリュー。リシュリューの名前はしっかりと覚えてください。『三銃士』などで敵役として登場するキャラクターですが、実際のリシュリューはフランスを発展させるために誠心誠意努力した人物。「余の第一の目標は国王の尊厳であり、第二は王国の盛大である」とはリシュリューの言葉。

ドイツで起きた三十年戦争にも介入して、領土を拡大するなど、この時代にフランスはヨーロッパの政治に大きな影響力を持つようになります。

次の王がルイ14世（位1643～1715）。フランス絶対主義を代表する王です。

わずか5歳で即位したので、小さい頃は宰相マザランが政治を運営しました。マザランもリシュリューと同じようにフランス王国と王権の発展をめざした。王権を強化するために貴族階級などの既得権を奪おうとしたため、貴族が反乱を起こす。これがフロンドの乱（1648～53）。一時期反乱軍がパリを占領し、マザランは幼いルイ14世をつれてパリから逃れたほどでしたが、最終的に反乱は鎮圧され、結果的に中央集権化が進みました。

1661年、成年に達したルイ14世の親政がはじまります。親政というのは、王が自分で政治をするということですよ。

ルイ14世の政治を見ていきましょう。

経済政策。コルベールという人物を大蔵大臣に任命して、重商主義政策を展開した。開店休業状態だったフランス東インド会社を再建し、海外貿易に乗り出しました。

文化奨励。今のわれわれがイメージとして思い浮かべるヨーロッパの王侯貴族の暮らしを作り出したのが、ルイ14世です。

宮廷貴族の礼儀作法、ファッショなど、この時代に確立したものが多い。

象徴的なのが、ヴェルサイユ宮殿の造営です。場所はパリから南西約20キロ離れたところ。ここに大規模で豪華な宮殿を建設した。宮殿には王、貴族、官僚など5000人が住んでいた。そして、宮殿の周囲の付属の建物に兵士や召使いなど1万5000人ほどが住んでいたという。宮殿というけれど、王が住むだけではなく政府の機能もここに移したから、新しい都市を建設したといった方がよい。

この写真はヴェルサイユ宮殿の中でも有名な鏡の間。幅10メートル、奥行き75メートルの大宴会場です。ここに大きなガラスと鏡がずっと並べられているわけだ。鏡というのは大きくすればするほどゆがみも大きくなる。当時、ゆがみの小さい、大きな鏡を作るのはイタリアの特別なガラス工房しかなかつた。一枚の鏡でも非常に高価だったそうで、それを惜しげもなく使っているのが鏡の間のミソ。文字通り夢の世界だったわけ。

こんな宮殿を造営した国王ルイ14世の威光は高まるばかり。ヨーロッパ中の君主のあこがれの的。のちに、ヴェルサイユ宮殿を真似した宮殿が世界中で造られます。日本の赤坂離宮、今は迎賓館になっていますが、これもヴェルサイユ宮殿をまねたものです。

フランスの貴族たちは、かつてのように王権に反抗するだけの力はない。王から年金をもらって暮らしているものもいる。少しでもルイ14世に「お近づきになりたい」と思っていたようです。王あっての貴族なのです。

ヴェルサイユ宮殿には王以外に貴族たちが住んでいたと言いました。貴族は全体としてはものすごい人数がいるので、ヴェルサイユ宮殿に住めるのはルイ14世のお気に入りの貴族だけです。ヴェルサイユ宮殿に住めるだけで貴族としての箔がつく。

ルイ14世も、そういう貴族心理をうまく見抜いて、自分をスーパースターとして演出していた。

朝起きる時から、着替え、食事、散歩と、すべての王の行動は儀式化されていて、選ばれた貴族たちがその儀式に参加することができる。コップやハンカチを王に渡す役が、貴族たちに割り振られていて、そういう役目をもらったら名誉なのです。食事がすんだら朝の散歩ですが、どの貴族が散歩にお供できるかは、王の指名によります。だから、散歩の前には貴族たちが宮殿の広間に詰めかける。王は、ぐるりと貴族たちを見渡して、「○○公爵、●●伯爵、・・・・」と、その日の散歩のお供を指名する。指名された貴族たちは、それこそ天にも昇る心持ちで散歩について行くわけです。

こういうときにルイ14世は、どういう基準で選ぶかというと、豪華でお金のかかった衣装・装飾を着けている者を選んだ。王のお供をする者は、ゴージャスでなければならないのです。だから、王の寵愛を得ようとするためには、借金をしてでもドレスアップをしなければならなかつた。ファッショんでフランスがヨーロッパ文化の華となるのには、こんな事情があったのです。ただし、こういうむなしい贅沢をつづけなければならないので、貴族たちの経済的な負担は大変でした。多くの貴族はますます政府、というのはルイ14世ですが、に頼らなければ経済的に成り立っていくかなくなつていった。

ついでにファッションの話もしておこう。ルイ14世の肖像画、これが、ヨーロッパ最新のファッション。

貴族のあこがれの的です。ズボンは短くて、足にぴったりのタイツをはいています。われわれが今はいろいろな長ズボンは、下層民の服で、貴族ははきません。

ヘアースタイルも特徴的。このくしゃくしゃとした長い髪、これは、カツラです。フランスでのカツラの大流行が、やがてヨーロッパ中に広がり、その正装として定着しました。モーツアルトやベートーベンの肖像画、見たことあるでしょう。かれらも長髪バーマでしょ。あれもカツラ。かれらはルイ14世の時代から100年以上あとの人たちです。イギリス国会上院の議長は今でもカツラをしている。さすがに伝統の国ですね。（ベートーベンのぼさぼさ頭の肖像画はカツラはつけていないそうです。ご指摘ありがとうございました。）

なぜ、カツラをするようになったかというと、ルイ13世に原因がある。ルイ13世は若禿でした。それで、カツラをかぶるようになったのですが、王様一人がカツラをかぶっていると禿をかくしているのがバレバレなので、取り巻きの貴族たちも同じようにカツラをするようになった。どうせするなら派手に、ということでこんな奇抜なカツラが誕生し、ルイ14世時代になると、これが正装にまでなったというわけ。

ちなみにルイ13世時代というのは、ユグノー戦争の混乱の余韻が残っていて、宮廷のマナーというのは滅茶苦茶だった。これではいかん、と考えた貴族の婦人たちによって、サロンというのがつくられて、ここから貴族らしいエチケットやマナー、おしゃれな会話がだんだんと普及するようになった。

それでも、ルイ13世の頃はまだまだひどかったらしい。とくにルイ13世その人が、エチケットとは縁遠い人だった。ルイ13世の成長記録が残っていて、それによると、かれが初めて入浴したのが7歳、顔を洗ったのが9歳だという。ヨーロッパではペストの流行以降、入浴の風習が廃れたんですね。入浴で感染すると考えられたのです。でも、ルイ13世は極端です。全然体を洗わない。当然臭い。ルイ13世のそばに仕えた女性によると、王に近づくと「腐った肉のようなにおい」がしたという。たまらんね。王を臭いと言っている女性も、入浴する風習がないから臭いわけ。やっぱり臭いのはイヤです。そこで、体臭を誤魔化すためにフランスで香水が発達した。体臭を誤魔化そうと考えることも、エチケットの観念が普及してきた証拠。

しかし、ルイ13世自身はそういうエチケットの観念とは対極にあった人で、気にくわない相手に口の中のモノを吐きかけたり、ズボンを穿いたままジャジャーンとオシッコをして、自分の不快感を表現したと伝えられている。野蛮人ですね。

宮廷のマナーが確立してくるのがルイ14世の時代。洗練された文化の中心としてヴェルサイユがヨーロッパのあこがれとなるのですが、それでも、今のわれわれの感覚で考えると、まだまだ変な風習はたくさんある。

有名なのはヴェルサイユ宮殿のトイレの話。ヴェルサイユ宮殿は住んでいる人の数に較べて、トイレの数が極端に少なかった。どこで用を足すかというと、オマルですね。ところが、みんながちゃんとオマルで用を足すわけではない。人のあまり通らない階段の踊り場などには、結構してあったという。それから、オマルの中身はどこに捨てるかというと、召使いの人たちがオマル抱えて庭園に出て、草木の陰にジャバッと捨てる。だから、見た目はきれいなヴェルサイユ宮殿の庭園も、香ばしい匂いが漂っていて、へたに林の中に足を踏み入れると、グチャッ、ということもあった。

話が、だいぶそれてしましました。ルイ14世の政治に戻ります。

ルイ14世は、フランスの領土拡張のために積極的に外征をおこなった。

南ネーデルラント継承戦争（1667～68）、オランダ侵略戦争（1672～78）、ファルツ継承戦争（1689～97）。

さらに、スペイン継承戦争（1701～13）です。スペインのハプスブルク王家が途絶えたあと、ルイ14世は自分の孫をスペイン王にしようと考えた。そうなると将来は両国が合体するかもしれない。ブルボン家があまりにも大きくなりすぎるので警戒した周辺諸国が、ルイ14世の孫の即位に反対する。その結果起きた戦争です。

この戦争は1713年のユトレヒト条約で終結します。この条約で、ルイ14世は自分の孫をスペイン王にする事を列国に認めさせることができました。ただし、将来にわたってフランスとスペインが合体しないことを条件として。また、この条約で、海外の植民地の多くを失いました。領土と引き換えに反対する国を買収したことです。特にイギリスが北アメリカや地中海に領土を増やして得をしました。

ルイ14世のフランスは、たびかさなる戦争で、少しばかり領土を拡大しますが、戦争の負担は重税という形で国民にのしかかった。これが、徐々にフランスの経済を悪化させていきます。

もう一つルイ14世の失政がある。これが、1685年の「ナントの勅令の廃止」です。この結果、信仰の自由を認められなくなったユグノーは、フランスから逃れてオランダなどに移住した。ユグノーは豊かな商工業者が多かったから、結果として富裕な市民階級がフランスからごそりいなくなってしまった。結局、政府の税収は減るし、産業の発展という意味でも大きな損失となった。

ルイ14世治世の末期には、人口の一割が乞食同様だったという記録もある。農民反乱もしばしば起こりました。見た目の華やかさの陰で、フランスの政治、経済の矛盾は大きくなっていた。この矛盾が爆発するのが、ルイ14世の次の次の王、ルイ16世の時。フランス革命です

(20020226改稿)

第64回 フランスの絶対主義 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第63回 イギリスの革命](#)

[次のページへ](#)
[第65回 ドイツの混迷・三十年戦争](#)

世界史講義録

第65回 ドイツの混迷・三十年戦争

三十年戦争

イギリスやフランスが絶対主義国家として中央集権化を図っているときに、ドイツでは内乱が起きていました。これが三十年戦争(1618~48)です。三十年間つづいたので三十年戦争という。単純なネーミングです。しかし、戦争の中身は複雑でした。この発端は宗教対立です。

ちょっと復習。1555年、神聖ローマ皇帝カール5世はアウグスブルグの宗教和議をだし、ドイツの宗教内乱はいったんはおさまりました。アウグスブルグの宗教和議は、新教徒にも信仰の自由を認めるものだったけれども、いくつかの問題点があった。一つは、個人に信仰の自由が与えられなかたこと。諸侯が選んだ教会をその土地に住む住民は信仰しなければならなかた。だから、信仰の自由は、諸侯にとつての自由です。もう一つは、カルヴァン派の信仰は認められていなかたこと、です。

アウグスブルグの宗教和議は中途半端な妥協の産物だったわけです。

さて、オーストリアの領地にベーメンという土地があった。今のチェコです。ドイツのオーストリア・ハプスブルク家によって支配されていますが、民族はチェク人で、ドイツ人とは違う。宗教改革以前からローマ教会に楯突くところがあった。そしてベーメンの人々は新教を信じていた。従来ベーメンの人たちは信仰を認められていましたが、1617年、支配者が代わって、新教徒に対して弾圧をはじめた。これに対してベーメンの新教徒貴族が反乱を起こしたのです。はじめはハプスブルク家領内の内乱にすぎなかつたんですが、他の新教の諸侯がこの内乱に参加してから、戦争の規模が大きくなる。ドイツ以外の国もそれぞれ、新教、旧教を援助して介入してきたので、收拾のつかないまま30年間つづいてしまった。

新教側と旧教側の両陣営を見ておきます。

新教側で戦ったのは、ドイツの新教諸侯。デンマーク王クリスチャン4世。スウェーデン王グスタフ・アドルフ。フランスもリシュリューが新教側を応援して戦争に介入します。フランスは旧教の国なので、新教側の味方をするのは変なのですが、領土拡大が本当のねらいですから、こういうのもあります。宗教を理由に各国や諸侯は参戦しますが、どさくさ紛れに領土拡大をねらっていたと考えていい。デンマーク王やスウェーデン王が参加した理由もそこにあります。

旧教側は、神聖ローマ帝国皇帝がその中心です。オーストリアのハプスブルク家でしたね。同じハプスブルク家のスペインも旧教側で参加。

旧教側で大活躍したのが皇帝軍総司令官ヴァレンシュタインでした。この人は傭兵隊長。皇帝の支払う巨額の資金で2万以上の傭兵部隊を率いて大活躍します。

三十年戦争で兵士となったのは大部分が傭兵でした。傭兵がドイツの農民など一般民衆にものすごい被害を与えたのです。傭兵はお金で雇われる兵隊です。国を守るために志願して兵士になるような、近現代の兵隊とは全然違う。給料さえ払ってくれれば誰にでも雇われるのです。ヨーロッパのどこかで戦争が起こ

ると、傭兵のグループはそこへ行って、自分たちの部隊を売り込む。そして、高く雇ってくれる陣営に参加する。三十年戦争のような長期の戦争になれば、ずっとひっきりなしに戦闘がつづいているわけではなくて、だいたい大きな合戦が一つあつたら、しばらくは中休みがあります。なぜかというと、諸侯や皇帝は常に莫大な給与を傭兵たちに払い続けられないからです。一つ合戦をやつたら資金が底をつくから、傭兵を首にします。資金がたまつたらまた傭兵を雇って合戦をする、そういうサイクルで動いています。傭兵の立場からすると、雇われて給料をもらえている期間より、失業状態の時の方が長い。失業中でも食っていかなければならない。どうするかというと、傭兵部隊はドイツの農村を略奪して廻るのです。農民にとっては、戦争があれば、重税を課せられ、領主はその金で傭兵を雇う。村が戦場になれば、畠が踏み荒らされる。戦争がないときは失業中の傭兵部隊がいつ襲ってくるかわからない。傭兵部隊に襲われたら、略奪、暴行、虐殺、やりたい放題にやられる。

三十年戦争でドイツの人口は1800万から700万に減ったという。この多くが傭兵による被害と考えていい。

傭兵にとっては、戦争が長引けば長引くほど仕事がつづくわけだから、合戦の時も八百長試合もする。勝利の直前に戦闘を中断して、雇い主に賃上げを要求したりもしました。とにかく、兵士としては質が悪い。

これは「ブライテンフェルトの戦い」（山川出版社・世界史写真集）を描いたものです。1631年、旧教側の軍をグスタフ＝アドルフ王率いるスウェーデン軍が破った戦いです。当時の軍隊の隊形がよくわかるおもしろい絵です。この絵で四角形に見える固まりがたくさんあるでしょう。これが、当時の部隊です。長い槍を立てて四角い陣形をつくっているので、遠目にはサイコロみたいに見える。

一見すると、古代ギリシアの重装歩兵の密集隊形のように見えますが、中身は全然違う。ギリシアの重装歩兵は、密集して敵に向かって全速力でかけていきますが、このドイツの部隊はゾロゾロとゆっくり進軍します。決して走らない。なぜか。だいたい百人で一部隊になっていて、四隅に将校、真ん中に隊長がいます。かれらは諸侯直属の貴族。それ以外の兵士は傭兵か、もしくは無理矢理あつめられた農民兵。やる気も忠誠心もない。つまり、自分の命が本当に危ないと思ったら逃げてしまう。四隅の将校は部隊の隊形が崩れないように見張っているのです。目の前に敵が出現しても、「突撃！」なんて命令して傭兵を走らせたら、どこに走って逃げてしまうかわからない。だから、走らせない。隊形を崩さずにゆっくり進むのです。部隊の真ん中にいる指揮官が四隅の将校に対してどちらに向かって進むのか、そのつど指示をあたえます。

こういう具合で、実際に敵軍と接触して戦闘が始まるまで、四角の隊形は崩しません。戦闘が始まるとどうなるかというと、敵も味方も傭兵で、命よりも金が欲しいですから、真剣に戦わない。雇い主の諸侯たちが見て、サボっている、と見られない程度にやるだけです。だから、なかなか戦争の決着もつかなかつたのです。

三十年つづいた戦争も、ようやく集結します。戦争に関わったドイツ国内の封建諸侯、その他フランスやスペインなどの参加国が集まって、国際会議が開かれて、条約が結ばれます。1648年のウェストファリア条約です。

ウェストファリア条約の内容。

1. ドイツ国内の諸侯の独立状態を認める。

ドイツは、神聖ローマ帝国皇帝が統治する帝国という建前でしたが、現実には統一国家ではなく、皇帝は名目的なものでした。この実体を認めようというのです。これ以後、諸侯の統治する地域は領邦国家とよばれ、事実上の国になります。諸侯は「領邦主権」をもって、その国を統治するのです。これまでと同じように、神聖ローマ帝国皇帝はいますが、単なる名誉ある称号にすぎなくなります。この称号を持つのはハプスブルク家ですが、ハプスブルク家の領邦はオーストリア。ですから、神聖ローマ帝国皇帝が実際に支配しているのはオーストリアとそれに付随する地域だけになります。

2. ルター派と共にカルヴァン派にも信仰が認められた。ドイツでの話ですよ。

3. スイス・オランダの独立を正式に承認。

スイスもオランダも以前から事実上独立していたのですが、この国際会議の席上で正式にそれが認められたということです。スイスもオランダももともとハプスブルク家の領地だったので、この件が取り上げられたのです。

4. フランスがアルザス地方を獲得。アルザス地方はもともとドイツの一部だった地域です。

5. スウェーデンもドイツに領土を拡大。

以上です。

三十年戦争の結果、ドイツはどう変わったか。2点を押さえてください。

1. ドイツの農村や産業が徹底的に荒廃した。

2. イギリス、フランスが中央集権化を進めているのに対して、ドイツは逆に分裂を固定化させた。

第65回 ドイツの混迷・三十年戦争 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第64回 フランスの絶対主義](#)

[次のページへ](#)

[第66回 プロイセンとオース](#)

[トリア](#)

世界史講義録

第66回 プロイセンとオーストリア

----- プロイセン -----

三十年戦争の結果、バラバラになってしまったドイツの中にプロイセンという国がありました。1618年、ブランデンブルグ選帝侯領とドイツ騎士団領という諸侯の領土が合体してできた国です。支配者はホーエンツォレルン家という。宗教は新教。プロイセンは飛び地になっていて、大きく東と西に分かれています。東側の領土はポーランドの中にあり、西の領土は神聖ローマ帝国の中にあるというややこしい国です。まあ、領土が飛び地になっているというのは、当時は珍しくはないんですが。で、プロイセンが出来たときの正式国名はプロイセン公国といった。公国というのは王国よりもワンランク下です。その後、プロイセンは国力をつけてきて、スペイン継承戦争の時にオーストリアを支援しました。その見返りとして、1701年、王国に昇格した。プロイセン「王国」になったわけだ。オーストリアは神聖ローマ帝国皇帝として、ランク付けできるのです。

これ以後、プロイセン王国はさらに発展していく。最初に発展の基礎をつくったのがフリードリヒ=ヴィルヘルム1世（位1713～40）です。あだ名が「兵隊王」。軍隊を強化して軍国主義的国家建設をすすめた。とにかくプロイセン軍を強大にすることに熱中しました。宮殿の庭園をつぶして練兵場にしたくらいです。かれは常備軍をつくるのですが、傭兵は金がかかるし、質も悪いから、徴兵制で農民を集めて軍隊を作り上げた。それでも兵士が足りないので誘拐もやった。徴兵係がずっと農村を廻って、体格の立派な若い農夫がいたら無理矢理さらってくる。さらわれて気がついたら兵隊にさせられているのです。こんなふうにして8万人の常備軍を作り上げた。当時のプロイセンの人口が200万人程度ですから、すごい割合ですよ。人口の4%ですからね。今の日本だったら400万人以上になる。

無理矢理集められた兵士ですが、彼らを命令に従わせるために、プロイセン軍は厳罰主義をとります。たとえば、命令拒否は銃殺です。死にたくないから上官の言うことに従いますわな。誘拐されてきた兵士たちは、脱走してふるさとに帰りたいとおもう。脱走の罰が、また厳しい。「列間鞭打ち」というのをやった。脱走した兵士は、裸にされて走らされる。どこを走るかというと、自分の部隊の兵士たちが二列に並んでいる真ん中を駆け抜ける。部隊の兵士たちは、おのれの鞭を持っていて、裸で走ってくる脱走兵を打つのです。

仲間に打たれる方もつらいけど、仲間を鞭打つのもつらいよ。走り終えたら、身体はずたずたで虫の息です。こういうスパルタ式軍国主義をプロイセンはおこなった。この時期、イギリスやフランスでは兵士に対する鞭打ちは禁止されていたといいます。そういう意味では遅れた国だったのです。

また、フリードリヒ=ヴィルヘルム1世は、とくに背の高い兵士を集めて「巨人軍」というのを作り、閲兵して楽しんだという。兵隊が好きで仕方がなかったのです。

とにかく、国力的にはかなり無理をしながらも軍隊を大きくして、プロイセンをヨーロッパの一流国に押し上げようとしたのです。

フリードリヒ=ヴィルヘルム1世のあとを継いだのが息子のフリードリヒ2世（位1740～86）。ブ

ロイセンを絶対主義国家として完成させた。フリードリヒ大王と呼ばれることもあります。生存中からすでに伝説となつたような大王です。

かれは小さい頃から父親の兵隊王とうまくいかなかつた。とにかく父親は、軍隊を強くすることに異常な情熱を燃やす男です。一言で言つたら乱暴で粗野。お妃でも皇太子でも気にくわなかつたらぶん殴つたり、鞭で打つたりするのは当たり前の男。

息子のフリードリヒ2世はそんな父親が嫌いで、正反対の趣味を持つようになつていったんだ。フランスから詩集や小説を取り寄せて読んだり、音楽が好きでフルートを自分で演奏したりする。そうすると、父親は将来の王がこんな軟弱なことでどうする、といって殴つたり、文学書を取り上げたりする。少年フリードリヒはますます自分の世界に逃げ込む。父と息子はお互いに理解できないのですね。

18歳のある日、とうとうフリードリヒ2世は家出を決意した。フランスに逃げようします。このときにカッテという友人も家出に誘う。カッテ君はフリードリヒに同情して、一緒に逃げてくれた。息子が逃げたことを知ると、父の兵隊王は減茶苦茶に怒った。この人は、とにかく何事も軍隊を規準に考える。家出は軍隊でいえば、脱走と同じです。絶対に許すことは出来ないというわけで、追っ手を差し向けて、逃亡中の二人を捕まえた。

ベルリンに連れ戻された二人は牢獄に入れられて、カッテは見せしめとしてフリードリヒ2世の目の前で処刑されてしまった。むごいことをしますね。

さすがに皇太子のフリードリヒ2世は処刑はされませんでしたが、この事件をきっかけに、引きこもりがちな陰鬱な人間になります。いくら逃げようとしても、結局、自分が父親のあとを継いでプロイセンの王にならなければいけない。だとすれば、自分はどんな王になるのか。父親とは違ったどんな政治をすべきなのか。そんなことをフリードリヒ2世は考えていたはずです。

やがて、父親が亡くなり、かれがプロイセン王となつたときには、それまでのヨーロッパにないタイプの王になつてゐた。

「啓蒙専制君主」というのがそれです。フリードリヒ2世は、若い頃からフランスの本をたくさん読んでいたから、プロイセンがフランスと比べて、制度や文化の面でずいぶん遅れていることを知つていました。だから、フランスの先進思想を積極的に取り入れたのです。

当時、フランスでは絶対主義の絶頂期ですが、絶対主義に批判的な思想も生まれていました。迷信や偏見を打ち破り、合理的、理性的に社会を改革しようという啓蒙思想です。

本来、啓蒙思想は絶対主義を批判するもので、両立しない思想なのですが、フリードリヒ2世は二つとも一緒に取り入れてしまつた。だから、「啓蒙専制君主」といいます。専制的に絶対主義的な政治をするのだけれど、その中で不合理なものをどんどん排除していく。プロイセンがフランスなどの先進国に追いつくにはそういう方法が一番有効だと考えたのでしょう。

当時ヨーロッパの思想界で一番もてはやされていたフランスの啓蒙思想家にヴォルテールという人がいて、フリードリヒ2世は、かれと文通するのですが、それだけでは我慢できなくなつて、最後はヴォルテールをベルリンに呼び寄せて宮殿と一緒に住まわせてもいます。結局は喧嘩してヴォルテールは出でいくんですが。

フリードリヒ2世の言葉として有名なのが「朕は国家第一の僕（しもべ）である」。ルイ14世の「朕は国家である」と比べると、へりくだつた表現をしてゐますね。ここが、啓蒙思想の影響している部分だ

ね。ただ、啓蒙思想に理解はありますが、ぶっちゃけていえば、実際にやっていることは専制君主なんですよ。

さて、フリードリヒ2世は二度の戦争でプロイセンをヨーロッパの一流国に押し上げることに成功しました。

その一つがオーストリア継承戦争（1740～48）です。この年、オーストリア王にマリア＝テレジアが即位した。この人は女性です。前のオーストリア王カール6世は、男の子がいなかったので、前々から娘のマリア＝テレジアに位を譲るつもりでした。しかし、オーストリアのハプスブルク家で、これまで女性の王はいなかった。しかもオーストリア王は同時に神聖ローマ帝国皇帝の称号を兼ねます。実体のない称号といえども、伝統ある称号を女性が名乗ることに対して、ドイツ各領邦国家から反対があることは当然予想できた。そこで、カール6世は前もって各領邦国家の君主に根回しをして、マリア＝テレジアが即位しても、反対しないという約束を取り付けていました。

そういうなかで、いよいよマリア＝テレジアが即位したのです。

そこで、すかさずフリードリヒ2世は反対した。かれも、事前には「女でもかまいませんよ」と約束していたのに、です。フリードリヒ2世の本音では、別に男でも女でも構わない。オーストリアに戦争をふっかける名目さえあればよかったです。親父が作り上げた強大な軍隊を利用して領土を拡大するチャンスです。

これが、オーストリア継承戦争。マリア＝テレジアは有能な人物で、即位したばかりなのに多民族国家のオーストリアをよくまとめて戦いました。最終的に「アーヘンの和約」が結ばれて戦争は終結した。結論としては、マリア＝テレジアはオーストリアの相続を認められた。しかし、代償としてシュレジエン地方をプロイセンに割譲する、ということになった。シュレジエン地方は当時は工業の発達した地域で、人口も100万人いました。それまでのプロイセンの人口が200万をこえる程度ですから、単純に言って、プロイセンの国力は一気に1.5倍になったわけだ。

悔しいのはマリア＝テレジア。もともと、自分の即位は了解済みだったはずなのに、あとからイチャモンをつけてきたプロイセンに大事な領土を奪われて、何とも許しがたい。そこで、シュレジエン地方を取り返すための復讐戦を仕掛けました。これが七年戦争（1756～63）。

マリア＝テレジアはオーストリア継承戦争の経験から、単独でプロイセンに勝つのは無理だと考えた。そこで、軍事同盟を結ぶのですが、その相手国がフランスとロシアです。フランスは伝統的にオーストリア・ハプスブルク家とライバル関係で、常に敵対していました。三十年戦争でも、同じ旧教国でありながら、フランスは新教側で参加していましたね。それを、外交交渉を通じてオーストリアはフランスを味方につけたのです。

プロイセンのフリードリヒ2世は、オーストリアの軍事力については高をくくっていて、負けるはずがないと考えていた。フランスが敵にまわったらかなり危険だが、伝統的にフランス・ブルボン家とオーストリア・ハプスブルク家が組むはずがないと考えていましたから、両国の同盟を知ってかなりショックだった。このフランスがオーストリアと手を組んだ事件を「外交革命」といっています。現代的にはほとんど無意味な、細かい知識ですが、受験で世界史をとる人は覚えておいた方がいい。

さて、七年戦争がはじまるとき、オーストリア、フランス、ロシアの連合軍に押されて、さすがのプロイセンも苦戦します。ロシア軍がベルリン近くまで攻め込んでくるまでになります。フリードリヒ2世も、もは

やこれまでか、と覚悟をしたらしい。側近の家来が、「陛下、もうダメです」と声をかけたら、「わかっている、覚悟は出来ているよ」と言って、胸に下げているロケットを開いて見せた。中には毒薬が入っていたといいます。

死を覚悟するまで追いつめられたのですが、ここでプロイセンにとって奇跡が起きる。ロシア皇帝エリザヴェータが突然死んだのです。あとを継いで即位したのがピョートル3世。この新ロシア皇帝はフリードリヒ2世の崇拜者だった。「啓蒙専制君主」としてのかれの政治姿勢は、結構人気があったのです。で、ピョートル3世は自分の崇拜するフリードリヒ2世と戦争する気は全然ない。講和を結んで、ロシア軍を撤退させてしまった。

こんなふうに、土壇場で助かったプロイセンはその後、盛り返して最後は逆転勝ち。結局、シュレジエン地方はプロイセンの領土として確定し、オーストリアのマリア＝テレジアはなにも得るもののがなかったのです。

ちなみに、こうして勝ったフリードリヒ2世は、後々まで伝説の大王として語り継がれていった。余談ですが、第二次世界大戦末期、ナチス・ドイツの指導者ヒトラーは、自分の執務室にフリードリヒ2世の肖像画をかけて、七年戦争の奇跡をもう一度、と願っていたという。で、実際にアメリカ大統領フランクリン・ローズヴェルトが死ぬんですね。ヒトラーは、奇跡だ、と喜んだけれど、結局はドイツは負けてヒトラーは自殺したのでした。

二度の戦争を通じて、プロイセンはドイツの領邦国家の中ではオーストリアに次ぐ大国の地位を確立しました。また、かれの「啓蒙専制君主」という政治スタイルは東ヨーロッパに流行することになる。ロシアのピョートル3世みたいに、かれの崇拜者もたくさんいたのでした。

プロイセンの経済ですが、基本的には農業国です。穀物を安く生産して、先進地域である西ヨーロッパ、オランダ、イギリスなどに輸出する。そういう輸出穀物生産が経済を支えていました。そして、安い穀物を生産するために、封建的な地主制度がつづいていきます。封建制度が崩れていくイギリスとは、正反対の方向に向かうわけです。

国の指導者層も、地主貴族を中心です。プロイセンの地主貴族のことを「ウンカー」と言う。この用語は覚えておくこと。

オーストリア

ドイツの中で最大の領邦国家、オーストリアについて見ておきます。

何度も言っていますが、オーストリアを支配しているのはハプスブルク家。神聖ローマ帝国皇帝の称号を、事実上世襲しています。ヨーロッパの名門中の名門です。

ハプスブルク家は、巧みな婚姻戦略で領土を広げてきたので、その領土はあちこちに散らばっています。飛び地が多い。だから、イギリスやフランスのような中央集権化が物理的にしにくい。これは、不利ですね。

さらに、広い領土の中には、ドイツ民族以外が住んでいる地域もあった。代表的なのが、ハンガリーとチェコ（ベーメン）です。ハンガリーはマジャール人、チェコはチェク人。オーストリアは多民族国家だったのです。いまは、これらはオーストリアとは全然別の国になっているわけで、こういう地域を一つ

の国家としてまとめ上げるのは大変だった。

外交面では、16世紀以来、オーストリアの脅威になっていたのは、オスマン帝国です。オスマン帝国は、たびたびオーストリアに攻撃を仕掛けています。首都ウィーンは二度オスマン軍に包囲されている。しかし、1683年の第二次ウィーン包囲のあとは、力関係が逆転して、オーストリアが逆にオスマン帝国を攻めるようになる。

1699年にはオスマン帝国との間にカルロヴィッツ条約を結び、オスマン帝国支配下にあったハンガリーの中央部と東部を獲得した。こうして、オーストリアは中央ヨーロッパの大國に発展します。ただし、繰り返しますが、フランス・イギリスのような中央集権化は進んでいません。領土がでっかいだけです。

そういう流れの中で、マリア＝テレジア（位1740～80）が即位するわけですね。彼女の即位にプロイセンが反対して、オーストリア継承戦争が起きた話はしました。つづく七年戦争も負けてしまったので、マリア＝テレジアはダメな王様だ、とは思わないように。

オーストリアのおかれた条件が複雑すぎて、プロイセンのようにすっきり近代的な国づくりができなかつたのが根本原因です。マリア＝テレジアはその中で、大きな国をよくまとめて統治したと言える。しかも、彼女は女性ですからね。女性だからダメだという意味で言っているのではなくて、彼女はちゃんと結婚して子供もたくさん生んでいる。何人子供を産んだと思いますか。16人ですよ。16人。妊娠可能期間中はずっと妊娠している感じですね。妊娠しているからって、産休はありませんからね。女王なんですから。

しかも、この人の偉いのは、産まれた子供を全員自分の手で育てているところです。どういうことかというと、だいたい、当時の上流貴族たちは子供ができたら、どこかの誰かに預けてしまって、自分では面倒を見ないというのが普通です。昔から、上流階級というのは親子肉親の情が薄いと言われる。実際に、生みっぱなしでたまに会うだけですから、あまり親愛の情はわからないらしい。だけど、マリア＝テレジアは子供たちを手元に置いて成長を見守った。16人ですよ。

子育てをちゃんと自分でやりながら、しかも王として国家経営をきっちりこなした。プロイセンに負けたとはいえ。そういう意味では大した人物です。

ちなみに、彼女の娘の一人がのちにフランス王ルイ16世に嫁ぎます。外交革命で、フランスと友好関係を結んだ証としての政略結婚ですが、その娘がマリー＝アントワネットです。有名な王妃ですから、名前を聞いたことある人も多いんじゃないですか。フランス革命で処刑されてしまいますが。まあ、それは、あとのお話です。

マリア＝テレジアの長男がヨーゼフ2世。将来はオーストリア王・神聖ローマ皇帝ですから、彼女は息子を大事に育てるし、息子も母親を愛し尊敬していた。マリア＝テレジアは1765年、共同統治者として、かれを神聖ローマ皇帝に即位させて、自分と二人で国政をみることにした。

この親子は仲がよいのですが、マリア＝テレジアとしては一つだけ我慢できないことがあった。息子ヨーゼフはプロイセン国王フリードリヒ2世のファン。崇拜しているんです。短期間でプロイセンを一流国に押し上げたフリードリヒ2世の政治手法を学びたい、少しでも近づきたいと考えていた。しかし、マリア＝テレジアからすれば、オーストリアから領土を奪った憎い敵。それを息子が崇拜しているというのは、何とも困ったものですね。

ヨーゼフ2世は、マリア＝テレジアの死後、啓蒙主義的な内政改革を次々に実施します。だから、ヨーゼフ2世も「啓蒙専制君主」といわれる。改革の内容は、農奴解放令・農民保護のための土地税制改革・貴族の特権排除・商工業の育成など。いちいち覚える必要はありません。フランスなどの先進国に追いつくために、改革をやったということです。

しかし、これらの改革はほとんど失敗に終わります。ヨーゼフ2世の改革は、理想を追ってばかりで、オーストリアという複雑な国の実状にあっていなかった。それから、まわりの貴族たちの理解を得なかつたことなどが、失敗の理由です。

第66回 プロイセンとオーストリア おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第65回 ドイツの混迷・三十年戦争](#)

[次のページへ](#)

[第67回 ロシアの台頭](#)

世界史講義録

第67回 ロシアの台頭

モスクワ大公国

ロシア人はモンゴル帝国以来、キプチャク＝ハン国の支配下にありました。キプチャク＝ハン国が衰えると、1480年にモスクワ大公国が独立した。これが、現在のロシアの始まりです。

このときのモスクワ大公国の支配者がイヴァン3世（位1462～1505）。この人は、ビザンツ帝国、つまり東ローマ帝国の最後の皇帝の姪と結婚していた。その関係で1453年にビザンツ帝国が滅びると、イヴァン3世は「ツアーリ」という称号を使いはじめました。ツアーリというのはカエサルのロシア訛りです。だから、この称号を使うということは、ビザンツ帝国のあとを引き継ぐという象徴的な意味あいがある。ツアーリを日本語に訳すときは皇帝と訳しています。

モスクワ大公国をさらに発展させたのがイヴァン4世（位1533～84）。イヴァン雷帝ともいわれる。この人は、大貴族を抑圧し、中央集権化をすすめます。また、農奴制を強化している。それから、ツアーリを正式な称号として採用した。

激情型の性格で、ユニークなキャラクターだったらしい。ロシアでは非常に有名な王様で、小説や映画の題材に取り上げられています。有名なのが資料集に載っている絵のエピソードですね。ある時、イヴァン雷帝は長男の嫁を身なりがだらしないといって殴った。そうしたら、長男が怒った。そりや、怒ります。奥さんを親父に殴られたらね。長男と言い争いになった雷帝は、カッとなつて持っていた杖で長男の頭を打った。そうしたら、長男の頭がパックリ割れて倒れた。殺してしまったんだね。我にかえった雷帝が息子を抱きかかえて泣き叫んでいる、そのシーンを描いたものです。

この短気で凶暴な性格で、自分に逆らう大貴族たちの領地を取り上げて中央集権化をすすめていった。しかし、貴族たちの反発も大きかったようで、雷帝は六回結婚しているのですが、妃のうち五人は大貴族に毒殺されたという。六人目の奥さんを捜していく中、イギリスのエリザベス一世の姪が候補にのぼった。婚約までいったのですが、彼女の方が、あんな野蛮な国に嫁に行きたくないと、泣いていやがるので、とうとう破談になってしまった。イギリスから見て、ロシア、モスクワ大公国がどんなに野蛮で辺境の土地だったかということです。

まだまだモンゴル系の勢力も強くて、イヴァン雷帝は、モンゴル王家の血を引く貴族からツアーリの称号を譲られる、という形式をとって即位しています。ロシアがアジアかヨーロッパかもはっきりしない時代なんですね。19世紀末のロシアの文豪トルストイに『戦争と平和』という小説があります。ナポレオン戦争を題材にしているんですが、その中で、ナポレオン軍がロシアに攻め込む。モスクワの街並みを目前にして、ナポレオンが「アジアの都だ」というシーンがある。モスクワはフランス人からすればアジアなんだと、トルストイが考えていたというのは、なかなか興味深いです。

話をもどします。イヴァン4世のやったことで、もう一つ覚えておくのは、シベリア進出です。コサック隊長のイェルマークという人物にシビル＝ハン国遠征をさせた。シビル＝ハン国というのはウラル山脈の東にあったモンゴル系の遊牧国家です。こうして、シベリア方面へ進出するきっかけを作った。シビル＝

ハンはシベリアという地名の語源です。

コサックというのは南ロシア・ウクライナの辺境地帯に住んでいた人たちで、逃亡してきたロシア人の農奴が中心になってできた集団です。どこの国の領土でもない平原地帯で誰にも支配されずに共同体を作っていた。住んでいるところによって、ドン・コサックとかウラル・コサックとか、いろいろあります。男たちは、はじめは略奪などで生計を立てていた。だから、騎馬兵として優秀。ロシアはコサックたちに自治を認めるかわりに彼らを騎馬兵として利用した。20世紀の日露戦争でも騎馬軍団として登場していますよ。

----- ロシアの発展 -----

イヴァン4世が死んだあとは、ロシアは大混乱する。王家の血筋が絶え、偽皇帝が出現したり、農民反乱、ポーランド軍やスウェーデン軍の侵入などがあった。こういう混乱のなか1613年に、貴族たちの会議でミハイル=ロマノフが皇帝に選ばれて、ロマノフ朝が始まります。

その後も政治は安定せず、1667年から71年まではステンカ=ラージンの乱という大農民反乱が起きています。これは、名前だけでいいので覚えておくこと。

ロマノフ朝ロシア発展の基礎を築いたのがピョートル1世（位1682～1725）。かれの時代から正式にロシア帝国という国名になる。

ピョートル1世は、なんとかロシアをヨーロッパ風の国に仕立てあげて、近代化したいと考えた。イギリスはすでに名誉革命で絶対主義が終わっているし、フランスはルイ14世が絶対主義の絶頂期。ロシアはとすると、絶対主義以前の状態です。文化的にも非常に遅れている。ピョートルが貴族たちにエチケットについて注文を付けているので紹介しておきましょう。

人前でつばをはかないこと

音を立てて鼻をかまないこと

指で鼻くそをほじくらうこと

食後に手で口をぬぐわないこと

ナイフで歯の掃除をしないこと

食事中に豚のように口をならさないこと

笑うでしょ。これが、ロシア貴族に対する皇帝の要望。ただ、当のピョートル1世もそんなに礼儀正しい方ではなかったらしい。大酒のみでどんちゃん騒ぎが大好きだった。お気に入りの酒飲み仲間を、陸軍大臣や公爵にしたり、おちゃらけで「酔っぱらい省」という役所を作って、酔っぱらい大臣を任命して、暇があればみんなで酔っぱらい会議を開いたという。正式なパーティの時に将棋に熱中して、貴族や貴婦人たちをほったらかしにすることもあった。情熱的で、思いこんだら突っ走るところがあったようです。

さて、ピョートル1世ですが、ヨーロッパ風の国造りのためにはヨーロッパ諸国の研究をしなければいけない、と考えて、1697年、総勢250名の大使節団をヨーロッパ諸国に派遣した。ヨーロッパの文物、制度を輸入しようというわけです。このとき、じつとしていられない性格のピョートル1世は、随行員ピョートル=ミハイロフという変名を使い、身分を隠して使節団に加わります。お忍び旅行ですね。

各国を視察してまわるのですが、オランダでピョートル1世は造船所がすっかり気に入る。なんと、一職工として就職してしまった。身分を隠して働きはじめるのですが、すぐばれる。あの、背の高い男はロシアの皇帝らしいぜ、と噂が広まり、見物人が増えて仕事にならなくなつて、やめてしまうのですが、船造りがすっかり好きになる。ちなみにピョートルはものすごい大男です。2メートル13センチ。

イギリス滞在を終わったときには、宿舎の家主から莫大な損害賠償を要求されたという。毎晩のどんちゃん騒ぎの宴会で家の中が滅茶苦茶に壊されていたんですね。いかにもピョートル1世らしいですね。

17世紀の終わりから18世紀のはじめにかけて、西ヨーロッパの先進国がとっていた経済政策は重商主義です。オランダ、イギリス、フランスは、東インド会社を設立して、アジア貿易にどんどんのりだしている。

ピョートル1世も、ロシアのとるべき進路は重商主義と考えた。海外貿易を活発化しなければならないわけだね。ところが、当時のロシアは今と違って、内陸国です。港はあるにはあるがアルハンゲリスクという、ほとんど北極圏にある北の港。スカンディナヴィア半島の北側をクルッとまわらないと到達できない辺境の地。しかも一年の大半は凍っている。

これでは、ダメなわけで、もっとよい港が欲しい。当時バルト海沿岸を領有していたのはスウェーデン。そこで、良港を得るためにピョートル1世はスウェーデンと戦争をした。

これが、北方戦争（1700～21）です。

この戦争に勝利して、獲得した小さな漁村に建設したのがペテルスブルクです。湿地帯で都市建設には不向きな場所だったのですが、10年間で4万人の農奴と5千人の職人を動員して港と都市を建設する。そして、ここを新首都として貴族を強制的に移住させました。

ピョートル1世はペテルスブルクの宮殿では半日政務を執ったあとは、造船所に出かけて船を造っていたそうです。ただの船マニアではなくて、趣味と重商主義政策を兼ねていたんでしょうね。かれのあだ名は「ハンマーをふるう帝王」。

ピョートル1世の時代のロシアは東にも領土を広げて中国北方まで到達しています。中国は清朝の絶頂期。その清との間で国境線の確定をおこなっています。これがネルチンスク条約（1689）。この条約はロシアと清朝が対等です。この時点では、アジアの国もヨーロッパに劣らず繁栄しているということです。

ところで、この条約を結ぶときに何語で書類を作成したと思いますか。ロシア語と中国語、接点ないでしょ。

実は条約の原本はラテン語で書かれています。清朝宮廷にイエズス会の宣教師が仕えているんですね。かれらが、交渉で活躍したそうです。

ピョートル1世の死後は短命な皇帝がつづき、ロシアの政治は少々混乱します。プロイセンとオーストリアの七年戦争に参加したのもこの時期。七年戦争の時の皇帝はピョートル1世の娘のエリザベータ。彼女が死んで、甥のピョートル3世が即位した。フリードリヒ2世の崇拜者で、七年戦争から撤退したという話は前回しました。ピョートル3世のフリードリヒ2世に対する崇拜ぶりは徹底していて、肖像画にひざまづいたり、胸像に接吻したりする。近衛隊の兵士たちになると、こういうのはイヤなんです。自分の仕えている皇帝が、敵国の王にひざまずくなんて屈辱的でしょ。ピョートル3世はそういう兵士たちの心理がわ

からない。かれは少々知能が低かったとも言われている。近衛隊に徹底的に嫌われて、ついには殺されてしまった。近衛隊は、かわりにピョートル3世の妻を皇帝にした。これが、ピョートル1世と並び称されるエカチェリーナ2世（位1762～96）です。

エカチェリーナ2世は、ピョートル1世の政策を引き継いだ皇帝です。また、当時東ヨーロッパで流行していた啓蒙専制君主でもあります。

実は、エカチェリーナ2世はドイツ人なのです。ピョートル3世はお妃を求めて、ドイツでめぼしいお姫様をさがすのですが、ロシアは辺境の野蛮国、おまけにピョートル3世は少々頭が弱いらしい。となれば、王家や一流貴族の令嬢は行きたがらない。結局、ドイツ貴族のなかでは一流でもなく、ものすごい美人でもないエカチェリーナが、因果を含められて嫁ぐことになった。

教養ある賢い人だったらしい。ロシアに嫁いでからは夫や宮廷の人々ともうまくつきあって、親衛隊からも人気が高かった。だから、夫の死後、皇帝に擁立されたわけです。

ドイツ出身の彼女が、啓蒙専制君主になるのは、当然ですね。ロシアの社会を見て、遅れているなど感じるところがたくさんあったのでしょう。

彼女が残している「訓示」というのがあるので見てみます。

君主は絶対である…。

君主政治の真の目的は…人民からその自然の自由を奪うことではなく最高善に達するため、彼らの行為を正すことである。

ひとつめは、まさに絶対主義。ふたつめは啓蒙主義ですね。啓蒙専制君主の典型です。

彼女の言っていることは立派ですが、1773年にプガチョフの乱という大規模な農民反乱があって、これを鎮圧したあと、農奴制は強化されています。当時のロシアの新聞に農奴の売り出し広告が載っている。一応、農奴というのは移動と職業選択の自由はないけれど、売買はされない身分のはずなんですが、これでは奴隸と変わらない。

1789年にはフランスで革命がおきています。そういう時代状況のなかで、彼女の政治は、ますます反動的になったのでしょう。

領土は拡大します。プロイセン、オーストリアと共同でポーランドの領土を分けあつた。ポーランド分割という。その結果、1793年にポーランドは滅亡します。

もう一つが南方への発展で、オスマン帝国からクリミア半島を奪います。クリミア半島は、黒海に面した半島。ここから地中海へ抜けて、大西洋にでることができる。そういう意味では、重要な場所です。

東アジアにも関心を持ちます。1792年には日本にラクスマンを使節として派遣しています。これは日本人の商人大黒屋光太夫（だいこくやこうだゆう）という人が大きく関わっている。

大黒屋光太夫は現在の三重県伊勢の商人でした。米や木綿を積んで伊勢から江戸に向かう途中で難破する。アリューシャン列島のアムチトカという島に漂着したのが1783年。

一行は17人。そこに来ていたロシア人の毛皮商人に助けられて、ロシアに渡ることになる。光太夫たちは日本に帰りたいのですが、日本は鎖国中。仕方ないので、かれらはロシア人商人に連れられて、ロシア本土に渡ります。1789年にはイルクーツクに来ますが、そのときには光太夫の一行は5人に減っている。厳

しい環境や病気で死んでいくのですね。イルクーツクで光太夫は学者で企業経営をしているラクスマンというロシア人と知り合って、そのつてで1791年、皇帝エカチェリーナ2世に謁見することができました。ペテルブルクまで行っているんですからね。当時の日本人としてはけた外れの大旅行です。光太夫がエカチェリーナ2世に謁見した目的はただ一つ。日本に帰りたい、と訴えたのです。ちょうど、エカチェリーナ2世も、日本貿易に関心があったので、漂着民大黒屋光太夫を日本に送り届けるという名目で、日本に使節を送った。使節に選ばれたのが光太夫たちの面倒をみたラクスマンの息子です。5人になっていた日本人のうち二人はロシアに残ることを選びました。ロシア人と結婚したりして、生活基盤ができてしまった人たちです。結局、光太夫を含めて三人が日本に向かうのですが、そのうち一人は根室で死んでいます。

1792年、ロシア使節ラクスマンは北海道根室に着きました。幕府は、漂着民は受け取りますが、外交交渉は長崎でしかおこなわない、としてラクスマンに長崎への入港許可書を与えて追い返しました。日本との貿易交渉は事実上失敗ですね。

日本側に引き渡された光太夫たちは北海道から江戸に護送されます。鎖国の中から外国へ行っただけで罪人扱いです。

江戸では幕府の役人から取り調べを受けた。光太夫は貴重な海外の情報をたくさん持っています。ロシア皇帝と会っているくらいですから、ロシアの上流階級と幅広い付き合いもあって、ヨーロッパの制度や思想もそれなりに理解しているわけです。こういう人物を、大事にすれば日本にとって、ものすごいプラスだったと思うのですが、幕府にはそういう発想はなかった。幕府から見れば、光太夫は、世界を知ってしまった危険な人物です。一般庶民と混じわらせるることはできない。せっかく帰ってきたのに、光太夫は江戸に家を与えられ死ぬまで軟禁生活を送った。鎖国政策の被害者ですね。日本に帰ってきた漂流民が、海外知識を利用して活躍するようになるのは幕末のジョン万次郎以後のことです。（追記・授業では、このように教えましたが、その後に読んだ本によれば、自由に出歩いたり人にあつたりも出来たようです。授業での語りとは逆に、幕府が外国問題のアドバイザー的な存在として、江戸に留め置いたと考えられるようです。2013/08/28）

----- ポーランド -----

ドイツとロシアにはさまれた国がポーランド。ここは、16世紀後半にヤグロー朝が断絶してから、貴族の選挙によって王を決めていた。選挙王政という。もともと貴族の力が強かったし、王は強大な権力を持つことができなかった。だから、ヨーロッパの潮流になっていた絶対主義による中央集権的国家建設ができませんでした。

強力な中央政府を持たないポーランドは、隣国によって分割されて消滅してしまった。ポーランド分割です。

ポーランド分割は三回あって、第一回が1772年。ロシア、プロイセン、オーストリアによって、領土を奪われる。このときのロシア皇帝がエカチェリーナ2世、プロイセン王がフリードリヒ2世、オーストリア皇帝がマリア＝テレジア。この段階では、ポーランドは領土が縮小しましたが、まだ存続しています。

第二回が1793年。ロシア、プロイセンによって、さらに領土が奪われた。

第三回が1795年。ロシア、プロイセン、オーストリア三国によって、まだ残されていた領土も完全に分

割されて、地図上からポーランドが消滅した。このときにロシア軍に対してコシューシコという愛国者が抵抗運動をしています。この人はアメリカ独立戦争に義勇兵として参加していることでも有名。現在ポーランドでは英雄です。

(20020228校正)

第67回 ロシアの台頭 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第66回 プロイセンとオース
トリア](#)

[次のページへ](#)

[第68回 ヨーロッパ人とアジ
ア貿易](#)

世界史講義録

第68回 ヨーロッパ人とアジア貿易

ポルトガル人の進出とアジア貿易

ポルトガルはインド航路にどのように進出していったのか。

ポルトガル人が進出する前から、インド洋には海上交易ネットワークがありました。インド商人、イスラム商人が活躍していたのですが、特にエジプトのマムルーク朝が海上貿易に積極的で、アジアとヨーロッパをむすぶ中継貿易で利益を得ていた。ポルトガルの進出は、そこに割り込むことになる。ポルトガルは、ライバルとなるマムルーク朝の海軍を擊破して、紅海・インド洋海路を確保します。

当時、アジアでは、ポルトガル人の持っていた大砲と鉄砲の威力は抜群で、ポルトガルはインド洋沿岸各地を占領して要塞を作った。プリントに「インド洋のポルトガル要塞」という地図がありますね。ずらりとポルトガルの要塞が並ぶ。

アフリカ東海岸には、マリンディ、キルワ、モザンビーク。

アラビア半島の沖合のソコトラ島、ペルシア湾岸のホルムズ。

インド西海岸には、ディウ、ダマン、バセイン、チャウル、ゴア、アンジェディヴァ、オノール、マンガロール、カナノール、カリカット、コーチン。

セイロン島にコロンボ

ポルトガルがこうして香辛料貿易を独占しようとしたということを、実感してくれたらよいです。

ところで、香辛料貿易がどれくらいもうかかったか。これは、1506年の里斯ボンでの値段。香辛料1キントル(50.8キログラム)あたりの、輸送料を含めての原価と、販売価格です。

コショウが原価6.08クルザード、販売価格22クルザード。利益率262%。クローヴが原価10.58クルザード、販売価格60から65クルザード、利益率467から514%。ナツメグ、これは原価7.08クルザード、販売価格300クルザード、利益率4137%。要するに滅茶苦茶もうかったわけだ。だから、要塞を各地に作ってインド航路を独占しようとしたわけです。独占すれば値段はさらに上がり上げられますからね。

ポルトガルがアジア貿易にはいりこんでいく様子を見てみよう。

インドの重要な拠点ゴアを占領するのが1510年。

翌年の1511年にはマレー半島のマラッカを占領しています。マラッカは香辛料の原産地モルッカ諸島とインドの中間点。狭いマラッカ海峡をおさえる重要な中継地点です。

1517年には中国の広州で中国貿易もはじめる。中国の当時の王朝は明です。ポルトガルは、明の倭寇退治に協力して、1557年にはマカオに居住権を得ています。

ポルトガル人がはじめて日本にやってきたのが1543年。火縄銃を種子島に伝えたのが最初といわれています。その後ポルトガル人は九州各地にやってきて貿易を行った。日本史では南蛮貿易ですね。

しかし、このポルトガルのアジア貿易独占は長くつづかなかった。16世紀後半からポルトガル勢力は衰退していく。理由はオランダとイギリスの参入です。オランダ、イギリスと対抗するために軍事費がかさ

んで、この負担に耐えられなかつたようです。そもそも、ポルトガルの当時の人口は150万人。この中でアジア貿易に出かけられる成年男子となるともっと数が少なくなる。国の人ロ規模に比較してあまりにも広い交易圏を独占しようとしすぎたともいわれています。

ポルトガルがひとり勝ちしていたときでも、その香辛料の取引量は全体の14%しかなかつたという計算もある。どういうことかというと、在来のインド商人、ムスリム商人がポルトガルを避けながら、交易をつづけていたのです。

たとえば、この時期に、スマトラ島の西端にアチエー王国、ジャワ島の西にバンテン王国、中部にマタラム王国が発展してきますが、これらは、ポルトガルをさけて開発された航路沿いに発達した国々です。

ところで、16世紀から17世紀前半の東南アジア海域は「商業の時代」といわれるくらいに貿易が活発におこなわれていました。

とにかく、中国明朝の経済発展が著しい。中国貿易が活発になるのは当然の成り行きです。ポルトガルも中国貿易をしますが、1571年にはスペインもフィリピンにマニラを建設して、アジア貿易にのりだします。スペインは、ポルトガルとは逆回りのアメリカ大陸経由でアジアにやってきますから注意してください。

埠など日本の商人が積極的に海外に出かけていくのもこの時期です。イエズス会のフランシスコ=ザビエルがインドで日本人に出会ったのも、そういう例の一つです。ほかにもタイのアユタヤ朝で活躍した山田長政なども有名ですね。

オランダの進出

オランダは、1602年に東インド会社を設立しました。そして、ポルトガルを追い落としながら、積極的に植民地経営とアジア貿易の独占をめざしていきます。東南アジアの各地に商館を建設しましたが、その中心になったのが、ジャワ島中部に建設されたバタヴィア。現在のインドネシアの首都ジャカルタです。オランダは、さらに東のモルッカ諸島にも根拠地を建設します。このモルッカ諸島が、香辛料の特産地でしたね。

イギリスも香辛料貿易に参入してきます。しかし、当時はオランダの方が強い。遅れてやってきたイギリス勢力を、東南アジアから追い払おうとして起きたのが、1623年のアンボイナ事件です。

モルッカ諸島のアンボイナというところに、オランダの商館がありました。商館というよりは、要塞にちかいものですが、1623年2月のある日、この要塞の中に、日本人が入り込んで何かを調べていた。この日本人はイギリス人に雇われた傭兵だった。日本では応仁の乱以来、戦国の世が長くつづいていましたから、戦士として有能で、アジア各地で傭兵として活躍していたんです。当然、オランダ側は不審に思う。そこで、イギリス商人たちを捕らえて尋問した。実際は拷問をくわえたみたいで、苦痛に耐えかねたイギリス商人たちは、オランダ商館襲撃計画を白状したんだ。その結果、オランダはイギリス商人とその仲間を処刑した。これが、アンボイナ事件です。処刑されたのはイギリス人10人、日本人9人、ポルトガル

人1人という。イギリス人はわずか10人で、少ない気もしますが、本国から遠く離れたアジアで活動していたのは、このくらいだったのですね。

この事件で、イギリス勢力はモルッカ諸島から撤退することになった。同じ年に、イギリスは日本にあつた平戸商館を閉鎖していますから、かなりのダメージだったんですね。

結局、オランダによる香料貿易の独占が実現するのです。

翌1624年、オランダは台湾の南部を占領し、現在の台南の近くにゼーランディア城を建設する。ゼーランディアは、中国と日本に対しての貿易拠点としてつくられたものです。ちなみに、当時の台湾は、どの国の領土でもなかったのです。

このあと、オランダは日本との貿易も着々と進めていく。徳川幕府が徐々に鎖国の方針を固めていく時期で、ポルトガル、スペインは日本から撤退していくのですが、オランダだけはうまく幕府に取り入って、ずっと日本と貿易をつづけることができました。

たとえば、1637、38年、島原の乱が起きています。キリスト教の反乱ですが、このときオランダはキリスト教国にも関わらず、幕府を援助して海上から原城跡に立てこもった反乱軍に砲撃をくわえている。ポルトガル船が日本への来航を禁止されて、オランダによる日本貿易独占がはじまるのが、島原の乱鎮定後の1639年です。

オランダは、1641年ポルトガルからマラッカを奪い、1652年にはアフリカ大陸最南端にケープ植民地を建設した。ヨーロッパとアジアを結ぶ重要な中継地点ですね。

こうして、オランダはアジア航路を確保し、アジア内貿易蓄積した富をヨーロッパに送るという体制を作り上げました。

「商業の時代」から植民地経営へ

16世紀から17世紀前半まで、アジアは活気にあふれた「商業の時代」でした。ところが、17世紀後半から長い不況に入ります。

原因はいくつかありますが、日本の鎖国もその一つです。しかもしもっと大きかったのは中国の政変です。中国では1644年、明が滅亡し、かわって満州から侵入してきた女真族の清朝が成立します。ところが明の復活をはかる勢力が、台湾を根拠地にして清朝に抵抗した。この指導者が鄭成功です。この人については、またあとで触れますが、鄭成功たちは中国沿岸地域で軍事活動を展開した。清朝は、これに対抗するために、1655年以降「海禁政策」をとります。海外貿易禁止ということです。貿易が鄭成功勢力の資金源になっていたからです。さらに、1661年には「遷界令（せんかいれい）」という命令を出した。福建省・広東省などの海岸から20キロまでの住民を強制的に内陸部に移住させて、鄭成功たちを孤立させようというものです。「遷界令」は二十年近くおこなわれた。やることが徹底している。

中国は巨大市場だし、陶磁器や絹など多くの特産品がある。この中国が国際交易から完全に消えるのだから、不況になって当たり前ですね。

さらに、同じ時期にヨーロッパでコショウの大暴落がおきて、香料貿易で以前のような利益を生めなくなったことも大きな原因です。

そこで、オランダは商業活動から植民地経営へと政策を転換した。商品を運んで稼ぐのではなくて、商品を生産しようと考えたわけだ。そこで、領有地を拡大し、プランテーションをつくり、コーヒーなどを栽培する。そして、それをヨーロッパに輸出するのです。

商館を中心とした点の支配から、面の支配にかわる。当然、人も支配するようになる。それが植民地経営です。その結果、ジャワ島ではバンテン王国、マタラム王国といった国々を圧迫していくことになりました。

第68回 ヨーロッパ人とアジア貿易 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第67回 ロシアの台頭](#)

[次のページへ](#)
[第69回 大西洋ネットワーク・商業霸権の移動](#)

世界史講義録

第69回 大西洋ネットワーク・商業霸権の移動

大西洋の三角貿易

ヨーロッパは、アフリカ・アメリカ大陸とはどのような貿易をおこなっていったのか。

それが、三角貿易とよばれるものです。

アメリカ大陸と西インド諸島ではヨーロッパからの入植者がサトウキビを栽培する。綿花を栽培する。タバコを栽培する。金・銀を採掘する。労働力となったのは、アフリカ大陸からつれてこられた奴隸たちです。生産した商品はヨーロッパに輸出される。

ヨーロッパは、工業製品、銃などの武器、綿織物やガラス工芸品などの雑貨をアフリカに輸出します。アフリカでもギニア湾に面した地域が中心です。

アフリカが輸出するのが奴隸です。ヨーロッパ商人は雑貨を売って、奴隸を買い、アメリカ大陸に運ぶ。こうして、三角貿易は完成です。

三角貿易の影響について。

奴隸貿易で一番活躍したのがイギリスです。とくにリバプールの商人が有名。このおかげで、イギリスは資本を蓄積して工業化をおこなっていく。

アメリカでは三角貿易の結果、農業のモノカルチャー化がすすんだ。モノカルチャーとは、単一種の作物しか栽培しないことです。だから、その作物が値崩れすると、モノカルチャー経済の国はいっぺんに経済が破綻します。

奴隸の供給源になってしまったアフリカは、社会に破壊的な影響がでた。16世紀後半から19世紀初頭までで一千万人以上のアフリカ人が奴隸として連れ去られたという。もっと多い数字をあげる人もいます。人間がいなくなったら、その社会が発展するはずがありません。現在、アフリカは貧困で苦しんでいますが、奴隸貿易によるダメージがつづいていると考えていいかもしれない。

ヨーロッパからやって来た奴隸商人たちは、どうやって奴隸を集めたのか。白人たちが奴隸狩りをしたというイメージを持っている人がいるかもしれません、そういうことはまずなかった。白人商人たちが、アフリカの港に入港すると、現地の奴隸商人たちがすでに奴隸を取りそろえて待っているのです。アフリカ人の奴隸商人がいて、彼らは奥地に入って違う部族の村を襲ったりして奴隸を狩り集めてくるんだ。ベニン王国など、奴隸貿易で繁栄した国が成立したりもします。

資料集に「アフリカ西海岸の風景」という絵がのっていますね。これは、アフリカの港にやってきたヨー

ロッパの奴隸商人が、アフリカの奴隸商人から奴隸を買っているシーン。左端のところに帆が見える。これが奴隸船です。沖合にも停泊しています。真ん中に白人と、黒人グループが向かい合っている。これは、下に寝かされている奴隸の値段を交渉している。よく見ると、この奴隸の口を無理矢理こじ開けている白人がいます。歯茎を調べて健康状態を見ようとしているんです。あまり健康じゃなかったら値切ろうというわけだ。左では、買い取られた女性の奴隸が腕に焼きゴテをあてられている。牛と同じですね。右の向こうの方からは、何人の女性達が歩かされています。丸太棒に数人づつ首をくくりつけられて、横一列に並んでいるね。よく見ると、泣き叫んでいます。奥地からさらわれて、奴隸市が立っているこの港に、今連れてこられた、という雰囲気です。左の奥には、鞭で打たれている奴隸が見えます。奴隸船にのせられているところでしょうか。

こうして集められた奴隸たちは、アメリカ大陸や西インド諸島に運ばれるのですが、この奴隸船が地獄でした。教科書、資料集には、奴隸船の内部構造が載っていますね。ぎっしり黒く描かれているのが奴隸です。一回の航海で、できるだけ多く運べるように、船の内部を低い天井で仕切って奴隸を横に寝かせています。逃亡や反抗をさせないように、全員の足首が鎖でつながっていました。男女とも頭は剃られ、全裸です。腕には会社のブランドマークが焼き付けられています。

トイレはどこにあるかというと、ないでしょ。ただ、ワンフロアに二個か三個のバケツが、オマルがわりに用意してあった。ただ、バケツの所まで行くには、自分とつながっている何人の人たちを引きずっていかなければならぬので、事実上オマルを使うことはできなかった。どうするかというと、しかたなく横になつたまま、垂れ流します。奴隸にされた人々は、船に乗せられて出向した段階で恐怖の最高潮です。しかも、トイレさえ人間らしくできなくて、もう生きる望みはなくしている。

自殺をはかる者もいたといいます。ただ、死ぬための手段がない。どうするかというと、朝晩に食事があたえられるのですが、それを食べない。食べないと死んでしまう。奴隸商人としては、商品に死なれては困りますから、食べようとしない奴隸に無理矢理食べさせます。どんなものかはわかりませんが、マウスオープナーという道具があって、これで食べない奴隸の口を強引にこじ開けて、流動食を流し込んだ。

大西洋を横断するのにだいたい40日から70日かかった。船の中は、衛生状態が最悪ですから、伝染病、衰弱などで、奴隸たちはどんどん死んでいきます。死亡率は8%から25%。かなり幅があるが、だいたい6人に1人の割合で死んでしまうと考えたらいい。

大西洋の真ん中で奴隸船が他の船とそれ違いますね。姿が見えなくても奴隸船が近くにいるとすぐにわかったという。理由は悪臭です。数キロ先まで、悪臭が漂っていた。なるほどな、という感じですね。もう一つ有名なエピソード。奴隸船がすすむ後にはいつも、鮫の群れがついて泳いでいたんという。なぜかわかりますか？奴隸が死ぬでしょ。するとその死体は船からボーンと海に捨てられる。毎日毎日、死体が捨てられる。それをねらって鮫の大群が集まってくるんだ。なんだか、すさまじい光景です。

商業覇権の移動

海外貿易で富を蓄えた最初の国はスペインでしたが、オランダ独立の頃からスペインは衰える。17世紀前半はオランダが商業覇権をにぎります。中継貿易と加工工業で繁栄し、アムステルダムはヨーロッパ金融の中心となる。イギリスも海外貿易に乗り出しますが、オランダにはかなわなかった。1623年、アン

ボイナ事件でオランダに負けていましたね。

ところが、ピューリタン革命、名誉革命くらいから、イギリスは急速に力をつけてオランダをしのぐようになってくる。クロムウェルが制定した航海法はオランダを標的にしたものでしたね。航海法が原因で1652年から英蘭戦争がはじまります。この戦争で商業霸権が、オランダからイギリスへ移る。たとえば、北アメリカではオランダが建設した植民地ニューネーデルラントが1644年にはイギリス領になる。のちに、ここにあったニューアムステルダムという町が、ニューヨークと名前を変えて発展する事になる。

アジアでは、モルッカ諸島からしめだされたイギリス東インド会社は、しかたなしにインドで貿易をはじめますが、これが大当たり。インドの綿織物をイギリスにもっていったら、爆発的な人気をよんだ。今では、綿の布なんて珍しくも何ともありませんが、木綿というのは、軽くて、手触りが柔らかくてあたたかい。しかも白くて清潔感がある。手軽に染めることもできるし、好きな模様をプリントできる。これは、それまで一般的だった毛織物にはなかった特色です。人気がでるのもわかるね。香料貿易はオランダに取られましたが、インド綿布の貿易でイギリス東インド会社は莫大な利潤を得るようになった。やがて、綿織物を自国で安くできないかということで、産業革命がはじまるのですが、これは後の話。

オランダにかわってイギリスが霸権をにぎるのが17世紀後半ですが、このイギリスのライバルとして、登場してくるのがフランスです。ルイ14世時代以来、積極的な重商主義政策をとって、各地でイギリス勢力と衝突した。これを第二次英仏百年戦争（1689～1815）という。

ヨーロッパで戦争がおこると、それにあわせて北米大陸でイギリスとフランスが戦った。
箇条書きでいきます。

1689～97、ヨーロッパで、ファルツ継承戦争。北米で、ウィリアム王戦争。

1702～13、ヨーロッパで、スペイン継承戦争。北米で、アン女王戦争。

1744～48、ヨーロッパで、オーストリア継承戦争。北米で、ジョージ王戦争。

1755～63、ヨーロッパで、七年戦争。北米で、フレンチ＝インディアン戦争。

これらの戦争を通じて、イギリスはフランスから植民地を奪い、北アメリカ大陸の支配権を確立していました。戦争の名前は、戦争時のイギリス王の名前です。フレンチ＝インディアン戦争は違いますが。

フランスはインドにも進出していて、1757年、インドでイギリス、フランスが戦いました。プラッシーの戦いという。これも、イギリスが勝つ。これ以後イギリスは本格的なインド支配をはじめることになる、重要な戦いです。

フランスとの百年間の抗争は、イギリスの勝利で終わる。これ以後、イギリスが世界経済の中心となっていく。20世紀になってアメリカ合衆国が台頭するまで、この状態はつづきました。

まとめ

ヨーロッパの商業霸権の移り変わりと、政治体制を確認しておきます。

16世紀、商業覇権はスペインにある。カルロス1世、フェリペ2世の時代です。政治的には絶対主義がここからはじまります。経済政策は重商主義です。

16世紀末。オランダがスペインから独立戦争をはじめる。国内産業の発展がなかったスペインはそのまま没落し、オランダが商業覇権をにぎります。ポルトガルもスペインと同じ運命をたどる。

オランダの独立を助けたイギリスはエリザベス1世以後、政治は絶対主義でしたが、17世紀半ば、ピューリタン革命、名誉革命で絶対主義は終わった。かわりに市民階級が権力をにぎる。このあたりから、イギリスは急速に力を伸ばし、オランダを追い抜いて、覇権を握ります。

フランスは、絶対主義の絶頂期ですが、イギリスに対抗して重商主義政策をとる。アメリカやアジアでイギリス、フランスがしのぎを削っているときに、ようやく中央集権的な国家をつくりはじめるのが、ロシアのピョートル1世。18世紀前半の人でした。

18世紀後半になって、イギリス、フランスの先進的な部分を取り入れて、国家改造をはかったのが、プロイセン、オーストリアの啓蒙専制君主といわれる人たち。フリードリヒ2世やヨーゼフ2世でした。プロイセン出身でロシア皇帝となったエカチェリーナ2世も、啓蒙専制君主として政治改革をします。これらの国々は、イギリスやフランスのように海外に進出できるような地理的な条件がなかったこと、国内産業が未発達だったので、穀物を西ヨーロッパに輸出することで、貿易を成り立たせようとした。安い穀物を生産するために、農民に対しては抑圧的になる。海外貿易で富を得て、市民階級が発言力を増すイギリス、フランスとは、反対の政治風土が生まれていきます。

第69回 大西洋ネットワーク・商業覇権の移動 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第68回 ヨーロッパ人とアジア貿易](#)

[次のページへ](#)

[第70回 オスマン帝国](#)

世界史講義録

第70回 オスマン帝国

オスマン帝国の隆盛

14世紀から20世紀初頭まで、長い間繁栄をつづけたイスラムの大帝国がオスマン帝国です。いろいろな呼び方があって、オスマン朝とも、オスマン＝トルコとも言う。19世紀以降は単にトルコと書かれていることが多いです。

国名の由来は、建国者の一族がトルコ人のオスマン族だったからです。

トルコ人はもともとはモンゴル高原から中央アジアにかけての草原地帯で遊牧生活をしていた。これが、長い時間かけて、西に移動してきます。はじめは、イスラムの国々で軍人として重宝された。遊牧民族ですから、騎馬兵としてうってつけだった。だから、マムルーク、つまり奴隸、として西アジアにつれてこられて、活躍するものは古くからいました。やがて、部族ごとにイスラムに改宗して西に移動してくるようになる。以前に出てきたセルジューク＝トルコもそうです。

オスマン族も同じように、東から移動ってきて、現在のトルコ共和国のアナトリア地方に国を建てた。これが、1299年のこと。建国者はオスマン＝ベイ。都はブルサ。

はじめは、地方政権のひとつにすぎなかった。アナトリア地方には、同じような小さな勢力がたくさんあったのです。

オスマン朝の面白いところは、ヨーロッパに向かって領土を拡大した点です。ヨーロッパとアジアを隔てるのがマルマラ海。その一番狭くなっている部分が、ボスポラス海峡とダーダネルス海峡。オスマン朝は、ダーダネルス海峡を渡って、イスラム国家としては、はじめてバルカン半島に領土を獲得した。ムラト1世（位1359～89）の時に、バルカン半島のアドリアノープルに首都を移します。コンスタンティノープルに都をおくビザンツ帝国は、オスマン朝に領土を奪われて、まわりを囲まれる形になります。ただ、コンスタンティノープルは難攻不落。ビザンツ帝国は海上貿易をつづけながら、このあと100年間つづきます。

ムラト1世の時に、イエニ・チェリという軍隊がつくられます。これは、新領土となったバルカン半島で、白人キリスト教徒の少年を奴隸として集めてつくった軍隊です。40戸に1戸の割合で、身体強健、眉目秀麗な少年を差し出させる。これが、首都に集められ、イスラムに改宗させられ、共同生活をしながら軍事訓練を受けるのです。マムルークの一員と考えていいとおもう。イエニ・チェリはオスマン朝を支える軍事力として、他の国からおそれられるようになった。イエニ・チェリの部隊が移動するときは、軍楽隊つきで演奏に合わせながら行進する。先頭には、軍旗として大きな鍋がかかげられていた。これは、部隊の兵士は同じ釜の飯を食う仲間という、団結のしるしだそうです。バルカン半島各地では、遠くからイエニ・チ

リの軍楽隊の音楽が聞こえてくると、農民は農作業をやめて、家に隠れたという。それくらい怖かったらしい。

のちに、ヨーロッパ各国も、イエニチエリを真似て、軍楽隊をつくるようになります。

バヤジット1世（位1389～1402）の時には、ニコポリスの戦い（1396）で北方のハンガリー王ジギスムントと戦って勝利します。

こうして、バルカン半島で足固めをしたオスマン朝は、つぎに東のアナトリア地方で領土を拡大しようとするのですが、ここにあらわれたのがティムールです。モンゴル帝国の復活を夢見るティムールは中央アジアを統一して、イラン・メソポタミアを領土にくわえて、アナトリア地方にまで進撃してきた。

オスマン朝が、ティムールを迎撃ったのがアンカラの戦い（1402）。結果は、ティムールの勝利で、バヤジット1世は捕虜になってしまった。ここで、オスマン朝はいったんは滅亡するのです。バヤジット1世はティムール軍につれまわされたあげく、翌年、病気で死んでしまう。ところが、ティムール自身も1405年には死んでしまって、オスマン朝はその後再興されるのです。

復活したオスマン朝は、すぐにアンカラの戦い以前の領土を回復し、さらに領土を広げはじめる。

そして、1453年メフメト2世は、コンスタンティノープルを陥落させ、ビザンツ帝国を滅ぼした。これは、大きな事件なので、年代も含めてしっかり覚えておいてください。ビザンツ帝国は古代ローマ帝国からの流れをうけついでいるから、大げさに言えば、1500年つづいたローマ帝国がとうとう滅んだということですね。

コンスタンティノープルの陥落のようです。1000年以上もビザンツ帝国の都として栄えてきたコンスタンティノープルの守りは堅くて、三重の城壁に囲まれていた。メフメト2世は10万の大軍でこの都を攻撃するのですが、城壁を破ることができないまま、2カ月が過ぎます。

ビザンツ最後の皇帝はコンスタンティヌス11世。ビザンツが滅びることは目に見えているので、多くの市民はすでに逃げてしまっていて、皇帝が戦える者を集めたときには、4773人しかいなかつたという。しかし、たった四千人で10万の軍勢をしのいでいたんだから、鉄壁の守りだったのです。

コンスタンティノープルの海に面している部分は守りが弱いので、オスマン海軍は海から攻めたいところですが、ボスポラス海峡は潮流が速くてこれは無理だった。金角湾という入り江があって、ここに入り込めば海上からの攻撃もできる。しかし、ビザンツ側は金角湾の入り口に、大人の腕くらいの太さの鎖を張り巡らして、オスマン海軍が湾に入れないようにしていました。

これを打ち破るためにメフメト2世がとった作戦が「山越え」というもの。海から金角湾に入れないのなら、船に山を越えさせろと命令した。湾を一山こえた向こうの海岸から艦隊を陸揚げして、70隻の戦艦を山を越えて金角湾に入れたのです。ビザンツ側はびっくりですね。金角湾の向こうの山からどんどん船が降りてくるんですから。

さらに、城壁を破るために「ばけもの」とよばれる超大型の大砲を建造した。これは、長さ8メートル、砲弾の重さ600キロ。60頭の牛に引かせて、アドリアノープルから運んできます。

陸と海からの総攻撃で1453年5月29日、ついにコンスタンティノープルは陥落し、ビザンツ帝国は滅びました。最後の皇帝となったコンスタンティヌス11世は、乱戦の中で戦って死んだといわれています。オスマン朝のメフメト2世は、23歳の若さでした。

この後、オスマン朝は、コンスタンティノープルに首都を移します。コンスタンティノープルはやがて、イスタンブルとよばれるようになります。

セリム1世（位1512～20）の時には、西に進出して、イランにあったサファヴィー朝を圧迫する。さらに、エジプトに入り、ここにあったマムルーク朝を滅ぼしました（1517）。

マムルーク朝は、モンゴルの攻撃で滅亡したアッバース朝のカリフを保護していたという話がある。セリム1世は、マムルーク朝を滅ぼしたときに、カリフの子孫を見つけて、その「カリフ」という地位を譲り受けたというのです。これは、19世紀頃にオスマン朝の権威づけのために作られた伝説らしいですが、少し前までは事実として語られていました。世俗の王とか皇帝とかいう意味の称号がスルタン。全イスラム信者の指導者としての称号がカリフ。両方を兼ね備えたオスマンの皇帝を「スルタン＝カリフ」と19世紀頃から呼ぶようになります。ちょっと覚えておいてください。

セリム1世の段階で、オスマン朝は、アジア、ヨーロッパ、アフリカの三大陸に領土を持つ大帝国に発展しています。これは、ローマ帝国以来の領土の広さです。

さらに領土を拡大して、オスマン朝の最盛期となったのが、スレイマン1世（位1520～66）の時です。1526年、モハーチの戦いでハンガリーを破って、属国とします。さらにドイツ、神聖ローマ帝国に侵入。神聖ローマ皇帝カール5世の領地であるオーストリアの都ウィーンを包囲した。第一次ウィーン包囲（1529）という。イエニチエリ1万5千、スィパーヒーという騎士4万で、ウィーンを攻めた。

当時ドイツではルターの宗教改革がはじまっていて、ルター派諸侯とカール5世の対立が激しい。カール5世は、オスマン朝の攻撃をしのぐために、このときにルター派の信仰をいったん認めました。ちなみに、ルターは「トルコ人はヨーロッパの腐敗に対する神の罰だ」と言っています。

結局、オスマン軍はウィーンを陥落させることはできずに撤退した。しかし、このころからオスマン朝は、ヨーロッパの国際関係に大きな影響力を持つようになります。とくに、イタリアの支配権をめぐって、ドイツ、スペインのハプスブルク家と対立関係にあったフランスは、オスマン朝に接近して友好関係を結ぶんだ。

スレイマン1世は、フランス王フランソワ1世に恩恵として、オスマン領内のフランス人に対する治外法権、港湾での通商権、イエルサレムの守護権などの特権を与えた。この保護特権をカピチュレーションと言います。19世紀になると、フランスなどヨーロッパ諸国はこの特権を利用して、オスマン朝に圧迫をくわえますが、この時期のカピチュレーションは、オスマン朝からのフランスに対する恩恵です。オスマン朝の立場の方が強かったのです。

1538年には、プレヴェザの海戦で、スペイン・ヴェネツィア連合軍を破って、東地中海の制海権を確立。

さらに、チュニジア、アルジェリアなどアフリカ北岸、イラクを併合して、地中海を取り囲む大領土となった。

絶頂期のスレイマン1世の様子を、オーストリア大使はこう伝えている。

「スルタンは地面から1フィートたらずの、むしろ低い玉座のうえに座っていた。玉座は沢山の見るから

に高価な絨毯と精巧な細工をほどこしたクッションにおおわれていた。…スルタンの表情はにこりともせず、むしろその顔には厳しい威厳が満ちあふれていた。われわれが到着した際、式部官は手を取ってスルタンの面前に案内してくれた。スルタンは私が口上を読みあげる間、耳を傾けていた。わが皇帝陛下（カール5世）の要求に対して、見下すような物腰で、言葉少なく「よし、よし」と答えるだけであった。」

（オーストリア駐トルコ大使ビュスペックの書簡）

スレイマン1世が、神聖ローマ皇帝カール5世宛に出した手紙も紹介しよう。

「朕は、諸スルタンのスルタン、諸君主のあかし、地上における神の影（カリフのこと）、地中海と黒海、ルメリアとアナドルとルームとカラマンとエルズルムとディヤルバカルとクルディスタンとルーリスタンとイランとズルカドゥリエとエジプトとダマスカスとハレブとエルサレムと全アラビアの諸地方とバクダードとバスラとアデンとイエメンの諸国土とタタールとキプロス平原の諸地域とブダとそれに属する諸地と、そしてまた我らが剣をもって勝ちえた多くの諸国土の大王でありスルタンである、スルタン・セリム・シャー・ハンの子、スルタン・スレイマン・シャーであるぞ。その方、スペインの諸地方の王カールであろう。以下のことを知れ……」

（スレイマン1世から神聖ローマ皇帝カール5世への親書）

これでもかと、自分の支配する地名を挙げておいて、カール5世はただ「スペイン諸地方の王」だけですからね。格の違いを見せつけているようです。

スレイマン1世の時の出来事として、スンナ派を国教としたこと、壮大なスレイマン=モスクを建設したこと、付け加えておきます。

----- オスマン帝国の統治

オスマン帝国の統治の特徴をみておきます。

バルカン半島と、アナトリア地方、シリアの一部は、皇帝の直轄地で、それ以外のエジプト、アラビア半島などは、在地の有力者に統治を任せて、税金だけを納めさせるという、比較的緩やかな支配の仕方でした。

軍事封土制

直轄地では、軍事封土制をおこなった。ティマール制ともいいます。セルジューク朝やマムルーク朝でおこなわれていたイクター制の発展したものです。スィパーヒーと呼ばれる騎士に、一定の地域の徵税権をあたえるかわりに、軍事奉仕を義務づけるものです。

二聖都の守護者

オスマン朝の皇帝、スルタンは、「二聖都の守護者」として宗教的権威を持ちます。イスラム教の二大聖地であるメッカとメディナを支配下におさめていたからです。

トルコ人にこだわらぬ支配層の形成

オスマン朝は、各地にマドラサと呼ばれるイスラム法学の高等教育機関を設けて、ウラマー（イスラム学者）を育成します。ウラマーたちは有能な官僚として、民族に関係なく行政や司法、教育を担当しました。

また、イエニチエリなど奴隸出身のものでも、有能であれば高い地位につくことができた。

異教徒への寛大な支配

オスマン帝国の領土には、イスラム教以外の宗教を信じる者もいます。ギリシア正教やユダヤ教などです。オスマン朝は、これらの宗教の信者にミッレトという共同体を作らせる。それぞれのミッレトに自治と安全保障をあたえます。イスラム法にもとづく生活を強制しないから、自分たちの問題は自分たちで処理しなさい、ということだ。

外国から商売などでやってくる異教徒には、カピチュレーションという特権をあたえた。

衰退

スレイマン1世以後のオスマン朝は、ゆっくりと衰退していきます。

1571年には、レバントの海戦で、スペイン艦隊に敗れた。スペイン艦隊が無敵艦隊と呼ばれるようになったのはこれからです。。オスマン朝は、この敗北で一気に地中海の支配権を失ったわけではないのですが、ヨーロッパ人にとっては象徴的な勝利だった。

この時期くらいから、東西貿易の流れが地中海から大西洋に移っていきます。これは、オスマン朝にとってはダメージでした。

オーストリアとの戦争は断続的につづいていて、1683年にはオスマン軍がウィーンを再び包囲攻撃します（第二次ウィーン包囲）。これが失敗に終わると、今度は逆にオーストリア側が優位に立つ。劣勢のオスマン朝は、1699年にカルロヴィッツ条約でハンガリーの支配権を放棄しました。ハンガリーはオーストリアの支配下に入ります。

ロシアも、黒海北岸にあるオスマン朝の領土を徐々に奪っていきました。

フランスやイギリスもカピチュレーションを逆手にとって、オスマン朝から利権を獲得していく。

17世紀後半以後は、国内でもスィパーヒーの反乱や、地方総督の自立化傾向が強まり、オスマン朝の弱体化がすすんでいきました。

余談になりますが、モーツアルトに「トルコ行進曲」という曲がある。モーツアルトは18世紀後半の人。ウィーンで活動していた。ウィーン包囲から百年もあとに、なぜこんな曲を作ったのか。

第二次ウィーン包囲の時、ウィーンを取り囲んだオスマン軍は、軍楽隊がありますから、ウィーンの市民にプレッシャーをあたえるために、ジャンジャカジャンジャカと演奏をしていたと思う。その音楽の記憶が、人々の間にかすかに残っていたのかなと、私は想像します。ピアノを長く習っている人なら、弾ける

と思います。ちょっと聞いてみましょう。（CDを流す）

この曲のどこがトルコ風なのか。音楽の先生に聞いたら、ターン・ターン・タン・タン・タンというリズムがトルコのものだということです。ちなみに、現在のトルコの軍楽隊の演奏を聴いてみましょう。（古い陸軍行進曲「ジェッディン・テデン」をテープで流す）ウィーン包囲時代の音楽そのままではないそうですが、確かにリズムはモーツアルトと同じですね。

オスマン朝が衰え、トルコ人が恐怖の対象から、異国情緒の対象になってきたということでしょう。

第70回 オスマン帝国 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第69回 大西洋ネットワーク・商業霸権の移動](#)

[第71回 サファヴィー朝・ムガル帝国](#)

世界史講義録

第71回 サファヴィー朝・ムガル帝国

----- サファヴィー朝 -----

オスマン帝国とほぼ同時期に、イランに栄えていた王朝がサファヴィー朝（1501～1736）です。ティムール帝国が崩壊した後のイランに建国します。

建国者はイスマイール1世。この人は名門の出身で、第四代正統カリフ、アリーの息子フサインと、ササン朝最後の君主ヤズデギルド3世の娘シャハル＝バーヌーの血をひくという。本当かどうかは怪しいですが、とにかく、イスラム教創始者とペルシア王家ですから、イスラム教徒のペルシア人にとてこれ以上の高貴な血筋はない。

さらに、イスマイール1世の家は、サファヴィー神秘主義教団というイスラムの宗派の教祖さんをやっていて、かなりの信者を集めていた。

イスマイール1世は、名門としての人気と、教団の指導者としての影響力をを利用して、サファヴィー朝建国に成功したわけです。

サファヴィー朝の特色

イスラムの中でもシーア派を国教とします。伝統的にイラン人はシーア派が多いですし、西の大國オスマン朝がスンナ派ですから、これと対抗するという意味もある。

皇帝の称号には、シャーという呼称を使った。これは、イランの伝統的な王号です。イスラム教国ではあるけれど、イランの民族国家という意識もあったということです。

最盛期の皇帝がアッバース1世（位1588～1629）。オスマン朝からイランの一部とアゼルバイジャン地方を奪還して領土を拡大した。さらに、ホルムズ海峡に要塞を築いていたポルトガル人を追放する。新たに首都イスファハーンを造営する。

アッバース1世の死後、サファヴィー朝は衰退していきます。イランの話はこれでおしまい。

----- 内陸アジア（ティムール帝国衰退後） -----

ティムール帝国衰退後の、中央アジアはどうなっていたのか。

ウズベク人。

カスピ海、アラル海の北にカザフ草原という所がある。ここでは、15世紀以降、キプチャク=ハン国に属していたトルコ人と、トルコ化したモンゴル人の集団がひとつになって、ウズベク人という民族ができていた。彼らが、ティムール帝国崩壊後に、東トルキスタン地方に南下してくる。アラル海に注ぐシル川、アム川流域のオアシス地帯です。ここに、ウズベク人が建国したのが、ブハラ=ハン国、ヒヴァ=ハン国、コーカンド=ハン国。あわせて、三ハン国という。19世紀後半に、ロシアに併合されるまでつづきました。現在、ウズベキスタンという国になっていますね。

カザーフ人

キプチャク=ハン国に属していた遊牧部族が、ウズベク人が南下したあのカザフ草原で、いろいろな遊牧集団を吸収してできた民族です。トルコ系。16世紀頃には、中央アジアで大きな勢力に成長しますが、18世紀にはロシアの支配下に入った。

ウイグル人。

唐の時代から、モンゴル高原にいたトルコ系の民族です。もともとは遊牧生活でしたが、この時期には東トルキスタンのオアシスに定住して交易に従事している。東トルキスタンというのはパミール高原の東側の中央アジア。トルコ系のウイグル人が定住してからトルキスタンという地名が生まれたのです。14世紀以降にイスラム化していきました。

政治的には、大きな勢力に服属をつづけた。チャガタイ=ハン国、モンゴル系遊牧国家ジュンガル、中国の清朝などの支配下に入ります。

ムガル帝国の発展

オスマン朝、サファヴィー朝と同時期にインドでもイスラムの大國ができます。これが、ムガル帝国(1526~1858)です。

建国者はバーブル(位1526~30)。この人は、ティムール帝国の王族の血を引くひとで、もともと中央アジアの都市サマルカンド本拠地にしてフェルガナ地方を支配していた。ところが、ウズベク人の南下で、本拠地を追われてしまった。一族を率いて各地を転戦して、なんとかアフガニスタンのカーブルに根拠地を移し、サマルカンド奪還をめざした。ウズベク人の勢力と何度も戦うのですが、結局失敗。

とうとう中央アジアで、国を再建するのをあきらめて、180度方向転換して、インドに侵入した。

1526年、デリーを本拠地にしていたロディー朝を、パーニパットの戦いで破る。これ以後、本拠地をデリーに移して、インドの王朝として発展します。これが、ムガル帝国のはじまりです。

ムガルという国名ですが、モンゴルがなまつたものです。民族的には、トルコ化していますが、バーブルはティムールの子孫で、ティムールはチンギス=ハンの血を引いてことになっているからね。ティムール帝国、さらにはモンゴル帝国の復活を夢見ていました。

インドに建国したバーブルですが、本心はサマルカンドで建国したかった。涼しい中央アジアが大好き。インドは実は好きではない。食事のデザートにマスクメロンが出てくると、サマルカンドを恋しがって涙を流したという。マスクメロンは中央アジアのオアシスで作られるからです。

武人としても政治家としても有能だったバーブルは、文学の才能もあって、かれの「バーブル詩集」は、トルコ文学の傑作とされている。

「バーブル詩集」の冒頭です。
「わが心よりほかに頼るべき友なし
わが魂よりほかに信すべき朋なし」

バーブルの跡ををついだのが、息子のスマーユーン。じつは、スマーユーンが大病にかかって、心配したバーブルは息子のベッドのまわりをクルクル回りながら、自分が身代わりになるからどうか息子の命を助けてくれと、神に祈ったという。スマーユーンの病気が回復した直後、本当にバーブルは死んでしまった。48歳でした。

ムガル帝国はまだインド全域を支配しているわけではなく、北インドにも敵対勢力がたくさんあった。スマーユーンは、他の勢力に負けて、一時イランのサファヴィー朝に亡命します。そのご、サファヴィー朝の兵力を借りながら勢力を盛り返し、再びデリーを奪還しますが、宮廷の図書館の階段から落ちて、あっけなく死んでしまった。

かわって即位したのが、まだ13歳だったアクバル（1556～1605）。このあと50年間位にあって、ムガル帝国を大帝国に発展させた。重要な皇帝です。

成人してからのアクバルは、軍事、政治ともに才能を發揮して、まだ不安定だったムガル帝国をインドの大帝国に発展させた。領土としては、現在のアフガニスタンから北インドにかけて統一します。首都はアグラ。

アクバルたちムガル帝国の支配者一族はトルコ系民族であって、インド人ではない。しかも宗教はイスラム教です。インド人の大多数の宗教はヒンドゥー教です。

だから、ムガル帝国が、インドをしっかりと統治するには、インド人たちに受け入れられる必要がある。アクバルは、インド人に対して融和的支配をします。具体的には、ヒンドゥー教徒へのジズヤを廃止した。ジズヤというのは人頭税。イスラム教の支配下にある非イスラム教徒が支払わなければならないものでした。これを廃止するということは、伝統的なイスラムから、はずれることなのですが、それをあえてする。

アクバルは、最終的には、イスラムでもヒンドゥーでもない新しい宗教をつくって、インドを統合しようと考えていたようです。柔軟な発想の持ち主だったのですね。

もう一つは、積極的に北部インドの有力部族であるラージプート族の諸侯と婚姻関係を結んだ。ラージプート族というのは、非常に好戦的で、ムガル帝国としても手を焼いた相手だったのです。でも、これを内側に取り込む。

このような政策で、インド人の反発を招かないようにして、ムガル帝国の最盛期を現出した。ただ、インド全体を支配しているではありませんから、注意してください。インド南部にはヴィジャヤナガル王国が繁栄しています。

五代目の皇帝がシャー=ジャハーン（位1628～58）。この人で覚えることはひとつだけ。タージ=マハルの建設です。非常に美しいこの建物、皆さんも一度はみたことがあるでしょう。ドームの曲線と、まわりの尖塔とのバランス、壁の白さと青空の対比。どれをとっても素晴らしい。

タージ=マハルは、皇帝シャー=ジャハーンが愛妻ムムターズの死を悲しんで、彼女を祭るために造営した廟です。ムムターズは17歳でシャー=ジャハーンと結婚して、36歳で産褥死している。18年間の結婚生活の間に、なんと14人の子供を産んだという。いつも妊娠している勘定ですね。ムガルの皇帝たちは、ちんまり玉座に座っていることはあまりない。頻繁に一族や有力諸侯の反乱がおきたり、国境で戦闘がおこなわれますから、皇帝みずから軍隊を指揮して、あちこちを転戦する。ムガルの一族はもともとは遊牧民族ですから、各地を転戦するときには家族を引き連れていた。ムムターズは大きいお腹をして、シャー=ジャハーンに付き従って、旅から旅の生活をしていたのですね。だから、シャー=ジャハーンの愛もひとしおだったのだろう。

タージ=マハルのすぐ後ろにはジャムナ川という川が流れている。伝説では、シャー=ジャハーンは、川の対岸に黒い石でタージ=マハルと同じ形の自分の廟を建てて、川に橋を架けて二人の廟をつなごうと考えていたという。ロマンチックですね。

だけれども、シャー=ジャハーンは、晩年帝位を息子に奪われて、アグラの宮殿に監禁されてしまった。死ぬまでの8年間は監禁された部屋の窓から、タージ=マハルを眺めて泣いて暮らしていたといいます。

父親を監禁して帝位についたのがアウラングゼーブ（位1658～1707）。ムガル帝国が繁栄していた最後の時代の皇帝。

アウラングゼーブは南インドのデカン高原を平定して、ムガル帝国の領域を最大にした。

一方で、アウラングゼーブは非常に敬虔なイスラム教徒で、インド人に妥協してイスラムの教えを曲げることを嫌いました。そのため、アクバル以来廃止されていたヒンドゥー教徒への人頭税（ジズヤ）を復活した。また、ヒンドゥー教徒やシク教徒を弾圧した。

これは、当然インド人の反発を招く。非イスラム教徒の離反、反乱があいつぐようになり、アウラングゼーブは反乱鎮圧のため転戦につぐ転戦です。

アウラングゼーブの様子を伝えるイギリス外交官の報告書があります。

「ムガル軍のキャンプは不潔このうえない泥土の中にあり、兵士たちの給料は一年以上滞っている。宮廷人は腐敗の極みにあり、何一つするにしても賄賂を要求する。だが老皇帝一人だけは、なおかなりの威儀を持ち純白の衣裳で前線を回る。多くの兵が皇帝を見ようと群れる。だが皇帝は彼らのほうを見ずただ手中の本のみに目をこらす。その本はコーランだった。」（1699、イギリス使節報告）

コーランをたよりにひとりでムガル帝国を支えているアウラングゼーブの孤高の姿を伝えている。アウラングゼーブは軍人としては有能だったので、かれが生きていた間は、ムガル帝国はなんとか、かつての栄光を保ちますが、アウラングゼーブの死後、各地の勢力がムガル帝国から自立していって、ムガル帝国は急速に衰退する。デリー周辺を領土に持つだけの、一地方政権になっていきました。

かわって、勢力を拡大してきた政権が、パンジャブ地方のシク教国。ラージプート諸侯国、マラータ同盟など。シク教というのは、ヒンドゥー教とイスラム教を融合した宗教で、シク教国はかれらの国です。マラータ同盟はマラータ族諸侯の連合政権。

また、やがてインドを支配することになるイギリスが、マドラス、ポンベイ、カルカッタに商館を築いたのが、時期的にはアウラングゼーブの時代に重なります。

ほぼ同時期にフランスもシャンデルナゴル、ポンディシェリに商館をひらいていましたね。

第71回 サファヴィー朝・ムガル帝国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第70回 オスマン帝国](#)

[次のページへ](#)
[第72回 明帝国](#)

世界史講義録

第72回 明帝国

明の成立

16世紀以後に繁栄したアジアの王朝をずっとみてきました。最後は中国。明と清です。

明(1368～1644)。建国者は朱元璋。皇帝としての呼び名が洪武帝（位1368～98）。貧しい農家の四男坊です。

流行病で親も死に、口減らしのためにお寺の小坊主に出されます。やがて、元朝末期になり、各地に反乱がおこり、政情は不安定。お寺でも食べられなくなって、放浪の乞食坊主になる。三年間ほど、各地を放浪している。まだ十代の朱元璋は、このままの生活では一生うだつがあがらないと思って、いちかばちか、紅巾軍に参加することにした。

紅巾軍は、白蓮教という宗教結社からおこった元朝末期の反乱軍のひとつです。紅巾軍はたくさんの部隊が各地で活動していた。朱元璋は、その紅巾軍の一部隊に「俺も仲間に入れてくれ」と、志願するのです。ところが、「怪しい坊主だ、敵方のスパイではないか」と疑われて、すんなり参加させてくれない。押し問答しているところに、部隊長がやって来て、朱元璋の顔をじろりと見た。ひとこと「よし、入れてやれ」。

隊長は朱元璋の顔を一目見て、みどころがあると思ったようです。実は、朱元璋は非常にかわった顔をしていたらしい。資料集を見てください。朱元璋の二つの肖像画がある。皇帝になってから描かせたものです。ひとつは、堂々としていい男。こちらは、ごつごつした顔はアバタだらけで、目はつり上がり、とても同じ人とは思えない。たぶん、こちらのかっこよくない方が、本当の顔に近いとおもう。

隊長は、人並みはずれた人相に、何かをやる男かもしれないと感じたんだろう。

そのご、朱元璋は部隊の中で大活躍して、どんどん反乱軍の中で地位を上げていきます。暗殺という手段もつかって、とうとう紅巾軍のリーダーになった。このころ元朝は、北京を中心に中国北部は支配していますが、反乱勢力を鎮圧する力はなくて、中国南部には、いろいろな反乱勢力がそれぞれ支配地域をつくって争っていた。朱元璋は南京を本拠地にしていて、やがて対立する勢力を倒して中国の統一に成功した。これが、明朝です。元朝のモンゴル人は、中国を放棄してモンゴル高原に退去します。

中国歴代王朝の創始者は、だいたいが名門出身です。何の身分もない、ただの農民が王朝を開いたのは前漢の劉邦と、この朱元璋だけです。無一文の身分から身を起こし、立身出世する歴史上の人物は、普通は人気があるものです。たとえば、日本では豊臣秀吉。中国でも劉邦は人気がある。ところが、この朱元璋は全然人気がない。

なぜかというと、非常に残虐で猜疑心が強い。皇帝になってから、異常なまでに人をたくさん殺している。それも、自分が皇帝になる前に反乱軍で苦労をともにした部下たちをどんどん殺すのです。

たとえば胡惟庸（こいよう）の獄(1380)、李善長の獄(1390)、藍玉（らんぎょく）の獄(1393)という事件がある。それぞれ、若い頃から朱元璋に仕えていて大臣や将軍になったものたちが、謀反の罪で処刑された事件です。事件そのものが、朱元璋によるでっち上げらしいのですが、それぞれの事件で処刑された人数がすごい。胡惟庸の獄が1万5千人、李善長の獄も1万5千人、藍玉の獄が2万人。合計すれば5万人ですよ。一族郎党、関係者、ちょっとでも疑われたもの、みんな殺されてしまった。皇帝の昔の乞食坊主時代を知っている者はみんな殺されたということです。

乞食坊主だったことは、そうとう朱元璋のコンプレックスになっていたらしい。役人が作成文書に「僧」「禿」とかいう文字があったら、とんでもないことになった。杭州府学という官立学校の教授の文章に「光天の下、天は聖人を生ず」という一節があって、この先生は死刑になったそうです。光という文字が、坊主を連想させたらしい。

朱元璋の奥さんに馬皇后という人がいた。反乱軍時代に二人は結婚して、互いに皇帝、皇后になってからも馬皇后は以前と同じように、夫の食事を作ったり身の回りの世話をしていた。この人にこんな話がある。

馬皇后は、51歳で病死するのですが、死ぬ前から長く病んでいた。ところが、医者にも診てもらわないし、薬も全然飲もうとしない。朱元璋が心配して差し向ける医者もすべて追い返してしまう。心配した侍女が、「どうして医者に診てもらわないのでですか」とたずねたら、こう答えた。「私はもう歳だし、どんな名医に診てもらっても助からないことは自分が一番よくわかっている。もし、診察を受けて私が死んだら、夫は責任を追及して医者を殺すでしょう。だから、私は誰にも診てもらわないのです」。

馬皇后は、夫の残虐なおこないをたしなめることができる唯一の人でした。こんな人柄だから、朱元璋が人気がない反面で、みんなから敬愛されたようです。

話を戻します。朱元璋は全国を統一したあとも、本拠地を変えず、現在の南京を首都としました。当時の呼び名は金陵。

統一王朝で、首都を中国南部にしたのは、明がはじめてです。

朱元璋=洪武帝の政策をみていきます。

まず、皇帝独裁を強化します。

具体的にいうと、中書省を廃止して、六部と軍を皇帝直属にしました。唐の時代と比較してください。唐代は皇帝の下に中書省、門下省、尚書省とあって、その下に六部がありましたが、明代には最後に残っていた中書省もなくした。皇帝の権限が強化されたということです。皇帝の権限を制約する機関は存在しません。こういう統治機構を中国史では皇帝独裁という。

一世一元の制をはじめた。

洪武帝の時代の年号は洪武。洪武何年という。同一皇帝の時代は改元しない。これを一世一元の制といいます。日本では明治時代からこれを取り入れました。

兵制は衛所制。

兵士を出す家を軍戸として、一般人の民戸と区別して戸籍をつくる。そして、軍戸から軍を編成する制度

を衛所制という。言葉だけで結構です。

村落行政。

村落行政に関しては、元朝時代に放任だったのを引き締めるために、隣組制度を作る。これを里甲制といふ。110戸を里という単位に編成して、その中から裕福な農民が輪番で里長として、行政の末端を担わされます。細かいことは、お上を煩わせずに自分たちで解決しろということです。

里長に任せられた仕事で一番大変なのが、戸籍と租税台帳の作成。台帳のことを賦役黄冊（ふえきこうさつ）といふ。さらに、税の取り立ても里長の責任。決められた税額より少ないと、里長は自腹を切らなければならなかったから大変だった。それ以外に、治安維持などの仕事もありました。

全国的な土地台帳もつくられた。魚鱗図冊といふ。これは、土地の形が魚の鱗みたいに描かれている所から付いた名前です。資料集を見たら、なるほどというネーミングですね。

明の時代は、元代にないがしろになっていた伝統的中国的秩序を回復しようという意識が相当あったみたいです。里甲制もその一つですが、さらに、朱元璋は『六諭』というものを発布している。これは、法律というよりは、道徳の教科書ですね。親には孝行しろ、目上の者を尊敬しろ、村の仲間は仲良くしろ、というような儒教的な道徳を六つならべたものです。これを、月に何回か村々の老人たちに、みんなの前で読ませた。

皇帝が直接、こんな形で、民衆にお説教をするというのは、それまでの時代にはなかったことでした。これを、明治時代に日本が真似た。教育勅語がそれです。500年後の日本が朱元璋の政治から影響されているというのは、興味深い。

法律では唐の律令を意識して、大明律令というのを編纂します。これも中国的秩序回復の一環。

永楽帝

1398年明朝初代皇帝朱元璋=洪武帝が死に、第二代皇帝に即位したのが建文帝（位1398～1402）。この人は、朱元璋の孫にあたります。皇太子だった長男が早死にしたので、その息子が即位した。まだ、16歳でした。

朱元璋には、死んだ長男以外にも息子が何人かいた。朱元璋は皇太子以外の息子たちを国境防衛の軍司令官として各地に駐屯させていた。現在の北京に軍司令官として駐屯していたのが朱元璋の四男、燕王（えんおう）。ここは、モンゴル人の勢力と接する最前線基地だった。

元は明に滅ぼされたのではなく、モンゴル高原で存続しているのです。この時代のモンゴル人の政権を北元（ほくげん）といいます。のちに、タタールと呼ぶようになるが、同じ国を指しています。モンゴル人たちは、いつまた中国に侵入してくるかわからない。

国境防衛の一番重要な場所が、北京だったわけで、そこの司令官を任せられている燕王はそれだけの能力があったのでしょう。かれの率いる軍隊も強かった。なかにはモンゴル系の兵士も多くいたようです。

さて、建文帝からみると、強大な軍事力を持つ実力者燕王は不気味な存在です。自分の地位をおびやかすかもしれない。そこで、建文帝は燕王の権限を奪おうと計画する。両者の緊張が高まって、ついに燕王は建文帝に対して反乱をおこした。これを「靖難の変（せいなんのへん）」（1399～1402）という。帝位をめぐる一族の争いですね。

建文帝、いくら若いといっても首都をおさえる皇帝です。官僚、軍隊、ほとんどすべてが皇帝側なので、燕王が有能な指導者で強力な軍団を率いていても簡単には勝てない。結局4年越しの戦争になりますが、最後は燕王軍が皇帝の本拠地南京を一気に突く作戦で勝利した。建文帝は混乱のなかで死んだとされています。

勝った燕王は、皇帝になった。これが、永楽帝（位1402～24）です。

永楽帝の政策を見ていきます。

永楽帝は、はじめは官僚たちに人気がない。官僚たちは永楽帝に殺された建文帝に仕えていたわけで、かれらから見れば、永楽帝は反逆者そのものです。だから、永楽帝にとっては、官僚たちとの関係はしっくりこなかったし、南京の町そのものが居心地が悪かった。

そこで、首都をもともとの自分の本拠地である北京に遷した。これ以来、北京が中国の首都となります。首都を遷したもう一つの理由は、北方の遊牧民族の来襲に備えるには、南京よりも北京の方が都合がよいということもありました。

当時の北京は人口の三分の一がモンゴル人だったといいます。元代以来定住したモンゴル人がかなりいたんですね。現在北京の横町のことを胡同（フートン）というのですが、これはモンゴル語がなまつたものです。

内閣の設置。

朱元璋＝洪武帝の時から六部を皇帝直属にして皇帝の独裁政治がすすんだ、といいました。しかし、実際には、皇帝がひとりでできる仕事には限界があるので、皇帝の補佐役、秘書役が必要になる。それが内閣です。中身は違いますが、用語だけは現在の日本に引き継がれていますね。

儒学の奨励、大規模な編纂事業。

反乱によって帝位についた永楽帝は官僚、学者に人気があまりなかった。注意しておきますが、儒学をおさめたものが学者ですよ。そして、儒学をマスターしなければ科挙の試験に合格しませんから、官僚も学者です。

人気がないのは、やはりやりにくい。首都を北京に遷しても、官僚を動かさなければ帝国を治めることはできないですから。そこで、学者の人気取りのために、儒学を奨励した。さらに、大規模な編纂事業をした。国家事業として大百科事典をつくるのです。百科事典をつくるというのは大仕事で、たくさんの学者を必要とします。学者先生は、国家事業に携わって、大事にされて、給料ももらえるわけだ。人気取りには、いいですね。

永楽帝時代に編纂された本が、『永楽大典』、『四書大全』、『五經大全』。儒学関係の百科事典だと考えておけばよいです。

ただ、こういう学者優遇をしますが、永楽帝は官僚、学者を信頼しきれなかったようで、宦官をつかって

政治をおこなうことが多かった。宦官を秘密警察にして、官僚の動向をスパイさせたりする。宦官というのは、皇帝個人の使用人です。身分は低いし、学問もない。男でもなければ女でもない。だから、政治の表面に出てくることは、本来あってはならないことなのですが、これ以来、明の政治は、宦官の横暴による混乱がしばしばおこります。

遠征事業。

鄭和の南海遠征。1405年以来七回にわたって、南シナ海、インド洋の国々に大艦隊を派遣します。これを鄭和の南海遠征という。

この遠征はスケールが大きい。第一回の時は、62隻の大船団で行く。総員2万7千人。一番大きな船は、長さ137メートル、幅56メートル。マストは9本あった。コロンブスのサンタ・マリア号が23メートルだから、その6倍ある。驚異的な大きさだ。

遠征の目的は、明帝国の偉大さを諸国に知らしめて、朝貢させようということだったらしい。もうひとつ、裏の目的として建文帝の搜索があったといわれています。靖難の変で敗れた建文帝は南京で死んだといわれていたのですが、実は死体が確認されていない。だから、どこかに落ちのびて生きているのではないかという噂が常にあった。そこに、ベトナム方面で建文帝が活動しているという情報がはいった。生きているなら、草の根を分けてでも探し出して殺せ、という密命が遠征隊にあたえられていたのではないか。この辺は、憶測にすぎないのですが。

艦隊の指揮官に任命されたのが鄭和。この人は、宦官です。永楽帝が宦官を使った一例です。鄭和は面白い生き立ちで、かれの家は、モンゴル時代に中央アジア方面から雲南省に移住してきたようです。雲南省はラオス、ビルマと国境を接する中国南部の辺境です。ここが、明朝の支配下に入ったとき、鄭和は明軍に捕らえられて、南京に連行され去勢されてしまった。12歳の時です。そして、即位する前の永楽帝、燕王に宦官として仕えることになった。靖難の変の時には燕王を助けて活躍したという。即位後も永楽帝に宦官として仕えていた。

鄭和は大男で、身長180センチ、腰回り100センチあったというから、プロレスラーみたいな体格です。性格も剛胆だったので、永楽帝はかれを武将として使っていました。

興味深いのは、鄭和がイスラム教徒だったことです。鄭和のもともとの姓は馬という。馬という姓はイスラム教徒に多い姓です。ムハンマドのムの音を漢字表記したものらしい。鄭和のひいおじいさんの名前が、馬拝顔（バヤン）。バヤンという名は漢民族ではない。またおじいさんは、馬哈只（ハッジ）と呼ばれていた。ハッジというのは、メッカに巡礼したことのある人に対する尊称です。

だから、鄭和はイスラム教徒のネットワークや、出身民族の横のつながりで、いろいろな情報網をもっていた可能性がある。そこで、南海遠征の司令官に任命されたのだとおもう。インド洋を航海するときに、星で緯度を測定するのですが、アラビア式測定器「カマール」というものを使っている。また、高度の単位として「イスバ」「ザム」というアラビア語を使ったという。鄭和の背景を想像させますね。

鄭和の艦隊は、アフリカ東岸にまで出かけています。第七回遠征では、メッカにも行っている。スケール大きいですね。

モンゴル遠征。

永楽帝は、モンゴル遠征を五回おこなっている。モンゴル人を服属させることはできなかつたですが、漢民族皇帝みずからモンゴル方面に遠征するのは前漢の劉邦以来です。そういう意味では、気宇壮大な皇帝

だね。五回目の遠征が65歳の時で、帰る途中に死んでしまった。戦争で即位して、戦争で死んだ皇帝でした。

第72回 明帝国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

第71回 サファヴィー朝・ム
ガル帝国

[次のページへ](#)

第73回 明中期以降・朝鮮

世界史講義録

第73回 明朝中期以降・朝鮮

北虜南倭

15世紀中頃から、「北虜南倭」といわれる事態が、明朝に大きな被害と、軍事支出の増大による財政圧迫を招きます。

北虜とは、北から攻めてくるモンゴル系遊牧民族のことです。モンゴル高原に退去したモンゴル族は、チンギス=ハーン直系の勢力をタタール、傍系で新しく勢力を伸ばしてきたグループをオイラートと呼ぶようになっています。

15世紀中頃には、オイラートにエセン=ハンという有能なリーダーが出て、勢力を伸ばした。エセン=ハンは、西のティムール帝国と東の明朝とをつなぐ交易路をおさえ、さらに明と朝貢貿易をおこなって莫大な利益をえていたのですが、明が貿易を制限しはじめると、貿易拡大を要求して攻め込んできました。1449年のことです。このときの皇帝が正統帝。よせばよいのに、宦官の口車に乗せられて、自ら軍隊を率いて出撃したのですが、北京の北方の土木堡という場所で、モンゴル側の捕虜になってしまった。これを、土木の変といいます。エセン=ハンは中国との貿易拡大が目的だったので、明を滅ぼすということはありませんでしたが、皇帝が捕虜になるとは大失態でした。

エセン=ハンの死後、オイラートは衰退しますが、16世紀後半になるとタタールがモンゴル高原を統一する。リーダーがアルタン=ハンです。アルタン=ハンも、中国との貿易を求めて、中国北部に侵入を繰り返した。1542年の侵入では、男女20万人を殺し、家畜200万を奪い、莫大な衣糧金錢をかすめとった、と記録されている。毎年のように、こういう被害が出るわけで明朝側も国防に必死です。

北方遊牧民の侵入を防ぐために、国防費は増加します。現在残っている万里の長城は、この時代に建設されたものです。

南倭はおもに中国南岸地方で活動した日本の海賊。これは、前期倭寇（14世紀）と後期倭寇（16世紀）にわかれます。

倭寇は、日本では足利幕府の時代です。足利幕府は、三代将軍義満の時までは非常に不安定な政権でした。南北朝の政治的混乱がつづき、地方は事実上の無政府状態で、小領主が好き勝手なことをやっていました。幕府は地方のすみずみまで統制する力はなかった。こういうなかで、五島列島などの貧しい漁民たちが、倭寇になった。また、明は海禁政策をとっていて、民間人に海外貿易を許可していなかったので、中国貿易を求める商人たちが海賊行為をしたともいう。これが、前期倭寇です。

だから、この時期の倭寇は、足利幕府が安定し、明とのあいだに勘合船貿易がはじまるときとおさまりました。

応仁の乱後、足利幕府の統制が乱れると、再び倭寇が活動をはじめます。これが、後期倭寇。中国南岸の港にやってきて、貿易が思うようにできないと、海賊に変身して略奪をおこなう。沿岸地方だけでなく、河川をさかのぼって、都市を攻略して略奪をするのです。海上で、他の船を襲うのではないですよ。

「倭人の至る所、人民一空す」といわれて、人間までさらっていく。後期倭寇の被害に明は苦しむのですが、この時期の倭寇の構成員は、ほとんどが中国人で、日本人は一割から三割だったといいます。ただし、われわれが考えるような国境や国籍は当時の人たちには関係ないわけで、たとえば、後期倭寇の大親分で王直という中国人がいるのですが、かれの本拠地は五島列島だった。当人たちは、海の世界に暮らす者どうし仲間意識はあっても、日本人だ、中国人だという意識はなかったかもしれません。

----- 張居正 -----

北慮南倭の対策で、国防費が増加し、国家財政は大赤字になる。永楽帝以来、明の皇帝は凡人か放蕩児がつづいて、宦官の横暴がまかり通っています。この状態を一時立て直したのが張居正。10歳で即位した万暦帝(位1572～1620)の後見人として政治を担当した大臣です。非常に剛胆な性格で、正しいと思ったことは、反対があってもどんどん実施した。また、滅茶苦茶だった綱紀を肅正した。税金はびしひ取り立て、浪費をいましめ、官僚組織を引き締めた。この結果、税の滞納率20%、年間100万両以上の赤字だったものが、1576年には390万両の黒字になったという。

また、一条鞭法という新しい徴税方法がこの時期、全国に広がった。さまざまな徴税項目があり非常に煩雑だった租税と力役を、それぞれ銀納化した制度です。徴税事務が簡素化され、里長クラスの農民の負担が軽くなった。

また、タタールとのあいだにも和平を実現しました。

張居正が政権を担当している時期に、こんなことがあった。かれの父親が死んだのです。父が亡くなれば、当然喪に服して仕事を休むことになる。中国は儒教の本場です。官僚は儒教道徳のお手本ですから、親が死んだら一年や二年は田舎に帰って喪に服し、仕事から離れるのが常識でした。ところが、張居正は、皇帝に頼んで、「父の喪に服さず、正常の勤務をつづけよ」と命令を自分に出させる。そして、政務をつづけたのです。儒教道徳から見れば、とんでもない行動です。それくらいがんばって、明朝の政治を引き締めた人物でした。

張居正が約10年間ワンマン宰相として政治をしているあいだは、張居正を批判できる人は誰もいなかつた。実績もあげていたしね。しかし、死んだあとは、特に父親の喪に服さなかつたことなどが批判されて、かれの残された家族は弾圧されました。また、張居正が生きていたあいだは、真面目にしていた万暦帝も、急に政務に対して熱意を失って堕落した生活を送るようになりました。

----- 明末期の政治 -----

張居正が建て直した明の財政でしたが、その後、急速に悪化します。軍事費負担が増大する。

1592年から98年まで、豊臣秀吉が朝鮮を侵略します。日本では、文禄・慶長の役、朝鮮では壬辰・丁酉の倭乱と呼ばれています。

秀吉が朝鮮に戦争を仕掛けた理由は、いろいろあるようですが、どうも、この時期の秀吉は誇大妄想にとりつかれていたようで、中国を征服しようと真剣に考えたらしい。それで、中国への道筋にある朝鮮に協力を命じた。朝鮮は、明朝の冊封国の立場ですから、秀吉の命令などきくはずがない。そこで、秀吉は朝鮮を懲らしめるという名目で、諸大名に命じて朝鮮侵略戦争を開始した。日本の軍隊は、戦国時代を経験していますから戦争慣れしていて強かった。また、鉄砲をたくさん持っていて、朝鮮軍よりも武器で優れていた。

朝鮮の正規軍は、当初日本軍に連戦連敗して、明に救援を求めた。朝鮮国は明の冊封体制に組み込まれていて、形式上、朝鮮国王は明国皇帝に対して臣下の礼をとっている。朝鮮国の上に立つ明としては、助けを求められたら、これに応えなければ面白がありません。明の大軍が朝鮮半島に遠征し、ここで日本軍と戦争をしたのです。

結局、秀吉が死んで日本軍は撤退するのですが、明はこの戦争で10万の戦死者と1000万両の出費をした。

さらに、同時期に南方では少数民族であるミャオ族の反乱、北の国境の町、寧夏ではモンゴル人将軍ボバイの乱など、戦争があいつぎます。

また、中国東北部にいた女真族にも動きがおきる。かれらは明に服属していたのですが、日本軍の侵入で明軍が朝鮮半島にはりついているすきに、部族を統一して急速に力をつけてきます。1616年には女真族は後金国を建国して、明朝と対立します。

明の皇帝は、財政赤字を埋めるために、正規の政府機関を使わず、私的に宦官を地方に派遣して、いろいろな名目の新税を徴収した。宦官たちは、かなり強引な方法で税金を集めたので、各地で混乱や、騒動がおこりました。

さらに官僚の中にも派閥対立が生まれてくる。宦官が政治に関わる現状に批判的で、清廉潔白な政治を実現しようとする官僚たちが東林党というグループを作った。一方で、宦官と仲良くして出世しようという現実的な官僚たちもいて、このグループを非東林党という。東林党の人たちの志は立派だったのですが、宦官たちに弾圧されたり、非東林党との派閥争いに巻き込まれて、結果的に明の政治はさらに乱れていった。

一方、農村や都市には、宦官たちがやって来て、正規の税以外にいろいろ取り立てるので、各地で徴税に反対する運動が起きる。

都市での商工業者の抵抗を民变、農村での抵抗を抗糧闘争という。小作料支払いを拒否する抗租闘争も活発になります。

中央政界だけでなく、地方社会も、騒然とした雰囲気に包まれてくるのです。

朝鮮半島

一時、モンゴル帝国に服属していた高麗は、中国に明朝が成立すると、明の冊封国となりました。冊封というのは、中国の王朝と周辺国との関係で、冊封国は中国に対して、臣下の礼をとり、出兵の要請に応じたり、朝貢するなどの義務を負う。そのかわり、中国の保護を受けることができるというものです。

高麗は倭寇の侵入で衰退し、倭寇撃退に活躍した將軍李成桂が高麗を倒して新しい王朝を建てた。これが朝鮮(1392~1910)です。李氏の王朝なので李朝とよんだり、地名と区別するために李氏朝鮮ともよびます。

首都は漢城。現在のソウルです。

政治は中央集権的。中国を真似て科挙もおこなう。ただ、政治の中核は両班（ヤンパン）という貴族階級がにぎっていた。

外交的には明の冊封国となります。のちに明が滅ぶと清の冊封をうける。

儒学の中でも朱子学が奨励されて、国教的な扱いを受ける。朱子学的な倫理、行動が何よりも重んぜられる国になります。

李氏朝鮮成立前後の倭寇の被害はかなり激しいものがある。明の北虜南倭のところでも少し話しましたが、朝鮮ではどんなふうだったのか紹介しておこう。

1397年に慶尚南道晋州を襲った倭寇は、騎馬700、歩兵2000という規模。海賊というようなものではない。軍隊そのものです。九州あたりの守護大名クラスの連中がやっているのかもしれない。

朝鮮と足利幕府には外交関係があって、朝鮮から通信使という使節が何度も日本にやってきます。プリントに載せてあるのは、1429年に来日した朝鮮通信使・朴瑞生の帰国報告です。

「倭賊嘗て我が国を侵略し我が人民を虜し、以て奴婢と為し、或いは遠国に転売し、永く還らざらしむ。其の父兄子弟、痛心切歎するも、未だ讐に報いることを得ざる者、幾何人か。臣等の行くや、船を泊する処毎に、被虜の人争いて逃げ來たらんと欲すれども、其の主の枷鎖堅囚するを以て未だ果たせず。誠に愍れむべきなり。日本は人多く食少なく、多く奴婢を売り、或いは人の子弟を竊みて之を売る。滔々として皆是なり。（『世宗実録11、12乙亥』より）」

日本に行ってみたら、倭寇にさらわれ奴隸にされた朝鮮人がたくさんいて驚いているのです。通信使をみて、助けを求めているんだけど、みんな鎖につながれて逃げることもできない、とある。人身売買で生計を立てている日本人がたくさんいたのですね。余談になりますが、この時代のもう少しあと、戦国時代には、戦国大名どうしで敵の領地から人をさらってきて奴隸として売るということを日常的にやっていました。奴隸は海外にも輸出されていて、南蛮貿易でポルトガル商人が日本で買いつける重要商品のひとつでした。秀吉の朝鮮侵略でも多くの朝鮮人を奴隸として連れてきていますね。

李氏朝鮮の王様で、重要な人が世宗（位1418~50）。セジョンと発音する。世宗は「訓民正音」を制定した。ハングルのことです。それまで、朝鮮半島では文字は漢字だけです。民族の言語を表す文字はなかったのです。ハングルは非常に合理的につくられた文字で、発音するときの舌の形で子音をあらわしていました。

ただ、朝鮮では中国文化の影響力は圧倒的で、訓民正音制定後も公式文書は漢文でした。ハングルが一般に広まるのは19世紀の末です。ハングル、というのは「偉大な文字」という意味で、こう呼ばれるように

なるのは朝鮮が日本の植民地になって以降です。民族の誇りを守るためについた名前ですね。

15世紀以降の朝鮮は、両班（ヤンパン）の党派闘争がつづくようになります。朝鮮の政治を見ていると、政治闘争が朱子学の倫理とからんで展開するので非常にわかりにくい。党派党争があってもダイナミックな動きはありません。

16世紀末には豊臣秀吉の侵略をうけた。壬辰・丁酉の倭乱です。

劣勢に立たされた朝鮮は明軍の救援を求めましたが、大活躍した朝鮮人将軍もいます。水軍を率いた李舜臣（イシンシン）です。亀甲船という船で、日本海軍に連勝した。亀甲船は船の上を亀の甲羅みたいに板で覆っている。これは日本兵の斬り込みを防ぐためです。そして、側面の隙間から大砲を撃って攻撃した。

海を渡って兵士に糧食を補給しなければならない日本側は、李舜臣率いる亀甲船の水軍におおいに苦しめられたのでした。

第73回 明中期以降・朝鮮 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第72回 明帝国](#)

[次のページへ](#)
[第74回 清](#)

世界史講義録

第74回 清

清の成立

明の末期に中国東北地方で女真族が勢力を回復してくる。女真族は、12世紀から13世紀にかけて中国北部に金をいう国を建てたこともありましたが、モンゴルに滅ぼされて以来、元、明に服属していた。しかし、明が朝鮮に侵入した秀吉の日本軍に勢力を注いでいるすきに、再び力をつけてくるわけです。

女真族の諸部族を統一したのがヌルハチ(1559～1626)。かれは、1616年、明から自立して、後金国を建国した。

あとを継いだのが、息子のホンタイジ（位1626～43）。

かれは、モンゴル高原を勢力下においた。このときに、モンゴル有力氏族に代々伝えられていた元朝玉璽、つまり元朝皇帝の印章、を手に入れます。これ以来、ホンタイジは女真族のハーンであると同時に、モンゴル人の大ハーンの地位を兼ねることになった。

また、後金国の本拠地中国東北地方には、女真族の何倍もの漢民族が住んでいました。だから、ホンタイジは女真族、モンゴル族、漢族を支配することになった。

1636年には、国名を清と改めます。ホンタイジ自身もあらためて皇帝に即位する。中国風の国号を採用することで、多くの民族を支配する中華帝国の支配者となることを宣言したのです。

このあと、ホンタイジは中国本土への侵入を企てて、万里の長城を境として明との戦いがつづきます。

清の軍制が八旗。女真族を八つの集団に編成して、そこから兵士を出させる制度で、清朝の正規軍となつた。それぞれシンボルの旗があるので八旗という。ホンタイジ時代にはモンゴル人、漢民族にも八旗を編成させ、蒙古八旗、漢軍八旗ができます。八旗は、ちょうど同時代の徳川幕府の旗本のようなものです。建国初期には大活躍するが、特権的地位に安住して、のちにはすっかり軍隊として使いものにならなくなつたところもそっくりです。

これ以外にも、のちに綠營という軍制度がつくられます。これは、明の衛所制を引き継いだもので、主に地方の治安維持を担当した。

女真族のあいだには文殊菩薩信仰があつて、文殊の音マンジュをとって、女真族を満州族という言い方があるのですが、ホンタイジの時代に、この表現が定着するようです。また、中国東北地方を満州という地名で呼ぶようにもなる。これ以後、満州族という表現を使いますから注意してください。

明の滅亡

宦官の横暴や党派闘争による政治の乱れ、増税などで明の国内では反乱が続発するようになる。その代表が李自成の乱です。1630年代以降、流賊と呼ばれる反乱集団がたくさん生まれるのですが、李自成の反乱軍もそのひとつでした。流賊は都市を攻略して、略奪する。明の正規軍が出てくると、さっと退却して今度は全然別の地方にあらわれて都市の略奪を繰り返す。馬で移動して行動範囲がひろいので、流賊と呼ばされました。

李自成の反乱軍は、最初の頃は略奪集団とかわらないのですが、集団が大きくなると儒学者のブレーンについて、李自成に新しい王朝を建てるようにすすめるようになる。李自成もその気になった。略奪ばかりやっていると、王朝建設には逆効果。むやみな殺人や略奪はひかえて、貧民に施したり、評判をあげようとコマーシャルソングを作ったりもする。

殺牛羊

備酒漿

開了城門迎闖王

闖王來時不納糧

(訳)

牛と羊を殺せ（さあ、ごちそうだ）

お酒の用意をしよう

城門を開いて闖王（李自成）を迎えよう

闖王が来たら税金を取られないぞ

（『中国の大盗賊』高島俊男、講談社現代新書）

こういう歌を、配下のものに歌わせて流行させたといいます。だんだん、民衆にも人気が出てくる。

明朝が、全力で李自成軍を鎮圧しようとすれば、多分できた。ところが、明朝は李自成軍鎮圧に全兵力を投入できなかった。理由は、北の清軍に備えて国境を防衛するのに必死だったからです。明の精銳部隊は万里の長城の最東端、山海関に貼りついて離れることができなかった。

このすきに勢力を増した李自成軍は、1644年、40万の大軍で北京を占領してしまった。明朝最後の皇帝崇禎帝は宮殿の裏山に登って首をつって死んでしまった。あっけない明の滅亡でした。

李自成は、明にかわって新しい王朝を建国し、皇帝になります。まだ混乱の中ですが、明の行政機構を掌握して、即位式の準備もはじめた。

山海関を守っていた明軍の司令官が吳三桂という将軍でした。清軍と戦っていたら、北京からニュースが来て、明が滅んだという。吳三桂、びっくりします。かれは明に仕える将軍ですから、身の振り方に困ってしまう。引きつづき、李自成からの手紙も来た。明は滅んだが、李自成の新王朝の将軍として引きつづ

き山海関を守れ、と。

吳三桂は、成り上がり者で流賊出身の李自成に仕える気にはなれなかった。そこで、なんと清側に寝返ってしまったのです。清朝のもとでの高位高官を交換条件にしたのでしょうか。山海關を開いて、清軍を中国本土に導き入れた。清軍は吳三桂を先導役にして北京に向かって進撃します。

李自成は清軍を迎撃ちますが、簡単に擊破されてしまった。かなわないと悟った李自成は、あわただしく皇帝の即位式だけ済まして北京を脱出。かわりに、清軍が入城して北京の新しい支配者となりました。李自成が北京を占領したのが3月19日、清軍の北京入城が5月2日。わずか、一月半の李自成の天下でした。

このあと、李自成は西安に逃れ、翌年、さらに落ちのびる途中、山の中で地元の武装勢力に殺されてしましました。

明から清への王朝交替というのは、単なる皇帝家の交替ではない。清は滿州族の国ですから、漢民族が異民族の支配を受けることになったわけです。だから、この事件のキーパーソンである吳三桂の行動というのはいろいろ論議をよんだ。なぜ、かれが李自成ではなくて、清に味方したのか。いろいろな話があります。

俗に言われているのが「女性問題」説。吳三桂将軍には陳圓圓という滅茶苦茶に美しい愛人がいた。彼女は北京の吳三桂邸に住んでいて、山海關を守っている吳三桂とは離ればなれなわけです。

李自成が北京を占領したときに、吳三桂が一番気にしたのが、陳圓圓の安否。部下を北京に派遣して様子を探らせたら、李自成は評判の美女陳圓圓をすでに自分の宮殿に連れ込んでいた。怒り狂って吳三桂は、清側についたというのです。講談などでおもしろおかしく話された作り話でしょうね。

この前年にホンタイジは死んで、6歳の息子が清の皇帝になった。順治帝という。実権を握っているのは摂政のドルゴン。ホンタイジの弟です。

ドルゴンの指揮のもとで、清軍は各地の抵抗勢力を平定して中国全土を支配しました。ただし、当時の滿州族の人口は60万、兵力は15万。これだけの軍事力で中国全土を支配するのは、物理的に無理があったので、清朝は投降してきた明の漢民族の將軍たちを積極的に利用します。吳三桂がその代表です。

統一後は、漢民族の將軍たちを藩王として中国南部地方の支配をまかせました。吳三桂は雲南地方の藩王となりました。

ところで、北京入城前後の清軍と行動をともにした日本人がいます。1644年4月に越前三國を出港したあと、漂流して滿州に漂着した日本船がある。乗組員は滿州人に助けられ、かれらと一緒に11月に北京に入っている。その日本の漂流民が清朝の印象を書き残しています。

「御法度、万事の作法は、ことのほか明らかで正しくみえる。上下ともに慈悲深く、正直である。嘘をいうことは一切ない。金銀がそこらにちらかしてあっても、盗み取るものはない、という。これにくらべて北京の方が風紀が悪い」

滿州族がもっている素朴さ、朴訥さを誉めていますね。

清の全盛期

順治帝を継いだのが、康熙帝(位1661～1722)。そのあとつづく雍正帝(位1722～35)、乾隆帝(位1735～95)の三代が清朝の最盛期。中国の長い歴史の中でも、平和で繁栄した時代です。

まずは康熙帝の話から。

康熙帝が即位したときには、まだ清朝の中国支配は不安定な面があった。

1673～81年に三藩の乱がおきる。吳三桂ら、藩王に封ぜられていた漢民族の將軍の反乱です。吳三桂のほかに二名の藩王が反乱したのでこの名前がある。

清朝の支配が安定するに従って、大きな領土を持ちなれば独立国のような藩王の存在は邪魔になってきた。そこで、清朝は吳三桂らの領土や権限を取りあげようとした。これが反乱の原因です。吳三桂らは、「滿州族の支配に反対する。滅んだ明朝を復活させるための戦いだ」と宣伝して、自分の反乱を正当化したけれど、清が中国を支配したのはかれの寝返りのせいだから、今さらそんな大義名分をいっても、世論は支持しなかった。反乱軍は中国西南部を制圧して、一時は清朝に脅威を与えましたが、結局鎮圧されました。反乱が終わってみれば、清朝の支配はより強固になっていた。

1683年には鄭成功的台湾政権を滅ぼして、台湾を中国の領土に編入しました。

実は、清朝が北京に入城したとき、中国南部には明朝の皇族を擁立した地方政権がいくつかできます。清の中国支配に反対しますが、どの政権もそれほど大きな勢力にはならず、すぐに清朝に滅ぼされていきます。そのなかで最後まで明朝の復活を唱えて清朝に反抗しつづけたのが鄭成功です。この人の父親は鄭芝龍といって、密貿易に従事して日本にも来ていた。平戸の日本人女性とのあいだに産まれたのが鄭成功。明が滅ぶと、海上から沿岸各地を攻撃して清に抵抗した。清朝は鄭成功勢力を孤立させるために、1661年遷界令をだして、沿岸住民を強制的に内陸部に移住させました。こんな対策をとるということは、いかに鄭成功に手を焼いていたかということです。

ちなみに、鄭成功は徳川幕府に何度も使者を送って、援軍を要請しています。幕府は、清朝側が優勢なのを見て、援軍を送らないのですが、明朝に忠節をつくして清に抵抗をつづける鄭成功は、母親が日本人だということもあって、日本では有名になる。近松門左衛門の『國姓爺合戦』という人形淨瑠璃があるので、鄭成功が主人公です。

遷界令がでると、鄭成功は拠点を台湾に移します。当時台湾にはオランダ人がゼーランディア城という要塞を築いていた。鄭成功は2万5千の兵力でゼーランディアを攻略して、オランダ人を追い払い、ここに独自の政権をつくった。鄭成功的台湾政権です。翌年、鄭成功自身は死んでしまうのですが、その後20年間、台湾政権は大陸の清朝に攻撃をくわえつづけていたのです。清朝は、はじめは海軍力がなかったので、なかなか台湾を攻略できなかったのです。

この台湾政権を滅ぼして、台湾島を併合したのが、1683年、康熙帝の時だったわけです。

これで、中国国内に、清朝に抵抗する勢力はなくなりました。

対外的には、1689年、ロシアとのあいだにネルチンスク条約を結ぶ。対等な条約で国境線を確定しました。

さらに、中央アジアに大きな勢力を持っていた遊牧国家ジュンガルと戦い外モンゴリア地方を領土にくわ

えた。

康熙帝は、自分でこれらの反乱鎮圧などを指導しています。指導力は抜群にあった。それだけでなく理想的な皇帝になろうと、常に努力していたことで有名です。早起きで、早朝の4時か5時頃には、政務を取り始める。午前中に政務を終えて、午後からは勉強です。儒学だけでなく、イエズス会の宣教師から、天文学、数学なども学んだ。この肖像画は、普段着を着て、書斎で読書をしているところです。後ろにずらっと並んでいるのが中国の書物です。勉強中の肖像画というのも康熙帝らしい。

康熙帝が勉強を必死にしたのは、かれが好奇心旺盛だったこともあります。中国人たちに、満州族の皇帝だからとバカにされ、軽く見られないように、という意識もあったようです。

かれの姿をイエズス会の宣教師ブーヴェが次のように描いています。

「康熙帝は孔子の著書を大半、暗記されておられますし、シナ人が聖書と仰いでいる原典もあらかた暗唱されています。…皇帝はシナの古代大家の教説に対する尊敬を示されようとして親しく序文を執筆されて、注釈書の巻頭に掲げられ、御名をもってこの書を印刷せしめられたのであります。（ブーヴェ『康熙伝』より）」

この本は、ブーヴェがルイ14世に献上したものです。ルイ14世に、理想の君主像として康熙帝をお手本にして欲しいと思ったのでした。努力のかいあって、かれは理想的皇帝と評価されたわけです。中国歴代皇帝の中でも、指折りの名君という評価です。漢の武帝、唐の太宗、とならんでベスト3に入れる人もいます。

康熙帝を継いだのが息子の雍正帝。康熙帝の四番目の子供で、あまり目立たない人だった。

康熙帝の跡継ぎ問題はごたごたがあって、康熙帝臨終の時に次期皇帝に指名したのが雍正帝だったというのですが、この辺の事情は謎に包まれている。ともかく、即位した雍正帝は、後継者問題で今後混乱がないように「皇帝密建の法」というものを定めた。これは、はやく皇太子を決めてしまうと、他の皇子たちが陰謀などをめぐらすので、皇帝は後継者を決めて公表せずに紙に書いて秘密の箱に入れておく。皇帝が死んで、はじめて箱が開かれ次の皇帝が発表されるというもの。だから、皇帝は息子たちの日頃のおこないを見て、一度決めた皇太子の名前を書き換えることもできる。誰にも発表しないのだから、書き換えが政治的な混乱や陰謀を生むこともないです。長男があとを継ぐという原則もないから、優秀な息子を指名できる。だから、清朝の皇帝はこのあとも比較的優秀なものがつづきます。

雍正帝は父親の康熙帝のような華やかさはない人でしたが、実に真面目に皇帝としての職務をつとめ、清朝の支配体制を引き締めた。雍正帝の仕事ぶりを見ていると、皇帝というのも楽しじゃないな、と思うよ。自分のプライベートタイムはほとんどない。

清朝の地方長官たちは、行政組織を通さずに手紙を直接皇帝に送ることができました。雍正帝は地方情勢全般について皇帝に手紙で報告するようにさせた。毎日、全国から手紙がどんどん届く。どこが日照りで農作物が不作だとか、洪水が起きて何万人が被災したとか、米の価格が上がったとか下がったとか。雍正帝は、この地方からの報告を全部読んで、そのすべてに返事を書くのです。こうしなさい、ああしなさい、と指示事項まで付け加えて。これは、すごい労力ですよ。こんなことを、即位してから、死ぬまで毎日つづけた。地方の役人たちも、きちんと報告を送らないとサボっていると思われますから、真面目に働かざるを得ないわけです。

どこまで本当かわかりませんが、こんな話もある。ある時、大臣が四人集まって麻雀をした。雍正帝は官僚には賭事を禁じていたのですが、やっぱりやめられない。徹夜で、ジャラジャラやっていたら、牌が一枚無くなつた。いくらさがしても、出てこないので、大臣たちは、そこでお開きにしました。

翌日、大臣のひとりが雍正帝の前にでて、一通り政務の話を終わったあと、雍正帝がたずねた。「昨晩、おまえは何をしていた」大臣は、皇帝に嘘をつくことができず、正直に賭け麻雀をしていたと告白した。そうしたら、雍正帝は袂から麻雀パイを一枚とりだし、それを大臣に渡して、「以後、気をつけよ」と言った。見てみると、それは無くなつた牌だったという。怖いですね。大臣の家に仕えている召使いの誰かが、皇帝のスパイなのです。この手の話はかなりあって、官僚たちがピリピリしながら、政治をしている雰囲気が伝わってきます。

雍正帝時代の政治的出来事をいくつかあげておきます。

軍機処の設置。

雍正帝時代に、軍事機密を扱う機関として設置されたのが軍機処です。やがて内閣に代わって軍事・行政の最高機関になりました。軍機処の長官を軍機大臣という。のちには總理大臣のような役割をするようになります。ちなみに清は明の政治機構を受け継いで、皇帝独裁政治です。だから、軍機大臣はあくまでも皇帝の補佐役です。

文字の獄。

思想統制です。康熙帝もおこなっていますが、雍正帝が特に有名。清朝の皇帝を批判するような文章はいっさい許さない。

科挙の試験問題に「維民所止」という一節があった。これを見て雍正帝は出題した学者を処刑した。なぜか。「維」と「止」の上にそれぞれ、「なべぶた」と「一」をつけると「雍」「正」になる。つまり、この一節は雍正帝の頭を切り落とし、さらに二文字を「民所」で離して、雍正帝の胴を二つに裂いている、というわけです。あきらかに、イチャモンですが、当時は立派に反逆罪になった。

清朝は滿州族の王朝なので、こういう弾圧は厳しかった。漢民族の儒学者になめられてはいかんと考えていたようです。

地丁銀の全国実施。

地丁銀は税制です。明の一条鞭法をさらに簡素化したもの。成年男子にかかる丁銀という税金を、土地にかかる税にくみいれて一本化した。その結果、税の銀納化が一段と進んだ。

キャフタ条約（1727）。

モンゴル北部で未確定だったロシアとの国境線を確定。

即位したときにすでに45歳だった雍正帝は、清の政治を引き締め在位14年で亡くなる。

あとを継いだのが乾隆帝です。

乾隆帝は、雍正帝がしっかり固めた土台の上で、対外関係に力を注いだ。各地に遠征しますが、重要なのは、チベットと、東トルキスタンを領土にくわえたことです。この時代に、中国の領土は史上最大にな

る。現在の中華人民共和国の領域の原型がつくられた。当時の方が現在よりも広いですが。ヨーロッパとの貿易は盛んにおこなわれていますが、乾隆帝は貿易の管理と治安の維持を目的として、貿易港を広州のみに限定しました。これは、自由に貿易をおこないたいイギリスを刺激して、のちのち外交問題になっていくので注意しておいてください。

第74回 清 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第73回 明中期以降・朝鮮](#)

[次のページへ](#)
[第75回 清の政治・明清の社会](#)

世界史講義録

第75回 清の政治・明清の社会

清の政治

満州族王朝の清が、多くの人口と独自の伝統文化を持つ漢民族を支配するには、それなりの工夫が必要でした。

まずは、漢民族に受け入れられなければならない。具体的には、オピニオンリーダーである、儒学者たちに受け入れられればよい。

そのために、大規模な編纂事業をして、儒学者を優遇します。永楽帝が、儒学者のご機嫌をとるために『永楽大典』を編纂させたのに似ています。

康熙帝時代におこなわれたのが、『康熙字典』『古今図書集成』の編纂です。

『康熙字典』は漢字辞典です。漢字の数なんて異体字を含めるといくらでもある。それを集大成した。

「へん」「つくり」で漢字を分類する方法も『康熙字典』から確定します。現在日本でつくられているすべての漢和辞典の種本です。内容的にも現在まで価値が衰えていない、そういう仕事を学者にさせていたのです。

行政機構では、漢民族を差別せずに満州族と同様に扱いました。「満漢併用制」といって、役所の長官など満州族と漢民族を同数配置した。科挙は明代に引きつづきおこなわれています。

以上のような優遇制度をとる反面で、しめるところはビシビシ締めた。前回話した文字の獄もそうですし、反清的な書物は禁書にします。清の統治の初期は、明を懐かしがって清に抵抗する学者も結構いたのです。

清は中国を支配すると、清を認めるかどうかの踏み絵として漢民族に弁髪を強制した。弁髪というのは、満州族のヘアースタイルで頭頂部を残して頭を剃ります。残した部分を長くのばして三つ編みにする。むかしの漫画「キン肉マン」に出てきたラーメンマンの頭です。

漢民族の伝統的なヘアースタイルは総髪。どこも剃らずに伸ばして結います。だいたい、モンゴル人、満州人、日本人と、中国周辺の民族はこの時代、剃っている。サムライも額から頭頂部まで剃っていますね。漢民族から見ると、野蛮人の風俗なのです。それを強制される。

清は「頭を残すか、髪を残すか」と漢民族に迫りました。髪を剃らなければ、死刑ということです。結局漢民族は弁髪を受け入れざるを得なかった。

広大な領土の支配。

清朝は支配地域を直轄地と藩部の二つに分けます。

直轄地は、満州、中国本土、台湾。ここには官僚を派遣して中央集権的支配をおこなった。藩部は、モンゴル、青海、東トルキスタン、チベット。ここは間接統治で、各民族の伝統的な支配にまかせる。清朝は、理藩院という役所を設置して、藩部の統治を監視する。これ以外に、清の宗主権を認めた国がある。朝鮮、ヴェトナム、シャム（タイ）、ビルマです。これらの国は独立国ですが、理念的には清の属国です。

明清の社会

明清の時代は、王朝は交代しますが、社会・経済・文化はひとつづきのものとして発展していきます。特徴的なことを何点かみていきます。

蘇州、杭州など、特に長江下流地域に商工業都市が発展します。工業では綿織物、絹織物工業が発展。宋代からはじまる景德鎮の窯業も盛んです。

米の主産地は、長江下流域から中流域に移動します。この時代は「湖廣熟すれば天下足る」といわれる。湖廣とは湖北、湖南、江西省の長江中流域のことです。

商業も盛んで、山西商人、新安商人などによる遠隔地交易が盛んになる。山西商人は山西省、新安商人は安徽省徽州府出身の商人で、同郷者どうし協力しあい、ネットワークをつくって中国全土を舞台に活躍した。各地に「会館」「公所」と呼ばれる自分たちの宿泊施設や、商品の倉庫をつくりました。会館という名前は、日本語にもなっていますね。

銀の大量流入。

明清時代に中国国内に大量の銀が入ってきます。これは、海外貿易で中国からの輸出品の代金として支払われたものです。当時、アジア地域の国際貿易は銀で決済していました。なぜかというと、大量の銀があったから。出所は、日本とメキシコ。戦国時代から江戸時代の半ばにかけての日本は、世界的にみても大量の銀が採掘されていたのです。代表的な銀山が兵庫県の生野銀山。これが、オランダなどを通じて中国に流れる。メキシコからはスペインが大量の銀をアジアに運んだのです。

大量の銀が中国国内に流通するようになるので、明の一条鞭法や、清の地丁銀など税の銀納化がすすんだのです。戦国時代や江戸時代の日本の農民が、年貢を銀で支払う、なんていうことを想像できますか。できないでしょ。そう考えると、いかに明清時代の中国で貨幣経済が発展していたかということがわかるとおもう。

地域社会で指導的な役割を持ったのが「郷紳」と呼ばれる人々です。かれらは郷村社会の指導者であると同時に、科挙官僚もしくはその予備軍でもある。経済的には地主階級です。宋の時代に「士大夫」と呼ばれていた人たちとほぼ同じです。ただ、郷紳と呼ぶようになったのは、地域社会で彼らの存在が大きくなってきたことのあらわれのようです。

明清の文化

学問では陽明学が重要。

明代の儒者王陽明がはじめた一派で、宋代に生まれた朱子学を批判します。王陽明は官僚。有能な地方官で、何度か反乱鎮圧にも活躍して軍事的才能もあった。ある時、宦官に憎まれて左遷される。このときに、儒学に悟りを開いて陽明学をたてた。

王陽明は、朱子の「性即理」に対して「心即理」説を唱える。朱子は書物を読んで物の「理」を研究する必要性を説いたのですが、王陽明は「理」は自分の心の中にあるはずだと言うのです。その結果、こんなことを言う。

「わが心に問うてみて納得できぬことは、たとい孔子の言でも肯定しない」

過激でしょ。このほか「知行合一」説というのも有名。非常に哲学的で難しい内容なので、名前を覚えるだけでよい。ただ、普通理解されているような「正しいと思ったら行動をしなければならない」という意味では全然ない。そこだけ注意してください。

陽明学派には過激な思想家がたくさん出ますが、その代表格が李卓吾。李贊（りし）ともいう。かれの説はあまりにも過激なので最後は牢屋に入れられて、そこで死んでしまった。儒学者でありながら、すごいことを言う。「論語は偽善者の養成所」だって。

幕末の吉田松陰が、かれらの影響を強く受けたのも理解できる気がしますね。

考証学。

明末清初の王朝交代期には、儒学者たちは身の処し方に悩みます。「忠」という儒教道徳からすれば、明に仕えていたのなら、清の支配を認めてはならないはずですから。

顧炎武、黃宗羲という学者は明末清初の学者で、清に仕えることを潔しとしなかった人たちです。彼らがはじめたのが考証学。彼らは明があっけなく滅んでしまったのは、明の時代の学問が現実の問題に役に立たなかつたからだと考えた。そこで、実地検証にもとづいた実践的な学問をしようとした。これが考証学。

考証学は、実証的な学問方法として発展していった。現在の近代的学問方法とほとんど同じで、歴史研究では多くの成果を挙げました。特に清代の考証学者錢大昕（せんたいきん）は有名。

庶民文化の活況。

明代に「四大奇書」が成立している。

『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』です。宋や元の時代から、講談やお芝居で演じられてきたものが、現在に伝わる小説の形になった。江戸時代の日本文学にも大きな影響をあたえている。有名な怪談『牡丹灯籠』の原作『牡丹亭還魂記』もこの時代のものです。

清代では『紅樓夢』という小説が有名。作者は曹雪軒。この人は、滿州八旗の名門貴族出身。おじいさんは康熙帝のお気に入りの家臣で、政府が南京で経営する織物工場の長官をしていた。康熙帝が、南京に行幸したときにはかれの家に宿泊しているから、すごいお屋敷に住んでいたのでしょう。ただ、かれの時代には没落していて貧しい暮らしをしていたらしい。自分の家をモデルにして、滿州貴族の繁栄と没落を描

いた作品です。

実学の発達

明代の文化の特徴に実学の書物が多く出たことがある。

李時珍『本草綱目』、薬草の百科事典。

宋応星『天工開物』、工業技術の解説書。

徐光啓『農政全書』、農業の解説書。

実際に役に立つ学問は庶民が必要としているものです。上の小説類も庶民が楽しむものでした。そろばんが流行、普及したのも明の時代だったことも覚えておきましょう。

ヨーロッパ人宣教師の来航

明の時代の後半から、ヨーロッパ人宣教師が中国にやってきます。宣教師たちは、まず西洋の科学技術を売り物に、中国の支配者階級に取り入ろうと考えた。中国の皇帝たちは、西洋の技術を珍重して、宣教師たちを迎え入れますが、キリスト教に入信することはありませんでした。これは、清の時代になっても同じです。

代表的な宣教師と、かれらが中国に伝えたものをみていきましょう。

マテオ＝リッチ。中国名は利瑪竇(りまとう)。郷に入れば郷に従えで、宣教師たちは中国名をつけて活動しました。

かれはイエズス会士です。中国布教の先駆者で、1601年、はじめて明の万暦帝から中国での伝道許可を得た。このとき、マテオ＝リッチが万暦帝に献上した品物は、キリストとマリアの像、バイブル、ロザリオ、台つきの時計、万国図誌。万暦帝の気に入ったのが台つき時計。この時計が故障したときに、マテオ＝リッチが実際に手際よく修理して、皇帝に気に入られたという。こういう事情で布教の許可がでたので、皇帝は宗教そのものに関心があったわけではありません。

それでも、マテオ＝リッチの持つ科学技術が中国で尊敬の的になつたので、以後、中国にやってくる宣教師は、科学技術の知識をそなえた者が多くなつた。

マテオ＝リッチが1602年に出版した世界地図が『坤輿万国全図(こんよばんこくぜんず)』。

『農政全書』を出した徐光啓は、マテオ＝リッチに会って、キリスト教に入信しています。徐光啓は明朝の中枢で大臣として活躍した大物官僚ですから、かれの入信はマテオ＝リッチの大金星でした。ただ、当時の信者は北京で300人くらい。爆発的に信者が増えるということにはならなかつた。

マテオ＝リッチと徐光啓が共同であらわした数学の本が『幾何原本』。

アダム＝シャール。中国名、湯若望(とうじゃくぼう)。明の末期に徐光啓に呼ばれて、西洋の天文学をもとに暦の改変をおこないます。かれがあらわした西洋天文学の本が『崇禎暦書』。大砲の製造技術も伝授した。明は中国本土に侵入しようとする清軍を山海関でつい止めていましたが、かれの作った大砲はそこで大活躍していた。吳三桂が寝返るときの清軍への最大のおみやげが大砲でした。

明が滅んだあとは、清に仕えて天文台の長官をしていた。ところが、康熙帝の時に、キリスト教に反感を持つ中国人官僚に糾弾されて、逮捕投獄、最後は獄死しています。

フェルビースト。中国名、南懷仁（なんかいじん）。アダム＝シャール亡きあと、中国の伝統的な暦法よりも西洋の暦法の方が正しいことを証明して、康熙帝の信頼を得る。天文台の長官になりました。三藩の乱がおきた時には、康熙帝のために大砲440門を造っている。

ブーヴェ。中国名、白進（はくしん）。康熙帝に気に入られて、そばに仕えた。勉強好きな康熙帝は、数学や天文学など、疑問があったらすぐにブーヴェにたずねたという。ブーヴェは中国全土の測量作業を手がけて、中国の地図を完成させます。これが、『皇輿全覽図（こうよぜんらんず）』。

カスティリオーネ。中国名、郎世寧（ろうせいねい）。康熙、雍正、乾隆の三代に仕える。宮廷画家として活躍します。円明園という皇帝の別荘の設計もしている。ヴェルサイユ宮殿をモデルにしたもので、1860年にイギリス・フランス連合軍に破壊されて、現在は廃墟が残っています。

以上の宣教師はすべてイエズス会士です。歴代皇帝たちは利用できるなら、宣教師でも何でも利用しましょう、という態度。イエズス会の側も、まずは中国社会に入り込むことが第一と考えて、中国の伝統文化に妥協します。具体的にいうと、キリスト教に入信した中国人が、孔子を拝んだり、祖先の靈をまつるのを認めた。ちなみに康熙帝の時代に、中国全土に30の教会があったといいます。

ところが、イエズス会に遅れて中国に布教にやってきたドミニコ修道会、フランチェスコ修道会が、イエズス会の足を引っ張ろうというライバル意識もあったようで、イエズス会の布教の仕方が間違っていると言いました。中国人に対してどのように布教すべきかということが、ローマ教会の論争になります。これを典礼問題といいます。

北京の宮廷に出入りする宣教師たちが皇帝の前で、お互いの非難をはじめる。清朝の皇帝にとって、典礼問題はローマ教会内の問題で、自分たちにとっては何の関係もない。ところが、典礼問題は、ローマ教皇と中国皇帝とどちらが偉いかというような論争に発展してくる。やがて、ローマ教皇が、中国人の信者に孔子や祖先を祭ることを禁止する命令を出すと、康熙帝はイエズス会以外の布教を禁止した。次の雍正帝はキリスト教の布教を全面禁止しました。ただ、布教が禁止されただけなので、イエズス会宣教師が宮廷に仕えるのは以前同様でした。

結局の所、この時期のキリスト教は、西洋の技術や文物を伝えただけで、中国の文化に大きな影響を与えるということはありませんでした。

第75回 清の政治・明清の社会 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第74回 清](#)

[次のページへ](#)
[第76回 北アメリカの植民地化](#)

世界史講義録

第76回 北アメリカの植民地化

17世紀における北アメリカの植民地化

アメリカ合衆国の成立の話をする前に、北アメリカ大陸にヨーロッパ人がどのようにやってきたのかみておこう。

先住民はモンゴロイド系のアメリカン・インディアン。17世紀の北アメリカ大陸には、約100万人がいた。国家を形成していません。部族数500、言語系統が50あったというから、バラバラですね。生活の仕方も部族ごとにさまざまで、狩猟採集生活をしている部族もあれば、農耕をおこなっている部族もいた。

ここにヨーロッパ人がやってきた。来たのはスペイン、フランス、イギリスです。

最初にアメリカ大陸にやってきたスペインは、北米大陸の中西部を領有します。しかし、中南米や西インド諸島の経営が中心だったので、形式的なものにすぎなかった。地図の上で、ここはスペイン領ですよといっているだけです。実際に北アメリカの奥深くスペイン人が入り込んでいくわけではない。だから、アメリカ・インディアンたちも自分たちの住んでいる土地がスペインの領土になっているなんて、全然知らずに昔ながらの生活をしていました。

フランスは、セントローレンス川沿いとミシシッピ川沿いを領有する。それぞれカナダ、ルイジアナと呼ばれます。フランス人は、先住民との毛皮取引中心の植民地経営をおこなった。だから、先住民の土地を奪うこともなく、両者の関係は比較的友好的です。

イギリスは東海岸沿いに植民地を建設しました。イギリス人たちは、家族ぐるみで移住ってきて、先住民から土地を奪って、農業をはじめる。ここが、スペインやフランスと違うところでした。ただ、イギリスも最初から農業をするつもりではありませんでした。どうして、農業をするようになったかみておきましょう。

最初にアメリカ大陸にやってきたイギリス植民者は、キャプテン・スミスという男に率いられた約100人のグループでした。この100人は全員が男です。これは、どういうことかというと、定住するつもりはないのです。定住するつもりなら、家族を連れてくるから、当然女性もいるはずなのです。さて、キャプテン・スミスたちは何をしに来たかというと、黄金を探しにきた。インカやアステカみたいな黄金の国があるのではないかと、一攫千金を求めてやってきた連中でした。しかし、東海岸では黄金は

出ません。かれらはそんなことはわからないから必死に探す。どうやって探すかというと、先住民を捕まえて、黄金の在処を聞こうとするのです。聞いてもないものは答えようがないのですが、スミスたちは、隠していると思って拷問まがいのこともしたらしい。はじめは、スミスたちと友好関係にあった先住民の部族も、当然ながら敵対するようになる。

1607年、スミスたちがつくった最初の町がジェームズタウンという。復元写真がありますから見てください。三角形の壁に囲まれた変わった形の町です。先住民アメリカン・インディアンの襲撃をさけるためにこんな作りになっているのです。

黄金探しはうまくいかない。やがて冬が近づいてきて、食料が底をついてきます。イギリスの船もなぜか到着しない。飢えに苦しんだジェームズタウンの住民は、先住民から食料をわけてもらうために奥地に出かけた。一行はキャプテン・スミスに率いられて、ポウハタン族という部族の集落へ行き、そこで酋長ポウハタンに食料をわけてくれるよう交渉する。そのときの酋長の言葉が伝わっている。こんなことを言った。

「キャプテン・スミス殿。あなたがこの地に来たことについて、私は疑問をもっている。私は親切にしてあげたいのだが、この疑問があるので、それほど親切に救い手をさしのべるわけにはいかないのだ。というのは、あなたがこの土地に来たのは、交易のためでなく、私の人民を侵し、私の国をとってしまうためだ、と多くの人がいっているからだ。この人たちがあなたにトウモロコシをもって来ないのは、あなたがこの通り部下に武装させているのを見ているからだ。この恐怖をとり払ってわれわれを元気づけるよう、武器を船においていらっしゃい。ここでは武器は要らない。われわれはみな友人だから…」

非常に筋が通っている。武器を船においていらっしゃい、というセリフを見るとスミスたちがこれまでどういう態度をとっていたか、想像できますね。

さて、こういわれたキャプテン・スミスはどうしたか。一説によると、いきなり酋長の横に立っていた弟を、ぐいっと引き寄せて、その頭にライフルの銃口を突きつけながらこう言った。

「トウモロコシを船に積め、さもないとお前らの死体を積むぞ」。

滅茶苦茶です。武器で脅されて、ポウハタン族はイギリス人に食料を供給することになり、ジェームズタウンの人々は冬を乗り切った、というのです。

ところが、これとはまったく違う話も伝わっています。

このバージョンでは、食料を求めて奥地に分け入ったキャプテン・スミスたちはポウハタン族に捕らえられる。村の広場に連行されたスミスたちは処刑されることになった。スミスが広場の真ん中に引き出されて、両手両足を押さえられてうつぶせに寝かされる。そして、今までにスミスの首が切り落とされるというそのときに、一人の乙女が飛び出してきてスミスの上にかぶさって、命乞いをするのです。「この白人の男は、きっと悪い人ではありません。どうか命を助けてやって下さい」とね。この女性がポカホンタスといって、酋長ポウハタンの娘でした。娘の願いに負けてしまって、酋長はスミスたちを許す。さらに、食料までもらってジェームズタウンに帰ることができた、という。ポカホンタスもスミスとともにジェームズタウンへ行った。

なぜ、ポカホンタスがキャプテン・スミスを助けたかというと、これは一目惚れということです。

全然違う二つの話。どちらを信じますか。常識的に考えて、ポカホンタス・バージョンはイギリス人たちが作り上げた伝説でしょうね。

ただ、ポカホンタスというアメリカン・インディアンの娘は実在しているのです。実際に、ジェームズタウンに住んでイギリス男性と結婚して子どもも生まれています。ただし、夫になったのは、キャプテン・スミスではなくて、ジョン・ロルフという人物ですが。

実際のポカホンタスは、人質として、ジェームズタウンに無理矢理連れてこられたのではないでしょうか。ただ、現在のアメリカ合衆国の主流派である白人たちにとっては、少々後ろめたい話なので、それを、恋愛物語に仕立てて語り伝えてきたのではないかと思います。このポスター、覚えがある人いますか。ディズニー映画で数年前に公開された『ポカホンタス』。恋愛バージョンの話を映画化したものです。

ともかく、先住民の娘ポカホンタスはジェームズタウンでイギリス人と一緒に生活するようになった。彼女は先住民の農業をイギリス人に教えました。そして、ここが重要なのですが、彼女はタバコ栽培を教えた。

コロンブス以来、ヨーロッパに喫煙の風習が伝えられて、流行しはじめました。だから、タバコを栽培してヨーロッパに輸出すればいい儲けになる。ジェームズタウンの人々は黄金は発見できなかったけれど、タバコ栽培で成功したのです。これ以後、イギリスからタバコ栽培目的で移住してくる人が増える。イギリスの植民地が農業中心になるのはこれ以来です。

ジェームズタウンのある場所は、ヴァージニア植民地という。現在は、ヴァージニア州。今でも、タバコ栽培をやっている。ヴァージニア・スリムというタバコの宣伝、見たことあるでしょ。

ヴァージニア植民地がイギリス最初の植民地で、その後、いろいろなグループが移住してきて植民地を建設します。アメリカ大陸に移住するグループはそれぞれ国王から場所を指定した許可状を交付される。それにナントカ植民地という名前を付けます。基本的には植民地どうしの横のつながりはありません。なかには、イギリス本国で迫害を受けたピューリタンたちが信仰の自由を求めて建設した植民地もあります。1620年、ピルグリム＝ファーザーズというグループが建設したプリマス植民地です。

1732年に成立したジョージア植民地まで、13の植民地が成立します。13植民地が発展して、現在のアメリカ合衆国になるのです。

13植民地の暮らし

13植民地の人々はどんな暮らしぶりだったのでしょうか。13植民地でベストセラーになった『貧しきリチャードの暦』を通して見てみたいと思います。『貧しきリチャードの暦』を出版したのはベンジャミン・フランクリン(1706~1790)という人です。

フランクリンは名前を聞いたことがあると思う。現在のアメリカでも人気のある人です。いろいろな分野で活躍して名前を残しているのですが、かれの人生は、アメリカ人の理想像の典型です。

フランクリンは父親の代にアメリカ大陸に移住してきて、父親はボストンでロウソクや石鹼をつくっていた。家は貧しかったので、小学校も満足に行っていません。12歳で印刷屋をやっていたお兄さんのところで働きはじめるのですが、兄貴とうまくいかず、17歳の時に無一文でボストンを離れて、フィラデルフィアにやってきます。ここで、印刷工として働いて、22歳の時には独立して自分の印刷所を持つようになる。

とにかくまじめに働くし、いろいろなことに好奇心を持って、自分の頭で考えることが大好きな人だったのです。

当時、印刷所はカレンダーをつくって売っていました。今でも、カレンダーは印刷会社が作るんだけど、たいていの家庭では、買わないでしょ。仕事の関係とか、どこかのお店で年末になるとくれるよね。フランクリンの時代の13植民地では、誰もカレンダーをくれたりしない。買うしかないので、カレンダーは絶対卖れます。だから、どこの印刷所でもカレンダーを印刷して販売していた。ところで、カレンダーというのは、1から31までの数字と曜日さえ書いてあればいいので、どこの印刷所のカレンダーも同じようなものです。

フランクリンは、ここで知恵をしぼった。たくさん売れるためには独自性を出さないといけない。そこで思いついたのが、カレンダーの余白に「ことわざ」を印刷することでした。聖書をはじめとするいろいろな本から、人生訓的なものを探し出してカレンダーを埋め尽くす。足りなかつたら、自分でことわざをつくる。そして、出来上がったのが『貧しきリチャードの暦』というカレンダー。これが、ものすごい人気を呼んで、売れる売れる。これで、フランクリンは有名になり、金持ちになる。『貧しきリチャードの暦』はロングセラーにもなって、ことわざを入れ替えながら、これ以後25年間出版されつづけます。これだけ卖れたのは、「ことわざ」を入れるという工夫のせいだけではなくて、フランクリンの選んだ「ことわざ」そのものに、当時の植民地の人々を振り動かす何かがあったと考えられます。

いったいどんな「ことわざ」が載っていたのか。

「女と灯火のない家庭は魂のない人のようだ」

「軽い財布、重い心」

「よく愛し、よく鞭打て」

「生きるために食い、食うために生きるのではない」

「金をためすには火、女をためすには金、男をためすには女」

「寝ている狐は一羽の鳥も捕まえない」

「怠惰は何でもことをむずかしくするが、勤勉はすべてをたやすくする」

「仕事を追い、仕事に追われるな」

「早起きは人を健康に、金持ちに、賢くする」

「必要なないものを買えば、まもなく必要のあるものを売らなければならなくなる」

「御馳走が多いと意志がやせる」

「天は自ら助くるものを助く」

「今日の一日は明日の二日」

「空の袋は立ちにくい」

どこかで聞いたことのあるようなものばかりでしょ。フランクリンの「ことわざ」をずっと読んでいく

と、共通点がいくつか見えてきます。かれが繰り返し繰り返し訴えているのは、勤勉、節約、蓄財、です。働きなさい、無駄遣いはいけません、貯めなさい。まさしくカルヴァン派、ピューリタンの教えですね。言っていることは理解できます。理解できますが、現在の日本に住んでいる私たちにとってはピンとこないところもある。

たとえば、「早起きは人を健康に、金持ちに、賢くする」ということわざ。「早起きは三文の得」と翻訳されて、日本でも有名です。しかし、早起きすれば健康にはいいだろうけれど、金持ちになりますか。9時から仕事が始まるサラリーマンが朝の4時に起きて5時に会社についても、給料あがりません。まだ、シャッターは閉まっています。

しかし、13植民地の人々は、このことわざを読んで、なるほど、そうだ、早起きして金持ちになろうと、納得したに違いない。そうでなければ、『貧しきリチャードの暦』がベストセラーになるはずがないのです。

早起きしたら金持ちになる仕事ってなんですか。それを、実感できる仕事とは。

農業ですよ。植民地に渡ってきた人たちの多くは農業をしている。しかも、特別な環境だった。なぜなら、土地はいくらでもある。未開の荒野がいくらでも広がっているのです。早起きして、一坪でも開墾すれば、それが自分の農地となり、翌年の収穫増加につながる。働けば働くほど土地が手にはいるという環境だったのが、当時の13植民地なのです。そして、フランクリンは農民たちに、気を抜かずに頑張りや、と応援をしているというわけ。

N H Kで何度も再放送されている『大草原の小さな家』、あのドラマにててくるインガルス家のお父さん、あのイメージです。大きな農場を経営しているような農民ではなく、自分の力だけでやっている自営農民です。

頑張るのは、あくまでも自分で。「天は自ら助くるものを助く」。自助努力の精神とかフロンティア・スピリットとか、アメリカ人の精神的な柱のようなものがつくられてくるのです。

そして、頑張れと言っているフランクリン自身が、自分の才覚と努力で一文無しから大金持ちになっていくわけで、アメリカンドリームを最初に実現した人だから、説得力がある。

フランクリンの言葉を紹介しておこう。

「ヨーロッパでは名門に価値があるが、…アメリカでは他人のことを『あの人はどういう身分か?』とは聞かないで、『あの人は何ができるか?』と聞くのである。その人に有用な技能があれば歓迎されるし、それをやってうまくできれば、彼を知る者から尊敬される。だが、ただ家柄がよいというだけの人が、そのためだけの理由で、何か官職か俸給を得て、社会に寄食しようとすれば、軽蔑され無視されるであろう」

フランクリンは印刷所で成功を収めたあとは、別の分野に興味を持つ。

当時、発達しはじめていた科学のなかでも電気科学の分野はいろいろな仮説が出されていた。フランクリンは持ち前の好奇心で電気の研究を始めます。

有名なのが雷の研究。フランクリンは、雷は電気ではないかという説を立てて、嵐の日に凧を飛ばす。有名な実験です。そしたら、見事に凧に雷が落ちた。凧には電線がつけてあって、フランクリンの足下に置かれた蓄電池に、見事に電気が伝わってきたのです。この研究で、電気科学の研究者としてヨーロッパで

も有名になります。ちなみに、凧を持っていたフランクリンはなぜ感電しなかったのかと思うでしょ。運がいいんです。フランクリンの実験を知って、スウェーデンかどこかの科学者が追試をしたのですが、その人は感電して死んでしまった。本当の話です。

そのほか、フランクリンの活動はとどまるところを知りません。ストーブの改良、アメリカではじめての図書館の設立、奴隸制度反対協会設立、等々。晩年は政治家、外交官としても活躍して、アメリカ独立に貢献した。独立宣言の起草者の一人でもあります。肖像画を見ても、好々爺でしょ。人なつっこそうな表情で、誰にでも陽気に声をかけて冗談をとばしそう。「最初のアメリカ人」なのです。

最後にフランクリンと先住民との関係について。

さきほど、未開の荒野が無限に広がっていると言いましたが、その荒野には遙か昔から先住民が住んでいます。だから、自営農民たちにとってはアメリカン・インディアンは邪魔です。いなくなって欲しい存在。農民にエールを贈るフランクリンの立場も同じです。奴隸制度に反対していたフランクリンがインディアンに関してこんな言葉を残しています。

「ラム酒はインディアンを消してしまうために、神が我々にあたえたもうた」

白人たちが、インディアンから土地を奪うときによく使った手なのですが、ラム酒を持ってインディアンの村に挨拶に行く。一緒に食事をして、「飲め飲め」とラム酒をすすめる。ラム酒は強いお酒です。インディアンたちはそんな強い酒を飲んだことがないから、ぐでんぐでんに酔っぱらってしまう。前後不覚になったところで、土地の譲渡契約書に無理矢理サインをさせて、さっと引き上げる。

翌日になると、インディアンの土地に杭を打ち込んで囲い込みます。インディアンが抗議に来ると、契約書を見せて、お前はこの土地を俺に譲ると署名したんだ、とつっぱねる。合法性をよそおって、先住民から土地を奪うためのツールがラム酒だったのです。フランクリンはそのラム酒を讃えているというわけ。この辺が、アメリカ史の複雑なところです。

第76回 北アメリカの植民地化 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第75回 清の政治・明清の社会](#)

[次のページへ](#)
[第77回 アメリカ独立革命](#)

世界史講義録

第77回 アメリカ独立革命

13植民地の特徴

本国イギリスは13植民地に対してどういう支配をしていたのか。

実は、イギリス本国政府は、アメリカに成立した13植民地に対して無関心でした。植民地の人たちの生活に、規制や干渉をくわえることはなかった。税金も取らないのです。そのかわり、政府としてのサービスもしません。ほったらかしです。

だから、植民地の住民は、政府を頼りにせず、全部自分たちでやらなければならなかつた。そのため、早い段階から植民地で議会が成立します。一番はやいものが1619年のヴァージニア植民地議会。

政治的にも、自主自立、自助努力が植民地の人たちの当然の生活態度になる。自由な気風が尊ばれるようになる。イギリスの一部でありながら、イギリスとは違った文化風土が生まれはじめていたのです。

産業も徐々に発達してきます。

北部の植民地では、商工業が発達する。農業は自営農民が主流となります。

南部の植民地では、プランテーションが発達する。気候にあった商品作物として、タバコ、綿花の大規模栽培がおこなわれました。これらの農作物は、多くの人手を必要とした。そのために、労働力不足を補うために、南部では奴隸制度が発達した。奴隸はアフリカから連れてこられた黒人たちです。おなじ、イギリスの植民地でも北部はプランテーションがありませんから、奴隸制もなかつた。ここは注意しておいてください。

独立戦争

1754年から63年まで、フレンチ・インディアン戦争が北アメリカでおこなわれた。イギリスとフランスの戦争です。ヨーロッパでは七年戦争がおこなわれていた時期です。

この戦争の原因は北アメリカの領土の奪い合い。フレンチ・インディアン戦争という名前は、フランスがアメリカ・インディアンと同盟を結んで、共同でイギリスと戦ったところからついた。アメリカ・インディアンたちにとってみれば、土地を奪うイギリスの植民者は憎いですが、フランスは毛皮交易などを目的に植民地を経営していたから、利害の対立はない。フランスと同盟を結んでイギリスと戦うのもうなづけます。

フレンチ・インディアン戦争は、イギリスの勝利で終わる。勝ったイギリスはパリ条約でミシシッピ川以東のルイジアナ地方を獲得した。これでフランスの勢力は北アメリカからなくなりました。

この戦争では、13植民地の人々も当然イギリス側として戦った。そして、イギリスが勝って、内陸部のフランス領がイギリス領になったのですから、大喜びでした。さらに、内陸部を開拓して、農地をひろげることができます。

ところが、1763年、イギリス王は新しくイギリス領になったルイジアナ地方を国王の直轄地として、13植民地人が入植することを禁止した。13植民地と、国王直轄地とのあいだに引かれた境界線を「国王宣言線」といいます。

13植民地は、この国王宣言線に対して反発した。フレンチ・インディアン戦争で戦ったのは何のためか、ということです。これが、13植民地とイギリス本国政府との最初のいきちがいです。

その2年後、1765年、イギリス本国政府は13植民地に対して、印紙法という法律を施行しようとした。これは、植民地で発行されるすべての印刷物に課税しようというものでした。フレンチ・インディアン戦争での戦費を植民地人に負担させるのがこの税金の目的でした。

植民地の側からすれば、入植地が拡大したわけでもないのに、金だけ取ろうというのは本国政府は勝手すぎる。しかも、それまで13植民地は、税金を払わなくてもよかったです。税金なしというのは、一見うらやましいように思いますが、植民地人は納税の義務がないかわりに、参政権もなかったのです。植民地に住んでいても、国籍はイギリス人です。ところが、イギリスの国会議員を選ぶ権利がなかった。参政権をあたえられないままに、納税だけを迫られたので、13植民地は猛反発した。このときの植民地側のスローガンは有名です。「代表なくして課税なし」代表というのは、自分たちが選ぶ国会議員のことですね。

イギリス政府は植民地の猛反対で、印紙法を廃止しまが、このあとも似たような法律を制定していきます。その中で、再び、植民地側の猛反発を受けたのが、1773年の茶法です。

茶法は、イギリス東インド会社の茶しか、13植民地での販売を認めないという法律。植民地人は、この法律にひどく反発しました。当時お茶はイギリス人にとって国民飲料になっていた。国民飲料というのは、その国の人たちにとって食事の時に絶対欠かせない飲み物です。一昔まえの日本だったら緑茶。今は、ウーロン茶とかナントカ茶とか、缶やペットボトルで売り出されて、いろいろなお茶を飲むようになっているけれど、少し前までは緑茶だけだったと思う。真夏の麦茶は別としてね。

イギリスでは、東インド会社が中国から茶を輸入して以来、お茶がアッという間に国民の間に広がった。もちろん紅茶です。これがなかったら、食事もできない。生活必需品です。だから、茶法は植民地の人たちにとって、イギリス本国の強引なやり方の象徴となりました。

そこで、本国政府のやり方に腹を立てた一部の過激な植民地の人々が、ボストンの港に入港した東印度会社の貿易船にのりこんで、積み荷の茶を海に投げ捨てた。これが、1773年ボストン茶会事件です。この事件は、アメリカで切手になっていて、この絵はそれを拡大したものです。事件は夜におきた。植民地の人たちがボートに乗って貿易船に近づいています。何のつもりだったのかよくわかりませんが、インディアンに変装している。そして、海に箱を投げていますね。茶箱です。海面にプカプカ浮いている。9万ドル分の茶がバーになった。

これは、事件としては実にささやかなものですが、植民地人が本国に対して、実力行使をしたという点で、画期的だったのです。植民地人たちの反抗心に火をつけた。アメリカ独立の歴史の出発点となつた。

アメリカ人にとっては記念すべき事件なのですね。

資料集には、現在のボストン港の様子があります。観光客が、船から箱を海に投げ捨てるアトラクションに参加しているところ。

それから、現在のアメリカ人はあまり紅茶を飲まない。アメリカの国民飲料はといえば、アメリカンコーヒー。実は、アメリカンコーヒーは、「イギリスの紅茶なんか飲んでられるかい」と茶法に反発した植民地人たちが、紅茶の代用品として飲み始めたのです。コーヒーは、濃すぎて何杯も飲めない。紅茶に近づけようと、シャビーシャビに薄めたのです。どちらかというと、わたしはあまり好きじゃない。喫茶店でアメリカンコーヒーを飲んでも、コーヒー飲んだ気がしないです。

それはともかく、こうなった以上は本国イギリス政府との対立は避けられない。そこで対応策を練るために13植民地の代表者が集まって会議を開いた。これが第一回大陸会議(1774)。それまで、13植民地はそれぞれの成立事情、成立時期がちがっていたから、お互いの連絡はなくてバラバラだった。しかし、本国との対立が実力行使までに発展したのでお互い協力しましょうと言うことで開かれたのです。開催地はフィラデルフィア。のちに独立後最初の首都になる。映画の『ロッキー』の舞台になっている。

この大陸会議という名称が、大きいishよ。名前だけ聞いてるとアメリカ大陸の全ての地域が参加しているように感じてしまいます。でも、参加しているのは北米東海岸に細長く連なるイギリス13植民地のみです。アメリカに住み着いた植民地人たちは、自分たちの住んでいるところが世界の中心だ、みたいな発想があるんでしょうね。メジャーリーグの優勝決定戦を「ワールドシリーズ」という。メジャーリーグに参加しているのは、アメリカとカナダだけですよ。それで、「ワールド」。中南米を無視して「大陸会議」といっている発想と同じですね。

この段階で、イギリスから独立しようと考えている植民地人が多数派ではなかった。ところが、翌1775年、イギリス本国から派遣された軍隊と、植民地人の民兵の間で戦闘がはじまってしまった。アメリカ独立戦争の開始です。戦争という既成事実に引っ張られるかたちで、こうなったら独立するしかないか、という世論があとから生まれてきました。

独立戦争がはじまったときに、植民地人口は約250万人。このうち、王党派、イギリス国王に忠誠を尽くすという人たちですが、これが30万。独立をめざす愛国派が80万、中立派が120万でした。このときに独立の世論を盛り上げたのが、トマス=ペインの発行したパンフレット『コモン・センス』でした。常識、という意味ですね。植民地の権利を守らないイギリス本国から独立するのが常識だ、という中身です。これが、12万冊発行されたという。単純計算で20人に一人がこのパンフレットを手に入れたことになる。今の日本なら600万冊。大ベストセラーです。

実際に戦争がはじまてしまえば、行き着くところまで行くしかなくなる。とりあえず、植民地側は植民地軍を編成した。司令官に選ばれたのがワシントンです。フレンチ=インディアン戦争での活躍を買われたのです。ワシントン率いる植民地軍の兵力は1万2000人。そのうち、ぬかるみでも歩ける長靴を履いていたのが900人。小銃をもっていたのが三人に一人だったという。あとは、サンダル履きだったり、農具を武器にしている。軍隊というよりは農民一揆です。もちろん、ほとんどの兵士は、きちんとした軍事訓練を受けていない。素人集団です。

対するイギリス軍は兵力3万。当然こちらはプロ集団です。

兵力も装備も訓練も劣る植民地軍はどういう戦いをしたか。負けない戦いをする。正面からぶつかったら負けるのはわかりきっていますから、イギリス軍が、休息したり、山間の狭い道を分散して通過したりする時をねらって攻撃を仕掛けます。相手が向かってきたら一目散に逃げる。植民地軍は地の利がありますから、それを最大限利用して戦ったわけです。こういう戦いを散兵戦という。ワシントンは、植民地軍をよくまとめて負けない戦いをつづけます。

しかし、これでは負けはしないが、勝つこともできない。植民地がイギリス本国と戦いつづけるためには、他国の援助が絶対必要でした。そこで、ヨーロッパでも有名なフランクリンがフランスなどで外交活動をおこなった。植民地への援助を要請するためです。フランスは当時絶対王政の時代。貴族たちがサロンで政治の流れをつくっていく。洗練されたフランス貴族から見ると、アメリカ大陸の植民地人というだけで、どんな粗野な人間だろうかと興味津々なのです。フランクリンはそういう期待に応えるために、わざと田舎臭い、野暮ったい恰好、熊の毛皮を身につけたりして社交界に出入りした。話も面白いし、サービス精神旺盛だから、フランクリンはフランス社交界で引っ張りだこの人気者になった。

そんな努力のかいがあって、ヨーロッパ諸国は次第に植民地を支援するようになる。

ヨーロッパから義勇兵として植民地に来たのがフランスのラファイエット、ポーランドのコシューシコ。ワシントンの副官として活躍します。かれらは、のちにフランス史、ポーランド史でも、それぞれ活躍しますからしっかり覚えておくこと。

フランスは1778年に、正式に参戦して、アメリカに軍隊を派遣します。フレンチ＝インディアン戦争の復讐です。スペイン、オランダもイギリスに宣戦する。また、1780年、ロシアがプロイセン、ポルトガルなどを誘って武装中立同盟を結成してイギリスに敵対します。

これらの動きは、植民地の独立を応援したいというよりは、イギリスにダメージを与えるという各国の思惑から出ています。国際的な反イギリスの動きが、植民地の独立戦争を有利にしました。

植民地側が1776年に発表したのが『独立宣言』。「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命、自由および幸福の追求のふくまれることを信じる。」からはじまる歴史的文書です。

内容的には、基本的人権、革命権、平等・生命・自由・幸福追求の権利などをうたっていて、イギリスの思想家ロックの社会契約説の影響を強く受けています。

独立宣言が独立戦争の最中に出されたのは、ヨーロッパ諸国の援助を得るために自分たちの独立の正統性と、イギリスの暴虐ぶりをアピールするという目的がありました。この宣言で、国名をUnited States of Americaとしました。

起草者は複数いますが、中心となったのがトマス＝ジェファーソン。フランクリンも起草者の一人です。資料集の絵が、起草者たちが独立宣言に署名をしているところ。

独立宣言の中身は非常に立派で、「すべての人は平等」と書いてあるのですが、奴隸制度のことをどう考えていたのか。ここでいう「すべての人」の中には黒人奴隸やインディアンは入っていません。独立できても黒人奴隸やインディアンに自分たちと同じ権利を与える気は全然なかった。

実は、独立宣言を中心になって書いたトマス＝ジェファーソンは、奴隸制度の廃止を考えていました。かれが最初に書いた宣言の原稿には、そのことがはっきりと書かれています。ところが、起草委員は複数い

るので、ジェファーソンが原稿を見せると、「奴隸制廃止に触れるのはちょっとやばいんじゃないの?」という意見が出てくるのですね。

植民地側の指導者たちの中には、奴隸をもっている人も当然たくさんいるから。たとえば、軍司令官ワシントンは何百人の奴隸をもって農園を経営している。奴隸制廃止なんていったら、へそを曲げるでしょ。それでは、独立戦争を戦えない。結局、ジェファーソンの原稿から奴隸制度に触れた部分は削除されたのです。

ジェファーソンの逸話を紹介しておきます。ジェファーソンは妻を亡くしたあと、自分の身の回りの世話をしていた黒人奴隸の女性と関係を持った。もちろんジェファーソンが所有している奴隸ですよ。で、その黒人女性との間に子どももうけています。こういうことは、結構一般的だったらしいけれど、ジェファーソンは自分の体験から奴隸問題を真剣に考えたのでしょうか。ちなみにジェファーソンは、のちに合衆国の第三代大統領になっています。

戦争は、1781年のヨークタウンの戦いで、アメリカ・フランス連合軍の勝利が決定的となる。ちなみに、このときの兵力が、アメリカ軍8800人、フランス軍7000人。

その後、1783年、パリ条約で、イギリスは正式にアメリカ合衆国の独立を承認しました。

1787年、合衆国憲法が制定。特徴として、人民主権、三権分立、連邦制を覚えておく。

合衆国は、自然に出来上がった国ではなくて、植民地の人たちがどういう国にしようかと、議論しながら作った国です。最新の政治学説を取り入れて理想の国づくりをめざした。三権分立はフランスの思想家モンテスキューが専制政治を防止するための方法として唱えたものです。現代世界で、先進資本主義国はほとんど三権分立を採用しているほど広がっているシステムですが、合衆国がその最初だったのです。

連邦制。独立前の13の植民地が独立後は州となります。州の独立性を重視し、州の連合体が合衆国だという考え方です。国名のUnited States of Americaに反映されているでしょ。アメリカ合衆国、と一般的には訳していますが、意味的には「合州国」の方があっていますね。

建国当初は、中央政府と、州政府の力関係をどうするかは、大きな論争になりました。独立前の13植民地は、バラバラに自由にやっていたので、中央政府には大きな権限をもたせずに、州の独自性を尊重しようというのが、建国当初の方針でした。

今でも、アメリカでは州ごとに法律が違う、警察も違う。州軍という州の軍隊もあります。州の警察は、州の中でしか活動できない。たとえば、A州で殺人事件を起こした犯人がB州に逃げると、A州の警察はもう捜査しません。B州の警察は、自分の管轄で起こった事件ではないので犯人を捕まえない。これでは、犯罪やりほうだいです。それで、州をこえて犯罪捜査をおこなえる警察として作られたのが連邦警察、FBIというやつです。

初代大統領になったのが、独立戦争の英雄ワシントン。ワシントンに関してはこんな逸話がある。独立が決定し、どんな国をつくるかというときに、一部の軍人グループがワシントンを国王にしようと考えた。で、故郷の農園に帰っているワシントンの所に出かけて、王様になって下さいと頼んだという。もし、ここでワシントンが首を縊に振っていたら、アメリカは合衆国でなくて、アメリカ王国になっていたかも知れない。ワシントンは軍司令官で軍を掌握しているのだから、かれがその気になれば何だってできた。ところが、ここがワシントンの偉いところですが、「これからは王様の時代ではない」と断った。ワシン

トンが王様になるのを拒否したら、ほかに候補者はいません。そこで、選挙で国家元首を選ぶことにした。大統領です。やっぱりワシントンが選ばれたのですが。

さて、ワシントンが大統領になったのですが、まわりの役人や、議員たちは大統領に対してどう呼びかけていいかわからない。ヨーロッパでは王に対して「選ばれし陛下」とか「いと高き仁慈深き御方」とか、ややこしい呼びかけをする。呼び方に困ったので、本人に聞いてみた。「どのようにお呼びしたらよろしいでしょうか？」ワシントン「ミスター・プレジデントでいいよ」日本語に訳したら、「大統領さん」くらいの感じでしょうか。親しまれる大統領の伝統が、ここから生まれた。大統領就任は1789年。肖像画のワシントンが手に持っているのが、新しく建設する首都の設計図です。かれの名前をつけて、これが、現在の首都ワシントンになりました。

プリントの最後につけてあるのが建国当初のアメリカ合衆国の国旗です。星の数が13、縞の数も13。独立当初の州の数を表しています。その後、中西部に領土が拡大して、新しい州が増えるたびに、星の数は増やされていきました。だから、時期によって星の数が違う。こういう国旗も珍しいね。州というものを重視していることがわかります。

第77回 アメリカ独立革命 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第76回 北アメリカの植民地化](#)

[次のページへ](#)
[第78回 フランス革命1](#)

世界史講義録

第78回 フランス革命 1

革命前のフランス

イギリスの名誉革命、アメリカの独立革命は、ともに、市民が権力をにぎる政府をたてました。だから、これらの革命を市民革命という。産業をなう市民たちが、経済だけでなく、政治をも動かすようになつたわけで、国家の仕組みとしては合理的です。

一方、イギリスのライバル、フランスは古い社会制度のままでした。

古いままでのフランスの社会制度をアンシャン=レジームという。「旧制度」と訳します。

アンシャン=レジームを代表するのが身分制度です。三つの身分にわかつていた。

第一身分が聖職者。第二身分が貴族。第三身分が平民です。第一身分と第二身分が特權階級。平民には、都市の商工業者、職人、農民などが含まれる。都市の商工業者は、いわゆる市民階級です。経済的には力を持ちはじめていたけれど、身分的には一番下なわけです。だから、この身分制度に対しての不満は大きかった。

さらにみていくと、第一身分である聖職者の数は14万人、第二身分の貴族は40万人、第三身分の平民は2600万人でした。人口のわずか3%しかない圧倒的少数の第一身分と第二身分が、国土の40%を領有して、各種の特權をもっていた。最大の特權は、免税特權です。ようするに、かれらは大金持ちなのに、税金を納めなくてもよかつたわけです。税金の負担はすべて、第三身分に押しつけられていた。

特に、農民の暮らしぶりはかなり悲惨だったようで、当時イギリス人のアーサー=ヤングという人がフランスの農村を旅行して、おばあさんだと思った女性が28歳だと知って驚いたと書いています。貧困と激しい労働で、若いのにおばあさんのような姿になつていたといふ。

教科書にも資料集にも載っているフランス革命当時の風刺画です。第一身分の僧侶と第二身分の貴族が肩を並べて立っている。かれらは大きな石の上に立っているでしょ。その石の下では、人間が下敷きになつてもがいています。これが、第三身分の平民です。当時の身分制度は、まさにこの絵のようにフランス人たちに意識されていた。

特權階級である貴族たちは、アンシャン=レジームをどのように考えていたのでしょうか。

ルイ15世の愛人だった女性で、ポンパドゥール夫人という人がいます。この人が「我らのあとに洪水はきたれ」という言葉を残しています。意味わかりますか。ヨーロッパ人が洪水と言えば、旧約聖書にでてくるノアの箱船の洪水です。神を忘れて、墮落した生活をおくる人間をみて、神は人類を皆殺しにしてきれいさっぱり消し去ろうと考えた。ただ、ノアという男だけが、神に深い信仰を持ちつづけていたので、この男とその家族だけは助けてやろうとした。そこで、神はノアにお告げをあたえて、大きな箱船をつくりさせた。やがて、神は大洪水をおこした。人々はみな死んでしまったけれど、箱船に乗ったノアとその家

族、もろもろの動物たちだけが助かった、というお話です。

要するに、洪水とは、神があたえる天罰。それによって人間は滅ぼされる、というわけ。ここで、ポンパドゥール夫人が、洪水という言葉を使っているのは、自分たち貴族が平民たちを犠牲にして、贅沢三昧な生活をおくっていることに対して、神の罰がくだるだろうと自覚しているわけです。堕落した生活だとわかっている。だけれども、楽しいからやめられない。いずれ、天罰がくだるだろうけれど、「神様、罰をあたえるのは私が死んだあとにしてね」という気持ちが、「我らのあとに洪水はきたれ」という言葉に表現されているわけです。

貴族にも、アンシャン=レジームの身分制度が時代遅れでおかしいと、わかっている人はいたのです。プリントに載せているのは、ポンパドゥール夫人の肖像画。机の前に座っている。手に持つて広げているのは、楽譜です。芸術に理解のあるところを見せており、机の上には、本が並んでいます。本物の絵では、本の題名もはっきり読みとれるように描かれていて、この本が何かというと、「百科全書」。これは、アンシャン=レジームを批判する学者グループがつくったもので、身分制度を批判しているものです。そんなものを、貴族であり、王の愛人である人物が肖像画に自分と一緒に描かせている。これをどう考えたらよいでしょう。

自分が死んだあとも、肖像画は残る。後世の人は、肖像画を見てその人物を判断する。貴族社会が崩れ、市民の社会がくることを、彼女は予感していたのでしょうか。そのときに、自分が高く評価されるように、この絵を描かせたのではないか。

ルイ16世の妃マリー=アントワネットは「私は退屈がこわいのです」と言っている。彼女はオーストリアのハプスブルク家から輿入れしてきたお姫様。夫のルイ16世とは、相性がよくなかったみたいで、暇を持て余して遊びまくる。庶民感覚から見たら、信じられないくらいの贅沢をする。ハプスブルク家出身ということもあって、平民の恨みを一身に背負うような所があるのですが、それでも贅沢三昧をやめられない。

彼女だけでなく、貴族たちは、本当に贅沢な暮らしをしていた。タレーランという貴族、この人はフランス革命後も外交官として活躍するのですが、この人が、革命後に、アンシャン=レジームのもとでの暮らしを思い出して言う。「1789年以前に生きたことのない人に、人生の甘美さはわからぬ」1789年はフランス革命の起きた年です。

一方でアンシャン=レジームに対する批判も高まってきます。

その一つが、啓蒙思想の流行です。啓蒙思想というのは、理性の力によって迷信や偏見を打破して、社会不正を改革しようとする合理主義的・思想です。

啓蒙思想家で一番有名なのがヴォルテール(1694～1778)。もともとは詩人ですが、フランスの政治体制や社会不正を徹底的に告発して有名になる。貴族にもかれの支持者がいるというところが面白いところで、ポンパドゥール夫人は、フランスの政治を批判して、亡命していたヴォルテールがヴェルサイユ宮殿に入りきるように取りなしてたりする。プロイセンのフリードリヒ2世が、ヴォルテールのファンで、ベルリンに招いたこともあった。

『社会契約論』の著者で人民主権を唱えたルソー（1712～78）も、同時代の啓蒙思想家の一人です。これら啓蒙思想家264人が集まってつくった百科事典が『百科全書』です。

『百科全書』の編集責任者がディドロ、ダランベール。『百科全書』の出版は当然、政府当局の妨害をう

けるのですが、政府の役人のなかにも、こっそりかれらの出版を援助する者もいる。実際に刊行されると、ポンパドゥール夫人の机の上にのる、というわけです。

貴族も啓蒙思想に時代の流れを感じていたということでしょう。

また、アメリカ独立宣言も、アンシャン=レジーム批判に大きな影響をあたえた。独立宣言には、天賦人権思想や平等、自由、幸福追求の権利がうたわれていましたから。

フランスは独立戦争に援軍を送っていたから、実際にアメリカで戦ったフランス人兵士もいたわけで、かれらは当然アメリカ独立の精神を肌で感じて帰ってきている。フランスの制度に批判的になるのは当然ですね。

そして、フランス革命が勃発する1789年のはじめ、シェイエスという僧侶がアンシャン=レジームを批判するパンフレットを発行した。その名もズバリ『第三身分とは何か』

このパンフレットで、シェイエスは書いた。「第三身分とは何か？それはすべてである」なぜなら、フランス国民の大部分は第三身分であり、特權階級は第三身分に寄生しているだけだから。そして、さらに問う。第三身分とは何か？それはゼロである。なぜなら、政治的に何の権利もないから。すべてであり、ゼロである、という第三身分の状況、アンシャン=レジームの矛盾を訴える内容でした。

『第三身分とは何か』は大反響をおこし、この年の夏にフランス革命がはじまることになるのです。

革命の勃発

「アンシャン=レジーム」に対する批判が盛りあがってきた時期に、国王だったのがルイ16世（位1774～92）です。肖像画は堂々としてますが、地味でおとなしい人だったらしい。国王として難局を乗りきるようなリーダーシップや政治的センスはなかったようです。趣味は、狩猟と錠前つくり。宮殿の中に工作室をもうけて、暇があったらこもって鍵をつくる。しゃべるのが苦手で、人付き合いもうまくないから、妃のマリー=アントワネットは夫に不満で、贅沢三昧をしながら遊びまくっていた。

ルイ16世の時代、国家財政の赤字増大が大きな問題になっていました。

国家財政の収入が5億リーブル、支出が6億2千リーブル、財政赤字は45億リーブルになっていた。収入の9倍の赤字をかかえていたわけです。

赤字がふくらんだ原因は何か。

まず、ルイ14世時代以来の対外戦争の出費。これをルイ16世の時まで引きずっていたのですね。それから、アメリカ独立戦争を援助したこと、赤字を増やしました。イギリスに打撃をあたえるためにアメリカの独立に手を貸したのはよいけれど、その結果領土が増えたわけでもなく、何の見返りもなかつたわけです。

さらに、宮廷の浪費。マリー=アントワネットの浪費は国民の反感をまねいていましたが、国王だってすごい。たとえば、ルイ16世が所有している馬車は217台。馬が1500頭。馬の世話というのは、ものすごく大変です。1500頭の馬を飼っているということは、飼育係もそれ相応の人数が必要というこ

とです。狩猟のための獵犬が1万頭。宮殿で使うローソク代だけで数万ルーブルかかったという。無駄な出費とわかっていても、国王となると体面もありますから、簡単にやめることもできないのです。

このままでは、国家財政の破綻は目に見えている。ルイ16世は財政改革をおこなう決意をします。財政改革をおこなわせるために、財務長官に任命されたのがテュルゴー。

財政改革をおこなうためには、貴族階級の特権を制限せざるをえない。当然、貴族たちは財政改革に反対して、テュルゴーは十分な仕事ができないまま、財務長官をやめさせられた。

そのあと、財務長官に任命されるのが銀行家出身のネッケルです。

政府の収入を増やすには増税をすればよいのですが、第三身分からはこれ以上増税することができないくらいしぶりとっている。

どうしたらよいか。答えは簡単です。免税特権を持っている第一身分と第二身分から税金を取ればよい。かれらは、十分な財産を持っているのですから。しかし、免税特権を手放すことに、聖職者や貴族が賛成するはずがありません。

ついに、国王ルイ16世は、第一、第二身分へ課税するために、三部会を召集しました。

三部会というのは、第一、第二、第三の三つの身分の代表から構成されていることからついた名称で、国王が国民の支持を取りつけるために開かれる身分制議会です。しかし、絶対王政の時代には、国民の支持など関係なく国王は権力をふるっていたので、1614年以降は開かれていませんでした。

1789年5月、三部会がはじまります。全国から選ばれた各身分の代表がぞくぞくとヴェルサイユ宮殿に集まってきた。

ここで、ルイ16世の態度が問題です。国王は、貴族に課税をしたいから三部会を召集したのですが、かれ自身の心情としては、平民に大きい顔をさせたくない。自分の仲間である貴族たちを大事にしたいという気持ちがある。

第二身分の議員がやってくると、個別に謁見してねぎらいの言葉をかけたりするのですが、第三身分の議員にはそつけない。全然態度が違うのです。

三部会がはじまるとき、会議はすぐにもめた。特権階級への課税問題でもめたのではなくて、それ以前のことでもめた。それは、会議の議決方法です。

三部会の議員の数を見てください。第一身分が308人。第二身分が285人。第三身分が621人です。

第一身分と第二身分をあわせても、593人。第三身分の621人よりも少ないわけだ。第三身分は貴族への課税に賛成ですから、単純に多数決をとると、確実に特権階級は負けて、貴族への課税が決定してしまいます。

だから、第一、第二身分は議決方法として、人数には関係なく、一身分一票を主張した。第一身分に一票、第二身分も一票、第三身分も一票持つ。合計三票で多数決をとろうというのです。これなら、第一、第二身分は反対にまわりますから、2対1で貴族への課税は否決される。一身分一票というのは、今の感覚からは変な感じがしますが、身分制議会だから、こういう考え方もあり得るわけだ。現在でいうと、国連がこの方式ですね。人口に関係なく、国連総会では一国一票で議決します。

さて、議決方法でもめているのだから、その決着を多数決で決めることはできない。会議は空転して先に進まない。

こういう時が、国王の出番ですね。国王が召集した議会です。国王が、決断すればよい。国王は、財政改革のために三部会をひらいたのだから、一人一票に賛成すればよいわけです。しかし、ルイ16世は、その決断ができない。土壇場になって、かれは迷うわけです。貴族に課税はしたいが、貴族階級に対しては親近感がある。仲間意識を持っている。さらに、第三身分が主張している一人一票の議決方法に賛成して、第三身分の発言権を増したくないという気持ちがある。第三身分を増長させたくない。貴族社会の第一人者としての立場をのりこえることができないのです。

国王がぐずぐずしているのを見て、第三身分代表は愛想をつかした。

6月、三部会に見切りをつけた第三身分代表の議員たちは、三部会を飛び出して、自分たちだけで議会をつくった。

これが、国民議会です。

当然、国王はそんな行為は認めません。三部会の会議場は使えないでの、第三身分代表は、ヴェルサイユ宮殿に付属している室内球戯場に集まって、憲法を制定すること、国王が国民議会を正式な議会と認めるまで解散しないことを誓います。これを「球戯場の誓い」という。

これが、「球戯場の誓い」を描いた絵です。議員たちが集まって、盛り上がっています。会場の上の方を見てください。窓が開いていて、たくさんの人たちが中の様子を見ています。かれらは、実は、パリの市民たちです。三部会がはじまるとき、その成りゆきを見るためにパリから連日多くの市民たちがヴェルサイユまでつめかけていた。市民は第三身分ですよ。

そういう人たちが、国民議会にエールを送っているのです。

そうこうしているうちに、第一身分、第二身分代表の議員の中からも、国民議会の主張に賛同して、合流してくるものがはじめます。

貴族の中には、自由主義貴族と呼ばれる人たちがいて、彼らは啓蒙思想の影響を受けて、アンシャン=レジームが時代遅れであることを理解しているわけです。フランスの発展のためには、改革が必要であると感じていた。たとえば、アメリカ独立戦争に参加していたラファイエットがそうです。かれは「新大陸の英雄」として、すでに国民に人気があった。

時代の流れを読みとることのできた人々は、特權階級であっても、国民議会に参加したのです。

そうなると、三部会はスカスカです。ルイ16世は、しぶしぶ国民議会を正式な議会として承認し、国民議会は、新しい国造りのための憲法制定に着手しました。

しかし、ルイ16世は第三身分が主導権をにぎる国民議会をつぶしたいのが本心です。かれは国民議会に圧力をかけるために、軍隊に動員をかけた。各地の部隊が、ヴェルサイユとパリに向かい始めます。

軍隊が移動を開始しすると、パリの市民たちは、ルイ16世の意図を見抜く。王は軍隊によって国民議会

を解散させようとしているのだ、と察します。そこで、王が軍隊を使うなら、自分たちも軍事力で国民議会を守ろうと考えた。

緊張が高まるなか、財政改革の期待をあつめていたネッケルが罷免された。罷免というのは、簡単に言つたらクビ。クビにしたのは国王。

ついにパリ市民たちは、国民議会とパリを守るために、パリ市民による軍隊を編成しました。これを市民軍という。ところが、市民軍には武器がない。どうするか。

7月14日、パリの市民たちは蜂起した。まず、廃兵院という軍事施設を襲う。ここには、武器が保管されていたからです。ここを占拠して武器を手に入れましたが、火薬が足りない。火薬の保管場所がバスティーユ牢獄。そこで、市民たちはバスティーユ牢獄を襲撃した。映画の「仮面の男」のモデルになった鉄仮面が収容されていたという有名な牢獄です。

バスティーユ牢獄はパリ市内にある。牢獄という名前ですが、もともと要塞として使われていた建物です。ルイ14世時代から政治犯を収容するようになっていたので、専制政治の象徴でもあった。市民たちはバスティーユ牢獄を占領し、これ以後、市民たちは武器弾薬を手にすることになった。

この7月14日が、フランス革命勃発の日といわれています。

この日、ルイ16世は、ヴェルサイユ近郊の森に狩りに出かけていた。宮殿に帰還して熟睡していた国王を侍従が起こしてパリで起きたバスティーユ牢獄襲撃事件を伝えます。それを聞いたルイ16世は、「暴動だな」と言う。それに対して侍従は「いいえ、陛下、革命です」と答えたと伝えられています。

ルイ16世の日記が残っていて、この日もかれは日記を付けた。何と書いたか。ただ一言、「何もなし」。これはどういう意味かというと、狩にいって獲物が全然捕れなかったということなんです。大事件が起きているのに、その意味を理解できないルイ16世の政治的センスのなさを伝えるエピソードです。

一方、パリではバスティーユ牢獄襲撃に成功したパリ市民たちが気勢をあげている。市民軍が自分たちの総司令官に任命したのが、ラファイエット。「新大陸の英雄」ラファイエットは、自由主義貴族とはいえ、貴族ですから国王に対する忠誠心もある。このときに、市民たちはパリの旗を革命のシンボルとしてかけていました。パリの旗は、赤と青の二色のデザインです。ラファイエットは、赤と青のあいだに白色も入れて三色旗にしようと提案した。市民たちも賛成して、これ以後、三色旗が革命の旗となります。これが現在のフランスの旗です。

白色は、実はフランス王家ブルボン家のシンボルなのです。これを旗の色に加えようということは、「市民諸君、革命も結構だけど、国王も大事にしようね」という意味です。市民たちがそれを受け入れたのは、市民たちがアンシャン=レジームを変えようとしてはいても、国王を敵だとは思っていなかったということです。王様は立派でよい人だけれども、マリー=アントワネットや側近の保守的な貴族たちによってフランスはダメにされているんだ、というのが一般的な国民の感情だったようです。

パリでの事件が伝えられると、全国で農民が蜂起して、貴族、領主の館を襲う。借金の証文を焼き捨てる。地方の農村は「大恐怖」とよばれるパニック状態に陥ります。農民たちが、実力行使で封建的な支配制度を壊そうとしはじめたわけですね。

パリや地方の民衆の動きをうけて、8月4日、国民議会は「封建的特権の廃止」を宣言しました。身分制度と領主制をなくします、という内容です。

さらに、8月26日に、国民議会は「人権宣言」を発表した。第一条「人間は、生まれながらにして、自由であり、権利において平等である。社会的な差別は、共同の利益に基づく場合にしかもうけられることができない」有名な文章です。ちなみに、「人権宣言」を起草したのは、あのラファイエットです。

こうして、アンシャン=レジームは終わります。しかし、このあとに、どのような政治体制を作っていくのか、各勢力がしのぎをけずりフランスは激動の時代をむかえます。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

[世界の歴史〈15〉フランス革命河出文庫](#)

現在読める定番の概説書です。

[アメリカとフランスの革命世界の歴史](#)

後半のフランス革命からナポレオンの記述は、従来の概説書に較べて、事件の因果関係がすっきりと整理されて、非常に参考になりました。

第78回 フランス革命1 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第77回 アメリカ独立革命](#)

[次のページへ](#)
[第79回 フランス革命2](#)

世界史講義録

第79回 フランス革命2

ヴェルサイユ行進

「封建的特権の廃止宣言」「人権宣言」によって、全国的な農民蜂起はおさまっていきました。ところが、国王ルイ16世は、これらの宣言を承認しなかった。この時点では、まだ、国の主権者は国王ですから、王が承認しなければ正式の法律として効力を持たないので。承認を済む国王に対して市民たちのいらだちは高まっていきます。

また、政治的な混乱と前年の不作の影響でパリの物価が高騰しはじめていて、下層市民には食糧が手に入りにくくなっていた。一家の台所をあずかるパリのおかみさんたちが、きりきりしているところへ流れてくるのが、ヴェルサイユの噂。ヴェルサイユには食糧がたんまりあって、国王や王妃たちは庶民の暮らしなんか気にもせずに、今日もたらふく食べているという。

10月5日、怒ったパリの女性がパリ市役所前の広場に集まった。人数は7千人ともいいます。彼女たちを組織した者がいたらしいですが、詳しい背景は不明です。彼女たちは、国王と議会に食糧を要求するために、「パンをよこせ！」と叫びながら、ヴェルサイユに向かって行進を始めた。武器をたずさえて、なんと大砲まで引っ張っていきます。

パリからヴェルサイユまでは25キロほどの距離がある。大砲をひきながら、約6時間歩きつづけた。途中で雨が降ってきて、全員びしょぬれになりながらも、怒りに燃えていた。ヴェルサイユに着いたのが夕方4時ころ。国王は例によって狩りに出かけていたので、彼女たちはさらに4時間待たされた。みんなが興奮しているところに、国王は帰ってきた。国王は彼女たちの代表と会見する。武器を持って集団できているので、怒らせてはどうなるかわからない。王は、彼女たちに丁重に接してパンの配給を約束し、王妃と一緒に宮殿のバルコニーから挨拶するなどのパフォーマンスで、その場を切り抜けようとしたが、結局、「人権宣言」などを承認させられた。

さらに、女性たちは国王一家に「一緒にパリに帰ろう」と言い出した。ヴェルサイユのようなところに貴族たちに取り囲まれて暮らしているから、私たち庶民、第三身分の気持ちがわからないんだ。平民の街パリに一緒にいらっしゃい、というわけです。

パリにも宮殿があるので、そこで暮らすことはできるけれど、平民に囲まれて針のむしろにすわるようなものですから、国王としては嫌だったので抵抗しきれず、翌日、国王一家は女性たちに連れられてパリにやってきました。女性たちのセリフ「私たちはパン屋とおかみと息子を連れてきたよ！」この一連の事件を「ヴェルサイユ行進」といいます。

これ以後、国王一家はパリのテュイルリー宮殿に住み、事実上パリ市民に監視されて暮らすようになる。

国王と一緒に議会もパリに移動した。

このあとしばらく政局は安定した状態がつづきました。国民議会は王の抵抗なく憲法制定作業をつづけていきます。

議会の主導権をにぎっていたのはラファイエットやミラボーなど自由主義貴族といわれる人たちでした。かれらは、アンシャン=レジームを壊して国政を改革しようとしていますが、あくまで国王を中心とした政府を考えていた。イギリス風の立憲君主制です。ラファイエットたちは民衆には人気があるし、名門貴族ということで国王からも信頼されている。これが政局安定の理由です。

王は表面上は議会に協調するようになる。このまま、何事もなければ、ひょっとしたらフランス革命はここで終了したかも知れない。

ところが、ここで事件が起きます。事件を起こしたのは国王ルイ 16 世。

1791年6月、国王は亡命しようとしたのです。王妃マリー=アントワネットの実家オーストリアへ逃げようというのです。王妃の愛人でフェルゼンというスウェーデンの貴族がいて、かれを中心に亡命計画がたてられた。以前から、国王が国外逃亡を企てているのではないかという噂があったので、宮殿のまわりは警備の兵がつめているのですが、警備担当責任者ラファイエットの粋なはからいで、フェルゼンが王妃の部屋へ出入りする入り口だけは警備兵がいなかったという。

国王一家はこの出入り口を使って宮殿を抜け出し、用意してあった馬車に乗って国境の町メッツに向かった。メッツには、亡命を手助けする将軍が待っているのです。馬車に乗るのは王、王妃、二人の子供と王の妹、子供の教育係。八頭立ての大きな馬車だったけれど、王としての体面のためだと思うのですが、この馬車にたくさんの荷物を詰め込んだ。王妃の衣装の数々、さらにワインなど。重たくなった馬車は当然スピードが落ちる。

無事にパリから出たのはよいのですが、そのために予定の時間よりどんどん遅れていくのです。王様の鷹揚さなのか、危機感がなくて、途中で古くからの知り合いの屋敷によったりしながらメッツに向かった。沿道のところどころには軍資金輸送の警備という名目で、亡命を助けるための兵士が警戒にあたっていた。ところが、途中から予定の時間よりかなり遅れたため、警備の兵が引き揚げてしまったり、連絡がうまくつかなくなってくる。

さらに、ある村にやってきたときに、王が窓から顔を出して、待っていた警備部隊の指揮官に声をかけた。それを、目撃した村人がいたのです。

王が、こんな所にいるなんておかしい。国外へ逃げようとしているのではないか、というので、知らせを聞いた革命派の軍人が王を追う。軍人にも、王党派といって、王に忠誠心を持っている軍人と、革命に理解をしめす軍人と両方いるわけです。この段階では、多くの指揮官クラスの軍人は王に同情的です。

王の馬車がヴェレンヌという町に来た。この町で味方が替え馬をつれて待っている段取りになっていた。ところが王の到着が遅くて、もう夜になっている。味方の部隊が見つからない。一行は町に入って、住民をたたき起こして馬の場所をたずねた。間抜けです。

おかしな連中が町に入ってきたということで、町じゅうが起きだして王の一一行を取り囲んだ。追ってきた革命派の軍人も追いついてきた。はじめは、王は自分の身分を隠しているのですが、ついに国王だと認めます。すぐにパリに連絡され、翌日国王一家はパリに連れ戻されました。

この事件をヴァレンヌ逃亡事件という。

王に対する国民の信頼はこの事件でいっぺんに吹き飛んでしまった。国を捨てて逃げようというのだから、王にあたいしないというわけです。

国王ルイ16世の身柄、立場をどうするかが問題になったのですが、とりあえずは、もとのままにします。というのは、国民議会では憲法が出来上がりつつあって、これが立憲君主制なのです。穏健な形で、革命を一段落させようということです。もう一つの理由は、国王に対して過激な処罰などをすると、外国がフランスに攻撃をするかも知れなかったからです。国王をそのままおいておくというのは、フランスを取り囲む諸国に対する人質です。

ヴァレンヌ逃亡事件のあと、1791年8月には、オーストリアとプロイセンが「ピルニッツ宣言」というのを出している。ルイ16世の地位をもとに戻さないと、フランスに対して戦争をしかけるぞ、という内容です。だから、とりあえずは王をそっとしておこうというのが、国民議会の一応の結論。

8月10日事件

一月後の9月、正式に憲法が制定されました。1791年憲法という。特徴はふたつ。一つは、立憲君主制。もう一つが、制限選挙制です。平民でも一定以上の税金を納めていない者には選挙権はあたえられなかった。革命によって、平民の時代になったが、あくまでも豊かな平民が政権に参加できるだけです。多くの一般民衆は、不満を持っている。

このころの民衆の生活はどうだったかというと、インフレで苦しんでいた。封建制度はなくなっても生活は苦しい今まで、政府に対する不満は大きくなっていた。

フランス革命のそもそものきっかけは、政府の財政難でしたね。革命後、政府は教会の財産、土地を没収して国有財産にした。そして、この土地を売って財政難を解決しようとしたのですが、土地が思うように売れないので、そこで、土地を担保にしてアッシニアという紙幣を発行した。この紙幣、発行しすぎてしまつてインフレになります。物価が騰がるから、庶民生活は苦しくなる。

このころから、フランスから外国へ亡命する貴族が増えてきます。国王が逃亡するくらいですから。政府は亡命した貴族の土地財産も没収していきます。諸外国は、こういうフランスの成りゆきを見ていて、まさしく権力が国王や貴族などから、平民階級に移っていくことを実感する。自分の国でも、このような革命が起きたらとんでもないことになると思うわけです。はやいうちに、フランスの革命政府をつぶしてしまわなければならぬという気持ちになる。

ピルニッツ宣言は、そういう流れのなかで出されたものです。

1791年10月、憲法にもとづいて制限選挙がおこなわれ、新しい議会が成立しました。これを立法議会といいます。

この議会ではふたつの勢力が対立した。フイアン派とジロンド派です。フイアン派は、立憲君主主義を守ろうと考える稳健なグループ。ジロンド派は共和主義を主張する。共和主義とは、国王なしの政府のことです。

さっきも言いましたが、「ピルニッツ宣言」が出され、この段階でフランス政府と諸外国との対立がどんどん激しくなっています。とくに、マリー=アントワネットの実家であるオーストリアとの対立は激しい。

革命を守るために諸外国と戦争すべきだという世論がもりあがってくる。貧しい市民や農民の暴動がこのころ盛んになります。政府としては、庶民の不満を戦争でそらそうという魂胆がある。

一方、国王ルイ 16 世も、戦争に積極的でオーストリアと戦争をしようと言います。

国王は何を考えているかというと、戦争でフランスが負けることを期待している。革命政府がつぶれば、自分がもとの絶対主義の国王として権力を取り戻せるというわけです。だから、議会で戦争をしようといい、オーストリア皇帝にはこっそり連絡をとって、フランスに攻め込んで革命政府をつぶしてくれと要請しているのです。

1792年4月、ついに、フランスはオーストリアに対して宣戦布告をし、ベルギー国境でオーストリア軍との戦闘が始まりました。

戦いはどうだったかというと、フランス軍の連戦連敗で、オーストリア軍、プロイセン軍は国境を越えてフランス領内に進撃してくる。

フランス軍は滅茶苦茶に弱い。理由は何かというと、まず、指揮官が激減している。何百何千という兵隊を動かすには、それなりの技術と経験が必要です。指揮官クラスの軍人である士官は、皆訓練を受けた貴族だったのですが、革命以来かれらの多くが亡命している。1万2千いた士官の半数が亡命していました。指揮系統ががたがたなわけです。残っている士官も、革命政府に協力的なわけではなく、やる気がない。わざと負けてやろうという指揮官もいる。ルイ 16 世は、自分に同情的な士官に対して、負けるように指示していたらしい。マリー=アントワネットは敵方に、フランス軍の作戦を漏らしていたとも言う。これで、勝てるわけがない。

プロイセン軍がパリにせまつてくると、政府は「祖国の危機」を全土に訴える。このままでは、革命はつぶされる、フランス国民よ、祖国を守れ、革命を守れ、というわけです。この訴えにこたえて、フランス全土で義勇兵が組織されて、パリに結集した。このとき、マルセイユからやって来た義勇兵が歌っていた歌が「ラ=マルセイエーズ」。のちにフランス国歌となる。

せまる外国軍、集まる義勇兵。緊張が高まるなかで、敵は外にいるだけか、これだけフランス軍が負けづけるのは、フランスの内側にも敵がいるからではないか、と誰もが思いはじめた。そういう疑惑は以前からあったのですが、緊張感のなかで、生活難に苦しむ貧しい市民たちの、そういう想いが爆発します。

1792年8月10日、パリ市民と義勇兵は、王宮を攻撃した。フランスの本当の敵は王に違いないと考えたのです。国王は王権を停止されて、一家は全員タンブル塔に幽閉されてしまった。これを8月10日事件という。

このあと、パリでは市民たちが、裏切り者、反革命分子と思われる人々を虐殺した。多くの人々は、革命を守るために必要悪と考えていたようです。また、前線の指揮官で、国王側に立って政府を裏切っていたものは解任され、多くは亡命した。前線で指揮を執っていたあのラファイエットもこの時亡命します。かれは政府を裏切ったりはしていませんでしたが、王が幽閉されたことを知ると、パリへ進撃して王を救おうとした。しかし、部下の兵士が動かず、王の救出を断念して亡命したのでした。

入れ替わりに、前線には、義勇兵が向かいます。

混乱に乗じて、プロイセン軍はさらにパリにせまってくる。このプロイセン軍と義勇兵がはじめて戦ったのがヴァルミーの戦い。プロイセン軍はフランス軍に激しい砲撃をくわえる。今までのフランス軍なら、これですぐに退却をはじめるのですが、義勇兵たちはひるまずに「ラ=マルセイエーズ」を大合唱。不気味に感じたプロイセン軍が逆に退却をはじめた。戦闘に負けたのではなく、フランス義勇兵の勢いに負けた。革命を守らなければならないという兵士一人ひとりの志氣の高さ。これは、どこの国の軍隊にもないものでした。

ヴァルミーの戦いにドイツの文豪ゲーテが従軍していた。小説「若きウェルテルの悩み」で有名な作家です。この人は、さすがに作家だけあって感性が鋭い。この戦闘のあとに、こんな言葉を残している。
「この日この場所から世界史の新しい時代がはじまる」

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

世界の歴史 10 (10)	昔の中公の「世界の歴史」シリーズの一冊。「フランス革命とナポレオン」桑原武夫著。熱のこもった叙述で、私はこれでフランス革命の洗礼を受けました。現在品切れ。古本屋にあれば、手に入れるべし。
マリー・アント ワネット <上> 岩波文庫 マリー・アント ワネット 下 ...岩波文庫	古典的名作。マリー・アントワネットを通じて、物語的にフランス革命を理解できる。

第79回 フランス革命2 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第78回 フランス革命1](#)

[次のページへ](#)
[第80回 フランス革命3](#)

世界史講義録

第80回 フランス革命3

国民公会

8月10日事件で、王権を停止すると同時に、新しい国会を開くことが決められました。立法議会は立憲君主制の1791年憲法にもとづいていたから、当然ですね。立憲君主制の憲法ではまずいわけです。新しい憲法を作るための議会が1792年9月に成立しました。

これが、国民公会。この議会は男子普通選挙で選出された。普通選挙というのは、財産や納税額で選挙権を持つ人を制限しないということです。8月10日事件は下層市民の力で成功したし、対外戦争の危機を乗り切るためには、下層市民の力を結集しなければならなかったわけだね。

国民公会は、さっそく王政の廃止と共和政樹立を宣言した。共和政というのは王や皇帝のいない政治制度です。これ以後のフランスの政治体制を第一共和政という。この言い方はしっかり覚えておいてください。ちなみに今のフランスは第五共和政です。

このあと問題になったのは、ルイ16世の処遇です。王政がなくなったので王様はいらない。かれをどうしたらよいのか。やがて、裁判が始まります。王宮の隠し戸棚から、王が外国の使節と秘密にやりとりしていた文書がたくさん発見されて、王がフランス政府と国民を裏切っていた証拠はたくさんでてきた。結局、賛成387、反対360で死刑と決定した。ただし、賛成387のうち、26は条件付き賛成という内容で、それを除けば、361対360という微妙な評決でした。

1793年1月21日、パリの革命広場で二万人の市民が見守るなかで王は処刑された。最後の言葉は、「私は無罪だ。私は敵を許そう」というような内容だったらしい。王にたくさんしゃべられて、市民が動搖してはまずいので最後の方の言葉は、兵士の鳴らす太鼓の音にかき消されてよく聞こえなかったらしい。

ちなみに、処刑の方法はギロチンです。この処刑道具は、フランス革命のなかで発明されたものです。発明者はギヨタンという医者。革命がはじまって以来、反革命の容疑で多くの人が死刑になるようになつた。それまでの死刑は、首切り役人が、斧で受刑者の首を切る。切られる方は、首切り台の上に首をのせてうつぶせになっているわけですが、実際問題として、首を切られるまでおとなしくじっとしているわけではない。まわりの刑吏が身体を押さえつけても、何とか逃げようとじたばたもがく。だから、ねらいを定めて斧を振り下ろしても、一撃で首をはねることはあまりなかつたようで、肩を切られ、頭の一部を切られ、あちこちズタズタにされてようやく絶命したという。死ぬ方も苦しいですが、首切り役人も大変な

重労働だったらしい。

ギヨタンはそういう処刑方法を見て、受刑者にとって残酷だと思ったんだね。どうせ死ぬなら、一撃で苦しまずに死なせる方法はないか、ということでギロチンを発明した。理性にもとづいた人道的な発明だったわけだ。

こののち10月には王妃マリー＝アントワネットも死刑になっています。プリントには馬車に乗せられ処刑台に連れて行かれるマリー＝アントワネットの絵がありますね。のちにナポレオンの肖像画を描くことになるダヴィッドという画家がいる。この人は国民公会の議員でもあったのですが、このダヴィッドがマリー＝アントワネットが処刑台に連れて行かれると聞いて、通りに飛び出してその場でスケッチをしたものです。

そう思って見ると、粗い絵ですが臨場感があるね。マリー＝アントワネットは心労で髪が真っ白になっていたといいますが、この絵ではちょっとわからない。長い髪は短く切られています。ギロチンにかけるときに、髪が長いと邪魔だから切られてしまったのです。頭には、市民がつける帽子をかぶらされている。服はよくわかりませんが、質素なもののようにです。後ろ手に縛られて馬車の台に座らされているのでしょうか。

このころは政治の変動が激しくて、彼女の処刑はあまり話題にものぼらなかつたようです。

国民公会がルイ16世を処刑したことは、諸外国にショックを与えた。これをきっかけに、反フランス、反革命のヨーロッパ諸国の軍事同盟がつくられた。これを第一回対仏大同盟という。この同盟は1793年から97年までつづきます。

参加国は、イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセン、スペイン、オランダなど、ヨーロッパの主要国は参加している。どこの国の王家も、王を殺すという行為を見過ごすことができなかつたわけだ。対仏大同盟の結成を呼びかけたのはイギリス。当時の首相はピットという。この名前は覚えておくこと。イギリスは、ピューリタン革命、名誉革命を経験していて、王を処刑したこともある。なのになぜ対仏大同盟の中心になったのか。実は、フランス軍はヴァルミーの戦いのあと優勢に転じて、国境を越えて進軍していた。1792年の11月にはベルギーを占領する。そして、ここで封建制を廃止した。難しい言い方をすれば革命の輸出という。簡単にいえば、フランスが領土を拡大して占領地域に自国の政治制度を押しつけていたのです。フランス軍は、次はオランダに進出するかもしれない。イギリスにとっては市場を奪われることになるわけです。特にオランダは、金融市場の中心だったので、ここをフランスに奪われたくはなかつた。ようするに、経済的な利害関係からイギリスはフランスを警戒していたのです。

対仏大同盟との戦争が国境線ではじまり、フランスの対外的危機は深まります。

一方、国内でも経済危機が深まり、経済政策をめぐって政治的対立が激しくなつていて。

政府は財政難のために紙幣をどんどん増刷したので、インフレがすすんだ。紙幣の価値が下がるので。農家は、小麦を売っても紙幣の価値が下がれば損なので、売ろうとしない。商人たちも、売り惜しみをします。結局市場に小麦が出回らない。インフレによる物価高と食糧不足で、生活を直撃されるのが下層市民です。かれらの不満は政府の無策に向けられた。

政権を担当していたのはジロンド派というグループでした。

国民公会では、大きく分けて二つの派閥があった。ジロンド派とジャコバン派。

ジロンド派は、裕福な商工業者である上層・中層市民が支持している。政策は稳健。急速な改革はこのまない。現実主義的です。

ジャコバン派は、職人、小商人など下層市民が支持している。急進的に革命の理念を実現しようとします。理想主義的です。指導者にはロベスピエール、マラー、ダントンという人気者がいる。

話を戻すと、パリで商人達の買い占め、売り惜しみで食糧不足になると、下層市民は政府に対策を求めるでしょう。ジロンド派の大蔵官ランはなんと言ったか。

「議会が食糧についてなしうる唯一のこととは、議会は何もなすべきではないということ、あらゆる障害を取り除くことを宣言することであろう」

わかりますか？食糧不足に対して「何もなすべきではない」と言っているのです。

なぜか？ジロンド派は自由が好きです。革命前は、貴族達に頭を押さえつけられて、自由はなかった。フランス革命で、自由になった。政府は自由を制限すべきではないと考えているのです。経済活動も自由です。買い占めや売り惜しみも自由。それで儲かる人には儲ける自由がある、と考えるのです。

確かに理屈としては筋が通っている。でも、現実に飢えている下層市民はどうなるのか。自由の名のもとに、ジロンド派は市民を見殺しにしようとしているのだ、とジャコバン派は反論します。

民衆に近い立場のエベルという政治家の発言。

「商人たちに祖国はないのだ。彼らは革命が自分たちに有利だと思われた間はそれを支持し、貴族と高等法院を破壊するためにサン=キュロット（下層市民）に手を貸した。しかし、それは自分たちが貴族にとって代わるためだった。」

言っていることは、わかりますね。

次はロベスピエール。

「権利のうち第一のものは生存する権利である。だから社会の法は社会のすべての成員に生存の手段を確保する法であった。他のすべての法はそれに従属する。」

大商人の経済の自由よりも、下層市民の生きる権利の方が大事でしょう、と言っている。

若さと美貌の「革命の大天使」、切れ味鋭いサン=ジュストは言う。

「金持ちも貧乏人もあってはならない。富裕は汚辱だ。」

「富裕は汚辱」ですよ。じつに過激です。

次のマラーは過激でいいじゃん！と言い放つ。

「過激な手段によってしか自由をうちたてることはできない。諸国王の専制を打ち破る為には、一時的に自由の専制を組織しなければならない時がきたのだ。」

本当の自由を手に入れるためには、自由を制限しなければならないときがある、と言っているんですよ。ジロンド派では駄目だ、ということです。

ここで、「諸国王の専制」と言っているのは、対仏大同盟のことで、対外的な戦争の危機も迫っているのに、経済問題でジロンド派と悠長に議論なんかしている時ではないという気持があります。強力な権力を打ち立てて、機敏に危機に対処していかなければいけない、とジャコバン派は考える。パリの民衆も、その考えを支持します。

1793年6月、ついにジャコバン派は、実力で議会からジロンド派を追放し独裁政治を開始した。いよいよ、フランス革命のクライマックス、ジャコバン独裁のはじまりです。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

[死刑執行人サンソンー国王ル...集英社新書](#)

あのギロチンを使ってルイ16世の処刑を執行したパリの処刑人サンソンの伝記です。革命によって、身分差別が消えていくことを喜ぶ反面、敬愛する国王を処刑しなければならなかつたサンソン。読み物としても、充分楽しめました。

第80回 フランス革命3 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第79回 フランス革命2](#)

[次のページへ](#)
[第81回 フランス革命4](#)

世界史講義録

第81回 フランス革命4

ジャコバン派独裁

1793年6月、ジャコバン派は、武装したパリ市民の力を背景に、ジロンド派のおもだつた幹部を、国民公会から追放しました。

これ以降、約一年間、ジャコバン派独裁という。

政治の中心となったのは、ロベスピエール。6歳で母親を亡くし、10歳の時には父親が蒸発。きょうだいたちの面倒を見るために、苦学して法律を学んび、弁護士となった苦労人です。もともと正義感が強かったんだろう。弁護士として、貧しい庶民の弁護を多く引き受けて有名になる。愛読書はルソー。三部会が開かれたときに、議員に選ばれ、パリに出て政治活動を開始します。

ひとことで言って、滅茶苦茶まじめな男です。自分の理論を信じ、それにしたがって自分の行動を律することができる人物。しかも堅い。結構いい男ですが、女性には見向きもしなかった。生涯独身、というか、女性との深いつきあいは死ぬまでなかったらしい。ロベスピエールが女性と関係したことがあるかどうかという研究まであるらしいが、結論は「なし」。

金銭にも潔癖だったそうです。かれは、パリでは指物（さしもの）職人の家に下宿暮らします。今でいえば、総理大臣のような高い地位になっても、自分の屋敷などを持つうとしなかった。革命にすべてをさげた人物だったのです。

このロベスピエールを中心に、ジャコバン派独裁がおこなわれた。だから、独裁をやっている側としては、権力を握って甘い汁を吸ってやろうという気はさらさらない。あくまでも、フランス革命と共和国を守るために非常手段と考えていた。

組織としては、公安委員会というのが政府の中核です。これは、国民公会に設置された委員会で、ロベスピエールたちは、この公安委員会に権力を集中し、革命を推進していきます。

ジャコバン派がこの間におこなった主な政策は、次のようなものです。

- ・封建的特權の無償廃止。1789年8月に、国民議会が封建的特權の廃止を宣言していますが、そのときは「有償」。今回は「無償」です。お金を払って、権利を買い取らなくてもよい。さらに、亡命貴族の土地を小分けして農民に売却した。しかも、10年間支払を猶予したので、農民は土地を比較的容易に手に入れることができました。
- ・最高価格令。インフレを抑制するために、政府が強制的に商品の最高価格を決定した。
- ・徴兵制の採用など軍政改革。義勇軍と正規軍を統合したり、軍隊内の体刑を廃止したりする。これによって、フランス軍は、国境にせまる諸外国軍を打ち破る力を持つ軍隊に成長していきます。
- ・革命暦の制定。グレゴリウス暦はキリスト教と結びついているということで、新しい暦をつくった。季

節に応じて月の呼び方も変えます。ブリュメールとかテルミドールとか、フランス革命期の事件の名前で出てくるのが、この革命暦の月の名前です。

- ・メートル法の採用。度量衡の統一と、基準の客觀化をおこなった。
- ・最高存在の祭典。革命のモラルを高めるために「最高存在」をまつる大イベントを実施した。最高存在というのは、理性と考えていいと思います。ロベスピエールは、キリスト教そのものを否定していたわけではないようですが、それに替わる崇拜の対象を求めたのです。この祭典は、これっきりで後世には全然影響力を持ちません。
- ・ジャコバン憲法（93年憲法）の制定。男子普通選挙などを含む民主的内容の憲法ですが、未実施に終わります。

そして、ジャコバン派独裁の最大の特徴が「恐怖政治」です。この時期に、反革命罪で非常に多くの人たちが処刑されたので恐怖政治という。

ジャコバン派独裁が始まったころは、国内各地で反革命の反乱が起きていたので、革命政府を守るために、きびしい処分で反対派を押さえ込む必要があった。

また、最高価格令など、下層市民にとってはありがたい法律ですが、商工業者など上層・中層市民にとっては、値上げが出来なくて迷惑このうえない。だから、最高価格令を守らせるためには、強引な手段が必要です。そのため、充分な裁判もないまま死刑が乱発されたのです。

この時期に処刑された人数を見ておきましょう。パリに革命裁判所が設置された1793年4月から94年6月10日までの処刑が1251人。一月平均130人前後。一日に直すと4・5人。現在日本で一年間で死刑執行される数がこれくらいですか。しかも、この数字はパリだけですからね。94年6月11日からは裁判が簡略されて、処刑が激増します。7月27日までの47日間に1376人。一日平均29人。昼間の8時間に死刑執行がおこなわれるすると、一時間平均3・6人。だいたい15分ごとに首が落ちている計算になる。当然、無実の罪で処刑されたものも多かったはずで、ロベスピエールに冷酷な悪魔のようなイメージを持っている人がいるのも、これが原因です。

ジャコバン派独裁の末期になると、ロベスピエールは同じジャコバン派の政治家たちも処刑しはじめます。

なぜかというと、ジャコバン派のなかにも考え方の違いが生れてくるのです。下層民の支持を背景に、もっと過激に革命をすすめようとする左派グループと、上層市民に近い立場から穏健な政策を求める右派グループです。

ロベスピエールのグループは中間派で、自分たちの路線を守るために、左派、右派共に政敵として処刑します。1794年3月には、下層市民に人気のあった左派のエベルとそのグループを処刑。4月には、右派のダントンとそのグループを処刑。

ダントンは、ロベスピエールと並んで、かつてはジャコバン派のリーダーの一人だったのですが、金銭スキャンダルが絶えず、上層市民に近い立場をとっていたために、処刑されたのです。例の画家ダヴィッドが、やはり処刑場に連行されるダントンのスケッチを残しています。傲然としてなかなか迫力ある表情です。自分をスケッチするダヴィッドを見て、ダントンは「この下司野郎！」、さらに、ロベスピエールの下宿の前を通ったときには、2階を見上げながら、「ロベスピエール、次はおまえの番だ」と叫んだといいます。最後まで個性的で激しい男でした。

こうなってくると国民公会の議員たちは、みんな「次は俺がやられるのではないか」と、不安になってくる。国民公会には、ジャコバン派以外に平原派とよばれる一団の議員たちがいた。かれらは、ジロンド派の追放とジャコバン派独裁を黙ってみていた事なき主義のグループです。その平原派が、恐怖政治の行き過ぎ、ロベスピエールの独裁に不安を持ち、反ロベスピエールで結束します。

ジャコバン派のなかでも、「やりすぎた」ロベスピエールは孤立します。

1794年7月、ついに国民公会で、ロベスピエールの逮捕が決議され、ロベスピエールはパリ市庁舎に逃げ込む。武装したパリ市民を味方に付けて、国民公会に反撃しようと考えたのです。

市庁舎の一室で、パリ市民への指令書を書いていると、そこに国民公会から差し向けられた兵士が踏み込んできた。ロベスピエールは机の中からピストルをつかみだし、振り向いて反撃をしようとしたが、逆に兵士の撃った弾で頸をうち碎かれてしまった。ロベスピエールの頸から、ボタボタボタと血が滴り落ちた。

この時の、血染めの命令書が現存します。これがそう。コピーですけど。下の黒いシミがロベスピエールの血痕です。署名の「Ro」の字まで書かれている。ロベスピエールの「Ro」（口）です。ここまで書いたところで、撃たれたんだね。

ロベスピエール最後の指令書

下の黒いシミが血痕、Roのサインはその右上に小さくある

それはともかく、ロベスピエールは逮捕され、サン=ジュストらとともに翌日には処刑された。ロベスピエールのグループとして処刑された人数は108人。

例によって、ダヴィッドが、処刑場にひかれていくロベスピエールをスケッチしている。銃で撃ち抜かれた頸をハンカチで縛って、ささえています。ハンカチが黒く描いてあるのは、血で赤く染まっているためでしょうね。

ロベスピエールの逮捕と処刑で、ジャコバン派の独裁と恐怖政治は終わりました。この事件を「テルミドールの反動」という。テルミドールは革命暦で7月のこと。

あっけなく、ジャコバン派独裁が終わってしまった背景として、次のことを頭に入れておいてください。ジャコバン派独裁が始まったときは、外国軍の侵攻、内乱や経済危機があり、この危機を乗り切るために独裁政治しかない、という意識が国民にはあったのです。でも、1794年にはいると、戦況は好転、物価も安定して、危機は山場を越えていく。ジャコバン派独裁の恐怖政治を、もう我慢する必要がなくなったと国民は感じはじめていたのです。

革命の終幕

多くの歴史学者は、1789年に始まったフランス革命は、「テルミドールの反動」で終わると考えてい

ます。

確かに、「テルミドールの反動」以降は、民衆が政治の前面に登場することはなくなります。武装した下層市民の政治運動は下火になる。運動の指導者がみんな処刑されてしまったから、当然といえば当然。ジャコバン派独裁で、フランス革命の政治的試みは、行き着くところまで行ってしまったわけで、今度は、ジロンド派が国民公会に戻ってくる。ふたたび、上層市民が政治の主導権を取り戻します。

1795年には新しい憲法が制定され、下層民を排除した制限選挙によって新しい政府がつくられました。これが、総裁政府。この政府は、富裕市民、土地所有農民の利益を代表している。財産を持っている人のための政治をするわけです。

5人の総裁が行政を担当する。独裁をさけるために5人の総裁を置いたのですが、逆に指導力の弱い政府になってしまったことが、総裁政府の弱点。また、恐怖政治が終わり、政治的な緊張がゆるむ一方で、政府転覆の策謀が繰り返され、政局は非常に不安定になる。

ひとつは、王党派の策謀。王党派というのは、王による政治と貴族社会を復活させようとするグループです。総裁政府は、ジャコバン派のように過激ではないが、フランス革命の成果を引き継いでいますからね、王党派は許すことの出来ない敵です。

また、バブーフという人物は、下層市民の立場から政府転覆を企てた。事前に計画が漏れて反乱は失敗しますが、一種の共産主義社会をめざしていた点で、思想的に重要視されているようです。また、バブーフは、ごく少数のメンバーでの武装蜂起を計画していた。ベルサイユ行進や8月10日事件のように、市民大衆の直接行動が政治を動かす時代は、もう終わっていたのです。

恐怖政治も困るが、弱体な政府も不安です。総裁政府のもとで、国民は強力な指導者を求めはじめます。そこに登場するのがナポレオンです。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

[世界の歴史〈15〉フランス革命河出文庫](#)

現在読める定番の概説書です。

[アメリカとフランスの革命世界の歴史](#)

後半のフランス革命からナポレオンの記述は、従来の概説書に較べて、事件の因果関係がすっきりと整理されて、非常に参考になりました。

第81回 フランス革命4 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
第80回 フランス革命3

[次のページへ](#)
第82回 ナポレオン1

世界史講義録

第82回 ナポレオン1

ナポレオンの登場

ナポレオンの名前は誰でも知っていますが、どんなふうにしてフランスの皇帝になったのか、案外知らない人が多い。

この人が、どんなふうに登場してきたか、生い立ちを簡単に見ておきます。

ナポレオン=ボナパルトは、1769年にコルシカ島の貧乏貴族の家に生まれた。

コルシカ島といわれて、場所がすぐに思い浮かびますか。ここですね。イタリア半島の西にふたつ大きな島が浮かんでいます。北側の小さい方がコルシカ島です。

今でこそ、フランスの領土になっていますが、以前は、イタリアのピサやジェノバの領土だったこともある。ナポレオンが生まれる直前に、ジェノバ領からフランス領になったので、フランスの領土としての歴史は比較的新しい。コルシカの人々は、フランス領になってからも独立運動をやっていたくらいですから、ナポレオンの生きていた時代、フランス人としての自覚はない。ナポレオン本人も、フランス人としての自覚はありませんでした。そういう人物が、のちにフランスの皇帝になってしまったから、歴史は面白いです。

ナポレオン、たまたまコルシカ島がフランス領になるので、法律上フランス人になります。貧乏貴族が出生する近道は、軍人になることでした。そこで、少年ナポレオンは首都パリに出て士官学校に入学する。

ちなみに、軍隊というのは二種類の人間で構成されています。武器を持って敵軍の正面に出て戦うのは「兵」。

その「兵」を指揮し、作戦を立て、命令をするのが「将」。将校とか、士官とか、いろいろな言い方がある。「兵」は、命令されて動くだけだから、体力さえあればよい。誰でもなれます。しかし、将校は、戦術、用兵など知識や技能、経験を身につけなければならない。専門教育が必要です。将校を養成するのが教育機関が士官学校です。ナポレオンは、ここに入学するわけだ。

当時は、まだフランス革命勃発前です。アンシャン=レジームのフランスです。将校になれるのは貴族だけ、平民は兵士と決まっていた。つまり、士官学校に入学できるのも貴族の子弟だけです。ナポレオンはコルシカ出身ではあるが、貴族だったので、この士官学校に入れたわけです。

学校でのナポレオンは、暗くて目立たない年だった。無口で友人もできない。どうも、ぱっとしなかったようです。

無口だったのは、ナポレオンが傲慢な性格で他のクラスメートを馬鹿にしていたからとも、訛りがひどく

て、しゃべるとみんなに笑われたからだとも、いろいろ言われている。多分、両方でしょうね。成績も士官学校卒業時の席次が58人中42番というから、全然優秀じゃない。学校の成績が社会に出てからの成功とあんまり関係がないという見本みたいな人です。励まされるでしょ。

当時の士官学校には、3つの科があった。騎兵科、歩兵科、砲兵科です。

一番華やかで人気があるのが騎兵、次が歩兵、一番人気のないのが砲兵です。砲兵科は出来て間もない学科で、重たい大砲をごろごろと戦場まで引っ張って弾を撃つだけだから、あまり格好よくないわけです。ナポレオンが学んだのは、この砲兵科でした。のちにナポレオンは大砲を上手に戦術に取り入れて、勝利を重ねることになります。裏街道から、いきなり大逆転という感じです。

1784年、ナポレオンは士官学校を卒業し、フランス王国の将校としての履歴をスタートさせます。このときの年齢が16歳というから、ちょっと今の常識から考えると驚くべき若さだね。貴族出身、士官学校出身というだけで、16歳でも部隊を指揮する資格をあたえられるわけで、アンシャン=レジーム下での貴族の特権というのを考えさせられますね。

ナポレオンが軍人となって6年目、1789年、フランス革命が始まります。革命の進行にしたがって、フランスを捨てて国外に亡命する貴族たちは増えます。

先ほども説明したように、軍隊の将校はすべて貴族階級ですから、亡命者のなかには軍の将校もいる。また、革命に非協力的な指揮官は、軍務をはずされたり処刑される。将校が少なくなってくるわけだから、革命政府に忠実で、まじめに励む将校には出世のチャンスです。しかも、ジャコバン派独裁の時期には、身分に関係なく能力本位で将校の抜擢もはじまる。

ナポレオンは、このチャンスを逃さない。出世のための努力を開始します。

何をしたかというと、まずは、ジャコバン派の独裁を支持する内容のパンフレットを自費出版する。これで、ジャコバン派に近づき、ロベスピエールの弟と知り合いになって、自分を売り込むのです。

さらには、ツーロンという港町を占領していたイギリス軍と王党派の反乱を撃退するという功績をあげ、25歳で少将に昇進です。革命の混乱期でなければ、あり得ないような出世です。少将というのは、ランクとしては、上方ですからね。ついでだから、軍隊の階級を上から並べておこうか。大将、中将、少将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、ここまでが、一般的な将官の階級です。

トントン拍子に出世をつづけるナポレオンですが、落とし穴が待っていた。テルミドールのクーデタです。ロベスピエールのグループが処刑され、ジャコバン派の独裁が終わってしまった。それだけでなく、ナポレオン自身も、ジャコバン派ということで逮捕されてしまいました。すぐに釈放されますが、軍務をはずされて左遷状態に置かれる。

この不遇の時に、ナポレオンは復活のチャンスをつかもうとコネを求めて、有力者のサロンをあちこち訪れる。いわゆる社交界に入りするわけです。そこでナポレオンが一目惚れした相手がジョセフィーヌという女性です。

彼女は、貴族出身の未亡人。ナポレオンより6歳年上。夫はジャコバン派独裁で処刑されたという身の上。死んだ夫とのあいだに二人の子供がいる。しかも、ナポレオンと知り合った当時は、バラスという愛人がいた。

ナポレオンは、そんなことは一切気にせず彼女に夢中になるのです。

ジョセフィーヌの愛人バラスという人物は、大物政治家で、のちに総裁政府で総裁になるという実力者です。このバラスが、ナポレオンのツーロン反乱鎮圧の活躍を覚えていて、彼にチャンスを与えるのです。

1795年10月、ヴァンデミエール反乱という事件が起きる。これは、王党派がパリの中心部でおこした武装蜂起で、街のど真ん中でおきた反乱だけに、政府も鎮圧に手間取った。このときに、バラスがナポレオンに鎮圧を命じるわけです。

ナポレオンは、バラスに大砲を使ってよいかとたずねた。都会の真ん中で大砲をぶつ放すなんていうことは、誰も思いつかなかった、というか、そんなことをしたら無関係の市民に死傷者が出るかもしれないし、被害の予想がつかないから、誰もやろうとしなかった。

結局、使用許可をもらい、ナポレオンは大砲を使って、見事に反乱を鎮圧します。

この功績で、ナポレオンは国内軍司令官に就任。見事に復活を遂げます。このとき26歳。

1795年10月、総裁政府が成立します。ナポレオンがヴァンデミエール反乱を鎮圧した直後です。バラスが、この時に5人の総裁の一人となったことは、先ほど説明したとおりです。

翌年1796年、ナポレオンはイタリア方面軍司令官に任命されます。第一回対仏大同盟との戦争はまだつづいていて、イタリア経由でフランスに向かってくるオーストリア軍をたたくのがナポレオンにあたえられた任務です。

ナポレオンの大活躍はここから始まります。

ちなみに、イタリア遠征に出発する直前に、ナポレオンはジョセフィーヌにプロポーズ。急いで結婚してから、遠征に出かけた。イタリアに行ったら、なかなか会えないから、結婚によってジョセフィーヌをしっかり捕まえておこうとしたんだね。ジョセフィーヌの方は、結構迷ったらしいが、バラスにすすめられて求婚を受けた。このへんのバラスの神経はよくわかりません。

さて、ナポレオン軍はイタリアで、連戦連勝。

ナポレオンの軍隊が滅茶苦茶強かったのは、なぜか。あとで、詳しく説明しますが、簡単に、ひとつだけ言っておきましょう。

ナポレオンは、遠征軍の兵士に向かってこんな演説をしています。

「攻勢に出よう。武器も食糧も敵地にある。敵領の民衆を圧政から解放しよう！われわれは革命軍なのだ」

ナポレオンは、イタリアの封建制度をぶっ潰して、イタリアの民衆に、フランスと同じような「自由」「平等」をあたえてやろう、と言っているのです。

確認しておきますが、この当時、ヨーロッパでフランスだけが、革命によって封建制度、身分制度がなくなっている。市民による政府が成立している。しかし、イタリアも含めて、それ以外の地域では、封建制度がつづいていて、平民階級、つまり農民や市民は、貴族・領主によって政治的にも経済的にも抑圧され

ているのです。

フランスと同じように、イタリアの平民も、封建制度はいやです。貴族や領主の支配をひっくり返したいと思っている。だけど、イタリアの封建領主階級の力はまだまだ強いし、さらにそのバックにはオーストリア軍がひかえている。自分たちの力だけでは、革命をおこすことは不可能に近い。

そこに、ナポレオン軍がやってきて、オーストリア軍と戦ってくれる。そして、フランス軍が占領した地域の封建制をなくしてくれるという。「敵領の民衆を圧政から解放しよう」というのは、そういうことです。ナポレオンは、フランス革命をイタリアでもやってやろう、というわけです。

だから、イタリアの民衆は、喜んでフランス軍を歓迎します。

そういう意味では、イタリアは「敵地」ではない。逆にイタリアを押さえつけているオーストリア軍はイタリア人からは憎まれている。地の利はフランス、ナポレオンにあります。遠征地の住民の協力があるので、兵士や馬の食糧も、簡単に現地で調達できる。「武器も食糧も敵地にある」は、そのことを指しています。物資を現地調達できるから、部隊の荷物は、オーストリア軍に比べて軽装ですむ。荷物が軽いということは、移動速度が速いということです。ナポレオン軍は、オーストリア軍の予想を超えたスピードで部隊を集結させて、打撃をあたえることが出来たのです。

話を元に戻しますが、最終的に、ナポレオンが率いるイタリア遠征軍に敗北したオーストリアは、フランスと和約を結び、これによって、第一回対仏大同盟は崩壊しました。

フランスではナポレオン人気は急上昇。ちょっとしたヒーローになる。ナポレオン自身も自分の軍事的、政治的な才能に自信を持ちはじめる。

フランスに戻ったナポレオンは、今度は自分から、新しい軍事作戦を提案します。それが、エジプト遠征です。

フランスの国境近くに迫ってくる外国軍と戦争をするのならわかるのですが、なぜエジプトなのか。フランスとは全然関係ないじゃないですか。総裁政府の指導者たちも、なんでエジプト?と思ったようです。これに対して、ナポレオンは言う。「フランスの敵は常にイギリスである。第一回対仏大同盟もイギリスの主導で結成された。イギリスに打撃をあたえなければ、フランスの安定と発展はない。そのイギリスは植民地インドとの交易で利益をあげている。エジプトはイギリスとインドをつなぐ中継地である。したがって、エジプトをフランスの支配下に置くことで、イギリスに打撃をあたえることができる。」現実には、フランスがエジプトをおさえても、イギリスがどれだけのダメージを受けるか、はっきりしないのですが、とにかくナポレオンは、反対論を押し切ってエジプト遠征を認めさせてしまった。兵力は5万8千。

ナポレオンの主張は、やっぱり屁理屈で、エジプト遠征は結局のところ、ナポレオンの名誉欲、功名心から計画されたような気がします。ナポレオンは、このころすでに自分自身を英雄だと信じて、古代ギリシアの英雄アレクサンドロス大王と自分を重ねていたようです。アレクサンドロスも東方遠征をおこなって、エジプトを征服しているでしょ。それを、自分もやりたかったのではないか。アレクサンドロスは東方遠征の時に、学者を大勢引き連れていくのですが、ナポレオンもそれにならって、考古学者など165人を連れていきます。当時、ヨーロッパでは、ちょっとしたオリエントブームで、エジプトに対する関心も高まっていたようです。

ナポレオンが連れていった学者たちが、エジプトでロゼッタ＝ストーンを発見したのは有名な話。ロゼッタ＝ストーンの碑文から古代エジプトの神聖文字が解読された話は、以前にしましたね。

フランス軍は、エジプトでもピラミッドの戦いと呼ばれる会戦で勝利をおさめている。この戦いの前にナポレオンは兵士に演説している。

「ピラミッドの上から四千年の歴史が諸君を見下ろしている」

要所要所で、決めゼリフを吐いて、兵士の心を燃え立たせるのが上手ですね。

参考までに、言っておくと、この時期のエジプトはオスマン帝国の領土です。エジプトでフランス軍と戦ったのはマムルークとよばれる将軍たちでした。

さて、イギリスですが、陸軍の戦いでは、フランス軍に太刀打ちできませんが、海軍は強い。イギリス海軍は、エジプトのアブキール湾にいたフランス海軍を攻撃して、これを撃滅させた。舟がなければ、フランスに帰ることもできない。ナポレオンのフランス軍は、エジプトに孤立することになります。

さらに、イギリスは、オーストリア、ロシア、オスマン帝国などに呼びかけて、再び対仏大同盟を結成します（第二回対仏大同盟）。

この結果、再び諸外国の軍隊がフランス国境にせまり、イタリアではフランス軍がロシア軍に敗北します。危機のなかで、総裁政府と議会の対立は激しくなり、フランスの政情は不安定になる。もともと、総裁政府は強い指導力を持っていない、頻繁に政変が起きていましたから、不安定な政情のなかで、強力なリーダーシップを持った指導者を求める気運が高まっています。

エジプトで孤立しながらも戦いつづけていたナポレオンのもとに、フランス国内の情勢が伝えられると、かれは、わずかな側近だけを引き連れてエジプトを脱出してフランスに向かいます。政府が、ナポレオンに帰還命令を出したわけでも何でもない。ナポレオンの勝手な行動で、明らかな軍紀違反です。自分の指揮する部隊を、放り出していくわけですから、責任ある軍人としては、あり得ない。

ナポレオンは、軍人としてではなく、政治家として行動した。このチャンスに自分が権力を握ろうと決断したのです。

この時、ちょうど都合の良いことに、ナポレオンの弟が議会の議長をしていた。1799年11月、パリに戻ったナポレオンは、弟の協力を得て、合法的に権力を掌握しようとしますが、うまくいかない。結局、軍の力を背景に、総裁政府を倒して権力を握りました。この事件をブリュメール18日のクーデタという。

これ以後、1814年まで、ナポレオンがフランスの独裁者として君臨することになります。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータなどが見られます。購入も可能です。

[ナポレオンとジョセフ二世中公文庫](#)

ジョセフィーヌの視点からの、ナポレオンなど男達との人間模様。ナポレオンの熱烈な恋文がたくさん読める。

第8 2回 ナポレオン1 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第8 1回 フランス革命4](#)

[次のページへ](#)
[第8 3回 ナポレオン2](#)

世界史講義録

第83回 ナポレオン2

ナポレオンの大陸支配

総裁政府を倒したナポレオンは、あらたに統領政府を組織します。

三人の統領を置いて、これが政務に当たるのですが、ナポレオンは第一統領という地位につく。要するに一番えらい。他の二人の統領は、ナポレオンの言いなりですから、事実上の独裁者です。

フランスの支配者となつたナポレオンは、どのような政治をおこなつたか。

まずは、外交。

ナポレオンは、まず二回目のイタリア遠征をおこない勝利をおさめる。戦争に勝ってくれれば、国民は喜びます。クーデタで権力を握ろうが、ナポレオンのリーダーシップは強力だし、久々に頼れる政府が出現して、国民はかれを支持する。

これは、第二回イタリア遠征で、アルプスの峠を越えるナポレオンを描いたダヴィッドの絵です。非常にかっこよく描かれている。なんか、ナポレオンは乗馬が得意みたいに見えますが、実は苦手だったというから、完全な想像図でしょうね。ナポレオンの馬丁たちは、かれの乗る馬を調教するのに非常に苦労したらしい。なにしろ、乗馬が不得意だけれども、みっともないところを見せることはできない。たくさんいる馬のなかから、耳元で銃を撃っても、全く動じないような神経の図太い馬を選びすぐって、ナポレオンに渡したそうです。余談でした。

さらに、1802年、アミアン条約を結ぶ。これは、イギリスとの和平条約です。この条約で第二回対仏大同盟は解体しました。長年の宿敵であるイギリスとの和平を実現して、外交にも並々ならぬ能力のあるところを示したわけです。フランスに久々に平和がおとずれます。

内政でも成果をあげます。

1800年には政府の中央銀行であるフランス銀行を設立。通貨と経済の安定を図り、フランス産業の発展の基礎をつくる。

1801年には、宗教協約でフランス革命以来、敵対していたローマ教皇と和解します。フランス人のほとんどは、ローマ教会の信者ですから、これは多くの国民の信仰心を満足させた。

このような成果と、国民の人気を背景に、1802年、ナポレオンは終身統領という地位に就任する。俺は死ぬまでフランスの支配者、ということです。

ナポレオンは独裁者ではありますが、フランス革命の時にはジャコバン派を支持したこともある人物です。フランス革命の進歩的な理念や理想を理解している。その成果を守ることが、フランスの発展には欠かせないとも考えています。独裁者であることと、「自由・平等」を守るということは、矛盾するのですが、ナポレオンのなかでは、このふたつが平気で両立するのです。このへんが、ナポレオンの面白い所なんですね。

だから、ナポレオンの、独裁的な政治手法を嫌悪する人も人もいれば、「自由・平等」の実現者として期待する人もいます。

革命の成果を守るという立場から、ナポレオンは1789年の革命以来のフランス政府が出した法令を集大成します。これが、ナポレオン法典。1804年に制定されます。現在のフランスの法律も元をたどれば、これを基本にしているというくらいのものです。

のちにナポレオンは言っている。「余の名誉は幾度かの戦勝にあるのではなく、余の法典にある」難しい言い方をすると、ナポレオンは、この法典でブルジョアジーの政治・経済の支配権を確定させたのです。

またまた、ナポレオンの言葉「余はフランス産業を創造した」。「創造した」は、言い過ぎですが、フランス銀行の設立とナポレオン法典によって、フランス産業発展の基礎を固めたのは間違いない。

さて、ナポレオンの野心はとどまるところがありません。

1804年、ナポレオンは皇帝になります。皇帝としての呼び名はナポレオン1世。これ以後、1814年までのフランスの政治体制を第一帝政といいます。

皇帝というのは世襲の地位ですから、いくら何でもフランス革命の民主主義的な理念と矛盾します。だから、ナポレオンは、即位前に国民投票を行う。「俺が皇帝になるのに賛成か、反対か?」と、国民に問うている。結果は圧倒的賛成多数。形式的ですが、革命以来の民主的伝統はかろうじて維持されている、といえなくもない。

これは、ナポレオンの戴冠式を描いたダヴィッドの絵です。

右に立っているのがナポレオン、その前にひざまづいているのが、ジョセフィーヌです。ナポレオンが皇帝になることによって、彼女は皇后になるのですね。

ナポレオンの後ろに座っているのがローマ教皇ピウス7世。カール大帝が、ローマ教皇からローマ帝国の冠を授けられた故事にならってローマから招いたのです。ナポレオンも、ローマ教皇から皇帝の冠を授けてもらう段取りだったのですが、式の直前に気が変わり、自分の手で自分の頭に冠を載せたという。結構有名なエピソードですが、かれ一流のパフォーマンスで、はじめからローマ教皇に冠をかぶせてもらうつもりはなかったらしい。俺のこの地位は、誰の力でもなく、俺自身の実力で勝ち取ったのだ、ということですね。

ナポレオンの即位は、周辺諸国を刺激します。

またまた、イギリスの主導で第三回対仏大同盟が結成される。オーストリア、ロシア、スウェーデンがこれに参加します。

イギリスはアミアン条約を破棄し、再びフランスと諸外国との戦争が再会された。

フランスの主敵はイギリスですから、まず、ナポレオンはイギリス上陸作戦を実施する。

1805年10月、33隻のフランス艦隊がスペインのカディス港から、出撃しますが、すぐにイギリス海軍と遭遇して、海戦になります。これが有名なトラファルガーの海戦。イギリス艦隊は27隻で、艦船数でいえば劣勢でしたが、圧倒的な勝利をおさめます。フランス側は、沈没3、捕獲17、逃亡13隻。これに対して、イギリスの喪失船はゼロという結果でした。

ちなみに、ナポレオンは、パリから指令を出しているだけで、作戦の直接の指揮は執っていません。海軍の指揮は陸とは全く別の世界ですからね。

イギリス艦隊の司令官はネルソン提督。この人は、戦闘中は常に甲板の上に出て、自分の姿を部下の水兵たちに見せる。そうやって、味方の志気を高めるのです。姿をあらわせば、当然敵から狙い撃ちされるから、非常に危険です。実際、以前の戦いで、右目と右腕を失っています。

トラファルガーの海戦の時も、部下たちは危険だから甲板に立たないように願うのですが、いつものスタイルを変えずにいた。その結果、海戦では勝ったけれど、自分自身は弾に当たって死んでしまった。

こんな死に方をして、人気が出ないはずがないです。ネルソンは、イギリスの英雄になる。現在、ロンドンにトラファルガー広場という公園があって、そこにはネルソン提督の像がフランスの方を向いて立っているそうです。

それはともかく、海軍が大敗したので、ナポレオンはイギリス上陸作戦をあきらめざるをえない。なによりも、戦争で勝ち続けることがナポレオンの人気、権力の根本ですから、何とかこの敗戦を、次の大勝利によって帳消しにしなければならない。ナポレオンはみずから軍隊を率いて、オーストリアに出撃します。海戦は苦手でも、陸の戦いならナポレオンはおてのものです。

トラファルガーの敗戦の二ヶ月後、1805年12月、アウステルリツの戦いでオーストリア・ロシア連合軍を破る。オーストリア・ロシア連合軍の兵力9万。フランスは7万4千という劣勢をはねのけての勝利でした。この戦いには、オーストリアとロシアの皇帝も直接参加していたので、ナポレオンも合わせて三人の皇帝が戦場で相まみえたということで、三帝会戦とも呼ばれています。

これ以後、ナポレオンはヨーロッパ各地で勝利をおさめつづけ、イギリス、スウェーデン、オスマン帝国以外の地域をほぼ勢力範囲に收めます。そして、フランスの利益にかなうように、国境線を引き直したり、属国を建設したりする。属国にできないような、オーストリアやロシアのような大国は、同盟国としてフランスの影響下に置きました。いわゆるナポレオン帝国がつくられていったのです。

どの地域がどうなったか、大まかなところだけ見ておきましょう。

1806年には、神聖ローマ帝国を解体し、ドイツの小国を集めてライン同盟という組織を作りフランスの支配下に置く。名目だけの存在でしたが、千年つづいた神聖ローマ帝国がなくなったということは、中世の封建社会が終わる象徴的な出来事です。これによって、オーストリアのハプスブルク家は神聖ローマ皇帝の称号を失い、ただのオーストリア皇帝になります。

最後までナポレオンに抵抗していたプロイセンとロシアも、1807年のティルジット条約でフランスに屈服します。ナポレオンは、プロイセン領土の半分を奪い、ここにワルシャワ大公国を建設し、フランスの属国とします。

ほかにも、ナポレオンは、自分の兄弟などの身内をオランダやイタリア、スペインの国王に任命したりし

て、ヨーロッパ大陸をほぼ支配下に収めました。

この間、1806年、プロイセンに勝利し、首都ベルリンに入城したナポレオンは、ここで非常に重要な命令を出していますので、絶対に覚えておいてください。大陸封鎖令、別名ベルリン勅令、といわれる法律です。ナポレオンの支配下、及び同盟関係の諸国に対して、イギリスとの貿易を禁止する法律です。軍事的にイギリスを征服するのをあきらめたナポレオンは、ヨーロッパ大陸との貿易からイギリスを閉め出すことで、経済的にイギリスを追いつめようとしたわけです。これは、ナポレオンの戦争が最終的に何を目標にしていたかを示す大事な法律です。

イギリスの経済活動を妨害するだけが目的ではありませんよ。イギリスとの貿易を禁止して、「かわりにフランスと取り引きしなさい」というのがナポレオンの意図ですからね。フランス産業の発展が究極の目的です。

ナポレオンは、こうしてフランス皇帝となり、ヨーロッパ全域を支配下におさめました。すべてを手に入れたように見えるでしょ。ところが、人間の欲望にはきりがない。

ナポレオンはヨーロッパ最高の権力者になるのですが、言ってみれば「成り上がり者」です。古い伝統と格式を持つヨーロッパ各国の貴族から見れば、コルシカの田舎貴族にすぎない。ナポレオンは伝統と格式を手に入れたいと思った。

もうひとつ、後継者問題です。皇帝の地位をつがせる男子が欲しかった。ナポレオンとジョセフィーヌとのあいだには子供ができません。子供を産んでくれる若い皇后が欲しい、と考えた。

このふたつの問題を、一挙に解決するために、1810年、ナポレオンは、オーストリア皇帝の娘、ハプスブルク家の皇女マリー＝ルイーズと結婚します。マリー＝ルイーズ、18歳。ナポレオン、40歳です。まあ、完全な政略結婚ですね。しかし、ナポレオンには、ジョセフィーヌというれっきとした妻がいます。恋いこがれて結婚した妻ですが、こういうときには、ナポレオンは実にドライです。ジョセフィーヌには因果を含めて、円満に離婚しました。

マリー＝ルイーズにとっては、ナポレオンは、理解不可能な、ただ恐ろしいだけの男だったようで、二人のあいだにどれだけの感情のつながりがあったかはよく分かりません。しかし、彼女は結婚の翌年には、きっちりと男子を出産しました。

このあたりが、ナポレオンの絶頂期です。

ナポレオンの歴史的評価

すこし理屈っぽいですが、ここで、ナポレオンに対する歴史的な評価を整理しておきます。

まず、ナポレオンの政治にはふたつの側面があるということ。

ひとつは、専制君主、軍事独裁者としての側面です。皇帝という特別な地位につくことによって、フランス革命の民主主義的な側面を否定しました。

ところが、一方でフランス革命の継承者としての側面も持つ。フランス革命からはじまるフランスの政治

経済の改革を推し進め、革命の成果を確実にフランスに根付かせました。具体的には、中央集権化、フランス銀行設立、学校教育制度の整備、民法典の整備などの仕事です。

つぎに、ナポレオンがおこなったヨーロッパ各地での戦争にはどんな意味があったか。

フランス革命を守るために革命戦争の継続と考えることができます。ナポレオンはフランス軍を解放軍と言っています。ナポレオンは服属した地域に、人民主権、自由、平等といったフランス革命の理念を広げていきます。そして、封建制度を打ち壊していく。こういうのを「革命の輸出」といいます。

また、時間を長くとってみると、ナポレオンの戦争は、世界各地の植民地と市場をめぐるイギリスとフランスとの抗争の最後の段階を考えることができます。ルイ14世時代の17世紀末から18世紀全体を通じて、フランスとイギリスは断続的に戦争状態がつづいています。ヨーロッパでは、スペイン継承戦争、オーストリア継承戦争、七年戦争と、常にイギリスとフランスは敵対する陣営として争っている。アメリカ大陸やインドでも、対立して戦争をしています。アメリカ独立戦争が、その好例です。1689年のファルツ継承戦争から1815年のナポレオンの最終的な没落までの、イギリスとフランスとの抗争を第二次英仏百年戦争ということもあります。

そういう意味では、ナポレオンの戦争は、フランスの利益のための戦争です。だから、はじめは、各国の民衆から歓迎されたナポレオンのフランス軍も、しだいに自国の利益のために、他国を抑圧する侵略軍としての側面がはっきりしてくる。ヨーロッパ各地で、フランスの支配に対する抵抗が起きはじめます。それが、ナポレオンが没落していく最大の理由です。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

ナポレオン言行録 岩波文庫 青435-1	ナポレオン本人の言葉だから、一番信用できる、というわけではない。自己弁護や、虚飾も多いらしい。しかし、第一級の資料であることに、変わりはありません。
反ナポレオン 考—時代と人間朝 日選書	両角 良彦著。「反ナポレオン」という題名は、内容にそぐわないと思った。ナポレオンの周辺の人物から見たナポレオン像を描いている。

第83回 ナポレオン2 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第82回 ナポレオン1](#)

[次のページへ
第84回 ナポレオン3](#)

世界史講義録

第84回 ナポレオン3

ナポレオンのフランス軍の強さ

ナポレオンの率いるフランス軍がなぜ圧倒的に強かったのか。またたく間にヨーロッパ全域を支配下においた強さの原因を整理しておきます。

まず、一番大きな原因是、フランス兵の士気の高さです。士気というのは「やる気」です。兵士一人ひとりが戦う自覚を持っていた。なぜかというと、守りたいものがあったからです。それは、抽象的にいえば「革命の成果」。具体的には「土地」です。

フランス革命によって、封建制度がなくなったフランスでは、ジャコバン派の政策などによって、亡命貴族の領地が政府に没収され、多くの農民たちがこれを手に入れた。フランスが、対仏大同盟に負けるということは、フランスに王政が復活し、亡命貴族たちが戻ってきて、せっかく手に入れた土地が取りあげられるということです。

革命によって手に入れた土地と自由を失いたくないというのが、フランス人の気持ちであり、兵士の気持ちです。たとえ自分が戦場で命を落としても、我が家の土地を守れるのだと思えば、必死に戦います。これが、フランス軍が強かった最大の理由。だから、たとえナポレオンが登場しなくとも、フランス軍は強かったといえる。付け加えれば、当時のフランスは、ロシアを除いて最大の人口がある。当然兵士の数も多い。強くて当たり前です。

では、他の国はどうだったか。フランス以外の兵士は全然戦う意欲はありません。金で雇われた傭兵であったり、プロイセンのように、農民が無理矢理兵隊にされていたりで、戦争の意義を理解し、自分の意志で戦っているわけではない。

その差は歴然としている。だから、ヴァルミーの戦いでは、フランス義勇軍の雄叫びを聞いただけで、プロイセン軍は恐れをなして退却しています。

二つ目の理由として、以前にも触れましたが、フランス軍には、被占領地、被征服地の民衆の協力があったこと。「敵領の民衆を圧政から解放しよう。われわれは革命軍なのだ」と言ったように、ナポレオンは自由・平等の旗をかけて戦争をおこなう。

敵国に行っても、敵はその国の支配者階級である封建領主や貴族であって、民衆は味方だったのです。イタリアでナポレオンが歓迎されたように、各地の民衆、つまり平民階級はナポレオンの軍隊が、自分の国に攻めてきて封建制度を打ち倒すことを期待しました。

これで、戦争に勝てないわけがない。

有名な例として、ベートーヴェンの話をしておきましょう。「運命」や「歓びのうた」を作曲したあのベートーヴェンです。

ちょうどベートーヴェンはナポレオンと同じ時代を生きた人です。生まれたのはドイツのボン、1770年です。家は、おじいさんの代からつづく音楽家一家ですが、身分は平民。幼いころから天才ぶりを發揮して、やがてオーストリアの都ウィーンに出て演奏家、作曲家として活躍します。

ウィーンは今でも音楽の都と言われるくらい、音楽活動の盛んなところですが、どうしてそうなったかというと、かつてオーストリアの貴族たちが、音楽を愛好して音楽家たちのパトロンになっていたからです。

当時の一流の音楽家は、貴族のために演奏したり作曲して生活していました。たとえば、ウィーンに出てきたベートーヴェンは、はじめハイドンの弟子になりますが、このハイドンはハンガリーの大貴族エステルハージ侯爵家の宮廷楽団長だった人です。音楽家は皆、そうやって暮らしていた。だから、言い方は悪いけれど、音楽家は貴族にお愛想して気に入ってくれなければ、成功できない。ベートーヴェンが、本当に弟子入りしたかったのはモーツアルトだったんですが、モーツアルトは、奇行が多くて、貴族社会に受け入れられず極貧のなかで死んでいます。ベートーヴェンがウィーンに来る直前のことでした。

自分の才能に自信のあるベートーヴェンは、貴族にヘイコラするのが嫌で嫌でたまらない。かれはこんな言葉を残しています。

「侯爵なんか偶然の生まれによるもので何千人といふが、ベートーヴェンは、才能によってこの世にただ一人。」

見方によつては、何とも傲慢な言い方です。しかも、かれはこのセリフを自分を援助している貴族の前で言つたらしい。言われた貴族は、「ハハハ」と笑つて聞き流した。

モーツアルトが、貴族社会から嫌われて死んでいったのに、こんなことを言うベートーヴェンが許されたのはなぜか。

ひとつは、ベートーヴェンのこういう傲慢な振る舞いが貴族たちから面白がられていたということです。才能が認められていたことは確かですが、人間としては「物笑いの種」として受け入れられていたのではないか。ベートーヴェンを崇拜する人には、怒られそうですが、私はそんな感じを持っています。

もうひとつの理由として、これが重要なのですが、オーストリアの貴族たちも、時代の変化を感じはじめている。フランスで、平民たちが革命をおこしたように、オーストリアでも革命が起きるかもしれない。だから、貴族階級だからといって、平民を以前のように一方的に見くだして、邪険に扱つてはならない。とくに、ベートーヴェンのように才能のある平民は。こういう意識が生まれはじめている。モーツアルトとベートーヴェンの運命の違いは、この時代の変化にあったのでしょうか。

ちなみにベートーヴェンの先生、ハイドンは、晩年はイギリスに渡り演奏活動をして大成功をおさめます。イギリスでは、市民が入場料を払つて演奏会を聞きに来る時代が訪れはじめており、ハイドンは、貴族社会の援助なしに自立した最初の音楽家となったのです。

ベートーヴェンが活躍した時代は、ヨーロッパが貴族社会から市民社会へと大きく変化する、まさに変わり目だったのでした。

先ほどのセリフでわかるように、ベートーヴェンは、当然、貴族社会なんか早くつぶれてしまえばよいと

思っています。だから、ナポレオンが、占領地の封建制度を打ち壊していくのを見て、ものすごく期待する。はやくウィーンも占領してくれないかというのが、ベートーヴェンの本音です。

ナポレオンに心酔するベートーヴェンは、かれをテーマに交響曲を作曲します。題名は「ボナパルト」。この曲が、ちょうど完成したときに、ウィーンにいるベートーヴェンのもとにニュースが届く。ナポレオンが皇帝に即位した、というのです。それを聞いて、ベートーヴェンは激怒します。本心から貴族社会を否定する人間が、皇帝という特別の身分につくはずがありません。ベートーヴェンは、ナポレオンにだまされていたのだと悟った。「あの男も俗物だった！」と叫んで、机の引き出しから、完成したばかりの楽譜を取り出して、題名の「ボナパルト」と書いてあるところを、グワーッとペンで塗りつぶした。それでも、気持ちがおさまらないので、塗りつぶした表紙を、引きちぎって、クシャクシャと丸めてゴミ箱に放り込んだ。

なぜ、そんなことがわかるかというと、あとで弟子がゴミ箱から表紙を拾って取っておいたのです。それから、残された楽譜の最初のページには、表紙の題名を消したときのペンの跡が残っている。よほどの強い筆圧で、かき消したのでしょうか。

幸いにして、楽譜そのものは捨てられずにすんだので、われわれはこの曲を聴くことができます。ベートーヴェンが、つけなおした題名は、「一偉人の追憶をたたえるための英雄交響曲」。普通には、交響曲第三番「英雄」と呼ばれています。

出だしの部分だけ、少し聞いてみましょう。最初にフォルテでドン・ドンと鳴ります。私は、自由と平等の旗をかけて、ウィーンに近づいてくるナポレオンの足音のように感じるので、どうでしょうか。実際に、のちにナポレオンがウィーンまで攻め込んできます。フランス軍がウィーンにうちこむ砲撃の音がドカンドカンと響く。その時、城壁のそばにある弟の家に逃げ込んでいたベートーヴェンは、枕で頭を抱えて怒鳴りつけた。「ナポレオンの馬鹿野郎、俺の耳が壊れるじゃないか！」このとき、すでにベートーヴェンの耳はかなり悪くなっていたのです。思想的にも、自分の耳にとっても、ナポレオンはベートーヴェンには許し難い人物になってしまったのですね。

話が大分それてしましましたが、当初は、ヨーロッパ中の平民階級、つまりは一般の民衆が、ベートーヴェンと同じように、ナポレオンを応援していたということです。

ナポレオンの強さの理由、三つ目。

やはりナポレオンの戦術のうまさを挙げなければならないでしょう。ただし、これも士気の高いフランス兵だからできた部分はある。

まず、ナポレオンは軍の機動力を重視します。スピードです。常に敵軍よりも早く行軍し、戦場に到着する。敵軍が結集する前に、攻撃を加える。

たとえば、フランス軍4万、ロシア軍6万の兵力で、戦闘があるとします。兵力ではフランスが劣る。しかし、ロシアは6万といっても、予定戦場に一度に6万人の兵士が到着するわけではない。今のように幅の広い舗装道路があるわけではないですから、軍隊は部隊ごとに多くのルートにわかれ、徐々に終結します。フランス軍は、ロシア軍が終結するより早く、行軍を完了し、まだ敵軍が分散している時に攻撃をしかける。そうすれば、数的な劣勢は充分に補うことができるのです。

では、フランス軍はなぜ早く移動できるのか。簡単です。兵士が走るのです。フランス兵はやる気がありますから、一所懸命走る。フランス兵のこんな言葉が残されています。

「皇帝はわれわれの足で勝利をさせいだ」。

また、フランス軍は夜や雨の中でも行軍できる。他国の軍隊は出来ません。夜間行軍をすれば、兵士は逃げていなくなる。雨では、さぼって動こうとしない。

それから、フランス軍は荷物が少ない。軽装備です。だから走れる。なぜ軽装かというと、現地で必要な物資を調達できるからです。理由は何度も説明しましたね。敵地の民衆の協力があるからです。ロシア軍やオーストリア軍のように何ヶ月分かの食糧を、荷車に積んで、ゴロゴロ引っ張っていく必要がないのです。

こうして機動力を発揮して、兵力の集中、中央突破、各個撃破で勝利をおさめる。

さらに、戦術の特徴として、歩兵、騎兵、砲兵を有機的に結合させたといわれます。つまり、砲兵を上手に使ったということですね。

また、ナポレオンは追撃戦も得意です。会戦でフランス軍が勝てば、敗れた敵軍は退却します。これは、当然。さて、ナポレオン以前の戦争では、敵が退却したら、それで戦いはおわりです。ところが、ナポレオンは、退却する敵を追撃して、徹底的にうち負かす。

ナポレオン以前は、なぜ追撃しなかったというと、戦争といつても、戦っているのは封建領主同士、貴族同士です。たまたま、属している国が違うだけで、身分としては仲間同士。だから、勝敗がつきさえすれば、深追いしてそれ以上のダメージをあたえることはしなかった。しかし、ナポレオンのフランス軍は、封建領主の軍隊ではないから、お目こぼしはしない。完璧な勝利を追求します。

また、追撃命令を出すと、部隊は散開して指揮官の目が届かなくなる。封建領主の軍隊では、兵士は逃げたりサボったりするので、したくとも追撃を命令できなかった。しかし、フランス兵は、自覚を持って戦うから大丈夫。結局は、フランス兵の士気の高さに、行き着きますね。

最後に、伝説に属することかもしれません、ナポレオンのカリスマ性。これが、フランス兵を奮い立たせたという。同時代人の証言を紹介しておきましょう。

「彼が戦場に姿を現せば兵士4万人分に値する」（英・ウェリントン将軍）

「われわれは一種の光芒に包まれて進軍しているような感じだった。私は50年後の今でさえ、そのぬくもりを感じることができる。」（仏・マルモン元帥）

「望みをかなえようとする時のナポレオンの声には強烈な説得力と魔力があり相手をその気にさせ、自分の欲望どうりに事を運ぶことにかけては、どんな手練れの女性もかなわなかつた。」（ナポレオンの侍従長コーランクール）

没落のはじまり

1810年前後が、ナポレオンの絶頂期ですが、やがて、ナポレオンの大陸支配が個人的栄光とフランス産業の利益のためだということがはっきりする。ベートーヴェンがナポレオンを見限ったように、はじめは封建制度を打ち倒すフランス軍を歓迎していた諸国民も、ナポレオンの支配に抵抗をはじめます。自由・平等といっているくせに、フランスとの関係では、自由も平等もないのではないか、ということです。ナポレオンが自由・平等という考えを広めた結果、皮肉なことに各国で民族意識が高まってきたのです。

特に、諸国の反感を買ったのは、大陸封鎖令です。ヨーロッパ諸国は、一番産業の発展しているイギリスに、原材料や食糧を輸出して経済が成り立っていた。それを禁止したのですから、反発は当然です。

最初にフランスの支配に抵抗をはじめたのはスペインです。ここでは、1808年からフランスに対する反乱が始まっている。ナポレオンの兄がスペイン国王になっていますから、反乱をおこしたのはスペイン軍ではない。一般の市民たちが抵抗闘争をはじめたのです。今でいえば、ゲリラ戦です。ナポレオンは反乱鎮圧のために最終的には30万の軍隊を投入しますが、成果は上がらない。正規軍と決戦をすれば、フランス軍は無敵ですが、スペイン人ゲリラは、どこにいるか分からぬ。フランス軍の隙をついて襲ってくる。そもそもゲリラと、そうでない市民との区別もつきません。フランス軍は報復のために、怪しいと思った人たちを、どんどん処刑していくしかない。

ゴヤが描いた「1808年5月3日の処刑」という絵があります。マドリード市民の反乱が題材で、僧侶も含めて一般市民をフランス軍が銃殺しているところです。ゴヤはフランス軍の暴虐を告発するために、この絵を描いた。

中央で白いシャツを着た男が両手を挙げています。男の右の手のひらをよく見ると、穴があいている。これは、聖痕といって、イエスが磔になったときに、手に釘が打ち付けられた、その傷を象徴しています。今、殺されようとしているこの男の側にこそ、神のご加護がある、そういうメッセージです。フランス兵たちは、やましいので聖痕を持つ男を、まともに見ることができません。顔を上げることができず、うつむいたままで発砲しようとしているのがわかりますか。ゴヤがこの絵にこめたメッセージです。

こうなると、フランス軍は革命軍でも何でもない。ただの侵略軍です。そして、ナポレオンは最後まで、スペインの反乱を鎮圧することができませんでした。

ナポレオンによって領土が半分になってしまったプロイセンは、国を挙げて改革に取り組みます。これをプロイセン改革という。

プロイセンの指導者たちは真剣に考えた。なぜフランス軍に負けたのか、フランス軍との違いはなにか？ 答えは、簡単です。プロイセンの兵士は、やる気がない。フランス兵のように、兵士としての自覚も戦う意志もない。プロイセン兵は、強制的に集められた農民で、しかも彼らの身分は農奴です。封建領主に経済的にも身分的にも抑圧されている農奴が、封建領主のために戦おうとするわけがないのです。それどころか、ナポレオンに負けることを願っているかもしれない。

だとすれば、プロイセンを強くするためには、封建制度をなくすしかない。しかし、革命は困る。そこで、支配者側が、自分たちの権力を手放さないようにしながらおこなったのがプロイセン改革です。こういうのを、上からの改革という。

改革のリーダーになったのは、シュタイン、ハルデンベルグという二人の大臣です。かれらは、農奴制をなくして、農民を自由な身分として解放します。フランス革命のように、農民が土地を手に入れるような、徹底的な改革ではありません。一説によると、ようやくフランス革命前のフランス農民の状態に近づいたくらいだともいわれていますが、それでも大進歩です。

また、軍制改革をすすめました。軍隊内でのリンチやむち打ち刑を廃止して、兵士の待遇を改善する。さらに、身分に関係なく、能力のあるものは将校に抜擢する。シャルンホルストというプロイセンの将軍

は、「兵士は国王の召使いではなく、国家の市民でなければならない」と言っている。素晴らしいセリフですが、かれが民主的な人だから、こんなことを言っているのではない。そうしなければ、フランス軍のように強い軍隊が作れないからです。

こうして、プロイセンは短期間のうちに、国民皆兵の原則をうち立て、フランス軍に近い国民軍を作り上げることに成功しました。プロイセンの兵士も、ちょっとは国のために頑張ろうか、という気持ちになってくる。こうなると、フランス軍の優位性は揺らいでいますね。実際に、のちのワーテルローの戦いで、ナポレオンが敗北したときに、決定的な役割をはたしたのがプロイセン軍でした。

また、プロイセンでは、哲学者のフィヒテが「ドイツ国民に告ぐ」という講演をおこなって、民族意識が高まっていました。

次に挙げるのは、あるプロイセン人が少年時代の思い出を描いたものです。かれが、まだ子供でベルリンに住んでいたころ、ナポレオンが自分のアパートの前を通った。かれは、英雄が通る！と、無邪気にはしゃいで、母親に声をかけたのです。

私「窓のところにきてごらん、ナポレオンが通るよ」

母「私は台所に引っ込んでいるよ。何の罪もない貧しい国にすかずか押し入る男なんて見たくもないよ」
(ヴィルヘルム・キューゲルンゲンの想いで)

名もない庶民のお母ちゃんも、こんなふうに考えはじめる。民族意識の高まりとは、こういうことね。

そして、ロシアです。フランスから一番遠いロシアは、1810年、大陸封鎖令を破って、イギリスとの貿易を再開します。ナポレオンは、大陸封鎖令に従うように警告を繰り返しますが、ロシアは無視する。これを放置しておいては、ナポレオンのメンツは丸つぶれです。ロシアに影響されて、他の諸国まで大陸封鎖令を破り出せば、ナポレオンのヨーロッパ支配は崩れ去る恐れがある。

1812年5月、ナポレオンは、側近たちの反対を押し切り、ロシア遠征を開始しました。兵力は60万。そして、このロシア遠征が、ナポレオンの没落のはじまりとなったのです。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

世界軍事史一人間はなぜ戦争をするのか

小沢郁郎著。ナポレオン戦争だけでなく、洋の東西を問わず、古代から19世紀に至るまでの、主要な戦争の軍事技術、戦略を、それを生み出した社会制度から言及した隠れた名著。著者が高校教師だったためか、かゆいところに手が届くような、教師にとって「おいしい」本。本当は、誰にも教えてくれない私の「ネタ」本。
ちょっと高いですが、世界史教師には充分おつりが来ること請け合い。

ベー
トニ

ひのまどか著。ジュニア向けの本ですが、簡潔にして要を得ており、今回のネタにバッチリ使

ヴェ
ン＝運
命は扉
をたた
く

わせてもらいました。ベートーヴェンが傲慢だったのは、聴覚障害を周囲に悟られまいとした涙ぐましい努力の結果でもあるようです。実は、みんな、気づいているのですが、ベートーヴェンを気遣って知らない振りをする。そのあたりの機微や、ラッパのような巨大な補聴器など、人間ベートーヴェンの息づかいが伝わるようでした。

第84回 ナポレオン3 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第83回 ナポレオン2](#)

[次のページへ](#)
[第85回 ナポレオン4](#)

世界史講義録

第85回 ナポレオン4

ロシア遠征

1812年5月、ロシア遠征がはじまりました。ナポレオンの兵力は60万。すべてがフランス兵ではありません。24万は、フランスの属国、同盟国から動員した兵で、はじめから士気は高くなかった。

ナポレオンが率いる大陸軍がニーメン川をわたりロシアの領土に侵入したときの兵力は47万5千。ナポレオン軍はロシア軍を捕捉するために猛スピードで走った。一日60キロの距離を、30kgの装備を背負って走った。6月とはいえ、すでに猛暑。この行軍速度についていけない兵士が次々に脱落していましたが、それは見捨てて走りつづけた。最初の二日間で5万人の兵士が脱落したという。一刻も早くロシア軍に決戦を挑みたかったのでしょう。

ロシア軍は、いったんは国境近くに兵力を集めますが、ナポレオン軍がせまると退却をはじめた。ロシアの兵力は約20万。倍以上のナポレオン軍に正面から挑んで勝てるわけがない。逃げ出したわけです。だから、ナポレオン軍は、どんどん追いかける。ただ、ロシア軍は退却する際に、畠などを焼き払っていく。ですから、ナポレオン軍は食糧を現地調達できない。また、ロシア農民も、協力的ではない。解放軍ではなく、侵略軍だと見抜かれていますから、以前のイタリア民衆のようにフランス軍に好意的ではない。

8月、スモレンスクという町に到達したときには、ナポレオン軍の兵力は15万5千になっていた。一度も戦闘らしい戦闘はないのですよ。飢えと疲労と逃亡で激減したのです。

9月、退却をつづけたロシア軍は、首都モスクワの手前ボロディノで、はじめて本格的な会戦をしました。首都防衛のためです。ところが、あっさり負けて、またもや退却。ついには、モスクワを放棄してさらに東に逃げてしまった。ロシア皇帝をはじめ、モスクワ市民もみんな避難しました。

9月14日、ナポレオン軍はもぬけの殻となったモスクワに入城します。ナポレオンの兵力は11万になっています。この時、モスクワでは大火がおこり、町の大半は焼けてしまって、フランスの兵士の食糧や宿舎にも苦労する始末でした。

しかし、敵国ロシアの首都を制圧したことにはかわりはない。ナポレオンにとっては、これは勝利です。さっそく、ナポレオンはモスクワから、北方に逃げ去ったロシア皇帝に降伏勧告の文書を送る。首都を占領したのだから、悪あがきはせずに、早く謝りに来い、というわけです。

ところが、ロシア皇帝からの返事が待てど暮らせど来ない。外交交渉が全く進展しないまま、モスクワで待機しつづけて、一月が経った10月13日。この日、ナポレオンを驚かせる事件がおこる。

何か。

モスクワに初雪が降ったのです。ナポレオンの予想以上にロシアの冬は早かった。初夏に遠征を開始したフランス軍は、冬の装備を持っていません。ただでさえ飢えで苦しんでいるのに、このうえ寒さに襲われては、モスクワ占領は継続できない。即座に、ナポレオンは退却を命令します。何の成果もないまま、ナポレオン軍はもと来た道を、引き返しはじめました。退却時の兵力は10万。モスクワ占領の一ヶ月だけで1万減っています。

ナポレオン軍が退却を開始すると、どこかに隠れていたロシア軍があらわれて、追撃を開始しました。寒さとロシア軍の攻撃にやられて、ナポレオン軍は激減。11月3日には5万、11月8日、スマレンスクでは、3万7千。ここでは、気温はマイナス26度にまで下がっている。フランス軍の軍服のボタンはスズでできている。スズという金属は、急激な温度低下で粉々に砕けてしまう。だから、フランス軍兵士は、寒さのなか、服のボタンも留められない。想像を超える状態ですね。死んだ仲間の服をはぎ取って身にまとう、死んだ軍馬の肉を、みんなで食らう、味がないので火薬を振りかけて味付けをしたといいます。暖をとるために軍旗を焼く。軍旗というのは、敵に奪わされたら指揮官が自殺しかねないほどの、部隊の名誉を象徴する重要なもので、燃やしたりしたら銃殺ものです。それを、焼くのですから、もう軍隊としての規律も崩壊しかけているということです。

11月26日にはベレジナ川に到達する。この川を渡らないといけないのですが、ここに来て急に寒さがゆるみ、それまで凍結していたベレジナ川が歩いてわたれなくなってしまった。工兵隊が死を決して、氷の浮かぶ川に入り、仮設の橋を架けて、なんとか川を渡った。渡ることができたのは3万名。

後ろからせまってくるロシア軍をうまく翻弄して、橋を架けるための時間稼ぎをしたので、「ベレジナ渡河作戦」というかっこいい名前で知られていますが、要はただただ必死に逃げているだけです。

ベレジナ川をわたっている絵がありますが、川を渡る兵士のなかに女性が混じったりしている。当時、軍隊が遠征するときには、兵士に日用雑貨品を売る商人や、売春婦などもついてまわっていた。戦争的一面が垣間見えて興味深いです。

12月10日、ニーメン川をこえて、ロシア領から帰還したときの兵数はわずか5千。60万ではじまったロシア遠征軍が5千になっているのです。軍隊が消滅したと言っていい。ナポレオンの権力を支えていた軍隊が消えてしまったのです。

ロシア遠征は、大失敗に終わりました。

ナポレオンの最後

ナポレオンの支配に不満を持つヨーロッパ諸国にとって、これ以上のチャンスはありません。ヨーロッパ諸国は、反ナポレオンの連合軍を結成し、ナポレオンにとどめを刺す。これがライプツィヒの戦い。別名諸国民戦争。

連合軍の主力は、ロシア、オーストリア、プロイセンです。兵力は30万。

対するフランスは18万。ロシア遠征で、軍団が消滅したにもかかわらず、よく集めたともいえますが、急遽召集された兵士たちで訓練も充分ではない。

実際のところ、フランス国内では厭戦気分が蔓延していて、兵士集めに苦労します。政府が召集した数は42万。しかし、実際に出頭してきた若者は17万5千しかいませんでした。多くの若者が、徴兵命令を無視して、逃げてしまったのですね。上の息子はロシアに駆り出されて帰ってこなかった。なのに、下の息子まで引っ張るのかい！もう、たくさんだ。というのが、フランスのおかあちゃんたちの偽らざる気持ちです。

ロシア遠征以前の1810年には、すでに徴兵忌避者3万2千、脱走兵3万、という記録がありますから、ナポレオンの栄光とは裏腹に、長びく戦争にうんざりしていたフランス国民がたくさんいたのでしょう。徴兵のがれのために、自分で前歯を折ったり、親指を切断する者が多く出たといいます。当時の銃は、火薬袋を前歯でかみ切って銃に火薬を装填した。だから、前歯がなければ徴兵されないというのです。前歯だけでは心配という者は、親指まで落としてしまった。これでは、銃が握れません。当然徴兵免除ですね。また、妻帯者は徴兵免除されるというので、いそいで結婚する若者も多かった。村の若い娘は引っ張りだこ。若い娘がいないので、60歳の女性と結婚した18歳の若者がいたという記録もある。

そんな状態で、かき集められたフランス軍は、以前のような優位性がありません。ライプツィヒの戦いで、フランス軍は敗北し、ナポレオンはパリに逃げ帰り、これを追って連合軍もパリに進軍。ナポレオンは最後の抵抗を考えましたが、側近の将軍たちに退位をせまられて、抵抗をあきらめた。ついに1814年3月、パリは連合軍に占領されました。

降伏したナポレオンはどうなったかというと、島流し。流されたのはエルバ島という地中海に浮かぶ小島。ただし、曲がりなりにも皇帝の地位にあった人物ですから、連合国は、ナポレオンの名誉を重んじて、エルバ島の「皇帝」の称号と、島の統治を許されます。また200フランの年金と1200名の近衛兵もあたえられた。まあまあ、寛大な処置だと思います。

フランスには、革命で処刑されたルイ16世の弟が、亡命先から帰ってきてルイ18世として即位。ブルボン王朝を復活させました。

ところが、このルイ18世、すこぶる人気がない。傲慢で頑固なおじいさんだった。ルイ18世に外務大臣として仕えたタレイランはこんなことを書いています。

「ルイ18世はおよそこの世で知る限り、極めつきの嘘つきである。1814年以来、私が王と初対面の折りに感じた失望は、とても口では言い表せない。…私がルイ18世に見たものは、いつもエゴイズム、鈍感、享楽家、恩知らず、といったところだ。」

大臣からこんなことを言われるのだから、よっぽどだったんでしょう。あまりにも不人気な王、国民の評判も悪い。こんな王ならば、ナポレオンの方がよかった、という声がエルバ島で暮らすナポレオンの耳にも入る。チャンスはまだある、と考えたナポレオンは、1815年2月24日、側近を引き連れて、7隻の舟でエルバ島を脱出しました。向かう先はフランス南海岸。ナポレオン脱出のニュースはすぐにパリに

伝えられ、ルイ18世は、上陸するナポレオンを逮捕するために、軍隊を南仏に派遣します。軍隊が待ちかまえているなかを、ナポレオンはやってくるのですが、ナポレオンに「栄光あるフランスの兵士諸君、余は帰ってきた。ともに、フランスの栄光を取り戻そう」なんて言われて、逮捕するどころか、ナポレオンの指揮下に入ってしまうのね。この辺は、ナポレオンのカリスマ力爆発です。ルイ18世は、次々と軍隊を差し向けるのですが、ナポレオンは、それを全部自分の味方にしまって、パリに向かって進軍します。とうとう、ルイ18世は、恐れをなして逃げだし、3月、ナポレオンはパリに帰還。再び皇帝の座に返り咲きます。

すぐさま、イギリス、プロイセンなどによって、連合軍が結成され、ナポレオンとの最後の戦いがおこなわれた。これが、ワーテルローの戦いです（1815年6月）。

ナポレオン率いるフランス軍の兵力は約10万。対する連合国はイギリス軍6万8千とプロイセン軍4万5千。総司令官はイギリスのウェリントン将軍です。

この最後の決戦で、ナポレオンは負けてしまう。有名な戦いなので、敗北の原因をいろいろな人が研究している。この時、ナポレオンは病気で、判断力が鈍かったとか、前日の豪雨で地面がぬかるみ、得意の砲兵部隊を思うように活用できなかった、とかね。

ワーテルローでフランス軍とイギリス軍が激突したのが6月18日。実はその二日前、6月16日に、リニーという場所で、フランス軍とプロイセン軍が戦いました。この時は、フランスが勝って、プロイセン軍は麦畠のなかを散り散りになって敗走した。ナポレオンは3万3千の別働隊をグルーシー将軍に指揮させてプロイセン軍を殲滅するため追わせた。一昔前のプロイセン軍ならば、いったん散り散りになったら、兵士はどこかへ逃げてそれっきりです。ところが、プロイセン改革を経て、プロイセン軍は生まれかわっている。逃げた兵士たちは、また指揮官のもとに集結して、整然と退却をはじめた。グルーシーはプロイセン軍を捕捉することができないまま、追い続けた。

6月18日、ワーテルローで、フランス軍主力とイギリス軍が戦闘を開始したとき、グルーシー将軍の別働隊は、まだ帰ってきていない。戦いは、フランス軍優勢で進むのですが、グルーシーの3万3千が、今ここに帰ってくれば一気に決着がつくと、ナポレオンは首を長くして待っている。

ところが、夕方になって、ワーテルローに現れた軍団は、逃げたはずのプロイセン軍でした。形勢は一気に逆転して、結局フランス軍は負けてしまった。グルーシーの別働隊は、とうとう現れていませんでした。

兵士の士気の高さが、もはやフランス軍の専売特許ではなくなっているのだから、ナポレオンは負けるべくして負けたと言ってよいかもしれない。

この敗北で、ナポレオンは再び退位して、またもや島流しになる。今度は、簡単に脱出できないように、大西洋の絶海の孤島セント=ヘレナ島に流された。同行を許されたのは12名の従者のみで、イギリスによる厳重な監視つきです。

これ以後、ナポレオンは何もすることがないので、一日中島のなかを歩き回ったり、自分の生涯を従者にしゃべって暮らした。島流しのわずか6年後、1821年に52歳で死亡。病死ですが、イギリス人に毒を盛られて死んだという説が有力です。

死後、従者がナポレオンの回想録を出版する。この回想録がきっかけになって、ナポレオン英雄伝説が広く行き渡るようになりました。

最後に、ナポレオンの発言をいくつか紹介しておこう。

「わが権力は、わが名誉に由来し、名誉は戦勝に由来する。」

戦争に勝ち続けなければ権力を維持できなかったナポレオンの運命を、自分自身、よくわかっていたのですね。

「運命の女神など振り向いてくれなくとも、世界を完全に制覇してみせる。」

傲慢といえば、これ以上傲慢な発言はないかもしれない。

「余のごとく戦場で大人になった男には、百万の人命も気にならぬ。」

これもまた、えらく傲慢。これが、戦争指揮官の本音か。

「余の部隊の忠誠と服従に期待している。兵士なくしては余は何もできない。彼らがいなければ、余は普通の人間と少しも変わることろはない。」

これは、うってかわって謙虚。兵士の前での演説か。

「余はフランス産業を創造した。」

「余の名誉は40度の戦勝よりも、法典にある。」

「ジョセフィーヌ！」

これは、死を前にしたナポレオン最後の言葉。やっぱり、一番愛していたのはジョセフィーヌ？

こんどは、ナポレオンについての発言。同時代の人々が、彼のことをどう考えていたのか。

「ナポレオンが善玉か悪玉かとよく訊かれるが、こうした分類はこの人物には当てはまらない」（メッテルニヒ）

「ナポレオンの人間に対する姿勢は軽蔑であり、人間を従える手段は金銭と栄光である。その人間観は物欲と虚栄に裏打ちされている。」（ルドヴィッヒ）

「彼は一度として思いやりの情を持ったことがない。ために、人付き合いは無愛想であり、友達というものは得られなかつたのである。ナポレオンの無感動な性格というものは、その波乱に満ちた生涯のあらゆる時期を通じてきわだった特徴である。」（シャプタル）

「ナポレオンには二つの人間が同居している。一つはすばらしい才能の持ち主だけれども、もう一つは常に人を疑い、そして相手に対する信頼というものを絶対に持たない、認めない人だ。」（マダム・ド・レ

ミユーザ)

最後に、ナポレオンの戦争によるフランスの戦死者数をあげておきます。

1805年～09年 198,000名

1810年～14年 555,000名

1815年 30,000名

1805年からの合計戦死者数 783,000名

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[1812年の雪—モスクワからの敗走講談社文庫](#)

両角 良彦 著。題名の通り、ナポレオンのロシア遠征を描く。

第85回 ナポレオン4 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第84回 ナポレオン3](#)

[次のページへ
第86回 ウィーン会議](#)

世界史講義録

第86回 ウィーン体制

----- ウィーン体制の成立 -----

ナポレオンがライプツィヒの戦いに敗れ退位したあと、1814年9月からウィーン会議という国際会議が開かれました。ナポレオンによって変えられてしまった国境線や、各国の政治体制を、どうしていくのか、ナポレオン後のヨーロッパの秩序を話し合うための会議です。

会議を主催したのはオーストリアの外務大臣メッテルニヒ。ヨーロッパ各国の代表がウィーンに集まつた。各国とも、少しでも自分の国に有利に会議を進めようと必死です。お互いの利害がぶつかり合って、なかなか会議は進展しない。進展しないけれど、集まっているのは、各国の貴族階級ばかりなので、夜になると華やかな舞踏会が開かれて、かれらは毎晩踊っていた。だから、「会議は踊る、されど進まず」と言われます。

ウィーン会議は、結局翌年の6月までつづいた。ナポレオンがエルバ島を脱出したときも、ウィーン会議はやっていたわけだね。

会議の中心となったのは、主催者であるオーストリアのメッテルニヒ。フランスの代表タレーラン、ロシアは皇帝アレクサンドル1世直々の参加、イギリス代表カスルレー。

メッテルニヒは、オーストリアの名門貴族です。超保守的な考え方の持ち主で、フランス革命や、革命がめざした自由や平等が大嫌い。フランス革命からナポレオンの時代にかけて、ヨーロッパ全体に広がった自由主義的な考えを徹底的に押さえつけ、ヨーロッパ全体を、貴族階級が権力を握る昔の体制に戻そうと考えていた。

ロシア皇帝アレクサンドル1世は、英雄扱いでした。なにしろ、ロシア遠征の失敗でナポレオンは没落していったのですから。実際には、冬の寒さに敗れたのであって、アレクサンドル1世が、大活躍したわけではないのですが。

会議のなかで、一番立場が悪いのがフランスです。ヨーロッパを大混乱させたのはフランスだ、責任をとれ、と言わされたら、返す言葉がない。フランスの領土をよこせ、多額の賠償金を支払え、と各国から要求されても文句を言えない立場です。

フランス代表タレーランですが、この男は、非常に賢い。政治的能力は抜群です。名門貴族出身。フランス革命期には、三部会や国民議会の議員だった。ナポレオン時代には外務大臣です。そして、ナポレオン没落後は、ルイ18世のもとで、フランス代表としてウィーン会議に出席している。政治体制が変わって

も、それにうまく順応して、つねに政治の中核に居つづけた人物です。ある意味では節操がない。「変節と嘘と汚職の天才」「冷徹で偉大な現実主義政治家」などと呼ばれている。でも、これは、外交官としては褒め言葉といえるかもしれない。

このタレーラン、フランスを守るために「正統主義」という理屈を持ち出してきた。フランス革命以前のヨーロッパの姿が「正統」、つまり正しい状態である。だから、すべてを革命前の状態に戻そうという主張です。だから、国境線も、革命前の状態に戻す。つまり、フランスの領土は減らさない。賠償金も支払わない、という。

フランスは、他のヨーロッパ諸国に多くの被害を与えたのに、責任をとらないのはおかしいじゃないか、という主張に対して、タレーランはこう答える。

「フランスも被害者です。悪いのはフランスではなくて、革命なのです。革命によって、国王ルイ16世一家は殺されました。私たち、フランス貴族も特権を奪われ、多くの土地や財産を奪われました。皆さん方と同じ、被害者なんですよ。悪いのは、あくまでも革命であり、市民階級の連中なのです。」

なかなか、うまい理論構成ですね。他国の代表者たちも、タレーランの「正統主義」を受け入れます。

フランス、オーストリア、ロシア等々、国家間の利害の対立はあるのですが、ウィーン会議の出席者たちは、「ヨーロッパ全体の貴族階級」と「ヨーロッパ全体の市民階級」の対立の方を、より重大な問題として受け止めたわけです。

フランス革命のような革命が、再びヨーロッパのどこかで起きたら困る。国家間の利害の対立をこえて、市民階級を押さえつけるために、貴族階級全体で協力し合おうということです。こういう考え方にして、タレーランの言う「フランスも被害者」という主張も受け入れられるわけです。

ウィーン会議の基本原則は「正統主義」と教科書に書いてあるのは、こういうことです。

タレーランは、うまい具合に、フランスを守ることに成功した。

「正統主義」とならんで、大国による「勢力均衡」が、ウィーン会議のもうひとつの基本原則になりました。オーストリア、ロシア、プロイセンなどの大国の利益が優先され、小国の領土が分割された。その際に、突出した力を持つ国が出現しないように大国間の「勢力均衡」がはかられた。要するに、「正統主義」という原則の一方で、結局は、強い国が得をした、弱い国が損をしたということです。

会議の主な決定事項を見ておきます。

フランスでは、「正統主義」の立場から、ブルボン王朝の復活が認められ、ルイ16世の弟、ルイ18世が即位した。

ドイツでは、ナポレオンによってつくられたライン同盟が解体され、あらたにドイツ連邦が結成された。35の君主国と4つの自由市から構成される連邦で、統一国家ではありません。プロイセン、オーストリアという大国も、ドイツ連邦に含まれています。

ロシアは、ポーランドとフィンランドを事実上支配して、勢力を拡大した。

オーストリアは北イタリアに領土を拡大した。

イギリスは、セイロン島とケープ植民地の領有を認められた。セイロン島はインドの東に浮かぶ島。ケープ植民地は、アフリカ大陸の最南端。ともに、ヨーロッパではありません。イギリスは、ヨーロッパで勢力を拡大することよりも、アジアやアフリカに目を向けていることがわかる。ヨーロッパ諸国よりも、一步先に進んでいるわけだ。

以上のような新たな国際関係がつくられた上に、これを維持するための同盟が結ばれます。

ひとつが、神聖同盟。ロシア皇帝アレクサンドル1世の提唱で結成されたもので、正確には国家間の同盟ではなくて、各国君主どうしの盟約です。君主どうし協力し合って、革命を防ごう、というものです。

もうひとつが、四国同盟。イギリス、オーストリア、プロイセン、ロシアのあいだで結ばれた軍事同盟です。のちにフランスも加わって、五国同盟となります。

軍事同盟というのは、必ず仮想敵を設定します。四国同盟の仮想敵は、どこか。

仮想敵は、全ヨーロッパの市民階級です。そして、市民階級の求める自由主義。これ以後、ヨーロッパのどこかで革命運動や自由主義の運動が起こると、四国同盟が軍隊を出動させて弾圧するということになりました。

以上、ウィーン会議の結果できあがった新しいヨーロッパの国際秩序を、ウィーン体制といいます。

ウィーン体制の特徴をまとめます。

ウィーン体制は、1、特権階級が平民階級を抑圧する体制、2、大国が小国を抑圧する体制、3、保守主義が、自由主義を抑圧する体制、ということになります。

革命の第一波（1820年代の革命）

ナポレオンは没落したものの、ヨーロッパの人々は、かれによって一度は自由を味わってしまった。

ウィーン体制は、それを力で押さえつけようというのですから、当然、ウィーン体制に反発して、自由や民族独立を求める運動が起こってきます。

まず、1820年代を中心に自由主義運動の大きな波があります。

最も早い時期に起きたのが、1817年のドイツのブルシェンシャフト運動。ドイツ各地の大学生たちが組合を作り、自由とドイツの統一を求める運動です。オーストリアのメッテルニヒが中心となって、この運動は弾圧された。

1820年にはスペイン立憲革命が起きる。これは、ナポレオンからの独立戦争を戦っていた自由主義者たちが、反動的な政策をとるスペイン王に反対して、自由主義的憲法を認めさせた事件です。しかし、国王

が神聖同盟に援軍を要請して、出動してきたフランス軍によってつぶされました。

同じく1820年、イタリアではカルボナリの反乱が起きる。カルボナリは「炭焼き党」と訳されますが、意味はよくわかりません。イタリアの自由主義者の秘密結社と覚えておけばよい。このカルボナリが、政治的自由を要求して反乱をおこした。スペイン立憲革命に刺激されて、一時期ナポリで自由主義的革命政府をつくることに成功しますが、オーストリア軍の介入によってつぶされました。

1825年、ロシアでデカブリストの乱。これは、ロシア軍の自由主義的将校による反乱です。ロシアの将校は、みんな貴族階級です。なぜ、これが自由主義者なのか。貴族階級は自由主義に反対するのが普通ですから、ちょっと変なんです。

これは、かれらが軍隊を率いる将校だったということに理由がある。ロシア軍は、ナポレオンとの戦争で、常に敗北していた。ナポレオンのロシア遠征では最後には勝ちましたが、実際には、ロシア軍は侵入してきたナポレオン軍から逃げていただけで、冬の寒さと飢えがナポレオン軍を負かしたのでしたね。

自分の軍隊が弱い、いつも負けていた、というのは、将校としては非常に悔しいわけで、一部の貴族将校たちは、ロシア軍を強くするためにどうしたらよいか真剣に考えた。お手本になったのがプロイセンで、ここはプロイセン改革によって、プロイセン軍はわずかの時間で見違えるように近代化され強くなつた。農奴に自由を与えて、兵士に愛国心を持たせなければ軍隊は強くできないというのが、かれらの結論でした。そのためには、ロシアの政治に自由主義を取り入れ、立憲政治をおこない、農奴を解放すべきだ、と考えた。しかし、ロシアの政治は皇帝による専制政治ですから、自分たちの考えを実行するには反乱しかなかつたのです。

この反乱は、すぐに別の部隊によって鎮圧されてしまった。デカブリストの乱を描いた絵がありますが、反乱軍が広場で鎮圧されている。それを、民衆が野次馬になって遠くから見物している。他人事なわけ。反乱をおこした貴族将校たちの考えは、全然市民には理解されていなかつたのです。失敗して当然ですね。

こうして、1820年代の自由主義的運動はすべて失敗に終わるのですが、ひとつだけ成功した運動があります。

地理的には飛ぶのですが、ギリシアの独立運動です。ギリシアはオスマン帝国の支配下にあったのですが、ここで民族独立運動が起きる。オスマン帝国に対して利権獲得や領土的野心をもつイギリス、フランス、ロシアが援助して、ギリシアの独立運動は成功しました。でも、これは、ウィーン体制の本筋とはちょっとはずれる事件。ギリシアといえば、ヨーロッパ文明の源流なので、当時のヨーロッパでこの事件は、大層関心を集めたようです。

第86回 ウィーン体制 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第85回 ナポレオン4](#)

[次のページへ](#)
[第87回 ウィーン体制2](#)

世界史講義録

第87回 ウィーン体制2

革命の第二波(1830年の諸革命)

ウィーン体制のもとで、ヨーロッパ中の自由主義は、押さえつけられたのですが、革命の本家本元フランスはどうなっていたのか。

ナポレオンがワーテルローで敗れ、セント=ヘレナ島に流されたあと、ブルボン家のルイ18世が、再び王位につきます。しかし、ブルボン朝が復活したからといって、すべてをフランス革命の前の状態に戻すのは不可能です。革命やナポレオン時代を経て、フランスの経済も人々の意識も大きく変化していますからね。

ルイ18世のもとでの政治形態は立憲王政。革命の成果である法の前の平等や所有権の不可侵という原則は、そのまま認められました。とはいっても、この時期おこなわれた制限選挙では、有権者数は人口3千万人のうち9万人。人口のわずか0.3%にすぎませんでした。広い土地を持つ貴族と、ほんの一握りの上層市民による政治がおこなわれていたのです。

やがて、ルイ18世が死亡して、1824年、王の弟が即位した。シャルル10世といいます。この人は、極端に反動的な思想の持ち主で、有権者の数をもっと減らし、アンシャン=レジームを復活させようと考えていた。「イギリス王と同じ条件で王になるくらいなら、森のなかで木を挽いている方がました。」などと言っている男。

シャルル10世の反動的な政治は、自由主義者との対立を激しくさせ、さらに、経済不況や凶作が重なって、民衆の暴動が頻発するようになった。緊張が高まるなかで、1830年、シャルル10世は、議会を解散し、言論統制の強化、選挙権制限を企てます。これに対して、7月、パリの民衆が武装蜂起をしました。民衆を鎮圧するはずの軍隊の一部が、民衆側に寝返ってしまうほど、王に対する反感は強かったようです。

このなかで、シャルル10世は退位に追い込まれた。ウィーン体制後、はじめて市民の革命運動が成功したのです。この革命を七月革命という。

さて、シャルル10世が退位したあと、フランスの政治をどうするのか。

上層市民階級は、フランス革命の時のように、下層市民が権力を握り恐怖政治がおこなわれるのを恐れた。上層市民というのは、銀行家など莫大な財産を持つ市民たちです。かれらは、シャルル10世の政治

には反対だが、徹底的な革命ものぞまない。自分たちだけが権力を握って革命を終わらせようと考えた。共和政を求める市民たちはたくさんいましたが、組織されていなかったので、七月革命の流動的な政治状況のなかで、次の政権のリーダーシップをとれませんでした。そこで、上層市民階級は、自分たちの権力を認めてくれる新しい王を即位させて、革命を終わらせてしまった。

王になったのが、オルLEAN家のルイ=フィリップという男。

オルLEAN家は、ルイ14世の弟からはじまるブルボン家の分家です。王族なんですが、変わった家風の家で、代々自由主義に理解があった。ルイ=フィリップの父親などは、フランス革命の時、国民公会の議員としてルイ16世の処刑に賛成しているんですよ。まあ、チャンスがあれば自分が王位につけると考えていたのでしょうか。

ルイ=フィリップも、ジャコバン派に所属していた経歴の持ち主で、自由主義に理解があった。シャルル10世を批判する自由主義者たちの集会に、自分の屋敷の庭園を開放したりして、王族ではあるが、自由主義者に人気があったのです。

上層市民階級は、この人物を王としてかつぎだしたわけだ。ルイ=フィリップの方も、オルLEAN家が長年望んでいた王位が手にはいるですから、喜んで王位についた。

七月革命で成立したフランスの政治体制を「七月王政」といいます。

まとめ。七月革命は、シャルル10世を退位させることには成功しましたが、新しい王を即位させて終わりました。上層市民階級が権力を握ったことが、この革命の成果です。有権者の数は、9万人から17万に増えた。増えてはいるけれど、国民全体から見れば、まだ、ごくわずかです。大多数の国民のあいだに、不満がくすぶっていることに注意してください。

七月革命の影響

フランスの七月革命の成功は、ウィーン体制のもとで抑圧されていたヨーロッパ各国の自由主義運動に影響をあたえて、各地で革命運動が起こりました。

1831年、ウィーン会議の結果、オランダに併合されていたベルギーで独立運動がおこり、フランスやイギリスの支持を受けて独立達成。

同じく1831年、ポーランドで独立運動がおこります。これは、ロシア軍の出動で鎮圧されて失敗に終わった。

ポーランド出身の作曲家ショパンは、このとき二十歳。音楽活動のためウィーンに滞在していた。独立運動のニュースを聞き、自分も運動に参加したいと考えたのですが、「おまえは音楽に専念しろ、独立運動

は俺たちにまかせろ」という父親の手紙で、帰国を思いとどまります。その後、ショパンはパリに向かうのですが、旅の途中のシュツットガルトで、フルシャワがロシア軍によって陥落したというニュースを知る。自分の友人たちが革命運動に参加して、ロシア軍に殺されたかもしれないと考えると、居ても立ってもいられない気持ちになった。怒りと、絶望と、悲しみと、後悔のないまぜになった感情のまま、パリについて作曲したのが、エチュード「革命」と伝えられています。ちょっとピアノを習った人なら弾けるんじゃないかな。聞いてみましょう。ショパンの想いが感じられるかな。

同年、ドイツとイタリアで立憲政治運動がおこりますが、これもオーストリアの鎮圧で失敗。

イタリアでは、もうひとつ、マッティーニという人物を指導者に「青年イタリア」という政治結社が作られました。この組織は、イタリア統一をめざして、この後長く活動をつづけることになります。この時期のイタリアは、まだ中世さながらに小国に分裂したままです。「青年イタリア」の活動で、イタリアに統一国家、国民国家を作ろうと運動が、だんだん本格化していきます。この統一運動を妨害しつづけるのがオーストリア。イタリアを自国の影響下に置いておきたいオーストリアは、イタリアが小国分裂状態のままのほうが都合がよいのです。このため、統一イタリアの誕生は、まだまだあとのこととなります。

イギリスの諸改革

イギリスの政治状況はどうだったか。名誉革命後のイギリスは、急激な政治の変化を避け、法律の改正によって徐々に変化していくところに特徴があります。ヨーロッパ諸国とは、別格のようなイギリスですが、やはり七月革命の影響を受けています。

まず、宗教の自由化です。これは、七月革命以前からはじまっていました。

1828年には審査法が廃止されています。これは、国教会の信者でなければ官職に就けないという法律でしたね。チャールズ2世が、カトリック信者を官僚に採用し、絶対主義をおこなおうとしたのに対抗して、1673年に制定された法律です。それから、150年たち、時代に合わなくなっていたわけです。ただし、審査法の廃止によって、カルヴァン派などは官職につくことができましたが、カトリックだけは、まだ差別されていました。

そこで、翌1829年には、カトリック教徒解放法という法律がつくられ、カトリック信者も他の宗派と同じように、官職につくことが可能になり、宗教上の差別がなくなりました。

カトリック教徒解放法に関連して、オコンネルという人物を覚えておいてください。

カトリック教徒の差別の問題は、実はアイルランド問題です。ここは、ちょっとややこしいかもしれません、頭の隅に入れて置いても損はない。

ピューリタン革命の時に、イギリスはアイルランドを植民地にしました。それ以来、アイルランド人はイギリスにより、搾取され差別されつづけてきた。このアイルランド人の宗教がカトリックなのです。だか

ら、カトリックを差別する法律は、事実上はアイルランド人に対する差別なのでした。

政治的には無権利状態に置かれたアイルランド人のなかから、オコンネルという人物が登場します。この人は、アイルランド人のスーパースターです。若いころにフランスに渡り勉学したのち、ロンドンで弁護士資格を獲得し、その後はアイルランド人の弁護に大活躍して、有名になります。

やがて、オコンネルは、ひとつひとつの裁判でアイルランド人を守るよりも、政治家としてアイルランド人の地位向上をめざしたいと考えて、1828年下院選挙に出馬、当選します。ところが、オコンネルはカトリック教徒なので、当選しても官職である議員になることができないのです。

これまで、オコンネルは、あくまでも合法的に、ねばり強く運動をしてきました。これを、「カトリックだからダメ」では、オコンネルを支持するアイルランド人の反乱がおきるのではないか、と恐れたイギリス政府が、ついに宗教の自由化に踏み切ったというのが、ことの流れです。

七月革命の影響を受けて、イギリスでおこなわれたのが第一次選挙法改正です。

イギリスでは、古くから選挙がおこなわれていましたが、選挙区の区割りが産業革命以前の古い時代に作られたもので、産業革命後の人口の変化が全然反映されていなかった。たとえば、マンチェスターやバーミンガムのような新興都市は、10万人以上の人口があっても、全く議員が選出されなかった。

逆に、ほとんど人がいなくなってしまった農村の選挙区から、議員が選ばれたりする。極端な話、全く人がいなくなってしまった土地から、議員が選ばれたりした。こういう場合は、その土地の地主が議員になるわけです。こういう選挙区を腐敗選挙区といいます。

古い選挙区割りで得をするのは、貴族やジェントリなどの地主です。逆に、都市で経済力につけてきた産業資本家、商工業者と言ってもいいし、市民階級と言ってもいいですが、こういう人たちは、議員を選べないし、なれなかつたわけです。

七月革命で、フランスの市民階級が政権に参加したのを見て、イギリスでも都市商工業者が、腐敗選挙区をなくし、意見を国政に反映させようとした。

その結果、1832年、第一次選挙法改正がおこなわれる。都市の富裕な市民階級にも選挙権があたえられた。ただし、女性、工場労働者や農業労働者には選挙権はあたえられなくて、有権者は全人口の4.6%にすぎません。それでも、産業資本家層が、直接議員として国政に参加するようになった。その結果、政党が再編され、地主の利益を代表する保守党、商工業者の利益を代表する自由党という、ふたつの政党によって政策が争われるようになります。大きなながれとしては、自由党が主導権を握り、産業資本家に有利な法律が制定されています。

産業資本家は、自分たちの作った商品をどんどん海外に売って儲けたい。貴族やジェントリが持っている特権をなくして、誰でも自由に好きなところで商売ができるようにしたい。簡単に言うと、自由貿易を求めていた。

この要求に応えて、1833年、東印度会社の中国貿易独占が廃止されます。それまでは、東印度会社しか中国貿易が許されていなかったのです。

1846年には、穀物法が廃止された。穀物法というのは、イギリス国内の地主を守るために、外国産穀物の輸入を制限していた法律です。都市に住んでいる産業資本家にとって、国産だろうと外国産だろうと、

安い小麦が買えればよい。自由貿易の方が、彼らにとっては理想的なわけです。穀物法廃止に活躍した二人の政治家も覚えておこう。コブデン、ブライトです。二人とも産業資本家で反穀物法同盟を結成し精力的に活動しました。

1849年には、航海法が廃止。これは、1651年クロムウェルの時に作られた法律でしたね。当時ライバルであったオランダ商船を排除するために、イギリス船でなければ輸入を認めないとというものでした。これも、とっくに時代遅れの法律でした。

このように、1830年代以降、イギリスでは産業資本家が政治の主導権を握って、自由主義的な改革を次々におこなっていきました。

第87回 ウィーン体制2 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第86回 ウィーン体制](#)

[次のページへ](#)
[第88回 産業革命](#)

世界史講義録

第88回 産業革命

技術革新

産業革命とよばれる産業構造の変化が18世紀後半のイギリスで始まりました。産業革命は、やがて世界中にひろがり、社会経済の仕組みをそれまでとは全く違ったものに変えていきます。簡単に言えば、ここから資本主義社会、工業化社会が誕生する。では、産業革命はどのようにはじまったのか。

17世紀に、イギリス東インド会社がインド貿易をはじめると、インド綿布はイギリスで大流行しました。手触りは柔らかく、軽くて暖かい。白い布地は染めやすく、プリントも簡単にできるのが綿布の特徴。今、皆さんの中着もほとんどが木綿でしょう。流行して当然ですね。ところが、困ったのが、イギリスの毛織物業者です。綿布の流行で、売り上げがひどく落ちこんでしまった。危機感を持った毛織物業者の働きかけで、イギリス政府は1700年、インド綿の輸入を禁止します。

しかし、禁止されても綿布の需要はある。輸入が駄目なら、作ればよい。西インド諸島などから原綿を輸入して、イギリス国内で綿布の生産が始まりました。綿布は人気があるので、作る先からどんどん売れる。消費に生産が追いつかない。そこで、大量に生産するための技術の改良がはじまります。これが、産業革命のそもそもの発端です。

産業革命の発明史の中で、最初に登場するのがジョン＝ケイ。この人は「飛び杼（とびひ）」を発明した。1733年のことです。布というのは縦糸と横糸が交差して織られます。杼というのは横糸を載せる道具で、これを縦糸のあいだに通して横糸を張ります。織り職人は、機織り機の向こう側に手を伸ばして、右手と左手で杼を受け渡しして横糸を通すわけです。これは時間がかかるし、布の横幅は両手の届く幅より広く作れない。

これを改良し、杼を手で持たず、ひもを引っ張ることで、左右に飛ばすようにしたのが飛び杼です。横糸を通す作業が簡単になり、布を織るのにかかる時間が短縮されました。

画期的な発明ですが、ジョン＝ケイは、成功できなかった。当時の発明家は、大体そうなのですが、ひどい目に会う。こんな機械を作られたら仕事がなくなると考える職人たちに恨まれて、生まれ故郷の町に住めなくなる。のちには、使用料を払わずに機械を使う輩があらわれて、使用料の支払いを求める裁判の費用が払えずに最後は破産してしまった。

それはともかく、飛び杼によって、布の生産能率が上がると、今度は糸の生産が追いつかなくなってしまった。製

糸は、昔ながらの方法で行われていたからです。

糸は、どうやって作っていたのか、念のために説明しておきましょう。ほぐしてみるとわかりますが、糸というのは、纖維によりをかけて作られているね。昔は、どうやっていたかというと、綿のかたまりから細く纖維を引っぱり出す。これに紡錘という棒状の道具をつけてぶら下げる。ぶら下げた紡錘を手でひねって回転させると、糸がよじれてよりがかかる。ある程度よりがかかったら糸を紡錘に巻き取って、また新たに纖維を繰り出して同じようにりをかける。この繰り返しで、糸を作っています。

これが、一番単純な糸の作り方。何の機械もいらない。紡錘一本あればよい。

もう少し進歩したやり方が、糸車を使う方法。糸車を回すと、ベルトでつながっている紡錘が高速で回転する。片手で綿を繰り出し、もう片方の手で糸車を回します。これで、よりをかけたり糸を巻き取ったりする。これが、産業革命前のやり方でした。

ぶら下げた紡錘を回転させるよりは、能率がいいですが、一人に一本しか糸を紡げないから、飛び杼で織布の能率が上がると、糸不足になったのは理解できますね。

というわけで、糸不足を解消するために、紡績機械の発明があいつぎます。

1764年、同時に複数の糸を紡ぐジェニー紡績機が発明された。糸車の回転を複数の紡錘に伝え、レバーで糸と紡錘の角度を変えることによって、よりをかける作業と巻き取り作業を切り替えることができる機械です。発明者はハーグリーブス。ジェニーというのはハーグリーブスの奥さんの名前。

ハーグリーブスのジェニー紡績機は暴徒に破壊されたりして、この人も企業家としては成功しなかったそうです。

次いで、1769年、アークライトの水力紡績機が登場します。綿をローラーで引き延ばしてからよりをかける機械で、人力ではなく水車の力で動かしたので水力紡績機といいます。

アークライトはこの発明で特許を取り、水力紡績機の工場が各地で建設され大成功しました。

1779年には、クロンプトンがミュール紡績機を発明。これは、ジェニー紡績機と水力紡績機の長所を取り入れたもの。ジェニー紡績機の糸は細いが切れやすい。水力紡績機の糸は、丈夫だが太い。そして、ミュール紡績機の糸は、細くて丈夫。

1785年、カートライトが力織機を発明。ミュール紡績機の登場で、糸の供給は大幅に増加し、今度は逆に、糸の生産に織布が追いつかず、糸がだぶつくようになる。布を織る工程の改良が望まれ、登場したのが力織機です。力織機は織機の動作を自動化して、一人で何台もの織機を操作できるようにした。さらに、動力として蒸気機関を使うという画期的な発明でした。彼の工場は、織布工に襲われて壊されてしまい、事業は失敗してしまいました。

1793年、ホイットニーが綿繰り機を発明。この人はアメリカ人。今までの発明家はイギリス人ですよ。綿繰り機は、収穫した綿花から種を取り除く機械。水力を動力として、作業能率がそれまでの50倍にアップしました。

以上、綿工業の技術革新、機械の発明を見てきました。産業革命というのは、この技術革新が、他の産業にもどんどん波及していくのです。たとえば、力織機やミュール紡績機などの機械を作るための機械工業が発達する。また、機械の原料としての製鉄業の技術革新が始まる。大量の綿製品を工場から港に運ぶために、輸送手段でも技術革新が始まる、といった具合です。

その中でも、大事なのが動力。

1710年には、ニューコメンによって蒸気機関は作られていた。これは、炭坑の地下水を排水するためのポンプとして使われていた。ただし、効率の悪いものだったようです。1769年、ワットがこれを改良して、以後、いろいろな機械の動力として利用されていきました。

蒸気機関を輸送手段に応用した最初の人がトレヴィシック。1804年、蒸気機関車を作ります。ただし、レールが弱く実用化には向かなかった。彼の発明は世間には無視され、不遇のうちに生涯を終えたようです。

(蒸気機関車が発明される前から、イギリスには鉄道馬車が発達していた。レールの上の車両を馬が牽引するものである。トレヴィシックの蒸気機関車は、このレールの上を走ったが、その重量にレールが耐えきれなかった。)

1814年、スティーブンソンの蒸気機関車が登場します。1825年、ストックトン・ダーリントン間の鉄道開通に彼の開発したロコモーション号、1830年のマンチェスター・リヴァプール間の鉄道開通運転ではロケット号が運転され、これ以後、実用化され各地に鉄道が建設されていきます。

蒸気機関車は、まさしく鉄のかたまりです。これ以後、製鉄業など重工業も発達していくことになります。

船では、1807年、アメリカ人のフルトンが、蒸気船をつくっています。この時代には、スクリューは発明されていない、船の両脇に大きな水車をつけて、蒸気機関で回転させる。外輪船という。幕末に日本にやってきたペリーの黒船も、この外輪船ですね。

資本主義の確立と社会問題の発生

産業革命の進展によって、イギリスでは工場制機械工業が産業の中心となります。工場の経営者、産業資本家が社会・経済・政治の主導権を握るようになります。これが、資本主義社会です。前回話した1830年代以降のイギリスの諸改革は、まさに産業資本家たちの主導のもとにおこなわれた改革です。

資本主義社会のもとで、それまでの社会の構造が大きく変わります。

まず、伝統的な手工業が衰退し、没落した手工業者は、工場労働者となる。同時に、このころのイギリスでは、「第二次囲い込み」といわれる地主による経営規模の拡大化がおこなわれていて、多くの農民が農

村を離れ、都市に流入していました。かれらも、職を求めて工場労働者になる。

産業革命がすすむにつれて、工場で働き賃金を受け取って生計を立てる賃金労働者、プロレタリアートともいうのですが、が増加します。

資本主義社会では、労働者階級が人口の多数を占めるようになり、産業資本家とならんで、社会を動かす二大階級となります。たとえば、現在のイギリスでは二大政党は、労働党と保守党。それぞれ、労働者階級と産業資本家の利益を代表しています。これが、二大政党制のあるべき姿だと思います。このへんは、アメリカや日本では、はっきりしていませんが。

話を戻します。産業革命が始まった当初は、労働者を保護する法律など全くありません。しかも、資本家は、労働者を安い賃金で長時間働かせたい。そのほうが儲かりますから。だから当時は、資本家のやりたい放題で、19世紀前半イギリスでは労働問題が深刻化し、低賃金、長時間労働、児童労働が社会問題となっていました。

この絵は、大規模な紡績工場の内部です。紡績機械が奥まで並んでいますが、働いている人はわずか数人ですね。で、よく見てみると、機械の下にもぐり込んで腹ばいになっている人間がいます。この人、身体が小さい。子供なんです。何をしているかというと、糸を紡ぐ際に、膨大なほこりがでます。これを放つておくと、機械にからみついて故障の原因になるので、常に掃除をしなければならない。誰でもできる単純な仕事だし、機械の下にもぐるので、子供の方が都合がいい。

子供は、賃金も安く値切れるし、反抗もしないので、積極的に採用された。これは、マッチ工場で労働者に賃金を支給している絵ですが、労働者はみんな子供ですね。中には、裸足の子もいます。

イギリス政府も、やがて児童労働を問題にしあげました。1832年イギリス児童労働調査委員会の報告書を資料として載せておきました。児童労働の実態の証言です。

要点だけ挙げておくと、

- ・6週間に渡って、少女たちが朝3時から夜10時ないしは10時半まで働かされたこと。
- ・5分でも遅刻すると、賃金を4分の1カットされること。
- ・事故で指を無くした少女もいたが、その段階で賃金支払いが停止されたこと。

などが書かれています。

また、紡績工場にしろ、マッチ工場にしろ、工場内の空気は汚れているため、幼い頃から長時間働きつづける子供たちは、肺病などで短命になります。

1842年の「平均寿命の比較調査」がありますが、リヴァプールの労働者の平均寿命はなんと15歳。同じリヴァプールの「知識層・ジェントリ地主」は、35歳となっていますから、半分の短さです。

労働者は、平均寿命だけでなく、平均身長もどんどん小さくなっていました。フランス人の平均身長との差がどんどん開いていくのにショックを受けたのが、イギリスの陸軍。小さいということは、肉弾戦になれば負けますからね。政府としても、放ってはおけなくなってくる。

児童労働、長時間労働のひどい実態が明らかになり、多くの社会改良家の運動もあって、1833年工場法

が制定されました。繊維工業の工場で9歳以下の少年労働を禁止、13歳未満のものの労働時間を一週間48時間、18歳未満のものは一週間69時間とした。労働時間を制限する法律は、これ以前にもあったのですが、工場法は工場監督官の制度もつくったので、法律が実行されるようになりました。

また、新興工業都市が急速に発達するのですが、そこに職を求めて人口が集中した結果、さまざまな社会問題が生まれます。

人口の急増ぶりはどんなものか。

マンチェスターの人口、1760年3万人、1861年46万人。100年間で15倍の増加。

リヴァプールの人口、1760年4万人、1861年49万4千人。100年間で12倍の増加。

人口増加に住宅建設が追いつかず、上下水道も整備されない中で、住宅問題、衛生問題が発生する。また、低賃金や失業などから極端な貧困生活をおくる人も増えます。犯罪も増える。いわゆるスラム街が、歴史上初めて出現します。

のちに、工業化によって多くの国が、このような都市問題を経験するのですが、なにしろイギリスでは世界初の経験でした。多くの人が、驚きを持って、当時のイギリスの都市の状態を書きしるしています。

さきほどの「平均寿命の比較調査」ですが、農村地帯であるラトランド州では「知識層・ジェントリ地主」は52歳、労働者は38歳、となっていて、どの身分でも都市住民より長命です。都市は大気汚染や伝染病の蔓延など、劣悪な衛生環境だったことが想像できます。

産業革命の波及と世界

労働者に多くの負担を強いながらも、産業革命によりイギリス経済は発展していきます。安い商品を大量生産できるようになったイギリスは、他国よりも優位に立ち、やがて世界経済の覇権を握ることになります。

イギリスの後を追い、他の諸国でも産業革命がはじまります。

ベルギー、フランスは1830年代、ドイツでは1850年代に産業革命がはじまる。一番遅れて産業革命をおこなったのが、ロシアと日本で1890年代。この時期までに、産業革命を経た国は、20世紀初頭には列強として植民地獲得競争に乗り出します。産業革命を経験しなかった国や地域は、植民地、半植民地として資本主義国の利益のために利用され、従属的な位置に押しとどめられることになります。

話を19世紀前半に戻せば、こういうことです。イギリスの綿織物工業では、綿布をじゅんじゅん作る。国内だけでなく、世界各地に売りに出かける。それが、中国やインドです。相手国がイギリス製品を買ってくれないならば、戦争を仕掛けてでも相手国の制度を変えさせる。直接支配した方がてつとり早ければ、そこをイギリスの領土にしてしまって、独占的に販売する。イギリス政府の主導権は、産業資本家が握っているから、自分たちの思うように政府を動かすことができます。

アジア、アフリカ諸国は、こうして世界経済の中で従属地域となっていくのです。

イギリスで産業革命が起きた理由

最後に、なぜイギリスで最初に産業革命が起こったのか。

- 1, まず、イギリスでは17世紀にピューリタン革命、名誉革命という二つの革命をおこない、封建領主など古い特権をもった勢力がすでにいなくなっていたこと。その結果、自由な生産活動が可能になっていました。
- 2, 次に、綿織物工業が発展する以前から、イギリスでは毛織物工業を中心に工場制手工業（マニュファクチャ）が発達していたこと。
- 3, また、植民地貿易の利益が蓄積されていた（資本の蓄積）。
- 4, 第二次囲い込みにより、多くの農民が、都市へ流入して、これが豊富な労働力の供給源になったこと。

以上を、わかりやすく言うと、

- 1, 工場を作りたい人を邪魔する勢力がいなかった。
 - 2, 工場を作るためのノウハウはすでにあったし、
 - 3, 工場を作りたい人に、お金を貸せるようなお金持ちもいた。
 - 4, 工場で働きたいという人もたくさんいた。
- という事ね。

おまけ...家族と時間

産業革命が、生活の深いところにもたらした影響を述べておきます。

教科書に、こういう記述があります。

「...家族のあり方にも変化をもたらした。夫の賃金労働が主となり、妻の労働は補助収入のためとみなされ、賃金を得られない家事労働は低く見られるようになった」

さりげなく書かれていますが、実に含蓄のある文章です。

産業革命以前の労働というのは、農業が中心で、家族みんなで働きます。夫も妻も子供も一緒です。誰が何をしているのか、みんなが知っています。

ところが、産業革命後の労働者の家庭では、夫だけが工場に働きに行く。何をやっているのか、妻や子供には見えません。家族のむすびつき方が、それまでとは全く違ったものになった。家事労働が低く見られるようになったということは、女性の地位が低くなつたということです。これらは、産業革命以後の変化

だといっているのです。

人間の生活が時計によって縛られるようになったのも産業革命以後のことです。

労働者にとって、出勤時間や労働時間など、時間によって一日が区切られ、拘束されるようになる。労働時間は自分の時間ではなく、労働時間が終わって、やっと自分の時間がはじまるように、時間によって生き方が分割されるようになる。

現代に生きるわれわれも、細切れにされた時間の中で生きてています。それ以前の人間は、時計などは必要なく、時間を気にせずに毎日を過ごしていたのです。

家族関係や時間意識の変化は、歴史の年表に載るような事件ではないので、あまり意識しません。しかし、当たり前と思っている常識や感覚も歴史の中で作られたものだということを知っておくことは大事でしょう。

参考図書紹介 · · · もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[原始人の技術にいどむ
国民文庫](#)

岩城 正夫 著

原始人の技術という題名ですが、前半は、ジェニー紡績機をめぐって、筆者が試行錯誤しながら糸つむぎの技術発展を追体験する話。糸を作るだけの単純な技術にも、驚きと発見の連続です。ジェニー紡績機の原理もよくわかる、お勧めの本。
後半は、石器作りと、火起こしの技術。これも、筆者が技術を再発見する過程がエキサイティングです。

第88回 産業革命 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第87回 ウィーン体制 2](#)

[次のページへ
第89回 二月革命](#)

世界史講義録

第89回 二月革命

労働運動の形成

産業革命の進展と共に、労働者階級が増大し自覚も高まつくると、労働者自身による権利獲得の運動がおこってきます。そのひとつが労働組合運動です。イギリスでは、19世紀の前半までは労働者の団結が禁止されていましたが、やがて労働組合は社会的にも認知され、労働条件の改善や政治改革をめざすようになります。

イギリスでの、労働者階級の最初の政治運動がチャーチスト運動です。1832年の第1回選挙法改正で、労働者階級の参政権が認められなかった。そこでかれらは、1838年、「人民憲章」を作成し、これを採用するように政府に迫りました。この運動をチャーチスト運動といいます。「人民憲章」は「People's Charter（ピープルズ・チャーター）」なので、チャーチスト運動です。

「人民憲章」には、男子普通選挙や、議員の財産資格廃止などがうたわれていました。スローガンは「土地をすべての人民に、すべての人に家を、すべての人に選挙権を」。「すべての人に家を」というのが、当時の労働者の状態を想像させて、リアルですね。

この運動は、集会を開いたり、署名を集めて議会に請願を繰り返すという、どちらかといえば穩健な運動でした。1848年くらいまで、運動は継続しますが、議会はこれを受け入れず、チャーチスト運動は成果無く終わります。

社会主義思想

一方で、労働者階級の貧困を解決しようとする思想も生まれてきました。これを社会主義思想という。代表的な社会主義思想家を見ておきます。

まずは、イギリスのロバート＝オーウェン（1771～1858）。

この人は、工場経営者です。スコットランドのニューラナークというところで紡績工場を経営していました。経営者は利益をあげるために、できるだけ賃金を低く抑えるのが普通です。ところがオーウェンは、人道主義的な立場から、労働者の貧困生活を何とか救いたいと考えた。そして、経営者としてはとんでもないことをはじめる。

まずは、自分の工場の労働者の賃金を引き上げます。さらに、労働者のひどい住宅環境を改善するため社

宅を建設して労働者を住まわせる。工場内に給品所をつくり、日用雑貨・食料品などを安く労働者に販売する。おまけに、親が工場で働いているあいだ、ほったらかしにされている小さい子供たちのために幼稚園までつくります。これが、世界最初の幼稚園だといわれています。オーウェンの工場の労働者にしてみれば、至れり尽くせりですね。

しかし、こんな事をすれば、経費がかさむわけで、当然経営を圧迫する。経費を製品の販売価格に上乗せすれば、よその工場との価格競争に負けるはずです。だから、ほかの工場経営者仲間は、オーウェンの試みをたしなめます。「そんなことしたら、工場潰れるからやめておけよ」というわけです。

ところが、これを実行してみたら、オーウェンの工場の売り上げが伸びたんですよ。

なぜか。

一言でいえば、労働生産性があがった。つまり、労働者がオーウェンの待遇改善に感激して、はりきって働いた。当時の労働者は、普通は一所懸命働かない。監督に見張られていない限りは、だらだらしている。首にならない程度に、できるだけさぼるというのが、あたりまえでした。でも、オーウェンのところでは、労働者がちょっと頑張ってくれたんですね。

経営的にも成功しながら、しかも労働問題も解決できるとあって、かれの工場は評判となり、見学者も続々訪れるようになりました。

ただ、この成功は長くはつづかなかった。オーウェンのやり方に感激してよく働いていた労働者も、しばらくするうちに、その待遇の良さに慣れてくれる。当たり前のように思ってきます。素晴らしいことも、日常になってしまえば感激はなくなる。やがて、オーウェンの工場の労働生産性も他の工場とかわらなくなり、福利厚生に出費している分だけ不利になり、かれの工場は潰れてしまいました。

オーウェンは、失敗の原因は、他の業者との競争があるからだと考えた。だったら、競争のない所でやつたらどうかということで、北アメリカに、自給自足をめざした農場や工場のある共同体を建設しますが、これも失敗。

最後的には失敗に終わるのですが、かれのユニークな試みは、今でも我々の気持ちを引きつける何かがありますね。また、オーウェンは、工場法制定のために活動したことでも有名です。

オーウェンの試みは、資本家個人の努力で問題を解決しようというものでしたが、社会を変えることで労働者の状態を改善しようという思想も生まれます。

フランスのサン＝シモン(1760～1825)やフーリエ(1772～1837)などがそうです。

フーリエは少年時代にマルセイユの米穀問屋に奉公していたことがあった。その時に、主人の命令で、腐った米を海に捨てさせられた。なぜ、米が腐ったかというと、値上がりするのを待って倉庫にしまっておいたのですね。食べられるものを、儲けのために売らずに、挙げ句の果ては、腐らせて捨てる。こういう利潤追求に必然的につきまとふ不合理に疑問を持ったのが、かれが社会問題に目を向けたきっかけとなった。非常によくわかります。

フーリエは、雇う者も雇われる者もなく、競争もない社会をつくるためには、自給自足の共同体しかないと考えた。共同体をめざすところは、オーウェンと似てきますね。

ルイ＝ブラン(フランス・1811～1882)は、同じ社会主義でありながら、フーリエなどとは、ちがう発想をします。不合理な競争をなくし、労働者を保護するためには、国家が生産を統制すればよいと考えた。

国が工場を経営すれば、競争に巻き込まれることもなく、労働者を搾取する必要がなくなると考えたのでした。あとで話しますが、ルイ＝ブランは、フランスの大臣となってこの政策を実行します。いろいろな状況のためにうまくいきませんでしたが。

ブルードン(フランス・1809～65)は、これまた逆で、国家なんかなくしてしまえ、と言う。無政府主義です。政府はしょせん権力者である金持ちの味方なのだ。そんな政府はなくしてしまっても、協同組合が生産を管理すれば社会は成り立っていくと考えた。この人の有名な言葉で「財産とは何か？窃盗である。」ということがあります。金持ちが金を持っているのは、労働者階級から盗んだからだという。搾取の結果蓄えた私有財産を否定する。けっこう過激です。

こんな過激な発想が生まれるのは何故かというと、私たちは、当たり前のこととして受け入れていますが、このころの社会主義者たちは、貧富の差が生じること自体がそもそも間違っていると考えているのです。働いている労働者が貧しく、働かない資本家が豊かなのはおかしいというわけです。

理想社会の追究は、オーウェンのような資本家個人の良心の問題から出発して、経済問題、そして国家のあり方の問題へと、より広く深くなっています。

社会主義思想の最高峰に立つのが、マルクス(1818～83)とエンゲルス(1820～95)です。ともにドイツ出身ですが、活動したのは主にロンドン。二人はセットで覚えて下さい。マルクスが主で、エンゲルスが従ですが、主著は二人の共同作業です。『共産党宣言』『資本論』は必ず覚えること。『共産党宣言』の最後の言葉、「万国の労働者、団結せよ！」は、あまりにも有名。今でも、北京天安門広場前の紫禁城の城壁には、このスローガンが毛沢東の肖像とともにかかりています。

かれらは、資本主義経済の分析からはじまって、国家論、歴史、哲学などを含む膨大な思想体系を作り上げた。これをマルクス主義という。マルクス主義が、後世の人文社会科学全般にあたえた影響ははかりしれないものがあります。私の大学時代は、かれらの本を読んでいなかったら、学生としては半人前扱いでした。

なぜ、大きな影響力を持ったかというと、1917年、ロシアのレーニンがマルクス主義思想にもとづいて革命を成功させ、ソビエト社会主义共和国連邦を建設したからです。その後、東欧・アジアなど世界各地で社会主义国家が誕生した。これらの国も、マルクス主義を国づくりの理論に使ったのです。そういう意味では、歴史を作った思想です。

ソ連をはじめとして、ほとんどの社会主义国が崩壊してしまった現在、マルクス主義は過去のものとされつつあるようです。それでも、かれらの本は古典として残るでしょうね。

二月革命

労働者階級と社会主义思想が発展しつつあるというのに、19世紀前半のヨーロッパの政治状況は貴族階級による反動的政治がつづいています。ウィーン体制でしたね。ところが、フランスでまた革命が起きる。これが、1848年の二月革命です。

フランスでは、1830年の七月革命以後、銀行家などの少数の大資本家と国王ルイ＝フィリップによる七月王政がつづいていました。有権者は人口の1%で、資本家の大多数である中小資本家は政権に参加することができず、労働者も当然参政権はなく、当初から政府に対する不満は大きかった。1846年には凶作、1847年には不況と、国民生活が悪化する中で、参政権拡大を要求する運動も活発化するのですが、これに対して、首相ギゾーは、「働け、そして金持ちになれ。そうすれば有権者になれるだろう。」などと言う。火に油を注ぐわけだ。

ついに、1848年2月、パリ市民が武装蜂起し、国王ルイ＝フィリップは退位、亡命しました。これが二月革命。

国王亡命後、臨時政府が組織されます。この政府は、名前のとおり、ホントに臨時の政府です。政府の中核は、参政権拡大を求めていた資本家層ですが、二月革命を成功に導いた民衆・労働者階級の勢力も無視できないので、社会主義者のルイ＝ブランを政府に参加させるなど、労働者階級に対する配慮もする。革命直後は、どのグループが政府の主導権を握るか流動的だったので、寄り合い所帯の政府がつくられたのです。

ただ、もやは、国王は不要であるという点では、意見は一致します。二月革命以後のフランスの政治体制が、第二共和政です。

臨時政府は、自由主義的政策をおしそすめました。男子普通選挙、出版言論の自由を認めます。ルイ＝ブランが中心になって、10時間労働制を制定し労働時間の短縮もおこなった。

臨時政府の施策の中で、最も有名なのが、国立作業所の設立です。ルイ＝ブランが国立工場の経営というプランを持っていたのは、先ほど話しましたが、これを具体化したわけです。

ところが、いきなり工場を建設できるわけではないので、国立作業所では、登録した労働者に公共土木作業をさせて賃金を支払った。現実には、失業対策事業になってしまいました。失業者のあいだで、国立作業所に登録すれば仕事がもらえるという評判が広がり、登録者はどんどん増えた。3月には1500人、4月には6万6000人、5月には10万人にまで膨れ上がってしまった。10万人も労働者が集まても、そんなに仕事はないわけですが、政府は仕事がなくても登録者には、賃金を支払った。当然、これは政府の財政を圧迫した。6月、臨時政府は国立作業所の廃止を決定します。このころには、ルイ＝ブランは政府の中で完全に孤立していました。いよいよ臨時政府での中で、資本家が主導権を握ることがはっきりしてきました。

労働者の要求を切り捨てる臨時政府の方針に反対して、パリ民衆が武装蜂起を起こした。これを六月蜂起という。臨時政府は、軍隊を出動させて、徹底的にこれを鎮圧した。死者、逮捕者ともに1万人以上という。ルイ＝ブランはイギリスに亡命し、10時間労働制も廃止されてしまった。

労働者の政治的要求はつぶされましたか、フランスは、二月革命によって、貴族の時代が完全に終わりを告げ、産業資本家など中産市民階級を中心とする政治体制が定着していきます。

このあと、12月に大統領選挙がおこなわれ、臨時政府はその役割を終えました。この大統領選挙で当選した人物が、ルイ＝ナポレオン。名前を見てわかると思いますが、あのナポレオン1世の親族です。甥に当たる人物。この人の話は、またいずれしますが、ルイ＝ナポレオンは1848年12月に大統領に当選して以後、1870年までフランスを支配することになります。

----- 諸国民の春 -----

フランスで成功した二月革命は、ヨーロッパ各地の自由主義運動、民族主義運動を刺激し、革命運動の連鎖がはじまりました。これを「諸国民の春」という。

1848年3月、オーストリアのウィーンで民衆が蜂起。「ウィーン三月革命」です。ウィーン体制の大立て者メッテルニヒがロンドンに亡命して、ウィーン体制は崩壊。オーストリアの農奴制は廃止。

同じく、3月、プロイセンで「ベルリン三月革命」。プロイセン国王は、国民に憲法制定を約束し、自由主義内閣が成立しました。

オーストリアの支配下にあったハンガリーでは、コシュートら民族主義者の指導で独立運動が展開する。

同じく、オーストリア支配下のベーメンでは、チェク人が自治権獲得に成功。

ポーランドでも独立運動が活発化します。

イギリスでは、チャーチスト運動が盛り上がり、500万人分の署名を議会に提出した。

中世以来分裂状態がつづいていたイタリアでは、サルディニア王国がイタリア統一運動に乗り出します。

これとは別に、青年イタリアのマツィーニは、統一をめざしローマ共和国を樹立する。

同じく領邦に分裂していたドイツでも統一への気運が盛り上がり、各領邦の代表がフランクフルトに集まり国民議会を開いた（フランクフルト国民議会）。ここでは、ドイツの統一と憲法制定について討議されました。

こうしてみてみると、ヨーロッパじゅうで、自由主義、民族主義の運動で激動しているのがわかります。これが1848年。

ただ、フランスで労働者による六月蜂起が鎮圧されたのと歩調を合わせるように、各国の運動も徐々に後退していきました。

ハンガリーとポーランドの独立運動はロシアの出兵で失敗。

サルディニア王国のイタリア統一運動は、オーストリアの介入で失敗。ローマ共和国の試みもフランスの介入で失敗。

チャーチスト運動も、政府の圧力によって失敗。

フランクフルト国民議会も成果なく解散します。

失敗する運動もありますが、1848年の「諸国民の春」によって、ウィーン体制は過去のものとなったのです。

これらの運動の中で、フランクフルト国民議会について、すこし細かく見てみます。

ドイツでは、1815年、ウィーン会議によってドイツ連邦が結成されます。これは、統一国家ではなく、35の領邦国家と4つの都市による連邦で、事実上ドイツは分裂状態です。

当時、イギリス、フランスは、中央集権的な国家体制を作り上げて、政治経済両面で発展をしている。分裂状態のままでは、ますますドイツは遅れをとることは、わかりきっている。だから、ドイツ民族による統一ドイツを建設したいということは、多くのドイツの知識人の共通理解でした。ですから、1848年

3月、ドイツ各地で自由主義民族主義運動が盛り上がる中で、各領邦の代表がフランクフルトに集まり、統一についての議会が開かれたわけです。

グリム童話で有名なグリム兄弟の兄、ヤコブ＝グリムも、議員に選出されてフランクフルトに来ています。みなさんは、グリム童話をただの子供向けのお話と思っているかもしれないけれど、グリム兄弟には別の動機があったのです。グリム兄弟は、政治的には分裂しているけれどドイツ民族はひとつであるということを訴えたかったのです。だから、ドイツ各地の民話を集めて、民族の財産として出版した。かれらのこころざしは、ドイツじゅうが知っているから、グリム兄は議員になっている。ちなみに、かれらの本業は大学教授です。

さて、ドイツを統一するのに一番単純簡単な方法は、ドイツ連邦の中で有力な領邦の君主をドイツ皇帝に推戴して、そのもとにドイツをひとつにまとめることです。

統一ドイツの中心になることのできる候補の領邦国家が二つあった。ひとつがオーストリア。もうひとつがプロイセン。オーストリア中心の統一ドイツをめざすのが大ドイツ主義、プロイセン中心を小ドイツ主義といって、この二つがフランクフルト国民議会では対立した。

オーストリアは確かに大国で、ハプスブルグ家は、かつて神聖ローマ皇帝でもあった名門中の名門です。ただ、問題点がある。オーストリアの領土は広大で、ハンガリーやベーメンなど、ドイツ人以外の民族の住む地域も支配しています。これらの地域は、ドイツ連邦の領域には含まれていないです。オーストリアは多民族国家になっていて、ドイツ連邦に含まれている部分と、そうでない部分がある。だから、ドイツ民族国家を建設するには、オーストリアを中心にするには無理があった。

結局、小ドイツ主義が勝利して、フランクフルト国民議会は、プロイセン国王をドイツ皇帝に推戴した。ところが、プロイセン王は、これを断ったのです。自由主義者が集まった議会の推戴などで、皇帝にはなりたくない、というのです。皇帝になっても、国民議会の制約を受ける。そんな皇帝は、プロイセン王にとっては何の魅力もないわけです。

こうして、プロイセン国王に拒否され、フランクフルト国民議会は解散したのです。そして、プロイセンはこれから約20年後、軍事力によってドイツを統一することになります。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[世界の歴史\(22\)近代ヨーロッパの情熱と苦悩](#)

谷川 稔 他 著

結構広い時代をカバーしていますが、ウィーン体制以後のヨーロッパ全体の流れをつかむには適している。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第88回 産業革命](#)

[次のページへ](#)
[第90回 19世紀中頃のロシア](#)

世界史講義録

第90回 19世紀中頃のロシア

クリミア戦争

ロシアは、19世紀半ばになってもツァーリズムと呼ばれる皇帝の専制政治がつづき、自由主義思想は厳しく弾圧されていました。ウィーン体制崩壊後のヨーロッパの政治の流れから完全に取り残されているのですが、広大な領土と、強大な陸軍力でヨーロッパの国際関係の中で大きな位置を持ちつづけます。ロシアは18世紀中頃から、南下政策という外交戦略を立てています。ロシアは領土は広いが、内陸部が多く、わずかな海岸線は緯度が高い。冬になると港は皆凍ってしまうのです。海外貿易をすすめていくうえで、冬でも凍らない不凍港が是非とも欲しかった。そのため南へ南へと領土を拡大してきた。

ロシアの南にあるのがオスマン帝国です。16世紀の最盛期には、東地中海をとりまく大帝国としてヨーロッパ諸国に脅威をあたえていましたが、17世紀後半からじょじょに衰えています。19世紀にはいると、ギリシアが独立、エジプトも自立。そして、何度かの戦争で、ロシアに北方の領土を少しずつ削り取られていきます。

衰えかけているオスマン帝国をねらって、ロシアだけでなく、イギリスやフランスがこの地域に勢力を拡大する機会をうかがいはじめます。オスマン帝国をめぐるヨーロッパ列国の利権争いが、19世紀の国際紛争の焦点です。これを東方問題という。

さて、ロシアが不凍港を求めて南下政策をすすめながら、目標としたのが黒海です。地図で場所と形を確認して下さいね。オスマン帝国が元気なときは、黒海の周囲はすべてオスマン帝国領でしたが、18世紀末エカチェリーナ2世の時代に、黒海北岸のクリミア半島を獲得しました。黒海は冬でも凍りません。これで、不凍港を手に入れたわけですが、大きな問題があった。黒海にロシア船を浮かべることができても、地中海へ出なければ、どこにも行けません。ところが、黒海と地中海のあいだには、滅茶苦茶に狭い海峡が二カ所もある。ボスフォラス海峡とダーダネルス海峡です。必ず地図で確認すること。ボスフォラス海峡はオスマン帝国の首都イスタンブルに面する海です。重要な軍事的要所でもある。オスマン帝国にとって宿敵ロシアの船が、この海峡を通過するのに「はいはい、どうぞ」と通してくれるはずがないのです。

だから、次の段階として、ロシアはオスマン帝国から海峡の通航権を得なければならない。

ロシアは18世紀末以降もオスマン帝国と紛争を繰り返し、そのたびに両海峡の通航権をあたえられたり停止されたりしています。1829年以後、ロシアは商船の通航権を得て、小麦を大量に輸出するようになる。ただ、通航できるのは商船だけで、軍艦は許可されていませんでした。

ところが、1831年から33年までと、1839年から1840年の二回にわたってエジプト・トルコ戦争という戦争がおきて、この時にオスマン帝国は、ロシアに軍艦の通航を許可する。

エジプトはもともとオスマン帝国の領土ですが、ナポレオンのフランス軍に一時占領されたあと、総督のムハンマド＝アリーという人物が、オスマン帝国から事実上独立した。そして、さらに領土を拡大しようとしておこした戦争が、エジプト・トルコ戦争。

エジプトは、連戦連勝。しかも、そのバックにはフランスがついているのです。フランスは、エジプトを援助して利権を拡大しようという魂胆がある。

オスマン帝国は、これに対抗するため、ロシアに海峡の軍艦通航権をあたえて味方につけようとしたわけです。

エジプトが勝てばフランス、オスマン帝国が勝てばロシアが、この地域に勢力を拡大することになる。それをおそれたイギリスが、この戦争に介入してくる。当時イギリスが最強ですし、外交手腕も抜群でした。だから、最後はイギリス主導で戦争の決着がつけられた。

エジプトは占領した領土をオスマン帝国に返す。そのかわりムハンマド＝アリーの一族がエジプト総督の地位を世襲することを認められる。事実上のエジプト王国です。オスマン帝国に対しては、ロシアにあたえた海峡の軍艦通航権を取り消させました。結局、ロシアの南下政策はイギリスによって挫折したのです。

この間、1838年、イギリスはオスマン帝国と不平等条約を結んでいます。イギリスもオスマン帝国を狙っているのです。だから、南下政策をくわだてるロシアと利害が激しく対立するようになる。

1853年から56年にかけて、ロシアとイギリス、フランス、オスマン帝国のあいだでおきたのがクリミア戦争です。

戦争のきっかけは、フランスがオスマン帝国から聖地エルサレムの管理権を得たのに対抗して、ロシアがオスマン帝国に、オスマン帝国領土内のギリシア正教徒保護権を要求して、拒否されたこと。わかりにくいですね。

オスマン帝国は、現在のルーマニア、ブルガリア、セルビアなどがあるバルカン半島を支配していました。ここは、キリスト教のギリシア正教の信者が多数。そして、ロシアはギリシア正教徒の保護者であると自認しているので、保護権を要求した。そのことによって、バルカン半島に勢力を拡大しようとしているわけです。オスマン帝国としては、ロシアが自国の領土に干渉してくることは、当然拒否する。そこで、戦争となった。

すぐに、ロシアの南下を阻止したいイギリスとフランスが、オスマン帝国と同盟を結び、参戦します。また、イタリア半島の小国サルディニア王国も、英仏側にたって参戦しました。

主戦場が黒海に突き出たクリミア半島。そこで、クリミア戦争という名がつけられている。とくに、クリミア半島にあるロシアのセヴァストーポリ要塞の攻防戦は両軍ともに多数の死傷者を出した激戦として有名です。

この戦争は、産業革命によって工業化を進めつつあるイギリス・フランスと、遅れをとったロシアとの力の違いをはっきりと世界にしめしました。

ロシアは兵力100万。しかも戦場は、自国もしくはその周辺。英仏はあわせて兵力7万。しかも、本国から遠く離れた戦場です。これだけ見れば、ロシアが圧倒的に優勢なはずですが、ふたを開けてみればロシアは大苦戦して、1856年パリ条約で事実上敗北を認めた。

ハッキリ言って、ロシア軍の装備はナポレオン戦争の時からほとんど進歩がない。ロシア軍の大砲の着弾距離は、英仏軍の半分しかなかったといいます。技術力の違いです。さらに、ロシアは戦場に武器弾薬糧食、兵員を輸送するのに、荷馬車を使った。道路は舗装されていないので、雨でも降ると道はぬかるんで馬車はすすめない。思うように、戦場に物資が輸送できなかった。一方の英仏は、蒸気船で本国からどんどん物資を輸送する。さらに、港から戦場まで鉄道を敷設して前線に武器弾薬を運んだ。部隊の駐屯地には水道も設けた。工業力の違いがはっきりと出たのです。本国から遠い英仏軍の方が、輸送が円滑、兵士への補給は順調。

また、ロシア軍の一般兵士や輸送の人夫は、農奴が徵発されて嫌々やっている。戦争に勝とうが負けようがどうでもいい。早く終わって無事に家に帰りたいだけです。一方の英仏は、すでに市民社会が成立している。自分たちが払った税金でおこなわれている戦争の成り行きに注目している。イギリスの新聞社は、戦場に特派員を派遣して、毎日の戦況を報道しているくらいです。これは、世界初の従軍記者です。最新のニュースは、蒸気船や発明されて間もない電信で伝えられる。現代の報道の原型が、クリミア戦争ですでにあらわれているのですね。

イギリスのナイチンゲールが従軍看護婦として活躍して有名になったのも、この戦争です。ナイチンゲールは、新聞報道で激戦の様子を知り、負傷者の看護をしたいと考えたのです。仲間の看護婦を募って戦場に出かけて負傷者の看護に尽くしました。野戦病院の衛生状態を改善して、負傷者の死亡率を40%から2%に引き下げたという。劇的な改善ですね。

彼女の偉いところは、敵味方の区別なく、すべての負傷者の手当をしたこと。この人道的なおこないが、のちの1864年の国際赤十字の設立につながっていきます。もうひとつの功績は、看護婦の地位を高めたことです。看護婦というのは、ナイチンゲールが有名になるまでは下層階級の女性がおこなうどちらかというと卑しい仕事、召使いの仕事と見られていました。確かに、他人の血や膿に触れたりするし、下の世話も必要だし、伝染病がうつるかもしれないし、楽できれいで安全な仕事ではない。ところが、ナイチンゲールは、上流階級のお金持ちのお嬢さんだったにもかかわらず、この仕事に誇りを持って取り組んだ。彼女の活動が、看護婦を女性の仕事として価値あるものに高めたのです。

ちなみに、肖像画を見ると、ナイチンゲールは黒い服を着ていますね。彼女は黒衣の貴婦人。看護婦が白衣の天使になるのはもっと後のことのようです。（現在は看護師とよび、男女の区別をしませんが、今日のように女性の社会進出が一般的ではなかった時代には、働く女性の代表的な仕事でした。現在の視点から19世紀のナイチンゲールを看護師と表現するのはそぐわないと考えて、あえて看護婦としています）。

余談ついでに、もうひとつ。カーディガンという服がありますね。あれがつくられたのもクリミア戦争が原因です。前線で負傷した兵士がどんどん野戦病院に運ばれてきます。胸や腹に銃弾を受けている。治療のために服を脱がせなければならない。当時は防寒のためにセーターを着ていた。すっぽりと頭からかぶって着ますね。ところが治療のために、脱がせるためには万歳しなければならない。苦痛でもだえている負傷兵に万歳させてセーターを脱がせるのが一苦労だった。そこでカーディガン伯爵というイギリス軍人が、脱がなくても前を開けられるように発明したのがカーディガン。

ナイチンゲールにしろカーディガンにしろ、クリミア戦争がそれまでにない激しい戦争だったことのあらわれですね。ロシア軍は100万と言いましたが、そのうち52万が死亡したという数字もあるくらいで

す。

1856年、パリ条約で戦争は終結します。黒海の中立化によって、軍艦の航行は禁止され、ロシアの南下政策はまた挫折。ただ、ギリシア正教徒が多数を占めるルーマニアがオスマン帝国から独立し、ロシアの顔も少しあはたてられた。

ロシアの改革

クリミア戦争の敗北は、ロシアにとって大ショックでした。クリミア戦争を始めた皇帝ニコライ1世は、戦争中に亡くなっていますが、死因は薬の飲みすぎ。戦況を苦にして、事実上の自殺ではないかといわれています。ニコライ1世は、19歳の時にイギリスに旅行して議会を見学していますが、市民たちが議論しながら法律を決めていく様子を見て嫌悪感を抱いたという。そのイギリスに敗れたのだから、ショックが大きかったのでしょう。

ニコライ1世の跡を継いだのが、アレクサンドル2世。かれは、やはり考えざるを得ない。圧倒的な兵力と地理的優位にも関わらず「なぜ、ロシアは敗れたのか？」

答えは簡単で、イギリスとは政治経済制度が全然違う。イギリスは、すでに工業社会にはいっているのに、ロシアではまだ農奴制がつづいているのです。そこでアレクサンドル2世は自由主義的改革をはじめます。

ちなみに、クリミア戦争がはじまった1853年は、日本にペリーが来航した年です。黒船ショックで、幕末の争乱と明治維新がはじまるのと時期も状況もそっくりです。幕末の志士たちが「何とかしなくちゃ、日本は滅びる」と考えたのと同じように、アレクサンドル2世も「何とかしなくちゃ」と思ったわけです。

アレクサンドル2世の自由主義的改革の目玉が、1861年の農奴解放令。当時ロシアには2000万の農奴がいた。かれらが自由な市民となり、ロシア国民としての自覚をもつことでロシアは生まれ変わることができると皇帝は考えた。ところが、実際に農奴を支配している貴族たちは、本気で農奴を解放する気はありません。形だけの解放になる。身分は自由になっても、土地は貴族のものですから、結局変化はない。農奴時代の年貢よりも高い小作料を払わされて、かえって生活が苦しくなったりするのです。農奴解放といわれて期待していただけ、農民の失望と怒りは大きくて、農民一揆が続発します。1862年に884件、1863年には509件の農民蜂起が起きている。皇帝としては、せっかく自由を与えてやったのに農民どもは何をやっているのだ、と逆に農民に対する不信感が増す。

さらに、1863年には、アレクサンドル2世の自由主義的政策に刺激されてポーランドで独立反乱が起きます。これは、またもやロシア軍に鎮圧されて失敗するのですが、皇帝はこれらの経験を通じて、自由をあたえれば臣民たちは増長し、勝手な振る舞いをして、国を乱すだけである。こんな連中は、やはり上から押さえつけるしかない、と考えるようになってしまった。

キュリー夫人として知られているノーベル賞を取った女性科学者マリー＝キュリーは、この独立運動鎮圧

後のポーランドで少女時代をおくついて、伝記をみるとロシアの支配のようすがわかって面白いです。ポーランドの学校では、ロシア語で授業をさせられ、ポーランドの歴史など民族主義的な授業は禁止されていた。ところが、生徒も先生もポーランド人なので、ロシア人の監督官の目を盗んで、先生はポーランド語でポーランドの歴史を教える。監督官が学校にやってくるのが窓から見ると、先生はサッと黒板を消して、生徒は机の中からロシア語の教科書を出して、さも今までロシア語の勉強をしていましたという振りをするんです。監督官が教室に入ってくると、先生はマリーをあてる。小さい頃から賢かったから、あてられたマリーはロシア語でスラスラと答える。それを見て、監督官は満足そうにうなづいて、教室から出ていく。そんなことをやっていたそうです。そういう中で、ロシアへの反感と、独立への想いがいつそう強くなっていくのです。人の心は強制できない見本のような話です。

それはともかく、結局アレクサンドル2世は、自由主義的政策をやめて、180度方向転換。ツァーリズムとよばれる皇帝による専制政治を一層強化していきました。

しかし、西ヨーロッパの自由主義的政治体制を理想と考え、ツァーリズムに反対する知識人や学生が、当時のロシアにはある程度生まれていました。イギリスやフランスに留学して、ロシアの後進性を肌で感じている人が結構いるのです。こういう知識人のことをロシアではインテリゲンツィアという。略してインテリ。日本語になっていますね。

こういう反体制派のインテリたちが、政治改革をめざして1870年代から80年代にかけておこなったのがナロードニキ運動です。「ヴ=ナロード（人民の中へ）」というスローガンをかけたのでナロードニキ運動という。

これは、学生たちが農村へどんどん入っていって、政治意識の遅れた農民たちに啓蒙運動をしようという運動です。貧困で苦しむ農民の意識を変えなければ、ロシアは変わらないと考えたのですが、彼らの行動や考えは農民にはなかなか理解されなかった。

農民からすれば、いきなり都会の若者が村にやってきて政治宣伝を始める。「自分で働きもしない貴族か金持ちの坊ちゃんが何を言うとる」、という目でインテリたちを見るのは当然です。活動家たちは、「農民よ、めざめよ、立ち上がり、皇帝政治に反対せよ、革命だ！」と説いてまわる。普通の意識の農民たちからすると、ビックリするような危険なことを言っている。多くの農民たちは、皇帝に対しては素朴な敬愛の感情を持っていたそうですから、とんでもないことを言う怪しい連中だと思ったようです。

レーピンというロシアの画家に「ナロードニキの逮捕」という絵がある。これはナロードニキ運動の活動家が逮捕された瞬間を描いている。場所は農民の家の中。若い学生が、農民の家を訪問して、皇帝の専制政治を批判したのでしょうか。驚いた家の者が一人こっそり役所に知らせにいった。知らせを聞いて駆けつけた警察官に逮捕された所です。若者は拘束され、鞄の中の書類を調べられています。部屋の奥の暗いところにいるのが、この家の農民たち。暗くて表情はわかりませんが、若者に対して何の共感も抱いていないようですね。

政府によるナロードニキ運動に対する弾圧は激しく、逮捕された若者の多くがシベリアに流刑になった。農民の支持を得られなかつたナロードニキ運動は、80年代を過ぎると衰えていきます。そのなかで、一部の活動家は、テロリズムに走りました。まどろっこしい啓蒙活動よりも、直接的暴力でツェーリズムを倒そうと考えたわけだ。何度か、皇帝の暗殺未遂事件が企てられ、ついに1881年、アレクサンドル2世は、乗っていた馬車に爆弾を投げつけられて命を落としました。しかし、皇帝を暗殺しても、次の皇帝によって専制政治は引き継がれ、何の解決にもなりませんでした。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

エドワード・ラジンスキー (著), 望月 哲男 (翻訳), 久野 康彦 (翻訳)
日本放送出版協会 (2007/09)

ドストエフスキイの「カラマーゾフの兄弟」をようやく読了しました。高校時代から、何回も挑戦しつづけ、必ず上巻で挫折してきました。新しい翻訳で売れているというので、再挑戦したのでした。ただし、私が呼んだのは昔買った古い新潮文庫版。

社会の教師をやっているのだから、これくらい有名な本は教養として読んでおかなければと思いつつ、挫折がつづいたのは、とにかく、ドストエフスキイの饒舌さについて行けなかつたことがあります。

登場人物が、しゃべり始めると、せりふが最低3ページ分はつづく。読んでいるうちに、何についての話だったのかわからなくなってくる。しかも、話の内容が、キリスト教神学的なもので、不死とか、赦しとか、非キリスト教者にとっては、なんの関心もわからない。というか、おもしろくない。

ドストエフスキイは理屈をこねくり回して、論理で遊んで楽しい人です。一方、同じロシアの文豪のトルストイは、晩年キリスト教的立場から説話をたくさん書きましたが、ストーリーはどんどん単純化していきました。理屈をどんどん捨てていった。「イワンの馬鹿」など。私は、トルストイ派のようで、「戦争と平和」は何回も読みました。ボルコノンスキイとか、ベズウーホフとか、名前に慣れれば、すっと物語の中に入り込めました。

しかし、ドストエフスキイ。物語に入る前に、観念的な長セリフに、はじき飛ばされてきた30年でしたが、今年、とうとう「カラマーゾフの兄弟」読了です。はじめてわかったのですが、この本は、殺人事件の話だったのでした。犯人は誰か、という話なのですが、それは、読んでのお楽しみ。（多分、殺人事件の推理小説として読むと、文学の先生からは叱責されます）。

ところで、話のなかで、カラマーゾフの長兄が遺産相続で父親ともめているのですが、農奴付きで村を一つ丸ごと相続云々、というセリフが出てくる。農奴制ロシアが物語の背景にあります。主要登場人物も貴族か資産家の市民のようです。階級社会の上層部の人々の話です。

ドストエフスキイ自身は若い頃、ツァーリズムに反対する政治運動に係わり、逮捕され死刑判決を受けました。刑場に引き出され、あと數十分の命というところで、恩赦が出されるという劇的な体験をします。シベリアの流刑から帰り、作家として成功をおさめていた時の皇帝がアレクサンドル2世。この皇帝は、改革の意欲にあふれ、1861年農奴解放令で農奴制を廃止しましたが、その後、専制政治に回帰していきました。1881年、ナロードニキ運動の流れをくむ若者たちによるテロでアレクサンドル2世は暗殺されます。この犯人グループのアジトがあったアパートの同じ階の隣室に晩年のドストエフスキイが住んでいたのです。しかも、アレクサンドル2世暗殺の直後に、そのアパートで病死。ドストエフスキイが暗殺に係わっていなかったにしても、犯人グループの動きを知っていたのではないか。そのこと

アレクサンドル2世暗殺上
アレクサンドル2世暗殺下

が、死に至る発作を誘発したのではないか。

こんな刺激的な推理をしているのが、ラジンスキー『アレクサンドルII世暗殺（上・下）』（NHK出版、2007）。ドストエフスキーワークながらで思い出しました。皇帝の立場から描いたロシア史として興味深い本でした。

[世界の歴史\(22\)近代ヨーロッパの情熱と苦悩](#)

谷川稔 他 著

結構広い時代をカバーしていますが、ウィーン体制以後のヨーロッパ全体の流れをつかむには適している。

第90回 19世紀中頃のロシア おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第89回 二月革命](#)

[次のページへ
第91回 イタリア統一戦争](#)

世界史講義録

第91回 イタリアの統一

イタリアは、統一国家が形成されずに中世以来分裂状態がつづいていましたが、19世紀になると、イタリア人としての民族意識が高まり、統一運動が活発になっていました。

以前にも触ましたが、ウィーン体制時代には、カルボナリ党、マッツィーニの青年イタリア党が、独立・統一のための活動をしていました。独立というのは、どういうことかというと、イタリアの小国は神聖ローマ帝国時代以来ドイツの影響下に置かれていた。19世紀になっても、ハプスブルク家のオーストリアに従属している国が多かったのです。ヴェネツィアやミラノにはオーストリア軍が駐屯していて、反オーストリア的な政治運動ににらみをきかせている。自由主義的運動や統一運動が活発化すると、必ずオーストリア軍が出動して弾圧するというパターンがつづいていた。また、フランスもイタリアに大きな政治勢力が出現することを嫌って、イタリアに干渉することが多かった。

1848年の二月革命の時に、イタリア各地で独立・統一運動が盛り上がるのですが、この時もオーストリアとフランスの干渉で、すべての運動が失敗しています。ローマ共和国が成立したときは、フランスが軍隊を派遣してこれを潰して、以後ローマにはフランス軍が駐屯しました。

1849年以後、イタリア統一の中心となってくるのが、サルディニア王国です。この国は、フランスと国境を接する半島北西部とサルディニア島を領土に持つ。イタリアの中では比較的大きな国。ナポレオン1世時代にはフランスに支配されて封建的な古い制度はなくなっている。イタリアの中では、最も近代的な国でした。

1848年にはオーストリア軍と戦い、領土拡大をはかりましたが敗北。しかし、このころからサルディニア王国が中心となってイタリアを統一するのが一番現実的だと多くのイタリア人は考えていた。

1849年、サルディニア王国に新しい王が即位します。ヴィットーリオ＝エマヌエーレ2世という。かれは、自由主義的改革による近代化とイタリア統一をめざします。そのために首相に任命されたのがカヴールという人物。イギリスの議会を見学したことのある自由主義的立場の政治家です。

カヴールは、イタリアからオーストリア軍を排除しなければ統一は絶対に不可能だと考えました。それは、その通りです。しかし、サルディニア王国の軍事力ではオーストリア軍と戦って勝てる見込みはない。そこで、フランスを味方につけようと考えた。フランスと同盟を結べば、オーストリアに勝てます。そこでカヴールは、あの手この手の外交作戦でフランスに接近する。

フランスは1849年以降、ルイ＝ナポレオンが支配者です。はじめは大統領に当選するのですが、やがて皇帝に即位してナポレオン3世と名のっている。カヴールは、ナポレオン3世の好意を得るために、1853年のクリミア戦争に1万5千のサルディニア軍を派遣した。ナポレオン3世からすれば、サルディニアのような小さな国が援軍を出してくれて、ありがとうございます。気にもとめていなかった小国だが、なかなか見どころあるじゃないか、というわけ。当然イギリスもサルディニア王国に好意を持つ。クリミア戦争への参戦は、サルディニア王国にとっては大きな負担でしたが、イギリス・フランスの二大国に接近で

きたことは、大きな成果でした。カヴールは、クリミア半島での戦争がイタリア統一の第一歩だと激励して、兵士を送り出したそうです。

クリミア戦争で恩を売ったカヴールは、ついにナポレオン3世と同盟を結ぶ事に成功した。オーストリアと戦争した場合にフランスが援軍をおくことになった。交換条件として、サルディニアはフランス国境に近いサヴォイア、ニースという二つの地方をフランスに割譲するという条件付きですが。

こういう準備を進めた上で、1859年、サルディニア王国はイタリア統一戦争を開始しました。サルディニア軍は東隣のロンバルディアに攻め込みます。ここにはオーストリア軍が駐屯していて、さらに援軍もおこられてくるので、この戦争は、事実上オーストリアとの戦争です。オーストリア軍22万。対するサルディニア軍は7万、フランス軍は12万8000。フランスの援助がなかったら勝負にならないのがはっきりわかりますね。

サルディニア・フランス連合軍はオーストリア軍を破り、ロンバルディアはサルディニアに併合されます。これに呼応して、パルマ、モデナ、トスカナ各國で反オーストリアの反乱が起こります。これらの国々では、住民投票によって、サルディニア王国への編入が決まる。

トントン拍子に、統一がすすむのを見て、ナポレオン3世は、不安になった。こんなに簡単にサルディニア王国が、領土を拡大するとは思っていなかつたんですね。フランスの南にいきなり巨大な統一国家ができるのは得策ではない。そう考えたナポレオン3世は、オーストリアと単独で講和条約を結んでイタリアから撤退してしまった。フランスの援助がなければ、戦争は不可能です。ヴェネツィアをのぞく北部イタリアを併合しただけで、サルディニアの統一戦争は中断してしまった。

ここに登場するのがガリバルディ。青年イタリアのメンバーとして以前から統一運動で活躍していた人物です。この人が、全く個人的に義勇兵約1000人を集めて、2隻の船でサルディニアの港からシチリア島に向けて出発した。1860年5月6日のことです。イタリア半島の南部からローマに向かって進軍しイタリア統一を完成させるのが目的です。かれの部隊は、そのメンバーの数から千人隊、もしくはガリバルディのトレードマークである赤いシャツから赤シャツ隊とよばれています。

シチリア島はイタリア半島の南半分にあるナポリ王国の領土で、ちょうどこの時ナポリの支配に抵抗する農民反乱が起きていた。シチリアに上陸したガリバルディと千人隊は、農民たちの支援をうけてナポリ王国軍を追い払い、島を占領してしまった。その勢いで、対岸であるイタリア半島先端に上陸、半島を北上し、なんとナポリ王国を滅ぼしてしまった。ガリバルディは、さらに北上しローマ教皇領に攻め込もうとします。

イタリア半島の真ん中は、フランク王国のピピン以来ローマ教皇領となっていて、特殊な場所です。何しろ教会の領土なので、単純に武力で征服するわけにはいかない。ローマ教会の信者は、イタリア人だけでなく全ヨーロッパにいて、ローマに対しては特別な感情を持っているから、ここを武力征服してローマ教皇を敵に回せば、国際問題に発展しかねない。現に、1860年のこの時点では、フランス軍がローマに駐留している。だからサルディニア王国も、ここには手が出せなかった。教皇領の存在がイタリア統一大きな障害になっていたのです。

ガリバルディがローマに進軍して、フランス軍と戦闘になつたら困ると考えたのがカヴールです。フラン

スはイタリア統一戦争から手を引いていますが、ローマで武力衝突すれば、逆に統一をつぶす方向で軍事介入してくるかもしれない。

カヴァールは、サルディニア国王ヴィットリーオ＝エマヌエーレ2世自身に出陣を願い、サルディニア軍を率いてイタリア半島を南下します。ガリバルディを止めるためです。

10月26日、ヴィットリーオ＝エマヌエーレ2世は、ナポリの北にあるテアーノという場所までやってきてガリバルディと会見します。ガリバルディは、この直前におこなわれた住民投票で、ナポリ王国のサルディニア王国編入が決まつたことを王に報告し、自分が占領した土地を王に献上した。言ってみれば、ここでイタリア半島の統一がほぼ完成したわけです。だから、二人の会見は劇的なものとして、いくつかの絵に描かれています。二人が握手していたりする。

実際には、この場でガリバルディはローマ進撃の許可を得ようとするのですが、王はこれを禁止し、かれの義勇軍をサルディニア正規軍に編入してしまったので、ガリバルディにとっては失意の会見だったらしい。このあとガリバルディは政治の表舞台を去り、カプレラ島という小さな島で畑を耕しながら余生を送った。ヴィットリーオ＝エマヌエーレ2世にとっては、青年イタリア出身で民衆にものすごい人気のあるガリバルディは、危険人物に思えたようです。ああ、青年イタリアは基本的には共和政を目指していましたからね。

思いもかけないガリバルディの活躍で、ローマ教皇領とオーストリア支配下のヴェネツィアをのぞき、イタリアの大部分がサルディニア王国によって統一された。そこで、ヴィットリーオ＝エマヌエーレ2世は、1861年イタリア王国の成立を宣言し、初代イタリア国王に即位しました。イタリアという国家が生まれたのは、こんなに最近なんです。

このあと、ヴェネツィアは1866年、教皇領は1870年にイタリア王国の領土に編入された。1870年以降にローマがイタリアの首都となります。ただし、教皇領は完全になくなつたわけではなくて、小さいながらも現在もあります。ローマ市内のローマ教皇庁の建物がある場所がそれ。バチカン市国とよばれています。

イタリアの統一に話を戻すと、ヴェネツィア編入以後もオーストリアとの領土問題は残ります。これを「未回収のイタリア」という。オーストリア領のティロルとトリエステがイタリアの領土であるとして返還を要求しつづけたのです。この問題は第一次世界大戦まで持ち越されます。

政治的にイタリアは統一されましたが、長い間の分裂で北と南は経済的には大きな格差ができていきました。北イタリアは、工業が発展して豊か、南イタリアは農業中心で貧しい農村が多くなつた。統一後も格差は埋まらず、現在までつづく問題となっています。

南イタリア、とくにシチリア島からは、たくさんの貧しい農民が豊かな生活にあこがれてアメリカへ渡つた。アメリカ映画によく出てくるマフィアというのは、イタリア移民が多い。夢を持ってアメリカに来たが、すでにイギリス系アメリカ人が政治経済の主流であり、英語も満足に話せないイタリア移民は、アメリカ社会の底辺から出発しなければならなかつた。そんななかで同郷出身者同士で結束して、犯罪に走つたのがマフィアのもとだそうです。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[世界の歴史\(22\)近代ヨーロッパの情熱と苦悩](#)

谷川稔 他 著
結構広い時代をカバーしていますが、ウィーン体制以後のヨーロッパ全体の流れをつかむには適している。

第91回 イタリアの統一 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第90回 19世紀中頃のロシア](#)

[次のページへ](#)
[第92回 ドイツの統一](#)

世界史講義録

第92回 ドイツの統一

ドイツの統一

ドイツの統一について見てみましょう。

ドイツでは、ナポレオンによってつくられたライン同盟が、1815年ウィーン会議で解体されてドイツ連邦ができました。35君主国と4つの自由市によって構成されていて、統一国家としての実態はない。これに対して、民族主義の立場からひとつのドイツを求める学生や市民の運動が起きてくるのです。現実問題としても、35の国に分かれているのは非常に不便。

江戸時代の日本を想像してもらったらよいのですが、江戸時代の藩がそれぞれ別の国になっているのが当時のドイツと考えたらよい。徳川幕府はまがりなりにも中央政府としての役割を持っていましたが、ドイツ連邦には、徳川幕府に当たるような権力はない。それぞれの領邦は全く別の国。これは非常に不便なことで、経済的にはどんどんドイツはひとつに結びついてくるのに、たとえばミュンヘンからベルリンまで旅するだけで、いくつもの国境を通らなければならない。商品を運べば、国境を通過するたびに関税をとられる。

ドイツ経済が発展していくためには、ドイツの統一が是非とも必要なことは誰の目にも明らかでした。

そこで1833年、プロイセンが中心となってドイツ関税同盟が結成された。これに加わった国どうしで関税をなくし、自由貿易による経済発展をめざしたものです。

プロイセンは国が二つの地域に分かれている。ベルリン含む東の領土と、ライン川ぞいの西の領土があって、その中間には別の国があるわけ。だから、プロイセンを行き来するのに、他国を通らなくてはならなかつたわけで、関税同盟を必要としたのはよくわかる。また、プロイセンはドイツ連邦の中ではオーストリアにつぐ第二の大国で、他の小国を従わせるだけの実力があったので、いつか自国が中心となってドイツを統一したいと考えていた。だから、1848年二月革命の時に、フランクフルト国民議会によるドイツ皇帝推戴を拒否したのでした。

さて、イタリア王国が成立したのと同じ1861年に、新しいプロイセン国王が即位した。ヴィルヘルム1世です。この人は、いよいよドイツ統一に乗り出します。サルディニアのヴィットーリオ=エマヌエーレ2世がカヴァールを首相にしたのと同じように、ヴィルヘルム1世が、ドイツ統一のために首相に任命したのがビスマスク。19世紀後半のヨーロッパを代表する大政治家となる人物。

ビスマルクがドイツ統一のためにとった有名な政策が「鉄血政策」。鉄は兵器、血は兵士をあらわす。要するに、軍事力を強化して、征服によってドイツを統一するぞと宣言した。そして、着々と軍備を整えていきます。

プロイセンが武力によるドイツ統一を考えるとき、障害になるのがオーストリアです。オーストリアはドイツ連邦を構成する最大の国でありながら、オーストリア帝国として、ハンガリー、ベーメンなど他民族も支配している大国。しかも、それらの地域を切り離すことはないと宣言している。だから、ドイツを統一するためにはオーストリアを排除しなければならない。オーストリアと戦って勝利できなければ、ドイツ統一は不可能です。

プロイセンは軍備を増強しているが、それでもオーストリアに勝てるかどうかは、ビスマルクにとって心配だった。そんなことをビスマルクが思い悩んでいる時、1864年に、ドイツ連邦とデンマークのあいだで領土紛争が起こります。ユトレヒト半島の付け根の場所にあるシュレスヴィヒ・ホルシュタインという地方の帰属をめぐってデンマークとドイツ連邦諸国が戦争をした。デンマーク戦争という。

この戦争がおこると、ビスマルクはオーストリアを誘って共同出兵した。デンマークからシュレスヴィヒ・ホルシュタインを奪ってプロイセンとオーストリアで分けようじゃないかというのです。両国が協力すればデンマークは敵ではない。オーストリアは、喜んで誘いにのって出兵した。戦争に勝利して、シュレスヴィヒはプロイセンが、ホルシュタインはオーストリアが獲得した。

ビスマルクがすごいのが、デンマーク戦争でオーストリアを誘った真の目的です。ビスマルクにとって、ドイツ統一のためにオーストリアと将来戦うのは確実。しかし、その前にオーストリア軍の実力を知っておきたかったのです。戦争は博打ではない。勝てるかどうかわからないけど、行ってしまえ！では、首相として失格でしょう。勝利を確実にするために、プロイセンは敵を知りたかった。共同作戦で戦争をすれば、手に取るようにオーストリア軍の内部事情がわかるのです。装備、指揮系統、指揮官の能力、兵士の士気、こういうことがみんなわかる。そのための共同出兵でした。オーストリアは、そんなことには気づかずに、領土を拡大して喜んでいる。その間に、ビスマルクはオーストリア軍の実態をしっかり研究した。装備から用兵までナポレオン戦争時代からほとんど進歩していない。これなら勝てると踏んだ。

そして1866年、オーストリアと戦争に踏み切ります。これが普墺戦争。普はプロイセン、墺はオーストリアのことです。わずか7週間で勝負がついた。プロイセンの圧勝でした。

この戦争で、プロイセン軍は実戦ではじめて後装式ライフル銃を使っています。弾丸を銃の後ろから装填する銃です。後装式だと、腹ばいになったまま弾丸を装填できるので、攻撃には有利です。後装式ライフル銃の存在は、ヨーロッパ各国に知られているのですが、実戦に使えるか疑問視されていて、どの国も取り入れていなかった。プロイセンだけが、正式に軍隊に採用していました。一方、オーストリア軍は先込め式を使っていて、これは火縄銃と同じで、銃の先から弾丸を詰める。

新しい武器をどんどん取り入れるのがプロイセン軍の強さのもと。鉄道や電信などもフル活用して戦争にあたりました。単なる軍事力の違いというより、工業力や国の姿勢が根本的にちがっていたのです。

勝利ののち、プロイセンはドイツ連邦を解体して、翌1867年、オーストリアを排除して北ドイツ連邦を結成しました。

この北ドイツ連邦は、22の領邦が参加した連邦ですが、事実上プロイセンが支配します。ただ、オーストリアに近い立場をとる南ドイツのいくつかの領邦はこれに加わっていませんから、まだ完全なドイツ統一とは言えない。また、北ドイツ連邦も連邦国家ですから、各領邦国家はまだ残っていて、軍事的な圧力で統一をすすめるプロイセンのやり方に納得しているわけではない。北ドイツ連邦の中は、まだバラバラなわけです。

北ドイツ連邦の中味を一体感のあるものにまとめ上げ、ついでに北ドイツ連邦にまだ参加していない南ド

イツの領邦を取り込むために、ビスマルクはもう一度戦争をやろうと考えた。より強大な外部の敵と戦うことによって、ばらばらな内部をまとめようという考えです。そして、ちょうど手頃な相手がすぐ隣にいました。フランスです。

フランスは、ナポレオン3世の統治下です。ビスマルクはフランスと戦争をする口実を作るために、ナポレオン3世を怒らせて外交関係をわざとこじらせる。ビスマルクは、国王の電報の改竄までして、ドイツじゅうにフランスに対する敵愾心をあおりります。ついにナポレオン3世は、ビスマルクの挑発に乗ってしまって、1870年、フランスとドイツの戦争が始まります。ドイツとの戦争なのですが、実質的にドイツの中心はプロイセンなので、この戦争を普仏戦争といっています。

戦争が始まると、バイエルンなど北ドイツ連邦に参加していない領邦もドイツ=プロイセン軍とともに戦争に参加しました。ビスマルクの思うつばです。

戦争そのものは、ドイツ軍の連戦連勝でフランス領内に攻め込みます。焦ったナポレオン3世は、おじさんの真似をして、自ら指揮を執るために前線に出かけた。でも、ナポレオン3世には、将軍としての経験もカリスマもありません。セダンという場所で、ドイツ軍に包囲されて、8万のフランス軍とともに降伏して、捕虜になってしまった。皇帝自身が捕虜になってしまったのですから、もうフランス軍はなすすべがない。そのまま、ドイツ軍は進軍をつづけてパリを包囲した。

1871年1月、ナポレオン3世が捕虜になったあとパリで成立したフランスの臨時政府は、ドイツに降伏し、普仏戦争は終結。

わずか半年間の戦争でしたが、この戦争でドイツはプロイセンを中心にがっちり団結し、1871年1月、ドイツ帝国の成立が宣言されました。プロイセン国王ヴィルヘルム1世が、初代ドイツ皇帝に即位したわけですが、その戴冠式がおこなわれたのが、ヴェルサイユ宮殿です。ヴェルサイユはフランス・ブルボン朝の栄光の宮殿。わざわざ、伝統あるフランスの宮殿で戴冠式をやるというのは、フランス人にとってはこの上のない侮辱ですね。だいたい、即位式をおこなったときは、ドイツ軍はまだパリ包囲中で、戦争がつづいているのです。まさしく、ドイツ帝国は戦場から生まれたのです。これは、ビスマルクの描いたシナリオ通りの展開でしょう。

この戴冠式の絵は有名で、資料集にも載っていますね。左側の壇上に立っているのがヴィルヘルム1世。右側に白い服を着て目立っているのが帝国宰相になったビスマルク。臣下でありながら、絵全体の中心にいる。かれの果たした役割と立場を象徴していますね。

ドイツは、戦争には勝ったがフランスを支配し統治するつもりははじめからありません。あくまで、戦争を通じてドイツ統一を完成することが目的。だから、講和条約を結び、戦後処理が片づくと、フランスから撤退しました。

講和条約で、ドイツはフランスから多額の賠償金と、アルザス・ロレーヌという二つの地方を獲得しています。アルザス・ロレーヌを奪われたことは、フランスのドイツに対する深い恨みの元となり、この地方の帰属問題は第二次大戦まで尾を引くことになるので注意しておいてください。

ドイツ帝国の性格を簡単に見ておきます。

政治制度は立憲君主制。皇帝の権限は大きく、それに較べて、議会の権限はあまり大きくはない。

連邦制は維持されて、各領邦はまだ残されています。連邦制の伝統は根強く、現在でもドイツの正式名

称はドイツ「連邦」共和国といい、かつての領邦である州の権限が強いようです。

帝国政府の要職は、ウンカー身分の者が占めました。ウンカーというのは、プロイセンの地主貴族です。

ビスマルクもウンカー出身。かれらがドイツ帝国を事実上仕切っている。

オーストリアは、ドイツ帝国からははずされて、まったく別の国家になります。今でもオーストリアはドイツとは別の国ですね。でも、オーストリア人というのはドイツ民族で言語もドイツ語です。もしもの話ですが、普墺戦争でオーストリアが勝っていれば、ウィーンがドイツの首都で、ドイツとは別にプロイセンという国が現在あったかもしれない。そういう意味で、1860年代は、ドイツという国民国家がどういう形で作られていくかという分かれ道の時代だったのです。

ちなみに1860年代は、ドイツだけではなく、いくつかの国でも大きな転換期です。

1861年には、自由主義的改革をめざすロシアで農奴解放令がでる。

同じ1861年に、イタリアが統一されイタリア王国が成立。

また、アメリカ合衆国で南北戦争が始まるのも1861年。

日本で徳川幕府が倒れ明治政府が成立したのが1868年。

そして1871年にドイツ帝国成立。

この時期に近代的な国家づくりをはじめたかどうかが、のちの運命を分けるようです。1860年代に、中央集権的近代国家をめざした国は、やがて帝国主義国として他国に勢力を伸ばし、それに遅れた国や地域は植民地か半植民地になってしまふ。日本の明治維新は、ぎりぎりセーフで、間に合ったわけです。

明治新政府は、国づくりの参考にするために、さかんに欧米の制度を吸収します。明治憲法を制定するのに、伊藤博文が一番参考にしたのがドイツです。国家建設の時期もほとんど同じだし、封建的な分裂状態から中央集権国家をつくりあげるという状況もそっくりなので、参考にしたのは当然。伊藤はヨーロッパ各国の制度を調査するのですが、イギリスは議会政治が成熟していて一から始める日本の参考にならない、フランスは人民の力が強く革命ばかり起こしているのでモデルにするのは危険だと考えた。一方ドイツは、状況も似ているし皇帝の権限が強い立憲君主制なので、天皇を中心とする国家を考えていた伊藤の構想にピッタリ合ったのでしょうか。

伊藤はビスマルクにも会っていて、このヨーロッパを代表する大政治家にかなり影響されたようです。日本のビスマルクになろうと思っていたのではないかな。

伊藤が中心になって作った憲法は1889年、大日本帝国憲法として発布されるのですが、和田英作という人がその式典の絵を書いています。これは、日本史の資料集などによくのっているのですが、ドイツ皇帝戴冠式の絵と構図がそっくりなんです。真似ていると思いますね。

統一後のビスマルクの課題は、ドイツ帝国の内政の整備です。

これは、3つだけ覚えておけばいい。文化闘争、社会主義鎮圧法、社会政策の3つです。

文化闘争は、1871年から80年までつづくビスマルクによるカトリック勢力への弾圧のことをいう。南ドイツに多いカトリック教徒が中央党という政党を結成して、ビスマルクの政策に抵抗したのが原因。

社会主義鎮圧法。1878年に制定された。社会主義運動や労働運動を弾圧する法律で、ドイツ社会主義労働者党という社会主義政党が勢力を伸ばしてきたのに対して作られた。

社会政策は、労働者など民衆の不満をやわらげるためにおこなわれた政策。具体的には、災害保険、疾病保険、養老保険などを実施しました。社会主義鎮圧法がムチとすれば、こちらはアメです。

統一以後のドイツは急速に工業化がすすみ、イギリス、フランスにつづく大国に成長していきました。

オーストリアの動向

1866年の普墺戦争で敗北したオーストリアは、北ドイツ連邦から排除され、翌1867年にオーストリア＝ハンガリー帝国として国を再編成します。

ハンガリーに住むマジャール人は、以前からオーストリアからの独立を求めていた。このマジャール人の要求を受け入れる形で、オーストリアはマジャール人の自治を認めハンガリー王国が成立します。ただし、ハンガリー国王はオーストリア皇帝が兼ねる。なんだか、ごまかしのようですが、これでハンガリーはオーストリアと対等の国となった。そして、国名がオーストリア＝ハンガリー帝国となりました。一人の国王に統治される二つの王国の集合体です。

オーストリア支配下には、現在のチェコやスロヴァキアなどスラブ系民族が住む地域がたくさんあった。これらのスラブ系住民が、「なんでマジャール人だけやねん」と思うのは当然で、これ以後、スラブ系民族の自治権要求が活発化します。スラブ系民族は、オスマン帝国にも多く住んでいて、国境を越えてスラブ人どうしの連帯意識、政治意識が高まってきました。これを、パン＝スラブ主義という。

スラブ人の国であるロシアが、このパン＝スラブ主義を利用して、自国の影響力をオーストリアやオスマン帝国に強めようと考えるのは、南下政策からして当然の成り行き。このパン＝スラブ主義がやがてヨーロッパ政治の重大問題に発展していくことになりますから、注意しておいて下さい。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[世界の歴史\(22\)近代ヨーロッパの情熱と苦悩](#)

谷川稔 他 著
結構広い時代をカバーしていますが、ウィーン体制以後のヨーロッパ全体の流れをつかむには適している。

第92回 ドイツの統一 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第91回 イタリアの統一](#)

[次のページへ](#)
[第93回 ナポレオン3世のフランス](#)

世界史講義録

第93回 ナポレオン3世のフランス

フランスです。1848年、二月革命で七月王政が倒れて臨時政府が成立した話までしました。1848年の12月、大統領選挙で当選したのがナポレオン1世の甥、ルイ＝ナポレオン。これも話した。さて、ルイ＝ナポレオンですが、ナポレオンの弟の子供です。大統領選挙に出馬するまでは何をやっていたかというと、七月王政時代に陰謀事件を二回くわだてて、ともに失敗。その後は、イギリスで亡命生活を送っていた。叔父さんの栄光にあこがれて、政治的に山ッ気の多い人だったようです。二月革命が起きるとフランスに帰って大統領選挙に出た。

ルイ＝ナポレオンがどんな政治的な信条を持っているのか、どんな政治家なのか、ほとんど知られていなかった。でも、かれが立候補すると、その名前だけで当選してしまったんですね。ナポレオン1世の戦争で多くのフランス人が命を落とした。1世が没落するときは、ほとんどのフランス人がそっぽを向いていました。だけれども、1世の時代からすでに30年以上たっている。戦争で家族を亡くしてつらかった思いも薄れているんですね。ナポレオン1世時代にフランスがヨーロッパ全体に号令した栄光の記憶だけが呼び覚ました。叔父の名声だけがルイ＝ナポレオンが当選した理由です。当選したとき40歳です。

さて、ルイ＝ナポレオンは実にあっけなく当選したのですが、政治家としてはけっこうしたたか。自分が当選した理由も充分わかっている。人気だけが頼りです。逆に言うと、支持基盤があるわけではないから、しがらみなしにいろんな政策を実行できるとも言える。あまり後世の評価は高いとは言えませんが、結局20年以上も権力の座にあったことを思うと、したたかで有能な政治家だったと思います。

1852年には、叔父さんと同じように国民投票によって皇帝に即位した。皇帝としての名前がナポレオン3世。2世がいるのか、という話ですが、少年時代に死んでしまったナポレオン1世と、ハプスブルク家のマリー＝ルイーズとのあいだに生まれた男の子がナポレオン2世です。

政策は、国内のあらゆる階層から人気を得るために八方美人的です。

資本家のためにには、国内産業の育成に力を入れる。ルイ＝ナポレオンの時代に、フランスの製鉄、紡績工業は大きく発展しました。また、その成果を世界に誇示するために1855年と1867年の二回、万国博覧会をパリで開催します。

労働者、農民むけには公共慈善事業や社会政策をすすめた。病院や孤児院をつくった。

首都パリを大改造したのも有名。現在のパリの街並みはナポレオン3世によってつくられたものです。それまでのパリは細い路地が入り組んだ迷路のような町で、上下水道も整えられず衛生状態も悪かった。なによりも市民が路地にバリケードを築いて、政府軍を寄せつけず、革命や反乱を起こしやすかつたのをなんとかしたかったようです。

しかし、ナポレオン3世にとって、なにより肝心なことは、フランスの栄光を常に国民に意識させること。これが人気の元ですから。

万博の開催もその一つですが、一番手っ取り早いのは叔父のナポレオン1世と同様に戦争で勝利することです。ただし、ルイ＝ナポレオンは戦争の指揮をするわけではない。そういう能力はかれにはありません。世界の政治情勢をうかがって、チャンスと見れば、つまり勝てそうな戦争があれば軍隊を送り込む。具体的には、ロシアと戦ったクリミア戦争(1853～56)。

中国清朝と戦ったアロー戦争(1856～60)。この二つともイギリスと連合軍をつくっています。

インドシナ出兵(1858)。これはベトナムを侵略した戦争。

イタリア統一戦争(1859)。サルディニア王国を助けた戦争ですね。

メキシコ侵略戦争(1861～67)。これはメキシコの内政に干渉して、自分の傀儡をメキシコ皇帝にしようとしておこなった戦争ですが、これで失敗してルイ＝ナポレオンの威信が低下する。

さらにプロイセンのビスマルクに挑発されて1870年普仏戦争をおこなうのですが、この時に戦場に出向いた結果、逆に捕虜になって退位させられた。この話は前回しました。

ロシアといい、中国といい、ベトナムといい、誰が見てもフランスよりは弱い。しかもイギリスとの共同作戦ならば勝って当たり前。ようするに後進国をあいてに勝利して点数を稼いでいたわけです。

当時イギリスもフランスもアジアに勢力を拡大しようとしているときです。清朝が衰えかけているときなので、ちょっとした外交上の不備を突いて、戦争をふっかけて、相手に不平等条約を結ばせる。アロー号戦争はそういう戦争のひとつです。

この時期の日本にも、イギリス、フランスともにやってきます。黒船による開国、不平等条約の締結、尊皇攘夷運動や討幕運動など騒然としている時期です。英仏とも中国に力を注いでいるので、日本を武力占領するとかそういうことは考えていなかったようですが、日本の混乱を利用して勢力を拡大しようとしている。

幕末の情勢の中で、イギリスは薩摩と長州が将来の日本を担う勢力だと考えて、軍艦や銃器を売っていく。これと反対に、フランスは徳川幕府との関係を強めて、日本に利権を得ようとします。だから、幕府とフランスは仲がいい。ルイ＝ナポレオンは徳川慶喜に、贈り物をしていて、慶喜がルイ＝ナポレオンに贈られたフランスの軍服を着ている写真が残っていますね。幕府軍の近代化のためにフランスから軍事顧問団を招いてフランス式の軍事教練をしたり、先ほど話した1867年のパリ万博には徳川幕府も茶店のパビリオンを出している。特に世界に誇る工業製品もないので茶店を建てて着物姿の芸者さんが来館者にお茶を出したそうです。ヨーロッパ人からすると珍無類なエキゾチックさで結構人気があったという話。戊辰戦争の時勘定奉行だった小栗上野介は、慶喜にフランスから資金、武器、軍隊までも借りれるものほどんどん借りて、徹底的に薩長と戦うことを訴えた。慶喜に全然抵抗する気がなかったので、すんなり幕府は倒れましたが、もしフランスの援助で戦争をつづけていたらどうなったか。幕府が勝っても、日本はフランスの借金漬けになって、フランスの言うことを聞かざるを得ない半植民地になっていたことはほぼ確実。だいたい、イギリスやフランスは他国の内乱につけ込んで侵略するパターンが多い。まさに、幕末日本もそうなる瀬戸際だったわけだ。これは噂ですが小栗上野介は、フランスの援助と引き換えに日本の領土の一部を割譲すると提案していたという話もある。

結局、幕府は倒れて薩長主体で明治政府がつくられましたから、フランスは日本に大きな足がかりを作れませんでしたが、ひょっとしたらナポレオン3世によるフランスの栄光のなかに日本占領が加えられてい

たかもしれないかったです。

ちなみに、ペリーを派遣して日本を開国させたアメリカ合衆国は、南北戦争という内乱が起きてしまつて、日本にかまっている余裕はなくなっていました。

話を戻しましょう。

ナポレオン3世が、セダンの戦いで捕虜になり退位したあと、1870年9月フランス臨時政府が成立します。政府首班はティエール。首班というのはリーダーもしくは代表者と考えて下さい。

怒濤の勢いで進撃してくるドイツ＝プロイセン軍に勝てる見込みはないと判断した臨時政府は、翌1871年2月にドイツと仮講和を結んで降伏しました。ドイツ皇帝の戴冠式がヴェルサイユ宮殿でおこなわれたのがこの前月1月でしたね。

これで話が終われば簡単なのですが、この直後にヨーロッパ中が注目する大事件が発生した。それがパリ＝コミューンです。

パリの市民たちは、臨時政府が降伏したのが気にくわない。ヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝の戴冠式をするような屈辱が我慢できない。アルザス・ロレーヌの割譲も50億フランの賠償金も講和の条件のすべてが屈辱。俺たちフランスはもっと戦える。そう考えたパリ市民が1871年3月、臨時政府に反乱を起こしたのです。パリ市民はパリに新たに政府を作った。これがパリ＝コミューンです。ティエールをはじめとする臨時政府はパリから脱出しヴェルサイユに遷った。

だから、これでフランスに二つの政府ができてしまった。臨時政府とパリ＝コミューン。パリ＝コミューンは労働者の政府で政策も急進的、選出された議員には社会主義者が多く、政府の機構や政策から、史上初の社会主義政権という評価もある。政府といっても、パリの町を支配しているだけですが、人口160万のフランスの首都です。

ドイツは臨時政府に「どないすんねん」と圧力をかける。対ドイツ徹底抗戦を叫ぶパリ＝コミューンに対して臨時政府はどう対処するのですか、ということです。臨時政府としてはパリ＝コミューンを鎮圧するしかないが、兵力がない。そこでドイツ軍の捕虜になっていたフランス兵を返してもらって、13万の兵力でパリを包囲し、5月にはパリに突入、パリを守るコミューンの兵士、ということはつまりパリ市民なのですが、との市街戦になってしまった。同じフランス人同士の戦いです。さらに、市街戦がおこなわれているパリの周囲にはドイツ軍が陣取り、戦いの成り行きを見ているという状況です。

結局、装備で勝る臨時政府側がパリ＝コミューンを鎮圧してパリ＝コミューンは崩壊しました。コミューン側の死者3万。何とも後味の悪い結末です。

この後、臨時政府はドイツと正式な講和条約を結び、ドイツ軍はフランスから撤兵していきました。

わずか72日間で潰れてしまったのですが、パリ＝コミューンは当時ヨーロッパですごく注目を集めた。それは、この政府が、労働者によってつくられたからです。労働者と反対の立場の人も含めて、この政府がどうなるか固唾をのんで見守っている感じです。

崩壊後も、社会主義を実現させたものとして、多くの政治学者の研究対象になっています。以前に紹介したマルクスなどはパリ＝コミューンを高く評価していることで有名。

パリ＝コミューンを鎮圧した臨時政府ですが、この後ティエールが大統領となり政治を運営します。しかし王党派と共和派の対立などがつづき、1875年ようやく新しい憲法が制定された。これを第三共和国

憲法といいます。ナポレオン3世退位後のフランスの政体は共和政。フランス史上三回目の共和政なので第三共和政。だから憲法も第三共和国憲法。

第三共和国発足後のフランス政局は、小党分立状態がつづき安定しない。クーデタ事件も起きる。しかし、一方では海外に植民地を獲得し資本主義はますます発展していきました。結局第三共和政は、1940年、第二次世界大戦でドイツに敗れるまでつづくことになります。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[世界の歴史\(22\)近代ヨーロッパの情熱と苦悩](#)

谷川 稔 他 著

結構広い時代をカバーしていますが、ウィーン体制以後のヨーロッパ全体の流れをつかむには適している。

第93回 ナポレオン3世のフランス おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第92回 ドイツの統一](#)

[次のページへ](#)
[第94回 19世紀後半のイギリス](#)

世界史講義録

第94回 19世紀後半のイギリス

ヴィクトリア時代のイギリス

イギリスが19世紀前半から自由主義的改革をおこなった話は既にしました。議会を通じて徐々に改革を進めていくのがイギリス政治の特徴になっています。何しろ、17世紀にピューリタン革命とクロムウェルの独裁、名誉革命という大変革を経験済み。フランスに当てはめれば、ピューリタン革命はフランス革命、クロムウェルの独裁はナポレオンの第一帝政、名誉革命は二月革命になぞらえることができる。そう考えれば、イギリスはフランスよりも100年以上先をいっているわけで、ヨーロッパ諸国が革命運動や統一運動で激動している19世紀は、イギリスにとっては安定と発展の時代でした。

そのイギリスの繁栄を象徴するのがヴィクトリア女王です。1837年に18歳で即位して、1901年まで在位した。彼女の在位期間は、まさにイギリスの繁栄の時代だった。

即位したときの肖像画があります。ぽっちゃりとして可愛いですね。もう一枚の肖像画は、晩年のものです。当たり前ですが、おばあさんになっちゃってます。こんなに変わってしまうんですね。年をとっただけではなくて、おばあさんのヴィクトリアはうつろな目をしている。ぼうっとしてるでしょ。そして、真っ黒い服を着ている。これは喪服です。ヴィクトリア女王は21歳の時に、ドイツ出身のいとこのアルバートと結婚する。二人は本当に愛し合っていて、9人も子供を作ります。このあたりはエリザベス1世とは全然違う。アルバートは何の肩書きもなく、女王の夫にすぎないのですが、ヴィクトリアのよき相談相手だったそうです。ところが1861年、42歳の時にアルバートが病気で死んでしまう。ヴィクトリアは、それ以来ずっと悲しみに沈んで、いつも喪服を着て悲しい顔をしていた。一時は、完全に引きこもってしまって女王の職務さえ果たさなかった時期もあったようです。

それはともかく、おしどり夫婦とたくさんの子供たちという女王一家の暮らしぶりが、理想の家族の典型として、イギリス人のモデルになった。そういう意味でも、イギリスの繁栄を象徴する女王です。

ナポレオン3世がパリで万博を開いた話をしましたが、第一回万国博覧会が開かれたのが1851年ロンドンです。最大の呼び物がクリスタルパレス。これは、鉄骨とガラスで建設した大パビリオンで、建設地に生えていたニレの巨木を伐採せずにそのままクリスタルパレスの中に入れてしまった。ガラスでできた建物ですから、太陽光線はあたるので木は枯れないわけ。こんな建築物さえ出来るというイギリスの工業技術力を世界に見せつけたのです。クリスタルパレスの中には、ニレの木が生えているだけではなくて、産業革命でつくられたさまざまな工業製品が展示されていた。

このロンドン万博の開会式で、ヴィクトリア女王は「わが生涯で最も光栄ある日のひとつ」とスピーチをした。まさしくその通りでしょう。

5ヶ月間の開催期間中の延べ入場者は600万人。トマス=クックという人が団体割引で入場者を集め

旅行代理店業をしたのも有名。

イギリス国王は「君臨すれども統治せず」が原則ですから、ヴィクトリア女王が、直接政治運営にタッチしていたわけではない。19世紀後半のイギリスを動かした二人の政治家がとりわけ有名。

自由党のグラッドストンと保守党のディズレーリです。この二人は、政権交代で交互に首相となった。

グラッドストンは自由主義的政策をおしそうめたことで有名。敬虔なクリスチャンでキリスト教的人道主義の立場から戦争をあまり好まなかった。ディズレーリは逆に、帝国主義的な政策を進めた人で、侵略戦争に積極的。アジア・アフリカで植民地を拡大していきます。ディズレーリは、おじいさんの代にイタリアからイギリスに渡ってきたユダヤ系の人物。こういう出身でも首相になれるということを考えると、日本人とヨーロッパ人では国籍とか民族というものの感覚が違うような気がします。ディズレーリは、いつも原色のけばけばしい服に、レースの縁取りをあしらい、香水のにおいをブンブンさせていて、かなり奇抜な感じだったらしい。グラッドストンのほうはイギリス人がイメージする予言者のような風貌で、ディズレーリとは正反対の雰囲気の持ち主で国民には人気があった。

ヴィクトリア女王は、ディズレーリがお気に入りだったという。夫アルバートと死別して、引きこもっていた女王をなだめすかしご機嫌をとって、公式の場に出てくるようにしたのはディズレーリでした。

政党も個性も違うグラッドストンとディズレーリが、交互に政権交代をしたということは、時代や状況の変化に応じて柔軟に政策を転換していったということです。教科書にある「議会政治の定着」とは、こういうこと。

この時代のイギリスの政治の特徴をいくつかみておきます。

選挙権の拡大。19世紀後半に進展します。

1867年、第二次選挙法改正。都市労働者に選挙権があたえられ、有権者数は106万人から200万人に増加。

1884年には、第三次選挙法改正。農業労働者と鉱山労働者に選挙権付与。有権者数は440万人となりました。

選挙というと、投票用紙に名前を書いて投票箱に入れる。誰に投票したかは他人にわからないようとする秘密投票が今では当たり前ですが、1872年までは、イギリスでも秘密投票ではなかった。有権者はひとりひとり役人の前で、「わたしは誰々さんに投票します」と順番に言っていました。ビックリしますね。選挙権を持っているのが一握りの大金持ちの地主ばかりだった時代は、みんな仲間同士、クラブのようなもので、秘密にする必要もなかったのでしょうか、有権者が増えて労働者や農民も参加すれば、当然利害の対立も激しくなる。圧力もかかる。公正な選挙にするため、秘密にする必要が生まれてきたのでしょう。

労働・社会立法

1870年、教育法成立。8歳から13歳までの義務教育が実施されます。19世紀前半までは、教育は上流階級の独占物で、庶民に教育など必要はないと考えられていた。1843年の数字ですが、男子の32%、女子の49%が自分の名前が書けなかった。しかし、これではこまる。こんな露骨な発言があります。「農民の子でも職人の子でも、あらかじめ産業制度用にそだてられれば、あの仕込みの手間が大幅に省ける。すなわち公共教育こそ、産業社会には不可欠である。」（社会学者、アンドリュー・ウールの

発言)

それから、もともと選挙権は「教養と財産を持つ者」の権利と考えられていたので、有権者が無学では困るという発想もあったのでしょうか。これらが、教育を権利として要求する労働者側の要求と一致して、教育法は制定された。

1871年、労働組合法成立。これで、労働組合の法的地位が認められた。

社会主義運動では、1884年フェビアン協会が結成されます。著名な知識人が多く、マルクス主義とは違う立場から社会主義を唱えます。また、労働運動を積極的に支援した。労働組合運動とフェビアン協会などの活動が、のちの労働党の結成に結びついていきます。

海外発展。

なんといっても、イギリスの海外での活動は、世界の上では一番重要。主なものだけ挙げます。

中国に対しては、1840年から42年にかけてのアヘン戦争と、1856年から60年のアロー号戦争をおこない、中国を半植民地化していきます。

インドでは、18世紀後半からイギリス東インド会社が領土を拡大していたのですが、インド人の大反乱を鎮圧したのち、1877年インド帝国をつくりヴィクトリア女王が、インド帝国皇帝となる。簡単に言えば、全インドを支配下に入れたということです。

エジプトでは、エジプトの財政難につけ込んで、スエズ運河を買収。スエズ運河はエジプト領内にあるのですが、運河はイギリスのものになる。やがて、イギリスはスエズ運河の警備という名目で、軍隊をエジプトに駐屯させ、エジプトを事実上支配するようになります。

ほかにも、たくさんの地域に侵略行為をおこなっていますが、大きな所だけ紹介しました。

これ以外に、自治領が成立します。イギリス人が移住した地域です。カナダ連邦(1867)、オーストラリア(1901)、南アフリカ連邦(1910)がこれです(カッコは自治領となった年)。イギリス人が原住民を押しのけて住み着いて生活基盤をつくった場所で、まさしく植民地です。イギリスは、これらを全部含んで、大英帝国とよばれるわけです。

アイルランド問題

海外に植民地をたくさん持つイギリスですが、最初の植民地といえるのがアイルランド。16世紀からイギリスに侵略され、ピューリタン革命の時にはクロムウェルによって土地を没収され、アイルランド人農民はイギリス人に搾取される小作人になってしまった。

アイルランド人は、民族的にはゲルマン人よりも古くからヨーロッパに住んでいたケルト人。言語もアイルランド語で英語ではありません。また、宗教はカトリックが圧倒的。こういう違いは、われわれ日本人からはわかりにくいですが、イギリス人にとっては大きな違いで、アイルランド人を差別しつづけていました。

イギリスに征服されたあとも、アイルランドには形だけの議会があったのですが、これが1801年にイギリス議会に併合されます。これ以後、イギリスの正式国名は、グレート・ブリテン・アンド・アイルランド連合王国という。略して連合王国。ユナイテッド・キングダム。U. K. です。

併合されたからといって、アイルランドがイングランドと平等になったわけではなくて、アイルランド人小作農への迫害はつづきました。そういうなかで、以前紹介したオコンネルらの運動によって1829年にはカトリック教徒解放法が制定されて、カトリックがほとんどだったアイルランド人に対する宗教上の差別は法律上は廃止された。ただ、生活状態は改善されません。

そういうなか、1840年代にジャガイモ飢饉という大規模な飢饉がアイルランドを襲います。アイルランド人の主食はジャガイモでした。ジャガイモの別名を知っていますか？「貧者のパン」という。やせた土地でも栽培できて、収穫も簡単、脱穀や製粉をせずにそのままゆでてすぐに食べることが出来る。もともとはアメリカ大陸原産ですが、16世紀末にアイルランドに伝わると、すぐに全土に広がって主食になった。

ところが、このジャガイモの伝染病が大流行して収穫が激減、それがジャガイモ飢饉です。1845年から数年間に100万人が餓死。80万人が飢えから逃れて北アメリカに移住しました。飢饉前のアイルランド人口は850万人ほどですから、ものすごい被害ですね。

35代アメリカ大統領のケネディは、ひいおじいさんがジャガイモ飢饉から逃れてアメリカに渡ってきたことは有名。ミッキー・マウスの生みの親、ウォルト・ディズニーもひいおじいさんの代に、ジャガイモ飢饉を逃れてアメリカに渡っている。ディズニーのつくったネズミのキャラクターの名前ミッキーというのは、アイルランド人によくある名前マイケルの愛称です。ちなみに、アメリカでは、20世紀前半までは貧しいアイルランド系移民をバカにするときもミッキーと言っていたけれど、ミッキー・マウスが人気者になってからバカにするニュアンスはなくなったそうです。

その後もアイルランド人農民の一揆、自治や独立を求める運動は活発化します。有名なのがボイコット運動。ボイコットというのは、イギリス人地主に雇われていた実在の土地管理人の名前。このボイコットさんが法外な小作料を取り立てようとしたのにおこった小作人たちが、ボイコットさんの家に配達される郵便物や食料品を実力行使でストップさせて困らせた。これが、アイルランド全土に、小作人の闘争方法として広がったものです。不買運動や集会などへの不参加運動という意味で現在も使われますね。

イギリス側も、アイルランド人の反イギリス闘争が過激にならないように、1870年アイルランド土地法などで、アイルランド人小作人の生活安定化をめざします。

アイルランド側の政治運動としては、1905年に結成されたシン＝フェイン党が有名。この政党は急進的独立運動をすすめていきました。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

世界の歴史(22)近代ヨーロッパの情熱と苦悩	谷川稔 他 著 結構広い時代をカバーしていますが、ウィーン体制以後のヨーロッパ全体の流れをつかむには適している。
--	---

第94回 19世紀後半のイギリス おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第93回 ナポレオン3世のフランス](#)

[次のページへ](#)

[第95回 露土戦争その他](#)

世界史講義録

第95回 露土戦争その他

ヨーロッパ諸国

主要国以外の19世紀後半の様子を簡単に確認しておきます。

オランダ・ベルギー。ここは、ヨーロッパでも先進地域。立憲君主国として工業が発展します。

スペイン・ポルトガル。商工業ブルジョアジーが弱く、大地主による政治支配がつづいている。

スウェーデン。19世紀はじめに憲法を制定し、責任内閣制度が確立。

ノルウェー。ウィーン会議後スウェーデン領になっている。1905年に国民投票で独立します。

デンマーク。1864年、デンマーク戦争でシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方をドイツにとられてから農業牧畜による経済建設をすすめる。

フィンランド。1809年以降ロシアの支配下。1917年に独立。

スイス。1848年に民主的連邦制憲法を制定。

露土戦争

オスマン帝国の弱体化については、以前にも触れました。ヨーロッパで起きていた政治や経済の変化を取り入れることが出来なかつたのが衰退の大きな原因です。

オスマン帝国のヨーロッパ部分の領土がバルカン半島。オスマン帝国の弱体化にあわせて、このバルカン半島でスラブ人による民族運動が活発化していきます。これを、パン=スラブ主義という。スラブ人の大国であるロシアが、このパン=スラブ主義の運動を後押ししていた。オスマン帝国内のスラブ人の独立運動を支援するのですね。これは、南下政策です。ロシアの友好国ないしは同盟国をつくることによって、南方に勢力を拡大しようということです。

具体的に、1875年には、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでオスマン帝国の支配に対して反乱が起こり、ブルガリアでも独立運動が起こります。

当然、これはオスマン帝国によって、弾圧されました。バックにいるロシアとオスマン帝国の対立は、また激しくなった。

こういう流れの中で、またもやロシアとオスマン帝国の戦争がおこります。

1877年から78年までの露土戦争です。オスマン帝国内のスラブ人救済を名目にロシアが宣戦してしまった。戦争が長引いて、クリミア戦争の時のようにイギリスやフランスが介入してこないように、ロシアは戦いを有利に進めると、急いで休戦条約を結んだ。休戦条約をサン=ステファノ条約という。

この条約でロシアは大ブルガリア国の独立をオスマン帝国に認めさせました。これは、ロシアの南下政策

にとっては、画期的な成果でした。なぜか。大ブルガリア国の領土を確認して欲しいのですが、現在のブルガリアよりもかなり大きい。そして一番のポイントは、どこを領土に含んでいるかなんです。大ブルガリア国は、黒海海岸を領土に持つと同時に、地中海岸にも領土あるのです。これは、どういうことかというと、大ブルガリアの地中海岸の港にロシアの軍艦を浮かべれば、ボスフォラス海峡とダーダネルス海峡を通過しなくとも、地中海で軍事行動がとれる。クリミア戦争後、両海峡は軍艦の通航が禁止されているから、ロシアにとってこれは画期的だった。大ブルガリアはロシアのおかげで独立できたわけだから、完全なロシアの同盟国です。ロシアの要求を断るはずがないので、ブルガリアの港がロシアの軍港として利用されるのは確実だったのです。

この条約の中味を知って、文句をつけてきたのがイギリスとオーストリアです。

イギリスは、東地中海地域を勢力圏にしたいので、ロシアの南下政策を止めたい。オーストリアは、バルカン半島に領土的野心を持っていたので、大ブルガリア国の成立によってロシアの勢力が拡大するのを防ぎたかったのです。

両国は、サン=ステファノ条約に反対してロシアと対立しました。いよいよ、ロシアとイギリス・オーストリア連合の戦争がはじまるか、というくらいに緊張が高まりました。

開戦前夜の状況になって登場してきたのがドイツです。ドイツの宰相ビスマルクが、この対立の仲裁を買ってでます。

じつは、当時ビスマルクは、海外に植民地を持つとか、ドイツの勢力圏を拡大しようということは、全然想ていなかった。ビスマルクにとって、ドイツの内政整備が最重要課題でした。ドイツ帝国成立以来まだ日が浅い。建国以来10年もたっていません。国内問題に専念したい。専念するためには、平和が欲しかったのです。ドイツが戦争をしなくても、国境を接する他国が戦争を始めれば、当然その影響がドイツにも及びます。国内政治に専念するための条件として、ビスマルクは「ヨーロッパの安定」を何よりも望んでいました。ロシアもオーストリアもドイツの隣国ですから、この両国が戦火を交えるのは絶対に阻止したかった。

ビスマルクは「誠実な仲介者」として、戦争回避のための会議を呼びかけた。各国にとっても、戦争をせずに問題を解決できるのなら、それにこしたことはない。ビスマルクに領土的野心がないことは、みんな知っているから、呼びかけに応じて会議が開かれます。1878年のベルリン会議です。

会議の結果むすばれたのがベルリン条約。中味は以下のとおり。

ブルガリアは領土を縮小して、オスマン帝国内の自治国とする。地図で確認すると、大ブルガリア国との違いがすぐわかる。ようするに、地中海岸の領土を削った。ロシアの南下政策が阻止されたわけです。しかし、それだけでは、ロシアは損するだけ。面目丸つぶれ。これでは、「誠実な仲介者」にならないので、ブルガリア以外にも、スラブ人の国家の独立を承認した。新たに独立を認められたのが、セルビアとモンテネグロ。スラブ系ではありませんが、ルーマニアも独立を承認された。

スラブ系国家ばかりが独立すると、ますますバルカン半島にロシアの影響力が大きくなる。これでは、オーストリアが不満を持つので、オーストリアと国境を接するオスマン帝国の二つの地域ボスニア・ヘルツェゴヴィナの統治権をオーストリアにあたえた。

そして、イギリスはキプロス島を獲得。キプロス島は、シリア・パレスティナ・エジプト方面ににらみを

きかせる絶好の場所にありますね。

以上が、ベルリン条約の中味です。オスマン帝国は、自分の領土を勝手にとられたり独立させられたりしているのですが、この会議には呼んでももらえなかった。もう、やられっぱなしで文句も言えない弱体ぶりです。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[世界の歴史\(22\)近代ヨーロッパの情熱と苦悩](#)

谷川 稔 他 著

結構広い時代をカバーしていますが、ウィーン体制以後のヨーロッパ全体の流れをつかむには適している。

第95回 露土戦争その他 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第94回 19世紀後半のイギリス](#)

[次のページへ](#)

[第96回 ラテンアメリカの独立](#)

世界史講義録

第96回 ラテンアメリカの独立

ラテンアメリカの住民構成

ラテンアメリカとは、何処のことかわかりますか。

ラテン系民族の国家であるスペインとポルトガルの植民地になったアメリカ大陸の地域をいいます。具体的には、中南米とカリブ海地域。要するに現在のアメリカ合衆国とカナダ以外の地域です。この地域が、1810年代以降、次々と独立を達成していきます。今回はその様子を見てみましょう。

まず、住民構成を確認しておきます。

スペインの植民地の場合。支配者はスペイン人ですが、これは二つのグループに分かれます。ひとつはスペイン本人です。現在は植民地に来ているが、スペイン本国で生まれ、いずれは本国に帰国するだろう人々は本人。もうひとつは、植民地で生まれ育ったスペイン人でクリオーリョといいます。スペイン本国政府からみれば植民地は本国を豊かにするための領土ですから、重商主義政策によってその富を吸い上げようとなります。だから、植民地生まれのクリオーリョは経済的には本国政府に不満がでてくる。こういう構造は、イギリスと北米13植民地の関係と同じです。（本人とクリオーリョの比率について、参考までに1646年のメキシコの数字をあげておくと、本人1万3800人、クリオーリョ16万9千人。）

次に先住民がいます。いわゆるインディオです。北米と違って、中南米にはアステカ帝国、インカ帝国など高度な文明国があったから、メキシコ、ペルーでは先住民の人口も多い。（メキシコ中央高原の先住民推定人口は、1518年で2520万人。インカ帝国の人口推計は、400万～1500万の幅がある。）少数のスペイン人が直接統治するのは不可能で、先住民の首長層を利用して間接支配を行いました。また、スペイン国王は理論上は先住民をスペイン人と同様に臣民としていました。このあたりは、イギリス人が先住民を単なる邪魔者として、その存在を無視した態度と大きく異なるところです。

先住民は、スペイン人が持ち込んだ各種伝染病に対して免疫がなかったため、17世紀前半まで極端な人口減少がつづきましたが、その後は人口増加に転じます。

また、先住民とスペイン人の混血の人々も多く、これをメスティーソと呼びます。分類としては先住民に入れて考えます。（インカ帝国を滅ぼしたピサロはインカ皇帝一族の娘たちとの間に複数の子供をつくり、子供の一人はピサロの遺産を相続しています。）

労働力不足を補うためにアフリカ大陸からつれてこられた奴隸、及びその子孫の黒人もカリブ海地域やブラジルでは大きな比重を占めました。黒人とスペイン人の混血の人々は特にムラートと呼ばれました。

ハイチの独立

18世紀後半に、イギリスの13植民地でアメリカ独立革命が起きても、ラテンアメリカの植民地では独立への動きはありませんでした。ラテンアメリカで独立へ向けた具体的な動きは、フランス革命とナポレオ

ン戦争というヨーロッパの大変動の影響によって始まりました。

ラテンアメリカの独立はハイチに始まります。ハイチは、西インド諸島イスパニョーラ島の西側にあるフランスの植民地です。この島はハイチ島とかサント・ドミニゴ島とかいろいろな呼ばれ方をしますから要注意。もともと島全体がサント=ドミニゴと呼ばれるスペインの植民地だったのですが、17世紀中頃から島の西部にフランス人がスペインに無断で住み始め、事実上西部を占拠してしまいます。衰退しているスペインはフランス勢力を追い出す力はなく、17世紀末にはフランスの行為を追認し、正式にフランスの植民地サン=ドマングが成立しました。地図を見ると、島の真ん中に直線で国境線が書かれています。ここでフランス人入植者たちは黒人奴隸を使ってサトウキビ栽培で利益をあげていきました。（ハイチの人口構成…白人4万人、黒人奴隸45万人、ムラート及び自由黒人3万人）

さて、1789年、フランス本国で革命が始まりました。サン=ドマングからも三部会とそれに引きつづく国民議会に議員がおくられました。かれらは、もちろん白人プランテーション経営者の利害を代表していましたが、フランス革命が進行すると、議会では、彼らの意図に反して、奴隸制廃止や自由黒人とムラートへの参政権付与などが検討されはじめます。それを知ったサン=ドマングでは、1791年に島の北部で黒人奴隸が反乱を起こし、南部ではムラートと白人の対立が激しくなりました。1792年にはフランス本国の国民公会からジャコバン派の政治委員が着任しましたが、奴隸を所有する島の白人は反革命ですから、混乱は増すばかり。おまけに1793年、対仏大同盟が発足し、フランスが周辺諸国と交戦状態になると、イスパニョーラ島東部のスペイン植民地から、スペイン軍とイギリス軍が西部のサン=ドマングに攻めてきました。

このときに登場するのが黒人奴隸反乱のリーダーの一人だったトゥサン=ルーヴェルチュールです。解放奴隸でかなりの教養があつたらしい。彼は、ジャコバン派政府と手を結ぶと、スペイン軍とイギリス軍を撃退し、サン=ドマングの実権を握ってしまった。フランス政府は、サン=ドマングを敵国の侵略から守るためにトゥサン=ルーヴェルチュールの協力が必要なので、1799年にはサン=ドマングの副総督兼総司令官に任命します。国民公会はすでに1794年に奴隸制廃止を宣言しており、トゥサン=ルーヴェルチュールのもとでサン=ドマングの奴隸制はなくなりました。1801年には、トゥサン=ルーヴェルチュールは独自の憲法を発布してサン=ドマングの終身総督に就任し、事実上の独立に向けて動き出します。

ところが、1802年、フランスで独裁者となつたナポレオンが、アミアンの和約でイギリスと和平を結ぶと、フランス艦隊はイギリス海軍に妨害されず大西洋横断ができるようになりました。ナポレオンはサン=ドマング独立の動きを許さず、2万2千の遠征軍を送つてトゥサンを捕らえ、フランスに送られたトゥサンは1803年に獄中で死んでしまつた。しかし、トゥサンの部下の抵抗によってフランス軍はサン=ドマングを制圧に失敗し、1804年にはサン=ドマングは国名をハイチとして独立を宣言しました。世界初の黒人共和国の成立です。アメリカ大陸およびカリブ海地域ではアメリカ合衆国に次ぐ2番目の独立国です。

南米スペイン植民地の独立

スペイン領の独立もナポレオンが本国にもたらした変動をきっかけに始まりました。ヨーロッパを支配下においていたナポレオンは、1808年、スペインでブルボン家の王を退位させ、自分の兄ジョセフをスペイン王として即位させました。スペイン国民の多くはこれを認めず反乱を起こし、各地に評議会とよばれる自治政府が成立しました。

アメリカ大陸のスペイン植民地は、いくつかの副王領に分けられ、スペイン国王から任命された副王によって統治されていました。各地の副王は、ナポレオンの兄のスペイン国王を支持すべきか、評議会側つまり前の国王政府を支持すべきか迷う。スペイン本国の混乱で、植民地の支配者当局は、どうしたよいか困ってしまうわけですね。

植民地当局の動搖は、独立を求めるクリオーリョたちにとっては願ってもないチャンスです。政治的経済的にスペイン本国の植民地政策に不満を持っていたクリオーリョたちが中心になり、1810年には南米各地で自治と独立を求めて評議会が作られていきました。（具体的には、ベネズエラのカラカス、アルゼンチンのブエノスアイレス、チリのサンチャゴ、コロンビアのボゴタ）。

ただし、これがすぐに独立に結びついたわけではありません。カラカスを中心とするベネズエラでは1811年に独立宣言が出されますが、スペイン軍によってカラカスはすぐに制圧されてしまいます。これに屈せずに、スペインからの独立を目指して戦い続ける人物がカラカス出身のクリオーリョ、シモン＝ボリバルです。

1811年以後、ボリバルはスペイン軍とカラカスの争奪戦を繰り返します。1814年にナポレオンが没落し、復活したブルボン王家が植民地の独立派に対して攻勢をかけるようになると、追いつめられてイギリス領のジャマイカに亡命します。しかし、その後も、黒人共和国ハイチに支援を求めたりしながら、ねばり強く活動をつづけました。

ベネズエラでの運動が行きづまつたボリバルは、攻撃の矛先をヌエバグラナダ（現コロンビア）の中心都市ボゴタ（現コロンビアの首都）に変え、1819年、スペイン軍を打ち破りボゴタを副王の支配から解放しました。ここから、ボリバルの大活躍が始まります。

まず、ボリバルは大コロンビアの樹立を宣言します。これはこの時に、コロンブスにちなんでつけられた国名ですが、大コロンビアというのは現在のコロンビアとは違い、現コロンビアにベネズエラ、エクアドル、パナマをあわせたものです。しかし、実際にはこの時点でベネズエラもエクアドルもスペインが支配していますから、ボリバルは大風呂敷を広げたわけです。

ここで、おもしろいと思うのは、独立派が考えている独立国の範囲、大きさはてんでんバラバラなんですね。ボリバルは南米の植民地をひとつにまとめて独立をしようとしていますが、地域毎の利害関係が異なるために各地のクリオーリョたちは互いに対立していて、それぞれ別個に独立を求めていたりする。でも、この段階では、とりあえずみんな独立軍を率いてスペイン軍と戦っているボリバルに従っておこう、という感じです。

この後、1820年にスペインで立憲革命が起り植民地への圧力が弱ると、ボリバルは、21年にカラカスをスペインから奪いベネズエラを解放し、翌22年にはエクアドルの中心都市キトを解放しました。

ボリバルはさらに南のペルーの攻略を目指します。ペルーはインカ帝国の中心地域だった場所で、副王がおかれたリマは、スペイン本国による南アメリカ支配の拠点でした。リマ副王府の支配は強固で、スペイン本国の政治情勢の変化にも揺らぐことはありませんでした。スペイン本国の情勢の変化によって、植民

地の独立運動が左右されてきたことを考えると、大コロンビアの独立を確実なものにするには、情勢が有利なうちにスペイン支配の拠点であるリマおよびペルーの攻略をしておかなければならぬと、ボリバルは考えたのです。

ちょうど、同じ時期に同じようにペルーの攻略が必要だと考えて軍事行動をしている人物がいました。アルゼンチンのサン=マルティンです。

話はさかのぼりますが、ナポレオン戦争中の1806年、イギリス軍がアルゼンチンのブエノスアイレスを占領したことがあります。このとき、ブエノスアイレスのクリオーリヨたちが、スペイン軍の力を借りずにイギリス軍を追い出すことに成功して以来、ブエノスアイレスは独立派が強く、1816年にはリオ・デ・ラプラタ連合州として独立を宣言しました。当時、ブエノスアイレスは、アルゼンチンで成長し始めた農牧業の皮革輸出港として栄えていましたが、南アメリカ全体からみると、経済的にも政治的にも大きな影響力を持っていませんでした。だから、スペイン本国が立ち直り、ペルーの副王が勢力を盛り返せば、独立はつぶされてしまう可能性が高かったのです。

そこで、先手を打って、情勢が有利なうちにペルーを攻略しようとしたのが、アルゼンチンの軍人サン=マルティンです。現在のボリビアからペルー方面に攻め込むのが最短距離なのですが、ボリビア方面の副王軍は強力で簡単に攻め込むことができません。そのため、サン=マルティンはアンデスを越えてチリに進出し、チリから海路ペルーに向かうという作戦を立てます。

1818年、約5000の兵力を率いたサン=マルティンはチリに進入し、スペイン軍を破りチリを解放。チリで艦隊を整えて1820年にはペルーの海岸に上陸し、21年にはリマに入城しペルーの独立を宣言しました。ただ、このときペルー副王軍は戦略的にリマから高原地帯に撤退しただけで、その勢力は依然として優勢で、サン=マルティンはその後の方策に行き詰まってしまいました。

ちょうどそこに北からボリバル軍が南下してエクアドルを解放したわけです。サン=マルティンはエクアドルのグアヤキルという町に赴き、ボリバルと会見します。このとき何が話し合われたかは不明ですが、サン=マルティンの援軍要請をボリバルが拒否したということらしい。両雄並びたたず、ですかね。このあと、勢力を保てなくなったサン=マルティンはチリに撤退して、かわりにボリバルの軍隊がペルーに進出し1823年には副王軍を破りペルー解放に成功します。25年にはボリバル軍は上ペルーで最後まで残っていたスペイン軍を破り、上ペルーを解放します。このときに上ペルーは、ボリビアとして独立を宣言しました。ちなみに、この国名はボリバルの名からつけられたものです。

この時期がボリバルの活動の絶頂期です。アルゼンチンとチリをのぞくスペイン領南アメリカをほぼ独立で解放したわけですから。次にボリバルは、これらすべての地域を統合した国家建設を目指しましたが、各地域はボリバルの統制から離れて独自に国家形成をはじめました。ボリバルはこの流れを止めることができず、失意のうちにヨーロッパに去る決意をし、渡欧直前の1830年に持病の結核が悪化して死んでしまいました。

一方のサン=マルティンは、リマを去った後は、やはり失意のために隠遁生活に入ってしまいます。1824年にはヨーロッパはフランスに渡り、世間からすっかり忘れ去られたまま1850年に世を去りました。

ボリバルもサン=マルティンも、現在はラテンアメリカ独立の英雄として讃えられていますが、どうも使い捨てられてしまった感じがします。

メキシコの独立

メキシコは、メキシコ市に副王が置かれ、南米のペルーと並んでスペイン植民地の中心のひとつでした。19世紀にはいると、独立を目指すクリオーリョ層の勢力が成長してきますが、それに劣らず副王政府の支配体制も強固でした。

そんな中で、1810年、ドロレス村の司祭イダルゴ神父の呼びかけで民衆反乱が勃発しました。イダルゴ神父は「グアダルーペの聖母様万歳、悪いスペイン人（本国人）をやっつけろ」というスローガンを唱え、先住民やメスティーソの気持ちをつかみました。あつという間に反乱軍は6万におよぶ勢力にふくれあがり、メキシコ市に向かって進撃を始めました。ちなみにグアダルーペの聖母というのは、キリスト教が先住民の間に浸透する間に信仰されるようになったメキシコの聖母です。

この反乱は、最も下層の人民からの素朴な独立要求とも言えます。ただ、彼らは、進軍の途中で、白人にに対する虐殺を行なったため、独立を求めるクリオーリョ層は、イダルゴの反乱勢力とではなく、副王政府側と協力し反乱鎮圧にまわりました。反乱軍は人数が多いとはいえ、しょせん戦闘の素人、烏合の衆にすぎず、1811年、イダルゴは捕まり処刑されて、反乱は鎮圧されました。

副王政府は危機を乗り切ったかのように思えたのですが、スペイン立憲革命の翌年の1821年、イダルゴ反乱軍の残党を鎮圧するために出動した副王軍の将軍が、副王政府を裏切って独立宣言を出すという形で、本国から独立してしまいました。あっけないと言えば、あっけない独立で、スペイン政府の権威が地に墜ちていた結果といえるかもしれません。

ブラジルの独立

ポルトガルの植民地だったブラジルは、スペイン領とは違う経過をたどって独立します。

ポルトガルはイギリスとの関係が深く、ナポレオンに屈服しなかったため、1807年、ナポレオン軍がポルトガルに侵攻すると、政府宮廷がイギリスの艦隊に守られてブラジルに避難しました。植民地が本国になってしまうわけです。宮廷が疎開したリオ・デ・ジャネイロは、この間に整備され、都市として発展します。

ナポレオン没落後、1822年に国王はポルトガルに帰還するのですが、この時ブラジルに残留した皇太子が、ブラジル帝国の独立を宣言し皇帝に即位して本国から独立しました。

独立後の政治と経済

1825年までにスペインから独立した南米諸国は、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイです。しかし、これらの国家建設はなかなか順調に進みませんでした。なぜなら、この独立は、クリオーリョなど植民地人たちの組織的な政治運動の積み重ねの結果勝ち取ったというよりも、ナポレオンに翻弄されたスペイン本国の動揺につけいったものだったこと。しかも、ボリバルとサン=マルティンという突然登場した軍事的天才の活躍に負う所が大きかったこと。彼らがよそからやって来てスペイン軍をやっつけてくれたから独立してしまった、という感じで

す。この二人が、大活躍しながらも、後にラテンアメリカから去っていかざるを得なかつたというのは、彼らにはクリオーリョ層の永続的な分厚い支持がなかつたからです。

つまり、「棚からぼた餅」独立で、独立してみたものの国家構想などは全然できていなかつた。だから、どの国も政治体制が安定するまでにかなりの年月と混乱を経なければなりませんでした。

これは、メキシコも似たようなもので、副王軍の将軍の裏切りで達成した独立なので、この将軍が帝政を布いたり、内乱があつたりと、政治的安定はなかなかおとずれませんでした。

黒人共和国として出発したハイチに対しては、奴隸制度を廃止した国として何となく理想的な政治の実現を想像してしまうのですが、ここでも帝政を布く将軍が登場したり、南北に分裂したりと紆余曲折を経ました。

こうした政治の不安定さは、独立の過程だけが原因ではなくて、経済的な要因もありました。独立しても経済構造は変わらず、少数のクリオーリョ地主による農業生産が中心で、工業は未発達のままでした。ハイチではプランテーションはなくなり、小規模農民がたくさん生まれたのですが、農業生産性はひどく落ち込んで貧しい島になってしまった。中産階級、中堅市民層がなかなか発展しないのです。

貿易は、イギリスに従属する形になってしまいます。イギリスから安価な工業製品がドンドン入ってくるので、工業はなかなか発展しない。輸出は、農作物と鉱業生産物を中心にならざるを得ません。

以前から南米大陸を市場として狙っていたイギリスは、ラテンアメリカ諸国の独立によって、その目的を達成したわけです。

市場獲得で儲かることになるイギリスはラテンアメリカ諸国の独立を歓迎しましたが、当時ヨーロッパ政界はメッテルニヒが主導するウィーン体制下にあって、自由主義や民族主義運動は抑圧していました。だから、ラテンアメリカ諸国に干渉して、独立を抑え込む可能性もありました。この関連で有名なのが、アメリカ合衆国大統領モンローが1823年に出した「モンロー宣言」です。この中で、モンローは、いままで合衆国はヨーロッパの植民地に干渉したことはないのだから、すでに独立したラテンアメリカ諸国にヨーロッパ諸国も干渉しないでくれ、ということを言っています。アメリカ大陸とヨーロッパ諸国の相互不干渉ということを唱えたわけですが、これは、合衆国が独立したラテンアメリカ諸国を市場として確保したかったというのがその心です。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。



長い期間をカバーしながらも、内容は豊富。馴染みの薄い地域なので、最初は取っつきにくいかもしれないが、読み込めばかなり勉強になる。
玉石混交のこのシリーズの中で、間違いなく「玉」。今回のネタは、究極的にはこの本。

第96回 ラテンアメリカの独立 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第95回 露土戦争その他](#)

[次のページへ](#)
[第97回 アメリカ合衆国の発展](#)

世界史講義録

第97回 アメリカ合衆国の発展

----- 領土の拡大 -----

1783年、パリ条約で独立を達成したアメリカ合衆国ですが、独立時の領土は大西洋岸からミシシッピ川まででした。それが、この後、急速に領土を拡大していきます。

1803年には、フランスからルイジアナ西部を買収します。ミシシッピ川からロッキー山脈までの地域です。これで、領土は倍増します。ちょうど、フランスはナポレオンがヨーロッパ制覇に乗り出している時期で、ナポレオンとしては、たいして利益のあがらない北米大陸から撤退して、ヨーロッパ経営に集中しようとしたのでしょうか。合衆国はフランスに1500万ドルを支払いましたが、これが高いのか安いのか、よくわかりませんね。

1818年には、イギリス領カナダとの国境線を確定します。カナダと合衆国の国境線を見ると真っ直ぐ直線になっていますね。あれです。

1846年にはテキサスを併合します。テキサスはもともとメキシコ領だったのですが、合衆国からの移住者が増えた結果、1836年にメキシコから独立してテキサス共和国となった上で、合衆国に併合されたものです。合衆国は、さらにメキシコからの領土獲得をねらっていたため（テキサス共和国は、メキシコ領だったカリフォルニアとニュー＝メキシコに対する領有権を主張していた）、両国間で戦争となりました。これが、アメリカ＝メキシコ戦争。1848年までつづくこの戦争は合衆国の圧勝で、一時はメキシコの首都メキシコ＝シティを米軍が占領するほどでした。この結果、合衆国はカリフォルニアとニュー＝メキシコを領土に加えました。

カリフォルニアの北オレゴンは、1846年イギリスより併合しています。

これで、合衆国は現在我々が地図で見るあの形になったわけです。まだ、アラスカとハワイは併合されていませんが。

西へ西へと領土を拡大していくことを、アメリカ人は「明白な運命（マニフェスト・デスティニー）」と考えていました。ここでいうアメリカ人とは、アングロ＝サクソン（イギリス）系の、つまり白人のアメリカ人ですよ。かれらは、農地を切実に求めていたのです。新しい領土はフロンティア（辺境）と呼ばれ、豊かな生活を求める農民たちが移住、開拓していました。

辺境開拓の歴史の中で、有名なトピックが1848年、カリフォルニアでの金鉱発見です。アメリカン川で金が発見されると、ニュースはまたたく間に広まり、一攫千金を夢見てカリフォルニアに移住者が殺到しました。ゴールドラッシュという。中華鍋のような器で、川底の砂利をすくい上げて、米を研ぐみたいに

ジャラジャラとまわしていくと、金の粒が拾えた。でも、こんなやり方で金を見つけることのできたのは、最初の頃のラッキーな人だけで、すぐに川底の金などは取り尽くされてしまい、金鉱山での採石が主になります。

しかし、このおかげでカリフォルニアは人口が急増する。とくに、48年の金鉱発見のニュースを聞いて、人がどっとやってきたのが翌49年。そのため、49's（フォーティーナイナーズ）というのが、カリフォルニア人の通称になっているといいます。アメフトのチーム名にもなっていますね。

西部辺境へどんどん人が移動し、新しい町が生まれていくのに、行政機構の整備が追いつかない。なかでも、治安維持体制が万全でない中で、自衛の為に銃を持つことが当然とされました。これが伝統となって、現在でも合衆国では簡単に銃を手に入れることができます。先進国としては、異常な慣習ですが、歴史的な背景がそれなりにあるということです。

----- 政治 -----

このかん、合衆国の政治にどのような事が起こっていたのか見てみます。

ルイジアナ西部をフランスから買収したのが、ワシントン、アダムズにつづいて第三代大統領になったジェファーソン（職1801～09）です。独立宣言の起草をおこなった人物でしたね。

教科書には、この大統領就任について、民主主義の発展と書いてあります。どういうことかというと、ジェファーソンは初代大統領ワシントンのもとで国務長官をしていて、同じくこの時副大統領だったアダムズと政治方針で対立していた。やがて、アダムズはフェデラリスト党、ジェファーソンはリカブリカン党の中心となります。アダムズは、第2代大統領に当選すると、フェデラリスト党で政府を固めて、リカブリカン党を弾圧しました。ところが、第三代にはリカブリカン党のジェファーソンが選ばれた。つまり、対立する党派間であっても、政権交代がスムーズにおこなわれたということで、民主主義の発展、という教科書の文言になったというわけ。

ジェファーソン大統領については、これだけです。

このかん、ヨーロッパではフランス革命、そしてナポレオン戦争と、激動がつづいていて、大西洋をはさんだ合衆国にも影響を与えます。イギリスはフランスの貿易に打撃をあたえるためにヨーロッパに向かう合衆国の商船を拿捕して、通商を妨害するようになる。合衆国はヨーロッパの戦争に対しては中立を宣言しているのにもかかわらず、です。そこで、合衆国はイギリスに宣戦布告した。これが、米英戦争（1812～14）。

北米大陸でちょっとした戦闘がありましたが、アメリカとイギリスが雌雄を決するような戦いはありませんでした。合衆国はイギリスに攻め込む戦力はないし、イギリスはそんな合衆国をほとんど相手にしない。だから、ナポレオンの没落とともに、勝ち負けなく戦争は終わります。ただ、この戦争によって、イギリスからの輸入が途絶えたため、合衆国内で綿工業が発達した。イギリスからの経済的自立が達成されたというので、この戦争を第二次独立戦争と言うこともあります。

ナポレオンが没落し、ヨーロッパの秩序がウィーン体制で再編成されると、1823年、合衆国第五代大統領モンローが、いわゆる「モンロー宣言」を出します。これは、ナポレオン戦争のどさくさに、独立を達

成した中南米諸国を、スペインが再び植民地化しないように訴えたものです。ヨーロッパ諸国がヨーロッパで何をしようと、合衆国はちょっかいを出さない、反対に、ヨーロッパ諸国は新大陸にちょっかいを出さないでくれ、と、そういう内容です。

中南米諸国を市場にしようと考えていたイギリスが、モンロー宣言に同調したため、スペインなど神聖同盟諸国は干渉をあきらめました。

モンロー宣言は、中南米諸国の独立を支援するためのものだったのですが、やがて、合衆国は中南米諸国を自国の縄張りだと考えるようになっていきます。これは、今もそうです。注意しておいてください。

西部開拓と関連して重要なのが第七代大統領ジャクソン(職1829～37)です。東部の名門出身者が大統領に選ばれてきた中で、初の西部出身の大統領ということで有名。西部出身の粗野な荒くれ男というイメージが、彼の「売り」です。大統領になってから、いろいろな書類を決裁するときに「All Correct」(承認)の略でACと書くべき所を、ジャクソンはつづりを知らなかつたため、OKと書いてしまつた。しかし、大統領の無学を指摘することもはばかられるので、そのままOKを使いつづけ、いつの間にか、普通の言葉になつてしまつたという逸話があります。これは、決して、ジャクソンを馬鹿にしている逸話ではなくて、逆にみんなが彼に親しみを抱くプラスのエピソードだつたのだと思います。

お高く止まつたエリートではなく、西部出身の庶民の味方ということで、彼の人気は高かつた。西部の小農民や南部の奴隸所有の農園主が熱烈にジャクソンを支持しました。彼の時代に、普通選挙制度が各地に広がつたので、民主主義の発展した時代として、ジャクソニアン・デモクラシーと呼びます。

ジャクソンは大統領になる前から、米英戦争で活躍した軍人として人気があつたのですが、その「活躍」の中身は、先住民(インディアン)に対する迫害でした。土地を求める白人地主・農民のために、邪魔な先住民を追い払う。そういう「実績」で人気があつた。

大統領になってからは、これを合法的に大々的に実施しました。先住民に対する強制移住政策です。豊かな土地で農業をしていた先住民の部族から、無理矢理に移住の同意を取り付け、わずかばかりの補償金と引き替えに、西部の不毛な土地に移住させました。チェロキー族は移住の途中で多くの死者を出し、その旅路は「涙の道」と呼ばれています。

新しい土地に移住させられ、先住民はどうやって生活していったのか。生活基盤を破壊され、先住民の人口は激減していきます。推計ですが、1845年には100万人以上あつた人口は、1870年には2万5千人です。農地を奪われても、従来ならバッファローを狩ることで先住民は生活を維持できたのですが、そのバッファローも白人の乱獲によって激減します。1865年の1500万頭が、1880年には数千頭に減ります。

ケビン・コスナーが主演した「ダンス・ウィズ・ウルブス」という映画があります。ケビン・コスナー演じる白人兵士が徐々に先住民と心を通じ合わせ、最後には追われゆく先住民と行動をともにしていく姿を描いています。「ダンス・ウィズ・ウルブス」というのは、先住民がケビン・コスナーにつけたあだ名。彼が、なぜか狼と踊るからです。この映画にこんな場面がある。夜、ケビン・コスナーが寝ていると、ゴーッという地響きが聞こえてくる。そこへ、先住民の少年が飛び込んできて、「すごい、バッファローの大群だ。こんな大群を見たことがない。すぐに、狩りに行こう」と誘う。それだけなんですが、先住民の置かれた状況、激減するバッファローの知識があれば、少年の喜びの背景がわかるというものです。

南北の対立

西部開拓が進展し、西部に新たな州が誕生していくなかで、北部諸州と南部諸州の対立が激しくなっていきました。

対立の原因は、両地方の産業の違いです。北部では商工業が発展しつつあった。南部では、奴隸を使った大規模農場プランテーションが産業の中心です。

工業が発展しつつある北部の工場経営者にとって、ライバルはイギリス製品です。安くて質のよい綿織物などの工業製品が、イギリスからどんどん輸入されれば、自分たちの製品が売れない。そこで、イギリスからの輸入品に高い関税をかけて、北部の工業を保護するように政府に求めました。関税というのは、輸入する国が輸入品にかける税金です。こういう政策を保護貿易主義といいます。

貿易というのは、相手あってのことだから、もし、合衆国が関税を引き上げれば、それに対抗してイギリスも関税を引き上げます。オタクがウチからの輸入を制限するなら、ウチもオタクからの輸入を制限しますよ、ということになるわけです。

もし、そんなことになって困るのが南部です。南部では、綿花などの農産物をイギリスに輸出してもうけていた。当然、イギリスが高い関税をかけては困ります。税金で価格があがっては、売り上げが落ちますからね。だから、南部は、保護貿易主義には反対。関税ができるだけ低くする自由貿易主義を主張しました。

この貿易をめぐる南北の対立を、激しくしたのが西部開拓でした。

フランスやスペインから獲得した新領土は、特定の地域が、人口が増加し一定の条件を満たすと、あらたな州に昇格することになりました。この時に、その新しい州に奴隸制度を認めるかどうかが大きな問題になってきたのです。

奴隸制度を認める州を奴隸州、認めない州を自由州といいます。南部は奴隸州、北部は自由州です。1819年までに、22の州があって、奴隸州11、自由州11と、両者は同数だった。1820年に、ミズーリが州に昇格することになると、北部と南部がもめにもめます。

ポイントは、上院議員の数です。合衆国の上院は、各州から2名づつ選出されます。だから、ミズーリ州が奴隸州になるか、自由州になるかで、北部南部のどちらが国政の主導権を握るかということになってくるわけです。

このときは、南北間で妥協が図られ、ミズーリ州は奴隸州となりましたが、東部の自由州を分割して自由州もひとつ増やして決着。今後については、新しい州ができた場合、北緯36度30分より北は自由州、南は奴隸州にするというミズーリ協定がつくられました。

ところが、これも紆余曲折があって、ミズーリ協定は破棄され、1854年のカンザス・ネブラスカ法で、州の住民投票で奴隸州か自由州かを決めることになった。こうなって、何が起こったかというと、昇格直前の州に、奴隸州・自由州それぞれから移住者がどんどんやってきて、多数派をとろうとする。住民どうしが武力抗争を繰り返す。ジョン＝ブラウンという奴隸制度反対論者は、奴隸制論者を5人殺して北部で

英雄になる(1856年)。殺人で英雄になるというのは、すでに異様な状態で、これまでのような、妥協で南北の対立を先送りすることは限界に近づいていきました。

奴隸制度への批判

南北の対立は、経済的な理由だけではありません。みなさんご存じのとおり、南部でおこなわれている奴隸制度も、対立の大きな原因でした。どう考えても、「すべての人は平等につくられ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の権利を付与され...」とうたった独立宣言と奴隸制度が相容れるはずはありません。そのことは、当時のアメリカ人も当然わかっていました。

奴隸制度反対の世論を一気に盛り上げたのは、ストウ夫人の小説『アンクル・トムズ・ケビン』(1852)でした。昔は、子供向けの読み物として『トムおじさんの小屋』なんていう題名で図書館や本屋に並んでいました。今は、どうかな。

簡単にストーリーを紹介しておきましょう。

『アンクル・トムズ・ケビン』

主人公トムは黒人奴隸で、さるプランテーションで働いています。働き者で正直で、熱心なクリスチャンで、白人から見たら理想的な奴隸です。で、農場主である主人も、まあそれなりに良心的な男で、トムは妻子（もちろん奴隸）をもち、農場の中の小屋に家族と共に生活している。奴隸ながらも、幸せにやっているという風情です。

農場主には男の子がいて、この少年が奴隸のトムおじさんが大好き。いつもトムの小屋に遊びに行っている。トムも、この少年を可愛がっている。

ところが、農場主が事業に失敗、借金を抱えて農場を手放すことになるんですね。農場で働いていた奴隸たちも、売られていくことになった。トムのように、家族のいる奴隸にとっては、これは悲惨なことで、妻も子どもも、バラバラに引き裂かれて売られしていくことになる。トムが売られていくときに、農場主の息子の少年が、トムに約束する。ぼくが大きくなったら、農場を取り戻し、トムを買い戻すから、と。物語は、ここからトムの人生をたどります。ここは、略しますが、トムはさまざまな白人に転売され、いろいろな主人に仕えることになる。いい目にも遭うが、ひどい目にも遭う。要するに、いくら正直者のトムでも、主人次第でその運命はどうなるかわからない。読者は、「なんとかしてやれないのか」ともどかしい思いで、トムの運命を読みますむわけです。

トムが最後に売られた先が、サディストの白人農場主。奴隸に暴力を振るうのを楽しみにしているような人物です。そこでも主人には逆らわないトムなんですが、ある日、主人が、女奴隸に暴行しようとするのを思わず邪魔してしまう。怒り狂った主人が、トムに無茶苦茶な暴行を加える。虫の息になったトムがなにやらブツブツ言っているので、何を言っているか聞いてみたら、「この人も神様が救ってくださいますように」というようなことを言っている。自分に暴行を加える主人のために祈ってるんですよ。それを知って、主人はさらに逆上して、暴行は加速。「重傷」だったトムは「重体」状態に。瀕死で馬小屋かどこかに放り込まれる。

そこに、最初の農場の少年が成長して登場です。すっかり大人になった少年は、農場を再興して、約束どおりトムを探していました。ついに探して当ててみると、トムはまさに死ぬところです。「見つけるのが遅く

「ゴメン」と懺悔する少年が見守るなかで、トムは死んでいく。少年は、ここではたと悟る。トムを見つけて、買い戻せば良いと思っていたけれど、それは間違いただ。奴隸制度が問題なんだ。僕は故郷に帰ったら、農場の奴隸たちをみんな解放しよう、と誓う。

ちょっと脚色したかもしれません、大体こんな内容です。読んでみると、ラストシーンなんか、目頭熱くなります。ひどいじゃないか、奴隸制度！という気分になる。

当時の北部の白人たちも、そう思ったのです。南部の人々は、こんな事あるはずない。何も知らない北部人の作り話だと反発した。

熱を帯びてくる奴隸制度反対論は、新たな州は奴隸州か自由州かという問題、南北対立とが深く結びついていたのです。

こういうなかで、奴隸制度の拡大に反対する共和党が結成されます。1860年の大統領選挙で、それまでつづいていた民主党に替わって、初めて共和党のリンカーンが当選し、南北はついに内戦に突入します。

----- 南北戦争 -----

共和党のリンカーンが当選すると、奴隸州の南部11州はジェファソン=デヴィスという人物を大統領に、アメリカ連合国を結成しました。合衆国から分離し別の国をつくったわけです。

1861年、リンカーンは大統領に就任すると南部諸州の離脱を許さず、ここに南北戦争がはじまりました。この段階で、リンカーンは奴隸制度をなくすとは言っていません。戦争目的は、南部の分離独立の阻止です。

1858年、大統領に当選する前のリンカーンはこんな演説をしています。

「私は過去においても白人黒人両人種の社会的政治的平等を実現することに賛成したことはないし、今日でも同様である。また黒人に投票権を与えることや陪審員にすること、役人に任命する資格を与えることや白人との結婚に賛成したこともないし、今日も賛成しない。またさらに私は白人黒人の間には身体的相違があり、その相違ゆえに社会的政治的平等の条件の下で両人種が共に生活することは永遠に無理なことだと考える。」

リンカーンが奴隸解放をした人だと知って、これを読むとびっくりするでしょ。選挙前の演説だから、多くの人の支持を集めるためにしゃべっているので、どこまでが彼の本音かわかりませんが、人種差別反対の旗を高く掲げていた人ではなかったんですね。

南北戦争がはじまったのち、1862年の演説も見ておきましょう。

「この戦争での私の最高の目的は、連邦を救うことにあるのであって、奴隸制度を救うことでもなければ、また破壊することでもない。もしも私が、ひとりの奴隸を解放しなくても連邦を救えるものなら私はそうするだろう。また、もしも私が、すべての奴隸を解放することによって連邦を救えるものなら、私はそうするだろう。」

この連邦というのは、合衆国のことです。救うというのは、分裂させないことだね。

実際に、このあとリンカンは、南部に勝つためには奴隸を解放することが必要だと考えるのです。北部の人口2200万、南部は人口950万、しかもその内350万は黒人奴隸。工業力も北部が上。だから、北軍（合衆国政府軍）が強いはずなんですが、実際には、南軍は北軍を圧倒する粘りを見せ激戦がつづきました。勝利と奴隸制度廃止を切り離すことができないと考えたリンカンは、1862年に初めて黒人兵を18万人採用し、1863年には、奴隸解放宣言を出しました。

南北戦争の勝敗を決定づけたのが、1863年のゲティスバーグの戦いです。北軍8万7千、南軍7万5千が戦い、合計4万5千人が戦死するという激戦でした。

南北戦争と日本では言いますが、アメリカでは「Civil War」、つまり内戦と呼びます。同じアメリカ人どうしが殺し合っているわけです。戦闘が終わったゲティスバーグには、敵味方入り乱れて4万5千人の死体が転がっているわけです。戦死した兵士の家族が、息子や夫の死体を探しに来ます。数万の死体ですから、そう簡単に見つかるものではない。しかも、日がたつにつれ、死体は鳥につつかれ、野豚に食べられ、悲惨な状態になってきます。地獄絵図です。

これは、放っておけないということになり、政府が戦場跡を整備して、戦闘の4ヶ月後、戦死者追悼集会が開かれました。ここでリンカンは「人民の人民による人民のための政府」という有名な言葉を含むスピーチをおこなったのでした。ちなみに、今では、民主政治の核心をつかんだ名言として有名な言葉ですが、発言現場では全然話題にならず、失敗したスピーチと思われたようです。

それはともかく、ゲティスバーグで勝利した北軍は、以後優勢に戦いをすすめ、1865年には南軍が降伏して、戦争は終わりました。両軍死者、61万8千人。この戦死者数は第二次大戦での合衆国の戦死者31万8千人をも上まわるものです。南北戦争が、合衆国にとっていかに大きな事件だったかということを、理解しておいてください。

この後、合衆国は北部の商工業を基礎に発展していくことになります。

合衆国の分裂を回避し、奴隸解放をしたリンカンですが、勝利の5日後に暗殺されます。犯人は南部出身の奴隸制支持者でした。

日本との関連を少々。

合衆国の海軍提督ペリーが4隻の艦隊を率いて、日本の浦賀に現れたのが1853年。『アンクル・トムズ・ケビン』出版の翌年。

日米和親条約が結ばれた1854年に、共和党が結成。

日米修好通商条約が結ばれた1858年、リンカンは大統領選挙に向けて活動中。

鎖国の日本を、武力で脅して無理矢理開国させた合衆国が、これ以後、幕末日本に登場しなくなるのは、南北戦争で、日本どころではなかったわけです。幕末の日本と、南北戦争はほとんど同時期ということです。

それにしても、明治維新の直前まで、合衆国に奴隸制度があったことが、そもそも驚きです。南北戦争という大きな犠牲を払ってでも、奴隸制度をなくすのは歴史の必然でしょう。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第96回 ラテンアメリカの独立](#)

[次のページへ](#)
[第98回 エジプトの自立](#)

世界史講義録

第98回 エジプトの自立

オスマン帝国の衰退

16世紀半ば、スレイマン1世の時代に全盛期を迎えたオスマン帝国は、その後、徐々に衰退していきます。

1683年、第二次ウィーン包囲失敗が、衰退の大きなきっかけとなりました。第一次ウィーン包囲(1529)以後も、オーストリアとは断続的に武力衝突が起きていましたが、第二次ウィーン包囲失敗後は、オーストリアやロシアなどとの戦争になり、敗北したオスマン帝国は、1699年、カルロヴィッツ条約で、ハンガリーなどをオーストリアに割譲しました。

その後も、ロシアとの戦争で、18世紀後半には黒海北岸の領土を失います。

国内的には、地方総督の自立化傾向、帝国内の諸民族の独立運動が起きてくるのですが、オスマン政府は有効な対策がうてず、ずるずると衰えていきます。

ワッハーブ王国の成立と崩壊

オスマン帝国の衰退を象徴する最初の事件がワッハーブ王国の成立です。

18世紀半ば、アラビア半島でイブン=アブドゥル=ワッハーブという人物が、ワッハーブ派という宗派をおこしました。彼によれば、当時のイスラムのあり方は、ムハンマドの教えからはずれている。だから、ムハンマド時代の教えに帰れ、というのです。確かに、当時多くのムスリムの心をとらえていたスーフィズム（神秘主義）や、聖者崇拜などは、コーランのどこを探しても出てきません。イスラムがアラブ人以外の民族に広がるなかで、つけ加えられていったものです。（現在でも、スーフィズムや聖者崇拜はあります）

ワッハーブが唱えたのは、コーランに書いていないことはダメ、というガチガチのイスラム原理主義です。これは、当時の状況を考えると、トルコ人のオスマン帝国に支配されているアラブ人が、宗教をつうじて自己主張しているととらえることができます。

やがて、このワッハーブ派を信奉したアラビア半島中央部、ネジド地方の豪族サウード家が、オスマン帝国の支配にさからい、半島にワッハーブ王国を建設しました。やがて、領土を拡大しはじめ、19世紀はじめには、メッカとメディナの2聖都を支配するまでに発展した。

オスマン帝国にとっては、メッカ、メディナを失うというのは大失態で、辺境アラビアの出来事と、放って置くわけにはいかなくなりました。ところが、この時すでに、オスマン帝国は、独力でこれを討伐する力がなかった。そこで、またあとでのべるようにエジプト総督の力をかりてようやくワッハーブ王国を滅ぼしました（1818年）。

しかし、このあと1823年、ワッハーブ王国は復興し、89年にまた滅亡しますが、20世紀初頭、サウジアラビア王国という名前で、再度復活します。現在のサウジアラビアです。

----- ギリシアの独立 -----

1821年にはギリシアで独立戦争が始まりました。当時、ヨーロッパ列国はウィーン体制のもとで、民族運動には冷淡だったのですが、ギリシアといえばヨーロッパ文明の故郷、イギリスの有名な詩人バイロンが義勇軍として独立戦争に参加したり、フランスの画家ドラクロワが「シオの虐殺」というオスマン軍によるギリシア人虐殺事件を描いたりして、しだいにヨーロッパ人に注目されます。

また、南下政策をとるロシアが、この機会にバルカン半島に勢力を拡大しようと考え、ギリシアを支援してオスマン帝国と開戦。イギリス、フランスもギリシア独立に介入して、1829年のアドリアノープル条約で、ギリシアは独立を達成しました。

バルカン半島には、独立したギリシア以外にも、スラブ人、ギリシア正教徒が多数住んでいますから、かれらもこのあとオスマン帝国からの自立を求めて運動を活発化させるし、オーストリアやロシアがこれを援助しますから、オスマン帝国政府は、ますます難しい状況になっていきます。

----- エジプトの自立 -----

すでに18世紀くらいから、アフリカ北岸地域では、在地勢力が、オスマン帝国の宗主権を認めながら、地方政権をたてていました。そのなかで、今からエジプトの話をするわけですが、なぜ特にエジプトなのかというと、エジプトはオスマン帝国から自立しただけでなく、ヨーロッパをモデルに国家建設をめざしたからです。しかも、それが一時は、成功しそうになる。最終的には、失敗してイギリスの植民地になってしまいますが。だから、19世紀のエジプトの歴史は、アジア・アフリカ諸民族が、最も早い時期に欧化をめざし失敗した先駆的な例となりました。ヨーロッパがアジア・アフリカを従属化、植民地化していくひとつの典型なのです。

また、エジプトの試みが、オスマン帝国の衰退と絡み合いながら進行していったことも重要です。

エジプトの自立はナポレオンの遠征から始まります。1798年、ナポレオン率いるフランス軍がエジプトを占領しました。これに対抗して、イギリスはエジプトに軍隊を派遣しましたが、エジプトはオスマン帝国の領土なので、当然、オスマン帝国政府も各地の部隊をエジプトに送り込みました。この時、派遣されたオスマン軍の将校だったのが、ムハンマド＝アリーです。アルバニア系と言われています。エジプト人でもなければ、トルコ人でもないということです。このムハンマド＝アリーが、徐々に頭角を現して、やがて、エジプト派遣軍を掌握します。そして、1801年と1803年にフランス軍とイギリス軍がそれぞれ撤退した後、カイロの有力者たちの支持を取りつけて、1805年にはエジプト総督を名のります。オスマン帝国政府は、これを追認するしかありませんでした。この段階で、オスマン帝国の宗主権のもとに、ム

ハンマド＝アリーのエジプトが自立したのです。

ムハンマド＝アリーは、フランス軍やイギリス軍を、その目で見て、実際に戦っているわけですから、ヨーロッパの軍隊がどういうものか、その軍事力、組織力の高さを知っています。そこで、エジプトの支配者となつたムハンマド＝アリーは、ヨーロッパを目標としてエジプトの近代化を進めていきました。

具体的には、西洋式の陸海軍の創設、造船所、官営工場、印刷所を建設し、近代化をなう人材養成のため教育制度改革などをおこないました。印刷所は、イギリスやフランスの本をアラビア語に翻訳出版するために作られたもので、アラブ地域でつくられた最初の官営印刷所だそうです。

また、マムルークたちを、式典参加を理由に集合させ、一挙に虐殺する、ということもやつた(1811年)。かれらは、ナポレオンの遠征以前から、エジプトで一定の政治的勢力を持ち続けており、中央集権化をすすめるには邪魔な存在だったのです。

近代化政策の財源は、農業です。「エジプトはナイルの賜」ですから、農業生産は高い。ムハンマド＝アリーは、農産物輸出事業を独占し、その利益を財源としました。

こうして、急速に軍事力を高めたエジプトが、その実力を見せたのが、1818年のワッハーブ王国の撃破でした。メッカ、メディナを占領したワッハーブ王国の討伐をオスマン帝国から依頼され、アラビア半島に出兵し、これを破ったのでしたね。

なぜ、ムハンマド＝アリーは、オスマン帝国の要請にしたがつたかということですが、エジプトは自立していますが、あくまでも自立であって、独立ではない。エジプトは、オスマン帝国の宗主権を認めており、正式にはオスマン帝国の一部。ムハンマド＝アリーの肩書きは、オスマン皇帝から任命されたエジプト総督なのです。

オスマン帝国からすると、強くなったエジプトは、言うことを聞いてくれるのであれば、非常に頼りがいのある舎弟です。このあと、ギリシア独立戦争がはじまるとき、オスマン帝国は、また、エジプトに出兵を要請しました。

エジプトは、これにも応じて、ギリシアに出兵します。オスマン帝国側は、その見返りとしてシリアの支配権を与える約束をしていました。ところが、ギリシア独立戦争が終わっても、オスマン帝国側が、約束を果たさない。そこで、エジプトはシリアの領有を要求してオスマン帝国と開戦しました。これを、第一次エジプト・トルコ戦争という(1831~33)。

この戦争は、エジプトが勝利し、シリアを領有することになりました。

この戦争で、南下政策を実現させたいロシアは、恩を売るためにオスマン帝国を支援しています。また、エジプトの利権をねらうフランスはエジプトを支援しました。

この地域は、アフリカ、アジア、ヨーロッパにまたがつており戦略的に重要な場所だから、ただでさえヨーロッパ列国の関心が高い。ここでの紛争は、ヨーロッパ列国にとって、利権を得たり拡大するチャンスです。もはや、オスマン帝国、エジプトという当事者だけの争いでは、収まらなくなっているのです。また、当事者よりも、バックに控えるヨーロッパ列国の方が、経済的にも軍事的にも圧倒的に優位なので、いつのまにか、当事者を飛び越えて、ヨーロッパ列国が紛争を仕切って、自分たちに都合のいい秩序

を作り上げていくことになるのです。

1838年、イギリスがオスマン帝国とトルコ＝イギリス通商条約を結びました。オスマン帝国に關税自主権のない不平等条約でした。この結果、オスマン帝国の領土であるエジプトにもこの条約が適用され、エジプトの貿易は大打撃を受けました。

オスマン帝国から完全に独立すれば、この条約から逃れることができます。そこで、ムハンマド＝アリーはオスマン帝国にエジプトの独立を求め、1839年、第二次エジプト＝トルコ戦争が始まりました。

ここで、登場するのがイギリスです。イギリスは、第一次エジプト＝トルコ戦争の結果に不満を持っていた。エジプトの領土が拡大し、それにともなって、この地域でフランスの勢力が増したことが気にくわなかつたのです。そこで、第二次エジプト＝トルコ戦争が始まると、早速、この戦争の調停に乗りだしました。フランスやロシアとの外向的な駆け引きの末、翌1840年、ロンドン会議で、イギリスは自分のつくった調停案をエジプトに押しつけて戦争を終わらせました。

その内容は、エジプトはシリアを放棄する。ひきかえにムハンマド＝アリー家がエジプト総督位を世襲する、というものでした。

ムハンマド＝アリーはこの内容に不満でしたが、イギリスの軍事的圧力の前に、これを飲まざるを得ませんでした。

結局、正式に独立することはできませんでしたが、ムハンマド＝アリー家による総督世襲が認められたので、普通はこれ以後のエジプトを、独立国家として扱っています。（書物や年表によっては、1805年をムハンマド＝アリー朝の成立としているものもあります。）

スエズ運河

ムハンマド＝アリーの死後、エジプト総督位はその子孫が継いでゆき、ムハンマド＝アリーが始めた近代化政策は、その後も引き継がれていました。

さまざまな事業の中で、エジプトの運命に大きな影響を与えたのがスエズ運河建設です。スエズ運河建設をはじめたのは、第4代総督サイード＝パシャでした。かれは、ムハンマド＝アリーの三男で、少年時代にカイロに来ていたフランス人外交官レセップスを家庭教師にしていた。レセップスにかなりなついていたようです。三男だから、本来は総督位を継ぐ立場ではなかったのですが、兄や甥が次々と死んでいったため、総督になってしまったのです。

サイード＝パシャが総督になると、フランスに帰っていたレセップスがエジプトにやってきて、総督との個人的な関係を利用して、スエズ運河建設を売り込んだのです。総督は、レセップスにスエズ運河建設の許可を与えました（1854年）。

レセップスはスエズ運河株式会社を設立し、資金を集めて1859年に着工、10年に及ぶ難工事を経て、1869年に運河は完成しました。全長167キロメートル、幅60～100メートル、深さ8メートル。総工費は当初の予算2億フランの倍を超える4億5千フラン、工事に駆り出されたエジプト農民の死者は12万人に及びました。

建設費はエジプト政府も負担し、その費用はフランスからの借り入れに頼り、完成後のスエズ運河は、エジプトとフランスの共同所有となりました。

スエズ運河の開通によって、ヨーロッパからアジアに向かう船はアフリカを廻らなくてもインド洋に抜けることができ、費用、時間は大幅に短縮されました。現在でも、活発に利用されているスエズ運河は、歴史的大事業だったと言つていいでしょう。

スエズ運河開通の時のエジプト総督は、サイド=パシャをついだイスマーイール=パシャです。イタリアの作曲家ベルディによる「アイーダ」という有名なオペラがあります。これは、スエズ運河開通記念に建てられたカイロの大歌劇場で上演するために、イスマーイール=パシャがベルディに作曲を依頼した作品です。ストーリーの原案をイスマーイール=パシャが考えたという説もあります。エジプト総督がスエズ運河の開通を飾るのに、オペラの作成を依頼するというのは、どれだけエジプトの支配層が、ヨーロッパ文化にかぶれていたかということですね。エジプトをヨーロッパの国にしたかった、そんな気持ちがあったのかもしれません。

エジプトは、スエズ運河の航行料収入を当てにしていたのですが、これが思うようにのびず、また、アメリカ南北戦争のおかげで大きく伸びていた綿花の輸出による収入が、南北戦争の終結による合衆国の国際貿易復帰によってダウンしてしまいました。

急速な財政悪化に困ったエジプト政府は保有していたスエズ運河の株式を売りに出すことになりました。1875年、これを買収したのがイギリスです。

この時のイギリスの首相がディズレーリ。積極的な帝国主義政策をとり、世界に利権を拡大していた。エジプト政府によるスエズ運河株式売却のニュースを知ると、このチャンスを逃してはいけないと思った。そこで、ディズレーリは議会にはからず独断でこれを買い取りました。議会の賛成を得ていないから政府からお金が出ない。そこで、大富豪ロスチャイルド家から40万ポンド（約1億フラン）を借りたという。

この結果、エジプトの領土にあるにもかかわらず、スエズ運河の所有権はエジプトにはないという事になってしまいました。

スエズ運河株式を売ったにもかかわらず、エジプトは外国から借り入れた資金の返済ができなかった。スエズ運河以外にも、近代化政策のため外国から多額の借金をしていたのでした。

1876年、ついにエジプト政府が財政破綻すると、債権国（お金を貸している側の国のことと言います）であるイギリスとフランスが共同でエジプト財政を管理下に置きました。

ウラービー=パシャの革命

このような状況の中で、「エジプト人のためのエジプト」をスローガンに、政治改革運動が起こってきました。指導者はエジプト軍の将校ウラービー=パシャです。

ムハンマドニアリー以来のエジプト総督達は、近代化には熱心でしたが、立憲政治や議会政治は取り入れず、専制政治をつづけていました。しかし、近代的な教育を受けたエジプト人の中から、立憲政治をめざ

す勢力があらわれてくるのは当然でしょう。

「エジプト人のためのエジプト」という言葉の中は、英仏から財政権を取り戻そうというだけではなく、アルバニア系のムハンマド＝アリー朝の総督に対する批判も含まれています。

ウラービー＝パシャは、1882年、権力を掌握し、自分自身は陸軍大臣となって、憲法制定などの改革に着手します。これを見て、イギリスはフランスには相談せず、単独でエジプトに軍隊を派遣し、圧倒的な軍事力でエジプト軍と市民の抵抗を鎮圧して、占領してしまいました。

これ以後、エジプトはイギリスの支配下に入り、ムハンマド＝アリー朝の総督はイギリスの傀儡となりました。イギリス軍はスエズ運河警備を名目に、運河地帯に常駐しました。

改革運動の指導者ウラービー＝パシャは、イギリスに逮捕されセイロン島へ島流しとなりました。失敗に終わったウラービー＝パシャの改革運動は、現在は「ウラービー＝パシャの革命」と言われていますが、数年前までの教科書には「ウラービーの反乱」と書かれています。イギリスから見れば反乱だったんですね。誰の視点から見るかで、同じ事件でも評価や呼び方が大きく変わる一例です。

ウラービー＝パシャの改革と失敗は、同時代の日本でも大きな関心を持たれたようで、洋行する日本政府の高官が、セイロン島のウラービー＝パシャを訪ねることがちょくちょくあったようです。伊藤博文の娘婿が訪問しているようです。また、農商務省大臣秘書官が東海散士というペンネームで書いた小説『佳人之奇遇』(1885)に、ウラービー＝パシャが登場します。この小説は結構人気があったようですから、ウラービー＝パシャは明治期の日本人にはわりと知られていたかもしれません。

エジプトの先例に学びながら、明治期の日本は国家建設をすすめたのです。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。



ヨーロッパ史や中国史のように、人物伝や小説などで物語的ななじみがあると、歴史書を読んでも、理解しやすいのだが、いかんせんイスラム史は（特に近代）は、とつつきにくい。この本もそうなのですが、それは、本の責任ではない。敬遠せずに、しっかり読み込んでいくことが、勉強だし、そこから徐々に面白さがわかってくるというものです。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第97回 アメリカ合衆国の発展](#)

[次のページへ](#)

[第99回 オスマン・イラン・中央アジア](#)

世界史講義録

第99回 オスマン・イラク・中央アジア

オスマン帝国の改革

前回述べたように、オスマン帝国は、18世紀後半以降、北西のオーストリアや北のロシアから徐々に領土を奪われ、各地で在地勢力が自立化し、それに対して有効な手立てが打てません。じり貧です。改革の必要性は、統治者であるオスマン朝の上層部もわかつっていました。

1826年には、皇帝マフムト2世により、イエニチエリが廃止されます。

1839年には、アブデュル＝メジト1世がギュルハネ勅令を発布し、タンジマートの開始を発令しました。タンジマートとは、西欧化のための改革のことで、皇帝による上からの改革なので「恩恵改革」と訳されています。行政、法制度、教育などあらゆる分野で西欧化がすすめられました。改革は「イスラム・非イスラムを問わず全臣民の法の前の平等」をうたっていたのですから、その発想はかなり進歩的ですね。ただし、オスマン帝国の隅々まで改革が実現されていたわけではなく、また、独立を求めるバルカン半島の諸民族にとっては、タンジマートは満足できるゴールではありませんでした。

西欧化をすすめれば、必然的に西欧の論理に従わざるを得なくなります。クリミア戦争で、英仏の援助を受けて勝利したオスマン帝国は、その英仏の要請で、非ムスリムの政治的権利の尊重を約束します。また、外債受け入れ（英仏から借金をすること）、鉄道建設、イギリス資本によるオスマン銀行設立などの事業をすすめることになりました。

1838年のトルコ＝イギリス通商条約以来、ヨーロッパの工業製品の輸入が急増し、国内の産業が衰退した結果、オスマン帝国の財政は逼迫していました。そこに、借金や鉄道建設をおこなったため、1875年に、国家財政は破綻してしまいました。

結局、タンジマートは、西欧諸国が経済進出しやすいように制度を整備し、その結果西欧諸国に食い物にされてしまったという結果をまねいたのです。

経済的には、植民地化していったオスマン帝国ですが、教育の西欧化などで、新しい考え方を身につけた改革派の官僚や軍人が育ち、さらなる制度改革がはじまります。それが、1876年に発布されたミドハト憲法です。立憲君主制を定めたこの憲法は、改革派の宰相ミドハト＝パシャが、新皇帝アブデュル＝ハミト2世を擁立して発布したもので、アジア初の憲法制定です。この憲法にのっとって、国会も開設されました。

しかし、翌1877年、露土戦争がはじまるとき、皇帝アブデュル＝ハミト2世は、戦争を理由に憲法を停止し、国会を解散、ミドハト＝パシャを国外追放します。こうして、アブデュル＝ハミト2世は、専制政治を復活させました。

しかし、このあとも、官僚や軍人の中に、専制政治に反対し立憲政治復活をめざす「青年トルコ」と呼ばれるグループが作られ、立憲革命のチャンスをうかがいつづけていきます。

先走っていうと、オスマン帝国では、西欧化=立憲政治をめざす勢力と、専制政治を維持しようとする勢力のせめぎ合いがこのあとづき、第一次大戦後、西欧化勢力が政権を握り、現在のトルコ共和国が成立します。他のイスラム諸国とちがい、オスマン帝国=トルコで、これだけ早い時期から、西欧化の試みがつづいたのは、ロシアやオーストリアと国境を接していたことが大きいでしょう。とくに、オスマン帝国はロシアに負けつけ、領土をどんどん削られつづけている。戦争に勝つためには、西欧化しかないというのが、軍人たちの実感ではないでしょうか。青年トルコでは、軍人たちが、その中心メンバーになっていますし、第一次大戦後トルコ共和国を建国したケマル=パシャも軍人です。現在のトルコでも、イスラム政党が力をつけてくると、これに対抗して政治の世俗主義（非イスラム）を守ろうとするのは軍部です。軍人は、一般的に保守的・反動的と思われがちですが、トルコでは必ずしも簡単に割り切れないです。

----- イラン -----

オスマン帝国の東に接するイラン高原は、どうなっていたのでしょうか。

ちょっと、復習がてら、古代からイラン（ペルシア）について確認しておきましょう。

最初に登場するのが、アケメネス朝ペルシア。BC550年からBC330年まで。オリエント地方を大統一しました。ギリシアに侵攻したペルシア戦争が有名でしたね。アレクサンドロス大王に滅ぼされ、いったんは、ギリシア人の支配下に入りますが、BC248年から226年までは、パルチアが成立。これは、ペルシア人の国でした。西のローマ帝国と対立していました。パルチアが滅ぶと、こんどはササン朝ペルシアが成立(226~651)。ゾロアスター教を国教にしました。この王朝で作られた美術工芸品が、シルクロードを通って日本にもたらされ、現在も正倉院に残されています。

ササン朝は、イスラム教を奉じるアラブ人によって滅ぼされ、以後、この地域はイスラム化すると同時に、ペルシア人ではない異民族によって支配されます。ウマイヤ朝、アッバース朝、イル=ハン国、ティムール帝国などです。

他民族の支配下に入るものの、高い文化と伝統を持つペルシア人からは有能な人材が多くて、各王朝で官僚として活躍し、宰相になったりしています。

1501年、サファヴィー朝が成立します。ササン朝以来のイラン民族王朝の復活です。サファヴィー朝はシーア派を国教にして、西のオスマン帝国と対抗します。サファヴィー朝の支配のもとで、イラン人の民族意識が芽生えたと言われています。

サファヴィー朝が衰えたあと、18世紀末にイランを支配したのがトルコ系の王朝カージャール朝です。イラン人の多くはシーア派ですが、カージャール朝の支配者はスンナ派です。

カージャール朝は南下政策をとるロシアに圧迫され、1828年、不平等条約であるトルコマンチャイイ条約をロシアと結び、アルメニア地方をロシアに割譲し、治外法権を認めました。1841年には、イギリスとも不平等条約を結び、以後、北のロシア、南のイギリスに、徐々に従属していきました。

植民地化に抵抗するイラン人の運動として、1848年から50年にかけて起きたバーブ教徒の乱が有名で

す。バーブ教は、イスラム・シーア派から派生した新興宗教で、ヨーロッパ人に従属する中で、混乱をつづける社会を改革し理想社会を作るため反乱を起こしました。創始者バーブは、政府に逮捕され1850年に処刑されました。その後も、バーブ教は反政府運動をつづけますが、激しい弾圧でやがて勢力を失っていきました。

不平等条約で庶民生活が困窮するなかで、民族主義や外国人排斥、政治改革を訴える新興宗教が勢力を拡大して、反乱をおこすというパターンは、バーブ教の反乱だけではありません。あとで触れる中国の太平天国の乱や、朝鮮の東学党の乱（甲午農民戦争）と、同一のパターンです。西欧諸国から圧迫をうけたアジア民族の典型的な反応です。

イラン政府（カージャール朝）は、この後も、さまざまな利権をイギリスなどに与えていきます。

1891年におきたタバコ＝ボイコット運動は、政府がイギリスにタバコの製造販売の利権をあたえたことに抗議しておこった国民的大衆運動です。ウラマーと呼ばれる宗教指導者たちが先頭に立って民衆を組織し、反政府・反英運動をくりひろげ、利権をなくさせることに成功しました。イランでは、宗教指導者が強い影響力を持っていて、今から約30年前にも、ホメイニ師という宗教指導者のもと、革命が成功して国王を追放しました。1978年のイラン革命です。みなさんが生まれる前のことですが、私などには非常に印象的な事件でした。現在のイランも、大統領がいますが、宗教指導者の支持がないと権力を維持できないようです。

1906年には、専制政治に反対してイラン立憲革命が成功し、議会が開設されますが、ロシアの圧迫によって、議会は閉鎖されました。ロシアやイギリスにとって、弱体化したカージャール朝による専制政治のほうが、コントロールしやすく都合が良かったのです。

この後、1925年まで、カージャール朝はつづきました。

アフガニスタン・中央アジア

アフガニスタンには、パシュトゥーン人をはじめとする多くの民族が住み、ひとつの国としてまとまるようになったのは、18世紀の半ばです。1747年、パシュトゥーン人のアフマド＝シャー＝ドゥッラニーという軍人がイランから独立してドゥッラニー朝を建てたのが、現在のアフガニスタンの始まりです。このアフガニスタンの北、中央アジアでは、ロシアが勢力をのばし領土を拡大していました。アフガニスタンの南東インドを支配したイギリスは、ロシア勢力の南下を阻止するため、アフガニスタンを勢力範囲にしようと考え、19世紀以降、インドからアフガニスタンに侵入し、イギリス・アフガニスタン戦争をおこしました。

ところが、現在でも大国の支配をなかなか受けつけないアフガニスタンです。イギリス軍は、地方に強い影響力をもつ部族勢力のゲリラ活動に悩まされ、アフガニスタンを完全に支配することはできませんでした。1879年に、どうにかアフガニスタンの外交権を獲得し、間接的にロシアの南下をおさえることになりました。

アフガニスタンの北からアラル海にかけての中央アジアの地域には、トルコ系のウズベク人が、ブハラ＝

ハン国、ヒヴァ=ハン国、コーカンド=ハン国を建てていました。これらは、1860年代から70年代にかけて、ロシアの保護国になるか滅ぼされるかしていきました。

----- アフガーニー -----

今まで見てきたように、北アフリカから西アジア、中央アジアのイスラム諸地域は、西欧諸国の植民地もしくは半植民地の地位に落ち込んでいくのですが、このような状況に危機感を覚え、反西欧の主張をかけて、イスラムの連帯と改革を訴えた人物がアフガーニー（1838～97）です。反イギリス、反帝国主義の運動をするために、イスラム世界の各地を旅して、イスラムの連帯を訴えました。アフガニスタンから、イラン各地、イスタン布尔、カイロ、さらに、ロンドン、パリ、モスクワなど世界各地を訪れ、出版物を出したり、政治結社をつくったり、西欧に抵抗するためのネットワークづくりをおこないました。エジプトのウラービー=パシャの革命運動や、イランのタバコ=ボイコットに大きな影響を与えたといわれています。

以前は、教科書には載っていなかった人物ですが、現代、イスラム社会に焦点があたり、研究がすすむなかで、もっともはやく西欧と対抗してパン=イスラム主義を唱えた人物として注目されています。

参考図書紹介・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

 <p>書名: 世界の歴史 近代(イスラーム)挑戦 作者: 露台サハラ編、綱ヶ繩(繩)綱(縛)譲第始 蝶(蜀)譲御(蝶)譲 謹-蝶 amazon.co.jpで買う</p> <p>縛励ハ繩、縛舌す縛シ縛オ縛、 縛◆※</p>	<p>ヨーロッパ史や中国史のように、人物伝や小説などで物語的ななじみがあると、歴史書を読んでも、理解しやすいのだが、いかんせんイスラム史は（特に近代）は、とつつきにくい。この本もそうなのですが、それは、本の責任ではない。敬遠せずに、しっかり読み込んでいくことが、勉強だし、そこから徐々に面白さがわかってくるというものです。</p>
---	---

第99回 オスマントルコ・イラク・中央アジア おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
 第98回 エジプトの自立

[次のページへ](#)
 第100回 イギリスのインド支配

世界史講義録

第100回 イギリスのインド支配

----- インドの政治状況 -----

インドは、16世紀以降、ムガル帝国が支配していましたが、第6代皇帝アウラングゼブ（位1658～1707）の死後、衰退していきました。各地で在地勢力が自立していきます。代表的なものが、インド中部のデカン高原を中心とするマラータ同盟、インド北部パンジャーブ地方のシク教国です。マラータ同盟はマラータ族の諸侯連合でヒンドゥー教の国。シク教国は、その名の通りシク教という宗教によって建てられた国です。シク教は16世紀前半にナーナクという人物が始めた宗教で、イスラム教とヒンドゥー教を融合したものです。シク教徒の男性は長く伸ばした頭髪をターバンで包んでいて、名前の最後に必ずシング（シン）とつけるのが特徴で、現在でもそれは変わりません。シク教徒は勇猛果敢で知られていて、昔、プロレスラーにタイガー・ジェット・シンという人がいました。アントニオ猪木と死闘をくりかえしたんですが。彼が本物のシク教徒かどうかは知りませんが、勇猛なシク教徒ということを売りにしていたんですね。まあ、日本では、シク教徒のことをほとんどの人が知らなかつたと思いますけど。

----- イギリス東インド会社によるインド征服 -----

ちょうどムガル帝国が衰退していくのと入れ替わるようにして、イギリスがインドに登場します。イギリスは17世紀以降、マドラス、ボンベイ、カルカッタに商館を建設し、ここを拠点として貿易を本格化させます。商館といっていますが、実際には要塞のようなもので、商売をするだけでなく、地元の権力者との交渉や戦いによって土地も獲得していきました。

フランスも、17世紀後半には、同様に商館を建設しました。フランスが拠点にしたのはシャンデルナゴルとポンディシェリで、シャンデルナゴルはベンガル地方にあってカルカッタに近い。ポンディシェリも南インドでマドラスに比較的近い。当然、イギリスとフランスは競合することになります。

一時は、フランスがイギリスを圧倒した時期もあったのですが、18世紀の半ばに南インドでイギリスとフランスが戦ったカーナティック戦争で、イギリスが勝利してからは、南インドでフランス勢力は衰退します。

そして、ベンガル地方でイギリスとフランスが戦ったのが、有名な1757年のプラッシーの戦いです。イギリス軍の兵力は約3000。ただし、このうちイギリス兵は950名ほどです。あとの2000名は何か。イギリスが現地で雇った傭兵。インド人の兵士です。対するフランス軍はというと、フランス兵はわずか50名。しかし、フランスは現地の支配者であるベンガル太守と同盟を結んでおり、このベンガル太守軍の兵力約6800。イギリス対フランスの戦争といいながら、戦いの中心となっているのはインド人同士というところが特徴的です。また、イギリス兵とフランス兵の少なさは、意外ですね。私たちは英仏はものすごく強く、何でも思うがままにできたというイメージを持ちがちですが、ヨーロッパからインドまで兵

士を派遣するのは、イギリスもフランスも大変な負担だったのです。

話を戻すと、イギリス側3000、フランス側6800ですから、フランス側が圧倒的に有利です。ところが、この戦いでイギリスが勝利します。その立役者として活躍したのが、イギリス東インド会社のクライブです。説明が遅れましたが、イギリスの活動主体はイギリス政府ではなくて、イギリス東インド会社です。イギリス、イギリスと言っていますが、イギリス政府が指揮しているのではない。実体はイギリス東インド会社ですから、注意してください。で、そのクライブは、ベンガル太守軍の將軍に買収工作をした。太守を裏切り、イギリス側に寝返ったら、戦後、ベンガル太守の地位につけると約束をしたのです。將軍は買収に応じました。戦いが始まると、この將軍、ベンガル太守の命令を無視し、軍を動かさない。結局この裏切りの結果、イギリスが勝利することになったのです。この買収工作で、クライブは、イギリス本国で一躍英雄となりました。

この戦闘が、結果としてインドの運命を変えることになりました。イギリス東インド会社は、この後フランス勢力をインドから一掃しただけではなく、新しいベンガル太守を傀儡（かいらい）としました。1765年には、イギリス東インド会社はベンガル地方の徵税権を獲得しました。貿易会社が、他国の一地方の税金を徴収するのです。もう、貿易会社と言うより、統治機関と言っていいでしょう。事実上、ベンガル地方を支配するようになったということです。ベンガル地方というのは、現在のバングラデシュです。

これ以後、インドはイギリス産業の原料供給地兼製品市場とされていきました。

イギリス東インド会社はインドから木綿を買い付け、イギリス本国に輸出します。折からの産業革命で、発展しつつある綿織物工業の原材料です。そして、イギリスの機械制大工場で生産された綿織物が、今度はインドに輸出されます。インドは世界有数の綿織物生産国でしたが、手工業だったので、イギリスから輸出される大量生産で安価な綿織物に対抗できません。この結果、インドの綿織物工業は大打撃を受けました。「世界に冠たる織物の町」といわれたダッカの人口は、わずかのうちに15万から3万に激減しました。インド総督ベンティングは、1834年にイギリス本国に送った年次報告に「世界経済史上、このような惨状に比すべきものはほとんど見いだせない。職工たちの骨がインドの平原を白色に化している」と書いたほどです。

お金とモノの流れを単純に考えてみると、イギリス東インド会社は徵税権を持ち、インド人から税金をとる。その税金で、インド農民から原綿を買い付けると考えれば、ただで原料を手に入れている、もしくは奪っているのと同じことです。それを加工した製品をインド人に売るということは、つまり、奪った原料で作った製品を、奪った相手に売りつけているわけで、富は一方的にイギリスに流れることになります。イギリス側にとって、これほど儲かる商売はないし、インド側からみれば、最大限搾り取られているわけです。

このあと、イギリスは、インド各地の地方政権を次々に支配下に置いていきます。インド征服のための大きな戦争としては、南インドのマイソール王国とのマイソール戦争（1767～99）、マラータ同盟とのマラータ戦争（1775～1818）、シク教国とのシク戦争（1845～49）があります。

シク戦争の勝利で、イギリスによるインド征服は事実上完了しました。

イギリス東インド会社によるインド支配

イギリス東インド会社が、インドを支配するようになって、インドは重い負担に苦しむようになります。

まず、税負担があります。イギリス東インド会社の徴税額をみると（プリントの表を参照しながら）、1765年ベンガル太守時代には、82万ポンド。1770年東インド会社時代になると234万ポンド。1790年には340万ポンドと、増加しつづけています。別の資料によると、東インド会社による地租（土地税）収奪は、1771年から72年にかけて234.2万ポンド。これを指数100とすると、1821年から22年が1372.9万ポンドで、指数589。1856年から57年が1531.8万ポンドで指数654。こちらでも、どんどん税額が増えている。

税を増やすだけでなく、東インド会社は、インド農民に高く売れる商品作物の栽培を強制します。綿布の染料に使う藍や、麻薬アヘンの原料となるケシなどです。小麦など食糧をつくるべき畑で、食糧を作れない。食糧生産量は落ちる。藍やケシをいくら栽培しても、腹の足しにはならない。この結果、飢饉が激増します。

インド大飢饉回数の表があります。

18世紀 大飢饉3回 死者数不明

1800～25 大飢饉5回 死者100万人

1826～50 大飢饉2回 死者40万人

1851～75 大飢饉6回 死者500万人

1876～1900 大飢饉18回 死者1600万人

19世紀に2000万人以上が餓死しているのです。イギリスの支配によって、インドは貧困に追い込まれたのです。

印度大反乱

イギリス東インド会社は、インドを支配するための軍隊を持ちました。東インド会社軍といいます。全兵力23万8千人。兵力の内訳を詳しく見ると、そのうちイギリス兵、つまりイギリス人の軍人ですが、その人数は3万8000人。残りの20万人がインド人傭兵です。このインド人傭兵のことをシバーヒー（またはセポイ）といいます。シバーヒーは上級カースト出身者が多く採用されたようです。イギリス側は、カースト制度を利用して効率よく支配するために、上級カースト出身者を採用したのでしょう。また、上級カーストの者にとって、たとえ支配者がイギリス人であっても、自分たちが支配者側の一員になることは抵抗感が少なかったのかもしれません。俺たちは偉いのだから、イギリス人が雇うのは当然、イギリス人と同じ支配者階級になるのは当然、と思っていたのかもしれません。

とにかく、この約20万のシバーヒーが、イギリス東インド会社のインド支配の最終手段、暴力装置でした。シバーヒーたちがイギリス東インド会社から離反すれば、イギリスの支配は不可能になります。イギリス東インド会社軍としては、シバーヒーを飼い慣らし、手なずけておかなければならぬのですが、1857年シバーヒーの反乱が起こりました。

原因はいろいろあるのですが、そのひとつが、イギリス人のインドの伝統文化に対する無理解です。たとえば、インドのバラモンなどの上級カーストに、サティという風習がありました。インドでは人が死ぬと、一般に火葬をするのですが、夫婦で夫が先になくなった場合に、火葬をしている炎のなかに、未亡人が飛び込んで焼身自殺をするという慣行があった。これがサティです。夫の死を悲しんで自殺をするのは、貞淑な妻の鏡である、素晴らしい行いであるとして、サティが奨励されていた。

ところが、この風習をイギリス人がみて、びっくりするわけです。自殺を奨励するというのは、とんでもないわけです。しかも、夫が死んで、妻が後を追う、というときに、皆さんには、おじいさん、おばあさんの老夫婦を思い浮かべるかもしれません、イギリス人が見た夫婦は全然そんのじゃなかった。50代60代のお金持ちのバラモン男性が、年をとってから、14歳15歳の花嫁を迎えるということが当時は普通にあった。だから、60歳で死んだ夫を焼く炎のなかに飛び込むのは、まだ子供といつてもいい少女たちなのです。これはひどい、と思うよね、普通は。どう考えても、こんな少女が、自ら死にたいと願っているわけがない。早く飛び込んで死なんかい、という親族一同の視線にさらされて、死なざるを得ないように精神的に追い込まれていくというのが、実際のありようだったのでしょう。

そこで、イギリスは、野蛮きわまりないとして、サティ禁止令を出した。ところが、サティはバラモン身分の者には、自分たちの身分にだけ許された美しい慣行です（低位カーストではサティは行われていませんでした）。それを、一方的に野蛮と決めつけられて、イギリスに反発する。

サティの風習を禁止すべきかどうかの判断は今は措きますが、こんな感じでイギリス人はインド人のさまざまな風俗習慣を野蛮と感じ、見下す。インド人からすれば、イギリス人とは価値観は違うかもしれないが、インドは3千年以上の歴史を持つ文明国です。一方的に野蛮人扱いされることに我慢できない。シパーイーたちも、さまざまな不満をイギリス人に対して持つようになるのです。

そういうなかで、シク戦争が終了して、インド征服が完了すると、シパーイーへの待遇が悪化しました。さらに、ヒンドゥー教のタブーに係わる命令が出され、シパーイーの不満が高まりました。どんな命令かというと、ひとつはシパーイーに対する海外派兵。もうひとつは、新式銃の使用です。バラモンなど上級カーストでは、インドの外に出ると身分がけがれると考えられていたので、海外派兵に反発した。

そして、新式銃というのが、反乱の直接的な原因になります。この時代、銃は基本的に日本の戦国時代と同じで、鉄砲の先端から火薬と玉を入れて、銃身底部に押し込める先込め銃でした。東インド会社軍が採用しようとした新式銃、エンフィールド銃というのですが、これも先込め銃なんですが、火薬と弾丸と一緒に筒状の油紙に包まれている。それまでは、弾を入れるときに、火薬は火薬入れから取り出し、玉は玉で別のところから出して、銃に込めていた。エンフィールド銃は、この火薬と玉がセットになっているので、いっぺんに取り出せるわけです。弾薬包みを取り出して、歯で噛みちぎり、包みから火薬を銃に流し込んだあと、油紙がついたままで弾丸を落とし込むのです。で、この油紙の油に牛と豚の脂が使われているという噂が流れた。これがシパーイーたちの猛反発をよびました。弾丸を込めるときに油紙を噛みちぎるから口に触れる。牛はヒンドゥー教徒にとって神聖な動物で、その脂を口にするということは絶対にできない。身分がけがれてカーストから追放です。また、豚はイスラーム教では不浄の動物とされ、ムスリムのシパーイーもこれを口にすることを拒否しました。

イギリス人の軍幹部は、牛と豚の脂は使っていないと、否定しましたが、いったん広がった噂は消すことができなかった。それまでの、イギリス側の姿勢に対する反感も手伝って、各地の部隊で不穏な雰囲気が高まっていました。

シパーイーへの家族からの手紙が急増したのを不審に思ったイギリス人の上官が、手紙の中身をチェックすると、「新式銃の火薬包みの使用を拒否せよ、拒否しなければカーストから追放する」と書かれてあつたという。また、ある基地で、シパーイーが民間の作業員に水を分け与えようしたら、その作業員が「あなたはまもなく自分のカーストを失うから」と言って、水を拒否したと伝えられています。ヒンドゥー教のタブーをおかして、所属カーストから追放されると、アウトカースト、不可触民にされてしまう。そんな最低の身分の者から、水をもらえない、ということですね。新式銃の導入に伴う噂が、一般にも広がり、関心が持たれていたことがうかがわれます。

あと、これは、どういう意味があるのか今もわからないのですが、反乱の直前、インドの村から村へチャパティーがリレーされていったのを、イギリス人が目撃して報告しています。ある村から別の村へチャパティーが届けられる。すると、その村では、新たに数枚のチャパティーを焼いて、さらに別の村に届けていったという。チャパティーは小麦粉を焼いたパンのような食べ物です。このリレーにどんな意味があるのか、目撃したイギリス人には理解できなかつたが、異様なものを感じて、記録したのでしょうか。あとから考えると、なにか反乱の合図だったのかもしれない、ということです。同じように、東インド会社軍の部隊から部隊へと蓮の花がリレーされていて、これも何かの合図だった可能性があります。

不穏な空気が広がるなかで、1857年5月、シパーイーが反乱を起こしました。きっかけは、メーラトという町にあった部隊での事件です。この部隊で、新式銃を使った演習が行われたのですが、イギリス人上官の命令を拒否して、90名の兵士中85名が弾薬筒に触ろうとせず演習が不能になつた。軍隊にとって命令拒否は重い罪です。軍法会議の結果、問題の兵士たちは、見せしめのために、他の兵士たちが集合させられている前で、軍服をはぎ取られ足かせをはめられて牢に入れられました。残りのシパーイーたちは、これに反発し、翌日牢に入れられた仲間を救うために蜂起し、反乱はメーラト以外の各地の基地に広がりました。

各地のシパーイーが蜂起すると、東インド会社軍と関係のない民衆もたちあがり、インド全体が反乱状態となりました。これをインド大反乱といいます。以前は、シパーイーの反乱、もしくはセポイの乱とも呼ばれていましたが、反乱に参加したのはシパーイーだけではないので、現在はインド大反乱と呼んでいます。

反乱にはイギリスに滅ぼされた地方政権、インドでは藩王国と呼びますが、この藩王国の旧支配者層など、さまざまな勢力が加わりました。全インドの三分の二が反乱に参加したといいます。ただし、各地の反乱軍は、互いに連携するわけでもなく、全体の指導部もありませんでした。デリーを占領した反乱軍は、引退していたムガル帝国皇帝を、反乱軍のトップとして擁立しました。かれはイギリス東インド会社から年金を受け取り、名目だけのムガル皇帝として存在していました。ただし、彼はただの飾り物で、何の指導力もありませんでした。

反乱勢力は、統一した作戦や、反乱成功後の共通目標もなかつたのですが、不意をつかれたイギリス側は、一時、インドから撤退しました。しかし、やがて態勢を整えて反撃を開始しました。反乱に参加していなかつたシク教徒によるシク兵、イラン兵、ネパール人のグルカ兵を動員し、9月にはデリーを反乱軍

から奪還、以後は各地の反乱勢力を各個撃破していきました。1859年までには、完全に反乱を鎮圧しました。

イギリスは、反乱を起こしたものたちに徹底的な報復を行いました。反乱側についた町や村の住民を虐殺したり、反乱軍の捕虜を大砲の砲身にくくりつけて吹き飛ばしたり、牛や豚の血を無理矢理飲ませてから殺すなど、見せしめ的な処刑をおこなっています。プリントの挿絵の左側に描かれているのが大砲にくくりつけられている捕虜です。右側で馬に乗っているのがイギリス人の指揮官ですね。

結局、反乱は失敗したわけですが、この反乱で活躍したインド人の武将たちは、現在も民族のヒーローとして人気があります。一人だけ紹介しておくと、インドのジャンヌ=ダルクと呼ばれているラクシュミー=バーイーという女性。彼女はジャーンシー藩王国という国の王妃でしたが、イギリスに国を奪われ、反乱が起きると女性ながらも兵士を率いてイギリス軍と戦いました。養子にした幼い子供を背負って、馬に乗っている彼女の肖像画があります。最後には戦死するのですが、ゲリラ戦でねばり強く戦いつづけた女性でした。

インドの大部分が参加した反乱だったのに、しかも、東インド会社軍の傭兵部隊シパーヒーまでが反乱側にたったのに、なぜ、反乱は敗北したのでしょうか。

最大の理由は、反乱側内部の不統一です。はじめから反乱軍は烏合の衆で指導部もありませんでしたが、加えて、地域間の対立、カースト間の対立によって、インド人どうしがひとつにまとまれませんでした。イギリス側は、このようなインド人どうしの対立を巧妙に利用していったのです。同じインド人でありながら、シク教徒がイギリス側についているのがそのよい例ですね。

----- その後のインド -----

反乱をほぼ鎮圧した1858年、イギリス本国政府は、東インド会社を解散させ、インド全土を直接支配することにします。名目だけつづいていたムガル帝国も完全に滅亡させられます。

1877年には、インドにインド帝国を成立させました。ちょっとわかりにくいですが、イギリス政府がインドに新しい国をつくったということです。その国の名前がインド帝国という。そして、インド帝国の皇帝に即位したのがイギリス国王のヴィクトリア。だから、この時点から、ヴィクトリアはイギリス国王兼インド皇帝ということですね。ただし、ヴィクトリア女王はインドに行ったりしません。ずっと、イギリスです。イギリスのエリート貴族たちが、インド帝国の高級行政官としてインドに赴任して、インド人の役人を指揮しながらインドを支配するわけです。インド帝国は、イギリスの完全な植民地です。

イギリスのインド支配は巧妙で、インドが団結してイギリスに抵抗しないよう分割統治をおこないました。インド帝国は、イギリスの直轄領と、550以上の藩王国から構成されていて、藩王国は外交権はないし、イギリスの監視付きではありますが、マハラジャとよばれる藩王の自治が認められていた。マハラジャからすれば、無理してイギリスに抵抗せず、このままマハラジャの地位を認めてもらった方が安泰です。旧勢力を温存し、旧支配者層の抵抗を薄めながら支配したのです。このインド帝国は第二次大戦後の1947年までつづきました。

参考図書紹介 · · · もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

インド大反乱一八五七年(中公新書 606)

(第100回関連)

長崎暢子著。中公新書。講義で紹介したチャパティのリレーの話は、この本で読みました。インド大反乱に関する最も手頃な入門書だったのに、今は、絶版になっているようで、ビックリしました。たいていの図書館にはあると思うので、インド大反乱を詳しく知りたい人には一読を勧めます。

第100回 イギリスのインド支配 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第99回 オスマン・イラク・中央アジア](#)

[次のページへ](#)

[第101回 東南アジアの動向](#)

世界史講義録

第101回 東南アジアの動向

東南アジア地域の概観

ヨーロッパ列強による東南アジアへの進出についての話です。時代は19世紀以降。東南アジアについては苦手の人が多いので、どんな地域なのかざっと見ておきましょう。

東南アジアは島嶼(とうしょ)部 (=大小さまざまな島からなる部分)と大陸部に分かれます。現在、島嶼部の大部分はインドネシアに属しています。大陸部は、西からミャンマー(ビルマ)、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム。マレー半島にはマレーシア、その先端の島がシンガポールですね。

マレー半島をのぞく大陸部の国は、川と結びつけて覚えてほしい。

ミャンマーはイラワディ川、タイはチャオプラヤ川、カンボジアとラオスはメコン川、ベトナムはホン川。それぞれの国はこれらの大河流域に生まれました。これらの大河の多くは、中国の雲南地方に源があります。

そして大河に沿って、中国雲南地方から南下してくる民族移動の流れがあります。たとえば、タイの主要民族はタイ人ですが、中国雲南地方にもタイ族がいて、このタイ族の一部が長い時間をかけて南下してできた国がタイです。また、ベトナムは現在は南北に細長い国ですが、もともと北部のホン川流域にいたベトナム人がじょじょに南に領土を広げて現在の領域になったので、かつては、南部にはチャム人の国がありました。

東南アジアの歴史に最初に登場するのは、「港市国家」とよばれる国々です。インド人などの貿易船が立ち寄る港を支配する現地の首長が、港湾施設や市場を整備して、これが発展して生まれた国家です。

熱帯雨林の海岸線や河川流域に港市国家が点々とあって、その国の王様の権力が及ぶ範囲がその国の領土。その時々のよって、国の勢力範囲はのびたり縮んだりします。現在の地図を見ると、はじめから大きな領土を持った国があったように思いがちですが、そうではない。港市国家と港市国家の間には、誰も住まないジャングルがひろがっているというのが、17世紀くらいまでの東南アジアのイメージです。

以上のようなことを頭に置いて、具体的に見ていきましょう。

ミャンマー

イラワディ川流域に最初に登場する国はピューという。建てた民族はピュ一人。8世紀から11世紀くらいまでつづきました。

この国をほろぼしたのがパガン朝。イラワディ川中流のパガンを都にして栄えます。ミャンマー最初の統

一王朝とされます。民族はミャンマー人。スリランカから上座部仏教を導入しました。雲南地方とベンガル湾をむすぶ交易で繁栄しましたが、元の侵入が原因で1287年に滅びました。

13世紀から16世紀にかけて、イラワディ川下流地域にはモン人のペグー王国がありました。モン人は、チャオプラヤ川下流でも7~8世紀にドヴァーラヴァティーという国をつくっています。ドヴァーラヴァティーは、港市国家連合だった。モン人は、ミャンマーからタイにかけて、海上貿易で活躍した民族のようです。

ペグー王国を滅ぼしてできたのがトゥングー朝（1531~1752）。ミャンマー人とモン人の連合国家でした。パガン朝につづく、ミャンマー二度目の統一王朝で、一時はタイのアユタヤを支配したことあります。

トゥングー朝がモン人の反乱のため滅亡したあと、ミャンマー人が建国したのがコンバウン朝（1752~1885）。清朝支配下の雲南地方に侵入したり（1765）、タイのアユタヤ朝を滅ぼしたり（1767）と、軍事的には活発です。1822年にはインドのアッサム地方を征服しますが、これがきっかけとなり、その2年後1824年にはイギリスとの第一次イギリス・ビルマ戦争が始まりました。イギリス・ビルマ戦争は、1852年の第二次、1885年の第三次と断続的につづき、1885年にコウバウン朝は滅ぼされ、ミャンマーはインド帝国に編入されました。

----- ヴェトナム

ヴェトナムの歴史は大きく北と南に分かれ、北には中国の影響を受けながらヴェトナム人国家が、南部にはチャム人の国家が形成されてきました。

まず、南部にあったチャム人の国家チャンバー。2世紀頃に成立し、15世紀後半にヴェトナムの黎朝に滅ぼされました。南シナ海貿易で繁栄し、中国の歴史書には、林邑（りんゆう）とか占城（せんじょう）という表記で登場します。文化的には、インド文化の影響を大きく受けています。東南アジア地域は、北部ヴェトナムを除いて、インド文化の影響が強いですね。

チャンバーは黎朝に滅ぼされたが、チャム人は少数民族として、現在もヴェトナム南部に住んでいます。

北部は、東南アジアで唯一中国文明の影響を強く受けました。前214年、秦の始皇帝によって、現在の広西省、広東省からヴェトナム北部にかけて南海郡、象郡など3郡が設置されました。秦が衰えると、南海郡の漢人が自立して、南越国が成立しましたが、漢の武帝はこれを滅ぼし、前111年、ヴェトナム北部に、交趾（こうし）郡、日南郡など3郡を設置しました。

このあと、唐が滅ぶ10世紀前半まで、中国の王朝が変わっても、ヴェトナム北部は中国の支配下でした。その中でA.D.40年のチュンチャク、チュンニ姉妹の反乱は、ヴェトナムの独立反乱として有名。独立はできませんでしたが、指導者のチュンシャク、チュンニの姉妹は、現在ヴェトナムでは民族的英雄で

す。

10世紀になると中国から独立し、11世紀にはベトナム北部を統一する王朝が成立しました。最初に成立したのが李朝（1010～1225）。王朝名も人名も、中国文化の影響を受けて漢字で表記します。李朝は治水によってホン川デルタを開発しました。次が陳朝（1225～1400）。この時代に、漢字をもとに、ベトナム独自の文字であるチュノムを作りました。また、北方からの元の侵入を撃退し、南ではチャンバーを圧迫し、領土を南にのばしました。これには、南シナ海貿易に参入しようという意図があったようです。陳朝が衰えたあと、1407年から1427年にかけて、ベトナムは再び中国明朝の支配下に入りますが、1428年、黎（れい）朝（1428～1789）が成立し、独立を回復しました。黎朝は、中国風の国家建設をおこない、儒教を柱に、律令を整備し、科挙を実施しました。1471年には南にあったチャンバーを滅ぼしています。しかし、16世紀には内乱で衰え、黎朝の王は名目だけの存在となり、北部は鄭氏、南部は阮氏という武人が実権を握りました。阮氏政権は領土をさらに南に拡大し、カンボジア領だったメコンデルタ地帯までを支配下に入れました。また、この頃には、オランダ、ポルトガル、フランスなどの商人や宣教師がベトナムにやってくるようになっています。ちなみに、日本は戦国時代で、南蛮貿易が活発におこなわれていたときですね。

この鄭氏、阮氏を倒し、黎朝を滅ぼし、ベトナムを再統一し、ほぼ現在と同じ領域を支配したのが、西山（タイソン）朝（1778～1802）です。西山（タイソン）党という山岳地帯から起こった反乱軍が建てた王朝です。反乱軍のリーダーが阮氏三兄弟。阮氏政権の阮氏とは全く関係ない。ややこしいです。

そして、1802年、この西山朝を倒して成立したベトナム最後の王朝が阮朝。また、阮です。ややこしいです。この阮朝を建てたのは、阮福映という人で、これは、西山朝に倒された阮氏政権の関係者。阮福映は、阮氏政権崩壊後、タイ王国に亡命し、タイ国王やフランス人宣教師ピニヨーという人物の援助を受けて、ベトナムで政権を奪還しました。ピニヨーは亡命中の阮福映と出会い、かれを援助することで、東南アジアにキリスト教王国を建設しようと考えました。ピニヨーは、まだ4歳だった阮福映の息子を連れてフランスに帰国、国王ルイ16世と会って、ベトナムからの領土割譲と引き替えに軍事援助の約束を取り付けました。フランス革命のわずか2年前、1787年のことです。このあと、ピニヨーはベトナムに戻るのですが、フランスのインド総督と対立し、実勢にはフランス軍の援助は得られませんでした。そこで、ピニヨーは独立で義勇軍を編成し、阮福映に協力しました。（ただし、ピニヨーは、阮朝成立直前に死んでいます。）

フランス人ピニヨーの協力によって、阮福映が阮朝を建てたというのは、教科書には必ず出てきます。ところが、阮朝は、建国後すぐに、中国清朝を宗主国として、西洋諸国に対しては事実上の鎖国体制をとった。中国を中心とする伝統的な東アジアの国際秩序に納まってしまうわけです。フランスの援助を得ながら、どうしてそういうことが可能だったのか。高校時代、このところを習った時に、疑問に思ったのを覚えてますが、ピニヨーの援助＝フランス政府の援助ではなかったのです。ピニヨーも建国時には死んでしまっているし、阮福映としては、フランスに義理立てする必要は全然なかったわけです。

ちなみに、阮朝に対して、清朝は越南国という名前をあたえました。この越南というのは中国の南にある国という意味で、ベトナムという国号はここから生まれました。それ以前は、やはり、中国王朝が付けた大越という名で呼ばれていました。

この阮朝が成立して約60年後、フランスでは、ナポレオン3世の時代になり、かれは積極的に海外で軍事行動をおこなうのですが、その標的となつたのがベトナムでした。阮朝ではキリスト教を禁じていたにもかかわらず、密入国したフランス人宣教師の活動が途絶えることがありませんでした。阮朝政府は、しばしば宣教師を弾圧処刑していたのですが、これがナポレオン3世の出兵の口実となりました。

1858年、フランス軍が中部の港町ダナンに上陸して侵略は始まりました。阮朝は、成立当初から国内各地で反乱が絶えず、軍事的には弱体でした。したがって、フランス軍を撃退することができず、1862年、サイゴン条約を結び、ベトナムの南東部をフランスに割譲しました。

フランスは、次にメコン川をさかのぼり、中国南部との通商路を開こうと考え、1863年にはメコン上流にあるカンボジアを保護国化します。ただ、メコン川探検の結果、途中に滝とかの障害が多く中国に到達することは不可能だとわかります。それならば、ホン川からならば中国へいけるのではないか、ということになり、次は北部ベトナムを得るために、阮朝への侵略戦争はつづきました。

この時、劉永福という人物が率いる中国人義勇軍「黒旗軍」が、ベトナム政府のためにフランス軍と闘っています。有名ですので、覚えておいてください。

この少し前、中国では太平天国の乱という大反乱が起きます。劉永福たちは、この反乱軍の一部隊で、反乱が鎮圧されたあとベトナムに逃れてきていたのです。劉永福は、さらにこのあと、台湾に渡り、日本軍とも闘っています。国境を越えて、帝国主義国の侵略に抵抗した象徴的な人物として取り上げられているようです。

結局、阮朝はフランス軍に破れ、1883年、ユエ条約でベトナム全土がフランスの保護国となってしまいました。

清朝は、ベトナムの宗主国でした。近代的な支配従属関係ではないけれど、清朝は阮朝の保護者的立場に立っている。宗主国とは、本家と分家で言えば本家、本社と支社で言えば本社みたいなものです。清朝はベトナムがフランスの保護国になったのを黙って見過ごすわけにはいかない。

そこで起つたのが清仏戦争（1884～85）。結局清朝が負けて、1885年の天津条約で、ベトナムに対する宗主権を放棄し、フランスの保護権を承認しました。

1887年、フランスは、ベトナムとカンボジアをあわせてインドシナ連邦としました。1899年には、ラオスもインドシナ連邦に編入されました。第二次大戦中の日本占領下の一時期をのぞき、1945年までフランスはこの地域を植民地としたのでした。

カンボジア

カンボジアの主要民族はクメール人といいます。クメール人の国家として最初に登場するのが扶南国（ふ

なんごく、1～7世紀）。メコン川の下流にありました。この国にオケオという港があって、その遺跡からはローマの金貨が出土します。インド方面と活発な商業活動をしていたことがわかります。

6世紀になるとメコン川中流域で、扶南国の属国だった真臘（しんろう）が独立し領土を拡大します。これも、民族はクメール人。中国の歴史書に出てくる国名で表記しているので中国っぽい感じがしますが、文化はインド系でヒンドゥー教を取り入れていました。7世紀には扶南国を滅ぼし領土を拡大しますが、8世紀には分裂します。

9世紀に再統一されますが、そこからは真臘とは呼ばず、クメール王国とかアンコール朝と呼びます。有名な仏教寺院遺跡アンコール＝ワットや首都アンコール＝トムは、このときに建設されたものです。大規模灌漑工事による農業開発もおこない12世紀前半に最盛期を迎えました。

しかし、13世紀前半に西北のタイ人が独立しスコータイ朝を建国すると、じょじょに衰え、14世紀になるとタイのアユタヤ朝になんどか首都アンコールを占領されます。1432年にアユタヤ朝に侵略されたときには、ついにアンコールを放棄し首都をプノンペンに移しました。それ以後は、衰退の一途をたどり、タイやベトナムに圧迫され、両国に朝貢して二つの国の属国のようになってしまいました。

やがて、ベトナムがフランスの勢力下にはいると、カンボジアにはタイの属国になるかフランスの保護国になるかという選択肢しかなくなり、1863年にはフランスの保護国になってしまったというわけです。

タイ

タイは、中国雲南地方から南下してきたタイ人が国家を形成します。

最初の国が、スコータイ朝（13～15世紀）。真臘に従属していたタイ人達が自立した国です。

スコータイ朝が衰えたあとに成立したのがアユタヤ朝（14世紀～1767）。チャオプラヤ川中流に建国されました。国王が貿易を独占管理して、西欧諸国や中国とも積極的に外交・通商をおこないました。外国人達は、アユタヤの王を商人王と呼んでいて、この国も港市国家と考える研究者もいます。

アユタヤ朝はミャンマーのコウバウン朝に滅ぼされました。

次に成立したのがバンコク朝（別名ラタナコーシン朝、チャクリ朝）（1782～）。現在までつづく王朝です。

首都がバンコクなので、一般的にはバンコク朝と呼びます。

バンコクは、18世紀末で人口約40万。その半数は中国人で、タイ人は三割に過ぎなかったという記録があります。この時期の中国は、人口が爆発的に増加していて、あふれるように中国人が華僑（華人）として、どんどん東南アジアに移住しているようすがわかっておもしろいです。彼ら華僑の多くは王の保護のもとで貿易に従事していたとおもわれます。

バンコク朝の貿易は国王に独占されており、西欧の商人の貿易は制限していましたが、1855年、イギリスとの間にボウリング条約を結んで開国をしました。これは、治外法権を認める不平等条約でした。この

ときの国王がラーマ4世（モンクット王ともいう）。タイは、もともと米の輸出国でしたが、この条約を結んだあと、イギリスの要求に応えて米の輸出を増やすため、未開拓だったチャオプラヤ川のデルタ地帯の開発がはじまりました。開国後の50年で50万ヘクタール近くが水田となり、輸出量は1857年の5万9千トンから、1907年には89万トンに激増、さらにこの後も増え続けました。何が言いたいかというと、西欧列強が中心となる世界経済の中で、米の生産輸出国として位置づけられたということです。タイから見れば、植民地にされないよう、世界情勢の変化に必死に対応していったということです。

ラーマ4世は、自分自身が英語を学ぶなど、積極的に西欧の諸制度を研究し、王子の教育にはイギリス人女性を家庭教師にやといました。この家庭教師の話が、『王様とわたし』という有名なミュージカルのモデルになっていて有名です。

次の王ラーマ5世（チュラロンコン王）は、日本の明治時代とほとんど重なります。タイ政府の近代化を進めて、タイの独立をまもりました。中央集権化もすすみ、地方長官を派遣して辺境地域の領土を確定するのもこの時代です。

----- インドネシア -----

東南アジアの島嶼部で、オランダの植民地となった部分が現在インドネシアという国として独立していますが、オランダに支配されるまではさまざまな国がありました。ごちゃごちゃしていて、流れが系統だつてもないので、非常に覚えにくい。

よく出てくるのが、スマトラ島を中心とするシュリーヴィジャヤ（7～14世紀）。マラッカ海峡を押さえる場所にあり、貿易船のルートとなり繁栄しました。

インドまで海路で旅した唐の僧義淨（ぎじょう）が書いた『南海寄帰内法伝』に登場して有名。

ジャワ島ではシャイレンドラ朝（8世紀）。有名な石造りの仏教寺院の遺跡ボロブドゥールを残した国です。

ジャワ島ではもうひとつシンガサリ朝(1222～92)。この国は元の侵入を撃退したということで教科書に登場します。

ジャワ島の三つ目がマジャパヒト王国(1293～1520?)。スマトラ島のシュリーヴィジャヤを圧倒し、東南アジア交易を支配した。それから、島嶼部最後のヒンドゥー教の国ということでも大事です。マジャパヒト王国以後は、島嶼部にはイスラーム国家が成立していきます。

16世紀以降になると、この地域にポルトガル、やがてオランダが来航します。オランダは、1623年のアンボイナ事件で、イギリス勢力を追い払いインドネシアでの貿易を独占しました。しかし、17世紀以降は、過剰供給でヨーロッパでのコショウ価格が暴落し、香辛料貿易中心の商業活動だけではもうからなくなってきた。そこで、オランダはジャワ島を中心に、ヨーロッパで高く売れる商品作物の栽培をおこなうようになった。

そのためにおこなったのが、強制栽培制度です。1830年以降、オランダは、コーヒー、サトウキビ、藍などの商品作物の栽培をインドネシアの農民に強制したのです。耕地の5分の1に強制がおこなわれ、その結果、食糧生産が少なくなります。オランダは莫大な利益を得ましたが、1845年からの凶作では多数

の死者が出ました。

1904年、オランダはインドネシア全域を占領し、植民地オランダ領東インドが成立しました。

マレー半島

マレー半島には、14世紀にマラッカ王国が成立します。これが東南アジア最初のイスラーム国家です。これ以後、小さなイスラーム国家が半島に多数成立していきました。マレー半島は、マラッカ海峡に面する海上交通の要所なので、マラッカ王国は貿易港として繁栄しますが、1511年ポルトガルによって占領されました。その後、1641年にはオランダがポルトガルから奪い、1795年にはイギリスがさらにオランダから奪いました。

イギリスは、1786年にペナン島、1819年にはシンガポールを獲得し、マラッカと併せて1867年に海峡植民地としました。1895年には、さらに領土を拡大してマレー連合州としました。現在のマレーシアにあたります。

イギリスは、マレー半島で錫高山の開発をおこない、労働力不足を補うために、中国人やインド人の移民が多数集められました。そのため、原住民であるマレー人とインド系、中国系などさまざまな民族が混住する複合社会が形成されました。

-

第101回 東南アジアの動向 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第100回 イギリスのインド支配](#)

[次のページへ](#)

[第102回 アヘン戦争（前編）](#)

世界史講義録

第102回 アヘン戦争（前編）

18世紀後半の清朝

康熙帝、雍正帝、乾隆帝と三代つづいた清の最盛期については、以前やりました。18世紀後半、乾隆帝の時代には、清の領土は最大となり、現在の中国よりも広い地域を支配しました。経済は繁栄し、人口は爆発的に増加しました。18世紀後半に中国の人口は2億を突破し、その後も増加をつづけました。辺境地域、山岳部の開拓や、東南アジアへの移住が進むのもこの時期です。

1795年、乾隆帝は在位60年で退位します。これは、尊敬する祖父康熙帝の在位61年を越えることをはばかってたためでした。跡を継いだのは嘉慶帝（かけいてい）。乾隆帝の息子です。

嘉慶帝は決して無能ではありませんでしたが、乾隆帝の引退と同時に、いろいろな問題が表面化してきました。たとえば、乾隆帝のながい在位の間に、官僚の腐敗が進んでいたようで、嘉慶帝は、父乾隆帝が死ぬと、乾隆帝のお気に入りだったことをいいことに、不正蓄財していた官僚を処罰しています。

また、1796年には大規模な反乱が起こっています。嘉慶白蓮教徒の乱という。白蓮教は、暗黒の現世に救世主が現れて光明の世界を実現するという教えを持ち、仏教やマニ教の影響を受けて生まれた中国独自の民間信仰です。白蓮教はいろいろな系統があるようで、救世主は、弥勒仏や地母神みたいなものだったりするらしいです。明を建てた朱元璋が参加していた紅巾の乱も、もともと白蓮教の反乱が母体でした。朱元璋が国号を「明」としたのは、光明の世界を実現するという白蓮教の教えの影響を受けていたからだ、という説もあります。清の時代にも、民衆の間で白蓮教の信仰がつづいていたわけですが、このときの反乱は、山間辺境地域に移住した民衆が起こしたもので、白蓮教に対する役人の弾圧と重税が直接の原因でした。この反乱は、1804年までつづく。清朝の支配体制が動搖し始めている、というわけです。

清朝の貿易制限策

清朝は18世紀後半から貿易制限策をとり、欧米諸国との貿易は広東省の広州一港に限定していました。さらに、イギリス商人がとりひきする相手は、清朝政府の許可を得た特権商人に限定されていました。この中国側の特権商人を公行（コホン）と言います。十三の商人に限られていたので廣東十三行ともいいました。イギリス商人は、好きな相手と自由に取引が出来ない状態だったわけです。

また、イギリス人などの商人が滞在する外国人居住区を広州の一区画に限定されていました。

このあたりは、江戸幕府が海外貿易を長崎に限定し、オランダ人商人を出島に隔離したのと同じです。基本的に西欧人の文化に対する違和感、警戒感があって、できるだけ接触したくないという感覚があったようです。

さて、清朝と積極的に貿易をしていたのはイギリスでした。イギリスは、中国からほしいものがたくさんあった。その代表が、茶、絹、陶磁器です。

特に茶は重要で、イギリスの国民飲料紅茶は、中国から輸入するしかない。インドで茶を栽培するようになるのは、19世紀の後半になってからです。イギリスは中国で茶を買い付け、どんどんイギリスに運んだ。プリントにある絵は大型高速帆船カティーサーク号です。プラモデルで好きな人は多いかも知れない。こういう、スマートな船に茶葉を満載して、新茶を一番にイギリスに運ぶためのレースがおこなわれたりもしました。

当時国際貿易の決済は銀でおこなわれていましたから、イギリス商人は中国から買い付けた商品の支払いを銀でおこないます。イギリス側は、中国に売る商品がない。というか、中国側は、買ってくれないので、イギリスは銀を支払うばかりで、清とイギリスの貿易は、一方的にイギリスの貿易赤字がつづきました。もし、中国側がイギリスからも、なにか商品を買ってくれば、一方的にイギリスが損をすることはない。

イギリスには中国で売りたいものがありました。それは、綿工業製品です。産業革命が進展し、綿織物工業はその中でも特に発展していました。イギリスの産業資本家は、その製品を世界中で売りたい。人口の多い中国は、絶好の市場として期待されました。

そこで、イギリスは中国に綿工業製品を買ってもらうための交渉をおこないました。1793年、イギリスはマカートニー使節団を清朝に派遣しました。乾隆帝時代の末期です。マカートニーは、乾隆帝に面会して、綿工業製品の販売拡大のため貿易制限の廃止を求めた。

このときの乾隆帝の答えはこうでした。わが清朝は「地大物博」、つまり、領土は広大で、どんなものもある。だから、お前の国イギリスから買いたいものなど何もない。現在、広州でイギリスと貿易をおこなっているのは、お前たちイギリス人が中国のお茶や生糸を欲しいとほしいと望むから、かわいそうに思って恩恵として貿易をしてやっているのである。それなのに、調子に乗って、綿製品を買ってくれとはどういう事か。文句があるのなら、現在おこなっている貿易をやめてしまうぞ。それでも、中国は全然困らないのだ。と、まあ、こんな感じだった。マカートニーは、そういわれると返す言葉もなく、すごすごと引き返すしかありませんでした。

この段階で、清朝とイギリスとでは、清朝側が上手にたっているんですね。

マカートニー使節団の交渉が失敗したあと、1816年、イギリスは再び貿易制限撤廃を求めてアマースト使節団を派遣しました。このときの清の皇帝は嘉慶帝。このとき、アマーストは貿易交渉をするどころか、嘉慶帝に面会すら出来なかった。実はこのとき、清朝側は、皇帝に面会するに当たってアマーストに「三跪九叩頭礼（さんききゅうこうとうれい）」を要求した。これは、臣下が皇帝に謁見するときにする禮で、両膝を三回床につく。これが、三跪。そして、一回ひざまずくたびに、三回頭を床にこすりつける。これが叩頭。三回ひざまずくので、叩頭の回数は、合計九回。で、この礼を「三跪九叩頭礼」といいます。

伝統的な中国の世界観では、中国と対等な国は世界に存在しない。全て中国王朝より格下です。だから、どの国の使者であろうと、清朝皇帝のまえでは、臣下の礼をとらなければならない。その建前にたって、清の役人は、嘉慶帝に謁見したかったら、「三跪九叩頭礼」をおこなえと言う。アマーストは、自分はイギリス国王の臣下ではあるが、清朝皇帝の臣下ではない。イギリス国王の使者である自分が、清朝皇帝にひざまずくことは、イギリス国王が、清朝皇帝にひざまずくことであって、ぜったいにそんなことはでき

ない、と拒否しました。

マカートニーの時はどうだったかというと、同じように「三跪九叩頭礼」を要求されたのですが、マカートニーが拒否すると、片膝を床につくだけの略式の礼で許された。乾隆帝は鷹揚なところを見せたわけです。ところが、今回はどうしてもダメ。両者折り合わず、マカートニーは最終的に何の交渉も出来ず、イギリスとしては、貿易交渉は失敗に終わりました。

アヘン貿易

イギリスの望む綿工業製品の輸出はできず、对中国貿易の赤字だけが増大する。この状態がいつまでもつづくことは、イギリスにとって最悪です。綿工業製品が売れなくても、とりあえず、何かを中国に売つて、貿易赤字増大だけは防ぎたい。そう考えたイギリスが始めたのが麻薬の密貿易でした。麻薬ですよ。具体的にはアヘンです。

アヘンは「けし」という植物からとれる。けしの花が咲いたあと実がつくのですが、種ができる前に実を傷つけると乳液が出てくる。これを乾燥したものがアヘンです。これがけしの花の写真。きれいな赤と白の花が咲いている。この写真はアフガニスタンで撮影されたものです。紛争地域なので麻薬栽培で生計を立てている農家がいるんですね。日本で、この花を栽培してたらすぐ捕まります。農業試験場とか、特別に許可された農家だけが栽培しています。けしの実が完全に熟すると、小さい種がたくさんできます。これがいわゆる「けし粒」。おまんじゅうやあんパンの上についている小さなつぶつぶです。見たことあるでしょ。あのけし粒には麻薬成分がほとんど含まれていません。だから、輸入もできて、お菓子に使われているんです。ただし、種をまいて芽が出ると、これは法律違反。だから、輸入されるけし粒は、加熱処理がしてあって、発芽しないものばかりです。

アヘンを精製してつくるのがモルヒネ。現在、病院で麻酔や鎮痛剤として使っています。ただ、麻薬なので、慎重に使わなければダメだし、管理も厳格です。

アヘンを吸うと、夢見心地のいい気持ちになるといいます。走り回ったり、叫んだりというような活動的になるのではなくて、だらーっと寝そべる。気持ちよく寝ているが、麻薬だから、クスリが切れるとたまらなく苦しくなるし、やがては脳が冒されて廢人になってしまう。

中国ではアヘンが流行し出すと、アヘン窟（くつ）といって、アヘンを吸飲させる専門店がたくさんできた。そこでアヘンを吸っている人の写真です。ゴロッと横になってパイプを吹かしている。こんな風に専用のパイプに詰めて煙にして吸っていたんだ。

話をもどしますが、イギリスは、このアヘンに目をつけた。昔でも、麻薬は禁止です。清朝でもイギリスでも許されてはいない。だから、犯罪行為なのですが、これをイギリスはやる。密貿易で中国にアヘンを販売する。アヘンは麻薬だから、中毒性がある。簡単にやめることはできない。一度アヘンの快楽を知った者は、ずっとアヘンを買いつづけるし、吸飲が流行して中毒者が増えれば増えるほど、イギリスは儲かるわけです。

イギリスは、このアヘンの生産をインドでおこないました。インド農民にけしを栽培させ、アヘンを生産し、これを中国広東に運び密輸する。この販売自体は、ズバリ犯罪行為なのでさすがに東印度会社は直

接おこなわす、民間業者にゆだねました。密輸品のアヘンを広州港に持ち込めないので、イギリス商人は、沖合の島影にアヘン貯蔵専用の船を用意して、ここにアヘンを蓄えました。そこに中国の麻薬販売業者が舟でやってきて、海上で取引がおこなわれた。支払いは、銀です。

イギリス側は、中国人の好みに合わせて、アヘンの味なども改良を加え、中国でのアヘン貿易はどんどん発展してイギリスの対中国貿易の柱となっていました。

その結果、イギリス、インド、中国のあいだで、三角貿易が成立しました。

イギリスからインドへ綿工業製品が、インドから中国へアヘンが、中国からイギリスへ茶が輸出されます。この商品の流れと逆方向に銀が移動する。イギリスが買う茶よりも、中国が買うアヘンの金額が大きくなれば、イギリスの貿易は赤字から黒字になるわけです。実際に、1827年には、アヘン貿易が茶貿易を逆転しています。

プリントの表を見てください。中国流入アヘン量（年平均）が書かれていますね。

1800～1804年 3,562箱

1810～1814年 4,713箱

1820～1824年 7,889箱

1830～1834年 20,331箱

* 1箱=約60kg

1820年代くらいから急増しているのがわかります。

アヘン貿易は中国にどんな影響をあたえたか。

まずは、アヘン貿易の拡大にともなって、銀がどんどん中国から国外へ流出していました。中国の貿易赤字の始まりです。

しかも、清朝の税制である地丁銀制では、税を銀で納めることになっていた。農民であれば、農作物を売って銀に換えて税金を支払う。ところが、アヘン貿易による銀の大量流出で、中国国内の銀価格が高騰しはじめます。たくさんの農作物を売っても、以前のように銀が手に入らない。税金を納めるのが苦しくなるわけです。事実上の増税です。銀の高騰は、諸物価もつりあげ、民衆の生活を圧迫するようになりました。

一方で、清朝政府としては、税金の滞納未納が増えて、物価高とあわせて財政難に陥りました。

また、アヘン中毒患者の増加は、風紀の乱れ、治安の悪化を招きました。アヘン中毒患者の推定数があります。1820年36万人。1829年100万人。1845年3000万人。当時の中国の人口がだいたい4億人。だから、中毒患者3000万人ということは、7.5%。一クラス40人として、クラスで3人が麻薬中毒ということだから、これはすごい数だね。

中毒患者は、何がなんでもアヘンを買って吸いたい。だから、一所懸命働くと思うわけはないから、財産を切り売りしてアヘンを買う。家、土地を売って、売るものがなくなったら、女房子供を奴隸に売る。最後は、犯罪に走ってでもお金を手に入れるようになる。麻薬が蔓延するということは社会が崩壊することです。アヘン貿易は、中国社会をそういう状態に追い込んでいきます。

アヘン貿易は、インドにも被害をもたらしました。これは、以前にも話しましたが、飢餓の増大という形で現れました。インド農民は、イギリスによってけしの栽培を強制されるわけで、その分、食糧生産が減

少するわけです。

イギリスにも影響があった。インドでのアヘン生産が中国販売用としても、大量にアヘンをつくってイギリス国内に入ってこないわけがない。この時期、イギリスにもアヘンが一般的に広がっていたようで、貧しい労働者の妻が、お乳を欲しがってなく赤ん坊に、アヘンを水に溶かしたアヘンチンキを飲ませていた、というのを読んだことがあります。低賃金で、お乳も出ないほどの苦しい生活をしていても、アヘンなら買えたんですね。

『シャーロック・ホームズ』シリーズ知っていますね。イギリスの作家コナン・ドイルが19世紀後半に書いた探偵小説ですが、子供向けに翻案したものではなくて、ちゃんとした翻訳を読んだことがありますか。主人公ホームズは何か事件があると生き生きと行動するのですが、何もないときは倦怠感に浸っている人物です。小説を読んでいると、事件がないときに、刺激をもとめてホームズがモルヒネを注射しているシーンが出てくる。どうも彼は麻薬中毒という設定じゃないかな。モルヒネはアヘンから精製する。

『ホームズ』シリーズにはインド帰りの人物がしばしば登場するし、インドを支配しアヘン貿易をおこなっていた当時の大英帝国の状況を知っていると、いちいち腑に落ちるものがあります。

-

第102回 アヘン戦争（前編） おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第101回 東南アジアの動向](#)

[次のページへ](#)

[第103回 アヘン戦争（後編）](#)

世界史講義録

第103回 アヘン戦争（後編）

厳禁論と弛禁論

清朝政府はアヘンにたいする禁令を繰り返し出していましたが、あまり効果はなかった。密貿易がおこなわれている広州では、清朝がわの官僚や軍人はイギリス商人に買収されていて、実際には禁令は形式だけになっていたのです。清朝政府も、本気でアヘンを取り締まる姿勢はなかった。首都北京から見ると、広州は実に遠い。辺境地域です。だからこそ、広州でのみ外国との貿易をしていたわけだ。辺境地域で、少々麻薬密貿易があっても、中央政府がしゃかりきになるような問題ではないと考えていた。

ところが、1830年代になって、アヘン貿易による銀の流出、財政の悪化、中毒患者の増大と、さまざまな問題がはっきりしてくる。軍隊内部や皇室関係者にもアヘン中毒患者が出てくる。こうなると、さすがに清朝政府内部でアヘン問題に対しての議論がさかんになってきました。

アヘン問題に対する意見は大きく二つに分かれました。

ひとつは弛禁論（しきんろん）。禁令をゆるめよ、という意味です。アヘン貿易をきびしく取り締まるのをやめて、逆に、公認しようという立場です。

アヘン貿易を公認すれば、輸入アヘンに税金をかけることができ、政府の収入が増える。。銀の流出を止めるためには、銀での取引を禁止して、物々交換で輸入すればよい。また、国内でけしの栽培を奨励して、自国でアヘンを生産すれば輸入を減らすことができる。アヘン中毒患者対策としては、官僚や軍人のアヘン吸飲はさすがに禁止を主張しますが、一般民間人にたいしては取り締まらない。放任することを主張しました。弛禁論者はこんな理屈を言います。アヘンを吸うような者は、みんな意志の弱いだらしない者ばかりだから、そんな連中のことを気にかける必要はない。中毒患者はやがて廢人になり死に絶える。そんな連中がいくら死んでも、中国は人口が多いのだから、どうということはない。逆に、だらしのない連中が死に絶えて、健全な中国人だけが生き残るから、かえってよろしい、と。

これに対するのは厳禁論。その名のとおり厳しく取り締まれ、という。こちらも主眼は銀の流出をいかに止めるかというところにあるのですが、そのためアヘン吸飲者を死刑にしろといいます。厳罰でいどめればアヘン吸飲者は減る。消費が減れば輸入も減る。輸入が減れば銀の流出も減る、という理屈です。輸入そのものを取り締まるのではなく、吸飲者を減らすところに出発点があるのが、現在の感覚でいうと少し変わっていますね。

とにかく、有名無実の禁令が出ているだけで、密貿易はどんどんさかんになっているので、何らかの対策が必要でした。時の皇帝は道光帝（どうこうてい）。1838年、道光帝は全国の地方長官にアヘン対策についての意見書を提出させた。回答した29名中、アヘン厳禁に賛成したものはわずか8名、残り21名は厳禁に反対でした。清朝の官僚達の雰囲気がわかりますね。ここまで広がったアヘンを今さら取り締まるなんてもう無理、もうええやん、そんな感じですかね。

そのなかで、厳禁論を主張した官僚は、このままアヘンを放置していくには國が滅びるというまっとうな正義感を持った人びとでした。道光帝は、この厳禁論にひかれた。なかでも、湖廣総督（湖北省・湖南省の長官）林則徐（りんそくじよ）の意見書に、道光帝は注目した。厳禁論を主張する林則徐は、ただの理論として厳禁論を言うのではなくて、具体的に取締の実施方法まで細かく提案していた。

どんなふうにしたかというと、まず布告を出して、1年後にアヘンを吸飲したもの、アヘンやアヘンを吸飲するための道具を持っているものを死刑にすると住民に告げる。アヘン中毒になっているものは、1年以内に断ち切れ。アヘンや吸飲道具を持っているものは、自主的に役所まで差し出した者については、1年以内ならば罪に問わない、と。

さらに、林則徐がユニークなのは密告を奨励したことです。1年経過後、アヘンを吸飲している者がいれば密告しろという。密告というのは、住民同士が監視しあい疑心暗鬼になる。社会が暗くなる。密告を奨励する政治に、ろくなものはない。林則徐は、そんなことも十分承知しているので、こんなふうに言います。密告という手段は、よくない。無実の者をでっちあげの罪で密告し、密告された者が処刑されたらとんでもないことである。ただし、アヘンの場合は無実の者が罰せられることは決してない。アヘン吸飲で密告された者を逮捕して、一日椅子に座らせておけば無実かどうかすぐわかる。アヘン吸飲者であれば、禁断症状が出るから一目瞭然。吸飲者でなければ、平然としているだろう。そうならば、すぐに釈放してやり、密告した者を逆に逮捕して罰することができる。だから、アヘン取締に関しては、密告という手を使っても大丈夫だと。

林則徐の意見書は、論理的で理路整然としていたし、なによりも清朝を憂う気持ちにあふれていた。林則徐に興味を抱いた道光帝は、かれを北京に呼び寄せ、直接面談をすることにした。

林則徐は、北京につくとさっそく紫禁城におもむき皇帝とアヘン問題について話し合った。道光帝は、林則徐の考え方や人柄を大いに気に入り、一回の話では満足せず、明日も来い、また明日も来い、と呼びだしつづけ、二人の話し合いは連日8回に及んだ。

しかも、呼び出すたびに、道光帝による林則徐の待遇がよくなる。紫禁城はすごく広い。広いけれど、役人達は歩いて宮殿内を移動する。まあ、当然です。林則徐もはじめは徒歩で入城し皇帝の執務室まで行くわけですが、林則徐を気に入った道光帝は、この広い紫禁城をここまで歩いてくるのは大変だろう、明日は乗馬で入城するのを許す、と言うのです。ものすごい特別待遇で「紫禁城賜騎（しきんじょうしき）」と言われ、有名なエピソードです。林則徐はこれに応えて翌日は、馬に乗って出勤、乗馬したまま紫禁城内も移動した。ところが、林則徐はあまり乗馬が上手ではなかった。道光帝は、これを見ていたらしく、明日は椅子駕籠で来い、と言う。これは八人で担ぐ御輿の上に椅子を設置したものです。馬よりもさらにランクアップです。異例中の異例。あり得ないような好待遇なわけです。当然、ものすごい話題となる。林則徐がどれほど皇帝陛下に信頼されているか、誰も知らない者はなくなるわけです。

林則徐との話し合いを重ねて、ついに道光帝はアヘン厳禁に踏み切りました。道光帝は林則徐を欽差大臣に任命し、広州に派遣しアヘン貿易の取締を命じた。欽差大臣というのは、皇帝と同等の権限を持つ大臣で、欽差大臣の命令は皇帝の命令に等しい。それくらい重い役職です。

道光帝は、馬鹿ではないから、官僚達の多くが弛禁論者であるなかで、単純に厳禁論者の林則徐にアヘン取締をさせて、反対派の抵抗にあって手腕を発揮できないことをおそれたんでしょう。だから、乗馬や駕籠を許して、いかに皇帝が林則徐を信頼しているかを官僚集団全体に見せつけた。ここまでやられれば、弛禁論者もなにがなんでも林則徐の足を引っ張ってやろうとは思わない。まずは、静かに様子を見ておこう、ということになりますね。

林則徐のアヘン取締戦争

道光帝の期待を一身になって、林則徐は北京から広州へ出発した。この旅の途中でも有名なエピソードがあります。林則徐は、広州までの街道沿いにある府や県の長官に事前に手紙を出す。欽差大臣林則徐は、何月何日にその地域を通過するが、決して接待をするなという手紙です。宿泊したり、食事をする予定の地域の行政長官には、同行人数は何名である、食事はこれだけのものを用意すれば十分である、それ以上の料理を決して出すな、と書き送る。しかも、これは遠慮しているのではなく、命令だから絶対守れと書き添えた。

当時の中国では、中央の大官が、地方に出向くときは接待を受けるのが当たり前、賄賂を受け取るのが当たり前でした。地方の長官とすれば、皇帝お気に入りの大物官僚に気に入られたい、少なくとも悪印象をもたれて皇帝に告げ口をされてしまう。だから、全力で接待をしました。それが普通。ただ、これは地方長官にとっては大きな負担。しかも、その負担は最終的に地方住民への税金に転嫁される。地方長官を長く務めた林則徐は、そういう風習を苦々しく思っていた。そこで、自分が逆の立場になつたいま、あらかじめ接待を禁じる命令を出したのです。

欽差大臣としては、異例の簡素な旅行でした。林則徐が賄賂を受け取らない清廉潔白な人物であるということはすぐに広州にも伝わった。

広州でアヘン貿易をやっているイギリス商人達は、アヘン取締の命を受けた林則徐という大臣がやって来るという話を知りました。でも、はじめは全然気にしていない。中国の役人は、誰でも賄賂を握らせれば形だけの取締をして、あとはアヘン貿易を黙認する。だから林則徐という役人も、賄賂でなんとかなるだろうと考えていたのです。ところが、林則徐が接待を禁止しながら広州に向かっているという情報が入ると、これは今までの役人とは違うかも知れないと考えはじめたようです。

イギリス商人よりも、もっとビビッたのが広州の役人達です。かれらのほとんどが、イギリス人から賄賂を受け取っていた。林則徐が着任したら、自分たちはどういう目に遭うのか、もうパニックです。

1839年、広州に着任した林則徐は、中国人アヘン商人と、その便宜を図っていた役人や軍人で程度のひどい者たちを逮捕しましたが、その他大勢の役人、軍人については、今後は心を入れ替えよということで、過去の振る舞いは不間にした。厳しいばかりではないこういう態度が、部下の気持ちをつかんで、かえって綱紀粛正が進んだようです。

さて、林則徐はさっそくイギリス商人に対して、アヘンをすべて差し出すことと、今後アヘン貿易をおこなわないという誓約書を出すようにせまりました。広州には300人近いイギリス商人が住みんでおり、政府から派遣されている貿易監督官チャールズ＝エリオットがかれらを指導していた。エリオットは、とりあえず林則徐のメンツを立ててやるために少しだけアヘンを供出して、あとはうやむやにしてやろうと考えた。1037箱のアヘンを差し出して、これで全部ですと言う。ところが、林則徐は事前にアヘンの消費量や取引量などを計算していて、2万箱近いアヘンが沖合の貯蔵船にあると踏んでいた。こんなごまかしはきかない。

イギリス商人たちは広州城外の一角に作られた外国人居住区に住んでいたのですが、林則徐は軍隊でこの居住区を封鎖した。食糧、水を断つ、いわゆる兵糧攻めにでた。48時間の封鎖で、エリオットをはじめと

するイギリス商人たちは音を上げて、結局沖合に隠してあったアヘンを全部差し出しました。その量は約2万箱、1425トン。林則徐の計算とほとんど同じだった。当時の金額で1500万ドル相当という。

1400トンのアヘンは保管する倉庫もないくらいのものすごい量です。北京からは現地で処分しろという命令が来た。しかも、周辺住民や外国人に処分するところを見せつけてやれという命令です。

林則徐は処分方法を徹底的に研究した。林則徐がすごいと思うのは、きちんと情報を集めて検討して、確実に仕事をこなしていくその確実さです。

素人考えだと、処分するなら燃やすなり埋めるなりすればいいと簡単に考えてしまうけど、ものがアヘンという麻薬だけに、処理するときに有害物質がせず、処分したあの廃棄物を回収できず、回収しても麻薬成分が残っていないようにしなければならない。焼却処分してみると、燃やしたあの土から麻薬成分が回収できることがわかった。しかも、燃やせばアヘンの煙がモクモクと出るわけで、1400トン燃やしたらどういう事になるか。だから、焼却処分はダメ。埋めてもあとから掘り出される可能性がある。

研究の結果、林則徐は海岸に50メートル四方のプールを二つ作った。このプールにアヘンを溶かし込んだうえに、塩と石灰を入れます。石灰は水と反応して熱が出る。この絵はその様子を描いたものですが、もうもうと湯気が立っているのがわかる。アヘンの麻薬成分は塩と石灰に弱いのでこうやって処理をした。ただ、溶け残っていたりして、無害になっていないアヘンが残っているかも知れない。そこで、引き潮のときにプールの水門を開けて、アヘンの溶けた熱水を海に流した。引き潮と一緒に水は沖合へ。ここまでやれば、もう誰も回収できません。大勢の群衆が見物するなか、20日間かけてすべてのアヘンを処理しました。

アヘン戦争

アヘンの没収と処分はおわったけれど、今後もアヘン貿易をしないという誓約書が出ていない。林則徐は、イギリス商人に誓約書を要求しましたが、エリオットは断固としてこれを拒否した。それでは貿易を認めないということで、林則徐はイギリス商人を広州から追放しました。この間に、アヘン貿易と関係ないアメリカ商人は誓約書を差し出して広州でさかんに貿易をして儲けています。これを見ていて、イギリス商人のなかにも、誓約書を出して貿易をしようとする者も現れましたが、エリオットは抜け駆けを許さなかった。兵糧攻めにされてアヘンを没収されたことも許せないし、そのアヘンを全て処分されてしまったことも許せない。イギリスのメンツの問題だし、今後、アヘン貿易ができなければ、イギリスは儲からない。だから、誓約書はだせない。広州を追い出されたイギリス人はマカオに一時避難しますが、ここも追放され香港島周辺で状況が変わるのを待った。

一方、イギリスでは林則徐によるアヘン没収処分のニュースが伝わると、報復のため戦争をするべきだという議論が高まった。しかし、麻薬の密輸をして、その麻薬を没収されたからといって仕返しするのは、道理がない。イギリスの政治家にもさすがにそう考える人物がいました。自由党のグラッドストンは議会でこんな演説をしている。「中国にはアヘン貿易を止めさせる権利がある。…これほど不正な恥さらしな戦争は、かつて聞いたことがない。…国旗の名誉はけがされた…。」でも、多数決の結果は開戦賛成271、反対262。1840年2月、イギリス政府は出兵を決定しました。

林則徐はというと、アヘンを処分して以来英字新聞などを入手して、しきりに海外情勢を研究した。イギリスが報復のため実力行使にでるかもしれないと予想した。そこで、広州周辺の沿岸漁民を民兵に組織して軍事訓練をしたり、広州湾近辺の要所要所に砲台を築くなど、戦争に備えて防備を固めました。

1840年6月、軍艦16隻、輸送船27隻、陸軍約4000のイギリス軍が中国に到着しました（42年5月には軍艦25隻、陸軍1万6千名などの援軍到着、うち8割はシパーー）。イギリス軍は、林則徐によって広州周辺の防備が固められていることを知ると、沿岸を北上、杭州湾沖にある船山列島を占領し、渤海湾に入り天津に向かいました。天津は北京に一番近い港湾都市です。アヘンをめぐるイギリスとのもめ事は遠い広州の出来事と思っていたので、イギリスの艦隊が北京に近づくと清朝宮廷はおおいに動搖した。

林則徐の抜擢を苦々しく思っていた弛禁論の官僚たちは巻き返しに出ました。この責任は林則徐の責任である。かれを罷免しろという声が政府内で大きくなる。こういうなかで道光帝その人が、ゆれてしまった。とにかく、イギリス艦隊を北京から遠ざけたい。道光帝は林則徐を解任、かわって弛禁論の琦善（きぜん）を欽差大臣に任命し、琦善はイギリスに広州で交渉するよう要請しました。

これを受け伊ギリス軍は南下し、広州で琦善とイギリス全権使節ジョージ＝エリオットの交渉が始まりました。琦善はイギリス人は林則徐を憎んでいるだろうから、林則徐がやったことを全部ひっくり返せば、イギリス人がよろこび交渉が有利に進むと考えた。そこで、林則徐が設置した砲台を撤去し、沿岸に組織した民兵を解散、要所に配置した部隊の兵員削減をどんどんすすめてしまった。イギリス側は琦善の態度をみて、なめてかかります。イギリス軍が広州への入り口を守る虎門砲台に攻撃をくわえると、琦善はイギリスの要求をどんどん受け入れた条約案を作成した。

一方、北京の宮廷では、イギリス艦隊が広州に去ると強硬論が強まる。実際に政治方針が場当たり的で節操がないです。政府は琦善が結んだ条約案を拒否し、琦善は解任、北京へ呼び戻されました。

条約案は決裂し、広州とその周辺で清軍とイギリス軍との戦闘が始まりました。しかし、林則徐が作り上げた防衛体制はなくっているので、どこでもイギリス軍が圧倒的優勢で各地で暴行略奪やりたい放題だった。一方の清軍はというと、装備も劣るし、士気規律が全くない。近代的な国民軍ではないので、清の兵士が同じ中国人に対して暴行略奪をするんですね。しかも、イギリス軍が攻めてくると、戦わずに逃げます。

住民たちは、自分たちの村を自衛するしかない。負けっぱなしの中国側で唯一イギリスをおいつめたのがこの農民自衛組織でした。広州郊外の三元里の農民2万人が平英団という自衛軍を組織し、イギリス軍部隊1000人を包囲するという事件がありました。

こういう地元の住民たちを組織して戦えば、武器が劣っていても、勝つ可能性はあったかも知れませんが、清の政治家たちにはそんな発想はなかった。平英団も、広州知府（広州の行政長官）の圧力で解散させられました。これなんかは、イギリス側が広州知府に包囲されたイギリス部隊の救出を要請して、それで解散命令だから清朝の役人は誰の味方だかさっぱりわかりません。

広州一帯を荒らし回ったあと、1841年8月、イギリス艦隊は再び北上、廈門（アモイ）、寧波（ニンポー）などを制圧し、42年5月には長江に入り、7月、大運河の入り口に当たる鎮江を占領し、大運河を封鎖したため、8月ついに清朝は降伏し、南京条約を結びました。

南京条約の内容は、五港（上海、寧波、福州、廈門、広州）の開港、公行の貿易特権の廃止、香港島をイ

ギリスに割譲、賠償金2100万ドルの支払い、イギリスの領事裁判権の承認、関税自主権の放棄などです。これが、中国が結んだ最初の不平等条約となりました。五港開港は、開港場を増やすことで、中国市場をイギリスの工業製品を売り込もうという狙いです。

この条約は、アヘン取締をきっかけに起きた戦争だったのに、アヘン貿易については一言も触れていません。イギリスにとって、麻薬貿易は不名誉なことなので、あえて条約には書かなかったと考えてください。この戦争のあと、清朝はアヘン貿易を公然と黙認（変な言い方ですね）するようになるので、イギリスにとっては事実上アヘン貿易を認めさせたのと同じ事です。

1844年には、アメリカとフランスが、清朝に迫り同様の条約を締結しました。アメリカとの条約が望厦（ぼうか）条約、フランスとの条約が黄埔条約です。

余談。戦争のきっかけとなった林則徐は、1841年にアヘン戦争の責任を問われ中央アジアのイリ地方に左遷されました。林則徐は腐ることなくイリでも行政官として多くの仕事を残し、民衆から慕われ長く語り継がれたそうです。没年は1850年。

林則徐は欽差大臣を解任されたとき、広州で収集したすべての外国情報を友人の魏源に託しました。魏源はその資料をまとめて『海国図志』を著しました。この本はすぐに日本に伝えられ、幕末の志士たちが世界情勢を学ぶ貴重な情報源となりました。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

実録アヘン戦争 (中公文庫)	陳舜臣 著 決定版です。小説は長すぎるという人にはこれ一冊。
阿片戦争 上 滄海編 (講談社文庫 ち 1-1)	陳舜臣 著 これにつづいて中、下と三冊あります。詩社という名目で政治結社的な読書人のサークルがあって、官僚を含む知識人達が政策論を練っている様子も描かれていて興味深い。勉強になる小説。

第103回 アヘン戦争（後編）おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ
第102回 アヘン戦争（前編）](#)

[次のページへ
第104回 太平天国](#)

世界史講義録

第104回 太平天国

アヘン戦争後の中国

アヘン戦争後、中国南部の民衆の生活が悪化します。原因は大きく二つあります。

ひとつは、清朝政府による重税。清朝は、アヘン戦争に関わる戦費の調達、賠償金の支払いのために増税しました。ここが不思議なところですが、清朝は、増税を全国一律でおこなわない。アヘン戦争に関連した中国南部の地域でだけ増税をおこないました。戦争で荒廃しているところへ増税だから、民衆の負担はさらに大きくなりました。

二つめの原因が、通商交易路の変化です。南京条約で上海が開港されると、貿易の中心が広州から上海に移りました。上海は中国の真ん中を流れる長江の下流にあり、また長大な南北海岸線のほぼ中央、まさに広大な中国大陸おへそにあたる場所です。広州は中国最南部で不便なところだから、上海に交易の中心が移るのは当然です。

それまでは、各地の産物を広州に運ぶために、中国南部の民衆の多くが陸上運送に関わる仕事をしていましたが、広州の港がすたれたためにかれらは失業してしまった。そこに、増税ですから、踏んだり蹴ったりなわけです。生活基盤が崩れていくという状況が広がっていました。

洪秀全

生活困窮し疲弊している中国南部に、新しい宗教が生まれました。

この宗教を作った人物が洪秀全（こうしゅうぜん・1813～64）。広西省の客家（ハッカ）出身です。客家というのは、中国南部に広く分布している人びとで、普通の中国人とは文化風習や言葉がちょっと違う。宋代くらいに、戦乱から逃れて中国北部から移住してきた人びとの子孫だと言われています。あとから移住してきたので、その多くが人の住んでいない山間部の荒れた土地に住みつきました。そのため、客家の多くは貧しいです。また、まわりの人びとと溶けあわず独自の文化を守りつづけたため、差別されていました。洪秀全は、そういう客家の人です。

中国では、いくら貧しくても、一発逆転で富と名誉を手に入れる方法があった。それが、科挙です。科挙は男子であれば、誰でも受けることができる。客家でもOKです。ただ、超難関試験で誰でも受かるわけではない。ずば抜けて頭がよくないとダメ。だから、中国では、神童と呼ばれるような賢い男の子がると、親戚中でお金を出し合って、塾に行かせて科挙の準備をさせる。もし、その子が科挙に合格して、官僚になれば一族全員が間違いなく大金持ちになれるからです。

洪秀全は、まさしくそういう神童で、親戚みんなから期待されて、一族のみんなが朝から晩まで野良仕事をしている中で、小さい頃からひとり、勉強だけをさせられた。こういう勉強は、みんなの期待を背負っているから、つらいと思う。ものすごいプレッシャーだろうね。そういう勉強をつづけた。

いくら優秀でも、簡単に受からないのが科挙。ちなみに、洪秀全の住んでいた地域の受験場所は広州でした。一回目の受験は当然失敗。二回目の挑戦が1834年。このときも、不合格でしたが、受験会場のそばでキリスト教のパンフレットをもらった。唯一の貿易港広州には、すでに中国人のキリスト教信者がいて、未来の官僚に布教活動をしていましたね。このパンフ『勸世良言』という題名ですが、家に帰った洪秀全は、これを書棚に放り込んだままで読まなかった。

1837年、三回目の受験をしますが、これも失敗。さすがにこれはこたえたようで、そのあと、洪秀全は高熱を出して寝込んでしまいました。

高熱で苦しみながら、洪秀全は夢を見た。夢の中で竜や虎や牡鶴や多くの人に導かれて光り輝く場所に着きます。そして、案内されるままに大きな宮殿のような建物の中にすんすんと入っていくと、豪華な大広間があつて高いところに金色の髪を生やした老人が座っていた。その老人が洪秀全を見て涙を流しながら言う。「世界中の人間はわしが作り、わしが養っているのに、人間たちは皆わしを忘れて悪霊を崇拜している。悪魔を絶滅し、兄弟姉妹を助けよ。」そう言って、ひとふりの剣を洪秀全に授けた。変な夢です。それ以外にも、夢の中で洪秀全が兄と呼ぶ中年の男がしばしば現れて、一緒に悪霊退治をしたりした。洪秀全は何のことかさっぱりわからない。わからないままに、やがて熱も下がり、夢も見なくなります。かれは、再び受験勉強を始めたわけですが、夢のことはずっと覚えていた。

1843年、四回目の受験です。アヘン戦争直後の広州での受験だから、いろいろなことを感じたと思う。結果はまたもや不合格。がっくりして家に帰った洪秀全は、かつて書棚に放り込んだままだった『勸世良言』を、ふと手にとって読み始めた。そうしたらびっくりしました。かつて見た不思議な夢が、今読んでいるキリスト教のパンフレットで解釈できるとかは思つたんだ。

つまり、夢に出てきた老人は神。兄というのはイエス=キリスト。そして、自分は神の子で、イエスの弟だったのだ。人びとが信じている邪教というのは、儒教のことだ。孔子廟とか、さまざまな偶像をつくって拝んでいる。この偶像こそが老人が言っていた妖魔にちがいない。こんな具合に、キリスト教の教えを、どんどん自分に引きつけて解釈していきました。

こうして、自分が神の子、イエスの弟、救世主と確信した洪秀全は、科挙の勉強を放棄し、宗教結社「拝上帝会」を興しました。上帝とはヤハウェ神のことです。

布教活動をはじめると、最初は幼なじみの受験仲間などが信者になり、1847年ころからは広西省の紫荘山区という山間の貧しい地域で、客家・貧民・少数民族を中心に信者が増え始めました。拝上帝会は、キリスト教の影響を強く受けているので、神の前の平等を説きます。これが、アヘン戦争後急速に生活が悪化した人びと、その中でも差別に苦しむ人々の気持ちをつかんだのでした。

また、拝上帝会は偶像崇拜を否定しました。だけど、中国は偶像崇拜の国です。儒教でも、仏教でも、偶像をつくって拝むのは当たり前。でも、洪秀全たちは、それを悪だと教えるのですから、一般の中国人と馴染むはずがない。拝上帝会は、実際に行動します。村の廟に祭られている孔子様の像や、関帝廟やそういう様々な信仰の対象となっている像を壊します。やがて、土地の有力者からにらまれ、政府の役人から迫害されるようになりました。

こうして、ついに洪秀全は地上に天国をうち立てるため挙兵を決意しました。

太平天国

1851年、洪秀全は広西省金田村で挙兵しました。反乱の名前は太平天国。挙兵したときの拝上帝会会員は1万から2万だったといいます。老若男女を含む大集団は、清軍と戦いながら北上を開始しました。太平天国軍は信仰のもとに団結し、規律がきっちりと守られ、腐敗した清の正規軍よりも強かった。拝上帝会に入会し、反乱に参加した信者は全員、すべての財産を拝上帝会に寄進します。だから、負けたら何もなくなる。勝つしかないです。また、信仰心で自分たちの正義を信じているから強い。軍隊といつても、貧民の集まりですが、男女を分けて軍隊を組織して、夫婦といえども別々に行動しました。博奕（ばくち）やアヘンは絶対禁止。略奪ももちろんダメ。必要な食糧や物資は支給されました。

戦闘に勝って、どこかの町を占領すると、役所の倉庫や地主、商人などの金持ちから、食糧・物資・財産を没収し、太平天国軍共同金庫で保管します。信者への配給品はそこから配られます。また没収した食糧などは、占領地の貧民にも配られたから、貧民の多い一般民衆は太平天国軍がやってくるのを待ちわびています。占領地に対して3年間の租税免除も宣伝したから、太平天国への支持は急拡大しました。略奪暴行やりたい放題の、清朝正規軍は民衆の支持が全くないから、清軍が負けるのは当然です。

太平天国軍は清朝正規軍を破り、占領地を拡大しながら北上をつづけ、1853年に南京を占領し、ここを首都にして天京と改名しました。拝上帝会の会員数は100万に達しました。この段階で中国南部の広大な地域を勢力下に置いており、清という国の中に、太平天国という国ができているという状態です。とはいっても、まだまだ反乱勢力であって一人前の国ではない。洪秀全たち太平天国の指導者は、清朝打倒をめざし、北伐軍を北京に出撃させましたが、これは負けてしまって、清朝を滅ぼすという目標は遠のきました。以後は、支配地域を維持しようとする太平天国側と、これをつぶそうとする清朝との戦いが約10年間つづきます。

太平天国の政策

太平天国は、どんな政策をとなえていたか。

まずは、清朝打倒です。「滅満興漢（満州人を滅ぼし漢人の国を興す）」が反乱のスローガンでした。太平天国軍の男たちは、清朝が漢民族に強制していた弁髪をやめて髪を伸ばしました。弁髪をやめるということ自体が、清朝を否定する反逆行為だったのです。だから、かれらのヘアースタイルを見ればその主張は誰にでもすぐわかったのです。このため太平天国は「長髪賊の乱」とも呼ばれました。太平天国を満州族支配の清朝にたいする漢民族の民族運動と捉えることもできます。

また、土地制度として「天朝田畠制度」を掲げました。地主の大土地所有を否定して、土地を農民に均等に配分する政策です。ただし、戦いに明け暮れた太平天国なので、実際に土地均分が実施されたかどうかはわかっていません。

あと、特徴的なのは、中国史上初めて男女平等を主張したことです。中国は男尊女卑の国だから、これは画期的なことです。

男女平等に関連して、太平天国は纏足を禁止しました。

纏足（てんそく）は10世紀の宋の時代からはじまった風習です。女の子が4、5歳になる頃から足を布でがちがちに巻いてギブスのように固めて、足が大きくならないようにするのです。成長期に固められているため、これをやられた女の子は、すごく痛い。しかし、小さい足が美人の基準だったので、親はなだめすかして子供に我慢をさせたそうです。成長とともに、足の先が内側に折れ曲がって畸形になる。大地をしっかり踏みしめられないので、立ち上がると不安定で歩くとふらふらする。極端に小さな足の女性は、何かにつかまって伝い歩きをしなければならないほどだったらしい。よちよち歩く女性の姿と小さい足が、男性にとって魅力的だったのです。要するに、男が女性を愛玩物のように扱っていたということです。ある意味、奇妙な姿に変形させる金魚並みです。この纏足を太平天国は禁止したのです。洪秀全たち太平天国の指導者の多くは客家出身でしたが、実は客家には纏足の風習はありませんでした。また、女の子に纏足をしてしまうと歩くことさえま办ならぬのですから、労働力にならない。だから、貧しい農家などでは纏足をしていなかったといいます。実際には、太平天国に参加していた女性には纏足の女性は少なかったかも知れません。これを、太平天国は正式に纏足じゃなくて良いのだ、と宣言したということでしょう。

太平天国軍では、女性も武器の運搬などで戦場で男と同様に活躍しました。

さらに、これはふれましたが、アヘンと賭博は禁止でした。

----- 太平天国の経過 -----

南京占領までは、破竹の勢いの太平天国軍でしたが、南京を首都にして以来、変に落ち着いてしまった。洪秀全は皇帝にあたる天王という地位につき、その他の幹部も北王、南王、東王、西王、翼王という王号をと/or、それぞれが南京に豪華な宮殿を造り始めました。

南京といえば、明の初期には首都にもなった中国屈指の大都会です。中国南方の辺境の、しかも貧しい客家出身の洪秀全たちは、大都会の魅力にあてられ、膨大な富を手に入れ、反乱を始めた頃のせっぱ詰まつた緊張感を失ってしまったようです。一部の軍隊を北伐軍として北京攻略に派遣しましたが、これは失敗に終わっています。もし、南京に落ち着いたりせずに、太平軍全軍で北京に攻め込んでいれば本当に清朝を滅ぼすことができたかもしれません、その機会を逃してしまったのです。

太平軍の幹部は自分の富を増やし、権力をより強くすることに集中したとして、互いに仲間割れをします。最高指導者の洪秀全は、宮殿の奥深くに美女たちとこもってしまって、なかなかみんなの前に現れなくなってしまいます。めったに顔を見せないことによって、自分を神秘化するという作戦でもあったようです。

諸王のなかでもっとも力を持っていたのが東王楊秀清（ようしゅうせい）で、天京（南京）を首都としての国家体制づくりの中心となっていました。東王は戦争指導もうまかったのですが、なんといっても面白いのが神が彼にとりついてお告げをするということです。東王が自分でそう言っているだけなのですが、誰にも否定できないので、彼がお告げをはじめると、みんながその命令に従わなければならぬ。天王洪秀全も神の命令には逆らえない。ということで、東王楊秀清は、洪秀全と並ぶ高い権威をもって太平天国を指導しました。

東王の勢力がどんどん大きくなるのに反感を持ったのが北王だった韋昌輝（いしうき）で、かれは自分の部隊を率いて東王の宮殿を襲撃し、東王を殺害してしまいました。東王の一派やその部隊も皆殺しで

す。こうして北王が権力を握ったのですが、次には北王が翼王石達開（せきたつかい）に殺されました。これら一連の事件は1856年に起きました。この内紛で3万人以上が殺されています。やがて、翼王石達開はこのような権力闘争に嫌気がさして、自分の部隊を率いて四川省方面に移動し独自の行動をとるようになりました。代わって、天京で洪秀全と太平天国政府を支えたのは、若い世代のリーダーで忠王という王号を持つ李秀成（りしゅうせい）などでした。太平天国の末期は、ほとんど李秀成ひとりが支えている感じです。洪秀全は、宮殿にこもったままではほとんど何もしなくなっていました。

太平天国を追いつめた義勇軍

太平天国内部では抗争で弱体化が始まっているものの、清朝正規軍はそれよりも弱い。そこで、清朝政府は全国にいる引退した元官僚や、服喪などで帰郷している現役官僚に対して、地元で義勇軍を結成して太平軍と戦うように呼びかけました。義勇軍のことを郷勇といいます。だいたい、官僚になる人物は裕福な地主出身で、郷土に帰れば地元では名前がとどろいている地域のリーダーです。かれらが中心になれば義勇軍はすぐにできる。また、戦乱に巻きこまれれば、郷土が荒廃するし自分たちの財産も奪われてしまうのですから、義勇軍は必死に戦います。正規軍に替わって、この義勇軍が太平天国と戦いました。

義勇軍の中で、とりわけ強力だったのが、今で言えば文部大臣にあたる礼部侍郎（れいぶじろう）だった曾国藩（そうこくはん）が郷里の湖南省で結成した湘軍（しょうぐん）です。湘というのは湖南地方の雅名です。曾国藩は、清朝軍が内部の腐敗で弱体化していることを知り尽くしていたので、自分が組織する義勇軍の将校は、腐敗や墮落と縁のない信頼できる人物だけで固めようとした。そのためはどうしたかというと、学問上の弟子や同学の友人ばかりを集めた。科挙に合格して中央の大員にまでなるような人物は、学者としてもひとかどの人物である場合が多く、曾国藩はまさしく大学者だったので、地元には同門の者や弟子がたくさんいるわけです。学問上の信頼関係というのは結構強い絆です。将校になる連中も、やはりみんな地主です。で、自分たちの土地で働く信頼できる素朴な農民を兵士にしました。

湘軍は、規律ある軍隊となり、太平天国軍を圧迫していました。また、曾国藩の弟子である李鴻章（りこうしょう）も安徽省で同じように淮軍（わいぐん）を組織しました。

欧米列強は、太平天国の反乱が始まった当初は、太平天国がキリスト教を標榜していることもあり、わりと好意的に中立を守っていました。しかし、内乱を逃れて多くの難民が上海に集まるなどして、やがて、内乱が対中国貿易にはマイナスと判断します。1860年に貿易に有利な北京条約を清朝政府と結んだのちは、積極的に清朝支援を打ち出しました。米国人ウォードは、中国人を集めて義勇軍「常勝軍」を結成し、かれの死後は、イギリス軍人ゴードンがこれをひきつぎ太平天国軍と戦いました。ちなみに、このゴードンは、太平天国で活躍したあと、エジプトのスーダンで起きたマフディーの乱とよばれる現地住民の反英闘争の鎮圧におもむき、戦死しています。

これらの義勇軍によって太平天国は徐々に支配地域を奪われ、1864年、南京が陥落し太平天国は滅亡しました。最後まで、神の奇蹟による逆転勝利を信じていた洪秀全は、その直前に病死していました。忠王李秀成は捕虜となり処刑されました。翼王石達開はその後もしばらく単独で戦いつづけましたが、これもやがて鎮圧されました。

太平天国の意義

太平天国の反乱は、清朝政府の弱体ぶりを明らかにしました。イギリス軍に弱いだけではなかった、ということです。

また、太平天国が、「滅満興漢」のスローガンを掲げ、民族運動的な性格を持ったことは中国革命の先駆けとして位置づけることができます。事実、のちに辛亥革命のリーダーとして清朝を倒した孫文は、少年時代に洪秀全を見る太平天国軍の生き残りの老人の話を聞いて、すっかり影響を受けて友人から洪秀全というあだ名をつけられていたといいます。また、中国共産党の軍隊である紅軍の司令官となった朱徳（しゅとく）も、少年時代に翼王石達開の部下だった機織り職人の話を聞き、革命に強いあこがれを持ちました。脈々と革命の志が受け継がれているのがわかります。

幕末日本にも影響がありました。長州藩士久坂玄瑞（くさかけんずい）は「英仏がいまだ日本に武力を加えないのは太平軍が英仏と戦っているからだ」ということを言っています。この認識が正しいかどうかは別にして、中国の次は日本が英仏の侵略の標的になる、という危機感が感じられます。太平軍が時間を稼いでくれている間に、日本を変えなければならないということですね。この意識が、幕府を倒す強烈な原動力になります。

一方、郷勇を組織し、太平天国を鎮圧するのに活躍した官僚達は、乱後の清朝の政界で大きな影響力を持ち、清朝の改革がはじまります。

第104回 太平天国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第103回 アヘン戦争（後編）](#)

[次のページへ](#)
[第105回 アロー戦争・洋務運動](#)

世界史講義録

第105回 アロー戦争・洋務運動

アロー戦争

太平天国が中国南部を席捲しているとき、同時進行で、清朝とイギリス・フランスとの戦争が起こっていました。この戦争をアロー戦争、または第二次アヘン戦争といいます。この戦争の、経過と結果を見ておきます。

アヘン戦争後の南京条約で開港場を増やしたイギリスは、このあと綿工業製品の中国への輸出が増えることを期待していました。そもそも、イギリスが一番売りたいのは、インドの農産物（？）のアヘンではなく、イギリスの工業製品なのですから。ところが、開港場が増えても、イギリスが期待したほどに綿工業製品が売れない。これは、中国産業の底力です。中国の綿工業製品は、機械制大工業のイギリス製品に対抗できるだけの価格と品質を備えていたということです。

しかし、イギリスとしては、開港場をもっと増やせば、輸出は伸びると考えた。開港場を増やすには、新しい条約を清朝政府と結ばなければならぬ。しかし、基本的には清朝は欧米諸国と貿易をしたくないわけだから、開港場を増やすためにはアヘン戦争の責任をとらせる形で南京条約を結ばせたように、もうひとつ戦争を仕掛けて、清朝を負かして条約を結ぶのが一番手っ取り早い。というわけで、アヘン戦争後から、イギリスは、次に清朝に戦争を仕掛けるチャンスを狙っていました。

その戦争のきっかけとなったのが、1856年のアロー号事件です。

事件が起きたのは、広州の港です。アロー号という船が広州港に入港したのですが、この船が、実は海賊船であるという情報が、治安当局に入りました。そこで、広州の警察が、アロー号に乗り込んで調べてみると、本当に海賊船だったので、その乗組員12名を逮捕しました。乗組員は全員中国人です。警察が海賊を捕まえるのはあたりまえのことですし、容疑者は中国人なので、何も問題はないはずだったのですが、これにイギリスがいちゃもんをつけた。

その理由が、この船がイギリス船籍だったことと、清朝の警察が船に乗り込んだ際に、船のポールに掲げてあったイギリス国旗を引きずりおろした、ということでした。国旗を引きずりおろしたことが事実かどうかは、どうもはっきりしないのですが、イギリス側は、イギリスに対する侮辱であると、ねじ込みました。もし、本当に国旗を降ろしたとしても、戦争の理由になるような大事件ではありません。また、アロー号がイギリス船籍だとして、そこに中国の警察が乗り込んだことを、主権侵害のように非難したのですが、実は、アロー号の船籍登録は期限切れになっていたのです。車で言えば、車検切れのようなものです。つまり、イギリス船籍ではなかった。

しかし、イギリスは戦争をしたいので、この事件を盾にとって強引に清朝政府を責め立て、開戦に持ち込みました。いちゃもんをつけて、喧嘩をふっかけるゴロツキと同じです。

この2年前の1856年、広西省でフランス人の宣教師が殺害される事件が起きており、フランスもイギリ

スと共同で清朝に宣戦しました。フランスはナポレオン3世の時代ですね。

1857年に、インドで大反乱があったため、本格的な戦闘は57年末からはじまり、英仏連合軍が海路北上し天津に迫ると、清朝は降伏し、58年天津条約が結ばれました。この条約には、イギリス、フランスの他に、ロシア、アメリカも参加しています。条約が結ばれて、英仏軍が去ると、清朝政府内で、対外強硬派が力を持ち始めます。喉元過ぎれば熱さを忘れるというやつで、この辺の清朝政府の対外政策の一貫性のなさは、アヘン戦争以来全然変わっていません。

59年に、英仏の使節団が、条約の批准書を交換するためにやってきたのですが、天津の近くで清朝側がこの使節団を砲撃して追い払ってしまいます。60年には、再び英仏連合軍が北上し、北京に向けて進撃しました。皇帝（咸豊帝（かんぽうてい））は、北方の熱河という町の離宮に逃亡し、北京に残された政府が連合軍と北京条約を結び清朝は、再び降伏しました。

この時に、北京近郊にあった円明園（えんめいえん）は、英仏軍によって略奪破壊されてしまいました。宣教師カスティリオーネがヴェルサイユ宮殿を摸して設計した宮殿でしたね。現在でも、円明園の跡地は廃墟として残されています。私も、昔一度行ったことがあります、草莽々のなかに大理石の柱の残骸がごろごろ転がっていました。

北京条約の中身です。

まずは、開港場の増加。天津や南京など11港を新たに開港しました。

キリスト教の布教の自由。

外国人の中国国内の旅行が自由になった。これによって、商人はどこにでも行けるようになりました。それまでは、開港されていた五港から出ることは出来なかったのです。

北京に、外国公使の駐在を認めさせた。

イギリスに九龍半島の一部を割譲。九龍半島は香港島の対岸にある半島です。現在では、一般には香港の一部として知られていると思います。

そして、アヘン貿易の公認。アヘン戦争後の南京条約では触れられていなかったアヘンについて、ついに正式に認めさせたのです。これにともなって、清朝は民間人に対してのアヘン吸飲を認めることになりました。麻薬貿易も自由、吸うのも自由というわけです。

この北京条約によって、中国の半植民地化は深りました。1862年上海に密航した長州藩の高杉晋作が「上海は中国に属している土地なのに、イギリス・フランスに所属しているといつてもよい」と述べるほどに中国の半植民地化は一層進んでいきました。

忘れてはならないのは、この時期、南京を中心として太平天国の反乱が起きているということです。内側に反乱、外からは外国の侵略と、大変な状態だったわけで、不平等な条約でも結ばざるを得なかったのです。英仏にとっては、自分たちの要求を呑ませたわけですから、清朝政府にこの条約をきっちり守らせたい。そのためには、清朝にしっかりしてもらわなければならないから、これ以後、太平天国平定に力を貸すようになったわけです。

ロシアの東方進出

イギリス、フランスが南方から中国をうかがうだけでなく、北からはロシアが中国清朝に対して領土的な野心をもって接近していました。

19世紀半ば、ロシアの初代東シベリア総督となったムラヴィヨフは、衰退した清朝からの領土割譲を図り、アムール川（黒竜江）を探検、占領し、1858年、清朝と愛暉（アイグン）条約を結び、アムール川以北の土地を獲得しました。同時に沿海州（アムール川の支流ウスリー川以東）を清朝との共同管理地としました。アロー戦争の天津条約を結んだのと同じ年です。

また、アロー戦争終結の1860年には露清北京条約を結び、沿海州を獲得しました。この沿海州の南端にロシアが開いた軍港がウラジヴォストークです。この名前は「東方を支配せよ！」という意味。こうして、ロシアは東方に不凍港を獲得することに成功しました。

この後1875年、ロシアは日本と結んだ千島・樺太交換条約で、樺太を獲得しています。どんどん東へ向かっている感じですね。

ロシアは、東部だけでなく、中央アジアでも清朝の領土をうかがいました。1860年代に新疆地域（中央アジア）でイスラーム教徒の反乱が起きると、混乱に乗じてイリ地方を占領しました。この後、1881年、イリ条約でイリ地方は清朝に返還されました。その代償として清朝は、新疆地域の一部、賠償金、貿易特権をロシアに与えました。

ちなみに、ロシアは、1868年には中央アジアのブハラ＝ハン国を、1873年にはヒヴァ＝ハン国を保護国化しています。両国は、それまでは清朝の朝貢国でした。

洋務運動

太平天国の乱が終息したあと、清朝内部で改革が始まりました。中心となったのは、鄉勇（義勇軍）を組織し、太平天国鎮圧に活躍した官僚たちです。かれらは、その活躍によって、政権内で大きな発言力を持つようになりました。具体的には、曾国藩、李鴻章、左宗棠（さそうとう）、張之洞（ちょうしどう）といった人々で、太平天国で自分の地元の人々を組織して戦ったわけですから、当然皆漢人です。清朝は、満州人の政権ですから、基本的には漢人官僚を警戒するところがあるのですが、もはやそんなことを意識している場合ではなくなってきたということですね。

かれらは、共通して、地方長官となり、西洋の科学技術の導入を図りました。太平天国との戦いを通じて、軍事技術を筆頭に中国の科学技術が西洋に比べて大きく遅れをとっていることを強く自覚したようです。この西洋の科学技術導入運動を洋務運動と言い、洋務運動をすすめた官僚を洋務官僚と呼びます。地方長官は、大きな裁量権を持っているので、かれらはそれぞれに鉱山開発や工場建設、鉄道敷設などを行なっていました。

洋務運動は、中国の文化が世界の最高峰であるという中華意識を捨てて、他の文明を取り入れようとしたという点では、画期的ではあったのですが、清朝を強化するという点では、効果は限定的でした。

その理由のひとつは、中華意識の捨て方が中途半端だったこと。洋務官僚の考え方方は「中体西用（ちゅうたいせいよう）」というものでした。中は中国、西は西洋、つまり、中国の文明が本体であり正しいものであって、西洋の文明の便利なところだけを使うのだ、ということです。科学技術は進んでいるから、そこだけは取り入れる、しかし、文明そのものは中国の方が優れているのだから、科学技術以外の西洋文明に見習う点は無いということです。

しかし、西洋の科学技術は、西洋文明の中から生まれたものです。すぐれた技術は、資本主義経済の競争の中で、常に改良を加えられ発展してきたものです。また、西欧列強が戦争に強いのは、ただ単に武器が優れているからではなく、国民国家が形成され、兵士ひとりひとりが政府のために戦う意味を自覚しているからです。法の下に個人の権利が保障されており、国民全員ではないにしろ、国民の意思を繁栄した議会のもとで政治が運営されている。

洋務官僚たちは、こういう文明全体を考察することはなかった。西欧の政治制度や社会制度については無関心で、清朝に議会を作ろうとか、資本家を育成しようとかいう発想は全くなかった。根っこではなく、枝葉だけを真似ようとしたのです。

また、洋務官僚たちは自分の管轄地で、工場建設などを行いましたが、これらの企業は国有ではなく、地方長官の私物というべきものになっていきます。清朝全体の強化ではなく、洋務官僚個人の権力強化の傾向が強いものでした。

洋務運動では、軍事工場の建設や西洋式軍隊の育成に重点が置かれたので、西洋式の軍隊を育成した官僚は、そのまま軍閥化していきました。特に李鴻章は北洋軍という軍隊を組織し、政治的に強大な力を持ちました。後の話ですが、李鴻章の部下で、北洋軍を継承した袁世凱（えんせいがい）は、その軍事力を背景に清朝を倒すことになります。

第105回 アロー戦争・洋務運動 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第104回 太平天国](#)

[次のページへ](#)
[第106回 日本の開国](#)

世界史講義録

第106回 日本の開国

ペリーの来航と明治維新

西欧列強の勢力はトルコ、インド、中国と徐々に東に向かい、いよいよ日本に本格的にやってきました。これが、1853年、アメリカ海軍提督ペリーの来航です。時期的には、アヘン戦争終結10年後、太平天国の反乱がはじまって2年目のことです。ペリーの来航によって、「幕末」がはじまります。徳川幕府が崩壊して明治維新によって新政府が成立する激動の時代ですね。

徳川時代の外交政策というと、鎖国という言葉がすぐに浮かびますが、実際には、中国、朝鮮、オランダとは貿易をおこない、使節の来訪がありました。

インドや中国がイギリスなどのためにどのような目に遭っているか、武士階級を中心とする日本の読書人たちは、長崎にやってくるオランダ人や中国人からの情報で知っていました。それどころか、徳川幕府の為政者たちは、アメリカのペリーが日本にやってくることも、オランダ人からの情報で知っていたのです。

ペリーが来航する50年以上前の18世紀末から、徳川幕府に貿易を要求するロシア船が来航していました。1792年にはエカチェリーナ2世がラクスマンを根室に派遣、1804年にはレザノフが長崎に来航し、貿易を求めて拒否されています。19世紀にはいると、イギリスの捕鯨船の乗員が燃料や水を求めて鹿児島や茨城に上陸したりする事件が起きたり、日本人漂流者を乗せたアメリカ船を日本側が砲撃して追い払うというモリソン号事件もありました(1837年)。

当初、幕府は長崎以外の場所に近づく外国船は砲撃して追い払うという方針をとっていましたが、アヘン戦争の成り行きを知ると、燃料不足、食糧不足で困っている外国船には便宜を与えてお引き取り願うという方針に転換します。

しかし、鎖国の方針は変えない。1844年、オランダ国王は世界情勢を説き鎖国をやめるよう幕府に忠告する国書を送るのですが、幕府はこれを無視しています。

こういう流れの中でやって来たのがペリーです。ペリーの目的は日本を開国させることです。開国させたかったのはなぜかというと、第一には、日本をアメリカの捕鯨船の補給基地として利用したかった。当時、アメリカは北太平洋で捕鯨をさかんにおこなっていた。目的は鯨油です。石油が使われる前は鯨油が燃料として利用されたのです。使うのは油だけで鯨肉は食べずに捨ててしまっていた。もったいない話です。年平均100隻の捕鯨船が操業していたといいます。

もう一つは、蒸気船でアメリカから中国へ直行するための中継基地として日本を利用したかった。すでに、蒸気船が遠洋航海に利用されていましたが、当時はまだ太平洋横断に必要な石炭を蒸気船に積めなかつたようです。

だから、ペリーが日本に来航したときに、通った航路は東回りです。なんとなく、太平洋を渡って日本に

来たようにイメージしている人が多いと思いますが、ペリーはアメリカ東海岸のノーフォーク港を出発して、大西洋を横断後、アフリカを回ってインド洋、香港、上海、琉球を経由してやって來たのです。アメリカを発ったのが1852年11月24日、浦賀沖到着が53年6月3日ですから、約半年かかっている。

ペリーは、半年以上かけて日本へ開国を要求しにいくわけですから、鎖国だからダメですといわれて、ハイですか、と簡単に引き下がるつもりはなかった。だから、この交渉を成功させるために、事前に日本について研究しました。オランダ人の著作など、日本に関する研究書を40冊以上読み込んだ。長崎に行って開国を要求しても、江戸からの回答が来るのをさんざん待たされたあげくに鎖国の国是を理由に拒否されている先例も知っています。

研究の結果、ペリーが得た結論はこうです。「日本人は礼儀正しいが、権威に弱いから脅すにかぎる。」そして、江戸から遠く離れた長崎ではなく、江戸湾の入り口にあたる浦賀に現れ、大砲で脅したのです。

オランダ情報で、ペリーがやってくることは知つてはいましたが、実際に浦賀沖に現れたアメリカ船を見て、幕府の役人は驚いた。役人だけでなく、日本中が驚きました。

まず、やって来た船は1隻ではなかった。4隻の艦隊でやって来ている。しかもそのうちの2隻、ペリーが乗っている旗艦サスケハナ号とミシシッピ号は、世界でもまだ珍しい蒸気船です。西欧人にとってもまだまだ珍しかったのです。大きさも、世界最大級でした。要するに、世界最新鋭の軍艦が目の前に現れたわけです。

しかも、この2隻は、木造船ですが船体に鉄が張つてある。日本人には鉄の船が浮かんでいるように見えたのでしよう。他の2隻も防腐のため黒く塗装されていたため、日本人は黒船と呼んだ。黒い蒸気を吐き出している姿はいかにも恐ろしかったに違いありません。

ついでに言っておくと、蒸気船といいますが、当時はまだスクリューが発明される前なので、船の両脇にでっかい水車のようなものにつけてぐるぐる回して走る外輪船です。蒸気の力だけにはたよれない帆もついている帆走併用型です。

「日本人は脅すにかぎる」というペリーの作戦どおり、黒船の威力に押されて、浦賀に上陸したペリーから開国を要求するアメリカ大統領の親書を受け取った幕府は、とりあえず時間稼ぎに翌年の回答を約束しました。ペリーは日本を去りますが、アメリカへは帰らずに上海で半年間待機した後、54年1月浦賀に再び姿を現しました。このときには、遅れてやって来た船を加えて7隻の大艦隊になっている。

幕府は、ついに開国に踏み切りました。横浜に上陸したペリーと交わしたのが日米和親条約。下田、函館の二港の開港と、領事の駐在、アメリカに対する最惠国待遇の付与などがその内容です。

上海には列強各国の艦隊が寄港しており、ここでペリーが日本を開国させた情報は西欧列強にすぐに知れ渡りました。同じ年には、イギリス艦隊やロシア軍艦も長崎に来航しました。もはや鎖国を理由に断ることが出来ない幕府は、同様の条約をイギリス、ロシア、オランダと結んでいきました。

日米和親条約は、単に日本の開国を決めただけで、貿易に関する規定はありませんでした。このため、日米和親条約に基づいて来日したアメリカ総領事ハリスと幕府の間で貿易に関する条約交渉がはじめり、1858年に日米修好通商条約が結ばれました。これは、日本の関税自主権が無く、アメリカの領事裁判権を認めるという不平等条約でした。この後、幕府はオランダ、ロシア、イギリス、フランスとも同様の条約を結びました。

ペリーの来航から、日米修好通商条約を結ぶまでの過程で、それまで独裁政治を行ってきた幕府が自信を失い、朝廷に経過報告をしたり、条約調印の許可を求めたり、諸大名に意見を聞くようになりました。幕府の外交政策に対するこのような自信のなさは、幕府をおそれて政治的意見を控えていた諸大名や一般的な武士階級を一気に勢いづかせた。また、幕府の権威の低下にともない、朝廷の権威が急上昇することになりました。

外交問題に対して、世論は沸騰しました。このなかで主流となった意見は、幕府の弱腰を非難し、鎖国を守り、外国勢力を撃退せよ、というものでした。幕府が弱腰ならば、朝廷を押し立てて外国人を追い払えという「尊皇攘夷（そんのうじょうい）」のスローガンが広がっていきます。

しかし、実務を担当する幕政担当者にとって見れば、強大な軍事力を持つ欧米列強を拒絶できるものではない。それは、ペリー艦隊を見れば一目瞭然。ペリー艦隊が江戸湾に進入し、砲弾を撃ち込めば、江戸の町は壊滅します。あの中国でさえ、何千里も彼方からやってきたイギリス軍にアヘン戦争で敗れ、アロー戦争でも敗れつつある。

反対派を大弾圧して、日米修好通商条約を結んだ大老井伊直弼は、「条約を拒否して戦争になり、敗れれば、領土を割かれ、賠償金を支払い、国辱を受けることになる。実害のない方を選択するのはやむを得ない」と語っています。中国の二の舞、植民地化されることをおそれていたのです。

この後、尊皇攘夷運動は討幕運動へと展開します。政権担当能力を無くした徳川幕府を倒し世界情勢に対応できる新政府樹立をめざしたのです。下級武士層が、尊皇攘夷運動で世の中を揺り動かし、その運動をうまくすくい取った薩摩藩、長州藩が中心となって幕府を倒すことに成功しました。これが1868年の明治維新。

薩摩藩、長州藩は、幕末の時期に実際に攘夷を実行し、イギリスなどと戦い敗れています。その実力を知つてからは、幕府を倒し新政府を樹立し、大胆な開国政策で欧米文化を取り入れていかなければ日本が滅びると考えるようになっていました。はやくも明治維新が成功する前から、長州藩も薩摩藩も独自に留学生をイギリスに派遣しているほどです。前回紹介したように長州藩の高杉晋作などは、上海に密航して中国の現状を実際に見た。攘夷（外国人を追い払う）など、出来るはずがない。欧米に対抗するには、欧米文化を取り入れなければならないと考えたのは無理はありません。1861年には、ロシアが約半年間対馬の一部を占領するという事件も起きており（ロシア艦ポサドニック号による。イギリス軍の圧力で退去）、植民地化の恐れというのは、今われわれが想像する以上に、せっぱ詰まつたものだったと思います。

日本の改革

徳川幕府に代わって成立した明治政府は、次々と大胆な改革を断行し近代的な、言い換えると、ヨーロッパ的な国民国家をつくりはじめました。

1871年には、廢藩置県によって藩をなくし、中央集権制度を確立します。1872年には徴兵令を公布し、国民皆兵の原則を確立。その前年1871年には解放令で被差別身分を解放し、平民と同様とします。現実には人々の意識が急に変わらないので差別はつづくのですが、国民国家をつくるためには、身分差別を法的に認めるわけにはいかないのです。徳川時代の士農工商のうち農工商は平民とし、それまでは許されて

いなかった苗字を許可し、他の身分との結婚、職業選択、移住の自由を認めました。旧藩主や公家は華族、武士階級は士族となります。華族、士族、平民という区別があるなら、平等じゃないのではないかという考え方もありますし、華族は確かに特権階級なのですが、身分間の通婚が自由というところがポイントなんだと思います。現実に、この後、士族と平民という違いは、何の意味もなくなっていきます。人口に占める割合が極少でも華族身分があるので、「四民平等」はまやかしと言えばまやかしながら、この言葉自体は実感をともなって広まり、受け入れられたように思います。

明治政府のめざすところは、西欧列強と互角の国づくりですから、「殖産興業」というスローガンのもと、近代工業の育成に力を入れた。工業化によって国を豊かにして、強力な軍隊をつくる。「富国強兵」です。そうすれば、植民地化を免れる。

この明治政府のさまざまな改革の方向性を一言でズバリとあらわした言葉が「文明開化」。中国の洋務運動の「中体西用」と比べてみるとその特徴がはっきりします。

中国ではあくまで中国の文明が変更不要のもの「体」として中心に据えられています。日本の場合は、西洋化によって「文明」が開くのですから、それ以前の徳川時代までの日本の文化を全面否定しているといっていい。だから、徹底的に変えてしまう。

見た目で一番わかりやすいところで言えば、服装。女性の服装が変化するのはゆっくりですが、男性の公的な場面での服装が一気に替わる。1871年に条約改正のために欧米を歴訪した岩倉使節団の写真がありますが、正使の岩倉具視は着物（和装）を着ていますが、大久保利通や木戸孝允など他の副使以下はすべて背広にネクタイ姿です。明治維新の3年後ですからね。この変化の速さはすごいことです。明治政府は西洋化をすすめるため、公務員には洋服を着用させました。役所の部屋に入室するときも靴を履いたままであるように命じるのが1871年です。伝統であり慣習である服装という文化を一気に変えるのは難しい。そこで、政府は天皇にも洋装させます。明治天皇の若いころの写真で、伝統的な装束を身につけたものを一枚だけ見たことがあります、それ以外すべて洋装、軍服をつけての写真や肖像画ばかりですね。天皇ですら洋装なのだから、役人はすべて洋装になるわけです。

ただ、庶民のプライベートの時間まで完全に洋装になるには、まだまだ時間がかかります。私の子供のころ、1960年代ですが、父親は会社から背広姿で帰ってきましたが、帰るとすぐに着物に着替えていましたね。母親も、着物姿に割烹着を着て家事をしている写真がありました。ただ、1960年代後半から70年代には完全に、着物を着なくなっていましたように記憶しています。

余談ですが、この1871年には裸体禁止令というのも出ています。すっぽんぽんで出歩く人がかなりいて、外国人の目にはまさしく野蛮そのものに見えたのが恥ずかしかったのでしょう。昭和の初めころの地引き網を引いている漁師の写真を見ると、素っ裸の人がけっこういます。夏目漱石が学生時代に、瀬戸内の友人の家に遊びに行って、ふんどし一丁で海に遊びに行き海岸で貝をたくさん捕った。両手に持ちきれないで、ふんどしをほどいて、これに貝を包んで、素っ裸で宿に帰ったという話もあります（伊藤整『日本文壇史』）。浮世絵を見ても、ふんどし姿の男だけです。日本の文化の根っこは、裸に寛容だと思います。

福沢諭吉を初めとして啓蒙思想家が、ヨーロッパの思想や制度をどんどん紹介する。そういう中で、民主主義的な考え方も徐々に広まってくる。明治政府は基本的には、薩摩・長州出身者による藩閥独裁政治です。これに対して、自由民権運動がわき起るのが1870年代半ばから。今風に言えば、民主化運動です。

明治政府も、一定の譲歩を示し、徐々に民主化をしていきます。1881年には、「国会開設の詔」を発表し、10年後の国会開設を約束、1889年には大日本帝国憲法を発布、1890年には国会を開設しました。政治制度も完全に西欧式に変えたわけです。明治政府の中心である薩長藩閥グループにとっては、民主化自体はあまりやりたくないでも、西欧列強に日本を文明国として認めてもらうには、憲法を制定し国会を開かなければならぬということは強烈に意識していました。

明治政府の対外政策

明治政府による国境の確定は次のようにすすめられました。

1872年、琉球王国を滅ぼし琉球藩を設置、琉球藩は1879年には沖縄県となり、完全に日本の領土となります。

北方に関して、徳川幕府が1855年にロシアと結んだ日露和親条約では、樺太は日露雑居地、択捉（エトロフ）島以南が日本領とされました。1875年には、樺太・千島交換条約によって、樺太はロシア領、シュムシュ島以南の全千島列島が日本領となります。領土の大きさからいえば、圧倒的に樺太が広い。

中国との関係では、1871年清朝との間に日清修好条規を結びました。これは、ヨーロッパのルールに基づいた条約。日本が中国を中心とした従来の東アジアの国際秩序から抜け出したということ、ヨーロッパ風の国として中国もそれを認めたということです。この条約で、日本と清は対等です。

1874年には台湾出兵という戦争を行っています。約3000名の日本兵が台湾を占領した事件で、2つの意味があった。ひとつは、この戦争の原因は琉球の漁民が台湾に漂着して現地民に殺されたという事件だったのですが、日本政府が清朝政府に抗議すると、清朝はこれに対して、殺したのは台湾の原住民で清朝の国民ではないから関知しないといった。実は、清朝は日本からの抗議そのものを受け付けないという選択肢があったのです。琉球はこの時点で、日本によって琉球藩とされていますが、徳川時代からこの時点までずっと、清朝に朝貢していた。日本と清に両属しているわけです。だから、清は、琉球はわが国の属邦である、日本にこれを抗議する権利はないということができた。だけど、清はそういう回答をしなかった。つまり、日本が琉球を領土としていることを事実上認めたということ。しかも、責任はないというのなら、台湾の原住民に責任をとらせるために出兵しても文句ありませんね、ということになる。

幕末維新で活躍した武士、士族階級は、明治になってさまざまな特権が奪われ、こんなはずではなかったという不満がたまっていました。とくに、薩摩をはじめとする九州や長州の士族に不満が多い。明治政府としては、この不満をそらすために、戦争をやって彼らの不満をそらす必要があった。だから、台湾遠征軍には薩摩士族が多く従軍しています。

こうして、おこなわれた台湾出兵でした。台湾を占領したものの、日本はここを領土として維持していくだけの準備も力量もなかつたし、イギリスの調停もあってやがて撤兵しました。

そして、日本の近現代史にとって大きな意味を持つ朝鮮との関係ですが、これは次回に詳しく話します。

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第105回 アロー戦争・洋務運動](#)

[次のページへ](#)

[第107回 朝鮮の開国と日清両国の動き](#)

世界史講義録

第107回 朝鮮の開国と日清両国の動き

■日本に強いられた朝鮮の開国

1871年に日本は清朝と日清修好条規を結び、朝鮮にも国交求めました。しかし、朝鮮は清国を宗主国とする伝統的な外交秩序のなかに自国を位置づけ、西欧諸国に対しては鎖国政策をとっていたため、近代化した日本との通商を拒否しました。

1875年、朝鮮の首都ソウルに近い江華島の沖で、日本の軍艦雲揚号に朝鮮軍が砲撃を加える事件が起きました（江華島事件）。雲揚号が無断で測量をおこない朝鮮側を意図的に挑発した結果でした。日本は、江華島事件の責任を問う形で朝鮮と交渉をおこない、1876年、日朝修好条規が結ばれました。これにより朝鮮は開国し、釜山など三港を開港しました。また、この条約は日本の領事裁判権を認める不平等条約でもありました。ペリーが日本に対しておこなったのと同じ事を、日本は朝鮮におこなつのでした。この後、朝鮮はイギリス、ドイツなどとも同様の条約を結びました。

■朝鮮政府内の対立

朝鮮政府内では、国王高宗（位1863～1907）の実父大院君と王妃閔妃（ミンビ）がそれぞれ派閥を作り権力闘争をしていました。また、開国後の政権運営について、清朝の庇護のもとで伝統を守ろうとする守旧派と、近代化をめざす開化派の路線対立も生じていました。

■清と介入を招いた壬午軍乱

1873年から政権についていた閔妃派政権は、開化路線をとり日本から軍事顧問を招き洋式軍隊の創設に着手しました。これに不満を抱いた旧式軍の兵士たちが、1882年反乱を起こす（壬午軍乱）、開国後の米価高騰に不満を持つソウルの下層民衆もこれに加わり、閔妃派と日本公使館が襲われました。この反乱を利用して大院君は政権を握りましたが、宮殿から脱出した閔妃が清に救援を要請したため、清軍3000名が出動して反乱を鎮圧、大院君は捕らえられ中国に送られました。返り咲いた閔妃派政権は、保守的傾向と清への依存を深めるようになりました。一方、軍事顧問が殺された日本も出兵し、公使館に兵士を駐屯させる権利を得ました。

■金玉均ら急進開化派の動き

事件後、朝鮮は謝罪使を日本に送りましたが、その中に金玉均（キムオクキュン）などの若手開化派官僚が含まれていました。金玉均は1882年にも日本に視察旅行をし、朝鮮の改革に期待を寄せる福沢諭吉の紹介で井上馨、大隈重信、渋沢栄一などと面識を得ており、今回も福沢などと接触して、日本をモデルにして一刻も早く朝鮮の近代化を図ることが必要と考えるようになりました。帰国後、金玉均らは急進開化派として政治改革を試みますが、守旧派の抵抗で身動きがとれず焦りを募らせていました。

■日本の軍事力をあてにして失敗した甲申政変

1884年12月4日、金玉均ら急進開化派は、クーデタを決行しました。ソウル駐在日本公使が軍事援助を

約束したのです。また清の朝鮮駐屯軍が清仏戦争の影響で3000名から1500名に減らされたことも好機と考えられました。

金玉均らは、国王の身柄を確保した上で閔妃派の政府要人を殺害し、5日には新政権樹立と改革を宣言しました。この間日本兵約150人は王宮の占拠にあたっていました。しかし、6日に袁世凱率いる1500名の清軍が王宮に至り日本軍を攻撃すると、日本軍は小競り合いの後に金玉均ら開化派を見捨てて退去しました。また事件を知った民衆によって日本公使館が焼き討ちにあい日本公使もソウルから逃れました。閔妃派の守旧派政権が復活し、事件に関わった開化派は処刑され金玉均は日本に亡命しました。この事件を甲申政変といいます。

■衝突を避けた日清両国

事件の翌月、日本はソウルに軍隊を派遣し、自らの責任には触れず、朝鮮政府に公使館焼き討ちにたいする謝罪と賠償を要求して認めさせました。また、日清両国は朝鮮に駐屯する両軍の衝突を避けるため、1885年、天津条約を結びました。朝鮮からの日清両国軍の撤兵、朝鮮へ派兵する場合は相互に事前通告する、というのがその内容です。いずれ清朝との戦争は不可避と考えた日本は、この後戦争準備を進めていきました。

■その後の金玉均と福沢諭吉

亡命してきた金玉均は日本政府にとって利用価値はなく、小笠原の父島や、北海道に移送され罪人同様の扱いをうけました。日本に見切りをつけた金玉均は1894年上海に渡りましたが、そこで朝鮮政府から派遣された刺客に暗殺され、遺体はソウルに運ばれ「大逆無道玉均」としてさらされました。「日本が東洋のイギリスならば、朝鮮はフランスに...」との彼の夢は、日本の軍事力を頼ったため破れたのでした。福沢諭吉は、近代化されたアジア諸国との連帯を模索していましたが、甲申政変以後、朝鮮近代化への期待を捨て「脱亜入欧」をとなえるようになりました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第107回 朝鮮の開国と日清両国の動き おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第106回 日本の開国](#)

[次のページへ](#)
[第108回 日清戦争と日本による朝鮮の植民地化](#)

世界史講義録

第108回 日清戦争と日本による朝鮮の植民地化

朝鮮の農民反乱からはじまった日清戦争で日本は勝利したものの、朝鮮政府はロシアに接近して日本の排除を試みました。日露戦争の後、日本は朝鮮支配を完成させました。

■甲午農民戦争から日清戦争へ

1894年、全羅道を中心に、甲午農民戦争と呼ばれる農民反乱が勃発しました。指導者全 準（チョンボン・ジュン）は、東学の指導者でした。東学とは19世紀末に儒教、仏教、道教を融合して成立した宗教で、西学=キリスト教に対抗する意味で東学と名づけられたのです。

2月、全羅道古阜（コブ）郡で役人の不当な徴税に抗議して千人ではじまった反乱は、5月には1万人に増え、道都全州を占領するに至りました。「悪政改革、外人追放、万民福利、逐洋斥倭（ちくようせきわ・西洋人と日本人を追い払え）」を唱え、開国以来目に見えて生活が悪化していた民衆の支持を集めました。

朝鮮政府は、これを鎮圧できず清に援軍を要請しました。清は出兵するとともに天津条約に基づき日本に通告したため、日本も居留民保護を名目に朝鮮への出兵を決定しました。

侵略につながる日本の出兵をのぞまない朝鮮政府は、日本に撤兵を要請する一方、出兵の口実をなくすため農民反乱軍と交渉してその要求を受け入れたため、農民軍は全州を退去しました。反乱終結を理由に、朝鮮政府は日清両軍に撤兵を要求しましたが、これを機に清と戦って朝鮮に対する支配権を確保したい日本は要求を拒否して、7月末、逆に王宮を軍事制圧し親日政権を樹立し、朝鮮西海岸で清国艦隊に攻撃を開始しました（宣戦布告は一週間後）。こうして日清戦争が始まりました。

■日本の勝利と下関条約

戦闘は日本軍の優勢のうちに進み、9月には平壌会戦と黄海海戦で勝利し、10月には清朝領内の遼東半島、翌年1月には山東半島に侵攻、3月には澎湖島を占領しました。

1895年3月、清は降伏し、下関条約が結ばれました。全権代表は日本が伊藤博文、清は李鴻章でした。内容は、朝鮮の独立、遼東半島・澎湖島・台湾の日本への割譲、賠償金2億両などです。朝鮮の独立とは、清が宗主権を放棄し日本の朝鮮への干渉を容認することを意味しました。賠償金2億両は当時の日本政府の歳入4年2ヶ月分にあたります。

■ロシアなどによる下関条約への干渉

日本が清に勝利し、広大な領土を獲得したことは、ヨーロッパ列強の警戒感を招きました。特に、中国東北部への進出を狙っていたロシアは、フランス・ドイツを誘って遼東半島の清朝への返還を日本に要求しました。これを三国干渉といいます。日本はこの要求に屈して、遼東半島を清に返還しましたが、この後ロシアを仮想敵として軍備拡張をおこなっていました。

■ロシアに接近する朝鮮政府

日清戦争以来、朝鮮では親日派政府が成立していましたが、閔妃は三国干渉の結果を見て、日本の勢力を排除するためにロシアへの接近をはかりました。1895年10月、これを阻止しようとした日本公使陸軍中

將三浦梧樓は、深夜に日本兵と壮士を引き連れ王宮に乗り込み、閔妃を斬殺し遺体を焼却するという事件を起こしました。朝鮮人同士の事件に偽装するつもりでしたが、アメリカ人軍事教官とロシア人技師に目撃され国際問題となる一方、各地で王妃殺害に憤激した義兵（義勇軍）による反日闘争が起こりました。国王高宗はロシア公使館に移り親露派政権が誕生し、ロシアは軍事顧問、財政顧問を送り朝鮮への影響力を強めました。ちなみに、日本へ召還された三浦たちは裁判で証拠不十分として無罪になっています。1897年、高宗はロシア公使館から王宮に戻り、国号を朝鮮から大韓帝国に、称号も王から皇帝へと改め独立国としての気概を示しましたが、国の置かれている状況を変えるものではありませんでした。

■日露戦争後の韓国の抵抗と日韓併合

1905年日露戦争で勝利した日本は韓国に第二次日韓協約締結を強制し、韓国の外交権を奪い保護国化しました。1907年、高宗は第二次日韓協約の無効を世界に訴えるため、オランダのハーグで開かれていた第2回万国平和会議に密かに使節を派遣しました。しかし、日本も参加する平和会議は、韓国使節の参加を認めず、使節の一人が抗議の自殺を遂げる事件に発展しました（ハーグ密使事件）。日本は事件を理由に、高宗を退位させ、第三次日韓協約で内政も監督下に置き韓国軍を解散させました。

この後、元兵士を中心に義兵闘争が活発化し、1908年には義兵と日本軍との交戦回数は1400回を数えました。1909年、伊藤博文を満州鉄道のハルピン駅で暗殺した安重根（アンジュングン）も義兵でした。しかし、義兵も徐々に日本軍に制圧され、1910年12月22日、日韓併合条約によって韓国は日本に併合されました。

この夜、ソウルの朝鮮統監寺内正毅は「小早川加藤小西が夜にあらば今宵の月をいかに見るらん」と詠みました。秀吉の猛将たちがなしえなかつた朝鮮征服を成し遂げたと得意です。反対に、韓国併合のニュースを聞いた石川啄木は「地図の上／朝鮮國にくろぐろと／墨をぬりつつ秋風を聞く」と詠んでいます。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第108回 日清戦争と日本による朝鮮の植民地化 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第107回 朝鮮の開国と日清
両国の動き](#)

[次のページへ](#)

[第109回 挫折した清朝の変
法運動](#)

世界史講義録

第109回 挫折した清朝の変法運動

日清戦争後、光緒帝は立憲君主政などの政治改革を主張する変法派を登用し、改革に着手しました。しかし、西太后ら保守派のクーデタで改革は潰され清朝再生の機会は失われました。

■日清戦争敗北の原因

清軍は、洋務運動によって近代的な装備を持ち、特に最新鋭の軍艦を備えた北洋海軍は日本軍に見劣りするようなものではありませんでした。それでも日清戦争で敗れたのは、直接的には政府部内の不統一と為政者の自己保身が原因でした。日本軍と戦った清の北洋海軍と淮軍は、直隸總督（河北省長官）兼北洋大臣（外交軍事の責任者）だった李鴻章が洋務運動によって作りあげた私軍ともいいくべきもので、李鴻章は勝利よりも、軍を温存して権力基盤を守ることを優先しました。そのため、ロシアなどに仲介を求め決戦を回避しつづけ、日本軍は有利に戦争を進めることができたのです。また、宮廷の実権を握る西太后は自分の還暦記念のための頤和園改築工事に戦費を流用する始末でした。

■勢いを増す列強による利権獲得

清朝は日本に対する2億両の賠償金支払いのため海関税等を担保に西欧諸国に借款を求め、これをきっかけに各国は鉄道敷設権、沿線の鉱山採掘権などを清朝から獲得していきました。

また、1898年にドイツが宣教師殺害事件をきっかけに山東半島の膠州湾を租借したのを皮切りに、ロシアが旅順、大連、イギリスが威海衛、九龍半島、フランスが広州湾を租借し、鉄道敷設権を獲得した地域と合わせて排他的な勢力範囲を形成し、中国の分割が一気に進行しました。

■強まる政体変革の主張

日清戦争の敗北によって、洋務運動が国力強化につながらない事が明白になり、強まる列強の圧迫のなかで、若手知識人から政体変革を求める変法運動が起こってきました。

運動の中心となった康有為、梁啟超らは、明治維新を模範として立憲君主政や議会の開設による清朝再建をめざしていました。1888年に皇帝に政治改革を求める上書をして、既に有名になっていた康有為は、1895年、科挙の会試受験で北京に滞在した際に、下関条約に反対して1200名の受験生の署名を集め抗議活動をおこないました。

科挙に合格してからも、康有為のグループは雑誌出版などで変法＝政治改革の必要性を訴えましたが、その意見は保守派の官僚に阻まれ皇帝には届きませんでした。

■光緒帝による改革開始

1898年、康有為らの主張は遂に光緒帝（位1875～1908）の知るところとなり、6月、光緒帝は康有為らを登用して変法を開始しました（戊戌の変法）。科挙の改革、近代的学校制度の創設、官庁の統廃合など康有為らの改革案が皇帝を通じて次々と発せられました。

しかし、改革案には財政的裏付けがなく、また保守派官僚が強硬に抵抗したため、その多くは実行されませんでした。また西太后が変法に反対したため、多くの官僚が傍観的態度をとり、光緒帝を含む変法派は

孤立していきました。

西太后は、1861年以来、5歳で即位した同治帝（位1861～75）の生母として、また4歳で即位した光緒帝の伯母として権力を握りつづけた人物でした。光緒帝が成人に達すると政権を譲りましたが、宮中に隠然たる勢力を持っており、光緒帝も西太后に逆らうことはできませんでした。そんな中で、戊戌の変法は、光緒帝がはじめて西太后の意向を無視しておこなった政治的決断でした。

■西太后による巻き返し

保守派の西太后は改革に反対なのはもちろんのこと、自分を無視して改革を断行した光緒帝を許すことができませんでした。変法が開始された四日後には、光緒帝から高級官僚の任命権を奪い、軍隊を掌握する直隸總督兼北洋大臣に自分の側近を任命して改革に圧力を加えはじめました。

光緒帝も、保守派官僚の罷免と変法派の登用によって抵抗しました。しかし、思うように改革は進展せず、西太后派による光緒帝廃位計画も検討されるなか、変法派は日清戦争後創設された近代的装備を持つ新建陸軍の指揮官袁世凱に西太后派の排除を要請しました。袁世凱は李鴻章の後継者として頭角をあらわしてきた軍人で、1895年に変法運動に資金援助をしたことがあったため、最後の頼みの綱とされたのです。

しかし、袁世凱はこのことを西太后に告げ、西太后派は逆にクーデタを決行しました（戊戌の政変）。変法が始まって三ヶ月後のことでした。光緒帝北京の湖南海に浮かぶ小島瀛台（えいだい）に幽閉され、康有為と梁啓超は日本に亡命しました。その他の変法派のメンバーは皆処刑されました。

■その後の西太后と光緒帝

西太后は再び政権につき、光緒帝は死ぬまで皇帝のまま幽閉生活を送りました。1908年、光緒帝が没した翌日に、西太后は次の皇帝を指名して亡くなりました。光緒帝は死期を悟った西太后によって毒殺されたといわれています。彼女が指名した宣統帝（位1908～12）が清朝最後の皇帝となりました。

■変法運動の失敗が示したもの

変法運動が清朝内の権力闘争で失敗したことは、清朝を倒さなければ中国の再生があり得ないことを若い知識人たちに示す結果となりました。これ以後の改革運動は反清革命運動となって展開することになります。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第109回 挫折した清朝の変法運動 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第108回 日清戦争と日本による朝鮮の植民地化](#)

[第110回 義和団事件から日露戦争へ](#)

世界史講義録

第110回 義和団事件から日露戦争へ

中国民衆の排外運動義和団事件は清の植民地化を一層進めました。事件後、中国東北部地方をめぐって日露の対立は深まり、日露戦争が勃発しました。

■義和団事件

1860年の北京条約でキリスト教の布教が自由になって外国人宣教師が奥地に入るようにになると、治外法権を利用した横暴なふるまいによって中国民衆との紛争が頻発するようになりました。山東省では1890年代末から大刀会や義和拳という武術を習う人々を中心として宣教師や教会を襲撃する仇教（きゅうきょう・反キリスト教）運動が活発化しました。彼らは義和団と呼ばれ、1899年頃から参加者と規模を拡大し「扶清滅洋（清を助けて西洋を滅ぼす）」を唱える大規模な武装排外運動に発展しました。1900年には鉄道、電信の破壊闘争をおこない天津と北京を占拠、北京では公使館地区を包囲しました。

清朝政府は当初列強の要請を受け、義和団鎮圧にあたっていましたが、1900年6月、運動の盛り上がりをみて、義和団とともに外国勢力を排除することに方向転換し、列国に宣戦布告をしました。これに対し、日・露・英・米・仏・独・伊・墺の八カ国は共同出兵し2万の兵を送り込みました。連合軍は7月に天津、8月には北京を占領し、清朝は降伏、徒手空拳で果敢に戦った義和団も鎮圧されました。清朝は翌1901年の北京議定書で北京への外国軍の駐屯、賠償金4億5千万両などを受け入れ、半植民地化は一層進行しました。

■ふかまる日露の対立

義和団事件後、各国軍が撤兵した後もロシア軍のみは中国東北部に留まり、この地域を事実上占領しました。そのため、朝鮮半島から中国東北部への勢力拡大をねらう日本とのあいだに緊張が高まりました。イギリスもロシアの南下を警戒しましたが、南アフリカでブルー戦争を戦っていたため極東に大軍を送ることができず、ロシアを牽制するため日本を支援して1902年日英同盟を結びました。日本にとって世界最強国であるイギリスとの同盟は願ってもない事でした。

■日本軍が優勢に展開した日露戦争

1904年、日露戦争が始まりました。戦場は中国東北部であり、ロシア軍の籠もる旅順要塞の攻防戦が最初の激戦となりました。日本軍は旅順要塞を陥落させましたが155日間の戦いで59000名もの戦死者をだしました。与謝野晶子が「君死にたもうことなかれ」と歌ったのは、旅順に出陣している弟を思ってのことでした。

その後、日本軍は、25万の兵力で北上し、1905年3月、奉天会戦でロシア軍本体32万と激突し、激戦の末ロシア軍を退却させることができました。5月には、対馬沖の日本海海戦でバルト海からアフリカを回航してきたロシアのバルチック艦隊を破り（ロシア海軍は38隻中19隻が沈没）、日本の優位は確定しました。

■戦争続行が困難な日本とロシアの国内状況

開戦前はロシアとの戦争に懐疑的だった日本国内の世論は、あいつぐ戦勝の知らせに沸き立ち、社会主义者の幸徳秋水やキリスト者の内村鑑三らわずかな反戦論を除き好戦的気分に浸っていました。

しかし、もともと後発資本主義国の日本にとって、戦争による消耗は国力の限界に近づいており、武器弾薬を調達する戦費も底をつけはじめていました。実際、奉天会戦後の日本軍には退却するロシア軍を追撃するだけの弾薬は残っていませんでした。20億円近い戦費の45%をイギリスとアメリカの外債にたよっていた日本にとって、これ以上の戦争継続は不可能でした。

また、ロシアも1905年1月にペテルブルクで民衆のデモ隊に軍隊が発砲し死者を出した「血の日曜日事件」をきっかけに、専制政治に反対する労働者のストライキ、農民の蜂起や軍隊の反乱がおこり戦争継続は困難になっていました（ロシア第一革命）。

■アメリカの仲介による戦争終結

1905年9月、アメリカ大統領セオドア＝ローズヴェルトの仲介によってポーツマス条約が結ばれ戦争は終結しました。内容は、日本の韓国に対する保護権を認め、遼東半島南部の租借権と南満州鉄道と沿線の利権、南樺太をロシアが日本に譲るというものでした。ロシアからの賠償金支払いはなく、日本国内ではこれを不満として暴動も起きましたが、日本のきわどい勝利を反映した内容でした。

■アジア諸国にあたえた日露戦争の衝撃

日露戦争は、植民地分割をめぐって戦われた初めての帝国主義国間戦争でしたが、ヨーロッパにアジアが勝利した戦争として、列強に侵略されているアジア諸民族を鼓舞する一面がありました。インドでは「アジア人に対するヨーロッパ人の絶対的優位性の神話は崩れ去った。インド人も民族的自信を持つべきだ」と唱えるティラクの指導でインド国民会議派による反英運動が活発化しました。第二次大戦後にインド首相となるネルーも「アジアの一国である日本の勝利は、アジアのすべての国々に、大きな影響を与えた。わたしは、少年時代、どんなにそれに感激したかを、おまえによくはなしたことがあったものだ。たくさんのアジアの少年、少女、そしておとながおなじ感激をした。」と書いています。また、1906年のイラン立憲革命や1908年のトルコのサロニカ革命も日露戦争の影響があるといわれています。

しかし、その後の韓国の植民地化と中国侵略は日本がヨーロッパ列強と同様の帝国主義国であることを示すものでした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第110回 義和団事件から日露戦争へ おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第109回 挫折した清朝の変](#)

[第111回 辛亥革命の成功と](#)

[法運動](#)

[袁世凱の独裁](#)

世界史講義録

第111回 辛亥革命の成功と袁世凱の独裁

1911年の武昌蜂起をきっかけに南京を首都に中華民国が成立し、清朝は滅亡しました。しかし、清の実力者から中華民国の大総統となった袁世凱は独裁政治を開始しました。

■清朝打倒をめざす革命団体

清朝の打倒をめざす革命団体が19世紀末から結成されはじめました。担い手となったのは留学生や華僑など外から中国を見る機会を持った人々でした。1905年日露戦争に刺激を受け、興中会、華興会、光復会など革命組織が結集して東京で中国同盟会が結成されました。中国人留学生300人がこれに参加し、のちに彼らが帰国することによって革命運動は中国全土に広がりました。これ以後、革命派による武装蜂起が中国各地で繰り返されました。

中国同盟会の指導者となったのは孫文（1866～1925）でした。広東省の貧農の家に生まれ、小さい頃から太平天国の洪秀全にあこがれていたといいます。12歳の時ハワイで成功していた兄のもとに渡り西洋式の教育を受け、1894年には興中会を組織し革命運動をおこなっていました。孫文の唱える「三民主義」（民族の独立、民権の伸張、民生の安定）は、中国同盟会の指導理念となりました。

■ようやく始まった清朝の改革

日露戦争後、清朝政府は改革の必要性をようやく認識し、1905年には科挙を廃止、1908年には憲法大綱を発布し10年後の国会開設を公約しました。しかし、早期国会開設を求める人々はこれに失望し、清朝が科挙に代わる人材育成をめざして日本に送り出した多くの留学生は反清思想に触れて帰国しました。

■武昌蜂起の成功と中華民国の成立

1911年、鉄道国有化令が出されました。これは、民間鉄道である川漢（四川～湖北）鉄道、粵漢（広東～湖北）鉄道の敷設権を国有化し、これを担保に外国から借款を得ようするものだったため、国権を外国に売り渡すものとして、成長しつつあった民族資本家層を中心に、沿線各省で猛烈な反対運動が起こり、四川省では大規模な暴動に発展しました。10月には湖北省の武昌で湖北新軍が挙兵し革命政府を樹立し、清朝からの独立を宣言しました（武昌蜂起）。新軍（新建陸軍）は、日清戦争後に作られた洋式陸軍で、将校には日本留学者が多く、兵士も含めて革命派が多く所属していました。湖北新軍では15000の兵のうち三分の一が革命化していたといいます。

武昌蜂起成功が伝わると、湖南省、陝西省、江西省などに蜂起は広がり14省で革命政府が成立し清朝からの独立を宣言しました（辛亥革命）。1912年1月、独立した革命派諸省は南京を首都に中華民国の成立を宣言し、亡命先のアメリカから帰国した孫文が臨時大総統となりました。

■袁世凱の裏切りによる清朝の滅亡

武昌蜂起後、清朝政府は西太后死後失脚していた軍の実力者袁世凱を起用し革命鎮圧を命じました。資金難のうえ各省の足並みがそろわない南京政府には、列強の支持を受け北洋陸軍を率いる袁世凱を破る軍事力はありませんでした。ようやく成立した革命政府を守るために、袁世凱を味方につけるしかないと判

断した孫文は、宣統帝の退位させ共和政を守るならば、臨時大総統の地位を袁世凱に譲ると約束しました。この申し出を待っていた袁世凱は、1912年2月宣統帝を退位させ（清朝の滅亡）、3月には北京で臨時大総統に就任しました。

■革命を乗っ取った袁世凱

このような経過で大総統となった袁世凱には、革命や三民主義への共感はなく、あるのは権力欲だけでした。1912年、中国最初の選挙で中国同盟会を母体として結成された国民党が圧勝すると、袁世凱はこれを弾圧し、国民党の指導者宋教仁は暗殺されました。1913年各地で反袁反乱（第二革命）が起きましたが失敗に終わり、孫文は亡命しました。

袁世凱は、翌年には国会を停止し独裁を強化し、1916年には帝位につきました。しかし、これは時代錯誤として内外から強い反発を受け（第三革命）、帝政を撤回したのち病死しました。

袁世凱死後、彼の部下の将軍たちが軍閥として地方割拠し、中華民国とは名ばかりの分裂状態になりました。列強は各軍閥と結びつきながら利権を獲得していました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第111回 辛亥革命の成功と袁世凱の独裁

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第110回 義和団事件から日露戦争へ](#)

[次のページへ](#)

[第112回 帝国主義諸国との世界分割](#)

世界史講義録

第112回 帝国主義諸国の世界分割

19世紀後半、独占資本・金融資本が発達すると列強は、資本輸出先として植民地をもとめ帝国主義政策をとりました。やがて、植民地獲得のため帝国主義国間の対立が激しくなります。

■先進資本主義国が植民地を求めた理由

1870年代から先進国では重化学工業が発展してきました。膨大な資本と設備を必要とするため、生産は少数の大企業に集中し、企業合同（トラスト）、企業連合（カルテル）、企業結合（コンツェルン）という形で企業が巨大化して、独占資本が形成されました。金融資本も成長し、独占資本に資金を供給する大銀行が諸産業に大きな影響力を持つようになります。

独占資本・金融資本は国内では投資しきれない過剰な資本を海外に輸出しようとなります。そのために、政府を動かして投資先の国と条約を結んでゆきますが、相手国が西欧と異なる外交・経済体制をしき資本輸出が困難な場合には、軍事力によって条約を強制したり、その国を滅ぼし直接支配しました。これが、従属国や植民地を求めた理由です。古代ローマ帝国のように領土拡大をめざしたことから、このような政策を帝国主義政策と呼びます。各国は先を争って世界分割に乗りだし、また、そのために軍備を増強しました。

■資本輸出としての鉄道建設と借款

典型的な資本輸出は鉄道建設です。資本と技術が集約された鉄道建設は、製鉄、機械工業に需要をあたえ、沿線での工場建設や鉱山開発を促進し産業全体を牽引しました。

1870年代から世界中で鉄道建設が盛んになり、総延長距離はアジアでは1870年に8000キロだったものが、10年ごとに倍増し1910年には102000キロに伸びています。この大部分は帝国主義列強によって建設されたものです。ロシアがフランスの資本を導入して建設したシベリア鉄道は有名です。

相手国政府に資金を貸し付ける借款も資本輸出の一つの形態で、これは相手国の関税収入や鉄道敷設権を担保にして、半植民地化する手段としても有効でした。

■アフリカ分割をめぐる帝国主義国の対立

1880年代以降になると、列国の植民地獲得競争は激化します。アフリカ大陸に関して、ヨーロッパ諸国はお互いの衝突を回避するために、1885年のベルリン会議で、「先に占領した国が領有する」（先占権）というルールを一方的に作り分けました。イギリスはエジプトからケープ植民地まで自国の植民地をつなげるアフリカ縦断政策を、フランスはアルジェリアからジブチをつなぐアフリカ横断政策をとりました。その過程で両国軍が、1898年スーダンのファショダで衝突し（ファショダ事件）、両国間の緊張は開戦寸前まで高まりました。フランスの譲歩で戦争は回避されましたが、植民地分割が帝国主義国間戦争に発展する可能性を示した事件でした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第111回 辛亥革命の成功と
袁世凱の独裁](#)

[次のページへ](#)

[第113回 第一次世界大戦の
はじまり](#)

世界史講義録

第113回 第一次世界大戦のはじまり

バルカン半島で起きたサライエボ事件は、三国協商と三国同盟の戦争に発展し第一次大戦が始まりました。短期決戦をはかったドイツの作戦は挫折し、戦争は長期化しました。

■両陣営に分かれる西欧列強

19世紀末、急速に工業化を遂げたドイツが、植民地獲得に乗り出したことを警戒したイギリス・フランス・ロシアは露仏同盟(1891)、英仏協商（1904）、英露協商（1907）によって結ばれ、三国協商とよばれる枠組みが成立しました。

一方ドイツは、1882年にオーストリア、イタリアとともに三国同盟を結んでいました。オーストリアはバルカン半島への領土拡大を狙い、パン＝スラブ主義を掲げてバルカン半島進出をはかるロシアと対立していました。

■バルカン半島におけるオーストリアとロシアの対立

20世紀初頭のバルカン半島ではオスマン帝国の衰退に伴って紛争がつづきました。

1908年、オスマン帝国でミドハト憲法の復活を求める軍人たちの結社「青年トルコ」によるサロニカ革命が起きると、その混乱に乗じて自治国だったブルガリアが独立を宣言し、オーストリアはボスニア・ヘルツェゴビナを併合しました。セルビア人住民の多いこの地域の合併を望んでいたセルビアは、ロシアを後ろ盾にオーストリアと激しく対立しました。

1912年にはロシアの後押しで、セルビア、モンテネグロ、ブルガリア、ギリシアはバルカン同盟を結んでオスマン帝国と戦い（第一次バルカン戦争）、イスタン布尔を除くバルカン半島の全領土を奪いました。しかし、1913年、その領土の分配をめぐって、ブルガリアと他のバルカン諸国のあいだに戦争が起き（第二次バルカン戦争）、敗れたブルガリアは大幅に領土を縮小されました。この結果、ブルガリアはロシアから離れ急速にオーストリアに接近しました。

こうして、ロシアとオーストリアの対立を背景に小国が分立するバルカン半島は、「ヨーロッパの火薬庫」とよばれる紛争地帯となっていました。

■第一次大戦のひきがねとなったサライエボ事件

1914年6月28日、軍事演習観閲のためボスニアの州都サライエボを訪れたオーストリア皇太子夫妻が、オープンカーでパレード中に暗殺されました。犯人がボスニア出身のセルビア人学生だったため、オーストリア政府は、セルビア政府の陰謀としてその責任を追及し、7月28日、セルビアに対して宣戦布告しました。

ドイツはオーストリアとセルビアの戦争が三国同盟と三国協商の戦いに発展することを予測したうえでオーストリアの宣戦布告を事前に認めていました。短期間のうちに勝利をおさめてドイツの国力にふさわしい位置をヨーロッパ列国に認めさせようと考えていたのでした。

■戦争の始まり

ロシアがセルビアを支援するために7月30日総動員を開始すると、8月1日、ドイツがロシアに宣戦布告して第一次大戦が始まりました。ドイツは3日に、フランスに宣戦布告、ドイツ軍が中立国ベルギーに侵入すると、4日にはイギリスがドイツに宣戦しました。

もともとドイツと共に利害はなく、オーストリアとは未解決の国境問題があったイタリアは、戦争が始まると中立を宣言し、翌年、連合国側で参戦しました。そのため同盟国はドイツ、オーストリア、オスマン帝国、ブルガリアの四国となりました。オーストリア軍は弱体でヨーロッパ戦線はドイツ一国で支えている状態でした。

連合国側には主力の英仏露以外にセルビア、モンテネグロ、日本、のちに合衆国など最終的に27カ国が参戦しました。日英同盟を理由に参戦した日本は、中国山東省と南太平洋のドイツ軍基地を攻略しました。開戦時の兵力は、ドイツ軍400万人、オーストリア軍250万人、フランス軍360万人、ロシア軍500万人、イギリス軍35万人でした。

■反戦を貫けなかつた第2インターナショナル

反戦を訴えていた第2インターナショナルですが、大戦が勃発するとその主張を貫くことが出来ず解体しました。国境を越えた労働者の団結よりも、各党が所属する国家の「防衛」を優先したのです。強硬に反戦を唱えたフランス社会党の指導者ジョレスは、7月31に暗殺され、第2インターナショナルを支えていたヨーロッパ最大の社会主义政党ドイツ社会民主党は8月3日に「われわれは危機にさいして祖国を見捨てないであろう」と述べました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第113回 第一次世界大戦のはじまり おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第112回 帝国主義諸国の世](#)

[界分割](#)

[次のページへ](#)

[第114回 総力戦となつた第](#)

[一次大戦](#)

世界史講義録

第114回 総力戦となった第一次大戦

大戦は予想を超えた長期戦となり、膨大な人命と物資を消耗する総力戦となりました。従来の戦争とは異なり、銃後の国民も負担を強いられ、植民地からも兵力は動員されました。

■長期化する戦争

二正面作戦を強いられるドイツは、最初にフランスに兵力を集中し、短期決戦でフランス軍を殲滅したのち反転し、東部戦線でロシアと戦う作戦でした。

防備の薄いベルギー国境からフランスに侵入したドイツ軍はパリ近くまで進撃しましたが、9月になると体勢を立て直した英仏連合軍にマルヌの戦いで敗れ、西部戦線は膠着し持久戦となりました。互いに相手を包囲しようとして前線はフランドル海岸からスイス国境まで延び、両軍は塹壕を掘って対峙しました。塹壕の総延長は両軍あわせて約4万キロに及び、1914年末までで、ドイツ軍68万人、フランス軍85万人の死傷者を出すという大規模な戦争になりました。

東部戦線では、1914年8月タンネンベルクの戦いでドイツ軍がロシア軍に大勝しましたが、その後は持久戦となりました。バルカン半島では同盟国側が優勢でセルビア、モンテネグロ、北アルバニアを占領しましたが、大勢に影響を与えるものではありませんでした。

1916年5月、英独両海軍はユトランド沖海戦で戦ったものの勝敗はつかず、その後イギリスは海上封鎖によってドイツを苦しめました。

■莫大な戦死者数と新兵器開発

1916年のドイツ軍の総攻撃、ヴェルダンの戦い（2月末～年末）では、ドイツ軍33万7000人、フランス軍37万7000人の死傷者を出したが前線を突破できず、同年の英仏軍の総攻撃、ソンムの戦い（7月～11月）では、連合軍250万とドイツ軍150万が戦い、死傷者は連合軍90万、ドイツ軍60万を数えました。この戦いでも莫大な犠牲を出しながら相手の陣地を抜くことは出来ませんでした。戦況を開拓のため、ドイツ軍による毒ガス使用、イギリス軍の戦車開発、飛行機による爆撃など新たな兵器や戦術が開発されましたが、膠着状態はつづきました。

■第一次大戦の特徴である総力戦

第一次大戦は、交戦国が自国の工業力、技術力、労働力など国力のすべてを戦争遂行に動員する総力戦となりました。

たとえば、砲弾の消費量は各国首脳陣の予想を上回る膨大なものでした。1914年9月のマルヌの戦いで独仏両軍は日露戦争の全消費量にあたる弾薬を消費、ヴェルダンの戦いでは両軍で2000万発以上、136万トンの砲弾を消費しています。フランスは開戦1ヶ月で、ドイツは2ヶ月で備蓄砲弾の50%を使い果たし砲弾不足に陥りました。各国はこういう状況に対応して、武器弾薬の増産体制を敷かなければなりませんでした。また、前線で戦う何十万という兵士に物資を供給するためには道路や鉄道、水道の建設も必要でした。ヴェルダンの戦いでフランス軍は道路を新設し4000台の自動車をフル回転させ前線に物資を供給しました。

総力戦においては、何らかの形で全産業、全国民が戦争遂行に協力する必要がありました。

■国民生活の変化

戦争は国民の生活も変えました。男性の出征による労働力不足で女性が職場進出しました。イギリス首相ロイド=ジョージは全女性に対して軍需工場で働く事を要請し、弾薬工場では労働者の60%を女性が占めました。フランスでも軍需産業労働者の4割が女性でした。

ドイツでは、イギリスの海上封鎖により物資の輸入が困難となり、食糧、綿花、銅、ニッケル、石油、ゴムなどが不足し、戦時統制経済によって軍需生産を維持しました。食糧不足のため、1915年1月からパンの切符制が導入され、1916年末に労働力確保のため、政府が全成人男性に必要な労働を命じ転職を禁じる「愛国的労働奉仕法」が制定されるなど、国民生活への統制が強まりました。ロシア、オーストリアでも国民生活は急激に悪化しました。

■ヨーロッパで戦うインド兵

志願制だったイギリス軍は、兵力不足を補うため1916年から徴兵制を導入しただけでなく、植民地からも兵士を動員しました。インド兵144万人を筆頭にカナダ兵82万、オーストラリア兵41万などがヨーロッパ戦線でたたかいました。また、中国人10万が物資輸送人夫として働いていました。フランスもアルジェリアなど海外領土から兵士を動員しました。

■トルコに対するアラブの反乱

イギリスは、行き詰まっていた対トルコ戦を開拓するため、メッカ太守だったアラブの名門ハーシム家のフサインにオスマン帝国への反乱を要請し、1915年フサイン=マクマホン協定で大戦後のアラブ人国家樹立を約束しました。翌年フサインの息子ファイサルひきいるアラブ人部隊はヒジャーズ地方（アラビア半島西部）を制圧しました。有名な「アラビアのローレンス」はイギリス軍から派遣された連絡将校です。

ところが、イギリスは1916年にフランスとサイクス=ピコ協定を結び、両国による戦後のアラブ地方分割を密約し、さらに1917年には英米のユダヤ人財閥の支援を得るため、バルフォア宣言を発表し、アラブの一地域であるパレスティナ地方でのユダヤ人国家建設を約束しました。アラブ人やユダヤ人を利用するために出されたイギリスの相矛盾する約束は、パレスティナ問題の元凶となりました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第114回 総力戦となった第一次大戦 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第113回 第一次世界大戦のはじまり](#)

[第115回 同盟国の降伏とヴェルサイユ体制](#)

世界史講義録

第115回 同盟国の降伏とヴェルサイユ体制

1917年にはアメリカの参戦、ロシア戦線離脱で戦局が大きく変化し、18年にはドイツで革命が起り戦争は終結、「14カ条の平和原則」をもとに講和会議が開かれました。

■アメリカの参戦

第一次大戦が始まると中立を宣言したアメリカ合衆国ですが、1915年5月ニューヨークを出航したイギリスの客船ルシタニア号がドイツの潜水艦に無警告撃沈され、アメリカ人乗客128人が死亡してからは、対独参戦論が高まっていました。1917年2月ドイツがイギリスの海上封鎖に対抗して中立国の船も撃沈する無制限潜水艦作戦を開始すると、4月に合衆国は連合国側に立って参戦しました。最大の工業国合衆国の登場は戦力の均衡を破りました。

■革命によるロシアの戦線撤退

総力戦に耐えきれなかったロシアでは、1917年、十一月革命でソヴィエト政権が成立し、全交戦国に即時講和を呼びかけ、1918年3月にブレスト＝リトフスク条約でドイツと単独講和を結びました。この結果、東部戦線は消滅しドイツの負担は軽減され、戦力を西部戦線に集中することが可能となりました。

■革命によるドイツの降伏

ロシア革命は、各国の反戦運動を刺激しました。1917年にはドイツで戦争終結を訴える独立社会民主党が結成され、議会でも講和を求める決議が可決され、18年1月には軍需労働者100万人の反戦ストライキが起こりました。

しかし、軍部は独裁体制を強め、東部戦線の兵力を西部戦線にまわし、1918年3月から大攻勢を開始しましたが、7月以降アメリカ軍100万が加わった連合国が逆襲に転じ、ドイツ軍は占領地を放棄し退却をはじめました。9月にブルガリアが、10月にはオスマン帝国が降伏し、11月にはオーストリアも臨時政府が成立して降伏、同盟国は崩壊しました。ドイツでは、11月、無謀な出撃命令を拒否してキール軍港の水兵が反乱を起こすと、各地に反乱が広がり、全国で労働者と兵士によるレーテ（評議会、ロシアのソヴィエトにあたる）が組織されました。ベルリンでゼネストと労働者の武装デモが起きる中、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世はオランダに亡命し（ドイツ革命）、社会民主党を中心とする臨時政府が休戦条約に調印し、第一次大戦は終結しました。

連合国同盟国あわせて約6500万人が兵士として動員され、戦死・戦病死者約802万人、戦傷者数約2123万人、非戦闘員死者数約664万人を出した未曾有の戦争でした。

■「14カ条の平和原則」を基礎に開かれたパリ講和会議

1919年1月、連合国は戦後処理を話し合うパリ講和会議を開きました。会議の基本方針とされたのは合衆国大統領威尔ソンが1918年1月に発表していた「14カ条の平和原則」でした。これはソヴィエト政府の「平和に関する布告」に対抗して連合国に戦争目的を掲げたもので、秘密外交の廃止、海洋の自由、軍備縮小、民族自決、国際平和機構の設立などを提唱していました。諸民族に独立国家樹立を認める「民族自決」原則は、世界各地の被抑圧民族の期待を集めました。

会議には、敗戦国とロシアのソヴィエト政府は招かれず、米・英・仏を中心に進められ、国際連盟の設立を決定したあと、敗戦国に対する講和条件を決定していきました。

■ドイツに過酷な講和条約

対ドイツ講和条約のヴェルサイユ条約は、「ドイツ人に何もかも払わせてみせる」（フランス首相クレマンソー）というフランスの態度を反映して、ドイツにとって過酷なものとなりました。全植民地の放棄、潜水艦と空軍の保有禁止など軍備の制限、ラインラント地方の非武装化、アルザス・ロレーヌ地方のフランスへの割譲、そして天文学的数字といわれた1320億金マルクの巨額賠償金支払いが課せられました。多民族国家オーストリア＝ハンガリー帝国はサン＝ジェルマン条約で解体され、ハンガリー、チェコスロvakiaが独立し、オーストリアの国土は四分の一に縮小しドイツとの合併も禁じられました。オーストリア皇帝は正式に退位し共和政となりました。

ブルガリア、トルコもそれぞれ領土を削減され、トルコ領のシリア、イラクは「国際連盟の委任統治」という名目で英仏によって再分割されました。

■中東欧に多くの独立国を生んだ「民族自決」

旧ロシア領からはフィンランド、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ポーランドが独立し、大戦の発端となったバルカン半島ではセルビアが中心となって南スラブ系民族が住む旧オーストリア領（スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ）とモンテネグロを併せセルブ＝クロアート＝スロヴェーン王国（ユーゴスラヴィア）が成立しました。

■問題を残したヴェルサイユ体制

ヴェルサイユ条約などの一連の条約で新しい国際秩序ヴェルサイユ体制が成立しました。この体制は当初からいくつかの問題をはらんでいました。

ひとつは、ドイツへの対応が報復的で、あまりに過酷だったことです。この処置がドイツ人にあたえた屈辱感が、ヴェルサイユ体制打破をとなえるナチスの台頭をまねきました。

また「民族自決」は、ヨーロッパの諸民族にしか適用されず、アジア・アフリカの植民地の独立を求める声は無視されました。

国際連盟には、提唱国であるアメリカ合衆国が国内事情から加盟せず、ドイツ、ソヴィエトも当初は排除され平和機関としての影響力ははじめから限定されたものとなりました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第115回 同盟国の降伏とヴェルサイユ体制 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第114回 総力戦となつた第一次世界大戦](#)

[次のページへ](#)

[第116回 戦争から生まれたロシア革命](#)

世界史講義録

第116回 戦争から生まれたロシア革命

最も遅れた帝国主義国ロシアは総力戦に耐えきれず、三月革命によって帝政が崩壊し、十一月革命によって社会主義のソヴィエト政権が誕生し、大戦から撤退しました。

■後進的な帝国主義国ロシア

ロシアは帝国主義諸国の中では政治的にも経済的にも最も遅れた国でした。1905年、日露戦争による国民生活の悪化によって第一次ロシア革命が起きています。この時に初めて議会が開設されましたが、それ以後も専制政治（ツアーリズム）はつづいていました。

■ツアーリズムを打倒した三月革命

第一次大戦が長期化し総力戦の様相を見せはじめると、厭戦気分が蔓延し、輸送は停滞し、食糧不足と物価高騰により国民生活は窮屈し社会不安は増大しました。1917年3月（新暦、ロシア暦2月、以下新暦使用）首都ペテログラードで20万人規模の反政府デモが連日発生すると、首都防衛軍もこれに加わり無政府状態となりました。混乱を収拾するために皇帝ニコライ2世は退位し、弟ミハイルに譲位しようとしましたが、ミハイルがこれを拒否したためにロマノフ朝は崩壊しました（三月革命）。

■二重権力状態の出現

国会臨時委員会を基礎に新たに成立した臨時政府は、戦争の継続と普通選挙による議会召集を約束しました。産業資本家層に支持され、稳健な自由主義的立場に立ち、戦争継続を掲げる臨時政府の成立を連合国は歓迎しました。

一方、臨時政府とは別に各地にソヴィエトが組織されていました。ソヴィエトは「評議会」と訳しますが、職域や地域などで民衆が作る政治組織で、1905年の第一革命の時の経験にならって再び組織されたのです。ペトログラードに成立した労働者・兵士ソヴィエトは労働者と兵士の代表によって構成され、その決定は労働者や兵士に大きな影響力を持ちました。3月14日の「命令第一号」では兵士に対してソヴィエトの指令に従うことを命じています。

ソヴィエトも事実上の政府であり、ロシアには二つの政府が成立する二重権力状態が現出したのです。民衆は臨時政府の戦争継続方針には不満でしたが、ソヴィエトに強い影響力を持っていた社会主義政党の社会革命党とメンシェヴィキは、祖国防衛の立場から臨時政府と戦争継続を支持しました。しかし、なお政治状況は流動的でした。

■レーニンの帰国とソヴィエトの掌握

1917年4月、戦争反対をとなえていた社会主義政党ボルシェヴィキの指導者レーニンが亡命先のスイスから封印列車でロシアに帰国しました。ドイツ政府はロシアの混乱が増すことを期待して、レーニンの乗る列車のドイツ通過を許可し、ドイツで途中下車して革命運動をしないように列車に封印をしたのでした。帰国したレーニンは「四月テーゼ」を発表し、戦争の即時停止と、社会主義革命に向けて「すべての権力をソヴィエトへ」集中し臨時政府を支持しないことを訴えました。戦争停止の訴えは多くの支持を獲得し、ボルシェヴィキは急速に勢力を伸ばしました。これに対して7月、臨時政府はボリシェヴィキを弾圧し、一方で労働者の支持を得るために社会革命党のケレン斯基ーを首相に迎え、多くの社会主義者を入閣

させたうえで、戦争を継続しました。

ところが9月に軍の最高司令官コルニーロフ将軍が反革命クーデタを企て首都に進撃すると臨時政府はボルシェヴィキとソヴィエトの協力でようやくこれを撃退したため、ボルシェヴィキは再び勢力を盛り返しペトログラードとモスクワのソヴィエトで主導権を握りました。

■世界初の社会主義革命十一月革命

11月、レーニンの指導でボリシェヴィキは武装蜂起し臨時政府を打倒してソヴィエト政権を樹立しました（十一月革命）。世界初の社会主義政権の誕生でした。

政府成立の翌日にソヴィエト政府は、「平和に関する布告」で全交戦国に無併合・無賠償・民族自決による即時講和を訴え、「土地に関する布告」で土地の私有権廃止を宣言しました。

1918年1月、ボリシェヴィキは憲法制定議会を解散し一党独裁を開始、3月には共産党と改称しました。また、1919年に世界革命の指導部としてコミニテルンを創設し、世界各国の革命運動の組織と援助を開始しました。

■ドイツとの講和と対ソ干渉戦争

ソヴィエト政府の休戦よびかけを無視した連合国は、自国民に戦争継続の意義を説明する必要に迫られ、アメリカ合衆国の威尔ソン大統領は「平和に関する布告」に対抗して「14カ条の平和原則」を発表しました。ドイツは、1918年3月、ソヴィエト政府とブレスト=リトフスク条約を結び単独講和しました。この条約はドイツへの領土割譲を含み、ソヴィエト政府にとって不利なものでしたが、レーニンはドイツでも社会主義革命が起きることを期待して条約締結に踏みきりました。ボリシェヴィキの公約でもある平和はようやく実現されたかにみました。

しかし、1918年には、連合国支援を受けた旧ロシア軍人など反革命勢力との内戦がはじまり、4月以降には、英・仏・日・米などの連合国軍が対ソ干渉戦争を起こしてロシアに侵入しました。資本主義国にとって、社会主義政権の存在と革命の波及は脅威だったのです。

一時は崩壊寸前まで追いつめられたソヴィエト政府ですが、軍事人民委員トロツキーによって組織された赤軍（=革命軍）の反撃や、民衆の抵抗などで反革命軍は鎮圧され、列国の軍隊も1920年には撤退し（日本のシベリア出兵だけは1922年までつづけられました）、ソヴィエト政府は危機を乗りこえました。しかし、その間実施された、農村からの食糧の強制徴収や全工場の国有化、労働義務制など「戦時共産主義」に対する不満は強く、1921年にはクロンシュタット軍港で水兵の反乱が起きるほどでした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第116回 戦争から生まれたロシア革命 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第115回 同盟国の降伏とヴェルサイユ体制](#)

[次のページへ](#)

[第117回 第一次大戦後の欧米諸国](#)

世界史講義録

第117回 第一次大戦後の欧米諸国

戦後、アメリカ合衆国はイギリスにかわって世界経済の中心として繁栄しました。一方、敗戦国ドイツでは政情不安と経済混乱がつづきました。

イタリアでは、テロで勢力を拡大したファシスト党のムッソリーニの独裁政治が誕生し、ソ連では、社会主義建設の模索がつづくなか、レーニン死後スターリンの独裁が確立しました。

■空前の繁栄をむかえたアメリカ合衆国

大戦中の貿易で利益をあげ戦争の被害も少なかった合衆国は、大戦後、「黄金の20年代」と呼ばれる空前の経済繁栄を謳歌しました。世界の工業生産の4割を占め、世界の金の44%を保有し、大戦中からの英仏などへの融資で世界最大の債権国になりました。

経済の繁栄は、国民の生活水準を引き上げ、大衆社会が出現しました。金持ちの贅沢品だった自動車の普及がそれを象徴しています。フォード社は組立ラインによる大量生産を考案し価格を引き下げ、3世帯に2台の割合で自家用自動車が普及しました。日本では1970年代末の水準です。電気冷蔵庫やラジオも普及し、プロ野球や映画が大衆の娯楽として登場しました。ミッキーマウスが生まれたのもこの時代です。大量生産、大量消費、大衆文化という現代生活が出現したのでした。

■ひろまる保守的風潮

一方で、豊かな生活を求めて、南部の農村地帯から北部工業都市への黒人の移住や、東欧・アジアからの新移民が増加したことは、それまでのアメリカ社会の主流を占めていた「WASP」の反発を生み、保守的・排外的風潮を生みました。1919年の禁酒法や1924年の移民割当法による移民制限、人種差別集団KKK団の復活は、そのあらわれでした。

国際政治では、孤立主義を主張する議会の反対により、ウィルソン大統領の提唱した国際連盟に加入しませんでした。

注：WASPとは、W=ホワイト（白人）、AS=アングロサクソン（イングランド系）、P=プロテスタンのこと

■ドイツ・ワイマール共和国の成立と混乱

ドイツでは1919年ワイマール憲法が制定され、社会民主党のエーベルトを初代大統領として、いわゆるワイマール共和国が発足しました。ワイマール憲法は男女普通選挙、団結権や労働者の経営参加権を認めると、當時最も先進的民主的憲法でした。

しかし、敗戦直後から不安定な政情はつづき、ロシア革命の影響をうけ、1919年1月ベルリンで社会主義政権樹立をめざすスパルタクス団の蜂起がおこりました。これは鎮圧され、革命運動は退潮しますが、1920年にはヴェルサイユ条約で決まった兵力削減に不満を持つ軍部がクーデタを起こしベルリンを占拠しました（カッペー揆）。ベルリン市民のゼネストによる抵抗でクーデタは失敗しましたが、ヴェルサイユ条約に反対する旧軍人や右翼の活動は以後もつづきました。失敗に終わりましたがヒトラーが政権奪取をめざしたミュンヘン一揆(1923)もその一つです。彼ら右翼勢力は、ドイツ革命が起きなければ、先の大戦でドイツ軍は勝利したはずだと考えていたのです。

■超インフレをまねいたフランスのルール占領

1923年、ドイツの賠償金支払いが不能になると、フランスとベルギーがドイツ最大の工業地帯ルール地方を占領しました（～25年）。これに対して、ドイツ政府は「消極的抵抗」を呼びかけ、ストライキによって生産が停止したためフランスは利益を得られませんでしたが、ドイツ経済も大打撃をうけ、インフレが一気に進行しマルクの価値が戦中の1兆分の1にまで下落しました。市民生活は混乱し、ドイツ共産党による武装蜂起が計画され、ヒトラーのミュンヘン一揆が起き、社会不安は増しました。

■軌道に乗り始めたドイツの再建

この時、新たに首相になったシュトレーゼマンは、不動産と商工業資産を担保にした新紙幣レンテンマルクを発行することによって、超インフレを奇跡的に終息させました。また、1924年ドイツの賠償金支払いを可能にするための合衆国の提案、ドーズ案が成立しました。合衆国がドイツに多額の借款をあたえるもので、ドイツはこれによって賠償金の支払いと経済復興を軌道に乗せることができました。

■合衆国の資金にささえられたヨーロッパの安定

外相となったシュトレーゼマンは協調外交を展開し、英仏などと集団安全保障を定めた1925年のロカルノ条約と翌26年の国際連盟加入で国際社会に復帰しました。

賠償金が順調に支払われはじめしたこととあいまって、ヨーロッパの政情は安定期を迎えました。しかしこの安定は、ドイツに投下されたアメリカ資本にささえられたものでした。

■大戦後のイタリアの政情

大戦後、思惑どおりに領土を獲得できなかったイタリアでは、右翼的民族主義運動が盛り上がりると同時に、インフレや失業の増大の中で革命運動や労働運動、貧農雇農による土地分配運動が活発化しました。社会党とカトリック系の人民党に挟まれて自由主義勢力による政府は指導力を発揮できず不安定な政局がつづいていました。

1919年国粹主義者で詩人のダヌンツィオは義勇軍を率いてパリ講和会議で獲得できなかった港市フィウメを占領し、大戦中に社会主義から国家主義に転身した新聞記者ムッソリーニは、「戦闘ファッシ」を結成しファシスト運動を開始しました。

一方で、社会主义革命をめざす社会党は1919年の総選挙で議席の3分の1を占め第一党となり、1920年夏には北イタリアで50万人の労働者が工場を占拠し自主管理をおこない、革命前夜の様相を呈しました。しかし、政府の調停によって労働争議が終息すると、社会党の分裂もあり、社会主义運動は徐々に下火になっていきました。

■荒れ狂うファシストの暴力

20年秋からファシストによるテロが横行しはじめました。黒シャツ隊とよばれたテロ部隊は、社会党が政権を握る地方自治体に拳銃や棍棒を持ってトラックでのりつけ、暴力で町を制圧し、労働組合や農民組合の事務所や指導者を襲い、最後に市長に辞職を迫りました。抵抗した場合は家族を誘拐したり本人を殺害することもありました。こうしたむきだしの暴力で地方の支配権を握る「懲罰遠征」は参加者を増やしながら活動範囲を広げていきました。地主や資本家はこの運動を支援し、警察もファシストの暴力行為を黙

認しました。

■ムッソリーニによる独裁政治の樹立

1921年の総選挙では35名の当選者を出し、ムッソリーニは「戦闘ファッシ」を「ファシスト党」に改組し自ら統領の地位につきました。この間も地方でテロ活動を続け、1922年10月には「ローマ進軍」をおこないました。2万6千の武装したファシスト党員がローマに向かって進軍すると、内乱を恐れた国王は、戒厳令を求めて容れられず辞職したファクタ首相にかわってムッソリーニを首相に任命し、ファシズム政権が誕生しました。

35議席しかないファシスト党は、1924年の総選挙で、対立候補に対して暴行、脅迫、殺害など徹底的な選挙妨害をおこない535議席中375議席を獲得しました。議会でファシストの選挙妨害を非難した国会議員は暗殺されました。1926年にはファシスト党以外の政党は禁止され、一党独裁体制を樹立、1928年にはファシスト党の機関であるファシスト大評議会を国家の最高機関として独裁体制を完成させました。権力掌握の過程でムッソリーニは資本家層と接近してその支持を取り付け、また1924年にフィウメを併合、27年にはアルバニアを保護国化して領土拡大を望む大衆も満足させました。

イタリアのファシズム政権の誕生は当時の国際社会で大きな問題にはなりませんでしたが、ムッソリーニの政治手法はドイツのヒトラーに大きな影響をあたえました。

■「新経済政策」によつソ連の安定と列国の承認

1922年、ソヴィエト政府はソヴィエト社会主义共和国連邦（ソ連）の樹立を宣言しました。その前年1921年には「戦時共産主義」を停止し、「新経済政策（ネップ）」を採用し、生産回復を図るために自由市場を復活させ小農や私企業の経営を認めました。これは資本主義的経済方式を導入したものでした。

ソヴィエト政府成立直後のボリシェヴィキの指導者たちは、経済発展の遅れたロシア一国で社会主義を建設するのは不可能であり、進んだ西ヨーロッパでも社会主義革命が起きることが必要だと考えていました。しかし、最も可能性の高かったドイツでも社会主義革命はおきず、西ヨーロッパ全体で革命運動が退潮すると、ロシアは一国だけで社会主義建設をおこなわざるをえませんでした。「新経済政策」はその一つの試みであり、資本主義諸国から見ると、ソ連が以前ほど危険な存在ではなくなったことを意味しました。

まず、敗戦国として孤立していたドイツが1922年に最初にソ連を承認すると、1924年には英・仏・伊、25年には日本が承認しました。（合衆国は1933年に承認し、翌34年に国際連盟に加盟）。

■レーニンの死とスターリンの権力掌握

1924年、ソ連と共産党の指導者であったレーニンが死去すると、党指導部内で後継者争いがはじまりました。皮肉なことに、レーニンが遺書で「粗暴すぎる」から解任するように求めていた党書記長スターリンが、実務を握る立場を利用してライバルたちを失脚させていきました。レーニンの後継者と目されていたトロツキーの「世界革命論（永続革命論）」に対してスターリンは「一国社会主義論」を唱え、路線論争の装いをとりながら権力闘争が展開されました。権力闘争に敗れたトロツキーは1927年に国外追放となり、以後スターリンは独裁体制をかためていきました。

■第一次五カ年計画による社会主义経済建設の開始

1928年にはスターリンの指導により社会主义計画経済である第一次五力年計画がはじまりました。コルホーズ（集団農場）やソフホーズ（国営農場）による農業の集団化がすすめられ、農産物の飢餓輸出による犠牲のうえに、重工業が建設されていきました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第117回 第一次大戦後の欧米諸国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第116回 戦争から生まれたロシア革命](#)

[次のページへ](#)

[第118回 独立を回復したトルコとアラブ地域の再編](#)

世界史講義録

第118回 独立を回復したトルコとアラブ地域の再編

オスマン帝国を滅ぼしたケマル＝パシャのトルコ新政府は、連合国と条約を結び直し独立を回復しました。イラク、トランスヨルダンでは形式的なアラブの独立がおこなわれました。

■敗戦後のトルコ（オスマン帝国）

オスマン帝国は親ドイツ政策をとり、同盟国として参戦して敗北しました。1918年の休戦条約で、イスタンブールは連合国に占領されシリア、パレスティナなどアラブ人の住む地域だけでなく、トルコ人住民が多数を占めるトルコの本土であるアナトリア地方も分割される危機に陥りました。自己保身にはしつた皇帝は連合国の傀儡同然でした。

■ケマル＝パシャによるアンカラ政府の樹立

1919年5月には、領土拡大を目指すギリシア軍がイギリスの支持を受け、トルコ第二の港湾都市イズミルとその周辺を占領し住民を虐殺しましたが、イスタンブールの皇帝政府はなんの対応もしませんでした。これに対して抵抗を組織したのが、第一次大戦でダーダネルス海峡を突破しようとした連合軍をガリポリの戦いで破った国民的英雄ケマル＝パシャでした。

ケマルはアナトリアの中央部の都市シバスで「アナトリア・ルメリア権利擁護委員会」を結成し領土保全を国民に訴えました。1920年4月にはアンカラでイスタンブールから脱出した帝国議員も含むトルコ大国民議会を開催してアンカラ政府を樹立、ケマルはその首班となりました。この結果イスタンブールとふたつの政府が並立することになりました。

■外国軍の撤退とオスマン帝国の滅亡

イスタンブール政府は8月に連合国との講和条約であるセーヴル条約を結びましたが、その屈辱的な内容に不満を持つトルコ国民はアンカラ政府に結集しました。1921年には反帝国主義運動を支援するロシア・ソヴィエト政府から軍事援助をとりつけ、アンカラ政府軍は21年8月には内陸まで侵攻してきたギリシア軍をサカリア川で破り、翌22年にはギリシア軍を追い払い、イズミル地方を回復しました。それ以前に、フランス、イタリアのトルコ進駐軍はアンカラ政府との徹底対決を避け撤退していました。

イギリスも本国の世論に押されアンカラ政府軍のイスタンブール入城を武力で阻止することはできず、ケマルは22年皇帝メフメト6世を退位させ、オスマン帝国は滅亡しました。ただし、オスマン皇帝は世俗の支配者スルタンであると同時に全ムスリムの指導者カリフも兼ねており、廃止されたのはスルタン制のみだったため、メフメト6世亡命後はその甥が宗教的権威のみを持つカリフ位に就任しました。

■独立を回復したトルコ

唯一の政府となったアンカラ政府はセーヴル条約を破棄し、改めて連合国と1923年ローザンヌ条約を結びました。領土は保全され治外法権は廃止され財政管理権も取り戻しました。敗戦によって国中が疲弊していたにも関わらず、国民の力を結集したアンカラ政府はオスマン帝国が100年にわたって奪われつづけてきた独立を勝ち取ったのです。

アンカラ政府は、10月トルコ共和国成立を宣言し、ケマル＝パシャが初代大統領となりました。これがト

ルコ革命です。

■脱イスラム改革をおこなうケマル＝パシャ

大統領ケマル＝パシャは、脱イスラム化政策で世界の注目を集めました。1924年にはカリフ制を廃止、マドラサ（イスラム法学校）とイスラム法廷を閉鎖、28年にはイスラムを国教と定めた憲法の条文を削除し、イスラム世界で初めて政教分離を実現しました。そのほかに女性のベール着用禁止や、トルコ語のアラビア文字表記をローマ字表記改める文字改革など一連の改革をおこない、近代化を進めました。ケマルは独裁政治家でしたが、1934年には大国民議会からアタチュルク（トルコの父）という姓を贈られ、現在でもトルコ国民に敬愛されています。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第118回 独立を回復したトルコとアラブ地域の再編 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第117回 第一次大戦後の欧米](#)

[第119回 高揚するインドの民族運動独立](#)

[諸国](#)

世界史講義録

第119回 高揚するインドの民族運動独立

第一次大戦後、期待していた自治をあたえられなかつたインドは、国民会議派のガンディーの指導で非暴力・不服従運動を展開しました。

■インド国民会議派によるインド民族主義の高揚

1905年、インドでは日露戦争で日本が勝利した影響で民族運動が盛り上がり、インド総督カーランはこれを抑えるためベンガル分割令を出しました。反英闘争の盛んなベンガル地方を、ムスリムの多い東ヒンドゥー教徒の多い西に分割することで民族運動の弱体化を狙つたものでした。これに対して猛烈な抗議行動が展開され、1906年インド国民会議派カルカッタ大会では「スワデーシー（国産品愛用）」「スワラージ（自治）」「イギリス商品のボイコット」「民族教育」の四大綱領が採択されました。

インド国民会議は、1885年にイギリスがインド統治の円滑化のためイギリスの高等教育を受けたインド人を集めた組織でした。当初、インド国民会議に参加した弁護士、学者、ジャーナリストなどは、イギリスに協力することでインド人の地位向上を図ろうと考えていましたが、徐々に反英色を強め独立運動を指導するようになったのでした。

一方、ヒンドゥー教徒が主導するインド国民会議に対して、少数派のムスリムはイギリスの支援を受け1906年インド＝ムスリム連盟を結成しました。これはインド人同士を宗教で対立させようというイギリスの分断統治策でもありました。

■守られなかつたイギリスの自治付与約束

第一次大戦が始まると、イギリスは戦後の自治とひきかえに、インドに兵力・戦費の負担を求めました。ところが、戦後1919年に制定されたインド統治法は形式的な自治しか認めず、同時に制定されたローラット法は、令状なしの逮捕、裁判なしの投獄、政治犯の上告不可という民族運動弾圧法であったため、抗議行動が全土に広まりました。

■ガンディーの指導によって大衆に広がる反英運動

この時「非暴力・不服従」運動を掲げて国民会議派の指導者として登場したのがガンディーでした。ガンディーは、非暴力・不服従の抵抗を「積極的な非暴力には真理と勇気が含まれる」として「サティヤーグラハ（真実をつかむ）運動」と名付けました。

イギリスは農民や下層労働者も参加したサティヤーグラハ運動にインド大反乱の再現を恐れました。パンジャブ地方のアムリットサル市では、2万人が集まつた集会にイギリス軍が発砲し375人（国民会議派調査では1200人）が虐殺される事件が起き、反英運動はさらに勢いを増しました。国民会議派とムスリム連盟の協力関係も築かれました。

全国を遊説するガンディーを、民衆は熱狂して迎えました。洋服を着た他の国民会議派の指導者とは全く異なり、国産木綿の粗末なインド服をまとい自ら糸を紡ぐガンディーの姿は、「スワデーシー（国産品愛用）」と「イギリス商品のボイコット」を身をもって示すものでした。各地で人々はイギリス製の綿製品を積み上げて火を放ちました。

「非暴力」とは言いながらも運動の高揚にともなって流血事件はしばしば発生しました。1922年2月ある町で警官22名が群衆に殺される事件が起きると、ガンディーは統制のとれなくなった運動の中止を命じました。その後ガンディーは逮捕投獄されました。

■「塩の行進」

一時沈滞していた運動は1929年のインド国民会議派ラホール大会で「プールナ・スラワージ（完全な独立）」方針を決定しつたび高揚期を迎えました。運動に復帰したガンディーは1930年イギリスに抵抗する象徴的な行動として「塩の行進」をおこないました。「製塩禁止法」に反対して、自宅のあるアフマダバードから約380キロ24日かけてダンディー海岸まで行進し自ら塩を作ったのです。ガンディーと78名の弟子が歩く沿道には人々が群がり、一行は数千人の規模に膨らんでいきました。「塩の行進」では、ガンディーを含め6万人以上が逮捕投獄され、この運動に注目していた国際社会にイギリスの圧政を印象づけることになりました。「塩の行進」に刺激され全土で製塩運動やボイコット運動など非暴力・不服従運動がひろまり、第二次サティヤーグラハ運動がはじまりました。

■英印円卓会議と新インド統治法

イギリスはインド独立運動を懐柔するために、インド各界の代表者をロンドンに招き円卓会議を1930年から32年までに3回開きました。円卓会議とは座席に上座下座の区別を作らず対等に話し合う形式です。このために釈放されたガンディーも、国民会議派の代表として独立の条件を獲得するため第二回会議に出席しましたが、会議は成果無く終わりました。

1935年イギリスは新インド統治法を発表しました。各州の地方自治は認めるもののインドの自治や独立とはほど遠い内容に国民会議派の指導者の一人ネルーは「これは奴隸憲章だ」と反発しました。

<コラム：ガンディーの人となり>

ガンディー(1869~1948)はイギリスに留学し弁護士資格をとったのち、1893年インド人企業の顧問弁護士として人種差別の激しい南アフリカに渡りました。南アフリカのダーバンについて一週間後、一等客車に乗っていたガンディーは、あとからきた白人のために席を譲り貨物車に移るよう車掌に命令されました。ガンディーが一等の切符を示して拒否すると、車掌はガンディーをプラットホームに放り出しました。ガンディーは寒さと屈辱に震えながらプラットホームで一夜を明かしました。「権利のために戦うか、それともインドに帰るべきか」と考えながら。「義務を果たさずに逃げるのは卑怯だ」というのが彼の結論でした。こうして1915年までの22年間、南アフリカでインド人の権利擁護運動をつづけ、そのなかでサティヤーグラハ運動を確立していました。

粗末な衣服、菜食主義、妻帯しながら禁欲生活を貫くなど独特のスタイルは留学経験のある知識階層としては特殊なものでした。また、闘争の最高潮期に、流血事件を理由に闘争中止を命じるガンディーの姿勢は、ネルーなど他の国民会議派指導者の反発を招きました。しかし、一種宗教的ともいえる彼の思想と行動は、多くの民衆を惹きつけたのでした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第119回 高揚するインドの民族運動独立 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第118回 独立を回復したトルコとアラブ地域の再編](#)

[第120回 第一次大戦と朝鮮・中国](#)

世界史講義録

第120回 第一次大戦と朝鮮・中国

第一次大戦後の朝鮮では民族自決に期待して大規模な三・一独立運動が湧き起きました。中国でも、大戦中の日本による二十一ヶ条の要求に対して、五・四運動が起きました。

■ ウィルソンの民族自決と朝鮮

1918年、米大統領ウィルソンが「十四力条の平和原則」を発表すると、自由に活動のできる海外在住の朝鮮人から「民族自決」に期待した運動がおこりました。アメリカにいた李承晚（イシンマン）はウィルソンに韓国独立を要望し、上海の新韓青年党呂運亮（ロウンヒョン）はパリ講和会議への代表派遣を計画しました。これらの動きが日本留学生に伝わると、1919年2月東京神田朝鮮YMCA会館に600名の留学生が集まり「独立宣言大会」が開かれました。朝鮮半島でもこれに呼応して、宗教団体などの指導者33名によって独立宣言が起草され、前月（1月）に死去した元国王高宗の葬儀にあわせてソウルの中心パゴダ公園で独立宣言を読み上げることになりました。

■ 日本の支配を搖るがした朝鮮の三・一独立運動

3月1日、パゴダ公園に集まった青年学生を中心とする5000名は、独立宣言を読み上げたのち、市街にて「大韓独立万歳」と叫びながらデモ行進をおこないました。隊列はたちまち数万の規模に膨れあがりました。この三・一独立運動は朝鮮全土218の府郡のうち211カ所に広がり、示威運動の回数は1200回をこえ、参加者はのべ110万人にのぼりました。

■ 日本の弾圧と統治方針の転換

これに対して、朝鮮総督府は朝鮮常駐の二個師団に日本本国からの援軍を加えて徹底的な武力弾圧をおこないました。水原郡堤岩里（チエアムリ）では村民全員を焼き殺す虐殺事件の現場がアメリカ人宣教師たちに目撃されています。三・一独立運動での朝鮮人の死者約7000人、負傷者約4万5000人、逮捕者約5万人におよびました。

運動は鎮圧されましたが、総督府はこれを契機に統治方針を従来の武断政治から文治政治に切り替えました。具体的には憲兵警察を普通警察にかえ、日本人官吏教員の帶剣を廃止するなど、あからさまな武力支配を改め、出版・集会・結社の自由を一部許可するようになりました。

■ 日本による中国に対する干渉強化

日本は、第一次大戦中の1915年、ヨーロッパ列強が中国から後退した間隙について、袁世凱政府に二十一ヶ条の要求を突きつけました。その内容は、ドイツが租借していた山東省膠州湾などの権益の日本への譲渡、中国東北地方での権利拡大、中国政府に日本人の政治・財政・軍事顧問を置くことなど、中国の主権を侵害するものでした。

袁世凱政府が最終的にこれを受けいれると、民族的危機意識が中国民衆に広がりました。袁世凱死後も、その後継者段祺瑞が利権と引き替えに日本から多額の援助を得るなど軍閥による政府の私物化はつづきました。

■新思想をひろめた文学革命

一方で、1910年代後半から、新中国・新社会をめざす文化・思想運動が始まりました。文学革命とも新文化運動とも呼ばれるこの運動の中心となったのは、陳獨秀が発行した雑誌『新青年』でした。「民主主義と科学」を標榜し、封建制度や儒教思想、特に個人を縛り付ける伝統的家族制度を批判する論陣を張り、青年層に大きな影響を与えました。同誌を舞台に、胡適による白話文学運動（文語だった書き言葉を口語に変えることを提唱）が展開され、魯迅は口語文学の傑作『狂人日記』『阿Q正伝』などを発表しました。また、李大釗はマルクス主義を初めて中国に紹介しました。やがてかれらを教授陣として迎えた北京大学は文学革命の拠点となっていました。

*****コラム：医学から文学へ、魯迅の転身*****

少年時代に民間療法で病気の父を亡くした魯迅は、医者を志し1904年日本の仙台医学専門学校（現東北大医学部）に入学しました。日清戦争後、中国人に対する蔑視が広がりつつあるなかで、藤野巖九郎教授が魯迅を気にかけ、ノートの日本語を添削するなどの指導をしてくれたことを、かれは後年、深い感謝の気持ちとともに書き記しています（『藤野先生』）。

その仙台時代のことです。幻灯機を使ったある講義で、時間が余ったのか教授が日露戦争の写真を映写しました。勝利の場面が映し出されるたびに、学生たちは熱狂して万歳と叫んでいました。やがて、ロシア軍のスパイとしてとらえられた中国人が日本軍に銃殺される場面が映し出され、学生たちはやはり万歳と叫びました。その時、魯迅にとってショックだったのは、彼らの態度よりも、映し出された写真の中で、多くの中国人が銃殺される中国人をのんびりと見物していることでした。

このとき魯迅は、中国にとって必要なのは医学ではなく「彼らの精神を改造すること」だと思い立ちます。1906年、医学校を退学した魯迅は文学の道を歩み始めました。

■中国全土に広がった五・四運動

1919年、第一次大戦が終わりパリ講和会議が始まると、中国代表は「民族自決」にもとづいて、日本の二十一ヶ条要求の破棄と、山東省の権益返還を要求しました。しかし、中国政府の要求は拒否され、そのニュースが伝えられると、5月4日、憤激した北京の学生を中心に、二十一ヶ条と親日的軍閥政府への抗議デモがおこなわれ、政府の弾圧にも関わらず抗議運動は全国に広まっていきました（五・四運動）。上海では学生・労働者のストライキと商店の休業が8日間つづきました。ついに、北京の軍閥政府は親日官僚を罷免するとともにヴェルサイユ条約の批准を拒否しました。大衆運動が政府を動かしたのは中国史上初めてのことでした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第120回 第一次大戦と朝鮮・中国 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第119回 高揚するインドの民族運動独立](#)

[次のページへ](#)
[第121回 北伐～中国国民革命](#)

世界史講義録

第121回 北伐～中国国民党革命

中国革命のため中国国民党と中国共産党は合同して国民政府を樹立しました。革命軍司令の蒋介石は、北伐の途上で共産党を弾圧し、国民党の主導権を握って中国統一を達成しました。

■中国革命の新たな担い手、国民党と共産党

五・四運動における大衆運動の高揚を見た孫文は、秘密結社による革命運動を転換し、1919年10月、国民大衆に基盤をおいた中国国民党を結成し、革命派軍閥の協力を得て広州に廣東政府を樹立しました。

また、1921年にソ連・コミニテルンの指導のもと、陳独秀や李大釗により中国共産党が結成されました。反帝国主義の立場から民族独立を支援するソ連は孫文にも接触し、1923年、孫文はソ連との協力にふみきり反帝国主義、反軍閥を掲げて、「連ソ・容共・扶助工農（ソヴィエト政府と連携し、共産党を受け入れ、労働者農民を助ける）」の三大政策を発表しました。

翌24年、国民党が改組され、共産党員がその資格のまま国民党に入党することによって両党は合同しました(第一次国共合作)。また、広州には黄埔軍官学校が設立され、革命軍幹部の養成が始まりました。高い政治意識を持つ革命軍を持つことで、軍閥勢力の打倒をめざそうとしたのです。校長に国民党の蒋介石、政治部主任には共産党の周恩来が就任しました。

蒋介石は、1907年に日本の陸軍士官学校に留学した際に孫文と知り合い、それ以来忠実な態度で孫文に接し、軍閥に煮え湯を飲まされつづけた孫文に信頼された数少ない軍人でした。1923年には孫文の名でモスクワに渡り軍事組織の研究を行っています。

広州にはソ連から資金や武器が届けられ、コミニテルンの政治顧問も派遣されてきました。

■北伐の始まり

1925年、上海で労働者のデモ行進にイギリス警察が発砲し多数の死傷者を出す事件（五・三〇事件）が起きると、これに抗議して上海、北京、香港など全国でストライキが組織され反帝国主義運動が高揚しました。

孫文はこの年の3月「革命いまだ成らず」の遺言を残し癌で死去していましたが、7月、国民党は運動の高揚を好機ととらえ、広州で国民政府の成立を宣言し、翌26年7月、蒋介石を国民革命軍総司令官として北伐を開始しました。10万の北伐軍は、共産党に指導された農民運動や労働運動の支援を受けて、各地の軍閥を破りながら北上し、12月に武漢に政府を移動し、翌年3月までに上海、南京を占領し中国南部を制圧しました。

■蒋介石によって破られた国共合作

蒋介石は、孫文には忠実でしたが反共主義者だったため、北伐の過程で勢力を拡大する共産党に危機感を強め、同じく共産党を警戒する民族資本の浙江財閥や列強の支持を受け、27年4月上海で共産党に対する弾圧をおこない、多数の共産党員や労働運動指導者を殺害しました（上海クーデタ）。蒋介石は、南京に国民政府を樹立し、共産党との連携を主張する国民党左派を排除し武漢国民政府を吸収、国民党の支配権を握りました。国共合作は崩壊しました（国共分裂）。

28年4月、蒋介石は25万の国民革命軍を率いて北伐を再開しました。しかし、共産党を排除してその性格

は変質し、蒋介石自身が最大の軍閥ともいべき存在となっており、諸軍閥を傘下に編成しながら北京に進撃しました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第121回 北伐～中国国民革命 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第120回 第一次大戦と朝鮮・
中国](#)

[次のページへ](#)

[第122回 大恐慌とニュー＝
ディール](#)

世界史講義録

第122回 大恐慌とニューディール

1929年にはじまった合衆国の大恐慌は世界恐慌に発展し、各国に深刻な影響を与えました。合衆国ではローズヴェルト大統領がニューディール政策によって恐慌克服をめざしました。

■暗黒の木曜日からはじまった合衆国の大恐慌

アメリカの「永遠の繁栄」をうたった共和党のフーヴァーが合衆国大統領に就任した半年後の1929年10月24日、ニューヨーク株式取引所で空前の高騰をつづけていた株価が急落しました。いわゆる「暗黒の木曜日」です。株価は下落をつづけ、これをきっかけにアメリカ経済は大恐慌にみまわれました。

国民総生産、工業生産高、個人消費支出とともに、1929年と比較して1932年には60%にまで落ち込み、失業者は1929年の150万人から33年には約1300万人に増加、四人に一人が失業者となりました。経営悪化と取り付け騒ぎで1930年からの3年間に5000行以上の銀行が破綻し、900万人の預金が引出し不能になりました。都市には配給のパンを求める失業者の列ができ、農村では農作物価格が急落し、輸送代さえ回収できないため農作物は打ち捨てられ、農民は困窮を極めました。破産して小作農に転落する農民が続出しました。

■フランクリン=ローズヴェルトの登場

自由主義経済を信奉するフーヴァー大統領は、景気の自動的回復機能に期待して積極的な不況対策を講じず、国民の信頼を失いました。かわって32年の大統領選挙では、民主党のフランクリン=ローズヴェルトが「ニューディール（新規まき直し）政策」をかけて当選しました。

フランクリン=ローズヴェルトはニューヨーク州の名家出身で、26代大統領のセオドア=ローズヴェルトは彼の伯父です。少年時代には毎夏ヨーロッパに避暑に出かけるような生活の中で何不自由なく成長し、20代で上院議員となり、第一次大戦時には海軍次官補、1920年には副大統領候補とエリートコースをばく進しました。しかし、21年に小児麻痺を患い、その後7年間鬱病生活をおくったことは、かれに政治家として幅をもたらしました。

■ニューディール政策の始まり

1933年大統領に就任したローズヴェルトは最初の「百日議会」で矢継ぎ早に「ニューディール政策」実施のための法案を成立させていきました。

主要なものとして全国産業復興法(NIRA)、農業調整法(AAA)、テネシー河流域開発公社(TVA)があります。全国産業復興法は、企業にカルテルを認める一方、企業活動に対する国家統制権をつよめて生産調整と価格安定をはかり、労働者には団結権、団体交渉権を認めることで購買力の向上をはかるものです。農業調整法では、農産物価格の安定のため農家に補償金をあたえて作付け制限をしました。テネシー河流域開発公社は、ダム建設や森林開発などテネシー河流域の総合開発を政府の公共事業として実施し、同時に失業者を雇用するもので、ニューディールの象徴的な事業となりました。

またローズヴェルトは、ラジオ放送で「炉辺談話」として国民に語りかけた初めての大統領でした。大統

領就任一週間後の「炉辺談話」で「もう銀行は潰れません、安心して下さい」と話したあと、銀行への預け入れ額が引出し額を上まわるようになったと言います。

■社会改革にむかうニューディール政策

景気は回復にむかいましたが、失業者は1934年段階で1000万人をかぞえ、労働運動に対する企業の弾圧が激化するなどの問題が生じてきました。これに対し、1935年、ローズヴェルトは、失業保険や老齢年金などの社会保障制度をはじめて確立し、労働者の諸権利を保障したワグナー法を制定しました。労働者や一般大衆の要求にそったこれらの社会改革は「左傾化」として保守勢力からは批判されましたが、労働者大衆からは圧倒的に支持され、リンカン以来共和党を支持してきた黒人も民主党支持に回りました。

1936年の大統領選挙でローズヴェルトは再選され、ニューディール政策は継続されましたが37年には不況にみまわれ、財政支出による有効需要創出策とファシズム諸国に対抗するための軍備拡張によってようやく恐慌から脱出しました。

不況克服という意味ではニューディールの効果は不十分なものでしたが、政府による経済への介入・統制や社会政策はのちに資本主義諸国の経済政策に受け継がれていきました。

■大恐慌から世界恐慌へ

大恐慌によって合衆国が輸入を縮小し、海外に投資していた資本を引き上げたため、恐慌は、五カ年計画を実施していたソ連をのぞく各国に波及して世界恐慌へと発展しました。

1930年以降、世界貿易は縮小し、各國は国際収支の悪化を防ぐため、輸入品に高関税をかけ保護貿易政策をとる一方、金本位制を停止し為替を管理下に置いて自国の貨幣価値を切り下げて輸出の拡大をはかりました。

イギリス、フランスのように広大な自治領や植民地を持つ国は、販路と資源を確保するために排他的な経済ブロックを形成しましたが、そこから閉め出された日本、ドイツ、イタリアは、軍需産業育成によって恐慌の克服をはかり、国際秩序の再編をめざして対外侵略を志向しました。こうして、1920年代後半の国際社会の基調だった国際協調主義や軍縮の流れは断ち切られ、国際的緊張が高まってきました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第122回 大恐慌とニュードィール おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第121回 北伐～中国国民党革命](#)

[次のページへ](#)

[第123回 ドイツに誕生したナチス政権](#)

世界史講義録

第123回 ドイツに誕生したナチス政権

ドイツでは世界恐慌ののち、国民の不満を組織したヒトラーのナチスが政権を握りました。一党独裁政治によって、反ヴェルサイユ体制、反ユダヤ主義を実行していきました。

■ドイツ経済を揺るがした世界恐慌

世界恐慌で特に深刻な影響を受けたのはドイツでした。恐慌によってアメリカ資本が引き上げられるとドイツ経済は危機に陥り、1931年、合衆国のフーヴァー大統領による、一年間の賠償金支払い猶予（フィーヴァーニモラトリアム）も効果はなく、失業者は1930年には340万人、32年には600万人を超えるました。政府の基盤は弱く、社会民主党など既成政党が有効な政策を打ち出せない一方で、ナチスとドイツ共産党が急速に勢力を拡大してきました。

■大衆に浸透するナチスの宣伝活動

ヒトラーが率いるナチスは、正式名称を国民社会主義ドイツ労働者党といい、ナチスとは反対派による蔑称が一般化したものです。ヒトラーは1923年のミュンヘン一揆が失敗したあと、議会を通じて権力獲得をめざす合法戦術に方針を転換し、ヴェルサイユ条約の破棄、大ドイツ国家の建設、ユダヤ人の排斥、不労所得の廃止などを訴え、特に過激な反ヴェルサイユ体制と反ユダヤ主義で注目を集めています。ナチスは効果的な宣伝で支持者をひろげましたが、ヒトラーの演説は意図的なデマと誇張を利用して大衆の感性に訴えるものでした。ヒトラー自身が次のように書いています。「大衆の心情は単純で幼稚である。小さな嘘より大きな嘘に引っかかる。」「大衆の理解力は小さく、忘却力は大きい。効果的な宣伝はスローガンのかたちでくりかえせ。」と。

また、ナチスの軍事組織である突撃隊は反対派に公然と暴力をふるいましたが、失業にあえぐ民衆のなかには、それがある種の力強さと感じる層が存在したのでした。

■保守勢力の協力によるナチス政権の誕生

国会でのナチスの議席数は、1928年の選挙では12議席でしたが、世界恐慌後の30年には107議席と躍進しました。1932年7月の国会選挙では230議席を獲得して第一党になり、ヒトラーはヒンデンブルク大統領に首相の地位を要求しました。

ヒンデンブルクが代表する財界、軍部、ウンカー（地主層）など伝統的保守勢力は、新興勢力であるナチスとは一線を画していましたが、共産党が議席数を着実に伸ばしている(28年54議席、32年12月100議席)ことに危機感を抱き、ヒトラーと手を結ぶことにしました。

1933年1月、ヒンデンブルク大統領はヒトラーを首相に任命し、ナチス政権が誕生しました。そのときヒンデンブルクは、「ヒトラーのごとき人物を首相に任命する不愉快な義務を負うはめになった」と側近にもらしたといいます。

■またたく間に独裁政治を確立したナチス

政権を獲得したヒトラーは独裁政権を樹立するため、すぐさま議会を解散し総選挙をおこないました。選挙期間中の2月に国会議事堂放火事件が起きると、ナチスは共産党の犯行と決めつけ、約4000人の共産党

役員を逮捕して激しい弾圧をおこないました。それ以外にも、ナチスのテロ行為で50人以上が殺害されました。このような選挙妨害にも関わらず、ナチスの議席は総議席647のうち288で過半数に届きませんでした。

しかし、ナチスは次の国会で、反対議員に対する恫喝と欠席議員を出席と見なす奇策によって、ヒトラーに無制限の立法権を付与する全権委任法を成立させました。また、7月にはナチス以外の政党組織を禁止し一党独裁を確立しました。

1934年8月にヒンデンブルク大統領が死去すると、ヒトラーは大統領と首相を兼ねる「総統」に就任しました。これ以降のナチス支配下のドイツを第三帝国と呼ぶことがあります（神聖ローマ帝国、ドイツ帝国につづく帝国という意味）。

■失業を亡くしたナチス政権

ナチス政権は失業者を減らすことに成功し国民の支持を集めました。自動車道（アウトバーン）建設などの公共事業や軍需生産の拡大によって雇用を拡大したこと、また世界恐慌が底をつけ景気上昇期とかさなったこともあり、1933年1月に600万を超えていた失業者数が、35年1月には300万を切り、37年秋には50万以下となりました。

また、労働者のレクリエーション組織「歓喜力行団」によって労働者に旅行や観劇などのサービスを提供するという先進的な取り組みもおこなわれました。

■秘密国家警察と強制収容所

一方で、言論思想統制はきびしく、市民生活は秘密国家警察（ゲシュタポ）によって監視されていました。ゲシュタポは「保護拘禁」の名目で誰でも逮捕して収容所に送り込む権限を持ち、最初の強制収容所は、早くも1933年3月にミュンヘン郊外に建設されました。

収容所には政治的反対派だけでなく、障害者やロマ（ジプシー）、ユダヤ人などの少数者も収容されました。ドイツ民族の優秀さと純血を誇示するナチスは、「不純」な分子を排除しようとしたのです。

*****コラム：ナチスによるユダヤ人迫害*****

ヒトラーはユダヤ人を劣等民族として徹底的に差別し、失業や不況の原因をユダヤ人に押しつけ、国民の差別意識をあおりました。ユダヤ系の作家、学者、文化人は公職を追われ、トーマス=マンやアインシュタインのような著名人物も国外に亡命しました。

35年のニュルンベルク諸法では、ユダヤ人を法律で定義し、ユダヤ人とドイツ人の通婚を禁じ、国籍を剥奪したうえ職場からも排除しました。38年11月には、ドイツ全土で政府の煽動によるユダヤ教会やユダヤ人商店に対する襲撃、破壊事件が起きました。7000軒の商店が壊され、2万6千人のユダヤ人男性が逮捕されたうえ、政府は被害を受けたユダヤ人に総額10億マルクの罰金を課し、全ユダヤ商店の閉鎖を命じました。割られた窓ガラスの破片から「水晶の夜」と名付けられた事件です。

第二次大戦が始まると迫害はエスカレートし、「ユダヤ人問題の最終的解決」として組織的大量虐殺がおこなわれ500万から600万人のユダヤ人が殺されました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第123回 ドイツに誕生したナチス政権 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第122回 大恐慌とニュー＝
ディール](#)

[次のページへ](#)

[第124回 ヴェルサイユ体制の
崩壊](#)

世界史講義録

第124回 ヴェルサイユ体制の崩壊

ナチス＝ドイツはヴェルサイユ条約を無視し再軍備を開始しましたが、英仏はこれを阻止せず、スペイン内乱ではドイツ・イタリアの援助をうけたファシズム勢力が勝利しました。

■再軍備に踏み出したドイツ

ヒトラーは政権を獲得した1933年に、軍備平等権を主張して、これが容れられないことを理由に国際連盟を脱退しました。

1935年1月、国際連盟管理下のザール地方が、住民投票でドイツに併合されました。同年3月、ドイツは再軍備宣言をおこない、徴兵制の復活、10万に制限されていた常備軍を50万に増強すること、空軍が存在することを表明し、公然とヴェルサイユ条約を無視しました。

■ドイツの行為を阻止できなかったイギリス・フランス

これに警戒感を抱いたフランスとソ連は35年5月に、ドイツを仮想的として仏ソ相互援助条約を締結しました。反対に、イギリスはドイツの要求を認めることが国際社会の安定につながると考え、同年、英独海軍協定を結びました。ヴェルサイユ条約でドイツの潜水艦保有が禁じられていたにもかかわらず、この協定で、イギリスはドイツの潜水艦保有を認めました。イギリスの対応は、ドイツを増長させただけでなく、イタリアがエチオピア侵略にふみきるきっかけとなりました。

1936年3月、ドイツ軍はライン川の右岸50キロから独仏国境まで設けられていたラインラント非武装地帯に進駐しました。英仏などはドイツを非難し、国際連盟はドイツ問責決議案を採択しましたが、具体的な行動でドイツの行為を阻止せず、実態としては黙認しました。

■連携を深めるファシズム諸国

1935年10月のエチオピア侵略によって国際社会で孤立したイタリアはドイツに接近、36年10月、両国は友好関係を深めベルリン＝ローマ枢軸が形成されました。枢軸とは、ヨーロッパ諸国を中心機軸という意味でムッソリーニが使った言葉です。

11月にはソ連を仮想的として日独防共協定が結ばれました。すでに日本は中国東北地方に満州國を建国していました。翌37年にはイタリアも加わり日独伊三国防共協定が成立、全体主義国家三国の枢軸が形成されました。この年イタリアは国際連盟を脱退しました。

■高まる反ファシズム人民戦線の動き

1930年代半ばにはファシスタ党やナチスに刺激され、ヨーロッパ各国でファシズム勢力が登場していました。フランスでは1934年右翼勢力による議会攻撃の争乱事件が起きると、それまで敵対していた共産党と社会党、急進社会党が人民戦線を結成し反ファシズムで統一行動をとるようになりました。

また、コミニテルンは35年、モスクワに65カ国の代表を集めて第七回大会を開き、平和と民主主義の擁護が各国共産主義運動の課題であるとして、ブルジョワ自由主義者も含めた反ファシズム統一戦線の結成を呼びかけました。翌36年には、6月フランスの総選挙で人民戦線が過半数を獲得し社会党のブルムを首班とする人民戦線内閣が誕生しました。

■ファシズムと人民戦線のスペイン内乱

左右両派の激しい対立がつづいていたスペインでも1936年2月に人民戦線内閣が成立しましたが、7月、右派勢力の軍部がこれに反発し内乱がはじまりました。武装した市民と労働者の活躍によって反乱軍はいったん鎮圧されましたが、ドイツとイタリアが反乱軍のフランコ将軍を支援し、モロッコに孤立していた3万7千のフランコ軍をスペイン本土に空輸したため反乱軍は攻勢に転じ、内乱は長期化しました。

ドイツ、イタリアはこの後も、反乱軍に物資や援軍を送りフランコを助けました。

これにたいして人民戦線政府を支援するため、50数カ国から延べ5万人の国際義勇兵がスペインに渡りました。義勇兵は共産主義者から自由主義者までを含み、スペイン内乱は世界のファシズム勢力と反ファシズム勢力の代理戦争の様相を呈しました。

しかし、国家として人民戦線を支援したのは武器援助をしたソ連とメキシコだけで、戦火の拡大を恐れた英仏は不干渉政策をとり、内乱は39年4月、反乱軍の勝利に終わりました。この後フランコはスペインに独裁政治を布き、1975年の死までその座にありました。

ちなみにドイツはスペインを新兵器の実験場にしました。1937年4月、ドイツ空軍はバスク地方の都市ゲルニカへ世界初の無差別爆撃をおこない1600名を超える市民を殺害しました。スペイン出身の画家ピカソは怒りを込めて同年のパリ万博スペイン館に壁画『ゲルニカ』を描きました。

■ソ連にふきあれるスターリンの肅正

反ファシズム統一戦線を支援したソ連ですが、国内ではスターリンによる反対派への肅正が進行していました。1935年から38年までに800万人が処刑されたり強制収容所に送られたといわれます。この結果、スターリンを頂点とする個人独裁体制が完成しました。

1936年にはスターリン憲法が制定され、スターリンは民主的憲法と自画自賛しましたが、憲法上保障された民族の平等も信仰の自由も空文であり、18歳以上の男女による直接選挙も、共産党に推薦された者しか立候補者できず、国民に選択の自由はありませんでした。

しかし、国際社会にもたらされるソ連の情報は極端に少なく、五カ年計画の成果だけが宣伝されました。労働者・農民の国家を標榜するソ連は、依然として世界の労働運動や民族運動にとってユートピア的存在であり大きな影響力を持っていました。逆に、帝国主義諸国政府と独占資本にとってソ連は潜在的敵対勢力であり、イギリスは、ソ連を警戒するが故にドイツに対して宥和的態度をとったのでした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第124回 ヴェルサイユ体制の崩壊 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第123回 ドイツに誕生したナチス政権](#)

[次のページへ](#)

[第125回 満州事変と中国国民党](#)

政府

世界史講義録

第125回 満州事変と中国国民政府

日本が満州事変で中国侵略を本格化した後も、中国国民政府は中国共産党討伐を優先し抗日戦を回避していました。1936年の西安事件を経て、蒋介石はようやく抗日を決意しました。

■世界恐慌と日本の軍国主義化

日本では、1923年の関東大震災による震災恐慌、27年の金融恐慌と経済危機がつづき、さらに訪れた世界恐慌は1930年の金輸出解禁による不況と重なり昭和恐慌と呼ばれる深刻な事態となりました。財閥は恐慌を利用して多くの産業分野で支配権を強め、政党はこれらの財閥と結びつき国民の信頼を失っていました。一方で、中国侵略によって現状打破をめざす軍部が台頭し、1932年の五・一五事件、36年の二・二六事件など右翼や軍人によるテロやクーデタがつづくなかで、政党内閣は崩壊し、軍国主義化が加速していきました。

■軍部の独走から生まれた傀儡国家満州国

1931年9月18日、関東軍は奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道の線路を爆破し（柳条湖事件）、これを中国軍の犯行として、中国東北地方で中国軍と戦闘に入りました（満州事変）。関東軍の一部軍人による独断で始められた戦争で、立憲民政党若槻内閣は不拡大方針を表明しましたが、関東軍はこれを無視して軍事行動を続けたため内閣は総辞職し、代わった立憲政友会犬養内閣は、関東軍が東北地方を占領してしまった事実を追認するしかありませんでした。

32年3月、日本は侵略行為を糊塗するため、東北地方を日本の領土とはせず、清朝最後の皇帝溥儀を執政（34年には皇帝）として満州国を建国しましたが、日本の傀儡国家であることは明白でした。

この前の1月には、中国東北地方から世界の目をそらすため、排日運動が盛り上がった上海に日本軍が上陸し中国軍と交戦する上海事変が起きています（3月に停戦）。

中国の要請によって、国際連盟から現地に派遣されたリットン調査団は、満州事変を日本の自衛行動とは認めず、また満州国が日本の傀儡国家であるとしたため、33年、日本はこれに抗議して国際連盟を脱退しました。

■国内の「敵」と戦う中国国民政府

蒋介石率いる国民政府は日本の侵略に対して国際連盟をつうじた抗議は行ったものの、基本的には無抵抗政策をとりました。このため、柳条湖事件勃発時、北京に滞在していた東北軍司令官の張学良は、東北軍11万を錦州に集結しましたが、日本軍が迫ると抗戦することなく錦州を退き、その後も反撃することはありませんでした。

蒋介石は、国内を安定させてから外敵を退ける「安内攘外」策をとり、東北地方は切り捨てたのでした。蒋介石が総力を挙げて戦っていたのは中国共産党でした。中国共産党は、国共分裂で国民政府を追わされて以降、農村で農地解放を進めながら根拠地建設を行い、1930年には15の根拠地と紅軍（中国共産党の革命軍）兵力6万を擁し、三百余県を支配するまでになっていました。31年11月には毛沢東を主席として、江西省南部の瑞金を首都に中華ソヴィエト共和国臨時政府を樹立しました。

満州事変前後の時期に、国民政府は40万を越える戦力を投入して共産党根拠地を攻撃しており、蒋介石は「われわれの敵は倭寇（日本）ではなく、匪賊（共産党）である」と公言していました。

■中国共産党紅軍の長征

数次にわたる国民政府軍の攻撃を撃退した紅軍ですが、1933年、蒋介石が自ら指揮して100万の兵力と飛行機200機を投入し、経済封鎖も交えた包囲戦をはじめると、根拠地を維持できず、34年、10万の紅軍は瑞金を脱出しました。以後、国民政府軍の攻撃を逃れながら1万2500キロの道のりを踏破し3万の兵力に減少しながらも、36年に陝西省延安に到着して、ここに新たな根拠地建設を開始しました。これを長征といいます。

■民族統一戦線を呼びかけた八・一宣言と抗日意識の高まり

長征途上の35年8月1日、中国共産党は八・一宣言を発表し、内戦の停止と民族統一戦線の結成による救国抗日を訴えました。コミニテルンの呼びかけた反ファシズム統一戦線にそったものです。

満州国建国後も日本による侵略はつづき、1935年には河北省東部に日本の傀儡政権である冀東防共自治政府が成立しました。この「自治政府」は、沿岸でおこなわれていた日本の密貿易を低関税で公認し、またその支配地域を通過して満州国で生産されたアヘンが中国各地に流れたため、北京の学生は反日デモをおこない、救国抗日感情が高まっていきました。

■蒋介石に抗日を決意させた西安事件

蒋介石は抗日戦を求める中国国民の期待に応えることなく、36年、張学良を中共討伐戦司令に任命し延安の共産党討伐を命じました。しかし故郷を日本軍に奪われた張学良とその指揮下の東北軍は共産党の抗日救国の訴えに動かされ、対共産党戦に消極的でした。

36年12月、蒋介石が督戦のため張学良の司令部のあった西安におもむくと、張学良は蒋介石を監禁し抗日戦を迫りました（西安事件）。中国共産党の周恩来も延安から西安に入り蒋介石の説得をおこない（二人は黄埔軍官学校の同僚でした）、抗日戦に同意した蒋介石は、監禁を解かれ南京に戻りました。この後、中国共産党に対する攻撃は中止され、翌37年、日本の中国侵略が本格化すると、ついに第二次国共合作が成立し国民政府=中国国民党と中国共産党はともに日本と戦うことになりました。

*****コラム：その後の張学良*****

西安事件後、蒋介石に従って南京に戻った張学良は罪に問われ軟禁されました。1949年に国民政府が台湾に移ったのちも、台湾で軟禁はつづき、解放されたのは1991年でした。2001年ハワイで101歳の大往生を遂げました。晩年の張学良は、関係者がすべて死去していたにもかかわらず、西安事件で周恩来が蒋介石を説得した具体的な内容については、決して話そうとしませんでした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第125回 満州事変と中国国民政府 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第124回 ヴェルサイユ体制の崩壊](#)

[次のページへ](#)
[第126回 日中戦争](#)

世界史講義録

第126回 日中戦争

盧溝橋事件をきっかけに、日本は中国侵略を本格化し日中戦争がはじまりました。中国では第二次国共合作が成立し、国民政府は重慶へ移って抗戦をつづけ、戦争は泥沼化しました。

■日中戦争の始まり

1937年7月7日、北京郊外の盧溝橋で日本の支那駐屯軍と中国軍とのあいだで戦闘が始まりました（盧溝橋事件）。演習中の日本軍に対して中国軍が発砲したことがきっかけとされていますが、日中双方の言い分は食い違い真相ははっきりしません。11日には、現地の日本軍と中国軍のあいだで、停戦協定が結ばれたにもかかわらず、近衛内閣は三個師団の派兵を決定し、これを機会に中国への武力侵略を本格化する姿勢を示しました。7月末には華北で日本軍の総攻撃が開始され、北京、天津など主要都市を占領、8月には上海に2個師団が派遣されて華中でも戦闘が始まりました。

こうしてはじまった日中戦争ですが、当時の日本では「支那事変」と呼び、戦争という言葉を使わず、中国に対して宣戦布告を行いませんでした。中国を対等の交戦国と考えず見下していたのと、戦争と認めることで、交戦国への輸出制限を定めていた合衆国から戦略物資の輸入が途絶えるのを恐れたためです。

■第二次国共合作の成立

それまで日本の侵略に対して妥協的態度をとっていた蒋介石ですが、日本軍の総攻撃がはじまつた37年7月に徹底抗戦を表明し、9月にはついに第二次国共合作が成立しました。中国共産党の紅軍は国民政府の第八路軍と新編四軍として編成され、国民政府軍として日本軍と戦うことになりました。

■南京占領と日中戦争の泥沼化

日本軍は11月に上海を占領し、ついで国民政府の首都南京に進撃しました。12月中旬に南京を占領しましたが、その際に、捕虜、投降兵、一般市民を虐殺し国際的非難を浴びました（南京大虐殺）。犠牲者の数は4万人から30万人まで諸説ありますが、日本軍が国際法を無視して非戦闘員を大量虐殺した事実は否定できません。

近衛内閣は、南京の占領で国民政府を屈服させられると考えていましたが、国民政府が首都を四川省の重慶に移し抗日戦を継続したため、戦争終結への方向性を見失い、38年1月に「国民政府を対手（あいて）とせず」との声明を発表し、講和への道を自ら断ってしまいました。

日本軍はその後華北と華南の占領地をつなぎ、また重慶への補給路を断つために38年10月に広州や武漢を占領しましたが、重慶の国民政府は中央アジアやビルマ経由で米・英・ソ連の物資援助を受け、抗日戦の指導をつづけました。

華北を中心に広大な地域を占領した日本軍ですが、確実に確保していたのは主要都市と鉄道だけで、農村地域では中国共産党の抗日根拠地が建設されて、八路軍の遊撃戦に日本軍は悩まされました。戦争は泥沼化しました。

■中国国民の支持なき汪兆銘の南京政府

蒋介石と並ぶ国民党の指導者汪兆銘（おうちょうめい）が、1938年12月、日本の呼びかけに答えて重慶

を脱出しました。汪は、一時は孫文の後継者と目された政治家で、軍隊を掌握した蒋介石に国民党の主導権を奪われましたが、国民には大きな影響力を持っていました。日本は汪兆銘に親日的な国民政府を組織させて、その政府と和平交渉を行おうとしたのです。

しかし、重慶を出た汪兆銘は国民から見放され、40年、汪を主席として南京国民政府が樹立されましたが、国民に対する影響力はなく、日本の目論見は失敗しました。

■大敗北を喫したノモンハン事件

日中戦争の行き詰まりを、さらなる戦線拡大によって打開しようとする軍部内部には、ソ連との戦いを主張する北進論と、インドシナ方面への進出を主張する南進論がありました。

1938年7月、朝鮮・満州・ソ連の国境で起きた張鼓峰事件と1939年5月、モンゴル・満州国境で起きたノモンハン事件は、北進論の立場から行われたソ連軍との軍事衝突です。

ともに日本軍が敗北しましたが、特に、ノモンハン事件では戦車と航空機によるソ連の機械化部隊に日本軍は死者1万人を超す壊滅的打撃を受けました。また、ノモンハンで戦闘がつづくなかの39年8月に、独ソ不可侵条約が締結されたことは日本に大きな衝撃を与えました。日本の対ソ軍事行動は、日独伊防共協定を結んでいるドイツがヨーロッパ方面でソ連を牽制することを前提にしていたからです。9月にドイツがポーランドに侵攻し第二次大戦がはじまった後、ようやく日ソ間でノモンハン事件の休戦協定が結ばれました。

この後、第二次大戦のヨーロッパ戦線の推移と連動して、日本は南進策をとるようになります。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第126回 日中戦争 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第125回 満州事変と中国国民党政府](#)

[次のページへ](#)
[第127回 第二次大戦](#)

世界史講義録

第127回 第二次大戦

1939年、ドイツ軍がポーランドに侵入し第二次大戦が始まりました。ドイツ軍はフランスを破ったのち、東に向かいソ連に侵入、ヨーロッパ戦線最大の激戦、独ソ戦がはじまりました。

日本の真珠湾攻撃により合衆国が参戦し、第二次大戦は世界戦争に発展しました。劣勢だった連合国は1943年以降、各戦線で逆襲に転じ、45年8月日本の降伏で大戦は終結しました。

■ドイツの侵略開始

1938年3月、ヒトラーはオーストリア政府に圧力をかけ、オーストリア首相の要請に応じるという形式をとって、ドイツ軍をウィーンに進駐させオーストリアを併合しました。

さらに4月には、チェコスロvakiaに対して、ドイツ系住民が多数を占めるズデーテン地方の割譲を要求しました。ドイツとチェコスロvakiaの緊張が高まり、開戦寸前となった9月、戦争回避を望むイギリスのチエンバレン首相は、フランスのダラディエ工首相、イタリアのムッソリーニと共に、ヒトラーとミュンヘン会談をひらき、ドイツのズデーテン地方獲得を認め、チェコスロvakiaにもこれを受け入れさせました。小国チェコスロvakiaを犠牲にした宥和政策で、一時の平和は維持されました。

しかし、ヒトラーはさらに領土を求め、39年3月、ドイツはチェコスロvakiaを解体・併合し、さらにポーランドに対してダンツィヒとポーランド回廊の割譲を要求しました。ここにいたり、イギリスはようやく宥和政策を放棄し、戦争準備を開始しました。

■第二次大戦の始まりと「奇妙な戦争」

1939年8月23日、独ソ不可侵条約が結ばれました。この条約によって、ドイツは、将来英仏と開戦した場合に二正面作戦となるのを回避し、ドイツの東方への領土拡大を警戒していたソ連は自国の安全を図ろうとしたのでした。

9月1日、ドイツ軍がポーランドに侵攻を開始すると、英仏はドイツに宣戦し第二次大戦が始まりました。ドイツは約2週間でポーランドを制圧しました。これに乘じて、9月中旬にソ連もポーランドに侵入して、ドイツとその領土を分割し、さらにフィンランドと戦い領土を奪い、バルト三国も支配下に置きました。これらの行為によってソ連は国際連盟を除名されました。

英仏両国はドイツに宣戦したものの、両国軍はフランスの防衛ラインの内側に引きこもり、ドイツに対して積極的軍事行動を起こしませんでした。また、ドイツもポーランド制圧後、次の作戦準備で侵略行為を止めたため、交戦国が戦わない「奇妙な戦争」となりました。

■フランスの降伏

1940年4月、ドイツ軍がデンマークとノルウェーに侵入し、戦局はドイツの主導で動き始めました。

翌5月、ドイツ軍はベルギーを突破し北フランスに侵入し、英軍はダンケルクからイギリス本土に撤退、ドイツ軍はフランス軍を破って6月14日にはパリを占領しフランスは降伏しました。あまりにあっけないフランスの降伏は、第一次大戦の悲惨な記憶が生々しく戦意に欠けたためだといわれています。フランス北部はドイツが直接占領し、南仏にはペタン将軍による対独協力政府ヴィシー政権が樹立されました。

ドイツのフランス侵攻の成功を見て、イタリアは6月10日にドイツ側に立ち参戦しました。しかしその軍事力は弱く、大戦の中での役割は大きくありませんでした。

■イギリス空爆から独ソ戦へ

ヒトラーは、フランスの降伏でイギリスが講和に応じることを期待しましたが、イギリス新首相チャーチルは抗戦意志を明らかにしました。イギリス上陸作戦を企図したヒトラーは、8月からイギリス本土への空爆をおこないましたが、期待した成果があがらず上陸作戦は中止されました。

対イギリス戦が行き詰ったヒトラーは、40年9月、日独伊三国同盟を結んだうえで、矛先を東方のソ連に転じました。41年6月、ドイツ軍はソ連に進撃し独ソ戦が始まりました。この結果、ソ連は反ドイツ陣営に加わることになり連合国が形成されました。英ソ相互援助条約が結ばれ、合衆国は武器貸与法をソ連に適用しました。

ドイツ軍は快進撃をつづけ、41年12月6日にはモスクワまで140キロまでの地点まで迫りましたが、ソ連軍の反撃と冬の寒さでモスクワ攻略に失敗し、独ソ戦は長期化しました。42年春になると、ドイツ軍はロシア南部の油田地帯に侵攻し、8月から翌43年2月にかけてスターリングラードでは激しい攻防戦がおこなわれました。

■第二戦線を要求するスターリン

この間、41年12月に日本の真珠湾攻撃によって太平洋戦争がはじまるなど、合衆国も連合国として参戦することになりました。しかし、ヨーロッパの戦線においては、連合国の中でソ連だけがドイツ軍と戦っている状態であり、スターリンは英米両国にヨーロッパ西部からドイツを攻撃する第二戦線の形成を求めていました。しかし、独ソ両国が疲弊することをのぞむチャーチルは、その要求の実現を延ばしつづけました。

■市民による反ファシズム抵抗闘争

1942年の段階で、ドイツ、イタリアの同盟国がソ連とイギリスを除くほぼヨーロッパ全域を支配していました。しかし、ドイツやイタリアに占領された地域では、市民による反ファシズム抵抗運動であるレジスタンスやパルチザン闘争（不正規軍の遊撃戦）がおこなわれました。フランスのドニゴール将軍は、ロンドンに亡命政権自由フランス政府を樹立し、ラジオ放送を通じてフランス人に抵抗を呼びかけていました。

■日本の仮領インドシナ進駐と日米関係の悪化

ノモンハン事件でソ連に敗れた日本は南進論をとることになりました。1940年6月、フランスがドイツに降伏すると、9月、日本軍はフランス領インドシナ北部に進駐しました。これは、合衆国、イギリス、オランダを刺激し、特に合衆国は鉄鋼の原料である屑鉄の日本への輸出を禁止しました。また同月に締結された日独伊三国同盟は、合衆国を仮想敵としており、日米関係は急速に悪化しました。

さらなる南進をはかる日本は、1941年4月、日ソ中立条約を結んで北方の安全確保したうえで、7月に仮領インドシナ南部に進駐しました。これに対して、合衆国は日本の在米資産を凍結し、対日石油輸出を禁止し、重慶国民政府への援助を強化したため、日本では対米強硬論が勢いを増しました。

■ゆきづまる対米交渉

対立の一方で、日本は1941年4月から関係改善のための日米交渉をおこなっていました。しかし、合衆国は日本軍の中国からの撤退を要求したため交渉は難航し、日本では陸軍を中心に対米開戦論が強まってき

ました。41年10月に成立した主戦論の東条内閣は、独ソ戦でドイツが快進撃をつづけていたことにも刺激され、対米開戦を決定しました。

12月8日、日本軍はハワイの真珠湾を奇襲攻撃して、米英に宣戦、太平洋戦争がはじまりました。ドイツ、イタリアも合衆国に宣戦し、第二次大戦は世界的規模に拡大しました。

■太平洋の戦い

日本はヨーロッパの支配からアジアを解放し「大東亜共栄圏」を建設するとして、42年前半までに、マレー半島からインドネシア、フィリピンまでの東南アジア全域を占領し、南太平洋ではギルバート諸島、ソロモン諸島まで進出しました。

緒戦で勝利をおさめた日本ですが、1942年6月、ミッドウェー海戦で米海軍機動部隊に敗れて空母4隻を失ってからは形勢が逆転し、制海権・制空権を握った米軍の本格的反攻がはじまりました。米軍はガダルカナル島など日本が守備隊を置く島々を攻略しながら前進をつづけ、降伏を恥とする日本の守備隊は、満足な補給がないなかで玉碎という名の全滅を繰り返しました。44年7月にサイパン島を米軍が占領して以降、日本本土への空襲が本格化しました。サイパン-東京間を米軍の長距離爆撃機が往復できたためです。

■連合国シチリア島上陸とイタリアの降伏

42年11月、米英連合軍は北アフリカのモロッコ・アルジェリアに上陸し、独伊軍を破り43年5月には北アフリカを制圧、7月にシチリア島に上陸しました。ムッソリーニはファシスト大評議会で不信任され失脚し、かわって首相に任命されたバドリオ元帥は、9月連合国に降伏しました。しかし、ドイツ軍がイタリア南部で抵抗を続けたため、連合国がローマを解放したのは44年6月でした。ムッソリーニはドイツ軍の手引きで逃亡をはかりましたが、45年4月、コモ湖畔でパルチザンに発見され銃殺されました。

■ソ連の反攻と第二戦線形成によるドイツの降伏

半年に及んだスターリングラードの攻防戦は43年2月にソ連軍の勝利で終わり、ドイツ軍兵士9万人が捕虜となりました。これ以後、ソ連軍は攻勢に転じ、年末までにドイツ軍に占領されていた領土の三分の二を奪還しました。

11月にはローズヴェルト、チャーチル、スターリンの米英ソ首脳によるテヘラン会談が開かれ、翌年の第二戦線形成が確認されました。翌44年6月、米英両軍は北フランスのノルマンディーに上陸して第二戦線を形成、ドイツ軍と戦いながら西進し、8月にはパリを解放、45年3月にはライン川を越えてドイツに侵入しました。

ソ連軍は44年には東欧に進撃し、秋には枢軸陣営のルーマニア、ブルガリアを降伏させ、45年1月には東プロイセン・ワルシャワ・ブタペストの線を突破して、4月中旬にはベルリン攻略を開始しました。4月30日、ヒトラーは自殺しドイツは降伏しました。

■原爆投下とソ連参戦による日本の降伏

1942年2月、米英ソはヤルタ会談をひらき、対独処理方針を話し合うとともに、合衆国の強い要請でドイツ降伏後のソ連の対日参戦が確認されました。日本軍の捨て身の抵抗を前にして、米軍は自軍の損害を最小限に抑えるためソ連の参戦を望んだのでした。

45年4月、米軍は沖縄に上陸しました。多くの県民や学校生徒の犠牲者を出して、6月に沖縄守備軍は全

滅しました。

7月、トルーマン（ローズヴェルトの死去により副大統領より昇格）、チャーチル（途中でアトリーと交代）、スターリンによりヨーロッパの戦後処理が話し合われ、同時に中国の蒋介石の同意を得て、米英中三国により対日降伏勧告であるポツダム宣言が発表されました。日本政府がこれを黙殺すると、米軍は8月に開発したばかりの原子爆弾を広島と長崎に投下、さらにソ連軍が満州国境、樺太、千島から侵入を開始しました。8月15日、日本はようやくポツダム宣言を受諾して降伏、第二次大戦は終わりました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第127回 第二次大戦 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
第126回 日中戦争

[次のページへ](#)
第128回 戦後世界の出発

世界史講義録

第128回 戦後世界の出発

第二次大戦後、国際連合は米英仏ソ中の五大国を中心に国際秩序の形成をめざしました。一方で、勢力拡大をはかるソ連と、それを封じ込めようとする合衆国の対立が深まりました。

■連合国によるドイツと日本の処理

降伏したドイツは、米英仏ソの四国により分割占領され、首都ベルリンも四国により分割管理されることになりました。また、ニュルンベルク国際軍事裁判（1945.11～46.10）が開かれ、ナチス＝ドイツの主要な指導者が戦争犯罪者として裁かれ12名が処刑されました。

日本も連合国に占領下におかれましたが、実質はアメリカ軍の単独占領であり、連合国軍総司令部(G.H.Q.)の間接統治のもとで財閥解体、農地改革などの民主的改革がおこなわれました。46年には主権在民、戦争放棄、基本的人権の尊重を柱とする日本国憲法が制定されました。ドイツと同様に日本の戦争指導者は極東国際軍事裁判（東京裁判、1946.5～48.11）で裁かれ、7名が処刑されました。

満州国と台湾は中国に復帰しましたが、朝鮮は北緯38度線で分けられ北がソ連、南がアメリカによる分割管理となりました。

■国際連合の発足と五大国

1945年4月に、連合国50カ国によりサンフランシスコ会議が開かれ、国際連合憲章が採択され、10月にはニューヨークを本部に国際連合が発足しました。

国際連合は、国際紛争を阻止するために軍事的制裁の権限を持つ安全保障理事会を設置しました。その常任理事国であり拒否権をもつ、合衆国、ソ連、イギリス、フランス、中国が五大国として戦後世界の秩序に責任を負うことになりました。

国際経済体制は、1945年12月に国連の専門機関として国際通貨基金(IMF)が発足し、アメリカのドルを基軸通貨として各国の為替相場が固定されました。

■二大陣営の対立

ソ連は大戦末期にドイツから解放した東欧諸国を自国の勢力下に置き、親ソ的な共産党政権を樹立させていきました。イギリスのチャーチルは1946年3月に「ヨーロッパを横切って鉄のカーテンが下ろされた」と演説をおこない、ソ連に対する警戒感をあらわにしました。

1947年3月、合衆国のトルーマン大統領（任1945～53）は、「トルーマン＝ドクトリン」を発表し、ギリシアとトルコに経済援助をおこない、ソ連の影響による共産主義化を阻止する決意を示しました。これ以後、合衆国は軍事同盟や経済援助によってソ連圏（共産圏）の拡大を防止する「封じ込め」政策を展開しました。

47年6月、合衆国は、ヨーロッパ諸国が経済困難から社会主義化するのを防ぐため、経済援助計画「マーシャル＝プラン」を発表しました。1948年2月、チェコスロヴァキアで、マーシャル＝プランの受け入れをめぐる対立から、クーデタが起き共産党政権が成立すると、英仏とベルクス三国は、共産勢力を警戒して西ヨーロッパ連合条約を結びました。これが発展して、1949年、合衆国を中心に英、仏、伊など12カ国が反ソ軍事同盟である北大西洋条約機構(NATO)を結成し、ソ連を包囲する形で米軍が西ヨー

ロッパ各地に配備されました。

■ソ連の対抗措置

ソ連は「封じ込め」に対抗して、東欧各国の共産党にフランス共産党、イタリア共産党を加えて1947年コミニフォルム（共産党情報局）を組織しました。マーシャル=プランには49年のコメコン（東欧経済相互援助会議）を組織して対抗し、55年には東欧諸国の軍事同盟、ワルシャワ条約機構を結成しました。また、ソ連は49年に原爆実験に成功し、合衆国につづく核保有国となりました。合衆国が52年に水素爆弾を保有すると、翌年にはソ連も水爆実験に成功し核開発競争がおこなわれました。しかし核兵器保有国が戦火を交えればその被害はばかりしれず、両国の激しい対立は、戦争をともなわず「冷戦」と呼ばれました。

■分断国家の誕生

四力国によって分割占領されていたドイツでは、1949年、米英仏占領地にドイツ連邦共和国（西ドイツ）、ソ連占領地域にドイツ民主共和国（東ドイツ）が成立し分断国家となりました。首都ベルリンも東西に分断されたため、西ベルリンは東ドイツ領内に浮かぶ西ドイツの飛び地となりました。東ドイツから西ベルリン経由で亡命する者が急増した1961年、東ドイツ政府は通行遮断のため西ベルリンの周囲に壁を築き、東西冷戦の象徴となりました。

朝鮮半島では1848年、南部にアメリカの支援を受けた李承晩大統領(任1948~60)の大韓民国、北部にはソ連が支援する金日成主席(1912~94)の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が成立しました。

■朝鮮戦争と合衆国の対日政策の転換

1950年、朝鮮統一をめざす北朝鮮軍が北緯38度線を越えて南進し、朝鮮戦争が始まりました。国連安保理事会が北朝鮮の侵略と認定（ソ連は欠席）し、アメリカ軍を主力とする国連軍が韓国軍を支援すると、中国義勇軍が北朝鮮側に立ち参戦し、51年には戦線は38度線付近で膠着し、53年、休戦協定が成立し両国の分断が固定化しました。

朝鮮戦争勃発後の1951年、日本はサンフランシスコ平和条約で西側陣営諸国と講和を結んで独立を回復し、同時に結んだ日米安全保障条約で、日本国内の米軍基地建設を認めました。また、憲法が戦力保持を禁じているにもかかわらず、多くの国民の疑惑を押しきり自衛隊を発足させました。これらは、日本を反共の防波堤にしようとする米軍の意図に沿ったものでした。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第128回 戦後世界の出発 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第127回 第二次大戦](#)

[次のページへ](#)
[第129回 植民地諸国の独立と第三勢力の形成](#)

世界史講義録

第129回 植民地諸国の独立と第三勢力の形成

1949年、中国には国共内戦を経て中華人民共和国が成立しました。インド、インドネシアなど植民地諸国は独立を達成し、米ソ両陣営に属さない第三勢力として結集しました。

■大戦後の国共内戦から生まれた中華人民共和国

連合国の一員として日本と戦った中国は、大戦中に不平等条約を撤廃し、戦後は戦勝国の一員として国連安保理の常任理事国となるほどに国際的地位を高めました。

ところが、日本の敗北によって共通の敵がなくなると中国国民党と中国共産党は対立を深め、1946年6月、合衆国からの莫大な援助で準備を整えた蒋介石の国民政府は、共産党の根拠地に攻撃を開始して内戦がはじまりました（国共内戦）。

抗日戦での活躍をつうじて民衆の信頼を獲得していた共産党は、内戦の過程で、地主の土地を貧農に分配する土地改革を進めながら解放区とばれる支配地域を広げていきました。

一方の国民政府は、役人の腐敗堕落が激しく、経済悪化も手伝って国民から徐々に見放されました。当初は、兵力も装備も共産党の人民解放軍にまさっていたものの、47年には人民解放軍が優勢となり、49年には蒋介石は台湾に脱出、国民政府も台湾に移りました。

中国本土を掌握した中国共産党は、49年10月、北京で中華人民共和国の成立を宣言、主席に毛沢東（任1949～59）、首相に周恩来（任1949～76）が就任しました。50年の土地改革法で農民への土地分配を全土にひろげ、財閥企業の国有化をおこない社会主義建設政策をすすめました。

■中華人民共和国をめぐる国際環境

中華人民共和国は、1950年には、ソ連と中ソ友好同盟相互援助条約を結び、社会主义陣営に加わりますが、内戦を通じて独立で社会主义国家を樹立した中国共産党は、東欧諸国とは異なりソ連に対して独自の立場をとりました。

蒋介石を支援する合衆国は、中華人民共和国を承認しなかったため、国連では台湾を支配するだけの国民政府（中華民国）が中国代表として議席を保持しつづけ、中国大陆を支配する北京政府は国連への加盟すら認められませんでした。したがって、朝鮮戦争で米軍を主体とする国連軍が中朝国境近くに迫ると、北京政府はこれを米軍による侵略の危機ととらえ、100万近い義勇軍を北朝鮮に派遣したのでした。

■ヴェトナムの独立と南北分断

フランスの植民地だったヴェトナムでは、大戦中の日本支配時代に、ホー＝チ＝ミン（1890～1969）を指導者とするヴェトナム独立同盟が抗日運動を展開し、1945年、日本が敗れるとヴェトナム民主共和国の独立を宣言しました。しかし、46年、独立を認めないフランスが軍隊を派遣しインドシナ戦争がはじまりました。9年にわたる戦いの末、54年、フランスはディエンビエンフーの戦いで大敗後、ジュネーヴ休戦協定を結び、ようやくヴェトナムから撤退しました。

こうして、ヴェトナムは独立しましたが、社会主义体制をとるヴェトナム民主共和国は北緯17度線以北の支配しか認められず、南部にはフランスの傀儡政権だったヴェトナム国の支配下に入りました。両国

は56年に南北統一選挙をおこなう取り決めでしたが、南ベトナム政府は合衆国の支援を得て反共政策をとり、南北統一選挙を拒否したため、南北分断は固定化しました。また、合衆国は、東南アジア地域での共産主義勢力の拡大を抑え込むため、東南アジア条約機構(SEATO、加盟国：米・豪・ニュージーランド・仏・英・フィリピン・タイ・パキスタン)を結成しました。

■インドの独立と分裂

大戦後、国力の低下したイギリスは遂にインドの独立を認めました。1947年、インドはイギリス連邦の自治領として独立、50年にはインド共和国となり、初代首相にはネルー(任1947～64)が就任しました。また、全インド＝ムスリム連盟の要求を容れたイギリスは、47年、イスラム国家パキスタンのインドからの分離独立を認めました。独立前後、ヒンドゥー教徒とムスリムは流血事件をおこすほど激しく対立し、両者の宥和と統一インドを主張していたガンジーは、48年に狂信的ヒンドゥー教徒によって暗殺されました。

■結集するアジア・アフリカの新興独立国～アジア・アフリカ会議

大戦後、植民地を維持できなくなったヨーロッパ諸国から、次々と独立したアジア・アフリカの新興国は、米ソどちらの陣営にも属さない国家建設をめざしました。

1954年、中国の周恩来首相とインドのネルー首相が会談して発表した「平和5原則」は、領土主権の尊重・不侵略・不干渉・平等互恵・平和共存を国際関係の原則として主張しました。これは米ソ両国の外交政策に対する批判でした。

翌55年、インドネシアのバンドンでアジア・アフリカ会議が開催されました。アジア・アフリカの新興独立国29カ国の首脳が集まり、平和共存と反植民地主義を提唱し、第三勢力をひとつの政治勢力として世界に認知させ、新たな時代の到来を感じさせました。

会議を主催したインドネシアのスカルノ大統領(1901～70)は、1945年の日本降伏後、インドネシア国民党の指導者としてインドネシアの独立を宣言し、支配者として戻ってきたオランダ軍との4年におよぶ戦争に勝利して独立を達成した典型的な第三勢力のリーダーでした。

■第三勢力の高揚～非同盟諸国首脳会議

1961年にはアジア・アフリカにラテンアメリカ諸国も加えて、ユーゴスラヴィアのベオグラードで第一回非同盟諸国首脳会議が開催されました。呼びかけたのは、ティトー(1892～1980)、ナセル(1918～70)、ネルーです。

ユーゴスラヴィア大統領ティトーは、ソ連に従わず自主的な社会主义建設をすすめて注目されていました。エジプト大統領ナセルは英仏軍の武力干渉を排除して56年にスエズ運河の国有化に成功し、当時第三勢力のリーダーとして最も脚光を浴びていた人物です。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第129回 植民地諸国の独立と第三勢力の形成 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第128回 戦後世界の出発](#)

[次のページへ](#)
[第130回 イスラエルの建国と
パレスティナ問題](#)

世界史講義録

第130回 イスラエルの建国とパレスティナ問題

ユダヤ人国家イスラエルの建国は、パレスティナ人難民を生み、アラブ諸国と4度にわたる戦争を生じました。現在に至るまで、パレスティナ問題は解決していません。

■アラブ諸国連盟と大戦後のパレスティナ

中東のアラブ諸国は大戦前から大戦中にかけて英仏から独立を遂げ、1945年3月、アラブ諸国連盟を結成しました。当初の加盟国は、エジプト、シリア、イラク、レバノン、イスラエル、イエメン、サウジアラビアの七カ国で、アラブ諸国の連帯強化と反英運動を目的としました。対イギリスで問題となっていたのがパレスティナでした。

第一次大戦後にイギリスの委任統治領となっていたパレスティナ地方には、バルフォア宣言にもとづいて、ユダヤ人国家の建設をめざすユダヤ人の入植がつづき、土地を奪われるアラブ人（パレスティナ人）との紛争がつづいていました。

■イスラエルの建国と第一次中東戦争

1947年、国連はパレスティナ地方をユダヤ人国家とアラブ人国家に分割する「パレスティナ分割決議」を可決しました。ユダヤ人に圧倒的に有利な地割りに、アラブ人は決議案を拒否しましたが、48年ユダヤ人が一方的にイスラエル建国を宣言し、これに反対するアラブ諸国連盟との戦争が勃発しました（パレスティナ戦争、または第一次中東戦争）。翌年、イスラエル軍優勢のうちに国連の調停で停戦が成立し、イスラエルはパレスティナ地方の80%を支配して独立を達成し、約100万のパレスティナ人が土地を追われ難民となりました。

■ナセルのスエズ運河国有化からはじまった第二次中東戦争

1952年、エジプトで自由将校団による革命が起り、国王が追放され共和政が成立しました。自由将校団はナセルなどを指導者とする民族主義軍人グループで、パレスティナ戦争の敗北をきっかけに国政変革をめざしたのです。1922年に独立していたエジプトですが、イギリスはエジプト王室（ムハマド・アリー朝）と結びついて利権を維持していましたから、この革命が実質的なエジプトの独立といえます。エジプトの実権を握ったナセルが、世界の注目を集めたのが、56年のスエズ運河国有化宣言です。発端は、反共軍事同盟であるバグダード条約機構に反対したナセルに対して、合衆国がアスワン=ハイダムの建設資金援助を撤回したことでした。ナセルは資金確保のためスエズ運河の国有化にふみきったのです。これに対して、イギリスはフランス、イスラエルを誘ってエジプトを攻撃、スエズ戦争（第二次中東戦争）が起きました。しかし、国際社会の激しい非難をうけて三国がエジプトから撤退したため、アラブ民族主義は高揚しナセルはその指導的位置を占めました。

■負けないイスラエル～第三次、第四次中東戦争

スエズ戦争では70万のパレスティナ難民が生まれ、パレスティナ人を支援するアラブ諸国とイスラエルの敵対関係はつづきました。

1967年、パレスティナゲリラを支援するシリアとの対立をきっかけに、イスラエルはエジプト、シリ

ア、ヨルダンに先制攻撃を加え、エジプトのシナイ半島、シリアのゴラン高原、ヨルダンのヨルダン川西岸地区を占領しました（第三次中東戦争）。

領土回復をめざすエジプトとシリアは、1973年、イスラエルに先制攻撃を加え第四次中東戦争が起きました。戦争は勝敗なく約一月で停戦しましたが、このときにアラブ石油輸出国機構(OAPEC)が、親イスラエル国への石油輸出を制限し石油価格を引き上げるという石油戦略をとり、世界経済に大きな混乱をあたえました（第一次オイルショック）。

■方針転換をはかりイスラエルとの共存をめざすエジプト

第四次中東戦争で勝利できなかったエジプトは、イスラエルの存在を認めて共存する方針に転換しました。1970年のナセル死後、エジプト大統領となったサダト(任1970～81)は、中東和平に乗り出していた合衆国の仲介で、1979年、エジプト＝イスラエル平和条約を結び、その結果、シナイ半島はエジプトに返還されました。エジプトはアラブ諸国から激しい反発をうけ、サダト大統領は81年に暗殺されましたが、エジプトの外交方針は変わりませんでした。

■武装闘争から共存へ向かうPLO

パレスティナ人は、1964年、自らの政治組織パレスティナ解放機構(PLO)を結成し、70年代以降、アラファト議長(任1969～2004)の指導のもと武装闘争を展開しました。祖国を求めるパレスティナ人の戦いも、イスラエルにとってはテロであり、両者は互いの存在を認めず、報復の連鎖は途絶えず流血事件は日常化していました。

しかし、80年代後半には、エジプトの方針転換をうけて、PLOもイスラエルとの現実的な関係を模索はじめ、88年、アラファトはイスラエルとの共存を認めました。93年には、PLOとイスラエルは相互承認し、イスラエル占領地域でのパレスティナ人の自治を認めるパレスティナ暫定自治協定が結ばれました。

■パレスティナ問題の鍵を握る合衆国

しかし、PLOとの和平を推進したイスラエルのラビン首相(任1992～95)は95年に極右ユダヤ人青年に暗殺され、その後成立した右派のシャロン政権は協定違反をつづけています。一方のパレスティナ人も、PLOの方針に反対する武装勢力があり、また2004年に長年にわたってパレスティナ人の諸勢力をまとめてきたアラファトが死去し、新指導部の動向も不透明です。

戦争のなかで生まれ、周辺諸国の敵意に囲まれたイスラエルは、過剰なまでに攻撃的になることで国家建設をしてきました。核兵器も保持しているといわれます。このイスラエルが後ろ盾としている合衆国の姿勢が、パレスティナ問題解決の鍵となっています。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第130回 イスラエルの建国とパレスティナ問題 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第129回 植民地諸国の独立と](#)

[第三勢力の形成](#)

[第131回 ソ連の平和共存路線](#)

[とその影響](#)

世界史講義録

第131回 ソ連の平和共存路線とその影響

ソ連の平和共存路線とスターリン批判は、冷戦に「雪どけ」をもたらしました。東欧の自由化はソ連に抑圧され、平和共存を批判した中国では、文化大革命がはじまりました。

■スターリンの死後はじまったソ連の平和共存路線

1953年、ソ連の独裁者だったスターリンが死去しました。その後、ソ連は、資本主義諸国との平和共存を提唱しました。これを受け、国際的に緊張緩和を求める声が高まるに、55年7月、米英仏ソ四カ国の首脳が集まりジュネーヴ会談が開かれました。具体的な成果はなかったものの、米ソの指導者が直接会って平和の意思を確認しただけでも当時としては大きな意義がありました。

■世界に衝撃を与えた「スターリン批判」

1956年、ソ連共産党第一書記フルシチョフ(任1953~64)はソ連共産党第20回大会でスターリン批判をおこないました。スターリンの粗暴さに言及したレーニンの遺書を紹介し、スターリン時代の肅正の実態を暴露したフルシチョフの報告は、世界に衝撃を与えると同時にソ連の変化を印象づけ、「雪どけ」の気運は高まりました。

57年、ソ連は人類初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功し、ソ連の技術と核ミサイル攻撃の可能性に合衆国が衝撃を受ける（「スプートニク=ショック」）といった緊張関係はつづいていましたが、平和共存の流れは途絶えず、1959年にはフルシチョフの訪米が実現しています。

■親米政権を倒したキューバ革命

合衆国の影響下にあるラテンアメリカには、大土地所有制のもとで貧富の差の激しい国が多く、社会矛盾を抑え込むため独裁政権が成立していました。合衆国は社会革命を封じ込めるため、それらの独裁政権を支持していました。

キューバはバティスタ大統領の親米的独裁政権のもとにありましたが、1959年、カストロ(1926~)に指導されたキューバ革命が成功しました。革命政権が土地改革を実施し、米国系企業を接収すると、合衆国はキューバに敵対政策をとったため、カストロは社会主义革命を宣言しソ連に接近しました。

■核戦争寸前に迫ったキューバ危機

1962年、ソ連がキューバに中距離ミサイル基地を建設していることがわかると、ケネディ大統領(任1961~63)はソ連輸送船のキューバ入港を阻止するため海上封鎖を実施し、ソ連船が封鎖線を突破した場合は戦争も辞さない構えで核弾頭搭載弾道ミサイルの発射準備を命じました。世界中が固唾をのんで見守るなか、フルシチョフが、ぎりぎりの段階で、合衆国のキューバへの内政不干渉と引き替えに、ミサイル撤去を約束したため、危機は回避されました。

実際に核戦争の危機を経験したことによって、米ソ両国間には再び「緊張緩和」への流れがうまれ、63年、部分的核実験停止条約が米英ソ三国によって調印されました（イギリスは52年に核兵器保有）。また、米ソの最高指導者の執務室にはホットラインと呼ばれる直通電話回線が開設され、緊急時の

直接対話による危機回避を可能にしました。

■スターリン批判で自由を求めた東欧諸国

フルシチョフのスターリン批判によって、東欧諸国ではそれまで抑えられていたソ連に対する不満が噴出しました。

56年、ポーランドではポズナニで自由化を求める労働者の暴動が起こりました。ソ連が介入する動きを見ると、民族主義者として国民に人気のあったゴムウカ(1905~82)が政権に就き、民衆運動を終息させてソ連軍の出動を回避しました。ハンガリーでは、反ソ連・反独裁の民衆運動が高揚し非スターリン政権が誕生し、ワルシャワ条約機構からの脱退を決めると、ソ連軍が侵入し全土を制圧し、親ソ政権を樹立しました（ハンガリー事件）。

ソ連は、東欧社会主义諸国に対してはスターリン時代と変わらない姿勢を保っていたのでした。のちの1968年に、チェコスロvakiaで「プラハの春」と呼ばれる自由化運動が推進されたときも、ワルシャワ条約機構軍が出動して自由化を抑圧しました。

■ソ連の平和共存路線に反発する中国

中国にとって、台湾政府を支援する合衆国との対立関係はつづいていたため、ソ連の平和共存路線を受け入れることは出来ませんでした。平和共存をめぐる中ソ両国の対立は、60年にソ連が中国に派遣していた技術者を引き上げ、援助を中止するまでに発展しました。

■中国社会に混乱をもたらした文化大革命

中国がソ連に頼らない社会主义建設をめざし、58年にはじめた「大躍進」政策は1000万人以上の餓死者を出して失敗し、59年、毛沢東にかわって劉少奇(1898~1969)が国家主席となりました。劉少奇は、社会主义経済建設のテンポをゆるめ、生産請負制を認めるなどの「経済調整」政策をとりました。

これに反発した毛沢東は、66年、文化大革命を発動しました。紅衛兵として組織された学生たちは、「造反有理（反抗するにはわけがある）」と叫んで既成制度を批判し、党幹部や知識人を攻撃しました。この文化闘争の形をかりた権力闘争で、劉少奇は失脚し、毛沢東と文革派が権力を掌握しました。その後も文革派は大衆を運動に動員して権力闘争をつづけたため、社会は大混乱しました。文革期の武力闘争で数百万に及ぶ犠牲者が生まれたとされています。現在中国では70年代前半までつづいた文革期を内乱の10年と位置づけています。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第131回 ソ連の平和共存路線とその影響 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第130回 イスラエルの建国と
パレスティナ問題](#)

[次のページへ](#)

[第132回 ベトナム戦争と合
衆国の相対的地位低下](#)

世界史講義録

第132回 ヴェトナム戦争と合衆国の相対的地位低下

南ヴェトナムで、解放戦線と政府軍の戦闘が始まると、合衆国は大規模な軍事介入をおこないました。最終的にヴェトナムで敗れた合衆国は、経済外交政策の転換を迫られました。

■民衆の支持なき南ヴェトナム政府

分断されたヴェトナム南部には、1955年、ゴ=ディン=ジェム(1901~63)を大統領とするヴェトナム共和国が成立しました。合衆国は、南ヴェトナムが共産化すれば他のアジア諸国にも共産主義が波及すると考え、反共政策をおこなうジェム政権を支援しました。

しかし、カトリックのジェム大統領は当初から国民に人気がなく、大統領一族の金権腐敗体質、南北統一選挙のボイコットによる分断固定化、さらに強権的にすすめられた反共政策は、民衆の反米・反政府感情を刺激しました。とくに南北分断前の土地改革の成果を否定し、農民から土地を奪ったことは、大きな反発を生みました。

■南ヴェトナム解放民族戦線の結成

1960年、ジェム政権打倒をめざす南ヴェトナム解放民族戦線が北ヴェトナムの支援を受けて結成され、反政府ゲリラ活動を開始しました。61年、合衆国は南ヴェトナム政府軍のゲリラ掃討作戦を支援するため大規模な軍事顧問団を送りましたが、民衆に支持された解放戦線は着実に解放区を広げていきました。64年3月には、農村の40%が解放戦線の支配下に入っていました。

63年、ジェム政権の独裁と仏教弾圧に反対して、都市でも反政府運動が広がると、軍部によるクーデタが起り、合衆国に見限られたゴ=ディン=ジェムは暗殺されました。その後の南ヴェトナム政府は安定せず、65年6月までに14回のクーデタが発生しました。

■米軍の直接介入のはじまり

1965年、合衆国は南ヴェトナム政府軍の崩壊をくい止めるため、18万の兵力を直接投入しました。ここから合衆国の戦争としてのヴェトナム戦争が本格化します。

米軍は解放戦線の遊撃戦に苦しみました。農村地帯では、一般農民と解放戦線のゲリラとの区別がつかず、解放区の農村をまるごと破壊し、米軍将校が「この町を救うためにそれを破壊している」と述べたような、無意味な戦いにはまりこんでいました。山岳地帯やジャングルに誘い込まれて苦戦をすると、枯葉剤を散布してジャングルを破壊しました。

米軍は、解放戦線を支援する北ヴェトナムに対して、徹底的な空爆（北爆）を加えましたが、地上軍の投入は最後までおこないませんでした。北ヴェトナムに援助を与えていた中国とソ連が軍事介入することを恐れたためです。また、北ヴェトナムも米軍地上部隊に侵攻の口実をあたえないため、解放戦線に対する支援はラオス・カンボジアを経由するホーチミン=ルートを通じておこない、17度線の国境を直接越えませんでした。

■ヴェトナム反戦運動の広がり

米軍の兵力は派兵がはじまった65年から増え続け、68年には53万を超えるまでになりましたが、終結の見通しは立たず、膨大な兵力と軍事費を投入しながらも泥沼に陥ったヴェトナム戦争に対して米国内では批判が高まりました。

また、米軍の戦闘で逃げまどうヴェトナム農民の姿や、南ヴェトナム政府の腐敗ぶりは映像を通じて世界に伝えられ、世界各地に反米・反戦運動がひろがりました。

■米軍の撤退とヴェトナム統一

69年に合衆国大統領となったニクソン(任1969～74)は、介入縮小の方針を打ち出しました。ニクソンは、南ヴェトナム政府軍の増強をおこない、ホーチミン＝ルートを封鎖するため戦線拡大をしてカンボジアに親米政権を樹立したのち、1973年1月、ようやく北ヴェトナム政府、南ヴェトナム解放民族戦線、南ヴェトナム政府とパリ和平協定を締結し、4月に米軍の撤退が完了しました。

合衆国は撤兵後も南ヴェトナム政府への援助をつづけましたが、75年、解放戦線と北ヴェトナム人民軍の攻撃により南ヴェトナム政府軍は崩壊、首都サイゴンが陥落しヴェトナム戦争は終結しました。1978年、南北は統一され、ヴェトナム社会主義共和国となりました。

アメリカは、ヴェトナム民衆の民族独立の願いを理解できず、共産化の防止という一方的な正義を押しつけたため、圧倒的に優れた装備を持ちながら敗れたのです。

■ドル危機と石油ショック

ヴェトナム戦争は、合衆国の威信を低下させただけでなく、長年にわたる膨大な軍事支出は財政を圧迫し、ドル危機と呼ばれる国際通貨ドルの信用不安をもたらしました。

ニクソン大統領は1971年、ドルと金の兌換停止とドル切り下げを宣言し、ドルの価値は急落（ドル＝ショック）、73年までには主要国は固定相場制から変動相場制に移行しました。

また、73年の第一次オイルショックは、各国の経済に動搖をもたらしたため、先進資本主義国は、政治経済政策を討議するために75年以降毎年、先進国首脳会議（サミット）を開催するようになりました、合衆国の経済的地位が相対的に低下していきました。

■合衆国の中華人民共和国承認

ヴェトナムでの敗北が明白になった72年、ニクソン大統領はそれまで敵視していた中国を訪れ、共同声明で両国の和解を発表しました。中ソ対立で孤立していた中国を取り込むことで、ソ連を牽制し、東アジアで影響力を保持しようとしたのです。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第132回 ヴェトナム戦争と合衆国の相対的地位低下 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第131回 ソ連の平和共存路線](#)

[とその影響](#)

[第133回 イランのイスラム革命](#)

[金](#)

世界史講義録

第133回 イランのイスラム革命

国王による独裁政治のもと近代化をすすめていたイランで、1978年に革命が起きました。イスラム教を指導原理とする革命政権の成立は世界を驚かせました。

■経済建設に苦しむ第三世界

50年代後半以降、華々しく登場したアジア・アフリカ諸国ですが、植民地時代の経済構造からの脱却に苦しみ、先進資本主義国とのあいだにあらたな経済的従属関係が生まれ、60年代には南北問題として先進資本主義国と開発途上国との格差が問題になってきました。そのなかで、いくつかの国では指導者が強権的な支配によって経済発展をおしすすめる開発独裁と呼ばれる体制が出現しました。

■「白色革命」からイスラム革命へ

イランでは、国王パフレヴィー2世(位1941～79)が53年から「白色革命」と呼ばれる上からの近代化をすすめています。農地改革、工業化、女性参政権の付与などさまざまな改革は、西欧化と脱イスラム化をめざしたものでした。しかし、その独裁政治と貧富の差の拡大に対する国民の不満は大きく、イスラム教シーア派を中心に国王への抗議行動が全国に広がり、79年、国王は亡命しました（イラン革命）。

かわってシーア派の宗教指導者ホメイニ(1901?～89)が革命政権の最高指導者となり、イラン＝イスラム共和国が成立しました。ホメイニは、イスラム教を指導原理とした政教一致の政治運営をおこない、また、国王を支援していた合衆国とは厳しく対立しました。

近代政治の脱宗教化の流れに逆行するイランの「革命」は世界を驚かせました。しかし、イスラム圏では、イスラムの復権を掲げるイラン革命に刺激されイスラム原理主義運動がひろがっていきました。

■イラン＝イラク戦争から湾岸戦争へ激動する湾岸地域

周辺のイスラム諸国の政府は、原理主義の広がりと革命の波及を恐れました。イラクはサダム＝フセイン大統領(任1979～2003)のもと、1980年、革命の転覆をはかけてイランに侵攻、イラン＝イラク戦争がはじまりました。88年までつづいたこの戦争で、多大な犠牲を強いられながらもホメイニはイラン革命政権の基盤を固めました。

一方、湾岸諸国や合衆国の援助によって戦争を継続していたイラクは、戦後、経済がゆきづまる、90年クウェートに侵攻しこれを併合しましたが、翌91年米軍を中心とする多国籍軍の攻撃を受けて撤退しました（湾岸戦争）。その後、合衆国は、イラクを敵視しつづけ、2003年にはイラク戦争でサダム＝フセイン政権を崩壊させました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第133回 イランのイスラム革命 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
[第132回 ベトナム戦争と合](#) [次のページへ](#)
[第134回 社会主義諸国の改革](#)

[衆国の相対的地位低下](#)

[とソ連の消滅](#)

世界史講義録

第134回 社会主義諸国の改革とソ連の消滅

社会主義諸国では80年代から市場経済を導入した改革が始まりました。ソ連・東欧では改革が社会制度にまで及び、その結果、社会主義体制は崩壊、ソ連は消滅しました。

■中国～文化大革命の終息と改革・開放路線

1976年、周恩来、毛沢東があいついで死去しました。絶対的な権威となっていた国家主席毛沢東が亡くなると、そのもとで権力を振るっていた毛沢東夫人江青(1913?～91)など「四人組」と呼ばれる文革派の指導者が失脚、逮捕され、文化大革命は終わりました。

かわって実権を掌握したトウ小平(1904～97)は、大胆な改革・開放路線をとり、経済の自由化をすすめました。中国社会主義の代名詞だった生産と行政の組織である農村の人民公社を解体し、外資の導入、国営企業の民営化、私営企業の容認、と資本主義化をすすめていきました。

経済の自由化をすすめる一方で、政治的には共産党による一党独裁を堅持し、1989年には民主化を要求して天安門前広場に集まった学生たちを軍隊によって弾圧しました（天安門事件）。これはソ連ではじまっていた「ペレストロイカ」に対する中国の答えでもありました。

■停滞するソ連社会

ソ連では、64年にフルシチヨフにかわってブレジネフが書記長となり82年まで政権を担当しました。この時期に、計画経済の硬直化、労働意欲の減退、軍需産業重視による消費財生産の停滞、技術革新の遅れなど、西側諸国に比べてソ連経済のたちおくれは覆いがたいものになってきました。

79年、ソ連軍は政変のつづくアフガニスタンに侵攻し、親ソ政権を樹立しました。西側諸国の激しい非難を受けるとともに、これ以後、ソ連軍は反政府ゲリラやアラブ義勇軍との戦いでアフガニスタンに駐留をつづけ経済的には大きな負担となりました。

■ゴルバチョフによるペレストロイカ

1985年にソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフ(1931～)は、「ペレストロイカ（建て直し）」「グラスノスチ（情報公開）」をスローガンに改革に着手しました。86年 Chernobyl 原子力発電所の事故を経て、言論・集会・出版・報道の自由が大幅に認められ、改革は加速しました。

ゴルバチョフは、個人営業の自由を認め、市場経済の導入によって経済の改革をはかる一方、西側諸国との関係改善と緊張緩和につとめ、87年に合衆国と中距離核戦力全廃条約に調印し、88年にはソ連軍のアフガニスタンからの撤退を開始しました。また、同年には東欧社会主義諸国に対する指導性の放棄を表明し、89年には合衆国の大統領(任1989～93)と会談しマルタ宣言で冷戦の終結を宣言しました。

■崩壊する東欧社会主義圏

ソ連のペレストロイカは東欧諸国に変革をもたらしました。89年から91年にかけて各国で共産党による一党独裁体制が放棄され、自由選挙や革命による政権交代がおこなわれました。以前とは違い、ソ連はこ

れらの動きに介入するどころか、改革を促すほどでした。

なかでも、象徴的だったのが東西ドイツの統一でした。88年に一党独裁を放棄し民主化運動が活発化していたハンガリーが、89年5月に、オーストリア国境の鉄条網を撤去すると、西ドイツへの亡命を求める東ドイツ市民がハンガリー・オーストリア国境に詰めかけ、8月、ハンガリー当局の黙認のうちに集団で国境を突破しました。以後、西への移動を求める東ドイツ市民の圧力は高まりつづけ、ようやく改革にふみきった東ドイツ政府が11月旅行の自由を認めると、東西ベルリンの市民によって壁が破壊され、東西ドイツの国境は事実上消滅しました。翌年、東ドイツが西ドイツに吸収される形でドイツは統一されました。

■ソ連の消滅

東欧の激震と平行しながらすすめられたソ連の改革は社会制度にも及び、90年には複数政党制と大統領制が導入され、ゴルバチョフがソ連大統領に就任しました。

ソ連政府と共産党による統制が緩むなか、東欧諸国の改革の影響を受け、ソ連邦を構成する各共和国からの独立要求が高まるなど、91年8月、改革の進展を望まない共産党保守派がゴルバチョフを軟禁しクーデタを起こしました。クーデタはロシア共和国大統領エリツィン(1931~)の活躍で阻止されましたが、解放されたゴルバチョフは共産党の解散を余儀なくされ、以後ソ連政府とゴルバチョフの権威は空洞化し、12月に各共和国が独立しソ連は消滅しました。ソ連の大部分はエリツィン大統領のロシア連邦に引き継がれ、他の11の共和国とともに独立国家共同体(CIS)が設立されました。

ソ連と東欧社会主義圏の崩壊で、米ソ対立を最大の軸として形成されていた戦後世界が終わりをつけたことを世界中が実感しました。

「よくわかる高校世界史の基本と流れ」（秀和システム）より

第134回 社会主義諸国の改革とソ連の消滅 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)
第133回 イランのイスラム革命

[次のページへ](#)
第135回 冷戦後の世界

čŠEŽju<`~^
‘æ,P%ooñ@@Å%,ìŽö<A

PC%oðà

VŠw”NÅ‰, ÍŽö<Æ, Í¶“k, à<³Žt, àA’ŠŽè, ð’T, Á, Ä“Æ“Á, È<Ù’£Š’, ^a, , Ó, ê, Ä, ç, Ü, ·B
¶“k, Ík³Žt, ð’l”¥, Ý, µ, Ä, ç, Ü, ·B–È”, , ç, ©A, Ä, Ü, ç, È, ç, ©A•|, ç, ©A“{, é, ©A ŠÄ, ç, ©AŒµ, µ, ç, ©A, ç, ç‰oÁŒ, Èl, ©Aeg, É, È, Á, Ä,
, ©Ey, ç, ©A“TM“TMAAAB
±, ï, PŽžŠÖ–Ú, ÉA¶“k, È, Ç, ç, ç, öÛ, ð—^, !, é, ©, Á, », ïŒä, ï`é”NŠÖ, ïŽö<Æ, ï, à, è`Ö, ³, ^aŒ^, Ü, è, Ü, ·B
“—→, ¹/₂, ï, ïŽŒÈD‰i, àA<x, Ý”†, ï`ïŒ±, ð~b, µ, ÄAŽö<Æ, É, ï, ç, é, ï, ^a“è”È“Í, ï, æ, ç, Ä, ·B¶“k, ÍAŽö<Æ, ð, µ, È, ç, ±, Ä, ð”M—ó, ÉŠú‘Ö, µ, Ä, ç
, Ü, ·iŽ,,, à, ZŽž‘ä, ï, », ç, Ä, µ, ¹/jB
, Å, «, é, ³/4, —A”P, ç, ïŠú‘Ö, É, », ê, È, è, É‰ož, !, È, ^a, ç, àA’P, È, éŽG’k, Å, à, È, A, Ü, ¹/₂, ±, ê, ©, ç, ïŽö<Æ, É
, ï, ~b, ð, ·, év, Ä, ·B
, QCfKfEfFfCf“, ïŒ¶

@,±,‰,©,ç,ê”NŠÔ,Ý,È,³,ñ,É¢ŠEŽj,ð³,|,é,±,Æ,É,È,è,Ü,µ,½B,Ý,È,³,ñ,ÆŠç,ð‡,í,¹,é,Ì,Í,¶,ß,Ä,Å,·,ËB-¼O,àŠç,àS'R'm,è,Ü,¹,ñB,Ü,,ÍAftf\fl[ƒ€,ÅoÈ,ð,Æ,è,Ü,·,Ì,ÅAŒÄ,Î,ê,½,çŠç,·,º,Ä,ÔŽ-,ð,µ,Ä,

@,»,ê,Å,Í,A“-Žö ∞ ,δžn,β,æ,œ,ç,A,äžv,¢,Ü,µ,½,ªA,í,ß,Ä,ížö ∞ ,È,Ì,ÅŽ©ŒÈÐ‰º,ª,í,ê,É,“b,ð,µ,Ü,·,·

@,¢,Ü,©,ç700”N

$\mathbb{E} \left[f(\mathbf{f}(\mathbf{f}(\mathbf{f}(\mathbf{f}))) \right] = \mathbb{E} \left[f(\mathbf{f}(\mathbf{f}(\mathbf{f}))) \right]$ $\mathbb{E} \left[f(\mathbf{f}(\mathbf{f}(\mathbf{f}))) \right] = \mathbb{E} \left[f(\mathbf{f}(\mathbf{f}(\mathbf{f}))) \right]$

é i — Å · B ½ ³ ï ī ŽO a° Si · é a° N à° ² — È cB A E + è a° f A l F T U N a° S E P É ² ² ¢ Å u Ú Å Å % o ° è É Å

② ÅA Ü A » J ÄAfA[fT]‰g aŠ-ô : éh a ½

@,³, ÄÄ•ŒEê, Í, ±, ñ, È, Ó, ☐, ÉŽn, Ü, è, Ü, ·BfA[fT[%o, a, f, Ä, à, ï, æ, ☐, É{`i, Ä'—, l'i×, δÜ, c, Ä, c, é, ÄA^êl, l%o³—, %o, ☐, É, ±, ñ, È'i, l, δ, μ, Ü, ·BZ@•a, l—l'n, aŽ×«, ÈRŽm, É'D, i, èA, Ü, ½—öl, à•B—, É, ³, è, Ä, μ, Ü, Á, %A, ÄEfBfA[fT[%o, íAŽ@•a, l““à, Á, », ñ, È•s—@, È, ±, ÄE, a, , ±, È, i, è, Ä, c, é, l, Í, —, μ, ☐, c, ñA, ÄE, c, ☐, i, —, ÁÁ“Œ•fGfNfxJfŠfo[, ð, D, Á, ³, °, Á, ½, ³êl, ÁA, »], lŽ×«, ÈRŽm, lè, Éæ, èž, Y, Ü, ·B
 @, ÄE, ±, è, ^aA“G, lé, É^ê•a“«, ð“¥, Y“ù, è, ½, ÄE, ½, ñfA[fT[, lS, ☐, c—E<C, ÄŒE³C, a²², —, Ä, Ö, È, Ö, È, Á, Ä, μ, Ü, ☐, ñ, Ä, ·BfA[fT[%o, “Œê, É, l, —@, Žg, c, ^a, æ, , Ä, Ä, «, Ü, ·B, ±, è, à, », ☐, ÄAé, É, l, —@, ^a, ☐, ☐, Ä, Ä, c, ÄAN“ùŽÒ, l—E<C, ð, , ¶,
 ☐, ŠÖ, ÉfA[fT[%o, ð, Ä, ;%o, ☐, μ, Ä•B—, É, μ, Ä, μ, Ü, c, Ü, ·B

@fA[fT[%o \propto Au \bullet , -], A]

□ Å □ % □ JZ ös AF

â,ð,â,é,oxv,A,Á,ËBu,±,Ì,P”N,Ì,ó,í,É-â,Ì“š,!,^,Æ©,Â,Ó,Á,½,È,ç,ÎA,“,Ü,!,ð<-,»,oxB,à,µAÆ©,Â,“,ç,ê,È,“,ê,Î,“,Ü,!,ì‰ox“,ð,»,Á,èZ,,,^,à,ç,“,oxB,æ,ç,Èv,æ,ç,à,È,É,àA,Æ,É,©,

^<<,È<R m

@,Ç,ñ,È-â‘è,ðo,³,ê,^½,©,Æ,c,œ,ÆA,±,ê,^a,·,²,¢B,±,ñ,È,Ì,Å,·E

@u, · , × , Ā, ī—«, ª, à, Á, Æ, à—], þ, ±, Æ, í‰o ½, ©,

@“í,μ,¢,Ë[B,í,©,ç,ñ,Ë[B,í,©,é,Á,Äl,¢,Ü,·,©BfA[fT[à,í,©,ç,È,©,Á,½,Ì,ÅA,C,¤,µ,½,©,Æ,¢,¤,Æ—·,É,Å,ÄAs,«‰oi¤,¤,·,×,Å,Ì
 —«,É,½,·,Ë,Ü,·,é,ñ,Å,·Bu,·,Ü,!,Ì—],Ý,Í‰½,©Hv,·,×,Å,Ì—«,¤—],P,±,ÆA,Å,·,©,çA—,©,ç~V”k,Ü,ÅA”_—A¤lAEIA¤M¤A—¢¥AŽqŽ,ç, ,ç,¤,é—«,ÉŽç—
 ª,µ,Å,Ü,í,é,ñ,Å,·,¤A,¤,Ü,
 §”h,ÈRŽm,Ì•vAŽq,Ç,¤AŽá,³A—öl,È,ÇA, ,è,Æ, ,ç,¤,é“š,!,¤•Ô,Å,Ä,
 @—Žq,Ì,Ý,È,³,ñ,Í,È,ñ,Æ“š,!,Ü,·,©B·,©,ê,Å,¤¢,é,Å,µ,¤B,¤,ñ,Èó‘Ô,Å,ÍA,·,×,Å,Ì—«,¤—],P,±,Æ,¤,í,©,é,í,_,Í,È,¢B,µ,©,µA, ,¤,ç,¤,é,í,_,É,¤,¢,©,È,¢
 ,Ì,ÅAfA[fT[%¤,Í—,¤,Å,Ä,_,Ü,·B

@,·,é,ÆA,»,í`V”k,¢,«,È,è—§,i,,á,Á,ÄAfA[fT[%o,ðŽ¶,è,Æ,,µ,½B
 @u,±,êA,»,±,È<RŽm,æB—§”h,ÈŠZ,Ég,ðŒÅ,ß,Ä,³,¼,©,µ,,¢g•,ìŽÒ,©,à,µ,ê,ñ,ªAfŒffB,ð-³Ž_<,µ,Ä’È,è‰ß,—,é,Æ,ÍA,±,ì-³—çŽÒ,ßIV
 @<RŽm,Æ,¢,ø,ì,ífŒffBEftf@/[fxfg,ì,_,¹,äZ-È,ñ,¾BfA[fT[%o,í,í,Ä,Ä”n,ð~—èA”ñ—ç,ð,i,Ñ,Ü,·B@Œ™,ð,È,“,µ,½V”k,ÍA,³,ç,ÉfA[fT[,ÉŒ³/,,¤B
 @u, ,È,½,ìT,µ,Ä,¢,é,à,ì,ðAŽ,,,í, ,½,|,é,±,Æ,ª,À,«,év,Æ,ŒB,½,¾,µA,±,ê,àðŒ,ª, ,Á,ÄA~V”k,í`š,|,ð³,|,é,©,í,è,ÉAŽá,
 —,µ,¢A,ÆŒ³/,¢,Ü,·BfA[fT[%o,í,í,Á,Íl,Ü,Á,Ä,¢,Ü,·,©,çAŒäæl,|,|,É—ñ,©,µ,ÄA~“š,|,ð³,|,Ä,á,ç,¢,Ü,µ,½B,C,ñ,È“š,|,¾,Á,½,ÆŽv,¢,Ü,·,©B

@, „ÄA—, „úfA[fT, ÍŽ×„, È×RŽm, lè, Éo, ©, —, Ü, ·BŽ×„, È×RŽm, ¸, Ä, «, Äu„š, !, ðCE©, Ä, —, ½, ©BCE¾, Ä, Ä, Y, èvBfA[fT[%o, íu^ov, È, n, ÄCE¾, o, IB, ±, èA•S³‰o, ðEB•sžv<c, Èf<[f, È, n, ¾, —, è, CA‰½“x“š, !, ðCE¾, Ä, Ä, à, ç, ç, Y, ½, ç, È, n, Ä, ·B, »», è, ÄAfA[fT, lV”k, É<³, !, Ä, à, ç, Ä, ½“š, !, ðÄCEä, ÈŽc, µ, Ä, , ç, , ÄA, »», è, Ü, Ä, •, ç, Ä, «, ½“š, !, ð“S”CE¾, o, n, Ä, , ðBZ×„, È×RŽm, lú^á, oB^á, ov, AE¾, ç, È, a, çä@AE™BfA[fT[%o, l“š, !, a, Ä, «, ½, È, ±, è, Äu, Ä, lA—n, ©, C, , è, , Ü, !, l‰o, o, , ð, ç, ½, ¾, ±, ovfA[fT[Au, i, ¸, Ä, Ä, È, O, Ä, ½v, », µ, Ä, Ä, V”k, l“š, !, ðCE¾, ç, Ü, µ, ½B‰o½, ¾, AEŽv, oB, ±, è, a, cB

@uŽC•^,l`ÓŽu,ðŽ,Â,±,Æ·

@ž×^«,È×RŽm,ÍAu,,»,ÁA,³,Ä,Í, ,ł—,É³,i,Á,½,ÈB, ,¢,Â,ÍA%‘,ł—...,ł,
,¾,Á,½,ł,ÈB,È,º,©,í,©,è,Ü,¹,ñ,ºB

@,±,ñ,È,Ó,¤,É,µ,ÄfA[fT[%o,Í,P”N,Ô,è,É{’i,É×AŠO,µ,Ü,·B%o~’i,ł×RŽm,½,ç,à,å,Ši,Ñ,È,ñ,Å,·,ªAŠIS,łfA[fT[%o,ª,Ã,¢,ñ,¾BX,¢~V”k,Æ,ł—
ñ,©,ª,Žc,Á,Ä,¢,é,ñ,¾,ÈB—ñ,©,Í,µ,½,à,ł,ìA, ,ñ,ÈX,¢~V”k,ÉZá,
,³,¹,æ,¤,©,Æ”Y,ñ,Å,¢,é,í,¬,Å,·B—’z“i,È”¢,ł×RŽm,íK,,-ñ,©,đZç,é,à,ł,Å,·,©,çB
@,³,¾,ñ,¾fA[fT[%o,đCE,ÄAS,đ,É,ß,½,ł,ªfKfEfFfCf“,Å,·B,â,Å,·EA“oê,Å,·Bu%o,æA, ,È,½,ł”Y,Ý,đZ,,,É,à,ª,¬,Å,
,ê,+,ñ,ÈŽ—,Å,Ä,à,¾,µ,Ü,·B“-R,ł×WŠJ,Æ,µ,ÄA%o,É”‰,đKfEfFfCf“,íAuŽ,,,ªA,,»,ł—,ł—,Æ,È,è,Ü,µ,â,¤Bv,Æ,È,é,í,¬B
@fA[fT[%o,ÍAŽ,©,ä,ł,‰TM,Å,à, ,è,©,Ú—,í,µ,Žá,Æ’N,È,±,łKfEfFfCf“,đ, ,ñ,È•s,g,È~V”k,ÆCE,¥,³,¹,½,
‰,½,àA,“,Ü,|,ªC,Æ”½,ł,·,é,ł,Å,·,ªAfKfEfFfCf“,à,CE,¾,¢,¾,µ,½,ç,·,©,È,¢B
@CE,«,çA,fKfEfFfCf“,ª,~V”k,ł•v,Æ,È,è,Ü,·B

@,³,ÄA’‡ŠO,ł×RŽm,½,ç,ª,Ã,¢X,©,ç~V”k,đA,ê,Ä,«,ÄA{’i,ÄCE,¥Z®,Å,·B’¼,ł×RŽm,½,ç,íA,Ý,ñ,È,“,à,µ,ë”¼,•,ªfKfEfFfCf“,đ,©,ç,©,¤,ñ,¾B,¾,Å,ÄAV
¥,ìE,ÍA¢,É,àX,¢AŠç,đ,»P,¬,½,
,Å,·,©,çA,ç,Å,Æ,àK,¹,¶,á,È,¢B,¾,©,çAŽ®,¾,¬,Å”å”I‰,í,È,µB,â,ª,ÄA,¬ñ,©,ł—,ä,Å,Ä,«,Ü,·B

@VY‰-é,Å,·B”‰,È,ÍV~YV•w,ł“ñl,«,èB,Æ,±,¢,ªfKfEfFfCf“,í,Æ,¢,¤,ÆA‰,Ô‰,Å,É”w”†,đCEü,¬,Äu,Í,Ý|[v,Å,ÄA,½,B,§,í,©,è,Å,¢,Å,¢,é,í,¬B‰,Ô
‰,Å,łŠç,đCE,æ,¤,Æ,à,µ,È,¢B,Ü, A,»¤,¾,í,ÈB,·,é,ÆA,±,ł”V”k,ł‰,Ô‰,Å,ª,¾-ÈO,Å,ÄfKfEfFfCf“,É-ä,¢,©,¬,é,ñ,¾B

@u,í,ªv,æA, ,È,½,ÍVY‰-é,Æ,¢,¤,ł,ÉA,í,½,
@u,È,º,Å,·,©v,Å,ÄA,·,²,¢,Å,·,ÈB,í,©,é,Å,µ,â,¤,É,ÈB
@,Ü,½AfKfEfFfCf“,à,CŽ,ç,¢,¢,
@u‰,ªA,½,B,§,í,©,è,Å,¢,é—R,ÍŽO,Å, ,éB,D,Æ,ÄA, ,È,½,~Vl,Å, ,é,±,ÆB“ñ,Å, ,È,½,¤X,¢,±,ÆAŽO,Å, ,È,½,lg,ª,ª,¢,±,Æ,¾v
@,»,ê,đ,·,¢,Ä~V”k,ÍA”½,_,é,ñ,¾B,±,¤,Å,·Bu,D,Æ,ÄAŠm,©,ÉZ,,,Í”N~V,¢,Å,¢,é,ªA,»¤,é,¾,¬l,æ,è,à,Žv—¶,ª[,
,Å,Æ,Å,·BCE,µ,ÄA”¢,±,Æ,Å,í, ,è,Ü,¹,ñB”ñ,Å,BAÈ,¤X,¢,±,Æ,ÍA•v,É,Æ,Å,ÄK‰,Å,·B,È,°,È,çA’¼,ł”j,¾,¢Sñ,é,±,Æ,ðS”z,µ,È,
,©,çBŽO,Å,BAI,ł‰,ł”l,Í¶,Ü,é,¢,ä,Å,¢,Ü,é,à,ł,Å,í, ,è,Ü,¹,ñB°,łP,«,É,æ,é,à,ł,Å,·Bv—C,¢,±,ÆCE,¾,¤,ÈB

@fKfEfFfCf“,àA,Ü, ‘f’¼,È”j,¾,©,çA,»¤,ñ,È,à,ł,©,µ,çA,ÆZv,Å,ÄA,Ó,Å,ÆU,è,Ô,Å,Ä‰,Ô‰,Å,đCE,é,ÆA,È,ñ,Æ,»¤,±,É,¢,é,ł,ÍA,¤P,
,¾,Å,½,ñ,¾B

@u,“,Ü,|,Í”é,ł‰,ł”ZØ,¾v,Æ,¢,Å,«,
@u,“,Ü,|,Í”é,ł‰,ł”ZØ,¾v,Æ,¢,Å,«,
@uŽÅ,ÍŽ,,,í”¢,É,—@žg,¢,É,—@,đ,©,¬,ç,¢,ä,Å~V”k,łŽp,É•ł,|,ç,¢,ä,Å,¢,½,ł,Å,·B“ñ,Å,łŠè,¢Ž,—,©,È,í,È,¬,ê,ł,Å,à,Æ,łŽp,É-ß,é,±,Æ,ª,Å,«,Ü,¹,ñB—
§,h,È×RŽm,đv,É, ,é,Æ,¢,¤,D,Æ,Å,łŠè,¢,¤,©,È,|,ç,¢,½,ł,Å,ÄZ,,,Í”é,ü,ł”¾,đ,à,Æ,ł,±,łŽp,Å‰,β,²,·,±,Æ,ª,Å,«,é,æ,¤,É,È,è,Ü,µ,½B
@,à,Æ,łŽp,Å,¢,ç,¢,é,ł,Å,‘,¤A-é,ª,æ,¢,Å,·,¤C,Å,·,¤B,í,ª,¤v,æB,“I,Ñ,
@fKfEfFfCf“,í,±,¤,ç,Å,½B
u,»,ł”ü,µ,çŽp,ÍA”ñl,¾,¬,ł-é,ł”ZØ,ÉCE,¹,Å,Ü,µ,çB,Å,«,é,íA,»¤,ł”ü-e,đ’¼,ł”j,½,ç,é,íK,¹,È,ñ,Å,·,æv
@,»,ê,đ,·,¢,Å,µ,ł,ç,
@u,“,Ü,|,łD,«,É,·,é,ª,æ,¢v

@,·,é,ÆA‰‰Ô‰‰Å,·-ž-Ê,Ï,Ý,ð,¤,©,×,ÅŒ‰¾,Á,½,ñ,¾B
u,½,Á,½jA“ñ,Â-Ú,ì-],Ý,·,©,È,¢,Ü,µ,½BŽ„,Í‘,à-é,à,à,¤~V”k,É-ß,é,±,Æ,Í, ,è,Ü,¹,ñv
@,í,©,è,Ü,·,ËB“ñ,Â-Ú,ìŠè,¢Ž-,·,È,ñ,¾,Á,½,©B,»,¤A

@uŽC•^a,łÓŽu,đŽ,Â,±,Æv

”@”P—,Í•vfKfEfFfCf“É,æ,Á,ÄŽ©ª,Ì`ÓŽu,ðŽ,Â,±,Æ,ð<-,³,ê,½,ñ,¾E

@,±,ê,ºufKfEfFfCf“,íŒ¶,í•Œêv,Å,·B-{,³/4,Æ,í,,„©5fy[fW,,ç,¢,í~b,Å,·B,Å,àA,à,í,·,²,[,¢Žv‘z,ºž,ß,ç,ê,Å,¢,é,ÆŽv,¢,Ü,¹,ñ,„©B,³,Å,«,à

,É^ê,Â,Ìfçf“fg,ª, ,é,æ,¤,ÉŽv,¢,Ü, ·,Œ

@'jŽq'ŒNA—žq,É,à,Ä,æ,œ,¤,ÆŽv,Á,½,çA,±,ê,À,·,Ëu,·,×,Ä,Ì—«,ÍŽC•¤,Ì`ÓŽu,ðŽ,À,±,Æ,ð—],ñ,À,¢,év,±,¤,A Ší—{,À,·,¤B,Ü, A,È,

@'j—,¾,—,Å,È,ÄA‘å,«

@,±,˜b,ðŠÜ,þfA[fT[%o¤•Œê,ÍA12¢*I*,©,ç14¢*I*

¢ŠE, ¢Œ©, !, ÄŠy, µ, ¢, Ä, ·B, >, ê, ÄA, Ü, ½ŒäX, Ä, Ä, «, Ü, ·, ¢A, ¡f[fbfp, l'¼U, l'cæAfQf< f}f“l, ¢, Ä, Ä, , é‘O, Éf[fbfp, ÉL, Z, ñ, Ä, ¢, ½fPf< fgl, l, _
¢ŠE, àfA[fT[%o¤•Œê, É, l[,

@ŽŶ%oñ, ©, íAŽö<Æ, É‘ú, è, Ú, , ·, ^A, ±, ñ, È`b, àÙ, ÉG, êAD‰í, µ, Ä, ß, «, Ú, , ·, ßB—ðžj, Á, ÄA—È”, , ç, ñ, Å, , ·, æB

@,Å,ÍA¡“ú,Í,±,ê,Å,“,µ,Ü,¢

2002/2/18%oüe

$\tilde{Z}Q\{ \cdot D\%o^{\text{EE}}EE, \text{à}, \text{¤}, \mu U, \mu, 'm, \text{è}, \text{½}, \phi, A, \langle, \dot{I}$	$'-1/4, \delta fNfSfbfN, \cdot, \acute{e}, AExAfCf^{"f^{\wedge}[f]fbfg"} "XufAf\{f]f^ {"v, \dot{I}fy[fW, \acute{E}"] \dot{o}, \tilde{n}, \AA A - \{, \dot{I}ff[f^{\wedge}, \grave{E}, \dot{C}, ^aCE \circ, \dot{c}, \acute{e}, \ddot{U}, \cdot Bw^ {"\ddot{u}, \grave{a}\%o\AA"} \backslash, \AA, \cdot B$
$\dot{t}c^{\cdot R\tilde{Z}m^{\cdot CE\tilde{S}a^{\cdot g\langle C\acute{E}}$	$fKfEfFfCf^ {"\dot{I}CE\dot{Y}, \dot{I}b, \dot{I}A, \pm, \dot{I}\acute{E}^{\ddot{u}, \AA, \AA, \phi, \ddot{U}, \cdot B}$
$fA[fT\%o\text{¤}, \dot{I}\tilde{Z}c, \dot{c} \rightarrow$ cover	$fKfEfFfCf^ {"\dot{I}CE\dot{Y}, \dot{I}b, \dot{I}, \acute{e}, \dot{U}, ^1, \tilde{n}, ^aA, \pm, \dot{I} - \{, ^a fA[fT\%o\text{¤} \bullet CE\acute{e}, \dot{I}AA, \grave{a}\tilde{S}i - \{ "I, \grave{E}, \grave{a}, \dot{I}, ^3/4, AE\tilde{Z}v, \phi, \ddot{U}, \cdot B$

fg fb fv fy [fW, É–ß, é

@

ŽŶ, Ífy[fW, Ö
‘æ, Q%oñ@l—P, Í“oê

,±,ñ,È˜b, ö<Æ,Å,µ,

¢ŠEŽju[~][~]

‘æ, Q%eñ@l—p’aj

i‰o»[~] _

@—ðŽj, ^aŽn, Ü, é, É, ÍAl—p, ^aaJ, μ, È, [—], ê, Í, È, è, Ü, [!], ñB, C, Í, æ, o, Él—p, ^aaJ, μ, ^½, ©Bj, Å, ±, »i‰o», AE, ç, o, ±, AE, ÍiŽ[—], É, È, Á, Ä, ç, é, [—], ê, CA, ±, ll, ^{! , a}, ³, ê, ^½—Žž, Í‘å, <, È’íR, ^a, , è, Ü, μ, ^½B

@i‰o»[~] _, Å—L—^¼, ÈšwŽÒA’m, Á, Ä, ç, Ü, ·, ©B, », oAf_[fEfBf“, Å, ·, ÈBfCfMfŠfxSCŒR, Í“a—

È‘Dufr[fOf<†v, É”Ž•‘ŠwŽÒ, AE, μ, Äæ, èž, ŸA“i”^¼<..., ÍŠe’n, ð’², , μ, ^½BŠe’n, Í“®A•, ðŠiŽ@, ·, é, È, ©, Åi‰o»[~] _, ðŠm—§, μ, Ü, ·B

@—L—^¼, È, Í, ^afKf‰fpfSfX”“‡B—, ³, È“‡, ^a, ^½, ³, ñW, Ü, Á, Ä, ç, ÄA, ±, ±, É, μ, ©, ç, È, ç, AE, ç, o“®•, ^a, ^½, é, ñ, Å, ·, ^aAf_[fEfBf“, ^aŠiŽ@, μ, Ä, é, AE, , é, ±, AE, ÉC, Å, B, ^a, Å, Ä—x, Í“‡, És, , AE“—, Ží—p, Í‘¹, Å, à, , ^a, Í, μ, ÍŒ, ^a%fpfSfXf]fEfKf, AE, ç, oFjf, ^a, ç, é, Í, Å, ·, ^aA, ±, ê, à—x, Í“‡, És, , oI, !, ðŒ<, Ñ, Å, —, ÄAwŽí, ÍNŒ¹x, AE, ç, o—{, ðo”Å, μ, ^½, Í, “1859”N, Å, μ, ^½Bi‰o»[~] _, ð, AE, È, !, ^½, Í, Íf_[fEfBf“, ^a, Í, j, b, Å, Í, È, ç, Í, Å, ·, ^aA, ±, Í—{, ^aé‘afZf“fZ[fVf‡f“, ðS^a, <<N, ±, μ, ^½, ñ, Å, ·, ËB

@‰o^½, ^a—ê, ^¾, Á, ^½, ©, AE, ç, o, AEaf_[fEfBf“, ÍfCfMfŠfxXI, Å, ·, ÈBfCfMfŠfxXI, ðŠU, ß, Äf“[ffbfpl, Í, Ÿ, ñ, ÈfLfŠfxfg[~], ðM, j, Å, ç, éB @“¹, È, Í, ^aAf_f€ÆfCfu, ð, Å, ·, Å, ^½, È‘, ç, Ä, , Å, ÄAl—p, Í, Ÿ, ñ, È, », ÍŽq[~], ^¾, ÆM, j, Å, ç, ^½, i, —, Å, ·, æBŽ,, Ÿ, ^½, ç, É, , Ü, èMS[, oCŽ, ^a, Í, ©, ç, È, ç, Å, ·, —, ç, ÈBf_[fEfBf“Ž©g, ÍwŽí, ÍNŒ¹x, Å, Íl—p, È, Ä, í‘^½U, ç, Ä, ç, È, ç, Í, Å, ·, ^aAi %o»[~] _, ðlŠO, É, , Ä, Í, Ü, è, ÍAfqfg, Í‘cæ, ÍfTf<, Í‡ŠO, AE, ç, o, ±, AE, È, èA¹, ÍLq, ð”U”è, ·, é, ±, AE, È, èB

@M[~]Å, AE‰Èšw, Í‘Í—§A, AE, ç, o, ±, AE, ^¾, ÈBfqfg, Í_, ^a, Å, , Å, ^½, ñ, Å, Í, È, ^¾, È—, É, è, Ü, ·BfAffŠfJ, Å, ÍAŒö—§ŠwZ, Åi‰o»[~] _, ð³, !, é, È”^½Í—, él, ^a, ç, ÄAi‰o»[~] _, ð³, !, é, È, çA“—Žž, È¹, Íl—p‘n‘çà, à³, !, é, ×, <<, ^¾, AEÙ”, ^aN, ±, ³, ê, ^½, è, μ, Ü, ·B

@j, ©, ç20”N, à‘O, É, È, è, Ü, ·, ^aA, ZJ, ^¾, Á, ^½Ž, , Íf‰ofWfI, Í[—é•ú”—, ð•, ç, Ä, ç, ^½BŽöŒ±•×[~], o“Ô“g, ^¾, Á, ^½BffBfXfNfWf‡fbfL, ^afAffŠfJ, Í, Ç, ±, ©, Í”[™], ÅŠi—, È‰o»Í, ^a@, », Í‰o»Í, AE, ç, o, Í, Í°—³, Í“«Ó, Í‰o»Í, ÅA, », é, ^¾, —, È, ç, Ç, o, AE, ç, o, ±, AE, Í, È, ç, ñ, ^¾, ^aA, », Íl°—³, Í“«Ó, Í, ·, ®‰o, Ífqfg, Í“«Ó, àŽc, Å, Ä, ç, ^½A, AE, ç, o, ñ, ^¾, ÈB, , è, ðŒ»Íl—p, Í“[~], ^aE, fm, ^aB @, , Í‰o»Í, AE, ç, o, Í, Í°—³, Í“«Ó, Í‰o»Í, ÅA, », é, ^¾, —, È, ç, Ç, o, AE, ç, o, ±, AE, Í, È, ç, ñ, ^¾, ^aA, », Íl°—³, Í“«Ó, Í, ·, ®‰o, Ífqfg, Í“«Ó, àŽc, Å, Ä, ç, ^½A, AE, ç, o, ñ, ^¾, ÈB, , è, ðŒ»Íl—p, Í“[~], ^aE, fm, ^aB @, ±, èA—{, [—], ^¾, Á, ^½, ç, ·, ², ç, Ä, ^a, Ü, Å, Íi‰o»[~], Ílèa, ^aç, é, ©, ç, ÈB, ±, è, ÍAfrfbfOfjf...[fX, ^¾, AEŽv, Å, ÄAŽ, , Í—, “ú, ÍlV•, ð[÷], ©, ç[÷], Ü, Å, “C, ñ, ^¾, —, ÇA, Ç, ±, È, à, », ñ, ÈLŽ—, ^a, È, çB, ^a, Å, Ä, AE‘O, Í”Œ©, ©, à, μ, è, È, ç, ©, çA, », ÍŒäA, ç, è, ç, è—{, È, Ç”Ó[, ^½, Í, Å, ·, ^aA, ä, Å, Í, è[—], ç, í, —B

@, , Å, AEäI, ^¾, È, AEŽv, ç, Ä, Ä, [—], Å‰o^½”N, ©, μ, ÄAfnf, AEŽv, ç, , ^½, Å, ^½B

@, , Í”Ô“gAfLfŠfxfg[~]ŠOŒW^cÍ, Íñ[~]Y, ^¾, Á, ^½, Í, ÈBufmf, fbNfmfbNv, AE, ç, o“Ô“g—^½, àu, ^½, ^½, —, æA, ³, ç, ÍŠJ, ©, ê, ñv, Í, ±, AE, ^¾, Á, ^½, AEŽv, o, æB, c, i, aAŽZx¹, Íb, È, ñ, ©, μ, Ä, ^½B, », Í‰o»Í, Íljfj...[fX, Í, ç, i, ä, èfKfZflf[~], ^¾, Á, ^½, ñ, ^¾, ÈB

@, c, i, [~]ÓŽ[—], μ, Å‰oR, ð, Å, ç, ^½, AE, ÈŽv, í, È, ç, [—], ÇA[°]—³, AEfqfg, [~]Žž[~]a, È“jY, μ, Å, ç, è, ÍA, È, —pŠw, ÍŒ”Y, ÍŠwà, Í”U”è, Å, «, é, ©, ç, ÈB

@fefŒfr, ãf‰ofWfI, ÅŒ^¾, Á, Ä, ç, ^½, ©, ç, AE, ç, Ä, ÄAŠE’P, ÍM, j, Å, í, ç, [—], Ü, ^{! , ñ}, ÈB

@j, Å, à, », ñ, È, ±, AE, ^a, , é, , ç, ç, ^¾, ©, çA100”N, ÈäÍ, Íf_[fEfBf“, ^afLfŠfxfg[~], Í—{, è, ÅA, Ç, è, , ç, ç, [~]

@, ³, ÅAi‰o»[~] _, ðØ—^¾, , é, È, ÍAØ[~], ^aŒ©, Å, ©, è, È, çB‰o»Í, Å, ·BfTf<, AEfqfg, Í, , ç, ^¾, ð, Å, È, ®J[~], Í‰o»Í, ^aŒ©, Å, ©, è, ÈB

fqfg, AE, Í

@f_[fEfBf“, ÍŽž[~]a, ©, çŒ”Y, Ü, ÅA^½, , Íl—pŠwŽÒ, ^a‰o»Íl—p, Í”Œ@, ð, μ, Ä, ç, Ü, ·B, AE, ±

□l—P J“o□ê

@'¼—§“ñ‘«às,ÍA“ñ,A,ÌŒ‰œÊ,ðfqfg,É,à,½,ç,µ,Ü,µ,½B,D,Æ,Â,ÍAŽè,“ž©—R,É,È,Á,½,±,ÆB“ñ,Â,ÍA”],“
,ÆBfqfg,Í‘¼,Í“®•”,Æ”áŠr,µ,Á`ld,É`í·,é”],Í”ä—|,“æ,è,í,“å,«,çB
@,»,í‘å,«,È”],ðA’¼—§,·,é,±,Æ,É,æ,Á,ÁŽx,|,é,±,Æ,“å,«,é,æ,ç,É,È,è,Ü,·B,½,Æ,|,ÎA,±,Ìf{[f<fyf“,“wœ,Æ,µ,Äi...•½,ÉŽ,ÂjA,±,Ìæ|,É,±,
,Ì”ÁÁ,µ,ð,Á,Â,“,æ,ç,Æ,µ,À,àA,Ü, Af{f“fh,ðŽg,Á,À,à,·,®,—Ž,ç,À,µ,Ü,ç,À,µ,å,çB,À,à,±,ç,µ,Äif{[f<fyf“,ð,’¼,ÉŽ,Âj—§,Ä,ê,ÎA,Ù,çA
‰½,àŽg,í,È,·,À,à,±,Ì”ÁÁ,µ,“æ,è,Ü,·,Èi,»,Á,Ææ,·,À,Ý,éjB,ÆB“—,J—<ü,À,·B”],“å,«,

@, @, ½, ¾A¹¼—§“ñ‘«•às, Æ, ø, ☐, Í, Ì, Á, ©, È, è, -³—, ª, , éZp·, Ý, ½, ø, ÅAfqfg“Æ‘Á, Í, ê, J, à, ÿ, Ý, Ú, µ, ½E

@,%2,AE,!_IAoŽY,ìŽž,Éfqfg,Ù,C<éÉ,δ,AE,à,È,¤“®¤,Í,¢,È,¢,»,¤,Å,·B’¼—§,μ,Ä,¢,é,©,ç”D•w,³,ñ,Ì,¤•,©,çÔ,ç,á,ñ,^a—Ž,ç,È,¢,¤,æ,¤,ÉAŽq¤{,loŒû,^a,à,Ì,·,²,ŒÅ,

@, ,ÆA~'É,àfqfg,³/₄,⁻,Ì•a<C,ç,μ,¢,Å,·B

@”], a‘å, «,

,đŽhŒf,·,éA,·,é,A,Æ•,žG,Èi<Æ,à,å,«,é,æ,¤,È,éA,åA”],,à,å,ÆŽhŒf,³,ê,éB,±,ñ,È,Ó,¤,É·ŠŒÝi—p,^aŽè,Æ”],,ì, ,¢ ,¾,É¶,Ü,ê,Ü,μ,½B,·,×,À,Ì,à,Æ,ÍA’¼—§“ñ‘¤asB

@,Ç,ñ,È»»Í,ºŒ©,Â,©,ê,Îfqfg,©A,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,µ,½,ºA'¼—§“ñ‘«•às,Ì»»Í,¾,Á,½,çfqfg,È,Í,Å,·B“ºSWœA‘å‘ÙœAœ”ÓA,±,ñ,È•”•º,ºŒ©,Â,©,ê,Î‰œð,é,æ,¤,Å,·B

@,Æ,±,‰,ÅÄAFJf“kFk‘[A,,‰,í,½-§“‰“‰“as,Å,·,©B,»,μ,½,zqfqg,Å,·,©B,J,á, fyf“fMf“,ÍH“‰,|,ÍŒ¾,φ,U,·,‰,©,ç,A,Y,É,³,‰zC®ª,Ál,|,Á,²,ç,‰B

%o»Îl—P,I”

@,³,ÀAf_[fEfBf“,ÌZž‘á`ÈŒäAfqfg,Ì‘cæ,Ì‰o»Ì,Ì,¢,ë,¢,ë”

@fqfg,Í,Ì,ß,Á’ná,É“oê,µ,½,Ì,aÀ,ç,Ü,©,ç400–œ”N*OB,à,Á,Æ,æ@E‘Zn“I,È,±,Ì’iSK,Ìfqfg,ðAu‰Zl,È,Í,ç,ë,ç,ëZí
—P,ª, ,Á,ÄufAfEfXfg%effsfefNfXv,ÆŒÄ,Î,ê,é,à,Ì,ª,à,Á,Æ,à—L⁻¹/₄,Å,·B,±,êÈŠO,È,à,ê,Ì⁻¹/₄O,ð—^,!,ç,ê,Ä,ç,ë‰Zl,à,ç,Ü,·B•ÈZí,ª,ç
,ÄA“—Žz,É‰½Zl—P,©,¶JY,µ,½ZzŠú,ª, ,Á,½,æ,¤,Å,·B,C,ê,ª,í,ê,í,ê,Ì¹/₄Ú,Ì’cæ,©,Ía’èa,Í, ,è,Ü,!,ñB

@ufAfEfXfgf%offsfefNfXv—P,aA,1/2,,³,ñ”

L^{-1/4},ÈéŠ,^aAf^f“fUfjfA,luFIf<fhf”f@fC<¬Jv,Å,·B“ŒfAfſfŠfJ,łf,fUf“frſfN,©,çfGf fIſfsfA,É,©,¬,ÅA“ŒfAfſfŠfJ’å‘na‘N,ÆŒÄ,ł,é,n<... ,ł,š,,ê–Ú,^a, ,è,Ü,·BfIf<fhf”f@fC<¬J,à,±,±,É, ,Å,À‰½•S–œ”N,à‘O,ł’n‘w,^aIo,μ,Å,ç,À‰»ł”

@%É,É,±,±,É-Ú,δt-,̄,ÁA%Él,δ”Œ@,,µ,,½l,a^fcFxEfS[l|B1959°N,Í,±,Æ,Á,·»,ÍŒÁ,Á,±,Í←,J,Á%œSÚ‘I,E

,ñ,É,Ó,¤,ÉŒ³/4,¤,ÆA,¢,Æ,àŠŒ'P,É”Œ@,À,«,½,Ý,½,¢,À,·,ªAfŠ[fL[,ÍÀ‰œ,Í

,½,ñ,Å,·,æBæ \langle ìŽÒ,Æ,¢,¤,Ì,Í,·,²,¢,ËB

@f<`fCfXEfŠ[fL[,Í1972”N,É–S,,È,Á,Ä,¢,Ü,·,^A‘§Zq,ÌfŠf fff[hEfŠ[fL[,Æ,¢,¤,^AŒÝ,à”Œ@,ð‘±,_,Ä‰œÊ,ð,_,Ä,¢,Ü,·B,Ç,¤A,Ý,È,³,ñ,àfAf t fŠfJ,Ös,Á,À30”N,,ç,¢‰œä–,µ,ÄŒŒŠ,ðŒ@,è‘±,_,½,çA,D,å,Á,Æ,µ,Ä‰œæŠú”I,È”

@%oZl,a"

'1v, Å, ·B40–œ”N,

@Œ'l,Í“ñ,ÂŠo,|,Ä,

@fWfffŒ'1,ł”Œ©ŽÒ,ÍAfff...f{fA,Æ,¢,¤fIf‰of“f_1,Å,·B1891”N,ł,±,Æ,Å,·B,©,ê,Í,à,Á,Æ,à‘,¢ŽzŠÚ,É‰co»ł—þ,ð,ð—¡,í,¢,Ü,·B

@ffff...f{fA,ÍAf_[fEfBf“,Ì–{,ÉŽhŒf,³,êAfqfg,AEfTf<,ðŒ<,Ô‰o»Ì,Ì

,½,ñ,Å,·,ºA,»,Ì'nÊ,ð,È,º,¤,Á,ÄAfIf%of“f_ŒR,ÌŒR^ã,ÉŽuŠè,µ,Ü,·B23Î,ÌŽž,Å,µ,½

@ŒR^ä,É,È,Á,½,Ì,ÍfCf“fhflfVfA,Å‰o»Î,ð

%cf“f_„,IÄ—”n,ÅAAÆRI,É,È,È,ÎfCf“fhflfVfA,És,—,%v,n,%v,ÉB,%v,%vAfCf“fhflfVfA,É‰o»Í,„,É,È,n,ÄÛØ,

%o½,à,È,¢B,½,¾Afqfg,Ì'cæ,Í'M,¢'n`æ,ÉZ,ñ,Å,¢,½,É`á,¢,È,¢,ÆŽv,Á,½,¾,_,Å,·BfIj

%of“f_1,a_s,−,é”M,¢S,afCf“fhflfVfA,¾,Á,½A,½,¾,»,ê,¾,−,ì—R,Å,·B

l—p, l“o□ê

@ŽÀ,É,¢,¢,©,°,ñ,AE,¢,|,ÎA,¢,¢,©,°,ñ,¾,ËB

@,AE,±,ë,^AfCf“fhflfVfA,És,Á,Ä4”N—ÚA%»Î,ð”Œ©,μ,Ä,μ,Ü,¤,Ì,Å,·BéŠ,àŠo,|,Ä,“,±,¤BfWfff“‡,ÌfgfŠfjl|f<,AE,¢,¤Š,Å,·Bf\fl,AE,¢,¤,ì,ì“yŽè,Ä““œ,ì“œ”,AEA‘ä‘Úœ,ðŒ©,Ä,“,½B“œ,ÍŠÛ,Ý,“,È,

@æ,Ü,C“b,μ,½‰Zl,ì‰»Î,“Œ@,“,ê,éêj,©^È‘O,ì,±,AE,ÅA,©,ê,ì”

@ŽÀ,ÍA““œ,AE‘ä‘Úœ,ì”Œ©,“,ê,½êŠ,“,„,¶,Å,Í,È,A15f[fgf<—f,ê,Ä,¢,½,ÌB,¾,©,çA‘ä‘Úœ,Í, ,AE,ìŽž‘ä,ìf,fm,“•,êž,ñ,¾,AE,©A,¢,ë,ë,ë,„,Å,ÄAŒ<ç,©,ê,ì”

@ff...f{fA,ÍAS®‘S,É•Ìü,Èl,É,È,Á,Ä,μ,Ü,Á,ÄA,â,Ä,ÍŽŒ•a,ì”Œ©,μ,½‰»Î,ð<àŒÉ,É“ü,ê,ÄA,“,ç,ÉŽŒ‘ì,ì”‰»,É,μ,Ü,¢ž,ñ,Å’N,É,àŒ©,“,È,

@, ,AE,Ä—kŒ1,í20¢I,É,È,Á,Ä”

@“ŒAÖ,©,ç,½,“,ñ,ì“®•,ìœ,AE,AE,à,ÉŒ©,Ä,©,ë,Ü,μ,½Bœ,É”R,â,μ,½

@,“,ê,ÆAŒ©,Ä,©,Ä,“,kŒ1,ì‰»Î,ì”

K,“,Ä,ÄA’‡ŠO,ì“÷,ðH,×,½,ç,μ,¢B,±,ë,ð”Û‘è,·,éŠwŽO,à,¢,ÄAQ|,ìŽž,¾,¬H,×,½,AE,©AŽöp“I,ÈÓ—ì,“,ë,AE,©A,¢,ë,ë,ÈÓŒ©,“o,“,ê,Ä,¢,Ü,·,“A,ç,ë,à,“,ä,É,·,¬,È,¢BHl,ì•—K,ð”Û‘è,·,éŒ¤†ŽO,É,ÍAŽŒ•a,½,ì,ì“cæ,É‰~—¼,ð”...,“,½,

@,ì,È,Ý,ÉAŠ®‘S,È—kŒ1,ì“aŠwœ,Í“x“nŽY“åíŽžA“ú—{ŒR,“,kž,ðè—ì,μ,½Žž,ì,ç,“,Ü,μ,½Bö,μ,©,çŒ©,ÄA’N,©,“Z,ì,ò,μ,Ä,ç,±,©,É‰B,μ,Ä,¢,é,ñ,¾,AEŽv,¤BŒ©,Ä,©,Ä,½,ç“afXfN[fv,É,È,ë,Ü,·,æB

@ŽY,É,Ä,Ä,“,é,ì,“,ŒlB—n20—œ”N‘O,Å,·BflfA f“ffff,f^|f|,“—L—¼B,±,ê,í,à,¤”,ì“å,“,³,í,í,é,í,ê,æ,ë,à,“å,“,ç,Ü,C,Å,·B,±,ìŽí—p,ÍŒ‘ä—¤,ìŽš,éŠ,Ä”Œ@,“,ê,Ü,·B,©,ê,ç,ÍA,©,È,è,“x,È,—¶‰»,ðZ,Ä,Ä,¢,½,ç,μ,¢B,½,AE,|,ÍAŽè““,ðÜ,ëö,ñ,¾‰»Î,“,½,È,í,ê,Ä,¢,½Ø‘,Å,·B

@fCf‰cfN—k•”,Å”

““÷,¾,ÅŠIŽ@,μ,½,çAfqf,,fVf“fX,âf,,fOf< f}fMfN,ì‰œÔ•²,“å—Ê,É”

@,©,ê,“Z,ì,¾,AE,“,ÉA•êe,©—öl,©—Fl,©,í,©,ç,È,¢,“,çA—ì‰œÔ,ð,¢,Ä,Í,¢“E,ñ,Å,“,ÄA,“,ì—SŠ|,É,©,Ö,“,½,ñ,Å,·,æB

@,ì,Å,à,“,±,É,Í5ŒŽ,©,ç6ŒŽ,É,©,“,ÄAu,ìa^ê—È,É—ì,ìfjf,,fVf“fX,“ç,

@ŽŒä,ìŒŠ,É‘î,·,é‘z,¢,AE,©A‰œÔ,ðŒ©,Ä”ü,μ,¢,AEŽv,¤A‘å,“,É,¢,Ä,½,çŒlpŠ‘Šo,“,Å,½,AE,¢,¤,±,AE,Å,·B

@,Ü,½Aœ“V“I,É•DŽèA•D—Ú,ì,Å,Ö,ê,½40‘ä,j<,ì‰»Î,à, ,ë,Ü,μ,½B40l,AE,¢,|,ì“—Zž,È,ç‘Š“—,È”N,ì,í,“,Å,·BáŠQ,ðZ,ì,È,“,ç,àA’‡ŠO,ì•,“,ð“¾,È,“,ç,“VŽö,ð‘S,¤,μ,½,í,“,Å,·B@,““IV—ç,ð,“,±,È,¤,AE,©A‰œÎ,ì’Ö,AE,©A‰œ½,©,ì—ð—Ú,ðZ,Ä,Ä,¢,½,ì,Å,μ,å,¤B’Pf,ÉaŠQŽO,ðØ,ëŽl,Ä,éŽD‰œi,Å,Í,È,©,Ä,½,AE,¢,¤,±,AE,“,í,©,ë,Ü,·B

@,“,ìŒä,É,Å,Ä,“,é,ì,“A,¢,¤,æ,í,ê,í,ê,ì“½Ü,ì“cæ,Å,·BVI,AE,¢,¤,Ü,·B,“,ì“å•\,AE,μ,ÄfNff}fjf“l,AEA““li,ç,å,¤,ç,¤,ñ,ðŠo,|,Å,“,@,ì,©,ç4—œ”N,“,ç,“O,É“oê,μ,Ü,·B”âÖ,í,“,½,

@fXfyfCf“,ìfAf< f^f~f‰œ“ŒŠAftf‰œ“fX,ìf‰œfXfR|“ŒŠ,ìC‰œ,Í—L—¼B1—œ5ç”N,

ð“ŒŠ’AFÈA,ç,ê,ð,AE,Ä,Ä,à,·,ì,ç,μ,¢B

@”n,âA<,ìSG,““½,ç,Ä,μ,ab,È,“,±,ñ,È,ì,ð“ç,ç,½,ì,“ŒŠ,ì,à,ì,“,²,‰œ,ì•ù,ìA”‡,Å,Ä,¢,©,È,“,ê,í,ç,ê,È,¢,æ,¤,ÈŠ,ì“V“ä,AE,©A,AE,É,©,“•,“,É,‰œ½,©@,““I,Èf,fm,¾,AE,à,¢,í,ê,Ü,·,““AŒ<ç,í,©,ë,Ü,“,ì,ñB

@Žu—ŒfXfyfCf““fpf< fPEfGfXfp[fjff,É,ÍfAf< f^f~f‰œ“ŒŠ•C‰œ,AE““—,ç,“fm,“,Å,

@Œ¾,ç—Y,ê,Ä,¢,Ü,μ,½B““ì,Å,·,“A‰œŽl,ìŽž‘ä,©,çìŠí,“,Å,Ü,·B‘Å”ìŠí,Å,·BVI,ìŽž‘äA1—œ5ç”N,

’lA<ŒIAVI,Æ,È,é,É],Á,Ä,I,ÈÍŠí,É,È,Á,Ä,«,Ü,·B

@‰œŽlACŒ’lA<ŒIAVI,Æl—p,Íi‰œ»,μ,Ä,ç,é,ñ,Å,·,^A^ê,Å,¾,^Ó,μ,Ä,·,«,½,ç,ì,ÍA,½,Æ,|,ÍflfAf“fff<f^|f\l,^fNff}fjf^f“l,Éi‰œ»,μ,½,©,Ç,ç,©,ÍA•s—¾,Å,·B
@“-,J’n‘w,©,ç<Œl,ÆVI,^Œ©,Å,©,éŽžŠú,à, ,é,ñ,¾,ÈB
@“-,J,æ,ç,ÉA‰œŽl,Æ<Œl,ÌŠÖŒWAŒ’l,Æ<Œl,ÌŠÖŒW,à,Ü,¾A•s—¾,Å,·B—{,É,æ,Á,Ä‘,ç,Ä, ,é,±,Æ,^á,ç,ì,Å,·B
@,Ü,¾,Ü,¾A,í,ê,í,ê,Ì’¼Ü,Ì’cæ,É,Ä,ÍŒç,ç,“rã,Å,·B

yŽQl}·zufqfg,Í,C,±,©,ç,«,½,ì,©v‰œÍ‡M~aA’©“úV··ŽDA1991”N

i2002/2/19‰œiej

—’C·LF2002”N2ŒŽ19“ú

×—E’†,Ìf~fgfRf“fhfŠfA,Ì,c,m,` ,δ•äÍ,·,é,Æ“Á’è,Ìl•,Ì•êŒn,δ,³,©,Ì,Ú,é,±,Æ,^,Å,«,éB,±,Ì•ù—@,É,æ,é,ÆAfI fAf“fff<f^|f\l,Í,í,ê,í,êŒ»çl
—p,Ì’cæ,Å,Í,È,ç,Æ,ç,çBiufCf”,ÌŽµl,Ì—°,½,çvfu‰œfCf Af“EfTfCfNfXAf\fj\l}fKfWf“fYA2001j

ŽQl}·D‰œíEEE,à,ç,µÜ,µ,’m,è,½,ç,Æ,«,í

‘-¾,δfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^|f\fbfg“XufAf}f]f“v,Ìfy|fW,É”ò,ñ,ÅA—{,Ìff|f^,È,C,^Œ©,ç,ê,Ü,·Bw“ù,à‰œÂ”\,Å,·B

çŠE,Ì—ðŽjq1rl—p,Ì’a¶ ‰œíœ¶ŒÉ	i‰œ»—_,ÆfTf<Šw,ÌŒœ,Ì’ç,Æi‰œ»,δ‘å’_,É—q,µ,½AŽÀ,Éf†fj fN,È—ðŽj,Ì—{,Å,·B
---	---

fCf”,ÌŽµl,Ì—°,½,ç cover	•êŒn,Ì,Ý,É“,í,éf~fgfRf“fhfŠfA,Ì,c,m,` ,Ìl•Ù,©,çAl—p,Ì’cæ,ÆAi ‰œ»,δ’T,éBÅV,Ìj•Šw,©,ç,ÌfAfvf f,ÍV‘N,Å,µ,½B
------------------------------------	---

‘æ,Q‰œñ@l—p’a¶@,”,í,è

[fgfbfvfy|fW,É—ß,é](#)

[·O,Ìfy|fW,Ö
‘æ,P‰œñ@fKfEfFfCf“](#)

[ŽY,Ìfy|fW,Ö
‘æ,R‰œñ@•—¾,Ì’a¶](#)

,±,ñ,È~b, , ö<Æ,Å,µ,

•¶-¾,Ì`a□¶

‘æ,R%oñ@•¶-¾,Ì`a¶@,‘,í,è

fgfbfvfy|fW,É-ß,é

,±,ñ,È~b, ö<Æ,Å,μ,

‘O,Ìfy|fW,Ö
‘æ,Q%oñ@l- þ,l“oê

ŽY,Ìfy|fW,Ö
‘æ4%oñ@fƒ\flf^f~fA•¶-¾

$$f \sqcap f \backslash f | f \wedge f \sim f \Delta \bullet \P =^3 / 4$$

¢ E j u<`~/

čŠEŽju<~^
‘æ,S%oñ@ff\f\f^f~fA•J-³/

$f \vee f \dots f [f < l]$

@¢ŠE,ÅÅ‰o,ÉЈ,Ü,ê,½•Ј-¾,³ff\f\|f^f~f~fA•Ј-¾,Å,·F
@**I**E³“O3500“N,

@,±,Ìff\f\|f^f~fA'n•û,Ìl‰o°A‰oÍŒû•t<ß,É,Í,¶,ß,Ä,Ì•¶-¾,ª,Å,«,Ü,·B

@•¶-¾,đ,Â,è,„,°,½,‡,ÍfVf...f[f~~↳~~lB-“°Œn“•s-¾,Å,·BŽc,³,ê,½’¤,È,Ç,đŒ©,é,ÆA-Ú,ª,,è,„,è,Æ‘å,«,
,,²,Ð,°,“Á’¥“I,Å,·,ËB

fVf...f[f<1—
§‘œ

@ffflf^f~f~fA,ÉA‰%,É•J-¾,ºJ,Ù,ê,½,Í,ÍA”_æJZY«,ºñí,É,,©,Á,½,©,ç,ç,µ,¢B
@,Ü,,A”ž,Æ-r,ÍŒ’ŽY’n,¾,Á,½B,,µ,ÄA,±,ł”ž,łZúŠn—È,ºñí,É,,©,Á,½B1—±,ł”ž,ð”d,¢
,ÄA20”{,©,ç80”{,łZúŠn,º,Á,½,Æ,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·B
@,±,ê,ºA,C,ł,ç,¢,·,²,¢,©,Æ,¢,¤,ÆA19¢I,łf^|ffbfP,Å”ž,łZúŠn,Í”dží—
Ê,ł5A6”{,
@,¾,©,çAŒ»‘ä,Æ“-,J,©,»,ê`Èä,łZúŠn,º,Á,½,Æ,¢,¤,í,“,¾B,½,
,Éžc,é•J-¾,ðJ,Ýo,µ,½,ł,Á,µ,å,¤B
@,ç,È,Ý,ÉA“ú—{,ł`Ä,Í,C,¤,©,Æ,¢,¤,ÆA]ŒŒžž“ä,ł30,©,ç40”{A,ł110”{,©,ç144”{,Å,·B

@fVf...f|f\l,Íff\f\f^~f~fA'~n'û,É,½,,³,ñ,Í“sŽs‘‰oÆ,ð’z,«,Ü,μ,½BfEf<AfEf<fNAf‰cfKfVf...,È,Ç,Æ,¢,¤“sŽs,ª—L—¼,Å,·B,μ,©,μA“sŽs‘‰oÆ,Ç,¤,μ,íR^,^Œf,μ,A“^ê‘‰oÆ,^Å,«,é,±,Æ,Í, ,è,Ü,¹,ñ,Å,μ,½BŽj,ÍA_“a,ð’†S,É_ŒŽj,ª,“,±,È,í,ê,Ä,¢,½,ç,μ,¢B

fVf...f[f<1,I•J%o»

@,©,ê,ç,ÌŽc,μ,½¶%o,ÍŒä¢,É‘å,«,È‰œ<j,ð—^,|,Ä,¢,é,©,ç,±,ê,Í,μ,Á,®,èŠo,|,Ä,“,«,Ü,μ,å,¤B

@,Ü,,ÍA—ii,±,æ,ÝjB¢ŠE‰,ì—iBŒŽ,ì—ž,íŒ‡,–,ÅA”NŒŽ,ð,Í,©,é³/‰A—i,Å,·B

@”Žš,Í60i-@,Å,μ,½B,±,ê,ÍAŒ»Ý,à, ,é•ª-ì,Å“úí“I,ÉŽg,í,ê,é,ËE

$$f \square f \backslash f | f \wedge f, \bot f \wedge \bot \vdash \bot$$

%<½,Å,·,©B,>,¤AŽžŠO,Å,·B^êŽžŠO,Í,È,º,©60•ªB,È,º,©,Æ,¢,¤,ÆfVf.
f[f<,È,ÌB^½,,Ì¬ŠwÌ,ªAŽžŠO,ÌŒvŽZ,Å,Â,Ü,Ã,
@,È,ºAfVf...f[f<,^60i-@,ðl-p,µ,½,©,Í,Í,Å,«,è»>,Å,Ä,¢,Ü,¹,ñB

@“yŠí,ÍÈ•¶“yŠí,Æ,¢,¤,Ì,ª,Å,Ü,·B“yŠí,ÉÔ,¢-Í-l,ª•,©,ê,Ä,¢,Ü,·,Ë

@•ЈŽš,ÍA,,³,ÑŒ•ЈŽš,ð”-³,μ,Ü,μ,%BŽ†,Í,Ü,³/4,È,¢Žž`áA”S“y”Â,É“,ðØ,Á,¹/₂,à,Ì,Å,,³,ÑŒ,ÉŽš,ð,Ýž,ñ,Å,¢,¹/₂,Ü,μ,%B×,©,¢•ЈŽš,Å,¹/₂,
,Í•ЈŽš,ðŽg,Á,Ä,¢,Ü,μ,%Bj,ÍfAf<ftf@fxfbfg,Ì-ðŠ,,ð‰È,¹/₂,μ,¹/₂,í,“³/4B

@fVf...f[f<ł,łŽż‘ä,ç“ñç”N,à,·,Ä,Å,·,^aAfAfPfflfX’©fyf<fvFvA,Ä,ç,ç,·,“ä’ë‘,δ,Å,·,ë,Ü,·B,±,ł‘,à,
·,ÄAf_fŒfCfIfX’å‰oç,Ä,ç,ç,‰oç,^aAŽç®·,łŒ÷N,δ,ñ,³/4fxfqfXfgfDl[f“”ë•J,Ä,ç,ç,ł,đŽç,μ,Ü,μ,½B,±
·,ë,ÍŽO,Å,łŒ³/4Eë,δ,·,³,ÑŒ•JŽš,Å,ñ,³/4,à,ł,ÅA,
‰oç“ç,μ,½,ł,Í,Íf[fŠf“f\“ç,Ä,ç,ç,fCfMfŠfXIBŠo,|,Å,·,“,Ü,μ,å,çB
@,±,ł”ë•J,Í’nä100f[fgf<^Eä,łä•ç,É,Ü,ë,Ä,ç,ÄAf[fŠf“f\“ç,Í,Å,ç,ç,ffbfNfNf‰ofCf~f“fO,Ý,½,ç,ë,±
,Ä,ç,δ,μ,ÅA,Ü,·½,·,ë,Å”ë•J,đ-ÍŽE,μ,½,ñ,Å,·B19ç·I,ł,±,Ä,Å,·B

@,,ê,©,çfnf“fRAÓÍ,Å,·A,±,ê,àfVf...f[f<1,^A‰oB‰o~“^ÓÍ,Æ,¢,¤,Ì,^,Á,ÄAŠG,^,ñ,Å, ,éB,±,ê,ð”S“y,Ìä,ðfRffRf,Æ“] ,^,·,Æ^,¢,šG,^,•,©,Ñä,^,é,í,^,Å, ·B‰o~“^ÓÍ,Í†S,É,Ð,à,ð’È,μ,ÄŽñ,ÉŒœ,^,é,æ,¤,É,È,Á,Ä,¢,½B,±,ê,ðg,É,Â,^,Ä,¢ ,é,Ì,^,¢’ñÈ,ÌÛ^,Ý,¾,Á,½,ç,μ,¢,Å, ·B

@fVf...f[f\l,\l•\%o»A•é,ç,\mu,\Í,\c,\ë,\ø,\È“à,\â•Œê,\ÉA‘å,«,\È%oe\ç,\ð, ,½,|,\Ä,\ø,\Ü,\·]

@,½,Æ,|,ÎA×Œ–ñ¹‘,É,ÍfVf…f[f‘,Ì‰oe<„,ª,©,È,è, ,è,Ü,·

@<Œ-ñ¹‘,ìÅ‰o,Ì˜bA_,^çŠE,ÆlŠÔ,ð‘n‘ç,·,é~b,^, ,è,Ü,·

@_,^uŒð, ,êv,Æ,¢,Á,ÄŒð,^a,Å,«,éB,±,ê,^aê“ú–ÚB“ñ“úAŽO“ú,Æ,¢,ë,¢,ë‘¢,Á,ÄA~Z“ú–Ú,ÉlŠÔ,ð‘¢,Á,ÄAŽµ“ú–Ú,É,“x,Ý,µ,Ü,·B,±,ê,ÍAfVf...f[f_<,IŽµ–j,Ì‰œ¢,B

@,»,ê,©,çfAf_f€,ÆfCf”,ÍbE

@_, ``D, ©, ç, Ä,

—‡,‡,Ü,Ü,‡Zp,‡,»‡,‡’p,‡,‡,©,µ,‡,‡E,‡‡Zv,‡,‡,‡A“‡,‡,‡

@,³,ÄA_,Í“ñl,É^ê,Â,Ì–ñ‘©,ð,³,¹,é,ñ,³/4BfGfff“,Ì‰o€

ñ, ©, Å, ·, B, Æ, ±, œ, ^aA, È, °, ©ŽÖ, ^a, Å, Ä,

,ñ,È,É,„,¢,µ,„,Á,Ù,¹BH,×,È,Í,êA,A

,É,àŚ©,ß,ÄAŒ<“ñl,Æ,àH,×,Ä,μ,Ü,Á,½B,,é,ÆA{},É,mŒb,^a,Â,¢,Ä,μ,Ü,Á,Ä,©,ê,ç,ÍÐ

$-t, I, \tilde{I}^{-a}, \delta, A,$

“*Å,ÍA’n,É,Í,¢,Â,Î,Á,ÄŒµ,µ,¢J“*

%œ, ª, ,é, U, ·BSy‰€ÍI, ·, ®—×, ¾, ,ê, Ç, », ±, ISy‰€ÍA, I, E, ¢A, », ê, ¢fGfff“, I“ŒB, », ☐Zv, A, AŒ©, é, Æ, ±, l‰of
‰œ, Ü, ½^ê’i, Æ[, ¢, æB

$$f \sqcap f \backslash f | f \wedge f \cdot f \wedge \bullet \vdash \bot$$

,¤“y’n,ð,þ,®,Á,Äí^,ðŒJ,è•Ô,μ,Ä,¢,é,ñ,Å,·B,C,¤,à,+,ÌfOEfGfffBf“,^Gff“Ì‰€Ìf,f ff<,ç,μ,¢B

@~b,^aŒæ,É,È,è,Ù,µ,^½,^aA<Œ–ñ¹‘,ð,Â

,¤I,½,·,Å,·B,©,ê,ç,Í‘O10¢I,ÉŽ©•ª,½,·,Ì‘%oÆ,ðŒsÝ,·,é,ñ,Å,·,ªA,·,ê,È‘O,Í““®,²,Æ,É•ª,©,ê,Ä-q’{,È,Ç,δ,μ,È,ª,cffff\fl f^f~fA’n•û,©,çfGfWfvfg,É,©,¬,Ä•ú~QJŠ,δ,μ,Ä,ç,½B-L,©,ÈfVf...f|f<,Ì‘y’n,ÉZ,Ý,½,ç,¬,ê,ÇA,»,±,É“ü,èž,P,¾,¬,Ì‘-Í,ª,È,©,Á,½,ñ,¾,ë,¤B,È,ºAŽ©•ª,½,·,Í,Ì‘-L,©,È‘y’n,ÉZ,ß,È,ç,Ì‘©A,Æ,ç,¤s-žE•s‰^,ðŽ©•ª,½,·,žCg,É”[“¾,³,¹,é,½,ßšy‰¢Ç•ú,Ì‘·(Èê,ª,Â,

%&, É`Í, |, ç, ß, é, Á, È, n, ¾, ÄÈZv, ☐BfGfffc, ÍA-L, ©, ÈfVf...f[f<, Í'n, ÍA, », Í, †, Á, à, à, Á, ÄE, à-L, ©, È`y'n, ÍU`¥, ¾, Á, ½, ñ, ¾, è, ☐B

@,»,ê,©,çAfofxf<,Ì“f,Ì“b,Å,·B,±,ê,Í‘m,Á,Ä,¢,Ü,·,©E

@!ŠÓ,“V,Ü,Å“Í,«,»,¤,È,,¢“f,ðŒš,Ä,éB,±,ê,ð’m,Á,½_,³A,±,Ì“f,ð‘Å,¿‰oó,·,ñ,¾,EE

@u_,ÉÍ,±,¤,Æ·,éo·“Í,«,«,ÈU,éo·“,¢,³/⁴v,Æ—l,“{,Á,½,Æ^ê”È,É,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·,¹A¹,·,δ“C,þ,Æ»,ñ,È,±,Æ,I‘,¢,Ä,¢,Ü,¹,ñB
—R,Í‰oδ,¢,È,¢,·,Æ,É,©,_,Í“f,·,Ð‰oó,·,μAIХ,Í,·,è,À,·,è,É,·,È,·,è,·,A,·,ŒÝ,¢,·,É~b,·,Œ³/⁴—t,·,¹È,·,J,È,

@,À,Á,±,Ífofxf<,Í“f,Íf,fff<,ª,â,Í,èfVf...f[f<,É, ,é,ç,µ,¢E

@fVf...f[f\l,½,\j,^aEšY,μ,½“a,ÉfWfbfOf%fg,Æ,¢,¤,à,Í,^a, ,è,Ü,·B,,¢“f,ÍŒ,δ,μ,½“a,ÅA,»,ÍâO,Í,½,Ü,·B,±,ê,^afofxf<,Í“f,Íf,fiff<,Æ,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·B

13

@<É,ß•t,«,˜b,ÍAfmfA,˜” M,Å,μ,å,¤E

IX,_É‘Î·,éM \langle Á,ðŽ_,Á,ÄAŽ©‘Á—Ž,ÈJŠ^,ð‘—,Á,Ä,¢,é,A«,éAfmfA,A¢,¤,¤’j,¾,¬,^,aM \langle Á,ðŽç,Á,ÄŒhái,ÈJŠ^,ð,μ,Ä,¢,½B_,ÍAM \langle Á,ð—Y,ê,½l—P,ð—

Å,Ú,»,¤,ÆŽv,Á,½,–,ê,ÇA,Ü,¶,ß,ÈfmfA,¾,–,Í•,–,æ,¤,Æ,·,é,ñ,Å,·,ËB, ,é“úA” M,ð,Â

,ð,·,éB,È,ñ,¾,©,í,©,ç,È,¢,Ü,U,ÉfmfA,Í,·,º,É],Á,ÄA%oÆ·º,Ý,ñ,È,µ,Ä” M,ð,Á,

,ê,¾,¬,Æ,©A_,ÍŒ×,©,¢,„,º,đ,·,éB,ÅA,»,Ì,Æ,„,è,É,Â,¸,ë,Ü,·B‘¼,Ì,½,å,Í,»,ñ,ł

@,Æ,±,±,ª,ª,„,ª,ª,Á,Á,«,«,ÁAM,Éæ,èž,ñ,Á,¢,½fmfA,Ì‰oÆº,¾,‐,ª,„,«,„,Á,½,Æ,¢,„,bB

@,±,Ì,AE,«AfmfA,Í, ,ç,ä,é“®•”,ð,Â,ª,¢,ÅM,Éæ,¹,Ä,¢,ÄA,±,ê,à•,©,éB

@fVf...f[f\l,{^a}\check{c},\mu,{^{1/2}}"S"y"\AA,\acute{E}wfMf< fKffVf...-\check{Z}-\check{Z}x,\AE,

,½,ł,Å,·B
@fvfŠf“fgŒ©,Ä,,¾,³,¢B

$ufVf\dots f<fpfbfN, \&L$

,é,×,«,»,ÌM,ÍA,»,Ìj-@,ð’è,þ,ç,ê,½’Ê,è,É,¹,Ë,Î,È,ç,ÊBc
~Z“ú~Z”Ó,É,í,½,Á,ÄA—’,Æ^...,‰%Ý,μ Šn,¹A ‘ä•—,“y,ðr,ç,μ,½BŽμ“ú-Ú,ª,â,Á,Ä,

,É”s,ê,½Bc,»,μ,Ä,·,×,Ä,ìšô,Í“D“y,É<A,μ,Ä,¢,½BcM,ÍfjfVf<,ìžR,É,Æ,C,Ü,Á,½

Ú, ª, â, Á, Ä, Å,

%oG, I - §, i, <Z>

,ÅŽ„,ÍcAJ,¬æÑ,ð,³,³,°,½BvifMf< fKffVf...-Ž-Ž,Ì^...•ŒêA,‘³,j-ój

,ë,Ü,Å,»,

,½,Ì,Å,·,ªAwfMf<fkffVf...-Ž-Žx,ª”

,Æ, ª, ï, ©, Á, ½B

@^..._~b,Íff\flf^f~fA'ñ•û'S^æ,ÅL,
‰o»,³,ê,½,Æ,¢,¤Ó-¡,ÅAf^f[ffbfpl,É,Æ,Á,ÄfMf<fkffVf...,¡•Œê,Í'å"

@ŽÀÛ,ÉfVf...f[f_l,¡'åÓ”Œ@,ª,·,·,ñ,Å,¢,

@wfMf<fkffVf...-Ž-Žx,É,ÍA,±,ñ,È^êß,à, ,éB
@, ,éŽžfMf<fkffVf...,Í³- z_fEfgfD,É‘i,!,éB

uc

@S”ß,μ,¢,±,Æ,ÉA,í,½,μ,¡'¬,Å,ÍAI,Í,·,×,ÄZ€,ÊB

@c

@,í,½,μ,Íé•ç,¡ŠO,δ'

@Ž€¡,ª,¢,

@Œ®,Ä,μ,Ü,Á,½,¡,³/₄v

@^...,_Å^é,μ,ñ,Å,¢,½,ñ,³/₄,ËB

@fefBfOfŠfXEf†[ftf‰cefefX‰cl,¡'Å—”,¡L‰o^,ª,μ,³/₄,¢,É‘å^...,¡_~b•Œê,É”

u,à,¡,¡,¬•Pv

@fMf<fkffVf...-Ž-Ž,¡'b,δ,à,¤^ê,ÅB¹‘,¡Œ³flf^,Æ,¢,Á,½,ñ,³/₄,¬,ÇA‰cf‰œ,¡Œ³flf^,É,à,È,Á,Ä,é,ñ,³/₄B
@u,à,¡,¡,¬•PvŒ©,Ü,μ,½,©BŽ,,A4‰oñŒ©,Ü,μ,½B’å—¬s,μ,½,©,çŒ©,½l,à‘½,¢,ñ,¡,á,È,¢,©,ÈB
@, ,é,¡Œ³,ÍfMf<fkffVf...-Ž-Ž,Å,·,æB5000”N‘O,¡fVf...f[f_l,¡'Œê,“Œ”‘ál,É‘i,!,éfpf],ðŽ,Á,Ä,é,ñ,³/₄,ËB

@fMf<fkffVf...-Ž-Ž,¡'O”½,É,±,ñ,È~b,ª, ,éB

@“-Žž,©,çf^f\flf^f~fA'ñ•û,ÍX-ÑŽ‘Œ!,Í-R,μ,©,Á,½,ç,μ,¢B

@‰op-YfMf<fkffVf...,Í'¬,δŒšY,·,é,½,ß,É-ØP,^~-~,μ,¢B,»,±,ÅAfŒfofmf“™ A,±

,¡fŒfofmf“™,Í,Ü,½ŒäX,Å,Ä,«,Ü,·,©,ç,æ,Šo,!,Ä,“,¢,Ä,

,Íe-F,¡fGf“fLf€fhfD,Æ,¢,¤-EŽm,Æ,Æ,à,É- - - §,Å,ñ,Å,·BâM,è,ª, ,é,©,çŽ~ß,Æ,-A,Æ,¢,¤ŽüÍ,¡§Ž~,ðU,èØ,Á,ÄB

@fMf<fkffVf...,ÆfGf“fLf€fhfD,ÍfŒfofmf“™,¡X,É,â,Á,Ä,«,ÄA,»,¡'ü,μ,³,É- - §,ç,Ä,

@”ü,μ,³,É³“l,³,ê,½“ñl,Í•ð‘R,ÆX,ðŒ©‘±,¬,Ü,·B

@,μ,©,μAfMf<fkffVf...,ÍC,ðŽæ,è’½,μ,Ä,±,¤Žv,Á,½B

@u,±,¡X,ð”j‰o,μAfEf<fN,¡'¬,ð- - §”h,É,·,é,±,Æ,ªAlŠO,¡K•Ý,É,È,é,¡,³/₄v

@X,¡'†,É“ü,Á,Ä,¢,

,½,ç,Æ“¬,¤,ñ,Å,·,ªAÅŒä,É,ÍX,¡_,ÍfGf“fLf€fhfD,ÉŽE,³,ê,Ä,μ,Ü,¤Bftf“fofo,Í“a,ðØ,è- - Ž,Æ,³,ê,ÄŽE,³,êAfGf“fLf€fhfD,Íu“a,ð,Ä,©,Ý“a‰o±,É‰oÝ,μ,ž,ß,½vB

@,»,¡ŒäAfgf“fLf€fhfD,ÍaM,è,Ä•È,¡_,ÉŽE,³,ê,Ä,μ,Ü,¤,ñ,Å,·,ª,ËB

@u,à,¡,¡,¬•Pv,Æ“-,¡,Å,μ,åB

fGf“fLf€fhfD,“u,½,½,çêv,¡fGf{fV-lAfjt“fofo,“fVfV_AŽñ,ð- - Ž,Æ,μ,¤‰o±,Él,ß,é,Æ,±,ë,Ü,Å“-,¡B

@fMf<fkffVf...-Ž-Ž,Å,ÍAfjt“fofo,“ŽE,³,ê,½, ,Æu,½,³/₄[-ž,·,é,à,¡,“ŽR,É-ž,ç,½v,Æ‘,©,ê,Ä,¢,éB

@u,à,¡,¡,¬•Pv,Ä,ÍAfVfV_,¡'¡,©,ç- - ,éo,½,ç,ë,ç,ë,¡,à,¡,“ŽR,ðÄ,«s,

@fGf“fLf€fhfD,ÍaM,è,ÄŽ€,É,Ü,·,ªAfGf{fV-l,ÍA“T,¡_f,f,É•Ð~r,ðH,¢,ç,¬,ç,ê,é,³/₄,¬,Å,·,ñ,Å,¢,Ü,·,ª,ËB,±,¡•ÓA-D,μ,¢‰oðŽß,³/₄,ËB

@IŠÔ,^•¶³/₄,δ”

@,μ,©,μAX,δŽE,¹,Î,»,ê,Í•K,,IŠÔAl—P,Æ,¢,Á,Ä,¢,¢,©,ÈA,É,»,I,μ,Á,Ø•Ô,μ,Í—^,éB,Ç,¤,·,ê,Î,¢,¢
,I,CBX,Æ,Æ,à,ÉJ,«,é“¹,I,È,¢,I,©,Æu,à,I,¬•Pv,Å,IƒAfVf^fJ,“ê”Y,·,é,Ü,ÜA%oð“š,È,μ,ÅI,i,è,Ü,·B

@5000”N‘O,É,·,Å,ÉAŽ©‘R”j‰oó,I‐å‘è,^N,±,Á,Ä,¢,½,Æ,¢,¤,±,Æ,ÍA,μ,Á,©,èŠo,!,Ä,“,¢,½•û,^,æ,¢B

@fŒfomf“™,ÍA’n’†ŠC“ŒŠÝ,IƒŒfomf“ŽR—,©,ç¬fAfWfA,É,©,¬,ÄL,
@,μ,©,μAfVf...f[f_l,IŽž·ä,É,·,Å,ÉfŒfomf“ŽR—“Œ¤,I Af f\flf^f~fA’n•û,É—È,μ,Ä,¢,é•û,Í,Ù,Æ,ñ,CØ,ës,
,½,ç,μ,¢BŒ»Ý,Å,Í¼‘¤’n’†ŠC,É—È,μ,½’n¤æ,à,i,,©,ÉŽc,Á,Ä,¢
,é,³/₄,¬,Å,·BŒ»Ý,IƒŒfomf“šø,I^,ñ’†,É,ÍAfŒfomf“™,^•,©,ê,Ä,¢,Ü,·B

@X—ÑŽ‘Œ¹,^R,μ,¢,½,ß,ÉAff\flf^f~fA’n•û,Å,IƒCf“f_fXi—¬æ,©,ç,à—ØP,δ—A“ü,μ,Ä,¢,½BfŒfomf“ŽR—,©,ç
‰o,Ô,æ,è,àAfCf“fh,©,çŠCä—A‘—,μ,½•û,^ŠÈ’P,³/₄,Å,½,ç,μ,¢B,»,IƒCf“f_fXi‰o—¬n¤æ,à,I,ÍX—ÑŽ‘Œ¹,ÍŒÍŠ‰o,μ,Ä,¢
,Ü,·B

fAfbfJfh‰o¤

@‘O2400”N AfVf...f[f_l’n•û,É,Í,¶,ß,Ä“^è‘‰oÆ,^,Å,“,Ü,·B

@,±,ê,^fAfbfJfh‰o¤‘B

@Œš‘,μ,½,I,ÍVf...f[f_l,Å,Í,È,

@—“Œn“,ÍfZfŒEn,Æ,¢,¢,Ü,·BŽc,³,ê,½Œ³/₄Œê,Å—“Œn“,δ”»’f,·,é,I,Å,·,^AfZfŒEn,Æ,¢,¤,I,ÍŒ»Ý,IƒAf
‰ful,Æ“—,¶,Å,·B”O,δ‰oÝ,μ,Ä,“,Ü,·,^AfVf...f[f_l,I—“Œn“•s—³/₄,Å,·,æB

@fAfbfJfh‰o¤‘,I‰o¤,I—¼‘O,ðŠo,!,Ä,“,Ü,μ,å,¤B

@fTf<fSf“,P¢B

@ŽjäÅ‰o, I‘å‰o¤,Æ,¢,Á,Ä,¢,¢,Å,μ,å,¤BfAfbfJfh‰o¤‘,ÍfTf<fSf“,P¢,³/₄,¬Šo,!,ê,Î,¢,¢,©,ç,ëB

@,±,±,©,ç,ÍfTf<fSf“,P¢,I,“,Ü,¬,I`bB

@fTf<fSf“,P¢,I“à,δL,μ,½”S“y”Å,à”

@,»,I“ð,³,ñ,^fTf<fSf“,ð”DPAoŽY,μ,Ä,μ,Ü,¤B

@“ð,³,ñ,^žq,Ç,à,ðŽY,P,I,Í<—,³,ê,Å,¢,È,¢,I,ÅA”P—,Í¶,Ü,ê,½,Î,©,è,IƒTf<fSf“,ðâÅ,Éæ,¹,Äì,É—

¬,·,ñ,Å,·B,Ü, AŽI,Å,½,í,¬,ËB

@fTf<fSf“,ÍYöYöI,ÉE,i,êA,©,ê,Í§žq,Æ,μ,Ä^ç,Å,ç,ê,Ü,·B¬·,μ,½, ,ÆAfCfVf...f^f_l—_,^,©,ê,ð^¤,μA,»,μ,Å
‰o¤,Æ,μ,ÄŒN—Ö,μ,½A,Æ,¢,¤,ñ,Å,·B

@‰op—Y,Æ,¢,¤,I,Íê“x,IŽI,Å,ç,êA¬·,μ,Å,©,ç•È,ÌøŠE,©,ç^Ù—l,Èfpf[,\øg,É,Å,¬,Å<A,Å,Ä,éB,»,μ,ÅA{—
^,é,x,«’n^È,É,Å,

@øŠEŠe’n,ÉŽ—,½,æ,¤,Èfpf^f[,\~b,â•Œê,^žc,³,ê,Å,¢,Ü,·B’O,IŽö<Æ,Å,μ,½fA[fT]‰o¤,Iø¶,I`b,âA<Œ—
ñ!“,Iƒ,[fZ,à“—,¶,Å,·B

@,»,ê,©,çA,^•œ,³,ñ,“ð,³,ñ,Æ,¢,¤,Æ,±,±AfCfGfX,Ìê,“—f}fŠfA,Æ,¢,¤b,ð~A‘z,μ,Ü,!,ñ,CØ,±,±,ÍA,«,í,Ç,¢
,Å,·,¹,!,Í,¶,ß,é,Æ—È”,¢,Æ,±,ë,Å,·,æB

@,à,Å,ÆA‘å_-,É~A‘z,ð”ð—,³,¹,é,ÆAì,É—¬,·,Æ,±,ëA_t,É—¬,ê,Å,

%op—Y,É,È,è,Ü,·,^A^é,Ì’N,^,Ç,±,©,ç—,μ,½,ñ,Å,μ,å,¤,ÈB““³/₄~Y,ÌŒŒ^,ÌŒŒ^,à,D,å,Å,Æ,μ,½,ç,±
,ê,©,à’m,ê,Ü,!,ñ,ÈB!,Í,¶,ß,½,çLfŠ,^,È,¢,ÈB

$$f \sqcap f \backslash f | f \wedge f, \vdash f \wedge \bot \quad 3/.$$

@fAfbfJfh‰¤,ÍfTf^fSf“,P¢,É,æ,Á,Ä“^ê,³,ê,½ff\flf^f~fA,àA200”N,Ù,Ç,½,Â,ÆAŽRŠx-“°,ÌN“ü,É,æ,Á,Ä,Ù,½•ª—ô,µ,Ù,·B

@-L, ©, ÅA•¶%o>, Ì., ¢ff\f\|f^f~fA' n•û, ÍŽü•Ó, Ì' Ø°, É, Æ, Á, Ä, Í, ©, Á, ±, ☐, Ì—^a'D'ÍÛ, Å, ·B, , í, æ
 %oz, μ, ½, ±, Æ, Í, È, ¢B
 @ff\f\|f^f~fA, Ì—ðŽj, ÍŽÝ, ©, çŽÝ, Ö, ÆA, ±, Ì'n, ÉN“ü, ·, é”^—°, Ì—ðŽj, Æ, ¢, Á, Ä, à, æ, ¢,

@fAfbfJfh‰¤-Å-SŒäA^êŽž,ÍfVf...f[f\l,ÌfEf<‘æŽO‰¤©,Æ,¢,¤,Ì,¤ch,|,Ü,·,¤A,±,ê,àfGf‰f\l,Æ,©fAf€f\l,Æ,©,¢,¤,Ì,¤N“ü,μ,¤‰¤B

fofrffjfA%o

@,±,Í‰œ¤,ÍœFVf...f[f<Žž‘ã,©,ç,±,Í’n•û,É,‘,±,È,í,ê,Ä,«,½‐@‐¥,ðW‘å¬,µ,½,Ì,Å‐L‐¼Í
@fnf“f€‰œfr‐@“TB’d‐v,Å,·B

@fnf“f€f%ofr-@“T,Ìà-¾,μ,Ü,·E

@“Á’¥“ñ,ÂB

1C“-ŠQ•œQ,ÌŒ’‘¥

u–Ú, É, Í–Ú, ðAŽ•, É, ÍŽ•, ðv, Å, ·, ËE

@@u,à,µl,^Z©—Rl,Ì—Ú,ð,Â,Ô,µ,½,Æ,«,ÍA,©,ê,Ì—Ú,ð,Â,Ô,·Bvi‘æ196ð

'N,©,ÉŠëŠQ,đ‰‰Á,|,½,çA“–,J,±,Æ,đ,³,ê,é,Æ,¢,¤,±,Æ,¾I

”@”ñí,ÉŒµ,µ,¢@—¥,Ì,æ,¤,ÉŠ’,¤,Ü,·,ËB,Å,àA,±,Ì’“ŠQ•œQ,ÌŒ‘¥,ÍœQ,É‡—“I,ÈŒÀ“x,ð’è,ß,/½,Æ,¢,¤“_,ÅŽÐ‰œi,¤”

@ '1/2,, I- - o

@ŒĀfofrffjfA%oꝝ‘,IŽx”zŽÒ,ÍfAf€ſl,Å,μ,åAŽx”z,³,ê,Ā,¢,é

,½,ÆŽv,¤B^á,¤E³/4-t,ð,μ,á,×,Á,ÄA^á,¤•-K,Å•é,ç,μ,Ä,φ,éB‘^,φ,³/4,«,½,Æ,«,Ç,¤,â,Á’‡Ù,·,é,©A‡-“I,Èf<[f<,³/4K-v,³/4,Á,½,ñ,³/4,ËB

@,»,¤,¢,¤'†,Å¶,Yo,³,ê,½,I,“—SQ•œQ,IŒ‘‘¥E

2Cg•^a••[†]E“ICEY”±

@u,à,µ“z—ê,³Ž©—Rl,Ì—j,ð‰ø£,Á,½,Æ,«,ÍA,©,ê,ÌŽ·,ðØ,èŽæ,éBvi‘æ205ð

“z-ê, ^aZ©-Rl, ÉŠëŠQ, ð‰oÅ, !, ½, çA, », êÈä, ïd, çŒY, ð, ☉, é, í, —, ¾Bt, Ég•^a, ï, çŽÖ, ^{aa}z-

ê,ð,À,¬,Ä,à”±<à,À,·,Ý,Ü,·BŒµ,µ,¢g•^•Ê,·, ,Á,½,±,Æ,·,í,©,è,Ü,·)

@,±,ÍAu-j,ð%cf,Á,½,Æ,«,ÍvA,Æ,c,ðo\Œ»A““a,Í÷-÷,Í÷û,ÉŽc,μ,Ä,“,c,Ä
@÷Eä“ñ,Â,Í“Á’¥,ðŒ©,é,ÆŒŒ““a“TŠ’Šo,©,ç,Í,â,Í,èŽc““EŠ’„,J,““a,μ,Ü,·

@,μ,©,μAfnf“f€f‰ofr-@“T,Ì, ,Æ,ª,«,ÉA,±,ñ,È•J,ª, ,éI

@u^čžò, ážážò, ðšs, °È, ¢, æ, ☉, ÉÁ³`®, ^Œçž™, Ä‰œç•w, ÄŒ, Éžö, ¯, ç, ê, é, æ, ☉, Év, ±, ï-@, ð, Å

f□f|f|^f~fA•¶-¾

@'Pf,ÉŒÄ,¢Žž·ã,Í-i”Ø,¾,Á,½,AE,©’x,ê,Ä,¢,½,AE,©Al,!,È,¢,æ,¤,É,μ,Ä,

@ŒÃfofrffjfA%o¤,Í‘O1600”N ,É,Í-k•û,©,ç^Ú“®,μ,Ä,«,½VŽè,Ì”-“°,É-Å,Ú,³,ê,Ü,·,ªA,±,ê,Í,Ü,½Œä,Ì,~bB

i2002/2/20%œuej

ŽQl}‘Ð%œîEEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,½,¢,Æ,«,Í

‘-¼,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^ [flfbfg“XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”ð,ñ,ÅA-{,Ìff[f^A‘•],È,Ç,ðŒ©,é,±,Æ,ª,Å,«,Ü,·Bw“ü,à%œÄ”\,Å,·B

[X.ðŽç,é•¶-¾EŽx”z,·,é•¶-¾PHPV](#) ŠÀ«,Ì•I%o»,Æ•¶-¾,Ì»—
cover S.ÌŠÖŒW,ðl,!,éuŠÀ«lŒÃŠwvBfMf< fKffVf...-Ž-Ž,âfŒfofmf“™,Ìb,Í,¾,“,Å,È,
¢ŠE,luX,Ì_Xv,É,Å,¢,Ä,àÚ,μ,G,ê,Ä,¢,Ü,·B

‘æ,S%œñ@ffflf^f~fA•¶-¾@,·,í,è

[fgfbfvfy|fW,É-ß,é](#)

‘O,Ìfy|fW,Ö
‘æ,R%œñ@•¶-¾’a¶

ŽY,Ìfy|fW,Ö
‘æ,T%œñ@fGfWfvfg•¶-¾

,±,ñ,È~b, ö<Æ,Å,μ,

čŠEŽju<`~'

‘æ,T%oñ@fGfWfvfg•j-¾@

ufGfWfvfg,ÍfifCf<,ÌŽ'•v

@ fGfWfvfg,Å,Í,O,T,O,O,O”N,É_”k,žZn,Ù,ë,Ù,·B’O,Q,V,O,O”N ,É,Í^ê‰o¤©,¤—§,µ,Ü,·BfGfWfvfg,ÍžüÍ,ð»”™,ÉÍ,Ü,ë,Ä,¢,ë,Ì,Afffl
f^A~fA,Ì,æ,¤,È,ß,Ü,®,é,µ,¢—°,ln”ü,â‰o¤©,Ì»—S,Í,_,Ù,ë,È,
@fGfWfvfg,¤•J—¾,ð,à,Ä,½,Ì,ÍA,È,ñ,Æ,¢,Á,Ä,àfifCfì,Ì,“,©,°BfifCfì,“”N,à,½,ç,·”í—€“y,Æ...,^fGfWfvfg,Ì—L,©,È_<Æ,ð‰Å`N,É,µ,½B—”NfifCfì,Ì...,Åä
—,¤,ç‰ch—{¤,ð,½,Ä,Ó,èSU,ñ,¾”y,¤—,ë,Ä,„,ëB,¾,Ç,ç‰½,à,µ,È,„,Ä,à’n—I,¤Už,Ä,«,ë,Ì,Ä,·B, ,Æ,Í...,¤,ø,¢,Ä,¢,Žž,È...,ÌŠC—,³,|,µ,Ä,©,ë,Ä,«,ë,Ì,æ,¢B

@'O5¢I,łfMfšFvF,A,ł—đŽj%oÆfwffhfgfX,łŒ%—t,ł—L—½,Å, BufGfWfvfg,łfifCf<,łŽ•vE

@fGfWfvfg,ł,ő'żĘ^,δCEC,é,AefifCfç,ł‰,¾,-,^,a-ł,É,Ę,Á,Ä,c,é,ł,a,æ,•,©,é,Å,µ,å,¤B--ł,æ,©,

@fGfWfvfg•J-¾,δ,Δ

%oful,^{3/4},ÆŽ©Šo,μ,Ä,¢,éH

fGfWfyfg.1•9%

fGfWfyfg]-i [‘% -z-i Å :B P”N B U T“ú Å :]

@fifCfjìÍfefBfOfŠfXEf†[ftf%efefX.]æ g É•s'èŠú È‘å^...[“ + è ÜL¹ nE

@,P,O,O,OlfL^fÉäaa—,ÍgfGf ffsfA,Í,Œ,É~Á,½f,f·fx[X[f*,%]cJ,ÁfifCfå,Í~...,é,Í,ÁA~"NŒ,Ú,Á,½žžšú,É~,J-1,Èfy[fX,Á...,©,³,ª,μ,Á,¢,«,Ü,·BfGfWfvfgl,Í,¢
ÂfifCfå,ª,é,©A,» ¸ ¸ Á,¾,¾,ÍSOSZ-B,» É,í,Í,Á,k,Í,Œ,ð,·,é,í,Í,Á,B,

② $\check{S}^{-\frac{1}{2}} : \{A''V'\} \check{\otimes} \check{S}^{\frac{1}{2}} @>{\tilde{E}^a \circ A \text{if } Cf \in \cdot}>> \check{S}^{\frac{1}{2}} \otimes \tilde{U} u^{-1}$

, N ,JES,EJ VJSJEJA, RP

“@,±,¤,μ,A,A,«,½-̄,¤,¾-̄-̄,A,·B,¾,C,¢A°Sm,E,¢,¤,Æ,¾-̄-̄-̄,J,·,E
¢SÉ“I,ÉŽg,í,ê,Å,¢,é-̄,Å,·B

@,P^ú,δ,Q,SŽžSÖ,é,μ,/,ł,łGfGfWfvfg,A,·BfGfWfvfg,I,P,Oi-@,AA,I,ł,ł,ł<,AE-é,δ,>,é,/,é,P,O,É^a,-,A,Q,O,³/4,A,¹/₂,I,³A<,AE-é,ł<ŠE,łžžSÖ,δ,>,é,/,é,É^at,-‰øA,!,ł,ł,Q,S,é,ł,ł,ł,¹/₂,»,ł,ł,A,·B

@^,...,ł,...,^a,φ,φ,/,„AE”_—_,½,ż,ł,„,ł,Å”_k,δ,ł,ż,β,ż,ł,Å,·,^aA“y’n,ł«„SEü,^aA‘...,...,ł, „AE,ł“D,É—,,à,ê,À‘S‘R,í,©,ç,È, ,È,Á,Ä,μ,Ü,¤,Å,μ,äB,»,,±,„AAfGfWfvfg,Å,ł“np,à”

@•ЈŽš,Í“Æ“Á,ÌŠG•ЈŽš,ð
,¤Žš‘Ì,ª, ,è,Ü,μ,½B

@.±.À¹·¶Žš.]‰ð“C.É.Ù.Â.í.é~b.ð.µ.Ä.„.«.Ù.·.Í.

@,P,WçI—Aftf%of“fX,lfifl fŒfIf“,aGfWfvfg%“a,δ,μ,Ü,·B,%/,%4A%“a,·,é,%/,-,Å,í,È,·Ä,P,U,Tl,łSwŽO,ð”ø,«~A,ê,Ä,ç,ł,Å,·B^a,ä,ðZ,Å,Ä,ç,%/,%4,ËB,ÅAfifl fŒfIf“,ÍfGfWfvfg,Åf”ø,δ,·,é,C,%,/2,í,çAŠe’n,É•”à,ÆšwŽO,ð”hŒ,μ,Ä”Œ@,μ,Ü,,éB,»μ,ÄAo,Ä,«,%/2,ł,açI,ł‘å”
@,±,¤,ç,¤L”O”è,ÍA^á,¤Œ%4Œè,δ,μ,á,×,éI,å,à¤,©,é,æ,¤,ÉA“^-é”å—
e,ð•_”•jZš,Å“,ñ,%4BfmfšVfBa•jZš,ÍfAf<ftf@fxfbfg,%/,%4,C,B,é,ł,Å,·B,%/,%4,C,çAff[fbf^fxfg[f“,ł”

@,Æ,±,€,„,„,ÍŒÄ,Q,O”NSÖ‰ð³Ç,Å,„,È,çB,Y,ñ,ÉA_•!JÙžš,IŠG,ÍŒ,É,f,í,³,é,ÅA,±,é,ð~Ø•!JÙžš,AEl,!,½,C,ç,Å,·B
@,½,Æ,!,ÍA’ë,ÍŒ,„,žš,„,é,ÍAu”ð,Óvu—E—Óv,Æ,ç,“O_í,J,á,È,ç,C@A,Æ,ç,Ø,EB

@,±,‰,ð,“C¬Œ÷,É,æ,Á,ÄAŒÄ‘äfGfWfvfg,Ì–ðŽj,„êŒ,É–¾,ç,©,É,È,Á,½,Ì,Å,·Œ

@ff|fbf^fXfg[f“ÍŒ»ÝA‘‰op”Ž•ŠÙ,É, ,è,Ü, ·Bfif|fŒfIf“,àG,Á,½,©,à’m,ê,Ü,¹,ñ,æH

$\partial \cdot \mathbb{J} \check{Z} \check{s}, ^{\text{a}}, ^{\text{c}}, ^{\text{E}}, ^{\text{v}}, ^{\text{l}}, ^{\text{a}} f p f s f \text{f} X, \check{A}, \cdot B f p f s f \text{f} X, \text{E}, \text{e}, \square A^{\bullet}, ^{\text{l}} \mathbb{C} \text{E} s, \delta, \hat{A}, \hat{O}, \mu, \check{A} f V [f g \check{o}, \check{E}, \mu, \check{U}, \cdot B \% p \mathbb{C} E \mathbb{E}, \mathbb{I} f y [f p [, ^{\text{l}} \mathbb{C} \mathbb{E} \mathbb{E} \mathbb{C} ^{\text{E}}, \check{A}, \cdot B f i f C f \leftarrow, ^{\text{l}} \check{Z} ^{\text{v}} \text{f} \text{C} ^{\text{E}}, \check{E} \check{Z} \mathbb{C} \mathbb{J}, \mu, \check{A}, \text{e}, \check{e} A^{\bullet}, \check{A}, \cdot ^{\text{a}} A_i, \check{I} \check{S} \check{I} \mathbb{C} \check{o} - p, \check{E}, \check{A}, \check{A}, \text{e}, \check{e}, ^{\text{v}}, ^{\text{l}}, ^{\text{c}}, \mu, ^{\text{e}} B, \pm, ^{\text{e}} A f G f W f v f g ^{\text{v}} \check{Z} Y, \check{E}, \text{a}, \text{c}, \check{A}, ^{\text{v}} \check{Z} A^{\bullet}, \check{A}, \cdot B, \check{U}, \mathbb{f}, \mu, \check{U}, \cdot A^{\bullet}, ^{\text{c}}, \cdot \check{E} \mathbb{C} \mathbb{C}, \check{A}$

ŒĀ‘āfGfWfyfgŽj.]—

@ŒÀ‰¤‘i‘O,Q,V,O,O`‘O,Q,Q,O,O”N

@'†%o¤i‘O,Q,P,O,O`‘O,P,V,O,O”N

@V%o¤‘i‘O,P,U,O,O`‘O,P,P,O,O”N

@SE'P,Å,μ,åE

@@»,ê,¼,ê,Ì, ,ç,¾,ÍÙSÓ,Í+SÓÙ,Æ,ç,Á,ÁAfGfWfvfg,^ç,Ê,É,Ú,Æ,Ù,Á,Á,ç,È,©,Á,½ZÙSÙ,Á,· Í

@Œ‰œ‘,ł“s,łff“ftfBfXBfGfWfvfg,ł‰œ—¬’n`æ,ð‰œfGfWfvfg,Æ,¢,¢,Ü,·,ªA,±,±,É“s,ªu,©,ê,½I

@OE%co^,Ífsf%cf~fbfh,^c,ç,ê,^Zž,á,ÆSo,,|,Á,“,„,Ú,µ,å,obÁ‘å,Ifnf%cf~fbfh,ð,í,j,BA,,x,Á,±,Ižž,á,í,ä,í,Á,`BCE%co^,ÁSo,|,é,í,í,“,é,¾,`B

@fsf%of~fbfh,Í,Ý,ñ,É'm,Á,Ä,é,ÆŽv,¢,Ü,·,ªA^ÄSO,È,ñ,È,Ì,©,í,©,Á,Ä,¢,È,¢E

@fGfWfvfg,l%%o,I,±,Æ,ðftf@f%ofl,Æ,¢,¢,Ù,·,·,A,»,Iftf@f%ofoI,l·æ,%/Æ·Ù·,È,Ùl,!,¢,Ù,·,·,Æ,·,·,CÅ·æ,J,á,È,¢,Æ,¢,¤SvZO,à,½,

@•æŽ°, ¸, ,é,µAŠ»‰±,Ü,Å, ,éA,E,ñ,Å•æ,¶,á,E,¢,Ì,©I

@ŽÀ,Íì,Ü,Å, ,ç,ä,éfsf%oof~fbfh,©,ç^ê,Â,àf~fCf%oo,^

•@•æ“D_-,ÍÍ,©,ç,é,ÁAfsf%o~fbfh,É,àN“ü,µ,Ä,ç,é,ñ,¼,¬,ÇAà•ö,Í“,ñ,Å,àf~fCf%o,Ü,Å“Ü,È,ç,¾,ë,¤,©,çA•æ,¾,Æ,·,é,Æ,â,A,I,è•I,È,í,¬B,µ,©,µA•æ,A,Í,È,ç,‰½%EÌŠ‰œ±,º,é,I,©,Æ,ç,í,ê,é,ÆA,±,ê,àà-¾,Å,«,È,çBç,ë,Ü,·,ËB

at@êl,lftf@f%ofl,“;”,lfsf%cf~fbfh,ðŒSY,μ,½—á,à,é,Æ,ç,ø,©,çA,í,ê,i,é,a,l,éœæ,A,I,E,C,A,½,ñ,³/⁴,AÆZv,ç,U,·E

@,J,á,A‰%½,©,Æ,¢,¤,Æ•_A_“a,Y,½,¢,E,à,I,ç,µ,¢B“úŒø,I“ŒÀ<,{,I‰ÆN,ðâJ,A,A,¢,é, ,ÇÀæ,A,I,E,¢B,»,ñ,Ef,fm,E,ñ,A,µ,å,¤B

$\partial f / \partial t = \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} \left(\frac{\partial^2 f}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2} \right) dx dy$

@,P'N,I''^a,IIfiCf<,I'...A'_n,I...-v, μ ,A, φ ,A'_-,I%oE,A, μ ,@,%E,%B,»,IZzSú,Eftf@f%oFI,a'_-, δ W,B,A'',@,¹,%BdJ'',³/₄,A,%E,I'á, φ ,,é,U,¹,n,A, ζ ,á,n,AE"

@ZÝ,Í†‰¤,ÍfifCf<,Íä—¬AäfGfWfvfg,Ífe[fx,“sB,»,ê,¾,–,Å,“,μ,Ü,¢H

@'†‰¤‘ÍfGfWfvfg‰„ÌŠO—^—°,ÌN“ü,É,æ,Á,ÄŠ‘þ,μ,Ü,μ,½

@N“ü,μ,½,Ì,ª¬¬¬¬¬°W’cfqfNf\fxB,±,ê,ªfAfWfA•û-Ê,©,çN“ü,μ,½I

@qfqNfFX,ÍÑ„Ù,Á”n,ÆíŽÓ,„Í,„Ù,ÄfGfWfvfg,É,à,½,ç,³,ê,Ü,µ,½B,»,ê,Ü,Å,ÌfGfWfvfg,É,Í’n,„ç,È,„Ù,Á,½,í,–,¾,„ç,À,Ç,ê,¾,–,ŒÇ–
§,µ,½çŠE,¾,Á,½,„ç,È,„Ù,„Ù,„Ù

@,±,ÍŽž‘ä,Í,Ü,¾”n,Éæ,Á,Äí,!,Ü,¹,ñB”n,Éæ,Á,Äí,¤,½,ß,É,ÍA^Æ,Æ, ,Ô,Ý,a•K—v,Å,·,a,Ü,¾

@"n,ÍžÔ,ðŒí,Œ,¹,é,½,þ,Éžg,¢,Ù,·BÍžÔ,Æ,¢,Á,Ä,á,½,¼,Í"nŽÔ,Ý,½,¢,È,ä,Ì,Å,·BŒäŽÔ,^êlA,»,µ,Ä,«,ðŽ,Â,“G,ðŽE,Á,½,Ì,¾,ÆŽv,¢,Ù,·BfGfWfvfgø,Í,Ý,È,«,·,Å,·,·,©,¢A³“lI,É,«@“@-Í,Å-Ð,ë,Ä,¢,½,Ì,Å,·B

@,, „I”n, A€[ZÓ, ÉfGfWfvfg, f„p”z, „, É, U, „, ^A, á, „, ÁfGfWfvfg, f, „, ±, „, I”Ví-@,, ðZC@„, I, á, I, É, µ, ÁfQfNfFfx, ðC, „, f, „, B, Á, „, „, /, „, V‰c, „, f, „, E

@V%o¤‘,Ì“s,Ífe[fxB,±,ÌŽž‘ã,ÌfGfWfvfg,Í”n,ÆíŽÔ,Å

@V%o\alpha', \neg - \S,]

%o\`A\fA\fW\fA'`n•û,É,Ífqfbf^fCfg%o\`A,Æ,¢,¤\`a, ,Á,½BV%o\fGfWfvfg,Í,±,ê,ç,Ì'X,ÆR\`^,Ó

@,,μ,ÄfgfgffX,Rçi‘O1504,±,ë‘O1450”N,±,ë,j,lžž,ÉfGfWfvfg,l—l“y,IžjaÅ,å,É,É,éB,+,lftf@f%cofi,Išo,|,Å,

fCfNfi[fgf“

@,à,¤élŠo,|,À,“,©,È,¢,Æ,¢,“,È,¢f@f%¢fl,³fAff“fzfefv,S¢A·È-¼fCfNfi[fgf“i‘O1379”N,±,ë‘O1362”N,±,ëj,À,·BfGfWfvfg,Í‘½_³,Ì¢ŠE,ÅA,¢,ë,¢,ë,È‘n·æ,É,»,ë,¼,ë,Ì—l,ª,¢,ÄAŽž·ä,Æ,Æ,à,É—¬s,Ì—l,à·I‰o,·,ë,Ì,À,·,ªA,±,IV‰o,À,à,À,Æ,àM·À,³,ë,À,¢,½,Ì,³fAff“,·,À,·B,»,µ,ÄfAff“,_,ÉŽd,|,ë,Š“,½,ë,Ì—l,³,ñí,É·ä,«,

@fAff“fzfefv,ÌfAff“,Ì,»,Ì_,Ì—¼,©,ç,«,À,¢,éB

@,Æ,±,ë,³fAff“fzfefv,S¢,Ì_Š“,½,ë,Ì—¼,ë,©,è,ÄŽ,ì,É%¢“ü,·,ë,Ì,ðŒ™,¢,Ü,µ,½B,µ,©,µA,©,ë,ç,ÌfofbfN,É,Ì_,ª,À,¢,À,¢,ë,Ì,ÀA, ,©,ç,³,Ü,É‘Ì—§,·,ë,±,Æ,à“ì,µ,©,À,½B

fCfNfi [fgf“œ

,›,±,Å,!,Å,¢,½,Ì,ªAV,µ,¢,ð,Å,
 @fAff“_,δM^Å,µ,È,¬,ê,ÎfAff“_S¬,c,ð¬,ž,µ,Å,à,¢,¢,í,¬,¾B
 @,®,ê,ªV,µ,
 §,Åv,Æ,¢,¤Ó¬,Å,·B
 @,³,ç,ÉAfAff“_S¬,c,Ì¬,Í,Ì¬
 @,¾,Ó,çAfCfNfi|fgf“,ÍcEä‘äfGfWfvfg,Ì@,³%œüŠvŽò,ÆŒÄ,Ì,ê,éB
 @,®,ê,Ìž,‘ä,ÍAŒlp,äff“fpf^|f“,®,ç”²,·o,µ,Ä”ñí,ÉŽÈžÀ“Ì,È“¤,È,ç,·,Å
 ,Ù,·,ªÙ¬,l,ÉfSfAf,·,Å,·,ÈB,±,Ìž,‘ä,ÌŒlp,ðfAf}f·fŒlp,Æ,¢,¢,Ù,·B

fCfNfi[fgf““α

@fcf^f“Jf|f“Í,łŽ@-¼,ÍAf gDfbgEf Af“fNEFAff“BfAf f“,ł-¼,“ū,Á,Ä,ç,é,Å,µ,åB
@,.+łf f@f%ofl[“x,Éžc,³,é,½a6,Å-ł-¼,Å,·B,+,%ç@,łf)fx fn,Í(€ç,½,+çE,é,Åžv,y,é,Ü,·ł

@,Æ,±,ë,ªfcf^f“fJ[f f“,l•æ,¾,–,Í“Œ@,³,ê,Ä,¢,È,©,Á,½,l,Å,·]

@“Œ@,,È,È,Œ,À,½—R,Ù,È,À,f{fcf+j“fjff“,“},l—/4,à‘m,ç,è,À,ç,È,ç,Ù,C—³—/4,Ì‰ç,¾,À,½,±,ÆB,WÎ,Œ,ç,P,WÎ,ç,ç,Ù,ÀÝ^È,μ,½,¾,—,Ì”N
‰ç,À,ÀŠi,È,È,Œ,À,½B,¾,Œ,ç,“},l—ç,à‘ç,“},

@.à.ç.é.â.í.Afcf^f^fJff^}. .A.í.Zz.á.Éf%{f@Zfx.Uc.Æ.c.ç.á.Èftf@f%{fI.ç.ÁÁ.».l.á.K-Í.È@.x.á.fcf^f^fJff^}.l@.x.l.%.É.â.

‰®.ªfcf^f·fJff^f·l·æ·l·É·e·c·é·½·l·Á·B·»·l·½·B·Afcf^f·fJff^f·l·æ·f%·B·é·Á·μ·Ú·Á·½·B·á·ää"NEŽ·Æ·Æ·ä·é·'·Ý·ä·Ý·e·c·é·Ä·μ·Ú·Á·½·B

@”Œ@,μ,½,Ì,ÍfJ[f^[,Æ,¢,¤fCfMfŠfXI,Å,·BfCfMfŠfX·M°,ÌfJ[fif{f“·,Æ,¢,¤l,³oŽ‘ŽÒ,É,È,Á,Ä%co‰œÆ,Ì’J,Ì’Œ@,δ,μ,½B”Œ@,·,é,½,β,É,ÍfGfWfvfg•{,Ì⁻%œÅ,ª,¢,é,ñ,¾,¬,é,ÇA,»,,é,Ü,Ä”Œ@Œ,δŽ,Á,Ä,¢,½fAffŠfJ,ÌŠwŽÒ,ª,à,¤œ¤‰œÆ,Ì’J,É,Ì‰½,à,È,¢,Æ”’f,μ,ÄA”

@fJ[f^[_Ž©g,Ífcf^f“fJ[ff“,Ì•æ,ª,é,Í,,¾,ÆŠmM,μ,Ä”Œ@,δŠJŽn,·,é,ñ,Å,·,ª5”NŠÖ·S,-%œÈ,È,μBfpfgff“,ÌfJ[fif{f“·,Ì’åàŽ,ç,È,ñ,Å,·,ªA,³,·,ª,ÉŽ‘à,ª,Ä,Ä,©,È,Ä,Ä”Œ@‘Ä,çØ,è,δŒ^Ó,μ,½ÅŒä,Ì’NA,P,X,Q,Q”N,Ä,¢,É%œ¤œæ,O‘È,Ì,éŠK’i,ð”

@fJ[f^[_ª•æŽ°,δ,Ó,³,®”à,δŠJ,¬,é,Ì,·,ª,»ÌŽž,ÌŒi,Í—L⁻¹/⁴B

@fJ[f^[_Ì’,•æ,Ì’å,δŠJ,¬,½,
,Ì,ÅA,Ü,“a,Ì÷,É·,³,ÈŒŠ,δ, ,¬,ÄfJ[f^[_ÍffEf\fn,δ,©,‘,μ,Ä’†,δ,Ì,¼,«ž,Ý,Ü,·B

@,Æ,±,é,ªAfJ[f^[_Í⁻³Œ³,Ì,Ü,ÜB,¤,μ,é,É,¢,½fJ[fif{f“·,ª,½,Ü,è,©,È,Ä•,
u‰½,©Œ©,|,é,©,ÈHv

@,å,Ä,Æ,ÌŽ-,ÄfJ[f^[_Í“š,|,Ü,·B
u,Í,¢A,·,Ì,ç,μ,¢,å,Ì,³cv
@ffEf\fn,Ì⁻¾,©,è,ÄŒö,è<P,

@^ê”Ô—L⁻¹/⁴,È‰œŒ·à,Ìf}fxFxFN,ÍAf cf^f“fJ[ff“,Ìf~fCf‰,ìa,É,©,Ô,¹,Ä, ,Á,½,à,Ì,Å,·Bf~fCf‰,íZld,Ì~ZqAlŠ»AŽOd,ìŒ Š»,Ì’†,É“ü,é,ç,è,Ä,¢,½B^ê”Ô“à·¤,ìŒ Š»,Í‰œŒ·à»B»,Ì,Ü,©,É,àfAf}f<Œlp,Ì‰œŒ·à, ,é,Ì,©AŒlp<,Ì,¢^ä·ó,ª,Q,O,O,O“_à”
@,±,é,Ä,à‰œ¤•æ,Ì’†,Ä,Ì’Ü—á,É·,³,¢,à,Ì,¾,Æ,¢,¤,©,çA·È,Ì‰œ¤•æ,É,Í,ç,é,¾,¬,ìa·ó,ª, ,Á,½,©·z·œ,à,Ä,«,È,¢B

@,³,ÄAf cf^f“fJ[ff“,Ì,±,Æ,Å,·,ªA,©,é,ÍfCfNfi[fgf“,Ì·§Žqi—È·O,Ì·^á,¢,Ì’í,Æ·,¢,Ä,¢,Ü,μ,½j,ç,μ,¢Bf~fCf‰,δfŒf“fgfQf“,É,©,¬,½,è,μ,Ä’²,×,é,ñ,Å,·,æB
@fCfNfi[fgf“,ª,R,QI,Ä·¤Z€µ,½, ,Æ‰œ¤·È,Ä,
.Æ,É,æ,Ä,Ä³,È,à,Ì,Æ,³,é,Ü,·Bf cf^f“fJ[ff“,ÍfCfNfi[fgf“,Ì·°fAf“fPfZfi[ff“,δÈ,É,μ,Ä‰œ¤,É,È,è,Ü,μ,½Bf Af“fPfZfi[ff“,Ífcf^f“fJ[ff“,æ,è
‰½Ì,©”Nä,Å,·,ªA^ë,É^ç,Ä,ç,é,½—c,È,Ì,Ý,À’‡—C,μ,¾,Á,½,ç,μ,¢B,½,Ô,ñ^¤,ª, ,Á,½,ñ,Ì,é,¢,©,ÈB^ä·ó,Ì’†,É”N‰œ¤fcf^f“fJ[ff“,ÆŽá,¢Èf Af“fPfZfi[ff“,ª‡—r,Ü,Ì,

@,±,ÌŽáÈf Af“fPfZfi[ff“,Å,·,³ŽÀ,Í,Q‰œñ—Ú,ÌŒ[¶],¾,Á,½B^ël—Ú,Ì•v,Í’N,¾,Á,½,©,Æ,¢,¤,ÆŽÀ,Ì•ffCfNfi[fgf“,Å,·B,å,ä,±,μ,¢b,Å,μ,åBfCfNfi[fgf“,ÍfAff“_Š“c,Æ,Ì’¹
—§,Ì’†,ÄŽŒ·¤,Ì‰œ¤·È,δ<
@•f,Å, ,è•v,Å, ,éfCfNfi[fgf“,³Ž€ñ,ÅA”p—,Ì—c,È,Ì,Ý,Ìfcf^f“fJ[ff“,ÌÈ,É,È,Á,½,ñ,¾B

@fcf^f“fJ[ff“,Í’†,È,ÌŽž,í,,©,WÎ,Ì’N,Å,·,©,çŽAÛ,ÌŽí,Í,½,Ô,ñ,μ,Ä,¢,È,¢B,»,,±,ÄAf Aff“_Š“c,ª—Í,δ·,è•Ô,μ,ÄAf CfNfi[fgf“,Ì@,³‰œüŠv,δ,·,×,Ä,Å,Ô,μ,ÄŒ³,É—
ß,μ,Ä,μ,Ü,¢,Ü,μ,½B
@Ží,δŽæ,èŽdØ,Ä,Ä,¢,½,Ì,³ŽOl,Ìftf@f‰œfI,ÉŽd,|,Ä,«,½~V‘abf AfC,Æ«ŒrfzfŒf“fwfu,Å,·B

@,±,±,©,ç,Ì,C,ñ,C,ñ,z·œ,ÌcŠE,É“ü,Á,Ä,¢,Ì,Å,·,ªAf cf^f“fJ[ff“,ÌŽ€ø,Å,·B,©,é,Ìf~fCf‰,δfŒf“fgfQf“,É,©,¬,½,Æ,±,é“aŠWŒä·û,ÉŒŠ,ª”
@,²,μ,½~äŽÒ,Íužž—,Ü,½,ÍŒ•,Ì,Ä,©,Ä“a•”,δ‘Ä,½,è,½,±,Æ,ª,æ,Æ,Å,«,½,ç,μ,¢v,Æ,¢,Ä,Ä,¢,éB·½ŽE,Ì‰œÄ“¤,ª, ,é,Æ,¢,¤,±,Æ,¾,ÈB[¶]í,Ì‰œŒ[,
.È,í,é,Ä,¢,½,Æ,μ,½,çA,³, A”Æl,Í’N,©B
@fcf^f“fJ[ff“,Ìf~fCf‰,Í’¾,à,à,³Ùí,É×,¢B3f~fŠ,μ,©‘ä‘Ú•”,Ì“‡,ª,È,¢B,D,å,Á,Æ,μ,½,ç·asç“í,ÈáŠQ,ª, ,Á,½,Ì,©,à,μ,é,È,¢BŽŒ—
R,É·à,¬,È,¢fcf^f“fJ[ff“,Ì,¤,μ,é,É,ß,Ä,¢,Ä“a,δŒ•,Ì,Ä,©,ÄfSf“,Æ·Ä,Á,½ŽÒ,ª,¢,é,Æ,μ,½,çB

@

@fcf^f“fJ[ff“,ÌŽŒŒftf@f‰œfI,Æ,È,Á,½,Ì,Í,©,é,¾,Á,½,Ì,Å,·Bf Af“fPfZfi[ff“,Ì,RL—Ú,Ì•v,Æ,μ,ÄB

@fcf^f“fJ[ff“,ÌŠ»,Ì•”‰œ®,Ì—×,Ì•”‰œ®,©,ç,Í,Uf—ŒŽ,Æ,Vf—ŒŽ‘È,Ì·ÙŽ™,Ìf~fCf‰,Q·Ì,©,Å,©,Å,Ä,¢

,Ü,·B,©,ê,íŽq,C,à,³/4,AE,μ,½,çA•êe,ÍcfAf“fPfZfi[ff“,Å,μ,å,¤B’ŽY,³/4,Á,½,ì,©A’†å,³/4,Á,½,ì,©B,D,å,Á,AE,μ,ÄŽY,ì‰¤Ê,ð,Ë,ç,¤ŽÀ—íŽÒ,É’†å,ð<§,³,ê,½,ì,©B’z‘œ,Í,Ó,
@•vfcf^f“fJ[ff“,ðŽE,μAŽC•,íŽq,C,à,ð’†å,³,¹,½,j,ÆŒ¤¥,δ,μ,È,¬,ê,ì,È,ç,È,ç,Æ,ÍBfAfC,“Æl,Å,È,ç,É,μ,Ä,à‰½l,a”Nä,ìVI,ìÈ,É,È,ç,È,¬,ê,ì,ç,¬,È,©,Á,½fAf“fPfZfi[ff“,Í,C,ñ,È<CŽ,ç,³/4,Á,½,Å,μ,å,¤,ËB
@žA,ÍfJ[f^,fcf^f“fJ[ff“,íšS»,íšW,ðSj,¬,½,Æ,«A’å”“£,è,ílŒ Š»,íšz,ìa,É¬,³,È‰¤O—O,“u,ç,Å, ,è,Ü,μ,½B,·,Å,©,ëfhf‰cfCftf
‰cf[,É,È,Å,Á,é,ñ,¾,¬,ç,ËBfJ[f^,ÍAf cf^f“fJ[ff“,íša“,ì,È,©,ÅA‰¤©à,â,ó,Å,Å,«,½,½,
@^¤,·,é•v,ðŽ,Å,½fAf“fPfZfi[ff“,Å¤ä,íšW,ð•Å,B,é•O,É,»,Å,Æ•u,ç,½,ì,©,à’m,ê,Ü,!,ñ,ËB
i•t•L@2005°N,É,¬,±,È,í,ê,½fcf^f“fJ[ff“,í,fcf‰,ì,b,sfXfLfff“²,Å,íAž€í¼O,É,«,É,Đ,C,¤œÜ,ð,μ,Å,ç,é,±
,Æ,“í,©,è,Ü,μ,½,“a•”,É,íÙí,í”
@,³,ÅA,» ,íŒä,àV‰¤,ííšOŠ~“®,Éí,É“í,ÅfVfŠfA•û—È,ÅŠOŒðS~“®,ð’±,¬,Å,ç,Ü,·B
@šo,|,Å,·,ç,Å,¬~μ,ç,ì,“O,P,Q,W,T”NAfJffVf...,í,çBV‰¤,Æfqfbf^fCf,æ,í,Å,·B,±,ê,“È,“åž-,©,Æ,ç,¤,ÆAfqfbf^fCf,ížjá,í,ß,Å,“SSí,ð»íA—~
p,μ,½,Å,·BfGfWfvfg,íå“ší,Å,·B,¾,©,çA“SSí,“åž,“ší,í,åžíA,Æ,ç,¤,í,¬,Å,·BŒ‰¤,ífqfbf^fCf,íY—~,Éí,í,Å,½,ç,μ,çB
@,±,í,ç,ìL~,“AfGfWfvfg,Å,àAfqfbf^fCf,í, ,Å,½,“fAfWfA,Å,à“y,μ,Å,ç,é,Æ,ç,¤,“_,Å,à—L—½,Å,·B

@,±,ê,“ÈŒäAfGfWfvfg,íuŠC,ì,¬v,Æ,ç,¤,æ,

@,“,íŒäA^éžž•œŠ,·,éžžŠú,à, ,é,ì,Å,·,“A,Æ,è, ,|,·,±,±,Ü,Å,Å^é’í—ž,Å,·B
@—L—½,ÈfNfŒfIfpfg‰,“oê,·,é,ì,í,à,Å,Æ, ,Æ,í,“b

(20020227%üe)

ŽQI}•D%¤íEEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,½,ç,Æ,ç,í	
‘-½,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^ flfbfg“XufAf}f]f“v,ífy[fW,É”ò,ñ,ÅA—{,íff[f^A‘•],È,C,ðŒ©,é,±,Æ,“Å,“,Ü,·Bw“ü,à‰¤Å~“Å,·B	
fcf^f“fJ[ff“,í“åu’kžDŒ““åV“ (749) cover	fcf^f“fJ[ff“,à,ì,í,½, “é”ÖA“üžè,μ,â,·,A“ç,Ý,â,·,ç,Æžv,ç,Ü,·B

‘æ,T‰¤ñ@fGfWfvfg•§—³/4@,·,í,è

,±,ñ,È~b, ð,Æ,Å,μ,

[fgfbfvfy\[fW,É–B,é](#)

[‘O,ífy\[fW,Ö
‘æ,S‰¤ñ@fflf^f~fA•§—³/4](#)

[žY,ífy\[fW,Ö
‘æ,U‰¤ñ@ŒÅ‘äflfŠfGf“fgžj,í“WŠJ](#)

@

eŠEŽjuč~

‘æ, U%eñ@fIfŠfGf“fgŽj,l“WŠJ

fCf“fhf”[ffbfpŒœ°,]“o

@“-RAÅ,å,L,@,ç,å,Á,½fjflfjA~f~fA’n•ù,É’Ù,Z,µ,½W’c,à,ç,Ù,µ,½B,©,ë,ç,“Å‰e,É,±,l’ñæ,Å,Å
@fafbh,fçfcfaL,f~f~fiaAflfbhVfçfiaÅ,·B

fqbfb^fCfs

@ZÖ-ÖÉ-ÚBxFJ||fN,ðZg,Á,Á,é,Á,þ,Á,B'È!O,ÍZÖ-Ö,ÍSÙ,Þ,Ó,Á,é,Á,ð,Á,ð,Þ,f,í,Á,Á,Á,é,Ó,þ,þ,·,d,é,í,Á,·,B,Æ,±,é,·,f,XfJ||fN,Íl-p,É,é,Á,ÄZÖ-Ö,·,Fy-É‰,·,Á,·,A!ZÖ,ÍfXfsl,fh,·@fqbfb!fCg,ÍAfGfWfvfgV‰,·,AfVfÍfSf'an!n,·-l-LÆ,·,ð,þ,·,Á,þ,fCf,·,SÖEW,É,·,é,Ó,þ,·,B

@ŒAFofrffjfjA—Ä—SŒÄAf/j/f/j/f~j~f~j~A,l~k~*,ÆŒÉ~.,p.,½.,l~f~f~f~f~jfBjG/Wfvg,j,C,çfGfWfvg,É‰Ä,A,é,¼,A,E,e,f,i,e,A,c,u,-,·

@ff\flf^f~fA,l'+`l•",ÉŒS„,μ,½,ł,^fJfbfV[fgB,©,ê,ç,í,»,ê,U,Åc„,«,¾,Á,í

fAf%of

@_U,_A|A%f@_B@_C,g^a=+->_A,B@_S^zS^z,Jv\$AaJ|J|/JX|N[XB^P^e@_B@_S^zA@_A@_E@_L@_I@_d@_A@_E@_R@_-,@_B@_A@_f@_d@_I@_J@_B@_C@_A@_E@_L@_F@_G@_P@_E@_A@_U@_m@_l@_E@_E@_E@_A@_A@_U@_B@_I@_E@_J@_M@_S@_V@_F@_E@_C@_E@_E@_E@_U@_C@_B@_C@_G@_I@_Z@_Z@_A@_A@_f@_f@_E@_E@_B@_G@_f@_E@_E@_D@_B@_A@_E@_A@_F@_Z@_A@_f@_E@_Z@_A@_C@_E@_U@_B@_C@_f@_h@_f@_J@_W@_A@_Z@_g@_Z@_s@_A@_E@_I@_Y@_E@_f@_Z@_B@_L@_A@_E@_A@_I@_A@_O@_J@_H@_C@_E@_C@_O@_Z@_E@_m@_Z@_s@_e@_U@_B

'n' + ŠC 'CEŠÝ, I' - -

@ftfFfjfLfAl

@@'n;†ŠC-ƒØ,ÀŠ-6,µ,½,ł,„ftfFj/fL/fAI,À,·B,·+S“šZs,ÍfVfh„Afe/Bf,·XB

@fw:fu:f%:fC

^afwfwf% - fCIB © 8 c { }@c³ Å - E 12z; a E 8 } .

@ C n È O g È f ÷ f f c³ a Å

@fwfu%Fcl,^Wc,*@,é,ÁfJfS/Gf*fg'ñæ.l.,é,é,é,Á—V-q,ð'ñS,Éé,ç,µ,Á,e,%B
@O,P,T,O,O,N,ñ*,fpjEfxfjñññ,É'ñZ,ðSñZñ,µA,0,%é,ñWc,fJfGfWfvfg,É'ññ@,µ,ñU,ñV
@,é,é,é,AfGfWfvfg,é,ç,µ,l,æ,

@<E->n¹,!fCfXf%ef%<3,A,a^d,d^3,_e,e^1T,A,-BfCfXf%ef%<3,!<E->n¹,!F,B,U,-,AfcGfGX,δ~εZā,Æ,I,¹,A*Æ,I-aE%ZÖ,Æ,μ,ÄI,!,U,

@,_È,Ý,ÈŽ,,Ù,À,È-ñAV-ñ,ð,È-ñAV-ð,ÆŠ-æ,þ,À,ë,Ù,µ,½B¶(Èž²),ÌçÄ,ç-ł-ð,ÆAØù(Èž),IV,µ,ç-ł-ð,È,ł,©,È,À,À,EB”n
@,¾,©,çAfeFxJg,À,È-ñ”,Æ’,ç,È,ç,æ,ø,ÉB,È-ñ”,À,·B

‘æ,U%en@fIfŠfGf“fgŽj,ì“WŠJ@,”,í,è

,±,ñ,È`b, ñÆ,Å,µ

fg fb fv fy [fW, É-B.]

'O.]fy[fW.Ö
'æ.T%oñ@fGfWfvf g•¶—

ZYJfyfWÖ
:æ, V%eñ@fAfhfVfŠfA.ç,çfAfPfflfX.ç

čŠEŽju<~^

‘æ, V%oñ@fAfbfVfŠfA, ©, çfAfPfflfX'©fyf< fVfA@

fAfbfVfŠfA

@‘O,Wç<I, ©, ç‘O,Vç<IAff\f
f~fA, ©, çfGfWfvfg, Ü, Ä, ìfIfŠfGf“fg‘S~æ, ðfAfbfVfŠfA’é‘, ^ê, µ, Ü, µ, ½B
@, ±, ï‘, ðCEšY, µ, ½fAfbfVfŠfAl, ìfZf€E€En, Ä, ·B‘O, Q, Oç<IÈ‘O, ©, çfefBfOfŠfXìä—, ìfAfbfVf...
[f<, ÄE, ç, o“sŽs, ð’†S, ÉCEð’ÖS^“®“tm, ð, µ, Ä, ç, Ü, µ, ½BCEÄfOfrrffjfA%oç‘, ãf~f^f“fj, É•ž‘®, µ, Ä, ç
, ½, ï, Ä, ·, ^A‘O, P, Sç<I, ÉA^êŽž“Ä—§, ð%oñ•œB, », ìCEä, Ü, ½, µ, ï, ç,

@, ÄE, ±, ë, ^O9ç<I , ©, ç<}‘, ñ, É‘—Í, ðL, ï, µ, Ä, «, Ü, µ, ½B
@, ±, ìZžŠú, , ç, ç, ©, çAfIfŠfGf“fg, ì“SŠíZž‘ä, É“E“ü, µ, Ü, ·BfAfbfVfŠfA, ï, ±, ê, ð, o, Ü,
Žæ, è“ü, ê, é, ÄE“Zž, ÉA”òCE, ð‘gD, µ, Ü, µ, ½B
@, », µ, Ä<R•o·à, ð“±“ü, µ, Ü, ·B<‰òE‘, ìfAfbfVfŠfA<R•o, ì•, «’o, èŽÈ^, ðCE©, é, ÄE, ±, ï<R•o, ì<, ð, Ä, ^, Ä, ç
, Ü, ·, ÈB”n, É, Í, Ü, ¾ÄE, à, , Ô, Ÿ, à, Ä, ç, Ä, ç, Ü, ^, ñB
@“R•o, ^ÄE, ^, È, çó‘Ô, Ä‘,, ðŽ, Ä, Ä“G, ð, Ä, , ÄE”½“®, Ä”n, ì, o, µ, è, É”ò, ñ, Ä, ç
,

@‘O,Wç<I—, ìfTf< fSf“, Qç, ìZž, ©, ç”ò—ò“I, É—ì“y, ðŠg‘å, µ, ÄA, », ìCEäA^êŽž, ìfGfWfvfg, àŽx”z‰o, É, ^, ç
, Ä—ñ100”NŠÔAâ’, Šú, Ä, ·BŽñ“s, ìfjflf”fFB

@fAfbfVfŠfA, ï‘S‘, ð‘®BA‘®‘, ÄE, µ, ÄA‘½,
@’iR, µ, ½“sŽs, ìZ—, ìJç, ð”, ç, Äé•ç, É“\, è, Ä, —, ½, èA<øŽh, µ, É, µ, ½, èA, ÄE, É, ©,
‰Y, ^, |, Ä, —, è, à, ï, Ä, µ, ½B
@, », ì‘ä•\, ^u<§“ÜZ
@, ±, è, ïA*i*R, µ, », o, È‘n•û, ì—“o, ð, ^, Ä, », è•È, ìeŠ, É“ÜZ, ^, ^, è, à, ï, Ä, ·B
@JŠ^, ìŠi”O, ð‘D, í, è, ÄA^ê, ©, çJŠ^, ð‘z, ç, Ä, ç, ©, È, —, è, ï, ç, —, È, ç, ©, çA, ±, è, ð, à, ç, è, ½—“o
, ìfAfbfVfŠfA, É“iR, ·, è, Ç, ±, è, Ä, ï, È, è, è, í, —, Ä, ·Bu<§“ÜZv, È, ñ, Ä, ç, o, È³/4, ç•û, ïA, Ü, ¾, Ü, ¾—
D, µ, çB“i—“no

@, ±, o, ç, o, ^“3“I, È—Í, É, æ, èŽx”z, ï<
@, o, Ü, çŽx”z, ÄE, ç, o, ì, ï^, ÄEf€f, ðäŽè, ÉŽg, ç•a, —, è, à, ï, Ä, ·, ^AfAfbfVfŠfA, ìê‡, ìf€f f€f, ^, Ä, ½B
@100”N, Ü, ÇÄ·Šú, ^, è, ^, ½, , ÄE, ïAŠe’n, Ä”½—, ^, o, p”, µA, , Ä, —, È,
@-k•û, ìfXfLf^fCl, ìUCE, , ÄEŽx”z‰o, ìfJf<fffAlAffffBfAl“tm, ì”½—
, ÄŽñ“sfjflf”fF, ï‘O, U, P, Q”N, ÉŠx—Ž, µA‘O, U, O, X”NAfAfbfVfŠfA’é‘, ï—Ä—S, µ, Ü, µ, ½B

Žl‘•a—§Žž‘ä

@fAfbfVfŠfA—Ä—SCEäAfIfŠfGf“fg, É, ïZl, Ä, ï^, ^, Ä, «, Ü, ·B, ±, è, ðŽl‘•a—§Žž‘ai‘O, U, P, Q‘O, T, Q, Tj, ÄE, ç
, o, B

fAf_bfVfŠfA, ©, qfAfPf□flfX'©fyf<fvfA
 @, Ü, , ff\flf^f~fA, ©, cfVfŠfA, É, ©, —, Ä, ï, ç, í, ä, éú”í—€, È, ŽO“úŒŽ'n‘Ñv, ð’†S, ÉŒs‘, µ, ½, ï, ^VfofrffjfA
 %o¤‘BfJf<fffA%o¤‘, Æ, à, ç, ç, Ü, ·BfofrffjfA, ï“i•”, É, ·, ñ, Ä, ç, ½fJf<fffAl, ïŒs‘, Ä, ·B“s, Ífofrff“B
 @, ±, ï‘, ï%o¤, ÍflfufJfhflfUf<, Qç, ðŠo, |, éB‘O%oñ, à, Ä, Ü, µ, ½Bf†f_%o¤‘, ð—Ä, Ú, µ, Äfofrff“•BŽú, ð, “, ±
 , Ë, Ä, ½%o¤, Ä, ·B
 @, ±, ê, ÍAfAfbfVfŠfA, ïô, ðŽó, —Œp, ç, Ä, ç, é, í, —, Ä, ·BfAfbfVfŠfA, àfCfxf%oGf<%o¤‘, ð—
 Ä, Ú, µ, ½, Æ, «, É<
 %o½Œlfofrff“•BŽú, Æ, µ, ÄAf†f_f, „³—§, É‘å%oœ<ç, ð—^, |, ½, ©B•sŽv<c, ÉŽv, ç, Ü, , ñ, ©B‘åŠw, Ä
 —ðŽj, ðêU, ·, él, ï, ±, ç, ç, ±, Æ, ðŽC•a, Ä’², ×, Äl, |, é, ñ, Ä, ·, æB

 @¬fAfWfA, ÉŒs‘, µ, ½, ï, ^SffffBfA%o¤‘B, ±, ï‘, ÍÅŒÄ, ï’‘, ç%oÝ•¼, ð‘ç, Ä, ½“, Åd—vB
 @fMfŠfVfA•û—È, ÆfVfŠfAAff\flf^f~fA, ðŒ<, ÔŒð^O~H, É, , Ä, ½, ±
 , Æ, ÆŠO~A, , , é, ï, Ä, µ, å, oB, ©, Ä, ÄA, Ü, Ú“—, JéŠ, É, , Ä, ½fqfbf^fCfg, ÅÅŒÄ, ï“S, , , ±, Ë, í, ê, Ä, ç, é, ±
 , Æ, ðl, |, é, ÆA, ±, ï‘n^æ, í%o½, ©“ÁŽê, Èà‘®%oÁH, É, Ä, ç, Ä, ï““, , Ä, ½, ï, ©, à, µ, ê, È, çB

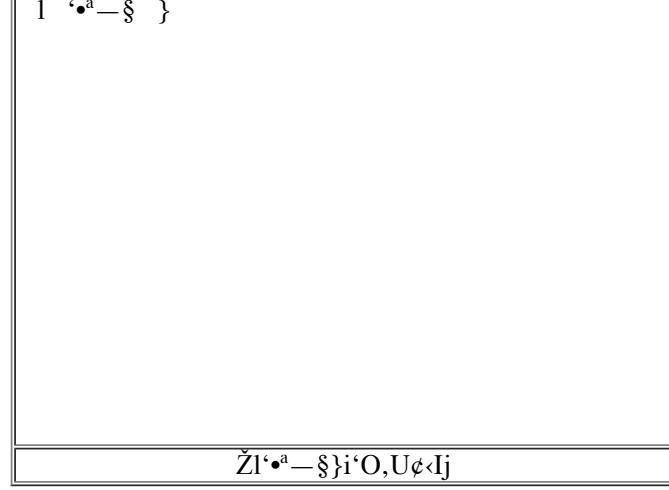
 @fCf%oF“, œ‘, ð’†S, É, Ä, «, ½, ï, ^AffffBfA%o¤‘B

 @fGfWfvfg, Í“Æ—§, ð%oñ•œ, µ, ÄfTfCfx‘©, , Ä, «, Ü, ·B
 1 ‘•a—§ }

 fAfPfflfX'©fyf<fvfA

 @Žl‘, ·, ×, Ä, ð“^ê, µ, ½, ï, ^fAfPfflfX'©fyf<fvfAB~fAfWfA, ©, cfCf“f_fxì, ÉŽš, é‘å‘é‘, ðŒšÝ, µ, Ü, ·B
 @fAfPfflfX, Æ, ç, o, ï, ï%o¤œ, ï—¼‘O, Ä, ·B, , Æ, ÉfTfTf“©fyf<fvfA, Æ, ç, o‘, à, Ä, «, Ü, ·, ï, ÄA, ±
 , ê, Æ<æ•È, , é, ½, BŽZŒ±, Ä, ïufAfPfflfX'©v, Æ•K, , Ä, —, Ä,
 @fyf<fvfAl, Ífcf“fshf^ffbfpŒê‘°, ÄA“—, J—“°Œn“, É‘®, ·, effffBfA, É•ž‘®, µ, ÄfCf%oF“, œ
 “i•”, ÉZ, ñ, Ä, ç, Ü, µ, ½B
 @‘O, T, T, O”NAffffBfA, ï
 @, , ïŒä, ç, Ä, ½, ñ%o¤Ê, ð, ß, ®, Ä, Ä“à—ð‘Ô, É, È, é, ï, Ä, ·, ^A, ±, ï“à—
 , ð‘Ä, ß, Ä“^ê, ð%oñ•œ, µ, ½, ï, ^fŒfCfIfX, Pç, Ä, ·B, ©, ê, ÍŽC•a, ïÄ“^ê, ïŒ÷N, ð‘L”O”è, ÉŽc, µ, Ü, µ, ½B, ±
 , ê, “È‘O, “~b, µ, µ, %i‘æ, S%oñjfxfqfXfgfD[f“]e•J, Ä, ·B, ©, ê, ïŽž‘ä, ^fAfPfflfX'©, ïâ, Šú, Ä, ·, ËB

 @, ©, ê, Í‘é‘, ïŽx”z§“x, ð®”ð, µ, Ü, ·B
 @, Ü, , ‘S‘, ð, Q, O, ïB, É•a, —, Ä““Ä, ð”hŒ



,¤B,±,ê,ªAf]ffAfXf^[<³,luÅŒä,lr”»v,Å,·B

@,È,ñ,³%,©AfLfŠfXfg^{<3},Ý,^½,¢,Å,µ,åB,Æ,¢,¤,±
 ,Æ,ÍAf†f_f,,^{<3},É,à,»,Á,
 ,¤,Æf]ffAfXf^[<³,È,ñ,Å,·Bf†f_f,,^{<3},l~¢žå‘ò]žv‘z,åÅŒä,lr”»,lši’o,ÍAf]ffAfXf^[<³,l
 %oe_ç,ðžó,“,Ä,Ü,ê,^½,Æ,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·B
 @,ç,È,Ý,Éf†f_f,,^{<3}AfLfŠfXfg³,Íf,,fnfEfF_M^Å,l̄e_<³,^¾,Æ‘O
 %oñ,~b,µ,µ,^½,^aA¹,ð“ç,ñ,Å,é,Æ,“,©,µ,È,à,ì,ª,Å,«,Ü,·B_,Å,àl,Å,à,È,¢B%o½,©,Æ,¢,¤,ÆA,±
 ,ê,^a«⁻,Å,·B[“]⁻,Å,Ä[“]l%o½žò,È,ñ,Å,µ,å,¤B,±,ê,Í_,l̄eží,Æ,µ,©l,|,æ,¤,ª,È,¢B<œ-
 ñ¹,lu^ffu<Lv,È,ç,Å,ÍA_,[“]⁻,l̄’§”
 ,Æ,Ù,Æ,ñ,C““,JfŒfxf<,Ä[~],µ,Ä,¢,é,ì,Å,·B
 @,±,l̄’“⁻,àf]ffAfXf^[<³,l̄fA[lfŠf}f“,af†f_f,,^{<3},l̄’†,É[“],êž,ñ,^¾,l̄,Å,í,È,¢,©,Æ,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·Bfwuf
 %oCl,ÍAfAfPfflfX’©,l̄žx”z%o°,Åf†f_f,,^{<3},ðšm—§,µ,Ä,¢,Å,^½,l̄,Å,·,©,çA,»,¤,¢,¤,±
 ,Æ,à, ,ë,¤,©,Æ,¤,È,Ä,“,Ü,·,ËB

@,±,l̄f]ffAfXf^[<³,ÍA^½•û,l̄fwuf%oCl,^¾,“,Å,È,
 @fAftf%o{
 fYf_,ÍfCf“fh,É“ù,èŒö⁻^¾•§f”fbf[fVffffi,É,È,ë,Ü,·B,³,ç,Éf”fbf[lfVffffi,l̄’†‘A’©‘N”^½“‡,ð’È,Å,Ä“ú-
 {,É,à,â,Å,Ä,«,Ü,·B,±,ê,“ùá,žò“b•§i,ñ,é,µ,á,È,Ô,ÄjB“P—ç,ì,å§,³,ñ,Å,·Bž,A¬šwZ,íCSw
 —s,Ås,«,Ü,µ,^½,ªAŒö⁻^¾_fAftf%o{f}Yf_,^¾,Å,^½,ñ,Å,·,ËB

@ž‘—çW,Éf]ffAfXf^[<³Vž®,l̄žÈ[“],a, ,ë,Ü,·BŒ»Ý,Å,àMžò,a,¢,é,ì,Å,·BfCf%o{,É,S-
 œ,TçlAfCf“fh,l̄f{f“fxfC,ð’†S,É,P,O-œl,Ù,CMžò,a,¢,é,Æ, ,ë,Ü,·B,±,l̄žÈ[“],l̄,È,é%oÌ,ð[•],¢
 ,Å,»,l̄’O,Åöži,ªAf”fFfXf^[],ð%or,ñ,Å,¢,é,æ,¤,·,Å,·B

@,“,Ü,“,l̄bBf}fcf_Z©“®žò,Æ,¢,¤,œižò,a, ,é,Å,µ,åBftf@f~fŠfA,Æ,©,Å,
 @½“c,³,ñ,Æ,¢,¤,l,“n<œžò,Åf}fcf_Z©“®žò,È,ñ,Å,·,ªAffSf}{fN,íumazdav,É,È,Å,Ä,¢,éB
 %o½ŒìA[“],ñ’†,af[fbfg,È,ì,©,Æ,¢,¤,ÆAfAftf%o{f}Yf_-,©,ç,Æ,Å,Ä,¢,é,Æ[“],¢,½,±
 ,Æ,a, ,ë,Ü,·BfRf}{fVffff,ð[•],¢,Å,¢,é,ÆA Šm,©,éufUfbfcEf}{fYf_v,Æ[“],±,|,Ü,·,ËB
 @f]ffAfXf^[<³,Ý,^½,¢,Éf]fsf...f%o[,Å,È,¢,à,ì,ç,Æ,é,È,ñ,ÅA,È,ñ,^¾,©š’S,·,é,ËB

(2002/3/5Z³)

‘æ,V%oñ@fAfbfVfŠfA,©,çfAfPfflfX’©fyf<fvfA@,“,í,è

fgfbfvfy[fW,É-ß,é

‘O,ìfy[fW,Ö
 ‘æ,U
 %eñ@fIfŠfGf“fgžj,ì“wšj

žy,ìfy[fW,Ö
 ‘æ,W%eñ@“œ’ñ’†šc
 ¢SE,ì•j-¾

,±,ñ,È`b, ö<Æ,Å,µ,

eŠEŽju<^~^

‘æ,W%oñ@“Œ’n’†ŠC,ì•¶-¾@¢

fNfEf \wedge J-3/a

@fGfWfVfg,âFfSfA,â”-“-,îS“@,“S”,É,É,é,ÆA-n’†SC,â’É,J,A,îCéðÖ,âJ,U,é,A,«,U,µ,«B’E’n’†SC%’SÝ,AE,»,±,â,Ó,“Ô”X,I,„ç,¼,ÉŒd’ÔŒ-,”
@,±,îCéð’ÔŒ-,”,É,J,U,é,%,â,J,fNfCéfH-J-3/4,Å,B•J-3/4,ÆŒÄ,Ö,A,e,ç,É-a’K-I,É,a,I,Ä,I,É,ç,Ä,-,A,±,ñ,É-a,«,ÉŒ3/4,çøû,d,·,é,I,ífMfSfVfJa•J-3/4,I,2^c-a-c-l,ñ,É,u,É,é,C,ç,Ä,µ,â,ç,ÉB

f~fmf^fEffX“>

@ + n E~h Å · E

@fNfŒf^“‡,É,Íf~fmf^fEffX,Æ,¢,¤‰»,,¬•,^Z,ñ,Å,¢,Ü,µ,½

@fNfEfA,ÉZX”z,³,é,Ä,é,½fMfšfVfA,lfAfefl,l,¬,l,~”Nf~fmf^fEfFfX,Éj,¬æÑ,ð,³,³,°,È,¬,é,î,È,ç,È,é’è,B,É,È,A,Ä,e,U,μ,½Bj,¬æÑ,Í”

@,±,Íf~fmf^fEffX,Í‰o½ŽÒ,©,Æ,¢,¤,ÆA,»,ê,ª,±,ñ,È~b,É,È,Á,Ä,¢,

“我就是想让你知道，你不是唯一一个被选中的人。而且，你并不是唯一一个能够完成任务的人。”

© ŽV U České Budějovice, 2009, vydáno v rámci programu podpořeného Evropskou unií.

•@ZY,U,e;zzq,ç,A;ASq;~A;ISO,Æ,c;wco,~?;74,A;B;B;E,C;J~M~J~J~E~J~F~J~A,B

$\hat{E} f_1 f_2 \dots f_n \leq E f_1 E f_2 \dots E f_n$

$\oplus \mathfrak{e} \times u, A, \gamma_2, \zeta, \Pi x, \text{IE}, A, \zeta, \wp, E, -C - A, H, \Gamma_1, a, A, \cdot B, \pm, \Gamma_1, a, \Gamma_{1000} E, I, \text{f} \neq j \cup S, J, A, E, \wp, \cup - \gamma_{41}, \Gamma_2 \otimes u, \wp, e, A, \zeta, \gamma_2, I, AA, \pm, I - A \wp, \cup, \text{of } \neq j \cup S, J, \text{fg} J, A, E, \wp, \wp, U, \cdot B \neq \wp, E, I - A, H \neq j \cup S, J, \text{fg} J, A, E, \wp, \wp, B$

$\textcircled{2}$ $\exists f \wedge f \in \mathbb{C}$

U>,e,·;e,1,A,·,æB

© 6A 6S 6A 6S 6S

جذب الماء من التربة وتخزينه في الأوعية الحيوانية، مما يزيد من إنتاج المحاصيل.

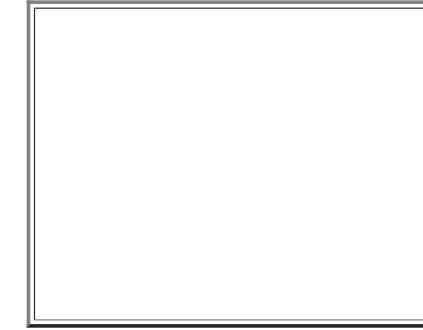
@-A<{,E•A,¶,±,ß,ç,é,½fe[f

@,ä,„,Af~jmj^fEfjF,Æo%oí,A,A“„,ä,í,A,„,AfAjsfAjhfj,©,ç„,„,ë,„,½ZD•,ðZg,A,Af~jmj^fEfjF,ð„,„,ä,„,A,„,½BA

@J, æN,ð,³,³,°,é,AÈ,¢,¤,I,IZAU,E, ,A,½~b,©,à,µ,ê,

“EN” ŠC Č-3/

@,Ù,½fNmfbfJX<“a,É,Í,ð*,¢,½Ç%œæ,à,Á,½
@fvfŠf“fgŒ®,Ä,



1

$$f \sim fP[f] \bullet \mathbb{J}^{-3/4}, \mathcal{E}fgff,, \bullet \mathbb{J}-$$

@fNfŒf^•¶–¾,Í‘O,P,T¢*I*,É,Í–Å,Ñ,Ü,μ,½B—R,Í,a

@fNfCEf^J-3, l-Ä-S, Ä-EDEä, µ, ÄAfA fJfCf Al, f~fPfJfI^J-3, ñ, Ä, è, Ü, -B, ·l, I^J-3, fÍO<>%oÄ, È, ç, Á, ½, Ù, n, a, ç, @, Ü, %Ä, "oŠfI^J-3, l-šK, ÄA %oÄ, f, l, i, l-fMfŠfVfA^J-3, l, æ, ç, È-Žä“i, È, à, l, Ä, í, È,

@*f*ggf,*f*^{-3/4},*I*⁻¹,*O*,*Q*,*U*,*O*,*O*⁻¹*N*⁻¹*E*,*C*,*c*⁻¹*Y*,*μ*,*A*,*φ*,*U*,*μ*,*½B*⁻¹*fAfWfA*,*I*⁻¹*fgf*,,^a⁻¹*TSB*,[±],*ē*,*ā*⁻¹*S*⁻¹*R*,*Ā*⁻¹*%oAE*,*I*⁻¹*IA*⁻¹*En*,*I*⁻¹*s*^{-3/4},*A*,*·*

@f~fP[f]l³/4,ägf^{ff},⁴l³/4,ä'0,P,Q,O,O'N-Å,N,Ü,B⁴,J,AQsfqb/f^fCfg,^a-Å,ÑA/GfwfvfgV%o^c,äuSC,Å-l^v,Æ,c,^oä'ÍW^c,ÉP,I,ë,Äzä'Í%o^c,µ,A,c,U,B¹/2,Ö,nA-¹/2,Û[®],Å,E,C^äK-Í,Æ^íï[®],^a,Å/2,l¹,Å,µ,a,^cB

@,±,Ì“ñ,À,Ì•Ј-¾,Ì•Ј-¾,»,Ì,à,Ì,æ,è,àÀ

@,»,ê,^fhfCfclAfVf...fS[f}f“B,P,W,V,O”N‘å,É,±,Ì“ñ,Â,Æ,

@,©,ê,Í—c,¢ ,©,çQ•Œê,É,¢,Â,àfMfŠfVfA_~b,ð“Ç,ñ,Å

,½,ÍB[~]ÁD,«,È,Í,fgf_g,í,»,ÍbB[~]Ál,É,È,Á,½,çá,Í,Éf_gf_{ff},,Í,`-,ðŒ©,Á,-,æ,¤,ÆZq,_YS,ÉŒ[~]Ó,.,é,Í,Á,B[~]-Žz,ÍfMf_SVfA[~]b,Í, ,

,È,©,Á,,ñ,À,„,³AfVf...fS[f]f“,”Ížá,¢,±,œ,©,¤,„,‘È’,¢,ÁÄo“,„,À,‘à,°,Œ,÷,μ,ÀŽ,‘à,°,Ð,“,,ß,À,T,OÍß,À,Á,À,C,çäZY,ð“S,Ì,ÀŽ—,À,

@Žü^Í, ll, ½, i, f^nž

@,Æ,±,ë,ª,©,ê,Í”€

,Í„ñ,Ä,Í•¶Í„¾,ÍfVf...fŠ[f}f“,ÆŒŒ<,Ñ,Ä,¬,ÄfZfbfg,ÅŠo,|,Ä,“

@fVf...fŠ[f}f“,ÍwŒÃ‘ã,Ö,Ì”Mx,Æ,¢,¤Ž©“ ,ðo,μ,Ä,éB}’ŠÙ,É

—ðŽjŠwŽÖ,É,È,ë,%ç,ÆŽv,¤lAŒÅ,ç,é,Ý,%ç,ç,Å,·,æB

fgff, í“

<p>‘-¼,δfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^f]flfbfg“XufAf}f]f^v,łfy[fW,É”o,ñ,ÅA-(,łff[f^A^•],È,Ç,δŒ©,é,±,Æ,^,Å,«,Ù,·Bw“ü,å‰cÅ^v,Å,·B</p>	
fMfŠfVfA_¬b	DEà-łëZ,łfMfŠfVfA_¬b‰cðà‘BŽ,,,ž,Å,Å,ç,é,ł,łA^ç”Öä,I,à,I,¼,^A‰c°,łJŒÉ”Å,à“à-e,f^-,J,ÆŽv,ç,Ù,·B
fMfŠfVfA_¬b %e@ V^a¶ŒÉ..V^a¶ŒÉ ..	·½•AA,...łfMfŠfVfA_¬b,ł-{B’Pf,E“Ç,ñ,Å,à-È”,ç,µA^2,×,à,I,É,à-ð-§,Å,Ù,ÇA^†-;łZ,çB ,à,ç,ë,ñAfgff,,ł^,łb,åÙ,Å,ç,Ù,·B

‘æ,W‰cñ@“E’n’†ŠCçŠE,ł•¶-¾@,,”,í,è

,±,ñ,È~b, ö·Æ,Å,μ,

[fgfbfvfv\[fW,É-B,é](#)

‘O,łfy[fW,Ö
‘æ,V‰cñ@fAfbfVfŠfA,@,çfAfPfflfX’@,Ö

žY,łfy[fW,Ö
‘æ,X‰cñ@ŒÅ’äfMfŠfVfA

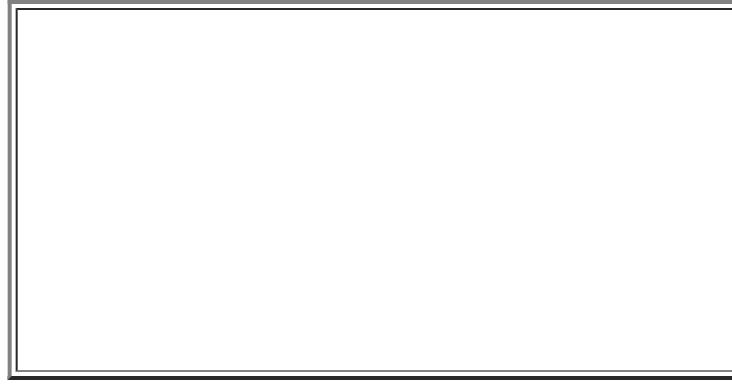
¢ E j u[~][~]

@@‘æ,X%oñ@ŒĀ‘āfMfŠfVfA@

-ÚŽŶ	,PŒĀ‘āfMfŠfVfA,ÌŽÐ%oř ,QfAfefl,ì—ðŽjE<M‘°Žj ,RfAfefl,ì—ðŽjEàŽYZžj,©,ç—ŽåŽj,Ö
------	--

,PŒĀ‘āfMfŠfVfA,ÌŽÐ%oř

@ ‘O,P,Qφ<I,Éf~fP[fI•J—³/₄,ª—Å,ñ,Å,©,ç”•S”NŠÔ,Í^Ã•Žž‘āBŽÐ%oř,ª,Ç,ì,æ,¤,³/₄,Á,½,ì,©,Í,æ,
,Ü,¹,ñB‘O,Wφ<I,É,È,Á,ÄAfMfŠfVfA•J—³/₄,žp,δ, ,ç,í,μ,Ä,«,Ü,·B
,±,ÌfMfŠfVfA•J—³/₄,Í,í,ê,í,ê,É‘å,«,È%oř<ì,δ—^,|,Ä,φ,éB,Ü,,A—ŽåŽå`‘,ìŒ³‘c,Å,·Bj,ì—ŽåŽå`‘,Í¹/₄%oř
,ÅJ,Ü,ê,½,ì,Å,·,ªA,»,ì¹/₄%oř,ÌIX,ªf,fff<,É,μ,½,ì,ª,±
,ìŒĀ‘āfMfŠfVfA,Å,·B,»,ê,©,çA“NŠw,âŒlp,È,Ç,í,ê,í,ê,É,È,J,Ý [,φ¹/₄%oř•J%oř],ìŒ³‘c,Å,à, ,éBfNf
%ořefX,Í•,φ,½,±,Æ,ª, ,é,Å,μ,å,¤B•§‘É, ,âEŽq,ì—{,Í%oř‘è}‘,É,È,ç,È,φ, —,ÇufNf%ořefX,ì•Ù—³/₄v,Í%ořÄ<x,Ý,ì
%ořU‘è}‘,É,È,é,ËB,Æ,φ,¤,í, —,ÅŒĀ‘āfMfŠfVfA,Íd—v,Å,·B



fMfŠfVfA•J—³/₄,ìeŠ,ðŠm”FAfof<fJf“”¹/₄“‡,ì“í[A,±,±,ªfMfŠfVfA—{“y,Å,·B,»,ê,©,çfCfIfjfA’n•ûA,±,±
,àfMfŠfVfAl,ìφŠE,Å,·BfMfŠfVfAl,ÍfCf“ fhf^ffbfpŒê‘°B‘O,Q,Oφ<I,©,ç,±,ì’n•û,É‘í
%oř,μ,Ä,«,½fAfJfCfAlA fCfIfjfAlAfh[fŠfAl,δ,Ü,Æ,β,ÄfMfŠfVfAl,Æ,φ,¤B
”P,ç,Í,±,ìfMfŠfVfAφŠE,ð“^ê,·,é‘å,«,È‘,ðì,é,±,Æ,Í, ,è,Ü,¹,ñ,Å,μ,½B ”P,ç,Í‘½,
,ÅJŠ^,μ,Ü,·B,»,ì“sŽs‘%ořÆ,ì,±,Æ,ðf|fŠ fX,Æ,φ,φ,Ü,·B
‘O,Wφ<I,É,ÍfMfŠfVfA,ìŠe’n^æ,ÌIX,ªW,Ü,Á,ÄZ,ÝŽn,ß,ÄflfŠfXŽÐ%oř,ªŒ`¬,³,ê,Å,«,Ü,·BW,Ü,Á,ÄZ,P,±
,Æ,ðWZ,Æ,φ,¤A“—,½,è‘O,³/₄,ËB,±,ê,ðfMfŠ fVfAŒê,ÅfVmfcfLfxf,fX,Æ,φ,Å,Ä,φ,Ü,·B%oř½Œì,©’m,ç,È,φ
,—,ç,±,¤,φ,¤PŒê,ª “üŽŽ,Å,«,©,ê,éB

“‘ä•\“I,Èf|fŠfX,ªfAfefl,ÆfXfpf<f^B flfŠfX,Ì^¢,à‘åŽ—,È,ì,Å%ořY,³,|,Å,“,¤,Ü,μ,å,¤B
f|fŠfX,ì^,ñ’†,É,Í,³/₄,φ,½,φ¬,φ<u,ª, ,éB<u,ìa,É,íéC,ª, ,Å,Äí‘^,ìŽž,±,ê,ªÅŒä,ìŽç,è,Å,·B,±
,ìéC,Í_“a,Æ‘ê,É,È,Å,Ä,φ,é,±,Æ,ª‘½,φ,¤,¤,Å,·BfAfefl,ìŽÈ^,ðŒ©,Å,
§,Å,Ä,φ,é,ì,Ífpf<fefmf“_“aB,±,ì’¬,ì’†S,Æ,È,é<u,ðfAfNfflfŠfX,Æ,φ,¤B

€Ã·ãfMfŠfVfA
fAfNfflfŠfX, Í, Ó, à, Æ, É, ÍfAfSf‰, ÆŒÄ, Í, ê, éLê, ^a, , è, Ü, ·B, ±, ±, ^aŽ; AŒo Í, Í†S, Æ, È, éBflfŠfX, ÍŽs-, B, Í
‰é, ^a, , Á, $\frac{1}{2}$, ç, ±, ±, ÉW, Ü, Á, Ä, \cdot , μ , á, \times , è, â, ‘Í‘, , é, Í, ËB
, » , ÍŽü, è, ÉŽs-, ÍZ[·]i, ^a-§W, μ , Ä, ϕ , Ü, ·B
ÁŒä, É, » , ê, ðŽæ, èŠ^a, ϕ , Äé•C, ^az, ©, ê, Ä, ϕ , éB
, ±, ê, “TŒ^“I, ËflfŠfX, Í“ ϕ , Å, ·B
, ÅA, ±, ÍflfŠfX, ÍŽü•Ó, É”[·]n, ^a, , Á, Ä, ±, ê, àflfŠfX, Í-Í“y, Å, ·B
, ±, ÍflfŠfX, Í-Íæ, Í‘å, «, ϕf , fm, Å, à“ú-{}, ÍŒ§,
, ±, ϕ , ϕf lflfŠfX, ^afMfŠfVfA-{“y, $\hat{a}fCfIfjfA$ ’n•û, É, ϕ , Á, Í, ϕ , , é, í, ^a-, Å, ·B

flfŠfX, É, ÍŽOŽí-þ, Íg[·]a, ÍZ[·], ^a, ϕ , Ü, ·B
, Ü, , Í \langle M[·]B
, » , ê, ©, ç[·] $\frac{1}{2}$ -^aB
, ±, Í“ñ, Ä, Íg[·]a, ^aŽs-, Å, ·B
, » , μ , ÄA“z-ê, ÆŠOlB”þ, ç, ÍŽs-, Æ, μ , Ä[·] μ , í, ê, Ü, ^a, ñB
fMfŠfVfA, Í“z-ê§ŽD‰oí, ÅA, $\frac{3}{4}$, ϕ , $\frac{1}{2}$, ϕ , ÍŽs-, Í“z-ê, ðŽ, Á, Ä, ϕ , ÄA”þ, ç, É”[·]ŽdŽ-, ð, â, ç, ^a, Ä, ϕ
, $\frac{1}{2}$, æ, ϕ , Å, ·B, , ÆAzŽR, È, ñ, ©, Å“z-ê, Í“
ŠOl, Í ϕ , „, Í, $\frac{1}{2}$, ß, É-^a, Ä, ϕ , éŽÒ, ^a $\frac{1}{2}$, ϕ B

@fAfefl, ÍŽÈ^, ðŒ©, Ä, à[·]^a, ©, é, æ, ϕ , ÉAfMfŠfVfA, Æ, ϕ , ϕ , Í, ÍŽR, ^a $\frac{1}{2}$, ϕ , Í, ËB[·]å, «, Ë[·] $\frac{1}{2}$ -
í, Í, , Ü, è, , è, Ü, ^a, ñB, $\frac{3}{4}$, ©, çŽR, ÍŽÍ-È, Å”[·] \langle Æ, ð, , éB‰oJ, à, , Ü, è~, ç, È, ϕ , ©, ç[·]•JŽY, É, ÍŒü, ©, È, ϕ B‰ $\frac{1}{2}$, ðì, Á, Ä, ϕ
, é, ©, Æ, ϕ , ϕ , ÆA‰oÈŽ÷Í[·]l, ÅAfufsh fE, Æ, ©flfŠ[fu, ð, , ñ, Éi, éB
, μ , ©, μ A, ±, ê, ÍffCf[·], $\hat{a}fIfCf$ [·], ÍŒ[·]-i, É, Í, È, é, ^aAŽåH, Æ, μ , ÄflfŠ[fu, Í, ©, è H, \times , Ä, é, í, ^a, É, Í, ϕ , ©, È, ϕ
, Å, μ , åB, ÅAfMfŠfVfAl, Í, Ç, ϕ , μ , $\frac{1}{2}$, ©, Æ, ϕ , ϕ , ÆA, ±, ê, ðŠCŠO, ÉŽ, Á, Ä, ϕ
, Á, Ä, ϕ , Æ[·]Ö, , Ä,
, ϕ , í, ^a, Å, ϕ ZžŠú, ©, çfMfŠfVfA, Å, ÍŠCä-f[·]Ö, ^a, ñ, É, \cdot , ±, È, í, ê, Ä, ϕ , Ü, μ , $\frac{1}{2}$ B
-L[·] $\frac{1}{4}$, È“NŠwŽÒ, Ífvf‰ofgf[·], à‰oÈŽ÷‰oÉ, ðŽ, Á, Ä, ϕ , ÄŽû“üŒ[·]1, ÍfGfWfvfg, Æ, Í-f[·]Ö, $\frac{3}{4}$, Å, $\frac{1}{2}$, ç, μ , ϕ , Å, ·B

-f[·]Ö, Å- \times , ^a, Ä-L, ©, É, È, Á, Ä,
, ±, ê, ð‰oðŒ[·], , é[·]û-@, ^a $\frac{1}{2}$, ñ, Ä, , Á, $\frac{1}{2}$ B
^ê, Ä, ÍŠCŠOA-, Å, ·B[·]ŠC‰o[·]ŠÝ, $\hat{a}fCf$ [·]fŠfA”[·] $\frac{1}{4}$ “‡AfVf[·]fŠfA“‡“TM, É, Ç, ñ, Ç, ñA -^a, μ , Ä, ϕ
, «, Ü, ·BA-^aŽs, È, ñ, Ä, ϕ , ϕ , $\frac{3}{4}$, ^a, Ç, ÈA, ±, ê, ^a, , ï, ê, ï•êŽs, à^a“w-f[·]Ö, É-L-^a, $\frac{3}{4}$, ÈB
fCf[·]fŠfA”[·] $\frac{1}{4}$ “‡, Í“í[, $\hat{a}fVf$ [·]fŠfA“‡‰o[·]ŠÝ, Í, » , ϕ , ϕ , ϕ fMfŠfVfAl, ÍflfŠfX, ^a, $\frac{1}{2}$,
fOfiEfOfŒfLfAA[·] $\hat{a}fMf$ [·]ŠfVfA, È, ñ, ÄŒÄ, Í, ê, Ü, μ , $\frac{1}{2}$ B
, à, ϕ , Ä, ^afMfŠfVfA, Í“à^a, Å, æ, » , ÍflfŠfX, ©, ç“y’n, ð[·] ϕ , Å, Ä,
, » , ñ, È, í, ^a, ÅfMfŠfVfA, Å, Í, μ , å, Á, i, ã, ϕ flfŠfX“-Žm, Áí^a, ð, μ , Ä, ϕ , Ü, ·B

@, Æ, ±, è, ^aAí^a, Í, ©, è, μ , Ä, ϕ , é, ñ, $\frac{3}{4}$, ^a, ϕ , Ç, àA”þ, ç, Í, ^aŒÝ, ϕ fMfŠfVfAl, $\frac{3}{4}$ A, Æ, ϕ , ϕ “-E[·]ÓŽ-, à^a, Ž, Á, Ä, ϕ , Ü, μ , $\frac{1}{2}$ B
, Ç, ñ, È, Æ, ±, è, Å“-E[·]ÓŽ-, ðŽ, Ä, ©, Æ, ϕ , ϕ , ÆA, Ü, , ÍŒ[·] $\frac{3}{4}$ -tB
fMfŠfVfAŒé[·]ÈŠO, ÍŒ[·] $\frac{3}{4}$ -t, ð[·]b, ·l, $\frac{1}{2}$, i, Í, ±, Æ, ϕ f[·]foffC, ÆŒ[·] $\frac{3}{4}$, Å, ÄŒy[·]Í, μ , Ä, ϕ , $\frac{1}{2}$ B
f[·]foffC, Æ, $\frac{1}{2}$ œ[·], ϕ Œ[·] $\frac{3}{4}$ -t, ð[·]b, ·l, $\frac{1}{2}$, i, Æ, ϕ , ϕ “Ó-í, Å, ·Bfxffxffoff[·]Œ[·] $\frac{3}{4}$, Å, Ä, é, æ, ϕ , È[·], ±, , $\frac{1}{2}$, ñ, $\frac{3}{4}$, è, ϕ , ÈB, ±
, ê, ^afo[·]fofŠfA[·]“A-í”Øl, Æ, ϕ , ϕ %opŒê, ÍŒê[·]Œ[·]1, Å, ·B

ŒĀ‘āfMfŠfVfA ‘S“y, ¨ZQ‰oÁ, ·, é, ¢, ë, ¢, ë, È, ‘Ó, è, ¨, , Á, ½B‘ä•“I, È, I, ¨fI fŠf“fsfA, ïÓ“TA, ¢, í, ä, éfIfŠf“fsfbfN, Å, ·B
·, ±, ê, Í‘O, W¢*I*, ©, ç, S”N, ², ÄE, É, , Á, ÄEŠJ, ©, ê, Ü, ·BŠef|fŠfX, ©, ç‘I, Ñ”², ©, ê, ½ ‘IŽè’B, ¨fIfŠf“fsfA, ÉW, Ü, Á, ÄA
‰o~”Ó“S, °, ÄE, ©fŒfXfŠf“fO, ÄE, ©Aí“, É’¼ÚŠÖ, í, é, æ, ã, È<ã> Z, ¨, †S, Å, ·, ¨A, »», ê, Ä%oh—_, ð<ã> f, ç‡, ã, í, —, Å, ·B—
DÝ, µ, Å, àÜ, <ã> à, ÄE, ©, È, ¢, —, ê, ÇA‘SfMfŠfVfA¢ŠE, É, »», ï—¼‘O, ¨, ÄE, Ç, è, «n, Á, ÄA—DÝŽÒ, ï’ã
‘œ, ¨i, ç, ê, Å, “a, É•o”[, ¨, ¨, ½, è, ·, ¨B—¼—_, È, ñ, Å, ·, æB
d—v, È, I, ¨ufIfŠf“fsfbfN, ï•½~av, ÄE, ¢, ã, à, I, Å, ·BfGfŠfX, ÄE, ¢, ãf|fŠfX, ¨fI
fŠf“fsfA, ïÓ“T, ðŽåÅ, ·, é, ï, ¾, —, ê, ÇAŠJÃ‘O, É, ïfGfŠfX, ©, çŠJÃ, ð, °, ¨Zg ŽÒ, ¨SfMfŠfVfA, ïf|
fŠfX, ð, ß, ®, Á, Ä, ·, ×, Ä, ï, “, ï<ã> xí, ð, °, é, ñ, Å, ·BfIfŠ f“fsfbfN, ïŽOf—
ŒŽŠÔ, ¨, é, ñ, ¾, —, ê, Ç, »», ïSÔ^êØí“, ï<ã> ÖZ~, È, í, —BŠef|fŠfX, ï, ±, ê, ð, i, á, ñ, ÄEŽç, é, ñ, Å, ·, ÈB

‘ß‘äfIfŠf“fsfbfN, ïfN[fxf<ã>f^f“, ÄE, ¢, ãl, ¨, ±, ïŒÄ‘äfIfŠf“fsfbfN, ð—‘z, ÄE, µ
·, ÄZn, ß, ç, ê, ½B•½~a, ïÓ“T, ÄE, ©Œ¾, ã, —, ê, ÇŽÀÛ, É, ï, Ç, ±, ©, Äí“, ð, ¨, Ä, Ä, ¢, Ü, ·B, à, ÄE, È, Ä, Ä, ¢, é•J
‰o», ¨á, ã, ©, çA, È, ©, È, ©ŒÄ‘äfMfŠfVfA, ï, æ, ã, É, ï, ¢, «, Ü, ¨, ñ, ÈB

‰o½ŒÌAfMfŠfVfA, Å, ïfXf|[fc<ã>f<ã>Z%oí, ï, ½, ß, Éí“, Ü, Å, ¨, Ž~, µ, ½, ©, ÄE, ¢, ã, ÄEAf|
fŠf“fsfbfN, »», ï, à, I, ¨f|fEfX, _É•ù, °, é<ã>VŽ®, È, ñ, ¾, ÈB@<ã>sŽ-, ÄŒ¾, Ä, Ä, à, ¢, , ¢, Å, µ, å, ã, B
fyf<ã>fVfA, ï, ‘äŒR, ¨fMfŠfVfA, ÉU, ßž, ñ, Å, «, ½Žž, É, àAfIfŠf“fsfbfN, ïSjÃ, µ, Å, ¨, é, ñ, Å, ·B, É•ù, °
, é<ã>VŽ®, ¾, ©, çA, ¨, ß, ½,
‘xí, ð”j, Å, ½, ç, Ç, ã, È, é, ©, ÄE, ¢, ã, ÄEAfIfŠf“fsfbfN, ïŽQ‰oÁŒ, ¨, È, , È, éB, »», ê
, ©, çAfff<ã>ftfHfC, ï, ‘ð, ¨, à, ç, |, È,
, , ç, ½, ©, ÄfMfŠfVfAl, Ý, ñ, È, ¨M, ¶, Ä, ¢, é, I, Å, ·B, È, ñ, ¾, ©, ñ, ¾Œ¾, Ä, Ä, à“-Žž, ïfMfŠfVfAl, à, ¢, Ä, ½, ÄE, «, É, ï, ï
, ;, °, ð, «, , ñ, ¾, ÈB, »», ê, ¨o—, È, , È, é, I, ï, ¢, é, í, —, Å, ·B

, »», ê, ©, çfIfŠf“fsfbfN, ï—l<ã>Ö§, Å, ·B‰oíê, ï, _¹, ÈéŠ, ¾, ©, ç, Å, ·, æBŒ©•*q*, ï, S—œl[†]ÈW, Ü, Á, ½, ÄE, ¢, ¢
, Ü, ·, ¨A, Ý, ñ, È, jB, »», µ, Ä, ‘IŽè, ï, Ý, ñ, È—‡BfgfŒ [fi|, à—‡B, È, ñ, ¾, ©, ÈBŒÄ‘äfMfŠfVfA, ï, j, ï, ŠE, Å, ·B

, QfAfefl, ï—ðŽjE<ã>M“ži

@fMfŠfVfA, ï, ‘ä•“I, Èf|fŠfX, Å, , éfAfefl, ð, È, µ, ÄfMfŠfVfA, ï—ðŽj, ðŒ©, Ä, ä, «, Ü, µ, å, ã, B
‘ä, «, ¨, ÄAfAfefl, ï, Ž, ï, M“ž, AàŽYŽ, A™GŽåŽ, A—ŽåŽ, ÄE, ¢, ã‡”Ô, Éi, ñ, Å, ¢, «, Ü, ·B
, Ü, , A·M“ž, B‘O, W¢*I*A<ã>L, É, ‘e, ©, È, iŠK, Å, ïA, ·, Å, É‰o¤, ï, ¢, È, , Ä·M“ž, ð, ‘S, Å, ¢, Ü, ·B, ÄE, ±, è, ¨AŠCŠO—
f, ï, , ñ, É, È, Ä, Ä‰oÝ•¼ŒoI, ¨i“W, ·, é, È, Ä, ¨, ÄA•½—, ï, ‘, É”ñí, É—L, ©, È, ŽÒ, B, ¨, , ç, í, ê, Ä, «, Ü, ·B
, ±, ï, L, ©, É, È, Ä, ½•½—, B, ¨, ¨, Äd“••à•°, ÄE, È, Ä, Äf|fŠfX—h‰oqí“, Éow, ·, é, , æ, ã, È, è, Ü, ·B

@, ±, ï, d“••à•°, ÄE, ¢, ã, I, ¨d—v, Å, ·B
“-Žž, ïfMfŠfVfAl, É, ÄE, Ä, Äf|fŠfX, ðŽç, é, ½, ß, Éí“, Éo, é, ÄE, ¢, ã, I, ï, ”ñí, É—¼—_, È, Ž—, ¾, Á, ½A, ÄE, ¢
, ã, I, ð“ä, É“ü, ê, Ä, ¨, ¢, Ä,
, ±, ï, Žž, ¨, ï, “, È, ¢,
, µ, ©, µA<ã>aŽ, , É, È, Ä, ½•½—, ¨, -¼—_, , éí, Éow, ·, é, æ, ã, È, È, éB, »», ï, Žž, ï, °, Ží, ¨d“••à•°, Å, ·B, Ç, ñ, È, ŠiD, ð, µ, Ä, ¢
, é, I, ©Ž“-cW, Å, Šm”FBÄ“o, ï, Š, •, È, Š, ï, A“*‘*, È, ï, “, È, “, Ä, ð, I, ß, Ä, ¢, Ü, ·B, ŠZ, È, Šv, », I, æ, ã, Å, ·B



d‘••à•° Â““œ	‘« b, ,Í,ß,é d‘••à•°
d‘••à•° Â““œ ‘O,U¢<I— ‰cEŽè,É,Í „, „, Á,½	‘«b,ð,Í,ß,éd‘••à•°

•Ší,Í“S,Ì•äæ,Ì•t,¢,½‘,,„,Å,·B

“S,Í,Ü,¾,Ü,¾,%o,Èf,fm,Å,·,μA,à,ç,ë,ñ‘S•”fI[f_[f[fh,¾,©,çA,æ,Ù,C <àŽ,ç,Å,È,¢,Æ,±,ñ,È‘•”ð,ðŽè,É“ü,ê,é,±,Æ,Ío—^,È,¢B‘•”ð,Ì,È,¢ŽÒ,Íi^,É,¢,Á,Ä,à‰½,à,Å,«,Ü,¹,ñ,©,çAí^,És,
,ë,ð<‰È‘,Íu•ŠíŽC•Ù,ÌŒ‘¥v,È,ñ,Ä“i,μ,¢Œ¾,¢•û,ð,μ,Ä,¢,Ü,·B
,³,ÄA<àŽ,ç•½—^B,³•i,ð‘μ,|,Äow,μA<M°,Æ‘Ì“™,Éf|fŠfX-h‰oq,ÉŠ^—ô,·,é,æ,¤,É,È,éBu<M°,Æ“—1,ÉŽs—,Ì—
±,ð‰È,½,μ,Ä,¢,é,Ì,¾,©,çAŽQŒ,à —^,|,æv,ÆA—v<,·,é,æ,¤,É,È,ë,Ü,·B,±,ê,³A—ŽåŽjŽn,Ü,ë,Ì‘æ^ê•à,Å,·B
í^,ÌŽd•û,à<M°,ÌR°,©,çd‘••à•°,É“äd,³U,Á,Ä,«,Ü,·B<M°,àd‘••à•°,ð—Š,ë,É,·,é,æ,¤,É,È,é,í,—,¾B

d‘••à•°,Ì“¬•û—@,Í,±,ñ,È,Ó,¤,Å,·B

d‘••à•°,Ì—§ W‘à	d‘••à•°,Ì—§W‘à ÔF, ÂF‘· ‘,, ‘O—ñ,Ì•°,Í „,ð‘O,É“È,«,¾,μA Œä—ñ,Ì•°,Í „,ðäŒü,«,ÉŽ,Å
-----------------	--

•à•°,Ì“—ñ,Wl,³,W—ñ,Å•ûw,ð‘g,Y,Ü,·B”b,ç,Í,¬,ä,Å,Æ—§W,μ,Ä‘à—ñ,ð‘g,PB
,±,ê,ð—§W‘àAftf@f‰of“fNfx,Æ,¢,¢,Ü,·B,»,ê,Å,Qf[fgf^Èä, ,é‘,,ð‘O,É
“È,«,¾,μ,Ä“G,Ì•”“à,ÉŒü,©,Á,Ä“Èi,·,éB“G,à“—,¤,æ,¤,É“È,Áž,ñ,Å,
‘,,Ô,·,Ü“—Žm,³,Ô,Å,©,é,í,—,¾,ËB‘O,Ì—ñ,Ì•°Žm,³|,ê,½,çŒä,ë,Ì—ñ,Ì•°,³O ,Él,ß,Ä,»,ÌŒŠ,ð—,,ß,½B,±

CEĀ·āfŠfVfA

,ñ,È,Ó,¤,É,μ,Ä‰o½“x,à“ĒŒ,,ðŒJ,è•Ô,·B
°,ë,μ,¢,ÆŽv,¤,æB,¾,¬,ÇA–§W‘à,Ì’†,Ì°Žm,¤,Ñ,Ñ,Á,Ä,μ,Ü,Á,Ä•à’²,ð—,μ,½,èA—ñ,©,ç“|,°,Ä,μ,Ü,Á,½,ç‘à—
ñ,¤ö,ê,éB,»,±,ð“ĒŒ,,³,ê,½,ç•‰,¬,Ä,μ,Ü,¤,í,¬B
,¾,©,çA•°Žm^el,Ð,Æ,è,¤u,±,±,ÅŽŒ•ª,ª•|,J_CÅ,¢,½,ç•‰,¬,éA¤,É‘à—ñ,ð‘g,ñ,Å,é’‡ŠÔ,ªŽ€
,ñ,Å,μ,Ü,¤A,¾,©,ç“|,°,ç,ê,È,¢vA,Æ,¢,¤°Ž—,ðŽ,Å,Ä,¢,é•ü,ª,¢B~A‘ÑŠ‘A‘cŒ—ÍA¤“—·Ž—A,»,¤,¢
,¤f,fm,ª
,±,¤,¢,¤d‘••à•¤A•½—,ÌW’c,ªŽQ

•—Í,Í‘½,¢•ü,ª,¢,¢,©,ç•½—,É,Í]ŒR,μ,Ä—~,μ,¢,¤AŽj,Ì“Æè,ð•ö,³,ê,½,
,Å,¢,Å,ÉŒ³/4,Å,Ä,“,„,ÆA¤M‘°,Ì_R•º,¤AŽÅ,Íé,És,
§W‘à,ð‘g,þ,ñ,Å,·B,±,ê,¤R•º,©,ÆŽv,¤,¬,C,ËB,¾,©,çA•½—,Æ¤M‘°,ª,¬,J‘à,ð‘g,þ,±,Æ,ª, ,Å,½,©,à’m,ê,È,¢
,Å,·B“—,J‘à,ð‘g,ñ,Å,¢,Å¤M‘°,³/2—,¾,ÆŒ—‰Ü,μ,Å,½,ç•‰,¬,é,©,ç,ËB

@—§W‘à,ð‘g,þ,Ì,Í—§“x,ª,¢•ü,¤UŒ,—Í,ª,·,Æ,¢,¤,±,Æ,à, ,è,Ü,·,¤A—hŒä —Í,à‘,·,ñ,Å,·B•ºŽm,ÍJŽè,ÉŠÜ,¢
,,ðŽ,Å,Ä,¢,Ü,·B,Ì—¤,Ì^,ñ’†,É’ç,Ì—Ö,ª•t,¢,Å,¢,Ä,±,±,É‘I,ð’È,·B’[,É^¬,è,ª, ,Å,Ä,±,±,ð,®,Å,Æ^¬,éB•I‘S
,Ì,Å,.,ðŽx,!,éS’,J,Å,·B,±,ê,ÅJ”¹/₄g,ðŽç,Å,Ä‰EŽè,Å‘,,ðŽ,ç,Ü,·BŽŒ•ª,Ì %œE”¹/₄g,Í,Ò,Å,½,è,
‰œE%œj,Ì•ºŽm,Ì,ÌJ”¹/₄ª,ªfJfo[,μ,Å,.,ê,é,í,¬,Å,·B,¾,©,çA,
,àŒ,Å‘—,Å,Ä,¢,
,Æ,±,ë,ª,±,Ì‘àŒ,ÌŽä“_,Í‘è”Ô‰œE‘¤,Ì—ñB‰œE’[,Ì•ºŽm,ÍŽŒ•ª,Ì‰œE”¹/₄g,Í,³,ç,¬ o,μ,Å,¢,éB
,¾,©,çAÅ‘O—ñ,ÌÅ‰œE—f,Í‘è”ÔŠœŒ—,È^È’u,ÅAŽ€—S—|,à,¢,Í,Å,·Bd‘••à •ºB,Í,±,ÌÅ‘O—ñÅ‰œE—f,É—
§,Å,Ì,ðŒ™,ª,Å,½,©,Æ,¢,¤,ÆA,»,ê,ªt,È,ñ,Å,·B
,±,±,É—§,Å,é,Æ,¢,¤,±,Æ,ÍASg¤,ÉÅ
,Í,Ì,ÌŽžAÅ‰œE—f,¾,Å,½,ñ,¾A,È,ñ ,ÅŽq,â‘,ÉŽŒ—,Å,«,é,Ì,ËBŽŒ•ª,Ì—½,æ,è,àf|fŠfX,Ì,½,ß,És,
,Él,!,éA,»,ñ,È¢ŠE,¾,Å,½,Ì,Å,·B

@~b,ð—ß,μ,Ü,·,ªAd‘••à•º,ÅŠ^—ô,·,é•½—,ÌŽQŒ —v,ð”F,ß,é‘O,ÉA¤M‘°B ,ÍŽj‰œüŠv,ð,“,±
,È,Å,Ä•½—,Ì•s—ž,ð’Å,ß,æ,¤,Æ,μ,Ü,μ,½B
,±,ê,ªfhf‰œfRf“,Ì—@i‘O,U,Q,Pj,Å,·BuŠµK—@,Ì¬•J‰œ»,É,æ,è¤M‘°,Ì‰œj—\,ð—hŽ~v,μ,æ,¤,Æ,μ,½A,Æ,¢
,¤a—¾,Å,·,ªAj—,É,¢,!,Ì•nŒoŠJ,Å,·,ËB¤M‘°,ª“Æè,μ,Å,¢,½ŽjA—@—¥•ñ,ð•½—,ÉŒoŠJ,μ,½A,Æ,¢,¤,±,ÆB

,RfAfefl,Ì—ðŽjEàŽYŽj,©,ç—ŽåŽj,Ö

@,±,Ì’iŠK,Å,Í•½—,ÍŽj,©,ç”rœ,³,ê,Å,¢,Ü,·,©,çA,±,ê,
,‘O,T,X,S”NAf\ff“,Ì‰œüŠv,É,æ,Å,Ä¤M‘°Žj,Ì,Å,¢,ÉI,í,èAàŽYŽj,¤Žn,Ü ,è,Ü,·B
f\ff“,Ì‰œüŠv,Í,Q,Å,Ìf\fcf“fg,ð‰œY,³,!,Å,
,Ð,Æ,ÅAŽs—,ðàŽY,É,æ,Å,Ä“™‰œ•ª,¬,μ,ÅàŽY,ðŽ,ÅŽÒ,É,Í•½—,É,àŽQŒ ,ð —^,!,½B—
v,·,é,Éd‘••à•º,Æ,μ,Å•i,ðŽŒ•Ü,Å,«,éàŽY,Ì, ,é~A’†,É,ÍŽjŽQ %œÅ,ð”F,ß,½,Æ,¢,¤,±,ÆB,±,ê,¤uàŽYŽjv,Ì‘O—j,Å,·B
,μ,©,μA,±,ê,¾,¬,Å,ÍaŽY,ª,È,·ÅŽQ
,é•½—,ÌŽØ_a,ð’ Å,μ,É,μ,½B,»,ê,©,çA¤É ’[,Ì•n—R•½—,É,ÌŽØ_a,ÌfJf^,É“z—êg•ª,É—Ž,ç,éŽÒ,à,¢,½B,±
,ê,ð~·,Å,½B
uÅ—±,Ì’ Å,μ,ÆAÅ—±“z—ê,Ì‘OŽ~v,Æ,Ü,Æ,ß,Å,¢,Ü,·B,±,ê,ª“ñ,Å—Ú,Å,·B

@•n—R•½—,É,Æ,Å,Ä,Ý,ê,ÌŽØ_a,ð—_ø,«,É,μ,Å,à,ç,Å,½,Ì,ÍA, ,è,ª,½,¢,¤A“—

EĀ‘āfMfŠfVfA

,J•½-“,È,Ì,ÉàŽY,Ì‘½,ÅŽQŒ ,É••Ê,ð,Â,“,ç,ê,é,Ì,Í-Ê”,
,Â,ÌŽž‘ä,Å,à““,J,Å,·,ªA<àŽ,ż•½-“,ÆA•n-R•½-“,Æ,Ç,ż,ç,“”,Æ,μ,Ä‘½,¢,©,Æ,¢,|,Î³“|“I,É•n-Rl,Ì•û,“½,¢B,±,
,Ì‘½,Ì•n-R•½-“,Ì•s-ž,ð~—p,μ,Ä”ñ‡-@,ÅŽjŒ -Í,ð^¬,éŽÒ,ªoŒ»,μ,Ü,μ,½BfyfCfV fXfgf%ofgfX,Æ,¢
,¤l•“,ÅA,©,ê,ÍM‘°w,©,çŒ -Í,ð'D,¢“ÆÙŽj,ðs,¢,Ü,μ,½B
,±,ê,ð™GŽåŽj,Æ,¢,¢,Ü,·Bi‘O,T,U,P‘O,T,Q,W j™GŽå,Æ,¢,¤,Ì,ÍA“ÆÙ ŽÒ,Ì,±,Æ,Æ-‰ð,μ,Ä,·,¢,À,¤,¢
,ÆŽv,¢,Ü,·iŒNŽå,Ì‘Â-ŽŒ‘Ô,Ì‘ÓjB,½,¾A“Æ ÙŽj,¾,©,çA-Å’f<ê’f,ÈŽj,ðs,Á,½,©,Æ,¢
,¤,ÆŒ^,μ,Ä,»,¤,Å,Í,È,
,Ü,·B<M‘°,©,çŒ©,½,ç-Å’f<ê’f,ÈŽj,©,à’m,ê,È,©,Á,½,Å,·,ª,ËB

@fyfCfVfXfgf%ofgfX,łŽ€€äÖ,ðŒp,¢,³¼™ GŽå,“O,T,P,O”N,É’Ç•ú,³,ê,ÄAfAfefl,É ,Í–ŽåŽ¡,“Sm—§,μ,Ä,«,Ü,·B

,±,ê,ÍŽO'iŠK,É•^a,–,Ä—‰oð,·,é,AÈ,æ,¢E

‘æ^ê’iŠKBfNfŒfCfXfeflfX,ł‰oüŠvi‘O,T,O,W”NjBfNfŒfCfXfeflfX,łŽdŽ-,ł“ñ ,ÂB
^ê,Â,ÍA<M°,łŒ -ÍŠî”Ö,Æ,È,Á,Ä,¢,½ŒÄ,¢•””§“x,ð”pŽ~,μ,ÄA’n’æŠ,,è,ÂV ,μ,¢•””®,ð‘nÝ,μ,½,±,ÆB,±
,ê,ð,P,O•””§,Æ,¢,¢,Ü, ·Bj,Å,¢,ł‘%œiïc^ð,ł‘I<“<æ,ł<æŠ,,è,ð‘å•”<c^ð,â—^“},É•s—

~,È,æ,¤,É,Í,!,À,µ,Ü,¤,æ,¤,Èf,fm,©,ÈB^a,©,è,Ü,·H,±,ê,É,æ,Á,ÃM[°],Í^{-1/4},Î,©,è,Ì‘Ý,Æ,È,è,Ü,µ,½B

“ñ,À,ß,ªA“©•Ð’Cºú§“x,ÌŽÀŽ{B,±,ê,Í-Ê”,¢§“x,ÅA“ÆÙŽÒA™GŽå,ÌoŒ»,ð -¢‘R,É-h,²,¤,Æ,¢

,ꝝ,à,ì,Å,·B“Š•|,·é,ñ,Å,·,^A,U,³/4Ž†,^,È,¢,©,cŠ¢,Ì,©,–,c,È,C,É–L–

ÍŽÒ.À-¼‘O,Ø,Ñ,Å“Š•[.:.éB.».)ÀŽž.ÉŽ©•ª.ÀuŒ™.¢.Èlv.À-¼‘O,Ø‘.

“ÆÙŽÒ,É,È,è,»,¤,¾,È,ÆAŽv,¤l•,δ,ËB,U,O,O,O•[Èä “Š•[,³,ê,½l,Í,P,O”NŠÔfAfefl,Ì’¬,ð’Ç•ú,É,È,é,Æ,¢,¤§“x,Å,·B

fNfŒfCfXfeflfX,ł‰öüŠv,É,æ,Á,ÄA<M°,Æ™GŽå,Í,È,È,Á,½B,¾,©,çŽj,łŽå‘ł,łŽs–,Æ,¢,¤,±,Æ,É,È,éB,±,łŽs–,Æ,Í–¼‘O,¾,–,łM°,Æ<àŽ,i•½–,Å,·B

€<J‘O”¹/₄, Jfvf<fvfAí“^ . ð·Ê·¶·Ä·Å·y·, ^

2005.5.4'ù³@d'••à•°,Ì-hü,ð“S»,Æ,μ,Ä,¢,½,Ì,ðÅ“°»,Æ, ,ç,½,ß,Ü,μ,½B
žoñ,ð%âFFFF à ñ uÍ u 'm à ½ ¢ Æ u Í

‘æ,X%oñ@CEÃ‘ãfMfŠfVfA@;‘,í,è

ŒĀ‘āfMfŠfVfA

fgfbfvfy[fW,É–ß,é]

‘O,Ìfy[fW,Ö
‘æ,W%œñ@“Œ’n’†ŠC,Ì•]–¾

ŽŶ,Ìfy[fW,Ö
‘æ,P,O
%œñ@ŒĀ‘āfMfŠfVfAi,Qj

@

CEĀ‘āfMfŠfVfA,Q

¢ E j u[~]^

@‘æ,P,O%oñ @@@CEĀ‘āfMfŠfVfAi,Qj@

-ÚŽŶ	,Pfyf<fvfAí“^ ,QfyfŠfNfŒfxžž‘ä ,Rfxfpf<f^,ì‘ ,SflfŠfX,ìš‘p
------	---

@

,Pfyf<fvfAí“^

@fAfefl-ŽåŽj,ì‘æ“ñ’iŠK,Ífyf<fvfAí“^i‘O,S,X,Q‘O,S,V,Xj,Å,·B
,±,ì‘^,ð’È,¶,ÄA•ì,ð”f,|,È,¢•n-R•½-,àŽjŽQ%oÅ,Å,«,é,æ,¤,É,È,è,Ü,·B
fyf<fvfAí“^,ÍA, ,ìfAfPfflfX’©fyf<fvfA,^AfMfŠfVfA,ÉNU,μ,Ä,
,|Œ,,Äí“^,Å,·B

í“^,ì‘,Å,®,-,ÍAfylf<fvfAžx”z%o,ìfMfŠfVfAl,ì”½-,Å,μ,½Bfyf<fvfA,ìžx ”z%o,É“ü,Å,Ä,¢
,½fCfIfjfA’n•ù,ìf~fŒfgfX,Æ,¢,¤flfŠfX,^fyf<fvfA’é‘,É”½-,ðN,±,μ,½B,±,ì”½-
,Í,·,®,É’Á^,^,ê,é,ì,Å,·,^AfAfefl,^,±,ê,ð%o‡•,μ,Ä,¢,½,±,Æ,Éfyf<fvfA,ì‘å%o¤,ÍŒf“{,·,éBf _fŒfCfIfX^ê¢
,Å,·Bfyf<fvfA,Íâ’, Šú,Å,·,ÈB

fyf<fvfA’é‘,®,çŒ®,ê,ìfMfŠfVfA¢ŠE,Í,ì,Å,Û,“,Èf,fm,Å,·,^A,±,ìô“®,ðŒ® “|,μ,Ä,ÍA,μ,ß,μ,^,Ä,®,È,¢
,Æ,Å,àl,|,½,ì,®,à’m,ê,Ü,^,ñB

”N•,ìŠúŠÔ’†i‘O,S,X,Q‘O,S,V,Xj,,Å,Æí“^,ð,μ,Ä,¢,½,í,“,Å,Í,È,
,ì‘å,«,Èí,¢,^O,S,X,O”NAf}f%ofg f“,ìí,¢,Å,·B

@,±,ê,ÍAf}f%ofof\“Z,ì,à,Æ,É,È,Å,½,ì,Å-L-½,Å,·,ÈBfyf<fvfAŒER,ÉÝ—~,μ,½ fjj...
[fx,ð‘,

,ì~b,ñ,è~b,Å,·B

ŽÀÛ,ìf}f%ofofgf“,ìí,¢,Í,±,ñ,È,Ó,¤,Å,·B

f}f%ofofgf“,Æ,¢,¤,ì,ífAfefl,ì-k“Œ-ñ,R,OfLf,É, ,éŠCSÝ,ì’n-½,Å,·BfG[fQŠC

,É“È,«o,½fAfbfefBfJ”½“‡,ìfAfefl,Æ,ížR,ð%o,|,½”½‘ì‘¤,ìŠCSÝ,Å,·B

,±,±,Éfyf<fvfAŒER,R-œl,^a-¤,μ,Ü,·B

fAfefl,à‘SŒER,^o“®,μ,Ä,±,ê,É’Ì^,μ,Ü,μ,½BfAfeflŒER,X,O,O,OA,±,ê,É’½,ìflfŠfX,®,ç,ì

%ož%o‡,^,P,O,O,OA‡Œv,P-œ,ìd‘••à•^,^fMfŠfVfA~A‡ŒER,Å,·B

fMfŠfVfAÅ<

—“I,È,Æ,±,ë,Å,¤,Ä,¢,é,ì,·,Ü,½A-f—I “I,Å,í, ,è,Ü,·,ÈB

fMfŠfVfAŒER,íŠCSÝ,É•zw,μ,½fyf<fvfAŒER,®,ç,P,T,O,Of[fgf<-f,ê,Ä•zw,μ,Ü,·B

fyf<fvfA,ìí-@,Í,Ü,_,A<|•ºA<,Å,·,ÈA,±,ê,ð“G,É’Å,ìž,ñ,Å¬-,^,ì,ç””•í,Éž,ìž,þ,ñ,Å,·B

,^,çA<,^“Í,®,È,¢,Æ,±,ë,É•zw, ·,é,ñ,¾,ÈB

,»,μ,ÄAí“¬ŠJžn,Æ,Æ,à,Éd‘••à•^B,Í|,ìžÈ’ò,ì’†,ð‘S—Í,Å‘-,è”^,·,Ü,μ,½B

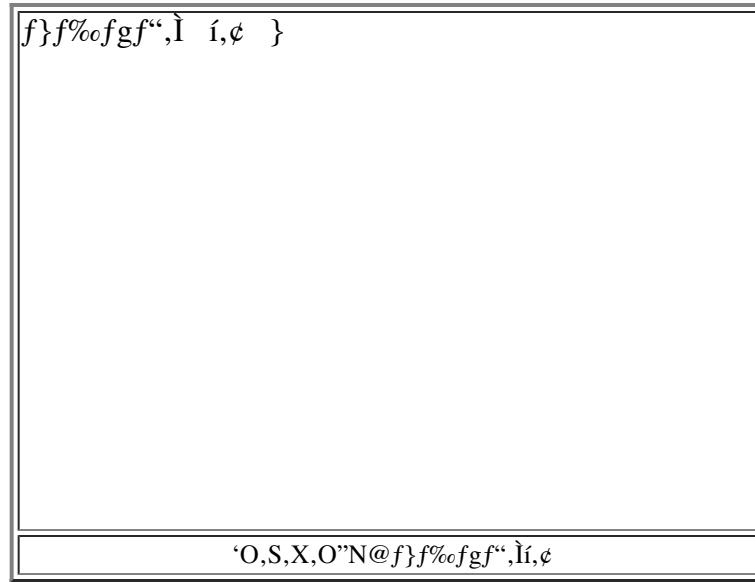
d‘••à•^,ì“ÈŒ,,ÉŠμ,ê,È,¢fyf<fvfA¤,ížZ,ð—,μ,ÄŠCä,É“|,ê,½BfAfeflŒER,ì

QEĀ·āfMfŠfVfA,Q

Ž€ŽÒ,Í,P,X,Q-¼Af yf <fvfAŒR,ÍŽ€ŽÒ,U,S,O,O-¼,AE“,”,|,ç,ê,Ä,¢,Ü,·B,±,ÌŽž,Ì
fAfefl,Ì«ŒR,^af~f \sim f \sim BfAfffXB \times ,©,¢’mŽ-¾,-,C“üŽŽ,É,Ío,éB

,³,ÄA,±,Ì, ,Æ,È,ñ,Å, ·Bfyf<fvfAŒR,^aP

,μ,½,Ì,¢,¢, - ,ê,ÇAfAfefl‘¤, a - âÃ,Él,|,é,ÆA,±
,Ì‘iŠK,Å‘SfAfeflŒR,Íf}f%ofgf“,Éow,μ,Ä,¢,é,Ì,ÅfAfefl Žs,Í,Ü,Á,½,
h”ð,È,í, -,Å, ·Bfyf<fvfAŒR,“”¹/₄“‡,ð‰oñ,èž,ñ,ÅfAfefl,Éä —¤iU,μ,Ä,“,½,ç•K,,ŠX,Í—Ž,Æ,³,ê,Ü,·B,“,±
,ÅAd“•à“•,P—œ,ÍAd,½,¢‘• ”ð,ð,Ä, -,½,Ü,ÜŽR‰oZ,|,ð,μ,ÄfAfefl,Ü,Å,Ì,R,OfLf,ð \triangleleft , - ,±, -,éB
,æ,¤,â,
^Ä,Ì‘èfyf<fvfA,ÌŒR‘D,“”¹/₄“‡,ð‰oñ,èž,ñ,Å,â,Ä,Ä,“,Ü,μ,½,^A,³,Ä,“,“¬,Ä,½fA feflŒR, a,à,¤,±,ç,ÌSCŠY,É-
ß,Ä,Ä•zw,μ,¢,é,Ì,ðŒ©,Ä^ø,<ä,°,Ä,¢,Ä,½A,Æ ,¢,¤,Ì,^ZÀÛ,Ìf}f%ofgf“,Ìí,¢,Å, ·B
,±,Ì,Æ,“,Ìfyf<fvfA‘¤,Ìí,¢•û,ðŒ©,Ä,¢,é,ÆA-³—,ð,μ,Ä,¢,È,¢Bfyf<fvfA,É ,Æ,Ä,Ä,Í—Žè’²,×A,Æ,¢
,Ä,½S’,Ì,Å, ·,ËB



@,“,Ì,P,O”NŒäA;“x,Ífyf<fvfA,Ì‘å‰o¤fNfZf<fnfZfXŽ©,çŒR‘à,ð—|,¢,ÄU,ß,Ä,“,Ü,μ,½B;“x,Í-
{C,Å, ·B,R,O-œ,Ì—¤ŒR,ÉŠCŒR,P,O,O,Oç,Ì•—Í,Å,μ,½B
,±,Ì‘åŒR,Íf_[f_flf<fxŠC<-,ð“n,Ä,Äf of<Jf“”¹/₄“‡,ð“i‰o°,μ,Ä,“,Ü,μ,½B,±,ê ,ðŒ}
,|Œ,,Ä,½,Ì,^fxfpf<f^ŒR,ð’†S,Æ, ·,éfMfŠfVfAŒR,V,O,O,OB, ,Ü,è,É,à
,ËBfIfŠf“fsfA,ÌÖ,è,Å,Ý,ñ,ÈW,Ü,ç,È,©,Ä,½,ç,μ,¢B,½,¾A,±,ÌfXfpf< f^ŒR,ÍÅŒä,Ì^el,Ü,Åí,¢”²,¢
,Ä,S”ð,ÈÓ,μ,Ü,μ,½B,±,ê,^Afeff<f,fsfŒ[,Ì í,çf‘O,S,W,Oj,Å, ·B,±,Ìí,¢,ÌŽwŠö,ðŽ,Ä,½fXfpf< f^
‰o¤fŒfIfjjf_fx,ÍŒäX ,Ü,ÅŽ],|,ç,ê,Ü,μ,½B
fef<f,fsfŒ[,Ì-h‰oqü,ð“È”j,μ,½fyf<fvfAŒR,ÍfMfŠfVfA-{“y,É“{Ý ,ÌiŒ,,ð,μA , ,ç,±,ç,ÌfIfŠfX,ðU—a,μ,Ä,¢
,“,Ü, ·BfAfefl,à—áŠO,Å,Í,È,ÄAf yf <fvfAŒR ,Éè—Ì,³,ê’¬,Í”j‰oó,³,ê,Ü,μ,½B

,Æ,±,ë,ÅA,“,Ì‘O,Ì‘iŠK,ÅfAfefl,ÌŽw“±ŽÒ’B,Í—á,Ìfff<ftfHfC,Ì_“a,Ì›B—,³ ,ñ,É,·Žf,¢,ð,½,Ä,Ä,¢
,½,Ì,Å, ·Bfyf<fvfAŒR,^U,ß,Ä,“,½,ç,Ç,¤,μ,½,ç,æ,¢,©A ,Å,Ä,ËB
,“,ÌŽž,Ì_‘ð, ,±,¤,¾,Å,½B
u’¬,à_“a,àÄ, —Ž,ç,é,¾,ë,¤B,μ,©,μA-Ø,Ì•ç,É—Š,éŒÀ,èA“iU•s—Ž,Å, ,év
,±,Ì_‘ð,ð,C,¤‰oðŽß, ,é,©,ÅŽw“±ŽÒ’B,Ì‘ÓŒ©,Ì•a,©,ê,½,ñ,Å, ·B

u-Ø, Í•Çv, Æ, Í‰o½, ©A, Å, ·, ÈB

“-ŽžfAfNff|fŠfX, Ìä, Ífpf<fefmf“_“a, Í-Ø, Å‘ç, ç, ê, Ä, ç, Ü, µ, ½B, à, Æ, à, ÆfA fNff|fŠfX, Æ, ç
, ã, Í, Í‘^, ÌŽž, ÌÅŒä, ÌÔ, È, Í, ÅAu, ±, ê, ÍfAfNff|fŠfX, É-§ , ÄâÄ, Á, Äí, |, Æ, ç, ã, °, ¾v, Æl, |, él, ½, ç, ÆAu-
Ø, Ì•Çv, Æ, Í‘D, Ì, ±, Æ , Å, , éA, Æl, |, éfOf<[fv, ^, , Å, ½B‘D, à-Ø‘ç, Å, ·, ©, ç, ÈB

Œ<Çu‘DfOf<[fvv, ÌÓŒ©, ^Y, Á, ÄA, ±, Ì“ú, É”ô, |, ÄfAfefl, ÍŒR‘D, ð‘å—È, ÉŒš ‘ç, µ, Ä, ç, Ü, µ, ½B
fyf<fVfAŒR, ^fAfefl, ðè—Ì, µ, ½, Æ, «, É, Í-Zq<Y, Í-£, ê—‡, É‘Ò”ô, µ, Ä, ç, ÄA’j ’B, ÌÅŒä, ÌŠCí, É”ô,
œ’[, ¾, Å, ½, í, —, Å, ·B

fof<fJf“” “‡ Ö~A }

‘O,S,W,O”N,Ìfyf<fVfAí^

@“-Žž, ÌŒR‘D, ÍŽO’iYD‘D, Æ, ç, ç, Ü, ·B‘D, Ìæ’[, ÉÖŠp, Æ, ç, ã“S, Ì, ©, ½, Ü, è, ^t, ç, Ä, ç, ÄA, ±, ê, ð“G‘D, Ì‰
, É, Ô, Å, —, ÄŒŠ, ð, , —, Ä’¾, ß, Ä, µ, Ü, ãA, Æ, ç, ã, Ì, ^ŠCí, Ì, â, è•ûB
‘D, Ì@“®—Í, ^, ç•û, ^Y, ï, Ü, ·, ©, çAfXfs[fhfAfbfv, Ì, ½, ß, É, ±, ¬Zè, ^, ½,
, çB, » , Ì, ½, ß, ÉYD, ðŽO’i, É, µ, Ä, ±, ¬Zè, ð, ¬, Ä, µ, èæ, ^, éB^êC, Ì æ^ô, ^, Q, O, OI, ÅA, ±, ¬Zè, ^, P, W, OI B
•È, Í‘N, ^YD, ð‘†, ç, ¾, ©, Æ, ç, ã, ÆA, ±, ê, Í, Ç, ã, à“z—ê, ç, µ, çB, Ä, ç, , µ, ñ, Ç,
, Å, ·, ©, ç, ÄA, È, É, µ, è‘D, ^¾, ñ, ¾, çZ©•^, àZ€ñ, Å, µ, Ü, ã, í, —, Å, ·B

, ^, ÄAfAfefl, ÍŒR‘D, ð, Q, O, OÇ‘ç, è, Ü, µ, ½B‘PfŒvŽZ, Åæ‘g^ô‘S^ô, Å, S—œl—v , é, ±, Æ, È, é, ñ, Å, ·, æB‘N, ^A, ±
, Ì‘D, Éæ, èž, ñ, Å‘†, ®, Ì, ©B, ±, Ì, Æ, «, É‘†, ¬Zè, Æ, È, Á, ½, Ì, ^A, » , è, Ü, Åí‘^, ÉŽQ‰Á, ·, é, ±, Æ, ^o—^, È, ©, Á, ½•n-
R•½—, Å, ·B

fAfefl, ðŽç, é, ½, ß, É, ±, Ì“z—ê, ÌŽdŽ—, ð”f, Å, Äo, Ü, ·B•ŠíŽ©•Ù, ^o—^, È,

”P, ç, ÍŽ©•^, ½, ï, ÌflfŠfX, ðŽç, é, ½, ß, Ìí, ç, Å, ·, ©, çAŽm<C, Í”^ŒQ, Å, ·B

^ê•û, Ìfyf<fVfAŠCŒR, Ì‘†, ¬Zè, Í“z—êB, µ, ©, àAfAfefl‘^, Ífyf<fVfAŠCŒR, ð‘·, ç fTf‰of~fX~p, É—
U, çž, Y, Ü, ·BfAfefl, Ì, ·, ®‰«, ÌŠC, Å, ·, ©, çAŠC—¬, Æ, ©^ÄÈ, ^, Ç, , ±, É, , é, ©, Æ, ©A, » , ã, ç, oŽ—, ð’m, Å, Ä, ç
, èfAfefl, ^—L—~B, Æ, ç, ã, í, —, ÅÅŒä, Ì , ±, ÌfTf‰of~fX, ÌŠCí, Äfyf<fVfA, Í‰o, —, Ü, ·B

@, ±, Ì, Æ, «fyf<fVfA, ÌfNfZf<fNfZfX‘‰o, ÍÅIY—~, ð, » , Ì—Ú, ÅŒ©, æ, ã, Æ—|, Ìä, © , çŠí, µ, Ä, ç
, ½B, » , ã, µ, ½, çZ©•^, ÌŠCŒR, ^ZÝX, É’¾, ñ, Å, ç

ß, ðo, µA^, Åæ, ÉfMfŠfVfA, ©, ç “|, ê, Ä, ç, «, Ü, µ, ½B

—œä, Í§^, µ, Ä, ç, é, Ì, É‰o½ŒÌ“|, °, é, ©, Æ, ç, ã, ÆAfMfŠfVfA, ÍŽR‘, Å, à, Æ, à, ÆH—Æ, É—R, µ, ç

, ©, çAfyf<fVfAŒR, Ì°—Æ, ÌŒ»’n’’B, Í“i, µ, çBfyf<fVfAŒR, R, O—œ, Ì •°—Æ, ÍAŠCä—A‘—

,·,é,Â,à,è,¾,Á,½,ñ,Å,·,æB,»,ÌŠCŒR,ª,â,ç,ê,Ä,μ,Ü,Á,Ä§ ŠCŒ ,ðfAfefl,É^¬,ç,ê,½,çfMfŠfVfA,É
‰o“ª,μ,½,R,O–œl,Í_Q,ÄŽ€,ñ,Å,μ,Ü,¤,í,–,Å,·B

,±,Ì, ,ÆŽc‘Ìfyf<fvfAŒR,ÆfMfŠfVfAŒR,Ìí,¢,È,C, ,é,Ì,Å,·,ªAŠi–{“I,É,ÍfT f‰of~fX,ÌŠCí,ÅŒ^”...
,Í,Å,«,Ü,μ,½B

fTf‰of~fX,ÌŠCí,ðŽwŠö,μ,½fAfefl,Ì«ŒR,ªfef~fxfgfNfŒfXB,»,ÌŒä‘å,¢,É‰HU ,è,ð–
~,©,¹,Ü,·,ªA,Ì,ç,É“©•D’C•ú,ÅfAfefl,ð’C,í,ê,Ä,μ,Ü,μ,½B,C,±,É –S–½,μ,½,©,Æ,¢
,¤,Æ,»,ê,ªfyf<fvfA,È,ñ,Å,·,æBfyf<fvfA,à‰ou,ª[,¢,ËB
,ç,È,Ý,É,±,Ì,Æ,«,Ìfyf<fvfA ŠCŒRìí‰oi<c,Ì‘æ^ê~–ñ,ªfVfhf“‰o¤A‘æ“ñ~–ñ,ªfefBf<fx‰o,¾,Á,½B,±,Ìí“A ŠCä–
fŒ,ð,ß,®,éftfFfjjLfA ‘ÌfMfŠfVfA,Ì‘^,¢ ,Æ,¢,¤–È,ª, ,è,»,¤,Å,·B

O’iÝD‘D	fyf fNfŒfX‘œ
ŽO’iÝD‘D	fyfŠfNfŒfXi‘O,S,X,TH`‘O,S,Q,Xj

@,³,ÄAí‘^,ªI,í,Á,Ä,Ý,é,ÆfTf‰of~fX,ÌŠCí,ÅŠ^–ô,μ,½‘†,¬ŽèA•n–R•½––,Ì“
¾,©,ç,Ù,Ä,½,ñ,¾I‰o‘‘B,É,àŽQ
,Ü,½A,¢,Äfyf<fvfA,ª•ñ•œí,ðŽdŠl,–,Ä,·,é,©”»,ç,È,¢,í,–,Å,·,©,çA”P,ç,Ì –v,ð,Ì,Ü,·,é,ð“¾,È,¢B,±
,ñ,È,Ó,¤,É,μ,ÄA,·,×,Ä,ÌŽs–,ÉŽQ
•n–R•½––,Æ,¢,¤Œ¾,¢•û,ð,μ,Ä,«,Ü,μ,½,ªA,±,ê,ðSiD–C,Œ¾,¤,Æu–³ŽYŽs– v àŽY,Ì,È,¢Žs–,Æ,¢,¤Ó–,Å,·B

QfyfŠfNfŒfXŽž‘ª

@fAfefl–Žå§”

fyfŠfNfŒfX,Æ,¢,¤,Ì,Íl–¼,Å,·B,Í,¢A,±,ÌlB“ª,Éd‘••à•º,Ìfwf<ffbf,ð Ü,¹,Ä,¢,é,ËB,±
,Ìl, ,¾–¼,ªufffJ“ª,ÌfyfŠfNfŒfXvB“ª,ªÙí,É‘å,«,©,Á ,½B,¾,©,ç,»¤,ê,ð,²,Ü,©,·,½,ß,É,ç,å,¢
,Æfwf<ffbf,ð Ü,¹,Ä‘¤‘œ,ð‘¤,ç,¹,½ ,Æ,àŒ¾,í,ê,Ä,¢,Ü,·B“ª,ªå,«,·,¬,Ä”í,ê,È,©,Á,½,Ì,©,à,ËB
,Æ,à,©,

Žž‘ªfAfefl,» ,Ì,à,Ì,Ìâ’ ,Šú,Å,à, ,Á,½,Ì,Å,»,ÌŽž‘ª,ÌŽw“±ŽÒ,Ì–¼,ð,Æ,Á,ÄA fyfŠfNfŒfXŽž‘ª,ÆŒÄ,ñ,Å,¢,Ü,·B

–‰o¤A,±,ê,ª,ÌÅ,«@ŠÖ,Å,·B,P,WÌÈä,Ì‘jŽqŽs–,É,æ,é,‘½Ü––Žå

àŽY,ÉŠŒW,È,

,ËB¡,Ì‘‰o¤,ÌR¤c,Í,C,¤,à¤C,É“ü,ç,È,¢A^êŒ¾•¤\,μ,½,¢A,ÆŽv,Á,ÄŽ,,ª“

%o¤,És,Á,Ä,à‘†,É“ü,ê,Ä,·,ê,Ü,¹,ñBŽ,,A‘‰o¤c¤,Ì,á,È,¢,©,ç,ËB‘–,É‘I ,Ì,ê,½ŽÒ,ª“

CEĀ‘āfMfŠfVfA,Q

,Ā~b,μ‡,ɔ̄,l̄Zd‘g,Ý,ÍuŠÔÚ—Žå§vBfAfefl,Í’¼Ú —Žå
—‘z,©,ÆŒ³/₄,|,̄A’N,Å,à•` \,¹,é’¼Ú,l̄•û,¹,æ,¢B,»,¤,¤,¤Ó—,Å,±,l̄fAfefl,l̄—Žå,Í’ê,Å,ì,·Žè—{,Å , ,é,í,_,Å,·B
,à,¤,¤,Å,̄fAfefl,l̄Zj,̄“Á’¥,ÍAŒöE’S“—ŽÒ,ð’Š’I,Å’I,ñ,¾“_,Å,·B
j,ÅŒ³/₄,|,̄I‘—‘ab,àÙ”»S—,à—ðl,à,¶,Å’I,ÔB,
,±,ê,Í,¢,¢,±,Æ,©,Ç,¤,©B,È, ,Æ,à—ðl,ÍZC•,ÍfGfS[fg,¾,©,ç,Æ^D’f,ç,È ,¢
,¾,ë,¤,ËB,½,Ü,½,Ü,
j,Å,«,é,Ì,¾,ÆŽv,¢,Ü,·BŒ»Y,̄ZjŒoÌ,Í ”ñí,É•jŽG,¾,©,çA’Š’I§,ðjŽÀŽ{,·,é,±,Æ,Í•s‰øÅ”\,Å,·Bž,,,“ú—{
,É, ,½,Å,Ä,à‰ø½,ð,μ,½,ç,¢,¢,©’S’R•,©,è,Ü,¹,ñ,ËB,±,l̄Zz‘ä,Íf|fŠfX,l̄K—Í,à¬,³,¢
,μA,>,é,Ù,Ç•;ŽG,Ès§“x,Å,à,È,¢,Ì,Å’Š’I,Å,â,ê,½,ñ,Å,·BfAfe fl,l̄IX,Í,±,¤,¤,¤žj§“x,ðŒÖ,Å,Ä,¢,Ü,μ,½B, ,é’Ó—
j,Å,Í’O’ê“I,ÉŒö•½,Å,·B

•{,l̄ŒöE,Í,

^,é,à,Ì,Å,Í,È,¢B, ,éŽí,ÌE”\,âl—],^•K—v,Å,·B
,à,μ—³”\,ÈŽÒ,^•ŒER,É,È,Å,Äí“^,É•‰ø,“,½,çŽæ,è•Ô,μ,¹,Å,©,È,¢B,¾,©,ç“ŒER
E,Í’I“,Å’I,Ñ,Ü,μ,½BfyfŠfNfŒfX,Í,±,l̄“ŒRE,É,P,T”N~A‘±,μ,Ä’I,Î,ê,½,Ì ,Å,·B,»,l̄’n^Ê,©,çfAfefl,l̄Zj,ðŽw“±
,μ,½,í,¬B
,¾,©,çS®‘S,É•½“TM ,l̄,æ,¤,ÉŒ©,|,Ä,à,â,Í,èŽw“±ŽÒ,Í•K—v,¾,Å,½,ñ,Å,·,ËB

@ŒĀ‘āfMfŠfVfA—ŽåŽå` ,l̄‰øA,Ì”•,ðŒ©,Ä,“,“,Ü,μ,å,¤B
fMfŠfVfA,Í“z—ê§“x,̄ZD‰øi,Å,·B“z—ê§,l̄ä,É¬,è—§,Å,½—ŽåŽå` ,¾,Å,½,±,Æ ,ð—Y,ê,Ä,Í,È,è,Ü,¹,ñB
,±,l̄,±,é,̄fAfefl,l̄Œû,ðŒ©,Ä,Ý,é,ÆAŽs—,¹,Þ,W—œB“z—ê,¹,Þ,P,P—œ,
‰øÆ’{,Å,·B|ŠÔ,Æ,μ,Ä,ÌŒ —~,È,C’S,È,¢B,±,l̄“z—ê,É“, ,ç,©,¹,ÄA,Ô,ç,Ô,ç,μ,Ä,¢,éŽs—,B,l̄—Žå
,à,¤,¤,ÅAŽs—,Å,à—«,ÌŒ —~, ,è,Ü,¹,ñB—,ÍZq,Ý,ðŽY,Þ“¹*i*,Å,·B—‰øi,È ,ñ,©,É,Ío,ç,ê,È,¢B,»,é,Ç,±
,é,©A’j’B,©,ç,Í’Í“TM ,ÈlŠi,ðŽ,Å,½‘JÝ,Æ,Í 1,|,ç,ê,Ä,¢,È,©,Å,½B’Í“TM ,ÈlŠi,¹,È,¢,ñ,Å,·,©,ç^¤,àJ,Ü,ê,È,¢,ÌB’j,Í —
,ð‰øÅ^¤,¹,è,Ü,·,¹,Å,½,Æ,|,ÄŒ³/₄,|,Î,»,é,ÍZ,,½,ç,afyfbfg,ÌŒ¢,ð‰øÅ^¤,¹,é,Ì ,Æ“—,J,æ,¤,È,à,Ì,Å,·B
,J,á, A’j,Í’N,Æ^¤,μ‡,¤,©,Æ,¢,¤,ÆA“—‘R’j,Æ^¤,μ‡,¤Bíé,Å^ê,É‘à—ñ ‘g,ñ,ÅJŽ€,ð¤,É,·,é,ñ,¾,©,çA^¤,¹
‰øJ,|,é,Ì,à“—‘R,©,à,μ,ê,Ü,¹,ñB^¤,ÌŒ,Æ,¢,¤,Ì,ÍZz‘ä,Æ¤,É•Ì,í,é,ñ,Å,·,æB

Žs—,P,W—œ’†—‰øi,ÉŽQ‰øÅ,Å,«,é¬”N’jŽqlŒû,Í,S—œlB“z—ê,à,¢,ê,ê,ÎA’Sl Œû—ñ,R,O—œl’†,Ì,S—
¾,¬,¹,ÅZQŒ ,ðŽ,ÅB,»,¤,¢,¤—Žå,¾,Å,½,í,¬,Å,·B

@—‰øi,Í,C,Ì, ,ç,¢ŠJ,©,ê,½,©,Æ,¢,¤,Æ”NŠÔ,S,O‰øñ,
œl‘S^ö,¹,ÅZQ‰øÅ,·,é,í,¬,Å,Í,È,
fŠfX,Ì’†S,É, ,éL êj,ÉW,Ü,Å,ÄA,í,¢,í,¢,¹,â,¹,âB,Å,àA,U,O,O,O,Æ,¢,¤,Ì,Í,·,²,¢”,Å,·,ËB,±
,ê,¹,ç,ñ,È,Ó,¤,Éc—,Å,«,½,Ì,©A,ç,â,Å,Æ‘z’œ,Å,«,Ü,¹,ñ,ËB•Ù,Ì—§ ,Å,à,Ì,¹‡”Ô,ÉfXfs[f,ð,μ,Ä,¢
,½,ñ,Å,μ,å,¤,©,ËB

fyfŠfNfŒfXŽz‘ä,̄fAfefl,ÍfMfŠfVfA”flfŠfX,̄fS[f_ ,Å,à, ,è,Ü,μ,½BfTf‰
f~fX,ÌŠCí,ÅfyfŒfVfAŒR,Í“P’Þ,μ,Ü,μ,½,¹A,Ü,½,¢,ÂU,Þ,Ä,
fŠfX,Í’ÍfyfŒfVfA,ÌŒRŽ—h‰øq“—,ðŒ—,μ,Ü,μ,½B,±,ê,ðffffX “—,Æ,¢,¢,Ü,·BfAfefl,ÍffffX“—,Ì—
j,Žå,Æ,μ,Ä‘SfMfŠfVfA,É†—ß,·,é—§é ,É,Å,¢,½,Ì,Å,μ,½B

,RfXfpf<f^,I‘

@,±,±,ÅAfXfpf<f^,I‘b,δ,μ,Ä,“,“,μ,å,¤BfXfpf<f^,ÍfAfefl,A•À,ÔfMfŠfVfA
,I‘å‘,Å,·,¤AfAfefl,I‘æ,¤È–Žå,I‘”B,¹,¤MfŠfVfA¤ŠE,I‘†,Å,à“ÁŽê,È “¢,è,δ,μ,Ü,μ,½B

fXfpf<f^,É,ÍŽOŽí–P,lg•ª,ª, ,è,Ü,μ,½B^ê”Ôä,É–§,Ä,Ì,¤Žx”zŽÒ,Å, ,éfXfp f<f^lA,±,ê,¤Žs–,Å,·B,»,I
‰,ÉfyfŠfIfCfRfC,A•ŒÄ,Î,ê,élxXBfyfŠfIfCfR fC,ÍŒRŽ–“I,È<–±
,Í, ,è,Ü,·,¤ŽQ
é,Å,·BfwfCf[f^fC,“”_<Æ,δ,μ,Ü,·BfXfpf<f^ ,ÍL,¢–I“y,δŽ,Å,Ä,¢,ÄAŠ,,‡,É•½’n,à‘½,¢B,±,I‘”_”,ÉZ,ñ,Å,¢
,é,I,“z–ê g•ª,lfwfCf[f^fC,Å,·B

fXfpf<f^,ªfAfefl,È,C,A•”ª,×,Ä•I,í,Å,Ä,¢,é,I,Í,±,I“z–ê,ÌlŒû,“”ñí,É‘½,¢ ,Æ,±,ë,Å,μ,½B
fAfefl,I‘žs–,Í,P,W–œA“z–ê,ª,P,P–œB Žs–,I•û,“”½,¢B
fXfpf<f^,ÍAŽs–,ª,Q–œ,TçlB“z–ê,ª,Q,O–œB^“”I,É“z–êlŒû,I•û,“”½,¢ ,ñ,Å,·B,±,I“z–ê,ªcŒ,μ,Ä“½–,δN,±
,μ,½,ç,Q–œ,Tçl,Å,Í‰,é,ËB,Q–œ ,Tçl,Å,Q,O–œl,ð‰,Ý,³,|,Ä,“,é,½,β,É,Í,C,¤,μ,½,ç,æ,¢,©B
fXfpf<f^l,I‘ñí,É’Pf,È“š,|,ðo,μ,Ü,·BfXfpf<f^l’el,D,Æ,è,ª–Å’f^ê’f ,É<,
,“,±,ÅAfXfpf<f^l,I‘–c,¢Žž,©,ç”ñí,ÉŒμ,μ,Žq,Ý,δ^ç,Å,Ü,μ,½BŒμ,μ,¢Žq^ç ,Å,ðfXfpf<f^³ç,ÆŒ¾,¤,Å,μ,åB,±
,±,©,ç–,Å,¢,é,ñ,Å,·,ËB

@,Ü,,AÔ,ç,á,ñ,¤ŽY,Ü,ê,éA,±,±,©,çfXfpf<f^³ç,ÍŽn,Ü,éB’·~V,ª,â,Å,Ä,« ,ÄAÔ,ñ–
V,ðf fFfbfN,·,é,ñ,¾BŒÜ‘I–ž“”,©HŒ’N,É^ç,ç,«,¤,©H
áŠQ,ª, ,Å,½,è,•Žä,¾,Å,½,è,μ,½,çf^fCfQfgfXŽR,ÉŽI,Ä,Ä,μ,Ü,¤B^ç,Ä,È,¢B
,VÎ,É,È,é,Æ’j,I‘žq,ÍeŒ³,©,ç^ø,«–£,³,è,Ä,Ý,ñ,È‡hŠ,É“ü,ê,ç,è,Ü,·B,± ,±
,©,ç’j,Î,©,è,ÌW’çJŠ^,¤Žn,Ü,è,Ü,·B’j,Î,Ä,©,è,Å^ê,É<N,«,ÄA^ê,É
”ÑH,Å,ÄA^ê,Ég‘I‘b,|,ÄA,Ü,½^ê,É”ÑH,Å,ÄA^ê,ÉQ,é,ÌB
‰½Ì,Ü,Å,±,ÌJŠ^,δ,·,é,©,Æ,¢,¤,Æ,R,OÎ,Ü,Å,Å,·BŒ™,¾,Ë[B
,R,OÎ,É,È,é,Æ‰œÆ’ëJŠ^,ª[–],³,è,é,ñ,¾,“,é,Ç,àA,â,Í,è–[H,Í‰œÆ,ÅH,×,È,¢B
’j’B,ªW,Ü,Å,Ä<“–HŽ–,δ,·,é,ñ,Å,·B,±,ê,δ,μ,È,¢,ÆŽs–,I‘ž’Ši,ð’D,í,ê,Å ,μ,Ü,¢,Ü,·B
,¾,©,çAfXfpf<f^,Å,Í^‰œÆ’cŽR,Ì–[H,Æ,¢,¤,Ì,Í,È,¢B
,±,ñ,È,Ó,¤,ÈJŠ^,δ,μ,È,ª,çA“÷‘I,δ’b,|,Ä,¢,«,Ü,·B’j’B“–Žm,Ì’cŒ,Í,à,Ì ,·,²,¢,à,Ì,É,È,éB,·ŒÝ,¢
,Ý,ñ,È<CS,ªm,ê, ,Å,Ä,¢,éB,±,ê,–§W’ä,ðì,Ä,Äíê,Éo,Ä,«,½,ç‘¼,ÌflfŠfX,Í‘¾“Å,ç,Å,«,È,¢BfXfpf<f^
–¤ŒR,ÍfMfŠfVfA Å<,Å,μ,½B

–I,Ì<VŽ®,Å,Í,±,ñ,È~b,à“,|,ç,ê,Ä,¢,Ü,·BfXfpf<f^,Ì’N,Í,P,RÎ^È,Å¬1,Ì<VŽ®,ðŒ},|,Ü,·B,»,Ì’N–
í,É,È,Å,½
‰½,àŽ,½,¹,„,É,P”NŠÔ•í~Q,I –,δ,μ,È,“,é,Î,¢,“,È,¢BH–Æ,Í,C,¤,·,é,©,Æ,¢,¤,ÆAu’D,|Iv,Æ,¢,í,ê,éB
¤,ì“I,É,Í[–]ßx,É,Í“”_“”,ªL,ª,Å,Ä,¢,Ä,“,±,É,Í“z–êg•ª,ÌfwfCf[f^fC,ªZ ,ñ,Å,¢,éB”P,ç,©,çH–
Æ,ð’D,¤,ñ,Å,·BfwfCf[f^fC,ªíR,μ,½,çŽE,μ,Ä,©,Ü ,í,È,¢B
fwfCf[f^fC,©,ç,·,ê,ÎAí,É”N ,Ì”N,ªZŒ•,ðŽ,Å,Ä,¤,è,Ä,¢,Ä,¢,ÄA‰½ ŽžP,Å,Ä,
,ñ,È,Ó,¤,É,μ,ÄfwfCf[f^fC,É,ÍfXfpf<f^l,É ‘I,·,é[–]•|S,ðA,|•t,–A
,Ì,Å,·B

ŒĀ‘āfMfŠfVfA,Q

—,łŽq,Í‡h¶S^,Í,È,¢,Å,·,ªA,â,Í,èW,ß,ç,ê,Ä“÷‘Ì,ł'b~B,ð,μ,Ü,μ,½B,±,ê,Í—§”h,ÈíŽm,ðŽY,p,½,ßB
—v,·,é,ÉAfXfpf<f^,ÍŽÐ‰oī‘S‘Ì,ªí^f,[fh,łf|fŠfX,Å,μ,½B
±,Ì,æ,¤,Èf|fŠfX,ÌY,è•û,ÍfMfŠfVfA‘S‘Ì,®,çŒ©,½,ç“ÁŽê,Å,·B

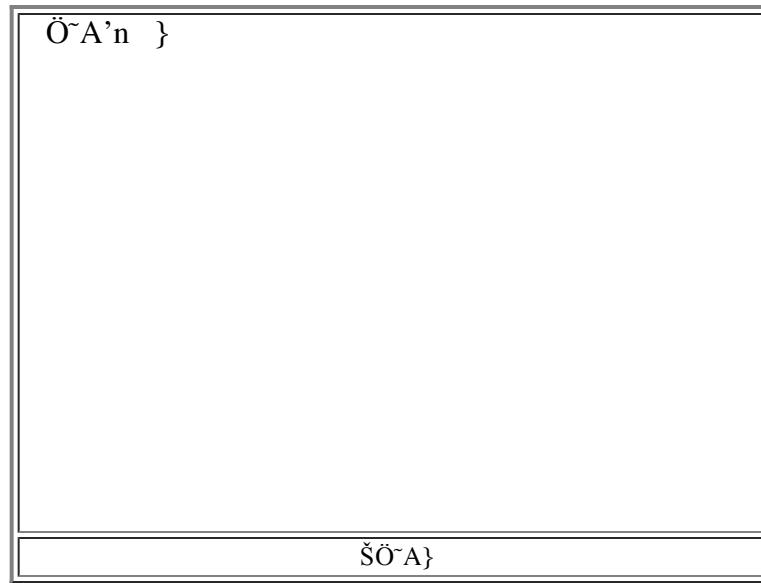
,Sf|fŠfX,ÌŠ‘P

@,±,łfAfefl,ÆfXfpf<f^,ªí^,ð,μ,Ü,·B
±,ê,ªfyfflflf\fxí^i‘O,S,R,P‘O,S,O,Sj,Å,·B

fAfefl,ÍffffX“—_ł,ł-Zå,Æ,μ,ÄfMfŠfVfA,łZw“±“I—§ê,É—§,Â,ñ,Å,·,ªA,»,ł,â,è•û,ł‘¼,łf|
fŠfX,ł”½S‘,ð”f,¤,æ,¤,È,±,Æ,ª½,®,Å,½B—á,!,łA,±,êAŒ»Ý ,łfAfefl,Å,·,ªAfAfNffl
fŠfX,łä,Éfpf<fefmf“_“a,ªŒš,Å,Å,¢,Ü,·,ËB,±,ł ‘å—ł,ł—§”h,È_“a,ÍfyfŠfNfŒfXžž‘ä,É‘¢,ç,ê,½,à,ł,Å,·,ªA,±
,łŒšÝ”i,łZÀ,ÍffffX“—_ł,łZ‘
à,ð—¬—p,μ,Å,¢,é,ñ,Å,·,æBffffX“—_ł,łŒRž“—_ł,Å,·,®,çA %oÅ—łf|
fŠfX,®,çŒRž‘
à,ðW,ß,Å,éA,±,ê,ðfAfefl,Ífyf<fVfAí^,Å”j‰oó,³,ê,½
žC•ª,ł’¬,ł•œ»»,ł,½,ß,Éžg,Å,Å,μ,Ü,¤,ñ,¾B
“—RA‘¼,łf|fŠfX,ł”½S‘,ðž,ł,Ü,·,í,ÈB

,» ,ł•M“ª,ªfXfpf<f^,¾,Å,½,í,¬B
fXfpf<f^,ÍžC‘,ð—łZå,Æ,·,éfyfflflf\fx“—_ł,Æ,¢,¤“—_ł,łfŠ[f_,Å,μ,½B
±,łfMfŠfVfA,ł—¼—Y,ªfMfŠfVfA‘S“y,ł’eŒ ,ð“q,¬,ÄÖ“Ë,μ,½,í,¬,Å,·B

@×,®,¢Œo‰oß,ÍÈ,«,Ü,·,ªAÅI“I,ÉfXfpf<f^,ªY,Å,ÄfAfefl,Í~•šB
fAfefl,É‘ä,í,Å,ÄfXfpf<f^,ª”eŒ ,ð¬,è,Ü,·,ªA,±,ê,à’·‘±,«,μ,Ü,¹,ñB



žY,É”eŒ ,ð¬,Å,½,ł,ªfe[fx,Æ,¢,¤f|fŠfXB
±,łfe[fx,ÉAfGfpf~fmf“f_fx,Æ,¢,¤l•,ª“oê,μ<}‘¬,É—ł,ðL,ł,μ,Å,«,Ü,μ,½B”P,ÍAžlùw,Æ,¢,¤V,μ,¢í—
@,ð•Ò,Ýo,μ,Å‘O,R,V,P”N,ÉfŒfEfNfgf‰,ł í,¢,ÅfXfpf<f^ŒR,ð”j,è,Ü,·B
”eŒ ,ÍfXfpf<f^,®,çfe[fx,É^Ú,è,Ü,μ,½B

Í ü w

Žlūw

fe[fx,Í-§W‘à,ð,PC,QC,R,Ì,æ,¤,ÉŽÍ,ß,É”z'u,μA,P,Ì•”‘à,Í‘à—
ñ,ðŒú,
%oñ,èž,Ý,QC,R,Ì•”‘à,Æ¤,É“GŒR,ð•řÍ,·,éB

@,±,ñ,È<í‡,ÉfMfŠfVfA“à•”,ÅŽÝ,©,çŽÝ,Ö,Æí—,^±,¢,Ä,¢,
fMfŠfVfA¢SE,^S‘Ì,Æ,μ,ÄŠ‘þ,μ,Ä,μ,Ü,¢,Ü,·B
,Ü,,Ì”_<Æ,^r”p,μ,Ä,¢,
fefl,ÍáÄéí,ð,·,é,ñ,Å,·,^AfAfeflŽs,ð•řÍ,μ,½fXfpf<f^ŒR,ÍfAfeflkþx,É L,^,é”·A,»,±,ÌfIfŠ[fu,âfufhfE,Ì—
Ø,ðØ,è“l,μ,Ä,μ,Ü,¤,Ì,ËB•Ä,â”ž,¾,Á,½,ç^ê”N,¾,©,çAŠ ,èŽæ,ç,ê,Ä,à—,”N,ÍŽûŠn,Å,«,é,^,ê,ÇA
‰œÉŽ÷,ÍØ,ç,ê,Ä,μ,Ü,Á,½,çŽÝ,É•c—Ø,ðA,! ,Ä,àŽûŠn,Å,«,é,Ü,Å,É,Í‰œ½”N,©,©,©,é,í,^,Å,μ,åB
,±,¤,¤”_<Ær”p,Å,·Bí^,^I,í,Å,Ä,à,·,®,É‰œ•œ,Å,«,é,í,^,Å,Í,È,¢B
_<ÆŒo‰œcŽÒ,Ì†ŽYŽs—,Í,±,ê,Å—v—Ž,·,éŽÒ,^o,éBŽûŠn,È,^,ê,ÍŽû“ü,È,¢A”—
'n,ð,,,éAàŽY,ð^•^a,·,éAÅŒä,É,Íd“•a•o,Ì•*à*,ð”,,éB,»,±,Ü,Å—v—Ž,·,éŽs—,ào,Ä,,é,ñ,Å,·,ËB

@,³,ç,É,±,Ì,±,ë,ÌŽj,ÍO<ð,ÆŒÄ,Ì,ê,Ü,·B—Žå
<ð,©ŽÒ,^W,Ü,Å,Ä,¢,éŽj,Æ,¢,¤Ó—j,Å,·,ËB
—Žå,ÆŒ©,½—Ú,Å^á,¢,Í,·,é,Ü,¹,ñBŽj,ÉŠÖ,í,éŽs—,B,Ìl,|^•û,Ì^á,¢,¾,Æ l,! ,Ä,à,ç,Á,½,ç,¢,¢Bf|fŠfX‘S‘Ì,ÌŽ—
,ðl,! ,é,Ì,Å,Í,È,ÄA—Úæ,ÌŽ©•^a,Ì —‰ov,ð‘æ^ê,Él,! ,éA,»,ñ,ÈŽÒ‘B,Ì—Žå,Å,·B

ŽQl}‘D‰œîEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,½,¢,Æ,«,Í

—¹/₄,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^*[flfbfg“XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”ò,ñ,ÅA—{,Ìff[f^A‘•],È,Ç,ðŒ©,é,±
,Æ,^,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰œÂ”\,Å,·B

[cŠŒERŽ—ŽjNŠÔ,Í,È,ºí^,ð,·,é,Ì,©](#)

¬ð^ë~Y~B fyf<fvfAí^,¾,^,Å,È,
¢,I,ÉŽŠ,é,Ü,Å,ÌAŽå—v,Èí“,ÌŒRŽ—ZpAí—
^,ÆA,»,ê,ðJ,Ýo,μ,½ŽD‰œiì§,ÉŒ³/₄y,μ,½—¹/₄~B
~ŽÒ,^,Z<³Žt,¾,Á,½,½,ß,©A,©,ä,¢,Æ,±
,é,ÉŽè,^,Í,æ,¤,ÈA<³Žt,É,Æ,Å,Ä,Íu,^,¢,μ,¢v—{B—{“—
,ÍA’N,É,à<³,!,½,
,i,å,Å,Æ,¢,Å,·,^A¢ŠEŽj<³Žt,É,Í[•^,·,Å,è,^,é,±,Æi,^‡,¢B

‘æ,P,O‰œñ@ŒÃ‘āfMfŠfVfA,Q@,·,í,è

[fgfbfyfy\[fW,É—ß,é](#)

[‘O,Ìfy\[fW,Ö](#)
[‘æ,X‰œñ@ŒÃ‘āfMfŠfVfA](#)

[ŽÝ,Ìfy\[fW,Ö](#)
[‘æ,P,P](#)
[%œñ@fAfŒfNfTf“fhffX,Ì‘é‘](#)

fAfŒfNfTf“fhf fX,ł’é ‘

¢ E j u<`~^

@ @@‘æ,P,P%oñ @@fAfŒfNfTf“fhffX,ł’é‘@

,PfAfŒfNfTf“fhffX,ł’“Œ•û‰““

@ fMfŠfVfA,ł–k•û,Éf}fPfhfjfA,Æ,¢,¤‘,ª, ,Á,½B
fof<Jf“”/“‡,ł“i[AfAfefl,È,Ç,łflfŠfX,ª,½,
f}fPfhfjfAl,ÍfMfŠfVfAl,ł^ê”h,È,ł,Å,·,ªAfAfefl,È,ÇfMfŠfVfA,ł’†S•”,łIX,Æ”ä,×,Ä‘å•ª,È,Ü,è,ª, ,Á,½,Ý,½,¢
,ÅA”P,ç,©,ç,Ífof<foffCi‰~,¢Œ³/–t,ð`b,·ŽÒ’Bj,ÆŒÄ,ł,ê,ÄŒy•ł,³,ê,Ä,¢,½B–i”Øl,Æ,³,ê,Ä,¢
,½,ñ,¾,ËB•½ÀŽž‘ä,ł<ßŒ—,łl,½,ç,“Œ–k’n•û,łIX,ðu‰oÚ’łv,Æ,μ,ÄŽŒ•ª,½,ç,Æ,ł•È,łIX,Æl,|,Ä,¢
,½,æ,¤,È,à,ł,Å,·,ËB
,³,ç,Éf}fPfhfjfAl,ÍflfŠfX,ðŒ¬,μ,Ä,¢,È,
ł,Å,à’x,ê,½’n•û,ÆŒ©,È,³,ê,Ä,¢,½B

,Æ,±,ë,ª,±,łf}fPfhfjfAA“i•û,łaei’n^æ,ªŽw“±Œ “^,¢,ÅŠ‘P,μ,Ä,¢,ŠO,É,Ç,ñ,Ç,ñ—Í,δ,Å,–,Ä,«,½,ñ,Å,·B
f}fPfhfjfA,ð^ê‘å‘,É”
”P,ÍAŽá,¢,Æ,«,Éfe[fx,ÉlŽç,É,È,Á,Ä,¢,½,±
,Æ,ª, ,éB,ç,å,¤,ÇfGfpf~fmf“f_fX,³łüw,ÅfXfpf<f^,ð”j,è”eŒ ,ð^¬,Å,½,Å,·B
d••à•°,łíp,ð,¶,Å,
f}fPfhfjfA,łŒR§,ÍM°,ł<R•°,ª”†S,¾,Å,½,ł,Å,·,ª”_–,ðd••à•°,É,μ,ÄAftfBfŠfbflfX,ÍŒR§‰üŠv,ð¬Œ÷,³,¹A
‰o¤Œ ,à<
,»,”,μ,ÄA’Š•ł,í,ç,,f}fŠfXŠO,ł’ł—§R“^,ª”±,fMfŠfVfA-{“y,Éio,μ,Ü,μ,½B

@ fAfeflEfe[fx~A‡ŒR,ªf}fPfhfjfAŒR,ðŒ},|Œ,Á,½,ł,ª”O,R,R,W”NAfJfCfflfCfA,łí,¢B
Œ<Çf}fPfhfjfA,ªY,Å,ÄAfMfŠfVfA,łflfŠfX¢ŠE,Í,»,”,łZx”z‰°,É“ü,è,Ü,μ,½B

“Æ—§,ðŽ,Å,½ûŒflfŠfX,łIX,ł,Ç,¤l,|,½,©,Æ,¢,¤,ÆAef}fPfhfjfA”h,Æ”½f}fPfhfjfA”h,ª, ,Å,½,ñ,Å,·B, ,
–§,Æ—”Žå

fPfhfjfA”h,ł,³,ç,Éf}fPfhfjfA,ð‰Y,μ—§,Å,Äfyf<fVfA,É’ł,·,é•ñ•œí“^,ðl,|,Ä,¢,½,æ,¤,Å,·B

,±,¤,¢,¤”^,ł’†,ÅA’O,R,R,U”NftfBfŠfbflfX,Q¢,ÍÅŽE,³,ê,Ü,·B,S,O’ä”¼,ł,Å,Ü,¾,±,ê,©,ç,ł”N—
ł,Å,·,ËB”wŒäŠÖŒW,Í,æ,•ª,©,Å,Ä,¢,Ü,¹,ñB

”½f}fPfhfjfA”h,É,Æ,Å,Ä,ł,±,ñ,Èf”fff“fX,ł, ,è,Ü,¹,ñB“Æ—§,ð‰oñ•œ,·,é,É,ÍftfBfŠfbflfX,łZ€,Ü,Ç, ,è,ª,½,¢
,¤,ł,Í,È,¢B,È,É,μ,ëAf}fPfhfjfA,ÍftfBfŠfbflfX^ê‘ä,Å<
fPfhfjfA,łZx”z,Í,·,®,É•ö,ê,é,¾,ë,¤,Æl,|,½,ñ,¾,ËBftfBfŠfbflfX,É,Í’§Žq,ª,¢,½,–,ê,ÇA,Ü,¾,Q,Oł,Å,·B,±
,ñ,ÈŽáŽÒ,ÉftfBfŠfbflfX,łO,ðŒp,º,é,í,–,ä,È,¢,Æ,¢,¤,ł,ªA,Ü, íŽ—“I,Èl,|,¾,ë,¤B

@ ,Æ,±,ë,ªA,±,ł,Q,Oł,łŒp,¬,ªfAfŒfNfTf“fhffX,¾,Å,½,ñ,Å,·B
‰opŒê,Å,ÍfAfŒfLfTf“f_[,ÆŒÄ,ł,ê,Ü,·B•,¢,½,±,Æ, ,é,Å,μ,¤B
fAfŒfNfTf“fhffX,Í‰o¤”È,ðŒp,®,ÆA,·,®,³,Üf}fPfhfjfAŒR,ðJ”¬,μA“Æ—§,ðŠé,Ä,½f!
fŠfX,ð§”^,μ,Ü,μ,½B,»,łä,ÅAfAfŒfNfTf“fhffX,Í’SfMfŠfVfA,ł–žå,É,μ,Ä’Ífyf<fVfAíÅ,ži—

·BfMfŠfVfA, ðŒÅ, ß, Ä, ©, ç”P, ^, ±, È, Á, ½, ï, —L—¼, È“Œ•û‰o“a, Å, ·B
fAfŒfNfTf“fhffX, Í‰op—Y, ¾, ©, ç, ÈA, ç, è, ç, è, È““à, ^, , èB, Ç, ±, Ü, Å—{“—, ©•a, ©, ç, È, ç^íb, à, ½,
, ñ, È~b, ^, , èB
, ç, è, ç, è”o, ð®, !, Ä“Œ•û‰o“a, Éo, ©, —, è, A, «, ÉA‰of
‰oi, ð, , é, ñ, ¾BowŽ®, ¾, ÈBfAfŒfNfTf“fhffX, Í, Q, QÎ, Å, ·B, Ü, ¾, Ü, ¾Žá, çBj, È, ç‘åŠw, S”NJJBŽá, ç’‡ŠÔ, ïM“
, à, ½, , ¾, ñ, ç, èBf}fPfhfjfA, Í‰o, AŒM“, ïŠÔ, ^, », ñ, È, É‰o“,
, ðŠ, J, Å, ·BfMfŠfVfAl, ïiŠÔŠÖŒW, Ía‰o ŠÖŒW, æ, è‰o ŠÖŒW, ï•û, ^
‰o, àŽá, ç<M“B, à‡ŠÔ“—Zm“I, ÈŠ, J, Å, í, ç, í, ç, å, Á, Ä, , èä, ^, Á, ½, ñ, ¾, è, ðB
, ±, ï, AŒ, «fAfŒfNfTf“fhffX, ÍŽ©•a, ïaŽY, ð, Ù, ç, Ù, ç’‡ŠÔ’B, È•a, —, Ä, µ, Ü, o, ñ, Å, ·BX—Ñ, à—
ïn, ð, ÈB, , ñ, Ü, èA<C‘O, æ, àŽY, ð•a, —, ÄAfAfŒfNfTf“fhffXŽ©g, ïŽ, i•^, ^, è,
, ï, ÅAf yf<fffBfbfJfX, AŒ, ç, o, M“, a‰o, É, ½, , è, ½B
u‰o, æA, , È, ½, È, Í‰o, àŽc, ç, È, ç, ï, Å, ï, È, ç, Å, , ©Hv
, », è, È, ^, µ, ÄfAfŒfNfTf“fhffX, ^Œ¾, Á, ½, AŒ, ç, o, àŽŒi, ^, è, ÕjB
uŽ,,, È, ÍŠó—], ^, , èBv
, ©, Å, ±, æ, , —, èB
•f‰o, ftfBfŠfBf|fX, ^f}fPfhfjfA, ï—Í, ðL, ï, µ, ÄfMfŠfVfA‘S“y, ð§^3, µ, Ä, ç
,
uç, Á, ½, à, ï, ¾B•fã, a‰o, ½, à, ©, à, È, , ê, Ä, µ, Ü, Á, Ä, ïA‰cæX, ï, å, é, ±, AŒ, ^, è,
“Œ•û‰o“a, AŒ, ç, o, ï, ïi•i“I, È, ïfyf<fvfA‰o“a, È, ñ, Å, , ^, A, ±, è, ï”P, ï•fftBfŠfBf|fX, ^, , Å, ÈŒv‰oæ, ð, µ, Å, ç, ½, à, ï, Å, ·B, ±
, è, ïA‘§Žq, ÈŽc, , ê, ½, AŒ, ç, o, í, —, ¾B
@ ‘O,R,R,S”NAfAfŒfNfTf“fhffX, Í“Œ•û‰o“a, Éo”
, ±, ï, AŒ, «•—AŒ, ï, R, O“ú•a, µ, ©, È, ©, Å, ½, AŒ, ç, o, ©, çAâ‘îY, Á, ÄŒERŽ‘<à, àH—AŒ»’n’2”B, , é, Å, à, è, ¾, Á, ½, ñ, Å, ·B
f[ffbfp, AŒfAfWfA, ð•a, —, èf_[f_flf<fxŠC<à, ð“n, Á, ÄA, Ü, , Å‰o, ï‰oiBfOf‰ojfRfX‰ol”È, ïí, ç, AŒ, ç, ü, Ü, ·B, ±
, ï, AŒ, «, ïfyf<fvfAŒR, à, ¾, ç, ½, ç, S—œ, , ç, ç, Å, ·B, ±, ±
, ÅfAfŒfNfTf“fhffX, ÍŒy, “G, ðRŽU, ç, µ, ÄA“r”†, ï“sŽs, ð§^3, µ, È, ^, çff\f\ff^f~fA’n•û, ÈŒü, ©, ç, Ü, ·B
fyf<fvfA‘o, —{‘C, ÅfAfŒfNfTf“fhffX, ðŒ}, !, ½, ï, ^ff\f\ff^f~fA’n•û, ï“ü, èŒû, È, , ½, èfCfbf\fx, AŒ, ç, o, èŠ, Å, ·B, ±, ±
, ÅA, ï, J, ß, Äfyf<fvfA‘a‰o, f_fŒfCfIfX, RçŽ©g, ^ow, , é, ñ, Å, ·Bfyf<fvfAŒRŒöì, U, O—œAŽÀÛ, È, ï, S, O—œ,
, Å, µ, å, o, B, », ê, Å, àfMfŠfVfAŒR, ï, P, O”{, Å, , æB
, µ, ©, µA, ±, ï, S, O—œ, ï”†, Å—{‘ï, Å, , èfyf<fvfAl, ïA, », ñ, È, È‘½,
, P, O—œ’ò“x, Å, ·Bfyf<fvfA—ï“à, ïFX, È—““o, ©, ç“žm, ïW, ß, ç, ê, Ä, ç, èB
fyf<fvfAŒR, È, ïfMfŠfVfAl, ï—b•o, àŒ\, ç, ½, ñ, Å, , æBH, ç<l, ß, ½fMfŠfVfAl, ^fyf<fvfA, Ü, Åo‰oÒ, —, È—^, Å, ç
, è, ñ, ¾B, È, È, µ, èfMfŠfVfA, ïd“••à•o, ï<à, ïžž‘ä, ï•ç‰oæ, Å, , ^AfCfbf\fx, ïí, ç, ð•, ç, ½šG, Å, ·A“!, °, æ, o, AŒ, , èf_fŒfCfIfX, Rç, ïŒä, è, ÈT, !, Å, ç, è, ±
, ïŒR“, ï““, è, „, ðŽ, Å, Ä, Å, ç, è, Å, µ, åB, ±, èAd“••à•o, Å, ·Bfyf<fvfA‘a‰o, è‰oq‘à, È, È, Å, ç, è, ñ, ¾B
, Ü, A, », ñ, È, í, —, ÅAf yf<fvfAŒR, ï”, ï“½, ç, ^AŒ, µ, Ä^ê, Å, É, Ü, AŒ, Ü, Å, ½‘å, «, È—Í, ð”Šö, Å, «, èó‘Ô, Å, È, ç, AŒ, ç, o, ±
, AŒ, Å, ·B
‘O,R,R,R”NAfCfbf\fx, ïí, ç, Å, ·Bí, ç, ï—í, È, è, Ü, ·BfAfŒfNfTf“fhffX, ïŽ©•a, ©, ç^, Åæ, È“G, È“È, Åž, ñ, Å, ç

fA_fNfTf“fhf fX, l'é ‘
 fyf fVfA‘å%oɔf_fŒfCfIfX,Rφ,ÍA,C,ç,©,Æ,φ,|,î,~V,ç,á,ñ,ÅA,±,ɔ,φ,ɔí,É,ÍŒü,φ,Ä,φ
 ,È,©,Á,½BfMfŠfVfAŒR,“—,Á,Ä,
 ,é,±,Æ,Í,È,φ,Å,·B
 ,Æ,φ,ɔ,í,~,ÅAfCfbf\fX,lí,φ,ÍfAfŒfNfTf“fhffX,lÝ—~,Å,μ,½B
 @ Ý,Á,½, ,ÆAíê,É,Íà•ó,^,½,
 ,ɔ,ÆAf_fŒfCfIfX,Ííé,Å,à~,ÈJŠ~,δ,·,é,½,B,É“Á•È,ì“V~,É%oÆ*i*’~“x•i,ðZ,ç,ñ,Å,φ,½,lb,Ä,φ
 ,Å,ÉŽ©•^,l•ee,É”ÜA,~P—l,Ü,Å~A,ê,Ä,«,Ä,φ,½,ñ,Å,·,ÈA,±,ê,^B,Å,àA”P—,½,ç,Ý,ñ,È’u,«*Z*,è,É,μ,Ä“|,°,ç,á,Å,½B
 ,±,l”Ü,å,~P—l,í,à,ì,·,²,φ”ü,¾,Å,½,ç,μ,φB
 ,Ý[,ñ,ÈfAfŒfNfTf“fhffX,l,à,ì,É,È,éB,Å,·,^AfAfŒfNfTf“fhffX,l”P—,½,ç,É,ÍŽw^ê—
 {G,ê, ’sd,É•ÛŒì,δ,μ,½,ñ,¾B,±,l•Ó,ÍÖ—~“I,ÅŒ%o•È,Å,μ,åB
 ,±,ê,ð, ,Æ,Å“ ,|^,φ,½f_fŒfCfIfX,Rφ,ÍAu,à,μ—],^fyf fVfA‘å
 %oɔ,Å,È,
 -{“-,É,±,ñ,ÈŽ-,ðŒ¾,Å,½,©,Ç,ɔ,©•^,©,è,Ü,¹,ñ,^A,±,lŒ¾,φ“ ,|,ÍfAfŒfNfTf“fhffX,lÓ},ð‘z‘œ,³,¹,é,ËB
 ,Å,Ü,èAf yf fVfA’é‘,ð—Å,Ú,μ,ÄA,»,l—l“y,ðZx”z,·,é,Ä,à,è,È,çAf yf fVfAl,l[|]—l,íâ‘l•K—
 v,Å,μ,åBf yf fVfAl,ðZè,È,Ä,~,é,É,Í,Ç,ɔ,μ,½,ç,æ,φ,Å,·,©B
 ”P,lfyf fVfA%oɔ”Ü’B,É‘l,·,é•ÛŒì,É,Í,»,ɔ,φ,ɔ[-d%o“—j,^, ,Å,½,ñ,Å,í,È,φ,©A,» ,ɔžv,|,Ü,·BŒ«,φ,ËB
 ,±,l, ,ÆfAfŒfNfTf“fhffX,í,·,®,³,Ü“|,°,½f_fŒfCfIfX,ð’Ç,í,,ÉAi~H,ð“i,ÉŽæ,è,Ü,·B
 ,Ü,,ftfFfjfLfAU—^,ð—Ú•W,É,μ,Ü,·B,Vf—ŒŽ,©,~,ÄAfefBf fXŽs,ðU—^,μ,Ä,φ,é,ñ,Å,·BfMfŠfVfA,ÍŠCä—fO,ì—
 %ov,É,Æ,Á,Ä,ÍftfFfjfLfA,í’×,³,È,φ,Æ,ËB
 ,» ,μ,ÄAfGfWfvfg,É“ü,è,Ü,·BfGfWfvfg,Å,Ífyf fVfA,lŽx”z,É‘l,μ,Ä‘iR,^
 ,³,ê,éBfAfŒfNfTf“fhffX,Í%oð•úŽO,Æ,μ,ÄŒ},|,ç,ê,Ä,φ,φ<C•^,Å,·B,±,ê,ÍA, ,Æ,ì“WŠJ,É
 %œ<ç,·,é,ì,Å“a,ì÷,É“ü,ê,Ä,~,φ,Ä,~,¾,³,φB
 @ ŽÝ,“O,R,R,P”NAfAf<fxf%o,í,φ,Å,·BfGfWfvfg,©,çfffl
 f^f~fA,ÉŒR,ði,β,½fAfŒfNfTf“fhffX,Æf_fŒfCfIfX,Rφ,ìÅŒä,ìŒí,Å,·Bfyf fVfA‘ɔ,Í,P,O,O—œ,ìŒR“,Å,·B
 ,S—œ,ìfMfŠfVfAŒR,ÉÝ,ç—Ú,Í,È,φ,Æl,|,½fpf<ffjfIf“«ŒR,ÍfAfŒfNfTf“fhffX,ÉiŒ¾,μ,Ü,μ,½Bu%oɔ,æA,±
 ,l‘åŒR,ÉÝ,Å,É,í—éP,μ,©, ,è,Ü,¹,ñBv
 fAfŒfNfTf“fhffX“š,|,ÄŒ¾,ɔBuŽ,,,ÍÝ—~,ð“,Ü,È,φBv
 ,±,ê,àfAfŒfNfTf“fhffX“à,Å,·,©,ç-{“-,©,Ç,ɔ,©•^,©,è,Ü,¹,ñ,~,ê,ÇA,±,ñ,È~b,É,È,Å,Ä,φ,éB
 fyf fVfA‘ɔ,ít,ÉfMfŠfVfA,ìÝ@,í—éP,μ,©,È,φ,Æl,|,½B,» ,±,ÅA—éP,É”ð,|,Ä‘SŒR,ÉŠ®‘S••,Å<N,«,Ä,φ
 ,é,æ,ɔ,ÉŽwŽ!,ðo,μ,½BfAfŒfNfTf“fhffX,~
 éP,ð,©,~,½,çA,·,®,³,Ü<P,É,Å,æ,ɔ,ÆŒ¾,ɔ,í,~,Å,·B,μ,©,μAfAfŒfNfTf“fhffX,Í‘S‘R,» ,lC,Í,È,φ,Å,μ,åB
 fyf fVfAŒR,í,φ,Å—~,é,©A,φ,Å—~,é,©,Æ<U’L,μ,È,^,ç—é,ð—¾,©,μ,Ä,μ,Ü,φ,Ü,μ,½B“O—é,Å<U’L,μ,Ä, ,½,
 ^ê•û,ìfMfŠfVfAŒR,í,®,Å,·,è~,Å,ÄŒ³<C^”t,Å’C,^,½B
 ,Æ,φ,ɔ,í,~,ÅA—,“ú,ìŒí,ÍfAfŒfNfTf“fhffX,ìÝ—~,Æ,È,Å,½A,Æ,φ,ɔB
 ŽÀÛ,É|“x,ìŒí,à—í,É,È,Å,ÄA,Ü,½,à,âf_fŒfCfIfX,Rφ,Í“|,°o,μ,Ä,μ,Ü,ɔ,ñ,Å,·B,» ,l,½,ß‘SŒR‘•ø,ê,É,È,Å,Ä•%o
 ,~,Ä,μ,Ü,Å,½B
 ,±,ê,ÅAŽ—ŽÀäf yf fVfA,í—Å—S,μAfAfŒfNfTf“fhffX,^,ìé‘,ìŒäŒpŽO,É,È,è,Ü,μ,½B

fAfŒfNfTf“fhf fX, l̄é ‘

“|, °, ½f _fŒfCfIfX, R¢, l̄’n•û, l̄fTfgf%ofbfvi““Åj, l̄— Ø, è, ÅŽE, ³, ê, Ä, µ, Ü, ¢, Ü, µ, ½B

@ fAfŒfNfTf“fhffX, l̄, »l̄Œä, àŒfyf<fvfA—l̄, δŽx”z‰o, É”[, β, È, ª, ç“Œ, ÉŒü, ©, Á, Ä“]í, µ, Ä, ¢, «, Ü, µ, ½B
‘O, R, Q, U”N, É, l̄fCf“f_fXì, δ“n, èfCf“fh, ÉN“ü, µ, Ü, µ, ½B
, C, o, àAfAfŒfNfTf“fhffX, l̄—{
, C, Å¢ŠEª•ž, δl, |, Ä, ¢, ½, ñ, Å, l̄, È, ¢, ©, ÈB!ŠÔ, l̄Z, pš, C, ±
, Ü, Å, à“Œ, ÉŒü, ©, Å, à, è, Ÿ, ½, ¢, Å, ·B
”P, l̄—|, ¢, é•°Žm’B, l̄s^Å, É, È, é, ñ, ¾, ÈB, ¢, fA‘å‰o, æA, C, ±, Ü, Ås,
, ±, l̄’iŠK, Å•°Žm’B, afxfgf%ofCfL, δ<N, ±, ·B, à, o<A, è, ½, ¢A, AŒE¾, o, ñ, Å, ·B“Œ•û
‰o“ª, Eo”, µ, Ä, ©, ç, ·, Å, É, W”N, aŒo, Á, Ä, ¢, éB<CŽ, l̄, l̄•ª, ©, é, ÈB

, ¢,

, ±, ±, Å, æ, o, á,

, ½, ¾AfAfŒfNfTf“fhffX, a}fPfhfjfA, É<A, é, ±

, AŒ, l̄, , è, Ü, ¹, ñ, Å, µ, ½B”P, l̄fyf<fvfA’é, l̄ŒäŒpŽO, AŒ, µ, Äfofrff“, ©, ç’é, δ“Žl, µ, Ü, µ, ½B

”P, l̄, Å, ½, ±, l̄’å’é, l̄—¼‘O, a, , è, Ü, ¹, ñB, AŒ, ¢, o, l̄, l̄, , AŒ, ·, ®, ÉfAfŒfNfTf“fhffX, l̄Ž€ñ, Å, µ, Ü, o, ñ, Å, ·B, ±
, l̄, l̄’ÈfAfŒfNfTf“fhffX, l̄’é‘A, AŒÄ, l̄, è, Ü, ·B

QfAfŒfNfTf“fhffX, l̄o

@ ’Z, ¢ŠÔ, Å, µ, ½, a}fAfŒfNfTf“fhffX, a, C, l̄, æ, o, È
, Ü, , ”P, l̄V, ½, Éª•ž, µ, ½—l̄y, ÉfAfŒfNfTf“fhfŠfA, AŒ, ¢, o—¼‘O, l̄“sŽs, δŒšÝ, µ, Ü, ·B
’†, Å, àfGfWfvfg, l̄fifCf%oÍŒü, É’z, ¢, ½fAfŒfNfTf“fhfŠfA, a—
L—¼, Å, , a’é’Še’n, ÉŽx”z, l̄’“_AŒ, µ, Ä“—, j—¼‘O, l̄“sŽs, δ, ½,
, ±, l̄V, µ,
‰o}fAfWfA, ªfCf“fh, É<ß, ¢fAfŒfNfTf“fhfŠfA, ÉZ, Ü, i, ³, ê, ½fMfŠfVfAl’B, l̄fMfŠfVfA—{“y, ©, ç‰o“,
, é, µAŒ»’n, l̄IX, AŒŒ \times , È, ñ, ©, µ, Ä, á, a, Ä“y’n, l̄l, ½, l̄, É<zŽû, ³, ê, Ä, ¢,
, o, n, æ, È, àL, a, Å, ½, í, Ä, ·B

%o½”N, ©‘O, l̄, ±, AŒ, Å, , a, m, g, j, ÅAafCf“fh, l̄ŽR‰oœ, l̄’J, , ¢, ÉZ, p•”“o, aD‰o, ³, ê, Ä, ¢, é, l̄, δŒ©, ½, ñ, Å, , a, A, », l̄•”“o
, l̄IX, l̄ŽC•a, ½, l̄, l̄fAfŒfNfTf“fhffX, a}Cf“fh, ÉŽc, µ, ½fMfŠfVfAl, l̄—åá, AŒ—¼æ, Ä, Ä, ¢, é, ñ, Å, , æBŠç, Ä, «, á•
—‘, aŽü’Í, l̄fCf“fh, AŒ^á, o, ñ, Å, ·B, », o, ¢, o, l̄IX, a, Å, à, ¢, é, ñ, Å, , ÈB

@ , ³, ç, ÉAfAfŒfNfTf“fhffX, l̄fMfŠfVfA•j—¾, AŒfIfŠfGf“fg•j—¾, l̄—Z‡, δ, ß, , µ, Ü, µ, ½B
ç“l̄’I, É, l̄—“—Z‡, δl, |, ½, æ, o, Å, ·BfMfŠfVfA•°Žm, AŒfyf<fvfA•M“o, l̄Zq—, AŒ, l̄W’cŒ \times , È, ñ, Ä, ¢
, o, l̄, l̄, ð, à, Ü, ·BŽC•°Ž@g, àfyf<fvfA‰o, l̄—«, δÈ, É, , éB
L‘å, È’é, , ðŽl, ß, é, ½, ß, É, àfyf<fvfAl, ð, C, ñ, C, ñ“o—p, µ, Ü, ·B
fAfŒfNfTf“fhffXZ@g, a}fyf<fvfA, ÉŒX, ¢, Ä, ¢,
, ±, ê, a}f}fPfhfjfA^È—^fAfŒfNfTf“fhffX, l̄g<ß, É, ¢
, ½<M“o}fOf<fv, AŒ, l̄ŠÔ, É, µ, Ä,
, ©v, AŒA•s—ž, ðŽ, ÄB

@ , Ü, ½AfGfWfvfg, ÄfAfŒfNfTf“fhffX, l̄fVf[, AŒ, ¢, o, “a“sŽs, És,
, ð, o, —, ÄA, , Ä, ©, è, », l̄C, É, È, éBfGfWfvfg, ÉS½Œ}, ³, ê, Ä, ¢, c<CŽ, l̄, Å, ¢, ½ä, ÉA, ±
, ê, Å, , ©, ç, ÈB, µ, ©, àA, à, AŒ, à, AŒGfWfvfg, l̄‰o, ð_, l̄‰o»g, AEl, |, é““a, , éB_, l̄J, Ü, è•l̄, í, è, AŒ, ¢, í, êA_, l̄

fAfŒfNfTf“fhf fX, l'é

%o»g, l, æ, o, ÉÚ·Ó·, ê, éB

%o, ð—Fl, l, æ, o, É·l“tm, É<ß, çS·, J, Å·μ, œf}fPfhfjfAl, åfMfŠfVfAl, AE, l—ž·, l‘å, <, ç, Å, ·B
fyf<fvfAl, l%o, É·l, ·, é·Ó“x, àfGfWfvfg, É<ß, çB%o, ð, , ç, AE, ±, è, É·u, ç
, Å, ·žd, l, ;, éS·, J, Å, ·B“l, μ, çŒ³/4, ç•û, ð, ;, é, AE Afyf<fvfA, åfGfWfvfg, l%o, lY, è•û, lue§žå·“iv, È, l, Å, ·B
fAfŒfNfTf“fhffX, É, AE, Å, åfMfŠfVfA·—, æ, è, àfIf ŠfGf“fgê§žå·, a·C, É·ü, Å, ½, ±
, AE, l, à, l, è, n, Å, ·B, », μ, AA”p, lMfŠfVfAl, åf}fPfhfjfAl, É·l, μ, Å, à_, l, ², AE,
žC·a, ÉÚ, ·, é, æ, o, É<§, μ, l, J, B, Ü, ·B<CŒy, É·, ð, ©, —, é, ÈA~b, ·, AE, <, læi, —A, AE, ©, ÈB

fvfŠf“fg, l}fAfŒfNfTf“fhffX, l}fRfCf“, ðŒ©, Å,
, é, Å, μ, å, o, BŠpA<, É, àJ, l, Å, ç, éA, ±, è, l_¹, È, à, l, lØi, , ©, μj, Å, ·B_A, à, μ,
, à, l, AE, μ, ÅžC·a, ð·, ç, Å, ç, é, l, Å, ·B
i·á·“j“çžò, l·û, æ, è, È%o, l, žw“E, ð, ç, ½, ¾, «, Ü, μ, ½B ufwfAfof“fh, l%o, ðž|, μA—
r, lŠp, l}Af, f“_, lžq, AE, μ, Å, l, œ, ðU, ü, ·, évi“ú—{ ‘á·S%o, È·S·E·šwšÜj

, ±, ê, É·l, μ, Åf}fPfhfjfA·M·°, l·†, ©, ç, l·½—Œv%o, È, C, ào, Å,

, ±, o, ç, o, ð, μ, l·†, ÅfAfŒfNfTf“fhffX, l·È·Rž, n, Å, μ, Ü, ç, Ü, ·B

fAf%o, frfA·û—È, É%o, “œv%o, a, , Å, Ä, », low, ðj, o%o, f%o, i, Å“È·R“l, è, Ü, ·B%o, ½“ú, ©Qž, n, ¾Œä, Å—
S, , È, è, Ü, ·Bž, ö, l, æ, o, ©, è, Ü, , nB, R, Rl, Å, μ, ½B

RfwfŒfjfYf€”

@ œäŒpžò, a·è, É, È, èBžq, Y, , Ü, ¾, È, ç

, n, Å, ·, æB”Ü, l·él, ”DP”†, ÅAfAfŒfNfTf“fhffX, lžœä·§žq, aJ, Ü, è, Ü, ·, aA, ±, n, Èžq, Y, É“žj”·—l, l, È, ç
, Å, ·, ÈB, , AE A“÷e, AE, μ, Å, l·á, ç, lŒZ, a, ç, ½, l, Å, ·, aA, ±, ll, l·m“lášQ, a, , Å, ÄA, à, AE%o, ñ, È, l, ç, è, È, çB

—OISÔÜ, ÉfAfŒfNfTf“fhffX, lœäŒpžò, É, Å, ç, Ä, , , ©, è, Å, ±, oŒ³/4, Å, ½B

uÅ, à%o, ½, é, É, Ó, , i, μ, ç, à, l, Èv

žA—lžò, É, AE, Å, l“s‡, l, ç, ç·œ³/4, ¾, ÈB

”p, lžœäAf}fPfhfjfA·M·°, l—L—l·«, É, æ, èœäŒp“ç, l·í“ç, aN, ±, è, Ü, ·B

, ±, lœäŒpžò, ðŒo, ÄAfAfŒfNfTf“fhffX, l·é“, l·å, , , R, Å, l, È·a, ©, è, Ü, μ, ½B

f}fPfhfjfAAfMfŠfVfA, Éœš·, μ, ½, l, aAfAf“fefBfSfmfX’©f}
fPfhfjfAA·Œfyf<fvfA—
l, Éœš·, μ, ½, l, aZfŒfEfRfX’©fVfŠfABfGfWfvfg, ÉfvfgŒf}
fCfIfX’©fGfWfvfgB%o, AE, ©, AE, ç
, o, l, lœš·, μ, ½, œR, l—¼·O, Å, ·B, ±, l, , AE A, », lžq·, a
‰œ, ñ, È, ðŒp³, μ, Å, ç, , ±, AE, È, è, Ü, ·B

fZfŒfEfRfX’©fVfŠfA, l—l“y, aL, ·, ñ, Å, ’†‰œ, fAfWfA·û—
È, Ü, Å“§, Å, , , È, ©, Å, ½B, ’†‰œ, fAfWfA·û—

È, l}fMfŠfVfAl“Å, lA, å, a, ÅžC·—§, μ, ÅfofNfgfŠfA, AE, ç
, o, ðŒšY, μ, Ü, μ, ½i·O, Q, T, TjB

fyf<fvfA—{“yAŒ»Y, l}fCf‰œf“, Å, ·, aA, ±, ±, Å, lfpf<fefBfA, AE, ç

fAfŒfNfTf“fhf fX,ł’é ‘

,ɔfyf<fvfAl,ł’‘,^aż@—§,μ,Ü,·i‘O,Q,S,WjB

@ ,±,ñ,È,Ó,ɔ,É™ X,É<ŒfAfŒfNfTf“fhffX,ł’é‘,Í•^a—ô,μ,Ä,¢,
^AfvgfŒf}fCfIfX’©fGfWfvfg,^a–Å–S,·,é‘O,R,O”N,Ü,Å,ł–ñ,R,O,O”NŠÔ,δfwfŒfjfYf€ž‘ä,AE,¢,¢
,Ü,·BfMfŠfVfA•—,łŽž‘ä,AE,¢,ɔ^Ó–j,Å,·Bff\flf^f~fA,âAfGfWfvfg,È,C,łfIfŠfGf“fg’n•û,É,àfMfŠfVfA•
‰»»,^aL,Ü,Á,^ažž‘ä,^a¾,AE,¢,ɔ,í,–,Å,·,ĘB
fAfŒfNfTf“fhffX,ł’é‘,ł—¬,ê,đ<,,P‘,ÍfwfŒfjfYf€‘,AEŒÄ,ł,ê,Ü,·B

,¢,ł,ł,ñ’·,

¢ŠEŽO‘å”ül,^a¾,»,ɔ,Å,·,^aB,±,łfNfŒfIfpfgf‰o,Å,·,^aA‰o½—“o,^a¾,Á,^a½,©,AE,¢
,ɔ,AE,^a¾,©,çAfMfŠfVfAl,È,ñ,Å,·,ĘBfAfŒfNfTf“fhffX,ł•«fvfgfŒf}fCfIfX,łŽq‘·,È,ñ,Å,·,©,çB
fwfŒfjfYf€ž‘ä,AE,¢,ɔ,ł,ÍfMfŠfVfAl,^ažx”zŽO,Å,·,Å,^ažž‘ä,Å,à,·,é,í,–,Å,·B

‘æ,P,P‰oñ@fAfŒfNfTf“fhffX,ł’é‘@,·,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É–β,é](#)

[‘O,łfy\[fW,Ö
‘æ,P,Q
‰oñ@ŒÄ‘äfMfŠfVfAi,Qj](#)

[žY,łfy\[fW,Ö
‘æ,P,Q
‰oñ@fMfŠfVfAEfwfŒfjfYf€ž
‰»](#)

@

@@ @‘æ,P,Q‰oñ @@fMfŠfVfAEfwfEfjfYf€•¶‰»@

	,PŽ©·R“NŠw
	,Qf\ftfBfXfg
-ÚŽY	,R\ftfNf‰cefefX
	,Sfvf‰cfg“,EfAfŠfXfgfefEfX
	,T•jŒl
	,UfwfEfjfYf€•¶‰»

,PŽ©·R“NŠw

@¢ŠE,ÅÅ‰o,É“NŠw,ðJ,Ýo,μ,½,ì,afMfŠfVfAl,Å,μ,½B

ŒÄ·äfMfŠfVfA,ìŽs-,ÍAfqf},Å,·B

”·ŽdŽ-,È,C,ìJ“,Í“z-ê,·,·,é,μA•v•w,Å‰oÆŽ-,ð•a·S,·,é,È,ñ,Ä”·z,Í·S·R,È,

,¾,®,çŽs-,A,E,c,|,íj,Å,·,³A,Ífjf},Åfjf},ÅB

fjf},ðŽ,Ä-],μ,A·šO,®,çfAfSf‰o,ÆŒÄ,Î,ê,éLê,ÉW,Ü,Å,Äfuf‰ufuf‰o,μ,Ä,c,é,ì,Å,·B

fxf fffxf ff,Æ,”·,è,μ,½,èAí“,ì,½,B,Égì,ð·b,|,½,èA,»,ñ,ÈŽ-,μ,Ä,Ý,Ä,à,â,Ä,ì,èfjf}B

lŠÖfjf},¾,Æ,c,é,c,é-]·a,È,±,Æ,ðl,|,éB

,ÅA”P,ç,íl,|,½,ì,Å,·,ëB

%o½,ÅH‰o½,Å¢ŠE,ío-^,Ä,é,ìH,Å,ÄB

,±,ê,³Å‰o,ì“NŠw,Å,μ,½B

Å‰o,ì“NŠw,íŽ©·R“NŠw,Æ,c,c,Ü,·Bí,È,c,³,μ,,β‰oÈŠw,É, ,½,é,±,Æ,ðl,|,½B

¢ŠE,ì¬,è-§,ç,Æ,®,ð,ËB,½,¾,μAžAœ‡“i,ì‰o½,à,È,c,®,ç,D,½,·,ç“a,ì†,Å~_,Ål,|,½B

@,»,ìÅ‰o,ìl,afŒ[fXi·O,T,W,O”N Š-ðj,Å,·B

,±,ìl,íFcIfjfA·n·ûf~fŒfgfX,ìl,Å,·BfMfŠfVfA-{“y,Å,Í,È,cBf^fŒ[fX”ÈŠO,É,àŽ©·R“NŠwžO,íFcIfjfA·n·û,âfVf fŠfA“‡,ìl,³-Ú-§,ç,Ü,·BfMfŠfVfA-{“y,Å,È,c·a·A““É,Æ,c,í,ê, ,¼-“o,ìZhŒf,È,C,ðŽo,“,ÄV,μ,c”

,³,ÄAf^fŒ[fX,ìŒ³/4-tu-œ“,ì³Œ³,ì...,Å, ,évB,μ,Å,®,èŠo,|,Å,·,±,¤B

,±,ê,³Å‰o,ì“NŠw,ìŒ³/4-t,³B¢ŠE,í...,®,çø-^,Å,ç,éA,Æ,c,ç,ò,ì,í-c’t,ÉŽv,|,é,®,ç,å,μ,ê,È,c,³A,â,Í,è‰œŠú“I,È,ñ,Å,·,æB

”ê,Å,ÍAcŠE,ì¬,è-§,ç,ð’C·y,μ,½,“_,ÅA,»,μ,Ä“ñ,Â-Ú,ÉA,±,ê,ÍÅ,àd-v,Å,·,³cŠE,ì¬,è-§,ç,ð_-l”²,«,Ål,|,½,“,ÅB

”P,à_X,ðM,¶,Å,ç,½,Å,μ,å,ç,³A,Æ,è, ,|,„,»,ê,í,±,Å,ç,É’u,c,Å,·,B,±,ì”

,±,ìf^fŒ[fX,Æ,c,¤l,í,½,¾“NŠw,ð,μ,½,¾,“,Å,í,È,cB“úH,ð-Œ³/4,μ,½,èAì,ì-¬...-È,ð’²®,μ,ÄŒER“à,ì“n‰oÍ,ð‰oÅ”,É,μ,½,è,c,é,c,é,ÈZp,ðŽ,Å,ä,ç,Ü,μ,½B

fwf‰ofNfŒfCfgfXi·O,T,O,O”N j,íu-œ“,ì³Œ³,í‰oì,Å, ,évB

,Å,à,±,ìl,íu-œ“,í-¬“,|,·,év,Æ,c,¤Œ³/4-t,ì•û,·-L-¼,Å,·,ëB‰oŠ,¶,Å,Æ,μ,Å,c,È,c,æ,¤,ÉA·S,Å,ì,à,ì,íêu,à“-,¶,Æ,±

,é,ÈŽ~,Ü,ç,È,cA,Æl,|,½,ÆŒ³/4,í,ê,Å,c,Ü,·B

%oì,Å,å...,Å,å,ò<C,Å,å‰o½,Å,å, ,è,ÅA,c,é,c,é,Èl,|,¤o,Å,·,é,ñ,Å,·,³A,â,³A”

,“,ì†,Å,åffff,fNfŠfgfXi·O,S,U,O“O,R,V,O j,íA·àŽ-,¾Bu-œ“,ì³Œ³,íŒ’žqifAfgf¶,Å, ,év,Æ,c

,¤,ì,³”P,ìl,|,Å,·Bf,fm,ð,C,ñ,C,ñ×,®,·,Å,c,

{“I,É,í“-,¶,Å,μ,åB

“a,ì†,Ål,|,é,¾,“,Å,åA,±,±,Ü,Å“z’B,Å,“,é,ñ,Å,·,ëB

’ŠU,ì·ÉŒÀ,afsf^fSf‰ofXi·O,U¢*Ij*,Å,μ,å,¤,¤B

”Šw,ìŠi·b,Å,å,Å-L-¼,Èl,Å,·,³”P,íu-œ“,ì³Œ³,í”Å, ,évB

,Qf\ftfBfXfg

@,³,ÅA,â,³,ÅŠOS,íŽ©·R,ì¬,è-§,ç,®,çlŠO,ì¶,¤¤,Ö,Æ^Ú,Å,Ä,c,“,é,Ü,·B

,¢,©,ÉЈ,«,é,×,«,©A^,Æ,ÍA”ü,Æ,ÍA‘P,Æ,ÍA,±,ñ,ÈŽ–,ðfMfŠfVfAl’B,Íl,|,Í,¶,§,ß,½B
 ,±,¤,¢,¤’†,ÀAŠ^–ô,µ,½,Ì,¤f\ftfBfXfg,ÆŒÄ,Ì,ê,½l,½,ç,À,·B
 f\ftfBfXfg,Æ,¢,¤,Ì,Í•Ù~_p,³Zt,Ì,±,Æ,À,·B
 ,È,°f\ftfBfXfg,½,ç,³S^–ô,ð,·,é,æ,¤,É,È,Á,½,©,Æ,¢,¤,ÆA–“Žå,Ì”
 fAfefl,Ì,–%o,ðŽv,¢o,µ,À,³,¢B,U,O,O,OI,³W,Ü,é%o,ç,ÀŽ@•,ÌÓŒ©,ðl,É•,¢
 ,À,à,ç,¢A,³,ç,ÉIX,ÌŽxŽ,ð“³/4,ÀAŽ@•,ÌÓŒ©,ð’È,»,¤,ÆŽv,Á,½,ç`bp,¤,Ü,,È,©,Á,½,çf_f,È,ñ,À,·,æB–È”,
 ,À,à,ç,!,È,¢B<ç~_,À‘ŠŽè,ÉY,À,È,©,Á,½,ç`O_¡,¤,È,¢B<ç~_,ç`bp,¤,Ü,
 –<ü,³äŽè,¢,Ì,ÍA’mŒb,Ì, ,éI,½,çA,À,Ü,¤“NŠwŽÒ,À,·,ËB
 ,»¤,¢,¤“NŠwŽÒ,ÉŽ;‰œÆŽu–],ÌŽáŽÒ’B,³,|,ð,ç,¤,½,í,–,³/4B
 f\ftfBfXfg,Æ,¢,¤,Ì,Í,à,Æ,à,Æ,fu’mŒb,Ì, ,élv,Æ,¢,¤O_¡,À,·B–v,·,é,É“NŠwŽÒ,¾,ËB,ç,å,À,Æ‘O,Éuf\ftfB[,Ì¢ ŠEv,Æ,¢,¤–
 {,“,è,Ü,µ,½,ËB\f\ftfB[,Æ,¢,¤,Ì,Í–,ÌŽq,Ì,–¹/4’O,À,·,¤Au’mŒbv,Æ,¢,¤O_¡,À,·B“ú–{•–,ÉŒ¾,|,Ì’mŒb,ç,å,ñ,À,·B,»,Ìf
 \ftfBfXfg,À,·,¤A,å,¤,À‘O_¡,¤,À,Í,À,À,«,ÀA•Ù~_p,Ì,³Zt,Æ,È,À,½B
 @,»,Ìf\f\ftfBfXfg,ÀÀ,à–L–¹/4,È,Ì,¤vff^fSf‰œfXi‘O,S,X,O`‘O,S,Q,O j,À,·B
 ,À,Ì,·,²,¢Žö<Æ–ç,ð,Æ,À,À,³,|,½,ç,µ,¢BŒRŠÍ^éÇ,ÌŒš‘¢’í,Æ“–,Ì,³/4,–,ÌŽö<Æ–ç,ð,Æ,À,½,Æ,¢,¢,Ü,·B,P–œfhf
 %œfNf,¾,À,ÀŒ¾,¤,ñ,À,·,¤A¡,È,ç,¢,ç,È,À,·,©,ËB,P,O,O,O–œ‰œ~,ç,¢,À,µ,å,¤,©B
 fvff^fSf‰œfX,ÌŒ¾–t,À,·B
 u–œ•,ÌŽÚ“x,ÍlŠÔ,À, ,éBv
 fGfWfvfgl,ÍlŠÔ,Ìg‘Ì,É‘é,âŽRŒ¢,Ì“a,ð,À,–,½f,fm,ð_,Æl,|Af yf_fVfAl,Ì‰œÌ,ð_,Æ’,ßAf wfuf
 %œfCl,Ì_,ðf,fnfEfF,Ì,Ý,Æ,µA,í,ê,í,êfMfŠfVfAl,Ì,Ü,½,È,Ì_,ðŽ,ÀB
 ,À,·,çAŽž,ÆŠ,³,À,|,Ì,í,éB,C,±,Éâ“Ì“I,È^–,¤P,¤,»Ì‘½,à,ë,à,ë,¤,ë,¤,©BŒN,Ì³,À,í,½,µ,Ì³,Ì‘á,¤B
 u–œ•,ÌŽÚ“x,ÍlŠÔv,Æ,¢,¤,Ì,Í,»¤,¢,¤O_–,ðŒ¾,À,À,¢,éB
 “í,µ,¢Œ¾,¢•û,À‰œ,Ì‘Š,ÌŽá,ÀB
 ,ç,À‘ŠŽè,ð’À,ç‰œ,©,·,Ì,³–Ú“I,É,È,ë,Ü,·,©,çAâ“Ì“I^–,È,ñ,À‘C,¢,ß,À,¢,À,Ìf_f,È,í,–,À,·B, ,éŽž,Ì•,ð””,ÆŒ¾,¢
 ,é,ßA,Ü,½, ,éŽž,Ì””,ð•,ÆŒ¾,¢,é,ß,é,±,Æ,¤K–v,É,È,éB,»¤,¤l,|,é,Æu–œ•,ÌŽÚ“xv,ðulŠÔv,É,·,é,Ì,Ì“s‡,æ,¢,À,·B
Rf\ftfNf‰œfefX
 @f\ftfBfXfg’B,ÌŒ¾,À,À,¢,é,±,Æ,ÌŒ<\Œ‘‘al,É,Í¤O_À,«,é“_,¤½,¢,ÆŽv,¢,Ü,·Bu“z–ê§,ÍlŠÔ«,É”½,·,év,ÆŒ¾,À,À,¢,½,èAu_,Ì“a,Ì,¢
 ,¢,j,¤lX,ð],í,¹,é,½,ß,É”
 ,Æ,¢,¤,Ì,ÍA”P,ç,Æ‘Ì”¤,³,ê,é,¤“NŠwŽÒ,¤“o,é,·,é,Ì,À,·,æB
 ,»¤,ê,¤A\ftfNf‰œfefXi‘O,S,V,O`‘O,R,X,Xj,À,·B
 f\ftfNf‰œfefX
 ,±,ê,¤f\ftfNf‰œfefX,Ì‘œ,À,·B
 œC,À,ç,ñ,ÈŠ,Ì,À,·,©B,È,|AAAB
 “–Žž,ÌlL^,À,Ì”P,Ì”ñ,É,Ý,À,Æ,à,È,¢,j,Æ,³,ê,À,¢,Ü,·B“a,Ì“À,°,å,¤,èA–Ú,ÌfMf‡f–
 ÚA@,ÌŽ,Žq@,ÀA•¤Œú,¢OA,¤,Ü,–,É“³/4,è,À,¤,Ì“È,¤,o,À,¢,éB,³,ç,ÉA”ñ,É–Ñl,©,À,½,¤,À,·B
 ,¤,ðŒ©,éŒÀ,è,À,Í,»¤,È,É,Ð,Ç,¢,j,É,ÌŒ©,|,Ü,¹,ñ,–,Ç,È,|B
 ,»¤,ÀA^Ì‘å,È,Ì,Ì¤,Ì¤,À,½B
 ”P,ÌfAfefl,À,Ì,Ü,¤A,Ì,Ì,À,·,¤A”P,Ìf\ftfBfXfg,ÆŒ“è,Ì,È,¤,¤“_,¤,À,½B
 Žá,¢,Æ,«,©,ç“NŠw,Ì•¤,¤
 f\ftfBfXfg’S,ÌŽž,À,È,Ì,À,·,¤A”P,Ìf\ftfBfXfg,ÆŒ“è,Ì,È,¤,¤“_,¤,À,½B
 ”P,ÌŽá,¢,ÌŽq’B,É“NŠw,ðŒê,è,Ü,·,¤AŒ,µ,ÀŽö<Æ–ç,ÌŽæ,ç,È,©,À,½B¤,À,·B
 ,»¤,µ,À,¤,æ,è,¤,æ

JMfŠfVfA□EfwfŒfjfYf€•‰

Lß,É,È,éBfAfefl,ìÙ”»,Í”†R§,Á•[”,Í,Q,W,P·Î,Q,P,O,³/₄,Á,½,ç,μ,φB
—Lß,É,È,Á,½, ,ÆA,C,ñ,È”±,É,·,é,©,ìÙ”»,“±,·,Ì,Å,·,“Af\Nf%oefefX,Í,»,,±
,ÅŠJ,“/₄,Á,ÄŒ³/₄,¤,í,“,%BužC•a,ÍfAfefl,Ì,½,ß,És,
,ÍfAfefl,Ì,“,“à,ð,í,é,±,Æ,μ,©,È,çv,È,ñ,ÄŒ³/₄,¤,ñ,Å,·B”†R^ð,ð“G,É,Ü,í,·,æ,¤,È,à,ñ,³/₄B”P,ð,í,·,½~A”†,ÍžŒY,É,μ,æ,¤,Æ,Ížv,Á,Ä,ç
,È,©,Á,½,æ,¤,ÅA^“, ,Ä‘ŠO’C•úAf\Nf%oefefX,“à,¤,ç,“,ð,μ,È,“,é,Î,»,é,Å,æ,μA,Æl,|,Ä,ç,½,æ,¤,Å,·,“AŒ<ÇŽŒY”»Œ,“o,³,é,Å,μ,Ü,¤B

@f\Nf%oefefX,Í~S–,É“ü,é,ç,ê,é,ñ,Å,·,“A~S”Ô,ÍŒ\,ç,ç,©,“,ñ,Å’ížq,â—Fl’B,“S–,Íf\Nf%oefefX,É%oï,ç,É—,éB,ÅA, Y,ñ,È—,Å,Í”P,É“|–
S,ðŠC,ç,é,ñ,Å,·Bužè,Í,·,Í,Æ,Æ,Ì,|,Å,ç,é,©,ç“|,“,æ,¤v,Å,Ä,ÉB
,Æ,±,é,“f\Nf%oefefX,Í’f,é,ñ,³/₄Bž,·,Í“|,“,é,çA,Å,Ä,ÉB

,È,“|,“,È,©,Á,½,©Bf\Nf%oefefX,ÍžC•a,Ížv’z,ð—Ø,é,½,
”P,ÍžC•a,ÌM,ç,é,Ü,Ü,És“®,µ,Ä,“,“/₂A,“,é,ÍžÀ,Ì,½,ß,Å,·,é,æ,é,æ,
,Æ,Å,µ,½B,·,ÌŒ<‰È,“žŒY”»Œ,·,ç,ÍA,·,é,ðZó,“ü,é,é,“ÈŠO,É”P,Ì,“Í,È,ç,Í,Å,·,é,ç,©B
,³/₄,Å,ÄA“|,“,½,ç,“,ñ,È“z,³/₄,Å,½,ñ,³/₄,Å,Äžv,í,é,Å,μ,åBžC•a,Í%oß<ž,ÌŒ/“@‘S,Å,“^,í,é,Å,μ,Ü,¤B

f\Nf%oefefX,ÍžŒY,ÍžCžE,Ì,æ,¤,ÈŒž®,ÍžŒY,Å,μ,½B
žC•a,Å“Å”t,ð,ù,Å,·,Ì,Éf\Nf%oefefX,“Å”t,ð,ù,ñ,Åž,¤,uŠO,É,á’ížq’B,“P,Ì,“Í,É•t,“Y,Å,Ä,ç,é,Ì,Å,·,“A,»,Í’ížq’B,“uæJAJž,È,ç
,Åv,Å,Ä,ç,·,ÌBu,“,“A“,·,ÌS’Šo,“³,
,Å,é’ížq,ð,Ô,Å,½,é,·,éBÅŒä,Ü,ÅAžC•a,Í“Nšw,ðŒé,é,“±,“éB““X,Æ,μ,½—§”h,Èž,É,·,Ü,³/₄,Å,½,ñ,Å,·B
,±,¤,ç,¤f\Nf%oefefX,Íj,““û‘S’Ì,“—Fl,“^,½,
%oefefX,Ížp,·,ÍA<_,ÅY,Å,½,ß,Ì•Ù_p,Ì<³žt,Æ,Í’S’R^á,Å,½,ñ,³/₄,ÉB

fvf%oefgf“

,ÆfAfšfXfgfefŒfx

@fvf%oefgf“,Íf\Nf%oefefX,Í’ížq,Å,μ,½Bf\Nf%oefefX,ÍžŒä,É,“,ÍŒ³/₄““®,ð,Ü,Æ,ß,Ä’ðžR,Ì,“{,ð,ç,ä,ç,Ü,·B
,±,Ífvf%oefgf“,Å,·,“Af\Nf%oefefX,Í’óžu,ðŒp,ç,Ä•O“I,È^žÀ,ð’ç,·,μ,Ü,μ,½B,“,μ,ÄA”P,“^,½,ç,é,Å,ç,½“š,|,“ufCfffA~_v,Å,·B
fCfffA,Æ,Í%o!/_2,©,Æ,ç,¤,ÆA—á,|,“ufof%o,Ì%oÔv,“^,é,Æ,μ,Ü,μ,å,¤Bu”ü,μ,çfof%o,Ì%oÔv,Å,·B,μ,©,μA,å,“Äžž,“^,½,Å,Ì,±
,é,ÍŒí,é,Ä,ç,Ü,ñ,Å”ü,μ,·,È,
‰Ô,“Œí,é,Ä,ç,“au”ü,μ,³v,Æ,ç,¤,æ,ì,Í,ç,±,©,É’jY,μ,Ä,ç,é,ì,Å,·,È,ç,©A—Ú,Ì’O,ÉŒç,|,éŒ,Å’jY,μ,Ä,ç,È,
çŠE,ÉžÀY,·,é,à,ìA,±,é,ðfCfffA,Æ,ç,ç,Ü,·B
fCfffA,ÌçŠE,“^,éA,Æfvf%oefgf“,ÍŒ³/₄,¤B
žOšpŒ,Ì—á,Í•a,©,é,“O,ç,©,ÈB Š®àø,È³žOšpŒ,ðŒ»žÀ,É•,·,±,Æ,Í,Å,“,È,
,¤,à,ì,Í’jY,·,éA,·,éA,Å,·,åB,“,ñ,Èš,·,j,ì,à,ì,“fCfffA,Å,·B%opŒé,ÌideaifAfCfffA,j,ÌŒ³,Å,·B

fvf%oefgf“,Í,±,ñ,È—á,ðo,μ,Ä,ç,éB

“ŒA,“^,éB

,“μ,ÄA,í,é,í,élšO,Í,Ý,ñ,È““ŒA,Ì,“^,Å”“,ç,é,ÄŒÅ’è,“^,é,Ä,ç,éA,ÆŒ³/₄,¤B
žè,“^,ç,é,Ä,ç,Äg““®,“Å,“^,È,ç,ì,Å,·,“A,ç,ì,çŒü,“^,É”“,ç,é,Ä,ç,é,©,Æ,ç,¤,ÆA““ŒA,Ì%oœ,Ì•ù,ðŒü,ç,Ä”“,ç,é,Ä,ç,é,ÌB
“ŒA,Ì,“ü,èŒü,É,ÍŒò,“^,éB,“^,μ,ÄA,“,ÌŒò,Æ”“,ç,é,Ä,ç,é,í,é,ì,“w”†,ÌŠO,ð,ç,é,ç,é,Èf,fm,“^,È,ç,éB”ü,μ,çfof%o,Ì
‰Ô,“^,Ä,ç,“^,Å,½,èA³žOšpŒ,“^,È,Å,½,èAd““ò,“^,È,Å,½,èA^žÀ,“^,È,Å,½,èA³,“^,È,Å,½,è,·,éB
,·,é,ÆA““ŒA,Ì%oœ,Ì•ç,É”“%oß,·,éf,fm,Ì%oœ,“%oef,é,ÉB
·,í,é,í,é,ÍA•ç,Ì%oœ,ðŒü,ç,Äj,“^,Ä,ç,é,ì,ÅA,“,Ì%oœ,ðf,fm,Ì—{,“—,Ížp,“^,Æžv,ç,é,ç,é,ð,μ,Ä,ç,éA,ÆŒ³/₄,¤B
“w”†,Ì,¤,μ,ç,ð,““%oß,μ,Ä,ç,éf,fmA,“,“^,è,f,fm,Ì—{,“íAfCfffA,“^,Å,ÆŒ³/₄,¤,í,“,Å,·B
,“μ,ÄAžè,“^,ð,ç,é,Ä,ç,é,í,é,ì,Å,·,“Ažñ,ð““®,ç,·,±,Æ,Í,Å,“,éB

file:///Users/shohei/Documents/sekaishi/kougi-012.html[2/11/15, 3:53:59 PM]

{Ž,“I,È·¶ÍY,„,é,Æ,Íl,|,È,©,Á,½Bu”ü,μ,¢of of %o,Ì‰oÔv,„-3,,È,ê,Îu”ü,μ,¢v,à-3,
±,¤,¢,¤l,|,ðŽÀÝ_“NŠw,Æ,¢,¢,Ü,·B”þ,Í,»,ÌŒ³·c,Å,·B

@,±,é,Íf<flfTf“fxXžž·ä,ÍfCf^fSfA,Ì‰cæ‰oÆf%oftf@fGf,lu fAfefl,ÌŠw“°v,Æ,¢,¤SG,Å,·B
·A,A,©,¢Œs•,Ì†,ÉŒA·äfMfŠfVfA,Ì“NŠwŽOÄZ©·R‰œÈŠwŽO,ð·äW‡,³,¹,Ä,μ,Ü,Á,½ŠG,È,ñ,Å,·,³A’†‰œ,É·À,ñ,Å·,©,ê,Ä,¢,é,Ì,“fvf
‰of gf f“,Æf Af ŠfXfgfefŒfX,Å,·B,±,Ì“nl,¤,C,¤Zv,í,é,Ä,¢,½,©·,©,é,Å,μ,¤BŒÄ·äfMfŠfVfA,ÌŠw-ä,Ì,“_,É,¢,é,ñ,³B
·,ç,å,Ä,ÆSG,„-3,¢,Å,·,¤AJ“¤fvf‰of gf f“,Ì‰œEŽè,É-ÚBŽw,ð-§,Ä,Ä“V,ðŽw,μ,Ä,¢,é,Å,μ,¤B”þ,ÍfAf ŠfXfgfefŒfX,ÉŒè,è,©,“,Ä,¢
·,é,ñ,³BufCfffA,Í¢ŠE,¤,¶ÍY,·,é,Ì,³v,ÆB
·,¤,é,É·Ì,μ,Äf Af ŠfXfgfefŒfX,Ì‰œEŽè,àŒ©,Ä,
¢ŠE,Í,·,é,Ü,¹,ñAŽt,aevB
·,©,ê,Ä,¢,é·êl,D,Æ,è,ÍŽv‘z,âfGfsf[fh,ð’m,Ä,Ä,¢,é,Æ-É”,¢SG,Å,·B

f‰oftf@fGfiufAfefl,ÌŠw“°v · ¶fvf‰of gf f“A‰œEf Af ŠfXfgfefŒfX

@fAf ŠfXfgfefŒfX,ÍfAfŒfNfTf“fhffX‘å‰œ¤,Ì‰œÆ’ë·³Žt,ð,μ,½,Ì,Å,à-L-¼B
fAf ŠfXfgfefŒfX,¤,S,PÍAf AfŒfNfTf“fhffX,Í,P,QÍB,»,ê,©,ç,R”NŠO,
“-Žžl,|,ç,é,Ä,,Ì¤J,³B
fAfŒfNfTf“fhffX,ÌŒ³/4-tBuŽ,,,ÍJ,«,é,±,Æ,ðftfBfŠfbf!Xi•fj,ÉA”ü,μ,
“NŠw,¾,“,Å,È,A~—ŠwAŽ;ŠwAŽ©·R‰œÈŠw, ,ç,ä,éŠw-ä,É,·È,μ,Ä,¢,½fAf ŠfXfgfefŒfX,Å,·B‰œç,ðŽó,“,½fAfŒfNfTf“fhffX‘å
‰œ¤,Í“Œ·¤‰œ“¤,Éo,©,“,é,Æ,«AŠwŽO,ð,½,
·,±,é,ðŒä,É·Ž-,½,Ì,¤iflfŒfIf“BfGfWfvfg‰œ“¤,ÍŽž,ÉŠwŽO,ð~A,é,Äs,“”Œ©,μ,½,Ì,¤ff[fbf^EfXfg[f“A,Æ,¢,¤b,ÍÈ·O,μ,Ü,μ,½,ËB

T·¶ŒI

,·,Ä,Æs,«,Ü,μ,¤B•K-vÅ¬ŒÀ,¾,“B

@ŽB

fzffffXi‘O,W¢*l*jufC[fŠfAfXvufIffff...fbfZfCfA[v,±,é,ÍAf gff,•J-¾,Å~b,μ,Ü,μ,½i·æ,W‰œñjB
fwfVfIfhfXi‘O,V,O,O”N ju~J“,Æ“úXvu_“Lv

@”ŒŒB

fAf Cf XfLf...ffXAf ftfHfNfŒfXAfGfEfŠfsfffXi‘O,T¢*l*jB
·,±,ÌŽOí,ÍŽO‘å“ŒŒ‰œÆ,Æ,μ,Ä-L-¼AŽOlZfbfg,Å‰œ“,!,Å‰œ°,³,¢BfMfŠfVfA~b,ð·èþ,É“ŒŒ‰œð‘,¢,½BfMfŠfVfA,Å,Ì‰œ‰œŒ‰¤,ñ,É,“,±
,È,í,é,Ä,¢,Ü,μ,½BŒ‰œ,ÌfRf“fN[f<,à, ,Ä,½,ñ,Å,·B

@ŠiŒŒ‰œ,à, ,é,Ü,·B

ŠiŒŒ‰œÆ,Å,ÍAf Af ŠfXfgftf@flfXi‘O,T¢*l*jB,±,Ì,ÍfNf‰œfefX,Æ“-Žž·ä,Ì,ÅA”þ,lu‰œ_v,Æ,¢,¤Œ‰œÉ,ÍfNf‰œfefX,“f

·ftfBfXfg,Æ,μ,Ä·,©,ê,Ä,¢,Ü,·B

·ä·ù,Íu—,Ì·½~avB

u—,Ì·½~av,Í·½iŒŒ‰œ,Å,·B,Æ,±,é,¤,±,ÌŒŒ‰œÍyfflflfXí~·,É‘,©,ê,Ä,¢

,é,Ì,Å,·,æB,»,é,¾,“,Å,à·Ä,«,Å,·,ËBŠÈ·P,ÉfXfg[fŠ],ðD‰œì,μ,Ä,“,

§,Ä,ÄA,È,ñ,Æ,©í~,ð,â,ß,³,¹,æ,¤,Æ,·,é,ñ,Å,·B’j,“D,«,Èf,fm,Í

‰œ½,CB,»,é,ÍfZfbfNfX,¾B,¾,Å,½,ç”þ,ç,¤í~,ð,â,ß,é,Ü,ÅŽ,,,½,ç,Í“nŽ

‰œfCfL,ð,·,é,ñ,Å,·B

·j’BA‡í,“I,í,Ä,Æ‰œÆ,É·A,Ä,Ä,«,ÄA,©, ,ç,á,ñ·ø,©,¹,Ä,

,Æ,C,ç,ðŽæ,é,©AŒ<çí~,ðŽl,Ä,éA,Æ,¢,¤Q‘,«,Å,·B

‰œBŒf,Å,μ,¤B

fm fS fV fA □ E fw fCE fi fV ff. 1% ..

,±,±,A,I'1/2,

Šđ‰o½Šw,đ‘å¬,μ,½,Ì,afGfEfNfŒfCfffXE

”ädA,Ä,±,ÌŒ’—,Å—L—¼,ÈfAf< fLffffX

'n<...,ÌŽ©“]EŒö“]à,ð,Æ,È,|,½fAfŠfXf^f<frfXE

'n<...,ÍŽü^Í,ð‘a’è,μ,½fGf‰ofgfXfeflfXE

,±,•,Ó,^a-L-¼,Ç,±,ë,Å,·B

fGf%ofgfXfeflfX,Í'n<...,ÍžüÍ,ð,R–œ,X,V,O,OfLff[fgf<,Æ‘a’è,μ,Ü,μ,½

Œ»Ý,ѝŒv^a,Å,Í,S–œ,V,OflfB,Ù,Æ,ñ,Ҫ³Ӯm,³¼,ӬE,

f€fZfCfIf“,δ’†S,AE,·,é‰%ÈŠwŒ¤†,Í‘Š“-,ÈfŒfxf<,É“ž’B,μ,Ä,¢,½,Ì,Å,·,·

,½,¾AfvgfgefX©fGfWfvfg,·-S,μf€fZfCfIf“,··Å½,·,ê,é,ÆA,±,ê,ç,ł'mŽ-,Í-Y,ê,ç,ê,Ä,μ,U,¢,Ü,μ,½B,â,·,ÄA'n<...,Í·½,ç,Å·¾—z,·n<...,łŽü,è,ð‰ñ,é,ÆM,¶,ç,ê,Ä,¢,Á,½B

³,μ,¢'mŽ²-,^aŠl^{'3}/4,³,ê,Ä,àŽ,*i*,ê,é,±,Æ,^a, ,é,Ì,Å, ·B^aMd,È^{'3}ŒP,³/4,ÆŽv,¢,Ü,¹,ñ,©

ŽQI}•Đ%oîEEEE,à,¤,μÚ,μ, ’m,è,½,¢,Æ,«,Í
‘-¼,đFNFŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^ [flfbfg““XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”ò,ñ,ÅA-{,Ìff[f^A‘•],È,Ç,đŒ©,é,±,Æ,ª,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰Å”\,Å,·B

fNf%efefX, l•Ù-³EfNfŠfgf“Šâ”g•JCEÉ
cover

<p>fNfZfmftfH[f“~BfNfZfmftfH[f“,Íf\Nf%cefefX,le–</p> <p>F,À,à, ,èA’íŽq,À,à, ,À,½lBfyf<fvfA,Éí~,Éo,®,_,ÄA<A,Á,Ä,«,½,çAf\Nf</p> <p>‰cefefX,“(EY,³,ê,½,Ì,ð’m,èA<A,ç,À,±,Ì–{,ð’,ç,½B</p> <p>“NŠw“I,À,Í,È,ç,®,à,μ,ê,È,ç,“Af\Nf‰cefefX,ÌfGfsf\[fh,Íä,lu\Nf‰cefefX,Ì•Ù–¾v,æ,è,à–</p> <p>È”,çB</p> <p>fNfZfmftfH[f“,ÌŒo–ð,àAf\Nf‰cfgf“,æ,ò–È”,çi– –òŽÒ•X–Ø–,“u,Ù, ,“,“v,ÀŠÈ’P,É‘,ç</p> <p>,À,ç,éjBfyf<fvfA,Ì‰œ”ÈŒp³“,ç,ÉA”ê–‡,®,ñ,ÀAÀŒä,ÍfMf\ŠfVfA–b•º”à,ð,Ð,“,ç</p> <p>,ÀA–fAfWfA‰œ’n,®,ç–½,®,ç,“ç<ASÖ, ,éB‰œäX,ÍAf[ffbfp\,Ì</p> <p>‰œç,ÀAfMf\ŠfVfA,Æfyf<fvfA,ð”,Æ•A’P,Æ“A,ì,æ,ç,É’Ì–</p> <p>§“I,È,Æ,ç, ,“ç,³/⁴,“A,ç,ç,“Y,À,àAfMf\ŠfVfA,Æ,ç</p> <p>,ç,Ì,ÍAf\Nf<fvfA,Ì•È”,Æžv, ,éBfl\ŠfGf“fgçŠE,Ì•È”,Æ,ç,ç,“ç,©Bi–</p> <p>,{,ID‰œç,çA,µA,Í,,é,À,µ,U,ç,Ü,µ,½j</p>

90•^a.Å,í,©,éfvf%cef gf“
cover Šm,©,ÉAfRf“fpfNfg,É,Ü,Æ,Ü,Á,Ä,¢,Ü,µ,½B,ZJ,Ì“ü-å,É,ÍAAÅ“K,©,à,µ,ê,È,¢B

f v f % c f g f „ , į Š w % c ē f A f l f f f C f A u ' k Ž D Š w p • ! C E É cover	f o f C f g , Ą Š w " i , δ % c O , c , Ą , c , ē , ē Š w J , į f G f s f \ f h , Ė , Ç A f v f % c f g f „ , į Y – § , μ , ½ f A f J f f f C f A , į - r į " I , Ė – I Ź q , a • , © , ē B f M f Š f V f A " N Š w Š O E W , Ą , ī , μ , ī , Ą , ½ Ø , e C ā , į - { B
---	---

fgfbfvfy[fW,É-β,é

'O,ÍfY[fW,O
'æ,P,P%oñ@fAfŒfNfTf“fhffX,Ì'e

ZY, Jfy[fW, O
‘æ, P, R%oñ@f[f}, Í’”W

f = [*f*]₁ “W

¢ E j u<`^ʌ

@@ @‘æ13 %oñ @@f[f},Ì”“W@

,Pf[f},I”“W

@ fCf^fŠfA, ÍŽñ“sAf[f], Å, ·, ^aA, ±, ±, Í, à, Æ, à, Æ, Í, „, ³, È“sŽs‘‰Æ, Å, μ, ^½BfMfŠfVfA, ÍflfŠfX, ÆŽ—, ^½, æ, ☐, È‘¢
, ÅfAfefl, É”ä, ×, Ä, Q, O, O”N, , ç, ç’x, ê, Ä”“W, μ, Ä, «, Ü, μ, ^½B
fAfŒfNfTf“fhffX‘‰☐, ^ayf^fVfA, δ–Å, Ú, μ, ^½, , Æ, È, [°], », Í, Ü, ÜfCf“fh•û–
Ê, ÉŒü, ©, Á, ^½, Í, ©A¼, ÉA, Â, Ü, èfCf^fŠfA”^¼“‡, Í•ûŒü, Ö‰“^a, ðl, |, È, ©, Á, ^½, Í, È, [°], ©B, Â, Ü, èŒ»Ý, ÍfCf^fŠfA•û–Ê, É, Í
‰“^a : é ^¾ — Í—f — Í Í È © Á ^½BŒäi, n, Ņ ^¾, Á ^½ í — Å : B

,±,łf[f},^,â,^,Ä‘å”
€‰oÆ,ð,·,×,ÄŽx”z,·,é‘å’é‘,É,È,é,ł,Å,·B,»,łŒo‰oß,ðŒ©,Ä,“,«,Ü,μ,å,¤B

f[f], Í‘O, W¢I f%oefef“l, É, æ, Á, ÄŒš, ³, ê, Ü, µ, %Bf%oefef“l, ÍfCf“fhf”[ffbfspŒê°, Å, · Bi, Å, àfCf^fŠfAl, âfXfyfCf“l, ðf%oefef“Œn-°, Æ, ¢, ☒, Íf[f]’é, ÍŽx”z%o°, É“ü, Á, Äf%oefef“l, ÍŒŒ, ð^ø, «Œp, ¢, Å, ¢, é, Æ, ¢, ☒ÓŽ-, ©, ç—, é, æ, ☒, Å, · B

"sŽs‰Æf[f},É,ÍÅ‰o,Í‰o¤,¤,¢,Ü,µ,½,¤A‘O,U¤I,É,Í‰o¤,¤,¢,Ü,µ,½B‰o¤,¤,¢,éŽ;§“x,¤‰o¤A‰o¤,¤,¢,È,¢,ì,Í¤a,Å,·B,±,¤,¢,¤-pŒê,ÍŠo,|,Å,·,±,¤BfAffŠfJ‡O‘,Í‰o¤,¤,¢,Ü,¹,ñ,©,ç¤aAfCfMfŠfX,Í-‰o¤,¤,¢,Ü,·,ŒA,¾,©,ç‰o¤BŠØ‘,ÍA¤aB,¶,áA“ú-,ÍH‰o¤,Í,¢,È,¢,¬,ç¤Vc,¤,¢,éB,C,Á,¸,¾,Æ,t,í,ê,ê,Í‰o¤,É¤-B,³,ê,Ü,·B

@f[f], Á, Í, O, U, <, I, É, ~, a, ^, Zn, Ü, Á, Ä, ^, È, —, A, Æ, E, ^, V, %, o, @, , Ä, Æ, E, Ä, ^, ê, é, <, M, ‘, °, , l, c, %, o, i, ^, Z, j, ð, Z, „, ±, , μ, Ä, «, , Ü, μ, %, B, Š, O, ‘, , I, Ž, g, ß, ^, f, [f], , l, C, ^, V, %, o, @, , ð, C, E, C, Ä, A, %, o, , a, %, o, 1/2, •, S, l, à, W, Ü, Á, Ä, , ç, é, æ, , o, 3/4, Ä, Æ, E, 3/4, Á, 1/2, , , ç, , ç, É, A, ”, P, , ç, Í, C, E, Ö, è, , , C, Á, 1/2, B, Ü, 1/2, ~, a, Ä, , ç, , o, - , Z, j, §, “, x, É, Ž, C, M, ð, Z, Á, Ä, , ç, 1/2, æ, , o, , Å, , B

•{,ì-ðE,Å^ê”Ôfgfbfv,É-§,Â,Ì,^aRf“fXf<BŽ·Š-,Æ-ó,³,ê,Ü,·B,±,ê,àŒ»‘ä“I,É-ó,¹,Î‘å“—
Ì,Å,·B”CŠU^ê”N,Å,Q-¼,“,©,ê,Ü,·B,Q-¼,É,µ,Ä,¢,é,Ì,Í“ÆÙŽ;É,È,ç,È,¢,æ,¤,ÉŒÝ,¢,ÉŒ;§,³,¹,é,½,ß,Å,·B,Æ,à,©,
,Å,Í‰¤,â‰¤,à,Ç,«,^aŒ»,·,é,Ì,ð<É’[,ÉŒx‰¤ú,µ,Ü,µ,½B

,μ,©,μAŽ·Š⁻“ñl,lÓŒ©,^Ù,È,é,AŒ‰œAŒ‘J-S,l”ñiŽ-‘Ô,É·Î‰œž,^x,ê,Ä¢,é,±,AŒ,É,È,è,Ü,·B,±,l“_,ð‰œðŒ^,·,é,½,β,É,·,©,ê,é
-ÖZŒ,ÉfffBfNf^fg[f<^, ,éB,±,ê,Í“AŒÙŠ-,AŒ-ó,·B”¼”N”CŠú,Å,P-¼,Å,·BŒ^,μ,Ä”¼”N”Èä,Í”C,É’...
,©,È,¢B“AŒÙŽÒ,É,È,ç,È,¢,æ,¤,É,Å,·B

@Ž·Š“,à“ÆÙŠ“,àŒ³~V‰@<ç^œ,à,Ý,ñ,È<M‘°,©,ç‘I,Î,ê,Ü,·E

,±,ê,É‘Î,μ,Ä•½–,½,¸,ª•s-ž,ðŽ,Â,æ,¤,É,È,é,Ì,ÍfMfŠfVfA,Æ“–,¶,Å,·B

f[f}, Å, à•½—, ^a ŠíŽ©Ù, Åd‘••à•°, Æ, μ, Äîé, É, Å, éB, ±, ê, Í<Md, È!—Í, ~, ^a, È, çB, Æ, ç, ☒, ±, Æ, Å•½—, ^a M°, É, î, μ, ÄR<c Š~“®, δ, ;, ±, È, ç, Ü, ·B

‘O,S,X,S”N,ł¹ŽRŽ–Œ,Æ,¢,¤,ł,ª,±,ê,Å,·B•½—,½,ż,ª¹ŽR,Æ,¢,¤ŽR,É—§,ÄâÄ,à,Á,ÄfXfgf%ofCfL,ðN,±,μ,½Ž–Œ,Å,·B
f[f},łM°,½,ż,ÍŒì–Š–Ý’u,ð”F,β,é,±,Æ,Å•½—,É•à,ÝŠñ,è,Ü,μ,½B
Œi–Š–,Í,Q–¼BŽ–Š–,łô,É’ł,μA,»,ê,¤½—,ł•s–~%ov,É,È,é,Æ”»’f,·,ê,ł“”ÛŒ ,ð”“®,·,é,±,Æ,ºo—^,éBŒi–Š–,fm[,Æ,¢
,!,łŽ–Š–,Í‰œ½,à,Å,«,È,¢,Æ,¢,¤,í,–,¾B

$f \in [f\chi]''W$

f[f], ^A%, E, O, A, C, A, 1/2, "G, ^a, ±, IfJf< f^fS, A, · B

f nf“f j f o f <, I i ~ H

$\hat{A}F, Ifnf“fjf of<, \tilde{i}i^H$

fJf< f^fS,ÍftfFfjjfLfAl,^ŒSÝ,µ,½A—“sŽs,Å,µ,½,“—Žž,Í¼'n'†SC-fÓ,δŽx"z,·,é‘å‘,É,È,Á,Ä,¢,Ü,µ,½BfJf< f^fSl,δf[f}l,Ífl
fGfjl,ÆŒ¾,Á,½,Ì,ÅA,±,Ìf[f}EfJf< f^fS,Ìí“,δflfGfjí“,Æ,¢,¢,Ü,·B

‘æ^ê%oñíí‘O,Q,U,S”N‘O,Q,S,P”NjBfVf fŠfA“‡,ì^”DíBŠCí,ÉŠµ,ê,È,¢f[f}’

,^a,Í,¶,ß,Íêí,μ,Ü,·,^aAÅI“Í,ÉŸ,Á,ÄfVf fŠfA“‡,©,çfJf<f^fS“—Í,ð’Ç,¢,Ü,·B

@‘æ“ñ%oñíí‘O,Q,P,W”N‘O,Q,O,P”NjB

,±,ê,Ífnf“fjf of<,Æ,¢,¤-¼«,ºoé,·,é,Ì,Å-L-¼,Å,·B•È-¼fnf“fjf of<í^B
fnf“fjf of<,ÍfJf<f^fS,Ì«ŒR‰oÆ,ÉJ,Ü,ê,Ü,·B•fe,ºæ^é‰oñí,ÅfVf fŠfA,ðf[f}
,É'D,í,ê,½, ,ÆACE»Y,ìfXfyfCf“,ÍSJ”
,½Bfnf“fjf of<,Í•fe,Æ,Æ,à,ÉfXfyfCf“,Í””°,ð-|•û,É•t,_,È,ª,çSJ”,ð,“,±,È,¢AŒR‘à,Ì-{¬,à,μ,Å,¢,½B

,â, ª, AA•fe, ªZ€ñ, AO, δŒp, ®, ñ, A, ·, ªAfVf fSfA, δ'D, A, ½f[f], E, C, ☒, E, ☐^ê-A, ☒, , A< tP, μ, ½, ¢, ÄE, ¢, ☒, ï, ªAfnf "fjf of, lhŠè, Å, · BŒR 'à, δ-|, ¢, ÄŠC Hf[f], δU, ß, ê, î, ¢, ¢, ñ, Å, ·, ªA, ·, Á, ☒, èšŠCŒ, Íf[f], É¬, ¢, ê, Ä, ¢, ½B

SC, ©, ¢, f[f], ð, U, œ, , ·, é, I, I•s‰oA”\, ¾, Å, ½B

fnf“fjf of <

,» ,±, Å fnf“fjf of <, ^1, |o, μ, ½, Í, ^A f A f < f v f X % o Z, |, ÄE, ¢, ☒ Si ô, Å, · E

—ꝝHfAf<fvfX,ꝝ%ooz,|,ꝝfCf[^]fŠfA”^{1/4}‡,ÉN“ü,μ,æ,ꝝ,Æ,¢,ꝝE

“oŽR“¹,à‰%½,à,È,¢Žz‘ã,Å,·B,±,ê,à•s‰%Å”\,É^ß,¢B’N,à,^a,»,¤Žv,Á,Ä,¢,½,©,çf{f},àfAf<fvfX•û-Ê,ÉŒERŽ-“I,È-h

%oq,ð,μ,Ä,¢,È,¢B,¾,©,çA¤t,É,à,μfAf<fvfX%oz,|,É¬OE÷,·,ê,ÎÛê¤C,ÉÙ—~,ðÙ,žæ,éf fff“fX,à‘å,«,¢B

‘O,Q,P,W”NAtAfnf“fjf of <,Í-ñ,T-œ,Í•º,ð-|,ç,ÄAfXfyfCf“,ðo’

,½B,»¸Ì,Ù,© $\langle R^o$ à,à, ,é,©,ç“-‘R”n,à,¢,éB,±,ê,ç,ð^ø,«~A,ê,ÄfAf<fvfX,ð%oz,!,½,Ì,ª,P,OŒŽB“r†,ÌŽR“¹,Íá,É

-Ž,j,,½,èAŽRŠx-,ìPŒ,,ðŽó,-,½,è,μ,ääAfCf^fšfA-k•”,É,½,C,è’...,¢,½Žž,Í•o-Í,Í”¹/₄•ª,Ì,Q-œ,Tc,Å,μ,½B

,Æ,±,è,º,±,Ì,Oœ,Tc,Ì•º—Ì,Åfnf“fjfof<,Ì,Ü,é,P,U”NŠÖfCf^fŠfA”¹/₄“‡,Å“¬,¢‘‡,¬,é,Ì,Å,·B

‘O,O,P,U”NAfJf“f]¶,łí,¢,Å,Í,T–œ,ð’’,ł,éf[f}ŒR,ðŸr–Å,μ,Ü,μ,½B,±,ê,Ížj,Éžc,éŸr–

Áí, ¾, »., ☒, Å, ·, B, ». JCEå, àfnf“fjfof_s, [f|f}ER, ð”i, è‘±, -Ü, µ, ½B, È, É, ©

$\vdash \text{é}, \text{J} \cdot \text{A}f[f], \text{J}(\text{E}^{\text{í}, \text{ð}})^{\text{ð}}, \vdash \text{Ä} \text{ž}, \text{vý}, \text{É}, \text{J}, \text{c}, \text{è}, \text{Ü}, \vdash \text{B}fnf^{\text{“}}, fifof^{\text{“}}, \text{J}, \vdash \text{é}, \text{ð}^{\text{“}}, \text{x}, \text{J}^{\text{“}}, \text{s} \text{ž}, \text{s}$

$$\sim \int^{3/4} c \in \mathbb{C}^{1/2} B$$

Œœ,łê,Â,Ífnf“fjf of <,Íf[f},ł”–iŽs,^—f”½,μ,ÄZC•a,δŽx‰o‡,·,é,±,Æ,δŠú‘Ò,μ,Ä,¢,½,ł,Å,·,^aA•aŠ,“Žj,^a,¤,Ü,
½,ñ Å · ÈA—f”½,^a È C Ä ½B

$f \in [f]_{\sim}^{\perp}$

,»,,¤,¾,Á,½,Ì,©A,AÈ,¢,¤,í,¬,Åf[f}ŒR,Í‘UŒ,,ð,©,¬,½B
à,¤fJf<f^fS,Í,Ù,AÈ,à,Éí,|,éó‘Ô,Á,Í,È,©,Á,½Bf[f},Ì³Ý,Á,μ,½B
Žc,Á,½Z¬,Í“S”“z-ê,É”,,èo¥,¢A“y’n,É,ÍŠC...,ð,Ù,¢,Ä“ñ“x,AEl,“Z,ß,È,¢,æ,¤,É“O’ê“I,É”]‰ó,μ,Ù,μ,½B

fJf<f^fS-Å-S,Æ“”NA‘O,P,S,U”N,É,Í“Œ•û,Ìf}fPfhfjfAAfMfŠfVfA,àf[f},É,æ,Á,Ä³•ž,³,ê,Ü,μ,½B

,±,Ì,æ,¤,ÉV,µ,

,» , Í•x, ^af[f] Žs, É—¬, êž, ñ, Å,

ŒJ,è•Ô,μ,Ü,·,ªAÅ<à,ð•¥,í,È,,Ä,æ,¢fCf[^]fŠfA”¹/“‡,Ì•ž•®“sŽs,Æ,Í‘S‘R‘Ò<ø,ªá,¢,Ü,·,©,ç,ËB

,Ü,½AÍ“^•ß—,“z—ê,AÈ,μ,Ä,C,ñ,C,ñf[f]Žs,É‘—,èž,Ü,ê,Ü,μ,½B

¢ŠE'é‘,Æ,µ,Ä,Ìf[f}’a¶,Å,·B

ŽQ1}·Đ‰ô†EEEE,à,¤,µÚ,µ, ’m,è,½,¢,Æ,«,Í

‘-¼,đfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^{f\lceil f\rfloor}fg“XufAf\}f]f“v,\rlap{if}y[fW,\rlap{E}”\rlap{o},\rlap{n},\rlap{AA}-\{,\rlap{If}f[f^{\wedge}A^{\bullet}],\rlap{E},\rlap{C},\rlap{đCEC},\rlap{é},\rlap{\pm},\rlap{Æ},\rlap{^a},\rlap{Å},\rlap{\ll},\rlap{Ü},\rlap{\cdot}Bw“ü,\rlap{à}\%o\rlap{Å}”\rlap{\backslash},\rlap{Å},\rlap{\cdot}B

CSE, I

—đŽjq5rf{f}’é‘,ÆfLfŠfXfg³... Ší—{“I,ÈŠTà‘B‘è—¼,Ù,CfLfŠfXfg³,ÉfXfy[fX,đŠ,,¢,À,¢,é,í,—,À,Í,È,¢B
‰ólo¶ŒÉ

$f[f\}l.l\bullet\text{E}\hat{e}$ (3) $fnf^{\prime }fjf of \triangleleft Li\hat{a}j$
cover

$f[f\{l, l\}]$ (4) $f[nf“f_ifof<\{Li\}”]$

f[f]l, l•(Eê (5) fnf“fjfof<í<Li
‰°j

<p>ŠÍ—{“I, ÈŠTà‘B‘è—¼, Ù, ÇfLfŠfXfg<³, ÉfXfy[fX, ðŠ,,¢, Ä, ¢, é, í, –, Å, Í, È, ¢B</p>
<p>j %o—iŽμ¶”~Bf[f]l, l•ŒÊ, ÍA, Ç, lŠ^a, à–Ê”, ¢ ^aAufnf“fjf of<íLv, Í“Á, É, ‘³C, É“ü, èBf~[fn[³C•^a, Åfnf“fjf of<, ð%ož%o‡, μ, Ä, μ, Ü, o, l, Å, , éB</p>

‘æ13%oñ@f[f},ì”“W@,“,í,è

fgfbfvfv[fW,É-β,é

'O,ʃy[fW,Ö
'æ12%oñ@fMfŠfVfAEfwfŒfjfYf
Θ¶%o»

ŽY, Iſy[fW, Ö

“à— ,l̄ê çI

@ @@‘æ,P,S%oñ @“à—,l̄êçI@

—ÚŽŶ

,Pf{f}ŽÐ‰cī,ł•łži,Æ“®—h
,QfOf‰cfbfNfXŒZ’í,ł‰cū Šv
,Rf}fŠfEfX,łŒR§‰cū Šv
,SfXfpf<f^fNfX,l”½—
,TfJfGfTf<

,Pf{f}ŽÐ‰cī,ł•łži,Æ“®—h

@ fvfŠf“fg,ł,Ü,Æ,β,É,ł,±,ø, ,é,ĘB

u’·Šú‰o»,·,é]ŒR”_’n,łr”p”_—d‘••à•º,ł—v—Žv

f[f},Í’n’† ŠCçŠE,đŽæ,èŠª,‘å—łx‰oÆ,É”“W,μ,Ä,ç,
,é,í,—,Å,·Bf|fGfjí“”†,àf}fPfhfjfAAfMfŠfVfA•u—È,ÅŒRŽ—s“®,đŒp‘±,μ,Ä,ç,é,ñ,¾B
u’·Šú‰o»,·,é]ŒRv,Æ, ,é,ł,Í,»,ø,ç,ø,±,ÆB

d‘••à•º,Æ,μ,Äow,·,é•ºŽm,Í‰o½”N,àAí“,És,Á,Ä,È,Ø,È,©Œł½,É<A,ê,È,çA,Æ,ç,ø,±,Æ,à<N,±,Á,Ä,«,Ü,·B
f[f}Žs—Œ ,đŽ,ÅŽŒi”_—,½,ł,ºŠiŽŒ•Ù,Åd‘••à•º,Æ,È,Á,Ä,ç,é,ł,Å,·,©,çAf[f},ł”_—,ä,È,©,È,©<A,Á,Ä,±
,È,çA,Æ,ç,ø,±,Æ,À,à, ,é,ł,ĘB
,¾,©,çŽc,³,ê,½f[f},ł”_‰oÆ,À,ÍA•f,ł,á,ñ,ç,È,ç ŠO,ÉŽc,³,ê,½•ê,ł,á,ñ,â—ê,ł,á,ñ,“”_ł<Æ,đ,μ,Ä,ç,é,í,—,Å,·B
,μ,©,çAŠlS,ł“
,à,μ,,ÍŽ,Á,Ä,ç,é”_’n‘S•”,đkì,Å,«,È,çA,Æ,ç,ø,μ,“”J,Ü,ê,Ä,«,Ü,μ,½B

”_ł<Æ,đ, ,«,ç,β,Ä—ł”_·,éŽÒ’B,ào,éB”P,ç,Í“y’n,đ”,,Á,ÄJŠ”i,đ”Po,·,éB
í“,³I,í,è•ºŽm,“”A‘,μ,Ä,Ý,é,ÆA,à,ø“y’n,đŽœ•ú,μ,Ä,ç,Ä”_ł<Æ,“”o—,È,çA,Æ,ç,ø,±,Æ,“”N,±,Á,Ä,
,±,ê,“”u”_—d‘••à•º,ł—v—Žv,Å,·B

@ ŽŒi”_·,äŽœ•ú,μ,½“y’n,đ”f,À,½,ł,Í’N,©B
,±,ê,“”M“”o,Å,·B
”P,ç,Í‘ä“y’nŠ—LŽÒ,Æ,È,èA”_êŒo‰oc,đ,·,éB,±,ł‘å”_ê,đf‰fefBftf“fffBfA,Æ,ç,ç,Ü,·B
f‰fefBftf“fffBfA,“”C,ñ,“”C,ñŠg“”A“”W,·,é,ł,“”O,Qç<IŒä”½B

“”M“”o,“”Œo‰oc,·,éf‰fefBftf“fffBfA,Å“
f[f},Í“”Å,Ç,ñ,Ç,ñŸ,Å,Ä,ç,Ü,·,©,çAí—~•i,Æ,μ,Ä•ß—,Æ,©”í“”ž—,“”z—ê,Æ,μ,Ä,ç,
,ç,ê,½,ñ,Å,·,æB
,ç,,ç,Å,à“z—ê,Í,ç,½,μAV,μ,~A,ê,Ä,±,ç,ê,½B‰oÆ’{,æ,ë“”À,Žè,É“”ü,é,ñ,¾,ĘB
,ü,Ý,½,ç,È,à,ł,¾,©,çA“z—ê,đ“

,à— ,l̄ê øI
,ë,,ÉHŽ—,ð—^,|,È,,ÄŽ€,ñ,Å,μ,Ü,Á,Ä,à<C,É,μ,È,¢A,¢,,ç,Å,àV,μ,¢“z—ê,Í,â,Á,Ä, ,éB
Žj—,ðŒ©,é,Æ,Ð,C,¢^μ,¢,^a,®,é,Å,μ,åB,±,ê,Í»•^2Š,ì“z—ê,ì—á,Å,·B
”w’†,É,Í,þ,‘Å,ì,ì, ,Æ,^aŽÈ—Í—l,É,È,Á,Ä,¢,éB
“a,ì—N,Í”^1/4•^a,“,è—Ž,Æ,³,ê,Ä,¢,éA,Æ‘,¢,Ä, ,é,ËB“|,°,½,Æ,«,É”^1/4•^a—VŽåŠ ,è,É,È,Á,Ä,¢,é,®,ç,·,®,É“z—
ê,³/4,Æ,Î,ê,Ä,μ,Ü,¤Žd‘g,Ý,³/4B
,“,μ,ÄAŠz,É,ÍŠ—LŽÒ,ì—¹/4,^aÄ,«fSfe,Å“æ,μ,Ä, ,éB
hŽÉ,Í‰oÆ’{¬%o®,ì—x^ù,Ý•,ÍŠC...,Å”—,β,½•“,ŽdBŠC...,Å”—,β,Ä, ,é,ì,Í‰o—•^a•â<,ì,½,β,Å,·B
,Ü,³,Éf,fmŒ³/4,¤‰oÆ’{,Å,·,ËB

@ ,±,¤,¢,¤“z—ê,ð~J“
‰ofefBftf“fffbfA,Å,ÍŒÙ,Á,Ä,à,ç,|,È,¢,ì,Å,·B

,³/4,®,ç—v—Ž”—,½,ì,Í‰oÆ‘°,²,Æ“sŽs,É—¬,êž,ñ,Å,“,Ü,·B
”P,ç,ðf’f“fyf“EfVffŒf^fŠfA[fg,Æ,¢,¤B—V—,Æ—ó,μ,Ä,¢,éB—V,ñ,Å,é,ì,Å,Í,È,¢,æB,â,é,±,Æ,È, ,ÄŽdŽ—
,È, ,ÄA•ú~Q,μ,Ä,¢,é,Æ,¢,¤Ó—,Å,·B;—,ÉŒ³/4,|,íŽ,<æŽÒAfz[fŒfXA,Æ,¢,Å,½Š’,JB

f[f}Žs,É,â,Á,Ä,ê,î—L—ÍM‘°,“,è,È,è,É” P,ç,ì—Ê“l, ðŒ©,Ä,
,ì”ÝŒì—,Æ,È,èA‘l“,ìŽž,È,C,ÍM‘°,ì,½,β,É~ê”§’E,®A,“,ñ,ÈŠÖŒW,“, ,é,ì,Å,·B
,Ü,½Af[f},ì’®B,®,ç‰o^,î,ê,½Å<AH—ÆA,à,é,à,é,ì•x,ÅAŽs—Œ ,³,|, ,é,î,“,è,È,è,ì]Š^,í•{,®,ç•Ûá,³,ê,Ü,μ,½B
,½,³/4Af[f},ì’†Œ~Žs—,Å, ,é” —,^a,C,ñ,C,ñ—v—Ž, ,é,ÆŒ³/4,¤,±,Æ,ÍAd‘••à•°,ì,È,èŽè,^aŒ,é,í,—,Å,·,ËB
ŠÈ’P,ÉŒ³/4,|,î,±,ê,Íf[f}ŒR,ìŽä’Í‰o“,É,Ä,È,“,éB
—ì“y,ðŠg‘å,μ,Ä,“,½<,¢f[f}ŒR,^aŽä
f[f},í,±,ì,Ü,Ü,Å,æ,¢,ì,ŒA,ÆS, ,éŽ;‰oÆ,½,ì,í,|,½B

QfOf‰ofbfNfXŒZ’í,Ì‰oüŠv

@ f[f},ì—¹/4—å<M‘°og,ìŽáŽÒ,ÅfefBfxfŠfEfXEfOf‰ofbfNfX,ÆfKfCfEfXEfOf‰ofbfNfX,Æ,¢,¤ŒZ’í,“,¢
,Ü,μ,½B”P,ç,Í—á,ìfXfLfslI,ì’ê“°,Å,à, ,é—¹/4—å’†,ì—¹/4—å,Å,·B
,±,ìfOf‰ofbfNfXŒZ’í,^aAf[f}”—,ì—v—Ž,ð, ,¢,Æ,β,é‰oüŠv,ð’fs, ,é,ì,Å,·B

Å‰o,É‰oüŠv,ðŽŽ,Ý,½,ì,ÍŒZ,ìfOf‰ofbfNfX,Å,·B
”P,ì
f’f“fyf“,Æ,È,Á,Ä“sŽs,É—¬“ü,μ,Ä,¢,éŽÒ’B,É“y’n,ð—^,|,ÄÄ,ÑŽŒì”—,É—β,“,¤,Æl,|,½B,“,μ,Äf[f}
ŒR,ðÄŒš, ,éB
“y’n,Í,C,±,®,çŽè,É“ü,ê,é,ŒB
“M‘°,ìf‰ofefBftf“fffbfA,“, ,éB,P,Q,TfwfNf^[f’Èä,ì“y’n,ðè—L,μ,Ä,¢,é<M‘°
,®,ç,“,ê’Èä,ì“y’n,ð‘‰oÆ,É•Ô,³,¹,éA,“,é,ðf’f“fyf“Žs—,ÉÄ•“z,μ,æ,¤,Æ,¢,¤,í,—,³/4B

,±,ì
,μ,®,ç,µA<M‘°,½,ì,Í—Ê”,
,ç,ê,é,Æ,È,ê,ÎA,â,Á,Ì,èŒ™ ,È,ñ,Å,·,ÈB

“à— ,l’ê øI
±,ø,ç,ø,ì,ð~ Ž^¬Še~ _”½‘Î,È,ñ,ÄŒ¾,øB
fOf%ofbfNfX,à<M‘°,¾,¬,ÇAŽ©•ª,ì—~ŠQ,æ,è‘%oÆ,ì—~ŠQ,ð—Dæ,³,¹,Äl,¹,½,ñ,¾,ËB
,½,¾A”P,ì,â,è•û,Í,®,È,è<
‰oüŠv,ð,,µi,β,æ,ø,AE,μ,½B
”½‘Î”hM‘°,AE‰oüŠv,ðŠ½Œ},·,é•½—~,ì‘Î—§,Åf[f},Í‘>R,AE,μ,½•μ^Í<C,É,È,éB
@ ÆZfOf%ofbfNfX,Í,C,ñ,È—ðE,ÉA,ç,Ä,ç,½,®,AE,ç,ø,ÆAŒì—~Š—,Å,·BŒì—~Š—,Íg‘Ì•s
‰oAN,Å_¹,È,ì,Å,·B,¾,®,çA”½‘Î”h,àŽè,ºo,¹,È,çA,Í,_,È,ñ,Å,·,ºA<
‰ofbfNfX,ðP,í,¹,½,ñ,Å,·BÌ,à—Í’c,Ý,½,ç,È,ì,¹, ,Å,½,ñ,¾,ËB
ŒZfOf%ofbfNfX,Íf{fRf{fR,É‰o£,ç,ê,ÄŽE,³,ê,Ä,μ,Ü,ç,Ü,·BŽ€Í,ñ,É“Š,°ž,Ü,ê,Ä,Ö,®,Ö,®,ç,Ä,ç,é,AE,±
,é,º”Œ®,³,ê,½B
,±,ì,æ,ø,È”ñíŽè’i,É,æ,Á,Ä‰oüŠv,Í‘×,³,ê,Ü,μ,½B,±,ê,º”O,P,R,R”N,ì,±,AEB
’ífKfCfEfXEfOf%ofbfNfX,ÍŒZ,ìŽ€Í,P,O”NŒä“~,J,Œì—~Š—,É,È,Á,ÄŒZ,ì
,ì,AE,«,à‘’R,AE,μ,½•μ^Í<C,AE,È,Á,Ä—\“®,ºN,±,è—,ì’†,Å’ífOf%ofbfNfX,íŽ©ŽE,μ,ÄA,±,ìŒZ’í,ì
‰oüŠv,íŽ, ”s,ÉI,í,è,Ü,μ,½Bi‘O,P,Q,Rj
,Rf}fŠfEfX,ìŒR§‰oüŠv
@ “y’nŠ—L,ðŽç,ê,½,®,ç—C,®,ç,Á,½,®,à,μ,ê,È,ç,¬,ê,ÇAf[f}ŒR,ìŽä‘Ì‰»»,ð,C,ø,·,é,®,AE,ç,ø—
á‘è,íŽc,Á,½B
,±,ê,ð^ê<C,É‰oðŒ^,μ,½,ì,ºf}fŠfEfX,ìŒR§‰oüŠvi‘O,P,O,Vj,Å,μ,½B
f}fŠfEfX,AE,ç,ø,ì,Í‘ŒR,AE,μ,Ä“aŠp,ð, ,ç,í,μAfRf“fXf<,É,È,Á,½l•,Å,·B
f[f},ìŒR‘à,ìŠi—{,íAàŽY,ðŽ,Á,½f[f}Žs—,ºŠíŽ©•Ù,Å•ºŽm,AE,È,Á,Ä]ŒR,·,éA,AE,ç,ø,±,ì^ê“_,Å,·B
,¾,®,çAfOf%ofbfNfXŒZ’í,Í•ŠíŽ©•Ù,ºo—^,é”—,ðì,è,¾,»,ø,AE,μ,½B
,Å,àf}fŠfEfX,Í,±,ìŠi—{,ð, ,Å,³,èŽì,Å,Ä,μ,Ü,øB
uàŽY,È,çŽÒ,º•ºŽm,É,È,Á,½,Å,Ä,ç,ç,J,á,È,ç,ìBv,AE”P,ÍŒ¾,øB
,μ,®,çA”P,ç,í•Ší,º”f,!,È,ç,J,á,È,ç,®B
u,»,ñ,È•”A‰o“,º”f,ç—^,!,Å,â,é,æBv,AE”P,ÍŒ¾,øB
AE,ç,ø,í,¬,Åf}fŠfEfX,Íf<“fyf“Žs—,ð•ºŽm,AE,μ,Äì—p,μA•Ší,ð—^,|A<—,ì,à•¥,Å,Ä,â,é,ñ,Å,·B,»,ì”i—p,íŠi—
{“I,É,Í”P,ìflfPfbfgf}fl[®,çø,·B
•ºŽm,AE,μ,Ä“
,±,ø,ç,ø‘P—ð•º,É‘Î,μ,Ä,àf}fŠfEfX,Í—È“
,ðŒ®,Å,â,éB, ,é’ö“x¹,ß,Å,®,ç,â,ß,é•º,É,Í“y’n,ð•^,¬,Å,â,éB,»,μ,ÄAŽ©ì”—,AE,μ,ÄJ,«,Å,ç,¬,é,æ,ø,É,μ,Å,â,é,ìB
•ŠíŽ©•Ù,ìŒ“¥,ð•úŠü,·,é,±,AE,ÅA•ºŽm•s‘«,í^ê<C,É‰oðŒ^,μ,ÄAf}fŠfEfX,Í,±,ìV,μ,çŒR‘à,ÅŸ—,ð‘±
,¬,Ü,μ,½B,±,ê,ºf}fŠfEfX,ìŒR§‰oüŠvB

“à— ,l’ê çI

@ ,μ,©,μA,±,l’ŒR§‰üŠv,Åf[f}ŒR,l’Žç,“å,«,
•ŠíŽŒ•Ù,l”_—ŒR,¾,Á,½,Æ,«,ÍA•Žm,Íf[f}Žs—,l’—±,ðŽŒŠo,μ,Ä]ŒR,μ,Ä,¢,½Bf[f}
,l,½,ß,Éí,Á,½,í,—,Å,·,ËB
,Æ,±,ë,“Af}fŠfEfX,l’°,Í,ç,¤,©B”P,ç,l’CŽ,ç,l’†,ÅA[f}f},l,½,ß,ÉA[f}f}Žs—,l’—±,Æ,μ,ÄA,Æ,¢
,¤ÓŽ—,Í—,³,,È,éB,»,ê,æ,è,àuŽŒ•ª,ðŒÙ,Á,Ä,ê,Ä,¢,éf}fŠfEfX«ŒR,l,½,ß,Év,Æ,¢,¤CŽ,ç,l’û,“å,«,
,Ü,½Af}fŠfEfX,à,»,ê,ðÓŽ—,μ,Ä•Žm,ð,Ä,È,Ä,—,Ä,¢,«,Ü,·B
,±,¤,¢,¤Œ»Û,ðŒR‘à,luŽ,,•‰»v,Æ,¢,¤B

Ž,,•º,ìŒRŽ—Í,ð”wŒi,É,μ,ÄA[f}fŠfEfX,l’f[f}ŠE,Å,l”
,Ü,½A‘l<“,l’ž,É,l”P,l’°Žm,½,ç,“f}fŠfEfX,É“š•[,μ,Ä,ê,é,í,—B•°Žm,Í,Ý,ñ,È•½—,Å,·,¤,çA•½—‰oi,Åf}
fŠfEfX,ðf[f}

,±,ê,ÍAŽŒ•ª,ìž—Í,ðL,î,μ,½,¢,Æ,¢,¤M“Ž;‰œÆ,É,Æ,Á,Ä,íážè,¢,â,è•û,¾,ËB
,l,ç,É‘½,
,»,μ,ÄAž,•º,ð—{,Á,½“ŒR“—Žm,l“à—,“±,¢,Äf[f},l’—,l’ž‘ä,ðŒ},|,Ü,·B

@ fOf‰fbfNfXŒZ’í,ì‰üŠv,©,ç,P,O,O”NŠÔ,ðu“à—,l’êçIv,Æ,æ,Ñ,Ü,·B
‘O,X,P”N,©,ç‘O,W,W”N,É,ÍAfCf^fŠfA,l“sŽs,“f[f}Žs—Œ,ð,ß,Äf[f},É”½—,ðN,±,μ,Ü,·B“—çŽsí“^,Æ,¢
,¤Bf[f},Íf[f}Žs—Œ,ðfCf^fŠfA”“sŽs,É—^,|,é,±,Æ,Å,±,l’í“^,ðI,í,ç,¹,Ü,μ,½B

‘±,¢,Ä‘O,W,W”N,©,ç‘O,W,Q”N,Ü,ÅA[f}fŠfEfX,ÆfXf‰œ,Æ,¢,¤“ŒR,ìR“^,“N,±,è,Ü,·BfXf‰œ,Í‘å<äZ,ç,l’M“
,Å‘½,
,Æ,“ç,³,ê,È,©,Á,½f[f}Žs“à,É—“ü,μ,½,è,μ,½B

f[f},l’žw“±ŽŒW’c,Å, ,éŒ³~V‰@,Í‰½,ð,μ,Ä,¢,½,©,Æ,¢,¤,ÆA,±,l’ñl,l’ŒR,ìR“^,ÉU,è‰œñ,³,ê,é,¾,—,Å,±
,ê,ð‰œðŒ^,Å,¤,È,©,Á,½BŒ³~V‰@,l’Œ ^D,³,ñ,³,ñ’á‰œ°,μ,Ü,·B

,ç,È,Ý,Éf}fŠfEfX,Í•½—”hAfXf‰œ,Í““”h,Æ,È,Á,Ä,¢,Ü,·,ËB
•½—”h,Æ,¢,¤,l,ÍAŒöE,ÉA,
““”h,Í<äM““—Í,ð”wŒi,ÉŒöE,ð—ÚŽw,μ,Ä,¢,½,à,í,¾,Æ—‰œð,μ,Ä,“,¢,Ä,
Žç“I,Èl,|•û,Éá,¢,“,é,í,—,Å,í, ,è,Ü,¹,ñB

,SfXfpf<f^fNfX,ì”½—

@ ,Ü,½,±,l’žšú,É“z—ê”½—,àN,±,Å,Ä,¢,Ü,·B
‘O,P,R,X‘O,P,R,P”N,Æ‘O,P,O,S‘O,X,X”N,ÉfVf fŠfA“‡,Å“z—ê”½—B”—œK—Í,l’å,«,È”½—
,¾,Å,½,æ,¤,Å,·B

@ ‘O,V,R‘O,V,P”N,É,Í—L—¼,ÈfXfpf<f^fNfX,ì—B

“à— ,l̄ê çÍ
 fXfpf<f^fNfX,ÍŒ•“z,Å,μ,½B
 “z—ê,Æ,ç,Á,Ä,à,ç,ë,ç,ë,È“z—ê,^a,ç,½,ñ,Å,·,ËB“Á•Ê,È”\—Í,^a,È,^-,ê,Îf%ofefBftf“fffBfA,Å”_ì<ÆB’†,É,ÍŒ«,ç“z
 —ê,à,ç,éBfMfŠfVfA,àf[f},Éa•ž,³,ê,Ü,μ,½,©,çŠwŽÒ,Ì“z—ê,È,ñ,Ä,ç,¤,Ì,à,ç,é,í,^-,Å,·,¤B,±,¤,¤,¤ŽÒ,ÍM‘°,Ì
 %oÆ,ÅŽq,Ì%oÆ’ë<³Žt,È,C,δ,³,¹,ç,ê,éBŠç,Ì,«,ê,ç,È”N
 “Á·Z,â”\—Í,É,æ,Á,Ä“z—ê,É,à^á,ç,^a, ,Å,½B,» ,ê,ÅA,» ,Ì’†,Å,à•Ì,í,Å,Ä,ç,é,Ì,^aŒ•“z,Å,·Bí“^•ß—,È,C,Å“÷‘Ì“I”\—
 Í,“²ŒQ,ÌŽÒ,aŒ•“z,É,³,¹,ç,ê,éB

Œ•“z,Í^Œ•Ý•%o,ÌŽE,μ‡,ç,δ,³,¹,ç,ê,éŽÒ’B,Å,·B; ,ÅŒ³/₄,|,ÎAf{fNfVf“fO,âfvffŒfX,Ý,½,ç
 ,È,à,Ì,Åf[f}Žs—,½,ç,^a,» ,ÌŒ^“¬,ðŒ©,Ä”M<J,·,éB
 <,Äl<C,Ì, ,éŒ•“z,ÍfXf^[\mu,ç,Å,·,^aA•%o,^-,ê,ÌŽ€,ñ,Å,μ,Ü,¤,©,à,μ,ê,È,ç,ñ,Å,·,©,ç,ËBŒ»Ý,ÌŠ’Šo,©,ç,·,ê,ÎA,·,²,
 Žc“,È,à,Ì,Å,·B

@ f[f},Ì“sŽs,Å,Í<Zê,^a, ,Å,ÄŒ•“z,ÌŽŽ‡,^a•p”É,És,í,ê,Ä,ç,½B
 Œ•“z,ÌŽŽ‡,ðŠJÄ,·,é,É,Í‘å‘w,“à,^a,©,©,éB”“ú,©,^-,Ä%o½”Ô,à,ÌŽæ,è‘g,Ý,δ,μ,½,è,·,é,ñ,Å,·B,±,Ì,à,ðo,·,Ì,^aA’¬,Ì—
 L—ÍŽÒA<M‘°,½,çBŽŽ‡,ðŠy,μ,Ý,ÉŒ©,É—^,é,Ì,^a•ê”ÈŽs—A,Å,Ü,è•½—,³/₄,ËB
 —L—ÍŽÒ,Ì,È,°,±,ñ,È,±,Æ,δ,·,é,©,Æ,ç,¤,ÆAl<CŽæ,è,È,ñ,Å,·B
 •½—,ÉfT[frfX,δ,·,éŒ©•Ô,è,ÉA‘I“,Å“Š•[μ,Ä,à,ç,Å,ÄŒöE,É,Å,±,¤,Æ,ç,¤,í,^-,B

Œ•“z,Í<>Æ,^a, ,é,Æ, ,ç,±,ç~A,ê,Äs,©,ê,ÅŽŽ‡,δ,³,¹,ç,ê,Ü,μ,½B
 ,Å,ç,Å,ÉAŽŽ‡,Ì,±,Æ,ð~b,μ,Ä,·,¤,Ü,·B
 ŽŽ‡,Å,Í•K,,ç,ç,©,^aŽ€,È,Ü,Åí,¤,í,^-,Å,Í,È,çB
 %oö%oä,ð,·,é,Æ,©AŒ•,ðŽæ,è—Ž,Æ,μ,Ä,μ,Ü,¤,Æ,©Aí“¬•s”\,É,È,Å,Ä,Ý•%o,^a,Å,
 ,Æ,C,ß,δ,³,·,Ì,©,Ç,¤,©BÝ,Å,½Œ•“z,ÍŽåÅŽÒ,ðŒ©,é,Ì,Å,·BŽåÅŽÒ,Í<Zê,É,Å,ß,©,^-,½ŠI<q,ðŒ©“n,·B,±
 ,ÌŽž,ÉŠIO,^aŽw,ð—§,Ä,ÄŒ,ð“È,«o,^,ÍAu,» ,ç,Å,Í•%o,^-,½,^-,ÇA—§”h,Éí,Å,½B—½,Í—,μ,Ä,â,êv,Æ,ç
 ,¤‡}BŽåÅŽÒ,æŽw,ð—§,Ä,ÄAÝŽÒ,Ì,Æ,C,ß,δ,³,³,È,çB”sŽÒ,Í%oö%oä,ÌŽè“—,È,C,ðŽó,^-,Ä•,^-,ç,ê,éB
,ÉŠIO,^aŽw,ð%o,ÉŒü,^-,½,çAu,» ,ç,Å,Í•,^-,é,É’l,μ,È,çBŽE,^v,Æ,ç,¤Ó—ÌBŽåÅŽÒ,à“—,J‡},ð‘—
 ,éBÝŽÒ,Í”sŽÒ,É,Æ,C,ß,δ,³,μ,ÄŽE,μ,Ä,μ,Ü,¤,ÌB
 , ,ÆA—Òb,ÆŒ•“z,Ìí,ç,Æ,©,às,í,ê,Ü,μ,½B

“—‘R,Ì,±,Æ,Å,·,^aAŽŽ‡,ÍffU,Ì—D,ê,½,à,Ì“—Žm,Ìí,ç,Ì•û,^a—È”,ç,¤,ËB
 ,» ,±,ÅAŒ•“z,½,ç,ÍŒP—û,ðŽó,^-,Ä,ç,½,Ì,Å,·,ËBŽŽ‡,Ì,È,çŽž,Ír,ð—,ç,Å,ç,éB,Ü,½A•%o,^-,éŽ—,ÍŽ€,ð^Ó—
 ,μ,Ü,·,©,çAŒP—û,à•KŽ€,³/₄B

@ f[f},Ì“ì•û,ÌfJfvfA,Æ,ç,¤¬,ÉŒ•“z,ÌŒP—ûŠ,^a, ,è,Ü,μ,½B
 ‘O,V,R”NA,±,±,©,ç,V,Wl,ÌŒ•“z,^aE‘—,μ,½B,±,ÌfŠ[f_[,³/₄,Å,½,Ì,^aXfpf<f^fNfX,Å,·B

”P,ç,ÍfxfXfrfIŽR,É“|,°ž,ñ,³/₄B,» ,±,Éf[f},Ì“ç”¤‘à,^a—
 ^,é,ñ,Å,·,^aAfpf<f^fNfX’B,ÍAŽE,μ,Ìfvf,³/₄B,» ,ê,ÉŽ,¤f,fm,Í%o½,à, ,è,Ü,¹,ñ,©,ç,ËA—Å’f¤’f<
 ÇER,ÉÝ,Å,Ä,μ,Ü,¤B

à— ,l̄ê çI
'E‘-,μ,½Œ•“z,a^f[f}ŒR,ÉŶ,Á,½,Æ,ç,¤‰\,Íu,ŠÔ,ÉL,Ü,Á,ÄŽü•Ó,Ìf‰fefBftf“fffBfA,©,ç”_<Æ“z—
ê’B,^,Ç,ñ,Ç,ñ“|,°,Ä”P,ç,Ì,à,Æ,ÉW,Ü,Á,Ä—^,éB
fXfpf<f^fNfX,Ì—Í,Í,V—œl,É,Ü,Å,È,Á,½,ÆŒ³/4,í,ê,Ä,ç,Ü,·B
fXfpf<f^fNfX,Íí“,ÌžwŠö,àãŽè,©,Á,½,æ,¤,ÅA,±,Ì, ,Æ,àf[f}ŒR,Æ,Ìí,ç,ÉŶ,i‘±,_,é,ñ,¾B—œ’PÊ,ÌIX,ð‘©,È,Å,ç
,é,¾,_,Å,à,·,²,çŽj“I,ÈŽè~r,Æ,ç,¤,©Al—],^, ,Á,½,ñ,¾,ë,¤,ËB

,ÅA‘å—Í,É,È,Á,½fXfpf<f^fNfX’B,Ì“z—ê”½—ŒR,Í,â,^,ÄfCf^fŠfA”¹/₄“‡,ð-kã,μ,Ü,·B
H—Æ,Í,Ç,¤,â,Á,ÄŠm•Û,μ,½,©,Æ,ç,¤,Æ—^D,Å,·B“r†,Ì“sŽs,ðU—^,μ<aŽ,çA^M‘°,ÌaŽY,âH—Æ,ð—
^D,μ,È,^,ç^Ú“®,μ,½B

@ fXfpf<f^fNfX,Ì—Ú“I,Í‰½,©,Æ,ç,¤,ÆAŒÌ½,ÖŠØ,é,±,Æ,Å,·B
fXfpf<f^fNfXŽ©g,Íi,Ìfu<fKfŠfA, ,½,è,Ìog,¾,Á,½,ç,μ,¤BŒÌ½,É,Í—-[,âŽq^Y,^,ç,½,Ì,©,à’m,ê,È,ç,ËB‘¼,Ì“z
—ê’B,àf[f}—Ì,Ì—k•û,©,ç—^,½ŽÒ,^½,©,Á,½,æ,¤,Å,·B
,¾,©,ç—k,Ös,Á,Äf[f}—Ì,ð’Eo,μ,æ,¤,Æ,μ,½,ñ,Å,μ,å,¤B

,Æ,±,é,“P,ç,ÍfAf<fvfX,Ì[,Ü,Ås,Á,Ä,»,±,Å,tf^f[“μ,Ä,μ,Ü,¤B
,È,“fAf<fvfX‰z,^,ð,μ,È,©,Á,½,Ì,©A“ä,Å,·BfAf<fvfX,ð‰z,^,ê,Ì,à,¤f[f}—
Ì,©,ç,¤,ê,½,ñ,Å,·,©,ç•sŽv<c,Ès“®,Å,·B
ŠwŽÒ,Í,ç,é,ç,é,Èà,ð¥,^,Ä,ç,Ü,·,^,ËB
,½,¾AŒ»ŽÀ—â‘è,Æ,μ,Ä,·V—
œ,à,Ì‡ŠØ,ð^ø,«~A,ê,ÄŽÀÛ,ÉfAf<fvfX,ð‰z,^,ç,ê,é,ÆfXfpf<f^fNfX,“”’f,μ,½,©,Ç,¤,©,Å,·,ËB
fXfpf<f^fNfX,â‘¼,ÌŒ•“z’B,¾,_,È,ç“÷ÌŠæ
—ê’B,É,Æ,Á,Ä,Í,Ç,¤,¾,Á,½,©B~Vl,âA•alA—Žq^Y,à,ç,½,Å,μ,å,¤,©,ç,ËB,»,¤,ç,¤ŽÒ’B,Í,©,È,è,ÌŠm—^,Å
—ŽŒP,μ,ÄŽ€ñ,Å,ä,
fŠ[f_][,Ì”’f,Æ,μ,Ä,ÍfAf<fvfX,ð—Ú,Ì‘O,É,μ,Ä^ø,«•Ô,³,é,ð“¾,È,©,Á,½,Ì,©,È,ÆŽv,ç,Ü,·B

ì“x,Í,Ü,½—^D,ð,μ,È,^,çfCf^fŠfA”¹/₄“‡,ð“ì‰°,·,é,ñ,Å,·,^A”P,ç,ÍfCf^fŠfA’Eo,ð, ,«,ç,ß,½,í,_,Å,Í,È,©,Á,½B
“—ZžfCf^fŠfA”¹/₄“‡žü•Ó,ÌŠCæ,Å,ÌŠC“,^Œ<o-v,μ,Ä,ç,½,ñ,Å,·,^AfXfpf<f^fNfX,Í,»ÌŠC“,Æ~A—
,ðŽæ,è‡,¤BfCf^fŠfA”¹/₄“‡ì[,ÉŠC“,D,“Œ},^,É,«,Ä”P,ç,ðfVf fŠfA“‡,É‰^,Ô’iŽæ,è,É,È,Å,Ä,ç
,½,æ,¤,Å,·BfXfpf<f^fNfX,Í—^D,μ,½à•ó,ð,½,

@ ,Æ,±,é,^fXfpf<f^fNfX^ês,^fCf^fŠfA”¹/₄“‡,Ìæ,Á,Û,Ü,Å—^,Ä,Ý,é,ÆAŠC“^-D,Í—^,È,çBŽè^á,ç,^,Å,½,Ì,©A
— Ø,ç,ê,½,Ì,©•^,©,è,Ü,^,ñ,^B•Ì,í,è,Éf[f},Ì“åŒR,^,â,Á,Ä—^,Ä,Â,ç,ÉfXfpf<f^fNfXŒR,Í,±,±,Å•‰
,_,Å,μ,Ü,Å,½,Ì,Å,·B

fXfpf<f^fNfXŽ©g,à—í,Ì†,ÅíŽ€µ,½,ç,μ,çB
Ì,«Žc,Á,Ä•ß,^,ç,ê,½“z—ê’B,Ía÷i,Í,è,Å,¬j,É,³,ê,½Bf[f}Žs,©,ç“ì•û,É‘±,
,¤ŒR“¹,^,é,ñ,Å,·,^A,±,Ì“¹,Ì—¼“¤,É\Žš‰œ È,‰œ½fLf,à,È,ç,×,ç,ê“z—ê’B,Ì,¤,ç,«º,‰œ½“ú,à•·,±,^,½,»¤,Å,·B
‘¼,Ì“z—ê’B,É‘Ì,·,éŒ©,^,μ,ç,¾,ËB

“à— ,l’ê çI

~b, ^afXfpf< f^fNfX, Å· ,
ê”½—AŒ³~V‰@, lŽw“±—Í, l’á‰º, È, ÇA¬—, ^a±, ç, ½, Æ, ç, o, ±, Æ, Å, · B
f[f}, ^a, », lŒ»ó, É‡, Å, ½žj§“x, ðŒ©, Å, —, é, Ü, Å, à, o, µ, l, ç,

,TfJfGfTf<

“@ ‘O,U,O”NA—L—Í«ŒRŽOl, É, æ, é’k‡, ^a¬—§, µA”P, ç, ^af[f}, l
, ê, ^aæ^ê‰oñŽO“ažj, Æ, ç, í, ê, é, à, l, Å, · B
ŽOl, lJfGfTf<Af|f“fyfCfEfXAfNf‰fbfXfX, Å, · B
fNf‰fbfXfX, lJf[f}^ê, l‘å•x•B
f|f“fyfCfEfX, lJf[f}^ê, l«ŒRB
fJfGfTf<, lA, ±, ê, lJf[f}^ê, ll<CŽÒB
, ±, lŽOl, ^a—Í, ð‡, í, ¹, ê, l•l, ç, à, l, È, µBŒ³~V‰@, àažè, ‘€, è, Ü, · B
fJfGfTf<‘œ

“@ ŽOl, Å^ê”Ôd—v, È, l, ^afJfGfTf<, Å, · B‰pŒê, Å, lfv[fU[, AE“Ç, PBfVfFfCfNfXfsfA, lŒ€, Å, à—
L—½, ¾, ŒBfAfŒfNfTf“fhffX‘‰oAfnf“fjfof<, È‘±,
, ±, lIA, AE, É, ©,
Fl, ¾, °A, AE, Ý, ñ, È, ^aŒ³/4, ç, ½,
, ³/4—½, ^aufnfQ, lJfXfPfx, “, â, Jv, ¾, Á, ÄB, ±, ñ, È, Ó, o, ÉŒÄ, l, ê, ÄfJfGfTf<, lJfKfnfn, AEŠð, µ, », o, ÉÎ, oI, È, ñ, ¾, ŒB

, à, o^ê, Å, l, ³/4—½, ^aužØ<a‰oovB
, AE, É, ©, fJfGfTf<, lžØ<à, ^a½, ©, Á, ½Bf[f}’†, l<až, lA•x<, ©, çžØ<à, µ, Ü,
, ±, l̄a, ð‰o½, ŒZg, o, ©, AE, ç, o, AE•½—”B, È, Ó, é, Ü, o, ñ, Å, ·, æB
—á, lAŒ•“z, lžž‡, ð, Ç, ñ, Ç, ñŠJÄ, µ, Ä•½—”B, ðµ‘Ô, ·, éAH—
AE, ð”f, çž, ñ, Å, Ý, ñ, È, É, Ó, é, Ü, oA, », ê, à, Ý, ñ, È, l“xŠl, ð””,
, ³/4, ©, çA, Ü, ·, Ü, •½—”B, lJfGfTf<lC, l, ,

“ , ³, ÄA, », lJfGfTf<, Å, ·, ^aO, T, W”N, ©, çfKfŠfA‰“a, Éo, Ü, µ, ½B, ±, l‰“a, l‘O, T, P”N, Ü, Å‘±,
, lŠúŠÔ, ŒfJfGfTf<, ll<C, ÉŒ©‡, o, ³/4, —, lžÀ—Í, ð, Å, —, ½, ñ, Å, · B
fKfŠfA, AE, ç, o, l, lŒ»Ý, lftf‰of“fX, lõl, |, Ä,
, ÄA, Ü, ³/4f[f}, l—l“y, È, l, Ä, Ä, ç, È, çB
, ±, lJfKfŠfAl, AEí, Ä, ÄAÝ, l‘±, —, Ü, · B
fJfGfTf<, lY—~, ^aŽÝX, Éf[f}Žs, É“, |, ç, ê, éB, », l, ½, Ņ—, ÉA, Ü, ½”P, ll<C, lā, ^aéA«ŒR, AE, µ, Ä, lžÀ—Í, à•t, ç
, Ä, , éB”P, l•ožm, l“—‘R, l, ², AE, ”P, lž, •o, Ä, · B, ±, l•ožm’B, AE, llŠÔ“I, È, Ä, È, ^a, è, à<,

“à— ,l’ê ç·I

^ã, ^a, éB

%o½, æ, è, à Ÿ—~, É, æ, Á, ÄAfJfGfTf<, Í•‰, —, ½fKfŠfAl, ©, çà ŹY, ðí, è Źæ, è, Ü, ·, ©, ç, ÈAŽØ^à
‰o¤, ©, ç·å•x<, É•Íg, ·, é, Í, Å, ·B

fJfGfTf<, Í«ŒR, Æ, μ, Ä, ÍŽÀ—Í, ^a, Å, ç, Ä, , é, ÆA“àS—È”,
, » , ê, Å, àfNf‰ofbfXfX, ^¶, «, Ä, ç, é, o, i, ÍŽOl, Å, È, ñ, Æ, ©f of‰of“fX, ^•Û, ½, ê, Å, ç, ½, ñ, Å, ·, ^aA‘O, T, R”N, ÉfNf
‰ofbfXfX, ^Z€, ÈfJfGfTf< Af|f“fyfCfEfX, Í·Í—§, ^a, Í, Å, «, è, μ, Ä, «, Ü, μ, ½B“ñl, Í
, ½, ñ, Å, ·, ^aA, » , ñ, È, Í, à, Á”ð, Ô, ®, ç, ç, Å, ·B
, Ü, ½Œ³~V‰@, ÍŒ³~V‰@, Åf|f“fyfCfEfX, ð—~—p, μ, ÄAfJfGfTf<, ð’×, » , o, Æ, μ, Ü, ·B

, ±, o, ç, oó<μ, l’†, ÅAfJfGfTf<, lúælî, ^3, çj, l“š, °, ç, ê, ½v, Æ, ç, Å, ÄfKfŠfA, ©, çŒR‘à—|, ç, Äf[f], ÉiŒR, μ, Ü, μ, ½Bf|
f“fyfCfEfX, ÆŒ^í, ¾BŒ<çf|f“fyfCfEfX, l’s, ê, ÄfGfWfvfg, É“|, ^o, éB, μ, ©, μA, ±, ±
, ÄfGfWfvfgl, ÉŽE, ^3, ê, Å, ^o, Ü, çB
fJfGfTf<, l’Ÿ—~, Å, ·B

, ±, l’žfJfGfTf<, l’f|f“fyfCfEfX, ð’ç, Å, ÄfGfWfvfg, É, á, Å, Å,
L—¼, ÈfNfŒfIfpfgf‰, Å, ·B

@ fNfŒfIfpfgf‰, l’fGfWfvfg, l—‰o¤, Æ, μ, Ä—L—¼, Å, ·, ËB
, ±, l’žz, l’ó<μ, ð, μ~b, μ, Ä, ^o, Ü, ·Bf[f], l’, ^o, Å, É’n’†SC, ðŽæ, èS^a,
, Ü, μ, ½B, μ, ©, μAfGfWfvfg, ^¾, —, l’, ©, è, o, ¶, Å“Æ—§, μ, Ä, ç, ½B
, ¾, ©, çAf|f“fyfCfEfX, l’|, ^o, Å—^, ½, í, ^o, Å, ·, æB
, μ, ©, μAf[f], l’, ^3, l’³“l’I, Å, ·, ©, çfGfWfvfg, l’‰o½žzf[f], l’®B, É, ^3, ê, Å, à, ^o, ©, μ,
, ¾, ©, çAf[f]
, l’ž—žÀá, l’æ^él’žò, Å, , éfJfGfTf<, ^a, á, Å, Ä, , é, ÆfGfWfvfg
, ©, ç, ÈB

, ÅA—â‘è, l’fNfŒfIfpfgf‰, Å, ·, ^aA‰o¤, l’‰o¤, È, ñ, Å, ·, ^a, o^elfGfWfvfg‰o¤, ^a, ç, ½, ñ, Å, ·, æB
, ±, ê, ^a, fvfgfŒf}fCfIfX, P, Rç, Æ, ç, oB<—“žj, Æ, ç, Å, ÄA, ±, l’n^æ, Å, l’œ\, , éfpf^|f“, Å, ·B
fvfgfŒf}fCfIfX, P, Rç, l’fNfŒfIfpfgf‰, l’í, È, l’B, ¾, ©, çžo’í, Å‰o¤—l, á, Å, Ä, ç, éB
, ±, ê, ¾, —, È, ç, ç, ç, ñ, Å, ·, ^aA, ^3, ç, É, á, á, ±, μ, ç, l, l’ñl, l’v•w, Å, à, , é, l, Å, ·B
<ßeŒ¥, ¾, ÈBfCfNfi[fgf“, Y, ½, ç, ÈŽŒ•^a, l’—, ÆŒ¥, ·, é‰o¤, à, ç, ½,
, ¾, ©, çfGfWfvfg, Å, l’sžv<c, Å, l, È, çBfNfŒfIfpfgf‰, BfvfgfŒf}fCfIfX’©, l
‰o¤‰œ, l’MfŠfVfAl, ¾, —, ç, ·, fGfWfvfg, Å¶š^, ·, é, o, i, ÉfGfWfvfg, l’—‘

, ^3, ç, É, á, á, ±, μ, ç, l, ^a‰o½, ©, Æ, ç, o, ÆA, ±, l’žo’í, l’‡, ^a, çB
Œ—l’“¬“^, , Å, ÄA’i‰o¤, Æ, » , l’ê”h, ^žÀŒ, ð^¬, Å, Ä, ç, ÄAfNfŒfIfpfgf‰, l’s±i, l’j, ^3, ê, Å, ç, ½, ñ, Å, ·B, Å, àA”p—
, àŒ—l’—~, μ, çB

@ , » , ñ, È, Æ, «, ÉfGfWfvfg, É, á, Å, Ä—^, ½, l, ^aJfGfTf<, Å, ·, ËB

"P-, Íl, |, ½BfJfGfTf<, É‰oï, Á, ÄŽ©•ª, ÍŒä, ë, , ·, é, ±, Æ, ªo—^, ½, çA'í, ð'Ç, ¢—Ž, Æ, µ, ÄfGfWfvfg, Í^, Í—‰o¤, É, È, ê, éB
 , Æ, ±, ë, ªA" P-, É, Í'í‰o¤, ÍŠÄŽ<, ª, Ä, ¢, Ä, ¢, È, ©, ©fJfGfTf<, É, Í^ß, Ä, —, È, ¢B
 , » , ±, Äl, |, ½, Í, ¨äOÝ~iiB
 "P-, ÍŽ©•ª, ðäOÝ~, Å, ®, é, ®, éSª, «, É, ^, ¹, éB, », µ, ÄAfGfWfvfg, Í•x<, ©, ç, Í‘j, è•·, ¾, Æ, ¢
 , Á, ÄA, », ÍäOÝ~, ðfJfGfTf<, lhŽÉ, É“Í, —, ^, ¹, ½, ñ, Å, ·B
 fJfGfTf<Au—§”h, ÈäOÝ~, ¾v, Æ, ©Œ¾, ¢, È, ª, çL, °, é, ÆA'†, ©, çflf“, ÆfNfŒfIfpfgf‰o
 , ¨d, Ño, Ä, , éB, Ñ, Á, , è” , È, ç, È, Ñ, Á,
 —ö^¤, Æ, ¢, ¤, Í, Ío‰oï, ¢, ÍuŠÔ, ¨äZ—B, ±, ñ, ÈŒ€‘I, Èo‰oï, ¢, Í, È, ¢BfJfGfTf<, Í, ±, ÍêŒ, , Å, à, ¤ffff, É, È, Á, ½, Æ, ¢, ¤B
 , ±, ÍbA, ¨, ¨, Á, ÆM, ª, ½, ¢, —, Ç, ÈAL,
 , é, Å, µ, ¨afWfFf[f¤‰œjB, ¨, È, Ý, ÈfNfŒfIfpfgf‰o, Í, Q, PÍBfJfGfTf<, Í, Æ, ¢, ¤, Æ, T, QÍBfE[f“A, Æ, ¢, ¤, Æ, ±
 , è, ¾, ÈB

fNfŒfIfpfgf‰o, Í“à, Í, æ, ¤, Èâ¢, Í”ü—, Å, Í, È, ©, Á, ½, æ, ¤, Å, ·, ªA^³—{, , Ó, è, é’m“I, È—«, ¾, Á, ½B“Á, É°, ¨f—
 Í“Í, ¾, Á, ½, ñ, ¾, Á, ÄB, Ç, ñ, È, ñ, ¾, Á, ½, ñ, ¾, è, ¤B
 %o½, æ, è, àA, ±, ¤, ¢, ¨ä’_, Ès“®—Í, Í—f—Í“Í, ¾, ÆZ,, ÍŽv, ¢, Ü, ·, ¨B
 , Æ, à, ©,
 fJfGfTf<, Í, Ä, ¢, É, ÍfGfWfvfg, Í<`í“¬“, É‰oî“ü, µ, ÄfNfŒfIfpfgf‰o, ð—½ŽÀ, Æ, à, ÈfGfWfvfg—
 %o¤, É, µA, ^, ç, ÈfGfWfvfg, Í“Æ—§, ð•ÛØ, µ, ½, Í, Å, ·B

@ f[f], ÉŠÔ, Á, ½fJfGfTf<, Íflf“fyfCfEfX, ÍŽc‘¶—
 Í, ð, ¨, Á, Ä, —, Ä‘O, S, U”N, É, Ílg“ÆÙŠ—, É, È, Á, ½BŽ—ŽÀä, Í“ÆÙŽÒ, Æ, ¢, Á, Ä, æ, ¢B, , ç, ¨, é‰oh—
 , ÆŒŒÀ, ð^êg, ÈW, ß, ½, Í, Å, ·BŽÀ—ÍŽÒ, ¾, ©, ç’N, à•J^å, ðŒ¾, |, È, ¢, Í, Å, ·, ¨AfJfGfTf<, ÍU, é•·, ¢, ðŒ©, Ä, ¢
 , Ä, ©, È, è, ll, ½, ¨, ¨ä, ¢, ðŽ, ¨, Žn, ß, ½, ñ, Å, ·B
 ufJfGfTf<, Í‰o¤, É, È, è, ¤, Æ, µ, Ä, ¢, é, Í, Å, Í, È, ¢, ©v, Æ, ÈB
 “ÆÙŽÒ, È, ç, Ü, ¾‘O—á, Í, , Á, ½BfXf‰o, Æ, ©, ÈB, ¾, ©, ç, Ü, ¾‰oä—, Å, «, éB
 , µ, ©, µA‰o¤, Í•È, Å, ·Bf[f]l, É, Í^ça, É‘Í, ·, éŒÖ, è, ¨, , éA‰o¤
 œ³~V‰o@Žå“±, Í^çM‘°Žj, ”Û’è, ^, è, é, ±, Æ, Å, ·, ©, ç, ÈB^çM‘°B, ÍfJfGfTf<, ÈŒx
 %oúS‘Èä, Í“G‘Ó, ðŽ, ¨, Žn, ß, èBfuf<[fgfDfx, ðfŠ[f_], Æ, ·, é^çaŽå^çM‘°, ÍfOf<[fv, ¨, Å, à, }i“I, Å, µ, ½B
 , ©, è, ç, È, æ, Á, ÄfJfGfTf<, ÍŽE, ^, ¨, Ä, µ, Ü, ¤, Í, Å, ·B
 ‘O, S, S”N, RŒŽ, P, T“úAfJfGfTf<, ¨Œ³~V‰o@, Í^çcê, È, ¨, Á, Ä,
 , ½fuf<[fgfDfx’B, ¨fJfGfTf<, ÉP, ¢, ©, ©, è’ZŒ•, Å”P, ðŽh, ·BfJfGfTf<, Í•KŽ€, É’íR, ·, é, Í, Å, ·, ¨Ž©•ª, ðP, ¤M‘°
 , Í’†, Èfuf<[fgfDfx, ÍŽp, ðŒ©, Ä, —ufuf<[fgfDfx, ”O, à, ©Iv, Æ^ç©, ñ, ¾, Æ, ¢, ¤, Í, Í—L—½, È, ~bB
 fuf<[fgfDfx, Í—½—å^çM‘°og, È, ñ, Å, ·, ¨AŒ\JfGfTf<, É‰oÅ^ç, ¨, ç, è, Ä, ¢, Ä”P, Í•ÙŒì, Í, à, Æ, Èd—v, È—ðE, É, Ä, ¢, Ä, ¢
 , ½, è, ·, éB, », Ífuf<[fgfDfx, Ü, Å, à, ¨‰o‘, ðŽE, ·, Í, ©I, Æ, ¢, ¤Ó—j, Å, ·, ÈB

, ±, è, Í—~b, ¨, , Á, ÄAfuf<[fgfDfx, ÍfJfGfTf<, æ, è, à, Q, TÍ”N
 %o¤, Å, ·B, ÅAfJfGfTf<, ÍŽá, ¢, Èfuf<[fgfDfx, Í•ê, ¨, á, ñ, Æ•t, «‡, Å, Ä, ¢

,½,ÌBfJfGfTf<,Í,à,Ä,Ü,·,©,ç,ËAŽá,¢ ,©,ç—«ŠÖŒW,ÍŒf,μ,¢B,»,ÌŒä“ñl,Í•È,ê,Ä”þ—
 ,Ífuf<[fgfDfX,le•f,AŒŒ·¥,·,é,í,¬,Å,·,^Afuf<[fgfDfX,Ì’a¶“ú,ð•·,¢
 ,ÄfJfGfTf<,Í,Ð,å,Á,AŒ,μ,½,çA,Á,ÄŽv,Á,Ä,¢,½,ç,μ,¢B‰o’,ÌŽq,©,àA,AŒŽv,Á,Ä,¢
 ,é,©,ç^ø,«—§,Ä,Ä,â,Á,½,ñ,¶,á,È,¢,©,AŒ,àŒ³/₄,í,ê,Ä,¢,Ü,·B
 fuf<[fgfDfX,©,ç,·,ê,ÎA,½,AŒ,|,»¤,Å, ,Á,Ä,àŒœa§,ðŽç,é,½,ß,É,ÌŽE,³,È,¬,ê,Î,È,ç,È,¢
 ,AEl,|,½,ñ,Å,·,ËB‰o¤,É‘Î,·,é”½”,Ì’
 —Š,Å,«,é,©•a,©,è,Ü,¹,ñ,^B

fJfGfTf<,ÌffXf}
 fXfNiä,Ì‘œ,æ,èŽA·,É<ß,¢Hj

@ ,³, AfJfGfTf<,Í,À,ŽE,³,ê,Ü,μ,½B
 ,±,Ì, ,AŒ,Í,Ü,½,ŽY‰oñB

fNfŒfIfpfgf‰o,Å,·,^AfJfGfTf<,ÌŽq<Ý,ðŽY,ñ,Å,¢,é,Ì,Å,·B’j,ÌŽq,ÅfJfGfTfŠfIf“,AŒ,¢
 ,¤B•ëŽq,Í,À,ŽE,Ì‘úAfJfGfTf<,Éμ,©,ê,Äf[f],É—^,Å,¢,é,ñ,Å, ·BfJfGfTf<,ÌŽ€,ð’m,Á,ÄfNfŒfIfpfgf‰o
 ,ÍfJfGfTfŠfIf“,ð^ø,«~A,ê{}},¢,ÅfAfŒfNfTf“fhf ŠfA,É<A,Á,Ä,¢,«,Ü,μ,½B
 fJfGfTfŠfIf“,Í“AŒ—§‰o¤,fGfWfvfg,Ì‰o¤Žq,Å, ,è,Ü,³/₄,Žq<Ý,Å, ·BfJfGfTf<,Ì’âŽY‘Š‘±l,É,Í,È,è,Ü,¹,ñ,Å,μ,½B

ŽQ!}‘Ð‰oñEEE,à,¤,μÚ,μ, ’m,è,½,¢,AŒ,«,Í

‘—¼,ðfNfŠfbfN,·,é,AŒAfCf“f^*[flfbfg““XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”ò,ñ,ÅA—{,Ìff[f^A‘•],È,ç,ðŒ©,é,±
 ,AŒ,^,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰oÅ”\,Å, ·B

<u>fMfŠfVfA,AŒf[f}cŠE,Ì—ðŽj</u> cover	Vi<C‰oS,ÌŒœ<†ŽÒ,É,æ,éŠTà‘B]— ^,È,©,Á,½,æ,¤,ÈAff[f^,âV,μ,¢Ž<“,^V‘NBŽö<AŒ,Ìflf^,É,μ,½, ,È,é~b‘è,à—L•xB
<u>cŠE,Ì—ðŽj 2</u> <u>fMfŠfVfA,AŒf[f}</u> <u>’†Œö•JŒÉ H 3-2</u>	,± .ç,Ì’†Œö•JŒÉ”Å,ÍAŒÄ,¢fVfŠ[fYB,μ,©,μA“Ç,Ý·,AŒ,μ,Ä,ÍA^ê”Ô“Ç,Ý,â,·, {“IB“ü—å,AŒ,μ,Ä,ÍAÅ“K,AŒŽv,¤B•iØ,êia”ÅHjŠO<ßB

‘æ,P,S‰oñ@“à—,Ì’êçI@,“,í,è

fgfbfvfy[fW,É—ß,é

‘O,Ìfy[fW,Ö
‘æ,P,R‰oñ@f[f},Ì’“W

ŽY,Ìfy[fW,Ö
‘æ,P,T‰oñ@’é
,Ä,Ä,«j

@

'é -,I ¬-§ if [f},Â,Ã,« j

@@ @‘æ,P,T%oñ @’é,Ì¬-§if[f},Â,Ã,«j @

,P'é,ÌŠJŽn

@ fJfGfTf<,ð^ÃŽE,μ,½fuf<[fgfDfX,Æ,»,Ì¬‡SÔ'B,Í“-‘Rf[f}ŠE,ÌŽå“±Œ ,ð^¬,ë,œ,Æ,μ,Ü,μ,½B
fJfGfTf<,Ì“ÆÙ,ð-È”,Žv,Á,Ä,È,©,Á,½Œ³~V‰@,ÌM‘°B,Í,»,ê,Å,æ,ç,Ì,Å,·,ªA-
â‘è,ÍfJfGfTf<,Ì•ºŽm’B,¾,Á,½,ñ,Å,·B

fAf“fgfjfEfX,Æ,ç,œ’j,ª,ç,Ü,·B”þ,ÍfJfGfTf<,Ì‰E~rA-L”\,È«ŒR,Å,μ,½B,±,Ì’jA•ºŽm’B,Él-]
,©,È,è, ,Á,½B”þ,ª•½-”B,Ì‘O,Åfuf<[fgfDfX,É’Ì,·,é’eŠN‰‰à,Æ,ç
,œ,Ì,ð,â,Á,ÄA•½-”B,Í”½fuf<[fgfDfX,É,È,Á,½,Æ,ç,í,ê,Å,ç,Ü,·B

Œ»ŽÀ-â‘è,Æ,μ,ÄA<à,Ì-a‘è,ª, ,Á,½,ÆŽv,í,ê,é,ñ,Å,·B

fJfGfTf<,É,ÍfKfŠfA‰“ª^È-^½,

f“fyfCfEfX,ð”j,Á,½, ,Æ”þ,Ì•ºŽm,Ì,©,È,è,Ì”,ð,»,Ì,Ü,ÜŽ©•ª,ÌŒR‘à,ÉŽó,¬“ü,ê,½,ç,μ,çB

³Šm,Å,Ì,È,ç,¬,ç-œ’P^È,Ì•ºŽm,ðŽ,Á,Ä,ç,½,ÆŽv,ç,Ü,·B

‘O‰ñ,É,à~b,μ,Ü,μ,½,ªA,±,Ì•ºŽm,Íf[f}•º,Å, ,è,È,ª,çŽÀÛ,É,ÍfJfGfTf<,ÌŽ,,•º,Å, ,ÉB

-v,ÍA’N,ª”þ,ç,É<-ç,ð•¥,œ,Ì,©A,Æ,ç,œ,±,Æ,Å,·B•ºŽm,É,Æ,Á,Ä,Ì,±

,œ,Å,·Aufuf<[fgfDfX,³,ñAfJfGfTf<ŒR,ðŽE,μ,½,Ì,Í,ç,ç,¬,çA, ,ñ,½A,í,μ,ç,É<-ç,ð•¥,Á,Ä,

fuf<[fgfDfX,ÍfJfGfTf<,Ý,½,ç,È•x,¶,á,È,ç,©,ç•¥,|,È,çB

<-ç,ð•¥,Á,Ä, ,ê,È,çA,»,ñ,Èl•“,ð•ºŽm,ÍŽxŽ,μ,È,çA•ºŽm,ÍfCfR[f•½-”Å,·B”þ,ç,ÌŽxŽ,ð“¾,é,±,Æ,ªo-
^,È,

’N,a•ºŽm,Ì<-ç,ð•¥,Á,Ä”þ,ç,ÌŽxŽ,ð“¾,½,©,Æ,ç,œ,ÆAfIfNf^f”fBfAfkfX,Å,μ,½B³Ž®,ÈŽq<Ý,ª,ç

,È,©,Á,½fJfGfTf<,ÍA,ç,Ü,í,ÌÛ,É-{Žq,ðŽw-¼,μ,ÄàŽY,ð‘Š‘±

,³,¹,½,ñ,Å,·,ªA,»,ê,ªfIfNf^f”fBfAfkfX,Å,·BfJfGfTf<,Ì-Ä,Ì’§Žq,Æ,ç,œ,©,ç,Ù,Æ,ñ,C‘½l,Ý,½,ç

,È,à,ñ,Å,·,ÈB,Å,à~ê“œ,Ì†,Å,Í-DG,ÅfJfGfTf<,Í‰øÅ^œ,ª,Á,Ä,ç,½,æ,œ,Å,·B

fIfNf^f”fBfAfkfX,Í,±,ÌŽž,P,XÌ,Å,·,©,çŽ;“I,É,àŒRŽ-“I,É,àŽÀÑ,È,ñ,©,È,ç,ñ,Å,·,ªAfJfGfTf<,ÌaŽY,ª, ,éB,±
,ê,Å<-ç,ð•¥,œB•ºŽm,Í,½,¾,»,ê,¾,¬,Å”þ,ðŽxŽ,·,é,±,Æ,É,È,Á,½,í,¬,¾B,±,ñ,È,Ó,œ,É,μ,Ä, ,Á,Æ,ç
,œSÔ,ÉfIfNf^f”fBfAfkfX,Íf[f}ŠE,ÌŽÀ-ÍŽØ,É,È,Á,½,Ì,Å,·B

@‘O,S,R”N,©,ç,ÍfIfNf^f”fBfAfkfX,ÆfAf“fgfjfEfXAfŒfsfhfDfX,ÌŽOl,ªœ“ñ‰ñŽO“ª
Žj,ð,Í,¶,Ù,μ,½BfŒfsfhfDfX,àfAf“fgfjfEfX,Æ“-,¶,fJfGfTf<,Ì•“,¾,Á,½’jB,½,¾AŽ;“I,È-Í-
È,Å, ,Æ,Ì“ñl,æ,è‘ª•ª-
ò,è,Ì,ç,ÉŽ,«r,μ,Ü,μ,½BfIfNf^f”fBfAfkfX,ÆfAf“fgfjfEfX,ÌŠÖŒW,ªÅ“_,É,È,Á,«,Ü,·B

'é -,I ¬-§ if [f},Â,Ä,« j
“Œ•û,É“|,°,Ä,¢,½fuf<[fgfDfX’B,ð“|,μ,½, ,ÆAf[f}—I, I“Œ,ðfAf“fgfjfEfXA¼,ðfIfNf^f”fBfAfkfX,Æ,¢
,¤•¤S,¤o—^,Ü,·B

“Œ•û,É,“,à,Þ,¢,½fAf“fgfjfEfX,¤o%oï,Ä,½,I,¤fNfŒfIfpfgf‰BfAf“fgfjfEfX,I,S,OÛAfNfŒfIfpfgf‰,I,Q,WÛB
fNfŒfIfpfgf‰,IæÒ,I,©,¬,è,ðs,
ÍŽÒ,ðpfpgff“,É,μ,½,i,¬B
fNfŒfIfpfgf‰,É,Æ,Ä,Ä,±,Is“®,ÍŽ;“I‘ÅŽZ,©,çŽn,Ü,Ä,½,I,Ä,μ,å,¤,¤AŽÀÛ,É,±
,I“ñl,I,©,È,è<
³Ž®,É“ñl,IŒ¤¥,μAfNfŒfIfpfgf‰,Í”Þ,IŽq,ðŽOlŽY,ñ,Ä,¢,éBfAf“fgfjfEfX,Íf[f}—I,ðfNfŒfIfpfgf‰
,É÷,Ä,½,è,μ,Ä,¢,Ü,·BfAf“fgfjfEfX,I“Æ’f,Ä,±,ñ,ÈŽ—,ð,·,é,I,Äf[f}ŠE,Ä,I•]”,I,C,ñ,C,ñ^“,
fIfNf^f”fBfAfkfX,I
‰,Æo%oï,Ä,½, ,ÆBŒ^,¾,¬,IŒ¤¥,ÅŽo,³,ñ,É,IŒ©Œü,<,à,μ,È,¢B

“-‘R,I¬,è,«,Æ,μ,ÄAfIfNf^f”fBfAfkfX,ÆfAf“fgfjfEfX,IŒ^—ôB
‘O,R,P”NAfAfNfefBfEf€,IŠCí,ÅfAf“fgfjfEfXEfNfŒfIfpfgf
‰~A‡ŒR,IfIfNf^f”fBfAfkfX,É”s,ê,Ä“ñl,IŽ©ŽE,μ,½B“`à,Ä,IfNfŒfIfpfgf‰,I“ÅŽÖ,É“û—
[,ð™ù,Ü,¹,ÄŽ©ŽE,μ,½,Æ,©B

,±,ê,ÅfGfWfvfg,Íf[f},I‘®B,Æ,È,èAfIfNf^f”fBfAfkfX,Íf[f}^ê,IŽÀ—ÍŽÒ,Æ,μ,Ä

@‘O,Q,V”NAfIfNf^f”fBfAfkfX,IŽ—Åä,I’é
uŽ—Åäv,Æ,¢,¤,I,Í—Úä,I’é
fIfNf^f”fBfAfkfX,ÍuŽ—Åävc’é,É,È,Ä,½,i,¬B

,μ,©,μAl,!Ä,Ý,Ä‰o°,³,¢B
,±,I,!,©,Q,O”OA”Þ,I—{•ffJfGfTf<,Í‰o¤,É,È,è,¤,μ,ÄŽE,³,ê,½B
,È,ºAfIfNf^f”fBfAfkfX,I,·,ñ,È,èc’é,É,È,è,½,I,©B
fJfGfTf<ŽŒä,I¬—,©,çŒ³~V‰@‘M’°B,àŠw,ñ,¾,ñ,¾,ÆŽv,¤,¤B
<‘å,È—I“y,ðŽ,Ä,±,I[f},ð•½~a,É~ÜŽ,·,é,½,B,É,I;Ü,Ä,Ý,½,¢,ÈŒ³~V
‰@,ð’†S,Æ,·,é‡¤§,Ä,ÍŒÀŠE,É,«,Ä,¢,é,±,Æ,ðBfJfGfTf<,äŽŽ,Ý,½“¹,μ,©,È,¢,Æ,¢,¤,±
,Æ,ð,ËB

^ê•ûAfIfNf^f”fBfAfkfX,àfJfGfTf<,I“ñ,I•‘,É,È,ç,È,¢,¤,¤,É”nŽ’s”J,ÉŒ³~V‰@,ð’,d,μ¤a
,¬,éB
”Þ,μ,©Œ,ð’S“-,Ä,«,éŽÒ,¤,¢,È,¢,I,ÉA,Æ,¢,¤,±,Æ,Í”Þ,μ,©•¤Žm,É<—,ð•¥,!,È,¢,Æ,¢,¤,±,Æ,È,ñ,Ä,·,¤A
‰o½“x,à
,»;I,½,Ñ,ÉŒ³~V‰@,ÍA,·È,½,É,·Šè,¢,μ,Ü,·A,·È,½,μ,©,¢,Ü,¹,ñ,ÄfIfNf^f”fBfAfkfX,É—Š,Þ,í,¬,¾B
Œ³~V‰@,Í”Þ,ÉfAfEfOfXfgfDfX,Æ,¢,¤,¤,ð•¤,½B,±,ê,Íu‘,Œμ,È,éŽÒv,Æ,¢,¤,¤,Ó—;B

fAfEfOfXfgfDfX‘œ

'é -Í ¬-§ if [f}, Á, Ä, « j
, ±, ê, É'Í, µ, ÄfIfNf^f" fBfAfkfX, ÍŒa«», µ, ÄA, ç, |, ç, |Ž,, Í, ½, ¾, ÍfvfŠf“fPfvfX, Å, · A, ÄŒ¾, œB, ±
, ê, Íu‘æ^ê, ÍZs-^-v, ÄE, ç, œÓ-¡, Å, · B~—ñ^ê^Ê, Íf[f}Žs-^-, É, ·, ¬, Ü, ^, ñ, ÄE, ç, œ, ±, ÄEB
, ¾, ©, çAŽ-ŽÀä, Í’é
fIfNf^f" fBfAfkfX, ^Ž€ñ, ¾, ÄE, «, Í³Ž®, ÍŒ“, «, Å, · B
uÅ, Ži—ßŠ-EfJfGfTf<È_, ÍŽqEfAfEfOfXfgfDfXE‘å_<_S^-· (f|f“fefBftfFfNfXEf}fNfVf€fX)E“—
Í13%oñEÅ, Ži—ßŠ^-, ÍS½ŒÄ20%oñEŒí—S^-EŒ sŽg37”N—ÚE‘•f(fpfef<EfpgfŠfAfG)v
c’é, ÄE, ç, œŒ¾—t, ^, È, çB, », à, »àAc’é, ÄE, ç, œ, à, ^, è, Ü, Å, È, ©, Á, ½, ñ, ¾, ©, çŒ¾—tŽ©‘Í, ^, ¶Y, µ, È, ç, Í, Å, ·, æB
, ±, ÍŒäAfJfGfTf<, ÄE, ç, œŒ¾—t, ^, c’é, ÄE, ç, œÓ-¡, ÅŽg, í, ê, é, æ, œ, É, È, è, Ü, µ, ½B
fhfCfcŒê, ÍfJfCfU[AffVfAŒê, Ífcf@[fŠA—¼•ûc’é, ÄE, ç, œÓ-¡, Å, ·, ^ŒêŒ¹, ÍfJfGfTf<, Å, · B
@‰‘ac’é, ÄE, µ, ÄfIfNf^f" fBfAfkfX, Í‘å‰œB, È,
, ½, ¾AŽq<Y, É, ÍŒb, Ü, ê, È, ©, Á, ½B—, ÍŽq, ÍŽY, Ü, ê, ½, ñ, Å, ·, ^A’jŽq, Í, ç, È, ©, Á, ½B
Œn}, ðŒ©, Ä‰œ°, ^, çB, ©, È, è•; ŽGB
f[f}l, Í’ê•v^ê•w§, È, ñ, Å, ·, ^A, Y, ñ, È, ½,
”P, ç, Í, ñ, ÉŒ<¥—f¥, ðŒJ, è•Ô, ·, Í, ÈB““I, É, Í, ©, È, è—, ê, Ä, ç, é, ñ, Å, ·, æBŒ<¥, µ, Ä, ç
, Ä, à•v•wŠÖŒW^ÈŠO, Í““IŠÖŒW, ð’j, à—, à“—, ½, è‘O, Í, æ, œ, ÉŽ, Á, Ä, ç, éB
fZflfJ, ÄE, ç, œ“NŠwŽO, ^, Ü, ·, ^A”P, ÍŒ¾, Á, Ä, ç, éBuÈ, Í•, <C‘ŠŽè, “nl, ¾, Á, ½, ç, », ÍÈ, Í’åi, ¾A•v, ÍK, ^ŽO, ¾v, ÄE, ÈB
, »ÍS,,, É, Í, ÄE, ç, œ, ©A, », Í^×, È, Í, ©•^, ©, è, Ü, ^, ñ, ^A“—Žž, Í<M°, Í‰œA, Å, ÍŽq<Y, ^, È, ç, Å, · B—¼—å<M°, Í
‰œAŒn, ÅŒEp, ¬, ^, È,
fIfNf^f" fBfAfkfX, ÍŽO“x—Ú, Í, »µ, ÄÅŒä, ÍÈ, ^fŠf" fBfABfŠf" fBfA, É, Í•v, ^, ç, Ä, µ, ©, à, ^, , à‘å, «, ç, ÄE, ç
, œ, Í, ÈfIfNf^f" fBfAfkfX, Í, Y, »µ, Ä, µ, Ü, Á, ½B, »µ, Ä•v, ÄE•È, è, ^, , ÄŒ<¥, µ, ½, ñ, Å, · B, µ, ©, µAŒ<ç”P—
, ÍfIfNf^f" fBfAfkfX, ÍŽq<Y, ðŽY, P, ±, ÄE, Í, È, ©, Á, ½B
fIfNf^f" fBfAfkfX, Í, »ÍfŠf" fBfA, Í’A, èŽq, ð—{Žq, É, µ, ÄA, », ÍŽq, ^“ñ‘ä—Ú, Íc’é, È, Á, ½B
fefBfxfŠfEfX, ÄE, ç, œ, Ü, · B^È, µ, ½, ÄE, «, Í, à, œ, T, O‘äB, Ç, ç, ©, ÄE, ç, œ, ÄE“ú‰œ, Í¶, ð‘—, Á, ½B‰œA<C, Èl, ÄE, ç
, œ•]”, Å, · B•È“, Éø, «, ±, à, ÅŽj, Í‘œB, É”C, ^, «, èB
@”P, à‘§Žq, ^, ç, È,
‰œB
, ±, Í, _“I, É, Ç, œ, à, ^, ©, µ, ©, Á, ½, ÄE, ç, í, ê, éB
Ž,,, Í‘åŠwŽz“äAfAffŠfJ, Í’j<ŽGŽfyf“fgfnfEfX, ÍŽD’·, ^ufJfŠfOf‰œv, ÄE, ç, œ‰œf‰œœ, ði, Á, ½BfJfŠfOf‰œ
, Í¶, ð‰œŽÀ, É`^, ç, µ, œBo—^ä, ^, Á, ½, ^i, Í, P, W<ÖBŽ,,, ÍŒ©, És, ©, È, ©, Á, ½, ñ, Å, ·, ^A, ç, µ, œB
Fl, É, æ, é, ÄE‘S•Ø, Ú, ©, µ, ¾, ç, ^, Å‰œ½, ^, È, ñ, ¾, ©•^, ©, ç, È, ©, Á, ½, ç, µ, œB
, Ü, A, »ñ, Èc’é, Å, · B
, , å, Á, ÄE, ¾, ^, ç, œ, ÄEAŽ©•^, Í—..., ½, , ÄE“÷“ÍŠÖŒWŒ<, Ñ, ^, ç, É”, , t, à, ^, , éB”n, ðfRf“fXf<iŽ·-
Š^-j, É, µ, æ, œ, ÄE, à, µ, Ü, µ, ½B
, , èŽžA—L—¼, È<RŽmŠK‰œ, ÍŽO, Í‘§Žq, ^, «, ê, ç, È”^, , ð, µ, Ä, ç, é, ÄE, ç, œ—
R, ÅŽ‰œY, É, µ, ½B, »µ, ÄA, »Í“ú, É, »Í•fe, ð‰œf‰œi, Éµ‘Ø, µ, Ä‰œ½‰œñ, àŠf”t, ^, , é, Í, ÈB•fe, Í‰œf‰œi, ^I, í, é, Ü, Å”B, µ, œ

'é -I -§ if [f},A,A,« j
 ,» ,Ô,è,â“{,è,ÌŠ,â,ðŒ,â,ÉfJfŠfOf‰,É•t,«‡,Á,½B,È,º,©,Æ,¢,¤,ÆA”þ,É,Í,à,¤êl‘§Zq,¤,¢,½,Æ,¢
 ,¤,ñ,¾B,ç,å,Á,Æ,Å,àfJfŠfOf‰,É”á”“I,È‘fU,è,ð,Ý,¹,½,ç,à,¤êl,Ì‘§Zq,¤œY,³,ê,é,©,à,µ,ê,È,¢,Æl,¹,½,ñ,¾B
 -C‰Æ,ÌŽq-,ðW,ß,Ä”,th,ðì,Á,ÄAŽs-,É”f,í,¹,éB-Å’f<ê’f,Å,·,íB
 ŽŒ•ª,Ì-º,ð”,t•w,É,³,¹,ç,ê,½M°ºB,Ì“{,è,Í,¢,©,Î,©,è,©B
 fJfŠfOf‰’é,ÍA³º³-Å,ÌfTfffBfXfg,³/4,Á,½,ñ,¾,ë,¤,ËBŽŒ•ª,Ì-Ú,Ì‘O,Ì‘N,©,ÉœJ,ð-
 ^,|,é,±,Æ,ªŠy,µ,„ÄŠy,µ,
 ”þ,ð,^Ùí,¾,Æ‘,¢,Ä,·é-{,ª,Ù,Æ,ñ,C,È,ñ,Å,·,ªAf[f}’é‘c’é,È,ñ,ÄA,Æ,ñ,Å,à,È,¢Œ-
 Í,È,í,·,Å,·B,» ,ê,ð,ð,½,©,¾,©,Q,TÎ,Ì•½-}
 ,ÈŽáŽÒ,ªŽè,É“ü,ê,Ä,µ,Ü,Á,½,ç,C,¤,È,é,©B,» ,ÌŽÀ-á,ªfJfŠfOf‰,Å,·BŒ-
 Í,Ì,·,ª,³,ÉŽŒ•ªŽŒg,‰Y,µ,Â,Ô,³,ê,Ä,½,ñ,¶,á,È,¢,©,ËBŽä,¢ŽÒ,¢,¶,ß,Å,µ,©ŽŒ•ª,Ì-
 Í,ðŠm,©,ß,é,±,Æ,ª,Å,«,È,©,Á,½S,Ì-³,È’j,¾,Á,½,ñ,¾,ë,¤B
 ŽŒ•ª,ÌŽü,è,Ì,·,ç,ä,él,É-Å’f<ê’f,·,é,à,Ì,Å,·,©,çÅŒä,É,íœ‰q‘à,ÉŽE,³,ê,Ä,µ,Ü,Á,½B
 ‘|^Ê,í,„,©,S”NB
 fJfŠfOf‰,ÍŽŒ•ª,Ì‘n^Ê,ª,_,í,ê,é,Ì,ðº,ê,Ä^ê“º,Ì‘j,Í,Ù,Æ,ñ,CŽE,µ,Ä,¢,½B
 Žc,Á,Ä,¢,½,Ì,Íf•ffNf‰ofEfffBfEfX,Ì,ÝB
 ,È,ºfNf‰ofEfffBfEfX,³,ê,È,©,Á,½,©,Æ,¢,¤,Æ,ç,å,Á,Æ“ª,ªŽä,©,Á,½BfJfŠfOf‰,Í,±
 ,ñ,È”nŽ
 ,Æ,±,ë,ªAfNf‰ofEfffBfEfXA‘|^Ê,·,é,Æ<},É“ª,ª-ç,
 ~H®‘R,Æ~b,ð,µ,Ä,Ý,ñ,È,ð<Á,©,¹,½BŽÀ,ÍfJfŠfOf‰,ÉŽE,³,ê,È,¢,æ,¤,É”nŽ
 ,Å,àA,±,¤,¢,¤-Ê”,¢~b,Í‘ªifEf,Å,·,©,ç^,ÉŽó,·,È,¢,æ,¤,É,ËB
 fNf‰ofEfffBfEfX,Í-‰º,ª,©,Á,½B,Sl,Ì-«,ÆŒ¥,µ,Ü,µ,½,ªŒö‘R,Æ•,·C,ð,·,éÈ,ª,¢
 ,½,èAÅŒä,ÌÈ,É,Í“ÅŽE,³,ê,Ä,µ,Ü,¤B
 ,±,ÌÅŒä,ÌÈ,ªfIfNf^f”fBfAfkfX,Ì‘·,ÅfJfŠfOf‰,Ì-...,Ì^êlB
 ”þ-à-f¥ŒoŒ±,ª,Á,Ä~A,êZq,ª,¢,½B,±,ÌA,êZq,ð‘,
 %œfEfffBfEfX,ðŽE,µ,Ä,µ,Ü,¤,Ì,ËB
 @~A,êZq,ªflf,Å,·B
 -\ŒN,Å-L-¼,Å,·,ªA‘½•ª•’Ê,Ì‘j,ÌŽq,¾,Á,½,ÆŽv,¤,æB‘|^Ê,µ,½,Ì,ªP,VÎB,Ý,ñ,È,Æ“-¶,N-î,¾BŽá,¢
 ,Æ,«,ÍfZflfJ,Æ,¢,¤-L-¼,È“NŠwŽÒ,â-DG,Èe
 %œq‘à’·,ª•ª²,µ,Ä•]”»,æ,©,Á,½,ñ,Å,·,ªA‘å,«,
 ,Ü,·,ÍŒû,¤,é,³,¢•êe,ðŽE,µ,Ä,µ,Ü,¤B
 -f¥,µ,½È,É¢ŠÒ,Ì“-í,ªW,Ü,é,Æ,±,ê,àŽE,µ,Ä,µ,Ü,¤B
 •ª²,µ,Ä,
 ,à,ñ,Å,·B
 ·,ñ,ÉŽ,ðì,Á,ÄfRf“fN[f,Éo,½,èA<£>n,âfIfŠf“fsfbfN,Éoê,µ,½,è,·,éB
 ‘¼,ÌoêZÒ,Íc‘é,ÉÝ,Â,í,·,É,Í,¢,©,È,¢,©,çAflf,Í•K,-DÝ,·,é,Ì,Å,·B,ÅAŽŒ•ª,Ì,±,Æ,ð“VË,¾,ÆŽv,¢,±

'é -Í ¬-§ if [f}, Â, Ä, « j

í,S,O,O,O”N,ÍfCf^fSfA,Íl,“Ç,Þ,AEŽv,¢,Ü,·,©B¬Ý°,³,ñ,af_f,³/4,AE,¢,¤,í,¬,Å,Í,È,,ÄA,»»,ê,
f<NfXfAfEfŒfŠfEfXfAf“fgfjfkfX,Í,·,²,¢,¶,á,È,¢,©A,AE,¢,¤,±,AE,Å,·B

”P,Í-§”h,Èl•,Å,µ,½,^ê,Å,¾,-Œ‡“_,^,Å,½B-{“-,ÍŒ‡“_,Å,Í,È,¢,ñ,Å,·,³B‰½,©,AE,¢,¤,AEA”P,É,ÍŽq<Ý,^,¢
,½,ÍB,±,±,Ü,Å-DG,Èc’é,“±,¢,½,Í,Í-{Žq,Å,»,¤,¢,¤l•,É, ,AE,ðŒp,^,¹,½,©,ç,Å,·,æ,ËB,µ,©,µAŽÀŽq,^,¢
,ê,Í,»,ÍŽq,ðŒp,¬,É,µ,½,¢,AEŽv,¤,Í“Nlc’é,Å,à“-,JIB,AE,¢,¤,í,¬,ÅŒÜI‘±,¢,½—
DG,Èc’é,Í“râ,ŒÜŒ«’éŽž‘ä,Íl,í,è,Ü,·B

ŒÜŒ«’éŽž‘ä,Íf[f}’é‘,ÍÅ·Šú,AE,³,ê,Ä,¢,Ü,·BfpfbfNfXff}[fiAuf[f}],Í•½~av,AEŒ¾,í,ê,éŽž‘ä,Å,·B

@,i,å,Å,AE~b,Í,»,ê,Ü,·,^AŒÜl,Íc’é’†ÅŒä,Íf}

f<NfXfAfEfŒfŠfEfXfAf“fgfjfkfX”ÈŠO,Í,Ý,ñ,ÈŽq<Ý,^,È,©,Å,½,AE,¢,¤,Í,Í,ç,¤l,^,½,ç,¢,¢,Í,©B
,à,¤A,±,ê,ÍðR,AE,ÍŒÄ,×,È,¢B‘S”È“I,Éo¶—|^,“‰°,µ,Ä,¢,éB“-Žž,Íf[f}”M°,Í“IŠOŒW,Í-Å’f’ê’f,¾,AE,¢,¢
,Ü,µ,½,^,»,ê,AEŠÖŒW,^,é,æ,¤,È,ñ,Å,·BŽÝ‰oñ,Íb,ÉŠÖŒW,µ,Ä,«,Ü,·,©,çA,i,å,Å,AE“a,Í÷,É“ü,ê,Ä,“,¢
,Ä,

ŒÜŒ«’é’ÈŒä,Íc’é,É,Å,¢,Ä,Í,²,i,á,²,i,á,µ,Ä,¢,é,Í,ÅÈ—^B

^el,¾,-Šo,^,Ä,“,

R-^,Éf[f}”zs-^Œ,ð-^,|,Ü,µ,½B‘Š‘±Å,ðŽx•¥,¤,Íf[f}”zs-^,¾,¬,³/4,Å,½,Í,ÅAf[f}”zs-^,ð‘,â,·,±
,AE,Å‘Žû,ð‘_,Å,½,AE,³,ê,Ä,¢,Ü,·B

—R,Í,AE,à,©,A,±,ê,Åf[f}l,AE‘®Bl,AE,Íæ•È,Í,È,

,½“sŽs‰œAE“I,ÈŒ`Ž®,^,ÄAf[f},Í•È,Í-Íæ‰œAE,É,È,Å,½B,»,ê,É‰ož,¶,ÄŽx”zŒ`Ž®,ä•Í,í,Å,Ä,¢
,,Í,Å,·,^,»,ê,Í,Ü,½, ,AE,ÍbB

ŽQI}‘Ð‰œîEEEE,à,¤,µÚ,µ,’m,è,½,¢,AE,«,í

‘-¼,ðfNfŠfbfN,·,é,AEfCf“f^f[flfbfg“XufAf}f]f“v,Ífy[fW,É”ð,ñ,ÅA-{,Íff[f^A‘•],È,C,ðŒ©,é,±
,AE,^,Å,«,Ü,·Bw“ü,‰œÄ”\,Å,·B

f[f},Í-ðŽj | f,f“f^flfbfŠ”BfRf“fpfNfg,Å, ,è,È,^,ç“Ç,Ý•,AE,µ,Ä-È”,¢BŽö’†Œö•¶ŒÉ | \f,h,à,½,^,³,ñBŽö

(ÆÄ‘äf[f}’é)
„,ÍŽx”z,ÍŽÄ‘œ
Šâ”gV‘
cover | g“‰“T”B
fRf“fXf<^,“-Žž,É,Q-¼,¢,½,èA•ÈŒÄ,É<
{1,AE,ÍŒ-Í,äŽx”z,ÍST”O,^,á,¤,Í,Å,Í,È,¢,©,AEŠ’,¶,Ä,¢,½,^A,±,Í-
{,Å¹,Í,Å,©,^,AE,ê,½B,AE,ÉAu-½-BŒ v,AE,¢,¤l,^,•û,Í-Ú,©,ç-Ø,à,Í,Å,µ,½B

‘æ,P,T‰œñ@’é,Í¬-§if[f},Â,Ä,«j@,^,í,è

fgfbfvfy[fW,É-ß,é

‘O,Ífy[fW,Ö
‘æ,P,S‰œñ@“à-Í,Íêc’Íif[f]}
Â,Ä,«j

ŽY,Ífy[fW,Ö
‘æ,P,U‰œñ@f[f},Í•¶‰œ»

@@ @‘æ,P,U%oñ @f[f],J%o»@

f[f]Žs-̄,J“sŽsJŠ^

@ f[f]l, ^, Ç, ñ, ÈJŠ^, δ, μ, Ä, φ, ½, ©, δŒ©, Ä, ^, <, Ü, μ, å, ☒B

”P, ç, J%o, Jf[f]NB

Žz‘ä, ÍfJfGfTf<, ©, çŒÜŒ«’éŽž‘äA, ¾, φ, ½, φ<IC³‘O, T, O”N,, ç, φ, ©, ç, Q, O, O”N,, φ, Ä, ·B

f[f]Žs, Jufpf“, AEfT[fJfX, J“sv, AŒ³/4, í, ê, éB

L‘å, È‘®B, ©, çí, èŽæ, Ä, ½•x, a[f]Žs, É, Í, Ç, ñ, Ç, ñ—¬, êž, ñ, Ä, , éB, », J•x, a[f]Žs-̄, É, Í, ç, Ü, ©, ê, ½Bf[f]Žs-̄, Ä, , ê, Í%o½, ààŽY, ^, È,

, Ü, Afpf“B

’•, J-̄-̄z<, AŒ, φ, ☒, J, ^s, í, ê, Ä, φ, ÄA%oAŒ‘°, %o½l, à, φ, ½, ç‘‘, è, È, φ, ^, ê, ÇAŽC•^el, È, ç[•^, ÉH, ×, Ä, φ, ^, é, ¾, ^, JH-̄-̄z, ^z, ç, ê, Ü, μ, ½B, », êÈŠO, É, à—ÖŽž, Äc‘é, à—L—ÍM‘°, ^z, é, ©, ç, ÈB

flf’é, Í-ŒN, AŒ, μ, Ä—L-¼, ¾, ^, ÇA—O, JlC, Í, , ©, Ä, ½, ñ, ¾B”P, Í—T•Y, ÈŽs-̄, δŽŒY, É, μ, ÄàŽY-̄vŽû, μ, Ä•°Žm, ä-̄O, ÉfT[frfX, ð, μ, Ü,

fJfŠfOf%o’é, Í-{-, É-à%o Y, ð, Í, ç, Ü, φ, ½, è, à, μ, ½BL, φÓ-̄j, Ä-̄OA<, φÓ-̄j, Ä•°Žm, ÉŽxŽ, ^, ê, é, ±, AŒ, ^c‘éŒ-̄Í, JŒ¹, ¾, Ä, ½, ±, AŒ, ^•^, ©, è, Ü, ·B

fT[fJfX, à•^, ©, é, Ä, μ, å, ☒B

Œ•“z, JZž‡, ^•p”É, És, í, ê, Ä, φ, ½B, , AŒ“nBíŽÔ $\langle\mathbf{f}\rangle^{\wedge}$, Ä, ·B%oŒ€à·, ñ, ¾, Ä, ½, æ, ☒, ¾B

, ±, ☒, φ, ☒ŒâŠy, ^, μ, å, Ä, ^, ã, ☒s, í, ê, Ä, φ, ÄA”í-p, Íc‘é, à—L—ÍŽØž, ^B

c‘é’B, JlCŽæ, è, J, ½, ß, É‘%oAŒ, JØ, è, àL”O“ú, ð, Ç, ñ, Ç, ñ‘, à, μ, Ä, φ,

, è, ÈÄ, μ•, ðŠJÄ, ·, éB

—v, ·, é, ÈŽs-̄, J‘ü, Ä—V, ñ, Ä•é, ç, ^, ½, í, ^, ¾B

—L-¼, ÈfRffZfEf€, Ä, ·B, TœlŽû—e, AŒ, φ, ☒, ©, ç, ·, ^, φB“-Žž, J“V- $\langle\mathbf{f}\rangle$, Ä, Ä%o®^, à, Ä, φ, Ä, φ, ½B’†, É..., δ’f, Ä, Ä-̄Í[SCí, JŒ©, ^•, à, ä, Ä, ½, ñ, ¾, Ä, ÄB, », ñ, È, ±, AŒŽv, φ, Ä,

, ð“ü, ê, Äf{[fg<£<Z, μ, æ, ☒, È, ñ, ÄŽv, φ, Ä, «, Ü, ·, ©B

@Žs-̄fT[frfX, AŒ, μ, Ä—L-¼, È, J, ^ŒöO—ê, Ä, ·B

fJf%oJf%o’é, J‘φ, Ä, ½, à, J, ^, K-Í, J‘å, «, ^, Ä—L-¼, Ä, ·, ^A, », êÈŠO, É, àf[f]Žs“à, É, ÍçŒ-̄Èä, JŒöO—ê, ^, Ä, ½B

, ±, êA—ê, AŒ-ó, μ, Ä, φ, é, ^, ê, ÇA“ú-{, J‘K“, ðŽv, φ•, , ©, ×, ½, çf-f, Ä, ·, æB

f [f},Í•¶%o»
“ú-{Œê,É-|—ó,·,é,Æ,«,É, ,Ä,Í,Ü,é,à,Ì,ª,È,©,Á,½,©,çŒöO—ê,È,ñ,Ä—ó,³,ê,Ä<³‰œÈ‘,âŽ‘—_zW,à,»,¤‘,¢
,Ä, ,é,_,ÇAŽÀ,Í^á,¤B
,æ,¤,â,
,éA, ,ê,Å, ·B,¤,ì,ì<ßŠ,ÉfGfOfUfX,Æ,¢,¤,ì,ª, ,è,Ü, ·,ªA,Ü,³,μ,

“üê—_z,Í”ñí,É^À,©,Á,½B—{,É,Í,P,O‰~œ,Æ‘,¢,Ä, ,é,ñ,Å, ·,ªA‘ü,
,ÅA“üê,·,é,Æ,Ü,,fgfŒ[fjf“fOEf<[f∈ª, ,éB,»,±,ÅfŒfXfŠf“fO,μ,½,èA…Z,μ,½,èA‰~”Œ“Š,ºA,â,è“Š,º,Ì—
ûK,Å^êŠ³⁴—¬,μ,Ü, ·B
ŽY,Íf}fbfT[fWEf<[f⊕B,±,±,Åg‘Ì,δ,Ù,®,μ,Ä,à,ç,Á,ÅA,¢,æ,¢,æ“ü—B
,±,ê,ÍfTfEfi,Å, ·B’‰œ·fTfEfi,ÅŠμ,ç,μ,Ä,©,ç,‰œ·fTfEfiB“ñ,Å,ìfTfEfi,ª, ,Á,½,æ,¤,Å, ·B
g‘Ì,δ,«,ê,¢,É,μ,Ä’g,Ü,Á,½,Æ,±,ë,ÅAAŒä,Ífv[f<,Å,D,Æ‰oj,¬B

,Ü,³,μ,
,³,ç,É,±,±,ÅI,í,è,¶,á,È,¢,ñ,Å, ·,æB

,±,Ì, ,Æ—V<YZº,â’k~bZº,É“ü,éB—F’B,Æ,“,è,μ,½,èA«Šû,È,ñ,©,ìfQ[f∈δ,μ,½,è,μ,Ä—V,ÔB
,â,ª,Ä•,¤Œ,è,Ü, ·,í,ÈB
,»,μ,½,çH“º,Ös,
Œi<C,Ì“ç,¢,Æ,«,Å,àÅ’á,UŽM,Ì—_z—,ª,Å,½B,»,Ì,¤,ì,QŽM,Í“÷—_z—,³/₄,Å,ÄB“—‘RffCf“,à,Å,é,Å,μ,å,¤,ÈB,±,ê•È
—_z<à,Å,Í,È,¢,Å, ·,æB,Í,¶,β,Ì,P,O‰~œ,Ì“üê—_z,ÅAAŒä,Ü,Å—V,ñ,ÅH,×,ç,ê,éB

ì,Ì“ú—{,æ,è,æ,Å,Û,C—ž‘“ç,¢,
,±,ê,ªf[f},ÌŒöO—ê,Å, ·B

@^ê”ÊŽs—,Å,±,ê,³/₄,©,çA—T•Y,ÈŽs—,â•M“º,Í,C,¤,³/₄,Å,½,©B
,±,Ì•—C,âfv[f<,ðŽ©‘Ì,ÉŽ,Å,Ä,¢,éIX,Å, ·,©,ç,ÈB
”P,ç,ìæŒ‘ð,ðŒ³/₄,¢o,μ,½,çfLfŠ,ª,È,¢,Ì,ÅAHŽ—œi,³/₄,—~b,μ,Ü,μ,å,¤B

<M“ºB,Í,μ,Î,μ,Î‰œf‰œi,ðŠJ,
,±,¤,¤,¤,Æ,«,ÉŽåÄŽÒ,Í<à,ÉŽ...—Ú,ð•t,_,’z—ì,ð,C,±,©,ç,Å,àŽè,É“ü,é,Å,«,Ä•—•Ì,í,è,È’²—,ðŽ{,μ,ÄA,±
,ê,Å,à,©,±,ê,Å,à,©A,ÆHŽ—,ðo,μ,½,ç,μ,¢B

‰œf‰œi,Éo,éŽÒ’B,ÍHŽ—•ž,Æ,¢,¤,ì,ð’...,Ü, ·B,±,ê,ÍHŽ—,ìŽž,³/₄,—...,éŽg,¢Žì,Å,ì•ž,Å, ·B
Ž‘—_zW,ìHŽ—œi,ìfCf‰œfXfgŒ©,Ä‰œº,³,¢B
Q,»,×,Å,Ä,¢,é,Å,μ,åB,±,ê,ª³Ž®,ÈHŽ—,ìf}fi[B
”P,ç,Í“ç,àftfH[fN,àfXfv[f“,àŽg,¢,Ü,¹,ñBHŽ—,íŽè,Å,©,ÝB
Q,»,×,Å,ÄŽè,Å,©,Ý,Å,³/₄,ç,³/₄,çH,×,éBŽè,Í, ·,®,É,®,ì,á,®,ì,á,É‰œ~,ê,é,ÈB,»,ìŽè,ðHŽ—
•ž,Å@,¤,í,_,Å, ·B,³/₄,©,çA‰œ~,μ,Å,à,æ,¢•ž,ªHŽ—•žB
,È,ñ,Å, ·,ªA”P,ç<àŽ,ì,Í,±,ìHŽ—•ž,É<à,ð,©,_,ÄAæŒ,ð,±,ç,μ,½,è, ·,é,ì,Å, ·,æB,»,ì,%œì,ÈHŽ—•ž,ðÉ,μ,º
,à,È,

”P,ç,ðŒ©,Ä,¢,é,ÆŽUà,·,éŽ-,É”M,ð,©,¬,Ä,¢
,é,æ,¤,Å,·B,»,ê,^fXfe[f^fXEfVf“f{f*n^E, lÜ'Yj, ¾, Á, ½, ñ, ¾, é, o, EB
fAfslfLfeFX,Æ,¢,¤‘å<äZ, i, l b, a, , è, Ü, ·B, ±, llH“!Sy, Å, ³, ñ, ‘, ñ~Q”i, µ, ½, , AE, , AE, P, O%o
, ½, l, ÉA•n-R, Å, lJ, <, Ä, ¢, éÓ-i, a, È, ¢, AEŒ¾, Á, ÄŽ©ZE, µ, ½B*

, ÅA%of%oï, l‘±, <, Ü, ·B, Ç, ñ, Ç, ñHŽ-, l, Å, Ü, ·BoÈŽÒA-ž• , Å, à, oH, ×, ç, ê, Ü, ¹, ñB, », o, ·, é, AEŽ-i, l, ×j, Á, Ä, ¢, é“z-
ê, ðŒÄ, ÔB%of%oïê, É, l, ½, , ³, ñ, l“z-ê, a, ¢, é, ñ, Å, ·, ^AE, l%oH, ðŽ, Á, Ä, ¢, é“z-ê, a, ¢, éB, », l“z-ê, a, », l·M°
, É<äB, Å, B·M°, l, a, ðŒü, ¢, ÄfA[, Á, ÄŒû, ðSJ, ¬, éB“z-ê, a, », lŒû, l’†, É
%oH, ð“È, Áž, ñ, ÅfOfŠfOfŠ, ·, é, ñ, Å, ·B-ž• , lA, É^Ù“, ð“È, Áž, Ü, ê, Ü, ·, ©, ç, ËAfQ[fb, Ä“f,
, ·, l’†, l, à, l, ð, ·, Å, ©, é“f, < o, µ, ÅA·M°, l, Ü, ½V, ½, ÈŽM, É’§, p, l, Å, ·B
“f, ¢, ½%o~•, l, AE, ¢, o, AE·È, l“z-ê, a, <, ê, ¢, É^-, µ, Ä,
”P, ç“f,

, ±, ê, l-¾, ç, ©, É^Ùí, ÈŒöŒi, ¾, æ, ËB
, ±, o, ¢, o•é, ç, µ, Ô, è, ð‘P”p, AEŒÄ, Ô, l, ¾, AEŽv, ¢, Ü, ·B

@‘P”p, AE, ¢, o, ±, AE, Å, l<“I, È-È, Å, l-Å’f<ê’f, ¾, Á, ½, æ, o, ÅA·M°, l•v•wŠŒW, È, ñ, Ä, ¢, o, l, l-¼-Ú, ¾, -, Ý, ½, ¢
, Å, ·, ËB
•, <C, Ý, ½, ¢, ÈŽ-, l“-, ½, è‘O, ¾, Á, ½, ñ, Å, ·, ^A‘O%oñ, à~b, µ, ½, æ, o, ÉoJ-|, a, Ç, ñ, Ç, ñ’á%o°, ·, é, ñ, Å, ·BŒ³~V%o@, l-¼-
å·M°, l%oAE, a, Ç, ñ, Ç, ñ’fâ, ·, éBfCf^fŠfA”½“‡ÈŠO, ©, ç, à-¼-å, l%oAE, lŽÒ, ðŒ³~V%o@<c^õ, É’C-½, µ, ÄAŒ‡õ, ð-
,, ß, ½, è, µ, Ä, ¢, é, ñ, Å, ·, æB
oJ-|’á%o, lŒ^õ, l, ¢, è, ¢, è, Èa, a, , Å, Ä, l, Å, <, è, µ, Ü, ¹, ñ, ^A‘½•aŽq
, ©A, AEŽv, oB·M°, lŽCp, ÅŽq
, È, à, ñ, ¾B, µ, ©, à•v, ©, ç, ·, è, lJ, Ü, è, ½Žq, a’N, lŽq, ©p, ©, ç, È, ¢, í, -, ÅA, », è, ÈaŽY, ð÷, è, l, à, , Ü, ç, µ, ¢B, », ñ, È, ±
, AE, É”l, i, ³, è, é, æ, è, à, “ú, lSy, µ, Ý, ðŽv, ¢Ø, èŠy, µ, Ý, ½, ¢B<aŽ, i, l, CŽ, i, l, », ñ, È, AE, ±, è, Å, l, È, ¢, Å, µ, å, o, ©B

@, », ê, É, µ, Ä, àA“z-ê, a, ½,
<äZ, i, l, ½, , ³, ñ“z-ê, ðŽg, Á, Ä, ¢, ½B’¬, Éo, éŽž, lA’á“ñl, l, ·t, «, l“z-ê, ð~A, ê, Ä, ¢,
‘O, V, O”N, l[f}ŽslŒû, a, ¾, ¢, ½, ¢, T, O-œB, », l, o, i, Žl•a, lŽO, a“z-ê, à, µ,
ê, l, Ü, ñ, AE, É‘½, ¢B

‘å<äZ, i, É, È, é, AE, í, -, l, í, ©, ç, ñ“z-ê, ð, ½,
Žal, lŒC, ð’E, a, ·“z-ê, AE, ©, ËB, , è<aŽ, i, lŽCp, lŒC, ð’E, a, ·“z-
ê, ð“ñlŽ, ABŠO, ©, ç<A, Á, Ä, , è, AEfff“, AE, D, Ä,
%oE‘«ê-åŒC’E, a, ¹“z-ê, AEJ‘«ê-åŒC’E, a, ¹“z-ê, AE“ñl-v, é, ñ, ¾, Á, ÄB
, ±, o, ¢, o“z-ê, l, , Ü, è”\-l, ¢, ç, È,
%oAEŒv, ðŽæ, èŽdØ, ç, ¹, ½, è, à, µ, ½, ñ, Å, ·B

f [f], l, j%»

“z—ê, l”ßžS, Èó‘Ô, É, Ä, ÍfXfpf< f^fNfX, l, ÄE, ±, ë, Ä, à~b, μ, ½, ÈBi‘æ, P, S%oñj

@, ÄE, ±, ë, Ä“z—ê, l<Œ¹, Ä, ·, ^Aí“^•β—, , V, μ, φ^a•ž’n, lZ—, È, Ç, “z—ê, ÄE, μ, Äf[f], É~A, ê, Ä, ±, ç, ê, Ä, φ, ½, ÄE, φ, , o~b, δ‘O, É, μ, Ü, μ, ½B

, ÄE, ±, ë, ^A‘O%oñ, à~b, μ, ½, æ, o, ÈŒÜŒ«’é, l“ñ”Ô—ÚAf gf%of,,fkfX’é, lžž, ^f[f]’é‘, l—l“y, ^A‘å, Ä, μ, ½, ÈB, ÄE, φ, o, ±, ÄE, l, », ê~ÈŒäf[f]’é‘, l~· Šú, ^I, í, Ä, Äžç, è, lžžŠú, È“ü, é, í, —BV, μ, φ^a•ž’n, ^, È,

, ÄE, ¾B

, Ä, lA, », ê~ÈŒä, l“z—ê, l”, ^EfŒ, ·, é, ©, ÄE, φ, o, ÄE, », n, È, ±, ÄE, l, È, ³, », o, È, n, Ä, ·, æBfgf%of,,fkfX’é~ÈŒä, l“z—ê, l, Ç, ±, ©, ç, «, ½, l, ©B

Ä<β, ±, n, Èà, ^¥, |, ç, ê, Ä, φ, Ü, ·B“z—êZl, ÄžqàB

f[f]l’B, lžq<Y, ^žY, Ü, ê, é, ÄE^ç, Ä, é, l, ^Œ™, ¾, ©, ç, Ç, n, Ç, nZl, Äžq, È, μ, Ä, φ, ½A, ÄE, φ, o, n, ¾B

, φ, í, ê, Ä, Y, ê, l, », o, ©, à, μ, ê, È, φBoJ—|, ^á‰o°, ÄE, φ, φ, Ü, μ, ½, ^A|, Y, ½, φ, È”δ”D—@, ^”

, ^, φ, ê, l•½—, ¾, Ä, Ä<M°, ¾, Ä, Ä”DP, ·, é, l, , ¾B’†â, Èž, ”s, ·, ê, lōžY, ·, éBZl, Ä, Ä, φ, ½, ©, çŒ©, ^, ©, —, lōJ—|, ^Œ, μ, ½, ÄEl, |, ê, l”[“¾, ^, φ,

Zl, Äžq, l—½š, ^, , Ä, ½, ç, μ, φBu“û, lō, é‰~’Œv, ÄE, φ, oŠB, φ, ç, È, φÔ, l, á, n, l, Y, n, È, ±, ±, Èžl, Ä, èB

, », μ, Äžl, Äžq, δW, β, Ä, Ü, í, é<ÄEžO, ^, φ, ½BŒ™, È~b, ¾, —, ÇA, ±, l<ÄEžO, ^žl, Äžq, δ“z—ê, ÄE, μ, Ä^ç, Ä, Ä”„, é, n, ¾B, ±, ê, “z—ê, l<Y<Œ¹, ÄE, μ, Ä‘å, «, È, à, l, ¾, Ä, ½, ç, μ, φ, Ä, ·B

fzf‰fefBfEfX, ÄE, φ, ožl, ^, ±, n, Èž—, δŒ¾, Ä, Ä, φ, éBu”S“y, ^_, ç, ©, —, ê, lA, ” , ^, ç —~_“l, É, lAÔ, n—V, δžl, Ä, ½<M°, ^A‰o½”N, ©, μ, ÄžC•a, lžA, lžq, ¾, Ä’m, ç, , È“z—ê, δ”f, Ä, Ä“

, o, ±, ÄE, à, , è“¾, é, í, —, Ä, ·B‰o½, ÄE, àŒ¾, |, È, φ<C•a, Ä, ·B

<až, l~A’†, à“z—ê, δžg, o, ±, ÄE, È‘l, μ, Ä‘½, l—çS, ^, ÄE, ^, β, ½, l, ©, à, μ, ê, È,

ê’B, δ‰oδ•ú, μ, Ä, ä, é, ±, ÄE, ^, ½, ©, Ä, ½, n, Ä, ·B

, ±, o, φ, oI, δ‰oδ•ú“z—ê, ÄE, φ, o, n, Ä, ·, ^A”P, ç, lžC—R, Ä, l, , é, ^f[f] Zs—Œ, l, , è, Ü, ^, nB, ÄE, ±, ë, ^A—á, |, l‰oδ•ú“z—ê“—žm, ^Œ<¥, μ, Äžq<Y, ^žY, Ü, ê, ½, çA, ±, lžq, lž, Ü, ê, È, ^, ç, È, μ, Äf[f] Zs—, È, n, Ä, ·B, ¾, ©, çAŒöO—ê, à“ü, ê, é, μfpf“, ^a”z<, ^, è, éB

, à, μA”„, Ä¬Œ÷, Ä, à, μ, ½, ç, ”

“z—ê, δ”f, Ä, Ä“

g•a§, lžD‰oï, Ä, , è, È, ^, çA, », l̄g•a, ^a”l“l, Ä, È, φ, ÄE, ±, ë, ^f[f], l̄š—l, lŒ¹, Ä, à, , è, ÄE, φ, í, ê, Ä, φ, Ü, ·B

, », ê, È, μ, Ä, àA, ±, l, l, à, l, l, ¾, ÈB

, Qf[f]—@

@^ê—È, Ä, l‘P”p“l, Ä, à, è, «, ê, È, φf[f]•J‰o», Ä, ·, ^A, ±, ê, ^‰o½•S”N, à”É‰oh, μ‘±

f [f},l•j%o»

,-,½,Ì,Í,â,Í,ë“Žj<Zp,Ì,¤,Ü,³A_“í,³,¤“,°,ç,ê,é,ÆŽv,¢,Ü,·B
,»,,µ,Äf[f]l,ÍŒö³,ð<,ß,Äí,É-@,ð‘,d,·,é•j%o»,ð^ÛŽ,µ‘±,-,½B,±,±,Íf[f]l,Ì`ì·å,È,Æ,±,ë,Å,·,È

,»,,ê,ðÛ'¥,·,é,Ì,¤f[f]-@B
,i,å,Á,Æ,Ì,ç,Ìc'é,Å,·,¤,Uç·I,Ìf†fXfefBfjfAfkfX'é,Íd-vBfgfŠf{fjfAfkfX,É-½,j,Äuf[f]-
@‘å‘Sv,ð•ÒŽ[³,¹,½B,±,ê,Íf[f],Ì-@,Æ-@,Šwà,ðW‘å-,µ,½,à,Ì,Å,·BŽŽŒ±,É,æ,

,R“y-ŒŒš’z

@,±,ê,àf[f]l,Ì“³/⁴Ó•¤-iB-@-¥,Æ,©Œš’z,Æ,©AŽÀ-p“I,È,à,Ì,Åf[f]l,Í”\—Í,ð”Šö,·,éB
Œš’z,Å,ÍfA[f],“Á’¥B%o½<C,È,
,È,ñ,Å^ê”Ôä,Ì,Í-Ž,ç,Ä,±,È,¢,ñ,Å,·,©B“S<Ø,“ü,Å,Ä,¢,é,í,-,Å,Í,È,¢,©,ç,ËB
,±,êAÎ,ÌØ,è•û,É”÷-
,ê,ÅÌ,Ý,Ì·å,«,ÈŒš•,ðŒšÝ,Å,«,é,æ,¤,É,È,Å,½B
'P“ÆfA[f],ÌŒš‘¢•,¤SMù-åB
fRffZfEf€,à,j,Á,èŒ©,Ä,Ý,é,ÆfA[f],ðW,ß,Ä‘¢,ç,ê,Ä,¢,é,Ì,¤a,©,é,Å,µ,åB

,Å,Á,©,¢,Ì,¤A...“¹<‘Bftf%of“fX,É, ,éfK[f<’,¤-L-¼B,,³,¤,T,Of[fgf<, ,éB
f[f]l,Íd-v,ÈêŠ,É,Ç,ñ,Ç,ñ“sŽs,ðŒšÝ,µ,Ü,·B,»,±,É...,¤,È, ,Ä,à,‘\,¢,È,µB,È,-,ê,Î,C,±,©,Ì
%o“, ,ÌŽR,Ìä,©,ç...,ð^ø,¢,Ä,

,»,-Ì‘¼,ÌŒš’z•,Æ,µ,Ä,ÍfAfbsfAŠX“¹,Æ,¢,¤ŒR-p“¹~H,¤-L-¼B,ì,¤^ê•”,¤Žc,Å,Ä,¢
,Ü,·BfAfPfflfX’©fyfVfA,É, ,Å,½u%o¤,Ì“¹v,Ìf[f]”Å,¾B

,SŠw-âŒŒlp

@f[f],ÌŠw-âŒlp,Í,Ù,Æ,ñ,ÇfMfŠfVfAAfwfŒfjfYf©j%o»,Ì`ì-Z-B“Æ‘n«,Í,È,¢,Æ,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·B

“NŠw,Å,ÍfXfgfA”h,¤-¬s,Å,½B
fZflfJ,¤-L-¼B,±,Ì,Íflf’é,Ìæj,ÅAflf
,»,,ê,©,çf}f<fNfXfAfEfŒfŠfEfXfAf“fgfjkfX’éB‘O%oñ,à~b,µ,Ü,µ,½B”~uŽ©È~vB

‘³%oÈ‘,Å,Ío,Ä,«,Ü,¹,ñ,¤GfsfNfefgfXA,Æ,¢,¤l,àŒ\—L-¼B
,±,Ì,Í“z-êogB,Ì,ç,É%oð•ú,³,ê,Ä-L-¼,È“NŠwŽÒ,É,È,é,Ì,Å,·B
fGfsfNfefgfX,Í‘¤,¤,¤,
,Ü,·B,Í,Å,«,è,Æ,Í•¤,©,ç,È,¢,Ì,Å,·,¤A“z-êŽž‘ä,ÉŽål,É‘¤,ðÜ,ç,ê,½,ç,µ,¢B
“NŠwŽÒ,É,È,é,,ç,¢,¾,©,ç”P,ÍŽá,¢,©,ç,,ç,“I,È¢ŠE,ðŽ,Å,Ä,¢,½,ñ,¾,ë,¤B‘Ô“x,â-Ú,Å,«,¤z-
ê,ç,µ,

u“z-ê,È,ç“z-ê,ç,µ,”Ü<ü,ÈŠç,ð,µ,È,¢,©BvŽål,Í,»,ñ,ÈfGfsfNfefgfX,¤ž,ç,µ,

f [f},ł•¶%»

,» ,é, É‘Î, μ, ÄfGfsfNfefgfX, Íu, » ,ñ, È, ±, ÄE, δ, μ, ½, ç‘ «, aÜ, ê, Ä, μ, Ü, ç, Ü, ·, æBv, ÄE—Ä, μ,
Žäl, ÍX, ÉfJfb, ÄE, μ, Ä, » ,ł, Ü, Ü‘ «, δÜ, Ä, Ä, μ, Ü, Ä, ½B
, » ,ç, μ, ½, çu, Ü, çA, ¾, ©, çŒ³/₄, Ä, ½, ¶, á, È, ç, Ä, ·, ©v, ÄEAŽäl, δ—@, μ, ½, ÄE, ç, ç, ñ, Ä, ·B
fGfsfNfefgfX, lŽ, „í, Ä, Ä, ç, Ü, ·B

@@@@@“z—êfGfsfNfefgfX, ÄE, μ, Ä, í, ê, l¶, Ü, êAg, ÍæêA
@@@•n, μ, ³, lCffX, l, ², ÄE,
@@@@@lifCffX, lufC[fSfAfXv, É“oê, ·, éŒîHj

ŽÀ, lŽ, A, ±, l̄fGfsfNfefgfX, aD, «, Ä, ÄAfvfSf“fg, É, à”P, l•¶, δÜ, ¹, Ü, μ, ½B, ç, Ä, ÄŒ©, Ä‰o°, ³, çBuŒê~^v, ÄE, ç
, ç, i, Ä, ·B

@uŽ©•a, l, à, l, Ä, È, ç’ · Š, ÍA‰o½, àŽ©—, ¹, Ä, a, ç, çB, à, μ”n, aŽ©—, μ, ÄuŽ,,, l”ü, μ, çv, ÄE, ç, Ä, ½, ÄE, ·, é, È, ç, lA, » ,ê, l‰ä—
, Ä, «, é, ¾, è, çB, ¾, aA, «, Ÿ, aŽ©—, μ, ÄuŽ,,, l”ü, μ, ç”n, δŽ, Ä, Ä, ç, év, ÄE, ç, ç, lA, «, Ÿ, l”n, l—D—Ç, È, ±, ÄE, δŽ©—
, μ, Ä, ç, é, ñ, ¾, Ä’m, é, a, ç, çB, ÄE, ±
, è, ÄA, «, Ÿ, l, à, l, l, È, È, l, ©BS‘œ, lŽg, ç•û, ¾B, μ, ½, a, ÄA, «, Ÿ, lS‘œ, lŽg, ç•û, aŽ©‘R, É, ©, È, Ä, Ä, ç
, é, ÄE, «A, » , lŽž, ±, » Ź©—, ·, é, a, ç, çB, ÄE, ç, ç, l, lA, » , l, ÄE, «, lA, È, È, ©, «, Ÿ, l—D—Ç, È, à, l, δŽ©—, μ, Ä, ç, é, l, ¾, ©, çBv

—á, l, lA, M‘°, a, ç, ÄA, %oç, È”n, δ”f, Ä, ÄŽ©—, μ, Ä, ç, é, ñ, ¾, ÈB
fGfsfNfefgfX, l, ç, çB, “O, l”n, ©B”n, aŽ©•a, δŽ©—, ·, é, È, ç•a, ©, é, aA, È, °, “O, a”n, δŽ©—, ·, é, l, ©A, ÄE
•a, ©, é, æ, ÄB, l, c”f, Ä, ½, ÄE, ©AÅV, l, o, g, rŽ, Ä, Ä, ç, é, ÄE, ©Afuf‰of“fh, l̄fJfof“Ž, Ä, Ä, éA, ÄE, ©, ç, Ä, ÄŽ©—, ·, el, ç
, Ü, ¹, ñ, ©B
, , È, ½, lS, É, lŽ©—, ·, é, à, l, a, È, ç, l, Ä, ·, ©A, ÄE, ç, ç, ±, ÄE, δŒ³/₄, Ä, Ä, ç, é, l, aGfsfNfefgfXB
u“z—ê, ¾, Ä, ½, ©, ç, ±, ç, ç, l, l, δ, μ, ½, ñ, ¾v, ÄE, ç, Ä, Ä, μ, Ü, l, » , ê, Ü, Ä, Ä, ·, aA, í, ê, í, ê, l¶ Š^‘Ô“x, ä, —, δU, è•Ô, ç, l, é—
l, δŽ, Ä, ½“à—e, ¾, ÄŽv, ç, æB

, à, ç, ê, ÄB

@uL‰o—, μ, Ä, „, a, ç, çA, «, Ÿ, δ•ŽJ, ·, é, à, l, lA, «, Ÿ, δ”l, Ä, ½, èA, È, ®, Ä, ½, è, ·, éŽØ, Ä, l, È,
, é, ÄŽv, ç, » , lŽv~f, È, l, ¾B, » , ê, Ä, ¾, è, ©, a, «, Ÿ, δ“{, ç, ·, È, ç, lA, «, Ÿ, l, l, a, «, Ÿ, δ“{, ç, l, ½, l, ¾, ÄE’m, é, a, ç
, çB, ¾, ©, ç‘æ~ê, ÄAS‘œ, ÄD, ç, ê, È, æ, ç, È, µ, ½, Ü, l, B, È, °, È, çA, à, µ, «, Ÿ, a, D, ÄE, ½, Nl, l, éŽžŠØ, ÄE—P—\
, ÄE, δ“¾, é, È, ç, lA—eÔ, È, «, ŸŽ©g, È‘Ä, ç, l, Ÿ, Ä, ¾, è, ç, ©, çBv

, ±, ê, à—È”, çl, l•û, Ä, ·B
, ¾, ê, ©, a, «, Ÿ, δ‰o£, Ä, ½B, , È, ½, l‰o£, Ä, ½l, È‘l, µ, Ä“{, è, ä‘ž, µ, Ÿ, l, CŽ, ç, l, δ•ø,
, Ä, à, » , ê, lAŠØ^á, ç, ¾, ÄEAfGfsfNfefgfX, lŒ³/₄, çB
”P, l, , È, ½, l‰o£

f [f},J‰»

,Á,½,¾,¬B“{,è,â‘ž,μ,Ý,δ, ,È,½,ÌS,ÉA,|•t,¬,½,Ì,ÍA, ,È,½Ž©g,ÌS,¾A“{,è,Í”P,Ì’†,É, ,é,Ì,Å,Í,È, ,Ì’†,É, ,é,Ì,Å,μ,åB
, ,È,½,δ“{,ç,¹,Ä,ç,é,Ì,Í, ,È,½Ž©g,Ì“{,è,ÌSB,Ù,ç,Ù,çA,»,ê,ÉU,è‰oñ,³,ê,Ä,Í,ç
,¬,Ü,¹,ñ,æBŽ©•ª,ÌS,Å,·AfRf“fgf[f,μ,È,³,çB
fGfsfNfefgfX,ÌŒ¾,ç,½,ç,±,Æ,Í,±,ç,ç,ç,±,Æ,¾,ÆŽv,ç,Ü,·B

ÅI“I,É,Í,±,ç,ç”

Ž©•ª,Ì‘«,δÜ,ç,ê,Ä,à•½‘R,Æ,μ,Ä,ç,½fGfsfNfefgfX,ç,μ,ç,Å,·B
,Å,àA“z—ê,¾,©,çA,Æ•D,Å,¬,Ä,μ,Ü,ç,ÆŠO^á,|,é,ÆŽv,çB

@f}f<NfXfAfEfŒfŠfEfXfAf“fgfjkfX’éAf[f}’é,Ìfgfbfv,Ì,±,Ìl,“z—
ê,ÌfGfsfNfefgfX,Æ“-,JfXfgfA”h,¾,Æ,ç,ç,±,Æ,δ,Ç,ç,ç,ç,ç,ñ,Å,μ,å,ç,©B
Ž,,ÌZ,Å,Ä,ç,é,±,Ì{A’†‰oŒö~_ŽD,ÌuçŠE,Ì-¼~,P,Rv,È,ñ,Å,·,ªAfGfsfNfefgfX,Æf}
f<NfXfAfEfŒfŠfEfXfAf“fgfjkfX’é,^ê,ÉŽû,ß,ç,ê,Ä,ç,é,ñ,¾,æBÛ’¥“I,Å,μ,åB
uŽ©È~^v,ð“Ç,P,ÆfAfEfŒfŠfEfX’é,à,â,Í,èA,_,Ì•½^À,ð^êŠŒœ-½<,ß,Ä,ç,é,ñ,Å,·,æB

f[f},Ì<M°°B,ÍæÒ‘òŽO-†,Å“f,ç,Ä,ÍH,×AŽY,ñ,Å,ÍŽÌ,ÄA,Æ-Å’f<è’f,Å,·,ªA,»,ñ,ÈJŠ^,δ,μ,È,ª,ç,àS,Ì
‰œ’ê,Å,Ífqf...`Ä,Æ,·,«,Ü•-,ª,ç,Ä,ç,½,ñ,Å,Í,È,ç
,©BæÒ‘ò,Å,_,Ì•½^À,Ì“¾,ç,ê,È,çBc’é,ªfXfgfA”h“NŠwŽO,Å, ,é,Æ,ç,ç,±,Æ,ÍA,Ü,³,μ,
,é<C,ª,μ,Ä,È,è,Ü,¹,ñB

@“z—ê,ac’é,àS,ª,ç,é,Æ,±,ç,Í^ÄŠO<ß,ç,Æ,±,ç,É, ,éB
’Pf,ÉuS,Ì•½^Àv,Æ,ç,Ä,Ä,·,«,Ü,μ,å,çB
,ç,å,Ä,Ææ‘-,è,μ,Ä,ç,ç,ÆA,±,ç,ð“NŠw,Å,Í,È,
,©B,¾,©,çA, ,Ä,Æ,ç,çŠO,ÉfLfŠfXfg<³,ªf[f}’é,ÉL,Ü,Å,½,ÆŽ,,,Íl,|,Ä,ç,Ü,·B

“NŠw,ÌÅŒä,ÉfZflfJ,É,Ä,ç,Ä^êŒ¾,¾,¬B
fZflfJ,ÌŒ•“z,Ì<£<Z,É”½‘Î,μ,Ä,Ü,μ,½Bl“¹“I,È—§ê,Å,Í,È,
R,È,ñ,Å,·,ª,ÈB
fxfXfrfI‰oÎŽR,Ì•¬‰oÎ,Å-,,Ü,Ä,½flf“fyfC,Æ,ç
,ç,¬,ª, ,è,Ü,·B“-Žž,ÌlX,ÌJŠ^,ð,Ü,é,Ü,éŽc,μ,½,Ü,Ü”Œ@,³,ê,ÄA-È”,ç^âO,Å,·B,»,Ìflf“fyfC,ÌŒ•“z,ÌhŽÉ,Ì•ç,É
-Ž‘,«,ª”

@-ðŽjE•JŠw,É,Ä,ç,Ä,Í-¼‘O,Æì•i-ñ<“B,Æ,É,©,Šo,|,é,¾,¬B

, ,ÌfJfGfTf<,ªfKfŠfA‰o“ª,ðL~^,μ,½ufKfŠfAíLvBf‰ofef“Œê,Ì-¼•J,ç,μ,çB

f!fŠf...frfIfXi‘O,Qç<Ij,Ìu-ðŽjvB,±,Ìl,ÌfMfŠfVfAl,¾,¬,ÇlŽ,ç,Æ,μ,Äf[f},É~A,ê,Ä,±

f [f},l•j‰»

,ç,ê,ÄfJf< f^fSSŠ×—Ž,ÌŒ»ê,É[‡],í,¹,½B

fŠf”fBfEfXiŒä,P¢*Iju*[f}Œš‘LvB

f^fLfgfDfXi,Q¢*Iju*Qf< f}fjfAvu”N‘ã< LvB‘OŽÒ,Íf[f}l,C,çŒ©,½,ç,Ü,^¾,Ü,^¾—¢ŠJl,^¾,Á,½fQf< f}
f“l,Ì< Md,È< L~^BfQf< f}f“l,Í,ÌfCfMfŠfXl,âfhfCfclAftf%of“fXl,Ì’¼Ú,Ì‘cæBf^fLfgfDfX,Í‘Á
—Ž,μ,½f[f}l,AE”äŠr,μ,ÄŽ,žÀ,ÈfQf< f}f“l,ðŽ,ž,°,Ä,¢,Ü,·B

•JŠwB

f”fFf< fMfŠfXi‘O,P¢*Ij*,Ìf[f}Œš‘—Ž—ŽufAfGflfCfXvB
fzf‰efBfEfXAfIf”fBfffBfEfXA,Í,AE,à,É‘O,P¢*I*,ÌŽl,Å,·B

,»,Ì’¼B

fXfgf‰of{f“i,P¢*Iju*’n—Žv

fvgfŒf}fCfIfXi,Q¢*Iju*“V•JŠw‘å‘SvB,±,ê,ÍA“V“®à,ð¥,|,Ä—L—¼B,±,ê^È—^fRfyf< fjfNfX,AE,¢
,¤“V•JŠwŽÒ,¤o,Ä,

ŽQI}‘Ð‰oiEEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,½,¢,AE,«,Í

—¼,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^f[flfbfg“XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”ð,ñ,ÅA—{,Ìff[f^A‘•],È,C,ðŒ©,é,±
,Æ,¤,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰Å”\,Å,·B

<u>cŠE,Ì—¼~ 13</u> <u>fLfPf...</u>	fLfPfAfGfsfNfefgfXAf}f< fNfXEfAfEfŒfŠfEfX,Ì,RI,Ì•i,¤,Ü,Æ,B,ÄÚ,Á,Ä,¢,éB fGfsfNfefgfX,Æf}f< fNfXEfAfEfŒfŠfEfX,ÍA[,Á,¤,ÈŒÎ,Ì,æ,¤,¾BS,¤,í,Ä, é,ÉA,Å,¢ŠJ,¢,Ä,μ,Ü,¤—{,Å, ,éB”P,ç,ÌŽv‘z,¤A,í,½,μ,ÌS,É‘i, ,é—Í,ðŽ,Å,Æ,¢,¤,± ,Æ,ÍACEÄ‘äf[f}•J—¾,¤AŒ»‘ä“ú—{,Ì•J—¾,Æ”ñí,É [~] B,¢,¤,ç,Å,Í,È,¢,¤,©,ÆŽv,Å,½,è,à,·,éB
<u>fif“fyfCEfOf</u> <u>%oftfBfefB...†ŒöV·</u> <u>cover</u>	—{“º—½“ñ~B‰oÌŽR,É—,,à,ê,½ŒÄ‘äfCf^fŠfA,Ì“sŽsf f“fyfCB”Œ@,³,ê,½ŠX,Ì —Ž,¤,¤,çAŒÄ‘äf[f}l,ÌJŠ^,ð“Ç,Ý‰oð, ‰o½,Å,à,È,¢Z—,Ì•é,ç,μ,¤S_ŠÔŒ©, ,ÄA»—j[,¢B
<u>”—Å,Ìf[f}cŠE\</u> <u>%odŽ™^âŠü,Æ“z—ë§</u>	—{“º—½“ñ~Bf[f}’é,¤—Ì“yŠg‘å,ð,μ,È,,È,Á,½, ,Æ,àA‘½, é,Ì [~] Y [~] Œ¹,Í‘ÌŠOí^,Ì•ß—,Å,Í,È,¤,Á,½,Ì,©H—ðŽjŠw,Ì,~,à,μ,ë,³,¤—ži,Å,«,é~b‘èì,Å,·B

‘æ,P,U‰oñ@f[f},Ì•J‰o»@,~,í,è

fgfbfvfy[fW,É~ß,é

‘O,Ìfy[fW,Ö
‘æ,P,T‰oñ@’é
 ,Ä,Ä,¤j

ŽY,Ìfy[fW,Ö
‘æ,P,V‰oñ@f[f}’é,Ì•JŽ,

f□□[f}’é□:̄I•IŽč

“z—ê,©,çg•ä,μ,½,¾,¬,Å,È,

fefIfhfVfEfX’é

@,»,I, ,Æ,Id—v,Èc’é,ÍfefIfhfVfEfX’éi^È,R,V,X’,R,X,TjB
,±,±,ÅA{f}’é,Íe%ož,I<æØ,è,^,Å,«,Ü,·B

,±,lc’é,Í,R,W,O”N,ÉfLfŠfXfg<³,δ<³%o»,μ,Ü,·B<³%o»,Æ,φ,□,I,í,ì@<³,É,μ,½,Æ,φ,□,±,Æ,Å,·,æB,Ý,ñ,ÈfLfŠfXfg<³,δM,¶,È,¬,ê,î,φ,¬,È,φBf~f%o fm”o—
β,ÍEö”F,Å,·BCEö”F,Æ,ÍM,¶,Å,à,æ,φ,Æ,φ,□,±,Æ,Å,·,©,çB’S’RA^Ó-i,Íá,□,©,ç,æ,
‘³%o»,μ,½,Æ,φ,□,±,Æ,ÍAfLfŠfXfg<³,δ<%oÆŽx”z,I’Œ,É,μ,æ,□,Æ,φ,□,±,Æ,Å,·,EB

,³,ç,ÉA,R,X,Q”N,É,ÍfLfŠfXfg<³ÈŠO,ì@<³,ÍM,Å,δ<ÖZ~,μ,Ü,·BfLfŠfXfg<³<%o»,Æ,φ,□,Æ,«,ÉŽQl:,Å,í•È,±,ç,í,R,X,Q”N,Ào,Å,«,Ü,·B

,ç,È,Ý,ÉAfMfŠfVfA,íŒÅ‘äfIfšf“fsfbfN,í,±,IŽž,Ü,Å,·,±,È,í,ê,Ä,φ,Ü,μ,%B,Å,à,±,êAfMfŠfVfA,í_X,É•ù,°
.é,·Ö,è,³/4,©,çfLfŠfXfg<³<%o»ÈŒäŠJ,©,ê,È,

@fefIfhfVfEfX’é,ÍŽ€È,Æ,«,É“nl,í§Žq,É’é,δ•S,,μ,Ä’Š’±,³,¹,Ü,μ,%B
ŒZ,³Œp,φ,³/4,í,“Œ”¼•A,±,ê,“Œf[f}’é‘iŽñ“sfRf“fxf^f“fefBfm[fvf;jB
í,³Œp,φ,³/4,í,³/4•A³/4f[f}’é‘iŽñ“sf[f]j,Å,·B
’n†SC’S’í,δ,®,é,è,ÆŽæ,è‘í,ñ,³/4äf[f}’é‘,í,±,±,Ü,Å,Å,·,μ,Ü,φB

,Æ,Í‘Œ½,»,ê,¼,ê,íf[f}’é‘,íb,^,è,Ü,·,^A,»,ê,Í,Ü,/,Æ,Å,μ,Ü,μ,å,□B

‘æ,P,V%oñ@f[f}’é‘,í•IŽč@,“,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É–ß,é](#)

‘O,ífy[fW,Ö
‘æ,P,U%oñ@f[f},í•¶%o»

ŽY,ífy[fW,Ö
‘æ,P,W%oñ@fLfŠfXfg<³,í—§

fLfŠfXfg³,l□—§

¢ E j u<~^

@@‘æ,P,W%oñ@fLfŠfXfg³,l—§@

-ÚŽŶ ,P<IE³‘OEä,ÍfpfŒfXf fi’n•û
,QfCfGfX,ÍjŠU
,RfLfŠfXfg³

,P<IE³‘OEä,ÍfpfŒfXf fi’n•û

@ ,S¢<I`È~f[f}’é‘,Å,ÍfLfŠfXfg³,”F,ß,ç,ê,ÄA,â,ª,Ä‘³,É,È,é,Ì,Å,μ,½,ªA,±,ÍfLfŠfXfg³,l—
§,ðOE®,Ä,“,«,Ü,μ,å,¤B

fCfGfX,É,æ,Á,Ä,±,l@³,ªJ,Ü,ê,½,±,Æ,Í’m,Á,Ä,¢,é,Å,μ,å,¤B

fCfGfX,ÍžÀY,Il•“,Å,“,æB, ,Ü,è,É,à“à‰o»,³,ê,Ä,μ,Ü,Á,Ä‰oÈ<ó,J,á,È,¢,©,ÆŽv,Á,Ä,¢,é,Ý,½,¢,^¾,-,ê,ÇB

fCfGfX,Í‘O,S”N,,ç,¢,ÉJ,Ü,ê,ÄAŒä,R,O”N,

%o‘ac’éfIfNf’f”fBfAfkfXifAfEfOfXfgfDfxj,Æ,^¾,¢,½,¢“,-,JŽz‘ä,Å,·B

êŠ,ÍfpfŒfXf fi’n•ûBf†f_f,,l,ªZ,ñ,Å,¢

,é,n•û,Å,·B,^¾,©,çAfCfGfX,af†f_f,,l,Å,·BfpfŒfXf fi’n•û,Í,ç,å,¤CfCfGfX,a—c,¢,Æ,«,Éf[f},l‘®B,É,È,Á,Ä,¢,é,ñ,Å,·B;,ÍfCfXf‰ofGf<,Æ,¢,¤,Å,·,ËB

,Æ,¢,¤,±,Æ,ÍAfCfGfX,Íf[f}’é‘,l—l“y,Å Š^“®,μ Ž€,ñ,Å,¢

,Á,½B,^¾,©,çAf[f}’é‘,ÅfLfŠfXfg³,IMŽÒ,a,C,ñ,C,ñ‘,!,Ä,¢,

@f[f}l,l@³,Í,ç,ñ,È,^¾,Á,½,CBf[f}l,l‘½_<³,Å,·BŠi{“I,ÉfMfŠfVfA,Ì_X,Æ“-,JB—l“y,“Šg‘å,·,é,É,Ä,ê,Ä,¢,é,¢,é,È‘n•û,Ì_X,af[f},É“,í,èA,©,ê,ç,Í“K“-,É,¢,é,¢,é,È—l,δM,J,Ä,¢,éB
‘½—“o, l@³,É‘l,μ,Ä,à“Á,É‘e^3,·,é,±,Æ,à,È,¢,Å,·B

f†f_f,,l,l@³,Íf†f_f,,³,^¾,Á,½,ËB^ê_<³,Å“-Žz, l¢ŠE,Å,Í“ÁŽê,ÈM[^]Å,Å,μ,½,ªA,»,ê,δ‘e^3,·,é,æ,¤,È,±,Æ,Íf[f}
,Í,μ,Ü,!,ñB

,μ,©,μAÅ,Íd,¢Bf†f_f,,l,ÉdÅ,Í,©,“,Ü,·B,^¾,©,çf†f_f,,l,½,ç,JŠ^,Í“-‘R[^]ê,μ,

¢ŽåffVfA,loŒ»,δ‘Ò,ç-],P<CŽ,ç,“,È,A,Ä,é,ñ,^¾B,±,±,ÍA,ç,å,Ä,ÆŠo,!,Ä,“,¢,Ä,

@“-Žz, l¢†f_f,,³,Í—¥—@Žå, ,¾,Æ,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·B

ŠÈ‘P,ÉŒ¾,!,ÍA@³,É,ÍŒ Ž®,ä‰oú—¥,ª, ,é,í,“,Å,·,ªA,»,¤,¢,¤‰oú—¥,ðŒμ,μ,Žç,Á,Ä,¢,±,¤,Æ,¢,¤l,|•û,Å,·B
f,[fZ,Ñ‰oú—È—^f†f_f,,l,½,ç,É,Í,¢,é,¢,é,È‰oú—¥,ª, ,Á,½,í,“,Å,·B

@³ä, l‰oú—¥,Æ,¢,Á,Ä,àA;,l,í,ê,í,ê,É,Í,í,©,è,É,

fvfŠf“fg,ÉV•[·]LŽ-,δÚ,!,Ä, ,è,Ü,·,©,çA,ç,å,Á,ÆŒ®,Ä‰oº,ª,¢B;,Å,àf†f_f,,³,IMŽÒ,Í¢ŠE’†,É,¢

,é,í,“,Å,·,ªAf†f_f,,l,ª,Á,½,ª,¢CfXf‰ofGf<B,»,l“sŽsfCfFf<ftfŒf€,É“hŒ

,Å,·BŒ»Ý,Å,àf†f_f,,³“k,¤‰oú—¥,ð‘êŠŒœ—½Žç,Á,Ä,¢,é—lŽq,ª,æ,

@

u, ,éÓAŒË, ð, ±, Ä, ±, Ä, Æ, ½, ½,
,çAu, ,È, ½, Íf†f_f,,l,J,á,È,ç,Ä,µ,å,çv,Æ• ,
@,»,ç,ç,|,ÍA,±,Í“ú,ÍFVfffofbfBf†f_f,,³,Í“À‘§,Í“ú,¾,Ä,½B%oÍ,ð,Æ,à,·í,Æ,ð,µ,Ä,Í,ç,¬,È,ç,Æ,³,êA’†ç
,Íf†f_f,,l,½,ç,Í”ñf†f_f,,³“k,É—S,ñ,Ä%oÍ,ð,Ä,¬,Ä,à,ç,Ä,Ä,ç,½A,Æ,ç
,çb,ðZv,çø,µ,½BŒ»“ä,Ä,ÍA“d<C,â@SB,ðì“®,³,¹,é,±,Æ,ª,ç,¬,È,ç,Æ,³,êA%oú—¥,ðZç,éIX,Íà—j“ú,Í—é,©,ç“y—j,Í—
é,É,©,¬A,»,ê,É—P,·,és^×,ð”ð,¬,éB
@ZÖ,Í%o“],Í,à,ç,ë,ñ,¾,BcŒä—çv

@^À‘§“ú,É,ÍZdZ—,ð,µ,Ä,Í,ç,¬,È,ç,Æ,ç,ç%oú—¥,ª, ,é,ñ,¾,ËB
,±,Í,¬,Í, ,³,ñAZC®•ª,Í•”%o®,ÍfKfX,aVf...[fVf...[~R,ê,Ä,ç,é,ñ,¾BZC®•ª,Å,ç,å,ç,Ä,Æð,ð•Ä,ß,ê,Í,ç,ç,Í,ÉA%oú—
¥”j,è,É,È,é,©,ç,Ä,«,È,ç,ÆŒ³/₄,ç,ñ,¾,ËB,¾,©,çA%oú—¥,ÉSÖŒW,È,ç“ú—{l,IV•·LZÖ,Éð,ð•Ä,ß,Ä,
^,½B
,±,êAŒ»“ä,Í,±,Æ,Ä,·,æB,Q,O,O,O”N‘O,Í%oú—¥dZ<,Í,Ç,ê,Ù,Ç,¾,Ä,½,Ä,µ,å,ç,ËB
,È,°A%oú—¥,ðZç,ç,È,¬,ê,Í,È,ç,È,ç,©,Æ,ç,ç,ÆA_,Æ,Í—ñ‘®,¾,©,ç,ËB,â,Ô,Ä,½,ç~í,ê,È,ç,Í,Å,·B“V‘,É,ç,¬,È,çB

×,©,ç%oú—¥,ª,½,
—á,|,ÍA,±,Í“À‘§“ú,É%oÍ,ð,Æ,à,µ,Ä,Í,ç,¬,È,ç,Æ,È,é,Æ”Ñ,Í,Ç,ç,â,Ä,Ä,Ä,
,Æ,É,È,éB^À‘§“ú,Ä,àHZ—,Í,µ,½,ç,Ä,µ,åBV•·LZ—,É,à, ,Ä,½,¬,ê,ÇA%oú—¥
,É,Í”²,¬“¹,à, ,Ä,AAZC®•ª,Áì,Æ,ð,µ,È,¬,ê,Í,ç,ç,ñ,Ä,·B,¾,©,çA<Z,ç,Í,¬,à,Ál,ðŒÙ,Ä,Ä%oÍ,ðZg,Ä,Ä—ç—
,³,¹,ÄAŽC®•ª,ÍH,×,é,¾,¬,Ä,ç,çB,±,é,È,ç%oú—¥,ðZç,è,È,ª,çA—ž•,Ä,«,Ù,·B
<æ,É•n—Rl,Í,Ç,ç,çB•n,µ,¬,ê,Í,Ç,ñ,ÈZdZ—,Ä,à,µ,ÄA¶,«,Ä,ç,©,È,¬,ê,Í,È,ç,È,ç
,æ,ËB^À‘§“ú,É<aZ,ç,ÉŒÙ,í,ê,ÄA,©,ê,ç,Í,½,ß,É“,

@,Q,O,O,O”N‘O,Íf†f_f,,lZD%oí,É—ß,è,Ù,·,ªA%oú—¥dZ<,Í—¥—@Zå~,ªZå—¬,¾,Ä,½B
—¥—@Zå~,ªŒµ,µ,Œ³/₄,í,ê,é,ÍŒ³/₄,í,ê,é,Ù,ÇAŒ<%oÊ,Æ,µ,Ä•n—Rl,Í,Ç,ñ,Ç,ñ~í,ê,È,
<æ’[,ÉŒ³/₄,|,Í~í,ê,é,Í,Í~ä,Ä%oú—¥,ðZç,é,±,Æ,Í,Å,«,él,¾,¬,É,È,éB
,»,µ,ÄAf[f},ÍZx”z%o°,ÅdÅ,ð,©,¬,ç,ê,ÄA•n,µ,çIX,ª,Ç,ñ,Ç,ñ~|,Ä,ç,½,Í,“—Zž,ÍfpfŒfXf fi’n•û,Å,·B
ZC®•ª,Í~í,ê,È,çA,Æ,ç,ç,z,ç,ä,Í,æ,ç,È,à,Í,©Z,,É,Í‘z‘œ,Å,«,È,ç,¬,ê,ÇA”ñí,Éâ—]“I,È<C•ª,¾,Ä,½,ñ,J,á,È,ç,©,ÈB

@,±,ç,ç,ç,ç,µ,Í’†,ÅAfCfGfX,“oê,µ,Ä—O,ÍZxZ,ð“¾,éB
fCfGfX,ç%o½,ðŒ³/₄,Ä,½,©A,à,ç,ç,z‘œ,Ä,
,©,ê,ÍAÄ,à•n,µ,çIXA%oú—¥,ð”j,ç,È,¬,ê,ÍJ,«,Ä,ç,¬,È,çIXA,»,Í×,É••Ê,³,ê<s,º,ç,ê,½lX,Í—§ê,È—
§,Ä,Ä~ä,ð,·,é,ñ,Ä,·,ËB
ç%oú—¥,È,ñ,Ä<C,É,µ,È,
—á,|,Í”,,t•wB”,,t,È,Ç,Í%oú—¥”j,è,Í,³,ç,½,é,à,Í,Å,·,ªAŒb,Ù,ê,È,ç—«,ªÅŒä,É,½,Ç,è’...,
,Æ,ð,µ,ÄJ,«,Ä,ç,
,»,ç,ç,ç,ç,ÉfCfGfX,Íu, ,È,½,Í~í,ê,év,ÆŒ³/₄,çB
,»,ç,ç,ç,ç,çAf%ofC•a,ÍS³ZÒBfnf“fZf“Z•a,Å,·,ËB“ú—{,Å,à,Ä,çÅ<ß,Ù,Ä%oÈŠw“I,Èa’,Í,È,ç•ÍŒ©,ª,·,
,Ä,«,½•a<C,Å,·Bf†f_f,,³,Å,ÍA•a<C,»,Í,à,Í,ç,ç,Í”±,Æ,µ,Äl,|,ç,ê,Ä,ç,½B,¾,©,çA,D,C,·•Ê,³,ê,Ä,ç
,Ù,µ,½BfCfGfX,Í,»,ñ,Èl,Í,Æ,±,é,É,à,Ç,ñ,Ç,ñ“ü,Ä,Ä,ç,
,±,ê,ªA,Ç,ê,¾,¬,ÖŒ,“I,¾,Ä,½,©AIX,Í,ð—h,³,Ô,Ä,½,©A‘z‘œ—Í,ð“

,QfCfGfX, lJ ŠU

@, ³, ÄAfCfGfX, » , lI, l, ±, AE, Ä, ·, ^aA•ê, ^af} fŠfAA, ±, ê, Í, Y, n, È'm, Ä, Ä, ç, é, ÈB¹•êf} fŠfA, AE, ç, i, ê, éB•fe, l'm, Ä, Ä, ç, é, ©, ÈBf¹fZft, Ä, ·B, ±, lI, l'åH, ³, nB

•ff¹fZftA•êf} fŠfAA, Ä, ·, ß, lŠE'P, È, n, Ä, ·, ^aA, ±, ê, ^aÓ ŠO, AE, ä, ä, ±, µ, çB

, l, i, ÉfLfŠfXfg³, l³¹, ^aSm—§, ·, é'†, ÄAf} fŠfA, l'—, l, Ü, Ü, Äg, ², à, Ä, ÄfCfGfX, ^aJ, Ü, ê, ¹/2, AE, ç, o, ±

, AE, É, È, è, Ü, ·BŒ» ZÀ, É, Í, » , n, È, ±, AE, Í, , è“³/4, È, ç, l, ÄA¹ê' l, ±, l¹b, l‰¹/2, ð¹Ó—j, µ, Ä, ç, é, l, ©, AEŒ³/4, o, ±, AE, É, È, éB

@, Ç, o, à, ±, o, ç, o, ±, AE, ç, µ, çBf} fŠfA, AEf¹fZft, lY—nŽO“—žm, Ä, µ, ¹/2B, AE, ±, è, ^aY—n'†, Éf}

fŠfA, l, l, •, ^a, Ç, n, Ç, n'å, «,

f¹fZft, AE, µ, Ä, lÍg, ÉŠo, |, ^a, È, çB•s¹/2, È—, ³/4A, AEY—n”jŠü, ð, µ, Ä, à'N, É, à”n“i, ³, ê, Ü, ¹, nB¥—

n”jŠü, ·, é, l, ^a•'È, ³/4, è, o, ÈB¹“¹, ð“Ç, p, AEA, ä, l, èf¹fZft, l'Y, n, ³/4, ç, µ, çB, µ, ©, µAŒ¹Ç, » , n, Èf} fŠfA, ðŽó, —“ü, ê, ÄŒ¹Y, µ, ¹/2, n, ³/4, ÈB, » , µ, ÄA¹J, Ü, ê, ¹/2, l, ^afCfGfX, Ä, ·B

f} fŠfA, AEf¹fZft, l, » , lŒä‰¹l, àžq¹Y, ð, Ä,

, ÄAfCfGfX, lœJ, lŽ—i, AE, ç, o, l, l¹o, l, Y, n, È, ^am, Ä, Ä, ç, ¹/2, æ, o, Ä, ·B

, l, i, ÉfCfGfX, ^a•z³S¹“¹®, ð, l, J, B, ÄAŽ¹•^a, lŒl¹•¹/2, l¹B,

iŽY, éB, » , l—iŽY, lŒ³/4—t, ^au, , è, lAf} fŠfA, lŽqfCfGfX, J, á, È, ç, ©Iv, AEŒ³/4, o, n, ³/4, ÈB'NX, lŽq'NX, AE, ç

, o, l, ^a“—žzl, ðŒÄ, Ô, AE, «, l¹é”È“l, ÈŒ³/4, ç•û, È, l, Ä, ·, ^aA•'È, l•fe, l—¹/4, È¹±, —, Ä—

{l, l—¹/4, ðŒÄ, ÔB, ³/4, ©, çAfCfGfX, È, çuf¹fZft, lŽqfCfGfXv, AEŒÄ, Ô, ×, «, È, n, Ä, ·Buf} fŠfA, lŽqfCfGfXv, AE, ç, o, ±

, AE, l1, “O, l•é, l, á, n, l¹f} fŠfA, ³/4, ^ae•f, l'N, ©, í, ©, ç, n, J, á, È, ç, ©vu•s¹, lŽqv, AEŒ³/4, o¹Ó—j, È, n, Ä, ·B

, ³/4, ©, çA, ©, è, lœJ, l'—s, Ä, à, È, n, Ä, à, È, ©, Á, ¹/2BfCfGfXŽ¹g, à, » , l, ±, AE, ð¹m, Ä, Ä, ç, ¹/2, Ä, µ, å, oB

fCfGfXŽ¹g, ^a%oú—Y, ©, ç, l, Y, ³/4, µ, ¹/2J, Ü, è•û, ð, µ, Ä, ç, ¹/2, n, Ä, µ, å, oB, , ç, èAâ—], l'†, ÄJ, «, Ä, ç, ©, ‘, é, ð“³/4, È, çlX, l‘o, È, ¹/2, Ä, Ä¹~, ç, ðà,

•êf} fŠfA, l'—%où“ÙA, AE, ç, oŒ³/4—t, É, l, » , n, È”wŒi, ^a%oB, ³, ê, Ä, ç, é, l, Ä, ·B

@fCfGfX, lŽá, çZž¹ä, l, ±, AE, l, i, ©, è, Ü, ¹, nB¹•¹•^af¹fZft, AE¹ê, È¹åH, ð, µ, Ä, ç, ¹/2, n, Ä, µ, å, oB

, R, Ol, ð, ±, |, ¹/2, , ¹/2, è, ©, ç“È”@•z³S¹“¹®, ðSJŽn, µ, Ü, ·B

”Ó, µ, Ä—~, µ, ç, Ä, ·, ^aAfCfGfX, l, ,

@žå¹, É•l, Ä, Ä, ç, éf¹f¹—, ^a%, ð‰oùŠv, µ, æ, o, AEl, |, Ä, ç, ¹/2, l, ³/4, AEŽv, ç, Ü, ·B

@æ, Ù, ÇG, ê, ¹/2, ±, AE, lŒJ, è•Ô, µ, É, È, è, Ü, ·, ^aAfCfGfX, l¹³, |, l“Á’Y, ð, à, o¹ê“xŒ©, Ä, ‘, «, Ü, µ, å, oB

, Ü, , Af¹f¹—, ^a%, l‰oú—Y, ð—³Z¹, µ, Ü, ·B

Ä, àŠí—{“I, È‰oú—Y, l’À¹“§“ú, à•¹•¹C, Ä—³Z¹, ·, éB, ±, n, ÈŒ³/4—t, ^aŽc, Ä, Ä, ç

, Ü, ·Bu¹À¹“§“ú, ^alŠO, l, ¹/2, B, É, , è, l, Ä, , ÄAIŠO, ^aÀ¹“§“ú, l, ¹/2, B, É, , è, l, Ä, l, È, çv

@ŽY, ÉAŠK‰oA•n•x, l·, ð, ±, |, ¹/2_, l¹o, ðà, ç, ¹/2, AEŒ³/4, i, ê, Ü, ·B

g^{•a}, ^a“Ú, µ, , Ä, àA•n-R, Ä, àA‰oú—Y, ðŽç, è, È, , Ä, à_, l¹o, µ¹~, Ä, Ä,

—L—¹/4, ÈfCfGfX, lŒ³/4—t, ÄAu¹àŽ, i, ^a“V¹, É, l, ç, é, l, lAf‰ofNf¹—, ^aj, lŒŠ, ð¹È, è, æ, è, ^a“i, µ, çv, AE, ç

fL^fXf^g,³¹⁰[—]
,¤,Ì,^a, ,éB,Ô,Á,^ç,á, —,ÄŒ^{3/4},|,ÎA^àŽ,^ç,Í[~],í,ê,È,¢A,AŒŒ^{3/4},Á,Ä,¢,éB,¶,á, A'N,^a[~],í,ê,é,©A,»,ê,ÍŒN,^{1/2},ç[•]n—
Rl,^{3/4},æBfCfGfX,Í,»,¤,¢,Á,Ä,¢,é,ñ,Å,µ,å,¤B

f†f_f_„³,Ìf,,fnfEfF,Ì_,ÍŒµ,µ,¢“{,è,Ì_,Å,·BfAf_f€,ÆfCf”,^a mŒb,ÌŽÀ,δH,×,^{1/2},çA“{,Á,ÄŠy‰
‰Ç•ú,Å,µ,åAfmfA^ÈŠO,Ìl—P,Í[~]...,ÅŠFŽE,µAfofxf<,Ì“f,à”j‰ó,µ,Äl—P,δŽl•û,É”ò,Î,µ,ÄŒ^{3/4}—t,δ—
,µ,^{1/2}B“{,Á,Ä”±,δ—[^],!,é•l,¢_,Å,·B
,±,Ì_,Ì‰oδŽB,δfCfGfX,Í•I,¹,Ä,µ,Ü,Á,^{1/2}B
“{,è,Ì_,©,ç[•]¤,Ì_,Ö•I,¹,éB
_,^a,í,ê,í,ê,δ[^]¤,µ,Å,
u‰E,Ì—j,δ‘Å,^{1/2},ê,^{1/2},çA¶,Ì—j,à[~],µo,¹v,Æ,¢,¤B“δ,Ì“G,δ[^]¤,¹,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,·,ëB
,±,ÌŒ^{3/4}—t,ÍA,·,²,
,±,Ìⁿæ,Ì““,Í‰^{1/2},©,Æ,¢,¤,ÆAfnf“f€f‰fr—@“T“È—^Au—Ú,É,Í—Ú,δAŽ•,É,ÍŽ•,δv,Å,µ,åB,^{3/4},©,çA‰E,Ì—j,δ‰f
,ç,ê,^{1/2},ç‰f,è•Ô,·,Ì,¹íZ—B,Æ,±,ë,^aAfCfGfX,Í¶,à‰f,ç,¹,Ä,â,êA,Æ,¢,¤BíZ—,δ,D,Á,
lŠO,ÍA,»,ê,Ü,Å,[~],Á,^{1/2},±,Æ,à,È,©,Á,^{1/2}íZ—,δfofb,Æ,D,Á,,è•Ô,³,ê,^{1/2},Æ,«,ÉA,»,Ì,à,Ì,É[~],Žä,©,ê,é,Æ,¢,¤,±
,Æ,^a, ,è,Ü,·B
fCfGfX,Í,Ü,³,É,»,ê,δ,â,è‘±, —,^{1/2}B

@,»,ê,©,çA^fCfGfX,Ía—@,ÅuŽž,Í—ž,^ç,^{1/2}A_,Ì[‘],Í^ß,Å,¢,^{1/2}v,Æ,¢,¤B
,±,Ìu_,Ì[‘]v,ÍufCfXf‰fGf^v,Æ”
fCfGfX,Ì^b,δ[•],¢,^{1/2}IX,Ì[‘]†,É,ÍufCfXf‰fGf^v,Æ,¢,¤Œ^{3/4}—t,©,ç‰^ßŽ,É‰oh,|,½f†f_f,,l,Ì[‘]%œÆfCfXf
‰fGf‰œ[‘],δ[‘]A[‘]z,·,éIX,à,¢,^{1/2},ñ,^{3/4}B,»,Ìl,^{1/2},^ç,ÍAfCfGfX,Í@[<]³%œÆ,ÌŽp,δŽØ,è,Äf{f},©,ç,Ì“Æ—
§Af†f_f,,l[‘]%œÆ,Ì[‘]œS[‘],δŒv‰œ,µ,Å,¢,é,Ì,^{3/4}A,ÆŠú‘Ø,µ,Ü,µ,^{1/2}B
@[<]³“I,È[~],¢,ÆŽj“I,È[~],¢AŽü[‘]Í,Ìl,^{1/2},^ç,ÍfCfGfX,É,¢,ë,¢,é,ÈŠú‘Ø,δŽ,Å,æ,¤,É,è,Ü,·B

@fCfGfX,Ì^S“®,Å”δ, —,Ä’È,ê,È,¢,Ì,^aŠiØ,Å,·B
Œ^{3/4}—t,É,æ,é•z³,Æ“—Žž,ÉfCfGfX,Ís,
¤[‘]Ì[‘]I,É,Í[‘]a—ü,µ,^a^{1/2},¢B,Ç,ñ,Ç,ñ•a^cC,δŽj,µ,Å,¢,
,©,Ì[‘]¬,ÉŒ»,ê,é,ÆIX,^a•al,δ,C,ñ,Ç,ñ[~]A,ê,Ä,«,Ä,²,Å,^{1/2}•Ô,·, ,è,³,Ü,^a¹,É,Ì[‘],©,ê,Å,¢,Ü,·B

—{“-,ÉŠiØ,δ^cN,±,µ,^{1/2},Ì,Å,µ,å,¤,©B
,±,±,ÌŽö^cÆ,Æ,µ,Å,ÍG,ê,É,
ŽG’k,Æ,µ,Å[•],¢,Å,

fCfGfX,Ì^a—ü,µ,É,ÍA—Ó—Ú,Ìl,Ì—Ú,δŠJ,¢,^{1/2},èAŒŒ,Ì“¹,Å[~]ê,µ,þ—«,δŽj,µ,^{1/2},èA,¢,ë,¢
,ë, ,é,Ì,^aÅ,·,^aA,·,“I,ÈŽ^{3/4}Š³,Æl,|,ç,ê,é,à,Ì,à,©,È,è, ,éB,»,±,ÖfCfGfX,^aŒ»,ê,ÄA[‘]“—ìaP,¢
,δ,·,éB,»,µ,ÄAŒ[‘]D, ,é,à,Ì,Ì,æ,¤,Éu, ,È,^{1/2},ÍŽj,Å,^{1/2}A[‘]ää•v,^{3/4},æv,ÆŒ^{3/4},í,ê,^{1/2},ç,»,ê,^{3/4}, —,Åfzf“fg,ÉŽj,Å,Ä,µ,Ü,¤A,»,¤
,¢,¤,±,Æ,Í, ,è,»,¤,Å,µ,åB[•]a,ÍC,©,çA,Æ,¢,¤[•]”^a,ëB

,à,¤[~]ê,Å,Í,¢,í,ä,éŽè,©,‘,µ,Æ,¢,¤,å,Å,·Bfnf“fhfpf[,ÆŒŒ^{3/4},¤,Ì,©,ÈB
,Ý,ñ,È,Ím,ç,È,¢,ÆŽv,¤, —,ç‰œ^{1/2}”N,©‘O,É,‘EfqfJf<,³,ñ,Æ,¢,¤l,^a,¢,½Bj,à,¢,é,ÆŽv,¤, —,çB,±,Ìl,Ì[‘]È,ÌfTf‰fŠ[f]
f“,È,ñ,^{3/4}, —,ç^ca^cC,Ìl,Ì³•”,ÉŽè,δ,©,‘,·,ÆA,»,Ì^aC,äŽj,Å,Ä,µ,Ü,¤,Ì,Å—L^{—1/4},É,È,Å,^{1/2}B,^{1/2},µ,©A‰f
‰œ,Ü,Åì,ç,ê,^{1/2},ÆŽv,¤,æB

fL^fXf^g^c,¹[□][—][§]
,[’]É,^³,^ñ—{l,É,à%o½,Å•a•C,^aŽ_j,é,©,í,©,ç,È,¢B,¬,ÇAŽ©•^a,^aŽè,©,[’],μ,ð,[·],é,ÆŽ_j,Á,Ä,μ,U,¤,Ì,ÅA, ,_ç,±,_ç,©,ç^ø,Á’¢
,è,^¾,±,Å,μ,^½B

,Ü,é,ÉA,»,¤,¢,¤—^ü,Å,Í,í,©,ç,È,¢fpf[,δŽ,A,^½l,^a,¢,é,ñ,^¾,ËB
‘O,É[†],ß,Ä,¢,^½ŠwZ,Å,à,¢
,Ü,μ,^½B¶“k,Å,ËB’j,ÌŽq,È,ñ,^¾,¬,ÇA,©,ê,Í,[·],Æ,È,μ,¢•’È,ÌŽq,È,ñ,^¾,¬,ÇA[’]Ì[’]ç,ÌŽžŠÔ,^aI,í,é,Æ,©,ê,Ì[’]O,És—
ñ,^a,Å,«,é,ÌBfNf
‰ofXffCf^g,^a,ÉA‡”Ô,δ[’]O,Á,Ä,©,ê,ÉŽè,©,[’],μ,μ,Ä,à,ç,¤,í,[—],Å, ·BŒ[·],Æ,©A[’]¾ŒØ,Æ,©A,»,¤,[·],é,Æ[’]Ø“[÷]’É,^aŽ_j,Á,Ä,[·],
,Å,«,èB[’]Ì[—]Í,[’]œ, ·,é,ñ,^¾,Å,ÄBæ¶,à,μ,U,μ,¤,©A,È,ñ,Ä,¢,í,ê,U,μ,^½BŽ,,Í‰o“—¶,μ,U,μ,^½,BŠw”N,Å,Í—
L^½l,Å,μ,^½B
fzf“fg,ÉŽ_j,é,Ì,©,Ç,¤,©’m,è,U,^¹,ñ,¤B,^½,^¾A,â,Å,Ä,à,ç,Á,^½l,^aŽ_j,Á,^½AfxfbfLf^š,μ,^½,Æš’,¶,é,Æ,¢,¤,±,Æ,Å, ·B
fCfGfX,Í“Á,É,»,¤,¢,¤fpf[,δ[’]½,Ž,A,Ä,¢,^½,Ì,©,à,μ,ê,È,¢B

fCfGfX,ÌSiÔ,Ìb,Í[’],É,^½,
,È,©,É,Ír“,—³Œm,È,à,Ì,à[’]½,
fCfGfX,Ìà[’],É”çl,^aW,U,Á,^½B,±,Ì[’]®O,ÉfCfGfX,ÌíŽq,^aHŽ—
,δ”z,éBfpf“,^a,T,Ä,Æ[·],^a,Q”ö,μ,©,È,©,Á,^½,Ì,É[’]S[’]ö,É”z,ê,^½,Æ,¢,¤bB,»,ê,©,çAf‰ofUf,Æ,¢
,¤Žá,¢fCfGfX,ÌŽxŽŽÔ,^aŽ€,ñ,Å,[·],^aAfCfGfX,^aŽ€ä“úŒä,Éuf‰ofUfo,Ä,±,¢v,ÆŒÄ,Ñ,©,[—],é,ÆAf
‰ofUf,^a¶,«•Ô,Á,Ä[·]œŒš,©,ço,Ä,«,^½,Æ,©,ËB
,±,ê,ç,ÍfCfGfX,ÌŽ€äA“à,Æ,μ,Ä[’]nì,^³,ê,^½,ÆŽv,í,ê,U,[·],^aAflfCf“fg,Í,±
,ñ,Èr“,—³Œm,È~b,Å,à,»,Ì[—]Žž,ÌIX,^aufCfGfX,È,ç, ,è,|,é~b,^¾v,ÆŽó,[—],Æ,B,^½,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,μ,¤,¤B

@•a—ü,μ,Ìb,Ì[’]†,É[’]C,É,È,é,Ì,^aê,Å, ,è,U, ·B
fQf‰ofTl,Ì•al,δŽ_j, ·b,Å, ·B,±,Ìl,Í[’]a,^a,[·],©,μ,
,é,ñ,Å, ·BŽü,è,Ìl,^a,[·],©,[’],Å”,^a,[·],è, ·,é,ñ,Å,[·],^a, ·,®,É[’]ø,¤,ç,¬,Å,ÄAÌ,ÅŽ©•^a,Ìg[’]Ì,δ,Å,[—],½,è, ·,éB
fCfGfX,ÍfQf‰ofTl,Ì[’]y[’]n,É,â,Å,Ä[’],Ä,©,ê,Éœß,¢,Ä,¢,é[’]—[—]Ì,δ[’]PŽU,^³,^¹,é,ñ,Å,[·],^aA,±,ÌŽž,É[’]—[—]
Ì,É[’]—½,δq,Ë,ÉB, ·,é,Æ[’]—[—]Ì,^³—½æ,é,ñ,Å,[·],^aA,»,Ì[’]—½,^aufŒfMfIf“vBfKff‰,Æ,^½,^½,©,Á,^½%öb,É,¢,^½,ËB
ŽÀ,ÍfŒfMfIf“,Æ,¢,¤,Ì,Íf[f}ŒR[’]c,Ì,±,Æ,Å, ·B
,»¤, ·,é,ÆA,±,ê,ÍP,È,é•a—ü,μ,Ìb,δ,±,|,½%o½,©,δ[’]ÄŽ_j,μ,Ä,¢,é,æ,¤,¾,ËBfCfGfX,Ì[’]Œê,Íf[f}
,ÌŽx”z,Æ[’]—³SÖŒW,Å,Í,È,©,Á,^½,μAfCfGfX,^aŽ_j,μ,^½,Æ,¢,¤,½,
,¤,±,Æ,U,ÅŽ,,,È,ñ,©,Ìl,|,Å,μ,U,¢,Ü, ·B

@~b,^a,^¾,¢,Ô, ,ç,±,ç,É”ò,Ñ,U,μ,^½,^aAfCfGfX,Íf[’]f_f,[<]^³,Ì‰oδŽß,μ,È,[·],μ,Æ•a—
ü,μ,É,æ,Å,ÄA’Z,¢ŠÔ,É,à,Ì, ·,²,•]”»,É,È,é,U, ·B[’]½, ,ÌŽxŽŽÔ,δW,ß,éB,©,ê,Ìs,
fCfGfX,±,»,^a’O,ç[’]—],ñ,Å,¢,½[~]¢Žå,^¾,Æl,|,élX,à[’]½,

fCfGfX,^a’]”»,É,È,é,ÆAf[’]f_f,[<]^³,ÌŽw“±ŽØ,^½,ç,Í[’]È”,
,»¤,ÅA,È,ñ,Æ,©fCfGfX,ÌM—p,δ—Ž,Æ,μ,ÄA, ,í,æ,
f[’]f_f,[<]^³,ÌŽw“±ŽØ,^½,ç,ÌŽè‰oAfXfpfC,^½,çA,^afCfGfX,Ìg[’]Ó,É, ,ç,í,ê,Å,©,ê,ÌŒ^¾“®,δ’T,Á,^½,è,¢,ë,¢
,é,Èä©,δ,©,[—],é,æ,¤,É,È,é,ñ,Å, ·,ËB

@^¹,Éš

fLfŠfXfg^a, Í□—§ , ,éŽž», ÍfXfpfC~A’†, ^afCfGfX, Í‘O, É^el, Í—, ð~A, ê, Ä, «, Ü, ·B, », Í—, Íš
·È, ^aç^{1/4}, Í’j«, AEŠÖŒW, ðŒ<, ñ, Å, ç, ½, ñ, Å, ·B
·±, ê, Í“—‘R‰oú—¥á”½, ÅAŽŒY, É, ,½, è, Ü, ·B
·Á, Ä, Ý, ñ, È, Él, ð, Ô, Ä, —, ç, ê, ÄZE, ³, ê, éE^a, Ü, è, Å, µ, ½B
·ÅA, ©, ê, ç, ÍfCfGfX, ÉŒü, ©, Á, ÄŒ^{3/4}, ðBfCfGfX, æA, ,È, ½, Í, ±, Í—, ð, Ç, œ, ·é, Í, ©B
·±, ê, ÍAä©, Å, ·B
fCfGfX, ^aà, µA, ±, Í—, ð<-, ·, ×, «, ^{3/4}, AEŒ^{3/4}, |, ÍA‰oú—¥”j, è, ð“°X, AE”F, ß, é, ±, AE, É, È, éB
·Á, Ä, à“ú—{, Å, àí‘O, ^{3/4}, Á, ½, ç”AE, É, ,½, és×, Å, ·B, ±, ê, ð”F, ß, ½, çfCfGfX, Í—³—@ŽØ, ^{3/4}, AE
·à, µAu<-, ³, È, çAŽŒY, ^{3/4}v, AE, ç, |, ÍAfCfGfX, ÍŒ^{3/4}“®, É—ä, Ü, ³, ê, Ä, «, ^{1/2}‘½,
·AE, É, È, é, í, —, Å, ·Bu, È, ñ, ^{3/4}AfCfGfX, ÍŒü, Å, Í, í, ê, í, ê, Í—•û, Ý, ^{1/2}, ç, ÉŒ^{3/4}, Á, Ä, ç, é, ^aA, ç, ‘, AE, È, ê, Í‰oú—¥, ðŽç, ê, AE, ç
·œ, ñ, ^{3/4}, Èv, AEŽv, í, ê, é, Ä, µ, åB
·Ç, i, ç, É, µ, Ä, àfCfGfX, ÍM—p, ð—Ž, AE, ·, ±, AE, É, È, éBI—
·±, ÍžžfCfGfX, Í, ±, œŒ^{3/4}, œB
u, ,È, ½’B, Í, È, ©, Å, Ü, Åß, ð”AE, µ, ½, ±, AE, ^aÈ, ç, à, Í, ^aç, ê, Í, ±, Í—, ð, Ô, ç, È, ³, çB
—, Ížü, è, É, ÍÍ, ðŽ, Á, ^{1/2}j, ^{1/2}i, ^aAŒ, ,i, ŽE, µ, Ä, ä, œ, AEŽæ, èÍ, ñ, Å, ç, ^{1/2}, ñ, ^{3/4}B, ^{3/4}, —, ÇAfCfGfX, ÍŒ^{3/4}—t, ð•·, ç
·ÄA^elA, Ü, ^{1/2}el, AEÍ, ð’u, ç, Ä, », ±, ©, ç—§, i, Ž, Á, Ä, ç, Ä, ^{1/2}B
ŽÀ, ÉŠ“®“I, Èê—È, Ä, ·B, µ, ©, àAfCfGfX, Í<@’m, à““, í, Á, Ä,
·qŠÍ“I, É‰oú—¥, ^aç, µ, ç, ©, Ç, œ, ©, È, ñ, Ä, ±, AE, ÍfCfGfX, ÍŒ^{3/4}, í, È, ç
·Í, Å, ·, ÈB, ,È, ½, Í, Ç, œ, È, Í, ©B, », ê, ð, Ý, ñ, È, É“È, «, Ä, —, ^{1/2}B
@, à, œ, ê, Ää©, ÍbB
·â, Í, èfXfpfC~A’†, ^afCfGfX, ÉŽç, —, µ, Ü, ·B
ufCfGfX, æA, í, ê, í, ê, Íf[f]’é‘, ÉÅ, ð”[, ß, é, ×, «, ©, Ç, œ, ©B
fCfGfX, Í•n, µ, çŽØ, Í—•û, Å, ·BŽû, ß, È,
·ÆŒ^{3/4}, |, Í•n, µ, çŽØ’B, Íši, Ô, Å, µ, å, œ, ^aA, », ê, Íf[f]’é‘, É‘Í, ·, é^{3/4}, ç, ©, È”^{1/2}ts×, É, È, è, Ü, ·B
·, è, çB
”[, ß, æ, AE, ç, |, ÍA, ä, Í, è, ±, ê, àfCfGfX, ç, µ, ,È, ç”
fCfGfX, ÍfRfCf“, ðŒ©, ¹, æA, AE, ç, Ä, ÄfRfCf“, ðŽè, ÉŽæ, èB, », µ, ÄAŽç, —, µ, ^{1/2}, à, Í, È<t, ÉŽç, —, èB, ±, ê, ÍN, ©, AE
·, ÍfRfCf“, É, Íc’é, ÍN‘œ, ^aÜ, è, Ä, ç, é, ñ, Å, ·, æB
fXfpfC, Í“š, |, Ü, ·BufJfGfTf<, ^{3/4}B
fCfGfX, ÍŒ^{3/4}, œ, ñ, ^{3/4}, ÈBufJfGfTf<, Í, à, Í, ÍfJfGfTf<, È•Ô, µ, È, ³, çB_, Í, à, Í, È•Ô, µ, È, ³, çB
·, å, ^aç, œ, Í, ±, œ, Í, AE, ç, œ, ‘O, ÉA, ‘‘O, ³, ñA, i, á, ñ, AE, _É‘Í, µ, Ä³, µ, çM^äÅ, ðŽ, Ä, Ä, ç, é, Í, ©, çB, », œ, ç
·, Å, ÄfCfGfX, Í<t, ÉfXfpfC, ð, â, è, ±, ß, Ä, ç, é, æ, œ, Å, ·B
@, ±, ñ, È, Ö, œ, ÉfCfGfX, Íf†f_f, „³Žw“±ŽØ, ^{1/2}, i, Í‘Ç, y, ðØ, è”², —, Ä, ç, «, Ü, ·B
·, µ, ©, µA, ©, ê, ^af†f_f, „³, Í, , è•û, ð”á”», , é, ^{3/4}, —, Å, È, A~çŽå, AE, µ, Ä, Í•]”, ^a, , , È, Ä, Ä,
f†f_f, „³, Í•ÛŽç“Í, ÈŽw“±ŽØ, ^{1/2}, i, Í‰o^{1/2}, ^a%o^{1/2}, Å, àfCfGfX, ð•ß, ç, |, ÄŒŒY, µ, æ, œ, AE, µ, Ü, ·BfCfGfX, É‘Í, , éfff}, à—
·, µ, Ä, ©, ê, Í•]”, ð—Ž, AE, ·B
·ÄŒä, ÍžžSú, É, ÍfCfGfX, Í“|, œœñ, è, È, ^aç•z³, µ, Ä, ç, Ü, ·B
·, Å, àA, Ä, ç, È•ß, ç, |, ç, ê, ÄÙ”», É, ©, —, ç, ê, é, ±, AE, É, È, è, Ü, ·B

±, ê, ÍAf<flfT“fXŠú, l‘‰œæ‰œEfŒfIfif<fhEf_Ef”fBf“f , lùÅŒä, l‘Ó Ž v, Å, · B
 ‘ß•ß, ³, ê, é‘O, l‘Ó AfCfGfX, l‘íŽq, ¹/₂, i, ÄHŽ-, ð, ·, éB, », l‘r’†, ÅAfCfGfX, l‘³/₄“úŽ,, l•ß, Ü, é, ³/₄, ë, o, ÄŒŒ³/₄, oB<Á, ç
 , ¹/₂’íŽq, ¹/₂, i, ^aA, |, ÁA, », ê, l‰œ½Œl, Å, ·, ©A, Ü, ³/₄, Ü, ³/₄A“|, °, ç, ê, Ü, ·, æA, ÄŒŒ³/₄, o, ñ, Å, ·, ^aAfCfGfX, lù, ±
 , l‘†, l‘el, ^aZ,,, ð— Ø, é, ³/₄, ë, o, Ä, Å, Ô, â,
 œ<Çf†f_-, ÄE, ç, o’íŽq, ^aAf†f_f, , ³Žw“±ŽÒ, ÉfCfGfX, l‰œB, êêŠ, ð-§, µ, ÄA, », lŒ‰œÈfCfGfX, l•ß, Ü, Á, ¹/₂, Ä, ³, ê, Ä, ç
 , Ü, · B

@f†f_f, , ³, l‰œú—¥, l‘j, Å, ¹/₂, ©, à, µ, ê, È, ç, —, ê, ÇAfCfGfX, l•Ê, É”Äß, ð”ÄE, µ, Ä, ç
 , é, í, —, Å, l, È, çB, Å, àAf†f_f, , ³Žw“±ŽÒ, ¹/₂, i, É, ÄE, Á, Ä, lŒfCfGfX, lÉD, «YŽè, É, ³, ¹, é, í, —, É, l, ç, ©, È, çB
 Y”ñ, ÄE, àŽE, µ, Ä, µ, Ü, ç, ¹/₂, ç, ñ, Å, · B, », ±, ÅAf[f]““Å, l, ÄE, ±, ë, É^ø, «“n, ·, ñ, Å, ·, ^af[f]““Å, àfCfGfX, ”ÄßŽÒ, Å, È, ç, ±
 , ÄE, l, ·, ®, l, ©, Á, ¹/₂, µf†f_f, , ³“k”-Žm, l“ç, é, ÉŽñ, ð“È, Áž, Y, ¹/₂,
 , µ, ©, µAf†f_f, , ³, lŽw“±ŽÒ, ¹/₂, i, lù, ±, l‘j, lŒf[f], É‘l, ·, é”¹/₂tŽÒ, ³/₄Af†f_f, , l‰œo, ÄŒŒ³/₄, Á, Ä, ç, év, ÄŒŒ³/₄, o, ñ, ³/₄, ÈB
 f[f]““Å, ÄE, µ, Ä, l‘¹/₂tŽÒ, ð, Ü, Á, Ä’u,

f[f], lŽœCY, lNŽ‰œÈ, Éá÷i, l, è, Å, —j, Å, · B
 ŽœCYŽú, lá÷, É, È, é‘O, Éf[f]•o, ©, ç, ç, ¹/₂, Ô, ç, ê, éŠµK, ^a, , Å, ¹/₂B
 fCfGfX, l•oŽm, ¹/₂, i, ©, ç•ž, ð, l, -Žæ, ç, ê—‡, É, ³, ê, éB‰œ£, ç, ê, ¹/₂, èR, ç, ê, ¹/₂, è, à, µ, ¹/₂, Å, µ, å, oB
 , “O, lŒf†f_f, , l‰œo, ³/₄, è, oA‰œo, È, çŠ¥, ð, ©, Ô, êA, ÄŒŒti, ç, l, çj, Å, Å,
 , ð, ©, Ô, ç, ³, ê, ¹/₂BŒt, lŒfgfQfgfQ, Å, ·, ©, ç, ÈA, », ê, ð“a, É, ©, Ô, ç, ³, ê, ÁŠz, ©, ç, lŒŒ, ^a, ³/₄, ç, ³/₄, ç—¬, ê, éB, ±, lê—È, ð•` , ç
 , ¹/₂@³%œ, l, ¹/₂,

ÅŒä, lNŽ‰œÈ, Å, · B, ±, êAŽè‘“, ð“B, Å\Ž‰œÈ, É‘Å, i•t, —, é, ñ, Å, ·, æB
 Žè, l, Ð, ç, ð‘Å, i•t, —, é, ÄEA‘lId, ÅŽè, ^a—ô, —, ÄŠO, ê, Ä, µ, Ü, o, ç, µ, çB, ³/₄, ©, ç³Šm, lÉŒ³/₄, o, ÄŽèŽñ, lœF, l, ÄE, ±
 , è, Å‘Å, i•t, —, ¹/₂B‘“, à‘“Zñ, Å, · B, », ê, ³/₄, —, Å, lŒx, !, «, ê, È, ç, l, ÅŽñ, ©, çŒ‘, É, ©, —, Å, lœF, l, ÄE, ±, è, Å, à‘B, ð‘Å, i•t, —, ¹/₂, ÄE, ç
 , o, b, à, , éB
 , ±, ñ, È, Ó, o, É, µ, Ä\Ž‰œÈ, lÉŠl, —, ¹/₂, , ÄEA•oŽm, ^a„, ÅS‘Y, l, », l, ð<}Š, ð, l, , µ, Äf f‡fC, Ä“È,
 œŒŒ, ^a, ³/₄, ç, ³/₄, ç—¬, ê, È, ^a, ç”“úŠÔA^ê’É, ÄE, l, Ç, lŠ‰œ, «, É^ê, µ, ß, ç, ê, È, ^a, çŽœñ, Å, ç,

fCfGfX, l, ±, ê, ÅŽœñ, Å, ç, Å, ¹/₂, l, Å, · B

@MŽÒ, ¹/₂, i, l, Ç, o, µ, Ä, ç, ¹/₂, l, ©B
 ŽÀ, l‘¹/₂,
[~]çŽå, ^a, ±, ñ, È, lÉŠÈ’P, lÉ•ß, Ü, Á, ÄA, µ, ©, àŽœCY, lÉ, è, é, í, —, è, çB, , ç, Ä, l‘ü, l‘j, ³/₄, Á, ¹/₂, ñ, ³/₄B, », ñ, È<CŽ, i, Å, µ, å, oB[~]
 çŽå, È, ñ, Ä, ç, Å, Ä, ³/₄, Ü, µ, å, ^a, Å, ÄI, ÄfCfGfX, lÉ‘ž, µ, Y, ðŒü, —, éŽÒ, à, ç, ¹/₂, æ, o, Å, · B

’íŽq, à“|, °, ¹/₂B

fyfef, ÄE, ç, o’íŽq, lA“|, °, ¹/₂, ñ, ³/₄, —, ÇÙ”, l—lŽq, ^aC, lÉ, è, éB, ³/₄, ©, çAÙ”»Š, l‘O, Å, o, è, i, å, è, µ, Ä, ç
 , è, l, ÈB, ·, è, ÄE, ©, è, lŠç, ð’m, Å, Ä, ç, è, à, l, ^au, , èA, , ñ, ¹/₂fCfGfX, l‘íŽq, l, á, È, ç, ©v, ÄŒŒ³/₄, o, ñ, ³/₄B
 fyfef, l, , í, Ä, Ä”Û’è, ·, è, ñ, Å, · Bu, ç, |A^á, ç
 , Ü, · BfCfGfXH, », ñ, È, jŽ, , l‘m, è, Ü, ¹, ñBv’íŽq, ÄE, µ, Ä^é, lÉ‘ß•ß^ŒY, ³, ê, Ä, l, ©, È, í, È, çA, ÄŽv, Å, ¹/₂, ñ, ³/₄, ÈB
 , í, Å, ÄŒW, Ü, Á, ¹/₂ŽxŽŽÒ, ¹/₂, i, lA, í, Á, ÄA, |, Ä, µ, Ü, ç, Ü, µ, ¹/₂B

fLfŠfXfg³, l□—§

OE<CAFcfGfX, ÉÅŒä, Ü, Å•t, «], c^OEY, Ü, ÅŒ©“Í, —, ½, l, í, Ù, ñ, l

fCfGfX, l, í, , ©“ñ”N, Ü, C•z³S^{“®}, ð, μ, ½, ¾, —, ÅA^OEY, ³, ē, Ä, μ, Ü, φ, Ü, μ, ½B, Ü, ¾R, O†, ð, φ,

, RfLfŠfXfg³

@fCfGfX, l~b, l, ±, ē, Ål, í, èB

, ÅE, ±, ē, ^afLfŠfXfg³, l, ±, ±, ©, cŽn, Ü, éB

fCfGfX, ^OEY, ³, ē, Ä[”]“úŒäA — «MŽÒŽO!l, ^afCfGfX, l-SŠ[, ð^ø, «Žæ, è, És, Á, ½, ñ, Å, ·B[“]-Žž, l•æ, l‰
|ŒŠŽ®, l[“]ŒA, É, È, Á, Ä, φ, éBfCfGfX, l-SŠ[, à, », ±, É[“]ü, ē, Ä, , Á, ½, l, , È, ñ, Å, ·, ^aA[”]P —, ½, l, ^aü, Á, Ä, φ,
, ½, ÅE, φ, o, ñ, ¾, ŒB
Ž€l, lSm, ©, É, È,

, ÅE, ±, ē, ^a, ±, l~b, ^aA, Ç, ñ, Ç, ñ[“], í, é, È, ©, ÅfCfGfX, ^aJ, «•Ô, Á, ½A•œS[^], μ, ½, Ål, |, élX, ^a, , ç, í, ē, Ü, μ, ½B
Š^a, «“Y, |, É, È, é, l, ð[°], ē, Ä[“]|, °ŽU, Á, Ä, φ, ½’íŽq, ½, l, , àÄ, ŅW, Ü, Á, Ä, «, ÄA[”]e³, ð[°]
, ē, ^afCfGfX, l³, |, δlX, Éà, «, l, J, B, Ü, ·B, ©, ē, ç, à•œS[^], μ, ½fCfGfX, É‰oí, Á, ½, ÅE, φ, oB

@, ±, l, æ, o, É, μ, ÄAfCfGfX, l•œS[^], μ, ½AfCfGfX, l, á, l, è[~]cŽå, ¾, Á, ½, Ål, |, élX, É, æ, Á, ÄfLfŠfXfg³, a—
§, μ, Ü, μ, ½BfLfŠfXfg, ÅE, lfmfŠfVfAŒê, Å[~]cŽå, l, ±, ÅE, Å, ·B

~cŽå, l•œS[^], ðM, J, élX, lfmfŠfXfg³“k, É, È, è, Ü, μ, ½BM, J, È, cIX, lftf_f_, ³, É, ÅE, Ç, Ü, è[±], —, é, ±, ÅE, É, È, è, Ü, ·B

•œS[^], ÅE, φ, o, ±, ÅE, ð, Ç, oI, |, é, ©B, ±, ē, l, à, o — ðŽj, lZö[~]ÅE, ©, cŠO, ê, Ä, μ, Ü, o, l, ÅŠF, ³, ñ, », ê, ¼, ē, ^al, |, ½, ç, φ, φB
, ½, ¾A[“]|, °, Ä, φ, ½’íŽq, ½, l, ^aÄ, ŅŠ^{“®}, l, J, B, ½, l, É, lA‰o½, ©, ^a, , Á, ½, ñ, Å, μ, å, o, ŒB, ±, o, φ, o, l, ð@³lŒ±, ÅE, ©A —
i[“]I[“]lŒ±, ÅE, ©AŒ[Z, ÅE, ©, φ, o, ñ, ¾, è, o, ŒB

@fCfGfX, l’íŽq, Å — L[—]½, È[“]ñl, ^afyfef, ÅfpfEfB

fyfef, lÙ[”], lZž, ÉfCfGfX, ð’m, ç, È, φ, ÅE, φ, Á, ½’j, Å, ·B, ÅE, ±, è, ^OEYŒä, l’MS, È•z³S^{“®}, ð, “, ±, È, φAÅŒä, l[f]
, Å^OEY, ³, ē, ½B

fpfEf, lfcfGfXžŒä, l’íŽq, Å, ·BžŒä, l’íŽq, ÅE, φ, o, l, àl, ¾, —, ÇA•œS[^], μ, ½fCfGfX, É‰oí, Á, Ä, φ, é, ©, ç, », o, È, éB
fpfEf, l-T•Y, Èf[~]f_f_, l, l‰oÅE, ÉJ, Ü, è, ½”MS, Èf[~]f_f_, ³“k, Å, μ, ½BfLfŠfXfg³“k, ðŒ©, Å, —, ¾, μ, Ä[”]— ŠQ, μ, Å, φ
, ½’j, È, ñ, Å, ·B, ÅE, ±, è, ^a— s[”]†, É•œS[^], μ, ½fCfGfX, É

%oí, oBfCfGfX, lfpfEf, Éu, È, °Až, , ð[”]— ŠQ, ·, è, l, ©v, ÅE[°], ð, ©, —, ½, ÅE, φ, oB
, ±, è[~]ÈŒäfpfEf, lftf_f_, ³, ðŽl, ÅA, », è, Ü, Å[”]— ŠQ, μ, Å, φ, ½fLfŠfXfg³, l•z³S^{“®}, ÉjŠU, ð, ©, —, è, ñ, Å, ·B

fLfŠfXfg³, l — ~ _ È, ÅfpfEf, lŒ÷N, l’å, ^a, ^a, φ, Å, ·BfCfGfX, l³, |, ð, à, ÅE, ÉfpfEf, ^afLfŠfXfg³, ð, Å,
, é, Ü, Ç, Å, ·B
, »^a, ©, çAfpfEf, lftf_f_, l, ¾, —, Cf[f]žs[”]Œ, , ðŽ, Á, Ä, φ, ½, ñ, Å, ·B, ¾, ©, çAžŒ— R, É[“]à, ð — s, ·, è, ±
, ÅE, ^a, Å, ^a, ^a, ½BfLfŠfXfg³“k, ÅE, μ, Ä[”]B[”]B, ³, è, ½, ÅE, ^a, ^a, àf[f]žs[”], lŒ — ~, ÅE, μ, Äf[f]žs, Åc[”]é, É, æ, è[~]U[”], ð —
v^a, μ, ½B, »^a, l, ½, βA, ©, è, l[f]žs, É[~]U[”]—, ³, è, Ä, »^a, ±, Å, à•z³S^{“®}, ð, μ, Ü, ·BÅŒä, l, á, l, è[~]ŒY, É, È, è, Ü, ·, —, Ç, ŒB

,±,¤,¤,¤'íŽq,½,¢,lš“®,É,æ,Á,ÄfLfŠfXfg<³,ÍfpfŒfXf fi'n•û,lf†f_f,,l'ÈŠO,É,à™ X,ÉL,ª,Á,Ä,¢,«,Ü,μ,½B

@fLfŠfXfg<³“ÆŽ©,l“T,ªV—ñ¹,Å,·BfCfGfX,lŒ³“®,ðL,μ,½•J‘,ªA'íŽq,½,¢,lžèŽ†,È,C,©,ç¬,Á,Ä,¢,Ü,·B
fCfGfX,lžŒä,©,ç,¢,ë,¢,ë,È•J‘,ª,ç,ê,Í,J,ßA¡,l,æ,¤,ÈV—ñ¹,łŒ,É,È,A,½,l,Í,T¢I,l,±,Æ,Å,·B

«Œ—ñ¹,àfLfŠfXfg<³,ł¹,Å,·,ªA,±,ê,Í,à,Æ,à,Æf†f_f,,³,ł¹“TBfLfŠfXfg<³,Íf†f_f,,³,©,çJ,Ü,ê,½,à,l,Å,·,©,çA,±,
,ê,à,ø,«Œp,¢,Å“C,þ,í,“,¾B

V—ñ,Æ,¢,¤,l,ÍAV,μ,¢Œ—ñA,Æ,¢,¤,Ó—jBfCfGfX,Æ_,łŠÔ,ÅŒð,í,³,ê,½V,½,ÈŒ—ñ,ðL,μ,½—{A,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,·B
,»,ê,É,í,μ,ÄAŒ—ñ,Æ,ÍfCfGfX^È‘O,łA_,ÆłŠÔ,Æ,łŒä,¢Œ—ñ,Æ,¢,¤,±,Æ,¾,ÈB

@V—ñ¹,ÍA‘½,

,É‘,©,ê,½•J‘,łŠñ,‘W,þ,Å,·,©,çAfCfGfX,łJ,à•J‘,É,æ,Á,Ä‘,«•û,ª,å•á,¤,ñ,Å,·,æB
—á,! ,lA\ž‰œE,ÉŠl,“,ç,ê,½fCfGfX,łŒ³/—t,Å,·B

^ê”Ô,Í,â,

,μŒä,Å‘,©,ê,½f<J•Y‰œ¹,Å,ÍAu•f,æB”þ,ç,ð,·žÍ,μ,

‘S‘RAfCf[fW,ª,¤,Å,μ,åB,C,¢,ç,àfCfGfX^ŒYŒä,½,©,¾,©,S,O”N,©,ç,U,O”NŒä,
,¾,©,çAžÀÛ,łfCfGfX,—{“-,É,C,ñ,È,O,¤,¾,Å,½,l,©A,±,ê,ð’T,é,l,í,μ,¢B

žö<æ,ł,½,þ,É‰œ½û,©fCfGfX,ł—{,ð“C,ñ,¾,ñ,Å,·,ªA,Ý,ñ,È^á,¤,l,Å,·B‘,©,ê,Ä,¢

,éfCfGfX‘œ,“BižÒ,ł,¾,“fCfGfX‘œ,ª,é,ÆŒ¾,Å,Ä,à,¢,¢,ñ,J,á,È,¢,©,ÈB

¡“ú,łb,Í,“,¤,¢,¤,Ó—j,Å,Í,½,μ—,łfCfGfXB

ŠF,³,ñ,àž©•ª,È,è,łfCfGfX‘œ,ðl,! ,Å,¤,ê,½,ç,¢,¢,Æžv,¢,Ü,·B

žQl}‘D‰œîEEEE,à,¤,μÜ,μ,‘m,è,½,¢,Æ,«,í

‘—¼,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^*[flfbfg“XufAf}f]f“v,łfy[fW,É”ò,ñ,ÅA—{,łff[f^A‘•],È,C,ðŒ©,é,±,
,Æ,ª,Å,¤,Ü,·Bw“ü,à‰œÅ”\,Å,·B

łŠÔfCfGfXu’kžÐŒ»‘äV‘	‘êàV•l~BfLfŠfXfg<³šÖ~A,ł—{,í,½, ,l,ÅA“C,þ‘¤,à——f,łZæ,è•û,ª,åž— ,¾B^ê”ÈŒü,“,IV“Å,ÅAžö<æ,Éžg,!,é~b‘è,à,½,©,Å,½BAŒ»‘a“ú—{,ł•J—¾,Æ”ñí,É<æ,¢ ,©,ç,Å,Í,È,¢,©,Æžv,Å,½,è,à,·éB
‘•,Æ,μ,Å,łIV—ñ¹	“cŒžO~Bu¹‘Šwv,Æ,¢,¤,à,ł,ª,é,æ,¤,ÅA~žÒ,íA“ú—{,Å,ł‘ä•\“I,È¹‘ŠwžÒ,¾,Æ•,¢ ,½B¹,ł—§‰œB’ò,ªA,æ,í,©,éB,½,¾,μAŠwp’,È,l,Å,¢,Æ,¢B

‘æ18‰œñ@fLfŠfXfg<³,ł—§@,“,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É–β,é](#)

[‘Q,łfy\[fW,Ö
‘æ,P,V‰œñ@f\[f}’é’,ł•łži](#)

[žY,łfy\[fW,Ö
‘æ,P,X‰œñ@fLfŠfXfg<³,ł’
—œä,ł“Œ¼f\[f}’é’](#)

fL_f§fX_fg³, l_l□¬—§

@

fLfŠfXfg³, Í”-“W□A•—ôŒä, Í“Œ□½f□□[f}’é□‘

¢ E j u[~]^

@ @@‘æ,P,X%oñ@fLfŠfXfg³, Í”“WA•—ôŒä, Í“Œ½f[f}’é“@

,PfLfŠfXfg³, Í”“W

@ @fCfGfX, ÍŽŒäA’íŽq, ½, ï, Íš^“®, É, æ, Á, ÄTM X, ÉfLfŠfXfg³, ÍMŽÒ, Íf[f}’é““à, ÉL, ^a, Á, Ä, ç, «, Ü, µ, ½B, Í, J, ß, Í, ÍMŽÒ, Í—«, Æ“z—ê, ^a”†S, ¾, Á, ½, Æ, ç, í, ê, Ä, ç, Ü, ·BfCfGfX, ^a, Ç, ñ, ÈIX, É•z³, µ, ½, ©, ðl, |, ê, Í“—‘R, ©, à, µ, ê, È, çB
@“z—ê, Í“—‘R<s, ^o, ç, ê, ½IXB—«, àŽÐ%oř“I, É, Í—}^3, ³, ê, ½JŠ^, ð, µ, Ä, ç, ½, Æl, |, ç, ê, é, Á, µ, å, ©B
@fLfŠfXfg³, ^aL, Ü, è, Í, J, ß, ½, Í“—RV»@³, Á, ·B%o½Žž, Ížž‘á, Á, àV»@³, Æ, ç, o, à, Í, Ížü^Í, ©, ç[^], í, µ, ç—Ú, ÁŒ©, ç, ê, é, à, Í, ¾B%oŠú, ÍfLfŠfXfg³, àf[f}, Á, ÍŒÓŽUL, ç, à, Í, Æ, µ, ÄŒ©, ç, ê, ½, æ, o, Á, ·BMŽÒ, Á, , é, ±, Æ, ð’m, ç, ê, é, Æ”—ŠQ, ³, ê, é, Í, Á”P, ç, Í, ±, Á, », èW, Ü, Á, ÄM[~]Á, ðŠm, ©, ß, , ç, Ü, µ, ½B
@@W, Ü, Á, ½, Í, ^afJf^fRf“fxBŽ‘—_W, ÉŽÈ^, ^a, , è, Ü, ·, ÈB, ±, ÍfJf^fRf“fx, Í’n%o°•æ Š, Æ—ó, µ, Ä, ç, Ü, ·Bf[f}l, ½, ï, Í—, ÍxŠO, É•æ’n, ðl, è, Ü, ·B’n
‰o, Éfgf“flf[~], ðŒ@, Á, ÄAf gf“flf[~], Í•ç, É’I, ^a, ½,
‰oÍ“, Í, µ, Ü, ¹, ñBŒ»Ý, Í, ±, ñ, È, Ó, o, É’ó, Á, Ü, Í’I, ^a•À, ñ, Á, é, ¾, —, ¾, —, ÇA“—Žž, Í, ±, ±, É, —, Á, µ, èŽŒÍ, ^a, , Á, ½B“—‘R<C—
í, ^a““ç, Æ, ±, è, ¾, ©, çA’N, à—^, È, çB
@”—ŠQ, ð[~], è, ÄMŽÒ, ½, ï, Í, ±, ±, ÉW, Ü, Á, ½, ñ, Á, ·BW, Ü, éŽžŠÒ, Í—éB, Ý, ñ, È, ^aQÃ, Ü, Á, ½, ðŒ©Œv, ç, Á, Ä“z—
é, ½, ï, ä—, ½, ï, ^a‰oÆ‰o®•~, ð”², —o, µ, ÄfJf^fRf“fx, É, ä, Á, Ä, ^a, ÄW‰oř, ðŠJ, ^a, Ü, µ, ½B, ±
, Á, », èW, Ü, Á, Ä, à, á, ^a, ÈIX, É’m, è, Ü, ·, í, ÈBfLfŠfXfg³, ÍMŽÒ, ½, ï, Í—é, È—é, È’n%o°•æ Š, ÉW, Ü, Á, Ä
‰o½, ©, æ, ©, ç, È, ±, Æ, ð, á, Á, Ä, ç, é, ñ, J, á, È, ç, ©A, Æ, Ü, ·, Ü, ·•È, ^aŒf, µ,
Œð, µ, Ä, é, Æ, ©, ÈB
@, Ü, A, », ñ, È•ÍŒ©, ác’é, É, æ, é’e^3, ^a, , Á, ½, è, µ, È, ^a, ç, àTM X, ÉMŽÒ, Í‘, |, ½, æ, o, Á, ·B
•œK, É, È, è, Ü, ·, ^afffbfIfNfŒfefBfAfkfX’é, Í”—ŠQ, Í—L—½, Á, µ, ½, ÈB, Æ, ±
, è, ^a, R, P, R”N, É, ÍfRf“fxf^f“fefBfkfX’é, ÍfLfŠfXfg³Œö”FA, R, X, Q”N, ÍfefIfhfVfEfX’é, É, æ, é’^{3‰o}, Æ, S
ç[~]I, É, ÍfLfŠfXfg³, Íf[f}’é, ðŽx, |, é, —I, È’Œ, É, Ü, Á, È, Á, ½, í, —, Á, ·B

,Q³[~], ð, B, ®, é’Í—§A³•f

@@MŽÒ, ^a, |, é, É, Á, ê, ÄAŠe’n, É’å, ^a, È^{3‰oř}, à, Á, ^a, Ü, ·B’EŽÒ, à, ½,
§, ^aN, ^a, Ü, ·B, Ç, ñ, È@³, Á, àŠJ’c, ^aZŒñ, Á, ©, ç‰o½”N, à, ½, Á, Íl, |•û, Íá, ç, Á, Í—§, µ, ½, è•—
ô, µ, ½, è, ·, é, à, Í, Á, ·B, ½, ¾AfLfŠfXfg³, Íf[f}’é, ÍŒö”F@³, É, È, è, Ü, ·, ©, ç’é•{, Æ, µ, Ä, Í^{3‰oř}“à•”, ^aÍ—
§, ·, é, Í, ÍD, Ü, µ, , È, çB, », ±, ÄAf[f}
@, ±, è, ÍA^{3‰oř}“à, Í’Í—§, ðc’é, ^a”²â, ·, é, Æ, ç, o, ±, Æ, ÆA, à, o^ê, Á, Í’²â, ð—½—Ü, Æ, µ, Äc’é, ^a3‰oř“à•”, ÉŠ±Ä, µ, ÄŒ—
Í“à•”, ÉŽæ, èž, ñ, Á, µ, Ü, oA, Æ, ç, o^Ó—í, à, , Á, ½, ñ, Á, ·B

fLfŠfXfg³, Í”-“W A•^a—ôEä, Í“Œ ¼f □□[f]’é □‘

@@,±,Í@^{<3%oï}c,Í,±,Æ,ð^{<3%}øÈ‘,Å,ÍŒö%oïc,Æ‘,¢,Ä,¢,Ü,·B—L—¼,ÈŒö%oïc,^aR,ÂBŠo,!,Ü,·B
,R,Q,T”NAfjfP[fAŒö%oïc
,S,R,P”NAfGftfFf\fxŒö%oïc
,S,T,P”NAfJf\fpfh“Œö%oïc
fjfP[fA,Æ,©fGftfFf\fx,Æ,©%oïc,ÍŠJ,©,ê,½êŠ,Å,·B

@,Z,Å,±,ñ,È,ÉÚ,μ,fLfŠfXfg³_Šw,Í•×
Á’f[‘]ê’f‘å,‘,Á,Í,Éà—¾,μ,Ä,“,‘,«,Ü,·,ËB
@fLfŠfXfg^{<3%oï},Í“à•”,ÅŒJ,è•Ô,μ<c~,Í·ÍÛ,Æ,È,Á,½—â‘è,‘, ,è,Ü,·B,±,Í,R,Â,ÍŒö%oïc,à“È,«^l,ß,½,c^ê,Â,Í—
â‘è,ðŒJ,è•Ô,μ<c~,μ,Ä,¢,é,Í,Å,·B,»,ê,Í‰½,©,Æ,¢,¤,ÆfCfGfX,Í—â‘è,È,ñ,Å,·BfCfGfX,Í,È,ñ,È,ñ,¾H
‰Šú,Í'EŽÒ,½,ç,à[‘]—â,ÉŽv,Á,½,ñ,¾,ËB”þ,‘~çŽå,Å, ,é,±,Æ,Í,¢,¢
,ñ,Å,·B,»,¤M,Í,éI,‘fLfŠfXfg^{<3}“k,È,ñ,¾,©,çB—â‘è,Í,»,ÍæA~çŽåfCfGfX,ÍlŠÔ,©A_,©H,»,±,Å~_,‘Í,Ü,ê,éB
@lŠÔ,¾,Á,½,çŽŒY,É,È,Á,½, ,ÆÍ,«•Ô,Í,Í,È,¢B1,ÍŽ€ñ,¾,ç•’ÈŽ€
,ñ,¾,Ü,Ü,Å,·,©,ç,ËB,¾,©,çAfCfGfX,ðlŠÔ,Æ,·,é,ÆA,â,‘,Ä,»,ê,ÍœŠ,Í”Û’è,É,Â,È,‘,è,Ü,·B
@,Í,á, A_,¾,Á,½,Í,©B,»,ê,à,‘,©,μ,¢
,ñ,Å,·BfLfŠfXfg³,à^ê_‘,Å,·B_,Íf,fnfEfF,Í,ÝBfCfGfX,à_,Æ,μ,½,ç_,‘nl,É,È,Á,Ä,μ,Ü,¢
,Ü,·B,¾,©,ç”þ,ð_,Æ,·,é,±,Æ,à,Å,«,È,¢B
@,±,Í—μ,,ð,Ç,¤Ø,è”², Í,ÄŽñ”ò~êŠÑ,μ,½—~,ðì,èä,°,é,©,Á‰Šú,Í'EŽÒA_ŠwŽÒ,½,ç,Í~_,‘,μ,½,ñ,¾B

@@,R,Q,T”N,ÍfjfP[fAŒö%oïc,Å,ÍAfAfŠfEfX”h,Æ,¢,¤l,!,‘Ù’[A,Â,Ü,èŠÔ^á,Á,½—
~,Æ,‘,ê,Ü,·BfAfŠfEfX”h,ÍfCfGfX,ðlŠÔ,¾,Æ,¢,Á,½,ñ,Å,·B³“Æ”F,ß,ç,ê,½,ÍfAf^fifVfEfX”h,Æ,¢,¤B,±
,ÍfAf^fifVfEfX”h,Íl,!,Í, ,Æ,Å,Ü,Æ,ß,Ü,·B
@,S,R,P”N,ÍfGftfFf\fxŒö%oïc,Å,ÍflfXfgfŠfEfX,Æ,¢,¤l,‘Ù’[,Æ,‘,ê,Ü,·B”þ,Íf}
fŠfA,ðu_,Í•êv,ÆŒÄ,Ô,Í,É”½,Í,μ,½,ñ,Å~Ù’[,É,È,Á,½BŽÀÛ,É,ÍŽj“¬‘,¾,Á,½,æ,¤,Å,·,‘,Í,Ä,¢
,ÍflfXfgfŠfEfX,àfCfGfX,ÍlŠÔ«,ð
@,S,T,P”NfJf\fpfh“Œö%oïc,Å,Í’P~_”h,‘Ù’[,Æ,‘,ê,Ü,·B,±,ÍfOf<fv,ÍfCfGfX,ðlŠÔ,Å,Í,È,¢,Æ,·,éB’Pf,É,¢
,Í,Í,¾A,Æ,¢,¤,í,‘,¾B

@@,Â,Ü,èfCfGfX,ð_,Æ,©lŠÔ,Æ,©A,C,ç,ç,©,ÉŒ^¾,¢,‘,éŽå’f,Í~Ù’[,Æ,‘,ê,Ä,¢,Å,½,ñ,Å,·B,±
,ê,ç,Í~_,ð’È,Í,Ä,‘,žc,Á,Ä³“Æ,‘,ê,½,Í,ÍfAf^fifVfEfX”h,Å,·B,±,Í”h,Í~_,ÍuŽO^È~ê’Í,‘,ñ,Ý,¢,Á,½,çjåv,Æ,¢
,¤B_,ÆfCfGfX,Æ¹—Í,ÍŽÒ,Å,Íu“~Žçv,Å, ,éA,Æ,¢,¤—~,Å,·B”Ó,μ,È,‘,ê,Í,¢,‘,È,¢,Í,Íu“~Žçv,Æ,¢
,¤Œ^¾,¢•ûBu“~,Ív,Æ,Íá,¤,©,ç,ËB,â,â,±,μ,¢,ËBu“~Žçv,Æ,¢,¤,Í,ÍuŽç,‘~Ív,È,Í,Åu“~,Ív,Å,Í,È,¢B
@,à,Æ,à,ÆuÍ,«•Ô,Á,½lŠÔvfcfGfX,ðlŠÔ,Å,à_,Å,à,È,¢
,à,Í,ÉA•È,ÍŒ^¾,¢•û,ð,‘,ê,ÍAIŠÔ,Å,à, ,è,Å,à, ,é,à,Í,É,μ,¤,¤,Æ,¢,¤,ñ,¾,©,çA•^a,©,è,â,‘,
,¾,ËB,»,±,ð,È,ñ,Æ,©,®,è”², Í,ÄŠ®~³,ê,½—~,‘u“~Žçv,ÍuŽO^È~ê’Íav,Å,·B,¾,©,çŽ,ŽÀ,Í,æ,
,Ü,‘,ñB,±,Í,¢,‘,È,è“oê,μ,½u¹—Ív,Í,¢,Å,½,¢,È,ñ,¾,ë,¤,ËBŽ“T,ð“C,ñ,Å,à•^a,©,è,Ü,‘,ñB’m,Å,Ä,¢,éI,Í,±
,Å,»,è[‘],Í,Ä,

fLfŠfXfg<³, l̄-“W□A•—ôŒä, l̄“Œ□½f□□[f}’é□‘
@Œ»ÝfLfŠfXfg<³, ÍçSE’†, ÉL, ª, Á, Ä, ç, Ü, ·, ªfJfgfŠfbfN, àfvffefXf^f“fg, à“““I, È<³%oï, ÍŽO^È^ê’l̄à, É, ½, Á, Ä, ç
·Ü, ·B, Ý, ñ, È, », ¸, ¾, ©, çŒ»Ý, Á, Í, , ç, ½, B, ÄfAf^fifVfEfX”h, È, ñ, ÄŒ¾, í, È, ç,
, È^ê”È“I, Á, ·B<³%oï, l̄à<³, Äu•f, AEŽq, AE¹—l̄, l̄Œä—¼, É, , ç, Ä~v, AE, ç, ¸, l̄, ð•·, ç, ½, ±
, AE, , è, Ü, , ñ, ©B, , è, ¨Zo^È^ê’l̄, Á, ·, ÊBfAffŠfJ‡O”J, Ü, è, l̄V, µ, ç@”h, Á, ÍŽO^È^ê’l̄à, É, ½, Á, Ä, ç, È, ç
, à, l̄, ª, , é, ©, à’m, è, Ü, , ñ, ¨B

@@@^Ù’[, AE, ª, ½@”h, l̄, », l̄Œä, Á, ·, ¨Af[f}’é““à, Á, l̄•z<³, ª, Á, «, Ü, , ñBfAfŠfEfX”h, l̄—k•û, l̄fQf<f}
f“l, É•z<³S~“®, ð, µ, Ü, ·BflfXfgfŠfEfX”h, l̄fCf%of“, ©, ç’†%o›fAfWfA, É, ©, —, ÄL, ª, Á, Ä, ç
, «, Ü, µ, ½B’P<_”h, l̄fGfWfvfg, ¨fGf fIfsfA, ÉŽc, è, Ü, ·B

@@@%oŠú<³%oï, l̄Žw“±ŽÒ, Á<³, , ð@”o, µ, ½l, ½, , l̄, ±, AE, ð<³•f, AE, ç, ç, Ü, ·B“ñlŠo, |, Ä
‰o°, ª, ¨BfGfEfZfrfIfXi, Q, U, O`R, R, Xj, l̄u<³%oïŽjv, ð~, µ, Ä—
L—¼BfAfEfOfXfefBfkfXi, R, T, S`S, R, Oj, l̄u”vu_, l̄v, l̄~ŽÒBfAfEfOfXfefBfkfX, l̄, à, AEf}fj<³, AE, ç
, ¸, l̄, ðM, J, Ä, ç, é, ñ, Á, ·, ¨fLfŠfXfg<³, É‰oü@, , éB, », ñ, È”¼J, ð~, ç, ½, l̄, ¨u”v, Á, ·B, ±
, ll, l̄i, Á, ¨afLfŠfXfg<³k, ll, ½, , É, l̄ftf@f“, ¨½, ç, Ý, ½, ç, Á, ·B

, R½f[f}’é‘, l̄-Ä-S

@@@, ª, ÄA, ±, ±, Äfpfpfb, AE½f[f}’é‘, ð-Á, Ü, µ, Ü, µ, ¨B
@ftf““œ, AE, ç, ¸—V-q—“œ, ª, , è, Ü, µ, ½B, ±, ¨, ¨œ•û, ©, ç•ŠC-kŠY, , ½, è, É^Ù“®, µ, Ä, «, Ü, µ, ½B, S¢*I*’†, l̄, ±, AE, Á, ·B
@Žz<³, l̄, ª, ©, l̄, Ü, è, Ü, ·, ¨O, Q¢*I*’† Af[f}, ÄfOf‰fbfNfXŒZ’í, %oüŠv, ðŽŽ, Ý, Ä, ç, ½ f†[f‰ofVfA‘á
—œ, l̄“Œ’[A’†, Á, l̄S̄’é‘, %ooh, |, Ä, ç, Ü, µ, ½B•é, AE, ç, œc’é, l̄Zž<³, Á, ·B, ±, l̄È‘O, ©, ç’†—k•û, l̄Œ’n‘N, Á, l̄TM±“z, AE, ç
, ¸—V-q%oAE, ª, , Á, Ä’†, ð³”—, µ, Ä, ç, ½, ñ, Á, ·, ¨A•é, l̄Zž<³, Á, È, Á, Ä, J, ß, Ä—k•û‰o“a, ÄTM±“z, ÉÝ, , Ü, ·B
@•‰, —, ½TM±“z, l̄S̄, É’C, , è, éŒ, Á½, É^Ù“®, ðŠJŽn, µ, Ü, µ, ½B, S, O, O”N, ©, —, Ä, ä, Á, , è, ä, Á,
‰oï, Á, ½‘¼, l̄—V-qfOf<fv, AE‡l̄, µ, ½, è<zŽû, µ, ½, è, µ, È, , ç^Ù“®, µ, ½, ñ, ¾, AEŽv, ç, Ü, ·B, ±, ¨, ¨ftf“, AE, ç, œ—¼, Äf[f}, l̄
—ðŽj, É“oê, , é, l̄, Á, ·B™±“z, l̄u, «, ¨, œ, Çv, AE“C, ñ, Á, ç, Ü, ·, ¨uftf“fkv, AE, à“C, ß, é, ñ, Á, ·, ÈB™±“z, AEftf““
, l̄“—, Jf, fm, ¾, è, œ, AE, ç, í, è, Ä, ç, Ü, ·B

@@@f[f}’é‘, l̄—k•û, ©, ç•ŠC-kŠY, É, l̄fQf<f}f“l, ¨Z, ñ, Á, ç, Ü, µ, ½B”P, ç, l̄”““P^È, Á”_k-q’{, È, ñ, ©, ð, µ, ÄJŠ^, µ, Ä, ç
, ½, ñ, Á, ·, ¨A, », ±, É“Œ•û, ©, çftf““œ, ¨Ù“®, µ, Ä, «, ½B^È“È, «ó‘Ô, É, È, Á, ÄAfQf<f}
f“l, l̄”““P^È, ÁŽÝX, É½, Ö^Ù“®, ðŠJŽn, µ, Ü, µ, ½B, ±, ¨, ¨R, V, T”N, ÉŽn, Ü, éufQf<f}f“—“œ, l̄å^Ù“®v, Á, ·B
@ftf““œ, É’C, , è, Ä~Ù“®, ·, éfQf<f}f“l, l̄Œ”‘ä—, ÉŒ¾, Á, ½, ç“—, Á, ·, ÈB, ±, ¨, ¨ÀZ, l̄n, ð, , ß, Äf[f}’é““à, É“ü, Á, Ä, ±
, æ, œ, AE, µ, Ü, µ, ½B
@~È‘O, ©, çfQf<f}f“l, l̄, È, ©, É, l̄f[f}’é““à, É~ÙZ, µ, ÄJŠ^, , éfOf<fv, ¨Af[f}ŒR, l̄—b•º, AE, È, é, à, l̄, È, C, àŒ\, ç
, Ü, µ, ½B<
, Ü, ·B, µ, ©, µA; “x, l̄K-Í, ¨á, œB‘—, È, l̄fQf<f}f““—, ¨, Ç, Á, AE—, , èž, ñ, Á, «, ½, çAf[f}ŽÐ‰oï, l̄’å—, É, È, é, ±, AE, l̄-
Ú, ÉŒ©, , Ä, ç, Ü, ·B“Œf[f}’é‘, l̄, È, ñ, AE, ©‘““h‰oq, É~Œ÷, µfQf<f}f“l, ¨N“ü, , é, l̄, ð,
, AE, ¨, Á, «, Ü, µ, ½, ¨A½f[f}, l̄, ±, ¨, ÉŽ, ”s, µ, ½B

fLfŠfXfg³, Í”-“W A•^a—ôŒä, Í“Œ ¼f f [f]’é ‘

@ŽÝX, É, È, ¾, êž, ñ, Å,
S, µ, Ü, µ, ½i, S, V, U”NjBfIfhfAfPf<, ÍfQf< f} f“log, Í’j, Å, ·B
@fQf< f} f“l, Í•”“P^È, Å ¼f[f}’é‘, Í, , ï, ±, ï, ÉY Žè, ÉŒš‘, µA, ³, ç, É, ·ŒÝ, ç, Éí, ç, , ç, Ü, ·B, ½, AE, |, ÍfKfŠfA’n•û—
k•”, ÉN“ü, µ, ½ftf%o f“fN°, Íftf%o f“fN%o °, ðì, éB, ±, ê, ^aŒ» Y, Íftf%o f“fX, Í, à, AE, Å, ·Bf[f} l, ½, ï, Í, ±, ÍV, µ, ç—
í”Ø, ÈŽx”zŽÒ, AE, È, ñ, AE, ©Ü, è‡, ç, ð, Å, —, ÄJŠ^, ·, é, µ, ©, È, ©, Á, ½, ñ, Å, µ, å, o, ÈB’·^ø,
, Í, È, ©, Åf[f} Zž‘á, Í, , ç•J—¾, Í•ð%o ó, µŒoI, à’á’Ø, µA, å, ^aÄf[f} l, ÍfQf< f} f“l, AE¬ŒŒ, µ, Å, ç, «, Ü, ·B, +
, ê, ^aŒ» Y, ÍfCf^fŠfAAftf%o f“fXAfXfyfCf“, , ½, è, Ío’Ô, Å, µ, ½B

@@@J, <%o,,, Ñ, ½“Œf[f}, Íf†fXfefBfjfAfkfX’éí^È, T, Q, V, T, U, Tj, ÍZž‘á, É^êŽžŠú—
Í, ð, è•Ô, µ, Ü, ·Bf†fXfefBfjfAfkfX, ÍfCf^fŠfA”½“‡, áfAftfŠfJ-kŠY, ÉŒš‘, µ, ½fQf< f} f“l’%o AE, ©, ç—
Í“y, ð’D, ç•Ô, µ, Å, ç, Ü, ·B“Œ¼•^a—ð^È‘O, É^aB, ç—Í“y, ðŽx”z, µ, Ü, µ, ½B
@, », ê, ©, çf†fXfefBfjfAfkfX, Íf[f}—@‘á’S, ð•ÒŽ[, ³, ¹, Å, ç, é, ±, AE, Å, à—
L—¼, Å, µ, ½, ÈB”P, ÍZž‘á, ÍŒÄ, «f[f}’é‘, ÍÅŒä, ÍP, «, AE, ç, |, é, Å, µ, å, oB
@, ±, ê^ÈŒä“Œf[f}’é‘, Í—Í“y, Í, Ç, ñ, Ç, ñk¬, µ, Å, ç
, «, Ü, ·BŒÄ, Ñ, ©, ½, àŽñ“sfRf“fXf^f“fefBfm[fvf<, ÍŒÄ—½frfUf“fefBfEf€
, ©, ç, AE, Å, ½frfUf“fc’é‘, AEŒ¾, o, Í, ^ê”È“IB, ±, ÍŒä, àf[f}’é‘, Í—”O, ÍfrfUf“fc’é‘, ÅJ, «‘±
, —, Ü, ·, ^aAŽÀŽi“I, È†g, Íá, o, à, Í, É•í%o», µ, Å, ç, é, AEI, |, ½•û, ^a, ç, ç, Å, ·B•½AŽž‘á, AEŠ™ ‘qŽž‘á, Å, í“—, J“ú—{, Å, à
Žj, ÍZd‘g, Y, ^aÜ, é, Å^á, o, æ, o, È, ÈB

ŽQI}’Ð%o îEEE, à, o, µÜ, µ, ’m, è, ½, ç, AE, «, Í

‘—½, ðfNfŠfbfN, ·, é, AEAfCf“f^f[f]fbfg“XufAf} f] f“v, Ífy[fW, É”ò, ñ, ÅA—{, Íff[f^A‘•], È, Ç, ðŒ©, é, ±
, AE, ^aÅ, «, Ü, ·Bw“ü, à%o Å”\, Å, ·B

“ü— <u>åfLfŠfXfg³, Í</u> <u>—ðŽj</u> cover	ŽR—iã f•v ”B‘è—½, Ç, ”, èAfRf“fpfNfg, Å, , è, È, ^a çAufpfEf, Í‘ŠÈ, É, Í—%où‘Ù, ÍfhfOf} } , Í, È, çv, È, ÇAV‘N, ÈŽw“E, à’½, çBŽ,, Í, ±, Í—{, ©, çfpfEf, É, ©, ñ, , éff,, ð, ½, , ³ , ñŽæ, Å, ½B
--	---

‘æ, P, X%o ñ@fLfŠfXfg³, Í”“WA•^a—ôŒä, Í“Œ¼f[f}’é‘@, , í, è

fgfbfvfy[fW, É–ß, é

‘O, Ífy[fW, Ö
‘æ, P, W%o ñ@fLfŠfXfg³, Í—§

ŽÝ, Ífy[fW, Ö
‘æ, Q, O%o ñ@fCf“f_fX•J—¾

@

@@ @‘æ,Q,O%oñ @@fCf“f_fx•j-¾ @

@ @fCf“fh,Í•J-¾,ð•×<,·,é,í,¬,Å,·,ªA,±,±,ÅŽæ,è^μ,¤,Ì,ÍufCf“fh¢ŠEv,Æl,|,Ä,,¾/,³,¢
,ËBj,ÌfCf“fh,¾,¬,Å,Í,È,
@’n},ðŽv,¢•,©,×,ÄfCf“fh—m,ÉŽOŠpŒ,É”ò,Ño,Ä,¢,é,Æ,±,±,ëA,±,±, ðfCf“fh,Æl,|,ª,i,È,ñ,Å,·,ªfqf}f%of,,ŽR-
¬,©,ç“i,Í‘S•”fCf“fhA,,ç,¢,Él,|,Ä,

@ @fCf“f_fX•¶-³/₄,Ì“Á’¥,đ,¢,

@, Ü,, A, ±, ê, ç, ï“sŽs, Í, ·, ×, Ä“sŽsŒv%oæ, ª, , Á, ÄŒvŽZ, ïä, ÅŒšÝ, ¸, ê, Ä, ç, é, ï, º“Á’¥B—L—¼, È~b, Å, ·, ¸ä
‰oº...“¹, ¸Š®”ð, µ, Ä, ç, ½, èAf_fXf^ [fVf...[fg, ¸Z’í, É, , Á, ½, è, ·, é, ñ, ¾B
@, »¸, ê, ©, çAŒÄ~ä, ï“sŽs‰oÆ, Æ, ç, ¸, ï, ïŠX, ï’†S, É_“a, ª, , é, ï, ¸•Ê, È, ñ, Å, ·, ¸AfCf“f_fX•J—¾, É, Í_“a, ª, È, ç
, ñ, Å, ··B“sŽs, ï^, ñ”†, É‰o½, ª, , é, ©, Æ, ç, ¸, ÆA, Å, Á, ©, çŒöO—ê, Å, Ü, è•—~C, ª, , éB, ÅA, Ç, ¸, à, ±, ï•—
~C, ¨“a, ï—ðŠ,, , ð‰oÊ, ½, µ, Ä, ç, ½, ç, µ, ç, ñ, Å, ·, ïB—ê, Æ, ©•—~C, Æ, ©Œ¾, ¸, Æ, í, ©, è, É,
êBÝ”—, Æ, ç, ¸Œ¾—tA•, ç, ½, ±
, Æ, , è, Ü, ·, ©Bg, ð‘, ß, é, ïBfefŒfr, È, ñ, ©, ÅŽžX, â, Á, ã, éB“cŽÉ, ï’¬, Å_ŽÐ, É, È, ñ, ©•ù, °
, é, “Ó, è, ª, , é, Æ, «, É’N’j, ª, Ó, ñ, Ç, µ^ê’s, Å^~“~, ïŠC, É, Å, ©, Á, Äg, ð‘, ß, Å, ç, éfV[f“BCŒ
±“¹, ïsŽÒ, ¸, ñ, ¸“ê, É’Å, ½, ê, ½, è, ·, é, ï, àL, ç^Ó—¡, Å, ïY”—, , ©, à, µ, ê, È, ç, ïB, , ê, Å, ·B

@ @f,fwf“fWf‡f_f,âfnf‰fbfp[,ÌIX,Í’¬,Ì^,ñ’†,ÌÝ”—ê,É,Â,©,è,È,^,çg,ð’,ß_X,É<F,è,ð•ù,°,Ä,¢,½,Ì,Å,Í,È,¢,©A,Æ‘z‘œ,³,ê,Ü,·B,±,Ì•—K,Í;_,ÌfCf“fh,É,àŽc,Á,Ä,¢,ÄAfKf“fWfXì,Ì,Ù,Æ,è,ÉfxifŒfx,Æ,¢,¤¹n,^,é,Ì,Å,·,^AfCf“fh,Ìl,½,ì,Í,±,±,ÅfKf“fWfXì,É,Â,©,Á,ÄÝ”—,μ,Ä,¢,é,ËB,±,ê,ÍAŽÈ^,^, ,è,Ü,·B,T,O,O,O”N’O,ÌfCf“f_fX•¶—¾,ÌIX,Æ“—,¶,æ,¤,ÈS,Ì, ,è,æ,¤,È,ñ,¾,ÆŽv,¢,Ü,·B,»,μ,ÄA,±,ÌS,Ì, ,è,æ,¤,ÍŽ,,½,ì,É,à¤,©,é,ËB•¶—¾,Ìf<[fc,^Z—,½,Æ,±,ë,É, ,é,ñ,Å,μ,å,¤B@Š^á,¢,μ,â,·,¢,©,à,μ,ê,È,¢,©,ç•t,¬‰oÁ,!|,Ä,“,ñ,Å,·,æBŒ‰oÈ,Æ,μ,ÄŒ‰o,É,È,é,©,à,μ,ê,È,¢,¬,ê,ÇA,»,ê,Í—Ú‘I,Å,Í,È,¢BfKf“fWfXì,È,ñ,Ä,ß,ì,á,»,¤,Å,·,©,ç,ËB,¢,ë,ñ,È“®•“,ÌŽ€Ì,^,Ö,©,Ö,©•,,¢,Ä,¢,½,è,·,éB‰o~,à—¬,êž,ñ,Å,¢,éBŒ‰o,©,Ç,¤,©,Æ•,©,ê,ê,Î•sŒ‰o,Èl,Å,·B,Å,àA@³“I,É,Íuò,çi,«,æ,¢jv,ñ,Å,·B,»,Ì...,Å‘,ß,ê,Î°,©,È,ñ,È,Ì,©•,©,è,Ü,!,ñ,^Aò,,È,é,ñ,Å,·,ÈB,»,ê,^AÝ”—,Å,·B

@ @~b,^a,»^,ê,Ü,μ,½BfCf“f_fX•¶^{-3/4},Ì“Á’¥,É–ß,ë,¤B“S,Í’m,ç,È,¢AÄ“¤Sí•¶^{-3/4},Å,·BŠÁÝò”_k,Æ–q’{,^Zå,ÈJŽYŽe’i,Å,·,^Aff\f|f^f~fA’n•û,ÆŒØð`O,à,·,±,È,A,Ä,¢,½B
 @•JŽš,ÍfCf“f_fX•¶^{-3/4},Å,·BfCf“f_fX•¶^{-3/4},Å,Í^óÍ,^a_o,é,ñ,Å,·BŽÈ^,·è,Ü,·,ËB,±,Ì’óÍA[,],Æ,©Ž
 ,Ì,Å‰øð“C,Å,«,Ü,¹,ñB,_,È,Ý,ÉfNfŒf^•¶^{-3/4},Ì,Æ,±,ë,ÅŒÄ‘ä,É,Í<,^a_1,ÈJ,«•^,³/₄,Å,½,Æ,¢,¢
 ,Ü,μ,½,^AfCf“f_fX,Ì’óÍ,É<,^a_1,©,ê,Ä,¢,é,Ì,à<»–;[,¢,ËBfCf“fh,Å,Í,¢,Ü,³/₄,É<,Í_1,ÈJ,«•^,Å,·,μ,ËB

 @ @,±,ÌfCf“f_fX•¶^{-3/4},^a_Å,Ô,Ì,^a_O,P,W,O,O”N B–Å,ñ,³/₄Œ^ö,Í,¢,ë,¢,ë,Èà,^a,·,Å,ÄŒ[,]C•s–³/₄,Å,·B
 @–Å,Ñ,Å,Å,·,é,Æ,«,©–Å,ñ,³/₄Œä,©,Í,Å,«,ë,μ,Ü,¹,ñ,^AfA[fŠfAl,Æ,¢,¤l,½,_,^fCf“fh,ÉN“ü,μ,Ä,«,Ü,μ,½B,±,
 ,ê,ÍA–á,ÌfCf“fhf^ffbfpŒê^o,Å,·B”P,ç,Í’†‰øfAfWfA,©,ç“ì
 %o^,μ,Ä,«,Ü,·,^a_A,»^,Ì,¤,ç,¹/₄,ÖŒü,©,Å,½fOf{fv,^fCf‰of“,Œ’,É“ü,¢
 ,èfyf[,]fVfAl,É,È,ë,Ü,·B“Œ,ÉŒü,©,Å,½,Ì,^a_fA[fŠfAl,Å,·BfA[fŠfAl,ÌfCf“fh,ÌæZ–^oA–á,!,Ìfhf
 %ofrf^I,È,C,δ^a•ž,μ,½,ëA,à,μ,
 %ofŠfA,ÌæZ–,âfjf...[fMfjfA,’nl,Ì,æ,¤,È”§,ÌF,Ì•,¤l,½,_,Æ“–,JŒn,Ì–^o,Å,·BfCf“f_fX•¶^{-3/4},ð’z,¢,½l,½,_,Ìfhf
 %ofrf^I,Æ,à,¢,í,ê,Ä,¢,Ü,·,^a_A,±,Ì,Ö,ñ,Í,Í,Å,«,ë,μ,Ü,¹,ñB¬,³,¢W’c,²,Æ,ÉfCf“fh,Ì–§–
 Ñ,ðŠJ’ñ,μ,È,^a,¢^o,ðì,Ä,Ä,¢,Å,½,ñ,Å,·,ËB
 @‘O,P,O,O,O”N fA[fŠfAl,ÍA,æ,¤,^a,fKf“fWfXì–¬^æ,Ü,ÅŠg,^a_A,Ä,¢
 ,«A¬,³,È^,à,½,
 1,È,ñ,Å,·,^a_A,±,ÌŽž’ä,

 @ @fA[fŠfAl,^a_fCf“fh,ÉŠg,^a_A,Ä,¢,
 %o»,^J,Ýo,³,ê,Ü,·B@^,Æg^¤§“x,Å,·B
 @fA[fŠfAl,ÌfCf“fh,ÌŒμ,μ,¢Ž©‘RŠÄ[,]¤,ð_X,Æ,μ,ÄZ],!,é%oÌ,ðì,Ä,Ä,¢,«,Ü,μ,½B,±,Ì,æ,¤,ÈŽ©‘RŽ]‰oÌ,Ì
 %oÌW,ðuf”fF[f_v,Æ,¢,¢,Ü,·BÅ‰o,É¬–§,μ,½‰oÌW,^ufŠfOf”fF[f_vB,»^,ÌŒä,àufT[f}f”fF[f_v,È,C,¢
 ,
 @,±,Ìf”fF[f_,ð%ori,¤,½j,Ä,Ä_X,ðZ],|A<VŽ®,ð,Æ,è,·,±,È,¤è–ð‰øÆ,^J,Ü,ê,Ä,«,Ü,μ,½B,±,ê,^fof
 %of,f“,ÆŒÄ,Ì,ê,é‘m–μ ŠK‰ø,Å,·B,»^,μ,Ä,±,Ì@^,ðfof‰of,f“^,Æ,¢,¤Bfof
 %of,f“,½,_,Í_X,ÉŽd,!,é,½,B,É”ñí,É•žG,È<VŽ®,ð•Ò,Ý,³/₄,μ,½B,»^,μ,ÄAŽ©^a,½,_,Ì’†,³/₄,–,ÅÒ–ç,Ì•û–
 @,ð“Æè,μ,Ü,·B’¼,Ì,½,_,È,Í^ž–,^a_A,«,È,¢B_X,ð•Ò,βD,¢,ð,à,½,ç,³,È,¢,æ,¤,É,‘Šè,¢,Å,«,é,Ì,Í,ê,í,êfof
 %of,f“,³/₄,–,Å,·éA,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,μ,³/₄,¢,Éfof‰of,f“ ŠK‰ø,Í“ÁŒ ŠK‰ø,É,È,Å,Ä,¢,«,Ü,μ,½B“–Žž,Éfof
 %of,f“^ÈŠO,Ìg^a,à¬–§,·,éB
 @Åä‰og^a,^a_fof‰of,f“A,»^,ÌŽÝ,^a_fNfVffffgfŠfAA•lg^a,Å,·B,»^,ÌŽÝ,^a_f”f@fCfVff,ÆŒÄ,Ì,ê,é^ê”ÈŽ–^A^ê”Ö
 %o^,^a_fVf...[fhf‰ø,Å,±,ê,Í’í^a•ž–,Å,·B,±,Ìg^a,Ì,±,Æ,ðf”f@f[,]fi,Æ,¢,¢AŽí©,Æ–ð,μ,Ä,¢,Ü,·B
 @,^,ç,É,±,ÌŽl,Ä,Ìf”f@f[,]fi,Ì,Ç,ê,É,à,®^,³,È,¢Å‰ø“w,Ìg^a,Æ,μ,Ä•s‰øÅG–,Æ,¢,¤IX,^a,¢,Ü,·B}•\,ðŒ©,é,ÆfVf...
 [fhf‰og^a,Ì‰ø,É^,¢,Ä,·,é,–,ÇAŠI”O,Æ,μ,Ä,Íu
 %o^v,Å,Í,È,
 ,ç,È,¢,©,à,μ,ê,È,¢,æ,¤,È^μ,¢,ðŽó,–,é,½,_,Å,·B

@ @s‰oÂG⁻,Æ,¢,¤ŒÄ,Ñ•û,à,·,²,¢,Å,μ,åBG,Á,ç,á,¢,¬,È,¢,ñ,^¾,æB,È,[°],©,Á,ää,©,ê,ç,ÍfPfKfŒ,Ä,¢,é,©,ç,Å,·BG,é,ÆfPfKfŒ,^a,¤,Â,éB,©,ê,ç,Ì[”]^½Ì,É, ,Á,ÄfPfKfŒ,©,çÅ,à‰o“,¢,Ì,^f of‰of,f“A,AE,¢,¤,í,¬,Å,·B

@ @,±,Ìf”f@f<fiiŽí©j,ÍŒ»Ý,Ü,Å,Â,Ã,¢,Ä,¢,Ü,·B,%/2,^¾Af of‰of,f“,Ìl,^aŒ»Ý,Å,à‘m—μ,δ,μ,Ä,¢,é,Æ,©AfNfVfffgfŠfA,^a,Ý,ÈŒRI,Æ,©A,»,ñ,È,±,Æ,Í, ,è,Ü,¹,ñB”_—,Ìf of‰of,f“,à,¢,ê,Ì[”]„,δ,μ,Ä,¢,éfVf...[fhf‰o,à,¢,Ü,·BŽí©,ÌZl,Â,Ì^a,¬,û,Ì[”]å,«,·,¬,é,Ì,ÅA,±,Ìg^a,Íž‘å,Æ,Æ,à,É,C,ñ,C,ñ×•^a%o»,³,ê,Ä,«,Ü,μ,%/2B×•^a%o»,ÍE<Æ,¤ŒŒ‰o,É,æ,Á,Ä,·,±,È,í,ê,%/2,æ,¤,Å,·,^aA,±,Ì×,©,í,ä,éfJ[fXfg§,Æ,¢,¤,Ì,ÍžA,Í,±,ÌfWff[fefB,Ì,±,Æ,Å,·B

@fvfŠf“fg,ðŒ©,Ä‰o[°],³,¢BŒ»Ý,ÌfCf“fh^¼•”,Ì, ,é[°],ÌZ—,δ[’]²,μ,%/2•\,Å,·Bf of‰of,f“,©,çfVf...[fhf‰o,Ü,ÅŽl,ÂA•s‰oÂG⁻,ðŠÜ,ß,é,Æ,T,Â,Ìf”f@f<fi,^a, ,Å,ÅA,³,ç,É,%/2,[fhf‰o,Å,àAfNf“fr[Af]{fŠ[Af\{f<AfXf^A[f<AfifB[È,C,ÌfWff[fefB,É[®],·,éIX,^a,±,Ì[”]o,É,Í,¢,Ü,·B,à,Æ,à,Æ,Í,»,ê,%/4,éA”_—A[”]AàHA[”]åHA[”]%o[®],^a,»,ÌfWff[fefB,ÌE]A,Â,Ü,èfWff[fefB,^aŽó,¬Œp,¢,Å,«,%/2ŽdŽ-A,Ì,æ,¤,Å,·B

@ @f”f@f<fi,àfWff[fefB,à,Ð,Å,^a,Ì,Í[”]•Ê,Æ[”]ê,Ì,Å,·Bg^a••Ê,ËB!Œ,ð[’],d,·,éŒ»‘äŽD‰oï,Åg^a••Ê,È,ñ,Ä, ,Å,Ä,Í,È,ç,È,¢,Å,·BŒ»Ý,ÌfCf“fh•{,à“-R,»,¤l,|,Ä,¢,ÄfJ[fXfg§,ð,È,

@,Å,àg^a••Ê,ð[”]Ö,Ì,Å,¢,Ü,·B,»,ê,Å,àA,±,ÌfJ[fXfg§,ÍS[”]R,È, ,È,ç,È,¢B[”]•Ê,Í‰oß[”]Z,Ì,±,Æ,Å,Í, ,è,Ü,¹,ñBfCf“fhŽD‰oï,Ì”

{,ð“Ç,ß,Ì,·,®,É,±,Ì-â‘è,É,Ô,ç, ,%/2,é,æB

@ @,%/2,Æ,|^,ÎA[”]ßfCf“fh,Å_“¹,ð[”]³,|,Ä,¢,é“ú-{l,Ì[”]b,ð“Ç,Ý,Ü,μ,%/2BŽq,Ç,à’B,ðW,ß,ÄŽw“±,μ,Ä,¢,é,ñ,Å,·,^aA,Ü,^¾¬,³,¢,Æ,«,Í,Ý,ñ,ÈŠì,ñ,Å-Zæ,è,ð,·,é,ñ,^¾,Å,ÄB,Æ,±,ë,^aWC,XÌ, ,É,È,é,ÆŒ[”],Ü,Å,%/2[”]ŠŽè,Æ,μ,©-Zæ,è,ð,μ,È,ß,·,é,ÆaX[”]g,Þ,ñ,Å,·,Å,ÄB[”]g,Þ,¬,Ç[”]ŠŽè,Ìg[”]Ì,ÉG,ê,È,¢,æ,¤,Éf f‡fC,Æ“[”]...,Ì[”][,ð,Â,Ü,Þ,æ,¤,É,μ,Å,ËB,»,Ì[”]ú-{l,ÌæJ,Í‰o,ß,Í—-R,^a•,©,ç,È,©,Å,%/2B‰o^½”N,©,μ,Ä^a,©,Å,%/2,ñ,^¾,Å,ÄBfJ[fXfg,^aá,¤,Æ[”]g,Ý,%/2,ñ,^¾B“Å,É[”]ŠŽè,^as‰oÂG⁻,^¾,Æ,ËBfCf“fh,Ìžq,Ç,à’B,à,WC,XÌ,,ç,¢,É,È,Å,ÄfJ[fXfg§,Ì[”]J‰o»,Ì[”]†,ÅJ,«Žn,ß,Å,¢, ,@fCf“fh,Å,ÍV[”],Å,ÌŒ[”]¥L,Æ,¢,¤,Ì,^a,·,ñ,Å,·BŽC[”]a,ÌfvfftB[f<,Æ,©Šó-]’ŠŽè,ÌdŒ,È,ñ,©,ðV[”],ÉÚ,¹,é,ñ,Å,·,^aA[”]K, ,ŽC[”]a,ÌfJ[fXfg,ðÚ,¹,Ü,·B,»,é[”]ÈŠO,ÌfJ[fXfg,Ìl,Æ,ÌŒ[”]¥,μ,È,¢,±,Æ,^aO[”]ñ,È,ñ,Å,·,æB

@,à,μ[”]á,¤fJ[fXfg,Ì[”]j-,^a-ö[”]¤,μ,ÄŒ[”]¥,μ,æ,¤,Æ,μ,%/2,ç,Ç,¤,È,é,©B[”]½^ae[”]o,âfJ[fXfg’‡ŠÔ,©,ç-Ò[”]^½Ì,Å,·B,»,ê,Å,àŒ[”]¥,μ,%/2,ç,Ç,¤,È,é,©,ÆA[”]ñl,ÌfJ[fXfg,©,ç[”]Ç[”]ú,³,ê,Ä[”]s‰oÂG⁻,É,³,ê,é,ñ,Å,·B[”]ñl,ÌŠÔ,ÉJ,Ü,ê,%/2Žq[”]Ý,à•s‰oÂG⁻,Å,·B,Æ,ñ,Å,à,È,¢,Å,μ,åBŒ[”]¥[”]•Ê,%/4,ËB@AE[”]•Ê,Í,Ç,¤,©B-á,|,Î, ,È,¹,%/2,^aCf“fh-·s,ÂfJf[”]fJfbf^,ÌH[”]o,É“ü,Å,%/2BfEfF[fgfŒfx,Ì,·Žo,³,ñ,^a[”]J,ðŽæ,è,É-^,Ü,·B”Þ-Í,Ç,Ìg^a,Å,μ,å,¤,©Bf of‰of,f“AfNfVfffgfŠfAH,»,ê,Æ,à[”]¼l,ÉfT[fifx,·,éŽdŽ-,%/4,©,ç‰o[”]wg^a,©,ÈH@ŽÀ,ÍH[”]o,È,ñ,©,Å[”]‰of,f“g^a,^¾,¤,Å,·B,È,[°],©^a,©,è,Ü,·,©B,à,μAfVf...[fhf‰og^a,Ìl,ðŒÙ,Å,%/2,çA,»,Ì[”]X,É,Ìf ofCfVff[”]Èä,Ìg^a,Ìl,Í-^,Ü,¹,ñBŽC[”]a,æ,è‰o,Ìg^a,Ìžò,^i,Å,%/2,èo,μ,%/2,...,âH,[”]¤,ðŒù,É,μ,%/2,çŽC[”]a,Ìg^a,^aPfKfŒ,é,©,ç,Å,·B[”]t,Éf of

fCf“f_Xf¶^{-3/4}
 %of,f“,^o,·HŽ-,È,ç,Ç,lg•^a,ìZÒ,Å,àŒÛ,É,·,é,±,Æ,^a,Å,«,éB,^{3/4},©,çŠwZ<A,è,âŽdŽ-<A,è,É,Ý,ñ,È,Å,ç,å,Á,ÆHŽ-
 ,És,±,¤,©A,È,ñ,Ä,±,Æ,ÍfCf“fh,Å,Í,·,é,|^,È,çB’N,©,ðŽC•^a,ì‰œÆ,ÉHŽ-,Éµ‘Ò,·,é,È,ñ,Ä,ç,¤,±
 ,Æ,É,Í”ñí,É,ŒoŽç,^{3/4},»,¤,Å,·B‘Šžè,^a“-,JfJ[fXfg,Å,È,
 @-@-—¥,Åg•^a§“x,^a”Ü’è,^3,ê,Ä,ç,Ä,à,±,ñ,È,Ó,¤,É,·•È,Í“±,ç,Ä,ç,é,ñ,Å,·B,ç,,ç^{’2},μ,Ä,à‘«,è,È,ç,
 å‘è,^{3/4},ÆŽv,ç,Ü,·B

@ @“Á,É,à,Ì,·,^2,ç••È,É,·,|,Å,ç,é,Ì,^a•s‰œAG-^,ÆŒÄ,Ì,ê,él,½,ç,Å,·B
 @,±,ì•s‰œAG-^,É,Ì,·,é••È,^a,Ç,ê,^{3/4},^-,·,^2,ç,©BŽRÛ‘f’j,Æ,ç,¤l,Ì-{,Å,Ñ,Å,
 -Šw,μ,Ä,ç,Ä’m,è‡,ç,å,½,
 ,Å,Ä,à,ç,¤,ñ,Å,·,^aA“cŽÉ“^1,ð‘-,Å,Ä,é“r’†,Å”,ç•ž,ð’...,½W’c,^a•ä,ç,Ä,ç,½B,»,μ,½,çŽRÛ,^3,ñ,Ìæ,Á,½fNf<f}
 ,^a,»,Ì’†,Ì’el,ðf|[f“,Æ,Í,È,½,ñ,^{3/4}BŽRÛ,^3,ñ,Ñ,Å,
 %œ^“]Žè,ìfCf“fhl,Ì—Fl,Í-^3Z<,μ,Ä‘-,è‘±,^-,é,ìBU,è•Ô,Á,ÄŒŒ,é,Æ“l,ê,½l,ÌŽü,è,É,Ý,ñ,È,^aW,Ü,Á,Ä,ç
 ,é,Ì,^aŒŒ,|^,½B‘,
 ,é‘½,ìfCf“fhl,à,Ì,Å,^a“»,¤,É’m,ç,ñ,Ö,è,ð,μ,Ä,ç,é,ñ,Å,·,æB,±,ê,Ì,D,“|^,°,^{3/4},Æ“-RŽRÛ,^3,ñ,ÌŽv,¤,í,-B
 @-，“úV•,É,D,“|^,°,ìŒð’ÈŽ-ŒÌ,ÌŽ-Œ,^aU,Á,Ä,ç,È,ç,©’T,·,^-,çÚ,Á,Ä,ç,È,çB,^{3/4},^-,ç,D,“|^,°
 ,ÍŽ-ŽÀ,^{3/4},©,ç<C,É,È,Å,Ä,μ,å,¤,^a,È,çB,»,±,ÅA”P,Í’m,è‡,ç,ìfCf“fhl,ð-K,È,Ä,±,Ì,±
 ,Æ,ð‘i,|^,Ä,Ü,í,é,ñ,Å,·,^aA,Ý,ñ,È,Íu,»,ñ,È,±,Æ,Í‘,
 ,·,é,ñ,^{3/4},ËB,·,ñ,È-A’†,Í,ç,¤,^{3/4},Å,Ä,ç,ç,ñ,Å,·A,ÆŒ^{3/4},í,ê,éB,Í,È,ç,ê,½l,Ì•s
 %œAG-^,^{3/4},Å,½,ñ,^{3/4},æBÖŒ,,ðŽó,^-,½ŽRÛ,^3,ñ,Í,»,ê,©,ç•s‰œAG-^,ÌŽÀ‘Ô,ð”P,ç,Ì’†,É“ü,Á,ÄfŒf|[fg,μ,Ä,ç
 ,Ü,·BM,ç,ê,È,ç,æ,¤,È~b,^a,±,ê,Å,à,©,±,ê,Å,à,©,Æo,Å,

@ @fCf“fh,ìŒ>-@,ÍfJ[fXfg§,ð”Ü’è,μ,Ä,ç,Ü,·BŽÀÜ,ÌŽç,ç,ê,Ä,ç,È,ç,È,ç,É,μ,Ä,à,ÈB
 @,±,ìŒ>-@,ðN‘,μ,½,Ì,^aCf“fh<¤a‘,ì‰œ“a-@-±‘åb,^{3/4},Å,½fAf“fx[fhfJf<(P,W,X,P`P,X,T,Uj,Æ,ç,¤l,Å,·B,±
 ,ìfAf“fx[fhfJf<,ì•s‰œAG-^og,È,ñ,Å,·B
 @fAf“fx[fhfJf<,ì•s‰œAG-^,Å,à-aŠO‘I,ÉŒoI“I,É-L,©,È‰œÆ’ë,ÉJ,Ü,ê,Ä ŠwZ,És,
 ,Æ,^a,Å,«,Ü,μ,½B,ÅAfzf“fg,ÉK‰œ^,Èo‰œi,ç,Æ,©,^a, ,Å,Äa‰œ ŠwZ,Éi,P,±,Æ,^a,Å,«,ÄA“^a,à-
 Ç,©,Å,½,Ì,ÅfAffŠfJ,Ì’åŠw,É-Šw,μ,Ä”ZŽm†,ð,Æ,Å,½,ñ,Å,·BfAffŠfJ,Å,Í•È,Í,È,ç
 ,©,ç,ËBfCf“fh,É<A,Å,Ä,©,ç•s‰œAG-^-•È,ð,å,ß,^{3,1},é‰œ^“®,ÌŽw“±ŽÒ,É,È,Å,Ä,ç,ë,ñ,ÈŒo‰œß,Å‰œ‘a-@-
 ±‘åb,É,È,Å,½l,Å,·B
 @,±,ìL,ì“
 à,É,à“š,|^,Ä,
 ,å,È,ÌB,»,ê,©,ç,Ì’ç,ÌŽzŠO,^a,·,è,Ü,·BI,í,Å,½,·,Æ,Í,Ì,ç,^aŠ‰œ,
 ,©,çA...·,μ,^a,·,Å,Ä,»,±,©,çfRfbfv,É,Ä,ç
 ,Å^ù,P,ñ,Å,·,^aAfAf“fx[fhfJf<,Í...·,μ,ÉG,ç,¹,Å,à,ç,|^,È,çB,»,μ,½,çAeØ,ÈfNf‰œfXf[fg,^a,ç,Ä...
 ,ð^ù,Ü,¹,Ä,
 ,ÄŒû,ðŠJ,^-,^3,1,éB,ÅA...·,μ,©,ç,»,ìŒû,β,^a,^-,Å...,ð,»,®,ìBjA,í,ê,í,ê,^a,»,ñ,È,±
 ,Æ,^{3,1},ç,ê,^{1/2},ç<üJ“I,^{3/4},æ,ËB,Å,àAfAf“fx[fhfJf<,É,Æ,Å,Ä,Í,»,ìfNf‰œfXf[fg,^a,ç,È“z,^{3/4},Å,½,ñ,^{3/4}B
 @,å,^a,Ä,·È,ç,È”pŽ~,ì‰œ^“®,ÉŽæ,è‘g,P,Ì,à-‰œð,Å,«,Ü,·,ÈB

@,Æ,±,ë,Å•s‰œAG-^lŒû,Í,ç,ê,ç,ç,ÆŽv,ç,Ü,·,©BfCf“fhlŒû,Ì-ñ“ñŠ,,à,ç,é,ñ,Å,·,æB•s‰œAG-^,Ì-

â‘è,ÍŒ^,μ,Ä,²,”,ÌŒÀ,ç,ê,½l,Ì–â‘è,Å,Í, ,è,Ü,¹,ñB, A
‰oð,Ì,È,ç,æ,¤,ÉB

@ @~b,ðŒ³,É–ß,μ,Ü,μ,å,¤B,±,Ì,æ,¤,Èg•¤§,ÌŽn,Ü,è,¤O,P,O,O,O”N,
‰of,f“³,Æ^ê‘Ì,Æ,È,Á,Ä,Ü,ê,Ä,«,Ü,·BÅ¤‰og•¤fof‰of,f“,Í_,ÉŽd,!,é,à,Ì,Æ,μ,Ä‘¼,Ìg•¤,ÌŽÒ,ðA,Ü, A¤,©,μ,Ä^Ð’ƒ
,Á,Ä,ç,é,ñ,¾,ËB
@,Æ,±,è,¤A,¾,ñ,¾,ñ“sŽs‘‰oÆ,¤¬·,μA“sŽs‘‰oÆŠÔ,ÌŒð^Ø,àŠ”,É,È,Á,Ä,
,Ä, ,efNfVfffgfŠfAA¤l,Ä, ,efofCfVff,¤ZÄ—Í,ð,Ä,¬,Ä,«,Ü,·Bfof‰of,f“,Ì‰º,Ä,Ø,ç,±,ç,μ,Ä,ç,é,±
,Æ,É•s—ž,ðŽ,Ä,æ,¤,É,È,é,ñ,Ä,·,ËB
@,â,¤,ÄA¤VŽ®,Ì,©,è,Ìfof‰of,f“³,É—
O,«‘¤,ç,È,çl,½,ç,É,æ,Á,ÄV,μ,ç“NŠwŽv‘z,¤,Ýo,³,é,Ü,·B,³,ç,ÉAfJ[fXfg§,ð”á”»,:éV,μ,ç@³,àoŒ»,μ,Ä,«,Ü,μ,½
B

ŽQI}‘D‰oîEEEE,à,¤,μÜ,μ,’m,è,½,ç,Æ,«,Í

‘—¼,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^ [flfbfg““XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”o,ñ,ÅA—{,Ìff[f^A‘•],È,Ç,ðŒ©,é,±
,Æ,¤,Ä,«,Ü,·Bw“ü,à‰oÄ”\,Ä,·B

•‰oÄG—\ .à,¤,D,Æ,Ä,ÌfCf“fh’mŒb,ÌX•¶ŒÉ cover	ŽRÛ‘f’j~BfJ[fXfg§“x,ÍA—ðŽjä,Ì–â‘è,Å,Í,È,çBŒ»Ý,à,Ä,Ä,ç,Ä,ç ,éfŠfAf<^fCf€,Ì–â‘è,Å, ,éB“ú—{1,É,æ,é•s ‰oÄG—\,ÌX,Ì“¤,©,ç,ÌMd,ÈfŒf [fg,¾,ÆŽv,¤BŒ,“I,Ä,μ,½B
•s ‰oÄG—\,Ì“¤,fCf“fh—O,Ì...’mŒb,ÌX•¶ŒÉ	ŽRÛ‘f’j~B“—¤B
fCf“fhŽD‰oï,ÆV•§³fAf“fx...“.... —ðŽj‘S“	ŽRèŒ³^ê~B,ç,å,Ä,ÆŠwp“IBfAf“fx[fhfJf<,ðÚ,μ,
•‰oÄG—\,ÆfJ[fXfg§“x,Ì—ðŽj cover	¬’JÝŠ”V~B,³,ç,ÉŠwp“IBä,Rû,Æ,Íá,Ä,ÄAfCf“fhŽjŒ¤†ŽÒ,É,æ,é —ðŽj,Ì—{,Ä,·B

‘æ20‰oñ@fCf“f_fX•¶-¾@,“,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É–ß,é](#)

[‘O,Ìfy\[fW,Ö
‘æ,P,X
‰oñ@fLfŠfXfg<³,Ì”](#)
[ôŒä,Ì“Œ¼f{’é“](#)

[ŽY,Ìfy\[fW,Ö
‘æ,Q,P
‰oñ@fEfpfjVffh“NŠw,ÆV@³](#)

¢ E j u[~][~]

@@‘æ,Q,P%oñ@@fEfpfjjfVfffbfh“Nšw,Æv@³@@

,PfEfpfjjfVfffbfh“Nšw

@ @fTfCfofo,Á,Ä,¢,¤l'm,Á,Ä,Ü,·,©B^éŽžŠú,æ,
 ,Æ,δ,·,éfCf“fh,Ì'ŽÒ,Á,·B<’†,©,çSD,δ,Ä,©,Ý,³/₄,μ,½,è,ËB,»,ÌSD,δ^ù,þ,Æ•a<C,¤Zj,Ä,½,è,·,é,ç,μ,¢BfAffŠfJ,â“ú-{,ÉMŽÒ,³/₂,
 ,é,æ,¤,Ä,·,¤A,Ì'TfCfofo,Ì'ŽA,Í“ñ‘ä-Ú,Å,P,O,O”N,
 ,Ü,μ,½Bj,ÌfTfCfofo,³,ñ,ÍA,»,ÌJ,Ü,ê•I,i,è,ÆŽ@I,μ,Ä,¢,éI,Å,·B
 @fCf“fh,Æ,¢,!,Ì,â,Í,è,_¢SEA@³‘ä’,ÅA,«,Å,ÆfCf“fh,És,¬,Ì,·,¢,¤l'ŽÒ,ÌfSffSf,¢,é,ñ,Å,·,æB½‰o¢,Ìf}fXfrf~,É,¤,Ü,
 {,É,à,Ð‰oñ,³,é,ñ,Å,μ,å,¤,ËBf}fXfrf~,É,à,Žæ,è,°,ç,é,AM•òŽÒ,à,·,Ü,è,¢,È,¢,æ,¤,ÈŒ»-ð,Ì'ŽÒ,âCsŽÒA^ësŽÒ,Í,½,
 {,Å“ç,ñ,³/₄,èAŽÈ^,ÅŒ©,½,³/₄,¬,Å,·,¤A-á,|,Î,Q,O”NŠO-§,Å,½,Ü,Ü,ÅA,ç,È,¢ësŽÒ,Æ,©AŽ©•,δ,P,O•½•Å,Ì-§Ž°,É•Å,J,±
 ,ß,Ä,P,O”NŠOí,Æ‰oñ,í,È,¢Cs,δ,μ,Ä,¢,éI,Æ,©A,i,é,í,é,É,Í-‰oð,Å,«,È,¢I,½,ç,·,¢,éB

@,±,é,Í,R,O,O,O”N,Ì““,È,ñ,Å,·BŒå,è,ð<,ß,ÄCs,Ì¢ŠE,É”ð,Nž,þI,ðfCf“fh,ÍŽY,Ý‘±,¬,Å,¢,éB
 @,±,±,©,çA‘O‰oñ,Ì,Â,Ã,«,É,È,è,Ü,·Bfof‰f,f“³,ÍOŽ®†SŽå[~],Ì@³,³/₄,Å,½B•VŽ®,Ì,â,è•û,Í”é“,Æ,μ,Äfof
 %of,f“g[•]a,Ì'ŽÒ,³/₄,¬,É“,|,ç,é,Ä,¢,«,Ü,·B,Æ,±,é,¤A,»,Ì•VŽ®,³/₄,¬,Å,Ì-O,«‘ç,é,ÆŽv,¤ZÒ‘B,“-,Ìfof
 %of,f“g[•]a,Ì’†,©,ç,Ä,·é,ñ,³/₄B,ÅA,©,é,ç,Í-§-Ñ,Ì‰oñ[,
 ,¤CsŽÒ,½,ç,Ì’†,Å™ X,Éi,ç,é,Ä,¢,Å,½“Nšw,¤ufEfpfjjfVfffbfh“Nšwv,Å,·BfEfpfjjfVfffbfh,Æ,Íu‰œ<i,·,¤,-j‘v,Æ-ð,μ,Ä,¢,éB‰œ[,¢^—
 ,ðŒê,é“NšwA,Æ,Å,à,¢,¤,Æ,±,é,Å,·B,±,ÌfEfpfjjfVfffbfh“Nšw,¤Œä,ÌfCf“fhŽv‘z,É‘å,«,È‰œ<ç,ð-^,|,é,±
 ,Æ,É,È,è,Ü,·BfCf“fhŽv‘z,lo”

@ @fEfpfjjfVfffbfh“Nšw,Í,ç,ñ,È,±,Æ,δ,¢,Å,Ä,¢,é,©B
 @,Ü,,ÍšO,ÌJŽ€É,Å,¢,ÄB,ÌŽ€ñ,³/₄,ç,C,¤,È,é,©B‰oñ“šu—Ö‰oð“]JvB
 @,·,×,Ä,ÌJ,«,Æ,μJ,¬,é,à,Ì,ÌJ,ÆŽ€,ð‰oñ“,ÉŒJ,è•Ô,μ,Ü,·BŽ€ñ,³/₄,çA,Ü,½,Ç,±,©,Å,È,É,©,ÉJ,Ü,ê•I,i,Å,Ä,
 ,É,Ü,½J,Ü,é•I,i,éB‰oñ“,É‰oñ“],μ,Ä,Ã,¬,éŽÒ—Ö,Ý,½,¢,é,à,Ì,Å,·B

@ @Ž€ñ,Å,àJ,Ü,é•I,i,é,±,Æ,ðfCf“fhl,Í,ç,¤“·,½,©,Æ,¢,¤,ÆA,±,é,Í,é,Å,·BŽ€Ê,±,Æ,¤é,μ,Ý,È,ì,Í-‰oð,μ,â,·,¢
 ,Å,·,¤AfCf“fhl,ÌJ,Ü,é,é,±,ÆAJ,«,Å,¢,é,±,Æ,à,é,μ,Ý,ÆI,|,éB[•]Qé[A‰œu•aAí-A“VDA, ,ç,ä,é•sK,ÌJ,É,Í,Å,¢,Å,Ü,í,éBj,«,é,±
 ,Æ,Í,é,É,ÆfZfbfg,È,ñ,Å,·B1,|,Å,à,ŒC,Å‰œ,³,¢BŒ»‘ä,Å,ÌJ,Ü,é,Å,¢,½fJ[fXfg,É,æ,Å,Ä,Í,à,Ì,·,²,
 ,é,ñ,Å,·,¤Bu|“xJ,Ü,é•I,i,Å,Ä,à,·È,½,Æ^é,É,È,è,½,¢,ív,È,ñ,Å,¢,¤fZfŠft,Æ,Í-³‰œ,È¢ŠE,Å,·Bâ‘ÌJ,Ü,é•I,i,è,½,È,ñ,©-³,¢,í,¬B,±,¤,¢
 ,¤fZfŠft,¤,Å,
 @Ž€ñ,³/₄, ,Æ‰œ½,ÉJ,Ü,é•I,i,é,©,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,·,¤A,±,é,ÌJ,«,Å,¢,éŠO,É,ç,ñ,Ès,¢,ð,μ,½,©,ÅŒ^,Ü,éBj,«,Å,¢,é,Æ,¢,¤,±
 ,Æ,ÍA,È,É,©,Ìs^×,ð,μ,Å,¢,é,í,¬,ÅA,»,Ìs^×,ðu<Æi,²,¤jv,Æ,¢,¤
 ,Ü,·B,ç,ñ,È<Æ,ðI,ñ,³/₄,©,É,æ,Å,AAŽY,ÌJ,¤Œ^“e,³,é,éBŠE‘P,ÉŒ³/₄,|,Ì“ç,é<Æ,ðI,þ,ÌA’Ž,¬,ç,ÉJ,Ü,é,é,©,à,μ,é,È,¢B,æ,¢<Æ,ðI,þ,Ì,Ü,μ,ÈJ,«•AlŠ
 Õ,Æ,©,ŒA,ÉJ,Ü,é•I,i,é,éB
 @IšO,ÉJ,Ü,é,½,Æ,μ,Ä,à,â,Ì,èJ,Í,é,Å, ,é,í,¬,ÅAIX,ÌŠè,¢,Í“ñ“x,ÆJ,Ü,é•I,i,ç,,É,·,þ,±,Æ,Å,·BfNf<fnf‰œð,é—Ö‰œð,Ì—Ö,©,ç”²,¬o,·,±
 ,ÆA,±,é,¤A,·ÌSè,¢B”²,¬o,·,±,Æ,ðu‰œð’Ei,°,³/₄,Âjv,Æ,¢,¤B
 @u—Ö‰œð“]Jv,Æu<ÆvA,»,μ,Äu‰œð’EvB,±,é,¤é,Å-Ú,ÌfCf“fgB

@ @“ñ,Å-Ú,Í‰œF^,Ì^—,É,Å,¢,Ä,Å,·BfEfpfjjfVfffbfh“Nšw,Å,ÍA‰œF^,Ì^—{^—E^—{Œ‘—,¤JÝ,·,é,ÆI,|,Ü,·B,±,é,ðufuf‰œftf}f“v,Æ,¢,¢
 ,Ü,·B,±,é,ð’†‘,ÅŠç-ð,μ,½,Ì,¤uži,Ü,ñjv,Æ,¢,¤Œ%—t,Å,·B
 @,ÅA“-RCsŽÒ,½,ç,Í,±,Ì^—uuf‰œftf}f“v,ðŽŒ•,Ì,à,Ì,É,μ,½,¢A,Å,©,Ý,½,¢,ÆŽv,¤B
 @,±,Ì‰œF^,Ì^—,Å,·,¤Af†f-f,·,¤fLfŠfXfg³,Å,±,é,ð_,ÆI,|Afvf‰œfgf“,È,çfCfffA,Æ,¢,¤,ñ,³/₄,é,¤,ÆŽv,¤B,ÅfLfŠfXfg³,¤fvf

fEfpfjfVfffh“NŠw,Æ□V□@³

^ö, Å, éÆ, ðg`l, É, Á, Ä, Ç, %• Žç, Äl, !, Ü, ·B·êş, ð, ·é, ±, ÄE, É, æ, Á, Ä‘O¢, ©, ç, , Á, Ä, ¢, Ä, ¢, éÆ, ðÁ, µAV, %½, ÈÆ, , æ, o, É, Á, «, é, Äl, !, %½B, » , l, %½, ß, É·êş, ÄE“O”ê, µ, %½sŽEJ, ðà, «, Ü, ·B

@@•sŽEЈ,Á,Ä•^a,◎,è,Ü,·,ËBЈ,«•”,δŽE,³,È,c,±,Ä,ËB•§^{<3},Å,àŽg,□Œ3%—t,^{3/4},©,ç’m,Á,Ä,ç,é,ËB,È,°AЈ,«•”,δŽE,³,È,c
,©•^a,©,è,Ü,·,©Bf[ffbfsp”I,È“®•^□Œì,_Ä,Í’S‘RŠÖŒW,È,c,©,ç,ËB—Ö‰öô“]J,δfCf“fh,Ìl,ÍM,J,Ä,ç,Ü,μ,½,ËBŽ€,ñ,^{3/4},ç
‰½,©•Ê,Ì,à,Ì,É,È,A,ÄЈ,Ü,êI,i,éB,±,±,Í,c,ç,Å,·,ËB,^{3/4},©,çA,½,ÄE,!„‰cá,~r,ÉŽ~ü,Á,ÄŒŒ,δ<z,Á,Ä,ç,½,çfpf“Ä,½,½,ç
,ÄŽE,μ,½,
@ØHŽå`~a“-,J”
,ÌÄ,«÷,É,È,Á,j,á,Á,½<,Í,D,å,Á,ÄE,μ,½,çŽO”N‘O,ÉŽ€,ñ,^{3/4}•ê,³,ñ,ÌJ,Ü,êI,i,è,©,à’m,ê,È,cB,»,¤l,|,½,ç,Ä,ÀH,×,ç,ê,Ü,¹,ñ,Ë
@,±,±,¤A•sŽEЈ,âØHŽå`~J,Ü,ê,Ä,,é—R,Å,·Bf_fCfGfbfg,Ì,½,ß,ÉØHŽå`~J,δ,μ,½,çl,Í—Ö‰öô,δM,J,Ä
‰œ,³,çB“÷,¤H,×,é<C,É,Í,È,ç,È,

@ @fWfffCfi³,ÍŒÝ,Å,àMŽÒ,ª,¢,é,æ,¤,Å,·B¤l,È,Ç,É½,
 ,æ,¤,Å,·B”_<Æ,ð,â,é,Æ“y,Ì†,Ìf~f~fY,â,È,ñ,©,ðŽE,·,©,à’m,ê,È,¢,©,çAŒÃ,
 @¤l,Å,Í,·,è,Ü,¹,ñ,³AfCf“fh“Æ—§,Ì•f,Æ,μ,Å‘,Œh,³,ê,Å,¢,éfKf“fW[,_àfWfffCfi³“k,Ì‰oÆ,É]Û,Û,ê,Å,¢,Û,·,È

, R•§³

@ @•§³,ÍŠJ‘c,ÍfKfEf^f}fVfbf_[f< f^i‘O,T,U,R`‘O,S,W,R jB‘,Í,Íufbf_BJ–v’N,ÍFX,Èà,^a, ,Á,Áfzf“fg,Í,AÈ,±,é,Í,x,fn[f]”fB[f‰,à““,JBfCf“fhl,Í–ðŽj,L~^,É, ,Ü,è»–,í, ,È,ç,ñ,Á,·,æB,C,ç,¤,!JŽ€,ðŒJ,è•Ô,·,ñ,Á,ËB”N‘ä,ðL~^,µ,½,Á,ÄŽd•û,á,È,ç,AÈŽv,Á,Á,ç,½,æ,¤,Á,·B
@fufbf_,AÈ,ç,¤,ÍuŒå,è,ð,D,ç,ç,½ŽÒv,AÈ,ç,¤,Ó–,Á,·BfKfEf^f}fVfbf_[f< f^È‘O,É,àfufbf_,É,È,Á,½ŽÒ,á,ç,¤,Á,ç,Ü,·BŠF,³,ñ,àŒå,è,ð,D,ç,ç,½,çfufbf_,AÈ–½æ,Á,Á,©,Ü,ç,Ü,¹,ñB,Ý,ñ,È,¤M,¶,Á,
@,æ,
‰Á,³,ñ,à,à,ç,Á,ÄAŽq,Ý,àŽY,Ü,ê‰½•sŽ©–R,Í,È,ç¶S^,ð‘–,é,ñ,Á,·,¤Al¶,Í–³Í,ðS,¶,Á,¤‰AÈ‘°,ðŽÍ,Á,Äo‰AÈ,µ,ÄCs,Í“¹,É“ü,è,Ü,·B
@X,É“ü,è,ÍŽ–,½,æ,¤,ÈCsŽÒ,á,½,
.é,©,ç,·,Á,Éf“[fK, ,Á,ÄAf“[fK,ìæ¶,É,Á,ç,½,±,AÈ,à, ,Á,½B’fH,à,â,Á,½,æ,¤,Á,·B’‡ŠO,á,±,ç,ÁŽ€,ñ,¾,ñ,¶,á,È,ç,©A,AÈŽv,¤,
.Í’fH,¾,Á,½B

@ @,Æ,±,ë,„,¢,ç‰œBEf,Eës,ð,µ,A,aA,„,A,Æ,âEä,ë,E,¢,I,A,·B,»,±,AAfKfEf^f},Iës,E,æ,A,A(Eä,ë,ð,Ð,
‰œ,ë,Ä,«,Ü,·B’‡ŠO,½,„,Í, ,¢,Â,ÍCs,ªê,µ,
@-¢,É‰œ,ë,Äì,Ì”È,ÅfKfEf^f},^ë‘§,Â,¢,Ä,¢,é,Æ,«,Å,·BCs,ð,â,ß,Ä,«,½,Î,©,ë,¾,©,çfKfEf^f},Í‘½•ªfKfŠf
,µ,Ä,¢,½,ñ,¾,ë,¤B“o,Ì“o,³,ñ,ºu,“-V,³,ñA,C,¤,¼v,Æf~fN,ðŒb,ñ,Å,
,±,©,ç,Æ,Å,½,ñ,Å,·,æB

@ @,À,¢,Å,É`b,μ,Ä,“,«,Ù,·,“A•§³,Å,àfWfffCfci³,Å,à‰%o,Å,àfCf“fh,Ì@³,É<¤”Ê,Å,·,“AŒå,è,ò,Ø,ç,¢,“‰œð’E,Å,«,é,Ì,ÍAo‰œÆ,μ,ÄCs,μ,Ä,¢,éł,^¾,–,Å,·,©,ç,ËBÝ‰œÆ,ÅA•”Ê,Ì•é,ç,μ,ð,μ,Ä,¢,éł,ÍŒ[^],μ,“‰œð’E,Å,«,Ù,¹,ñBÝ‰œÆMŽÒ,à~í,ê,é•§³,“J,Ù,ê,é,Ì,Í,·Æ,Ì,±,Æ,Å,·B
@,Å,ÍAÝ‰œÆ,Ìl,½,ì,Ì~ç,Í,Ç,±,É, ,Å,½,©B,»,ê,ÍACs,μ,Ä,¢,é,“-V,³,ñ,É,“•zŽ{,δ,·,é,±,Æ,È,ñ,Å,·B‰œð’E,Í,Å,«,È,¢,–,ê,ÇA‰œð’E,ð-ÚŽw,μ,Ä,¢,éł,Ì,“Že“,ç,ð,·,é,±,Æ,Å,æ,¢<æ,ðł,þ,±,Æ,“a,Å,«,éB,æ,¢<æ,ðł,þ,Ì,“xJ,Ù,ê•Ì,í,é,Æ,«,Éj,æ,è,Æ,“a,Å,«,éA,»,¤,ç,¤l,|,Å,·B

@,³,ÄAfXfWff|f¹,©,çf~fⁿN,ð,à,ç,çJ-½-Í,ª,æ,Ý,ª,|,Á,½fKfEf¹f},ÍA•í·ñZ÷,í‰º,ÁáÓ'z,μ,Ü,·B,»,¤,μ,½,ç,Á,ç,ÉŒå,Á,À,μ,Ü,Á,½,ñ,Å,·,ËBfufbf_,Æ,È,è,Ü,μ,½B

@ @,±,±,©,çæ,ªŒå,Ì•§³,Ì“WŠJ,É,Æ,Á,Ä‘åŽ–,È,Æ,±,ë,Å,·B
@Œå,Á,½fKfEf^f},Í,±,¤l,|,½B,±,ÌŒå,è,ÍA,Æ,Ä,àŒ^¾–t,Å•Œ»,Å,«,é,à,Ì,Å,Í,È,¢BŒ^¾–t,Åà^{-¾},μ,Ä,àŒë
‰œð,³,ê,é,^¾Í,–^¾B,^¾,©,çAl,É<³,|,é,Ì,Í,â,B,Ä,“,±,¤A,Æ,ËB
@,Æ,±,ë,ªA,·,®,ÉŽv,¢øÔ,μ,Ü,·B,¢,â,¢,âAŒå,è,É•ß,¢,Æ,±,ë,É,¢,È,^,æ, ,Æ^ê•à,Ì,Æ,±,ë,ÅŒå,ê,È,¢l,^,½, ,³,ñ,¢,éBŽ,,^ª³,|,ðà,
,Æ,É,æ,Á,Ä,»,¤,¢,¤lX,ªŒå,è,é,æ,¤,É,È,é,©,à’m,ê,È,¢B…–È,·,ê,·,ê,Åç,¢,Ä,¢,é~@,Ì‰œÔ,ðf f‡fC,Æ^ø,Á‘f,èä,°,Ä,â,é,±,Æ,Å…
ä,Åç,“,é,æ,¤,É,ËB…ä,ªŒå,è,Ì¢ŠE,Å,·B
@,Æ,¢,¤,í,“,ÅA•z³,ðŠJŽn,μ,Ü,·B•z³,ðŒ^S,μ,ÄÅ‰,Éo‰œi,Á,½,Ì,^,êšŽž‘ä,Ì‡ŠÔBfKfEf^f},^–,é,Ì,ðŒ©,ÄAu<êš,C,ç‘E
–Ž,μ,½“z,^¾,©,çA‘ŠŽe,É,‘, ,É,“,±,¤,¤v,Æ,©,ê,ç,ÍŽ|,μ‡,í,‘,é,Ì,Å,·,ªA•B,Ä,¢,Ä–,½fKfEf^f},ÌŠç,ðŒ©,Äu,±,¢
,Ä,ÍÌ,í,Á,½v,ÆŽv,¤B,³,ç,ÉfKfEf^f},Ì–@,ð•,¢,Ä”þ,ÌŒå,è,ðŠmM,μ,ÄÅ‰,Ì‘žq,É,È,Á,½,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,·B

@ @fKfEf^f},à,¢,½§³,Æ,Í,Ç,ñ,È,à,Ì,^¾,Á,½,C©B
@fL[f|fh,ÍŽl'úi,µ,½,çj,Æ”^{a3“1}i,Í,Á,µ,å,¤,Ç,¤j,Å,·B
@,Ü,Žl'úB,±,ê,ÍŽl,Å,Ì^—,Æ,¢,¤Ó_¡,Å,·B,Ü,^ê”Ô—Ú,Ì^—Al¶,Íê,Å, ,éB,±,ê,Í,¢,¢,Å, ·,ËBfEfppffbfh,ÌŠi—{,Å,·,ËB“ñ”Ô—ÚA^ê,µ,Ý,É,ÍŒ^ö,“,éBŽO”Ô—ÚAŒ^ö,ðZæ,èœ,_,Íê,µ,Ý,àÁ,!,éB,“,¤A,È,©,È,©_—“I,Å,·,ËBŽl”Ô—ÚAŒ^ö,ðZæ,èœ,•ù—
@,Í”^{a3“1},Å, ,éBŠú‘Ô,“,Ü,è,Ü,·,ËB”^{a3“1},Á,Ä,È,ñ,Å,µ,å,¤,ËB“,
@,,Ì”^{a3“1},Å,·B,,Ü,Á,½Šú‘Ô,ð,¢
.«,È,èfXfJ,µ,Ä,·,ê,Ù,·B”^a,Å,Ì³,µ,¢^{“1},Å, ·B^êA³,µ,Œ©,éB“ñA³,µ,l,!,éBŽOA³,µ,~b,·BŽlA³,µ,s“®,·,éBŒÜA³,µ,¶S^,·,éB~ZA³,µ,“w—
Í,·,éBŽµA³,µ,Žv,¢,®,ç,·B”^aA³,µ,¢S,ð’u,
@,±,ê,Í,¢,Á,½,¢%½,È,ñ,Å,µ,å,¤B“—,½,è‘O,Ì,±,Æ,¶,á,È,¢,©A,ÆŽv,¢,Ü,¹,ñ,©B,»,¤,È,ñ,Å,·B,Å,à,±,ê,³•§³,Ì“Á¥
,È,ñ,Å,·Bfufbf_,ÍêS,ð”Û‘è,µ,Ü,·BÉ’[,ð]_,_,éB’†“1,Æ,¢,¤B
@fWffffCfi^{<3},É”ä,‘,x,é,ÆfnfbfLfS,µ,È,¢³,!,Ì,æ,¤,ÉS’,¶,Ü,·,ªA“—Žz,Ìl,É,Æ,Á,Ä,Í,±,Ì,±,Æ,ªt,ÉV‘N,^¾,Á,½,ñ,Å,Í,È,¢,©,ÆŽv,¢
,Ü,·B,^¾,Á,ÄA—½,ð—Ž,Æ,·,Ü,ÇêS,·,é,Ì,“—,½,è‘O,Ì†,Åfufbf_,ÍêS,ð”Û‘è,µ,ÄA—_,É,æ,Á,Æé,¢^{“1},ðZ|,µ,½,ñ,Å,·,©,çB

@ @fWfffCfi³,Í; ,À,àMŽÒ,³,ñ,^,ç,é,AÈ[~]b,μ,Ù,μ,%/z,^aA•§<³k,Í,Ù,Æ,ñ,Ç,ç,Ù,¹,ñB,P,R¢*<*¹%o,ßC•§<³,Ì³'c^a<'n,À, ,Á,%/frfNf%of}fVf%o
[Ž>%o@,Æ,ç,¤,Ì,^afCfXf%of€[~]Í,É"j‰o³,^,ê,ÄfCf“fh,Ì•§<³,ÍÁ,|,Ù,μ,%/BŽ>,‰o³,^,ê,%/z,,ç,ç,À⁻³,
,Æ,ÍA,à,¤,·,À,É"ê"È[~]O,ÌMŽÒ,^a,ç,È,©,Á,%/z,AÈžv,¤B'”“,Ìl,|•û,ÍfCf“fh,À,ÌžO,~,‰<,©,Á,%/z,©,à'm,ê,È,çB
@Œ»Ý,ÌfCf“fh,Ì•§<³k,Í'0%oñb,μ,%/fAf“fx[fhfJf<,Éžn,Ù,è,Ù,·BfAf“fx[fhfJf<,Ì•s‰AG[~]%oð•ú,Ì‰o^“®,ð‘±
,,ÄAŒ<çfJ[fXfg§,^a, ,éŒÀ,è•Û,Í,È,
‰i,Á,%/z,ñ,À,·BfJ[fXfg§,Ì,È,çfCf“fhŽD‰i,ði,é,%/z,ß•§<³,É‰ü@,μ,%/B,Ý,ñ,È,É,à‰ü@,ð,·,·,ß,Ù,μ,%/B
@,%/z,%/4A‰ü@,μ,%/z,Ì,ÍfAf“fx[fhfJf<,Æ“-,Ì•s‰AG[~],ÌfJ[fXfg,Ìl,%/z,~,À,μ,%/BŒ»Ý,À,à,»,êÈŠO,Ìl,É,Ì,È,©,È,©L,^a,À,À,ç,È,ç,æ,¤,À,·B

‘-¼,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^flfbfg“XufAf}f]f“v,lfy[fW,É”ò,ñ,ÅA-{,lf[f^A•],È,C,ðŒ©,é,±,Æ,ª,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰oÅ”\,Å,·B	
<u>čSE.Ì</u> —ðŽji3jŒA·äfCf“fh,Ì•]—¾,ÆŽD%ci cover	žRè Œ³^é~BŒÄ ‘äfCf“fhŽj,ð^b,·,ÆA,C,¤,μ,Ä,àŽv‘zŽj,ÉÌ,Á,Ä,μ,Ü,¢ ,ª,ç,Å,·BŽ,,lŽö<æ,ÍA,»,l“TŒ^B‘«,è,È,¢•ª,ÍA,º,D,±,¤,¢,¤ŠTå‘,Å,“,¬,È,A,Ä, .ê,Íê”ÔAAÅ·ß,lfVfŠ[fYB
<u>čSE.Ì—ðŽjq6rŒÄ·äfCf“fh</u> <u>%eo•]ŒÉ</u>	“ì ŒŽl~Y~ B,±,ê,à’è”ÔA‰oÍo‘-[,lučSE,Ì—ðŽjvfVfŠ[fY,ÌêÛB

‘æ,Q,P‰oñ@fEfpfjjfVfffbfh“NŠw,ÆV@³@,,”,í,èfgbfbfyfy[fW,É–ß,é‘O,lfy[fW,Ö
‘æ,Q,O‰oñ@fCf“f,fX•]—¾žY,lfy[fW,Ö
‘æ,Q,Q
%oñ@fCf“fh,Ì”‰o¤’Œi‘åæ•§³Afqf“fhfD[³]j

第22回 インドの諸王朝（大乗仏教、ヒンドゥー教）

マウリヤ朝

ガンジス川流域に生まれたいくつかの小王国の中から強国が成長してくるのが前5世紀頃です。代表的な国がコーサラ国とマガタ国。

前4世紀の末になって、はじめて北インド全体を統一する王朝が登場します。これがマウリヤ朝（前317～前180）。首都はパータリプトラ。建国者がチャンドラグプタ。この人はインド史では非常に大事。何が大事かというと、年代確定のキーパーソンなんですね。

インドの人たちは輪廻を信じているからあんまり歴史記録に関心がない。どんな事件がいつ起こったかなんていうことをあまり熱心に書き留めておきません。だから、インド史は難しい。ブッダの生没年にしても諸説あることは前回も言いました。

ところが、このチャンドラグプタはいつの人がハッキリ分かる。なぜかというとギリシア人の記録にでてくるのです。例のアレクサンドロス大王が東方遠征に出て、インドに侵入したときにかれを迎え撃ったのがこのチャンドラグプタだったのです。で、いつの人がハッキリ分かるのでかれを基準としてインドの古代の歴史は編まれています。

チャンドラグプタはインダス川流域からギリシア人勢力を追い払い、その勢いでマガタ国に取って代わりマウリヤ朝を建て、北インドを統一した。

マウリヤ朝の三代目の王が有名なアショーカ王（位前268～前232頃）です。

かれはインド全土をほぼ統一。インド亜大陸の南端だけは領土になっていないので、ほぼ統一という。仏教との深い関係でも有名です。アショーカ王は南方のカリンガ王国という国を滅ぼしたとき数十万人を虐殺した。それをあとで後悔して仏教に帰依したと伝えられています。政治も暴力ではなくダルマによる支配を行うようになった。このダルマというのは「法」と訳していますが法律ではなく、道徳的な徳目と考えて下さい。このダルマは仏教の教えに影響されているようです。

アショーカ王はこのダルマを刻んだ石柱碑、磨崖碑（まがいひ・崖に刻んだ碑文）を各地に作りました。この石柱碑が発見されるとアショーカ王時代にマウリヤ朝の領土だったことが確定するわけです。写真の石柱碑見て下さい。丸い円柱で、てっぺんに獅子の像が刻んであるね。この獅子の台座に注目。これは車輪ですね。クルクル廻る車輪は輪廻の象徴です。この車輪は現在のインド国旗の真ん中にも描かれています。インド人の世界観が見えてくるようですね。

また、アショーカ王は第三回仏典結集をおこなった。結集は「けっじゅう」と読みます。伝統的な読み癖です。仏典結集というのはブッダの教えが時とともに食い違っていかないように、各地の仏僧が集まってそれぞれのグループが伝えているブッダの教えを確認しあうのです。

第一回仏典結集はブッダの死後すぐにおこなわれ、第二回はそれから約100年後、そしてアショーカ王が主催したのが第三回です。

面白いことに当時はまだブッダの教えを文字に記録していないんですよ。だから、口伝でブッダの教えが伝えられていて、その教えを確認するためにやはり、ずっと誰かが暗唱する。それを聞いて他の僧たちが、「それでいいのだ」と確認するわけ。ブッダの教えが文字に記録されるのが一世紀くらいからだそうです。口伝の伝統はお経に残っていて、すべての仏典は「私はこう聞いた」という意味の言葉から始まっているんです。日本に伝えられている大乗漢訳仏典もそうです。ブッダの弟子が、「師の教えをこんなふうに聞きました」と確認している結集の口調がそのままなんですね。

アショーカ王は、また南のセイロン島に王子を派遣して仏教を伝えさせたともいわれている。

アショーカ王は仏教がらみの話題が多いのですが、実際にはジャイナ教も保護しています。バラモンの権威に反対する宗教ならすべて応援したんでしょう。

クシャーナ朝

マウリヤ朝はアショーカ王が死ぬと分裂していきました。次に重要な王朝がクシャーナ朝（1世紀～3世紀）。これはイラン系の民族が支配者でインドというよりは現在のアフガニスタンに根拠地があるのですが、インドの西北部も支配した、という国です。首都はプルシャプラ。

この国はやはり仏教との関連で重要。一つはカニシュカ王（位130～170頃）が、仏教を保護し第四回仏典結集をおこなったこと。

二つ目として、この王朝でガンダーラ美術と呼ばれる仏教美術が成立した。資料集の写真を見て下さい。仏像です。そもそも、インド人には仏像を作る風習はありませんでした。ブッダの生涯を描いた彫刻などがあってもブッダの部分だけは空白で表していたんです。これはユダヤ教、キリスト教的な偶像崇拜禁止ということではなく、解脱してこの世界のものではなくなつたことを空白で表現したんだ。

ところが仏教がクシャーナ朝でも流行する。クシャーナ朝の本拠地は中央アジアを含みます。ここにはアレクサンドロス大王の置きみやげ、残されたギリシア人たちの子孫がいた。ギリシア文化は彫刻大好きですからね。多分仏教信者になったギリシア系の人々がブッダをはじめて彫刻に刻んだんでしょう。それがガンダーラ美術と呼ばれるものです。だから仏様の顔も服もなんだかギリシア風です。

三つ目は、この国で大乗仏教が栄えたこと。この大乗仏教とガンダーラ美術が中央アジアを通じて中国、そして朝鮮半島、日本に伝えられることになるわけです。

大乗仏教について

大乗仏教についてここで簡単に説明しておきましょう。

前回も説明したようにインドの宗教は出家して修行しなければ解脱できません。救われない。しかし、すべての人が日常生活を放棄して出家できるわけではないので、その人たちは修行者にお布施をしたり徳の高いお坊さんのそばにいられることで満足していた。

さて、そこでブッダが死んだ時の話です。ブッダが死んだ時、修行を積んだ弟子たちはこの世の無常であることを知っているからじっと悲しみに耐えている。入門したての弟子たちはそこまで悟っていませんからワーンワーンと泣き叫ぶわけね。

在家の信者たちはどうかというと、かれらはブッダの高い徳を慕っていたわけだから当然嘆き悲しむ。出家した修行者たちのようにクールになる必要は全然ないので、亡きブッダに対して執着する。簡単に言うと少しでもブッダのそばにいたい、かれの亡骸を守りたい、と思った。そこで在家信者たちはブッダの遺骨を埋めてその上に塔を建てます。この塔を「ストゥーパ」というんですが、ストゥーパにお参りしてはブッダを偲ぶような形で自分たちのストゥーパ高17m 信仰を守りました。

ブッダの信者はインド全域にいたので信者のグループがいるところにはどんどんストゥーパが建てられた。その地下には分けてもつらってきたブッダの遺骨の一部を埋葬するんです。このストゥーパは仏教の広がりとともにアジア各地に広がっていきます。日本にもありますね。例えば有名な法隆寺の五重塔。あれはストゥーパが中国風に形を変えたモノです。だから、あの五重塔の下にもブッダの遺骨の一部が埋葬されている、ことになっている。日本全国あらゆるお寺の塔の下にはある、ことになっている。

世界中の仏塔はどのくらいあるか分からないほどたくさんある。だからブッダの遺骨はどんどん細かく分けられて米粒みたいに小さくなっている。このブッダの遺骨のことを仏舎利（ぶっしゃり）というんです。寿司屋さんで米のことをシャリというのはここから来ているらしいです。

どこかで読んだんですが世界中の仏舎利を集めたら数十人分の人骨になるそうです。でもこれが信仰というものでしょうね。少しでもブッダの側にいたい、という気持ちがそれだけ強かったと言うことです。

ブッダを慕う気持ちが強ければ強いだけ、在家信者たちはブッダが死んでしまっていることに耐えられなくなる。そういう在家信者に共感する修行者や仏教理論家たちがいたんでしょう。かれらの中から大乗佛教が生まれてきます。

というわけで、大乗佛教の特徴はまず、大乗なことだね。これは大きな乗り物ということです。在家信者も悟りを得て解脱することができると教えます。出家修行者だけではなく在家の信者も悟りの世界つまり彼岸（ひがん）に載せていくってくれる大きな乗り物。大乗です。これに対して出家者しか悟ることのできない従来の佛教を大乗側は小さな乗り物、小乗佛教といつてけなします。

また大乗佛教は歴史上の実在したブッダ以外に理念としてのブッダの存在を考えます。ブッダの教えを法、ダルマといいますが、そのダルマそのものがブッダである、と考える。宇宙の法則の中に永遠のブッダが存在している。そう考えれば寂しくないでしょ。

大乗は歴史上のブッダ自身の教えと違うじゃないかという人が昔もいたし今もいます。ただ一般的な理解

としては、大乗も仏教です。ブッダの教えが理論的に発展していったものと考えたらいいと思います。ブッダが悟りをひらいたときには誰にも理解できないから、法を説くのはやめようと思ったけれど、考え直して布教活動を始めたと前回話しましたが、この辺がポイントかなと思うんですよ。そのようなブッダであれば、在家信者を見捨てる事もないはずだ、在家信者も悟りをひらけるまで教えを説き続けてくれるはずだ、という考えが生まれる。菩薩というのがそれです。大乗では菩薩というものを考えました。菩薩は悟る力があるんだけれど、他のみんなが悟りをひらけるようになるまで待っていてくれる。他のみんなが悟りをひらけたときにはじめて菩薩も悟りをひらく、そういう有り難い修行者です。菩薩は現実にいるかもしれないし、理念的宇宙的な存在としてある者もある。仏に対する信仰とともに菩薩に対する信仰も生まれて色々な菩薩が考え出されました。なんだかややこしいけど、理解できるかな。理解より、信じれるかどうかの問題かも知れないけどね。

大乗仏教の理論を大成した人として覚えておかなければならない人がナーガルジュナです。龍樹（りゅうじゅ）と漢訳しています。龍樹菩薩とも呼ばれる。2世紀から3世紀にかけての南インドの人です。大学時代に彼の本を読みましたが哲学書として今読んでも面白いですよ。あまり理解はできていません。「依存関係による生起」というフレーズが仲間内で流行った。愛があるでしょ、私とあなたが愛し合っている。愛はどこにあるか、私の中にあるのか。ノー。あなたのの中にあるのか。ノー。あなたと私の間にあるのね。愛は関係なんですよ。あなただけでも私だけでも、そこには愛はない。二人がいてもしない。二人の間に、関係の中に愛がある。「依存関係による生起」です。川はどこにあるか。ここにあると僕らは思うが、実はない。それは水と、それが流れる大地のえぐれに過ぎない。水とその運動と大地の関係が川です。川は関係に過ぎない。これも「依存関係による生起」。こうして関係に分解していくと実在するモノがなんにも無くなってしまうんです。これが「空」。これも大乗仏教の重要な概念。「色即是空、空即是色」って聞いたこと無いですか。般若心経のフレーズ。この「空」です。

ちょっと煙に巻いてしまったね。ま、大学ではこんな事をやるという話。

お経はブッダの言葉を弟子たちが伝えそれをまとめたモノなんですが、大乗仏教はブッダが死んでから成立したんですね。ブッダの言葉ではないじゃないか、といわれればそういうことになる。ただ、ブッダということは悟った人ということだからね、ガウタマ=シッダールタでなくても悟った人の言葉であればお経であっていい、という理屈にはなる。

じゃあ一体大乗仏教のお経は誰が書いたのかというとこれが全然分からぬ。

ナーガルジュナには伝説があって、かれは竜に導かれて海底の竜宮城に行ったことがあるという。そこでお経をたくさんもらって帰ってきたというんだ。なんだか分からない世界ですが、ひょっとしたらナーガルジュナが書いたお経もあるかも知れないね。大乗經典成立の謎というのを空想していると私は楽しい。名も無き仏教僧たちがどこかでお経を書き続けていたんだ。

では悟った人が書けばお経として認められるかというとそれはダメで、インドで書かれていることが条件みたいです。中国で書かれたお経とかもあるんですが、インドでの原典が無いモノは偽經といってニセモノ扱いされています。

話がどんどんそれましたが、クシャーナ朝とナーガルジュナの活躍した時代は重なるわけで、この時期に大

乗佛教がどっとインドで流行したんでしょう。

その他の王朝

クシャーナ朝は三世紀中頃には崩壊します。

次に重要な王朝がグプタ朝（320頃～550頃）です。クシャーナ朝がイラン系だったこととは対照的に、このグプタ朝は純インド王朝で、北インドを統一しました。インド伝統文化の復興というのがこの王朝のテーマです。

建国者がチャンドラグプタ1世。次のチャンドラグプタ2世の時が最盛期です。マウリヤ朝のチャンドラグプタさんと名前は同じですが、まったく関係ないので混乱しないように覚えて下さい。チャンドラグプタ2世の時に中国から仏教研究のために法顯という坊さんが来ました。こういう横の関連は受験ではよくきかれることろです。

この王朝の時には仏教美術が盛んに作られます。ガンダーラ美術と違って純インド風でグプタ美術と呼ばれています。アジャンター石窟寺院に残された壁画が特に有名。資料集に写真がありますがこここの壁画と非常に似た絵が法隆寺金堂に描かれています。

それから受験的には、この時代のカーリダーサという人が書いた「シャクンタラー」という戯曲はよく出題されます。

この王朝は5世紀中頃から中央アジアのエフタルという遊牧民の侵入によって衰退していきました。

グプタ朝の崩壊後北インドは分裂時代が続くのですが古代インドの最後の大規模王朝がヴァルダナ朝（606～647）。建国者がハルシャ＝ヴァルダナ。この王朝はこの王様一代限りで崩壊しました。

この国には中国から玄奘という坊さんが仏教を学びにやってきました。玄奘というのは三蔵法師という名で『西遊記』にでてくる坊さんです。彼の旅行記にこのヴァルダナ朝が出てくるんですね。それで有名ということです。

南インドの王朝で重要なのがサーダヴァーハナ朝（前220頃～後236）。

この国はローマ帝国と貿易をおこなっていたことで有名。

ヒンドゥー教

仏教やジャイナ教の流行でバラモン教はどうなったかという話です。バラモン教は民間信仰をどんどん採り入れて徐々に変身します。バラモン教が民衆化した宗教をヒンドゥー教といいます。現在のインドの8割近い人がこのヒンドゥー教の信者です。

いつからバラモン教がヒンドゥー教に変身したかといわれるとハッキリしたことは分かりません。ただ、グプタ朝の時には確立していたようです。

ヒンドゥー教の特徴は多神教であることと、カースト制を積極的に肯定していることです。ヒンドゥー教はたくさん神さまがいます。代表的な三大神がブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ、です。ブラフマーは創造の神、ヴィシュヌが世界維持の神、シヴァが破壊の神です。破壊の神シヴァが一番人気があるようです。破壊するというのは次の創造につながるからと説明されますが、単純に破壊することはぞくぞくする快感があるんでしょうね。砂場に作った山をガーッと蹴散らす快感って経験あるでしょ。それをやるのがシヴァ神。

インドの二大叙事詩に「マハーバーラタ」「ラーマーヤナ」というのがあります。これは徐々に話が整えられていってグプタ朝の時期に完成されたといわれています。現在でもインドだけではなくインドネシアなどでも広く知られて愛されている物語なんですが、同時にこれらの叙事詩はヒンドゥー教の經典でもあるのね。

「ラーマーヤナ」はラーマという王子が主人公の話。あらすじだけ簡単に言っておくとラーマの妃がスリランカに住んでいるラーヴァナという男にさらわれてしまう。ラーヴァナは巨人とか魔人とかの仲間がいて手強い。ラーマは妻を取り返すのに苦労するんです。そのラーマにハヌマーンというサルの神様が力を貸してくれて無事妻を取り返したという筋です。

『西遊記』の孫悟空はこのハヌマーンがモデルらしい。桃太郎の鬼退治にサルがでてくるのも関係あるかもね。

「マハーバーラタ」は滅茶苦茶長くてスケールの大きい話です。

これはバーラタ王の子孫クル族という部族が二つに分裂して、インド中を巻き込んで大戦争をする話です。その決戦にこんな場面がある。

主人公の一人にアルジュナという王子がいます。強い戦士なんです。そのかれが両軍が向かいあって対峙している時に、敵陣に向かって出撃します。戦車に乗っているんですが、その戦車の御者がクリシュナという人物。この人は別の国の王なんですがアルジュナの軍に助太刀で参加している。人間なんですが実はヴィシュヌ神の化身なんです。

敵陣に突進する途中で急にアルジュナは迷いに落ちる。で、両軍の真ん中で戦車を止めさせます。どうしたのかと問うクリシュナにアルジュナはいうんです。「一族のものや仲間や先生を殺して良いものか」とね。敵の軍といっても同じ一族が別れて争っているんだから、親戚とか昔の親友や師匠が敵軍にいるわけです。これに対してクリシュナがいかに生きるべきかを語る部分がある。これがすごい。クリシュナは言うんだ。

「迷わず殺せ！」

納得できないアルジュナにクリシュナはその理由を延々と語ります。これがヒンドゥー教の神髄で、この部分だけが特に取り出されて「バガヴァッド・ギーター」という本になっています。

クリシュナは言う。「すべて生きるものは輪廻から逃れられない。いつか死んでまた生まれ変わらんだから、何時死のうとそれは大した問題ではない。」だから殺すことを迷うな、いつか必ず死ぬんだから今おまえが殺したって同じ事だ、というんだね。すさまじい発想です。一步間違えると殺人を正当化するどこかの新興宗教みたいになってしまいそうですね。

さらに言う。「おまえはクシャトリアである。クシャトリアの義務は戦うことにある。だから戦うことには迷うな。義務を果たせ。」義務を果たさないことは不名誉なことです。

ヒンドゥー教はカースト制を肯定しますからね、当然出てくる発想です。自分のカーストにはずれない行いをせよ、ということだ。

ヒンドゥー教徒ではない立場からすると滅茶苦茶なことを言っているように聞こえる部分もあるね。しかし文学作品ですから読んでみると心を揺さぶるような表現で語られているんですよ。

「あなたの職務は行為そのものにある。決してその結果にはない。行為の結果を動機としてはいけない。また無為に執着してはならぬ。」

わかるかな。結果を恐れることなく、なんじのなすべき事をなせ、といっているのです。こんな言葉だけを取り出すと結構勇気出てくるところもある。だから最近注目されているようです。

このような文学とともにヒンドゥー教の立場からの法も成立してきます。「マヌの法典」です。これもいつ頃作られたかはつきりしませんがグプタ朝の時代に完成しています。当時の社会的規範や慣習を体系化したものです。これによってカースト制が固定化されたとされています。

ヴィシュヌ神はいろいろなモノに化身する神ですが、いつの頃からか仏陀もヴィシュヌの化身とされました。一時はクシャトリアやバイシャに支持された仏教もヒンドゥー教に吸収されたわけです。結局カースト制度は消えることなくヒンドゥー教とともに現在までインド社会に生き続けたのです。

参考図書紹介・・・・もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[インド仏](#)

[教思想史](#)

[〈上〉](#)

ひろさちや著。一般向けの宗教関係の著作がたくさんある人だが、この本は、ものすごくわかりやすく、面白いです。大乗仏教が発展していく過程は、初めて読むエピソードが多かった。

[インド仏教思想史](#)

[〈下〉](#)

私の授業でも多くを負っています。今は、手に入りにくいそうです。

[インド神話入門と](#)

[んほの本](#)

長谷川明著。インド神話に登場する多くの神々を、コンパクトにわかりやすく解説している。「ラーマーヤナ」「マハーバーラタ」の物語もちゃんと載っている。これ一冊あれば、インド神話はバッヂリ。図版も多く、お得な本。

[バガ](#)

[ヴァッ](#)

[ド・ギー](#)

[ター岩波](#)

[文庫](#)

上村勝彦訳。訳者による解説と「マハーバーラタ」の要約つき。上村氏は、「マハーバーラタ」の原典からの全訳をちくま文庫で刊行していたが、志半ばでお亡くなりになった。合掌。

[大乗經典](#)

[を読む講](#)

[談社現代](#)

[新書](#)

定方晟著。主な大乗仏典を、わかりやすく大胆に現代語訳した意欲的な本。これで、お経に何が書いてあるか、初めて知った私です。大乗のお経が、こんなにスペクタクルとは思っても見なかつた。おもわず、文学的想像力をかきたてられてしまった。ただし、この本も入手しにくらしい。なぜ、いい本がすぐに消えてしまうのだろう。

[世界の名](#)

[著2大乗](#)

[仏典\(2\)中](#)

[公バック](#)

[ス](#)

これも主な大乗經典を、現代語訳したものだが、学術的な翻訳（？）なので、上の本のように、すらすらと読めない。これも、古本でなければ、手に入りにくいかも。

第22回 インドの諸王朝（大乗仏教、ヒンドゥー教）おわり

[前のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第21回 ウパニシャド哲学と](#)

[新宗教](#)

[次のページへ](#)

[第23回 黄河文明](#)

第23回 黄河文明

1 黄河文明

いよいよ中国です。

黄河文明が黄河中流域で誕生するのが前5000年頃です。

黄河文明の前半を仰韶文化（前5000～前3000年頃）といいます。仰韶は「ぎょうしょう」または「ヤンシャオ」と読みます。代表的な遺跡から名前がつけられています。特徴は土器で彩陶と呼ばれる土器がでる。これはメソポタミア文明の彩陶とよく似ているので何らかの影響があるともいわれています。写真を見て下さい。土色の土器に赤い模様が描いてあるでしょ。これが彩陶。

後半は龍山文化（前2900～前2000年頃）。読み方は「りゅうざん」または「ロンシャン」。黒陶、灰陶という土器がでます。黒陶が龍山文化の特徴で、これは見たとおり真っ黒な土器です。ろくろを使い高温で焼き上げたらしい。彩陶に比べて薄手でしかも固い。高度になっているわけだ。で、多分この黒陶は特殊な目的のために作ったモノで、日常生活で使ったのが灰陶だと思われます。こちらは見たとおり黒陶に比べたら気楽に作った感じです。ただ、形は面白いものがある。三本足の土器があるね。これは水などを入れてこの三本足の下で火を焚いて煮炊きしたらしい。

黄河文明とは別に最近は長江流域に遺跡群が見つかっています。河姆渡（かぼと）遺跡という長江下流の遺跡では稻作の跡が見つかっている。この辺は気候風土も日本列島に似ていて、日本への稻作は案外こんなところから直接伝わったのかもしれません。中国南部から台湾、琉球列島、朝鮮半島南岸、日本列島も含めて太平洋地域には似たような風俗が残っていたりするんです。地図を見ていると中国南部は遠いように感じるけれど、海というのは人と人を隔てるものではなくて重要な交通路でもあった。遣唐使なども朝鮮半島沿いにいければよいように思えますが、案外直接中国南岸に向けて行ったり来たりしています。

上流域には竜馬古城遺跡、三星堆遺跡というのが発見された。これらは巨大な都市の遺跡です。

これら長江流域の遺跡と黄河文明との関係がまだはっきりしていないので何とも言えませんが、黄河文明とは別の独立した文明として将来は長江文明という形で教科書に載るかもしれません。まだ研究途上の遺跡なのでとりあえずはしょうかいだけしておきました。

黄河文明が発展していく中で都市が誕生してきます。中国古代の都市を邑（ゆう）と言います。邑という字は口と巴からできているね。口は人々が住んでいた集落を取り囲む城壁を表している。巴は人が座っている姿を字にしたもの。つまり人が集まって城壁の中で暮らしている。これが邑というわけです。こういう邑が黄河中流域にたくさんできてきます。

黄河の下流域はまだ文明圏に入っていません。黄河というのはしおちゅう大氾濫をおこす。歴史時代に

入ってからも何回も川筋が変わっているんです。下流域は洪水の危険が多すぎて当時の生活技術では人は住めなかつたんだろうと思います。依然「大黄河」シリーズという番組をNHKでやっていて、現在の黄河の河口の映像が映っていました。前から、黄河河口はどうなっているのか見たかったんですがはじめて映像で見たんですよ。すごかつたね。全面まつ黄色。どこが陸でどこが河でどこが海か全然分からぬ。あんな風景が何キロもつづいているんでしょうね。現在も中国大陸は黄河によって運ばれる黄土によって拡大している、そんな感じです。昔はベチャベチャで人が入り込めないような湿地が下流域に拡がっていたんでしょう。

洪水といかに戦うかが黄河文明の担い手たちには重要な問題だったようです。

中国の伝説の古代の聖王に堯（ぎょう）、舜（しゅん）、禹（う）というのがいます。堯は自分の王位を舜に譲り、舜はその位をやはり治水で頑張った禹に譲ったという話になっている。禹は一年中黄河に浸かって働いたので下半身が腐ってしまったとも言われています。

プリントに写真がつけてある彩陶ですが魚が描いてあるでしょ。顔が人面です。これが禹ではな
いかという説もある。要するに河の神様です。

河の神にしろ、治水で頑張ったにしろ、黄河と切り離して古代中国の国家形成は考えられないと
いうことです。

人面魚=禹？

この三人は血がつながっていないのに位を譲ったり譲られたりして、みな徳があって立派だということで、
のちに儒家という学派に持ち上げられて聖王とされています。自分の血縁を無視して徳のあるものに位を譲る
この形式を禅讓（ぜんじょう）といいます。理想の王位継承パターンとして褒め称えられるわけです。

伝説では禹は自分の子供に王位を譲ります。ここで最初の王朝が成立します。この王朝を夏（か）とい
うんですが、日本の歴史学会ではこの夏王朝の実在はまだ認められていません。中国では実在したとされて
います。自分の国の歴史はできるだけ古い時代にさかのぼらせたいという気持ちが、どの国の考古学者にもある
みたいですね。

2 殿

夏王朝が滅んだあとを継ぐのが殷（いん）王朝なんですが、ここからが確実に考古学上証明できます。

邑に話を戻します。邑の住民は祖先を同じくする氏族集団だったといわれています。もしくは複数の氏族集
団が一つの邑を建設した事があったかもしれません。邑は都市国家と言って良いでしょう。ギリシアで言え
ばポリスみたいなものです。

やがて邑の中でも他の邑に比べて規模の大きく軍事力が強いものが出現してくると、その強い邑を中心にして
邑の連合体が生まれる。これが最初の王朝とされている殷です。殷というのは邑の名前でこれが盟主と

なって他の邑を緩やかに統合した、というふうに理解しておけばいいです。殷というのはあとから付けた名前で当時は商（しょう）と呼んでいました。この商の時代が前1600年頃から前1027年までです。

殷の遺跡が殷墟（いんきょ）。王の墓が発掘されています。こちらの図版を見てください。逆ピラミッド型に掘った頂点に王の遺体が埋葬してある。王の棺の下に犬が埋めてある。犬はあの世への案内役だったらしい。

王以外にもたくさんの殉死者が埋葬されています。それから青銅製の酒器もたくさん並べてある。あの世でも王を守るためでしょう、兵士も所々に別に穴を掘って埋められているし、戦車もありますね。

これ以外に目に付くのが生首です。殉死者はちゃんと身体があって服も着て埋葬されているのに、それとは別に生首だけがゴロゴロ並べられているでしょ。これは神への生け贋か、魔除けでしょう。

こんなふうに数百人、多い場合は千人以上の殉死者、生け贋などが一緒に埋葬されているのが殷王墓です。かなりの権力を集中していたことが分かる。

ただ宮殿などは藁葺きみたいのもので、壮麗な宮殿というのではなかったようです。

殷の政治の特徴。神權政治です。古代社会はどこでも政治と宗教が一体化しているんですが殷もそうでした。

殷の王はしおりをやって神々にお伺いを立てて政治を執り行いました。宇宙にはいろいろな神々や悪霊や妖怪やそんなモノで満ち満ちていて神々の機嫌を損ねないように、また、悪霊たちの災いに遭わないように彼らは真剣だったんです。

「道」という字があるでしょ。この字「しんにょう」に「首」が付いているね。「しんにょう」はそれだけで道の意味がある。なぜ、首がくっついているかです。いろいろな説があるんですが、興味深いのがこういう説です。

邑がある。邑の門を出るとずっと道が農地や遠くの邑につづいている。当時は今みたいに土地が開けていないわけで、原生林もあるし未開の民族も、邑がないところにはたくさんいるわけです。猛獣もいるでしょ。何よりもそういう原野には訳の分からない悪霊、魑魅魍魎がぐちゃぐちゃいるわけです。そういう魑魅魍魎が門から邑の中に入ってきたないように、邑の門の下に魔除けとして人の生首を埋めたというんだな。門を開けて生首の向こうに道は始まる。道に出るには生首をまたいでいく。またぐことが、外に出る人の魔除けのまじないでもあるんだという。

この説が正しいかどうかは分かりませんが、殷の王墓にも生首がたくさん見つかっているのを考えるとあたらずといえども遠からずという気がします。古代の中国の人々の生活感覚が伝わってくるような説ですね。

というわけで、古代人は神々に取り囲まれて生きていた。だから、政治も当然神々にお伺いを立てたわけです。

殷の人たちの神様は大きく分けると三種類ある。

一つが天帝。天というと、われわれにも何となく理解できるような気がしませんか。神みたいな感じで天という言葉を使うことがありますよね。日本の文化の中にも流れ込んでいる感覚です。

もう一つが自然現象を神にしたものです。

最後が祖先神です。中国文明を理解するにはこれは重要だと思う。祖先神崇拜はその後も生き続けて朝鮮や日本の文化の中にも深く浸透しています。殷の人々は死んだ祖先はそのまま神になって存在し続けていると考えます。どこか、上の方にいるんですね。で、常に子孫の行動を見ている。気にくわないことを子孫がすればたたるんだ。祖先神が一番子孫に望むことは、常に祖先神を崇めて祀ってくれること。これをサボるとたたります。だから殷の王達はいつもお祭りをしたらしいかしょっちゅう占っています。

祖先神崇拜はのちに儒教の中に引き継がれ、さらに仏教にも影響を与えます。われわれ日本の仏教の儀式の多くは儒教化されていて祖先神崇拜がたっぷり入り込んだものです。例えばお盆。お墓参りにいって線香立てるでしょ。あの線香はもともと儒教のもので、天界にいる祖先の靈があの線香の煙をたどって地上界のわれわれのもとに帰ってくる。その為のものらしい。そもそも、仏教の理論から考えれば祖先の靈なんて存在しないんですよ。どこかに輪廻転生しているんですからね。今生きているわれわれだって前世では誰かの祖先だったかも知れないわけで、祖先を崇拜するなら俺をあがめろよ、という話になる。お墓参りするよりは、酢豚や蟹玉スープを食べない方がよほど供養になるわけだ。お坊さんの話を聞いていて祖先の供養うんぬんという話が出てきたら、殷以来の東アジアの宗教的伝統がここに生きているんだなあ、と感慨にふけつて下さい。

殷王が占いに使ったのが牛など大型動物の肩甲骨や亀の甲羅です。どうやって占ったかというと、例えば亀の甲羅、お腹の方の甲羅ですがここに丸い溝をいくつも掘ります。で、その溝に木の棒などで火を押しつけるんです。するとヒビが入る。このヒビの形や向きで占いをしました。占った結果を甲羅や骨の裏側に刻んで記録しました。この文字が甲骨文字です。資料集には甲骨文字を刻んだ亀の甲羅の写真がありますが、これをひっくり返すと焦げ付いた丸い溝とヒビがたくさんあるはずです。この甲骨文字がのちの漢字の原型となるわけです。

殷代の遺物としてもう一つ大事なものが青銅器です。いくつか写真があるので見て下さい。グニャグニヤの模様が一面に刻んである。これはなんなのか。原型は羊の怪獣なのか、蛇のお化けなのか、逆巻く黄河の水なのか。伝説の怪物として色々な名前がつけられているものもありますが、そんなことより、じっくりこの文様を眺めながら殷の人たちの心を想像して下さい。私は魑魅魍魎がうじゃうじゃいた当時の人たちの精神世界を表しているような気がします。私は骨董品の価値とかわかりませんが殷の青銅器と日本の火炎式縄文土器は心が引き付けられます。

殷の青銅器は多分ラーメン丼の縁の渦巻き模様のルーツです。

殷の最後の王が紂王（ちゅうおう）です。酒池肉林の男です。故事成語の「酒池肉林」のルーツ。紂王は自分の庭園に池を作るんですが、その池に水の変わりに酒を満たした。庭園の木には木の実のかわりに肉をぶら下げた。池で美女たちとたわむれて遊ぶ。遊び疲れて池から上がると肉をたらふく食べた、という話。紂王が人民を搾り取って自分だけ贅沢三昧をしたという話なんです。これは多分あとで作られた話ですね。紂王が暴君で滅ぼされて当然だったという話になるわけです。

ただ、非常に贅沢といつてもたくさん酒を飲んで肉を食らうだけで、当時の贅沢の基準、逆に言えば普通の

暮らしがどんなものだったか想像がつきますね。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

中国古代の文化講談 社会科学文庫 441	白川静著。漢字の成り立ちから、古代中国のひとびとの暮らしが明らかにされていく。驚くべき仕事です。白川氏の説が正しいかどうかは別にして、学問のおもしろさを実感できます。
中国古代の民俗講談 社会科学文庫 484	白川静著。白川氏の仕事は、体系的ではないので、たくさん読まないと全体像はわからない。上の本と一緒に読むと、漢字博士になれるかも。
世界の歴史(3)中国の あけぼの河出文庫	貝塚 茂樹 (著), 大島 利一 (著)。定番の概説書です。
中国文明の歴史 (1) 中国文化の成 立.中公文庫	水野 清一 (編集)。近年文庫化されて、初めてこのシリーズの存在を知りました。中国文明の歴史という題名ですが、とどのつまり中国史です。

第23回 黄河文明 おわり

[前のページへ](#)

[次のページへ](#)

[トップページに戻る](#)

[第22回 インドの諸王朝 \(大
乗仏教・ヒンドゥー教\)](#)

[第24回 周](#)

@ @@‘æ,Q,S%oñ @Žü@

PZü

@ @Žü, ð-Á, Ú, µ, ½‰¤©, ªŽü, Á, ·BŽü, ÍE»Ý, ½À, , ½, è, É, , Á, ½-W, Á, ·B, à, ÄE, à, ÄE, ÍYü, É•ž•®, µ, Ä, ç, ½, ï, Á, µ, å, ☐B, ±, ê, ª, ¾, ñ—Í, ð, Á, —, Ä, «, ÄŽü•Ó, ï-W, ðŽx”z‰¤, É, , , µ, ½B, ±, ê, ªO, P, O, Q, V”N, ï, ±, ÄE, Á, ·B, ±, ïŽž, ïŽü, ï‰¤—1, ª‰¤ÄE, ç, ☐BÝü, ï‰¤—1, ªŽð”r“— ï-N, ïä@‰¤, Á, µ, ½B
@Žü, ï, Á, ½êS, Í“-Žž, ï”†•¶-¾, ï•Ó«, Á, ·BŽü, ðŒš, Á, ½”•“, ï¼•û, ï”U—“Œn“, ¾, Á, ½‰¤Á”\«, ª
, ÄŒÄ, ï, ê, é, æ, ☐, É, È, é”†•¶-¾, ðì, Á, ½—“, ÄE, ç, ☐, ïA, ±, ñ, È, Ó, ☐, É, Ç, ñ, Ç, ïŽü•Ó, ï—“, ª”†•¶-¾‰¤, µ, ÄŒ`ì, ç, ê, ½BŽü, ð, Á, , Á, ½IX, Í•Ó«, ï”Ø“, É<ß, ç, ©, çí^, à^ç
@ @Žü, ª“s, ð, , ç, ½, ï, ªM<ži, ±, ☐, , ejBj, ï½À, , ½, èB
@Žü, ïŽx”z§“x, ªu•Œšv, Á, ·BŽü‰¤, ïA—L—ÍZ“, ïŽñ·, É—W, ð—^, !, èB, Ü, ¾, Ü, ¾—¢ŠJ, ï“y’n, ï, ½,
, ï“Žj, ð, Ü, ©, !, èB, ±, ☐, ç, ☐V, µ, ç—W, ªŽü, ïŽx”z‰¤, ï“y’n, É, ½, , ³, ïŒšY, ³, è, é, i, —, Á, ·B]—^, ï—
W, ï”†, É, ÍYü, ÄE<ß, çŠÖŒW, É, , Á, ½, à, ï, à, ½, , ³, ñ, , è, Á, µ, å, ©, çA, ±, ñ, È, Ó, ☐, ÉŽü‰¤, ï”z‰¤, ï—W, ð, Á,
, Ä, , Á, «, ½, ï, Á, ·BŽü‰¤, ©, ç—W, ïŽx”z, ð, Ü, ©, , è, ½ŽØ, ð”Œò, ÄE, ç, ç, Ü, ·B”Œò, ïŽü‰¤, É, !, µ, Á, ïŒR—ð, ÄE”[, ï”±, ð‰¤, ç, Ü, , , è”ÈŠO, ïŽ©•, ï—
ï”n, ð, Ç, ☐Žx”z, µ, Á, à, ©, Ü, ç, Ü, , , nB”Œò, ïŽC•, ï—W, ïŽü•Ó, É”z‰¤, ï—L—ÍZØ, ð”z’u, µ, Ü, ·B, ©, è, ç, à, , ³, è—W, ðŽx”z, , èB, ©, è, ç, ï, ±
, Ä, è”Œ’å•vEŽm, , , èE, ½, è, ÖE, µj, ÄE, ç, ☐B
@ -v, , è, Éfsf‰¤f~fbfhŒ^, Éä, ©, çAŽü‰¤A”ŒòA<“E’å•vEŽm, ÄE, , Á, Ä, Ý, ñ, È, », è, ¼, è, l‰¤f“fN, É‡, i, !, Ä—W, ðŽx”z, µ, Ä, ç, èB, ±
, è, ªŽü, ï•Œš§, Á, ·BŽü”Èä, ªM”g•AŽx”zŽØŠK‰¤, ÄE, , , , è, ç, æ, èB

@ @,±,łZü,ł••Œ§§,Í“ú-{,å½‰œ¢,ł••Œ§§,Ä,Í‘á,¤A,AŒ‘¾‰È‘,É,Í‘,¢,Ä,·é,ŒB‰½,¤A,Ó,©A,Ù,¾¼‰œ¢,ł••Œ§§,ð×
 ,©,ç,¾‰È‘,ł,‘,¤A,Í‘ñÍ,ÉœseØ,¾,¬,ÇAŠÈ‘P,É,¢,¤,AŒ,±,¤,ç,¤,±,ÆB“ú-{,ł‘†ç,Ä,à“¬,J,Å,·,¤A—łZå,Í—ł“y,ð—^,!,Ä,
 %œJ,‘,ðS‘,J,Å‘‰½,ð¾,¤A,AŒ,¢,¤,ł,‘¤•Œ§§B
 @—ł‘n,ð—^,!,é,©,çZ„,Í„,Ü,!,łZalÅt,ç,Å,½,ç,¢,©,ñ,¤A,AŒ,¢,¤Œ—ñŠÖŒW,Å,·B—ł‘n,AŒ‘‰½,ðŒðS‘,μ,Ä,¢,é,í,¬,Å,·B
 @Žü,ł••Œ§§,ðZx,!,Ä,¢,é,ł,Í,»,¤,ç,¤Œ—ñŠÖŒW,Å,ł,È,¢B‰½,©,AŒ,¢,¤,ÆAŒŒ‰ŠÖŒW,Å,·B,±,ê,ð@°,AŒ,¢,¤B¤’È,ł‘cæ,©,çZ‘
 ,í,©,ê,μ,½,ÆM,J,Å,ç,éW’c,Å,·B“¬,J@°,È,ñ,¾,©,ç‘!—ł,μ,È,

@@@“,@,Í,K”Í,Í,±,Æ,ð@-@,Æ,ç,ë,Ü,·B
@@-@,Å,Í,AŽü,]‰o-1,ÍEä-{‰oÆ,È,ÌB”CEð,Í*‰oÆB<·E·å·vEŽm,Í,³,ç,É·‰oÆB·‰oÆ,Í-{‰oÆ,É·t,ç,Á,Ä,ç,_,È,çB,È,º,©,Æ,ç,¤,Æ-
{‰oÆ,³,_,^A·cæ,Ì-i,ðO,é,±,Æ,^A,«,é,©,ç,Å,·B*‰oÆ,ÌZØ,^cæ_,ðO,Á,Ä,à-C,ç,_,ÇA-{‰oÆ,^O,è,·é,±,Æ,ÅŒäæ‘c-1,Íe”ÔŠi,Ô,i,_,Å,·,æB
@,³,©,çA,»,ÍCEä-{‰oÆ,ÌZü,]‰o-1,É·t,ç,¤,í,_,É,Í,ç,©,È,ç,Ì,Å,·B,±,ë,^@-@B,±,Ì~,ÅŽü
‰oæ,Í’CEð,ð“-!,µ,½B,³,©,çA,Ù,³,Ü,³@,^I,Å,·,ËB*cæ_,Ì,½,½,ë,Í,º,ë,µ,ç,©,ç,ËB
@Žü,ÍYU,ð-Å,Ù,µ,½,Æ,«,É,»,Í‰o‰oÆ,ÌZØ,ðZE,³,È,ç,ñ,Å,·,æB,È,º,©,Æ,ç,¤,ÆAŽE,µ,Ä,µ,Ù,¤,ÆAÝU‰o‰oÆ,Ì‘cæ_,ðO,éZØ,^ç
,È,È,é,Å,µ,ËB,»¤,µ,½,çYU,Ìcæ,^D,ç,ð,È,·,©,å,µ,é,È,çB,»,ë,Í,º,ë,µ,ç,Ì,Å‰o‰oÆ,ÌZØ,Íj,©,µ,Å,·,

,QŽü,I“Œ‘J

@ @Žü,łŽż‘ã,Í‘å,«,

@‘O’¼,Í“s,“èM<ž,À,µ,½BŒä”¼,Í“s,ð—Œ—Wi,ç

@“s,^U,A,/2,I,ÉSÓ,μ,Á-È”,çfGfsf\jh,a,,é,I,ÁD‰i,μ,Á,“,U,μ,å,ob-B-H‰o,æ-Jfw, U,o,j,l,`í,é, Á,·B
@“s,a^U,A,/2,æ,«,l‰o,^a-H‰o, Á,·B-Jfw, I,»,l”U,È,ñ, Á,·,aAç, l”ülb-H‰o, Í,¼, Á,±,ñ, È,ñ, Á,·,aA-Jfw”U,É, l, è, Á,¾, -•I,í, Á,½, æ, ±, è, a,, Á,½, ñ, Á,·B, È, È, ©, æ, ç, o, æA”P-, lJy, U, è, Á, ©, ç, è, “x, à, l, Á,½, ±, æ, a, È, ç, B, ç, Á, à, ·, U, μ, Á, ç, è, B, ±, è, ¾, -, l”ülb, È, ñ, ¾, ©, ç, l, Š, c, í, c, è, ¾, -`í, ç, μ, ç, ¾, è, o, æ-H‰o, lžv, Á,½B, », ±, ÁA“l‰o”žt, ð, æ, ñ, ¾, è, ç, è, ç, è, È, ±, æ, ð, ·, è, ñ, Á, ·, aA‰/2, ð, μ, Á, à-Jfw, lÍ, í, È, ç, B
@, ±, o, È, Á, Á, ·, è, æA-H‰o, í, È, É, a‰/2, Á, à, l, Š, c, aE©, ½, ç, B, Š, è, -], a, c, ñ, c, n, Ž, l, d, U, Á, Á,

@@,»ñ,È,«,ñZÀñ,û,©,çÙ=«,ëM<ž,ðPCE,É=^,Ù,µ,½B,±,¤,ç,ñZ,ñM<ž,©,ç,ñ,è,µ,ð,«,À“**¶**ù,ñ”=W,ñ”CEð,É=«~%¢,ð,ß,þ,é,±,Æ,É,È,Á,À,ç,éB=H

三

%c¤,Í,Ì,ë,µ,ð, ¸, %/B,»,ê,ðŒ©,%/”Œð,½,ì,ÍÀê·äŽ–,ÆŽ¢·,ð–!,¢,Ä·S“y,©,çèM·ž,Ì’→ÚŽw,µ,Ä·ì,–,,À,–,Ä,«,Ù,·B
@,Æ,±,ë,“èM·ž,leŠO,ÉWŒ_¶,µ,À,Ý,é,ÆA·Ù–,íPŒ,ÍŒë·ñ,¾,À,½,±
.Æ,“a,©,éB‘§,¹,«Ø,À,Ä·ì,–,À,–,À,«,½”Œð,ÌŒR·à,ÍÀ”Žq”²,–,µ,ÄfKfbfNfŠ,·,é,ñ,À,·B
@,»,ê,ðé•C,Ía,©,ç–JfW,ÍŒ©,À,¢,½B‘å,Ì’j,½,ì,“fKfbfNfŠ,·,é–1Žq,“–È”,©,À,½,ñ,À,µ,å,“BfjfB,ÆÌ,À,½,ñ,¾B,»,ê,ð–H‰¤,Í‰
; ,©,çŒ©,%/B,»,Ì,çŠç,ð,Ý,ÄAf|fNf|fNfB,Æ»·±,µ,À,µ,Ù,À,½B,â,À,Ì,ë·f°,ç,µ,
‰¤,ÍŽv,À,½B,C,¤,·,ê,Ì’P–,“Ì,¤,©,à·a,©,À,½B
@”ñíŽ–‘Ô,É,µ,©, ¸,é,×,«,À,È,¢~‰¤–vì,Ì,Ì,ë,µ,ð–H‰¤,Í, ¸,À,µ,Ù,¤,ñ,¾,ÈB–H‰¤,Ì,ë,µ, ¸,éA”Œð·ì,–,À,–,éA“G,¢,È,çAfKfbfNfŠA–
JfWEfjfBÀ–H‰¤f]fNf]fNfbA,Ù,½,Ì,ë,µ, ¸,éA”Œð·ì,–,À,–,éA“G,¢,È,çAfKfbfNfŠA–JfWEfjfBÀ–H‰¤f]fNf]fNfbB,±,Ìfpf^|f“,‰¤½‰¤ñ,à·±
.¤,ì,É”Œð,à·a,©,À,Ä,“éB‰¤,Ì’U,Ì,¢,ðŒ©,½,¢,½,B,É,í,ê,í,ê,ð,¾,µ,ÉŽg,À,À,¢,éB,à,ç,ò,Ì,ë,µ, ¸,á,À,às,©,È,ç,½A,Æ,È,éB~T
@,â, ¸,ÀA–{“–,É’Ù–,¤M·ž,ÉU,ßž,ñ,À,«,Ù,·B–H‰¤,Í·KŽ·È,Ì,ë,µ,ð, ¸,é,–,ê,ç”Œð,Í·N’·el,Æ,µ,À~‰¤,É–
^,È,©,À,½B,»,Ì,Ù,ÜAèM·ž,ÍŠx–ž,µ,Äžü,Í“s,ð“Œ,Ì–Œ–W,É’Ù,µ,½A,Æ,¢,¤,í,–,À,·B

@,±,Í`b,Í`Œê,Å,·,^Šô•^a,©,Í`ž,À,à,ŠÜ,Ù,ê,Ä,ç,é,ñ,Å,µ,å,¤B,D,A,Æ,Á,ÍAžü,^a^1/4^û•Ó«,Í`Ù^—^“^ž,í,Éž,”s,µ,Ä¬,Í`†,Å“s,ð•úŠü,¹,‘,é,ð“^¾,È,©,Á,½,±,ÆB,à,¤D,A,Æ,Á,ÍA@^°,Æ,µ,Ä-{‰œÆ,Å, ,éžü‰œ¤,ð·,è,½,Ä•,^-,È,^-,ê,Î,È,ç,È,ç”Œò,^aA,»,ê,ðs,í,È,ç,æ,¤,É,È,Á,Ä,ç,½B@^°A@-@,ÍaJ,^a,ä,é,Ýžn,ß,Ä,ç,é,±,ÆB

@“s,^Ú,Á,Ä^ÈŒä,ÍA“ŒŽü,ì‰œ,Í-¼-Ú,¾,-,ì„JÝ,Æ,È,è,Ü,·B”Œò,ð“§,·,é,¾,-,ì—Í,àŒ ^Ð,à-³,

,RtHZž'ā

@@tHŽž'ā,IſL[f|f|h,ºu',‰coμ'li,,ºn,I,ºo,J,å,ºo,jv,Å,·B'‰co,I‰co-1,δ',U,ºo,AE,ºo,±,Æ,Å,·,EBμ'í,lu,ºo,i,í,ç,ºo,E',ºo,f,í,ç,ºo,vx,Æ,ºo,O-í,B'í,lu'U-ºo,í,±,Æ,ÅA'‰coμ'í,AE,ºo,í,íAu-Š,è,È,‰co-1,¾,-,ÇA‰co,È,ºn,¾,©,ºs',d,μ,Ü,μ,å,ºoA‰co-1,É-Í,ºe,È,ºo,©,ç‰co,í,á,í,é,É,í,é,í,ê"Ëo,ºoÙ-ºo,ð,å,í,"j,Å,Ä,ºoØ•J-¾,ðŽç,è,Ü,μ,åBv,Æ,ºo,±,Æ,Å,·B,±,lCE³/4-t,l<-,l"ú-{,Å,àŽg,í,ê,é,©,ç'm,Å,Ä,ºo,U,·,EB,à,Æ,Í,±,ltHŽž'ä,lcE³/4-t,Å,·B

@tHŽž·ä,í”Œð“‐Žm,Áí^,ä,½,
Å,Ú,µ,Ä,µ,Ü,Á,Ä,›,ł,łcæ_,ðØ,éŽØ,³,¢,È,
@,Æ,±,ë,³tHŽž·ä,ä,·,·,ñ,Å,é,Æ,½,½,è,ð^o,ë,ëÓŽ‐,ä‐,ë,Ä,
Å,Ú,³,ê,ë,æ,¤,É,È,Á,Ä,«,Ü,·BtHŽž·ä,ł,ł,ł,ø,É,Í,Q,O,O,Ù,C,·,Å,½,³I,í,ë,É,Í,Q,O,Ù,C,ÉŒ,Å,½,æ,¤,Å,·B

,Sí'Zz'a

@ @,±,ê,^í'Zž'á,E,E,A,A,,é,ÆA@-@,I"§,IS®'S,E-L-'4-³ZA,E,E,éBIX,I‡—"I,E"
 ,Æ,Å,·B
 @AEŽq,A,¢,¤Zv'z%oÆE,^,¢,Ü,·B,†,ŽjáÅ'á,ÌŽv'z%oÆAtHŽž'á,Ìl,Å,·,^A,±,Ìl,Íu%coö—Í-S,ðŒê,ç, vB%coöŠiŒ»Û,â_”é“I,È,±,Æ,ÍŒû,É,µ,È,©,Á,½,Æ,¢
 ,¤,Í,¬B,±,¤,¤—^,L,Ü,Á,Ä,

@%oÆb, ^aŽåŒN, ð“l, · A•^a%oÆ, ^a—{‰oÆ, ðæ, ÁŽæ, éA, ±, ☒, ☐, ±, Æ, ^a•p”É, É<N, «, Ä,

{,łł‘Žž‘ã,ÅŽg,í,ê,é,–,ê,ÇŒ³‘c,Í†‘,łł‘Žž‘ã,łŒ³¼–t,Å,·B

@tHŽž‘ä,ł`‘ä‘W,^a•^a%oÆ,Éæ,ÁŽæ,ç,ê,ÄŽO•^a—ô,µ,½ÈŒä,ðí‘Žž‘ä,Æ,¢,¢,Ü,·B

@ @Í ZZ̄á, É<,.^Zμ, Á, Éi, ç, ê, Ä, <, Ü, ·B, ±, ê, ður̄, l̄Zμ - Yv, ÆŒÄ, ÓB%oAÄA SØAÆ°AæñA·A, ÍZμ', Á, ·B

□

@!`^,IŽå—,I,`à•o°+S,É,È,A,Á,«,Ù,`·B,»,ê,Ù,A,IíZÓ,Eæ,A,½·M°,ºŒR,I`+S,¾,Á,½,I,Á,·,`AÝ,Á,½,ß,É,I°—I,`¹,ç•û,`ç,ç,Å,µ,`çA”_—,ð•à•o°,Æ,µ,Á“@^ð,µ,ÁÍ^,`åK-Í,É,È,éB,`ç,ÄA,±,Ì`†,Ì,`ç,`ç,ð“ê,·,é,±,Æ,É,È,è,Ù,`B

@‘å’n,ðk,·fxfLEfNfJ,Í,»),ê,Ü,Å–Ø»,³/₄,Å,½B,±,ê,“S»,É•I,i,é,A,E,c,o,±,A,E,a,C,ê,³/₄,–,·,²,c,©‘z‘œ,Å,«,Ü,·,©BfTfNfTfN,c,,³/₄,é,o,ËB,“,Ü,–,É<,l@,ÉffbfJ,ð’È,μ,Ä•R,ð,Å,–,Ä^ø,«%oñ,·Ž–,ª,Å,«,é,æ,o,É,È,è,Ü,·B,±,l,é, ô“I,Ék’n,ª,|,é,I,Å,·,æB

@,»,ê,Ü,Å,Í,»,ê,Ù,Ç‘½,

[•Û,É,Í—W,É<A,Á,À,éB,Æ,±,ë,“S”_<í,Æ<k,ÁA,»,ê,U,Ák,¹,É,©,Á,½‰“,,l“y’n,ðSJ‘ñ,Á,«,é,æ,¤,É,É,éB‰“,W,©,çø,Ä<A,Á,À,±,ç,ê,È,

W, ä, i, ç, êk'n, a, 'lŒû, à, ', A, ç,

I“y,ðZx”z, · ,éu—I`æ‘%oÆv,É•I%o»,μ,A,

@,±,ÍŒ‰É,Ç,¤,É,é,©,B,B,,ê,Ù,Á,¢,é,¢,ë,É,‘,ª, ,A,Á,à,à,‘,I‘‘«ü,Í-â‘ë,É,È,È,Ù,‘,ñ,Á,µ,½BSJ’
‘,½,ñ,Å,·,©,çB,Æ,±,é,ª-¢SJ’n,ÌSJ‘ñ,ª,·,·,ñ,Å-Ì`æ‘‰Æ,Æ,È,é,Æ‘‘«ü,ª-â‘ë,É,È,Á,Ä,‘,éB-¢SJ,Ì“y’n,ð,Ç,Ì‘,‘Žx’z‰º,É,u,
Í,à[ŽÀ,·,é,í,‘,Å,·,©,çA,Ç,Ì‘,à•KŽ‰É,È,è,Ù,·B,±,ê,‘,í‘Žž‘ä,É,È,é‘å,‘,È’wŒi,Å,·B

@”_<Æ,Í”“W,É,Æ,à,É,À,Á¤H<Æ,à”“W, μ ,½B<
W,Í†,Á^ê%eß,²,·,ñ,À,Í,È,Ä”“,ð•Ñ—ð, μ ,Á¤”, μ ,½,èAŽdŽ—,ð’T, μ ,Ä‘å“sŽs,Éo,À,,éA,»,¤,¢,
¤lŠÔ,à‘½,

@ \diamond \langle $\mathbb{A}, \mathbb{I}^{\prime } \rangle$ “W, $\mathbb{E}\mathbb{S}\mathbb{O}, \mu, \mathbb{A}\mathbb{A}\mathbb{A}$ “o,”%oY, $\mathbb{A}\mathbb{S}\mathbb{e}^{\prime }, \mathbb{A}$ ”

°Aæâ,À,I•z‘Ki,O,¹,ñjÀ¼,Í,À,ISA‘Ki,©,ñ,¹,ñjÀ“í,I·¹,À,I•@‘Ki,¬,N,¹,ñj,Æ,¢

,o,à,I,â,ç,ê,½BŒ,af†fj[fN,A,·,EB<³‰E,IZE^,ASm”F,μ,A,

L,Æ,¢,¤SLSk,l(E,¢f,f†f<,E,µ,A,¢,éBfJf...|fMfJfA,l,’nl,E,C’¾•½-m,l”‡X,A,lZq`ASL,ð,”¤a,Æ,µ,AZg,¤—á,¤,½,

@, ±, Ω, φ

„AZÉ, EÉÉ, É, µ, ½% Y•¼, „E, „I, „ç, „é, „½, „I, ©B“P, E•, „ð“, „A, „½, „é“f, „A, „½, „é, „é, „½, „ß, „¾, „A, „½, „çA““K, „á•z“K, „E, „ñ, „A•s•O, EÉÉ, „A, „µ, „áB, „à, EØZæ^ø, „I, „½, „ß, „¾, „, „A, „E, Žôp“IA, „Žç, „é, „I, „æ, „, „È–ðŠ,, „, „Á, „½, „ñ, „Å, „µ, „á, „, „EB

ISA-K,I,E,J,Y,ICE,A,B%o~,

“...”

“...E, U, Azo, (Ep., e, e, ..., %B, E, ACEU%~E, E, EES, ..., e, A, e, e, I, CA, ..., C, I, U, e, I, ISA' K, E, U, As, « ...

@ @,Æ,±,ë,Å“,”,â”*–*,È,Ç‘åŽ–,È°”,“Žç,è,I,È–ð,Ú,ðŽ,Â,Ì,Í,í,©,ë,â,·,ç,ñ,Å,·,“A,Ì,ŠÄ‘K,É,Í,ç,ñ,È°_i,“é,Ì,©B,â,Í,èAŒŠ,É°Ó–,©,ÆŽv,¤B,±,ÌŒŠ,É‰½,©_–I,“h,é,ñ,¶,á,È,ç,©BfRfbfNfS,³,ñA’m,Á,Å,é,Å,μ,åB–šwZžž,á,É–

70

%o~`È,ìŒŠ,Ég”,l•R,“È,µ,Ä, ,Ä,ÄA,±,ê,ðà•z,É“ü,ê,Ä,“,
@Œ»‘ä,Éj,«,Ä,c,é,í,ê,í,ê,ì†,É,àA,“à,ìŒŠ,ÉŠÖ,µ,Ä,Ú,ñ,â,è,¾,“,C“Á•È,È—Í,ìJÝAŽöp“I,È‰c½,©,ðŠ’,J,éŠ‘,“žó,“Ep,“ê,Ä,c
,Ú,·Bí“Žž·ä,É,í,à,Á,Æ<

@~b,^a,³/₄,¢,Ô,»,{,„,Ä,„,µ,Ü,¢,Ü,µ,½B

@ @<Æ, I”

$\partial_{-\mu}, \mathcal{A}, \phi, \Box \mathcal{E}^3 - t, \tilde{I}' m, \tilde{A}, \tilde{\bar{A}}, \phi, \epsilon, \mathcal{E} B, \pm, \tilde{I} \mathcal{E}^3 - t, \tilde{I} f < |fc, ^a, \pm, \tilde{I} \tilde{Z} \tilde{z} \cdot \tilde{a}, \tilde{\bar{A}}, \cdot B, , \epsilon^a s \tilde{Z} s, \tilde{I} \tilde{Z} s \hat{e} A, \cdot \hat{e} \hat{e}, \tilde{A} \mathcal{E} \hat{u} \hat{a}, \delta Y, |, \tilde{E}, ^a, \epsilon \bullet S \tilde{I}, \delta'',, \tilde{A}, \tilde{\bar{A}}, \phi, \frac{1}{2} \Box l, ^a, \phi, \frac{1}{2} B - \mu i, \tilde{U}, \pm j, \delta'',, \epsilon, \mathcal{E}, \ll, \tilde{I}, \mathcal{C}, \tilde{n}, \tilde{E}, , \tilde{A}, \tilde{a} \tilde{S} \tilde{N},$

@,±,ł,b,δ,æ,1,!,,Ā,Ŷ,é,ÆA,Ŷ,²,Æ,É,Ž,Z,ā,ló<μ,a•,,©,Ñā,a,Á,Á,,éB,cl,“,,,Á,Á,c,½u,ç,ñ,È,,Á,åSÑ,

,½,Ì,©B“S»,Æ,μ,©l,!,ç,ê,È,¢B,,à“S’ƒ,è,¾,Á,½,ñ,Å,μ,å,¤B,æ,¤,â.

,éó·µA,»,Ì,È,©,Å¤l,ÍuÅVŽ®,Ì·Ší,³/4Iv,ÆŒ³/4,Á,Ä”,„Á,Ä,¢,é,í,¬,Å,·B

@,³,ç,ÉÁZsé,Å„,Á,Ä,ç,é,Æ,ç,¤Ž,¬,àd-v,Å,·,ËBŽsé,Å„,,ç,ê,Ä,ç,é,Æ,ç,¤,¤,±,Æ,ÍA'•¶,ðŽó,¬,Ä,®,ç'b-ë‰o®,³,ñ,³i,é,ñ,Å,Í,È,¬,¬,Ê,ð'Ø'ñ,É,µ,Ä'å-Ê¶ŽY,³,ê,Ä,ç,é,Æ,ç,¤,¤,±,Æ,Å,·,æBŒ'•½‡í,Ì,Ì•½Ž,âŒ'Ž,ÌŽ,¬,½,ç,^,æ'ž"s,âŠ™'q,ÌŽsé,Å•i,ð"ƒ,Ä,Ä,ç,½,Ì,®,ç,ç,¤,Ël,!,Ä,Ý,é,ÎA“-Žž,Ì†,ÌŽÐ%oi,^a,ç,ê,^¾,¬,¤H<øÆ,“”

@ŽĐ%oī“S‘ł, „å, «, È·ł“®Šú, ð, þ, ©, ¡, Ä, ç, ½, ±, ÅE, ç, oŽ-, ^u-μ, v, ©, ç•^a, ©, é, l, Å, ·E

”@”_«ÆA¤ÆA→¬Ê,ł”“W,ÆŽÐ¤ç,łŠ«‰»A→¬“(‰%),ł†,Åí,ł”„,łj,«Žc,ë,d,q,¬,ÅA•x‘[°]ø,ð,°,±,È,¢,Ü,μ,½B,»,ê,ÍA,Ü,½ŽÝ‰ñB

ŽQI}‘Đ‰oîEEEE,à,¤,µÚ,µ,’m,è,½,¢,Æ,«,Í

‘-¼,ðfNfSfbfN,·,é,ÆAfCf^f^|f1bf|g“XufAf}f|f^v,Ífv|fW,É’ð,í,ÁÁ-í,Íff|f^A••,È,C,ðEc,é,±,Æ,^,Á,·,Ù,·Bw^ù,á%cÅ\,Å,·B

•†·ÉÄ·áŽí·
•½·žD·t'
cover

fAfwfAZjSTà
'†(Eö•|ŒÉ) ↪ {éZs'è~B'†'Zj,À,I,É,AufAfWfAZjv,ISTàBçSEZj,I,†,A'†'Zj,ðl,|,A,c,½,±
,Æ,ª,æ,,í,©,éBfXfP[f,,l'å,«,³,Æ'...‘z,l“Æ'n«,É,½,¾,½,¾Š•ž,Å,·B

fgfbfvfy[fW,É–ß,é

'O,ʃy[fW,Ö
'æ,Q,R%oñ@%oC%oÍ•]_3/

ŽY, Šy[fW, Ö
‘æ, Q, T%oñ@•x‘•’

@

@@ @‘æ, Q, T%oñ @•x‘[•]o @

, P”, I•x‘[•]o

@ tHŽž‘a, l—Šú, ©, cí“Žž‘a, É, È, é, ÆAŠe‘ŠO, lí, ç, à“úí“l, É, È, Á, Ä, «, Ü, ·, ©, çA, o, ©, o, ©, µ, Ä, ç, é, Æ‘¼‘, É•¹‡, ³, ê‘, a—Á, N, Ü, ·B, », ±, ÅAŒœ—½, É•x‘[·]

@@@, Ç, l‘, à•x‘[•]o, Å•KŽøB, ç, é, ç, è, È~b, ^{a“}, |, ç, ê, Ä, ç, Ü, ·B, ½, Æ, |, lAæâ, l•—l‰oøB, ±, ll, lŒR‘à, ð[·], V—q—[—]o, l—@, ð“±“ü, µ, ½, n, Å, ·i‘O, R, O, XjB

@, » , ê, ^aA, È, n, ^¾I, È, n, ÄŽv, í, È, ç, Å, ËB, ±, ê, l‘å•l, È, ±, Æ, ^¾Á, ^½n, Å, ·, æB

@Ší—{“I, É‘†‘, l—@, l•a•o, ©íŽO, ðŽg, oB”n, É, Ü, ^½, é, ±, Æ, l—^³, çB, », à, », àA‘†‘l, l•ž, l, ä, Á, ^½, è, µ, Ä, ç, éB‘^³, lāÖ, ^aL, , ÄAž, l‘, [·], ð‘å, »,

@, ^¾, —, ê, Ç, àA—V—q—[—], l•R”n íp, lA<@“®—l, ^a, , Á, Ä<

, ê, ð“±“ü, µ, æ, o, Æ, µ, ^½B, », l, ^½, ß, É, lA, Ü, , A•ž‘•, l‰oüŠv, ð, µ, È, —, ê, l, È, ç, È, ©, Á, ^½B•M‘[°], ^½, j, É—V—q—[—], l•ž‘•, ð, ^³, ^¹, æ, o, Æ, µ, ^½, i, —, ^¾B

@, Æ, ±, è, ^aA, ±, ê, ^aM‘[°], ^½, j, l—O”^½l, É, , Á, ^½B—R, l, Æ, ç, o, ÆA—V—q—[—], l, æ, o, È—i”Øl, l•ž, l‘, ..., ^½, , Æ, Å, ·B•J—^¾l, lŒÖ, è, , ç, ËB

@—V—q—[—], l, Ç, n, È•ž, ð‘..., Ä, ç, é, ©, Æ, ç, o, ÆAŠi—

{“I, Éj, lŒN, ^½, j, l•ž, Æ“—, J, Å, ·B”n, É, Ü, ^½, é, æ, o, É‘[·], ðfKfofb, ÆL, [°], ç, ê, éfYf{f‘B[·]l, ð[·]ø, [·], â, ·, ç, æ, o, É‘^³, à[·], Á‘^¼, ®, È“[·]3B, í, ê, í, ê, ^aj‘..., Ä, ç, é•ž, l^f[ffbf, ©, ç—[·], ^½, l, Å, ·, ^a—V—q•J‰o»[·]NŒ^¹, l, à, l, Å, ·B, ÄA, ±, ê, l—i”Øl, l•ž, È, l, Å, ·B“—Zž, l‘, l, É, Æ, Á, Ä, l, ËB

@Œ<ÇA—l‰oø, l<M‘[°], ^½, j, l“^½l, ð‰oY, µØ, Á, Ä‰oüŠv, ð, µ, Ü, µ, ^½B•RŽŒÓ•ž, ll—p, Æ, ç, ç, Ü, ·BŒÖ, è, , ç‘†‘•J—^¾l, ll, ^a—V—q—[—], l, Ü, È, ð, ·, é, Æ, ç, o, l, l, ·, ^², ç, ±, Æ, È, n, Å, ·, æB, », ê, ^¾, —, l—‰oð, µ, Ä, [·], ç, Ä,

@@@‘, ð[·],

^, lŽx”zŽOŠK‰oA‘E‘å•vEŽm, È, Ç, l<M‘[°], ^½, j, l‰o^½, à, µ, È, , Ä, à—^¼—å, Å, ·, ©, çl, É‘I, É‰oüŠv, ÉŽæ, è‘g, à, o, Æ, µ, È, ç, , µAŽæ, è‘g, P, ^¾, —, lÈŠo, l, , élP, à, ožO, ^½, j, ðŽg, í, È, çŽè, l, È, çBogEg[·]a, É, Æ, ç, í, ê, È, ç“—lŽå[·], llP“o—p, ^a, [·], ±, È, í, ê, é, æ, o, É, È, è, Ü, ·B

@“—Zž, l“[·], l“Œò, ^½, j, lP“o—p, É“MS, ^¾, Á, ^½, ±, Æ, ð[·]ø, ·b, l, ^½,

@—L—^¼, È, l, ^au, Ü, è§i, ©, çj, æ, èŽn, ß, ævBŽ, , l, ZŽž‘a, É, ±, l•bAŠl•J, l[·]‰oÈ‘, ÉÚ, Á, Ä, ç, Ü, µ, ^½, ËB‰o, l‰oøi‘O, Rç[·]l‰oj, lŽž, Å, ·B‰oø, l‰o^½, Æ, ©—DG, ÈlP, ðW, ß, Ä‘, ð“k[·]ž, l, , ^½, è, É, , é, l, Å, ·, ^aA“—Zž, l•Ó[·]«A“cŽÉ, l‘, Å, ·B, ±, n, È•Ó[·]«, lS[·], ç‘, É, Ç, o, â, Á, ^½, ç—L“\, ÈlP, ^a—^, Ä,

,¤,à,Ì,É‘Š’k,·,é,ñ,Å,·B,·,é,AÆŠsè§,¤Œ³/4,Á,½fZfŠft,¤u,Ù,„è§,æ,èŽn,ß,ævB‰½,ðŒ³/4,Á,Ä,¢,é,©,AÈ,¢
,¤,AÈAŽ,,,É,½,,³,ñ,Ì-J”ü,ð—^,|,È,³,¢A,AÈ,¢,¤,±,AÈ,Å,·BŽ,,,Ì,½,ß,É<{“a,ð‘¢,Á,Ä,·,êA,»,ê,©,ç,¢,Á,Ì,¢-
J”ü,AÈ,μ,Äà·ö,ð,·,êA,»,μ,ÄAŽ,,,ðæ¶,AÈ,μ,ÄŒh,¢,È,³,¢,AÈ,¢,¤B‰¤,¤,»,”,ê,Í,C,¤,¢,¤,±,AÈ,©•·,
,¤BŽ,,,Í‘å,μ,½l•·,Å,Í,È,¢,μAÈ”\,à,·,Ù,è,È,¢B,μ,©,μA,±,Ì-}l,ÌŠsè§,É,·,ç‰¤,¤”œ‘å,È-J”ü,ð—
^,|,ÄAæ¶,AÈ,μ,ÄŒh,Á,Ä,¢,é,AÈ,¢,¤‰\,Í,·,®,É‘S“y,ÉL,Ù,é,Å,μ,å,¤B,»,¤,·,ê,ÌAŽ,,,æ,è,àÈ”\,Ì,·,éIX,·,à,Á,AÈ-
C,¢‘Ò<ö,ð—^,|,ç,ê,é,É^á,¢,È,¢,AÈ,½,
@‰¤,Í,È,é,Ù,çA,AÈŽv,¤BŠsè§,Ì,¢,¤,AÈ,·,è,É,μ,Ä,Ý,½,çA’†“S“y,©,ç-
DG,ÈlP,·,½,
@,¤,ñ,È,·,í‡,É”Œò,½,ç,ÍlPŠl“³/4,É”M,ð’,¢,³/4,í,·,³/4B

@@Ä,Íé%oçí‘O,S¢*I*—j,Í,â,Í,èlP,ðW,ß,Ü,
ÖfVifŠf“fVj,É,ÍŠwŽÒŠX,^,Å,«,%B—ÖfV,É,Íäl—ai,μ,å,à,ñj,AE,¢,¤é—
å,^,Á,Ä,»,Ìç,ÉŠwŽÒ,%ç,^W,Ü,Á,ÄZ,ñ,%4,Ì,Åuäl‰°,ÌŠwv,ÆŒÄ,Î,ê,%BŠwŽÒ,%ç,Í“Á,ÉŽdŽ—
^, ,é,í,^,Å,Í,È,,ÄA^ê“ú”†ffCffCfKf,,fKf,,,ÆftfŠ[ffffBfXfJfbfVf‡f“,ð,·,é,ñ,Å,·B,»,Ì†,©,ç—
Ç,¢fAfCfffA,^, ,ê,ÎÄ,Ì‘

@,±,¤,¢,¤ó·µ,ÍŽ-̄,Ì‘¤,©,¤,·,é,ÆË”\
,³,|, ,ê,ÍŽ©•ª,ð”,,,èž,þf fff“fX,Å,·,ËBþ,Ü,ê,ÍŠÖŒW,È,¢Ag•ª,àŠÖŒW,È,¢A—L”\,Èlþ,¾,Æ”F,ß,ç,ê,ê,Î,C,±,©,Ì‘,Å,,¢’nÊ,É,Â,¢,ÄàŽY,ð’~|,é,±,Æ,à,Å,«,é,í,¬,Å,·B,¾,©,ç,¢,ë,ñ,ÈŠw-â,ðg,É,Â,¬A“Á

,Qæè×,I•I-@

“@”\—ÍŽå`“I,ÉlP“o—p,Å‘å¬Œ÷,μ,½,Ì,ª,Å,·B`,ÌFŒöi‘O,R,U,P‘O,R,R,Wj,ÌZž,Éu¤è×,Ì•I—@v,ª,“,±,È,í,ê,Ü,μ,½B
@¤è×i,μ,å,¤,“,¤j,AE,¢,¤,Ì,Íl—¼,Å,·B%¤q,Ì‘,log,Å,·BŽ;‰œÆŽu—],È,ñ,Å,·,ª,È,©,È,©Ž©•ª,ÌŒ”\
,δ”F,β,Ä,à,ç,|,È,¢B,·éŽž,Ì‘,ÅlP,δ<,β,Ä,¢,é,Æ•·,«o,©,_,Ä,¢,«,Ü,·B,Ó,ç,Á,Æo,©,_,Ä,¢,Á,Ä,àŠO‘og,È,Ì,Å`Ì—
L—ÍŽÒ,ÉŠÈ’P,É‰œi,|,é,í,_,Å,Í,È,¢,ÆŽv,¢,Ü,·B¤è×,Í,¢,ë,¢,ë,È,Ä,Ä,δ—Š,Á,ÄFŒö,É—Ê‰œi,·,é,±
,Æ,ª,Å,«,Ü,μ,½BFŒö,Í¤è×,δ”ñí,É‘C,É“ü,Á,½Bj,Å,¢,|,Ì‘—‘åb,É,¢,«,È,è””F,μ,ÄŽj,δ‘S—È‘I,É’C,¹,é,±
,Æ,É,μ,½,ñ,Å,·B

@,±,ê,É,Î,Í<M°,½,¸,Í \langle À,¢,½B,æ,»ZÓ,ª,¢,«,É,ë‰o¤,IM—S,ð“¾,À,½,¸,Í—Ê”,

,I,A,Ð,Æ,U,,I^øè×,I,“Zè•A,Y”qŒ©A,A,·E

@Z©•^a,IŽü,è,^aD‘I,A,I,E,c,±,Æ,I¤è×,à[•^a,í,©,A,A,c,éB¤M‘°,½,¸,I’½S’,ðZ,A,A,c,

,é,é,A,»,¤,Ä,I,E,c^é”E- O,E,μ,A,à¤è×,E,ñ,A,¢,¤’j,δ’m,ç,E,¢,í, ,ÄA¤è×,¤,¢,ë,¢,ë,E%oüSv,δ,“,±,È,“,¤,Æ,μ,Ä,à‘f’¼,É-½-ß,É],¤,©,Ç,¤,©•ª,©,Á,½,à,Ì,Å,Í,È,¢B

@, ¾, ©, ç×è×, I, Ù, „Z©•ª, ð”, „, èž, Y, Ù, ·B

@@` ,I“s,E,IZsê,` ,éB“-ZžZsê,I•»,A^I,í,ê,A,¢,A-å,` ,¢, ,A,©,A,¢,A,¢,é,ñ,A,·BZsê,I- O,` W,U,é,Æ,±

,ë,¾,©,ç

@œè×,Í,±,ÌŽsê,Ì“i-å,ÉP-Ø,ð^ê-{ - §,Ä,½B,,µ,Äu,±,ÌP-Ø,ðŽsê,Ì-k-å,É^Ú,µ,½ŽÒ,É<à\Ò-
^,|,éB‘åbœ×v,ÆG‘,ðo,µ,½B,Ý,ñ,È,±,ÌŒäG‘,ð“C,ñ,ÅffCffC%o\,ð,·,é,ñ,Å,·,ªA,È,ñ,¾,©
‰o,µ,¢G‘,Å,µ,åAœè×,Æ,¢,¤j,à,C,ñ,È‘ab,¾,©,í,©,ç,È,¢B,Ö,½,È,±,Æ,ð,µ,Ä”±,¹,ç,ê,Ä,Í,©,È,í,È,¢,Ì,N,àP-
Ø,ð^Ú,µ,Ü,¹,ñB‰½“ú,©Œo,Á,Ä,à’N,à“®,©,³,È,¢,Ì,ÅAœè×,ÍÜ<à,ð,T”{,ÌŒÜ\Ò,É,µ,Ü,µ,½B<à,P,VfLf,
@,»,¤,µ,½,çA,æ,¤,â,
,é‘†,Å,â,Á,½,ñ,Å,µ,å,¤B“¬”P,Íœè×,ÉŒÄ,Î,ê,ÄA-ñ‘©,ç,·,è<àŒÜ\Ò,ðÜ<à,Æ,µ,Ä,à,ç,Á,½,ñ,¾,ËB, ,Á,Æ,¢
,¤ŠÔ,Éœè×,Ì•]”»,ÍL,Ü,Å,½BV,µ,
@°,½,ç,à,Ð,Æ,Ü,,Í’P,É,â,ç,¹,é,µ,©,È,¢,ÆŽv,Å,½,ë,¤,ËB

@@œè×,ÌŽ‰üŠv,Íu•Ì-@v,ÆŒÄ,Î,ê,Ü,·B,C,ñ,È‰üŠv,ð,â,Á,½,©B
@,Ü,,uYŒPi,¶,¤,¤,²j,Ì§vB‘-^,ðŒÜŒ¬A\Œ¬^,É-×‘g,ðì,ç,¹,éB-×‘g,Æ,¢,¤,Ì,Í‰ø,é,©,ÈB”[Å,â-
h”Æ,Ì~A‘ÑÓ”C,ð,Æ,ç,¹,é,½,ß,É‘g,ðì,ç,¹,é,ñ,Å,·B-á,|,Î,»,Ì‘†,Ì,C,±,©,Ì‰øÆ,“ÆßŽÒ,ð,©,
-×‘g‘S‘Ì,“±,¹,ç,ê,éBÅ<à,ð”[,ß,½,èA•Žm,âl•v,ðo,µ,½,èA,Æ,É,©,

@,³,ç,É”‰øÆ,Ì•‰øÆ,ð<
,éŒZ’í,½,ç,“-<,µ,Ä,¢,é,Ì,Å,·B,±,ê,Å,ÌJŽY-Í,Ì-³‘È,È,Ì,ÅAŽY’j-V^È‰º,Í
¢ŠJ,Ì“y’n,É“üA,³,¹,½B,±,ê,É,æ,A,Äk’n,¤Sg‘å,µ,ÄAŒÉ”,à‘;|,é,µA“‰øÆŽû“ü,à‘;|,½B

@@œè×,Ì•Ì-@,Ì“““I,È”_-^,Ì¶,¤¤,ð-³—-í—•Ì,|,é,à,Ì,¾,©,çA,,¢
,Ô,ñ’iR,à, ,Á,½,æ,¤,Å,·B, ,éŽz“cŽÉ,Ì·~V,½,ç,¤œè×,Ì,Æ,±,ë,É-È‰øi,É-^,½Bœè×,É‘Î,µ,ÄA
Žj,ªŒµ,µ,·,¬,éA,à,Á,Æ-D,µ,·,µ,Ä,
,¤,ÆA^ê”È-^O,Ì•aÛ,ÅŽx”zŽÒ,É-¶¤,ðŒ³/4,¤,Æ,Í,-,µ,©,ç,ñA,ÆŒ³/4,Á,Ä,Ý,ñ,ÈŒY,µ,Ä,µ,Ü,Å,½B
@,©,ê,Ì,â,è•¤,ÍŒµ,µ,¢,Ì,Å,·B
@,Æ,±,ë,¤œè×,ÌŽj,¤O“¹,Éæ,A,Ä,,é,ÆŽj^À,à^À’ë,µ,ÄA“-^,Í,¢,È,,È,éA“¹,Éa•z,ª-Ž,ç,Ä,¢,Ä,à[°],é,Ä’N,àE,í,È,¢
,
,Å^ÀS,µ,Ä•é,ç,¹,é,æ,¤,É,È,Á,½A-L,è“i,âBv,Æœè×,ð-_,βÌ,|,É-^,½,ñ,Å,·B,»,¤,µ,½,çAœè×A,C,¤,µ,½,ÆŽv,¢
,Ü,·,©Bj“x,àŒY,µ,Ä,µ,Ü,Å,½,ÌBŽ-^,Ì•aÛ,ÅAŒä
—R,Å,·B-v,·,é,Éœè×,Í-^,¤
,¤,í,-,¾BŒµ,µ,¢,Å,µ,åB

@@ŒRŒ÷,É,æ,éŽY^Ê§,Æ,¢,¤,Ì,à,â,ë,Ü,·Bí^,ÌŽž,ÉŠ^ô,µ,½•a,¾,-g¤,ð¤,º,éBŽY^Ê,ð,
,¤,Ì,Í“G,ÌŽñ,ð,¢, ,ÅŽæ,A,Ä,«,½,©,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,·B,½,
,Å,à“G,ÌŽñ,ðŽæ,A,Ä,±,È,-^,é,ÌŽY^Ê,Í-^,|,ç,ê,È,¢B<M°,É,Ì•]”»¤,¢,Å,·,¤B

@,±,ê,ç,Ì‰üŠv,É,æ,A,Ä½•¤•Ó¤¤,ÌŽO-¬,¾,Á,½,Í^ê-ôí‘Žž‘ä,ÌŽå“±Œ,ð^¬,é‘å‘,É¬·,·,é,±,Æ,ª,Å,«,½,ñ,Å,·,ËB

@@,Æ,±,ë,ÅA,±,Ìœè×,Å,·,ªA,Ü,·,Ü,·FŒö,ÉM-Š,³,ê,Ä,éB^Ê,ÍÅ,A,P,T,Ì-W,ðŽö,©,èAàŽY,Í
‰ø,Æ•À,Ô,Ù,ÇA,Æ,¢,¤,d^2,¤,±,
,É,Ü,·BŠ‘Fœè×,Í,æ,¤,ŽÒ,ÅFŒö,Ì‘å,ÈM-Š,ª, ,Á,½,©,çŒ-Í,ð^¬,Å,Ä,¢,ç,ê,½,ñ,Å,·,ªA<M°

,½,¸,É“G,Í‘½,¢BFŒö,ºŽ€,ÆA|,Ý,ðŽ,Â<M‘°,½,¸,ºœ×,É,Å,Á,¸, ,°,l-d”½,ß,ð’...,¹,½BV,μ,¢`%œ,Í,»¸,ðM,¶,é,ñ,Å,·B
 @,±,¤,È,é,Æ,³,μ,à,ºœ×,à,Ç,¤,μ,æ,¤,à,È,¢B’Ç,ÁŽè,©,ç“|,ê,Ä‘ŠO“|-S,ð,Í,©,è,Ü,·B‘<<&,Ü,Å“|,°,é,Æ-é,É,È,Á,½B<ß,,l-¬,l-·âÁ,É”“,Ü,é,¤,Æ,μ,½Bfhf“fhf“A,Æ-·âÁ,l-à,ð,½,½,
 u,“,¢AŽ~ß,Ä,êBv,Æœ×,³Œ¾,¤,ÆA-ê,³,ñu’ÈsŽèŒ,ðŽ,Á,Ä,“,¢,Å,C Hv,Æ,“,é,ñ,Å’ÈsŽèŒ,È,ñ,©Z,Á,Ä,¢,é,í,“,è,Ü,¹,ñ,©,ç,ÈBuŽ,Á,Ä,¢Bv,»,μ,½,c-ê,³,ñ,±,¤Œ¾,Å,½B
 uœ×-1,l-½-ß,Å’ÈsŽèŒ,ðŽ,Á,Ä,¢,È,¢•û,Í,“,ß,Å,“,Ü,¹,ñBv
 u,“,â,¶A,»,±,ð,È,ñ,Æ,©A-S,þBv,ÆŒ¾,¤,ñ,Å,·,ªA
 uœ×-1,l-@,ÍŒμ,μ,¢,Å,·,©,çA”,β,½Ž,,¤ä,ÅŽñ,ð,Í,È,ç,ê,Ü,·,ñ,ÅAAABv,Æ,¢,¤,í,“,ÅŒ<çœ×,Íh
 %œ®,É”,ß,Ä,à,ç,!,È,©,Á,½BŽŒ•,l-@-¥,ªs,“Í,¢,Ä,¢,é,ì,Í Šð,μ,¢,“,ê,çA,»,ê,ÅŽŒ•,ª¢,é,Æ,Í,ÈBŠì,ñ,Å,¢,¢,â,çA”ß,μ,ñ,Å,¢,¢,â,çB

@œ×,lŠO“|-S,ÍŽ,”s,μ,ÄAAI“I,É,Í”½,“h,l<M‘°,½,¸,É•ß,ç,!,ç,ê,ÅŽÔ-oi,-½““,ð•ÈX,l”nŽÔ,ÈŒ<,í,!,ç,ê,Äg‘l,“ø,«,¸,¬,ç,ê,éŽc“,ÈŒY,Å,·B

@@í‘Žz‘ä,l”\-ÍŽå<“I,Èlþ“o-p,ª,È,“,ê,ºœ×,ÍŒ,μ,ÄŠ^—ô,le,ð-^,!,ç,ê,é,±,Æ,Í,È,©,Á,½,Å,μ,å,¤B,»,¤,¢,¤Ó-¡,ÅA,¢,©,É,àŽz‘ä,ll,Å,·B

ŽQl}‘Ð‰¤îEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,½,¢,Æ,«,í

‘-½,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^ [flfbfg“XufAf}f]f“v,lfy[fW,É”ò,ñ,ÅA-{,lff[f^A‘•],È,ç,ðŒ©,é,±,Æ,ª,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰œÅ”\,Å,·B

<u>-nU</u> <u>V^a•¶ŒÉ</u>	ŽŒŒŒ<^ê~B,±,ê,ÍA-à,Å,·,º-Ý‰œ,Å“Ç,ñ,¾l,à‘½,¢,©,à,μ,ê,È,¢B-n‰œÆ,ÍŠ^—ô,âí‘Žz‘ä,lfcf[fW,“a‰œÆ,ÍM,É,æ,Å,Ä¶,«¶,Æ•,«o,³,ê,Ü,·B-à,©,ç-ðŽj,É<ß,Å,·Æ,¢,¤,l,àA-f-Í“I,ÈfAfvf[l BtHí‘Žz‘ä,ð•“ä,É<{é}J¹ŒöZ,àA,½,Ü,·,ªAŒ»ÝŽ,,l-ê,Í,·,·,·,ß,ÍAŽŒŒZ,lu-nUv,ÅŒ,Ü,èI ŽŒŒŒ<^ê,É,íu fsf... f^fSf%ofX,l -vW%opŽÐ•¶ŒÉ,Æ,¢,¤-{,à, ,Å,ÄA,±,ê,ÍAŒÃ‘äfMfŠfVfA,Í“NŠwŽÔ’B,ðŽälŒö,É,μ,Å,¢,éB,±,ê,ÍA<f,“,éBŽ,,l‘åD,«,ÈfGfsfNfefgfX,l-b,à, ,é,l,¾B
--	---

‘æ,Q,T‰œñ@œ×,l•ï-@®,·,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É-ß,é\]](#)

[‘O,lfy\[fW,Ö
‘æ,Q,S‰œñ@Žü](#)

[žY,lfy\[fW,Ö
‘æ,Q,U‰œñ@”žq•S‰œÆ](#)

@@ @‘æ26%oñ @”Žq•S%oÆ @

,PEZq

@Žq,Ç,å,æe,É‘Í,μ,ÄŽ,ÄŒh^o,ł,CŽ,ç,đEŽq,ÍuFv,Æ-¼•t,¬,Ù,·B,±,luFv,ł,CŽ,ç,đ‘¼l,É,Ù,ÄL,°,½,à,ł,dumv,Æ,ç,□B,±,łumv,^EŽq,ll,ł,ł‘†S,Ä,·B-¾Ž;Žž‘ä,
Ù,Ä,ł,łŽò,³,ł,³,|,ł“ú-{,Å,å“¹“ç,łŠî-{,¾,Å,½,©,çAm,Æ,ç,|,łł,ł,łfnfbfJłfS,Æ,μ,½fCf[fW,^Z,Ä,½,ñ,¾,ë,ç,ł,çA,»,ç,
ç,“““í,Å,Ä,Å,·,Å,©,èÅ,|,Å,μ,Ù,Å,½,©,çAf[ffbfp,ł,łNŠw-pŒê,æ,è,àm,È,ñ,Å,ç,□Œ¾-t,ł-‰øδ,μ,É,ç
Å,·,EB,å,
@umv,đ<

@@EZq,Im,^aäZ-,^{3/4},Ä,φ,ø,í, ,A,·,^aA,φ,
 \Œ»,·,éA,»,\l•\Œ»,^au-çv,Å,·B
 @u-çv,Ä,\%o½,\@B-á,|,îZö<æ,îŽn,ß,ÆI,í,ë,ÉA·N-§A-çA,Æ,â,é,Å,μ,åB,Ý,ñ,ÈS,î'†,Å,C,ɔŽv,Á,À,φ,é,\@'m,ç,È,φ,-,ê,ÇA-ç,Æ†-
 ß,^a,\@,ç,ê,î,Z«V,ð,·,é,ËB,Ü,³,μ,,±,ê,^aEŽq,ì,φ,ou-çv,Å,·BS,î'†,ÅA,æ,ë,μ,
 \Œ»,μ,È,-,ê,î'SŽe,É“,í,ç,È,-,ê,î'Ó-í,^aÈ,φ,μA\%o½,\@í,ç,È,φB,^{3/4},\@,çA^{“a},\@%o°,°,éu-çv,ð,·,é,±,Æ,É,æ,Á,À,»,\@CŽ,ç,ð³Zt,É“,|,Å,φ,éA,Æ,φ,
 ,o-ü,Å,·B

@``%<%%^,%<ESOE,E,À,A,ç,ë,ç,é,ECE,AumvZv,ç,à,é,IcZ,ç,òu-çv,A(E,E\,,·,±,Æ,Id-v«,dEZq,fà,
Æ,É,æ,Á,ÁZ,í,ê,Á,µ,Ü,Á,½~,‰çñ®æ,Á,«,éA,Æl,|,½,n%,‰,ËB

%@%<@,æ,è,à~,í,%oñ`æ`UŽ,Æ,ç,¤,±,Æ,a`Sí{,É, ,é,I,AAŽx`zŽO,É,Æ,A,Á,I`'sþ,I,æ,çŽv`z,³/4,Á,½B,¾,C,çA,±,IŽð‰æÆ,I³,!|,I,»IŒä,à~,Žx`zŽO,½,ç,È,ÛŒI,³,é,Á,†'Žv`z,†ŒÆ,Æ,É,Á,Á,ç,«,Ù,·B

@@@EŽqŽ@g, ŽD, ŽE, Žc, Žo-og, ŽA,, Žl-âb, ŽE, ŽA, Ž½, Ž±, ŽE, Žà, ŽA, Ž½, ŽI, ŽA, Ž·, ŽaŽ, Žr, Žμ, ŽAA, Ž», Žl-Œa, Ž”-, Žδ-•u-ŽQ, Ž·, ŽeB, ŽI, ŽJ, Žß, ŽI, ŽC, Ž±, Ž©, Žl, ŽE, Žcg-a, ŽAŒ}, Ž|, Žç, Žê, Žé, Ž±, ŽE, Žð-Ú•W, Žé, Žμ, ŽA, Žc, Ž½, Žñ, ŽA, Žμ, Žå, Žo, ŽA, Ž»-, Žê, Žl-ŽAŒ», Žμ, ŽU, Ž¹, Žñ, ŽA, Žμ, Ž½B
@, Ž©, Žê, Žl-Žü, Žè, ŽÉ, Ž¹/₂, Žl-Žq, Ža, Žc, Ž½B, Ž¾, Ž©, ŽqŽ-‰œŒ, ŽE, Žμ, ŽA, Žæ, Žè, Žl-ž-ŽÒ, ŽE, Žμ, ŽÄŠ-ô, Žμ, Ž½l, ŽÅ, Ž· BEŽq, Žl-íŽq, Ž©, Žç, Žl-ž-‰œŒ, ŽE, Žμ, ŽÄŠ-ô, Ž-, Žé, Žl, Ž½,

@,A,ç,A,EŒ¼,A,A,“,
„,¤,ñ,Å,·,“^aA‘åæ¶,³/₄,O,ðŒÄ,Ô,Ì,ÍŽ,–ç,Å^Ø,ê,“,“,ç,A–{–½,ÅŒÄ,Î,,ÉEæ¶,ÆŒÄ,ñ,³/₄B,»,ê,“,ì,Ü,U,Ü’ë...,µ,Å,µ,Ü,Å,½,Ì,Å, B’†‘,íŽv‘z
‰œÆ,Åu Žqv,Æ,ç,¤l–½,Í,Ý,ñ,È“–,¶,Å,·B

@EZq,I₁Zq,^{1/2},₁,“•OZ₁,μ,₁EZq,I₁E^{1/2}s^{1/2},“u _Eev,A,·B^{-1/4}O,,ç,¢•,¢,₁,±,Æ,, „,ë,n,J,a,E,¢,©,EBI,I¹u-{},A,a,æ,₁,ß,©,ç‡”Ö,É“Ç,,ñ,À,¢,Á,À,à,,»,,ñ,È,É-È””,¢,à,Ì,Á,Ì,È,¢,ËBf¹[ffbfsp,Ì“NŠw,Ý,₁,¢,ÉŠT”O,“fLfbf¹fS,μ,À,¢,È,,ë,Èà-¾,ÌŽd•ù,ð,μ,À,¢,é,Ì,À³,¼Œ¾,À,À,í,©,ë,É,

@/_2,%A,A,±,é,C,±,éu/lfbvlv,AÉS,J,é,æ,º,EjfjtE[fY,º,o,A,
—á,!,íuICÉ%—BFÍ,±,º,º,ñ,é,C,μ,å,j,È,μmvBŠç,º,«,é,ç,ÁCEº,º,áŽè,È,å,Á,ÉŽv,é,å,è,l, ,é,å,Á,

@ $-L^{-1/4}$, $\dot{E}, \dot{I}, \dot{A}, \dot{I}u^<, \delta E\mathbb{C}, \dot{A}^{\times} \times, ^1j^<, \dot{e}, \dot{I}-E, \dot{E}, <,\dot{E}, \dot{e}vB^3, \mu, \varphi, \pm, \dot{A}, \dot{e}^s, \dot{i}, \dot{e}, \dot{A}, \varphi, \dot{e}, \dot{I}, \dot{E}\% \frac{1}{2}, \dot{a}, \dot{1}, \dot{,}, \dot{E}-\dot{U}, \dot{A}, \dot{A}, \dot{Y}, \dot{A}, \dot{e}, \dot{e}, \dot{3}/4, \dot{-}, \dot{A}, \dot{e}, \dot{c}, \dot{o}, \dot{I}, \dot{I}-E<C, \dot{a}, \dot{E}, \dot{c}, \dot{I}, \dot{A}, \cdot A, \dot{A}, \dot{e}, \dot{c}, \dot{o} B$
 $u^>\dot{C}i, \mu, \dot{1}/2, \dot{J}, \dot{E}^{-1}, \dot{D}\bullet, ^a, \dot{I}A-\dot{[}, \dot{\times}, \dot{E}\dot{Z}\in\dot{\cdot}, \dot{A}, \dot{\%}\dot{A}, \dot{\dot{A}}, \dot{\dot{e}}vB^{\dot{C}A^3, \mu, \dot{e}J, \dot{u}, \dot{\dot{D}}'m, \dot{e}, \dot{\pm}, \dot{A}, \dot{e}, \dot{a}, \dot{A}, \dot{\%}, \dot{1/2}, \dot{E}, \dot{c}, \dot{I}, \dot{,}, \dot{I}, \dot{\%}\dot{u}, \dot{I}-[\dot{\cdot}\dot{u}, \dot{E}\dot{Z}\in\dot{n}, \dot{\dot{A}}, \dot{\dot{a}}\dot{Z}, \dot{v}, \dot{e}c, \dot{\pm}, \dot{A}, \dot{I}, \dot{e}, \dot{c}A, \dot{A}, \dot{e}, \dot{c}, \dot{o} \dot{O}-\dot{;}B, \dot{\dot{E}}, \dot{\dot{n}}, \dot{\odot}A, \dot{\pm}, \dot{\dot{n}}, \dot{\dot{E}}, \dot{\dot{A}}, \dot{\pm}, \dot{\dot{e}}, \dot{\dot{I}}\dot{\dot{C}}, \dot{\dot{n}}, \dot{\dot{A}}, \dot{\dot{e}}, \dot{\dot{e}}, \dot{\dot{\pm}}, \dot{\dot{c}}, \dot{\dot{I}}\dot{\dot{J}}\dot{\dot{S}}\dot{\dot{I}}, \dot{\dot{E}}^>-\dot{\dot{A}}, \dot{\dot{A}}, \dot{\dot{e}}, \dot{\dot{A}}, \dot{\dot{\pm}}, \dot{\dot{e}}, ^a, \dot{\dot{e}}, \dot{\dot{I}}, \dot{\dot{A}}, \cdot B, ^3/4, \dot{\odot}, \dot{\dot{c}}A\dot{\odot}A\dot{\dot{Z}}\dot{\dot{A}}\dot{\%}\dot{\dot{A}}A\dot{\dot{Z}}\dot{\dot{D}}^>, ^3, \dot{\dot{n}}, \dot{\dot{E}}, \dot{\dot{n}}, \dot{\odot}, \dot{\dot{E}}, \dot{\dot{I}}\dot{\dot{\%}}\dot{\dot{E}}, \dot{\dot{a}}D, <, \dot{\dot{E}}, \dot{\dot{I}}\dot{\dot{1/2}}, \dot{\dot{e}}, \dot{\dot{Y}}, \dot{\dot{1/2}}, \dot{\dot{e}}$

,Å, · ,ËB”N,ð,Æ,Á,½,ç“Ç,ñ,Å,Ý,½

@@,±,ñ,È,Ì,à,éBuŽqžH,AŠw,Ñ,ÄŽž,É,±,ê,ðK,¤A-’í,Üj,½Aàí,æ,ë,±,†,Î,µ,©,ç,,âvBæ¶,ª,„,Á,µ,á,Á,½A•×‰,½,ÆŠy,µ,¢,±,Æ,©,Œ

@%>%,δ•æΚ·,·é,©,Æ,¢,¤,ÆA%>'Šy,ç,μ,¢,Å,·BEŽq,lu—çv,É,Í‰'Šy,àŠU,Ù,ê,é,ñ,Å,·B'Œð,¤,¢,ë,È<VŽ®,ð,·,é,Å,μ,åB—
á,!,í¹/4,·l,·Œð,ÆŠOŒðŒðÅ,μ,½,è,·,éB,»,¤,¢,¤,Æ,«,ÉŽ®ê,Å,í<‘íŠy’c,«VŽ®,l‰'Šy,ð‰‰‰t,·,é,ñ,Å,·B,ç,ñ,Èóµ,ìŽž,É,ç,ñ,È‰'Šy,ð‰‰‰t,·,é,ì,·—
ç,·É,©,È,¤,©A,»,¤,¢,¤,±,Æ,ðEŽq,ÍŒ¤<‘,μ,ÄA’iŽq,½,ç,É³,·,ä,¢,½,ñ,Å,·B
@uÅ,ÉÝ,è,Äéii,μ,å,¤j,ð•,
·,é,í“à,ì!‰‰wi,μ,ã,ñ,ì,·È,μ,½,Æ,¢,í,ê,éŒJ,ì,·È,¾,Á,½,ìB,ÅAEŽq,ÍŠŒf,μ,Ä•KŽ€É,È,Á,Ä,±,ì,·È,ðf}fxf^[],μ,½,Æ,¢,¤,ñ,¾B,±
ñ,È,ì,ð,iŽq,½,ç,É³,·,½,ñ,¾,ë,¤B’iŽq,½,ç,à,Ý,ñ,È,Ä‡t,μ,ÄuŽž,É,±,ê,ðK,¤v,í,·,¾B
@ÈÃ‘äŽD‰i,Å,í‰'Šy,í’P,ÉŒÅl,ìŽi-·,äŠy,μ,Ý,Å,í,È

@@@EŽq^“E’O, lŽž‘á, ÉA, á, Æ, à, ÆSYY^“O, È, Ç, l\<VŽR, ð, Á, Á, ^, È, s, s, %, ß, lŽ®“T, lÈ-á‰ÆW^c, ^, ç, %B^t+J%J-3, f‘cæ_”q, ^, lŽ®“Tè-á‰Æ, %, i, lŽzé, n, %cæ, l-í, dŒÁ, Ño, µ, %, è, á, µ, %, æ, ã, ÁA-í}, Ý, %, ç, È, ±, Æ, á, Á, Á, ç, %B>Pjí, Ó, µ, á,

,®,ê,ç,ÍÄŒÓŽUi,¤,ñjL,¢,ÆŠ',J,ç,êAŽD‰c“I'n'Ê,I'a,¢IX,À,µ,½B

@EŽq,Í,±,Í“““IŽ®“Tē-ä‰ÆW’c,©,ço,ÄA,±,¤,¢,Ó-í,ÄZg,i,é,Ä,A,¢,½Œ¾-t,ÍÓ-í,ð,D,Ä,

„È,À,Ì,„¶,¶,Á,À,¢,½,à,Ì,ð‡—“IA—~“I,ÉÌ,è,©,!,-ÁŠw-â,É,Ü,À,,ß,½l,È,Ì,À,·
½,ñ,À,µ,å,¤,ËB
@,±,Ì,½,è,Ì,±,Æ,Ì,â,±,µ,¢,Ì,ÀŽ©ª,Ì“ª,ª—,µ,»,¤,¾,Á,½,ç-Y,ê,À,¢,¢,æ

,Q-ĐŽqAä¤Žq

@@EZq^ECEa,IZd%oAE,ISwZO,Ad-v,El,^a-DZqi‘O,S`‘O,RcIj

@,±,Í,Íu<‘Pàv,δSø|,€,±,ÆBÍSØ,É,ÍJ,Ù,ê,E^a,ç,É,μ,ÁZv,φ,â,ë,ÍSumv,^a,,éA,ÆA,«,Ù,·B-á,Æ,μ,Á-DZq,I,±,ñ,ÈZ

,δŒ¾,□B“AŽEI,È,C“*i*ŒA,è,ðs,,μ,½È‘l,ª,¢,€B,©,ê,I,‡,±,©,l’œæ,É,¢,Áf{fb,Æ,μ,À,¢,€,IB,»,l’œ,É,I,æ,¤,

@1,Í,Ù,ê,È,ª,ç,É°PB,³/4,Á,½,ç"ÆB,âí~,Í<N,«,é,Í,„,ª,È,ç,Í,ÉA,È,ºAç,Í,†,Í=,êAÍ=,ª,±,«,Ó,Í,ê,µ,Ù,È,¬,ê,Í,È,ç,È,ç,Í,©B–DŽq,Í

‰‰,ÍŽÓ,Íá,ÍŽÓ,ðŒŒK,¤,Æl,!,-,éB,¾,C,çA‰¤,Ín^n^É,É,-,é,à,Ì,Íu-çv,ðg,É,Á,-,Äl,-,ÍŽè-{,Æ,É,ç,É,-,é,Ì,É,ç,É,çB‰¤-1,ª,»,ê,ð,Á,«,Á,ç,É,ç,Æ
‰‰™ Žá,ªN,«,½,è,µ,À,ª,-,é,é,ñ,¾,AŒŒ¾,ç,Ù,·B
@,à,µ‰¤,¤A,C,ç,¤,µ,¤,¤,à,È,clÍŠÓ,Áu-çv,ðg,É,Á,-,ä,-§"h,Ès,ç,ð,-,é,±,Æ,ª,«,Œ‰¤,Æ,µ,Äl,-,lu'Pv,ð‰¤,Ý,µ,Â,Ô,µ,AA"p,ç,ð•sK,É,-,éê‡,ÍA,»,ñ,È‰¤-
1,Ížæ,ð,Ó,!,½,Á,Á,C,Ù,í,È,çA,»,±,Ù,ÁŒ¾,¤B,±,é,ðušv-½,æ,ç,¤Bšv-½,æ,Íu'V-½,ªSví,,ç,½j,Ù,év,Æ,ç,¤,±,æ,Á,·B"V-½,Í‰¤,½,É,æ,Á,Á'm,é,±
,Æ,ª,Á,«,é,¤B-ÐŽq,Ìe‡,Í"V-½,Íl,-,¤,ç,â,Á,Á,

@@-DZq, " , δ, U, ī, A, A%o%o B, E, " , o, φ, o~b, ðā, φ, A, U, ī, ē, ñ, A, " , Bu%o%o, æA-ç, ðg, E, A, " , æl" V-½, EZ", ðEX, " , alv, A, A, EB%o%-
1, ē, Æ, Á, Ä, Íž, " , É, É, φ~b, ÅA-DZq, Í%o%o E, ½, " , ç, ê, %, ©, Æ, φ, o, " , EAŽA, Í, " , o, Ä, Í, õ, cBlcK, " , , Á, Ä, , õ, ±

%c cfRf“fTf< f^“fg, Ŷ, ½, ¢, È, à, ñ, ¾, ËB, ·, ¨, ¢fMfff‰o, ðŽæ, é, lB

@-DŽq,Í“-Žž,Í·,·,²,çlçC,ÅA,»,ÌŒä,åŽð‰oÆ,Ì`Ì,çæ¶,Æ,µ,Ä‘,Œh

@@“ú-{},À,à,»,□,À,μ,%B-á,|,ÎA-L-¼,È,Ì,a“c%eAB“ú-{Žj,À,à,è,Ù,μ,%B-EB-<-,l·B”ÈŽm,À

,Á,Ä!%œA,É,È,Â,ç,Ä,µ,Ü,¤B,,È,½,ÍPI,¾A,Æ,ç,í,ê,Ä,Ý,ñ,ÈŠð,µ,©,Á,½,ñ,¾,ËA,«,Á,ÆB

@,»,Ì, ,ÆA!%œA,Í•ÛŽB,É,È,Á,ÄZÀ‰Æ,Å¤PT•,É,È,è,Ü,·B!%œA,ÍŽÀ‰Æ,Å¤BS,ÌŽáŽ,ðW,ß,Äm,ð,â,éB,±,ê,a!%œo¤mB,±,±,Å!%œA,ÍŠv-½à,ðä,

,Æ,Æ-³ŠŒW,Å,Ì,È,ç,Å,·B

@,“,Ü,¬B!%œA,ÌÅŒä,ð~b,µ,Ä,“,ÆA,â,a,Ä-<•{,Íä“É’¼•J,a~V,É,È,éB`À

Æ,È,³,ç,ÆZÓ,Á,ÄA”½È,Ì‘Ô“x,ðŒ©,!,ê,ÌŽŒY,É,Ì,È,ç,È,©,Á,½,ç,µ,¢B-§q,ðŠé,Ä,½,¾,-,ÌB,Å,·,©,ç,ËB

@,µ,©,µA,±,±,Å!%œA,Í^,Å³-È,©,ç-<•{,Ì“a”>,ð,µ,Ä,µ,Ü,¤,ñ,Å,·B-<•{,Ì-ðl,a,>,ñ,È~b,ð•,ç,Ä•,ð-§,Ä,È,ç,í,Ì,„,È,ç,ñ,Å,·,aA!%œA,Í-<•{,Ì-ðl,Ìumv,Ü,²,±,ëA,Å,·,©A,»,ê,ðM,Ì,Ä,µ,Ü,¤,Ì,ÈB,Ä,ç,É,ÌŽ-å,à,³,ë,È,ç,Ì,ÈV’†^ÄZEŒv‰œ,Ü,Å’,Ä,Ä,µ,Ü,¤B,»,ñ,È,í,-,ÅA,Ä,ç

,É-<{,É,Ì,·,é”½^tZÒ,Æ,µ,ÄŒY,³,ê,Ä,µ,Ü,ç,Ü,µ,½B

@Žv’z,a-,-,Ä,Ä,µ,Ü,Ä,ÄŒ»ŽÀ“I,Èg,Ì,µ•ü,É,Ì,È,ñ,¾,©ŠÃ,ç,Æ,±,ë,a, ,éI,Å,µ,½B

@@Zð‰œÆ,ð,à,¤elB¤òŽqi‘O,R¢^tjAi‘Žž-ä—Šú,Ì,Å,·B

@aoŽq,Í-DŽq,Æ,Í’½,Ì,Äu<“av,Ä-L-½Bi,Ì,Ü,ê,È,³,ç,É,µ,Ä“Am,âF,ðg,É,Å,¬,ÄJ,Ü,ê,Ä,«,½,í,-,Å,Ì,È,çB,¾,©,çŒNŽåA‰¤,½,é,à,Ì,Ì-ð-Ú,Ìl,-,È,³ç,µ,Äumvu-çv,ðg,É,Å,¬,³,!,ç,±,Æ,¾,Æà,«,Ü,µ,½B

@“-,ÌŽð‰œÆ,¾,©,çuFvumvu-çv,ð~,ÌŒ,É,µ,ÄŽD‰¤,ð-§,Ä’¼,»,¤,Æ,ç,¤,Æ,±,ë,Í“-,Ì,Å,·,aA,»,Ìí“I,È,â,ë•ü,ÍS”“x^á,¤,Æ,±,ë,É”Ó,µ,Ä,

R-n‰œÆ

@@ŽY,Í-n‰œÆi,Ü,,©jB,±,ê,Í‘Žž-ä,³I,í,ç,ÆA,!,Ä,µ,Ü,Ä,½Šw”h,È,Ì,ÅA, ,Ü,ë“éö,Ý,³, ,ë,Ü,!,ñ,³Aí“-Žž,ÍŽð‰œÆ,Æ“-,Ì,

@-n‰œÆ,ÌŒ³‘c,a-nŽqi,Ü,

@Œ“¤,Æ,ç,¤,Ì,Ìu-•È-³,«l-þ¤v,Æ,Å,¤Œ³/¤,¤,æ,¤,È“Ó-ì,Å,·B-nŽq,ÍŽð‰œÆ,ð”á”»,·,é”†,ÄŽŒŒÈ,ÌŠwà,ð-§,Ä,Ü,·BŽð‰œÆ,Ìu-çv,ð-•È,¾,Æ”á”»,·,é,Ì,ÈB,»,µ,ÄuŒ“¤v,ð,Æ,È,!,é,Ì,Å,·B

@@,È,°AŽð‰œÆ,Ìu-çv,a-•È,©B

@-ä,!,ÌAŠö”ø,^tB’m,Å,Ä,é,æ,ÈB,C,±,ÌŠé^tÆ,Å,ÌŠwZ,Å,ÌŠö”ø,«,Ì-K’è,a, ,Å,Äe“¤,É•sK,a, ,Å,½ê‡A‰¤½“ú,©^tx,ñ,Å,¤Œ‡È^µ,ç,É,È,ç,È,çµK,¾,ÈB@, ,ê,ÌZÀ,ÌZòŠw,Ì³,!,©,ç,Å,Ä,ç,é,Ì,Å,·Be,³Z€,Å,µ,âBe,É’Ì,·éuFv,ÌlŠÖ,Ì,Ü,²,±,éumv,Ì”†,Å,âA,âA,Ì-“I,ÈŠt,¾,©,çA,±,ê,Ì-Å’f-é”f,É”B,µ,ç,í,-,Å,B,µ, ,Ä”B,µ, ,Ä”B,µ, ,ÄA^t,f-é-ð,-A-Ü,Ì,Ü,ç,Ü,ç,±,Ü,çA,Æ,Å,â-½S,Å,Ì,ç,ç,é,Ì,çBŽdŽ-,â-×,Ì,ñ,©Zè,É,Å, ,Æ,a-,-,ê,éB,±,ê,ÌŠö”ø,«,Ì-“T“-ä,Å,·B

@,Ü,½A“r,É•ž,·,Ì,ž€,ñ,¾e,É’Ì,·éu-çv,Å,à, ,é,í,-,Å,·B

@e,a-S,

@,³,ÄA,»,±,©,çæ,a-â‘è,Å,·BÌ“kŽè”,ðŒ©,Ä,à,ç,Å,½,ç,ç,Ä, ,é,ÆŽv,¤,“,ÇA,“,Ì,ç,ç,á,ñA,“,Ì, ,ç,á,ñ,a-S, ,Ìé“ú,Æ,©, ,éB

@,Ì,á, Ae-F,â-öI,ž€,ñ,Å,µ,Ü,Ä,½,çŠö”ø,«,Ì‰¤½“ú,©Bf[f,Å,µ,âB

@,±,ê,ð-n‰œÆ,Í-•È,¾,Æ,ç,¤,í,-,Å,·BŽð‰œÆ,ÌlŠOŠŒW,ðe,©,çŽn,Ü,Ä,Ä“-S‰œ~ä,É~ -ñ‰œ»,·,éBe,ð”†S,É‰œ“,·,È,é,É,µ,½,a,Äumvu-çv,a”-,Æy,·,È,Ä,Ä,ç

,@,¾,-,ÇAŒŒ‰œŠŒW,³,Å,â-äZ-Èl,a,ç,È, ,È,Ä,½,ç”B,µ,ç,Ì,á,È,ç,Å,·,©I-öI,Æ”ø,«-ð,©,ç,ç,Æl,!,ç,¾,-,Å,Ä,ç,ç,Å,µ,âB,µ,©,µAŽð‰œÆ,Í-öI,a,ç,È, ,È,Ä,Ä,â-”B,µ,

@,±,¤,ç,¤,“z,ÌlŠÖ,ÌlŽ-“I,È”

,ÄuŒ“¤vB’N,Å, ,ç,¤,Æ-•È,!,“-,Ì,ç,¤,É”¤,³,È,-,ê,Ì,È,ç,È,çA,ÆŒ¾,¤,Ì,Å,·B

@@,·,×,Ä,Ì,Ì,ð•½“tm,É”¤,·,é,È,ç,ÌAe,ž€,ñ,Å”B,µ,ç,æ,¤,É”½l,ž€,ñ,Å,â”B,µ,,È,,Ä,Ì,È,ç,È,çBí“,È,ñ,©,Å‰œÆ“¤,ž€,ñ,Å-~,µ, ,È,Ì,à-Ù,Å,ÄŒŒ,Ä,ç,ç,é,È,ç,Ì,Å,·B

@,»,±,ÅA-n‰œÆ,Í”ñUv,ð,ç,¤Bu”ñUv,Æ,Ía”½”ñAžå,Ì,±,Æ,Å,·B,C,ç,ñ,Èí“,É,â-n‰œÆ,Í”½,Ì,·éB

@,©,ç,ç,a,²,ç,Ì,Í,½,¾u””½”ñUv,ÆŒ¾,¤,¾,-,Å,Ì,È,ç,Æ,±,é,ÅAí“,ðZ~B,é,½,É”S”y,ði,“%ñ,éB-n‰œÆW”c,Æ,ç,¤,Ì, ,Å,ÄA,±,é,Ì-ñZq,ÌíŽq,½,ç,Å,Â,

,é,Éi,-,Å, ,Å-h‰œqí“,ðZè“,¤,ñ,Å,·B’å“,Ì”¤AN-a, ,é”¤,É,íá’Ì,É-§,½,È,çB, ,ç,Å,µ,âB,»,ë,á, AlC, ,Å,éB

@@, ,éŽzA‘v,Æ,ç,¤,“¤,Å,ç,ç,¤,¤,É,È,Å,½B,³,Å,»,

%çi,ð\,µž,ñ,¾B

- 19 -

@.%o, É%oí, □, Ä–nŽq, ÍCE³/, □BŠù, É–n‰ÆW'c, ^v, É“ü, Á, Ä–h‰cq, l€’ó, í®, Á, Ä, ç, éB^‘, Ä, íeU, ß, lV° Ší, ðŠJ”, µ, ½, ÄE• ,
 –Ž, ÄE, •, ±, ÄE, í, Ä, «, Ü, ^, nB–³, È, Èo•º, í, ^, â, ß, È, ^, çA, ÄE, ÈB
 @.%o, àŽCM, ^, é, l, Ä, », ñ, È, ±, ÄE, ðŒ³/, í, ê, Ä, ào•º, ð, â, ß, é, í, ^, ^, È, çB, », ±, ÄA–n‰Æ, íAŽÀÜ, É^‘, ^, Ý, Ä, ©‘v, ^Ý, Ä, ©‰o, l–Ú, l‘O, ÄfVf...f~fŒ[fVf‡“fQ|f€
 , ð, â, è, œ, ÄE, µo, Ü, µ, ½B^‘, lœER, ^A, ê, Ä, ±, ç, ê, Ä–n‰Æ, ÄE^lí, ^, é, ±, ÄE, É, È, Ä, ½B, ±, ê, ¾, ^, l•ºŽm, ð, ±, ±, È”z'u, µ, ÄA, ±, ±, ©, çU, ß, éB, ¾, Á, ½, çA, í, ê, í, ê, l, ±
 , ê, ¾, ^, l•º, ð, ±, ±, È'u, ç, Ä, ±, ñ, È, Ó, □, É–h, ç, Ä, ±, ±, ©, çtP, ^, éA, ÄE, ©, â, Á, ½, ñ, Ä, µ, å, çB
 @Œ<ÇA–nŽq, ^Ý, Á, Ä, µ, Ü, Á, ½B

$\oplus \overline{C} \otimes \cdots \oplus \overline{C} \otimes \hat{A} \otimes \overline{C} \otimes \hat{B} \otimes \overline{C} \otimes \cdots \oplus \overline{C} \otimes \hat{A} \otimes \overline{C}$

“@” „J,æ,ø,E b,“ç,„A,C, ,é,I,AA,±,I b,a,C,±,U,AZA b,C,i,C,é,U,‘,n,“-n‰oÆ,l•µ Tc,ø,á

@-@q, "z-êog, ¾, Á, ½, Èl, !, é, ÈA, •È, È, l, ð, g, :, x, y, È, c, ñ, Èy'z, ^, :

@,à,ç,D,Æ,Å,Í,©,ê,í-,ç,éW'c,aÍ^<Zp,ífvf,Æ,µ,Å,½,,³,ñ,í-h%cq-p,íŠí,í

$\partial_z \bar{A}^3 = -\bar{\rho} \partial_z \bar{A}^3$, $\partial_z \bar{B}^3 = -\bar{\rho} \partial_z \bar{B}^3$, $\partial_z \bar{C}^3 = -\bar{\rho} \partial_z \bar{C}^3$, $\partial_z \bar{D}^3 = -\bar{\rho} \partial_z \bar{D}^3$.

é, ðCE, U, μ, ½, ē, C, ÉB-n, ðZg, æ, ¾, C, c-n-ZqA, Æ, é, ¼, ¾-¼, st, e, ½, Æ, à, e, □, B, C, ., c, C, i, C, c, É, e, -é, CA"z - ea, l, 0, a, f - f, I, ¾, É,

@-n‰oÆ,Í`-s,μ,½,æ,¤,Å,·,ºÍŽ·ä,Ì,í,è,Æ,Æ,Æ,ÉÁ,!,Ä,¢,Á,µ,Ü,¢,Ü,µ,½Bí`-,ÌK-Í,»,Ì,à,Ì,ºä,«,,È,Á,Á-n‰oÆ,Ì,æ,¤,È”,‰osW’c,Ì“w-Ì,Å,ÌA‰c½,Æ,à,È,ç,È,

,S-@%oÆ

@@ŽÝ,Í-@‰Æi,Ù,¤,©jB‘O‰oñb,μ,½¤è×A,©,ê,ª-@‰Æ,Å,·

@Ž‰%Æ, „u –çv, ð~, l’Œ, É, ~, é, l, É, l, µ, ÄA –@‰%Æ, lú –@v, ð’Œ, É, µ, Ü, •B –@, ð×, C, ‘e, B, Äl –, ÉŽç, ç, ¹, éAŽç, ç, È, Ç, A, %, çŒµ, µ

@, Å, · B

@,í,©,è,â,·,ç,À,µ,åB,µ,©,àA,â,è,â,·,çAŒø‰Ê,à,·,®,ÉŒ»,ê,éBŽÀÙ,É,Í-@‰Æ,ðl-p,µ,Ä,®,ñ,®,ñ‘-Í,ðL,Î,µ,½,í,¬,¾B,Ù, A,±,ê,ÍŽv‘z,Æ,ç,¤,æ,è,à“Žj<Zp,É<ß,ç,€B

@@-@%oÆ,Ì-~_%oÆ,Æ,μ,Ä,ÍŠØ”ñi‘O,R¢Ij,ðŠo,!,éB,©,ê,ª,¢,½-{,ºuŠØ”ñŽqv

—→ Žz, Ä, ç, œ, Ž, Ä, É, Žd, |, Ä, ç, ÄA —→ Žz, ÍŠØ”ñ, |E”, ð°, ê, ÄŽE, µ, Ä, µ, Ü, Á, ½B

@ŽÀ,Í,±,Í→Žz,àŠØ”њ,àŽá,¢ ,ÍŽò‰øÆ,lä¤Žq,Í’íŽq,¾,Á,½,Æ,¢,¤Œ¾,¢“,,|,^,é

@ǣ Žq, ï̄ ŠO, l̄-{—^«, ¾, ©, ç, ^³ç, µ, È, —, ê, l̄, È, ç, È, ç, A, È, ç, o, l̄, Ä, µ, ½B, µ, ©, µA, ±, l̄í Žq, Ó, ½, è, l̄{O”}•”“³, ¾, —, ðS̄W, n̄, ¼, æ, o, Ä, - BiS̄O, l̄-{—

@,μ,©,μA,±,I•û-@,^a•x‘<

,T^{“”}%oÆ

@@@“%Æi,ζ,□,©j,A, B~VZqA“Zq,“%Æ,IZy‘z%ÆB,Æ,å,æ,O,S ϵ i,I,Æ,¢,í,é,B,½,³A~VZq,E,C,IZAY,“%œö,µ,¢,ç,µ,¢B

@“%oA,IZv^z,lu-^s\times Z\mathbb{C}^Ri,p,\phi,\mu,\circ,\tilde{n}jvBu^{\wedge}\times_1,Ej,\cdot,\pm,AE^{-s},\cdot,\hat{e},IAZ\mathbb{C}i,\cdot,Ij,\cdot,\mathbb{C},\zeta^Ri,

@”Œò,½,î,ª,±,ñ,È<³,|,ð•·,¢,Ä•x‘.

,ñ,ÈŽv‘z,Í•K—v,Æ,³,ê,½,Ì,©,ÈŒ

@@@“Žq,É,Í—L^{-1/4},ÉuŒÓ±,Í⁻²v,AÆ,¢,¤b,^a, ,éB“Žq,^aQ,Á,¢,Á⁻²,ðŒŒ,¢B⁻²,Í[†],Á“Žq,Í[±],É,È,Á,Áf¢qf%cfqf%o”ò,ñ,Á,é,ÌB,Ó,í,Ó,í•—,É‘,Á,ÁŽA,É,CŽ,^a—,¢B
@,»,±,ÁA“Žq,Í—Ú,áŠo,ß,½B,, A⁻²,¾,Á,½,ñ,¾A,ÆŽv,Á,½,ñ,¾,_,ÇAI,!,Á,Ý,½,c[±],¾,Á,½ŽŒ•,Ífzf“fg,É⁻²,¾,Á,½,_,l,©A,»,ê,Æ,à;—
Ú,áŠo,ß,½lŠO,žŒ^a,^a⁻²,È,l,©A,C,¤,à,í,©,ç,ñ,È, B,»,ñ,È“bBŒ[~],^a, ,é,ñ,¶,á,È,¢,_,ê,ÇAŒÝ,ÉŽŠ,é,Ü,Á[‘]/,
,éb,È,l,ÁÐ%câ,µ,Ü,µ,½B

@“‰Æ,ÍŽ‰œÆ,Æ,Æ,à,É‘Žž·ä,‰I,í,Á,½,Í,ç,åA’·,
‰œc,í,Žð·³,â‰§·³,Ù,CfnfbLfjŠ,Æ,µ,½Œ,Á,Ì,È,c,¬,é,C“ú-{ŽÐ‰œi,Ì‘†,É,åJ,„,À,c,é,ÆŽv,œ

,U•%oÆAc%o;‰oÆA‰oA-z‰oA

@@@í Žž‘á,ç,µ,ç,ì,„‰œÆBSwŽO,í~Žqb‘•A‘·fsf“iŒžu,É,„,Ã,«v,É•o,Æ‘,
@í~,É,Ý,Â,½,ß,ì,zp,ð‘lŒn‰œ,µ,½,ì,Å,·,ªA‘P,È,épf,Å,í,È,Á‘~_Aži~_Alj~_,Æ,µ,Ä,à‘ç,ß,é,ì,ÅAŒ»Ý,Å,àftf@f“,í‘½,ç,ç,µ,çB
@uS‰œñ,Á,Ä•S‰œÝ,Á,½,Æ,µ,Ä,àA,»,ê,íAä,íY~_,Å,í,È,éBí,í,·,µ,A‘ŠZè,ð‘ü‘z,³,!,é,±,Æ,±,»Åä,íY~_,Å,·eBv
@u“G,ð‘m,èŒÈ,ð‘m,é,È,ç,íâ‘l,É•‰œ,“çS”z,í,È,çi”þ,ð‘m,èŒÈ,ð‘m,ç,í•Sí,µ,Ä-wi,·,âj,¤,©,ç,jv
@,ÆA,Ü, A,ç,ë,ç,è-½Œ³/⁴,“,è,Ü,·BfGfsf[fh,à,½,³,ñ,·,é,ñ,Å,·,ªAfLfS,ª,È,ç,ì,ÅÈ~ª,µ,Ü,·B,ç,Ü,ÍAf}f“fK,Æ,©,Å,à,½,
;¹, ,Å,½,ç‘ç,ñ,Å,Ý,Å‰œ,³,çB

@@@C%o;ooÆ,IZv'z,A,¢,¤,æ,eSOŒð,A,-¼y,ð„,A,%l,%z,¢,I,±,Æ,%B‡|l,“A,µ,à,þjö,Þh`i,,µ,ñEH~O,R,P,VjA Ati,è,ñ,±,þjö,I`f,vih~O,R,O,XjB,±,ê,¾,~Šo,|,À,“,~I,¢,¢,À·B
@í~Šú,É,È,À,Á,«,À,Í`a,Æ,µ,À‘¼,Í`Z‘,ð~”~—,·,éB,±,ê,É‘ÎR,·,é,%z,B,É‘Z‘,“~—_ç,ðŒ \times ,Ô,±,Æ,ðà,¢,À,U,i,Á,%z,Ì,a‘h~,À,·B‘n~—“I,Éc,É•À,Ô~Z‘,“~—_ç,·,é,Ì,À‡]Ac,É‡,í,³,éA,ÆŒ¾,Á,%B‘h,Í`Z‘,Ì`ab,ð~êl,ÆŒ“”C,·,é,U,À,É,À,%z,Æ,¢,¢,U,·B
@,±,ê,ð~”j,À,%z,Ì,a‘AtôB‘,Éžd,|,À,¢,½f<V,Í`Z‘,ÉŒÂ•Ê,É,Æ“~—_ç,ðŒ \times ,Ô,±,Æ,ðà,¢,À,U,i,è‡]ò,ð•ö‰œð,³,¹,½,Æ,¢,¤,ñ,¾B

@@%C-A-Z%eCÆ,IAç%Y%I,,□,,HE'Ø,R,O,T'Ø,Q,S,OjB%æA-zðEusæ,Æ,¢,ø,I,ð,Æ,E,,!%,B%Zz, %E%F^šI,ðW^å-μ,½,à,ł,Å,,^AŽ,,Æ,Í,æ,^a,Ø,è,Ü,!,ñB,Æ,æ,,!,,PCEè,¾,-šO,|,Å,,¢,Å,

VCEA TJSW

@@@THE SWIFT, BOSTON, MASS., NOVEMBER, 1861.

@@WZQDXB,±,ε,azQSW,IGE 1,L,L,εB a-ε,1%ε◎x01-+ε,1- w,0w,b,/2,a,1B 1-p,L - ,/2,6,1-ε ε,Tel,E,h,ε, U,A,A,ε,εBCEA'āŽD%εi,δ'm,éA,Å'Md,ÈŽ'-_,Å·B

‘-¼,đfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^ [flfbfg“XufAf}f]f“v,łfy[fW,É”ò,ñ,ÅA-{,łff[f^A‘•],È,C,đŒ©,é,±,Æ,ª,Å,«,Ù,·Bw“ü,à‰oÅ”\,Å,·B	
Žò³,Æ,f‰½,© ’†ŒöV‘	%oÅ’nLs~B~_Œê,âEŽq,É’l,·,éŠu¬ŠT”O,đ,D,Å, ,ç,êA,©,È,è•]”»,É,È,A,%B•K“Ç-{,łê,ÂB
~Œê,łV,μ,¢“C,Ý•ñ Šâ”gŒ»‘ä•]ŒÉ cover	‘{èŽs’è’~B“NŠw,Æ,μ,Å,Å,Í,È,A—đŽj,łfefLfXfg,Æ,μ,Äu~_Œêv,đ‰ođà,μ,½BEŽq,łŒ¾—t,ªAŒÅ, ,ê,ÅAŽ,,,É,à—‰ođ,Å,«,é,æ,¤,É,æ,Ý,ª, ,Å,½B
EŽq“ ’†Œö•]ŒÉBIBLIO cover	””łÃ~B‰oÅ’nŽ,łŒo<†,Éæs,·,é ‰oæŠu“I,ÈEŽq“B’Èä,łRû,đ“C,B,łAEŽq,åŽò³,ł,©,ÑL,¢fCf[fW,ªA,·,Å,©,è“h,è‘Ö,! ,ç,ê,é,±,ÆŠÔ`á,¢,È,μB

‘æ,Q,U%eñ@”Žq•S‰Æ@,·,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É–ß,é](#)[‘O,łfy\[fW,Ö
‘æ,Q,T‰eñ@•x‘•º](#)[žY,łfy\[fW,Ö
‘æ,Q,V‰eñ@`](#)

@@`æ,Q,V%oñ@@`@@

@ @‘O,Q,Q,P”NA` ,^a†‘,ð“^ê,μ,Ü,μ,½B` ,Ì“s,Í™ ÷ -zi,©,ñ,æ,¤jBŒ»Ý,Ì¼À,Éß,¢,Æ,±,ë,Å,· B

@ÌX,ÌŠwJŽž‘ã,ÉŽ„,Í,±,Ì™ ÷—z,És,Á,½,±,Æ,ª,éB,Ü,¾AŽ©—R,É’†‘,ð—·s,Å,«,È,¢Žž‘ã,ÅŠwJ—FD—K’†’c,Æ,¢,¤—¼—Ú,ÅŠIŒð,És,Á,½B

@'†‘SØŒW, I•×<

,Å,É¥”ñs,«,½,¢,ÆfŠfNfGfXfg,µ,½,ç<}ç“Á•Ê,És,¬,é,±,Æ,É,È,Á,½B’†‘,É,Í,Ç,Ì“sŽs,É,à
—ðŽj”Ž•ŠÙ,ª, ,Á,Ä,»,±

,És,Á,½,ñ,Å,·,ºAŠÍŒ f of X,ð~,è,½,çŒ»'n,Ìl,½,î,º,Ç,Á,ÆW,Ü,Á,Ä,«,½B,Ü,¾,Ü,¾ŠO'1,a,º,ç,µ,¢ŽzŠú,¾,Á,½,
,µTM÷—z,Í•'Ê,ÌŠIŒ f R[fX,©,çŠO,ê,Ä,¢,½,©,ç••'ç,µ,©,Á,½,ñ,Å,·,ËB,í,ê,í,ê“ú—{IŠw¶,ÌŽü,è,ÉfAf b,Æ,¢
,¤ŠO,É•ŽR,Ìl,¾,©,è,a,Å,«,½B,»,Ìl,½,ç,Ý,ñ,È"—,ÌŠç,µ,Ä,éB•ž,Í'S^õ^,Á•,È—È“ü,ê,ð'...,Ä,¢
,é,ÌBfzf“fg,É•ŽR,Ìl,¾,©,è,¾,Á,½B

@”Ž•“SU,À‰½,ðŒ©,½,©,IA‘S‘RSo,!,À,¢,Ù,¹,ñ,ªA™÷—z,IIX,É,J,ë,J,ëŒ©,ç,ê,½,I,¾,“,I—Y,ê,ç,ê,È,¢B,»,I™÷—z,À,·B

@,U,,A-@%oÆ,II-p,^a,,éB¤è×A→Zz,E,C-@%oÆ,IZ;‰Æ,ð”²“F,μ,A“à‰œüSv,ð,“,±,E,A,½,±,Æ,“—Í,Í<

@,³,ç,ÉA` ,ª'n-“I,É•Ó<<'N,É, ,Á,½,±,Æ,ª-L-~,É“

@í‘Zz‘á,íæí‘,Í,Ç,±,©,Æ,¢,¤,ÆAŠØAéºAæâA,Å,·B,±,±,^ê”Ô•¶%o»,^i,ñ,Å,¢,éB’n},ÅŒ©,Ä,à-ÉI,Í¬,³,¢,ËB-
ÉI,³,¢,Æ,¢,¤,±,Æ,Í,»ê,³/4,-lŒû,^W†,μ,Ä,¢,é,±,Æ,ì-•Ô,μ,Å,·B,»¤,¢,¤,Æ,±,ë,Í•¶%o»,^,¢,ÆŒ©,Ä,æ,¢B
@,μ,©,μA,»ê,Ít,É,¢,¤,ÆŠJ”,ì-]’n,^

Í•Ó«,Í’x,ê,½‘,Å, ,Å,½,©,çAi,ñ,¾’n’æ,Í•¶%o»,â<Zp,ðŒø—_|,æ,Žæ,è“ü,ê,é,±,Æ,ª,Å,«,½,μA–
¢ŠJ,Ì’n,ª,½,
Í“y,É‘g,Ý“ü,ê,Ä‘—Í,ðL,Î,μ,Ü,μ,½B

@•Ó«,Ì`Æ,μ,Ä,Í“ì•û,Ì`^,à“—1,Å,·B,â,Í,è,±,±,àí“—Šú,É,Í⁺,Ì, ,Æ,Ì`b,É,È,é,ñ,Å,·,^A^,^A-S,μ,½, ,Æ€‰H,Æ,¢,¤j,^a^,Ì`n,©,çø,Ä^êŽž’†“S‘Ì,É†—β,·,é,æ,¤,É,È,éB,±,Ì`n^æ,É,Í,â,Í,è` ,Æ`ÌR,Å,«,é,æ,¤,ÈfGflf^fM[,,Å,½,ñ,Å,μ,å,¤B

@@`^a`†““^ê,μ,½,Æ,«,Í‰o¤,^a`í,¹,¢j,Å,·B‰o¤,ÍŽü,ÍŽž‘á,Æ,Í”äŠr,É,È,ç,È,¢,

,Æ,É,È,Á,½B,»,¤,È,é,ÆA%o¤,Æ,¢,¤Ì†,Å,Í-ž‘«,Å,«,È,¢B%o¤,æ,è,àf%o¤“fN,Ìä,Ì†,Æ,μ,Äc’é,Æ,¢,¤ŒÄ,Ñ-¼,ð”-¾,μ,½B¢ŠE%o,Ìc’é,Æ,¢,¤,±,Æ,ÅŽ©,çŽnc’é,Æ-¼æ,Å,½,Æ,¢,¢,Ü,·B,©,ê,ÍA` ,Ì‘,¤%oi%o“,É,Â,Ã,
,ñ,È,Ó,¤,Éfhf“fhf””Žš,ð‘,â,μ,Äc’é-¼,É,·,é,æ,¤,ÉŒ^,ß,½,ç,μ,¢B,¢,,ê,Í<äç<ä•S<ä\<ä¢c’é,àoŒ»,·,é—\’è,¾,Á,½,ñ,Å,·,¤AŽÀÛ,ÍŽO¢c’é,Å` ,Í-Å,ñ,Å,μ,Ü,¢,Ü,·,¤,ËB

@,±,ÌŽnc’éA`%o¤

Í“I,É,â,Á,½B^é“ú,ÉŒö•J‘,ð,R,OfLf•¤“Ç,ñ,ÅŒ^I,ð,Â,Å,¬,½,Æ,¢,¤B•J‘,ðd,³,Å—È,é,Ì,à,·,²,¢,Å,·,ËB

@,¤,ê,É,Ü,Â,í,é~b,Í,½,

L-¼,È,Ì,¤Žnc’é^ÄZE-¢ ŒB’†%of%oæ,É,È,Á,¤ŒöŠJ,³,ê,Ü,μ,½,ËB

@fvfŠf“fg,ÉÚ,¹,Ä,¤eŠG,ÍŠ,ÌŽz‘ä,É•,¤,ê,½,à,Ì,Å,·,¤A’¼Œä,ÌŽz‘ä,¤,çAlX,É•Œê,Æ,μ,ÄŒê,èŒp,¤,ê,Å,¢,½,±,Æ,¤,í,¤,éB

@` ,É,æ,é“^é’¼‘O,Ì` bB`%o¤,ðŽE,¹,Ì-Å-S,ð-Æ,ê,é,Æl,!,½,Ì,¤%o,Ì‘¾ŽqB‘¾Žq,ÍŒtcei,¬,¢,¤j,Æ,¢,¤’j,É`%o¤

,½,ñ,¾BŒtce,Ífvf,ÌŽE,μ%o®,Å,·,¤,±,ÌŽz,ÌŽ©•¤,ÌŽ,ðŠoŒå,μ,Ä,ÉŒü,¤,¢,Ü,·BŽè,Ý,â,°,¤,È,¢,Æ`%o¤%oyŒ©,Å,«,È,¢,Ì,Å` ,¤,ç,Ì-S-½¤ŒR,ÌŽñ,Æ%o,Ì-Ì“y,Ì’n},ðŽè,Ý,â,°,ÉŽ,Å,Å,¢,BŽñ”¤,æ,%oyŒ©,Å,«,AA’n},Ì’†,É%oB,μŽ,Å,Å,¢,½’Z“,Å

@,Æ,±,¤,¤,æ^éŒ,ÅŽh,μ‘¹,È,Á,Å,μ,Ü,Å,½B

@%oyŒ©,ÌŠÔ,É,Í‘½,

,½,Ì,Å’N,¤Œtce,ðŽ~,¤,é,±,Æ,¤,Å,«,È,¢B`%o¤

,é,ñ,Å,·,¤,» ,ÌŒ•,Í“Å’È»,Å,â,½,ç,É’·,¢BŒ•,Æ,¢,¤,Ì,Íâ,É“ü,Å,Å,¢,éB,±

,¤AŒ•,Ì•,ð%oEŽè,ÅŽ,Å,Ä’O,ÉL,Ì,·,Å,μ,åB%oEŽè,¤L,Ñ,éÈä,ÉŒ•,¤,¬,ê,Íâ,¤,ç”²,¬,È,¢

,Ì,Å,·,¤B,ÌŒ•,Í,¤,é,

@,μ,¤,à“È‘RP,í,ê,ÄÅ,Å,Å,¢,é,¤,ç,È,·,³,ç”²,¬,È,¢B%oÆb’c,¤Œ©Žç,é’†A’Œ,Ì,·,¢,¾,ð,®,é,®,é,Ü,í,Å,Ä“|,°,éB,» ,ê,ðŒtce,Í’Ç,Å,¤,¬,éB

@,æ,¤,â,¤,D,Æ,è,Ì%oÆb,¤u%o¤,æA”w•%o,í,ê,¤IvB,Í<ä>C,Å,¢,ÄŒ•,ð”w’†,É”w•%o,Å,½B,» ,μ,½,çâ,ÍfXfgf“,Æ°,É“] ,¤,Å,Å,æ,¤,â,Œ•,¤”²,¬,½B”½Œ,¤,ðŠJŽn,μ,ÅA%oÆb,¤Œä,¤,¤,çŒtce,É”ò,Ñ,Å,¢,Å,æ,¤,â,Žæ,¤%oÝ,³,|,½B,» ,Ì-È,ð‘,¢,Å,·,éB

@Žnc’é,Ì-È•æ,ðŽç,é,½,ß,Éì,ç,ê,½•”n~ÚBi,Ö,¢,Ì,æ,¤,¤,j,Æ,¢,¤,âÖ,¤,ç,Ä“°,ÌŒ•,¤,o“y,μ,Ä,¢,é,Ì,Å,·,¤,¤,é,¤,³,¤,X,PD,RfZf“f BŽnc’é,ÌŒ•,Í,±,¤,æ,è,¤,æ,Ü,C’·,¤,¤,Å,½,ñ,Å,μ,¤,¤,¤B

@,» ,ñ,ÈŽ-Œ,¤,¤,é,È,¤,ç,Ì“^é,¾,Å,½,í,¬,¾B

@@@` ,Ì

@, Ü,, A“Žj•ûŽ®, Æ, μ, ÄŒESŒ§§, δl—p, μ, Ü, ·Bâ‘I, ÉŠo, !, Ä, „, ±, ÆB` , ÍŽj, ÍŒSŒ§§B, φ, φ, Å, ·, ËB
 @Žü, ÍŽž‘ä, É, Í”Œò, á<‘A‘åv, „, ê, ¼, êŽŒ•a, l—W, ðŽŒ—R, ÉŽx”z, μ, ½, ËB, ±, ÍŽü, l•Œ§§, Æ‘Ì‘I, È•û—
 @, ÄŒSŒ§§B, Í“S“, ÉŒSA, „, l‰o, ÉŒ§, Æ, φ, œs‘gD, ð’u, φ, ÄA’†‰o•{, ©, çŠ—», ð”hŒ
 %oWŒ “I, È^êŒ³Žx”z, ðs, Á, ½B’†‰oWŒ “Iê§‰oÆ, l’aj, Æ, φ, φ, Ü, ·BŠi—{“I, É, Q, O¢I, É”‘©, ^Å, Ñ, é, Ü, Å’†‘, l
 Žj§“x, Í, ±, lŒ, ð•ö, ·, ±, Æ, „, è, Ü, ^, ñ, Å, μ, ½B, „, œ, φ, œÓ—j, ÅAŒSŒ§§, ll—p, Æ, φ
 , œ, l, Í, à, l, ·, ^,
 @, ï, È, Ý, É“ú—{, Å, ÍŒ§, l‰o, ÉŒS, „, è, Ü, ·, ^A’†‘, Å, lktBŒS, l•û, aŒ§, æ, è, à‘å, «, Ès

 @@, „, ç, É, l“^ê‰oÆ, Æ, μ, ÄA§“x, ð“^ê, μ, Ä, φ, «, Ü, ·B
 @, PC•JŽs, l“^êBÍ‘Žz‘ä, É, lŠe‘, Å•JŽs, lŽs‘l, ^á, Á, Ä, φ, Ü, μ, ½B, ±, ê, ð“^ê, μ, ½B` , lŽs‘l, lâ½i, Ä, ñj‘, Æ, φ, φ, Ü, ·B, â, ^Å, ±
 , ê, ©, çž^“A“, „

 @, QC‰oÝ•¼, l“^êB` , l‰oÝ•¼, lŒŠ, l, , φ, ½ŠÅ‘KB“Á, É, ±, lŽž, lŠÅ‘K, ð”¼—¼‘K, Æ, φ, φ, Ü, ·B

 @, RC“x—Êti, Ç, è, å, œ, ±, œj, l“^êB“x, l’·, ^A—Ê, l’lAt, l, „, à, ^A, „, ê, ¼, ê, ð‘a, é’P^Ê, Å, ·B, ±
 , ê, ð“^ê, μ, ½B’P^Ê, ^n^æ, ^, Æ, É^á, Á, Ä, φ, Ä, lIs

 @, SCŽÔ<øi, μ, á, «j, l“^êBŽÔ<øO, Æ, φ, œ, l, l’nŽÔ, lŽÔ—Ö, ÆŽÔ—Ö, l, , φ
 , ¾, l’·, ^Å, ·B“—Žž, l•Ü“^H, È, Ç, , è, Ü, ^, ñ, ©, ç”nŽÔ, ^—, ê, l’n—È, l, |, ®, ê, éB, |, ®, ê, ½•”•a, ^fŒ[f<, Ý, ½, φ, É, È, Á, Ä, φ
 , , ê, È, φB, ¾, ©, çAí‘, lŠe‘, l, í, ‘, ÆŽ©‘, lŽÔ<øO, ð‘¼‘, Æ^á, œ, œ, É, μ, ½B, „, œ, ·, ê, l“G‘, lŽÔ, ^, â, Á, Ä—^, Ä, àU, ß, É,
 , Å, μ, å, œB, Å, àA“V‰o“^ê, ·, ê, l, ±, ê, l•s•Ö, ¾, ©, ç“^ê, μ, Ü, μ, ½B

 @, TC, Å, φ, Å, ÉŽv‘z, à“^ê, μ, ½B•“BŽdi, Ó, ñ, μ, å, ±, œ, J, aj, Æ, φ, œB‘åb—>Žz, lŒfô, Å` , lŽj, É”á”»“I, ÈŠw—
 á, ð‘e^3, μ, ½B^äŠwA”_<œAè, φ, lŠw—â, μ, ©<—, ^, A, „, ê^ÈŠO, l—{, ðW, ß, Ä”R, â, μ, ½B, ±, ê, ^•“B•“Í”R, â, ·, ±,
 , Æ, Å, ·BÍ‘Žž‘ä, lŠw—â, l‘½,
 , Æ, ¾, ËB
 @BŽð, l, S, U, Ol, , Ü, è, lŽðŽÒ, ðJ, «—, , ß, É, μ, ÄŽE, μ, ½Ž—Œ, Å, ·BŽnc’é, lŒÂl“I, È“{, è, ©, çN, ±, Å, ½Ž—
 Œ, È, l, Å, ·, ^AŒ‰oÊ, Æ, μ, Ä, lŠw—â, l‘e^3, É, È, è, Ü, μ, ½BB, lJ, «—, , ß, É, ·, é, ±, Æ, Å, ·B

 @@@ ŠO^B` , l•û, l—V—q‰oÆ, Å, , ē™ ±“z, É‘l, μ, Ä“ç”“ŒR, ð”hŒ
 —l“y, ðŠg‘å, μ, Ä“iŠCŒS, È, CŽOŒS, ð’u, «, Ü, μ, ½B

 @@@‘å“y—ØHŽ—, à, „, ±, È, Á, ½B
 @, „, l’†, Å—L—¼, È, l, ^œ—ç, l’·é, lŒšÝB, ±, ê, l, „, ×, ÄŽnc’é, ^i, Á, ½, í, ^, Å, l, È, œBÍ‘Žž‘ä, É—
 k•û, lŠe‘, l, „, Å, ÉŒÂl•È, É’·é, ði, Á, Ä, φ, ½, ñ, Å, ·, ^AŽnc’é, l, ±, ê, ð, Å, È, φ, Å’·é, Æ, μ, ÄŠ®¬, ^, ^, ½, l, Å, ·B
 @Œ»ÝŽc, Á, Ä, φ, é’·é, l, ¾, φ, ½, φ, l—¾‘ai1368~1644”Nj, ÉC’z, ^, ê, ½, à, l, Å, ·BŽ—iW, lŽÈ^, l”a‘B—
 äi, l, Á, ½, Å, ê, œj, É, , é, à, l, Å, ·B—k<z, ©, ç<ß, φ, l, ÅŠŒñ, Æ, μ, Ä®”ñ, ^, ê, Ä, φ, éŠ, ÅAä, ð•à, ^, é, œ, œ, É, È, Á, Ä, φ, Ü, ·B
 @ŽR, l—Åü, lä, ð, Ç, ±, Ü, Å, à, œ, Ë, œ, Ë, Æ, Å, Ä, φ, éB, Ç, ê, ¾, ^, llŠÔ, l~J—l, ^Zg, i, ê, ½, ©, ðŽv, œ, Æ<C, %o“,

@'†‘—·s, ÅA, ±, ±, às, «, Ü, μ, ½, æB, ±, l̄a, δ°a, ç, ½BŽOŒŽ, Å, ȷ, å, o, Ç–k, l̄ó, ©, çá, ^~A, Ä, «, ½, ñ, Å, ·B, , A, ±, l̄, Í, é, ©Œü, ±, o, ©, ç – V – q – °, ^, ä, Á, Ä – ^, ½, ñ, ¾, È, ÆŽv, Á, ½, ç, È, ©, È, ©ff}f“f fb fN, Å, μ, ½, ÈB

@<{“a,à‘¢,Á,½B^¢-[<,{ÆŒÄ,Î,ê,é‘s‘å,È<{“a,ÅA^ê—œl,ªÀ,é,±,Æ,Ì,Å,«,éLŠÔ,ª, ,Á,Ä,»,Ì‰œ°,É,P,Of[fgf<,ÌŠøŽw•“,ðŽ,Á,½ŒR‘à,ªWŒ<,Å,«,½,Æ,¢,¢,Ü,·B

@•æ,à̄,Á,½Bé<ŽRi,è,́,ñj—É,Æ,¢,¢,Ü,·,·,·,·,n‰o,É,«{“a,ð‘¢‰oc,μ,½,ç,μ,¢B’†‘l,Í, ,l¢,Å,à,±,l¢,Æ“—,J,æ,¤,È•é,ç,μ,ð,·,é,Æl,|,Å,¢,Ü,μ,½,©,ç“—,Jf,fm,ði,é,Ì,Å,·B

@,³,ç,É,±,Ì'n‰o,Ì{“a,ðŽç,é,½,ß,É'n‰o,ÌŒR‘à,ðì,Á,½B,±,ê,ª—L—¼,È•º”n~ÚB,Å,·BŽnc’é—
É,Ì“ŒŽOfLf,ÌŠ,ÉlŒ,ÌŒR‘à,ª”
,ë—ñŽOç“Ì”

@,±,Ì•°Žm,ÌlŒ` ,Í`ê,Â^ê,Â,Ý,ñ,È•\í,â”–Œ^,^á,¤,ñ,Å,·B

@“-Žž,łł,½,ł,Íog•”°,É,æ,Á,Ä”–Œ^A’j,Å,à”–,ð’·,

,½,˜,Å,·B,ÅA•°Žm˜U,ð’²,×,Ä,¢,

,Æ,à,í,©,éB` ,Í•Ó««,É, ,è,Ü,μ,½,©,çŽü•Ó,Ì–

§, ª, ,é, Í, ©, à'm, ê, È, øB

@•◦”n˜UB,Í,Ù,¾‘S•”,“E@,³,ê,À,¢,È,,ÀE@,ê,Í,Ù,¾,Ù,¾¢,ç,À,à,À,À,
,“C,¢,À,C,©,È,¢,Ì,À—,,Ù,½,Ù,Ù,É,µ,À,¢,é,È,¢,¤,±,È,À,·B

@^È·OfefŒfr,À,±,Ì°Žm,ÌlŒ`¸ðì,éŽÀŒ±,ð,â,À,À,ç,Ù,µ,½,^æ,ÀŠ®¬,³,¹,é,Ì,ÉêŒŽ·Èä,©,©,À,À,ç,½·L‰o¬,ª, ,éB‘S‘,©,ç“©H,^W,ß,ç,ê,À‰o½”N,à,©,¬,À^ê·Ìê·ÌÄ,«ä,º,Ä,ç,Á,½,ñ,Å,·,ËB

@@’·é,Æ,¢,¢A•º”n~Ú,Æ,¢,¢A%o½,ð,â,é,É,à“O’ê,µ,½lSCíp,Á,·B,Æ,É,®,‘S‘,®,çl,ð“®^ð,µ,Ü,
É,¾,¬,Å,à,V,O–œl,a“®^ð,³,ê,½,Æ,¢,¢
,Ü,·,®,çA,¹,Á,®,
œ,È~b,¾,Á,½,É^á,¢, ,è,Ü,¹,ñB

@,³,ç,ÉZnc'é,Í'S',EZ©•ªê—p,Í“¹~H,ðì,ç,¹,Ü,µ,½B

@,±,ê,I•,^a,V,Of[fgf< B, ^3,ç,É,»»,I^,ñ'†,É,Vf[fgf<,I

,Æ, ^a \leftarrow , ³, ê, È, ¢B, », I^{1/4}, I^{M°} AS⁻ —» AŒR ‘à, I, », I‰, I^{€”} È“¹, ðs, «, Ü, · B

@Znc'é,I,±,I“^~H,A‘S‘,ð—·s,μ,½,ñ,À,·,ªA,»,I-U“I,IZ©•ª,ISç,ð—O,EŒ©,¹,é,½,β,E,IB

@,»,à,»,àAc'é,ÀÈ,¢,À,½,À,AAo—^,½,À,U,â,U,â,I'PŒê,¾,©,ç^ê”E— O,E,I‰o½,I,±

,Æ,¾,©,í,©,ç,E,¢BZnc'é,I`I,³,à,í,©,ç,E,¢B

@,»,±,AA“xSI, δ ”²,

@-Ó,Í,±,Ì“¹~HHŽ-,É,àŽg-ð,³,ê,“,Ù,“,ÉŽnc’é,^aÊ‰oß,·,é,Æ,«,É,ÍH—
Æ,Æ,©’¥”

@Žnc’é,Í,±,Ì—p“¹,Å‘S‘,ð,ß,®,èŠe’n,ÉŽ©•^a,ÌŒ÷Ñ,ð,ñ,³/4Ì”è,ð—§,Ä,³,¹A‘×ŽR,Æ,¢
,¤ŽR,Å••‘T,ÌvŽ®,ð,μ,¹/₂B••‘T,Æ,¢,¤,Ì,Í“VŽq,É,È,Á,¹/₂,±,Æ,ð“V’n,Ì_,É•ñ,·,é—v,È<VŽ®,Å,·B

@@,³,ÄA“V‰o,ð“^ê,μ,Ä,â,è,¹/₂,¢,±,Æ,Í‰o ¹/₂,Å,à,â,Á,¹/₂Žnc’é,Å,·,^aA,±,¤,È,é,ÆÅŒä,É—~,μ,
@,»,ê,ÍA•s~V’·Žo,Å,·B•sŽ€,ðŽè,É“ü,ê,¹/₂,¢Žnc’é,ÉAŒÓŽUL,¢~A’†,^aß,Ä,¢,Ä,«,Ù,·B•ûŽm,Æ,¢,¤—
,pŽtAŽôpŽm,Ì,æ,¤,ÈŽO,¹/₂,i,^aŽnc’é,É,¢,ë,¢,ë,È•s~V’·Žo,Ì¹Z—@,ð“Žo,μ,¹/₂,æ,¤,Å,·B

@“ú—{,Æ,ÌŠŒW,Å—L—¹/₄,È,Ì,Í™•ÙB,±,Ìl,Í“Œ,ÌŠC,É—H—‰o,Æ,¢,¤“‡,^a, ,Å,Ä,»,±,É•s~V’·Žo,Ì”é—
ð,^a, ,é,ÆŽnc’é,É³,¹,¹/₂B,»,±,ÅŽnc’é,Í™•Ù,É,»,Ì—ð,ðŽæ,è,É,¢,©,¹,¹/₂,Æ,¢,¢,Ù,·B™•Ù,Í,Ù,³,©Ž©•^a,¢
,©,³,ê,é,Æ,ÍŽv,Å,Ä,¢,È,©,Á,¹/₂,Ý,¹/₂,¢,ÅA,¢,â,¢
,â,³/₄,Á,¹/₂,æ,¤,Å,·,^a“Œ,ÌŠC,Éo,©,¹,¹/₂B,»,ÌŒä,Ç,¤,È,Á,¹/₂,©,ÍL~^a, ,è,Ù,¹,ñB
@,¹/₂,³/₄A¹É”¹/₄‡,ÌŒF—ì•û,É,Í,±,Ì™•Ù,^a,â,Á,Ä—¹,¹/₂,Æ,¢,¤“à,^a, ,éBV<{Žs,É,Í™•Ù,Ì•æ,Ù,Å,·é,»,¤,Å,·B

@Žnc’é,É¹ß,Ä,¢,¤•ûŽm,Ì’†,É...¹â,ð•s~V’·Žo,Ì—ð,Æ³,¹,¹/₂ŽO,â, ,Å,¹/₂,æ,¤,Å,·B

@...¹AG,Å,¹/₂,±,Æ, ,è,Ù,·,©B’Ì‰o·Œv,ðS,,Å,¹/₂,±,Æ,Ì, ,él,ÌŒoŒ±, ,é,ÆŽv,¤,ÇA...¹Æ,¢
,¤,Ì,Í,È,ñ,³/₄,©•sŽv<c,È,ñ,³/₄,æ,ËB‰otÌ,È,Ì,ÉŠÛ,
,é,Æ—O,«,È,¢,Å,·B’Ì“à,É“ü,Á,¹/₂,ç“Å,³/₄,©,ç...¹â,Å—V,ñ,Å,¢,é,Æ“{,ç,ê,Ù,μ,¹/₂,ËB

@Ì,Ì,±,Æ,Å‰oÈŠw“I’mŽ—,Ì

@,ÅAŽnc’é,Í,Ç,¤,à...¹â,ð

~“úŽnc’é,Í“Y’É,Å¹ê,μ,ñ,Å,¢,¹/₂,ñ,Ì,á,È,¢,©,ÈB

@@...¹•ž—p,^aŒ“ö,©,Ç,¤,©,Í,í,©,è,Ù,¹,ñ,^aA,Ä,¢,ÉŽnc’é,^aŽ€,É,Ù,·B‘O,Q,P,O”N,Ì,±,Æ,Å,·B
@,³,ÄAŽ€,ñ,³/₄,Ì,^a“s,Ì™÷—z,³/₄,Á,¹/₂,ç—â‘è,Í,È,©,Á,¹/₂,Ì,Å,·,^aA‘S‘—¹s,Ì“r’†,ÅŽ€,ñ,³/₄BŽ€
,ñ,³/₄,Æ,«,É,©,ê,Ì‘ø,ÉŽd,¹,Å,¢,¹/₂,Ì,^a>Š—i,©,ñ,^a,ñj,Ìæâ,Å,·B

@c’é,^aŒö,ÌŽdŽ—,ð,·,é,Æ,«,É,ÌŠ—»,^a•ž²,·,é,ñ,Å,·,^aAfvf‰ofCfx[fg,ÌŽžŠÔ,Éc’é,Ì¢b,ð,·,é,Ì,^a>Š—,Å,·B
@>Š—,Íj“¹Ší,ðØ,èŽæ,ç,ê,Ä,¢,éŽO,¹/₂,i,Å,·B,©,ê,ç,Íg^a,Í‘á,c’é,ÌŽ,“I,È“z—ê,É¹ß,¢‘JÝ,Å,·Bc’é,Ìg^ß,É,¢
,é,Ì,ÅA”Ù,¹/₂,i,É¹ß,Å,
,μ,Äc’é,ÌŽq,Ç,à,Å,Í,È,¢Žq,ðŽY,ñ,³/₄,è,μ,Ä,Í¢,é,©,ç,ËB,±,ê,^a>Š—,äŽg,i,ê,é—R,Å,·B

@>Š—,Æ,¢,¤§“x,Í’†‘ÅŒä,Ì‰o©’©’,^a—Å—S,·,é,Ù,Å,Ä,Å,¢,Ä,¢,Ù,μ,¹/₂BÅŒä,Ì>Š—,Ìl,Í,Å,¢
,Q,O”N,,ç,¢‘O,Ù,Å,¤,Ä,¢,¹/₂,ÆŽv,¢,Ù,·BŽ—¹W,É,Í’©Žž‘ä,Ì>Š—,ÌŽÈ^a, ,è,Ù,·,ËB,“—ê,³,ñ,ÌŽÈ^a,³B>Š—,ÍŽá,¢
,Æ,«,É,Í,·,²,
@í“^ß—,^a“z—
éA”ÆßŽO,ðŽèp,μ,Ä>Š—,É,·,éê†,âA•n,μ,¢ŽO,^aŽ©,ç>Š—,É,È,Á,¹/₂,èAe,ÉŽèp,ð,³,ê,Ä<{’ì,É”,,ç,ê,¹/₂,èA>Š—
,É,È,é,É,Í,¢,ë,ë,Í—R,^a, ,é,æ,¤,Å,·B

@,±,ì,š-,íg•“í,é,í’á,
í,ðU,é,øžò,à,å,½,è,·,éBc’é,í”é-§,ð’m,é,±,æ,à,å,«,é,μ,ëB

@@@,³,ää,½,ç”l,ì,š-,¾,-,äžnc’éê-p,í”nžò,éo“ü,è,·,é,±,æ,·-,-,³,ê,ä,ç,½,ñ,¾bžnc’é,íž€
,ðæâ,·,μ,©’m,ç,ë,çB,©,ê,í,±,ê,ð-~p,μ,äæ-í,ð^-,ë,ø,æ,μ,½B
@žnc’é,íž€¾,ð,±,å,»,ëæ©,ä,ý,½B,·,é,æAžý,íc’é,í’·j,é÷,é,æ‘,ç,ä,·,éB’·j,í,±,ížž™±“z“ç”°,å-k•û,é
‰oo“a”†B‰oo“,
-·,é,å,ä,ç,éB,»,±,ää,íceóå,é,»,á,æúG,μ,äžnc’é,íž€,ð,°,éB
u•ä‰oo,íž€,ð’m,ä,ç,é,íž,,æ,·,é,½,¾,-,å,·B,ç,ü,è,ç^æ¾,ð‘,«‘ö,!,äæóå-l,äžý,éc’é,é,è,é,±
,æ,·,å,«,ü,·Bž,·,æ|-í,μ,ü,!,ñ,©hv,è,ç,æ,ç
,á,ä’‡šò,μ,½bæóå,ac’é,é,è,é,í,è,ç,æši,ñ,å’|^æá,íæâ,·,í’n^æ,ææ-í,ð•ùø,μ,½,ñ,å,μ,å,øB
@,à,ø,D,æ,è,‘ab,í—>žz,à,±,í’‡šò,é‰ooá,í,å,½B

@”é-§,é,μ,½,í,í‰ooA-d,¾,-,å,í,è,
,ø,±,æ,à,·,å,½,ñ,å,μ,å,øB

@,ù,ñ,í,í,©,èlšò,é,μ,©žnc’é,íž€,í“,!,ç,ê,·,ac’é,í’ås-ñ,ítm÷-z,í,ü,ç,éœü,©,á,ä
-·,ð,å,ä,å,·,½B,»,íšò,éæâ,·,á—>žz,íceóå,é’|^æ,³,¹,é,æ,ø,é,ç,é,è€’øhi,ð,μ,ä,ç,½,ñ,å,μ,å,øB

@,æ,±,ç,ääžnc’é,äž€,ñ,¾,í,·ce»ý,ížr“ceèbž,ížμcežb<,©,á,½,ñ,¾b“-ržnc’é,íž€,í...å,ä,
-1,èl,ç,äžnc’éê-p”nžò,©,ç•y,çžn,β,½b‰oo½,à’m,ç,³,ê,ä,ç,è,ç‘ab,å<cer,½,ç,·sR,éžv,çžn,β,é,ææâ,íš±
,μ<,ð‘å-é,é”f,çw,β,äžnc’é,í”nžò,í¶‰ooE,é,å,·,ä•¹-,-,¹,½B<,íL,ç,åž€,ð,²,ü,©,»,ø,æ,ç
,ø,íB‘ab,½,ç,·æâ,·,é,è,º,»,ñ,è,±,æ,ð,·,é,í,©A,æ,½,·,é,æu•ä‰oo,í,²-½-β,åA,í,½,
,ü,·Bv,æ“š,!,éBžnc’é,í-½,¾,æ,ç,!,íA’N,à,»,é’èä,í’ç,å,«,è,ç,í,å,·,æB

@ši-

@æâ,·,í€’ø,ç,·,éžnc’é,íž€,ææóå,í“ñçc’é,æ,μ,ä,í’|^æ,ð”
,±,æ,ð--R,éž©žE,·,é,æ,ø,é-½-β,·,éBžnc’é,íU,ížèž†,ð‘-å,ä,¾B

@@@,±,í,æ,ø,é,μ,ä’|^æ,μ,½“ñçc’éæóå,í,å,·,äü,è,à,í,é,è,å,μ,ü,ç
,ü,·Bžææ,íš-æâ,·,äžè,é,·,é,æ,ø,é,è,å,½B
@,š-,í’i,íšòè‰oo,í¶ý,æ,μ,äæy•í,³,ê,ä,ç,é,©,çææ-í,ð^-,é,æ,å,è,½,ç•ú‘è,é,è,éBž,é’í,μ,äó”cš’,ðž,å,±
,æ,í,·,ü,è,è,çž©•a,í•x,æ•‰oohS,ð’ç,·,é,æ,ø,é,è,é,æ,ø,å,·B,ç,ø,ížq‘·,à,è,ç,í,·,åžç,ç,è,·,é,í,è,ç
,à,í,à,è,ç,©,ç,ëB

@æâ,·,í,å,·,äž©•až©g,·c’é,é,è,é-iS,ðž,å,½,æ,ø,å,·Bž©•a,·ç,ê,
@,·,éžž“ñçc’é,í’o,å•SS-,·,ø,é,å,ä,ç,é,æ,±,ø,öææâ,íž
çc’é,íuæâ,A‰oo½,ðæ¾,å,ä,ç,é,í,©Bšp,í,·,ä,ç,éAž,å,í,è,ç,©Iv,æ”½-_,μ,½B’N,aæ©,ä,àž,íž
@,·,é,ææâ,í,í,·,é,æ•à,ò•Sš-,ðæ©‰ooñ,μ,½,ñ,¾B,·,é,ææâ,·,é,è,é-ðl,½,ç,íceû,ð,ø,é,·,äæu•ä‰oo,±,»A
‰oo½,ð,·,å,μ,å,ç,ü,·B”n,å,í,·,é,ü,!,ñ,©Bv

@“ñ¢c’é,Íœ±’R,AÆ,·,éBŽ©•ª,Íc’é,Ì’n^Ê,È,ñ,Ä,¢,¤,Ì,ªŽÀ,Íó,Á,Û,Ì,¢,·,¾,Á,½,±,AÆ,É<C,Ã,

@,±,ê,^a u"n Z

@@ŽÀ,Í,±,Ì,±,ë,É,È,é,ÆA Še'n,Å”½—,ªN,«,Ä,¢,é,ñ,Å,·B,¾,¬,Ç,Ì•{,Í{’ì“à,ÌŒ—
Í“¬,Å,«,ç,ñ,Æ,µ,½,Ô,ª,Æ,ê,È,¢B,Ù,³,µ,,±,ñ,È”nŽ,È,±,Æ,Î,©,è,â,Á,Ä,¢,é, ,¢,¾,ÉA”½—,Î,ð—
Å,Ú,·,Ù,Ç‘å,«,

ŽQl}·D%oîEEEE,à,ô,µÚ,µ, ’m,è,½,¢,Æ,«,Í

‘-¼,ðfNfŠfbfgN,·,é,ÆAfCf“f^ [flfbfg““XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”ò,ñ,ÅA-{,Ìff[f^A‘•],È,Ç,ðŒ©,é,±,Æ,ª,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰oÅ”\,Å,·B

<u>EŽnc'é</u> <u>É, Í“äu'kŽDŒ“áV’</u> <u>(1232)</u> <u>cover</u>	Šx “í~B,±,ñ,È~b, ^a Ú, Á, Ä, ç, ½-{B @, P, X, V, S”NA’†‘, ÍlŒÄŠwŽÒ, ½, , ^{a•o} n~ÚB, ÍŽŽŒ@, δŽn, ß, é, ÄA-~“úŽŽŒ@Œ» ê, É”””, Í~VI, ^a Œ», ê, éB-Ø‰oA, ÉÀ, Á, Ä” ‰o°, É, Í, , é, ©, çHv, ÄE°, δ, ©, , éB•Í, È-ê, ³ , ñ, ^¾ , ÄE•]”», É, È, Á, ^½ , ç, µ, çB @, , ñ, È, , é“ú, Í— [•ûA, », Í~VI, ^a , , å, Á, ÄE”÷Í, ñ, Å u, Å, ç, Ä, ±, çvB @”Œ@’S“-ŽÒ, ^a , Å, ç, Ä, ç ,, ÄA^äŒË, ©, ç, Q, O, Of[fgf<, à-£, ê, ^½ , ÄE, ±, è, Å~VI, Í-§, .ç, Z~, Ü, Á, Ä uŽŽŒ@, , µ, È, ~VluM, J, é, ©, Ç, o, ©, Í, ‘‘O, ÍYŽè, ^¾ Bv @~VI, ÍÍ, ç, È, ^a , ç Š-Ñ, Í ‰œ, ÉÁ, , Ä, », ê, «, è“ñ“x, ÄŒŒ», ê, È, ©, Á, ^½ , », o, Å, ·B ~VI, ÍŒ ^¾ - t, Ç, ‘, è, ©, ê, ÍŽw, µ, ^{½‰o} , ^{a•o} n~ÚB, Í“È, «“-, ^½ , è, ^¾ , Á, ^½ , ±, ÄE, Í, ç, o, Ü, Å, à, , è, Ü, ¹ , ñB
>Š\“o ^o ßŽj, Í \“e’†ŒœV’ (7)	ŽO“c ^o ‘×•~B’†‘Žj, ðl, ÉŒê, é, È, çA, ±, ê, ð“Ç, ñ, Å, ‘, ©, È, ç, ÄA’p, , , ©, µ, ç, {B•Ê, É ^o , µ, Ä, ç, é, í, , Å, Í, È, A’.”N“Ç, ÝŒp, ^a , ê, Å, «, ^½ Šî-{“I, È-{, Å, ·B
ŽjL—ñ“ 1 (1) Šâ”g•ŒÉ Â 214-1	
ŽjL—ñ“ 2 (2) Šâ”g•ŒÉ Â 214-2	
ŽjL—ñ“ 3 (3) Šâ”g•ŒÉ Â 214-3	Ži”n ‘J (~), -ì ŠAŽ ÷ (-l-ó) B ŽžŠÔ, ^a , , él, ÍA-{•“, ð“Ç, ñ, Å, Ý, é, Í, à, ç, ç , ©, à, µ, ê, È, çBŽjL, ÍAtHi‘Žž‘ä, ©, çA‘OŠi‰oŠú, Ú, Å, ÍAŠi-{“I, È•ŒŒfBŒtce, ÍŽnc’é~ÃŽEŽ- Œ, åAŽjL, ^a Œ ³ f f [^] , Å, ·B, ±, o, ç, o-{, ð“Ç, p, ÄEÄŽC•äŽŒg, ÍŽž‘ä, È‘Í, ·, éfCf[fW, ^a -N, ç , Å, , éB, , è, È, Ý, ÉAŽ,,, Í, ZŽž‘ä, È“Ç, ñ, ^¾ , Í, ÅA[• ^a , Ý, È, ³ , ñ, È, à“Ç, ß, Ü, ·B
ŽjL—ñ“ 4 (4) Šâ”g•ŒÉ Â 214-4	
ŽjL—ñ“ 5 (5) Šâ”g•ŒÉ Â 214-5	

‘æ,Q,V%oñ@`@;,”í,è

fgfbfvfy[fW,É–β,é

‘O,Ìfy[fW,Ö
‘æ,Q,U%oñ@”Žq•S%oE

ŽŶ,łſy[fW,Ö
‘æ,Q,W%oñ@‘^Šż,ł»-S

@ ‘æ,Q,W%oñ@ @‘^Š;„Í»—S @ @

,P'ÄYECÈÀL,Ì—

@ @`,{^A-S,·,é,«,Á,©,¬,Æ,È,Á,½”½—,^a,Ä,ŸEŒàŒö,Ì—,Å,·B

,”N‘O,Q,O,X”N,Ì,±,Æ,Å,·B

@-œ-¢,Ì`·é,É<ø,¢<™ —z,Æ,¢,¤—k,Ì,Ü,¸,ÉŒx”Ù,Ì•°Žm,Æ,µ,Ä·ì,èo,³,ê,½,Ì,Å,·B,X,O,Ol,Ì’—_,½,¸,¤,Ì—Øl,É^ø
—|,³,ê,Ä—·,É,Å,½B'ÂY,½,¸,Ì,Ü,¸,©,¢<™ —z,Ü,Å,Í,‘,Á,Æ,P,O,O,OfLf,Í,‘,éB

@,Æ,±,ë,“r’†,Å‘å‰oJ,^~„,Äì,“”Ä—”,μ,Äæ,Éí,ß,È,

ß,ÍŠúŒÀ,ºØ,Á,À, ,Á,ÀŒ^,ß,ç,ê,½“ú,Ù,Å,ÉTM—z,Ì,Ù,¿,É,Â,©,È,¬,ê,ÎŒY,³,ê,é,±,Æ,É,È,Á,À,¢,éB,^¾,©,çA,¢,»»,¢,ÅŒ»’n,Ù,Å,¢,©,È,

@,Æ,±,ë,a‰o½“ú‘Ó,Á,À,à...,Íø,©,È,cB‘Ó,Á,À,ç,é,¤,„,É“ú”,ÍŒo,Á,ÀTM –z,É,¢,ŠúŒÀ,ªß,À,¢,Ä,,é,í,–,Å,·B^...,^ø,¢,Äo”,µ,À,à,Æ,¤,À,çŠúŒÀ,ÉŠÔ,É‡,í,È,„,À,ÄŒÌ^{1/2},É^{1/2},À,À,à,„,Ì–øl,É,Æ,ª,ß,ç,é,À^{1/2}ŒY,³,ê,éB“|–S,µ,À,àA,Ì,^{1/2},êŽ€,É,·,é,Ì,ª,„,ç,·B@,^{3/4},©,çA’¥”,³,ê,^{1/2}”_–,½,„,Í,½,^{3/4},½,^{3/4}A^...,Ìø,

@,μ,©,μA,Ù,©,Í”_-,½,¸,Î,È,½,Ã,Â,Ì,Å,·B

@,»,±,ÅAŒàL,Í,¢,ë,¢,ë×H,ð,µ,À”_—,Ì<C°ª,ð”½—,É,à,Á,À,¢
,,ñ,Å,·B‘å,«,È«,ð,Â,©,Ü,|,ÄA,»,Ì•,Ì’†,É•z,«,ê,ð“È,Až,ñ,Å,“,B•z,É,Íu’ÂÙ,‰o¤,É,È,év,Æ‘,¢
,Ä,“,Ì,Å,·B,»,µ,ÄA†Ž“—”Ô,Ì,à,Ì,É,»,Ì«,ð“n,·B†Ž“—”Ô,ª,ð,³,Ì,–,Ìu’ÂÙ,‰o¤,É,È,év,Æ,¢,¤z,ª,Å,Ä,
@,»,ê,©,çŒàL,Í—”ÓfLfff“fv’n,Ì—ŽR,É“o,éBŽR,É,ÍŒÌ,©‰½,©,ðâJ,é,Ù,±,ç,ª, ,Å,½B,»,Ì,Ù,±,ç,Ì
—,©,çŒÌ,Ìº,ð^Ž—,Äu‘å‘^»A’ÂÙ‰o¤v,Æ<©,Ô,ñ,Å,·Bu` ,É—Å,Ú,³,ê,½‘^,ª•œ«»,µA’ÂÙ,‰o¤,É,È,év,Æ,¢,¤Ó—
j,Å,·B
@—é,È—é,È•Ì,È—Å,«º,ª,·,é,È,ÆA”_—,½,ì,ªŽ“,ðÙ,Ü,µ,À•,¢,Ä,¢,é,ÆAŒÌ,Ìº,ª,_,Ì,“,°,É•,·,±,|,Ä,

@Žq<Ŷ,³/4,Ü,μ,Ý,½,¢,È,à,Ì,Å,·,ªAf–p,È”_—,½,¸,É,ÍŒø‰oÊ,ª, ,Á,½B,±,ñ,È,±,Æ,ª,Â,Ã,¢,Ä’ÂŶ,È‘Î,μ,Ä,Ý,ñ,È,ª•sŽv<c,È<CŽ,¸,ð,¢,³/4,«,Í,¶,ß,½,Æ,±,ë,ÅA,©,ê,Í”_—,½,¸,É‘Î,μ,Ä”½—

,^Š,„I»→S

,ðŒÄ,Ñ,®,_,é,ñ,Å,·B
@^...,,^ø,ç,Ä,±,Ì,Ü,Üi,ñ,Å,àŽ€A<A,Á,Ä,àŽ€B,Ç,ç,^Ž€Ê,È,ç^êŠø—g,°,Ä,â,ë,¤I‰°•a,È”_—,½,„,ð—
§,„,ä,^a,ç,^1,é,½,ß,ÉAŽ©•a,½,„,ð^ø—|,μ,Ä,ç,é,Ì—ðl,ðŽE,μ,ÄA,^3,ç,É,ç,Á,½Œ³/₄—t,a—L—½B
@u‰¤Œð«‘Š,ç,,
@u‰¤A<M“°A«ŒRA‘åb,Å, ,ë,¤,Æ,í,ê,í,ê”_—,Æ,Ç,±,É^á,ç,^a, ,é,Á,Ä,ç,¤,ñ,¾Bv,Æ,ç,¤Ó—j,Å,·B<
ó,È•½“™ Š’,Æ,ç,¤,©A”½œ,_,Å,·,ÈB,±,ñ,ÈŒ³/₄—t,^a,Q,O,O,O”N’Èä‘O,É,ç,í,ê,Ä,ç,éB’†‘,Æ,ç,¤,Ì,Í,·,^2,ç,Æ,±
,ë,¾,ÆŽv,ç,Ü,·,æBg•a,à‰½,à,È,ç•n,μ,ç”_—,^a—ðŽj,Ì•“ä,É—ô,èo,Ä, ,éB“ú—{,È,çA—LbG<g,
,Ì,à,Ì,©,ÈB’ÂY,Ì,P,V,O,O”N,à, ,Æ,Ì^b,¾B

@ @’ÂYEŒàL,ÍAŠe’n,Éžú•J,ð”ò,Ì,·B<Œ~Z‘,Ì—L—ÍŽÒ,É”½—,ðŒÄ,Ñ,®,_,é•J‘,ð‘—,Á,½,ñ,Å,·B,±,ê,É
œ,ÌŒR‘,É,Ó,ê,^a,è,Ü,·B,μ,©,μA,μ,å,^1,ñ,Í”_—,†S,Ì‰G‡,ÌO,Å,·Bí“^,Ìfvf,Å,Í,È,çB,â,^a,ÄA™÷—z,©,ç`Ì,
‰os•”à,^a,â,Á,Ä,
,ÄŠæ’ƒ,Á,½,Ì,Í”¼”NŠÔ,¾,_,Å,μ,½B
@,μ,©,μA,©,ê,ç,Í’†‘Â‰,Ì”_—”½—,ÌŽw“±ŽÒ,Æ,μ,Ä—ðŽj,É—½‘O,ð,Ý,Ü,μ,½B

@,»,μ,ÄA’ÂYEŒàL,Ì”½—,Í’Á^3,^3,ê,Ü,μ,½,^aA,©,ê,ç,ÌŒÄ,Ñ,®,_,É‰ž,|^,½”½—ŒR,^aS‘,ÉL,^a,Ä,ç,½,ñ,Å,·B

,Q‘^Š,Ì»→S

@ @‘S‘,ÉL,^a,Á,½”½—ŒR,ÌfŠ[f_[,É,È,Á,½,Ì,^a‰Hi‘O,Q,R,Q`Q,O,Qj,Å,·B

@‰H,Íí“^,Ì—½—å“ŒR‰Æ,Ìlog,Å,·BŒŒØ,^a,ç,ç,ÌB—c,ç,Æ,«,É•fe,^a,Ž€ñ,Å,·,Ì,^3,ñ,É^ç,Ä,ç,ê,é,Ì,Å,·,^aA,±
,Ì,·,Ì,^3,ñ,à,‘Š“—,ÌŒR—‰Æ,Å,·B—c,ç‰H,É‰opÈ<^ç,ð,·,éB,Í,Ì,ß,Ì‰H,ÉŒ•p,ð<^,|,é,Ì,Å,·,^aA‰H,Í,·,®,É—
O,«,Ä,μ,Ü,Á,Ä”MS,ÉŒ•,ðK,·,¤,Æ,μ,È,çB,·,Ì,^3,ñ,^a,Æ,^a,ß,é,ÆA‰H,ÍuŒ•,Ì—ûK,ð,μ,Ä,àA“|
,^1,é,‘ŠŽè,Í,μ,å,^1,ñ,Ð,Æ,è,^3/₄,_,^3/₄B,»,ñ,È,Ä,Ü,ç,È,ç,à,Ì,â,éC,^a,μ,È,çBv,Æ,ç,Á,½B,»,±,ÅA,·,Ì,^3,ñ;“x,Í•—
@,ðK,í,^1,½,ñ,Å,·,^aA;“x,Í—È”,^a,Á,Ä”MS,ÉŠw,ñ,¾,Æ,ç,¤B
@—v,·,é,Éí“^fgfŠ[fg,¾B,±,Ì•Ó,^a,ÂY,Æ,Í^á,¤,Æ,±,é,Å,·B

@,»,μ,Ä‰H,Í‘å’j,¾,Á,½Bg’·,Í,Qf[fgf<β,, ,Å,½B,±
,ê,ÍA•l,Æ,μ,Ä,ÍÅ,·,Å,·,ÈB“—Žž,Ìí“^,^a,C,ñ,È,à,Ì,¾,Á,½,©‘z‘œ,μ,Ä,Ý,Å,·,¾,^3,çBj,Ì,æ,¤,ÉA“S—C,â‘å—
C,âf~fTfCf<,â,»,ñ,È,à,Ì,È,çB“ðŽ,Á,½Jg,Ì“÷,Ì,^a,Ô,Å,©,è‡,¤,ñ,Å,·B,Å,©,ç“z,Íâ‘Ì<
‰Ü,·,é,æ,¤,È,à,Ì,Å,·B
@‘O“c“ú—¾i’m,Á,Ä,éHj,Ý,½,ç,È‘å’j,^a,Pf[fgf<,à, ,é,æ,¤,ÈŒ•,ðfu[f“,ÆU,è‰ñ,μ,ÄP,Å,Ä,«,½,ç“|^,°,é,μ,©,È,ç

@ @”½—W’c,lfŠ[f_[,Æ,μ,Ä,à,¤,Ð,Æ,è—L—¼,È,Ì,ª—«—MiH‘O,P,X,Tj,Å,·B,±,ll,à‘^,l’n•û,logB”—‰Æ,ÉJ,Ü,ê,é,ñ,Å,·,ªA,Ü,J,ß,É“, ,¢Žá,¢O,É,Íl<C,Í,·é,—,ê,¢A“{,ç,¹,½,ç,ç,å,Á,Æ•l,¢“o,ÌŠç—ð,Ý,½,¢,ÈŠ’,J,©,ÈB^“, @“—Zž,ÍA—«—M,Ý,½,¢,É<¤“—Ì,Ì~,©,ç,Í,Ý,¾,µ,ÄfGf1f<fM[,ðŽ,Ä—],µ,Ä,¢,½l,Ì,±,Æ,ðu<i,«,å,¤jv,Æ,¢,Á,½BŽnc’é,ð^ÃŽE,µ,¤,Æ,µ,½Œtce,àu<v,Å,·B’ÂÝ,àu<v,Æ,¢,|,é,©,à’m,ê,È,¢B @í’Žž’ä,Í,í,Á,ÄA,Ü,¾,P,O”N,»,±,»,±,Å,µ,åBu<v,ÌŠ’Šo,ðŽ,Á,½~A’†,Í’†,É,¢,½B‰Æ•i,Æ,©ŒŒ<Ø,Å,Í,È,Ž©•ª,Ì”\—ÍAÆŠo,Å^êŠø—g,º,Ä,â,ë,¤,Æ,¢,¤IX,Å,·Bí’Žž’ä,Ì”â•—,Æ,¢,Á,Ä,à,¢,¢,©,à’m,ê,È,¢B—«—M,Í,»,¤,¢,¤IX,ðŽ©•ª,ÌŽü,è,ÉW,ß,Ä,â,ª,À‘å,«,È‘—Í,ð,Â,

@'ÂÝEŒàL,ì-,^•{,ì-³-,È'Ý"
,©,çl,|,é,ÆA`^,ì‰oß^,ÈŽg-ð,É'Í,|,©,Ë,Ä“|-SÌŠ^,ð‘-,Á,½,è”š”;‘O,Ü,Å’Ç,¢,Â,ß,ç,ê,Ä,¢,½-^-O,^,½,
,½,É^á,¢, ,è,Ü,¹,ñB
@'ÂÝEŒàL,‰oÎ,ð,Â,^,½,çfAfB,Æ,¢,¤ŠÔ,É”R,|L,^,Á,½,í,^,Å,·B

@,³,ÄA-<-M,“|-SJŠ,đ,μ,Ä,đ,é,¤,đ,É,â,„,Ä’Ä ŸEŒàL,Ì”½-，“N,±,Á,½B’S,“>R,Æ,μ,Ä,
M,àŽ©•“-đ,É,À,Äu< v,Ì”A’†,đW,ß,Ä^êŠø-g,°,Ü,μ,½B’n•û-đl,à‘å-,-,Ì”†,ÅŽ©•“/₂,đ,đŽç,é,½,ß,É-
-M,đfofbfNfAfbfv,μ,Ü,μ,½B
@-<-M,Ì”½-fOf<[fv,ÍA’Ä ŸEŒàL,Ì”³,“, ,ÆŠe’n,Ì”½-W’c,đ‘©,Ë,Í,¶,ß,½Œ‰oH,ÌŽP‰o°,É,Í,đ,é,±
,Æ,É,μ,Ü,μ,½B,±,ñ,È,Ó,¤,ÉŒ‰oHW’c,ÍŠe’n,Ì”½-W’c,“ŒW,μ,Ä,Ç,ñ,Ç,ñ‘å,“,

@ @,±,Ì, ,Æ‰oH,Æ—<—M,Íf‰ofCfof<,Æ,È,Á,À`—À—SŒä,ÌŽw“±Œ ,ð“^,¤,ñ,Å,·,ªA,±,Ì,Ó,½,è,ÍŽÀ,É’Ì“IB
@‰oH,Í—¼—å<M“°,ÌfGfŠ[fg•lB—<—M,Í“cŽÉ,Ì”_—ogB

^S, i>→S

@€%oH, Í“ñl, » , ±, » , ±B — « -M, Í, S, O,
@€%oH, ÍZC•^a, lE”\, ÉZC M, ^a, , è, , -, Ä‘½l, ðCEy, ñ, J, é, ÄE, ±, è, ^a, , è, Ü, , ^aA — « -M, ÍZC•^a, l”z%o°, l, à, l, É, l-É“lE©, ^a, ç
, çBu< v, lS’Šo, Ä, µ, å, o, ©Be•^a“I, È, ñ, Ä, ·, ËB
@Znc’é, ^aS, δ, K, µ, ^½, ÄE, «, ÉA€%oH, à — « -M, à, » , lS—ñ, ÄZnc’é, ðCE©, ^½B, » , lZž, l€%oH, lfZfŠftBu, ç
, Ä, ©Zæ, Á, Ä‘ä, í, Á, Ä, ä, éBvZæ, Á, Ä‘ä, í, é, ÄE, ç, o•\E», l€%oH, ^a, Í, J, ß, ÄZg, Á, ^½, ñ, Ä, ·, æB
@ — « -M, lfZfŠftBu’j, ÄJ, Ü, ê, ^½, ©, ç, É, ÍA, , ñ, È, Ó, o, É, È, Á, Ä, Y, ^½, ç, à, ñ, ^¾, YBv

@ @, ^³, ÄA”^½—ŒR, l, l“sA™ ÷ -z, É, P, ©, o, ±, ÄE, É, È, Á, ^½BZå—ÍŒR, l€%oH, ^a—|, ç
, Ä, Ü, Á, ·, ®^½, É, P, ©, Á, ^½B•È“
l, µ, ^½, à, l, ^a, » , l’n^æ, l%o o, É, È, é, ÄE, ç, o-ñ•©, ^a, , Á, ^½, l, ÅA^l“^, Å, ·, ËB
@ŒR‘à, ÄE, µ, Ä, l€%oHŒR, ^a, ç, l, Å, ·, ^aA, l, %os•“à, ^a, Ô, Ä, ©, Á, Ä,
— « -MŒR, l, ^½, ç, µ, ^½iR, à, o, —, , É™ ÷ -z, l“s, É“È“ü, µè—l, É¬Œ÷, µ, Ä, µ, Ü, Á, ^½B

@` , Ä, l“ñçc’é, ^aæâ, , ÉZE, ^³, êA, » , læâ, , à, Ü, ^½ZE, ^³, ê, ÄAŽOçc’é, ^a|“^È, µ, Ä“êŒZ, l, ©, èŒo, Á, ^½, ÄE, ±, è, Ä, ·B, l
, µ, Ä, ç, Ä, à, o, Ç, o, µ, æ, o, à, È, çBŽOçc’é, lZn, É“ê, ðSl, —, Ä— « -M, l, à, ÄE, ÉoŒü, ç, Ä, «, Ü, µ, ^½B, ±, è, lA’S-
È~•š, lÓ-; , Ä, ·B, ±, o, µ, ÄA` , l-Å-S, µ, Ü, µ, ^½B

@ — « -M, lè—l, µ, ^½TM ÷ -z, Ä%o^½, ð, µ, ^½, ©B
@ — « -M, lTM ÷ -z, Ä` , l^l{“a, É••^ó, µ, Ä•ó•“, ð—^aD, ^³, ^¹, È, ©, Á, ^½B
@ŽOçc’é, È, Ç, l, c’é^é“[°], ðZE, ^³, , É•ÛŒl, µ, ^½B
@u—@ŽOÍv, ð”•z, µ, ^½BZE, ·, ÈA, Ä, —, é, ÈA“, P, ÈA, ÄE, ç, o”ní, É’Pf, È—@—¥, Ä, ·B— « -M, l, à, ä, ±, µ, ç—@—¥
, ð‘S•“, È,

@, ±, o, ç, o, ±, ÄE, ð—§, Ä‘±, —, É, ä, Á, ^½— « -M, ll<C, l, ®, ñ, ®, ñ%oV“o, èB
@, ä, ^a, ÄA’x, è, Ä€%oH, l—{“à, ^{atm} ÷ -z, É, ä, Á, Ä, «, Ü, µ, ^½B“å“€%oH, lTM ÷ -z, É“ü, è, ÄZOçc’é, È, Ç, l, c“[°], ðZE, µ, ÄA^
ç-[^l, ð—^aD, µ, ^½, , ÄE%oÎ, ð•ú, Á, ^½B— « -M, l”u, ð, D, Á, , è•Ô, µ, ^½, ÄE, ç, Ä, Ä, çB— « -M, l, o]”»^a, æ, ©, Á, ^½, ^¾, —, É€%oH, ll<C, ^a, È,

@ @` -Å-SŒä, l‘%oAE\‘z, Ä, ·B€%oH, É, lTM ÷ -z, Äc’é, É“|“^È, µ, Ä, l, , ÄE, ðŒp, ®, æ, o, ÉiŒ^¾, µ, ^½ZÒ, ^a, ç
, Ü, µ, ^½B, µ, ©, µA€%oH, l, ±, è, ð’f, éBuŒl^½, É<N, ðü, è, ^½, çv, ÄE, ç, o, ñ, ^¾B, ±
, è, ^¾, —, l, à•ó, ðZè, É“ü, è, ^½A“cŽÉ, É<A, Á, Ä‘nŒ^³, l, Y, ñ, È, ÉZC-, µ, ^½, çA, ÄE, ç, o, ±, ÄE, Ä, ·B
@€%oH, l‘^, l, , È<A, Á, Ä^¼“^, l”e%o o, ÄE l, µ, Ü, µ, ^½B, ^³, ç, È, ð“l, , l, ÈŒ÷N, l, , Á, ^½”^½—
W’c, lfŠ[f_[, ^½, ç, ð%o o, ÄE, µ, ÄSe’n, É••, J, ^½, ñ, Ä, ·B, æ, o, , é, ÉA€%oH, lÍ’Žž‘ä, l, æ, o, È’l§, Ö, l•œ<A, ð-ÚŽw, µ, ^½, ÄE, ç
, |, è, Ä, µ, å, o, BŽnc’é, ^al, èä, [°], ^½”^{%o}WŒ “I, È, , è•û, ÄEtHí““I, È•aŒ “I, È, , è•û, ^a, , Ä, ÄA€%oH, lŒäZÒ, ð‘ä•l, µ, Ä, ç
, ^½B•ÛŽç“I, Ä, ·B

@ — « -M, Ä, ·, ^a€%oH, É, æ, Ä, Ä%o o, É, ^³, ê, Ü, µ, ^½BŠ; %o o, ÄE, ç, ç, Ü, ·B™ ÷ -z, l“y’n, Ä, l, È, ŽlìÈ, lZR
‰œ, É^ø, Äž, ñ, ^¾èŠ, l%o o, ÄE, ^³, ê, ^½B€%oH, ÉŒx‰ou, ^³, ê, ^½, ©, ç, Ä, ·, ^aA— « -M, l•s-ž, Ä, µ, å, o, ^a, È, çB, ä, ^a, ÄA€%oH, lŒ^, ß, ^½Š,, è, ð^³ž, µ, ÄžÀ—l, Ä—l“yŠg‘ä, ð, l, J, ß, Ü, ·B‘S‘§”e, ð-ÚŽw, , í, —B, ^¾, ©, çA— « -M, ^aZnc’é, l
‘z, ðžó, —Œp, ®, à, l, ^¾, Ä, ^½, ÄE, ç, |, èB

$\wedge \check{S}_i \rightarrow s$

@,±,Ì, ,Æ,T”NŠÔ,É,í,%½,Á,Ä€‰oH,Æ—«—M,Ìí,¢,ª<N,±,è,Ü, ·B‘^Š,Ì„—S,ÆŒÄ,ÔB€‰oH,Ì‘,ª‘^A—«—M,Ì‘,ªŠ,Ì„,¾,©,ç,ËB

@‰H,Æ,¢,¤,ÍŽ©•ª,ÌCE÷Ñ,ðŒÖ,è,·,¬B•”‰º,Ì«ŒR,½,¸,É,Æ,Á,Ä,ÍŽd,|,É,
‰H,Í‡í,ÉŸ—~,µ,Ä,àŽ©•ª,¢,®,ç,ÆAl,|,é,®,çA•”‰º,Ö,Ì‰¤Ü,ª
@,»,±,Ö,¢,
,¤,Å,Í,È,¢B“Á[¶]Z,Í,È,¢,µAÎ,à,Æ,Á,Ä,¢,é,µAí“^,à,®,ç,«,µŽä,¢B,½,¾Al,ðŽg,¤,Ì,¤,¤,Ü,®,Á,½B,»,ê,¼,ê,ÉŠ^—
ô,ìê,ð—^,|,Ä,â,è‰¤Ü,à,Í,„,þB™÷—z,ðè—Ì,µ,½,Æ,«,Ì‘Ô“x,Å,»,ÌŠ°—e,³,ÍØ—¾Ì,Ý,Å,µ,åB
@,¾,®,ç,â,ª,Ä‰‰H,Ì•«,½,¸,ª,ç,ñ,ç,ñŽè“,ð—|,¢,Ä—«—MŒR,ÉQ•Ô,Á,Ä,¢,

@ @—«—M,Æ€‰oH,ÌÅŒä,ÌŒí,^s‰o°(,^,ç,©j,Ìí,çí‘O,Q,O,Qj,Å,·B
@s‰o°,Ìé,É’Ç,ç,Â,ß,ç,ê,½€‰oH,ÌŒR°,Í,P,O—œBŽæ,è^Í,p—«—M,ÌŒR‘à,Í,R,O—œB—
é,É,È,é,Æ•rÍŒR,Ì°Žm,^,ç,½,ç‰oÌ,^€‰oH,Ìw’n,É•,±,|^,Ä,«,½B,±,ê,^a,^,Ì‰oÌ,È,Ì,Å,·B‘,^,Í€‰oH,log’n,Å,µ,åB‘,^,Ì
‰oÌ,ð,ç,½,ç,Ì,Í‘,^,Ì°Žm,È,ñ,Å,·,æB,Â,U,è€‰oH,Ì°Žm,½,ç,^,í,Ý,ñ,È—«—MŒR,É,ç,Á,Ä,µ,U,Á,½,Æ,ç,ç,±
,Æ,³/₄BuŽl—È‘‰oÌv,Å,·,ËB
@€‰oH,Í,Â,ç,ÉŠI”O,µ,½B,à,çY—~,ÌŒ©ž,Ý,Í,È,çBÅŒä,U,Å•t,«],Á,Ä,ç,½•«,½,ç,Æ•È,ê,Ì‰of,ð,Ð,ç,
‰oH,^,ç,½,Á,½Ž,^,ç,ê,Ä,ç,U,·B,±,ê,³/₄B

@u—Í, ÍŽR, ð”², «A<C, Í¢, ðSWi, „, „j, ☐A
@@Žž, É—~, , ç, Aévi, ·, çjÀi, äj, ☒, A
@@év, ÍÀ, ☒, ‘, é, ÍA“þ‰½i, ç, ☒, ñj, ☒, ·, ×, «A
@@

Ž©•^a,Ì–Í,ÍŽR,ð‘^an,©,ç^ø,«”[”],«A<CŠT,Í¢,ð•¢,¤,Ù,Ç,È,Ì,É
Žž,^a-;•û,ð,μ,Ä,
év,^a–,Å,Ä,
<ñ,âA<ñ,âA,“,Ü,!,ð,Ç,¤,μ,Ä,

@,Ý,ñ,ÈŽЄ,ðŠoŒå,µ,Ä—ÜA—Ü,Ì%of%ooi,É,È,A,Ä,µ,U,A,½B^ñ,Æ,¢,¤,Ì,Í‰%oH,Ì`oIA^ñ”üI,Ì,±,Æ,Å,·B,,Å,Æ‰%oH,É•t,«],Á,Ä,«,½,Ì,Å,·,ªA,©,ê,Ì‰oI,ð•,¢,ÄŽ©•ª,«Žè,Ü,Æ,¢,Å,·é,Æ,µ,Á,ÄAŽ©,ç-½,ðâ,Á,½,Æ,¢,¤B”þ—,ÌŒŒ,ð^z,Å,½’n-È,©,ç,Í,|,½‰oÔ,ªñ”üI,¾,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,·B

@,±,Í, ,Æ€‰oH,½,‡,Í—<—MŒR,Ì`Í,Ý,ð]j,Á,ÄA“í•ûA‘^,Ì,ÉŒü,¬,Ä’Eo,μ,Ü,·B,È,ñ,Æ,C—
—MŒR,Ì`ÇŒ,,ðU,èØ,Á,Ä‰oG]i,¤,±,¤j,Æ,¢,¤,Æ,±,ë,Ü,Å“|,°,Ü,·B,±,ÌŽž,Í,í,,©”
<R,ÉŒ, ,Á,Ä,¢,Ü,·B’] ,ð“n,ç,È,¬,ê,Î,¢,¬,È,¢,Ì,Å‘D“a,ð“{,μ,½B,»,¤,μ,½,çAŒC,Å,¬,Ä,«,½‘D“a,³,ñ,³€‰oH,ðŒC,Ä,¢,¤,ñ,³/4B
u‘å‰o¤,æA‘^,Ì‘,ÍL,¢,μlŒû,à‘½,¢B]j,Í‰o,¬,Ä,à,Ü,½Ä,Ñ‰o¤,Æ,È,Á,Ä,

—Ž,č—Ú,ÌŽ©•^a,É—D,^μ,¢Œ³/₄—t,ð,©,̄,ç,ê,Ä,Í,¶,ß,ÄŒ‰H,ÍŽ©•^a,Ì,â,Á,Ä,«,½,±,Æ,ð”½È,·,éB‰½çl,Æ,¢,¤,¤,ÌŽáŽÒ,ð•°Žm,Æ,μ,Äø,«,Â,ê,Äí,Á,Ä,«,½,̄,ê,ÇA,Ý,ñ,ÈŽ€,ñ,Å,μ,Ü,Á,½B,È,°Ž©•^a,¾,̄,̄,ß,Æ<A,Á,Ä,©,ê,ç,Ì•fŒZ,É‰oï,|,é,¾,ë,¤,©A,Æ,ËB

@Œ‰H,ÍŽ€,ÉêŠ,ð<,ß,Äø,«•Ô,μ,½B’Ç,Á,Ä,«,½—«—MŒR,ÆÅŒä,Ìí,¢,Å,·B—í,Ì’†,Å€‰H,Í“G•°,É,©,Â,Ä,ÌŽ©•^a,Ì•”‰°,ðŒ©,Â,̄,é,ñ,¾B
@u,“,Ü,|,ÍAÌ,È,¶,Ý,¶,á,È,¢,©B‰°,ÌŽñ,ð,â,ë,¤B‘å—¼,
,Á,ÄAŽ©•^a,ÅŽñ,ð,Í,Ë,½,»,¤,Å,·B

@,±,¤,μ,ÄA^ê‘ä,Ì%op—YŒ‰H,ÍŽ€,É,Ü,μ,½Bf‰ofCfof<,ð“l,μ,Ä—«—M,“V‰°,ð“^ê,μ,Ü,·B,±,ê,^Šč’é‘B—«—M,Í,Ì,č,ÉŠč,Ì,‘c,ÆŒÄ,Ì,ê,é,±,Æ,É,È,è,Ü,·B

R` ,Ì-Å-S—R

@ @ÅŒä,É,“ZŠúŠÔ,Å-Å-S,μ,½—R,ð®—,μ,Ä,“,¤,Ü,μ,å,¤B

@,PC‘åK-Í,ÈŠO^a,â“y-ØHŽ-B,±,ê,̄O,É‘l,·,é‰ß“x,Ì•‰S,ð, ,½,|,½B’ÂY,â—«—M,à~J-ð,Ö,Ì’Ý”
^ö,É,È,Á,Ä,¢,Ü,μ,½,ËB

@,QC<}Œf,È’†
‰WŒ‰»B,Æ,,ÉŒSŒ§§BŠe’n,Ì““,âŽÀó,ð-³Ž<,μ,½‰œ^ê“I,ÈŽx”z,É‘l,·,éŒZ‘Žx”zŽÒ‘w,Ì”½”,Í
‰H,Í,±,ê,¾,ËBŒ‰H,Æ,Æ,à,É”½—,É‰oÁ,í,Á,½IX,É,ÍŒZ‘,ÌŽx”zŽÒ‘w,Ì”½,©,Á,½,ñ,Å,·B

@,RCŒμ,μ,¢—@—¥AŒY”±,É‘l,·,é,̄O,Ì”½Š‘A[°]•|BŽnc’é,^ž€,ñ,Å‰Y,³,|,ç,ê,Ä,¢,½•s-ž,^ê‘C,É”š”
‰œŽv‘z,ÌŒø‰œÊ,ÆŒÀ ŠE,Æ,Å,à,¢,¤,Æ,±,ë,Å,μ,å,¤,©B

ŽQl}‘Ð‰œîEEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,½,¢,Æ,«,Í

‘-¼,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^*[flfbfg“XufAf}f]f“v,Ìfy[fW,É”ð,ñ,ÅA-{,Ìff[f^A‘•],È,Ç,ðŒ©,é,±
,Æ,^Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰oÅ”\,Å,·B

‰H,Æ—«—M

(âŠa)V’•¶ŒÉ

‰H,Æ—«—M

(’+Š)V’•¶ŒÉ

‰H,Æ—«—M

(‰o°Ša)V’•¶ŒÉ

cover

’‡•¶—³/₄,Ì

—ðŽjq3r` Šč’é“’‡Œö•¶ŒÉ

cover

Ži”n—É‘³/₄~Y~B-à,©,çfCf}fWfl[fVf‡f“,ð—N,©,¹,é,Æ,¢,¤,Ì,ÍA—LŒø,ÈŽè—
@B^³Zt,^È”,¢,ÆŽv,|,ÍAŒê,è,É,à”M,“ü,é,μA¶“k”ŒN,à”MS,É•,¢
,Ä,„,ê,Ü,·B,à,Æ,Ìb,^È”,¢,Ì,¾,©,çA-à,É,μ,Ä-È”,,È,¢,Í,„,^È,¢B,±
,Ì•i,ÍA~ŽÒ,Ìu-³/₄Ž,ì,à,Ìv,É,
,¤,©A<CŠy,É“Ç,ß,Ü,·B

“ú”ä—iä•v•ÒBŠTà‘B` ,©,çŒäŠč—Šú,Ü,Å,ð^μ,¤B

‘^Šč,Í»–S

‘æ,Q,W%oñ@‘^Šč,Í»–S@,’í,è

fgbfvfy[fW,É–ß,é

‘Q,Ìfy[fW,Ö
‘æ,Q,V%oñ@`

ŽÝ,Ìfy[fW,Ö
‘æ,Q,X%oñ@‘OŠč

@

‘OS’

@@ @‘æ29%oñ @‘OŠ;@

,PŠ&%o,ÌŽí

@ @`É,Ó,í,Á,À—<-M,«Œš,À,½%œ»Ó,`aŠ,À,·B“s,Í,·ÀBŠ,Í,OŒá”¼,É·ª,Ó,ê,é,Ì,À·Ê,Í,OŠ,í,O,Q,O,QŒa,Wj,ÆŒÁ,Ñ,Ù,·B

@ @Šč‰,ÌŽj•ûj,É,Â,¢,ÄB

@,PC,U,,A` ,I‰øß“ ,ÉZx”z,ð,ä,é,ß,éB

@,QCZÝ,É“ŽíŒ`Ô,Æ,µ,ÄŒSŒ§§,ð,â,ß,Ü,µ,½B,©,í,è,Él-p,µ,½,Ì,“Œ§,Å,·B,±,ê,ÍŒSŒ§§,Æ•Œ§,ð•¹-p,µ,½Œ,Å,·B
@-«-M,Í,½,,³,ñ,ÌlP,ð“³/₄,Ä“^ê,ª,Å,«,½,í,-¾,-,ê,ÇA’Pf,É-«-M,ªu,¢,¢lv,¾,Å,½,©,ç‘½,
,Ì·å«,È,ç,½,Å,Ö,è‰¤Ü,ð,Í,,ñ,Å,
,¤A’†,ð-ž“³,¹,Ä,â,ç,È,-,ê,Ì,È,ç,È,©,Å,½B,Ü,½A,ÍŒSŒ§§,É,æ,é}Œf,È’†‰¤WŒ‰¤,Å”½”
@,»,±,ÅAŒ§,ÌŒ÷b,½,ì,â^“°,Ì,à,Ì,ð”Œð,Æ,µ,Ä’n•û,É•¤,Ì,Ü,µ,½BÙ’é‘,Ì,È,©,É,½,
‰¤,É,È,Å,½,ŽØ,½,ì,ÌZ©•¤,Ì‰¤“à,Å‘åb,ð”C-½,µ,½,è,µ,ÄD,«,ÉŽx”z,µ,Ä,¢,¢,ñ,Å,·,æB
@,»,µ,ÄA‰¤¤,ª,Â,·,ç,ê,È,©,Å,½,n•æ,É,ÍŒSŒ§§,ð,µ,¢,Äc’é,Ì’¼S’n,Æ,µ,½Bc’é’¼S’n,Í,ç,ê,

@,RC'ÍŠO

,Æ, ª, ,Á, ½B,», ¸, ©, ¸, Í, Í™ ± “z—aœð, ð, Æ, è, Ú, B·ê°·, Í—, ð™ ± “z, l‰œ¤, É—, Á, ½, è, µ, Á·½·a, ð, ½, à, Æ, œ, Æ, µ, Ú, µ, ½B

@,SC“-%o,ÌŠÙ,Ì{”ì,Å,Í“1%oÆ,ª—¬s,μ,Ü,·BŽð%oÆ,Í—çÙVì—@,É,¤,é,³,

@-«-M,ÍA,à,Ä,à,Ä“cŽÉ,Ì,Ü,¸,le•ª,Å,·,©,ç<³—{,È,ñ,Ä,Ü,é,Å,È,¢B—{“-,ÌŽ—,È,Ì,Å,·B

@,%2,Æ,!_Í,Â,©,ê,Ì—%e,Ì—%e•OB•êe,Í—»[i,è,ã,¤,„,çj,Æ<L~^,³,ê,Ä,¢,éBu>[v,Æ,¢,¤,Ì,ÍA,„,Î, „,³,ñ,Æ,¢,¤Ó-¡,È,ñ,Å,·B,%4,©,ç—»[,Æ,Íu—»,Ì”k,³,ñv,Æ—¢,Ì,Ý,ñ,È,©,çŒÄ,Î,ê,Ä,¢,½A,»,Ì,Ü,Ü,ÌŒÄ,Ñ-¼,Å<L~^,³,ê,Ä,¢,é,Æ,¢,¤,±,Æ,Å,·Be•f,³,ñ,à—«‘¾Œö,Æ‘,¢,Ä,·A,ÄA,±,ê,àu—»,J,¢,³,ñv,Æ,¢,¤Ó-¡,Å,·B,±,ê,Í,C,¤,¢,¤,±,Æ,©,Æ,¢,¤,ÆAfnfbfLfŠ,¢,Á,ÄA-¼‘O,·A,·E,¢,ñ,¾,ËB,Ü, A“-Žž,ÌŽÐ‰i,Å,Í,ç,µ,¢,±,Æ,Å,Í,È,¢,©,à,µ,ê,È,¢,³A—«-M,ÌJ`çŠÄ«,Øl,!,é,Æ-È”,¢,Å,·B

@—«—MŽCG,àu—Mv,Æ,¢,¤,Í,ÍA“—Žž,íuŒZ›Mvu,É,¢,¸,á,ñv,Æ,¢,¤Ó—¡,¾,Á,½,Æ,¢,¤à,à, ,Á,ÄAu—«,Ì, ,ñ,¸,á,ñv,ÆŒÄ,Î,ê,Ä,¢, ,½,Ì,ª,» ,Ì,Ü,Ü—¼‘O,É,È,Á,½,Ì,©,à’m,ê,È,¢B

@-«-M, ^aŠø-g, ^o, μ, ^{1/2}, ĀE, «, ©, ç, Å, «, μ, ^{1/2}, ^a, Å, Ä, φ, ^{1/2•”%} o, ^{1/2}, ġ, É, μ, Ä, àAŒç, l“j ŽEl, â“Ž®, l̄f

%fbfp,Ó,«,È,Ç“–Žž,ÌŽÐ%oï,Å'á,¢’n^nÊ,Ìl,½,¸,¹½,¢B,æ,

@,±,¤,¢,¤¤³—{AŠw-â,ÉŒ‡,¬,él,½,¸,^ê-ô‘å‘é‘,Ìc‘é,âdb,É,È,Á,Ä,µ,Ü,Á,½B,¾,©,¤<`ì,Æ,¢,Á,Ä,àA,í,ê,í,ê,^z‘œ,·,é,æ,¤,È,«,ç,Ñ,â,©,Á-§”h,È,à,Ì,Á,Í,È,

, ½, æ, ø, Å, -

@u-^3^×ZC‘Rv,Í“1%oÆ,Í,»,ñ,Èl,½,i,É,àfEfP,^a,æ,C,Á,½,ñ,¾,EE

@,%/,%/A%'%oÆ,ð%o^%oc,μ,Ä,¢,,É,Í,»,ê,È,ë,Ì~`^,ðÛŽ,μ,Ä,¢,©,È,^,ê,Ì,È,ç,È,¢,ì,Å™X,ÉŽð%oÆ,Ìà,–ç,ðVŽ®,ÉŽæ,è“ü,ê,%/ë,μ,Ä,¢,
„,Ü,·B,μ,©,μAŽòŠw,^Ši,•{,É–{Ši“I,ÉŽæ,è“ü,ê,ç,ê,Ä,¢,

‘OŠč

,é,Æ,«,ÉAÈ,É,μ,½—«,ª,»,Ì,Ü,Üc@,É,È,è,Ü,μ,½B~C@i,è,ª,²,ɔj,Æ,φ,φ,Ü,·B‘Œf,ÌÈA,Æ,φ,ɔ,â,Â,¾,ÉB
@c’é,Á,½—«MAŽá,φ—,ð,C,ñ,C,ñŒā<{,É“ü,ê,éB~C@,Í‰o÷,μ,φ,¬,ê,ÇA^ê•v½È,ªiZ¬,¾,©,ç‰oä—,μ,Ä,Ü,·B”Ó”N,Ì—«—M,a“Á,É
‰Â^ɔ,ª,Á,½,Ì,ªÈ•vlB
@,â,ª,ÄA—«—M,ÌŽ€ñ,ÅA~C@,ÌJ,ñ,¾Œb’é,“ñ‘ä—Ú,lc’é,É,È,è,Ü,μ,½B~C@,Í,»,ê,Ü,Å‰oY,³,|ž,ñ,Å,φ,½|,Y,ð,±,±
,Å”s”
@,Ü,,AÈ•vl,Ì—½Žè‘«,ðØ’f,·,éB,»,ê,©,çAä,ð”²,φ,Ä,μ,á,×,ê,È,
¬,μž,ñ,Å,μ,Ü,ɔB
@ŽY,É,»,ÌÈ•vl,ð“Ø—‰o®,É•ú,èž,ñ,¾B

@“Ø—‰o®,Æ,φ,ɔ,Ì,Í‰o½,©B“—Zž†,ÌfgfCfŒ,Í“nŠKŒš,Ä,É,È,Á,Ä,φ,Ü,μ,½B—p,ð“«,·,Æ,«,É,Ía,É,Ì,Ú,Å,Ä,·,éB•úo,μ,½,à,Ì,ÍeŠK,É
—Z,ž,éŽd’g,Y,É,È,Á,Ä,φ,ÄA,»,±,Å,Í“Ø,ðŽ”,Ä,Ä,φ,Ü,μ,½B—v,·,é,É“Ø,Ì‰ca,ªIŠO,Ì•³”A,È,Ì,Å,·B
@“Ø—‰o®,É•ú,èž,Þ,Æ,φ,ɔ,±,Æ,ÍA,»,ɔ,φ,ɔ,±,Æ,Å,·B

@C@A,»,ê,Å,à,Ü,¾CŽ,ž,ª,“,³,Ü,ç,È,φB‘|^È,μ,½,Ä,Ì·§ŽqŒb’é,Éu, ,È,½,É,·Œ©,¹,μ,½,φ,à,Ì,ª, ,è,Ü,·Bv,Æ,φ,Å,ÄAŽè,ð^ø,φ,Ä“Ø—
‰o®,Ì‘O,Ü,Å~A,ê,Ä,
@Œb’éA,È,ñ,¾,ë,ɔ,ÆA^Å~Å,ÅfSf\jSf\,ɔ,²,ß,
,éB
@ufMfffbIvŒb’é,ÍC,Ì—D,μ,φ<MŒöŽq,¾,©,çA,à,Ì,·,²,φfVf‡fbfN,ðŽó,¬,éB~C@,Í•½‘R,Æ,μ,Äu,±,ê,ªAfqfguf\,Å,·Bv,Æ
‰oðà,μ,½,ç,μ,φB

@u•éäA,Ð,C,φIv,Æ,φ,Å,½,©,C,ɔ,©,Í’m,ç,È,φ,¬,ê,ÇAŒb’é,Í,»,ê,ÈŒäŽ©•ª,Ì•”‰o®,É•Å,Ì,±,à,Å,ÄŽðZ,è,É,È,èŽ€ñ,Å,μ,Ü,Å,½B

@C@,Í‘Š“—,È«Ši,Å,·,ªA,±,ɔ,φ,ɔ—«,ðÈ,É,μ,Ä,φ,é—«—MA,©,ê,àŒ»ŽÀ,Ég<ß,É,φ,½,çŠO,í,è,½,
,ë,μ,φ“z,¾,Å,½,æ,ɔ,È·C,ª,μ,Ü,·B-{,Éo,Ä,
,ÆŽ©’lAíl,ð’’,|,Å,φ,é,æ,ÆB

@—«—M,ÌŽ€ä,ÍA~C@,“•{,ÌŽÀŒ,ð“¬,éŽžŠú,ª, ,é,ñ,Å,·,ªA”P—,ÌŽ€ä,Í,Ü,½A—«—M,ÌŽq·,½,ž,ªc’é,Æ,μ,Å

@ @~Z‘ä—ÚŒi’é,Ì,Æ,«,ÉŒä‘^Žμ‘,Ì—i‘O,P,S,Pj,ª,“,<,Ü,·B
@Šž•{,Ì‘†‰o>WE‰o
,Í‘Å^³,³,ê,ÄA,±,ÌŒ‰oÊA‘å,«,È‘,Í,È,
,Q•é,ÌŽž‘ä

@ @‘æŽμ‘ä—Ú,ª‘éi‘O,P,S,P‘O,W,Vj,Å,·B,P,UÎ,Å‘|^È,μ,Ä,T,O”N‘ÈäY^È,μ,Ü,μ,½B’†‘Žjä,Ì—½ŒN,Ì,D,Æ,è,Å,·B

@Œš‘Œä—ñ,U,O”NA‘å,«,Èí‘^,å,È,

@ @Šž,Í—«—M‘È—^A™±“z,É‘Î,μ,Ä~aeô,ð,Æ,Å,Ä,φ,é,Ì,Å,·,ªA™±“z,Í,μ,Î,μ,Î‘é,ð‰oZ,|,Å‘†“à,ñ,ÉN“ü,μ,ÄA—ªD,ð“
,ÅA•é,Í‘Î™±“zí‘,ðI‘É‘I,É,“,±,È,φ,Ü,μ,½B,Æ,±,ë,ªA™±“z,Í—V—q—“°,Å,·,©,çAŠž,ÌŒR‘à,ª,©,ê,ç,Ì‘—
Í‘Í‘,ÉoŒ,,μ,Ä,à,È,©,È,©•ß,Ü,ç,È,φB,Ü,½AŒ~è“I,È‘ÅŒ,,ð—^,é,±,Æ,ª,Å,«,È,φ,Ì,Å,·BŠžŒR,ÍŠi—{“I,É•à•º,Å,·,©,ç,ÈA<@“®—
Í,Å,Í,©,È,í,È,φB

@‰o½,©,φ,çŽè,Í,È,φ,©,ÆŽv^Å,μ,Å,φ,é,Æ™±“z,Ì•ß—,©,ç‘åŒŽž,Ì•ñ,ª,Í,φ,Å,½B
@“†‘,Ì‰oɔ‘©,Ì—Ì‘æ,æ,è,à½,Ì‘n•û,ð”™‘R,Æu½‘æv,Æ,φ,ɔ,ñ,Å,·,ªA,»,±,ÉŒŽž,Æ,φ,ɔ‘,ª, ,Å,½B,Æ,±,ë,ª,±,Ì‘,ªTM
±“z,ÉUŒ,,³,ê,Ä,³,ç,É½,Ì•û—È,É‘U“®,μ,½,Æ,φ,ɔ,ñ,Å,·,ªA,±,Ì‘,Ì™±“z,É‘Î,μ,Å,Í‘,Y,ð,à,Å,φ,é,Æ,φ,ɔB

OŠ*j*

@,»,-,±,ÅÅ•'é,Í`åŒŽŽ‘,Æ“-_,ðŒ<,ñ,Å“Œ¼,®,ç™±“z,ð<²,ÝŒ,,_,ÅU,β,æ,¤,Æl,!,½BfXfP[f<,Ì`å,«,Èíí,Å,·,ËB,½,¾A“-
 _,ðŒ<,Ô,½,β,Ë,ÍŽgŽØ,δ”hŒ
 @,Æ,±,ë,ªA<’ì,N,àŽgŽØ,É,È,è,½,ª,ç,È,¢,ñ,Å,·Bw¼—V<Lx’m,Å,Ä,é,Å,μ,åB‘·Œå<ó,ºŠ-ô,μ,Å-d‰oö,ð,â,Á,Å,¬,é~bB-d
 %oö,½,_,ºoê,·,é•“ä,¹/₄æ,Å,·B‘†’l,É,Æ,Å,Ä,Í¹/₄æ,Í,»,¤,¤é³-£é±é²,Ìæëç»,·,é[°],ë,μ,¢¢ ŠE,¾,Å,½,ñ,Å,·B,»,ñ,È,Æ,±,ë,Ö,¢
 ,Å,Ä,¶,«,Ä<A,ê,é,Æ,Í’N,àŽv,Å,Ä,¢,È,¢B

 @,»,ÌA’N,à,¢,«,½,ª,ç,È,¢¹/₄æ,Ö,Ì—·,ÉŽuŠè,μ,½’j,ª,¢
 ,½B,»,ê,ºfeyi,_,å,¤,¬,ñj,Å,·B•’éA’fey,ª,È,®,È,®,Il•“,ÆŒŒž,ñ,Å,®,ê,É•SI`Èä,Ì•”‰°,ð,Å,¬,Ä‘-,èo,μ,Ü,μ,½B,±,ê,ºO,P,R,X”N,Ì,±
 ,Æ,Å,·B

@'åŒŽ,Ó“z'B,μ,½'féy,ÍŠč,Æ,I“-č,ð\,μ“ü,é,Û,·,^A‘åŒŽ,í‰co-l,C,ç,·,ê,ÍA‘fey,Íl,μo,ÍŠeŒ-,¾,ÉB,E,É,μ,ëA‘fey,^aŠč,Í•é,©,ç‘-
-,èo,³,ê,Ä,©,ç,P,O”N“ÈaŒo,Á,Ä,ç,éB•é,Æ,ç,co-é,“Œ»Žz“_,ÅJ,«,Ä,ç,é,©,ç,co,©,à,í,©,ç,È,çAJ,«,Ä,ç,Ä,à;à;à™±“z“ç“,ðl,!,Ä,ç
-,é,©,ç,co,©A,È,n,ÌŠmØ,à,È,ç,í,-,Å,μ,åBŽgŽÒ,Ð,Æ,è,^aŠč,©,ç‘åŒŽ,É-^,é,Û,Å,É,P,O”N,©,©,Á,Ä,ç,é,í,-,ÅAíŽ-“I,Él,!,Ä“-
-,ðŒ<,n,Å,à<“-íí,^a,
@»,μ,ÄA,È,É,æ,è,à,±,ìŽž,ì‘åŒŽ,í-L,C,È“y'n,ÉZ,Ý,Å,ç,Ä,ç,ÄA; ,³,ç™±“z,É•œQ,μ,Ä,à,Æ,ì-ì“y,ðŽæ,è-
β : CŽ : È, n, ÄA ³ c ³ c , è Ù ¹ n Å μ ½ B

@ @‘O,P,Q,U”NAo”,©,ç,P,R”NŒäA’f y , ,æ, , ,

$\pm^{\text{“}} \text{z}, \text{I}, \text{E}, \check{\text{Z}}, \text{q}, \eth, \text{A}, \hat{\text{e}}, \ddot{\text{A}}, \text{c}, \text{,} \frac{1}{2} \text{B}$

@,Æ,Å,

đ,Í,Å,«,Ü

±“z,É‘Î,μ,ÄUŒ,,ð,©,–,Ü,μ,½B

@ @'ITM±“zí,A·áS-ô,µ,½₂_CE,R,^a“ñ-¼B%oqAi,!,¢,¹,¢j,Æè·_Z•ai,C,
‰oqÁ,IŽo,³,ñ,^a•é,É·¤,³,ê,Ä,>,ÌŠÖ~A,Åo¢,Ì,«,Á,C,_,ô,Å,C,ñ,^¾,ñ,Å,·,^aA«CER,Æ,µ,Ä,ÌÈ”\,^a, ,Á,½,ñ,^¾,ËBŽá,¢,Æ,«,C,¢,åŠ-
ô,µ,Ä,Ç,ñ,C,ñ,¢,µ,Ä,¢,Å,½B

‘OŠč

Ó,à,ß,“,“,,«,ÄAŠč,É•ž‘®,·,éfOf<[fv,à¶,Ü,ê,Ä,«,Ü,μ,½B
@’fey,àÄ,Ñ¼^æ,É,ç,Á,ÄA“Œ¼Œð‘Ó-Hä,ÌfIfAfVfX”“sŽs,ðŠč,Ìžx”z%o°,É‘u,ç,½B,¾,C,ç•é,Ìžž‘ä,Éšč,Ì—Ìæ,Í¼,É,®,Á,A,E’f
,èo,·,æ,¤,É,È,Ä,Ä,ç,é,ËB ¼^æ•û-È,É“ÖaŠi,AE,ñ,±,¤jQES,È,CŽlQES,ðV,½,É,“,ç,Ä,ç,Ü,·B

@ @•’é,ÌŒRž-s“®,Å,à,¤,D,AE,Ä-L-¼,È,Ì,“S¾ŒŒ”n,Å,·B’fey,Ìñ,É’†%o>fAfWfA,Ì‘å^Ji,¾,ç,|,ñ,j,AE,ç,¤,Ìb,a, ,Å,ÄA,±
,Ì,ÍS¾ŒŒ”n,AE,ç,¤-¼”n,ÌžY”n,¾,Æ,ç,¤,ñ,¾B-V-q-,Ì™±“z,AEí,¤,É,µ,Ä,à,°,D-¼”n,Ì—
~,µ,çBŠOŒðŒðÄ,ÄS¾ŒŒ”n,ðžè,É“ù,ê,æ,¤,AE,µ,½,ñ,Å,·,“A‘å^J,É’f,ç,ê,Ä,µ,Ü,Å,½,Ì,Å-Ì,,
@→L-~,Æ,ç,¤“ŒR,“å^J%o“a,É”hŒ
œ,ÉŒ,,Å,Ä,ç,½,Æ,ç,¤,C,A,C,ç,ê,¾,“,“N,µ,çí,ç,¾,Å,½,C‘z‘œ,Å,“,é,ËB,½,¾A,C,ç,Í,R,O,O,O“a,ÌS¾ŒŒ”n,ð~A,ê,Ä,“,½,ñ,¾B
@,±,ê,ð,â,µ,Ä™±“z,AE,Ì“-p,µ,½,ñ,Å,µ,â,¤B

@S¾ŒŒ”n,AE,ç,¤,Ì,Í,C,ñ,È”n,¾,Å,½,Ì,CBž-‘-çW,É,ÍžÈ^,“,é,ËB’¤,¾,“,çB‘“,Æ,µ,Å,Û,ðU,ëä,°,Ä,ç,¤,É,à‘-»,¤B,±
,ÌS¾ŒŒ”n,“,Ì,ç,É½fAfWfA,É“,í,Å,ÄfAf%o fu”n,É,È,Å,½B,³,ç,É,±,ÌfAf%o fu”n,“Af”[ffbfh,É%o^,Ì,ê,ÄfCfMf ŠfX,ÄY-
^Zí,Æ,¤,“,í,³,ê,ÄfTf%o fu”fŒfbfh,“a¶,µ,½B,Æ,ç,¤,í,“,ÅA,â,Å,Ì,ë‘-,¤,Å,½,í,“,¾B

@ @“Œ•û,É,àio,µ,Ä,ç,éB’©’N”¼“‡•û-È,É,Í%oqž’©’N,AE,ç,¤,“,Å,½B,±,ê,ÍASž-“,“Œš,Å,½,¾,Å,½,æ,¤,Å,·,“A,±,ê,ð-
Å,Ú,µ,ÄAŠy~QES,È,CŽlQES,ð,“,“Ü,·B

@“i•û,Å,à“iŠCŒS,È,C<¤>QES,ðY”u,µ,Ü,µ,½B

@ @•’é,Í,±,Ì,æ,¤,É“Œ¼“ì-k,ÄŒRž-s“®,ØdÌ-E“I,É,“,±,È,Å,Ä-Ì“y,ØŠg‘å,µ,½B,È,É,æ,è,à-“-M^È-
^,Ì“W,É,æ,Å,Ä~“,|,ç,ê,½ŒÉ,“,C,ç,ê,ðž,Øž²,Å,“,±,È,¤B’“,ÌÀ,ç,Æ,“,É
@,“,±,ÅA“à-È,Å,ç,ë,ç,ë,Èà

@ @•’é,Í-Å-@A•½-@B•%oç,“®,Ø,¤,É,½
@’†“,ÍL,ç,Ì,Å,“n•û,Å,Í-L,Å,“%oç,Ši,“À,çA,a’n•û,Í,¥i,Å,“%oç,Ši,“,“ç,µ,Å,ç,éA,Æ,ç,¤,±,Æ,“,éB,±,¤,ç
,¤,Æ,“,É•{,“,“n•û,Å^À,
@•½-@,Í“,¶,±,Æ,ðžšôž²,Å,“,±,È,¤B’“,ÌÀ,ç,Æ,“,É
@-ü,ÍšÈ’P,¾,“,ê,ÇAžAž{,“,é,Ì,ÍšÈ’P,Å,Í,È,çBî-ñžûW,Æ,CÅ’“,ÌšC- -A‘-,Æ,C’†%o>WŒ “I,Éš- -»§“x,“,ä,“,Æ,C,ç,Å,ç,È,ç
,Æ,Å,“,é,à,Ì,Å,Í,È,çB
@•’é,Ìžž‘ä,Íž-og,Ì,à,Ì,Å,à‘ab,É,Ì,Ú,è,Å,β,½,è,µ,Å,ç,Ü,·B•’é,Ì

@%o-A“SAžð,Ìé”,§B

@”“,§,Æ,ç,¤,Ì,Í{,“,“çA”Ì”,“Ø“Æè,µ,ÅA-“ŠôÆžò,É”Ì”,“,³,¹,È,ç,±,Æ,Å,·B%o-
,Í•Kžù•i,Å,·,¤,çA•{,¤,ç}f,¤,µ,¤,È,çB
,±,ê,ç,í,ò,ÍA‘OŠč,“ÈŒä,à‘½,ì%o¤,É,æ,Å,Äžž,Ý,ç,ê,éà
@,“,Í‘½A‘Å,âA%oÝ•½%oü”,à,“,±,È,ç,Ü,µ,½B

@ @“à,Æ,µ,Å,ÍA,±,ê-ÈŠO,ÉžoŠw,Ìš-Šw%o»,“d-vB“Y”‡@i,Æ,¤,ç,ä,¤,J,åj,Æ,ç,¤Šwžò,ÌEfð,Ø,¤,“,ÅA“³Šw,Æ,ç,¤š-
§ŠwZ,ð,Å,
@•’é,Ìžž‘ä,É,È,ç,ÆA<{,“í,É,Ížò%oÆ,É’Ì,·,éfAfŒf<ø>M[,Í,È,ç,¤,ÉB•’é,Í-c,ç,Æ,“,¤,ç,žò%oÆ,“D,“,Å,·B

@š- -tm“o-p§“x,Æ,µ,Å,Í,½“-ç‘I,Æ,ç,¤§“x,à,“,±,È,í,ê,Ü,µ,½B,½“-ç‘I,Æ,ç,¤Œ³/4-t,Íu½-çv,Æu““iv,Æ,ç,¤Œ³/4-
t,ð‘g,Ý‡,í,¹,½,à,ÌBu““iv,Íu‘I“v,Æ“-,¶,Å,·B’n•û,Ì-ðl,“nŒ³,Ì-L-Ížò,Ì,‘E,ð,¤,“ÄžòŠw,Ì‘f-{,“,è,“nŒ³,Ì•]”,Ì,ç,çžò,ð’†
%o>,É,‘E,·,éB’†%o
,¤B

‘OŠč

@,±,ì§“x,Å’†%,É,,‘E,³,ê,eŽÒ,ÍAŒ%oÊ,AE,μ,Ä’n•û,ì—L—ÍŽÒA[“]°,ìŽt’í,Å, ,é,±,AE,^a½,C,Å,½B,±,ì“,ÍŠo,!,Å,“,ç,Ä,

@ @,«,ç,Ñ,â,C,È•’é,ìŽž·ä,Å,μ,½,^aA,»,ì”Ó”N,ÍŒäŒpŽÒ,Å”Y,ñ,¾BŒäŒpŽÒ[“],ç
,Åc[“]¾Žq,^a-³ŽÀ,ìB,ÅŽE,³,ê,½,è,·,éBŽŒY,É,μ,½,ì,í’é,È,ñ,Å,·,^aA, ,AE,Å-³ŽÀ,ð’m,é,ñ,¾,EB
@ÅŒä,íŽ,ì”Ó,ì’†,Å•’é,íŽŒñ,¾,C,à,μ,ê,È,çB•’é,ìŽŒAE,AE,à,É’OŠč,ìÅ·Šú,Í,í,è,Ü,·B

ŽQI}‘D%cîEEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,½,ç,AE,«,í

‘-¼,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf“f^ [flfbfg“XufAf}f]f“v,ìfy[fW,É”ò,ñ,ÅA-{,ìff[f^A‘•],È,C,ðŒC,é,±,AE,^a,Å,«,Ü,·Bw“ü,à‰oÅ”\,Å,·B

Šč’é:,Æ•Ó[“]ŽD%oñ\’é,ì•—
Œj’†ŒöV[“] (1473)

cover
-aŽR -¾”BŠč,ì½•û•Ó[“],Å,ì-h‰oq’ì§,^aA [“]i’ì,I,ÉD%oî,³,ê,Ä,ç,Ü,·BTM±“z’îô,ÅŠč,^ai,â,μ,½“w—
Í,Æl—,ìJ—Í,^a,μ,Ý ,J,Ý,í,C,è,Ü,·B

‘æ29%oñ@‘OŠč@;:,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É–β,é](#)

[‘O,ìfy\[fW,Ö
‘æ28%oñ@‘^Šč,ì•—S](#)

[ŽÝ,ìfy\[fW,Ö
‘æ30%oñ@V,C,çŒäŠč](#)

$\notin E_j$ u \sim /

@@‘æ,R,O%oñ@V,©,çŒäŠ;@

,PV

@ @•é, ÍŽ€EáA’nºû, Á, Í[‘], Í[‘]·, ^, ß, ^¾, Á, Á, «, Ü, ·B“z—é, á—í”_, ð, ^½,
, ÍŠÙ, ÍŽÉ^, ^o, Ä, ç, é, ËB, ±, ê, ÍA[‘], Í•æ, ©, ço“y, ·, é%œœfZf“i, Á, , Ö, ñ, Ééj, ÆŒÄ, Í, ê, éŠç, ÍŠG, Å, ·B“—Žž, ÍJŠ^, È, Ç, ^a·, ç
Ä, , èBŠÙ, ÍŽü, è, Í»», ð, ß, ®, ç, ¹, Ä, , ÄA[‘]Œ©, ^, ®, ç, ä, , èBŠTM‘qŽž·ä, Í•Žm, ÍŠÙ, ÉŠ, ¶, ^aŽ—, Ä, ç, èBŽÀ·Ô, à[~]ÄŠO, », ê, É[~]ß, ç, ñ, Å, Í, È, ç, ©, ÈB
@, ^½, ^¾, µAŠç, Á, Í^½[‘]“—ç‘I, Æ, ç, oŠ[—]TM“o—p§“x, ^a, “, ±, È, í, ê, Ä, ç, Ü, µ, ^½, èB[‘], ÍŽq’í, ÍA, ±, Í§“x, É, æ, Á, ÄŠ[—]», Æ, µ, Ä[‘]†%œ ŠE, Éio, µ, ^½B, ±, ±
^aŠTM‘q•Žm, Æ^á, o, Æ, ±, èB

@,³,ÄA•'éŽ€ä,ìŠç,ì{”ì,Å,ÍŒ-Í“¬“^,³,©,ñ,É,“,±,éBŒ-Í“¬“^,íŽå-ð,íŠ-,ÆŠOÊ,Å,·E

@@@, Š⁻, Ě, Ā, č, Ă, Í, Ě, O, ào, Ă, <, Ū, μ, ½, ĚB'j«, į, ŠÍ, ðØ, è, Žæ, č, ê, ½g[•]a, ľ, á, č, ŽO, ½, č, Ă, ·, B[•]z—
ê, É[•]ß, čg[•]a, Į, ñ, Ā, ·, aA[”]P, č, Íc[’]é, įg[•]ß, ÉŽd, |, Äg, į, Ū, í, è, į, g[•]b, A[•]E, ©, δ, ·, ē, Ė, ĄAŽ©R, ÉŽ|“I, Ė[•]@-§, ÉG, ê, é, æ, o, É, Ė, ēBc[’]é, į—
§, ê, ©, c!, !, Ā, Y, é, AEA”P, č, Íc[’]é, ^-c, č, A[•]E, <, ©, č, ē, É—V, ñ, Ā, , ê, ½, è, μ, ½[•]ß, μ, č, JY, Ā, μ, āB[•]é, į, æ, o, Ė, μ, Ā, ©, è, μ, ½c[’]é, Ā, Ė, č, AEA, Ā, č
, Ā, č[”]P, č, ÉŽ|“I, Ė[•]X, A[•]E, μ, ½, ±, A[•]E, δ, Ū, ©, !, ½, è, ·, ĚB[•]Š⁻, į-{ - Ž|, ÉSÖ, í, é, ×, «, Ā, Į, Ė, č, ©, č, Š⁻—», ©, č, ·, ê, Į[•]—§, ½, μ, č, Ā, ·, aAc[’]é, įM
- Š, δ[”]/4, Ā, č, é, Š⁻, Ět, č, |, Į, čA, ±, ñ, Į[•]μ[”]C, Ě, Ė, é, A[•]E, Ū, A[•]E, à, ĖŽ|, į, „, ±, Ė, í, ê, É, ,

@SOÉ,Æ,¢,þ,Í,Íc'é,þ•û,leÊ,Í,±,Æ,Á,·B”N,Íc'é,a¹þ•É,·,é,AÆZ|“I,È,±,Æ,I•êe,Á,“c•ê,³,ñ,a,·,é,ñ,Á,·,³A,»,o,È,é,Æ,»,le°,a,,¢•É,ð“Æè,μ,Á,¢,·,Í,Í“-R,Í,·,es,«,Á,·,ëB,±,ÍSOÉ,ac'é,le°,Æ,¢,o“ÁÆ,ð,Ó,è,©,·,μ,ÄZ|,É,©,©,í,Á,Á,«,Ü,·B

@•ÈX,Î”wŒI,©,çŒ—Í,ð,à,À›S—,ÆSOÈ,Í“—R’‡,‡«,çB<{`í,À—¼—Í,ICÈ—Í“¬^,ðŒJ,è•Ô,µ,À,ç,é, ,ç,¾,È’nºû,À,Í<•—Í,ð~|,À,ç,

@%oäl,ISwZO,Æ,μ,A,Í•»»,^a,æ,©,A,½,Ac'é,E,E,é,ÆZj,Íê,C,E¬—,μ,U,μ,^bB%oäl,IZöSw,IŒ%o»1,²,ñ,³j,I,æ,¤,E'j,AZöSw,I
-z,ð^cø,ÉŒ»ŽÀŽD%oï,É,Ä,Í,ß,æ,¤,Æ,μ,½,©,ç,Å,·B-”O,ð%oŸ,μ,Â,¬,é,³/4,-,ìZj,Å¢,ì'†,^a“®,
@’n•û,Å^c°,â^c_-,ì”½-,-,±,è,Ü,·B^c°”½-,-,í-Ñ,ì-A”_-”½-,-,ÍÔ”û,ì-,-,Æ,¢,¤B,±,ê,Í’½-”_-,-,½,ç,^aZ©•^a,½,ç,ì-Ú^ó,Æ,μ,Ã”ù-
Ñ,ðÔ,ð,ß,Ä,¢,½,©,ç,Å,¬,ç,ê,½-¼,O,Å,·B,±,¤,¢,¤”½-,-,ì'†,Å%oäí,I

QEas;

—«GBc ē,Æ,μ,A,I,—«Gbc ē,Æ,μ,A,I,—
 —«G,Í'ÓŠč'é‰Æ,À,·é—«Ž,ÍŒŒØ,ð'ø,¢,À,¢,é,©,¢AŠč,ð'œ»»,μ,½,Æ,¢,¤,±,Æ,É,È,é,í,¬,À,·B,©,êŽ©g“-Žž,Í'nºû,ì·°,ÀA·°·½—
 ØER,ÍfŠ[f]_l,©,çc'é,É,Ù,À,ì,Ú,è,À,ß,½B·°—Í,ì·|—Í,âŽxŽ,^,È,¬,è,ÍŒäŠč,Íj,Ù,è,È,©,Á,½B,¾,©,çAŒäŠč,ì·{,Í·°,Ì~A‡

@@,±,Í`Ç',Í•”‰%,ÉŠÄ%opi,©,ñ,|,çj,AÈ,ç,¤l,ª,ç,éBŠÄ%op,Í`Ç',Í—½—ß,ÅA¼,Í•ùŒü,ÉŽgŽÒ,AÈ,µ,Ä“hŒ
,çA,AÈ,ç,¤l,ª”Ç',Í—½—ßB,ÅAŠÄ%op,Í,Ç,ñ,Ç,ñ¼,ÉŒü,©,Á,A—·,ð,Â,A,—AÅŒä,ÉŠC,É,Â,«, ,½,Á,½B,±,ê^Èä¼,Éi,ß,È,çA,AÈ,ç
,¤,Í,Å^ø,«•Ô,µ,Ä,«,½,ñ,Å,·B
@ŠÄ%op,ª,Ç,±,Ü,Å—·,ð,µ,½,Í,©,AÈ,ç,¤l,ªA»—¡[,ç,AÈ,±,ë,ÅAŠÄ%op,É,æ,é,AÈŠC,ª, ,Å,½‘,Í‘å`í,¾,ç,µ,ñ,±,
@ŠÄ%op,ª,½,Ç,è,Â,ç,½ŠC,Í‰½,©,AÈ,ç,¤,±,AÈ,ªÅ“_,É,È,éB,±,ê,É,Í“ñà, ,Á,ÅA^ê,Â,ÍfJfXfsŠC,AÈ,ç,¤àBŒÍ,¾,¬,ê,Ç’m,ç,È,ç
,à,Í,ª,Ý,ê,ÍŠC,AÈŽv,¤,Å,µ,¤B,à,¤ê,Â,ª’n’†ŠC,AÈ,ç,¤àBfVfŠfA,ÍŠCŠÝ,Ü,Å,½,Ç,è,Â,ç,Å^ø,«•Ô,µ,½,AÈ,ç,¤,Í,¬,¾B,ÅA,Ç,ç,©,AÈ,ç
,¤,AÈ’n’†ŠCà,ª—L—Í,Í,æ,¤,Å,·B
@,¾,AÈ,µ,½,ç,å`í,AÈ,ç,¤,Í‰½,©,AÈ,ç,¤,AÈA[f/f]’é‘,AÈ,ç,¤,±,AÈ,É,È,éBŒäŠç,ÍŒRL,ªf[f]’é‘,Ü,Å—·s,µ,½,AÈ,·,ê,ÍA fXfP[f<,Í‘å,«,È~b,Å,Í,È,ç
,Å,·,©B

@@@,±,ê,ð•â_á,·,éL[~]_^^á, ,Á,ÄA”Ç’`AŠÄ%op,ÌŽz_ä,©,ç
„í‘D,ìæ[~]ð,Í‘á[~]%o¤À“Öi, ,ñ,Æ,ñj,ÌŽgŽÒ,AE-¼,Ì,Á,Ä,c,é,Ì,Å,·B
@‘å[~],[~]f[f}’é‘,Æ,·,ê,Ì‘À“Ö,Æ,Æ,Í‘N,CB“–Žž,Ìf[f}c’ë,ð,³_^^á,·,Æ,Ö,Á,½,è,Ìl[~]_^^á,[~]c,Ü,μ,½,ËBf}
f<fnfXfAfEfŒfšfEfXfAf“fgfjkfX’é,Å,·BŒÜŒ«’é,ÌÅŠú,ËBfAf“fgfjkfX,ð‰¹ŽÈ,μ,Ä[~]À“Ö,É,Ù,ÚŠÔ[~]á,c,È,c,Å,μ,å,¤B
@,½,³Af[f}’¤,ÌL[~]_^^á,É,Íf}f<fnfXfAfEfŒfšfEfXfAf“fgfjkfX’é,[~]†•û–È,ÉŽgŽÒ,ð”hŒ
Ì,ÅÅ[~]†,É,å,Á,Ä,«,[~]½ŽÒ,½,_^^á,[~]c,Á,½,c‰¹½,à,Ì,³/4,Á,½,Ì,©Af[f}c’é,Ì⁻¹/4,ð,©,½,Á,½¹/4•û,ÌoI,Å,Ì,È,c,©,Æ,C,ç,í,ê,Ä,c,Ü,·[~]A,Æ,É,C,
ÌŽzŠú,É“Œ¹/4,Ì“ñ[~]å[~]é‘,[~]a,å,Á,Æ,Å,Í, ,è,Ü,·[~]ÚG,μ,Ä,c,½,±,Æ,É,Í,C,ç,í,è,Ì,È,cBçŠEŽj,Á,Û,

,RŠ;‘ã,Ì•¶%o»

@@‘OŠđAŒäŠđ,Đ,Á,

@@@'OŠ_č,À,ÍŽi"n'Ji,μ,Î,¹,ñji'O,P,S,TH 'O,W,UHjb•K,Šo|,È,_,ê,Ì,È,ç,È,¢B—ðŽj‰øÆ,À,·B,©,ê,Ì',¢
,½—¼~,^uŽj•Lv,À,·B_~bA“à,ìŽz‘ä,©,ç,©,ê,¶J,«,À,¢,½‘OŠ_č•é,ìŽz‘ä,Ù,À,ì—ðŽj,^a,©,ê,À,¢,éB,±,ì—ðŽj‘,ì‘,»•û,àd—vB•I“‘li,«,À,ñ,½,¢j,Æ,¢
,¤ŒŽ®,À‘,¢,À,¢,Ù,·B,Æ,¢,¤,æ,èAŽi”n'J,^a,I“‘Ì,Æ,¢,¤,»•û,ðSJ‘,μ,ÀA,±,ê,^a‘,À,í—ðŽj‘,ì‘,»•û,ì—Ì‘,É,È,è,Ù,·B‘å,«,
—ñ“i,ê,À,À,ñj,Æ,¢,¤,ñ,À,ì•“^a,©,ç,À,«,À,¢,é,ì,ÀI“‘Ì,Æ,¢,¤B
@-{I,I‘N•\,À,·B‰ø½”N‰ø½ŒŽ,É,±,ñ,Èo—^Ž—,^a,À,½A,Æ<‘ì,ð‘+S,Èo—^Ž—,^a—...—ñ,μ,À, ,éB•É'[,É,¢,|,Î,Ý,È,^3,ñ,ì¢ŠEŽj,ì·³‰È‘,Ý,½,¢
,È,à,ñ,À,·B“Ç,ñ,À,à,Ù,è,“,à,μ,ë,
@—ñ“,Í,»,ê,½,ê,ìŽz‘ä,É¶J,«,½ŒÂ“‘I,Èl•“,ì‘ñ“,^a,“,à,μ,ë,¢,ñ,À,·BŽò‰ø»,³,ê,À,¢,é,ÈB

@@@Ži”n‘J,Í·OŠč•’é,Éžd,!,½l,Å,·Bžjš̄,Æ,¢,Á,ÁA{‘ì,lo—Ž-,ðL~^,·,é,ì,ª,©,ê,ì‰Æ,íždž-
,,Å,μ,½Bži”n‘J,le•f,³,ñ,àžjš̄,Æ,μ,ášč,ì{‘ì,éžd,!,ä,¢,½B,åæe•f,³,ñ,ížjš̄,Æ,μ,ä,íždž-Èšo,éžçø,ífvf‰ofCfx[fg,èždž-,Æ,μ,áA
—ðžj’,ð’,±,¤,Æ,μ,ä,¢,½,ñ,Å,·B,»,ê,aužj·lv,Å,·B,Æ,±,ë,ª,±,ê,ðš®¬,³,¹,é‘o,ée•f,³,ñ,ážçø,ñ,åA‘§žqži”n‘J,ª,»,íždž-,à,ø,«çep,¢
,¾B,¾,©,çAži”n‘J,í{‘ì,â,ì,©,½,í,çí”M,ðçEx,¬,äužj·lv,ð’,¢,ä,¢,ü,μ,½B,¢,í,íf‰ofCftf[fN,Å,·B

@@@»,ñ,È,Æ,«, „éŽ-Œ, „,±,éB•’é, „Í³“I, È½⁴æŒo‰oc, ð,µ, Á™±“z, Ä†^, µ, Á, ¢, ½, ÈB—>—Èi, è, å, oj, Æ, ¢, o«ŒR, ¢, ¢, ½B, ±, „íŒR, àŒUç, „l°, ð-„, ¢, Á™±“z, Ä, „l°^, „Éo, ©, „, é, ñ, Á, „, ¢A“G, È•rÍ, „, é, Ä~oš, µ, ½B
@, ±, „lfjf...[fX, „, „À, „l{‘ì, É“Í, „Æ•’é, „-ð‰l, „l, „Æ,
, ðSFŽE, µ, É, µ, „Æ, „-½, „J, „½, „ñ, „Á, „·B, „, „l, „Æ, „xžjS-“ži”n‘J, „Í, „, „lè, „É<‡, „í, „½Bži”n‘J, „Í—>—È«ŒR, „l, „Æ, „È, „è, „ð’m, „Á, „Á, „¢
, „½, „l, „Á, „©, „é, „ð•ùŒl, „µ, „½, „ñ, „Á, „·B—>—È«ŒR, „Í-§”h, „Èl•”^, „¾, „©, „çA~oš, „µ, „½, „l, „É, „í, „æ, „Ù, „ç, „l, „í, „-, „, „Á, „½, „É^á, „¢, „è, „Ù, „½, „ñAž-
„í, „í, „Á, „«, „è, „·, „é, „Ù, „Á, „©, „é, „l‰œÆ“°, „ðŒY, „·, „é, „l, „í, „“O, „, „
@•’é, „í, „±, „é, „ð•”, „¢, „Á, „³, „ç, „É“{, „Á, „Ä, „µ, „Ù, „Á, „½Bu, „“O, „lžjS-, „l•”Ù, „Ac’é, „l”» „f, „ÉŒuø, „µ, „·, „é, „©lži”n‘J, „æA, „“O, „àžŒY, „¾[!v
@, „Æ, „¢, „o, „±, „Æ, „ÁAži”n‘J, „àžŒY, „É, „È, „é, „±, „Æ, „É, „È, „Á, „½B, „Æ, „±, „é, „, „©, „é, „É, „l•f, „³, „ñ, „©, „çø, „«Œp, „¢, „¾užjL, „v, „ð‘, „«ä, „°, „é, „Æ, „¢, „o, „d-v, „Èždž-
„, „, „é, „í, „-, „Á, „·BžŒ, „È, „í, „-, „É, „í, „¢, „©, „È, „¢B-“žžŒY, „Æ“-“tm, „Éd, „¢ŒY, „Á<ŒYi, „«, „ñ, „o, „-, „¢j, „Æ, „¢, „¢ŒY, „, „Á, „½B, „±

,ê,Í«Ší,đØ,èŽæ,ç,ê,éŒYB»Š,É,³,ê,Ä,μ,Ü,¤,í,¬,¾BŽi”n‘J,Í,Ç,å,ç,©,đ‘I‘đ,·,é,±,Æ,ª,Å,«,½E

@@Ž€È,,É,·,P,Ì,È,c<{EY,Å,¢,¢,¤,á,È,¢,©A,Æ,ì,Žž‘¤,È,çŠÈ’P,ÉŽv,¤,©,à,μ,ê,È,¢
-,ê,ÇAŽž‘¤,^á,¤,©,ç,ËB,È,°<{EY,^¤,È,°,©,ç,cd,¢,©,Æ,¢,¤,ÆA’j««Ší,ðØ,ëŽæ,ç,ê,é,Æ,¢,¤,±,Æ,Í’j,Å,à—
Å,à,È,,È,A,æ,¤,·,é,ÉlŠÔ,Å,Í,È,

@“–Žž,íššo,å,íššo’è‰‰,ì,à,ì,é,è,á,ä,ü,åj,«±,_,é,±,æ,íáž€ê,æ,è,à,â,ç,¢,±,æ,¾,á,½,ì,å,·,æb,μ,©,μaži”n’j,íužj<lv,ðš®¬,³,¹,é,½,β,é«{œy,ð‘i,ñ,ü,μ,½b

@«**Œ**Y,ð‘I,ñ,Å,àŽA,Íj,«,Ä,¢,ç,é,é,Æ,ÍŒÀ,è,Ü,‘,ñB“-Žž,ÍaŠw,àí‘à,μ,Ä,¢,È,¢,μ,ËBfXf|f“,Æ«Sí,ðØ,èŽæ,é,Å,μ,åB,»,Ì, ,Æ,Î,¢‘Û,“ü,Á,ÄŽ€, ,È,©,à,μ,ê,È,¢,μAoŒŒ‘½-È,ÅŽ€,È,©,à,μ,ê,È,¢BŽèpŒä,Ìj‘J-|,Í,©,È,è‘á,©,Á,½,æ,¤,Å, ·BŽèpŒä,ÍŽ°

%, δ,,

,Æ,È,É

@-]'k,E,E,è,U,·,ªAæ”N-S.

j,A,A,,1/2,»,o,A,·,æB

@@@ŒaŠ,łŽž‘ä,É,Í’ŒÅ,„uŠč‘v,đ,¢,Ä,¢,Ü,·BŒ Ž®,ÍI“‘ł,ÅŽi”n‘J,ł•u-@,đ“YP,µ,Ä,¢,Ü,·BuŽj<Lv,“OŠč,ł’é,łŽž‘ä,ÅI,í,Ä,¢,é,ł,ÅA”ŒÅ,Í‘OŠč,łŽž‘ä,đ,»ł-Å-S,Ü,Ä‘,«,Ü,µ,½B,±,êÈŒäA, ,Æ,ł‰oɔ’©,“,łO,ł‰oɔ’©,ł-đŽj,đ‘,«,Ü,·B”ŒÅ,Í¼æ“sŒi,¾,Ä,½”Œ,ł,ŒZ,³,ñ,Å,·B

@@@Š,ì,Í,Ј,Ђ,É,Íl,С,Ì,È,©,Á,½ŽòŠw,Å,·,ªA,â,ª,ÀŒo“T,ª®”o,³,ê,Ù,·BwŽŒoxi,μ,«,å,¤jw‘Œoxi,μ,å,«,å,¤jw^Œoxi,|,«,«,å,¤jwtHxi,μ,ã,ñ,Ј,ã,¤jw—çLxi,ç,¢,«,j,ÌŒÜ,Â,Â,·B‘S•”,Ù,Æ,ß,ÀŒÜŒoi,²,«,å,¤j,Æ,¢,¤B
@,±,ê,ç,ÍAtHŽž·â,©,ç¡‘Žž·â,É,Â,«,½‘•“,Â,·,©,çAŠ,ì,žž·â,Ù,Ñ,Æ,É,a`Ó_í,ª,í,©,è,Ã,ç,©,Á,½B,»,±,ÂA,±,ê,ç,ÌŒo“T,Ì‰œðŽßw,“”B,μ,Ù,μ,½B,±,ê,ðŒPæeŠwi,ñ,±,ª,
fxF^|,μ,Ã,¢,é,±,Æ,ª—½Žm,Æ,μ,Ã,ÌŒE,É,È,Ã,Ã,«,Ù,·,©,çA[“]o,ìžq’í,½,¿,àA,±,ê,Â^êŠŒœ—½•×<

@@•‰o», Å–Y, ê, Ä, ï, ç, –, È, ¢, ï, ïZ†, I”^{-3/4}, Å, · BŒäS_ç, läï–ïi, ¢, è, ñj, Æ, ¢, o, S⁻, a,

I'E'O,E,àZ†,I, ,A,½,æ,¤,AAäï—I,I,±,ê,ðZA—p“I,E‰oü—Ç,µ,½lB

@Z†,I”-¾,ªA•¶‰o»,I”

@'†, AZ†, "‐³/₄, ^, ê, É'º, IA'!, â‐Ø, ð×‐·, 'Zúô, Eí, A, ½, à, I, EZš, ð‐, ¢, A, ¢, U, µ, ½B, ±, ê, ð‐|SEi, , , ©, ñjA‐ØSEi, à, A, ©, ñj, È, ¢, ¢, U, ·B, , A, ±, "‐, Ä‐{, T, OfZf‐"f, , ¢, ¢, Å, ·B, ±, ê‐{‐, É, Í‐, ¢‐¶J, ð‐, „, È, ¢, ì, ÅA‰‐½‐{, ©, „, L'Zúi, ½, ñ, „, j, ðu, ·, ì, ±v, ì, æ, o, ÉŽ..., Å, Ä, Å, Ä, Å, ±, ê, É‐¶J, ð‐, Buûv, È, ¢, o, Zš, Í, ±, IŒ, Í, ±, ±, ©, ¢, «, Ä, ¢, éB, µ, Ü, o, È, «, É, Í, ®, é, ®, éSª, ¢, Ä, „,

{,đ^êS^aA“ñS^aA,Æ,¢,¤,Å,µ,åB,±,±,©,ç,«,À,¢,é,í,¬E

@,±,ñ,E,ñ,¾,©,çA,¸,å,A,Æ,µ,½-{},A,à,·,²,‘à,«,d,½,

@•×<

p*i*,Í-n,Æ•M,Å,μ,åB‘,«ŠO^á,!½,ç’Z“,Å-ØŠÈ,ðí,Á,Ä‘,«¼,·E

@,±,ê,^aŒy,

@äi—Í, ñ, ÉŠ·ŽÓB

ŽQI}·Đ%oâEEEE, à, ☐, μÚ, μ, 'm, è, ½, ç, Ä, «, í

‘-¼, δfNfŠfbfN, ·, é, ÄAfCf·f^f[flfbfg“XufAf}f]f·v, ìfy[fW, É”ò, ñ, ÅA-{, ìff[f^A·•], È, Ç, δŒ©, é, ±, Ä, ¨, Å, «, Ü, ·Bw“ü, à‰Å”\, Å, ·B

[ŒÄ·ä’†·, ìŒY”±
é’é, œê, é, à, ì, ’†ŒöV·
\(1252\)](#)

•x’J ŽŠ “Bj‰ñ, ìb, Åži”n’J, ì·{ŒY, ¨o, Ä, «, Ü, ·B·{ŒY, ìÓ-ì, É, Ä, ç, Ä, ÍA, ±, ì-{, É, à, Ä, Ä, ç, Ä, ç, Ü, ·BŒY”±
, ì, , è•û, ©, çŒÄ·ä’†·, ì, ì”
^, ©, ç”a·X, l-å‘è, Å, ·, ^y’J, ñ, Í, ±, ì-{, ì’†, Åà “¾—Í, É•x, ñ, ¾‰δ“š, ð“WŠJ, µ, Ä, ç, Ü, ·B @, ±, ñ, È’†·ŒÄ·äŽj, É, ½, ç
; , éf†fj[fN, ÈfAfvf[f, δAV’-{, Åê—åŠO, ìŽÒ, É, à, í, ©, è, å, ·, “Ç, ß, é, ì, ì, , è, ¨, ½, ç, ©, ¬, èB, ^, , a’†ŒöV·I

‘æ, R, O‰ñ@V, ©, çŒäŠ; @, ., í, è

[fgfbfvfy\[fW, É–ß, é](#)[‘O, ìfy\[fW, Ö
‘æ, Q, X‰ñ@‘OŠ;](#)[ŽY, ìfy\[fW, Ö
‘æ, R, P‰ñ@ŽO‘Žž’á](#)

@

¢ E j u<`~^

@@‘æ,R,P%oñ@@ŽO‘Žž‘ã@@

CEAS, 1999

@ @ŒaŠč,Í,QčJ`ÈŒāA—c,ċc'é,ª,Â,A,«,Ù,·B‘ál,łe‡,Å,à”e·C,ł,È,ċc'é,ª½,ċB,·,é,Æ‘OŠč,ł—Šú,Æ“—,J,ÅAŠOÈ,â,Š—,ªŒ—Í,đ^¬,é,æ,¤,È,Á,½B

@,Æ,ÉŒäŠ,ì,è‡,Í,Š,^,a,Í,ð,à,A,Á,<’í,ð<Ž,‘,Á,%BŠ—»,É,Æ,Á,Ä,Í-Ê”,,È,¢BŠ—»,Í,Ý,ñ,ÈŽòŠw,ðC,ß,Ä,¢,Ü,·,©,ç,ËAŠw-
â,Ì,È,¢>Š,^,aŽ,ÉŠÖ,í,é,±,Æ,Í-”O“I,É-³,ê,È,¢,Ì,Å,·BŠ,É,“,à,È,Á,Äo¢,μ,æ,¤,Æ,·,éŠ—»,à,¢

, \ddot{U} , μ , $\frac{1}{2}$, aA , C , \hat{e} , ζ , $\dot{\bar{I}}\dot{\bar{E}}$ $\dot{\bar{C}}$, $\dot{\bar{R}}$, μ , $\dot{\bar{A}}$ $\dot{\bar{C}}$ $\dot{\bar{A}}$ $\dot{\bar{S}}$, $\dot{\bar{I}}$ $\dot{\bar{Z}}$, δ , $\dot{\bar{U}}$, $\dot{\bar{A}}$, $\dot{\bar{A}}$, ϖ , $\dot{\bar{E}}$ $\dot{\bar{Z}}$, $\dot{\bar{P}}$, $\dot{\bar{E}}$, μ , ϖ , ϖ , $\dot{\bar{A}}$, \cdot , $\dot{\bar{e}}$ —‘ $\dot{\bar{z}}$ % $\dot{\bar{A}}$ ’§, $\dot{\bar{I}}$ $\dot{\bar{S}}$ —», $\frac{1}{2}$, $\dot{\bar{z}}$, $\dot{\bar{a}}$, $\dot{\bar{C}}$, $\dot{\bar{E}}$, $\dot{\bar{e}}$, $\dot{\bar{c}}$, $\dot{\bar{U}}$, μ , $\frac{1}{2}B$, \pm , ϖ , $\dot{\bar{c}}$, ϖ $\dot{\bar{S}}$ —», $\dot{\bar{I}}$, \pm , $\dot{\bar{A}}$, $\dot{\bar{E}}$, $\dot{\bar{u}}$ — $\dot{\bar{i}}$, $\dot{\bar{c}}$, $\dot{\bar{e}}$, $\dot{\bar{a}}$, ϖ $\dot{\bar{j}}$, $\dot{\bar{v}}$, $\dot{\bar{A}}$, $\dot{\bar{c}}$, $\dot{\bar{c}}$, $\dot{\bar{U}}$, μ , $\frac{1}{2}B$ — $\dot{\bar{S}}$ —», $\frac{1}{2}$, $\dot{\bar{z}}$, $\dot{\bar{I}}$ $\dot{\bar{S}}$, $\dot{\bar{o}}$ ” $\dot{\bar{a}}$ ”», μA $\dot{\bar{c}}$ — $\dot{\bar{a}}$, $\dot{\bar{C}}$, $\dot{\bar{e}}$, $\dot{\bar{c}}$, $\dot{\bar{I}}$ $\dot{\bar{z}}$ \bullet $\dot{\bar{u}}$, $\dot{\bar{o}}$, μ , $\dot{\bar{A}}$,

@,±,ꝝ,È,Á,Ä,

,*si*,P,U,U[†],P,U,XjB[†]→S[—]»,½,*i*,fOfF<[fv,ðSÈ,C,ç%ci<v'Ç»ú,μ,½,I,Å,BŽE,³,ê,½ŽO,å,ç,U,μ,½B

,Æ,ÅŒäŠ,ì,Ì«{’ì,ÍŠ—»,½,¿,ÌŽxŽ,ðW,þ,ç,ê,È

•,é,Í‰%oÄ,ÍÀ‘×,Å,·,^A“}çü,łkÖ,Å,©,ê,ç,ÍŒäŠż,ł

$\partial S^- \rightarrow, A, \mu, A, I, S, \delta, "S, "Z, A, 1/2<^o, 1/2, \zeta, a, C, \square, \phi, \square, O^x, \delta, A, A, 1/2, \square, A, \phi, \square, A E A <^o, A, \mu, A, I, Z, -\bar{Z}, -\bar{Z}, I, C, E$

,é,æ,œ,É,È,è,Ü,·B,à,μ,

,Í`í_“I,ÈJ,«•û,^,Á,±,¤fu[f€,É,È,Á,½,è,à,·,é,ñ,Á·B,±,ê,ÉŠÖ,μ,Ä,ÍA,¢,,ê~b,ð,μ,Ü,·B

@'n•û,Å[‘],[‘],[‘]Ž,,-~Ž,,—~É‘-,é,Æ,Ç,¤,È,é,©B,©,ê,ç,ÍA,Ç,ñ,Ç,ñ“y’n,ð“Æè,μ,Ä,¢,BŒäŠ,ł•{,Í,à,¤’n•û,ł...—~HŽ—,È,ñ,Ä,â,ç,È,

,É“y‘n,ð‘D,í,ê,ÄÄ—ì,É,È,A,½,ë“z—ê,É,È,ëB,»,ê,Ä,à,í,«,Ä,ç,_,ê,Í,U,¾,U,µ,ÄA‘½,

\neg , \wedge , \exists , \forall , \in , \mathbb{I} , \mathbb{A} , \cdot , B

,o@<^,lDE^-_,E,A,_,c,«,Ü,·B

æBMZO,E,e,E,ICEUT,I,P,A,o<`c,E,T,B,U,`BMZO,E,E,e,IEF-`a,ZD,A•a•C,oZj,μ,A,a,ç,],e,%,,A,I,E,`eB

,±,E⁺,U,e,AHZ-,a,A,eBCEUT,I,•A,oo,‘,E,¢,æ,¤,E•n,μ,¢- U,A,a- -p,A,«,eB,»,le‡,I J

,1,A,**B**⁺,0,E,⁻, μ ,%,eA⁺⁺ H,1•aC,o, μ ,%,e ζ -n,oC z, μ ,%,e⁻,e J⁺⁺,A,⁻B-{ = A⁺⁺{,a⁻,I⁺⁺ 1,-,.,e,x,«zdz-

◎ 『中華人民共和國農業部』編印：《中國農業百科全書》（農業卷），北京：農業出版社，1993年。

ŽO□·Žž·ã

@^{·%4•½“1,}Í,Ù,¤,ÍŒÜ“l•Ä“1,Í,¤,¤,È[·]Í“I,ÈŠ“®,Í,í,©,è,Ü,¹,ñ,³A‘½•äŽ—,½,¤,¤,ÈŠ“®,ð,μ,Ä,ç,½,Í,Ä,μ,å,¤B’†,Í“Œ•”,ð’†S,É”\—
œ,ÍMŽÒ,³,Å,«,Ü,μ,½B•{,Í—³ð,Æ<°,Í‰o—\,³,Å,Ä,ŒÀ,èAç<‡,μ,½”—,½,ç,³,C,ñ,C,ñMŽÒ,É,È,Á,Ä,ç,
@^{·%4•½“1,}ÍŽw“±ŽÒ,Í£Šp,Æ,ç,ç,Ü,·B,©,ê,ÍA”—MŽÒ,ÍŽxZ,ÄŽ©M,ð,à,Á,½,ñ,Å,μ,å,¤BŒäŠç,ð—
Å,Ú,μ,ÄAV,μ,ç,ðŒšY,μ,¤,Æ,μ,Ü,μ,½BMŽÒ,ðŒR‘à‘gD,É,μ,Ä‘å”—”½—,ð,“,±,μ,½B,±,ê,‰œ©[·]D,Í—i,P,W,Sj,Å,·B

@@‰œ©[·]D,Í—,É,Æ,Á,Ä“G,ÍN,©B,»,ê,ÍŒäŠç‰œ¤,Æ”—,ð,ê,μ,β,é<°,Å,·,ŒBŒäŠç
½,ç,Í,»,ê,¼,ê,ÉZ,,•°,ð‘gD,μ,Ä‰œ©[·]D,Í—,Æí,ç,Ü,μ,½B,ç,í,ä,éŒQ—YŠ,,[·],ÍóÔ,É,È,Á,Ä,ç,
@,±,ÍŽz,É°,ð<°,é,Í,³ŽO‘žu,Í,~b,Å—L—½,È‘,‘‰œA‘·Œ~A—”ºA,»,Í‘½,Í‰op—Y,½,ç,È,Í,ËBŽO‘žu,Í·Œê,Å,Í,©,ê,ç,‰œp—Y,Å
‰œ©[·]D,Í—,Í”—,ð,ê,μ,β,é<°,ç~A‘†,Æ,ç,¤,±,Æ,É,È,Á,Ä,ç,é,~,ê,ÇA”—,ÍŽ<“,©,çŒ©,ê,Í‘,‘‰œ½,ç,Í”—,ð,ê,μ,β,é, ,±,¬,È<°
,ÅA,â,¶,É,â,Ü,ê, ,—§,ç,ä,Å,½”—”½—,ð,³,ç,É,Ô,Á‘×,»,¤,Æ,ç,¤,Æ,ñ,Å,à,È,ç“zA,Æ,ç,¤,±,Æ,É,È,ë,Ü,·B<°,½,ç,Í·Å
‰œ©[·]D,Í—,Í‘Á³,³,ê,Ü,·,³ŒäŠç•{,ÍŽ—ŽÀä—Í‰œ»,μ,Ü,·B,½,³⁴A
Ú“I,É,Íj,«,È,³,ç,|,Ä,ç,«,Ü,·B
@ŒäŠç,³,Ä—½ŽÀ,Æ,à,ÉÁ,|,é,Í,Í,Q,Q,O”N,Å,·B

ŽO‘žž·ã

@@ŒäŠç—Å—SŒäA‘†,Í‘·,ç•³—ðŽž·ã,É“ü,Å,Ä,ç,«,Ü,·B^êŽž“I,È“^ê,ÍŠúŠO,Í, ,è,Ü,·,³A,¾,ç,½,ç,R,T,O”N,Ù,ç•³—
³,³,Å,Ä,«,Ü,·B

@@,»,ÍÅ‰œ,³ŽO‘žž·ã,Å,·B
@é°AŒäAå†A,Æ,ç,¤ŽO,Å,Í,É•³—³,μ,Ü,·B~b,Æ,μ,Å,Í—È”,ç,Æ,±,¤,Å,Ý,ñ,È,Í‘†,É,àD,«,Èl‘½,ç
,Å,μ,åBŽ,,àD,«,Å,ËAuŽO‘žuv,Æ,ç,¤FVf...f~fŒ[fVf‡f“fQ[f€,ð,μ,½,ç,³,½,ç,É,»,ÍIA,o,b,W,W,Æ,ç,¤fRf“fsf...
[f³,f,Å,½,èAfjf@f~fRf“³,f,Å,½,è,μ,Ü,μ,½Bu‘{öv,ÍfRf}f“fh,Å•KŽ€É”Š<—
³,ð,³,³,μ,½BŒ©,Å,©,Å,½,çu,“[,ÁIv,È,ñ,ÄB,»,ê,Í,»,ê,Æ,μ,ÄB

@@,Ü,é°i,Q,Q,O`Q,U,Tj,Å,·B“s,Í—Œ—zB,±,ê,³ŒäŠç,ÉŽæ,Å,Ä‘ä,í,Å,½‘,Å,·B’†—
k”³,ðŽx”z,μ,½BŽO‘,Í‘†,ÅÅ‘åÅ,Å,·BŒš‘ŽÒ,Í‘,‘‰œA‘,~j,í,»,¤,ÐjBŽ—ŽÀä,Í‘,‘‰œ³,Å,
,ñ,ÅA‘§Žq,Í‘,~j,Í‘ä,É,È,Á,ÄŒäŠçÅŒä,Íc‘é,©,ç~È,ð‘D,Å,Äé°,Í‰œ‘ac‘é,É,È,éB,¾,©,çA‘‰œžŒ‘Ž®“I,É,ÍŒš‘ŽÒ,Í‘,~j,B

@‘,‘‰œÍ,å,ç,é,ñ<°,Å,·,ŒB,~—³,ñ,³,š—,ÅaŽY,ð,«,ç,½B>š—,Å,à—{Žq,ð,Æ,Å,Ä‰œÆ,ðŽc,·,±,Æ,³,é,Í,Å,·B‰œ©[·]D,Í—
,Í‘Á³,Å‘“aŠp,ð, ,ç,í,μ,ÄA,»,Í‘½‘å—,Í‘‘°,ðŽP‰œ,É,~,³,ç,Ü,·BŽO‘žu,Í·Œê,Éo,Å,
,¾,©,ç,ËB,»,ê,½,êŽè—,ð—,ç,Ä‘,‘‰œž—,É‰œÅ,í,Å,Ä,

@‘,‘‰œ³,©,Å,½—R,Í,ç,é,ç,é, ,éB—á,|,ÍAŒäŠç—,ÍŒQ—YŠ,,[·],ÍŽž·ã,É~C•zi,è,å,Ój,Æ,ç,¤fX[fp{f}f“,Ý,½,ç,É<,ç<Œ†,³,ç
,é,ñ,Å,·,³A,È,°,©,ê,³
,½,Í,©,à,μ,ê,È,çB—V—q—,ÍRŽÈ,É—D,ê,Ä—E—Ò,Å,·B,»,Í~C•z,³Ž€,ñ,¾, ,ÆA,»,ÍŒR‘à,ð‘,‘‰œ
,Í,»,Å,
@,»,ê,©,çAB•°,Æ,ç,¤‰œ©[·]DŒR,ÍŽc“},Ü,ÅŽ©ŒR,É•Ø—,μ,Å,ç,Ü,·B‰œ½,Å,à—~—p,Å,«,é,à,Í—~—p,μ,Ü,·B

@@ŽO‘žž·ã,Å‘,‘‰œÍ‘“O—f—Í“I,Èl•,Å,·B,©,ê,Í—f—Í,Ía—{,ÍA]—,ÍŽoŠw,Í‘“ç,©,ç‰œð,¤ú,³,ê,Å,ç,é,Æ,±,é,É, ,éB‘,‘‰œÍ—@
‰œÆ,¾,Æ,à,ç,í,ê,Ü,·Bæ,Ü,ÇA“}çü,ÍÖ~È—^u~í—v“I,ÈJ,¤¤,fu[f€,É,È,Å,½,Æ,ç,Å,½,~,ê,ÇA~í—,Æ,ç,¤,Í,ÍçŠO,©,ç~íEi,ç
,Å,¾,Äj,μ,Å,ç,é,Í,Å,·B,±,Í‘EA,Æ,ç,¤,±,Æ,Í‘†g,É,ÍŽoŠw“I,È“ç,©,ç,Í‘E,Æ,ç,¤,±,Æ,àŠU,Ü,ê,Å,ç,éB,»,¤,ç,¤Ó—,Å,Í—@

ŽO□·Žž·ã

%oÆ“I,È‘,‘€,à^í—,Æ“—,J^a,Á,±,ð,à,Á,À,ç,Ü,·B,^¾,©,çA,»,ls“®,É,à‘å_•s“G,Å‘u%oo,ÈfCf[fW,^a,Â,«,Ü,Æ,ç,Ü,·B

@Ž;AŒRŽ—,^¾,—,Å,È,•JŠw,ÌE”\,É,à, ,Ó,ê,½l,Å,μ,½B‘,‘€^¾,—,Å,È,‘§Žq,Ì‘,~j,â‘,Ai,»,o,μ,å, ,Å,Ä‘†•JŠwŽjāA%o©àŠú,Ì,D,Æ,Â,É,©,^¼,|,ç,ê,éŽž‘ä,Å,·B,©,ê,ç,Í,Ý,È,»,luŒš^À,Ì•JŠwv,ð‘ä•\,·,éŽl,Å,à, ,è,Ü,·B

@‘,‘€,ÌŽ,ð,Ð,Æ,ÂD%oî,μ,Ä,“,±,oB

’Z%oIs@‘,‘€

Žð,É‘Î,í,î‘—,É%oÌ,|
lJŠd%o½,â, ,é
æ ,|,Î‘©I,É,à‘@,½,è
<Ž“ú^½,à‘½,«,±,Æ,æ
ŠS,ç,Î‘—,É,à,Á,ÄœÈ,—
—JŽv-Y,ê“í,μ
‰½,É‘È,Å,©—J,ð%oð,^³,ñ
—B“mN—L,é,Ì,Y
cc
ŽR@,,«,ð%o},í,
ŠC@[,«,ð%o},í,
ŽüŒöSM,ð“f,«,½,ê,Î
“V‰°S<A,^¹,½,è,Æ,©,â

,^³,—,É,B,©,í,Î,Ü,^³,É,o,½,|
,D,Æ,Ì,ç,é,â,ç,Ì,
,½,Æ,|,Î, ,^³,Å,ä,É,à,É,½,è
,·,¬,É,μ,D,N,^³,Å,à,μ,°,«,±,Æ,æ
,·,à,ç,½,¬,ç,Î,Ü,^³,É,à,Å,Ä,È,°, —
,±,à,ê,é,“,à,ç,í,·,ê,^a,½,μ
,È,É,É,æ,è,Å,©,b,·,Ú,ê,é,“,à,ç,ð, —,^³,ñ
,½,¾,o,Ü,‘, ,é,Ì,Y
@cc
,â,Ü@,½,©,«,ð,ç,Æ,í,
,o,Ý@,Ó,©,«,ð,ç,Æ,í,
,μ,â,o,±,o,
, ,Ü,^a,μ,½,±,±,è,æ,^¹,½,è,Æ,©,â

i’|“àŽÀE<g“c*x•v•Ø—óuŽu,Ì,o,½v’†ŒöV‘,æ,ëj

@lJ,È,ñ,Å,ç,o,Ì,I‘©~I,Ì,æ,o,É’Z,

,^aŽv,φo,^³,ê,ÄAfSfcfSfc,Æ^¹,É‘ø,Å,©,©,éB

@,»,ñ,È,Æ,«,É,í,o,Ü,çŽð,ð^ù,ñ,Å,o,½,“,o,Å,Ì,È,ç,o,CB

@ŽR,Í,ç,±,Æ,ðŒ™,^a,ç,È,ç,μAŠC,Í[,ç,±,Æ,ðŒ™,^a,ç,È,çB

@Žü,ÌŒš‘,ÌŒ÷bAŽüŒö’Ui,μ,â,o,±,o,½,ñj,ÍŽdS“,μ,½,çŽò,âŽj,É,Â,ç

,Ä‘ÓŒ©,ð,à,Âl,^a,â,Á,Ä,

@,»,ñ,È‘Ó—j,Å,·BŽüŒö’U,ÉŽŒ•^a,ðd,È,Å,ç,é,Ì,í,©,è,Ü,·,æ,ÈBŽR,^a,,ç,æ,o,ÉAŠC,^a[,ç,æ,o,ÉAŽüŒö’U,^a,»,o,Å, ,é,æ,o,ÉA%o
’A‘,‘€,à,»,Ì,æ,o,É, ,é,Ì,^¾B

@,ç,È,Ì,CŠT,^a,í,Á,Ä,

@@é°,Ì§“x,Å,Í“Ô“c§,Æ<ä•i‘†^³—@,ðŠo,|,éB“Ô“c§,ÍŒäŠi—,Ì—,Å—,μ,½”_—ÆJŽY,ð%oñ•œ,^³,^¹,é,½,ß,Ì“y’n§“x,Å,·B

@^a•i‘†^³—@,ÍŠi,Ì^½“—ç‘I,É,©,í,éS“—™“o—p§“x,Å,·B’n•û,É‘†^³S“,Æ,ç,o—ðl,ð,“,ç,ÄA,±,ê,^an•û,Ì•,ð^a“™‰,é•^a,—,Ä‘†
‰o,É,‘E,·,éB’†‰o

@@ŒäŠi—A‘†‘—k•”,ð“ê,μ,½,‘€,Í“i•û,ÉU,ßž,Ý,Ü,·B,±,ê,ðŒ},|Œ,,Å,½,Ì,“·Œ A—”ð,Ì“A‡ŒRB’·]’†—
¬æ,ÅŒ^í,É,È,é,Ì,Å,·,^a...ŒR,É,È,ê,È,ç‘,‘ŒR,Í“a”s,·,éB,±,ê,^a—L—^¼,ÈŒ•Ç,Ìí,ç,Å,·i,Q,O,WjB,±,Ì“s-k,Å‘,‘€
,Í“ê,ð, ,^aç,βA‘†‘,Ì•—ð,“Œ^“è“I,É,È,è,Ü,μ,½B

@@·Œ ,^a·]‰o—¬,ð‘†S,ÉŒš‘,μ,½,Ì,“Œai,Q,Q,Q` ,Q,W,OjBŽñ“s,ÍŒš<ÆAŒ»Ý,Ì“i^z,Å,·B,±,Ì‘,à‘i•û“y’...[“]o,Ì—
Í,ðŒ•W,μ,Ä,Â,

ŽO□·Žž·ã
@@ — »”õ, ¸Œ»Ý, ÌŽliÈ, ð’†S, ÉŒš, Ä, ½, ï, ¸â†i, Q, Q, P, Q, U, RjBŽñ“s, Í¬“sB, ±, ïl, Í—L—¼, ÈwŽO·Žu‰‰‰`x, Æ, ¢, ☐•Œê, ÌŽålŒöBŠÖ‰‰HA‘L”ð, È, Ç, ÌŒ†, ð], |, Ä‰‰©Ø, Í—, Ì‘Á^³, ÈŠ^—ð, µ, ÄA, ¸, ¸”Š<—°, Æ, ¢, ☐ŒRŽt, ðŒ}, |, Äâ†, ÌENŽå, È, È, éB•Œê, àŒ»ŽA, à, ±, ☉, ¢, , ☉Œ‘, «, Í‘—, ¶, Å, ·B, Å, ·, ¸A, ©, ê, ç, Í—ðŽjä, ÌŽÀ‘œ, æ, è, àŒê, Å, ÌŠ^—ð, Ì•û, —L—¼, È, Á, Ä, µ, Ü, Á, ÄŒ•œ, ¸el•à, <, µ, Ä, ¢, éŠ‘, ¶, ¾, ÈB’†‘, Å, àŒÄ, @, Æ,
‰‰ØŠX, È, à, , è, Ü, ·B

@@@ŒRŽt,ł”Š<—°,ł•Œê,ł’†,Å,ÍA,à,ł,·,²,¢’m-d,łŽ,żÅ,Å,©,ê,ł,½,Ä,½ł,ä,Å,¢,

@uŽOŒÚi,³,ñ,±j,Ì—çv,Æ,¢,¤,Ì,Å,·B

@—””õ,Í‘,®,çŠÖ‰HA’f”ð,È,Ç,AÈ^êŠø—g,°,ÀŠ^—õ,µA—L—¼,É,È,Á,Ä,ç,ì,Å,·,ªA,È,®,È,®,‘,€
,å‘·Œ ,ì,æ,¤,É^ê“éé,ìŽå,AÈ,µ,ÄŽ©•ª,ì’n”Ø,ð,Â,
,é,ì,Å,·B,»,ñ,È,AÈ,«A”Š<—°,AÈ,ç,¤m-d,ìŽm,ª,ç,é,AÈ•·,B,®,ê,ð•”‰°,É,Å,«,ê,î‘å,«,”
,¤,ñ,¾,ÈB”Š<—°,Í“cŽÉ,É,±,à,Á,Ä’N,É,àŽd,|,Ä,ç,È,çB
@,»,±,Å—””õ,Í”Š<—°,í‰oB“ÙêŠ,É—K,È,Ä,ç, B,AÈ,±,é,ªA”Š<—°,Í—”ŽçB—””õ,Í, ,«,ç,ß,«,ê,È,ç,ì,ÅA,à,¤^ê“xŽ®,çòŒü,ç,Ä,ç
,

@,±,ê,I•ŒÊ,ÎZRÊ,Î,D,A,E,Â,È,Î,A,·,ªAŽAÚ,É,à,·,Á,½~b,c,μ,¢B
 @,μ,©,μAl,!,-Ä,Y,é,AÆ•I,È~b,ÅA—”o,I~ê“x,å%oï,Á,½,±,AÆ,à,È,c”Š<—°,ð,C,¤,μ,Ä,»,ñ,È,É‰oAÆ—
 ^,É,μ,½,©,Á,½,Ì,CB,Ü,¾,Ù,³/4A—Í,Í¬,³,c,AÆ,Í,c,|A—”o,I,·,Å,É—L—¼l,Å«—^,Í‘å,«,È—ì—],ð,à,Á,Ä,ç,é,í,—,Å,μ,åBŒyX,μ,
 ŽC•ª,©,ç—³^È—³Š¥,ÌA,μ,©,à”N‰o,ÌlŠÔ,ð,ð’á,μ,ÄŒ},!,é,AÆ,ç,¤,Ì,ÍAŽC•ª,Ì'l·Å,_,ð‰o,°
 ,é,æ,¤,Ès^×,È,Ì,Å,·B,AÆ,,Éff“fc,ðd,ñ,Ì,é’†“I,È”

@@,±,ÌŽOŒÚ,Ì—ç,Ì”wŒi,É,Í,±,ñ,ÈŽ-î,ª, ,Á,½,ñ,Å,·H

@ŽÀÛA”Š<°,ðŒ}!,Ä,©,Ì—”ð,Ífgf“fgf””Žq,Åå†,Ì°,ðŒš,Ä,Ü,·Bå†,Ì°n•û,Ì°°,½,¸,ªA,©,ê,ðŒNŽå,Æ,μ,Ä×Å,®,±,Æ,ÉŽ^“,μ,½”wŒi,É,Í”Š<°,Ì°JÝ,Í°å,«,©,Á,½,ÆŽv,ç,Ü,·B

@,±,ê,Ù,C,ÉA[“],Ì—Í,ð⁻³Ž<,μ,Ä,Í‰o½,à,Å,«,È,©,Á,½Žž·ã,³/4,Á,¹/₂,Ì,Å,·Bt,É,¢,|,ÍA’N,à‘S‘,Ì[“]—
Í,ð,D,Æ,Å,É,Ü,Æ,ß,ç,ê,È,©,Á,¹/₂,©,ç[†],^a—ô,μ,¹/₂,Ì,Å,μ,¹/₂B

[ŽQl}](#) ‘D‰oîEEEE,à,¤,μÚ,μ,’m,è,¹/₂,¢,Æ,«,Í

‘-½,ðfNfŠfbfN,·,é,ÆAfCf[“]f^ [flfbfg[“]XufAf}f]f[“]v,Ìfy[fW,É”ð,ñ,ÅA—{,Ìff[f^A‘•],È,C,ðŒ©,é,±,Æ,^a,Å,«,Ü,·Bw[“]ü,à‰oÅ[“]\
Å,·B

cŠE,Ì—ðŽjq7r·å“,’é“	‘{è Žs’è [“] B ‰lo‘-[,lučŠE,Ì—ðŽjvfVfŠ[fY,È,Ì,ÉA‰íó,Å·JŒÉ ‰o», ³ ,ê,é‘O,ÉA [†] Œö•JŒÉ,©,ço”Å, ³ ,ê,Ä,μ,Ü,Á, ¹ / ₂ ,Ù,C,Ì ^{-½} [“] B u [“] å [“] ,é‘v,Æ,¢,¤ [“] è ^{-½} , ³ /4, ^a A [“] ,,È,Å,¢,Ä,Ì-q,Ì [•] t,‘ [“] µ [“] ö“xB [“] , ^a —§,·,é,Ü,Å,ÌŒaŠ [“] —,©,ç“ì-k’©Žž·ã,Ì [“] å,«,È —ðŽj,Ì,¤,È,è, ^a Žå [“] èB é [“] W [“] ì-k’©,Æ,¢,í,ê,éŽž·ã,ÍA [“] ‰È [“] ,Å,Í,·,®,ÉI,í,Å,Ä,μ,Ü,¤,¤AŽÀ,Í [†] ‘Žjá [“] è [“] ñ,ð, ,ç,»,¤d—v,Å [“] —[,¢B
ŽO·Žul[“]c‰oî·k	‘‡ r’j [“] B —ðŒ,ÉŠy,μ,ß,ÄA,μ,©,¤AŒ«,
Žu,Ì,¤,½\’† ‰oØœauŽ‘I...’†ŒöV[“]	‘ “à ŽÀ, [“] g [“] c [•] x [•] v [“] B @—{,J [†] ,ÉuŽu,Ì,¤,½v,Æ,¢,¤—{,©,ç [‘] ,‘,ÌŽ,ð ^ø —p,μ,Ä,¢,Ü,·,¤A,±,ÌŽW ,Í [†] ,ÌŽ,ðŽž·ã,ð [‘] , ,ÄW,ß, ¹ / ₂ ,à,Ì,Å,·B [‘] å [‘] _,È“C,Ý‰o [“] ,μ [•] J,Å [“] ê“C,μ,Ä [“] Ó—,¤Zæ,ê,é,æ,¤,ÉH [•] v, ³ ,ê,Ä,¢ ,Ü,·B [“] ú—{,l,ÌŠ [“] žš,ð,Ý,Ä‰o [“] ,Æ,È, ,Æ,à,Å,«,Ü,·B,·E,ß,Ì—{,Å,·i“üŽè,μ,É, ,ç,Ì [•] û,¤D,¤,È,ñ,Å,·,¤A—{,J,Å,ÍA [“] ,ÌŠÖŒW,ÅŽö [“] Æ,Å,Íu’Z‰oÌsv,ðÐ‰oî,μ,Ü,μ, ¹ / ₂ B

‘æ,R,P‰oñ@ŽO·Žž·ã@,“,í,è

[fgfbfvfy\[fW,É—ß,é](#)

[‘O,Ìfy\[fW,Ö
‘æ,R,O‰oñ@V,©,çŒaŠ[“]](#)

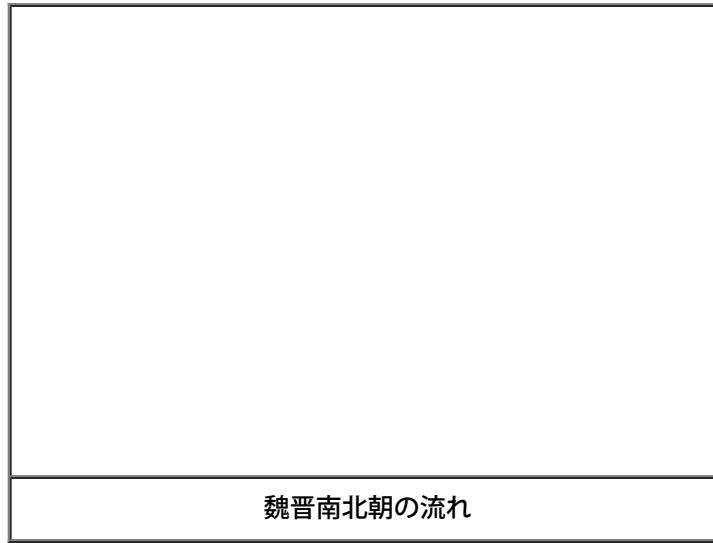
[ŽY,Ìfy\[fW,Ö
‘æ,R,Q‰oñ@é[“]ì-k’©](#)

世界史講義録

第32回 魏晋南北朝

1 大分裂の時代

前回三国時代の話をしたんですが、三国時代以後の流れを確認しておいてください。ここはややこしいところなので、プリントの流れ図をしっかり覚えておくこと。



後漢が滅んで三国時代。魏、呉、蜀の三国に分裂。

魏に代わるのが晋。「しん」という音の王朝はこれで三つ目だね。秦、新、がありました。漢字でちゃんと区別しておくように。

この晋が蜀と呉を滅ぼしていったん中国を統一します（265）。しかし、混乱がおこって短期間で晋は滅びます。

華北には北方、西方の異民族が侵入ってきて、かれらの部族単位の小さな政権がたくさん生まれます。これが五胡十六国（ごこじゅうろっこく）時代（316～439）。五つの異民族によって十六の政権ができた時代、という意味です。華北は大混乱の時代です。

やがてその中のひとつ北魏という国が華北を統一する（439）。

北魏はやがて東西に分裂（534）して東魏、西魏が成立。

さらに東魏は北斉（ほくせい）（550～577）、西魏は北周（556～581）に代わります。

北魏から北斉、北周までの五つの王朝はすべて同じ系統の政権なので、これをひっくるめて北朝と呼ぶ。

異民族の政権ができたのは華北だけで華南にまでかれらの侵入はありませんでした。崩壊した晋の王族の一人が南に逃げてここに晋を再興します。これを東晋（317～420）という。東晋と区別してその前の晋を西晋と呼ぶこともありますから注意しておいてください。

東晋を滅ぼしたのが宋、このあと、齊、梁、陳という王朝がつづきます。この宋から陳までの四つの王朝をひっくるめて南朝と呼ぶ。華北の北朝と対峙する恰好になる。

北周が北齊を滅ぼして華北を統一したあと、581年に北周が隋に代わり、この隋が南朝最期の王朝陳も滅ぼして再び中国全体を統一するのが589年。

後漢滅亡後、隋の統一までの370年間が大分裂時代、というわけです。

この時代全体の呼び方ですが、魏晋南北朝時代、というのがいちばん一般的です。また、南方の政権に着目して六朝（りくちょう）時代という言い方もあります。三国の呉、東晋、南朝の宋、齊、梁、陳、全部で六つの王朝があるでしょ。だから六朝。この六つはすべて都が現在の南京にあったので、ひとつづきのものと考えているのです。

六という数字を伝統的な読み癖で「りく」と読みますから注意してください。

受験的にはこの時代の王朝の変遷はしっかり覚えてください。

しかし、王朝の変遷というのは権力の最高位にある皇帝の家柄が代わっていくのを追っているだけの話で、大きな歴史の流れとしては、権力が不安定で長い分裂がつづいた時代として、ざっくりとらえてもらったらいい。

では、なぜ皇帝権力が不安定で政権交代を繰り返したかというと、三国時代のところでも話したように豪族の勢力が強かったから、ということになる。豪族層に対抗できるような皇帝権力の基盤を作れなかったのです。

もうひとつは異民族の流入がある。前漢、後漢の時代に積極的に对外政策をおこなった結果、北方の遊牧民族のあいだに徐々にではありますが、中国文明が浸透していく。匈奴の中にも中国国内に移住して生活するような部族が出てくる。華北の場合はかれらの活動がさらに混乱に輪をかけたということです。

2 西晋から東晋へ

王朝の変遷でポイントになるところだけ細かく見ておきましょう。

西晋（265～316）。建国者は司馬炎。この人のお祖父さんが「三国志演義」で有名な司馬懿（しばい）です。曹操に信頼されて大将軍をやっていた。

ちなみに司馬懿は蜀の諸葛亮が魏の国に侵攻してくるのを防衛して名を挙げて、諸葛亮の死後は東方の遼東半島にあった公孫氏の独立政権を滅ぼします。この結果、朝鮮半島までが魏の勢力範囲に入る。そこにやってくるのが倭の邪馬台国の使者です。有名な「魏志倭人伝」はこの魏の国の歴史書の一部分です。歴史に「もし」は禁物といわれますが、もし、諸葛亮が早死にせず司馬懿が蜀との国境戦線に張り付けになつたままだつたら、朝鮮半島は魏の勢力範囲には入らず、魏の歴史書に邪馬台国の記録は残されなかつたもしかな

い、というわけ。

話がそれましたが、司馬懿は魏の国で押しも押されぬ実力者になっていく。かれの子も、孫である司馬炎も魏の大将軍の地位を握りつづけます。魏は曹操、曹丕は力がありましたがそれ以後はだらしのない皇帝がつづき、いつの間にか司馬家に実権を握られ、司馬炎が遂に魏の皇帝から帝位を奪って晋を建てたというわけです。

だから、司馬炎はお祖父さんの遺産で皇帝になったようなもので、人物としては大したことではない。即位するとすぐに贅沢三昧にふけってしまう。それでも280年には呉を滅ぼしなんとか天下が統一されたのですが、かれが死ぬと帝位をめぐって王族どうしの内紛が起きる。八人の王族がそれぞれに軍隊を率いて内乱をはじまってしまったのです。これを八王の乱（291～306）といいます。

この王たち、ライバルを倒すためには自分の軍事力を強化すればよいわけです。で、そのための手段として周辺の異民族の力を導入したんですね。遊牧系の民族は中国兵よりも強い。各部族の酋長たちと話をつけて呼び寄せ、配下として戦わせた。遊牧部族の者たちは、はじめは晋の王族のもとで戦うのですが、中国人は弱い。なにもかれらの命令を聞いていなくても、自分たちの部族の力だけで中国内地に政権を打ち立てることができる、と考えはじめても当然だね。やがては、晋の王族に呼ばれていない部族までどんどん移住ってきて、晋国内は大混乱におちいります。結局晋は滅んでしまった。

この時に中国内に入ってきた異民族が五胡と呼ばれるのです。匈奴、鮮卑（せんび）、羯（けつ）、テイ、羌（きょう）です。テイ、と羌はチベット系の民族。鮮卑はモンゴル系。匈奴は不明ですね、羯は匈奴の別種といわれています。

遊牧系民族が国を建てるので当然ながら華北では農村荒廃がすすみます。五胡どうしの戦争もつづきますし、華北の豪族たちは配下の農民たちを引き連れてどんどん南に逃れました。

華南に晋の王族の一人司馬睿（しばえい）という人が逃れて東晋を建てます。都は建康。華南にはまだ開発されていない土地が結構あった。東晋政府はそういう土地を逃れてきた豪族たちに割り当てていきます。そして、かれらはアッという間にそこに地盤をきずいていくのです。華南には華南土着の豪族もいます。かつては呉政権を支えた人びとです。土着豪族と新来の豪族はあまり仲が良くない。東晋の皇帝はこういう豪族たちの微妙なバランスの上に立って政権を維持していったのです。しかも、北には五胡の圧迫があるし、大変だったね。

また、五胡の政権はしばしば南方に侵略してきます。一方東晋政権はこれを防がなければならないし、チャンスがあれば華北を奪還したい。だから、どうしても軍事力を強化しなければならない。この軍人たちが政治的な発言権を持つようになるからさらに権力は不安定になる。

東晋以後の南朝諸王朝は、軍人が帝位を奪って建国したものです。

3 北魏

華北で五胡の短命地方政権が興亡を繰り返しているなかに徐々に力につけてきたのが北魏という国です。鮮卑族の拓跋珪（たくばつけい）が建国者。拓跋氏という部族のリーダーです。

この北魏が五胡十六国の分裂状態を終わらせて華北を統一したのが439年。太武帝（たいぶてい）という皇帝のときです。この間に北魏は華北経営の基礎を固めていくわけです。当然漢人の豪族の協力も得ていく。鮮卑人の数はしていますから、漢民族の豪族の協力がなければ中国の支配はできないのです。華南に逃げずに北部にとどまっていた豪族勢力も当然いたのです。北魏の皇帝家も漢人と結びつきを強めるために漢人豪族と婚姻関係を結んでいきます。

そういう中で登場するのが北魏第六代皇帝孝文帝（こうぶんてい）（位471～499）です。孝文帝は当然鮮卑族なんですが、かれの母親は漢民族。かれのお祖母さんも漢民族。だから、人種的に何民族かということは実質的にはあまり意味がなくなってくるね。

北魏の国家を鮮卑族の国家から民族的な差別を越えた国家へと発展させなければ中国全土を支配することなどできないのです。そこで、孝文帝は積極的に漢化政策をおこないました。

具体的には首都を平城（へいじょう）（山西省大同）という辺境から、洛陽に移します。それから、宮廷で鮮卑語を禁じます。鮮卑族の軍人や役人はすべて中国語を話さなければならない。名前も中国風に改名させます。皇帝自身も拓跋という姓を元という一字姓に変更しています。鮮卑族有力者たちの反対もあったのですが、孝文帝はこれをやりきました。

これは直接関係あるかどうかわかりませんが、こんな話がある。鮮卑族の拓跋氏にはちょっと変わった風習がありました。皇帝の生母を殺すという風習です。これは外戚が権力を持つのを避けるためにずっと前からおこなわれていたらしい。孝文帝は幼いときに即位するのですが、その結果かれのお母さんは殺されているわけです。

中国の儒学の発想からすると考えられない野蛮な行為なのはわかりますね。親には「孝」というのが中国的な道徳です。孝文帝は血統からいうと鮮卑族の血よりも漢族の血の方が濃い。鮮卑族の風習と同じように中国の儒学的な発想も身につけていたに違いないのですよ。価値観のバイリンガルですね。ごくごく常識的に考えて自分の母親が殺されて悲しくないわけがない。孝文帝の場合は母の死は自分の即位が原因なわけで、かれは鮮卑族の風習を忌み嫌ったに違いないと私は想像します。そういうことを考えるとかれの漢化政策はよくわかります。

4 魏晋南北朝時代の政治

魏晋南北朝時代を通じていろいろな事件があるのですが、みんなカット。何がこの時代の政治のテーマになっていたのかだけを見ておきましょう。

どの王朝にしろどんな経緯で皇帝になったにしろ、皇帝は国家権力を強化したいと考えます。そのための邪魔者は豪族勢力です。豪族の勢力を押さえて、皇帝権力を強化するにはどうすればよいか。

ひとつは土地です。豪族よりも広い農地を直接皇帝の支配下におくこと。そうすれば、単純に豪族よりも強くなれる。

なぜならば、そこで自作農民を育成して租税を徴収する。さらに自作農民を徵発して兵士にする。そういうことが皇帝にとって可能になるからです。そうすれば豪族に頼らない軍事力と経済基盤を持つことができます。

そのための政策が、三国の魏の屯田制、西晋の占田・課田法。占田・課田法は豪族の土地所有を制限して自作農を作り出すための政策といわれていますが、くわしいことはわかりません。

さらにこの政策の決定版が北魏の均田制です。孝文帝の時代にはじまりました。これも自作農民を育成する仕組みだ。これは国家が人民に土地を支給するのです。人民は土地を支給されて自作農になることができる。そのかわり、かれらは国家に対して租庸調（そようちょう）という租税を納め、兵役の義務も果たすことになります。

これによって北魏は強力になったともいえます。この均田制は北魏につづく王朝にも引き継がれました。北周を継いで中国を再統一した隋、隋に代わった唐でも均田制はおこなわれました。

唐の時代に日本から遣唐使がいく。遣唐使がこの均田制を日本に伝えました。これが班田收授法という名前で日本でも実施されたわけです。

皇帝権力強化のもうひとつの課題が官僚の登用です。

皇帝の手足となって働く官僚は中央集権を目指す王朝にとっては絶対必要なのですが、これをどうやって採用するのか。豪族として私利私欲を追求するのではなくて、王朝に忠誠を尽くす人物を採用したい。

魏がおこなった九品中正法がそのための方法です。しかしこの方法によっても採用されたのは豪族の子弟でした。しかも、九品中正法は豪族の家柄をランク付けしましたから、有力な豪族は代々高級官僚を出すようになりました。このような豪族は事実上貴族といってよいものになっていきます。西晋の時代にはそういう貴族の家柄がだいたい決まってきたようです。これでは、皇帝に忠実な官僚の採用にはほど遠いような感じですね。

ただし、豪族＝貴族たちが九品官人法によって国家の序列の中に位置づけられたという意味はあったのです。国家の存在と無関係に貴族が存在できたのではなく、国家や皇帝権力によって高い家格にランクされることをかれらは望みました。そういう点では九品中正法は豪族を国家権力に取り込んだといえるでしょう。

九品中正法は魏晋南北朝時代の各王朝で採用されました。どの王朝もなんとか豪族＝貴族勢力を国家権力に取り込もうとしたのです。

国家権力が豪族とは無縁の官僚を登用できるようになるのはさらにあとの隋、唐の時代になってからです。

5 魏晋南北朝時代の文化

この時代の文化の担い手は貴族です。代々つづく豪族を貴族といってよい。とくに華北の戦乱を逃れて南方に逃ってきた貴族たちによって成熟した貴族文化が発達します。中国南部の王朝で発展したので六朝（りくちょう）文化と呼ばれることが多い。この表現は覚えておくこと。

後漢の末から豪族＝貴族たちのあいだで逸民的な雰囲気がはやったといいました。どろどろした政治の世界から身をひいて、儒学的な道徳にとらわれず精神的な自由を守ろうという風潮です。例の諸葛亮も劉備に引っぱり出されるまでは田舎にこもっていたわけで、かれも逸民的な生き方をしていましたんでしょう。

儒学のかわりに人気が出てきたのが老莊思想、道家の系統の思想です。西晋の頃から貴族たちのあいだで老莊思想にもとづく弁論合戦がはります。貴族のサロンで奇をてらった面白い議論を展開できれば人物の評判が高まりました。こういう議論を「清談」といいます。今のみんなが暇があったらカラオケにいくように、かれらは暇があったら「清談しようぜ」となる。

とくに清談で有名になった貴族が七人いて、かれらのことを「竹林の七賢（ちくりんのしちけん）」といいます。竹林が茂る別荘に集まって清談して遊んだんだ。阮籍（げんせき）なんていう人がとくに有名だけど、かれらの名前を覚える必要はありません。

竹林の七賢はみんな政府の高官でもありました。だからかれらは現代風にいえば国家の発展や人民の生活の安定のために一所懸命働かなければならない立場だよね。でも、浮き世離れした清談にうつつを抜かしている。悪い言い方をすれば「清談」は貴族たちの現実逃避の手段のひとつであったかもしれません。

そういう意味で、「清談」には国家から半分そっぽを向いている当時の貴族＝豪族の生き方がよく出ていると思う。

貴族階級には麻薬もはやったのですよ。五石散（ごせきさん）という麻薬を利用している記事が多くあります。やりすぎて死んでしまった人もかなりいたみたい。貴族のサロンは麻薬で陶酔しながら、浮き世離れした哲学論を戦わせる場であったのです。

代表的な文化人と作品を見てきます。

陶潛（とうせん）。詩人です。陶淵明（とうえんめい）ともいう。東晋の人。

「帰去来辞（ききよらいのじ）」という詩が有名。これは「帰りなん、いざ」という一文からはじまる詩で、役人を辞めて田舎に帰るときに作ったという。この詩の一節に「五斗米のために腰を折らず」という言葉がある。五斗米とは役人として陶潛がもらう給料をさしています。腰を折るというのは、ようするにお辞儀をすること。つまり、わずかばかりの給料をもらうために上司にペコペコお辞儀してへつらうような役人仕事はもうごめんだぜ、俺は仕事を辞めて田舎へ帰って、のんびり好きなように暮らすぜ、という詩なのです。

陶潛も当時の貴族の逸民的な雰囲気の中にいるのです。

謝靈運（しゃれいうん）。南朝宋の人。詩人です。超一流の名門貴族でもありました。

官僚をやっているんだけれど、傲慢な性格だったので左遷されて田舎に飛ばされた。そこで美しい自然に心を癒されて、山水詩を書きました。

自然の風景の中に自分の精神をとけ込ませて安らぎを得る、という感覚。わかるでしょ。

仙人みたいになりたいわけです。

昭明太子。南朝梁の王子。即位せずに死んでしまいますが。この人が編集した本が「文選（もんぜん）」。

古今の名文を集めたもので、貴族たちが文章を書くときに参考にしたものです。日本にも輸入されて奈良・平安の貴族たちが漢文を書くときの手本にしたので日本でも有名です。

王羲之（おうぎし）。東晋の人。この人も名門貴族。名前の「羲」という字は注意してください。義務の義とは違う字ですよ。書聖と呼ばれる書道の名人です。というよりも、筆と墨を使って書くという行為を芸術にした人といった方がいいですね。

代表作が「蘭亭序（らんていじょ）」。名門貴族たち40数人が蘭亭という風光明媚な場所に集まって宴会をした。いかにも「清談」的な雰囲気の集まりです。みんなで作った詩を集めたものに王羲之が序文を書いた。これが「蘭亭序」。傑作だったらしいんですが、のちの時代、唐の太宗という皇帝が自分の墓に一緒に埋めてしまった。だから実物はありません。

その他の作品も、王羲之本人が書いた真筆は伝わっていません。現在、わたしたちが見ているのは臨書（りんしょ）といって、のちの時代の名人が書き写したものです。

私、高校時代芸術選択は書道でした。美術を選択したんですが、どういうわけか書道にされてしまった。書道の教科書には王羲之の臨書があってこれを書きまくっていました。1600年後の高校生にも影響を与えている人です。

顧愷之（こがいし）。この人も貴族ですが謝靈運や王羲之ほど一流ではありません。役人としてもぱっとしませんが、画家として有名だ。肖像画が得意でした。代表作「女史箴図（じょししんず）」。資料集にありますね。貴族女性の日常生活を描いています。

わたしが見ても、この絵の芸術的価値はよくわかりません。

ただ、当時の貴族たちの暮らしがわかって面白い。たとえば、これは貴族の婦人が召使いに髪をとかせているのですが、彼女の前に円盤が掛けてある。これ、なんだかわかりますか。

銅鏡です。

日本列島では古墳からじゃかじゃか出土します。宗教的な呪力を持つものとして埋めてしまうのですが、これが本来の使い方。中国では鏡としてちゃんと使っている。

それから、彼女が座っているのはなんですか。これ、畳ですね。部屋の全面に畳を敷き詰めるのではなくて、自分が座るところにだけポンと畳を置いている。

これがそのまま日本に伝わる。百人一首の絵。あの天皇や貴族の座り方とまったく同じなんですよ。

日本では畳はどんどん普及して、部屋全体に敷くようになって現在に至る。一方、本家の中国では唐の時代くらいから、椅子とテーブルの暮らしが一般的になってきて、現在では畳は使っていません。

「古い時代の文化は、辺境地域に残る」という文化伝達の原則があるんですが、その実例だね。この場合、辺境とは日本のことね。

絵画資料として顧愷之の絵は面白いです。

以上が華南の貴族文化、六朝文化の代表者たちです。

華北では、五胡系統の王朝がつづくので、華やかな貴族文化は生まれませんが、実用的な書物が書かれま

した。

「齊民要術（せいみんようじゅつ）」は農業技術書。

「水經注（すいけいちゅう）」は地理書ということで教科書にはでています。中国国内に流れる河川沿いの風俗、歴史などを書いたもので、妖怪や怪物も実在のモノとしてでてくるのです。実用的な書物とは少し違う感じ。

五胡十六国の支配者である北方、西方の民族は仏教を保護します。招かれて西域から仏僧が渡来します。

仏団澄（ぶっとちょう、ブドチンガ）（?～348）、鳩摩羅什（くまらじゅ、クマーラジーヴァ）（344～413）が有名。

仏団澄は、中央アジアの亀慈（クチャ）という都市国家出身です。精力的に中国で仏教を布教しました。

鳩摩羅什は、父親がインド人、母親が亀慈の王女という人。インド留学もした一流の仏教僧でした。五胡十六国時代に中国に渡り活躍するのですが、この人は仏典の翻訳で有名です。

お経はインドのサンスクリット語で書かれている。これでは中国人にはわかりませんから中国語に翻訳しなければならない。鳩摩羅什はそれをして大変だったと思うよ。

日本が仏教を輸入したときに、日本語訳をしていない。現在でも葬式や法事でお坊さんが読むお経は漢訳仏典です。つまり、日本には鳩摩羅什はあらわれなかったのですね。中国が仏教を受け入れるときのような努力を日本はしていなかつたということかもしれません。

仏教遺跡は北魏時代の石窟寺院を覚える。雲崗（うんこう）、龍門（りゅうもん）の二個所です。

雲崗は初期の都平城近郊、龍門は後期の都洛陽の近郊に造られた寺院ですが、ともに岸壁に造られた巨大石仏で有名です。龍門は洛陽に近いので観光コースもあります。私もいきました。ここには北魏時代から20世紀までずっと石仏が掘られつづけていて、掘られた年代を見していくだけでも面白い。

唐の時代、日本から遣唐使がいくでしょ。仏教を学ぶための学生も多かった。で、日本から来た学生たちは多分この龍門の大仏を見たと思うんです。洛陽のすぐ近くですからね。かれらはそのスケールの大きさに度肝を抜かれたに違いない。そして「いつか日本でもこんな大仏を造ろう」と思った。そして、できたのが聖武天皇のときの奈良の大仏だ、と私は想像するのです。

龍門の大仏と奈良の大仏、どことなく体型、衣装の雰囲気が似ているでしょ。同じルシャナ仏もある。インドで生まれた仏教がガンダーラでギリシア文明と融合して仏像を生み、中国に伝わり北魏で造られた大仏が唐の時代に日本に影響を与え奈良の大仏になった。そういう意味で、まさしく日本は文化伝搬の終着駅なのです。

今年（1999年）正倉院展にいってきました。緑色の太くて長い縄が展示されていました。

752年に大仏の開眼供養会がおこなわれるのですが、インド人の僧菩提卵那（ぼだいせんな）という人が大仏の目に墨を入れます。インドの坊さんをよんでいるんですよ。菩提卵那は人間の腕ぐらいのでっかい筆を使って目を入れるのですが、この筆に縄がつけられているのです。縄はどんどん枝分かれしていて、下の方から開眼式を見ている多くの貴族たちがその紐の端を握っていたそうです。功德が伝わるようにね。

展示されていたのはその一番太い縄。当時の人の願いが伝わってくるようなこういう小物に結構感動しました。

宗教では道教が確立、発展したのも北魏の時代です。寇謙之（こうけんし）（365～448）が道教を体系化して北魏の保護を受けて発展しました。

参考図書紹介 ···· もう少し詳しく知りたいときは

書名をクリックすると、インターネット書店「アマゾン」のページに飛んで、本のデータ、書評などを見ることができます。購入も可能です。

[世界帝国の
形成・講談
社現代新書](#)

谷川道雄著。講談社新書のシリーズは歴史展開を理論中心に描くので、直接授業に利用できないものが多いが、この本だけは読んでおきたい。時代をうごかしていく人々の意識や倫理観にまでさかのぼり、歴史のうねりをダイナミックに描いている。
曹操や竹林の七賢など、何を課題としていたかが描かれており、非常に参考になった。

第32回 魏晋南北朝 おわり

[トップページに戻る](#)

[前のページへ](#)

[第31回 三国時代](#)

[次のページへ](#)

[第33回 隋](#)